新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集

新新バイパス関係発掘調査報告書

山三賀(やまさんが)II遺跡

1989

新潟県教育委員会

建設省新潟国道工事事務所

新新バイパス関係発掘調査報告書

山三賀（やまさんが）II遺跡

新潟県教育委員会

建設省新潟国道工事事務所

序

新潟県教育委員会ではここ十数年、高速道路や国道バイパスの建設に伴って，多くの遺跡—埋蔵文化財—の発掘調査を実施してきた。しかし，新潟県における文化財の調査はこれに始まるのではなく，早くから重要遺跡の調査・報告を行なってきた。昭和27年の佐渡千種遺跡，昭和32年から34年の磐舟柵推定地遺跡の調査はその一例である。

地方の歴史は『日本書紀』などの記録からだけではほとんどわからない。文化財はそれだけではものを語らないが，十分な調査を積み重ねることによって，実に雄弁に歴史を語る。特に地下に埋れた遺跡は古代のムラの姿や人々の暮しを生き生きと語ってくれる。

本書は国道７号新新バイパスの建設に伴って実施した聖篭町山三賀II遺跡の発掘調査報告書である。山三賀に古代のムラが存在したことは，もちろん現在に伝えられる当時の記録には書かれていない。調査は遺跡の一部を発掘したにすぎないが，古墳時代，奈良・平安時代の住居跡が約100軒も見つかった。出土した古墳時代前期（約1500年前）の土器は，当時の政治の中心地である畿内地方から直接影響を受けたものであり，この時期，畿内文化が阿賀野川を越えて浸透していたことがはっきりとうかがえる。また，奈良・平安時代（約1200年前）のムラは律令体制の盛衰とともに，成立・崩壊したことがわかり，当時の政治勢力と深く結びついたムラであったことが知られる。そして，多くの住居跡や出土品は当時の人々の暮らしむきを今に伝えている。

３か年にわたる調査期間中より，この遺跡は地元をはじめとした多くの人々の注目を集めてきた。聖篭町では新しい歴史のない町という認識も変りつつあると聞いている。これを契機に地域の活性化につながることが，いくらかでもあれば幸いである。

調査に当たっては，建設省北陸地方建設局新潟工事事務所に格別の御配慮を賜り，聖篭町教育委員会には多大な御協力と御援助をいただいた。ここに深甚なる謝意を表するものである。

平成元年３月

新潟県教育委員会
教育長　田　中　邦　正

例　　言

1　本書は新潟県北蒲原郡聖籠町大字三賀字白通905番地他に所在する山三賀II遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は，一般国道7号の新新バイパス（新潟～新発田）建設に伴い，新潟県が建設省から受託して実施した。

3　調査主体は新潟県教育委員会であり，昭和60年・61年・62年度に発掘調査を，昭和62年・63年度に報告書作成にかかる整理作業と報告書刊行を行なった。調査と整理の体制は第Ⅲ章に記した。

4　出土遺物と調査にかかる資料はすべて新潟県教育委員会が保管している。遺物の注記は，山三賀II遺跡を示す「山II」に出土地点を併記した。また，本書に掲載した遺物については，本書の図面の番号を併記し，別に保管してある。

5　本書の作成は新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。ただし，本書の「第Ⅵ章　自然科学の分析・調査」の土器の胎土分析は奈良教育大学教授三辻利一氏，鉄滓の分析は大澤正己氏にそれぞれお願いし，その分析結果について玉稿をいただいた。

6　本書の作成は中島栄一（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）の指導のもと坂井秀弥（同文化財専門員）が担当した。本文の執筆は坂井のほか，赤羽正春（同文化財主事），藤巻正信（同主任），山本幸俊（同文化財専門員），梶良成（同），田辺早苗（同文化財調査員），本間桂吉（同），柳恒雄（前文化財専門員，現長岡市立関原小学校教諭）があたった。執筆分担は，第II章4Bが赤羽，第II章4A・第V章3Cが山本，第V章1A・Bが田辺，第V章1Cが藤巻，第V章3B2)・3Dが梶，第V章2B・第V章3E・Fが本間，第V章2A2)・3B1)が坂井・梶，ほかが坂井である。第Ⅳ章3の遺構各説は調査員が作成した遺構カードをもとに坂井が執筆したものである。第V章1A・Bについては田中靖（同文化財調査員）の協力を得た。作成に関する作業分担は第Ⅲ章2に記した。

7　本書の構成は本文と巻末図版（図面・写真）からなるが，読むにあたっての具体的なことがらについては次頁の凡例に詳述したので，参照されたい。

8　本書の内容を一般の方々に御理解いただくため，平易な解説文を巻頭に用意した。また調査成果の要約を巻末（234頁）に付した。

9　発掘調査から本の作成に至るまで，下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略，五十音順）

阿部恭平，宇野隆夫，大澤正己，春日真実，金子拓男，川上貞雄，川村浩司，北野博司，小林昌二，品田高志，関　雅之，田嶋明人，田中耕作，津野　仁，坪谷　諭，手嶋勇平，藤井三好，三辻利一，吉岡康暢，加治川村教育委員会，五泉市教育委員会，豊浦町教育委員会，羽茂町教育委員会，北方博物館，山三賀遺跡を語り継ぐ会，北陸古代土器研究会

凡　　例

1　本書は本文・別表と巻末図版からなる。巻末図版は図面と写真で，おもな遺構・遺物の実測図および写真をおさめる。

2　遺構番号は調査現場で付したものをそのまま使用した。番号は遺構の種別ごとに付さず，すべて一連である。種別は竪穴住居（SI），掘立柱建物（SB），土坑（SK），その他（SX）で区別し，番号の先頭に付した。

3　検出されたおもな遺構については別表1，古墳時代，奈良・平安時代の土器については別表2に，それぞれ一覧表をかかげた。

4　遺構番号が調査現場における一連番号であるため，遺構・遺物の記述の順番は番号順にはなっていない。遺構・遺物の検索の便をはかるため，図版の図面には関係する本文・別表の頁をその都度指示した。また遺構番号による索引を巻末に付した。

5　本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。掲載した図面のうち，既製の地形図等を使用したものについては，原図の作成者，作成年を示した。

6　註は脚註とした。引用文献は著者と発行年（西暦）を〔　〕で文中に示し，巻末に一括して掲載した。

7　図版の遺構実測図は1/200の全体分割図9葉，1/80の個別図32葉がある。全体分割図は北西から南東の順に，1葉におさまる範囲を9つのブロックに分けたもので，1～9の番号を付し，それぞれ隣接する図面番号を略図で各図版ごとに図示した。全体の遺構配置は第23図（36頁）を参照されたい。個別図については関係遺構略図を図版ごとに付した。第Ⅲ章2A参照。

8　個別図にはすべての竪穴住居・掘立柱建物とおもな土坑の実測図をおさめた。切り合う遺構は同一の図面として作成し，一部の近接する遺構も同様の扱いとした。実測図の順番は原則として，遺構配置により，北西から南東の順である。

9　遺構実測図の表現方法等については48頁を参照されたい。

10　遺物実測図は原則として縄文・弥生時代，古墳時代，奈良・平安時代の順に配置した。奈良・平安時代は竪穴住居・土坑・その他の順で配置し，竪穴住居については時期を考慮したが，スペースの面で必ずしも徹底していない。番号は時代と種類ごとに通し番号を付した。

11　土器実測図の断面は種別で区別した。黒ぬりは須恵器で，それ以外は白ぬきである。黒色処理，赤彩，タールの付着などはそれぞれことなった網目（スクリーン・トーン）をかけた。網目の表示については図版ごとに記した。遺物実測図の表現方法等については106頁を参照されたい。

12　遺物の記述の順番は原則として図版（実測図）の順番に従った。

山三賀にあった古代の村

——山三賀II遺跡の発掘調査とその成果——

今回の発掘調査で，聖籠町の山三賀には古代の村があったことがわかりました。調査の細かなことについてはこのあと詳しく述べますが，これまでこのような調査報告書の内容が専門的すぎて，一般の方々には理解しにくいという声を多く聞きます。そこで，本論に先立って調査でわかったことをわかり易く述べてみました。そのためごくおおまかな内容ですが，その点をご理解の上お読み下さい。

はじめに

古代の遺跡が見つかった聖籠町は，新潟県の北部海岸部にあります。そこは新潟市の北西約20km，車で約30分のところで，日本海に面した海岸には新しく新潟東港がつくられ，いまは工業地帯として発展しています。この海岸には日本で最大といわれる新潟砂丘があり，海岸線に平行して10列にもおよぶ砂丘のたかまりがみられます。遺跡のある山三賀はこのうちもっとも内陸側の砂丘にあり，海岸線からは約５kmの位置です。付近一帯は畑や果樹園が広がるなかに，民家が点在し，砂丘からおりた内陸側の新発田方面は一面の水田です。果物が豊富なところで，サクランボがとくに有名です。

山三賀に古代の村があったことは今に伝えられる当時の記録にはまったく書かれていません。しかし，遺跡があることはかなり前から知られていました。遺跡を見つけたのは畠山佑二さん（豊栄市在住）です。畠山さんはこのあたりの畑をたんねんに調べながら歩き，多くの土器をひろい集め，土器の文様やかたちから，ここに縄文時代から奈良・平安時代の遺跡があることを明らかにしました。多くの遺跡はこのように土器や石器などの「もの」によって，はじめてその存在が知られます。

今回この遺跡のなかに，建設省により国道７号の新新バイパス（道路）が建設されることになり，新潟県教育委員会が道路工事の前に，遺跡の内容を調査することになりました。道路工事がはじまると，それによって地下に埋もれている遺跡がこわされてしまいますから，事前に学術的な発掘調査をするのです。発掘調査は建設省と町教育委員会の協力のもと，昭和60年から62年まで，通算約12か月にわたりおこないました。発掘作業を手伝っていただいたのは，聖籠町を中心とする地元の多くの方々です。発掘した面積は13,600m² (約１町３反)です。発掘調査が終った後，２か年にわたり調査の記録や土器などの出土品を整理し，この報告書をつくる作業をおこないました。

調査の結果

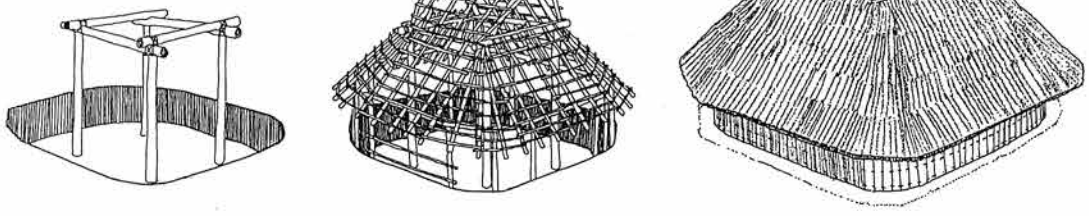
発掘調査は地表面から少しずつ土を掘りながら，土器や石器，住居の跡などを見つけます。住居の跡などは土の色や性質などを注意深く観察することによって見つけることができます。また，土器や石器は出土した地点や状況を記録しながら掘りあげます。住居跡の状況なども記録します。記録はおもに図面と写真にとります。一般に発掘作業というと，土器を注意深く掘り出すような軽作業ばかりと思われがちですが，シャベルで掘る作業も多く，土の運搬にはベルトコンベヤーやパワーシャベル，ダンプも使います。

調査によって，遺跡は三つの時期にわたることがわかりました。一番古いのは今から約2500～4000年前の縄文時代，次は約1500年前の古墳時代，そして約1200年前の奈良・平安時代です。このうち縄文時代の住居跡はありませんでしたが，古墳時代と奈良・平安時代の住居や倉庫の跡が約130棟も見つかりました。古墳時代や奈良・平安時代の昔から山三賀の地に村があったのです。どうして村の時代や時期がわかるのかは，そこから出土した土器の種類や文様，かたちなどの特徴からおおよそ判断できます。土器は時代や時期によって，いろいろ変化するからです。発掘調査は県内各地でもさかんにおこなわれていますが，これだけ多くの住居跡が見つかったのは初めてです。そのほかにもたくさんの出土品があり，土器ばかりではなく，日本で最初の貨幣とされる和同開珎やベルトの金具などもあり，各方面から注目を集めることになりました。

古墳時代の村

古墳時代は今から1600年から1400年前の西暦300年頃から600年頃で，今の奈良県や大阪府に勢力をもった大和朝廷を中心とする統一国家がはじめてつくられた時代です。その勢力は西日本ばかりではなく，関東・北陸，東北地方の一部まで及んでいました。この頃の豪族はさかんに大きな墓（古墳）をつくり，新潟県でも多くの古墳が見つかっています。巻町の菖蒲塚古墳は全長50ｍ以上の前方後円墳ですし，最近見つかった新津市の八幡山古墳は直径55ｍ以上の円墳

「竪穴」とは地面からたてに掘った穴のこと。
穴の上に屋根をかけたものが竪穴住居である。
穴の深さは数10cm。



竪穴住居の構造

（岩波書店『古代の村』より）

と考えられています。この時代にはすでに稲作と金属器が大陸から伝来しており，鉄の斧や鍬・鎌などが使われていました。

山三賀の古墳時代の村は西暦300年頃から400年頃にかけてのもので，住居跡が12棟見つかりました。住居跡は竪穴住居と呼ばれるものです。竪穴住居はわが国の原始・古代の代表的な住まいで，古墳時代以降の住居の平面形は正方形にちかいものです。大きさはさまざまで，小さいもので約６畳，大きいもので約40畳，標準的なものは10～20畳くらいです。１棟の住居には５～６人が住んでいたと考えられます。住居は地面を掘りくぼめて床をつくり，そこに屋根をかけたものです。床は土間で，寝る場所にはワラなどを敷いたのでしょう。20～30年で住居は建てかえられたと考えられます。

この時代の出土品は大部分が土器で，ほかに玉（管玉・勾玉）が２点あります。土器はすべて素焼きで，「土師器」といいます。米などを煮炊きするカメ（今の鍋・釜にあたる），何かをたくわえるツボ，食品を盛る高杯、おまつりなどに使う小さなツボとこれをのせる台（器台）などがあります。なかには特別に顔料を塗って赤くしたものがあります。これらの土器は当時の中心地である近畿地方周辺で使われた土器と同じかたちをしており，この地方に大和朝廷の勢力が及び，この地方がその文化圏に含まれていたことがよくわかります。

奈良・平安時代の村

今から約1300年前に，天皇を中心とした政治のしくみが整い，そのもとで地方が支配されていきました。山三賀のあたりは越後国沼垂郡に属していました。山三賀のこの時期の村は古墳時代からずっと継続して営まれたものではなく，西暦700年頃にでき，約200年間ずっと継続して営まれ，900年頃にはなくなりました。発見された住居跡などは竪穴住居約90棟と掘立柱建物が

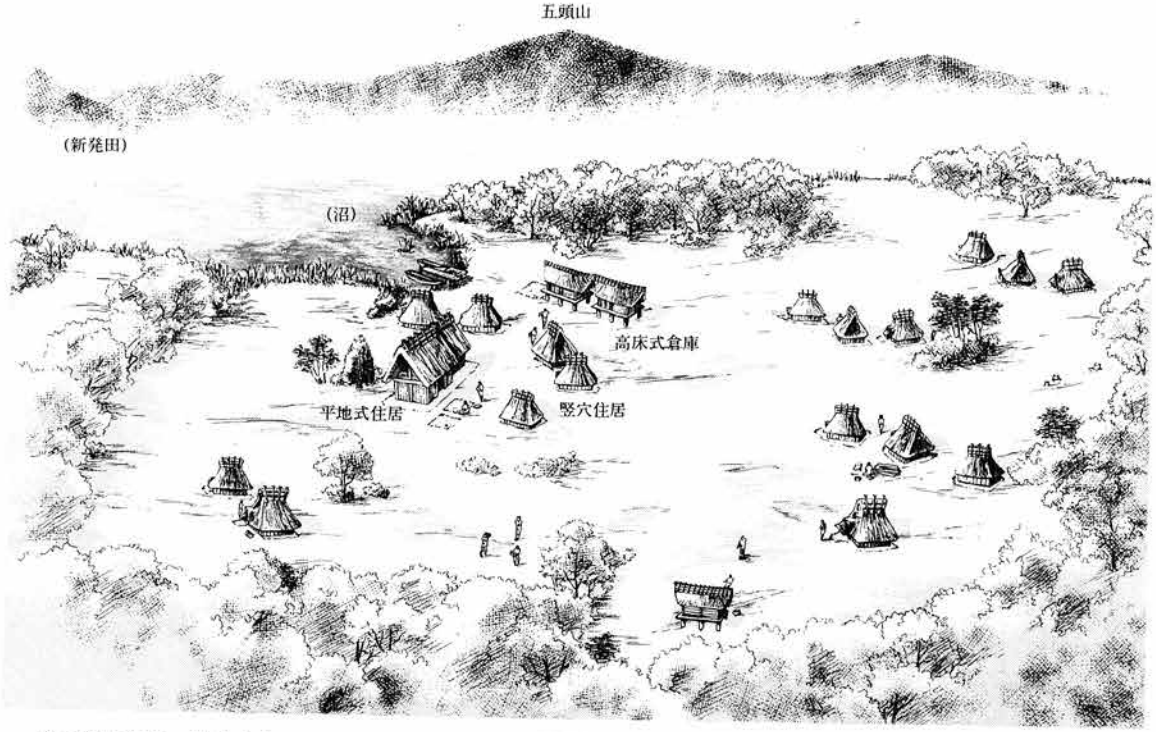
すべて素焼きの土師器です。左からカメ・小型壺と器台・くびの長い小型壺・高杯・ツボ。カメは高さ約20cm。これらの形はこの地方独自のものでなく，近畿地方でつくられて広く全国にひろまったものです。

古墳時代（約1500年前）の土器

約30棟にのぼります。これらは200年間にわたって建てられたもので，一時期の住居の数は10数棟と考えられます。しかし，これは発掘したバイパスの敷地内だけの数字であり，発掘しなかった場所を含めると，少なく見積もっても山三賀周辺には30棟以上の住居があり，200人以上の人々が住んでいたと考えられます。このほかにもこの周辺には同じ時期の村々があり，多くの住居が建ちならんでいたと思われます。

奈良・平安時代の竪穴住居は，大きさは古墳時代のものとほとんど同じですが，１棟ごとに作りつけのカマドをもっていました。カマドは朝鮮半島から伝わったもので，調理や暖房に使われました。カマドは粘土でつくりますが，中には使ったあとの土器を芯に入れたものがたくさんあります（61頁.第31図参照)。カマドに土器のカメをかけて，米を煮炊きしました。どの住居にもだいたいカマドがあることから，ひとつの住居で生活していた人々は，つねに食事をともにしていたと考えられ，これがもっとも基本的なまとまり（家族）といえるでしょう。

掘立柱建物とは地面に穴を掘って，直接柱を立てるもので，高床式（たかゆかしき）の倉庫と居住用の平地式（へいちしき）住居の二つがあります。高床式の倉庫は約10棟で，大きさは４坪（８畳）くらいの小さいものが大半です。これに対し，居住用の平地式住居は10坪（20畳）以上で，平均的な竪穴住居より大きいものが多いのです。竪穴住居の大きさは出土品からみて，住人の身分や階層と関係するようです。大きな住居は村の有力者のもので，平地式住居も面積からみて有力者の住まいと考えられます。平地式住居は村ができた奈良時代にはなく，平安時代に入る頃から建てられるよう



山三賀の奈良・平安時代の村のようす

海岸方面から内陸方面を望んだようすです。村は砂丘の高台にあり，内陸側は沼地がひろがっています。むこうに見えるのは須恵器や鉄をつくっていた笹神丘陵と五頭山です。人々の住まいは竪穴住居が多く，大きな平地式住居は有力者のもの。高床式の倉庫は村共同の米などを貯蔵しておきます。

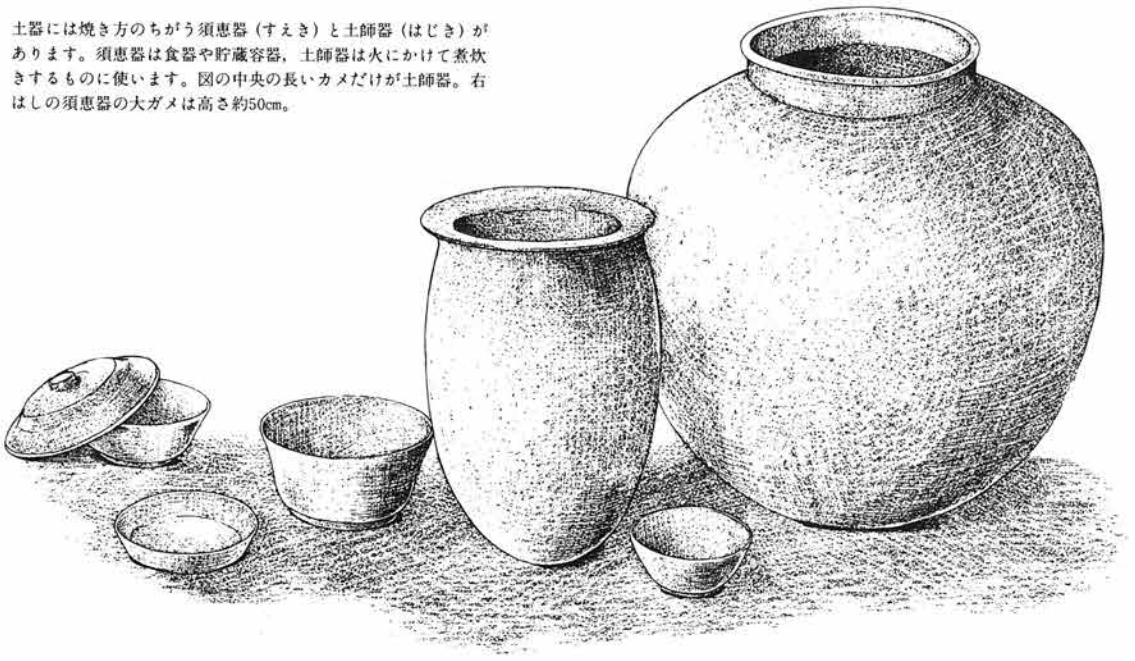
になりますが，それはその時期になると，大きい竪穴住居がみられなくなることから推定されます。高床式倉庫は，村ができた当初から，村共同の稲などの財産を貯蔵するために建てられたものでしょう。

奈良・平安時代の出土品は土器のほかに，鉄製品などの金属製品，石製品，貨幣などがあります。これらは木などとちがって腐りにくいもので，現在まで残っていたものです。当時はもちろん木製品やワラなどで編んだもの，あるいは繊維製品が豊富に使われていたはずですが，腐ってしまい残っていません。

土器には焼き方のちがう２種類があります。ひとつは古墳時代と同じ土師器（はじき）で，肌色か赤茶色をしており，やや軟らかいものです。もうひとつは灰色で硬い「須恵器（すえき）」で，山の斜面につくられた窯（かま）で1000度以上の温度で焼いたものです。須恵器は５世紀頃に朝鮮半島からわが国に伝えられたもので，新潟県では奈良時代の初めから作られるようになりました。山三賀で出土した須恵器の多くは，土器の土からみて10kmほど離れた笹神（ささがみ）丘陵で焼かれたものですが，平安時代に入ると海をこえた佐渡の小泊（こどまり）（羽茂（はもち）町）からも大量にもたらされており，当時の物資の動きが意外に広かったことがわかります。土師器は煮炊きをするカメ，須恵器は食品を盛りつける杯（つき）（今の皿や椀にあたる）や米や液体などを貯蔵するカメ・ツボというように用途によって両者を使い分けています。米の調理法は今とちがって，赤飯（おこわ）のように蒸すことが一般的であったようです。

鉄の道具もたくさん見つかりました。新潟県で製鉄が始まったのは，須恵器と同じく奈良時代のはじめ頃と考えられます。須恵器の窯がたくさんある笹神丘陵には，製鉄炉もたくさんあります。鉄の原料は山からとれる砂鉄です。笹神丘陵で作られた鉄の素材（鉄のかたまり）が

土器には焼き方のちがう須恵器（すえき）と土師器（はじき）があります。須恵器は食器や貯蔵容器，土師器は火にかけて煮炊きするものに使います。図の中央の長いカメだけが土師器。右はしの須恵器の大カメは高さ約50cm。



奈良・平安時代（約1200年前）の土器

村にもちこまれ，そこで鉄の道具に加工されたと考えられます。山三賀では実際に３軒の鍛冶屋の跡が見つかりました。出土した鉄の道具には鍬・鋤の先，斧，鎌，小刀などの農工具のほかに，鏃（やじり）や紡錘車などがあります。紡錘車は糸をつむぐのに使うもので，この村で糸をつむぎ，布を織っていたことを示しています。

めずらしい出土品にベルトの金具や和同開珎があります。ベルトの金具は銅でできたもので、８点も出土しました。当時このようなベルトをつけることができたのは，地方の役人や有力者であり，そのような人物がこの村に住んでいたことがわかります。２点見つかった和同開珎（708年鋳造）も，一般の人々にはなかなか入手できないものと考えられます。ベルト金具と和同開珎は県内では数点しか出土していない貴重なものです。

ところで，この村は平安時代に入ってから約100年後に，急速に滅びてしまいます。その後，江戸時代（17世紀）までの約800年間は，まったく人々の住んだ形跡はありません。この村はどのようにして生まれ，どのようにして滅んでしまったのでしょうか。これはたいへん興味のある問題です。洪水や疫病などで村がなくなったのではないかと考える人もいるかもしれません。しかし，調査の結果では洪水を受けた痕跡はなく，疫病の流行もあまり考えられないのです。それではどうしたのでしょう。

いま考えられる手がかりとしては，山三賀に村ができた奈良時代のはじめ頃は，律令体制が整備されてくる時期で，国家が強力に農民や村を支配していった時代だということです。とくに新潟県の阿賀北地方（阿賀野川以北）は，中央政府が淳足柵や磐舟柵を設置し，その力が強く及んだ地域です。記録によれば，北陸地方や長野県の人々が中央政府によって移住させられています。また，山三賀という土地は，いまでこそ広い水田が近くにありますが，江戸時代に新田開発されるまでは，この一帯は水田にはなりえない沼地で，農民が好んで住む土地ではなかったようです。おそらく，この時代の山三賀の村人たちは，砂丘の高台に住みながら，舟で新発田方面に行っては農作業をしていたと思われるのです。このように考えると，山三賀に村が新しくできたのは，中央政府の強い力によるものといえそうです。そして，その律令体制がくずれてゆく時期に，人々は水田の得やすい平野部に移り住み，村がなくなってしまったのではないでしょうか。このことは山三賀にあった古代の村のおかれた地域性と時代の状況から，十分に推測できることです。山三賀の地にかつて営まれた村の成立と消滅は，まさに当時の社会と政治の動きを象徴しており，そこに大きな歴史の流れと密接にかかわった人々の生活が，あざやかによみがえるように思われます。

目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2

1　はじめに …… 2

2　地理的環境と新潟砂丘の地盤変動 …… 6

A　遺跡をとりまく地理的環境 …… 6

1）地形概観 …… 6　　2）新潟砂丘 …… 6

3）砂丘と後背湿地 …… 8

B　新潟砂丘における地盤変動 …… 11

1）竪穴住居跡の床面傾斜 …… 11　　2）地盤変動の妥当性 …… 13

3　原始・古代の歴史的環境 …… 15

A　縄文・弥生時代 …… 15

B　古墳時代 …… 15

C　奈良・平安時代 …… 16

1）文献からみた阿賀北地方 …… 16　　2）遺跡 …… 20

D　山三賀Ⅱ遺跡周辺の遺跡 …… 21

4　近世・近代の開発と水上交通 …… 23

A　治水と新田開発 …… 23

B　山三賀Ⅱ遺跡に関わる潟・川・海の交通 …… 27

1）下越地方における川と潟の交通 …… 27　　2）低湿地の開発と舟 …… 28

3）舟の推進方法 …… 29　　4）当時の海上交通 …… 29

第Ⅲ章　調査の概要 …… 31

1　発掘調査 …… 31

A　調査方法 …… 31

B　調査経過 …… 34

C　普及啓蒙活動 …… 39

D　調査体制 …… 40

2　整理作業 …… 41

A　方　　法 …… 41

1) 遺　物 …… 41　　2) 図　面 …… 42
B 経過と体制 …… 42

第Ⅳ章 遺　跡 …… 43

1 概　要 …… 43
2 層　序 …… 46
3 遺構各説 …… 46
A 記述にあたって …… 46
B 各　説 …… 48

第Ⅴ章 出土遺物 …… 79

1 縄文・弥生時代 …… 79
A 縄文土器 …… 79
B 弥生土器 …… 81
C 石　器 …… 82
2 古墳時代 …… 84
A 土　器 …… 84
1) 古式土師器の分類 …… 84　　2) 各　説 …… 87
B 玉 …… 92
3 奈良・平安時代 …… 93
A 土器の概観 …… 93
1) 器種分類 …… 93　　2) 土器の製作技法 …… 102
3) 実測図の表現方法 …… 106　　4) 土器の胎土 …… 108
5) 使 用 痕 …… 109
B 土器各説 …… 111
1) 竪穴住居出土土器 …… 111　　2) おもな遺構出土土器 …… 158
3) その他の土器 …… 160
C 墨書土器 …… 162
D 土 製 品 …… 165
E 金属製品 …… 166
F 石 製 品 …… 170

第Ⅵ章 自然科学の分析・調査 …… 173

1 山三賀Ⅱ遺跡出土須恵器の胎土分析 …… 173

A　はじめに …… 173
B　分析方法 …… 173
C　分析結果 …… 173

2　山三賀II遺跡出土鉄滓の金属学的調査 …… 179
A　いきさつ …… 179
B　調査方法 …… 179
C　調査結果 …… 180
D　ま と め …… 182

第Ⅶ章　ま と め …… 184

1　古墳時代の土器と遺跡 …… 184
A　土器の編年 …… 184
1）出土土器の編年 …… 184　2）編年的位置 …… 185
B　遺構と遺跡 …… 189
1）遺　構 …… 189　2）遺跡をめぐる問題 …… 191

2　奈良・平安時代の土器 …… 192
A　出土土器の編年 …… 192
1）はじめに …… 192　2）変遷の画期 …… 192
3）須恵器窯との関係 …… 200　4）年代の比定 …… 206
B　山三賀II遺跡をめぐる土器の生産と流通 …… 207
1）越後・佐渡の須恵器窯 …… 207　2）山三賀II遺跡出土須恵器の生産地　209
3）佐渡小泊窯製品の広域流通 …… 211　4）土師器と土器生産 …… 213

3　奈良・平安時代の遺構と遺跡 …… 216
A　竪穴住居と掘立柱建物 …… 216
1）竪穴住居の構造 …… 216　2）掘立柱建物と土坑 …… 219
B　遺跡の変遷 …… 220

4　古代集落としての山三賀II遺跡 …… 225
A　成立とその背景 …… 225
B　山三賀II遺跡と県内の古代集落遺跡 …… 229
C　古代における沼垂郡の動向 …… 231

《要　約》 …… 234
《参考・引用文献》 …… 236
《別　表》 1　主要遺構一覧表 …… 240
2　古墳時代、奈良・平安時代土器観察表 …… 243
《遺構別索引》 …… 275

図 版 目 次

図 面

1 グリッド設定図
2 遺構配置と遺構全体図(1～9)の割付図
3 遺構全体実測図1 1:200
4 遺構全体実測図2 1:200
5 遺構全体実測図3 1:200
6 遺構全体実測図4 1:200
7 遺構全体実測図5 1:200
8 遺構全体実測図6 1:200
9 遺構全体実測図7 1:200
10 遺構全体実測図8 1:200
11 遺構全体実測図9 1:200
12 遺構個別実測図1 1:80 SI1・SI4・SI5・SI1100・SI1101
13 遺構個別実測図2 1:80 SI6・SI8・SI9・SI10
14 遺構個別実測図3 1:80 SI7・SB309・SI310・SI314
15 遺構個別実測図4 1:80 SI325・SI1500・SI299・SI11・SI12
16 遺構個別実測図5 1:80 SI360・SI336・SI339・SK340
17 遺構個別実測図6 1:80 SI14・SB355・SI15・SI280
18 遺構個別実測図7 1:80 SI1201・SI1202・SB1229・SB1280
19 遺構個別実測図8 1:80 SI1200・SI435・SI440・SI439・SI1281・SB1241
20 遺構個別実測図9 1:80 SI429・SI840・SB870
21 遺構個別実測図10 1:80 SI850・SI402・SI401・SI462・SI483
22 遺構個別実測図11 1:80 SI17・SI16・SI263・SB262・SB252
23 遺構個別実測図12 1:80 SI650・SI660・SI640・SI27・SI98・SI500
24 遺構個別実測図13 1:80 SI20・SB1570・SI18・SK34
25 遺構個別実測図14 1:80 SI458・SI805・SI1307・SI560
26 遺構個別実測図15 1:80 SI803・SI802・SI804・SI806・SI807
27 遺構個別実測図16 1:80 SI670・SI75・SI72・SI74・SB97
28 遺構個別実測図17 1:80 SI82・SI29・SI81・SI80・SB100・SK31
29 遺構個別実測図18 1:80 SI33A・SI33B・SI41・SI42・SI60・SK39・SK24
30 遺構個別実測図19 1:80 SI1302・SI1304・SI1300・SI1313・SI1311・SI1312・SB1314
31 遺構個別実測図20 1:80 SI71・SI595・SI70・SB85・SI502A・SI502B
32 遺構個別実測図21 1:80 SI600・SK620・SI610・SI630・SI741
33 遺構個別実測図22 1:80 SB570・SB770
34 遺構個別実測図23 1:80 SI1000・SI1010

35　遺構個別実測図24　1:80　SI1315・SI1320・SB1450・SB604
36　遺構個別実測図25　1:80　SI1124・SB1370・SB1162・SB1165・SB1535・SK1373
37　遺構個別実測図26　1:80　SI752・SI753・SB790
38　遺構個別実測図27　1:80　SB1161・SB730・SB1199
39　遺構個別実測図28　1:80　SI115・SB110
40　遺構個別実測図29　1:80　SB109・SI1461・SI1471・SI1460・SI1480
41　遺構個別実測図30　1:80　SI1181・SI1169・SI1166・SI1167・SI1168
42　遺構個別実測図31　1:80　SK311・SK1398・F7(12)P6・SK103・SK106・SK102・SK1337・SK108
SK113・SK621・SK1022
43　遺構個別実測図32　1:80　SX795
44　縄文・弥生土器1
45　縄文・弥生土器2
46　縄文・弥生土器3　石器・石製品
47　古墳時代土器1　SI502A(1)
48　古墳時代土器2　SI502A(2)・SI70
49　古墳時代土器3　SI1480・SI1460
50　古墳時代土器4　SI1168・SX795
51　古墳時代土器5　SI1124・SI71
52　古墳時代土器6　SI115・SI1010・SK108・SK107
53　古墳時代土器7　SI439・SI660・SI650・SI263・SI402・その他(1)
54　古墳時代土器8　その他(2)
55　奈良・平安時代土器1　SI5
56　奈良・平安時代土器2　SI115(1)
57　奈良・平安時代土器3　SI115(2)・SI804・SI807
58　奈良・平安時代土器4　SI336・SI1312・SI640
59　奈良・平安時代土器5　SI71
60　奈良・平安時代土器6　SI610(1)
61　奈良・平安時代土器7　SI610(2)・SI600・SI630・SI1311
62　奈良・平安時代土器8　SI462(1)
63　奈良・平安時代土器9　SI462(2)・SI741(1)
64　奈良・平安時代土器10　SI741(2)
65　奈良・平安時代土器11　SI12
66　奈良・平安時代土器12　SI502B
67　奈良・平安時代土器13　SI806
68　奈良・平安時代土器14　SI752・SI1000(1)
69　奈良・平安時代土器15　SI1000(2)
70　奈良・平安時代土器16　SI1461・SI27
71　奈良・平安時代土器17　SI314・SI1315

72	奈良・平安時代土器18	SI429・SI1300
73	奈良・平安時代土器19	SI1307・SI560
74	奈良・平安時代土器20	SI458・SI803
75	奈良・平安時代土器21	SI8(1)
76	奈良・平安時代土器22	SI8(2)・SI72(1)
77	奈良・平安時代土器23	SI72(2)・SI20(1)
78	奈良・平安時代土器24	SI20(2)・SI14(1)
79	奈良・平安時代土器25	SI14(2)
80	奈良・平安時代土器26	SI280
81	奈良・平安時代土器27	SI75
82	奈良・平安時代土器28	SI339
83	奈良・平安時代土器29	SI7(1)
84	奈良・平安時代土器30	SI7(2)
85	奈良・平安時代土器31	SI15・SI11
86	奈良・平安時代土器32	SI6(1)
87	奈良・平安時代土器33	SI6(2)・SI4(1)
88	奈良・平安時代土器34	SI4(2)
89	奈良・平安時代土器35	SI17・SI1500
90	奈良・平安時代土器36	SI60・SI650
91	奈良・平安時代土器37	SI310・SI33
92	奈良・平安時代土器38	SI500・SI10・SI41
93	奈良・平安時代土器39	SI360・SI1302・SI1
94	奈良・平安時代土器40	SI1100
95	奈良・平安時代土器41	SI1101・SI299・SI401
96	奈良・平安時代土器42	SI1320(1)
97	奈良・平安時代土器43	SI1320(2)
98	奈良・平安時代土器44	SI1320(3)・SI753
99	奈良・平安時代土器45	SI850・SI1460
100	奈良・平安時代土器46	SI1202・SI435
101	奈良・平安時代土器47	SI440・SI840
102	奈良・平安時代土器48	SI802・SI1201
103	奈良・平安時代土器49	SI1167(1)
104	奈良・平安時代土器50	SI1167(2)
105	奈良・平安時代土器51	SI1167(3)・SI29
106	奈良・平安時代土器52	SI1166 ・SI805・SI18・SI325・SI42
107	奈良・平安時代土器53	SI16・SI1471・SI1313・SI670・SI1304・SI80・SI9・SI1181・SI1169・SI82
108	奈良・平安時代土器54	SK39・SK1022・SK102
109	奈良・平安時代土器55	SK34・SK32・SK340・SB730・SB790・その他の須恵器(1)

110　奈良・平安時代土器56　その他の須恵器(2)
111　奈良・平安時代土器57　その他の須恵器(3)・その他の土師器
112　奈良・平安時代土器58　墨書土器
113　奈良・平安時代土製品
114　奈良・平安時代金属製品1
115　奈良・平安時代金属製品2
116　奈良・平安時代金属製品3・土錘
117　奈良・平安時代石製品1
118　奈良・平安時代石製品2

写真

119　遺跡遠景航空写真
120　1遺跡全景　2B・C9～11区付近　3SI1167土層断面
121　山三賀周辺空中写真
122　1遺跡遠景　2遺跡近景　3確認調査状況
123　1調査区全景　2B・C7～9区付近　3C・D9・10区付近
124　1A・B2～5区付近　2A・B2～5区付近　3A・B2～4区
125　1B・C12・13区付近　2C・D10・11区付近　3B・C5・6区付近
126　1C・D5～7区付近　2D・E8・9区付近　3D・E6・7区付近
127　1B・C7～9区付近　2A7～10区付近
128　1D・E11区土層断面　2B・C12・13区土層断面　3D・E8区土層断面　4SI16部分土層断面
129　1SI4・5完掘　2SI4完掘　3SI5カマド　4SI5カマド
130　1SI1100完掘　2SI1101完掘　3SI1100・SI1101南北断面
131　1SI1101C区土器(699)出土状況　2SI1101カマド南北セクション　3SI1100遺物出土状況　4SI1完掘
132　1SI6完掘　2SI6断面　3SI6カマド土器出土状況
133　1SI6　SI8　SI9完掘　2SI8断面　3SI10完掘
134　1SI11完掘　2SI7完掘　3SI7カマド内土器(487)
135　1SI310完掘　2SI314完掘　3SI1500土層断面
136　1SI12完掘　2SI325完掘　3SI299完掘
137　1SI360完掘　2SI336完掘　3SI339完掘
138　1SI14完掘　2SI14遺物出土状況　3SK340　4SI299カマド土器
139　1SI15完掘　2SI15遺物出土状況　3SI15遺物出土状況
140　1SI280完掘　2SI280土層断面　3SI280遺物出土状況　4SI280土層断面　5SI280土器出土状況　6SI280カマド断面
141　1SB355(D6区)付近　2SB355完掘　3SI440完掘
142　1SI1202完掘　2SB1229・SI1201・SI1202完掘　3SI1201カマド土器(872)出土状況　4SI1201土層断面
143　1SI435完掘　2SB1241・SB1280完掘　3SI462土層断面
144　1SI429・SI840完掘　2SB870完掘　3SI850カマド土器出土状況　4SI850カマド土器出土状況

145　1 SI 402完掘　2 SI 401完掘　3 SI 440検出状況　4 SI 440完掘

146　1 SI 850完掘　2 SI 462・SI 483完掘　3 SI 462遺物出土状況　4 SI 462カマド

147　1 SI 17完掘　2 SI 17遺物出土状況　3 SI 17カマド

148　1 SI 263完掘　2 SI 98完掘　3 SB 252完掘

149　1 SI 27・SI 640　2 SI 500完掘　3 SI 640帯金具(70)出土状況　4 SI 27鉄製品(46)出土状況　5 SI 429和同開珎(76)出土状況

150　1 SI 20カマド土器　2 SI 20カマド土器　3 SI 20カマド土器

151　1 SI 20カマド南北断面、支脚検出状況　2 SI 18・SK 34完掘　3 SI 18・SK 34検出状況

152　1 SI 1307　2 SI 560　3 SI 1307土層断面　4 SI 560カマド土器出土状況

153　1 SI 802・SI 805・SI 806・SI 804・SI 807・SI 560完掘　2 SI 802・SI 803・SI 804・SI 806土層断面　3 SI 33・SI 41・SI 42完掘

154　1 SI 72部分完掘　2 SI 72部分完掘　3 SI 72土層断面

155　1 SI 60・SI 80・SI 81完掘　2 SI 33Aカマド　3 SI 60カマド　4 SI 82カマド土器(988)出土状況　5 SI 41土層断面　6 SI 1300完掘　7 SK 1022土層断面

156　1 SI 1311・SI 1312・SB 1314完掘　2 SI 1302・SI 1304完掘　3 SI 1313完掘

157　1 SI 70完掘　2 SI 71土器出土状況　3 SI 71土器出土状況　4 SI 71土器出土状況

158　1 SI 502A・B切り合い　2 SI 502B完掘　3 SI 502A完掘

159　1 SI 752完掘　2 SK 1022・SX 795完掘　3 SI 263土器出土状況　4 SI 98土層断面

160　1 SI 458完掘　2 SI 741カマド周辺土器出土状況　3 SI 741カマド付近鋤鍬先出土状況　4 SI 741カマド土器(133)出土状況

161　1 SI 1000完掘　2 SI 1000土層断面完掘・内周堤　3 SI 1000・SI 1010土層断面

162　1 SI 1000カマド付近周堤内土器出土状況　2 SI 600・SI 610・SI 630完掘　3 SI 610周溝断面　4 SI 610カマド土器出土状況

163　1 SI 1315　2 SI 1320完掘　3 SI 280カマド土器(407)出土状況　4 SK 113土層断面

164　1 SB 1370・SB 1450完掘　2 SK 1337完掘

165　1 SI 1124完掘　2 SI 1124・SB 1161完掘　3 SK 1373土層断面

166　1 SB 570完掘　2 SB 1570完掘　3 SB 110完掘

167　1 SI 115完掘　2 SI 115土層断面　3 SI 115柱穴土器(34)出土状況　4 SI 115カマド

168　1 SI 1169完掘　2 SI 1166・SI 1167完掘　3 SI 1460・SI 1461完掘

169　縄文時代土器

170　縄文・弥生時代土器

171　古墳時代土器

172　古墳時代土器

173　古墳時代土器

174　古墳時代土器

175　古墳時代土器

176　古墳時代土器

177　奈良・平安時代土器　須恵器杯類ほか

178　奈良・平安時代土器　須恵器杯類ほか

179　奈良・平安時代土器　須恵器杯類ほか

180　奈良・平安時代土器　須恵器杯類ほか

181　奈良・平安時代土器　須恵器杯類・土師器ほか

182　奈良・平安時代土器　土師器甕ほか

183　奈良・平安時代土器　土師器甕

184　奈良・平安時代土器　土師器甕

185　奈良・平安時代土器　土師器甕

186　奈良・平安時代土器　土師器甕

187　奈良・平安時代土器　土師器甕

188　奈良・平安時代土器　1SI5　2 SI 115　3 SI 115・SI 804

189　奈良・平安時代土器　1 SI 336　2 SI 5・SI 71・SI 807・SI 1312　3 SI 71

190　奈良・平安時代土器　1 SI 600・SI 640・SI 1311　2 SI 12　3 SI 12土師器

191　奈良・平安時代土器　1 SI 20・SI 741　2 SI 502B　3 SI 502B土師器

192　奈良・平安時代土器　1 SI 462須恵器　2 SI 62土師器　3 SI 462土師器

193　奈良・平安時代土器　1 SI 806　2 SI 806土師器　3 SI 806土師器

194　奈良・平安時代土器　1 SI 752　2 SI 27・SI 752　3 SI 630・SI 1461

195　奈良・平安時代土器　1 SI 1000須恵器　2 SI 1000土師器　3 SI 314・S I 1000土師器

196　奈良・平安時代土器　1 SI 429　2 SI 1300　3 SI 1315

197　奈良・平安時代土器　1 SI 458土師器　2 SI 72須恵器・SI 1307　3 SI 72土師器

198　奈良・平安時代土器　1 SI 803土師器　2 SI 8　3 SI 280

199　奈良・平安時代土器　1 SI 14須恵器　2 SI 14土師器　3 SI 14土師器

200　奈良・平安時代土器　1 SI 75須恵器　2 SI 11・SI 75土師器　3 SI 15・SI 650

201　奈良・平安時代土器　1 SI 339　2 SI 339須恵器　3 SI 17

202　奈良・平安時代土器　1 SI 7　2 SI 7土師器　3 SI 7土師器

203　奈良・平安時代土器　1 SI 6須恵器　2 SI 6土師器　3 SI 310

204　奈良・平安時代土器　1 SI 4　2 SI 4　3 SI 60・SI 1500

205　奈良・平安時代土器　1 SI 33　2 SI 10・SI 500　3 SI 1・SI 41

206　奈良・平安時代土器　1 SI 360　2 SI 1100　3 SI 1100土師器・SI 1101・SI 1302

207　奈良・平安時代土器　1 SI 299・SI 840　2 SI 401　3 SI 753

208　奈良・平安時代土器　1 SI 1320須恵器　2 SI 1320須恵器　3 SI 1320土師器

209　奈良・平安時代土器　1 SI 1460　2 SI 850　3 SI 1320土師器

210　奈良・平安時代土器　1 SI 1166・SI 1201　2 SI 435・SI 440　3 SI 1202

211　奈良・平安時代土器　1 SI 802土師器　2 SI 18・SI 802須恵器　3 SI 29

212　奈良・平安時代土器　1 SI 1167須恵器　2 SI 1167　3 SI 1167土師器

213　奈良・平安時代土器　1 SI 1167土師器　2 SI 9・SI 42・SI 805・SI 1304・SI 1313・SI 1471　3 SI 80・SI 325・SI 670

214　奈良・平安時代土器　1 SI 16・SK 34　2 SK 102・SK 1022　3 SK 32・SK 39

215　奈良・平安時代土器　　1その他の須恵器　2その他の須恵器　3 SB730・SB790・その他の須恵器・その他の土師器

216　奈良・平安時代土器　調整技法（須恵器有台杯など）

217　奈良・平安時代土器　調整技法（須恵器無台杯）

218　奈良・平安時代土器　調整技法（須恵器杯蓋など）

219　奈良・平安時代土器　調整技法（須恵器杯類）

220　奈良・平安時代土器　調整技法・使用痕（須恵器）

221　奈良・平安時代土器　調整技法（土師器底部）

222　奈良・平安時代土器　調整技法（土師器底部）

223　奈良・平安時代土器　調整技法（土師器）

224　奈良・平安時代土器　調整技法・使用痕（土師器）

225　奈良・平安時代土器　墨書土器

226　土製品　1土製品　2土製品(SI 14ほか)　3土錘

227　奈良・平安時代金属製品1

228　奈良・平安時代金属製品2

229　石器・石製品

230　奈良・平安時代石製品

231　鉄滓の顕微鏡組織

挿　図　目　次

1　遺跡の位置と環境 …… 3
2　周辺の地形と遺跡分布図 …… 5
3　周辺砂丘列の土層柱状図 …… 8
4　遺跡周辺地の土層断面図 …… 10
5　竪穴住居跡断面図 …… 11
6　竪穴住居跡の床面傾斜平面図 …… 12
7　水準点の累積変動量変化表 …… 14
8　磐舟石廓堡（第２）実測図 …… 17
9　三角点下遺跡出土土器 …… 17
10　越後国の領域変遷 …… 18
11　聖篭町丸潟飛地屋敷遺跡土器 …… 22
12　近世福島潟周辺村落の成立
　　年代別分布図 …… 24
13　正保・元禄越後国絵図 …… 24
14　正保２年越後国絵図写真 …… 27
15　海老江舟とドブネ型刳舟 …… 28
16　舟構造断面図 …… 29
17　二艘舟略図 …… 30
18　竪穴住居内区割り …… 32
19　竪穴住居の発掘過程 …… 32
20　遺構カードの記入例 …… 33
21　年度別調査範囲 …… 35
22　61年度調査優先順序 …… 35
23　遺構配置概略図 …… 36
24　調査風景 …… 38
25　普及啓蒙活動 …… 39
26　年度別作業進行状況 …… 42
27　土層柱状図 …… 44
28　地山面の微地形 …… 45
29　竪穴住居の概念図 …… 47
30　掘立柱建物概念図 …… 47
31　ＳＩ20カマド復元模式図 …… 61
32　ＳＩ1000周堤模式図 …… 71
33　弥生土器実測図 …… 82
34　古式土師器の器種分類 …… 85
35　須恵器の器種分類 …… 95
36　土師器の器種分類(1) …… 97
37　土師器甕Ａ系法量分布図 …… 98
38　土師器甕Ｂ系法量分布図 …… 99
39　土師器甕Ｃ系法量分布図 …… 100
40　土師器の器種分類(2) …… 101
41　須恵器杯類の調整技法 …… 103
42　土師器甕Ａ系の調整技法 …… 104
43　土師器甕Ｂ系の調整技法 …… 105
44　土師器甕Ｃ系の調整技法 …… 106
45　土師器煮炊具の使用痕模式図 …… 110
46　ＳＩ12須恵器食膳具法量分布 …… 119
47　ＳＩ502Ｂ須恵器食膳具法量分布 …… 120
48　ＳＩ14須恵器食膳具法量分布 …… 129
49　ＳＩ７須恵器食膳具法量分布 …… 133
50　ＳＩ15須恵器食膳具法量分布 …… 134
51　ＳＩ６須恵器食膳具法量分布 …… 136
52　ＳＩ４須恵器食膳具法量分布 …… 137
53　ＳＩ60須恵器食膳具法量分布 …… 139
54　ＳＩ1320須恵器食膳具法量分布 …… 146
55　ＳＩ753出土須恵器甕拓影 …… 147
56　ＳＩ1202須恵器食膳具法量分布 …… 150
57　ＳＩ1167須恵器食膳具法量分布 …… 153
58　墨書文字一覧 …… 164
59　小泊群と笹神群の須恵器相互識別 … 177
60　山三賀Ⅱ遺跡出土須恵器の産地推定 178
61　美山遺跡出土須恵器の産地推定 …… 178
62　山三賀Ⅱ遺跡出土須恵器のRb—
　　Sr分布図 …… 178
63　美山遺跡出土須恵器のRb—
　　Sr分布図 …… 178
64　古式土師器の編年 …… 186・187
65　緒立遺跡・高塩Ｂ遺跡の出土土器 … 188
66　古墳時代の遺構分布図 …… 190
67　古墳時代の竪穴住居軸長分布図 …… 190

68 奈良・平安時代の土器編年(1) 194・195
69 奈良・平安時代の土器編年(2) 196・197
70 奈良・平安時代の土器編年(3) …… 199
71 山崎窯跡食膳具法量分布図…… 201
72 貝屋窯跡食膳具法量分布図 …… 202
73 狼沢2号窯跡食膳具法量分布図…… 202
74 馬上窯跡出土須恵器実測図 …… 203
75 ホーロク沢窯跡採集須恵器実測図 … 204
76 小泊窯カメ畑窯跡群出土
須恵器実測図 …… 204
77 小泊窯江ノ下窯跡採集
須恵器実測図(1)…… 205
78 小泊窯江ノ下窯跡採集
須恵器実測図(2)…… 206
79 越後・佐渡のおもな須恵器窯と
遺跡分布 …… 208
80 時期別の須恵器供給状況推定図 …… 210
81 須恵器の胎土別比率 …… 210
82 奈良・平安時代竪穴住居軸長分布図 217
83 奈良・平安時代竪穴住居面積分布 … 217
84 竪穴住居一覧図…… 218
85 奈良・平安時代掘立柱建物軸長
分布図 …… 220
86 奈良・平安時代竪穴住居方位
分布図 …… 221
87 奈良・平安時代遺構変遷図(1) …… 222
88 奈良・平安時代遺構変遷図(2) …… 223
89 曽根遺跡の遺構・遺物 …… 226
90 県内の竪穴住居集落遺跡 …… 229
91 一之口遺跡の遺構分布模式図 …… 230
92 古代沼垂郡の概要図 …… 232

表 目 次

1 越後(北半部)の地域区分概念…… 2
2 新潟平野における主な放水路と
潟の開発一覧 …… 3
3 周辺の気象状況…… 4
4 周辺の遺跡一覧…… 4
5 新潟平野土質性状表…… 9
6 竪穴住居跡の床面傾斜分類表…… 13
7 山三賀II遺跡周辺新田村の村高・
親村・開発年代一覧…… 25
8 山三賀II遺跡周辺新田村の戸数・
人口の変化…… 26
9 墨書土器一覧…… 163
10 帯金具の分類 …… 169
11 地元産須恵器の科学特性 …… 174
12 本遺跡出土須恵器の分析値…… 175
13 他の遺跡出土須恵器の産地推定…… 177
14 供試材の履歴と調査項目 …… 180
15 新潟県下の鉄滓と砂鉄の科学組成
折り込み(180・181)
16 古式土師器の編年的位置…… 189
17 須恵器窯跡編年試案 …… 208
18 山三賀II遺跡と古代沼垂郡の
遺跡動向 …… 232
19 山三賀II遺跡の動態 …… 234

別表 1 主要遺構一覧表…… 240
2 古墳時代、奈良・平安時代土器観察表…… 243

第Ⅰ章　調査に至る経緯

遺跡の発見　聖篭町山三賀周辺の砂丘地に遺跡が数多く分布していることは，かなり以前から知られていた。聖篭町近辺の遺跡は畠山佑二氏（豊栄市在住）が精力的に踏査し発見したものが多い。『聖篭町誌』〔聖篭町誌編纂委員会編　1978〕には山三賀出土として縄文時代中期の土器，古墳時代末期～奈良時代初頭の須恵器杯蓋，平安時代の須恵器長頸瓶の写真が掲載されている。昭和50年に県教育委員会（以下「県教委」とする）の遺跡カードに登録された「山三賀遺跡」が，これらの土器の出土地と思われる。

今回の調査対象となった「山三賀Ⅱ遺跡」は，新新バイパス建設に伴う分布調査によって新たに発見されたものである。分布調査は昭和50年６月，県教委によって実施され，山三賀地内で発見された遺跡は従来知られていた山三賀遺跡とは別の地点であることから，従来の山三賀遺跡を「山三賀Ⅰ遺跡」，新発見の遺跡を「山三賀Ⅱ遺跡」とした。このほか，蓮野地内においても新しい遺跡（正庵Ⅰ遺跡）が発見された。山三賀Ⅱ遺跡と正庵Ⅰ遺跡は，バイパス法線内に存在することから，今後調査が必要と判断され，その旨，建設省北陸地方建設局（以下「北陸地建」とする）に通知された。

バイパス建設　新新バイパスは新潟市から青森市に至る日本海縦貫道の国道７号のバイパスで，新潟市と県北部の中心地である新発田市を結ぶものである。

山三賀Ⅱ遺跡の調査について，北陸地建との具体的な協議がもたれるようになったのは57年度以降であり，当初，用地買収や工事工程の関係から，59年度上半期に調査の希望があった。その後再々協議しながら，県教委は他の調査や人員との関係から，とりあえず遺跡の内容を把握するために確認調査を実施し，日程や予算の計画を立てることにした。

確認調査　確認調査は昭和59年４月９日・10日に実施した。計18か所の試掘坑（約100㎡）と，２条の試掘溝（幅約２ｍ・長さ計約140ｍ）を設定し，土層・遺物・遺構のあり方を調査した。その結果，部分的には耕作による撹乱を受けているものの，遺物包含層が存在することを確認し，縄文，古墳，奈良・平安時代の多量の遺物と，遺構と思われる落ち込みを検出した。これらの所見と地形を勘案すると，道路法線幅約65ｍ，長さ約180ｍ，面積約12,000㎡の範囲の全面調査が必要とされた。ただし，町道より北西側は今回の調査では資料不足であり，今後さらに大規模な試掘が必要とされた。

正庵Ⅰ遺跡については遺物包含層が全く存在せず，これまでの耕作等によって遺跡が湮滅し，発掘調査の必要はないと判断された。

本調査にむけて　山三賀Ⅱ遺跡の本調査の日程は，59年度に協議され，60年度中に実施し，61年度に持ち越すことにした。60年度には，本遺跡と同じメンバーで出雲崎バイパス，上新バイパスの調査も予定されており，本遺跡の調査開始は当初より秋になるものと見込まれていた。上新バイパスの調査が10月中旬に終了する目処がついた９月下旬に至り，山三賀Ⅱ遺跡の調査開始を10月下旬とした。県教委では教文第924号で文化財保護法第98条の２の発掘通知を文化庁に提出し，聖篭町教育委員会の協力のもと，作業員募集などの調査準備を行った。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　はじめに

山三賀Ⅱ遺跡は新潟県の北部，北蒲原郡聖篭町大字三賀字白通に所在する。新潟県の県庁所在地である新潟市より北西へ約20km，車で約30分のところにある。

本章では山三賀Ⅱ遺跡をとりまく，地理的・歴史的環境について述べるが，各節においてとりあげることがらについて，その主旨を記しておきたい。

砂丘　遺跡周辺の地理的環境でもっとも注目されることは，当遺跡が砂丘上に立地することである。第2節ではまず，この砂丘の形成史と現在に至るまでの地形の変動についてとりあげる。この砂丘はわが国で最大の規模といわれる新潟砂丘である。遺跡の存在する阿賀野川北部では海岸線に平行して約10列もの砂丘列が並んでいる。遺跡はこのうち内陸側に立地し，海岸線から直線距離で約5kmある。したがって，海岸砂丘でありながら，現在では海と直接関係することは少ない「内陸砂丘」である。地形は一般に不変なものではないが，砂丘はとくに変動が大きく，発掘された遺構の状況もそれを示している。

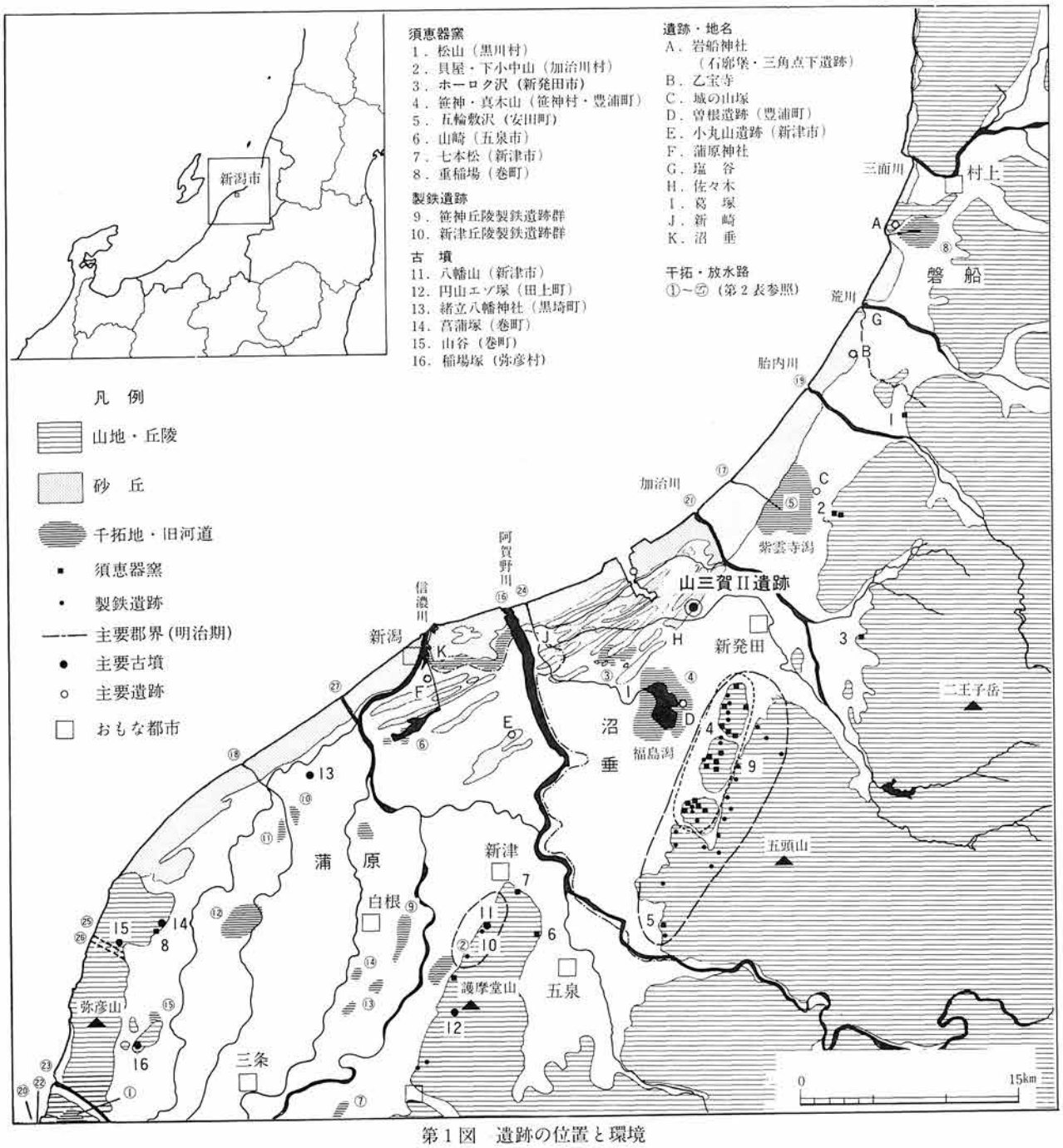
原始・古代　第3節ではおもに原始・古代の歴史的環境を述べる。文献資料による渟足柵・磐舟柵をはじめとした東北経営などの古代史にもふれるが，考古学的資料により，越後でも「東北色」の強いこの地域の特色について述べる。

近世・近代　第4節では近世・近代における歴史的環境について述べる。古代の遺跡である当遺跡ではあるが，現在の地理的環境・景観はおもに近世以降の開発によってつくられたものである。いま遺跡の立地する砂丘の内陸側は一面の美田地帯となっている。しかし，かつてそこには多くの潟湖を擁した広大な低湿地が存在していたのである。大規模な砂丘が存在したことにより著しく排水不良の地形となり，現在の状況からはおよそ想像できない景観であった。古代の当遺跡を考えるとき，このことは重要である。また，一方ではこのような環境であったことにより，広大な内水面を形成し，それが人や物の動きに大きく作用したことが想定される。古代遺跡の報告にあえて近世・近代の開発史と水運をとりあげた目的はここにある。

地域区分について　現在，聖篭町は北蒲原郡に属している。越後を地域的に大別する場合，「上越」・「中

第1表　越後（北半部）の地域区分概念

古　代	現　在	上・中・下越	（通　称）	690年頃～702年	702年～
磐船（いわふね）	岩　船（村上市）	下　越	阿賀北（揚北（あがきた））	越　後	越　後
沼垂（ぬったり）	北蒲原（新発田市）（東蒲原？）				
蒲原（かんばら）	中蒲原（新潟市） 西蒲原 南蒲原（三条市）				
		中　越		越　中	
古志（こし）	三島（さんとう） 古　志（長岡市）				



第1図　遺跡の位置と環境

第2表　新潟平野における主な放水路と潟の開発一覧

（『アーバン・クボタ』17より作成）

潟の干拓				放水路の開削			
	名　称	開発年代	記　事		名　称	開削年代	記　事
①	円上寺潟	承応1年(1652)	近世前期より周辺の開発がすすめられ，大河津分水との関連で円上寺隧道より放水し干拓。	⑯	松ケ崎放水路	享保16年(1731)	加治川の悪水吐として開削したものが，阿賀野川の度代洪水で本流化した。
②	鎌倉潟	延宝2年(1674)頃	干　拓	⑰	落堀川	享保18年(1733)	紫雲寺潟の干拓にともなって開削。
③	島見潟	享保16年(1731)	松ケ崎放水路によって干陸化。	⑱	新川放水路	文政3年(1820)	信濃川左岸の西蒲原一帯の排水のため開削。
④	福島潟	享保16年(1731)	松ケ崎放水路により周辺干陸化がすすめられるが，現在まで水面が残されている。	⑲	胎内川放水路	明治21年(1888)	荒川との分離のため開削。
⑤	紫雲寺潟	享保18年(1733)	落堀川によって，全面干拓される(江戸幕府享保改革の政策)。	⑳	東部組合悪水路	明治36年(1903)	大河津分水着工以前に島崎川排水のため開削。
⑥	鳥屋野潟	享保年間(1716～)	享保年間より周辺の干拓がすすむが，現在まで水面は残されている。	㉑	加治川放水路	大正2年(1913)	阿賀野川との分離のため開削。直接日本海へ放流。
⑦	大月潟	近世中頃～	干　拓	㉒	円上寺隧道	大正9年(1920)	大河津分水工事による補償工事として掘削。
⑧	岩舟潟	天明年間(1781～)	干　拓	㉓	大河津分水	大正11年(1922)	新潟平野の水害克服のため開削。
⑨	白蓮潟	寛政年間(1789～)	干　拓	㉔	新井郷川放水路	昭和9年(1934)	阿賀野川との分離のため開削。
⑩	大　潟	文政3年(1820)	新川放水路により，周辺の干拓がすすむ。昭和25年頃全面干拓。	㉕	樋曽山隧道	昭和14年(1939)	矢川流域一帯の排水のため掘削。
⑪	田　潟	文政3年(1820)	同　上	㉖	新樋曽山隧道	昭和43年(1968)	同　上
⑫	鐙　潟	文政3年(1820)	新川放水路により，周辺の干拓がすすむ。昭和41年全面干拓。	㉗	関屋分水	昭和47年(1972)	新潟市街の水害防御などのため開削。
⑬	上道潟	弘化年間(1844～)	何回かの破堤により，次第に埋り，弘化年間に開墾される。				
⑭	下道潟	弘化年間(1844～)	同　上				
⑮	揚技潟	昭和14年(1939)	樋曽山隧道開削にともない干拓。				

（番号は第1図参照）

越」・「下越」の三区分とするのが一般的である。北蒲原郡は下越にあたる。下越は下越後の意味であり，南北に長い越後の北部をさす。現在の行政区分でいえば，西蒲原・中蒲原郡より北東部にあたり，新潟市・新発田市・村上市などの都市がある。

古代においては北蒲原郡の地域は「沼垂郡」と呼ばれていた。沼垂郡の南西側の境界は阿賀野川であり，隣接する蒲原郡と対していた。阿賀野川は越後における大きな「境界」である。一般に阿賀野川以北の地域は，北部の磐船郡を含めて「阿賀北地方」と呼ばれている。中世においても「揚北」と称されたようにこれは歴史的名称である。この地域性を端的に表現すれば，東北色である。それは現在のことばが東北系であることにもあらわされている。当地方の地域性は第3節においても述べることになるが，この地域性は古代の当遺跡を理解するとき，重要な側面と考えられる。

気象条件(第3表)　新潟県は日本海岸の気候であり，冬に雪が特に多いことで知られている。しかし，雪の量は新潟県内でかなりの格差があり，海岸部に位置する聖篭町の周辺は，かなり少ない地域にあたる。聖篭町よりやや雪の少ない新潟市については，雪の初日は11月27日，終日は3月30日で，最大積雪深は数10cmで，1mをこえることはまずない。また，1月・2月でもまったく積雪をみない期間もある。聖篭町周辺もほぼこれと同じ状況かと考えられる。

降水量の季節ごとの差はさほど大きくはない。梅雨は入梅時の6月は雨量が少なく，梅雨あけ間近の7月に集中する。一方，秋から冬にかけても雨量が多い。10月以降は日本海側特有のしぐれる日が多くなり，いったん天気が崩れると数日北西の季節風を伴った雨が続く。

気温は2月がもっとも低く，8月がもっとも高い。しかし，最低の2月でも平均気温は氷点下には下らず，終日氷点をこえない真冬日も，一年で数日しかない。夏に気温が高くなるのは，梅雨明けの7月20日頃より後で，8月まで真夏日が20日程度ある。この時期に気温があがらない場合，「冷害」となり，米の生産量は著しく減少する。例年の真夏の暑さは東京近辺とあまり差はないと考えられるが，その期間は短いといえるであろう。

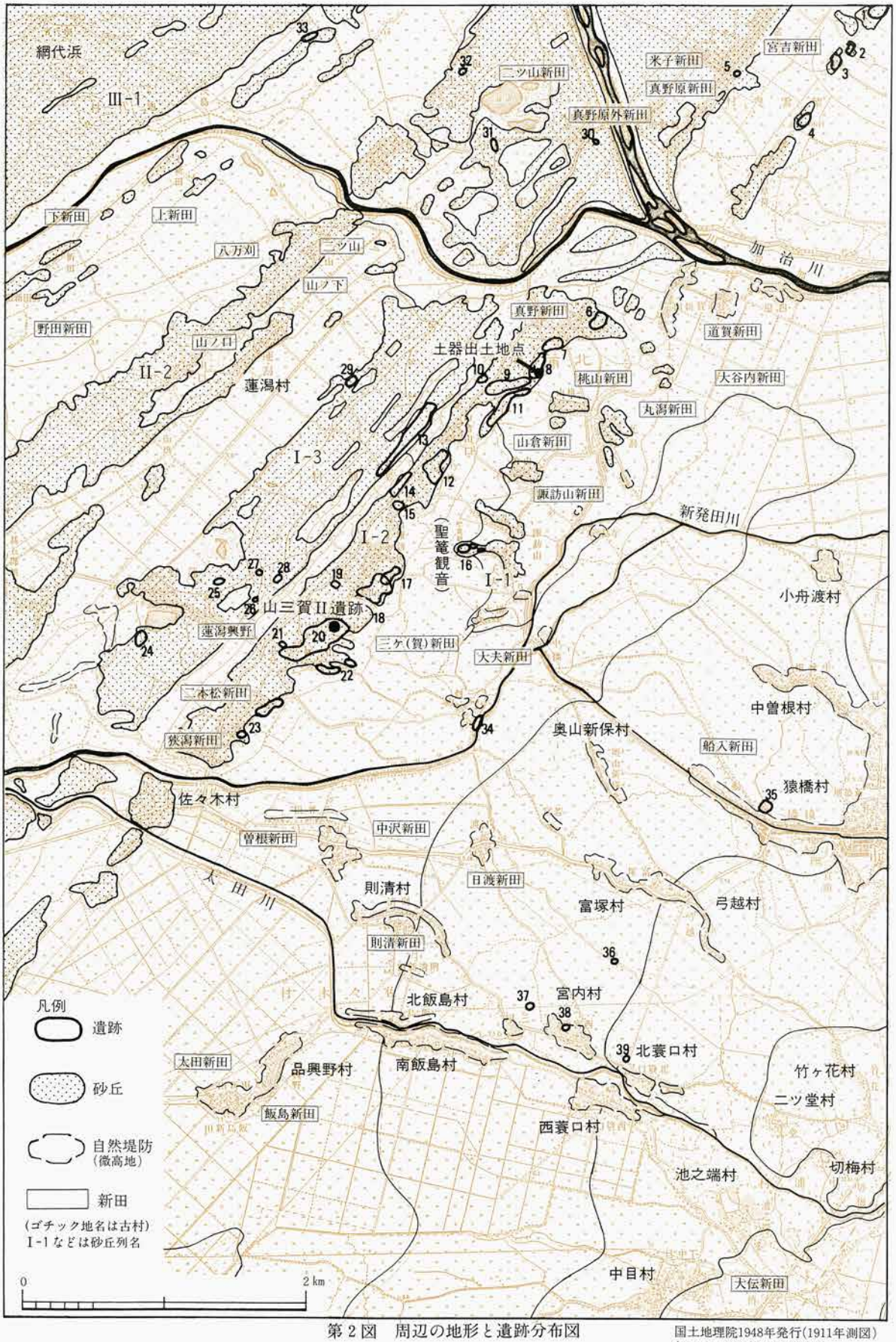
第3表　周辺の気象状況　　観測地点：中条町，1978～1988の平均値

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温	1.4	0.8	4.0	10.7	15.9	20.3	23.6	25.8	20.9	14.9	9.1	4.4
降水量	233.4	141.9	120.2	111.1	132	145.3	212.7	136.2	161.8	200.7	242.1	232.7

(資料提供：日本気象協会新潟センター)

第4表　周辺の遺跡一覧（次頁第2図と対照）

1．庚山遺跡　(古代)	15．諏訪山遺跡　(古代)	29．山倉遺跡　(古代)
2．小島遺跡　(古代・中世)	16．聖篭観音遺跡(縄文中・古代)	30．外新田遺跡
3．王子山遺跡　(縄文・弥生・古代)	17．山大夫遺跡　(弥生・古代)	31．二ツ山遺跡　(古代)
4．白山島遺跡　(縄文・古代)	18．山緑遺跡　(古代)	32．下二ツ山遺跡(古代)
5．妙広寺石仏　(鎌倉)	19．聖篭山遺跡　(古代)	33．前畑遺跡　(縄文・古代)
6．真野II遺跡　(古代)	20．山三賀II遺跡(古代)	34．本三賀遺跡　(古代)
7．真野I遺跡　(古代)	21．追分遺跡　(縄文・古代)	35．猿橋館跡　(室町)
8．丸潟飛地屋敷遺跡(古代)	22．山三賀I遺跡(弥生・古代)	36．赤沼遺跡　(古代)
9．桃山遺跡　(縄文・古代)	23．二本松遺跡　(縄文中・晩・弥生・古墳)	37．飯島遺跡　(古代)
10．長山辺遺跡　(古代)	24．蓮野I遺跡　(古代)	38．干割遺跡　(古代)
11．金港遺跡　(古代)	25．三辺遺跡　(古代)	39．鬼塚
12．木ノ株遺跡　(古代)	26．正庵III遺跡　(古代)	1～5，30～32．紫雲寺町
13．稲の平遺跡　(古代)	27．正庵II遺跡　(古代)	6～29，33～34．聖篭町
14．諏訪山II遺跡　(古代)	28．正庵I遺跡　(古代)	35～38．新発田市



第2図　周辺の地形と遺跡分布図

国土地理院1948年発行(1911年測図)
新発田1：25000→1：40000

2　地理的環境と新潟砂丘の地盤変動

A　遺跡をとりまく地理的環境

1）　地　形　概　観

山三賀Ⅱ遺跡は，新潟平野を横断する阿賀野川の北方，平野の北辺部にあり，海岸線に平行して10～数列に発達した砂丘列の，最も内陸に近い砂丘上に立地する。砂丘上でも，砂丘の頂部からやや内陸側に寄った部分で，背後の沖積平野に面している。標高は約５～６ｍである。以下に，遺跡をとりまく地形を概観する。

新潟平野は，山地・丘陵との境界が直線的であり，平面形で不等辺三角形を呈する。特に，平野東縁は，北北東―南南西方向の新発田―小出構造線〔山下1970〕と，それに平行した褶曲構造をもつ丘陵等に限られている。構造線の東側の東部山地区〔新潟第四紀研究グループ1971〕には，北から朝日山地，飯豊山地，櫛形山脈，五頭山脈，越後山脈が連なり，県境に至る。そして，その西側で，東部山地区の前面には，第四系の笹神丘陵と，褶曲構造の発達した新第三系の新津・五泉丘陵，栃尾・下田丘陵等が連なる。

平野西縁は，同じく北北東―南南西方向の褶曲構造をもった定高性のある新第三系の刈羽・三島丘陵と接し，その北延長の平野の最も広いところに弥彦山地をもつ。弥彦山地は，新潟平野から浮び上がったように独立し，日本海の波浪の防波堤として平野の成長を助長してきたものと考えられる。

平野中央には，膨大な量の土砂を運搬し，地盤の沈降と平行して，厚い沖積層を堆積してきた信濃川と阿賀野川の２大河川が流れ，日本海に注ぐ。前者は，本県の地形地質の一般方向に流れをもち，平野を縦断する。後者は，飯豊山地，越後山脈を切り，平野を横断する形で北西に流れる。そして，平野の前面すなわち平野北縁には，延長約70kmの新潟砂丘が海岸線にほぼ平行して発達している。この大量の砂丘砂も，２大河川の供給物と考えられる。

阿賀野川以北においては，荒川・胎内川・加治川が，背後の山地から狭い平野部に直接流れ出し，その山麓の谷口に扇状地を形成しているが，過去には，いずれも海への出口を前面の砂丘によって止められ，乱流していたと考えられる。特に，加治川は，砂丘に沿って流下し，阿賀野川・信濃川に合流していた痕跡がみられる。また，信濃川中流の平野への出口，すなわち長岡周辺においては，豊富な地下水を砂礫層に含む「古信濃川扇状地」〔榧根1985〕が地下に存在する。

しかし，山三賀Ⅱ遺跡の背後の沖積地をも含む平野の中央部では，２大河川をもちながら，扇状地の発達がきわめて悪く，河川の蛇行帯が広がる。そして，現在の穀倉地帯の美田が見られる以前には，２大河川や中ノ口川等が著しく流路を変え，くり返し氾濫していたことがうかがえる。それは，古い沖積段丘をも埋没させている広い氾濫原と，細長く連続した自然堤防，そして，その自然堤防にとり囲まれるように残こされた大小たくさんの湖沼（福島潟，鎧潟等）や後背湿地，砂丘間低地（鳥屋野潟，佐潟等）の分布によるところである。

2）　新　潟　砂　丘

山三賀Ⅱ遺跡の立地する新潟砂丘について触れる。新潟砂丘の研究については，遺跡の発掘調査，海岸

浸食・地盤沈下・地震，工場や港の建設にともなう地盤調査，砂丘地の作物栽培等に関連して古くから報告されてきた。この研究が第四紀地史の中に位置づけられるようになったのは，新潟古砂丘グループ等の団体研究が組織的に始まってからである〔新潟古砂丘グループ1976〕。新潟古砂丘グループは，砂丘列の区分について，主として腐植層の発達と人類遺跡とから，新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲという区分をし（1974），さらに新潟砂丘の特徴，新潟砂丘と沖積層の関係について検討を続けてきた。以下では，同グループ（1979）が新潟砂丘の形成史について総括したものを借り，その概要について述べてみたい。

新潟砂丘は，北は新潟平野の北東端の村上付近から，南は弥彦山地の角田山麓に至るまで延々と発達する。北東―南西方向の海岸線に沿った横列砂丘であり，他の砂丘に例をみないほど数多くの砂丘列からなる。砂丘列は，砂丘の中央部にあたる新潟東港付近で最も多く，10列を数える。また，信濃川と阿賀野川にはさまれた亀田付近で最も内陸まで分布し，海岸からの距離は約10kmにもなる。しかし，北東および南西に向かって，砂丘列は収斂していき，これらは上下の関係で重なっている。形成期については，完新世の砂丘堆積物からなり，古砂丘と区別して新砂丘と称している。

a）　新　砂　丘　Ⅰ

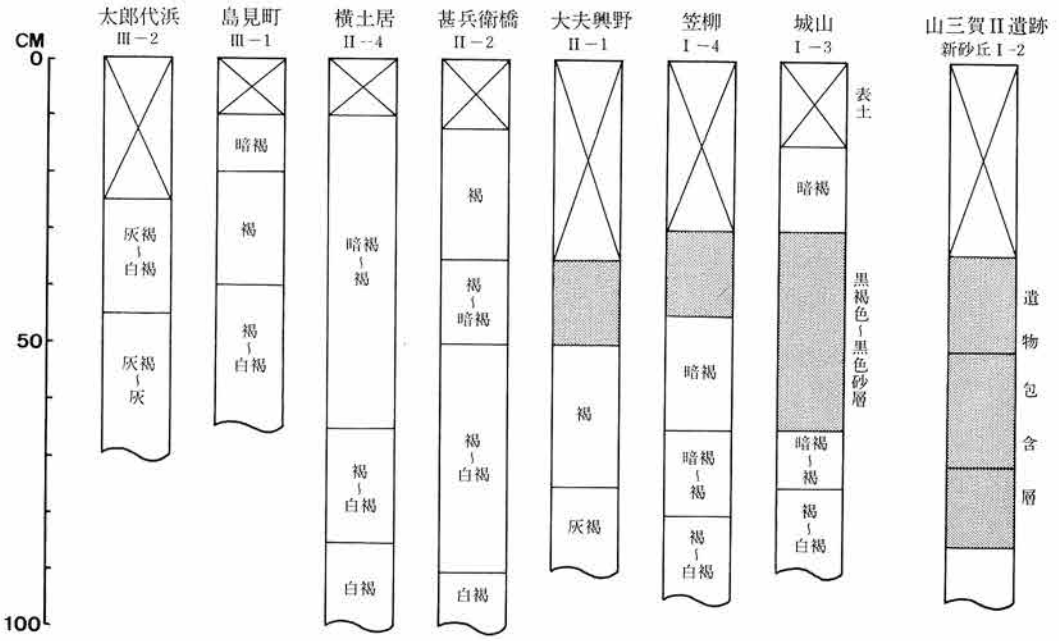
最も内陸側に分布する砂丘列群で大きくみると4列の砂丘列からなる。これを内陸側より新砂丘Ⅰ-1，Ⅰ-2，Ⅰ-3，Ⅰ-4と称している。全体としては，大きな円弧をえがいて分布するが，標高は平野の周辺で高く，中央部で低くなる。特に，最も内陸側の新砂丘Ⅰ-1は，標高5ｍ以下，延長4㎞程度の島状で断続的な分布になっている。途切れている部分の一部は，沖積面下に埋没している可能性がある。また，新砂丘Ⅰ-2についてみると，砂丘砂の粗度組成は砂丘列の東の方で粗粒になっている。このことから，新砂丘Ⅰの砂丘砂は東から西へと供給されていたこと，そして，現在新砂丘Ⅰを切って流れる阿賀野川は，この砂丘列群の形成当時には別の位置を流れていたことが考えられる。砂丘の表面には，色の濃い黒色腐植層があり，その下位の砂丘砂は，やや黄色味をおびた褐色砂でよくしまっている。新砂丘Ⅰ-1からは縄文前期末葉以後，新砂丘Ⅰ-2，Ⅰ-3，Ⅰ-4からは縄文中期以後の遺物が出土している。

b）　新　砂　丘　Ⅱ

新砂丘Ⅰの砂丘列群よりも海側にあり，新潟東港付近で最も多い4列の砂丘列からなる。これを内陸側より新砂丘Ⅱ-1，Ⅱ-2，Ⅱ-3，Ⅱ-4と称している。阿賀野川を境にして東と西の砂丘列のえがく円弧は異なり，全体としては，阿賀野川河口でやや海側に突出した「ハ」の字形の分布をなす。新潟東港付近で新砂丘Ⅱの砂丘列は新砂丘Ⅰの砂丘列を明確に切っており，両者の形成期の異なることを示している。そして，標高については，新砂丘Ⅱ-1，Ⅱ-2が10～15ｍの部分をもつのに対し，新砂丘Ⅱ-3，Ⅱ-4は起伏が小さく，標高を5～10ｍに下げる。また，新砂丘Ⅱ-2の砂丘砂の粒度組成をみると，阿賀野川河口で最も粗く，そこから離れると細粒になる傾向がでる。このことは，新砂丘Ⅱの砂丘列の分布形状と合わせて，阿賀野川から供給された砂がこの砂丘列の形成に大きく作用したことを示すものである。砂丘表面の腐植層はやや褐色をおびており，下位の砂丘砂も灰白色で新鮮な感じを示す。古墳時代以降の遺物の出土が知られていたが，西蒲原郡黒埼町の緒立では，新砂丘Ⅱ-2からさらに古い縄文晩期～弥生初期の遺物が出土している。

c）　新　砂　丘　Ⅲ

最も海側に位置し，最も発達している。信濃川以西で1列，その以東で2列の砂丘列が認められ，これを内陸側より新砂丘Ⅲ-1，Ⅲ-2と称している。起伏に富み，標高は新潟東港付近で25～30ｍ，南西端の角



第３図　周辺砂丘列の土層柱状図

田浜で55ｍに達し，新砂丘Ⅲ-2の幅は約１kmにもなる。東西で砂丘列の円孤が異なり，信濃川河口で最も海側に突出した形で分布する。そして，新砂丘Ⅱと同様に，砂丘砂の粒度組成と合わせると，信濃川から供給された砂がこの砂丘列の形成に大きく影響を与えたことがうかがえる。

砂丘表面にはほとんど腐植層が認められず，褐色の砂丘砂はくずれやすい。新砂丘Ⅲ-1からは須恵器や宋銭が出土しているが，新砂丘Ⅲ-2からは遺物は出土していない。

過去のある時期に，それまで進行してきた砂丘の発達が停止すると，その産物として黒色～黒褐色腐植層が形成される。これは，旧期クロスナ層と呼ばれ，この上下関係によって完新世の新砂丘をさらに新砂丘と旧砂丘に２分する。新潟砂丘においては，新砂丘Ⅰの表面にこの旧期クロスナ層の形成が見られていたが〔新潟古砂丘グループ1974〕，今回の調査では，北蒲原郡聖篭町の大夫興野の新砂丘Ⅱ-1においても，これに酷似した黒褐色腐植層が観察できた。縄文海進以後，弥生時代を経て古墳時代の初頭に至るまでが砂丘形成の停止期間であると推定されている。しかし，前述のような新砂丘Ⅱ-2（黒埼町緒立）の出土遺物を考慮すると，砂丘列の形成期については当時の環境をも含めて検討の余地があろう（第２図参照）。

３）　砂丘と後背湿地

山三賀Ⅱ遺跡は，いわゆる旧期クロスナ層で被覆された旧砂丘――新潟砂丘では新砂丘Ⅰ-２――の上に立地する。海岸からの距離は約5.5kmである。このすぐ背後には新砂丘Ⅰ-1の砂丘列が島状に分布し，さらに内陸側には沖積地が広がる。すでに，新潟東港建設に伴うボーリング資料により，新砂丘Ⅱの基底は現海面下－10～－16ｍ，新砂丘Ⅲのそれは現海面下－６ｍであると推定された〔新潟古砂丘グループ1979〕。そして，新砂丘Ⅱの基底の方が深いことと，新砂丘Ⅰ-1が島状に分布していることから，砂丘列の全体としての沈降が考えられた。最も古い新砂丘Ⅰ-1が長い時間の沈降により沖積面下に埋没したことは十分に考えられるのである。

本遺跡の発掘調査の原因である国道７号新潟―新発田バイパスの建設に伴い，今回新たにボーリング資料〔建設省1986他〕を得ることができた。これは，新砂丘Ⅰ，新砂丘Ⅱおよび新砂丘Ⅰのさらに内陸側

の沖積地にかかるもので，砂丘と後背湿地の関係について解明する貴重な資料となる。ここでは，北蒲原郡聖篭町の蓮野から新発田市郊外にかけての区間（バイパス・センター杭No.695～No.834区間）に注目する。

この区間の地盤は，上部粘性土層（Ⅰ層Ts，Ⅱ層Ums，Ⅲ層Umc，Ⅳ層Umpt），上部砂質土層（Ⅴ層Us），上部砂・粘土互層（Ⅵ層Uc，Ucs），砂丘砂層（Ⅶ層Sd），下部砂質土層（Ⅷ層Ls，Lsg）の5層に大きく分けられる。上部粘性土層は，表土のⅠ層（Ts），シルト質細砂を主体とするⅡ層（Ums），腐植物を混入する粘土のⅢ層（Umc）および腐植土のⅣ層（Umpt）からなる。いずれも，N値は0～2回で非常に軟弱な土層である。特にⅣ層（Umpt）は含水量が多く，泥炭状になっている。

第5表　新潟平野土質性状表

時代	地層名	記号	土質名	N値	土質性状
沖積世	上部粘性土層	Ts	シルト～シルト質粘土	—	含水多く軟質で有機物を混入する表土。
		Ums	シルト混り細砂～粗砂	0～2（1）	不均質な砂質土で全体に含水多くルーズである。
		Umc	シルト～シルト質粘土	0～2（1）	木片や腐植物を混入し，含水多く粘性強くおびる。
		Umpt	腐植土	0～1（0）	含水多く著しく軟質で，一部シルト質粘土を含む。
	上部砂質土層	Us	中砂主体細砂～粗砂	1～24（11）	不均質な砂質土で，小砂や腐植物及びシルトをはさむ。
	上部粘土・砂互層	Uc	砂質シルト～シルト質粘土	1～5（2）	上部層は細砂を含むが，下位層はほぼ均質な粘土。
		Ucs	シルト質砂中砂	3～6（5）	シルトを含む砂質土でルーズ。不連続なはさみ層。
	砂丘砂層	Sd	中砂	—	比較的均質な中砂で下部ではよく締まる。
洪積世	下部砂質土層	Ls	細砂～中砂	22～50（42）	上部では貝殻片や木片を混入する。ほぼ均質な砂層。
		Lsg	礫混り中・粗砂～砂礫	45～50（50）	∅3～10㎜以下の礫分にとみよく締まる。

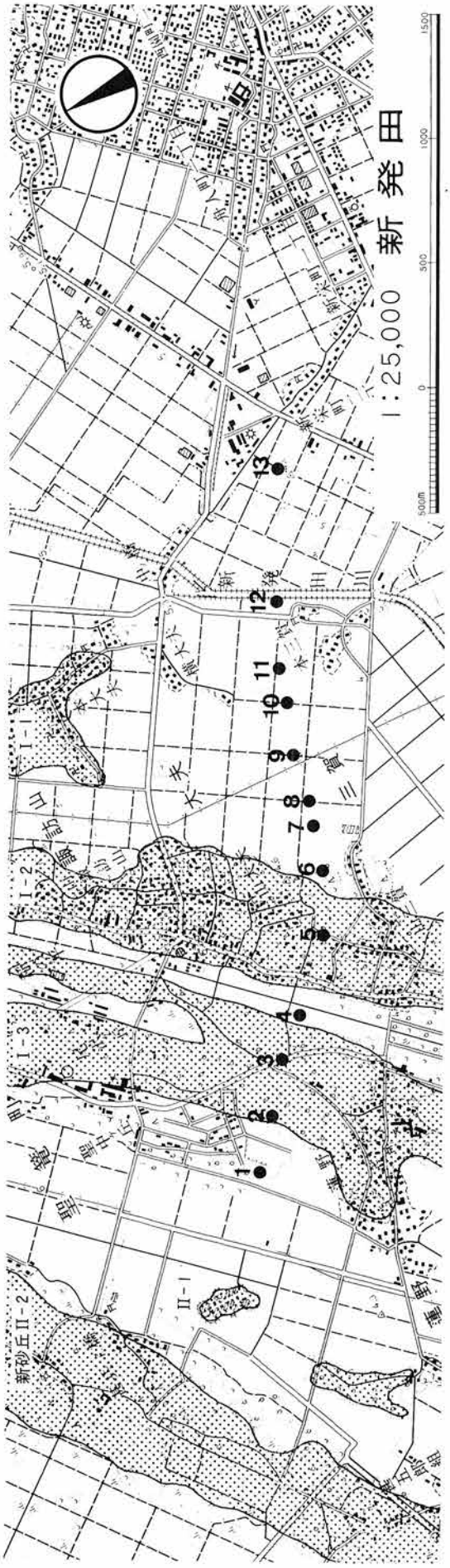
層厚，N値の（　）内はその平均値を示している。

上部砂質土層は，細砂，中砂，粗砂などの互層になっており，粗砂の部分には径2～5㎜の礫も混入する。粒度分布の悪い砂層である。これをⅤ層（Us）とする。平均層厚は5ｍを越えるが，深度9ｍ付近を境にN値が変化するところがある。すなわち，上部は9～15回，下部は21～26回を示す。全体的に締まっている。上部砂・粘土互層のⅥ層は，ほぼ均質な粘土層（Uc）とこれを不連続に介在するシルト質砂層（Ucs）からなる。平均層厚は6ｍを越え，N値は3回前後を示す。砂丘砂層のⅦ層（Sd）は比較的均質な中砂で，下部ではよくしまっている。下部砂質土層のⅧ層は，細砂・中砂・粗砂層（Ls）と砂礫層（Lsg）からなる。砂礫は径2～5㎜の細礫を主体としたもので，最大でも径20㎜程度である。N値は，上部で20～30回，下部で50回以下となり，非常によくしまっている。このⅧ層は洪積世のものと判断され，砂丘砂層（Sd）の基盤となっている。

新砂丘Ⅰ-3および新砂丘Ⅰ-2については，その起伏が地形に現われている上に，N値14～28回のしまりのよい砂丘砂層（Sd）が厚く堆積していることが明らかである（地点⑤，センター杭No.735＋15）。そして，新砂丘Ⅱ-1（Ⅰ-4）と新砂丘Ⅰ-3の間の砂丘間低地には，腐植土層（Umpt）をはさむ中砂が堆積し（地点①，同No.695＋6），新砂丘Ⅰ-3と新砂丘Ⅰ-2の間の砂丘間低地には，砂丘砂層（Sd）の上位に粘土層が堆積している（地点④，同No.724）。また，新砂丘Ⅰ-2の背後には，上部粘性土層の粘土（Umc）と腐植土（Umpt）が4～5ｍの厚さで堆積している（地点⑥，同No.752）。以上は，砂丘と砂丘間低地の地盤の様子を明らかにした。

一方，埋没したと考えられる新砂丘Ⅰ-1の存在について考察する。地形図の延長上でみると，この砂丘列はセンター杭No.765～790の位置に存在すると予想されるが，地形の起伏は認められないし，地下の土層においてはいわゆる砂丘砂層（Sd）も存在しない。しかし，層厚数ｍの上部砂質土層（Us）について次の点で注目したい。

①上下の粘土層に比べしまりがよく，N値は10～20回で（地点⑨，同No.774＋12），砂丘砂層（Sd）の値に近



第４図　遺跡周辺地の土層断面図

いこと。

②センター杭No.755以西，同No.790以東において，その上面の層理面に多少の落ち込みがあり，そこに層厚１～1.5ｍの腐植土（Umpt）が認められること（地点⑥，同No.752・地点⑪，同No.792＋17）。

すなわち，両翼に腐植土（Umpt）をもつ範囲（同No.755～同No.790）が新砂丘Ⅰ-1の延長上と一致するため，この上部砂質砂層（Us）は，砂丘砂層（Sd）と生成的にも類似したものの可能性がある。

また，上部砂質上層（Us）の下位の上部砂・粘土互層（Uc，Ucs）のＮ値が低く軟弱であることと，さらに，基盤である洪積世の下部砂質土層（Ls，Lsg）までの深度が東側（内陸側，新発田側）ほど深いことは，地盤の沈降（＝新砂丘Ⅰ-1の埋没）を裏づける要因となろう。

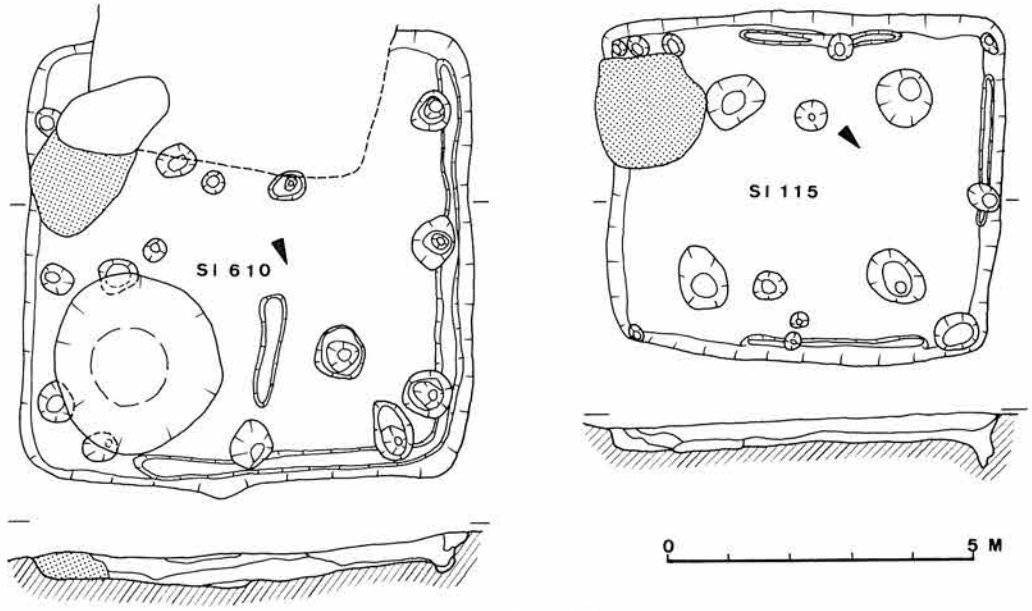
B　新潟砂丘における地盤変動

1）　竪穴住居跡の床面傾斜

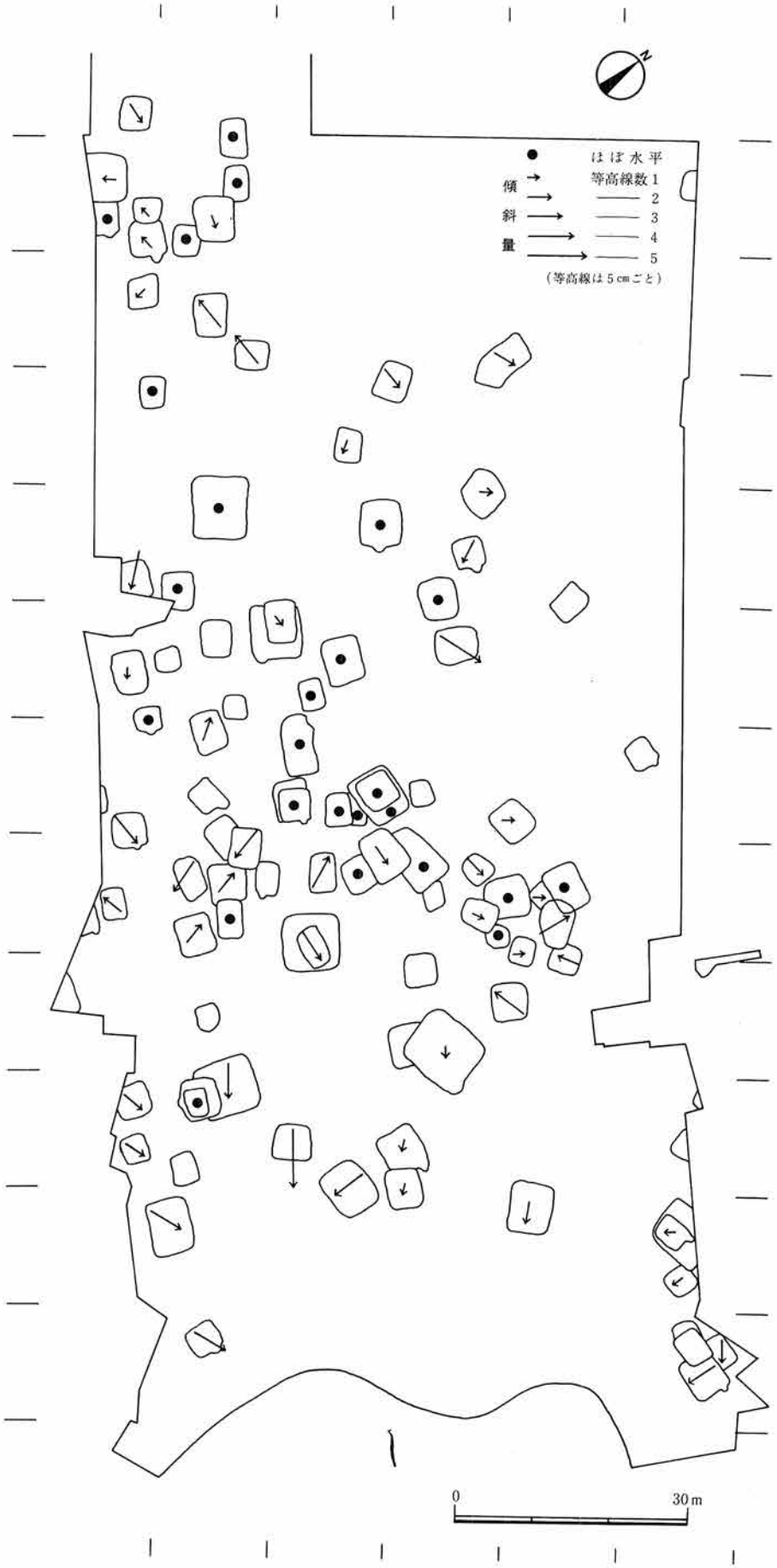
山三賀Ⅱ遺跡では，古墳時代中期（5世紀），奈良・平安時代（8・9世紀）の竪穴住居跡が約100棟発掘された。竪穴住居跡の床面は，簡素な敷物があったかどうかは想像にまかせるとして，ほぼ生活面であったに違いない。当時の人々は，そこに生活用具を置き，そこで腰をおろしたり横になって睡眠をとったりしていたわけである。そして，人間の平衡感覚は意外にも優れており，その床面はほぼ水平に整地されていたものと考えられる。ところが，いくつかの竪穴住居跡において，発掘中に肉眼でも判断がつくくらいに床面が傾斜していることが明らかになった。その傾斜の方向と量にはある傾向が認められた。このことによって，それは単なる偶然ではなく，竪穴住居跡が立地する砂丘地盤そのものの変動に伴うものではないかと考えるに至った。

当時の人々が意図的に傾斜した床面を作ったのではなく，水平の床面が長い時間を経て傾斜していった根拠として，次の２点が考えられる。

①床面は，南東方向つまり内陸側（新発田側）に傾斜する場合が卓越しているが，その傾斜方向は，竪穴住居跡の平面プランの長軸方向に沿ったものとは限らない。もし，意図的に作られたものであれば，長



第５図　竪穴住居跡断面図



第6図　竪穴住居跡の床面傾斜平面図

軸方向もしくはそれに直交する方向に傾斜する方が自然である。

②竪穴住居跡の埋土は２～３層からなるが，そのうち最下位層はほぼ平行した層厚をもって堆積している。つまり，最下位層はほぼ水平の状態で自然堆積されたものと考えられる。もし，最下位層が堆積される時点ですでに床面が傾斜していたならば，床面の低い部分に厚く堆積する埋土の様子が観察されるはずである。

第６表　竪穴住居跡の床面傾斜分類表

傾斜する	内陸・新発田側へ	36棟
	海　側　へ	14棟
ほ　ぼ　水　平		25棟
不　　明		24棟

傾斜は，30分の１の平面実測図上に，測量した床面のレベルをもとに５cm毎の等高線を加筆した。そして，等高線に直交する方向を「傾斜方向」，等高線の数を「傾斜量」として，この２要素をベクトルで図示した（第６図）。床面が水平のものもあるが，傾斜するものでは，１棟の竪穴住居跡の平面プラン（１辺４～８ｍ程度）の中に５cm毎の等高線が１～３本引けるものが一般的であった。傾斜方向については，第６表のような傾向に分けられた。結果として，内陸側（新発田側）に傾斜するものがやや卓越していると言える。そして，それは，調査範囲の南東端すなわち砂丘の最も内陸側の端でその傾向が顕著である。

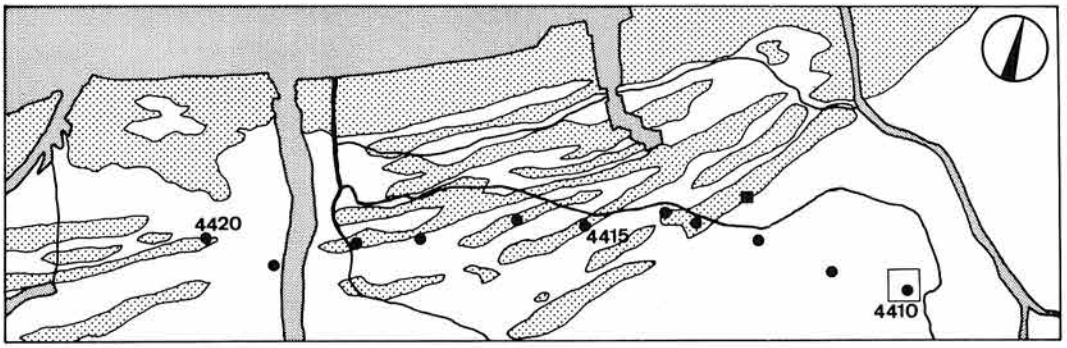
前段で，砂丘の後背湿地の形成および砂丘の内陸側の地盤の沈降を，新砂丘Ⅰ-1の埋没の可能性をもとに述べてきた。1,000年余りの時間を経て竪穴住居跡の床面が内陸側に傾斜し続けてきたことは，砂丘をとりまく地盤の変動と全く関係がないとは思えない。

２）　地盤変動の妥当性――国道水準点の変動量――

地盤の変動が竪穴住居の床面を傾斜させたという仮説――1,000～1,500年間の時間において，１辺400～800cmの平面プラン内に５～15cm程の落差による傾斜が生じる――の妥当性について考察する。

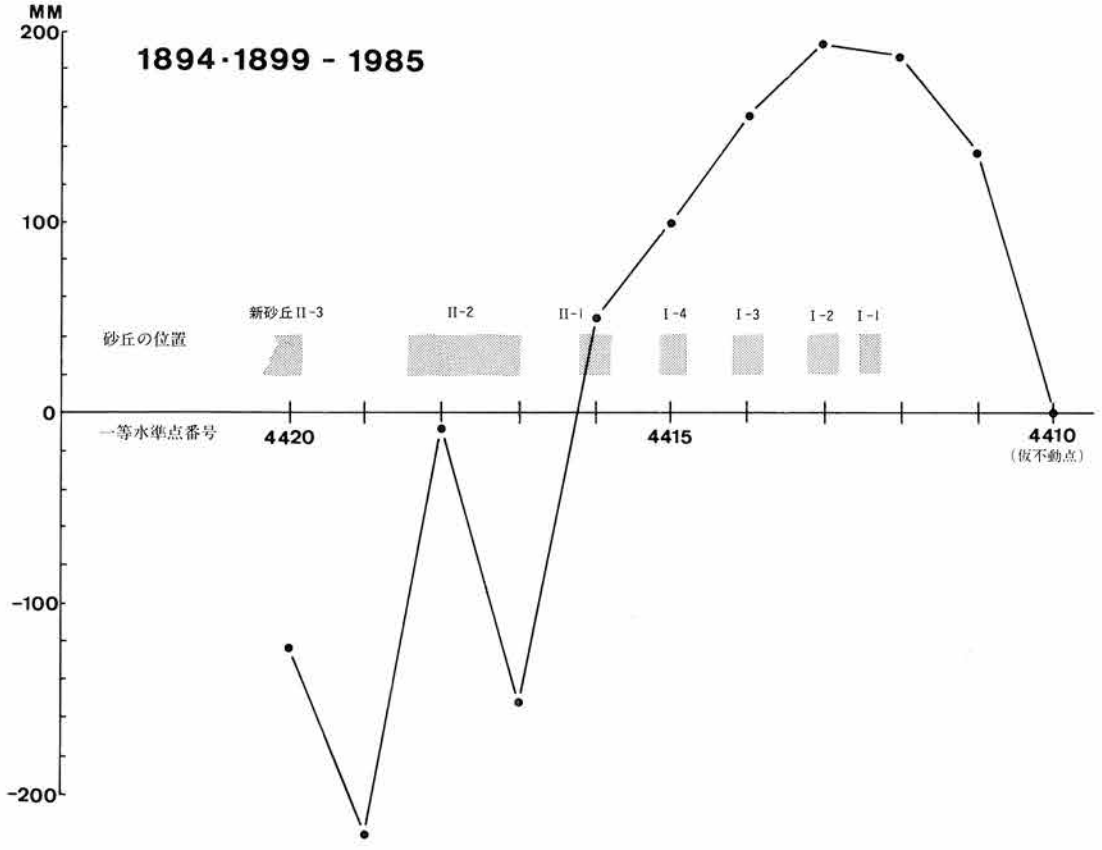
資料は，国道７号沿いの一等水準点の変動量図（建設省）である。ここでは，阿賀野川左岸の水準点No.4420から新発田市中心部の同No.4410の延長約19kmの区間において，11ケ所の水準点の観測値を用いた。資料を分析する都合上，観測年毎に水準点No.4410を仮不動点とし，他の観測値を補正した。その結果，水準点No.4414～4412の付近で相対的隆起のピークをもち，同No.4417以西で相対的沈降を示している。相対的隆起の範囲には新砂丘Ⅱ-1，Ⅰ-4，Ⅰ-3，Ⅰ-2，Ⅰ-1が存在し，相対的沈降の中でも小隆起のピークに新砂丘Ⅱ-3，Ⅱ-2がかかっていることから，現地形を反映したものと言える。ここで，最も相対的隆起のピークである新砂丘Ⅰ-2以東に注目したい。山三賀Ⅱ遺跡の立地する砂丘列上の水準点No.4413は，沖積地の新発田市中心部・水準点No.4410に比べ，約90年間で194mm（100年間で約220mm）の相対的隆起を示す。逆に言えば，新発田側が194mmの相対的沈降を示しており，このことは，「新砂丘Ⅰ-2の内陸側で沈降している」という仮説と同じ変動の様式をとることになる。この２点間は，道のりでは約６kmであるが，新砂丘Ⅰ-2の砂丘列からの距離は約4.7kmである。そこで，２点間の傾斜量を垂直：水平の比で表すと，0.22：4700（100年間）となる。さらに，同じ変動が累積すると考えて1500年間（古墳時代中期～現在）の傾斜量を比で表すと，3.3：4700となり，その比の値は$7/10^4$となる。さて，山三賀Ⅱ遺跡の竪穴住居跡の床面の平均的な傾斜量を求めてみよう。１辺６ｍの平面プランにおいて0.05ｍの落差があるとすると，1,500年間における傾斜量は垂直：水平で0.05：６となる。比の値は$8/10^3$である。両者を比較すると，その傾斜量は10倍程の差で算出された。

以上から，水準点の約90年間の変動と，竪穴住居跡の床面を傾斜させた変動は，同じものと考えてよい範囲なのか，それとも全く別のものと考えた方がよいのであろうか。また。竪穴住居跡の床面の傾斜自体に疑問を投げかけた方が妥当なのかどうか。今後の研究を待ちたい。



一等水準点番号		4420	4419	4418	4417	4416	4415	4414	4413	4412	4411	4410
観測年	1894 1899～1964	−352 (−247)	−435 (−330)	−285 (−180)	−400 (−295)	−240 (−135)	−195 (−90)	−170 (−65)	−143 (−38)	−115 (−10)	−100 (5)	−105 (0)
	1964～1966	−22 (−9)	−37 (−24)	−15 (−2)	−20 (−7)	−9 (4)	−9 (4)	−1 (12)	−2 (11)	−3 (10)	0 (13)	−13 (0)
	1966～1973	11 (34)	15 (38)	22 (45)	13 (36)	19 (42)	23 (46)	48 (71)	54 (77)	29 (52)	3 (26)	−23 (0)
	1973～1980	−37 (47)	−39 (45)	−15 (69)	−27 (57)	−11 (73)	−7 (77)	−12 (72)	−3 (81)	−9 (75)	−32 (52)	−84 (0)
	1980～1985	−14 (53)	−15 (52)	−7 (60)	−11 (56)	−2 (65)	−5 (62)	−1 (66)	−4 (63)	−8 (59)	−27 (40)	−67 (0)
	1894 1899～1985	(−122)	(−219)	(−8)	(−153)	(49)	(99)	(156)	(194)	(186)	(136)	(0)

(　)は4410を仮不動点0とした場合の相対値(mm)



第7図　水準点の累積変動量変化表

3　原始・古代の歴史的環境

A　縄文・弥生時代

前節で述べたように，この周辺には海岸に平行して何本もの砂丘列が存在する。縄文・弥生時代の遺跡は全て砂丘上に立地しているが，特に内陸側の砂丘列Ⅰ-1・2列に多く存在する。砂丘列Ⅰ-1には加治川村山草荷遺跡・聖篭町聖篭観音遺跡，砂丘列Ⅰ-2列には聖篭町桃山遺跡・同二本松遺跡などがある。山草荷遺跡は縄文前期・弥生中期（後半），二本松遺跡は縄文中期（前葉）・晩期・弥生中期（前半）で，この周辺の中心的遺跡である。

阿賀北地方では縄文晩期から弥生中期前半まで，まとまった資料がある。豊栄市鳥屋遺跡（縄文晩期），同引越遺跡（縄文晩期～弥生中期），新発田市村尻遺跡（縄文晩期～弥生中期初頭），同猫山遺跡（弥生中期初頭），安田町六ノ瀬遺跡（弥生中期初頭），村上市滝ノ前遺跡（弥生中期），同砂山遺跡（弥生中期）などである。鳥屋・村尻遺跡は近年の発掘資料で，墓制に関する良好な資料が得られている。しかし，集落の実態がわかる例は村上市滝ノ前遺跡くらいである。

これらの資料からみると，縄文晩期から弥生中期後半に至るまで，東北地方と共通した土器様相がみられることが注目される。これ以外の地域色としては弥生中期の北陸系土器が一部存在するにすぎない。このことは新潟県内における阿賀北地方の地域色を端的に示している。

前述した山草荷遺跡の弥生土器は中期の「山草荷式土器」として著名である。「山草荷式土器」は南東北系の南御山Ⅱ式に類似するものと北陸地方の小松式系の櫛描文土器の二つに大別される。これらを別の時期のものとする見方もある〔中村ほか1970〕が，同時期の別系統の土器とする見方が妥当と考えられる。阿賀北地方では南東北系の土器が多いが，海岸地方を中心に北陸系の土器もかなりみられる。中期後半の南東北系の土器はその末から後期にかけては，天王山式土器とその系譜下に連続する土器にかわるようである。信濃川下流西岸の新潟市六地山遺跡では後期前半～中葉に，畿内・北陸系土器のほか天王山系土器がかなり伴出している〔坂井ほか1983〕。天王山式土器の遺跡としては村上市滝ノ前遺跡が有名であり，最近調査された高地性集落の新津市八幡山遺跡〔金津丘陵埋文調査団1988〕でもかなりの天王山式系の土器が出土している。滝ノ前遺跡〔関1972〕は竪穴住居が検出されているものの，海抜約42ｍの海岸段丘上に立地し，一般的な農耕集落とは考えられない。天王山式土器の集落の性格の一端がうかがえる。

B　古　墳　時　代（第１図）

古墳　昭和56年に巻町で前方後方墳の山谷古墳が「再発見」されて以来，蒲原地方を中心に，数多くの古墳が発見されている。山谷古墳は昭和30年頃，郷土史家によって「発見」されていながら，当時これが古墳と認知されなかったという経緯があった。新潟県においては古墳に対する正当な認識がなかったことを雄弁に物語る。最近発見されたおもな古墳には，前方後円墳１基・前方後方墳１基を含む三条市保内三王山古墳群，直径55ｍ以上の大規模な円墳と推定される新津市八幡山古墳などがあり，巻町山谷古墳・菖蒲塚古墳とあわせて，前期の段階に蒲原平野の西側と東側に三つの勢力が存在したことがうかがえる。中期の古墳は明確ではなくて，後期前半（６世紀代）に再び古墳が確認される。

現在のところ，古墳の分布は阿賀野川以南の地域までであり，阿賀北地方には及んでいない。ただし，

古墳の可能性が考えられるものがある。中条町城ノ山塚は近世に干拓された旧紫雲寺潟縁辺の平野部に立地する円墳で，規模は直径約20m，高さ４～５mと大きい。墳頂部は平坦で，形はよくととのっている。いわゆる「塚」とする見方もあるが，規模からみて古墳の可能性を考慮してよいであろう。このほかに７世紀代の古墳と考えられるのが，昭和30・31年に磐舟柵関連で調査された「石廓堡」である（17頁）。

遺跡　古墳時代の遺跡はさほど多くは知られていない。発掘例も少なく，沼垂郡（現北蒲原郡）域においては水原町下金田遺跡（弥生末期～古墳初頭）〔関ほか1973〕，豊浦町曽根遺跡（前期～後期）〔家田ほか1981・1982〕があるにすぎない。採集遺物が報告されているのは，畠山佑二氏採集にかかる豊栄市域とその周辺の資料が多い〔関ほか1988〕。これらの資料によれば，遺跡はほとんど砂丘上に立地し，前期の遺跡が多く，中・後期は少ない。前期のうち，豊栄市上黒山では赤彩された畿内系の二重口縁壺が注目される。このほか豊栄市松影Ｄ・正尺遺跡では小型器台がみられる。曽根遺跡の発掘資料もあわせて，阿賀北地方南半の沼垂郡域には，畿内系の土器様式が流入，定着していることが確認され，県内の他地域とほとんどかわるところはない。

資料が断片的で，詳細は不明ではあるが，阿賀北地方において弥生時代後期前葉頃までは東北系の土器が卓越すると予想されるが，その後急速にそうしたあり方が払拭されるようである。なお，弥生時代末から古墳時代前期にかけての越後の土器は，北陸地方の東北部（能登・越中・佐渡）と共通する面が多い。

C　奈良・平安時代

1）　文献からみた阿賀北地方

聖篭町は古代では越後国沼垂郡に属していた。沼垂郡はほぼ現在の北蒲原郡にあたる。沼垂郡は阿賀野川以北（阿賀北地方）のうち，北部の岩船郡を除いた地域である。阿賀北地方は具体的には沼垂郡・岩船郡をさすが，この地方は越後国のなかでも特異な歴史をもっている。すなわち，沼垂郡には渟足柵，岩船郡には磐舟柵がそれぞれ置かれ，地方行政組織も異なった時期がある。中世においても「揚北」と呼ばれ，独自の地域を形成していた。現在の方言も阿賀北地方は東北系であり，阿賀野川以南とは明確に異なっている。

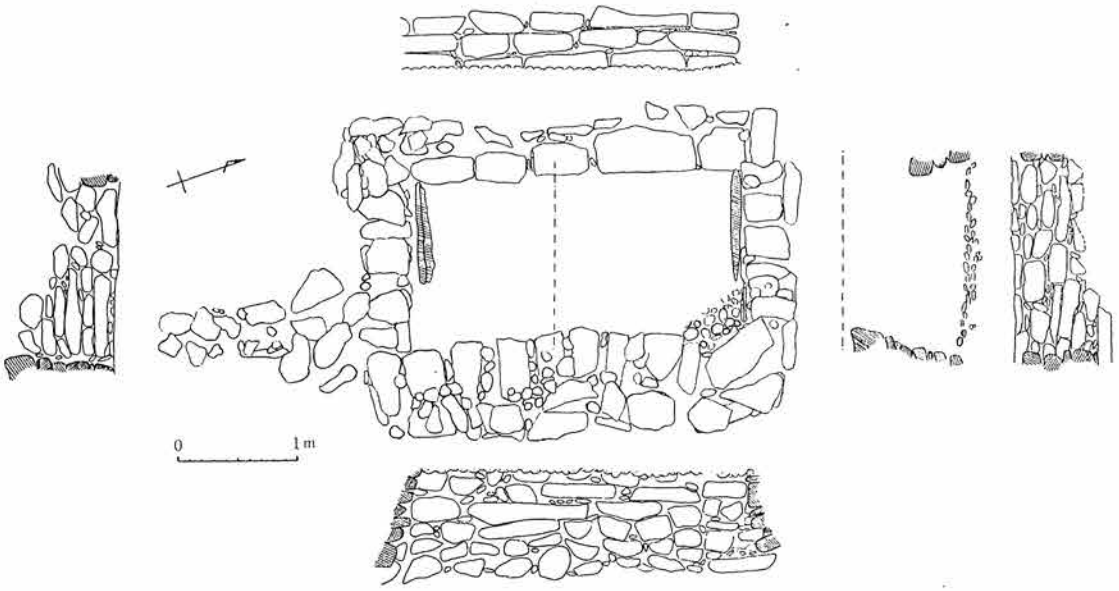
渟足柵・磐舟柵　渟足柵・磐舟柵はもっとも古い城柵である。渟足柵は大化３年（647），磐舟柵は大化４年（648）の設置である。現在のところ東北地方の城柵遺跡は数多く検出されているが，渟足柵・磐舟柵は遺構の発見はなく，詳細な位置は不明となっている。そのためこれらの位置については地名などを主な手掛かりに考えられてきた。

渟足柵の遺称は「沼垂」である。現在この地名は新潟市にある。古代における「沼垂」は「沼垂郡」と「沼垂郷」としてみえる（『和名抄』）。沼垂郡が蒲原郡に変わるのは古代末から中世である。現在の「沼垂」は信濃川の河口に近い右岸地区であるが，「沼垂」は栗の木川の「川欠け」などで何度か移動しており，古代の位置は不明である。渟足柵の比定地としては山木戸・下木戸などの「木戸」が「柵戸」に由来するという説，信濃川の河口・河道の移動によって消滅したという説〔金子1981〕などがある。

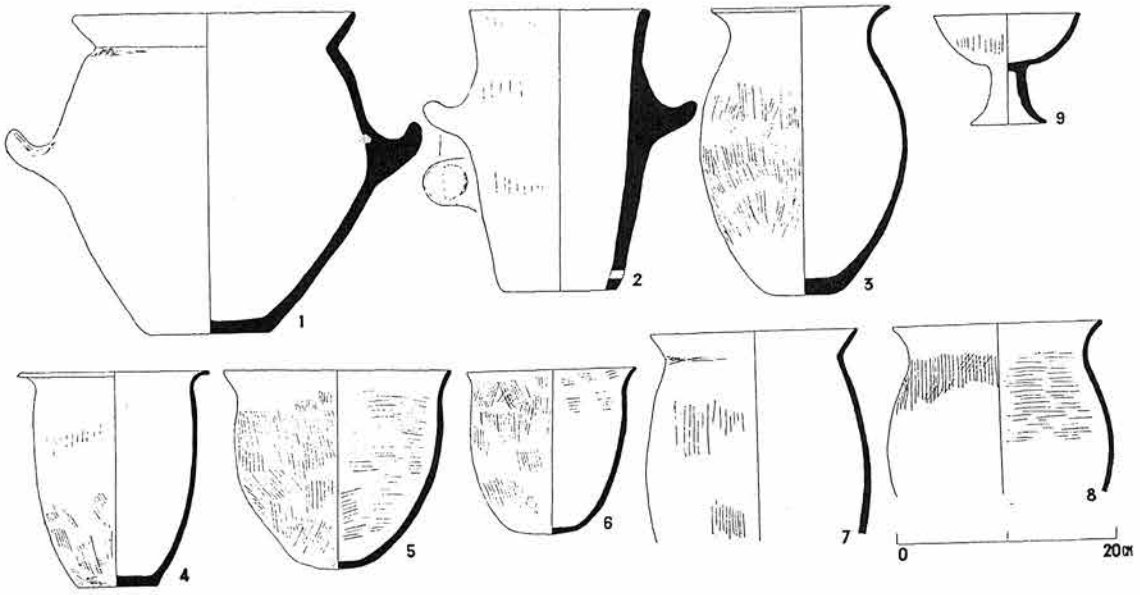
磐舟柵の「いわふね」は古代の郡名にあり，そのままほぼ現在の岩船郡にあたる。具体的な磐舟柵の位置は，延喜式内社に比定される岩船神社の近辺を考える説がある。岩船神社は海岸に面する浦田山丘陵南裾にあり，近くに諸上寺がある。浦田山丘陵の南側は広大な入り江となり岩船潟（18世紀干拓）と呼ばれていた。昭和30・31年に神社北方の海岸に面した丘陵上で石組遺構が検出され，磐舟柵調査特別委員会が組織され，学術調査がなされた。調査で２基の石組遺構（第８図）が検出され，磐舟柵に関連する施設と推定

され，「石廓堡」（以下「岩船石廓堡」とする）と称された。しかし，これまで調査されている城柵関連遺跡でこのような遺構が全く発見されていないうえ，これらの石組遺構の構造が報告書にも指摘されているとおり，古墳に類似していることから，城柵関連施設とは考えられない。石の組み方や形態・規模などからみて横穴式石室とみなされ，古墳とみるべきであろう。その場合，石室形態からみて７世紀代の時期が想定され，被葬者と磐舟柵との関係が注目される。また，この調査の際，同時に丘陵上の三角点下遺跡が調査され，竪穴住居が検出された。この竪穴住居は，出土遺物（第９図）からみて７世紀代と考えられる。詳細な時期は限定できないが，きわめて眺望がきくものの風のとりわけ強い海岸に面した立地は，一般的な生活住居とはみなしがたく，磐舟柵と関連した施設の可能性も考慮すべきであろう。

一方，中条町乙（きのと）の乙宝寺（おっぽうじ）周辺に求める説もある〔高橋1970〕。乙宝寺には古代の塔心礎があり，古代寺院が存在したことを示している。この塔心礎の形態は，７世紀代でも中葉～後半頃にさかのぼる特徴をもつ



第８図　磐舟石廓堡（第２）実測図　〔斎藤ほか1962原図一部改変〕



第９図　三角点下遺跡出土土器〔斎藤ほか1962原図〕

とされ〔西井1987〕，きわめて注目される。現在のところ，古い瓦は知られていないため，瓦葺きでない寺院と考えられる。この高橋説は，『書紀』斉明４年（658）条にみえる「都岐沙羅柵」を「磐舟柵」と同一であるとする。

越後国の成立と阿賀北地方　北陸地方は大化前代から「越（こし）」と呼ばれており，新潟県もその範囲にはいっていた。越から越後が別れ独立するが，その領域が確定するのはいくつかの段階を経てからである。国の領域が変動するのは対蝦夷の東北経営の進展によると考えられる。

越後国の成立と領域変遷の過程を整理すると，次のとおりである（第10図）。

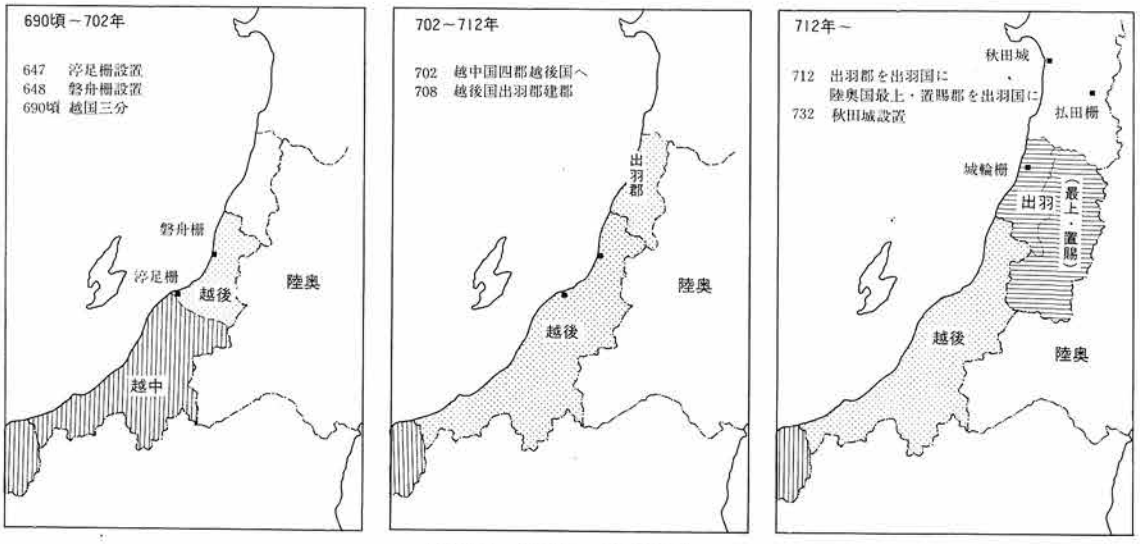
①持統期（690年頃）　越国の三分割（越前・越中・越後）

②大宝２年（702）　越中国四郡の越後国へ編入

③和銅元年（708）　越後国出羽郡建郡

④和銅５年（712）　出羽国建置

④の段階に至ってはじめて，後世の越後国の領域が確定する。この間，かなり大きな変動がみられる。まず，①の三分割当初の越後国の領域は，阿賀野川以北であった。このことは，②の越中国四郡が具体的に頸城・古志・魚沼・蒲原を示すこと〔米沢1980〕からうかがえる。この段階は沼垂・磐船二郡を中心とした領域で，国の中枢は淳足（沼垂）柵・磐舟柵に存在したと予想される。阿賀野川が越中と越後の国境となることは，この時点における両地域の歴史のちがいを端的に物語る。現在のところ，７世紀前半代までの古墳の分布の中心は阿賀野川以南にあり，蒲原郡まではスムースに律令体制に移行する素地があったことがうかがえる。畿内王権は柵を設置し，その支配に組み込みつつある地域をまず「越後国」として位置づけたものと考えられる。そして，②の時点で阿賀野川以南の地域を越後国に編入し，出羽を分けて，越後の領域が決まる。③の段階の出羽の地域は，山形県の内陸（最上・置賜郡）を含まない地域で，庄内地方中心と考えられる。④の出羽国建置からまもなく，陸奥国最上・置賜二郡が出羽国に編入されているからである。出羽ではのちに秋田城が天平５年（733）に創置され，さらに北方へ東北経営が進むが，出羽が越後国から成立したことを考えるとき，日本海沿岸部における東北経営が越後と密接にかかわっていたことを推測させる。そのような状況のなかで，とくに阿賀北地方の沼垂・磐舟両郡の占める位置は大きかったと考えられる。ただし，養老５年（721）には出羽国は陸奥按察使の隷下にあり，行政上，北陸道から東山道に組替えられつつあったことがうかがえる。



第10図　越後国の領域変遷

越後国府は『和名抄』によれば，頸城郡に存在したことが確認されるが，頸城郡に越後国府が置かれるのは，頸城郡が越後国に編入される大宝２年以降である。頸城郡に越後国府が設置された明確な時期は現在のところ不明である。しかし，出羽が一国として独立し，越後国の領域が確定する和銅５年からまもなくと考えるのが妥当であろう。一方，頸城郡に越後国府が設置される以前の越後国府はどう考えられるであろうか。現在のところ，考古学的に国府の遺構が確認されるのは，下野国府などの８世紀前半が最も古く，郡衙の遺構よりも新しい。したがって，越が三分され越後国が成立した７世紀末葉の時点で，実際に国府(国衙)としての建物が存在したかどうかは即断できない。しかし，独立した建物の有無とは別に国の行政機関は存在したはずであり，それを「国府」とすれば，「越後国府」は渟足柵・磐舟柵のどちらかに存在したと考えられる。

越後国の行政機関としては別に「越後城」がある。「越後城」は慶雲２年（705）の『威奈真人大村墓誌』に威奈真人大村が越後城司であったと記していることから知られる。『続日本紀』慶雲３年条によれば，威奈真人大村は越後守となっており，「城司」と「国司」が密接な官司であったことがうかがえ，「越後城」と「越後国府」の関係も注目される。なお，文献上では，渟足柵は設置記事のほかに斉明４年（658）にみえるのみであるが，磐舟柵は文武２年（698）・同４年（700）に修理の記事がみられ，この時点までは実際に柵として機能していたことが確認できる。

頸城郡に置かれた越後国府の遺構はいまのところ確定されてはいない。しかし，上越市今池遺跡群はその有力な推定地である〔坂井ほか1984・阿部1987〕。今池遺跡は昭和56～58年の調査で，８世紀前半～９世紀後半を主体とする時期の掘立柱建物が約100棟も検出され，注目されるようになった。建物は３つのブロックに群をなし，桁行５～８間の大型のものを含む。政庁とみられる建物はみられないが，官衙的なあり方は明瞭であり，西方約300ｍの地点に越後国分寺の推定地である本長者原廃寺〔坂井1983b〕が存在することも考慮して，今池遺跡群が国府域にあたっている可能性は強い。かりに直接それに該当しなくとも，この近辺に存在すると考えられる。今池遺跡群は土器からみて，８世紀の第２四半期には成立している。

郡と郷　さて，阿賀北地方の沼垂郡と磐船郡は『和名抄』によれば，それぞれ，沼垂郡は足羽(安須波)・沼垂（奴多利）・賀地（加知）の３郷，磐船郡は佐伯・山家・利波・坂井・余戸の５郷である。これらの郷名をみると，他国の地名と同じものがいくつかあることが注目される。すなわち，「足羽」は越前国足羽郡（足羽郷），「賀地」は越前国丹生郡可知郷，「坂井」は同坂井郡，「利波」は越中国利（砺）波郡，「山家」は信濃国小縣郡山家郷・同筑摩郡山家郷にみられ，地名の出自を彼地に求めることができる〔平川1982〕。磐舟柵戸には越と信濃の民が置かれており（大化４年条），これらの地名はそれを物語るものと考えられる。

わずかな文献資料から推定される一郷の人口は1,400人程度とされる〔沢田1927〕。したがって沼垂郡は全体で4,000人余りで，磐舟郡を含めた阿賀北地方でも１万人余りとなる。ちなみに，聖篭町の現在の人口は約１万２千人であり，当時の人口密度の低さが容易にうかがえる。したがって，耕地面積や集落もかなり少なく，荒涼とした景観が想定される。

さて，山三賀遺跡が具体的にどこの郷に比定されるかという問題であるが，沼垂郡の各郷（沼垂・賀地・足羽）の現地比定自体がむずかしく，即断はできない。たとえば「沼垂」の地名は前述のとおり新潟市沼垂に残っているが，沼垂の町は近世まで川欠けなどで移動したことに加え，沼垂郡と蒲原郡の郡境と考えられる阿賀野川の河道域も古代においてはどこであったかはっきりとしない。阿賀野川は現在松浜に河口をもっているが，これは近世（1731年）に砂丘を開削して，人工的に設定したものである。それ以前までは現在の砂丘の内側を西方に折れ，通船川にあたる部分を流れて信濃川に合流していた。かりに，古代にお

いてもこの部分に阿賀野川が流れていたとするならば，沼垂郷は現在の信濃川河口右岸の新潟市山ノ下から松浜にかけての砂丘を含む北東側にあたると考えられる。しかし，この付近には現在のところ古代の遺跡は多く確認されておらず，沼垂郡がこれよりさらに東側までのびていた可能性や，郡境そのものが遺跡の多い亀田砂丘の南西側に存在した可能性も残されている。一方，賀地郷は加治川などに地名が残っていることと，福島潟南辺の笹神村高田を含むこと〔阿部ほか1980〕から，おおよそ新発田市周辺に比定される。足羽郷は地名からは比定しがたい。以上のように考えると，山三賀II遺跡周辺は賀地郷に含まれる可能性が強いが，沼垂郷の可能性も考慮される。ちなみに，中世ではこの周辺まで，加地荘の荘域に含まれていた〔阿部ほか1980〕。ただし『和名抄』の成立した10世紀前半（930年代）にはすでに山三賀の地にはムラはなく，この砂丘上にもムラの存在は少なかったと推定され，『和名抄』の郷名に比定しえない可能性もある。なお，沼垂郡の式内社は，大形・市川・石井・美久理・川合の五座である。

2）遺　　跡

消費遺跡

奈良・平安時代の遺跡は縄文・弥生・古墳時代に比して，数多く分布している。遺跡は砂丘上や自然堤防上，丘陵裾などに立地している。山三賀の立地する内陸側の砂丘列はとくに多く，この砂丘につらなる阿賀野川西岸の亀田・大江山地区の内陸砂丘上も同様に多い。しかし，これまで下越地方の古代遺跡の調査例は少なく，なかでも阿賀北地方はとくに少ない。調査で遺構等が明確なものは，豊浦町曽根遺跡があるにすぎない。曽根遺跡は山三賀II遺跡と比較できる唯一の資料で，その内容についてはとくに注目される。

曽根遺跡（第89図）　福島潟縁辺の湖岸砂丘上に立地し，前述の古墳時代と8・9世紀を中心とする遺跡である〔家田ほか1981・1982〕。昭和55・56年に圃場整備に伴って，約10,000㎡以上が発掘された。調査により25棟の掘立柱建物，井戸9基の遺構と注目すべき多量の遺物が検出された。古墳時代の遺構が不分明で，遺構の大半は奈良・平安時代であろう。掘立柱建物は桁行3間以下，梁間2間のものが多く，2間×2間の総柱建物もみられる。出土遺物には多量の須恵器・土師器のほか，特筆すべき墨書土器・木製品が多い。木製品には「門継損同□匡合」の墨書のある圭頭形の付札，「佛□有」などの木簡や，斎串・桧扇・舟形・木沓などがあり，墨書土器には「門継」・「吉成」・「長人」などの人名がみられるほか「郡」・「大」・「主」・「朝」・「鳥」など約40種がある。時期は8世紀前半から9世紀後半までである。

この遺跡は山三賀II遺跡と同一の地域にあり，両者の性格を考えるとき，きわめて有効な比較資料である。しかし，同じ砂丘上の遺跡でありながら，遺構・遺物の内容にきわだった差がある。それは①竪穴住居（遺構），②墨書土器，③硯（以上遺物）に端的にあらわれている。曽根遺跡は竪穴住居が皆無で，多量（240点）の墨書土器・円面硯が存在し，一般集落とは考えられず，官衙に関連した性格と考えられる。笹神丘陵の生産遺跡群に近く，かつ福島潟湖岸という立地は注目される。曽根遺跡以外の発掘資料には，新発田城下層遺跡〔田中1987〕があるにすぎない。遺構は検出されていないが，9世紀代の土器が少量出土しており，沖積地内の微高地上に平安前期の集落が存在したことをうかがわせる。

生産遺跡

須恵器窯　山三賀II遺跡の土器（須恵器・土師器）の編年・流通の問題については，県内の須恵器生産の概観を含めて，後述する（Ⅶ章）予定であり，ここではごく簡単に述べるにとどめる。新潟県における須恵器生産は8・9世紀を主体とし，一部10世紀に及ぶ。山三賀遺跡東方数kmの笹神丘陵には数多くの須恵器窯（笹神・真木山窯跡群）が存在し，県内でも主要な生産地であったことがわかる。阿賀北地方では，これ以外

に黒川村松山窯跡，加治川村下小中山・貝屋窯跡群，新発田市ホーロク沢窯跡，安田町五輪敷沢窯跡がある。笹神丘陵では現在のところ30地点以上で須恵器窯が確認されており，実態は相当数にのぼるものと予想される。分布は笹神村・豊浦町の丘陵の南北約10kmにわたる。これまでに調査されたものは，豊浦町清見寺・岡屋敷（33・36年調査）〔中川ほか1962〕，馬上・高山寺（48年調査）〔戸根1986〕，笹神村狼沢2号（47年調査）〔中川ほか1973〕の各窯跡だけであり，全体像はよくわかってない。山三賀II遺跡の須恵器の多くは笹神・真木山窯跡群のものである。笹神・真木山窯跡群以外では，加治川村貝屋・下小中山窯跡群の資料が報告されている〔川上1982，戸根1973〕。窯体は，貝屋窯跡では2基，下小中山窯跡では3基と推定されているが，実態はよくわかっていない。現在のところ，岩船郡には明確な窯は確認されていないが，神林村の採集品から，窯の存在を想定する指摘もある。阿賀野川をこえた蒲原郡北半には，五泉市山崎窯跡〔川上1981〕，新津市七本松窯跡〔中川ほか1956〕，巻町重稲場窯跡などがある。

製鉄遺跡　笹神丘陵には須恵器窯のほかに多くの製鉄遺跡もある。須恵器窯と製鉄遺跡が同一地域内に共存することは，北陸地方でよくみられる。笹神丘陵もその例である。県内における製鉄遺跡は笹神丘陵のほか，下越・新津市周辺の新津丘陵，中越・三島郡（出雲崎町・寺泊町・和島村・与板町）の島崎川流域，上越・吉川町周辺，佐渡・二見半島周辺に群在している〔坂井ほか1987〕。笹神丘陵は現在のところ30地点以上確認されており，最大規模である。このうち，豊浦町真木山B・C遺跡が昭和48年に調査され〔関ほか1981〕，竪形の製鉄炉計7基と登り窯タイプの木炭窯1基が検出された。時期は8～9世紀という。ほかは未調査で実態はよくわかっていないが，調査の進んでいる富山県などの例〔関1984〕から推測すると，須恵器生産と同様に8世紀前半には操業を開始し，終末は10世紀代に及ぶと考えられる。鉄の原料は砂鉄で，山三賀遺跡に供給されている鉄素材はこの地域で生産されたものと考えられる（第VI章2）。製鉄遺跡の分布からみると，鉄生産とその素材の供給・流通圏はある程度地域ごとにまとまっていたと考えられ，笹神丘陵で生産された鉄素材は沼垂郡だけではなく，岩船郡まで供給していたとみられる。阿賀野川の西南側の蒲原地方は新津丘陵，中越の古志郡は島崎川流域がそれぞれおもな生産地であろう。

製塩遺跡　新潟県海岸部には多くの製塩遺跡が分布している。とくに佐渡では島の北側から西側にかけての海岸に数多く分布している。これに対し，越後ではかなり密度が少ないが，これは遺跡が海岸砂丘に深く埋没していることから，発見しにくいことに起因すると考えられる。山三賀遺跡に近い新潟市出山（てやま）遺跡が地表下約10mから発見されたことや，最近，紫雲寺町の砂丘の砂採取現場から製塩土器が採集されていることからもわかる。

現在のところ，県内の土器製塩は8世紀初頭頃には開始され，10世紀代までは確認できる。出山遺跡は昭和44年に新潟東港開削工事中に発見され簡単な調査がなされたもので，小型平底の製塩土器と小型で細い鼓形の器台が報告されている〔関1986，高橋1988〕。しかし，一般的な平底大型のものも出土したという。小型平底のものはこの遺跡以外ではほとんど出土していないもので，その用途などが注目される。出土している須恵器からみて，8世紀代と考えられる。出山遺跡以外では新潟市神谷地遺跡に比較的まとまった資料があり，採集品ながら9世紀末～10世紀前半代の土器がかなり出土している。

D　山三賀II遺跡周辺の遺跡

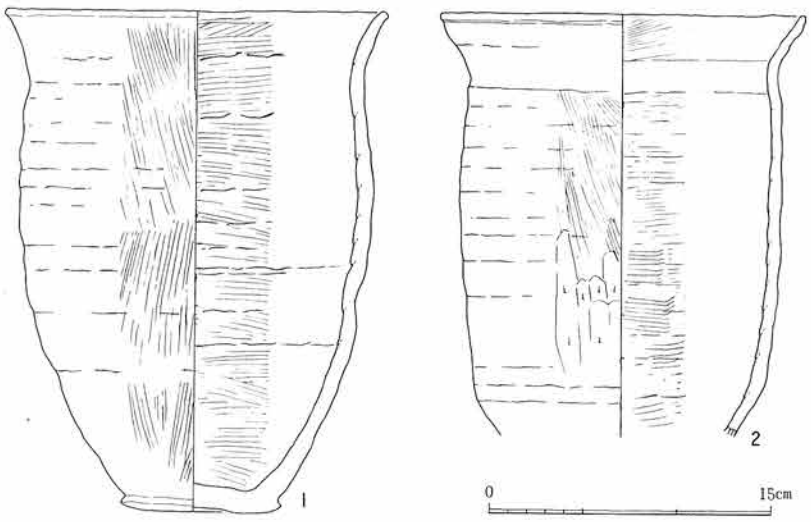
これまで，山三賀II遺跡周辺の遺跡にもふれながら，阿賀北地方の歴史的環境を述べてきたが，ここではとくに，山三賀II遺跡周辺の遺跡について述べておく。

山三賀II遺跡は砂丘I-2列に立地する。この砂丘列には数多くの遺跡が分布している（第2図）。この砂

丘列で最古の遺跡は縄文中期前半の二本松遺跡と山三賀Ⅱ遺跡である。二本松遺跡はかなりの土器が採集されているが，山三賀Ⅱ遺跡は広範囲の発掘で数点の縄文土器が出土しているだけでいわゆる集落とは考えられない。山三賀周辺でははっきりしないが，これより内陸側にⅠ-1の砂丘列があり，これには縄文前期後半の土器が出土している。したがって，Ⅰ-1・2の砂丘は縄文前・中期前半にはすでに形成されていたことが知られる。そして，山三賀Ⅱ遺跡における今回の調査によれば，中期前半に砂丘が形成された後は，飛砂もなく，砂丘そのものの形状がまったく変化していないことが判明した。今回の調査区内では部分的に縄文，古墳前期，奈良・平安時代の包含層が分かれて存在していたが，それぞれの包含層の間には間層がまったく存在していない。また，遺構の埋土も白砂ではなく，どの時期においても飛砂はまったくなかったと考えられる。一般に「砂丘」というと，つねに砂が移動したり，砂が飛ぶ光景をイメージするが，それは内陸側の砂丘にはあてはまらない。山三賀周辺の「砂丘」は地表に植物が繁茂した「台地」と基本的にかわりない。このことは往時の生活環境を考えるとき重要である。

弥生・古墳時代の遺跡には，山三賀Ⅰ遺跡・二本松遺跡がある。二本松遺跡には弥生中期前半のものもある。遺跡が多くなるのは奈良・平安時代である。砂丘列の内陸側は切れ目なく遺跡がつらなっており，砂丘上にいっせいに集落が営まれたことがわかる。本遺跡以外，発掘調査がなされておらず，遺跡の範囲も明確でない部分も多いが，かなり広範囲にひろがっている。時期も不明であるが，新発田市資料館所蔵の採集資料（桃山・山大夫・真野・山倉・木ノ株）や畠山佑二氏採集資料〔関ほか1988〕によれば，律令期の8・9世紀の土器も多数見受けられる。新潟平野や頸城平野に所在する遺跡の多くが9世紀後半から10世紀代である〔坂井1985〕ことからみると，この周辺の砂丘上の遺跡の時期的なあり方は注目される。砂丘の東側の沖積微高地にもいくつか遺跡が分布する。しかし，砂丘上の分布密度からみるとかなり少ない。沖積地に埋没した遺跡も存在することも考えられる。

山三賀Ⅱ遺跡は調査区内においては9世紀末葉には廃絶し，近世に至るまでの約1,000年間まったく無住の地であった。11世紀以降の古代末・中世の遺跡は現在のところ砂丘上に発見されていないから，この時期のおもな居住地は沖積地にあったと考えられる。律令期から王朝国家期に至る集落のあり方はこの周辺の砂丘と沖積地の遺跡からみて，山三賀Ⅱ遺跡の終末期頃を境とし，大きな画期があるようである。この点については県内の古代遺跡の消長もあわせて後述したい（第Ⅶ章4）。



丸潟飛地屋敷出土の土器（第11図）
聖篭町桃山の安達勝間氏が、昭和62年10月畑の耕作時に、地中より採集したものである。採集されたものは図の土師器長甕2点と川原石1点であり、付近には粘土があったという。これらの状況からみて、出土地点は竪穴住居跡のカマドで、川原石は支脚と考えられる。土師器はともに非ロクロで、内外面とも粘土紐の凹凸が著しい。1の底部外面は砂痕である。当遺跡のⅠ期かこれよりやや古く、8世紀初頭は下らないであろう。本遺跡が山三賀Ⅱ遺跡とほぼ同時に成立したことを示唆する資料である。

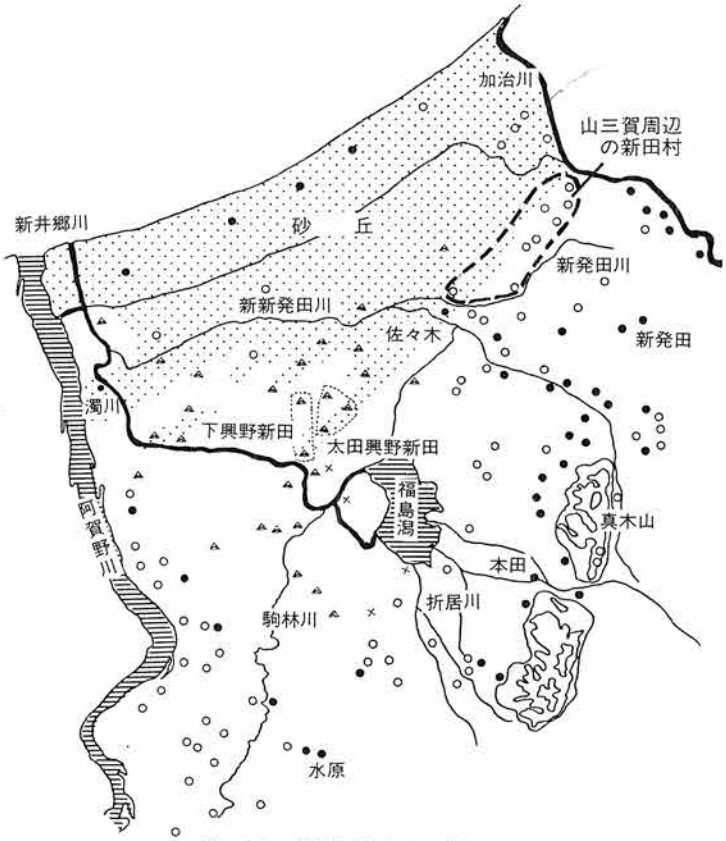
第11図　聖篭町丸潟飛地屋敷遺跡土器

4　近世・近代の開発と水上交通

A　治水と新田開発

近世には全国的に多くの新耕地が開墾され，ほぼ現代の村落景観が完成する。山三賀II遺跡周辺にも近世に成立した新田村が多い。元和偃武以降，対外戦争の危機がなくなった幕藩領主は自藩の年貢増徴をめざして大規模な治水事業に着手し，新耕地の開発を積極的にすすめていった。一方，中世末より広範に自立・展開しつつあった小農民層の耕地獲得要求も強まり，その結果多数の新田村落が成立していった。この空前の新田開発ブームはとりわけ近世前半期と享保期頃に大きな山をむかえる。越後にあっても例外ではなく，慶長３年（1598）から明治初年（1868）までの間に69万９千石余の新田開発をみ，その間の増加分を指数で示せば255にもなり，全国有数であった。なかでも信濃川と阿賀野川流域地域を擁する蒲原郡域が最高の新田開発地帯となった〔小村(おむら)1983〕。この国内でも最大級の両河川域に発達した新潟平野は，近世に入るまでは広大な低湿地帯で潟や沼など大小の湛水地が無数に散在していた。この広大な低湿地帯に本格的な開発の手が入れられるのであるが，その新潟平野の開発の特徴は多くの放水路の開削と潟の干拓事業にあったといってよい。その後，現代まで営々と乾田化の努力がすすめられ，今や国内最大の穀倉地帯のひとつとなっている。今，近世から現代に至るまでの主な放水路開削と潟の干拓をまとめてみると前掲した第２表のようになる。放水路12，潟15の事例があげられているが，一覧して気が付くことは潟の干拓はほぼ近世段階ですすめられ，放水路の多くは明治以降，現代までの課題として残されてきたことがわかる。ここに上げたものは比較的大きな開発例であるが，このほかにも小河川の瀬替えや小用排水路の開削・築堤工事などの治水に関するものをあげていけば枚挙にいとまがない。新潟平野に生活する人々にとって，水との関わりの歴史は古く，そして新しい営みとして連続してきているのである。ここでは，山三賀II遺跡周辺の新田開発の様子を概観し，近世以降の村落景観の変貌を確かめておきたい。

近世にあって，山三賀II遺跡のある聖篭町周辺は新発田藩領に属していた。新発田藩は慶長３年越後へ入部した堀秀治の与力大名である溝口伯耆守秀勝が６万石をもって入部し成立した。領地の大半は信濃川・阿賀野川・加治川の流域にひろがり，紫雲寺潟・福島潟・白蓮潟・島見前潟などの潟沼が散在するいわゆる水害常習地帯であった。このため新発田藩では幕初以来，領内の河川改修・築堤工事と新田開発に積極的に取り組んでいく。その結果としての新田開発高も顕著であり，溝口氏入部以来半世紀余で２万５千石余を開発し，そのほかに沢海藩・切梅・池端・二ツ堂の三分家を新田打ち出し分によって創設させたといわれている。藩領内を地域別にみると白根郷や新津郷の信濃川流域地方は17世紀において開発がすすみ，聖篭町周辺の阿賀北地方はこれよりやや遅れ，享保年間以降，18世紀の開発分が大きい。これは阿賀北地方には紫雲寺潟や福島潟などの大きな潟沼の存在とそれに流れ込む多くの中小河川により排水が困難であったためと考えられている〔小村1983〕。そのようななかで聖篭町周辺でも多くの新田村が誕生していった。第12図より，阿賀野川から加治川にいたる福島潟周辺村々の形成過程を概観すると，慶長期以前までに成立している中世以来の古村は真木山山麓，阿賀野川や加治川の堤防上と新発田市付近，さらに海岸筋にまばらにみられるのみである。これが元禄期までになると多くの村々が形成されている。主に阿賀野川，加治川，新発田川流域とその間の低地帯に広がってきている。この低地帯への拡大は元文年間以降にもすすみ，最も低い福島潟周辺が最後の開発対象地帯とされていったことがわかる。さらに，村々が増加した様

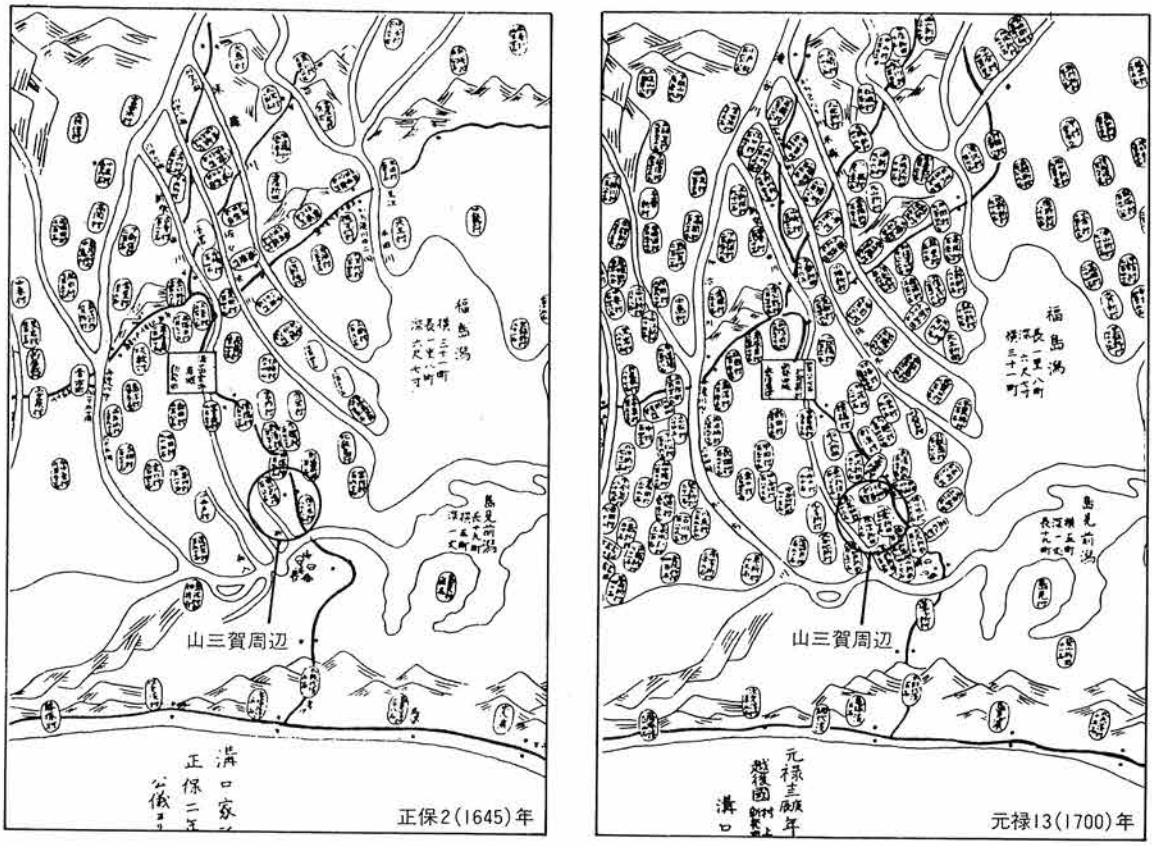


典拠
「慶長十年給地方村々高目録」
（新発田市史編纂委員会編『新発田藩史料』第三巻）
「御領内高付帳」
（新発田市史編纂委員会編『新発田藩史料』第三巻）
「元禄十二年開発年限届出帳」（小野武夫「旧新発田藩の新田政策と土地慣行」『史学』第5巻1号）
「元禄十三年越後国蒲原岩船郡絵図」新発田図書館架蔵
「正保二年越後国絵図」新発田図書館架蔵
「宝暦四年御勘定所江差上候趣意書」
新発田図書館架蔵
『葛塚町史』『神山村誌』『新潟県農地改革資料』
（新潟県農地課昭和32年）

● 慶長10（1607年）以前成立の古村
○ 元禄年間（1688～1703）までに成立の村落
△ 元文年間（1736～1740）検地村落
× 元文年間以後成立の村落

注　1）確認されるもののみ記入
　　2）現在の字名を基準にした

第12図　近世福島潟周辺村落の成立年代別分布図　（武田広昭1976原図一部改変）



第13図　正保・元禄越後国絵図　（『聖籠町誌』より転載）

子は正保2年越後国絵図（1645）と元禄13年越後国蒲原・岩船郡絵図（1700・第13図）を比較すると一目瞭然である。福島潟周辺をみても，正保期には村名はまばらにしかみえないが，元禄期には密集状態となっている。正保期の現聖篭町周辺には「佐々木村」や「奥山新保村」の名前がみえるのみであるが，元禄期になると，桃山新田・真野新田・諏訪山新田・大夫新田・山倉新田・道賀新田・狭潟新田・東高畑新田・西高畑新田・大谷地新村など現在の小字名が誕生しており，この時期の村落景観の変容が予想できる。さらに詳しく絵図を比較してみると，加治川の流路に若干の変更がみられることに気がつく。つまり，加治川が新発田川と合流する辺りより，島見潟に入る手前で正保期には流路が山側にカーブしていたのが，元禄期には反対に海側のカーブとなっているのである。そして，そのカーブした加治川左岸のふくらみ地帯に上記の新田村々が密集して誕生している。おそらくこの流路の変更が新田村形成に大きな意味をもったのではないかと推測されるのである。そのことを念頭におきながら，山三賀II遺跡周辺の村々の村高・親村（出身村）・開発年代をまとめてみると第7表のようになる。まず，開発年の大半が明暦1年（1655）である。この明暦1年という年は新発田藩では幕府の許可を得たのち大岡力右衛門・七里作左衛門を奉行として，聖篭新川の開削を行っている。この聖篭新川の開削による加治川の流路変更と，聖篭周辺の新田村の形成とが深く関わっていたと考えられる。そして，この時の流路変更が先に指摘した元禄絵図の変更として記されたものであるかもしれない。つぎに，各新田村の親村（出身村）をみると西名柄村（現新発田市）・中曽根村（現新発田市）・桑口村（現新発田市）・奥山新保村（現新発田市）・富塚村（現新発田市）など比較的近隣の村々であったことがわかる。いうまでもなく新田開発は自己の本田畑の耕作をするかたわら，年貢も皆納しつつ荒地の開墾をするという辛苦の労働をともなった。必然的に労働力や経済力に余裕のある村内の有力農民層が開発主体となる場合が多いが，その傾向は近世前期においては一層顕著であった。このような有力農民層による開発を土豪系開発新田などとよぶが，明暦1年に開発された上記の新田村も親村の有力農民層が主体の開発内容であったものであろう。また，各村高をみると多くの村が元禄期から天保期にかけて増加している。なかには真野新田や山倉新田，諏訪山新田のように倍以上に増加した村もみられる。明暦期に開発の手がつけられて以来，元禄期以降も切添的な新田開発を繰り返えし村域を拡大したものであろう。毎日の開墾作業に辛血をそそぐ農民層の努力はいうまでもないが，他方で幕府や新発田藩の治水事業もみのがせない。とりわけ，享保改革時の紫雲寺潟干拓は有名であるが，福島潟周辺においても領主主導の治水事業は積極的にすすめ

第7表　山三賀II遺跡周辺新田村の村高・親村・開発年代一覧

村名		元禄郷帳	天保郷帳	親村	開発年度	備考
真野新田		135.4040(石)	254.2530(石)	西名柄村(新発田市)	明暦1年	新発田藩新発田組
桃山新田		47.9240	98.1870	西名柄村(新発田市)	明暦1年	新発田藩新発田組
山倉新田		117.4500	382.7480	中曽根村(新発田市)	明暦1年	新発田藩新発田組
諏訪山新田		119.6160	275.5390	桑口村(新発田市)	明暦1年	新発田藩新発田組
大夫新田		161.5500	280.7523	桑口村(新発田市)	明暦1年	新発田藩新発田組
三賀新田	東高畑新田	52.1500	85.8940	奥山新保村(新発田市)	明暦1年	新発田藩新発田組
	西高畑新田	48.2250	48.2250	奥山新保村(新発田市)	明暦1年	新発田藩新発田組
	白通新田	76.5170	99.1980	富塚村(新発田市)	明暦1年	新発田藩新発田組
(上)大谷内新田		——	39.2603		明暦1年	新発田藩新発田組
丸潟新田		——	※ 140.9000		寛文2年	新発田藩五十公野組→新発田組
道賀新田		131.4500	299.6040	道賀村(新発田市)	正保1年	新発田藩新発田組

※『旧高旧領取調帳』　　（『新潟県史』資料編8・平凡社『新潟県の地名』より作成）

られた。なかでも聖篭周辺の村々と関連が深かったのは享保11年（1726）の二ツ山開削と，同16年（1731）の松ケ崎堀割であった。二ツ山開削は再び加治川の瀬替であり，新発田藩老中山庄小左衛門が中心になって実施された。砂丘列にそった二ツ山を開削することによって島見潟への排水をよくすることをねらい，この結果いまだ散在していた聖篭周辺の湛水地の排水に大きな効果となった。さらに，松ケ崎堀割は幕府の許可のもと新発田藩の指導により享保15年に着手された。この堀割により河口部で信濃川に合流していた阿賀野川を直接日本海へ放流する結果となり，福島潟周辺の排水は一挙にすすんだ。このように享保期の幕府や新発田藩の治水対策により耕地開発の条件も整い，先にみたような村高の増加＝村域の拡大となっていったものと考えられる。

さて，当遺跡の所在する「三賀」の地名は江戸幕府編纂の元禄絵図や元禄郷帳・天保郷帳にはみられない。しかし，新発田藩内で作成したと思われる安政６年（1859）10月「郷村帳」によると「三ケ新田……但し，東高畑・西高畑・白通りで三ケ新田という」とある（『聖篭町誌』増補版1978）。このことより「東高畑新田」・「西高畑新田」・「白通新田」の三か所をまとめて「三ケ新田」といい，さらにそこから「三賀」の地名が生まれてきたことがわかる。第７表よりすると，東高畑村・西高畑村は「奥山新保村」（新発田市）から，白通村は「富塚村」（新発田市）から出て新田村として生まれたことになる。幕府には三か村別々に登録されたものの，それぞれは百石にもみたない小村であり新発田藩内では三か村まとめて「三ケ新田」として村請的機能をはたしていたものであろう。『聖篭町誌』（増補版）では「部落の成り立ち」の項（54頁）で「三賀」について「加治川堤防の改修で干あがっていた三賀の土地を見つけ，近隣二，三人で移り住み開発にあたった」という記事をのせているが，砂丘列に沿った湛水地の干あがりの耕地であってみれば，その土地がどのような生産力をもっていたかは想像にかたくない。また，文政13年（天保１年・1830）１月に新発田藩では領内の農業事情を調査させまとめているが，それによると田植の時期について「勿論，窪地・沼地・用悪水之差支ふる地面ハ，仕付おくるゝ也，古くは五十公野より則清村まて田植すみて後，加治川筋ノ里々，聖籠辺植立ることなりしに……」〔『新潟県史』資料編8，1980〕と記されている。新発田藩領内三組（新発田組・川北組・五十公野組）においても，とりわけ加治川流域から聖篭辺りが窪地・沼地で用排水が支障をきたす地域であり，田植時期も遅らせていたことがわかる。低湿地の耕作条件の恵まれない地域であったことは，この史料からもうかがうことができる。

以上，近世における山三賀Ⅱ遺跡周辺の村々の形成とその変容ぶりをみてきた。まさに当地域の新田開発は水との戦いであったといえるが，その結果村落景観も様変わりしていったと思われる。不毛に近かった砂丘列に新田村が立ち並び，人々の生活が再び始められたのである。先述したように村高の増加や明治期の戸数・人口の増加（第８表）より，人々の生産条件向上の努力がうかがわれる。しかし，このような新田地帯はその生産性の零細さゆえに市島家や白勢家といった巨大地主の土地集積の対象とされていったこともこの地域のもった歴史的事実であった。さらに明治以降，治水事業の努力は続けられ，新潟平野が現在のような美田地帯となるには昭和に至るまでの長い道のりを経なければならない。

第８表　山三賀Ⅱ遺跡周辺新田村の戸数・人口の変化

村　名	真野新田		桃山新田		山倉新田		諏訪山新田		大夫新田		三賀新田		(上)大谷内新田		丸潟新田		道賀新田		藤寄(佐々木新田)	
戸数・人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
天和3年（1683）	15戸	78人	9戸	64人	20戸	130人	18戸	118人	23戸	130人			4戸	17人					46戸	210人
明治3年（1870）	54戸	255人	24戸	145人	72戸	336人	76戸	446人	60戸	385人	47戸	263人	7戸	49人	25戸	136人	56戸	320人	112戸	744人

（天和３年分は『聖篭町誌』増補版，明治３年分は『新潟県市町村合併誌』上巻より作成）

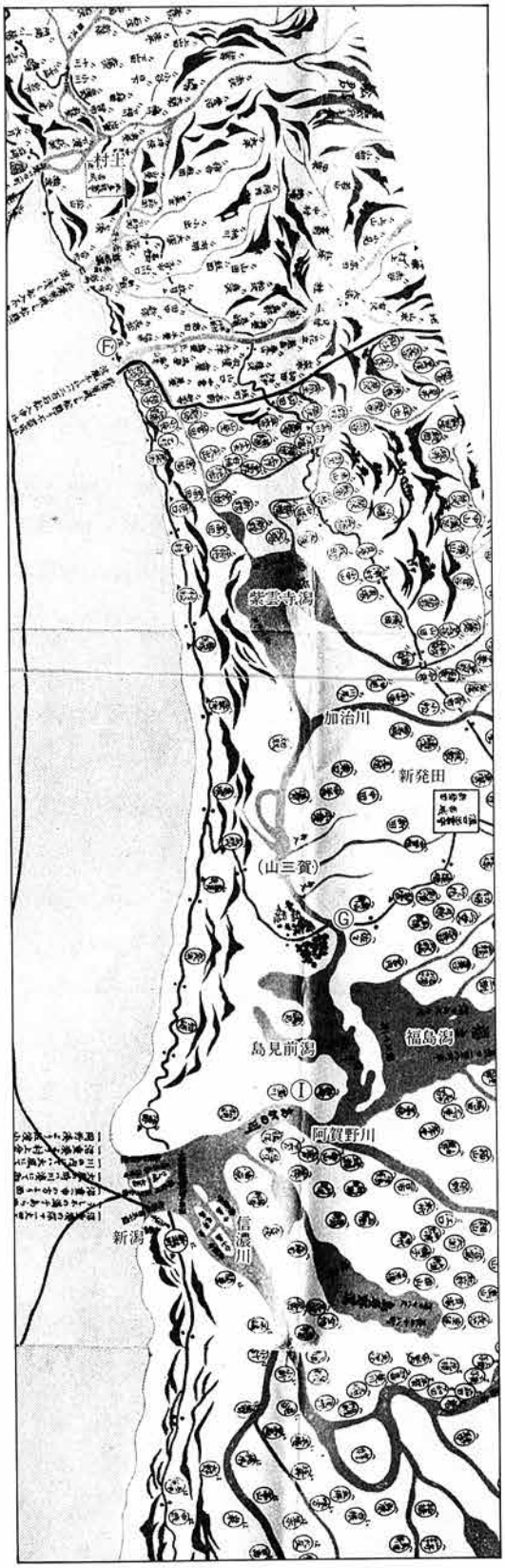
B　山三賀II遺跡に関わる潟・川・海の交通

1）　下越地方における川と潟の交通

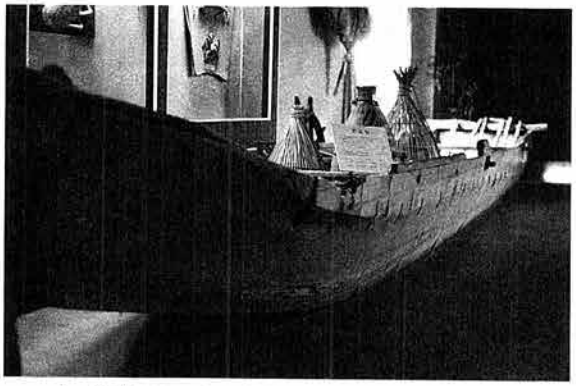
下越地方の村落・河川などの様子を，現時点で最も古くまで正確に知りうるのは，正保2年（1645）の越後国絵図によってである（第14図）。この絵図によれば山三賀II遺跡のあった第Ⅰ-2列の砂丘は，新発田川と加治川に挟まれた微高地であった。もともと各河川も，享保16年（1731）松ケ崎放水路の完成まで海への出口が限定されており，信濃川と阿賀野川は併呑して日本海に注ぎ，広大な湾口をつくっていた。この河口部には新発田川も加治川も流入していた。

紫雲寺潟は塩津潟と呼ばれ，新発田川・加治川が流入し，砂丘の内側に広大な湖水を形成していた。この北側の胎内川は荒川の河口部で荒川に合流すると同時に塩津潟にも入っていた。荒川から阿賀野川までの砂丘列の内側は，渺々たる低湿地が連なり，ここは内水面の交通路ともなっていた。越後国絵図によれば，現在の中条町築地・河内の塩津潟端に「新潟ゟ着船」とあり，当時すでに砂丘列の内側を通って舟運のあったことがわかる。新潟から濁川・新崎（第14図Ⅰ）を通り島見前潟に入る。ここから加治川・新発田川の合流している川筋を伝って佐々木（第14図G）に入り，塩津潟に入る。この塩津潟の北岸が船着場となっており，ここは岩船地方からの舟が荒川筋から胎内川を通って塩津潟に入ってくる航路にあたり，中継地となっていた。

近世・荒川湊には桃崎・海老江・塩谷（第14図F）の三湊があった。海老江は胎内川筋や塩津潟を通ってくる船荷の集散地で，この内陸筋の舟運を掌った舟を「海老江船」とよんだ。荒川筋から新潟まで，砂丘列の内側は一続きの舟運でつながれていたのである。この内水面の交通路は，海上交通より安全性が高く，しかも潟舟は川舟・海舟ほど製作が困難でないことは，使用するものにとって大きな利点であった。小舟が小支流まで入り込んで交易していたことが予想される。川筋に「舟入」という記述がみられるからである。山三賀II遺跡も島見前潟と塩津潟の間の大川沿いの小支流を入った微高地に立地している。決して住みやすい高台では



第14図　正保2年越後国絵図写真
（新発田市立図書館蔵）



第15図　海老江舟(左)とドブネ型刳舟(右)　　左：荒川鳥屋(1978年3月撮影)　右：新潟市水族館(1980年5月撮影)

なく，沼地に囲まれ，雪シロ（雪どけ時）には流れの変わる大川に悩まされ続けたものだろう。陸地では浜づたいの道と，山つけの道の間に，太郎代から佐々木を経て新発田にぬける道が一本通っているが，この道筋からわずかに入った所が山三賀であった。

2）　低湿地の開発と舟

低湿地の開発は，微高地に居を構えることから始まったが，近世に入り，開発が本格化するにつれて，土手を築いて水を止める工事が行われるようになる。第Ⅰ-2列砂丘の福島潟よりにある城山は，砂を土手にするため舟がここの砂をとりにきた所である。シロは砂のことであるという。横土居の土居は土手のことである。長峰も自然堤防上の村である。樋ノ入はドノイリと呼ぶが，これも土手の入口ということである。葛塚郷はまわりを三尺程の土手で囲った，直径500ｍほどの内側を開発した。堤防上の集落，嘉山・正尺・大口・鳥屋・芋黒・樋ノ内の一戸一戸の土地の権利を同じ幅の寸法で割り，円の中心に向かってまっすぐ切り込む。これを一戸の耕地として割り当てている。中心部は低湿地が残るが，この潟も中心に向かって割られた線上を境として，ヒシとりなどの権利を有したのである〔赤羽1978〕。

このような開発を本格化させるのに，潟舟は欠くことのできない，生活必需物資であった。潟舟は現在までに，ホンリョウ・ハンリョウ・ノウニンブネ・十二俵積み・長舟・コーリンボウなどがあったが，これらはすべて板合わせの船であり，チョウナガシラと呼ばれる頭のはみ出したヌイクギ（鉄釘）の出現によってできたものである。このタイプの鉄釘が越後に入ったのは，近世の中期を越えたころであり，海船の棚づくりの船から使用されてきたものである。越後でこの鉄釘をうち始めたのは，そう古いことではない。それ以前の船は，断面で船底と船側の間にＬ字型に刳った重木の入る，複材型刳舟であったと思われる。この舟は荒川の川舟として，海老江の白崎家（近世中期から記録のみえる舟大工）から技術が派生しており，荒川筋から，砂丘列の内側を新潟に向かって往来したものである。「海老江船」とは複材型刳舟のことでもある。

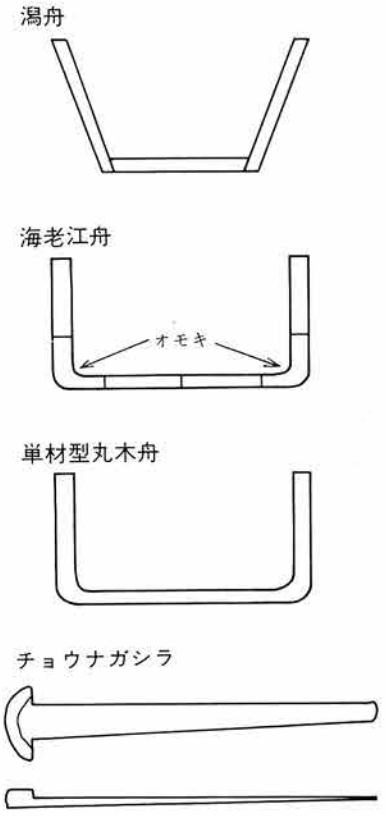
阿賀野川の河口・松浜にもナガシブネと呼ばれる，海老江船と同じ構造を持つ舟があった。どちらも大きさは全長７ｍ・幅0.9ｍの箱型の船である。日本海側への出口である荒川，阿賀の二河川の河口に，同じ構造の舟があったことになる。一方，近世末・慶応年間から葛塚に舟大工の記録が散見されるようになる。「農業之外舟作り」という一文である。この舟大工は，道具だけ持って，信濃川河口の沼垂から出職に来たものである。近世・中後期，沼垂には舟大工が群居し，海船の造船や修理などを広く手がけていた。この人々が福島潟近辺の開発がすすむに伴って，この地の必需品としての潟舟を作るようになった。板合わせと呼ばれる板を合わせて作った船である〔赤羽1977〕。

森岡・小林らの舟大工は現在までに四代を数える。舟大工はこの地にも出作り小屋を住居と兼ねて作り，生活の場が造船小屋でもある生活を始めたのである。現在にも残る潟舟が製作されるまでに，絶対必要な要件としては，鉄の道具（チョウナ・ノコギリ・ヤリガンナなど）と鉄釘がある。特に板を合わせて作る技術は木挽きの存在など職能分担の面からみても，新しいものである。一方，海老江船は舟大工がすべての過程（舟材の見立てから完成まで）を一人で行った。船釘も作った。釘はかつてタタラと呼ばれる木の釘や竹釘を使ったが，現在はオトシクギに変わっている。より古い形態を思いおこさせる。

鉄釘をメルクマールとして変遷をみると，海老江船はオトシクギ（頭のはみ出ない角釘）を使うが，潟舟はチョウナガシラを使う。中世以前には越後になかったこの釘から，山三賀II遺跡の時代は，やはり海老江船か単材型丸木舟が使われたものだろう。

単材型の丸木舟は現存するものが豊栄市城山，小柳家にあった。安永10年（1781年），現在の新潟市大江山から移住する時に持ってきたものと伝えられている。全長320cmの小舟であることから，人が乗るものではなく，荷を積載して引っぱったものらしい。キッツオ舟と呼ばれるものである。

荒川流域では山で作った丸木舟の，川をおろす記録が村鑑明細帳に載っている。「奥山ヶ伐出，材木並ニ丸木舟之儀…」「農業之外男ハ舟作リ」といった記述がみえる。舟運も盛んで，丸木舟につけた干鰯の記述もあり，この丸木舟が山三賀の方まで舟航したことは当時の状況からは考えられることである。阿賀野川のナガシブネも，もとは船底材全体が刳った刳舟であったといわれている。船材は杉が多かった。



第16図　舟構造断面図

3）舟の推進方法

これらの船の運航には櫂と竿が使われた。新潟から福島潟を明治時代に結んだ運搬船のコーリンボウは全長11ｍという潟舟最大のものであった。この船が櫓を使用した以外は櫂と竿であった。潟での操法は，

テ ガ イ：船首の方を向いて船尾に腰をおろし，櫂を水中に入れ前から後へこねながらかいて前進させる方法である。カイボウは５尺８寸位。

ウチガイ：側板に穴をあけて綱を通し，この中に櫂を入れる。漕ぎ手は立ったまま船尾を向き，側板に固定された櫂の柄のところを支点に，オール式にこぐ。

ネリガイ：船尾の床にネリバを設け，厚さ３寸～４寸の角材をとりつけ，これに綱を通して櫂を固定する。漕ぎ手は船尾を向き，立った状態で櫂を∞の字にこぐ。

竿　　：潟の浅いところは竿をさして舟をすすめた。

が残っている。帆は明治時代に長舟が張った程度である〔佐久間1970〕。

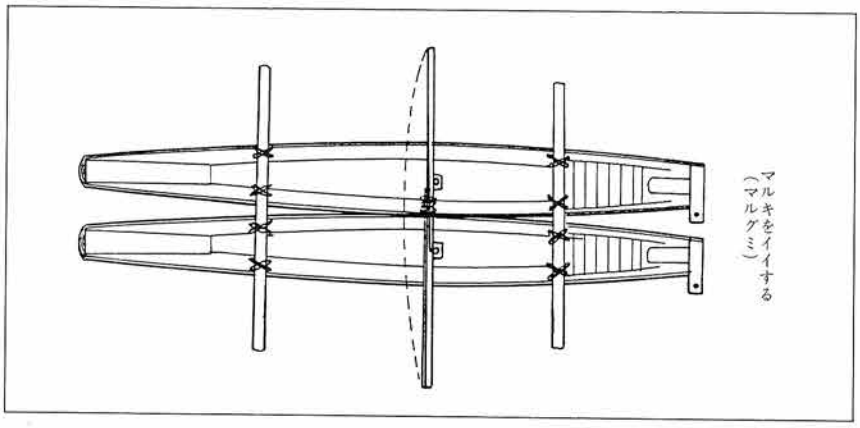
4）当時の海上交通

一方，海に目を向けると，佐渡海府，小泊産の須恵器と思われるものが大量に山三賀に入ってきてい

る。日本海を渡った船は棚構造の船ではなく，ドブネ型の丸木舟であったと考えられる。棚構造の船が日本海に広まったのは1600年代以降であり，それまではタナナシヲブネ（棚無し小舟）が主流を占めていたものだろう。佐渡のドブネは能登半島からの移入と見做れている。彼の地からは海女も出稼ぎ漁業に来遊しており，能登と外海府のつながりは深かった。もともと海府は「海部の連」の名称で海人の系統である。もし，ドブネよりプリミティブな形の舟であったとすれば，佐渡でクリコブネといわれる単材型の剝舟であったろう。事実，佐渡に丸木舟は多く，外海府の良材は，丸木舟をつくるために相当伐り出したといわれている〔赤羽1987〕。

佐渡と寺泊・出雲崎の間は５～９月までの静水時には１日間でタライブネが往復したといわれ，夏季の舟運はかなり盛んであった。近世中期以降も，帆走の時代，新潟津に入港できないときは小廻し船が佐渡の小木で船がかりしているのである。マルキブネであれば，恐らく櫂を推進具にしたものと思われる。櫓が越後の海域に入ったのは，やはり1600年代と見做れており，櫂を両舷につけてオール式にウチガイをやってきたものではなかろうか。重木づくりの舟は平底で吃水が浅く，潟や河川に入るには優れていた。小さなマルキ舟でも，二艘をカラクル（組み船）ことをし，このヤウチという組織で二艘船にして舟航することは海上交通では古くから行われてきたことである。

小泊産の須恵器が対岸の寺泊・出雲崎のみならず，山三賀のあった内陸側砂丘まで移出されていた事実は，佐渡との直接的な交易をうかがわせる。小泊産の須恵器はこればかりでなく，長岡・十日町・六日町と魚沼一帯の遺跡からも発掘されており，信濃川をさかのぼった船は，内陸まで運んでいるのである。これによっても広範な舟運の可能性を推測することができるのである。



第17図　二艘舟略図　〔赤羽正春1986原図〕

第Ⅲ章　調査の概要

1　発　掘　調　査

A　調　査　方　法

調査地の現況　山三賀Ⅱ遺跡は前述したように，南西方向から東北方向にのびる砂丘の内陸側に立地しており，調査地はその北東縁辺部にあたると考えられる。調査地内は小さな起伏があり，標高は南東側の湿地縁辺が約４ｍでもっとも低く，中央からやや南東よりの山三賀墓地に近い部分が約７ｍでもっとも高い。南東側の湿地に近い部分は比較的傾斜が急であるが，ほかは標高６～７ｍで，小さな起伏がみられる程度である。調査地は山三賀と山大夫の境界にあたっており，宅地はまったくなく，畑とぶどうを主とした果樹園が大半で，一部に山林と宅地に伴う竹林がある。調査地の北西側にかけてはかつてブルトーザーによって，高い部分を削平したと聞くが，その規模は明らかでない。ただ調査地内の層序からみるかぎり，畑などの造成によって，削平された部分はかなり広いと考えられるが，地形を大きく改変した状況ではないと思われる。

調査地内には何本かの道路が存在する。このうち舗装された町道（二本松―山大夫線）が一本クランク状に通っている。

グリッドの設定（図版１）　グリッドは15ｍ方眼で，調査対象地内の全域をカバーできるように設定した。方向はバイパスのセンターを使用し，方位と合わせなかった。その理由は第一に確認調査の所見から，竪穴住居を主とした一般集落で，特に方位と合わせる必要がないと判断されたこと，第二にバイパスの法線が方位と全く合致せず，グリッドをこれに一致させた場合，調査を進めにくいと予想されたことによる。グリッドの方向はバイパスのセンター杭No.735（Ｘ＝217920817，Ｙ＝68314256），No.740（Ｘ＝217856792，Ｙ＝68391060）の２点を結んだ線で，真北から49度42分西偏する。

グリッドの呼称は，法線に平行する方向の海岸側から内陸側へは，数字の１～14，法線に直交する方向の南西から北東へは，アルファベットのＡ～Ｆとし，両者の組み合わせによって，「Ａ１」・「Ｂ２」のように表示した。15ｍグリッドは大グリッドで，小グリッドは３ｍ方眼とし，それぞれ１～25の番号を付し（図版１右上），「Ａ１(1)」のように示した。グリッド設定にかかる杭の打設は業者に委託した。なお，現場においては便宜的に北西側の海岸方向を「北」，南西方向の内陸側を「南」と称した。

調査方法　調査の基本工程は，①基本層序の確認，②包含層発掘，③遺構検出・発掘，④実測・写真，である。

①基本層序の確認　グリッドの界線に沿って，要所に幅１ｍのトレンチを設定し，人力で発掘。基本層序のあり方，状況を把握する。トレンチはほぼ15ｍごとに入れる。基本層序は表土・包含層・地山となるが，明瞭に包含層と判断されるものは少ない。地山上は一部やや固い漸移層がみられる。

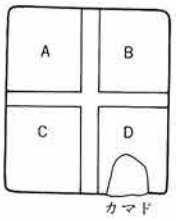
②包含層発掘　初年度の60年度はグリッドの１列から始めたが，遺構・遺物の出土が少なかったことから，重機（バック・ホー）により表土を除去した。次年度の61・62年度はトレンチの状況や地表面の土器の

散布量からみて，かなり遺構・遺物が多いことが予想され，表土から人力で除去した。包含層の発掘は人力である。人力による排土はベルト・コンベアーで要所に集め，適宜，重機とダンプで発掘区外へ運搬した。

③遺構検出・発掘　包含層の発掘の後，遺構検出にとりかかる。検出された遺構に番号を付し，発掘する。遺構番号は種別ごとに分けず全て通し番号とした。種別はSI（竪穴住居），SB（掘立柱建物），SK（土坑），P（ピット）などである。調査員が複数で，それぞれ別のブロックを担当したため，ある程度区切って各調査員が番号を付した。そのためかならずしも位置と番号の順番が一致しない。なお61年度当初はピットを大グリッドごとに別に番号を付したが，煩雑なためほかと統一した。

④実測・写真　実測は平面図が平板1/30，竪穴住居の断面図が1/20，カマドの断面図が1/10である。

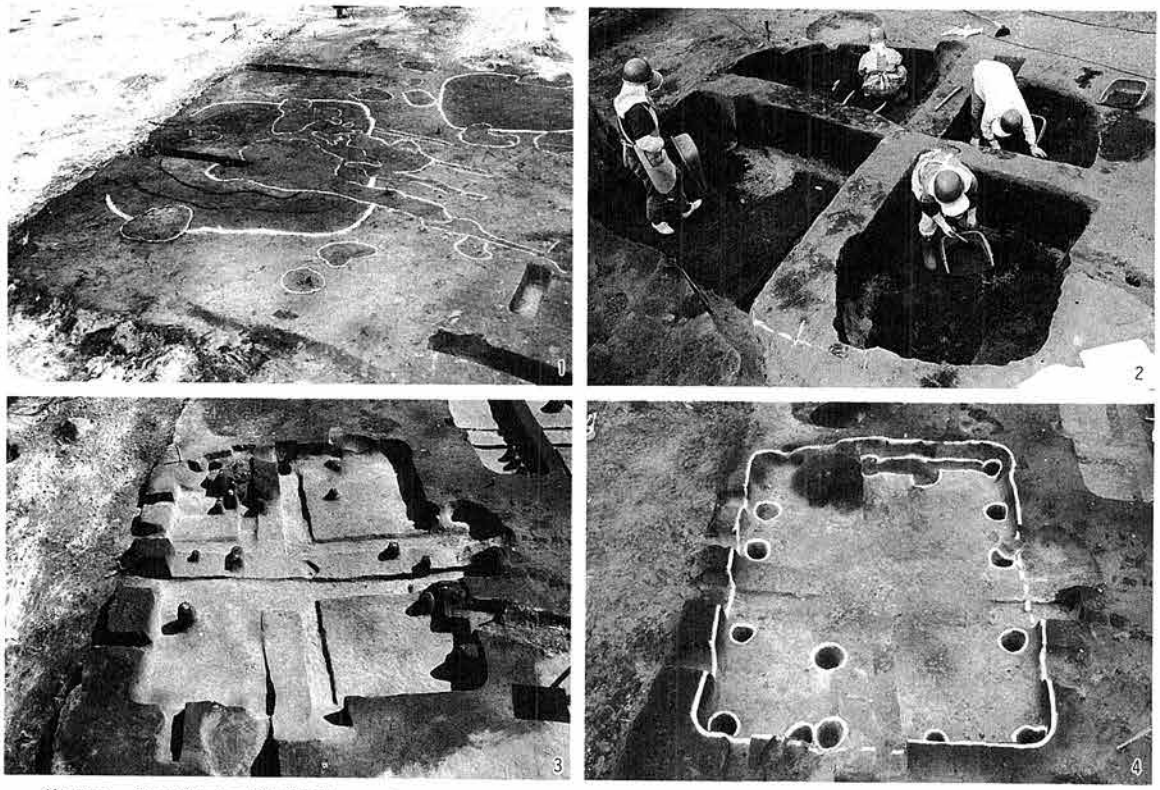
竪穴住居の発掘方法（第19図）　遺構の中心になる竪穴住居はまず，①検出しプランを確認した後，「＋」字状にアゼを設定し，これにそって幅30～50cmのトレンチを入れ，層序の確認を行なう。②カマドをのぞいて平面的に分層しながら掘り下げる。62年度には，アゼで分けた四つの区画をそれぞれA～D区とした（第18図）。まとまった遺物を除いてこの段階でとりあげる。③アゼの実測・写真の後，アゼを除去。④写真・実測。⑤カマドの調査。トレンチによる断面観察，出土土器の実測など。



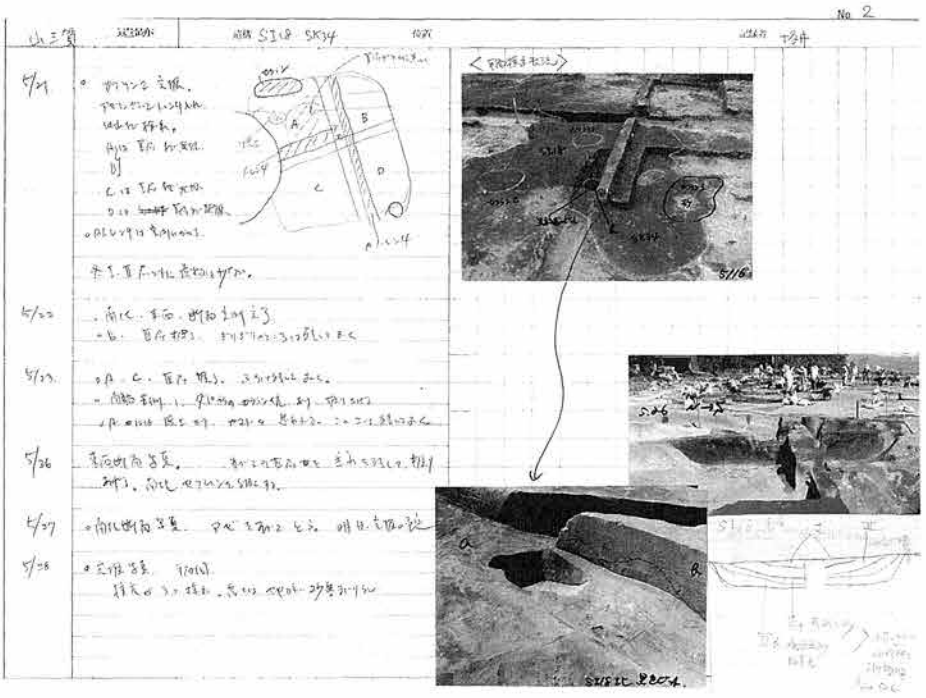
第18図　竪穴住居内区割り

全体に攪乱が著しく，全ての竪穴住居で攪乱を受けているような状況であった。断面観察などはこの攪乱坑も有効に利用した。

掘立柱建物の発掘　掘立柱建物は発掘前に全体のプランを把握した例は多くなく，いくつかの柱穴を掘



第19図　竪穴住居の発掘過程　1 ジョレンによる精査・検出（白マーク）　2 十字のアゼを残し発掘　3 アゼの調査後除去　4 カマドを残し完掘・写真　（2のみSI 1307，ほかはSI 850）



第20図　遺構カードの記入例

った段階で確認したものが大半である。柱穴が切り合っている例は少なく，発掘は平面的に少しずつ掘り下げて，柱痕跡の確認をしたのち，完掘した。おおむね，柱穴底面に柱のくぼみが存在し，これより柱の位置を把握したものが多い。

遺構調査カード　実測・写真以外の記録類には，調査日誌と遺構調査カード（以下，「遺構カード」と略す）がある。60年度は従来の県教委の方法と同様に調査日誌に遺構調査の所見も記入したが，61年度からは調査日誌と遺構カードを分離した。調査日誌には作業のおおよその内容を記入し，個別の遺構についての調査状況・所見はすべて遺構カードに記入した。調査日誌はＢ５版大学ノートに１日１頁，遺構カードはＢ４版のケント紙に罫線を印刷したもの（第20図）を使用し，基本的に１日ごとに書き加えてゆき，分量によって枚数を増やす。この遺構カードには現場で撮影したカラープリントの写真を多く貼付し，これにもメモを書き入れたり，野帳のメモをそのまま貼付したりする。遺構カードは竪穴住居・掘立柱建物・おもな土坑について作成したが，これが容易に作成できたのは，遺構の大半が竪穴住居であったことによる。竪穴住居は検出しやすく，当初から番号をつけて記録しやすいからである。報告書作成段階で調査に参加した調査員がすでに転出してしまっている現状では，遺構カードの作成はきわめて有効な記録方法と考える。

写真　写真は60年度はカラー・スライドと白黒の２種類を使用した。しかし，61年度からはカラー・スライドのかわりにカラー・プリントを使った。その理由はおもにカラー・プリントは遺構カードに貼付し，メモを記入することができるのに対し，カラー・スライドは多く撮影しても，スライドとして活用する割合がきわめて低いことにある。そのため，現場ではメモ用にカラー・プリントを多く撮影し，調査終了後に説明会などのために必要なものだけをカラー・プリントからスライドをつくることにした。白黒写真は報告書掲載用に限定し，メモ用には撮影しないことにした。白黒写真の撮影には三脚を使用した。カメラは35㎜カメラで，レンズは28～50㎜のズームレンズである。

砂丘遺跡の特性　この遺跡は砂丘上に立地した遺跡で，調査も他の立地とは異なった面が数多くでてきた。県教委による砂丘遺跡の本格的な調査は，54・55年の柿崎町木崎山遺跡（古墳前期～中世）であるが，

山三賀Ⅱ遺跡の調査員は砂丘調査をあまり経験していなかった。そのため，当初不慣れで失敗をくり返した。砂丘の特質は「掘り易く，崩れ易い」ということに尽きる。砂は粘土に比べ数倍以上の速度で発掘・排出することができ，ベルト・コンベアーのスリップもまったく生じない。しかしながら，いったん掘った遺構は乾燥するとともに崩落がはじまり，作業中に偶発的に崩してしまうことも多い。地山砂の白砂はとくに崩れ易い。乾燥が何よりもよくなく，天候は晴天時より，むしろ小雨ぐらいが最適である。遺跡の保存が難しいため，実測・写真が通常よりとくに難しい。

B　調　査　経　過

発掘調査は60年度から62年度まで，３か年にわたって実施した。当初計画では61年度上半期（７月まで）で終了の見通しであったが，60年度の調査終了時点で，61年度下半期（10月）までかかることが判明した。さらに，法線両側の追加買収予定部分が，61年度までに未買収であったため，さらに62年度まで調査継続となった。各年度の調査範囲は第21図のとおりである。

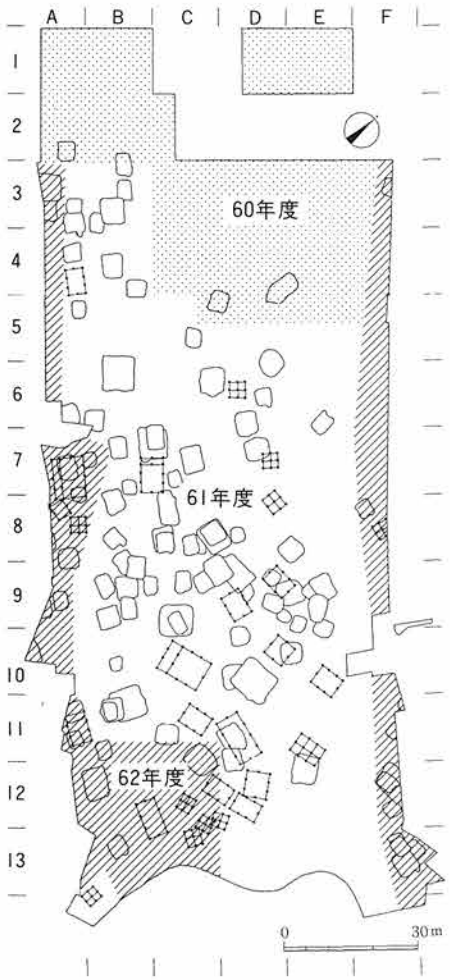
60年度　（10月21日～11月28日）

60年度の建設省関係の調査は当遺跡のほか２か所あり，その終了が予定より遅れたため，調査開始は予定より約１か月遅れた。10月21日，調査開始。調査員３名，作業員約25名の体制をとる。まず，１列からグリッドに沿って15ｍごとにトレンチを入れ，層位の確認をする（８列まで）。また南側湿地の水田部にバックホーでトレンチを入れる。南側湿地では砂丘が深く落ち込んでおり，遺物の出土が確認できないことから，この部分は発掘対象外とする。１列からはじめたトレンチでは，一部に遺物集中地点があり遺構の存在が考えられた。23日からは遺物の出土がみられない１列からバックホーで表土除去し，遺構確認をする。１列のＢ・Ｄ・Ｅで遺構検出し，遺構らしきものを掘るが，いずれも撹乱坑と判明する。撹乱坑はかなり多い。Ｄ・Ｅ３区でも遺構はなし。２列のＣ・Ｄ・Ｅは発掘不要と判断する。30日，Ａ２区で竪穴住居（SI 1）を検出，発掘する。引き続き表土除去していたＡ・Ｂ３区より同様の黒色土を検出，竪穴住居と推定する。当初，状況によっては６列までは当年度内に作業完了できるのではないかと考え重機排土を進めたが，予想以上に多くの地点から竪穴住居と考えられる黒色土と遺物を検出した。出土遺物からおおよそ８～９世紀と考えられたが，竪穴住居の埋土に黒色土層があるものとないものがあり，後者に古い遺物が伴っていることから，埋土の違いが時期差によることが推測された。SI 1から竪穴住居の発掘を順次進めたが，11月に入ると冬の天気が続き，作業もはかどらなかった。また，調査員が砂丘上の調査に不慣れで，遺構と撹乱の識別や遺構の崩落などに苦慮した。ただし，排土や発掘は通常の場所よりかなり早かった。通常，12月は降雪などにより調査不能となるため，11月末に当年度の作業を終了することにし，作業の区切りのついた28日，現場を撤収した。

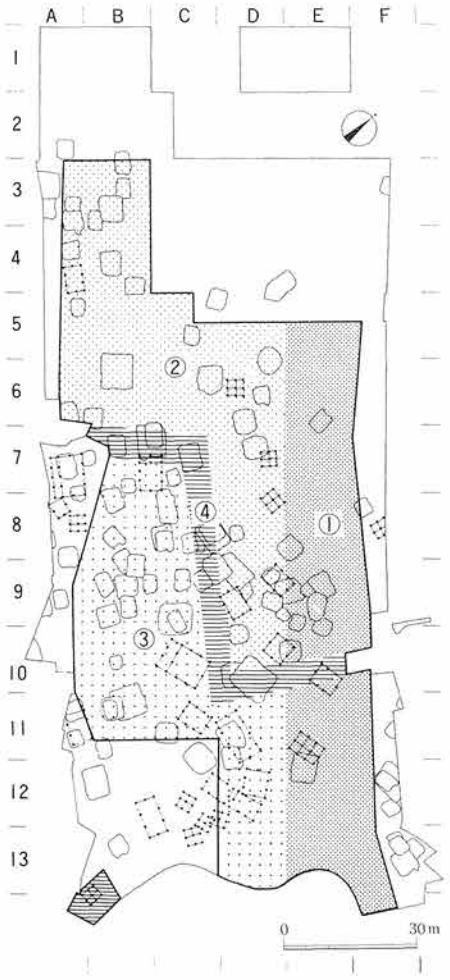
当年度の調査により，６棟の竪穴住居を発掘したが，他に６列までに10棟以上の竪穴住居が検出され，南側にさらに多く分布することが容易に予想された。遺物の出土量はコンテナ数20箱である。これより61年度の残りの発掘面積は約9,000㎡で，竪穴住居は50棟以上と想定し，調査体制は調査員３名作業員50名，期間120日（４月～10月）が必要とされた。古代の大規模な集落であり，従来の認識を改める必要が痛感された。

61年度

当初計画　当初の発掘予定面積は9,000㎡であったが，法線両側約５ｍ，約600㎡が追加買収されることになり，残りは9,600㎡となった。しかし，調査を開始した年度当初には追加買収部分と一部の畑（A7・８区）の買収は未了になっており，この部分については着手しなかった。61年度半ばにはこの買収が完了す



第21図　年度別調査範囲



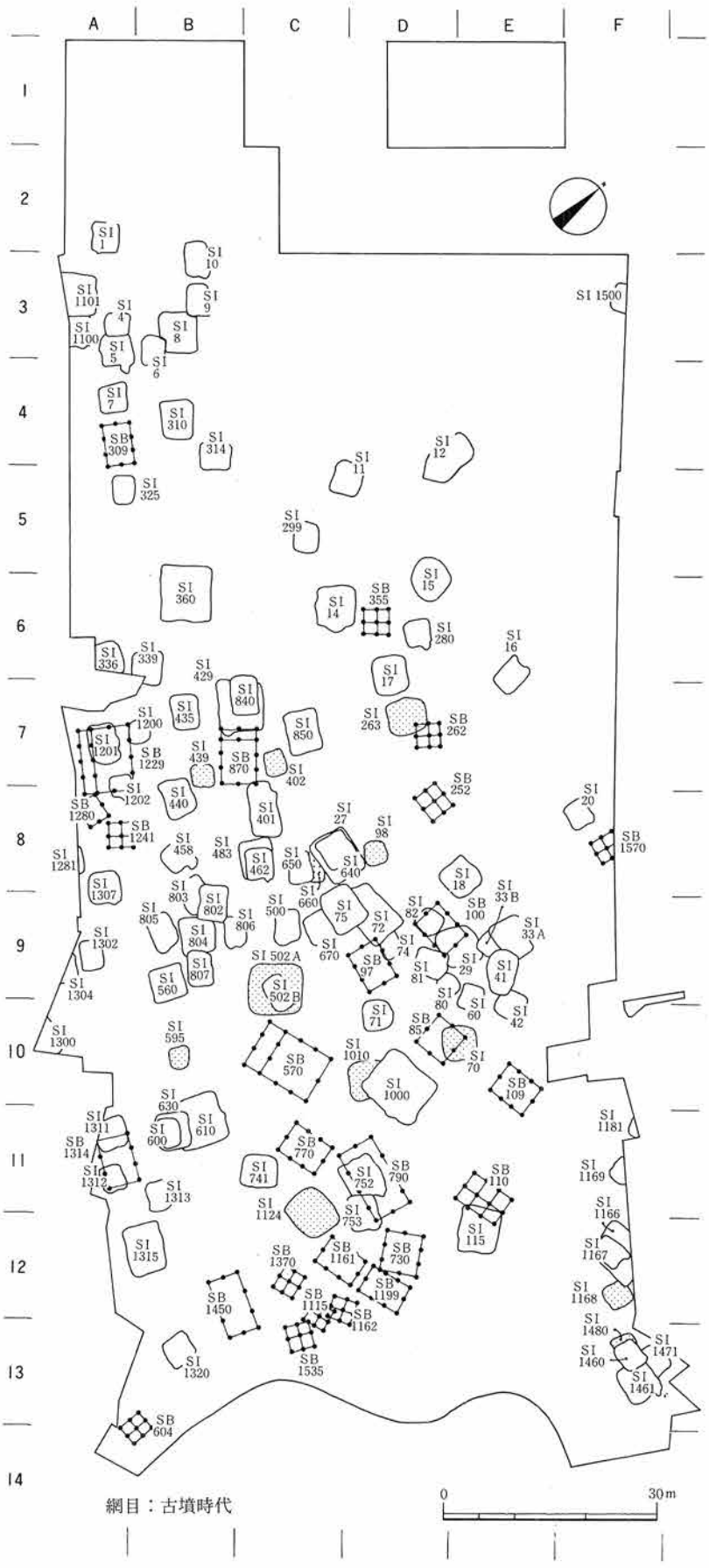
第22図　61年度調査優先順序

るという建設省側の見通しであったが，結局未了のまま61年度が経過し，この部分の調査は62年度に持ち越した。

建設省の計画では，61年度から工事着手となっており，調査は工事工程を考慮して進めることとした（第22図）。まず，第1に優先するのは北東側に敷設する工事用道路部分である。そして，舗装された町道部分についても，調査が必要と判断されたため，この付け替えも考慮し，第1に，工事用道路部分（幅約10m）に当たるF列とE列北西側幅6mの調査を優先させ，次に町道の北西側を完了させた後，こちら側に仮設の町道を敷設することにした。一応，工事用道路を6月上旬，町道北西側を8月末までの調査完了を目標にした。

工事用道路部分　4月10日，現場に器材を運搬し，15日から作業員による発掘作業を開始した。調査員3名，作業員約55名の体制をとった。排土の移動に重機を使用したが，発掘は基本的に人力で，15日以降表土・包含層発掘と遺構発掘を平行して進めた。調査は遺構発掘が3班（1班約10名），表土・包含層発掘班（約10名），実測班（約10名）に分れ，調査員は遺構発掘班ごとについた。

調査はE列の5区から19列と，10区から13区とにわけて進め，5月にはいってから，遺構検出に入り，中旬から竪穴住居（SI 18）の発掘を始めた。E列5～8区は遺構がとくに少なかったが，E9区とE11・12区には遺構が集中し，ここで時間がかかった。3名の調査員のうち2名は前年度調査を経験しているとは



第23図　遺構配置概略図

いえ，まだ十分砂丘の調査と「土」になれていないこともあって，予想以上に作業は難行した。E10区・11区では竪穴住居と掘立柱建物が切り合い，古墳時代前期の遺構もあるなど前年度のような単純な遺構のあり方ではなかった。6月4日にはSI 4から帯金具が出土，新聞にも報道され，「古代の大集落」の存在が，町内だけでなく，県内にも広く知られるようになった。予定より少し遅れ6月中旬には工事用道路部分を終了し，ひきつづきE列の残り部分とD列5～10区に移った。E列12区のSI 115は，それまで検出した竪穴住居としては比較的大型で切り合いもなく，とくに保存状態が良好で，竪穴住居のイメージをもつのに役立った。また，SI 115からは須恵器の出土が少なく，8世紀前半までさかのぼると考えられた。

町道北西側　町道北西側はD列の10区から5区に向って進めた。D 8・9区では町道の際で切りあう竪穴住居（SI 72・74・75）が検出され，これに時間を要した。竪穴住居で切り合っている場合，当初の想定プランと実際のプランが異なることがしばしばであった。また，D 8区より西側では撹乱坑がきわめて多く，これもプラン確認を困難にした。

D列終了後はC列，A・B列4～6区へ進んだ。A・B列2～4区は60年度に着手し，一部が終了していた部分もある。SI 4・5・6は完了，SI 7は一部発掘，SI 8は検出の段階であったが，その際再確認していなかったSI 9・10が新たに検出された。調査当初の前年度は，いかに「土」の見方が甘かったかを感じさせられた。このようなことは62年度にもあった（SI 20）。A・B列3・4区は周囲より低く，地山砂層の上面が明茶色でよくしまっており，この部分より縄文をわずかに含む土坑が検出され，その時期の遺構の存在も明確になった。

7月を迎える頃，町道北西側の調査は進行していたものの，遺構検出が進んでいた町道南側も遺構の密度が当初予想していたよりかなり多く，それだけ時間を要し，10月末までの予定期間内に終了しない見通しが出てきた。そのため，調査員とそれにともなう作業員の増員が必要と判断し，7月末より調査員1名（遠藤調査員）と作業員約10名を増員した。この時点の建設省との協議で，追加買収部分の交渉が進んでいないことから，来年度にも調査を持ち越すことが確認された。

町道の調査はお盆休み（8月8日～17日）の前までに終了した。休み明け21日には新発田消防署の協力で，シュノーケル車から写真撮影した。

町道南東側と町道付け替え　町道南東側は6月から，表土・包含層発掘を始めていたが，7月上旬より遺構検出に入った。この段階ではまだ町道の付け替えがなされておらず，調査区はわかれていた。8月末より仮設の町道が北側に敷設され，クランク状の舗装された町道を撤去し，発掘した。一方，B14区の一部にも農道を付け替える必要があり，この部分だけを先に調査した。

8月末，建設省との協議で，当年度の調査未了部分は追加買収両側部分とB・C列12，13区とすることにした。

この部分でポイントとなった遺構はC 9区のSI 502A・B，B11区のSI 600・610・630，D10区のSI 1000，BC 7区のSI 429・840などである。SI 502は古墳時代前期と奈良時代の竪穴住居がきれいに重複していたため，多量の古式土師器によって，はじめて遺構の重複を知った。SI 610などは傾斜地でもあり重複しているプランをつかむのに苦慮し，SI 1000は竪穴住居周壁部に粘土混じりの土を置くという特異な構造に驚かされた。そしてSI 840は切りあいのプラン確認が難しかったのに加え，鍛冶工房の存在が注目された。SI 429からは埋土から和銅開珎が出土した。

C11区は傾斜地であったため，包含層が奈良・平安時代，古墳時代前期，縄文時代の3時期に分離し，砂丘の形成や環境を考えるうえで興味がもたれた。

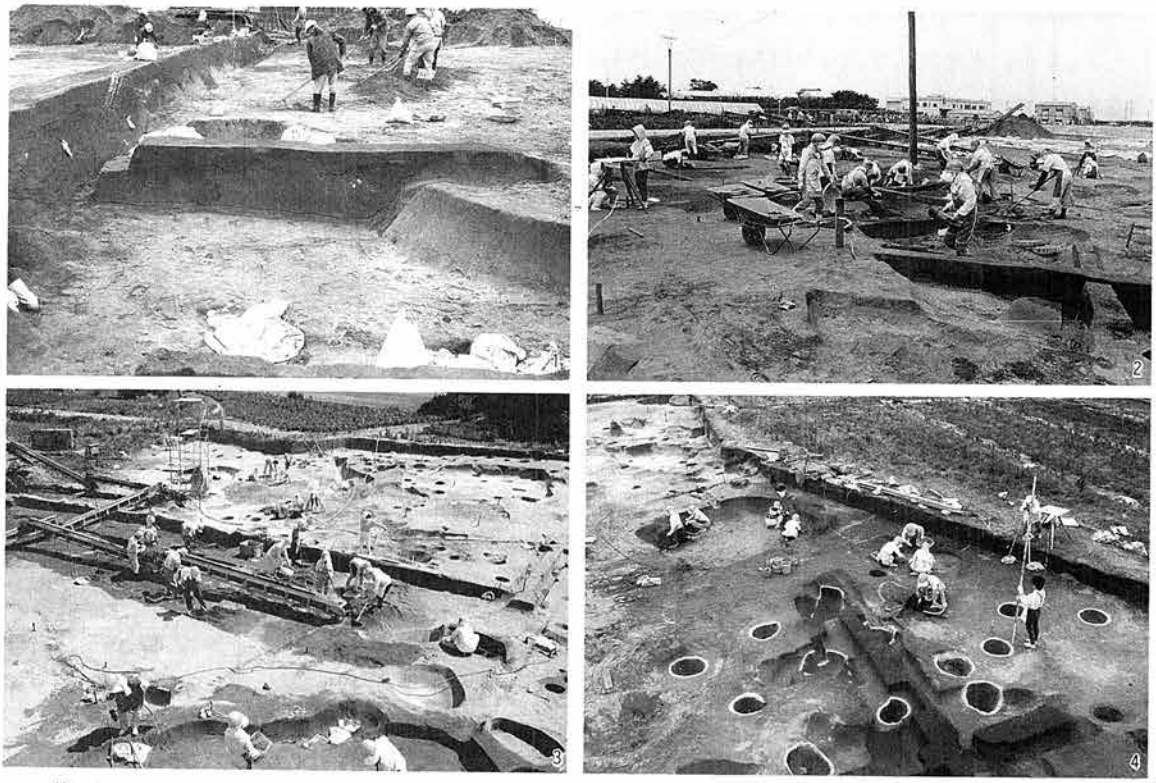
10月末でほぼ調査が完了し，再び消防署のハシゴ車（高さ約30m）で写真撮影し，補足調査をやり，11月上旬に調査を終えた。

61年度の調査実績は面積約8,000㎡，発掘した遺構は竪穴住居約65棟，掘立柱建物13棟である。竪穴住居のうち８棟は古墳時代前期で，ほかは奈良・平安時代である。

62年度

62年度の調査面積は2,600㎡である。前年度の実績を勘案して，調査員３名，作業員40名で調査日数は50日とみなし，５月上旬から７月末日までを予定した。調査範囲は61年度調査未了に終ったＢ・Ｃ12・13区と追加買収の両側で，変則的になった。バイパスの工事用道路は前年度に引き続き行なわれるため，調査もこれに合わせ優先順序を決めた。順序は①町道ボックス部分に当たるＡ・Ｂ７区付近，②その他の南西側（山三賀）追加部分，③北東（山大夫側）追加部分とした。③の山大夫側追加買収部分は山林や竹林の部分が多いことと，前年度の遺構のあり方からみて，あまり遺構が多くないと予想されたことから，この部分は表土発掘にバック・ホーを使うことにし，ほかは全て人力排土とした。調査は調査員３名，作業員約45名で，遺構発掘が３班，表土・包含層発掘が１班，実測が１班の編成で進めた。調査員３名のうち，１名は本年度からの調査員である。

Ａ列３～６区は竪穴住居が２棟のみであったが，７～13区は13棟と多く，予想以上であった。Ａ７区では廂をもった大型の掘立柱建物も検出された。Ｃ12・13区では掘立柱建物が重複して検出され，前年度の状況もあわせて，南東内陸側に掘立柱建物が集中することが分かった。一方，山大夫側のＦ列は３～９区迄，予想通り遺構は少なかった。Ｆ３区のＳＩ1500は他とかなりはなれて存在する印象を与え，古代の集落が北側へさらに広がることが知られた。Ｆ８区のＳＩ20は前年度一部発掘していたにもかかわらず，竪穴住居と認識するに至らなかったものであるが，調査日程の最終段階でカマドの遺存状態が良好であることが



第24図　調査風景（写真）

1 土層観察アゼ清掃（60年度 SI 12付近）　2 住居跡発掘（61年度 SI 81付近）
3 遺構検出・排土（62年度 B 12区付近）　4 遺構実測・発掘（62年度 SB 1241付近）

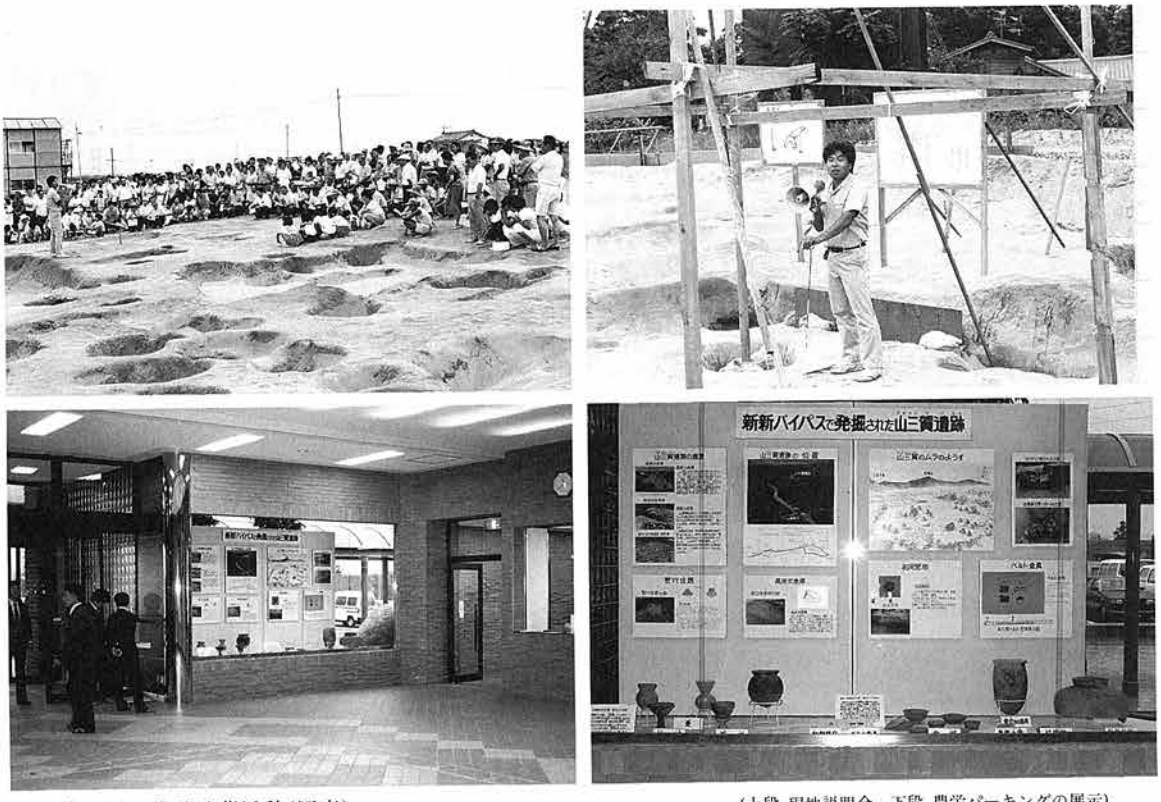
判明し，これに使用された土師器甕４個体が設置状況を明確に示していた。それまで，カマドの調査を多く繰り返しながらも，その構造把握に至らなかったが，これによりその一端が把握された。A12・13区では竪穴住居が重複した。そのうちSI 1460は道路を撤去して発掘した。作業は予定通り７月下旬に終了し，３か年にわたる約13,600㎡の現場調査が全て終った。

C　普及啓蒙活動

遺跡の発掘成果はたんに学術的な意義だけでなく，広く市民のなかに生かされてはじめて地域の文化財として活用されることは言うまでもない。普及啓蒙活動が重要なゆえんであるが，そのためにいくつかの行事や活動を行なった。これは調査が３か年にわたり，数多くの新しい発見があったことにもよる。また，町教育委員会や作業員の自主的な企画運営による活動にも特筆すべきものがある。

広報等の記事　町教育委員会で月１回発行し，町内全戸配布している『社会教育だより』に，各年度１回づつ発掘調査とその成果について紹介した（60年11月37号，61年６月42号，62年７月51号）。作業のようすや出土品などの写真を掲載するとともに，調査に参加した作業員の感想もよせられている。37号では61年度の作業員募集記事を載せたところ，多くの応募があった。一方，町役場広報課で月２回発行し，全戸配布している広報紙『せいろう』にも２回紹介された（７月119号，10月122号）。ここでは調査成果のほかに現地説明会の案内とその内容について詳しく述べられている。

現地説明会（第25図）　遺跡の概略がわかり，かつ作業工程上可能な時期として，61年度８月24日に実施した。この段階で発掘予定面積の約半分が調査を終了し，遺物も完形品や珍しいものがかなり出土していた。説明会は午前10時から12時までの日程で，①全体の概要，②竪穴住居，③掘立柱建物（高床式倉庫），④竪穴住居の発掘方法，⑤おもな出土遺物について，場所を別にして説明した。②，③についてはイラストなどの説明板を作成した。参加者は約350名と予想以上に多かった。参加者の約2/3は町内の人で，各年令層



第25図　普及啓蒙活動(写真)

（上段 現地説明会　下段 豊栄パーキングの展示）

が万遍なく含まれている。『広報』や『社会教育だより』，町の有線放送などで説明会についてPRしてもらったことが多くの人を集める結果になったと思われる。なお，説明会ではB5版12頁孔版の資料を作成した。

展示会・スライド会・講演会　62年度になってからは，町教育委員会などの主催でいくつかの行事が実施された。町の文化祭（11月1日～3日）には，会場の一角で出土遺物の主なものを展示し，あわせて調査と遺跡についての説明とスライドを上映した。出土遺物の一般公開は，県の展示施設もないことから，現地説明会以外ではほとんど実施していない。また，文化祭に先立つ10月には，町公民館における町老人福祉協議会主催「聖篭町老人の集い」（約250名参加）にて「古代のロマン『山三賀遺跡』」と題して講演した。

豊栄サービス・エリアでの資料展示（第25図）　出土遺物等の恒常的な展示公開は，県をはじめとした公立の適当な展示施設がないため，実施できないのが現状である。そうした状況について建設省と話し合うなかで，建設省側の施設内での展示ができないかという案がでた。建設省ではちょうど新々バイパス豊栄パーキング内に，道路情報等を提供するサービス・エリアを建設中であり，その建物内部に展示コーナーを設け，山三賀II遺跡の資料を展示することになった。サービス・エリアは高速道路のサービス・エリアと同じものであり，一般国道では当サービス・エリアが全国でも最初の例ときく。昭和63年11月10日のオープン予定にあわせ，写真・図のパネル，説明文の作成，出土品の選定をおこなった。展示スペースは幅約3.5m，高さ約2m，奥行約1mである。

山三賀遺跡を語り継ぐ会　発掘に参加した作業員を中心に結成された会。作業員は61年度の調査規模の拡大にともなって，登録約70名となった。多くは遺跡近辺の住民であるが，周辺の新発田市・豊栄市などからも参加していた。会は61年度の調査終了に近い頃結成され，文集『山三賀遺跡発掘調査誌』を町教育委員会とともに62年3月に発刊した。文集には調査員のほか作業員の感想文が多く掲載されている。会では発掘作業の終了後も，町教育委員会の協力のもと，会合や見学会を催しており，62年9月には出土遺物の整理作業が行なわれている文化行政課曽和分室の見学を行なった〔聖篭町教育委員会1988〕。発掘作業員の自主的な組織結成は県内でも例がなく，今後の活動が注目される。

その他　発掘現場に直接見学に来た人は多い。遺跡に近い町立蓮野小学校の4～6年生は学校教育の教材として，遺跡見学を行なった。聖篭町は一般に比較的新しい町であるという認識が町民の間で定着していたが，遺跡の調査によって，1,000年以上の歴史をもつことが知られ，新たな町の歴史像がつくられつつある。あらためて遺跡のもつ重要な側面を認識したい。

D　調　査　体　制

確認調査　昭和59年4月9・10日

担　当	藤巻正信	（県教育庁文化行政課学芸員）

昭和60年度　10,21～11,28

総　括	高橋安	（県教育庁文化行政課長）
管　理	田中浩一	（県教育庁文化行政課長補佐）
調査指導	中島栄一	（県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長）
庶　務	高橋幸治	（県教育庁文化行政課主事）
調査担当	坂井秀弥	（県教育庁文化行政課文化財専門員）
調査職員	金沢道篤	（県教育庁文化行政課文化財専門員）
	田辺早苗	（県教育庁文化行政課文化財調査員）

昭和61年度　4,10～11,14

総　括	高橋　安	(県教育庁文化行政課長)
管　理	田中浩一	(県教育庁文化行政課長補佐)
調査指導	中島栄一	(県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)
庶　務	土田　玲	(県教育庁文化行政課主事)
調査担当	坂井秀弥	(県教育庁文化行政課文化財専門員)
調査職員	柳　恒雄	(県教育庁文化行政課文化財専門員)
	金沢道篤	(県教育庁文化行政課文化財専門員)
	山本　肇	(県教育庁文化行政課文化財専門員)
	遠藤孝司	(県教育庁文化行政課文化財調査員)

昭和62年度　5,7～7,23

総　括	大塚克夫	(県教育庁文化行政課長)
管　理	田中浩一	(県教育庁文化行政課長補佐)
調査指導	中島栄一	(県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)
庶　務	土田　玲	(県教育庁文化行政課主事)
調査担当	坂井秀弥	(県教育庁文化行政課文化財専門員)
調査職員	高橋昌也	(県教育庁文化行政課文化財専門員)
	金沢道篤	(県教育庁文化行政課文化財専門員)

2　整理作業

A　方　　法

1)　遺　　物

出土土器の大半は土器で，そのうちでも奈良・平安時代の須恵器・土師器が主体を占める。土器以外では鉄製品がかなり多く出土しているが，木製品はまったくない。

土器　現場から出土した土器はまず基礎整理として，袋ごとに①洗浄，②注記，③分類する。洗浄は須恵器・土師器を一緒におこない，のちに両者を分けて，土師器のみバインダー処理を施す。注記は基本的に墨汁を使い，素地が黒いもののみ白色のポスターカラーを使った。注記の文字の上にはニスをかけた。分類は遺構とグリッドに分け，それぞれ遺構・グリッドごとにまとめた。遺構のうち，遺物量がまとまっているのは竪穴住居である。接合は基本的に遺構ごと1グリッドごとにおこない，切り合った遺構などについても接合のチェックをしたが，それ以外のものについては原則的に接合のチェックはしていない。石コウ復元は実測・観察の障害になるため，最小限にとどめ，実測後に保存と写真撮影を考慮し，復元を追加した。実測は，竪穴住居の土器を中心におこない，出土量や出土状況を勘案して，可能な限り図化するものと，代表的なもののみ図化するものに分けた。

鉄器　砂丘遺跡ということもあって，鉄器はかなり出土していた。現場で簡単にサビを取りチャック付のビニール袋にシリカゲルとともに入れた。現場から持ち帰った後は簡易の真空パックに入れ，良好な資料については元興寺文化財研究所で保存処理をおこなった。

2）図　　面

現場で作成した遺構実測図はＡ１版用紙で約140枚の量にのぼった。実測図はグリッドごとの平面図（1/30）と断面図・微細図等（1/10・1/20）に分けており，それぞれに通し番号を付し，台帳を作成した。平面図はトレースを考慮して1/40の第２原図をコピーで作成した。

遺構実測図は1/80と1/200の２種類を作成した。1/80図は竪穴住居などの主要遺構のみで，1/200図は全体を９ブロックに分割したもので，すべての遺構を記入した。カマドや遺物の出土状況の実測図は細かいことから1/60とした。遺構の断面図は原則として竪穴１棟に１本とし，最小限にとどめた。竪穴住居の土層断面にはよく目立つ「黒褐色砂層」が堆積しているものがあり，この有無がひとつの時期決定の要素にもなりうるため，この層のみ砂目の網がけにした。その他詳細については第Ⅳ章にて述べる。

B　経過と体制

経過　出土遺物の洗浄・注記は発掘作業の現場で実施し，残ったものについてその後に文化行政課曽和分室で実施した。また，図面・写真の整理や遺構台帳・遺構調査カードの作成も発掘作業に並行して進め，残ったものについて，年度ごとに現場終了後おこなった。

整理作業を本格的にはじめたのは62年度からで，８月以降，作業員のほかに整理担当職員を配置した。62年12月から63年３月までと63年８月～10月は職員１名，63年11月～平成１年３月は約３名をそれぞれ増員した。

遺物の接合が62年９月より63年６月までと，もっとも時間がかかった。遺物の実測は実測点数の約半数を職員，ほかを職員の指示のもと作業員がおこなった。このほかの作業は職員の指示にしたがって作業員がおこない，職員は原稿執筆，図版のレイアウト，編集にあたった。

体制　整理作業が本格化した62・63年度の整理体制と本文執筆以外の作業分担は以下のとおりである。

62年度
- 指　導　中島栄一（埋蔵文化財係長）・横山勝栄（副参事）
- 担　当　坂井秀弥（総括，須恵器・土師器の整理・実測）
- 職　員　金沢道篤（遺構実測図の製図，古式土師器整理・実測）
- 作業員　（遺物洗浄・註記，土器接合・復元，遺構実測図整図，その他作業補助）

63年度
- 指　導　中島栄一（埋蔵文化財係長）・岡本郁栄（副参事）
- 担　当　坂井秀弥（総括，遺構実測図，土器実測図，編集）
- 職　員　赤羽正春（遺構写真）・藤巻正信（縄文・弥生石器実測図）・山本幸俊（編集）
  梶　良成（遺物写真・土器観察表）・田辺早苗（縄文・弥生土器実測図）
  本間桂吉（金属製品・石製品実測図）
- 作業員　（土器接合・復元・実測・製図，図版類作成，その他作業補助）

年度＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
59	確認												
60	発掘												3000㎡
61	発掘												8000㎡
62	発掘												2600㎡
	整理												整理（水洗・註記・接合）
63	整理												整理（接合～報告書作成）

第26図　年度別作業進行状況

第Ⅳ章　遺　　跡

1　概　　要

遺跡の時期は縄文時代，古墳時代，奈良・平安時代の三つに大別される。このうち，縄文時代は住居跡がなく，遺物の出土量もごく少ない。主体となるのは，奈良・平安時代である。部分的に時代ごとの包含層が分離していたが，ほとんど同一平面上に重複するものが多い。検出されたおもな遺構は古墳前・中期と奈良・平安時代（8・9世紀）の竪穴住居約100棟と奈良・平安時代の掘立柱建物27棟である。

縄文時代　出土土器の時期は，中期前葉から晩期終末に及び，一部は弥生時代に入る。遺構は土坑が主体をなす。縄文土器の出土した土坑は数少ないが，埋土からみて，縄文時代と考えられるものがいくつかある。これらの埋土は茶褐色砂ないしは黄褐色砂で，よくしまっており混じりが少ない。ただし，若干の炭片を含むものが多い。遺構の分布はA・B3・4区周辺とB・C12・13区周辺に集中する傾向がみられる。後者の地区は地山面がかなり傾斜しており，包含層が縄文，古墳，奈良・平安の各時期に分離していた。比較的遺物がまとまって出土したSK1373はこの地区の土坑で，土器の出土状況などからみて，墓の可能性も考えられる。

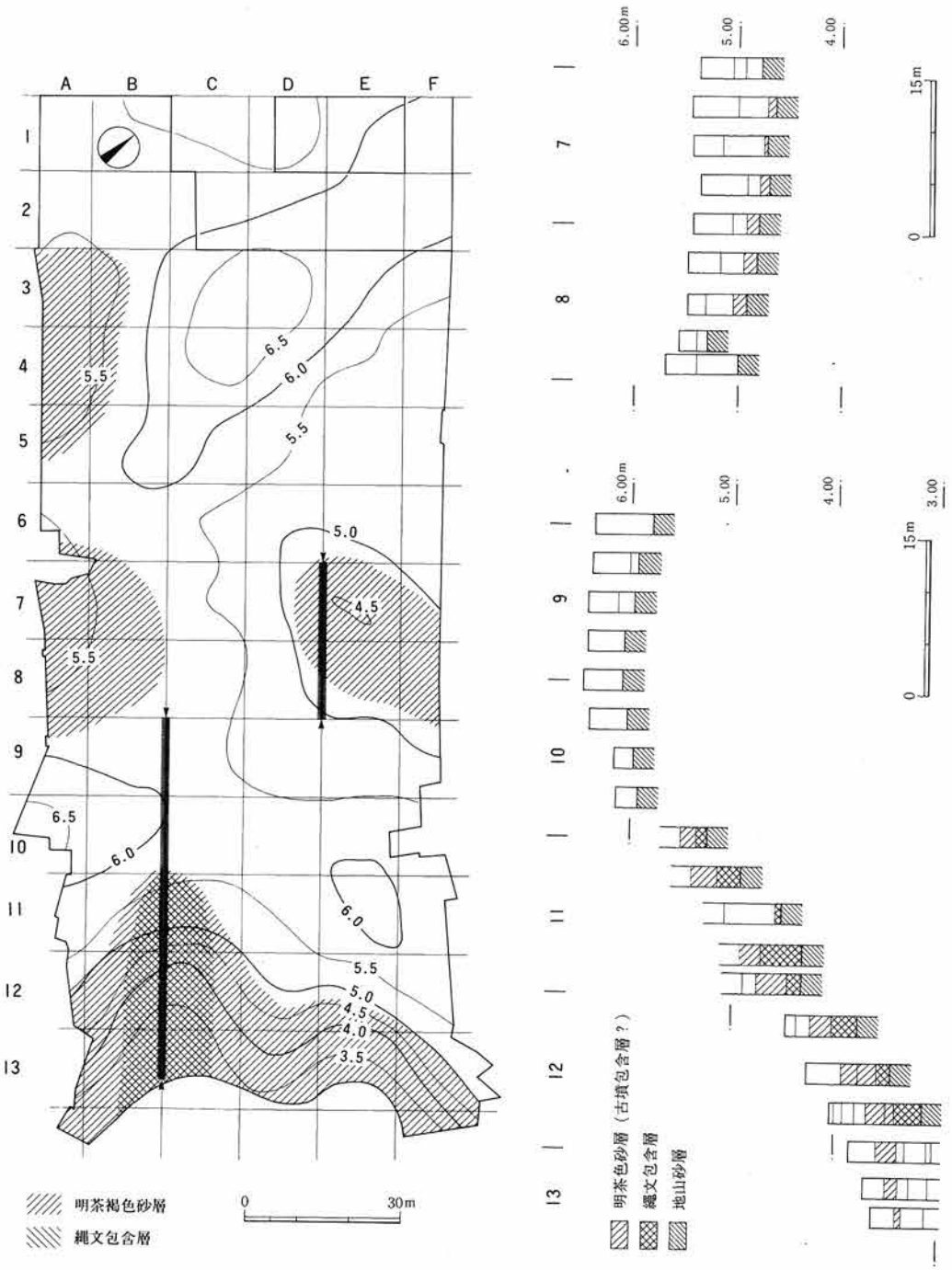
全体を合せても遺物の出土はごく少ない。縄文土器は小破片がほとんどで，石器も石斧・石鏃数点ずつを数えるにすぎない。時期のおおよそわかる土器は，晩期後半～末葉の時期が多い。この時期の土器はB・C12・13区に多い。土坑以外の遺構は明確でなく，遺物の出土状況からみても竪穴住居などの居住施設が調査区内に存在したとは考えられない。

古墳時代　約100棟の竪穴住居のうち，当時期のものは12棟である。調査区のほぼ中央から，東南端まで東西約100ｍの範囲に分布する。竪穴住居のほかには土坑がいくつか存在する。奈良・平安時代の遺構と重複しているものが多く全体のプランが明確でないものもあるが，いずれも平面形は方形である。規模は一辺約8ｍのもの（SI 502 A）から一辺約3ｍのもの（SI 98など）まである。深さは10～60cmである。古墳時代の住居跡同士の重複はない。出土土器からみて中心は前期から中期前半である。住居跡出土の土器には若干の時期差があり，すべての竪穴住居が同時期のものではない。埋土最上層から奈良・平安時代の土器が比較的まとまって出土している例（SI 1124）があり，住居の掘り込みがすべて早い時期に埋没しなかったことが知られる。土器はいわゆる「古式土師器」で，1点のみ古墳時代中期と考えられる須恵器𤭯（はそう）がある。土器の他には玉類がある。

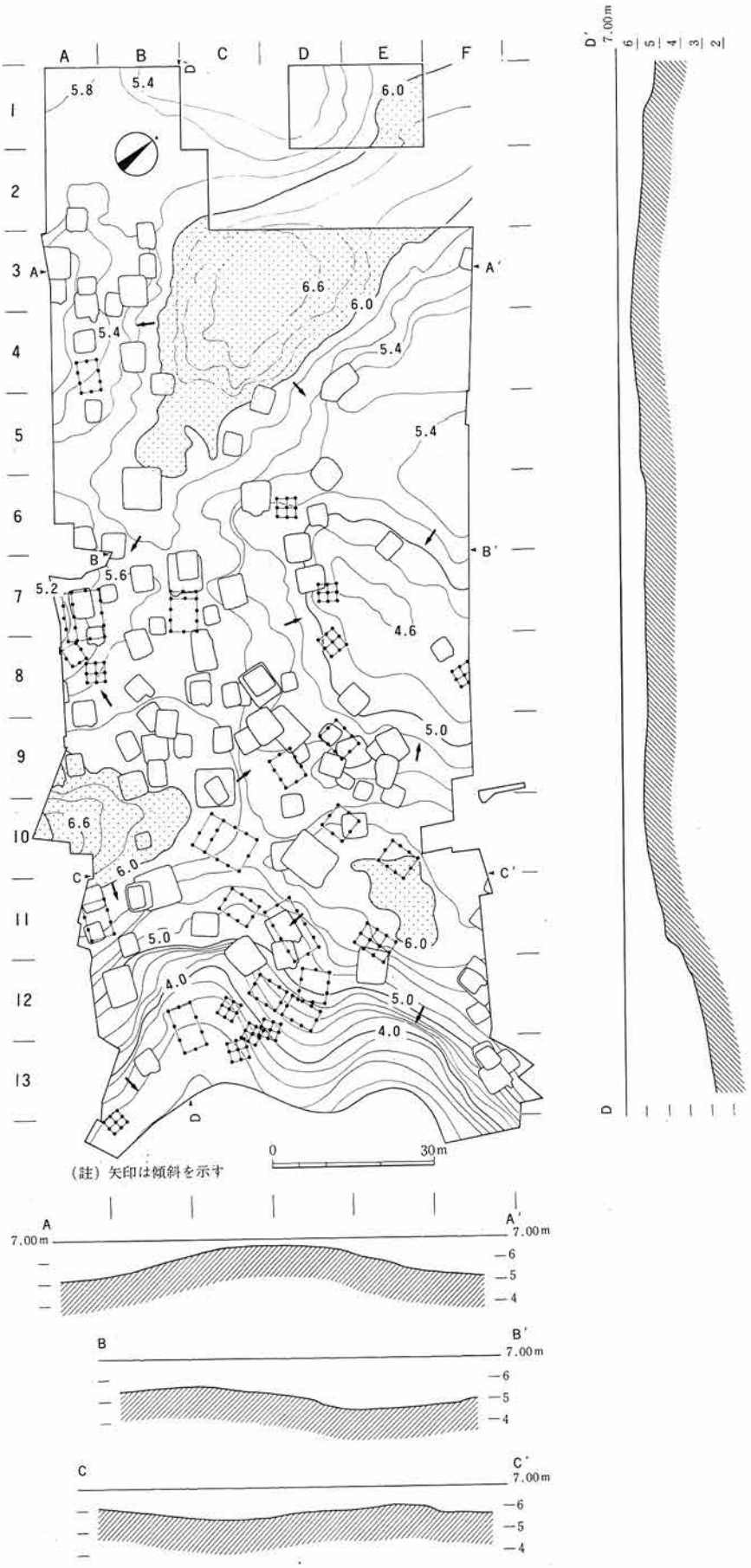
注目される遺構にC11区の方形溝SX795とB12区の溝状の土坑SK1337がある。SX795は方形に溝がめぐり，SK1337は断面「V」字状のものである。

奈良・平安時代　遺跡の主体をなす時期である。検出された遺構は竪穴住居約90棟，掘立柱建物27棟のほか，多数の土坑・ピットがある。これらは調査区の中央から，東南端の湿地近くまでの間に多く分布する。

竪穴住居はすべて方形プランで，規模は一辺3ｍ以下のものから一辺8ｍに近いものまである。多くは一辺5ｍ以下である。長方形のプランになるものも多い。竪穴住居の方位は東西南北の方位に近いものから，これよりかなり偏向するものまである。深さは20～60cmである。東側ないしは南側にカマドをもつの


A
B
C
D
E
F
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
5.5
6.5
6.0
5.5
5.0
4.5
5.5
6.5
6.0
6.0
5.5
5.0
4.5
4.0
3.5
明茶褐色砂層
縄文包含層
0
30m
6.00m
5.00
4.00
15m
0
6.00m
5.00
4.00
3.00
15m
0
明茶色砂層（古墳包含層？）
縄文包含層
地山砂層

第27図　土層柱状図



第28図　地山面の微地形

が一般的である。カマドは粘土を混ぜてつくっており，土師器の甕などを芯に入れているものが多い。床面には明確な竪穴をもたないものがある。周溝もすべてにみられるものでない。埋土で特徴的なのは8世紀前半期のものを除いて黒褐色砂が堆積していることである。土器は床面直上より，その上位から多く出土している。掘立柱建物は束柱をもつ総柱建物と，束柱をもたないものがある。調査区の東南端に比較的集中する。総柱建物は2間×2間の規模が多い。束柱をもたないものは梁間2間，桁行は3間～4間で，廂をもつ例が2つある。掘立柱建物と竪穴住居が重複する例ではすべて掘立柱建物のほうが新しい。

出土土器の年代は8世紀初頭から9世紀後半までであり，調査区内の遺構の時期もこれと一致すると考えられる。土器のほかには，鉄器がかなりある。

2 層序 (第27・28図)

発掘区内は1～2mの起伏をもった砂丘で，南西側は湿地に落ち込む。砂丘で掘り易いためか全体に撹乱が著しく，旧状をとどめた部分は多くはない。撹乱は平坦に削平したことによるものと，部分的な乱掘坑によるものがある。高い部分はおおむね削平されている。

基本層序は①表土（I層），②包含層（II層），③地山（III層）に大別される。いずれも砂である。①表土は暗褐色砂で，20～60cm程度である。高い部分は薄く，低い部分は厚い。②包含層が遺存していたのは撹乱されていない低い部分である。この範囲には地山上に明茶色砂層が存在する部分とほぼ一致する。包含層は低湿地にむかって傾斜するB・C列11～13区付近では3層に分離していた。その下層は黄褐色砂層で，若干の縄文土器と炭片を含む。出土土器のうち最も古いのは中期前葉である。中層は明茶褐色砂層で，古式土師器を含む。上層は暗褐色ないしは褐色の層で，奈良・平安時代の遺物を含む。下層・中層はよくしまっており，上層に比し色はうすい。それぞれの包含層の間には，遺物を含まない間層は存在せず，砂丘の形成が確認される縄文時代中期前葉以降，この砂丘列には砂が移動したり，堆積したりすることがなかったことがわかる（第III章2D）。

地山は淡黄白色のいわゆる「白砂」である。前述のように低い部分にはよくしまった明茶色砂層が存在している。この層は粒子が細かく「土」に近い。調査した範囲ではこの層からは遺物は出土しなかったため，時期は不明である。ただ，B・C列11～13区の古墳時代の包含層にやや類似することから，その時期の包含層の可能性も考えられる。地山砂は表面の比較的かたい部分をのぞくと，さらさらとしている。削平されて包含層が存在しないところでは表土の直下はしまりのない地山砂となる。

3 遺構各説

A 記述にあたって

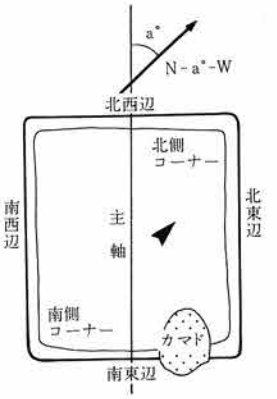
ここでとりあげる遺構は，おもに竪穴住居と掘立柱建物・土坑である。以下，個別に記述するが，これらの記述にあたっての一応の基準と，使用する語句や数値の意味，実測図の表現方法などについて，あらかじめ述べておく。なお，遺構の種別は「竪穴住居」・「掘立柱建物」・「土坑」とし，あえて「竪穴住居跡」のように「跡」を付していない。これはすべての遺構は原則として何らかの痕跡，「跡」であり，とくにいちいちは付す必要はないと考えるからである。

竪穴住居（第29図）

① 位置は大グリッドで示す。複数のグリッドにわたる場合は，それぞれ記したが，わずかな部分は省く。

② 重複する場合の先行関係は，「切る」，「切られる」と表現し，「AがBを切る」と表現すれば，AがBより新しいことを意味する。切り合い関係の把握に及ばなかったものは不明とする。

③ 主軸はカマドのある辺とその向かい側の辺（対辺）とに直交する方向とする。方位は北から東西に偏する角度（a°）を「N－a°－W（またはE）」と表現する。多くの場合は西に偏している。なお，グリッド方向は北から約50度西偏している。



第29図　竪穴住居の概念図

④ 住居の四辺の呼称は方位にしたがう。主軸の偏向角度が30度以下の場合は，それぞれ東西南北の方位をそのまま付し，「東辺」・「北辺」などとするが，30度以上の場合は南北と東西を組み合わせ「南東辺」・「北西辺」などとする。この場合，四辺のコーナーは「南側コーナー」・「西側コーナー」とする。

⑤ 平面形の長さ・深さの寸法は確認面からである。面積は四角形として計算したもので，細部は考慮していない。平面形は大半が正方形ではなく，長方形で，主軸方向が長いものが一般的である。この場合はそれぞれの長さを示した。平面形に若干の歪みがあるものも多く，部分的にことなるものもある。

⑥ カマドについての「左右」・「前後」の表現は，カマドにむかっての位置を示す。カマドの寸法も確認部分のものである。

⑦ 必要に応じて柱穴の番号を付した。

⑧ 埋土は時期決定の要素となる「黒褐色砂層」の有無に重点をおいた。なお，「埋土」は遺構内に入っていた土である。いわゆる「覆土」と同じ意味であり，人為的に埋めた土を意味するものではない。

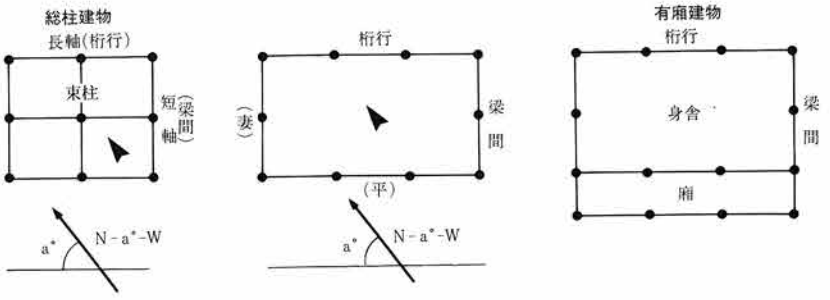
⑨ 出土地点を記録したおもな土器は記述した。土器の番号は実測図と一致する。

⑩ 奈良・平安時代の時期（Ⅰ～Ⅳ期）は土器編年（第Ⅶ章2A）の時期を示す。

掘立柱建物（第30図）

① 掘立柱建物の用語については建築史の分野の用語を使うのが通例である。しかし，それらの専門用語は建築の知識のないものにとっては難解なものが多い。ここでもなるべく通例にしたがって，使用したつもりではあるが，根本的な認識の誤りも多いことと思われる。

② 柱間の多い部分（原則として長軸）の柱の間を「桁行」，柱間の少ない部分（原則として短軸）の柱の間



第30図　掘立柱建物概念図

を「梁間」とする。「梁間」は「梁行」と同じ用語である。２間×２間の場合などはこの区別ができないため，「桁行」・「梁間」は使用しない。しかし，柱間が同じ場合でも建物の平面プランが正方形ではなく，長軸・短軸の区別できるものは，これを使う。建物の方向は長軸を基本に示す。

③　廂をもつ建物の柱間の数は廂を含める。廂以外の部分は「身舎」という。

④　建物の内側にも柱穴があり，これが側柱を結ぶ線の交点に位置する場合はこの柱を「束柱」とし，このような建物を「総柱建物」とする。

⑤　この遺跡の掘立柱建物はほとんど方位と一致しないため，「東西棟」「南北棟」の表現は用いない。

⑥　柱穴については「柱掘形」と「柱痕跡」の語を使う。「柱痕跡」は柱穴内に残る柱の痕跡で，ほかの埋め土は「掘形埋土」とする。径・深さは確認面でのおおよその数値である。

⑦　面積は長軸と短軸の乗数を示した。

遺構実測図について

遺構実測図は1/200の全体図（９葉に分割）と1/80の個別図がある。個別図は竪穴住居・掘立柱建物とおもな土坑のみ抽出した。全体図と個別図ごとに通し番号をもつ。全体図（1/200）は１～９，個別図（1/80）は１～32である。

全体図は遺構の存在する範囲を，多少の重複部分をとって９葉に分割した。それぞれの図の位置関係を図版２に示し，それぞれの図版にも略図を示した。発掘区の範囲は，下端の部分を直線で結んだ。この図には多数存在する撹乱はいっさい省き，その部分の遺構については想定される線を点線で入れた。カマドは外側の輪郭のみを記し，網目（スクリーントーン）を入れた。断面図は任意の位置（三角矢印で示す）を選び，作成した。

個別図は竪穴住居・掘立柱建物・土坑ごとに分けたが，重複するものはその限りではない。撹乱部分は点線で復元したが，それが大きくて復元が困難なものについては，撹乱部分を細い実線で示した。カマドは全体図同様，輪郭を入れ網目で示した。おもな遺物の出土地点は黒丸で平面図に示した。断面図は原則として土層断面を入れたもので示し，その位置は三角矢印で表示した。断面図は方向を統一するため，原図を反転したものもある。撹乱部分は実線で復元し，その両端部分の線を切った。トレンチ部分は実線で復元した。土層のうち最も目立つ「黒褐色砂層」は時期決定の要素にもなるため，砂目（スクリーントーン）をかけて表示した。土層名はなるべく統一すべくつとめたが，不可能なものもあり，それらについては観察者の記録を尊重した。

B　各　　説

SI1（図版３・12・131）

Ａ２区にある奈良・平安時代の竪穴住居。調査区のなかではもっとも西側に位置する。主軸はＮ-47°-Ｗで，南東辺にカマドがある。北東・南西辺がやや長く4.3ｍ，ほかは3.8ｍで，面積16.3㎡である。深さは40cm前後である。床面に深さ10cm前後の小さなピットがあるが，住居の柱かどうかは不明である。周溝はない。カマドは1.7×1.2ｍ，高さ約40cmであるが，この部分だけ床面がレンズ状にくぼむ。最下層が焼けている。埋土は基本的に上・中・下に分かれ，中層が「黒褐色砂層」で最も目立ち，上層は淡褐色砂，下層は淡茶褐色砂である。中央下層より須恵器無台杯（670），土師器小甕（674）が出土した。土器の出土量は10個体未満で少ないが，底部糸切りの須恵器無台杯（672）や土師器小甕（673）は当地域では異質な土器であり，当住居の住人の出自を示唆する可能性も考えられる。糸切り無台杯は頸城産の可能性もある。

時期はⅢ$_1$期に比定される。

SI 4（図版3・12・129）

A3区に位置し，SI 5を切る奈良・平安時代の竪穴。フイゴ羽口や鉄滓が多量に出土しており，鍛冶工房と考えられる。主軸はN-53°-Wで，カマドは東側コーナーにある。一辺3.4～3.5mのほぼ正方形で面積は11.9m²と小さい。深さは40～50cmである。西側コーナーと南側コーナーに径25～30cm，深さ約50cmのピットが1つずつある。柱穴の可能性がある。周溝はない。カマドは1.2×1.5m，高さ40cmで，ほぼ全部焼けている。カマドより土師器甕（547・552・557・561），須恵器有台杯（545）が出土した。561の甕は横倒しの状態で出た。埋土は最下層をのぞいて，炭や鉄滓などで，黒色を呈する。西側はとくに床面ちかくまで，黒色砂層が達する。西側コーナーの1.5×1.5mほどの範囲は床面と壁面が焼けており，この部分に鍛冶炉が存在したものと推定される。床面直上付近から土師器長甕（559）が一括出土した。土器の出土は上層を中心に比較的多く約30個体である。フイゴ羽口多数と鉄滓18.5kgが出土した。時期はⅢ$_2$期である。

SI 5（図版3・12・129）

A3区に位置し，SI 4に切られる奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-60°-Wで，南東辺にカマドがある。一辺4.6～4.7mで，ほぼ正方形を呈する。面積は21.6m²，深さは60～70cmである。床面の中央に径30cm，深さ約30cmのピットがあるが，柱穴かどうかは不明である。このほかにピットは存在しない。周溝はない。南西辺の壁面には小さなテラス状の段がある。カマドは1.8×3.0m，高さ55cmで，住居の外側に張り出す。当遺跡ではこのようにカマドが住居の外に張り出す例はまれである。床面が深いこともあり，遺存状況はよい。住居内の部分は最下層のみ焼けており，その上に明るい色の粘質土がのる。住居外にのびる部分は浅くレンズ状にくぼむ。カマド内からは土師器甕（8・9・10・12），支脚？（6）などが出土した。9は倒立状態で出土したことから，カマドの芯と考えられる。埋土は中位に黒っぽい砂層があるが，これは他の竪穴住居にみられる「黒褐色砂層」とは異なる。最上層（7）と最下層（9）から土器が出土した。出土土器は20個体未満であるが，須恵器は杯の小片が1点あるのみで，大半は土師器煮炊具である。時期はⅠ期の古い段階である。

SI 1100（図版3・12・130・131）

A3区の調査区際に位置する奈良・平安時代の竪穴住居で南辺が調査区外へのびる。SI 1101に北西辺を切られる。鉄滓とフイゴ羽口の出土より鍛冶工房と考えられる。主軸はN-51°-Wで，南東辺にカマドをもつ。全容は不明であるが北東辺は長さ4.5m以上である。深さ約35cm。床面には小さくて浅いピットが3つあるが柱穴かどうかはわからない。周溝はない。カマドは1.7×1.5m，高さは40cmで，たき口に近い部分の下部が焼けている。埋土最上層は「黒褐色砂層」で，その下部も相対的に黒味をおびた砂層である。これは鍛冶工房という特性によるものであろう。カマドの南辺あたりには赤褐色の粘質土がレンズ状に入っている。工房に関連する何らかの施設の可能性がある。カマドの前面よりフイゴ羽口（693・694）や鉄滓が比較的まとまって出土した。このなかから和銅開珎（77）が出土した。このほかカマド南側の調査区際の床面上約10cmより土師器（683・684・690・691）が一括出土した。出土土器の総数は20数個体である。鉄滓の総量は600gである。時期はⅢ$_2$期の新しい段階かⅣ$_1$期に比定される。

SI 1101（図版3・12・130・131）

A3区の調査区際に位置し，SI 1100を切る奈良・平安時代の竪穴住居。中央部に大きい攪乱坑がある。住居の南辺は調査区外へのびる。主軸はN-50°-Wで，SI 1100とほぼ同じである。カマドは南東辺にある。一辺の長さがわかる北東辺は長さ6.0m，ほかは4.9m以上で，面積30m²以上の大型の竪穴住居である。

深さは40～50cmで，周溝はない。壁際と中央に径25～40cmほど，深さ15～40cmの小さなピットが，一辺に3個ずつ存在する。住居にともなう柱穴と考えられる。カマドは1×1.5m，高さ約40cmで，土層は焼けた粘質土である。このなかにカマドの芯と考えられる土師器小甕(699)が倒立して入っていた。カマド上部にはこの他かなりの土器が出土した(700・701)。埋土は中位に「黒褐色砂層」があり，その上に暗褐色砂，下には鉄滓を含む「黒褐色砂層」である。鉄滓の出土量は430gであるが，これはSI 1100を切ることによると考えられ，この竪穴では鍛冶作業をしていなかったのではないかと考えられる。出土土器は約10個体である。時期はSI 1100より新しいⅣ$_1$期に比定される。

SI 6（図版3・13・132・133）

B3区に位置する奈良・平安時代の竪穴住居で，北辺でSI 8を切る。主軸はN-43°-Wで，南東辺にカマドがある。東西の両辺がやや長く，約4.2m，短辺は約3.6mで，面積15.1m²である。深さは30～40cmである。SI 8と切り合う部分は，床面がSI 8よりも低く，約10cmの段差がある。柱穴と周溝はない。カマドは1.6×1.4m，高さ約35cmで，下層に焼けた土がある。この焼けた土をはさむように左右にソデと考えられる暗茶褐色土がある。これからするとカマドの主軸は住居の主軸より若干西偏する。時期はSI 4と同一個体があり，Ⅲ$_2$期に比定される。

SI 8（図版3・13・133）

B3区に位置する奈良・平安時代の竪穴住居で，北辺でSI 9との切り合い関係は明確でないが，土器からみてSI 9に切られると考えられる。N-52°-Wで，南東辺にカマドがある。主軸方向の北東・南西辺がやや長く，5.7m，ほかは5.3mで，面積は30.2m²で，比較的大きい。深さは40cm前後である。カマドの南側に大きな撹乱坑がある。カマドのある辺をのぞいて，周溝がめぐる。北東辺と南西辺はカマドに近い部分で周溝が切れる。周溝は幅20～30cm，深さ10～15cmである。壁面のたちあがりはいずれも垂直に近い。周溝の埋土は白っぽく，よくしまっている。南東辺の周溝内には小さなピットがほぼ等間隔に5個あり，住居の柱穴と考えられる。このほかの壁際のピットも柱穴と考えられる。床面にあるやや大きめのピットは規則的な配置ではなく，性格は不明である。中央のピットは深さ50cmであるが，埋土が黄色でまじりがなく，柱穴とは考えられない。カマドは2.0×1.8m，高さ40cmで，大きくしっかりしている。基本的に上下2層で，下層が粘土を少し含むが暗赤褐色砂で，上層は焼けていない黄茶色粘質土である。カマドの左側（住居内部からみて）に接して，土師器(347・348)，須恵器無台杯(336)，20cm角の礫が出土した。ただし，無台杯はカマドからやや高いレベルである。カマド中央やや左よりの焼けた下層からは土師器数個体(342・343・346)が出土した。343はカマドの芯と考えられる。カマド右側の撹乱坑から出土している土師器長甕(345)もカマドの芯であろう。住居埋土最上層は「黒褐色砂層」がある。この層が存在する竪穴住居のうちでは，もっとも古いグループであり，この「黒褐色砂層」の形成時期を考える上で，貴重な例である。「黒褐色砂層」の下は茶褐色系の砂層である。土器は上層を含めても少なく，カマド以外では数個体である。時期は須恵器が少なく，やや不分明であるが，Ⅱ$_1$期と考えられる。

SI 9（図版3・13・133）

B3区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，南辺はわずかにSI 8と接する。SI 8との切り合い関係は不明である。主軸はN-53°-Wで，南東辺にカマドをもつ。主軸方向がやや長く約4.4m，ほかは約3.2mで，比較的明確に長方形を呈する。面積は14.1m²である。深さは約30cmである。西側，東側に大きな撹乱坑がある。径30cm程度の小さなピットが3つ，径50～60cmの比較的大きいピット（深さ約50cm）が1つあるが，配置からみて，柱穴ではないと思われる。周溝はない。カマドは1.2×1.1mで，高さは約25cmで，中央下

層が赤味をおびた粘土まじりの砂層，その上が黄赤褐色粘土で，この部分が燃焼部と考えられる。カマドから土器は出土しなかった。埋土は基本的に2層で，上層が「黒褐色砂層」，下層が暗黄茶褐色砂で，ともにしまりがない。土器の出土量は少なく全体でも小破片数個体しかない。このほか北側コーナー付近の床面上約25cmで，鉄の鋤鍬先（8）が出土した。土器が少なく時期はあまり明確でないが，III_1期頃と推定される。

SI 10（図版3・13・133）

B2・3区に位置する奈良・平安時代の竪穴住居。南東側にSI 9が近接する。主軸はN-50°-Wで，カマドは東側コーナーちかくにある。平面形は，主軸方向が長く，約5.0m，ほか3.8mで，比較的明確な長方形をなす。面積は19m²。北側コーナー付近とカマド付近にかなり大きな撹乱坑がある。深さは15～25cmで，周溝はない。床面中央にあるピットは浅くレンズ状のもので，暗黄色のしまった埋土である。西側の2つの小さなピットは深さ約15cmであるが，柱穴とは考えられない。カマドは1.3×1.3m，高さ約25cmで，ほぼ中央に焼土があり，この部分から土師器甕（641）が出土した。埋土上層は「黒褐色砂層」，下層は基本的に茶褐色系の砂層であるが，床面中央部に粘土を少し含み，よくしまった層がある。床面ちかくから637～640の土器が出土している。このうち須恵器無台杯（637）は二つに割れた大きな破片が重なった状態で，壁際から検出された。出土量は少なく，数個体である。時期はIII期に比定されよう。

SI 7（図版3・14・134）

A4区に位置する奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-54°-Wで，南東辺にカマドがある。北西辺に大きな撹乱坑がある。カマドのある南東・北西辺がやや短く，3.9m，北東・南西辺は4.0～4.2mで，面積16m²である。深さ50～65cmで，カマドの部分をのぞいて，幅20～40cm，深さ10cm前後の周溝がめぐる。柱穴はない。カマドは2.6×2.6m，高さは50cmで，埋土の最上層は「黒褐色砂層」でカマドとそのまわりの粘土が混じる部分は広く，幅2.5mにも及ぶが，焼けているのは北半分のみで，カマドの芯である土師器甕（475）がこの部分で倒立状態で検出された。遺物の出土は比較的少ない。カマド内の土器はIII_1期としてとらえられるが，その他の土器はSI 4と同じIII_2期と考えられる。

SI 310（図版3・14・135）

B4区に位置する奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-53°-Wで，南東辺にカマドがある。カマドのある南東・北西辺がやや短く，4.7m，ほかは5.2mで，面積は24.4m²である。深さは50cmで，周溝はない。床面にみられるピットはいずれも深さ50cm前後で，埋土は黄茶色砂でよくしまっている。遺物の出土はないが，形状や埋土の状態からみて住居にともなうものではなく，この周辺にいくつかみられる縄文時代の遺構と推定される。埋土最上層は「黒褐色砂層」で，その下は茶褐色，ないしは黄褐色の砂である。カマドは1.5×2.0m，高さ40cmで，芯の土器はみられない。遺物は上層の「黒褐色砂層」・暗褐色砂層から土器10数個体が出土している。時期はIII_1期と考えられる。

SI 314（図版3・14・135）

B4区，SI 310の両側に接する奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-47°-Wで，カマドは南コーナーにあり，特異である。南西・北東辺が長く，約4.5m，ほかは約3.8mで，比較的明確な長方形を呈する。面積は17.1m²である。比較的高い位置にあるため，削平を受け，深さは25cm前後である。周溝はなく，住居に伴う柱穴も明確でない。カマドは1.3×1.7m，高さ30cmであるが，遺存状況はよくなく，上面よりカマドの芯と考えられる土師器長甕（272）が，口縁を南西に向けてつぶれた状態で検出された。その他の土器が5個体ほど出土しているにすぎない。土器が少なく，時期はあまり明確ではないが，II_1

期の新しい段階かと考えられる。

SB 309（図版３・14）

Ａ４区，ＳＩ７の南東側に位置する３間（5.8ｍ）×２間（3.9ｍ）の掘立柱建物。主軸はＮ-59°-Ｗで，面積は22.6㎡である。柱穴は一辺約50cmの方形に近いもので，柱痕跡は径15cmほどである。深さは80～70cmで，柱穴７はかなり撹乱を受けている。出土土器がなく，時期は不明である。

SI 325（図版３・15・136）

Ａ５区，ＳＢ309の南東側に位置する奈良・平安時代の竪穴。主軸はＮ-52°-Ｗで，カマドはなく，住居かどうかは不明。北東・南西辺が長くて，約4.1ｍ，ほかが3.1ｍで，明確に長方形をなす。面積は12.7㎡で，かなり小さい。周溝・柱穴はない。埋土はきれいなレンズ状堆積の砂層で，最下層はほとんど地山砂に近い。出土遺物は５個体ほどで少ない。鉄の刀子（26）が出土した。土器が少なく時期は明確でないが，Ⅲ期に比定されよう。

SI 1500（図版15・135）

Ｆ３区の調査区際に位置する奈良・平安時代の竪穴住居。調査区のなかではもっとも北側にある竪穴住居で，調査区の際にあるものの周辺には遺構はみられない。北東部の約半分は調査区外にのび，全容は不明で，カマドは検出されていない。南西辺は長さ3.5ｍで，深さ約40cmである。周溝・柱穴はない。埋土は上層が「黒褐色砂層」，下層が褐色砂で，下層より須恵器無台杯が比較的まとまって出土した。これらには同一の筆による「中」の墨書が２点含まれる（579・580）。土師器甕（581）は上層出土である。出土土器は全体でも10個体未満で少ない。土器が少なく，時期ははっきりしないが，II_2期頃に比定されよう。

SI 299（図版４・15・136・138）

Ｃ５区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はＮ-51°-Ｗで，南東辺にカマドがある。北東・南西辺が長く，約4.4ｍ，ほかは約3.1ｍで，明確に長方形を呈する。面積は13.6㎡で小さい。深さは10～30cmと浅いが，これは高い位置にあったため，上面が削平されたことによる。東側・西側コーナーに比較的大きな撹乱坑がある。カマドの付近は床面よりやや高くなる。周溝・柱穴はない。カマドは0.8ｍ×1.4ｍ，高さ40cmで，カマド内には完形品の土師器甕（705）が倒立状態で入っていた。土師器甕（707）もカマド内出土である。この他の出土土器は少ない。鉄器片が若干出土している。土器が少なく，時期ははっきりしない面があるが，III_2期頃に比定されよう。

SI 11（図版４・15・134）

Ｃ・Ｄ，4・5区に位置する奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はＮ-30°-Ｗで，南辺西よりにカマドがある。東・西辺が長く，約4.9ｍ，北・南辺は約4.2ｍで，面積20.6㎡である。高いところに位置するため，深さは20～30cmと浅い。東辺と西辺に大きな撹乱坑がある。床面にいくつか浅いピットがあるが，浅くて柱穴とは考えられない。カマドは1.5×1.0ｍ，高さ約30cmである。上層はよく焼けており，カマド内から土師器甕（516）が出土した。ほかにカマド上面からタタキ目の土師器甕片が出土している。埋土は上層が「黒褐色砂層」で下層が褐色ないしは黄褐色砂である。土器は上層から多く出土したが，個体数は10個体未満である。土器が少なく，時期ははっきりとしないが，Ⅲ期に比定されよう。

SI 12（図版４・15・136）

Ｄ・Ｅ，4・5区に位置する奈良・平安時代の竪穴住居。主軸は東西である。調査開始当初に発掘したことと，比較的傾斜したところに位置したこと，全体にかなり撹乱が著しかったことなどから，プランを明確に把握できなかった。南北にかなり長く，しかも整った平面形を呈さないため，複数の遺構が重複してい

るとも考えられるが，出土土器に時期幅はほとんど認められない。カマドは東辺に１基存在する。南北約10ｍ，東西約4.3ｍで，深さは斜面のため，20～60cmである。カマドは1.5×1.5ｍ，高さ30cmで，上部が粘質を帯びる。カマド内を含め，付近から比較的まとまって土器が出土した。埋土は上層に「黒褐色砂層」がなく，上層は暗色系，下層は黄褐色砂である。時期はⅡ$_1$期の新しい段階に比定される。

SI 360（図版５・16・137）

Ｂ５・６区にある奈良・平安時代の竪穴住居。大型でしかも東半部には大きな撹乱坑があり，平面プランをすぐには把握できなかったものである。主軸はＮ-48°-Ｗで，カマドは南東辺にある。平面形は正方形にちかいが，主軸方向が約8.0ｍとやや長く，ほかは7.1ｍである。面積は約56.8㎡で，検出された奈良・平安時代の竪穴住居中最大規模である。深さは15～25cmと浅い。これはこの竪穴住居が高い位置にあり，かなり削平されていることによると考えられる。

北西辺全体と北東，南西辺の東側には周溝がある。南西辺には周溝と同じ規模の小さな溝が約50cmの間隔で平行する。また，カマドの下からも周溝が検出された。これらは幅20～30cmで，深さは５～10cmと浅い。壁際には径30～50cm，深さ40～60cmのピットが比較的等間隔にあり，柱穴と考えられる。これ以外のピットも，西側コーナー付近の小さいものをのぞけば，いずれも柱穴とみられる。規模の大きい主柱穴をもたない住居の構造と考えられる。なお，周溝などに沿ってある柱穴は溝の埋土を切っている。

カマドは左側半分が撹乱を受けており，２×１ｍで，上部は削平されて，高さ30cmである。上層部が焼けた粘質土である。この層よりタタキ目の土師器長甕片が出土した。住居の埋土は上層が「黒褐色砂層」で，その下は褐色の砂層で，あまりしまっていない。上部全体がかなり削平を受けていることもあって，土器の出土量は10数個体と，比較的少ないが床面直上で須恵器稜椀（656）が出土した。また，転用硯（657），把手付鉢（662）などは，一般的でない器種であり，稜椀を含めてこの住居の階層を示唆し，住居の大きさと住人の階層との一定の関係を知ることができる。時期はⅢ$_1$期頃に比定されよう。

SI 336（図版５・16・137）

Ａ６区に位置する奈良・平安時代の竪穴住居。町道と調査区の関係から，南辺部を発掘することができなかった。主軸はＮ-63°-Ｗで，東辺のコーナー寄りの部分にカマドがある。全体の規模は明確ではないが，主軸方向がやや長く，約5.1ｍ，ほかは約4.4ｍで，面積は約22.4㎡である。ただし，西辺には上層に浅い掘り込みがあり，これをのぞくと主軸方向は約4.3ｍで，ほぼ正方形となる。深さは約60cmで，削平はあまり受けていないと考えられる。

西辺の壁際に深さ10cmほどの溝状のくぼみがあるが，周溝のように整った形状でない。床面のピットも明確に柱穴と考えられるものはない。カマドは1.5×1.5ｍ，高さ30～40cmで，土師器が数点（49・51・54・55）出土した。このうち54と57はカマドの芯の可能性がある。上層は焼けていない粘質土で，その下に焼けた粘質土がある。住居の埋土には「黒褐色砂層」がみられず，全体に褐色系の砂層で，粘土が多少まじり，よくしまっている。出土土器は20個体ほどである。非ロクロ土師器を主体にする時期のものである。Ⅰ期の新しい段階に比定されよう。

SI 339（図版５・16・137）

Ｂ６区のSI 336の北東側に隣接する奈良・平安時代の竪穴住居。北東側にはSK340がある。町道に一部かかり南側コーナー付近は調査できなかった。主軸はＮ-47°-Ｗで，東側コーナーにカマドがある。上部全体が広く撹乱を受ける。主軸方向がやや長くて，約5.1ｍ，ほかは約4.2ｍ，面積は約21.4㎡である。深さは30～50cmである。床面にあるピットは深さ30～50cmで，柱穴の可能性もあるが，配置が不規則である。

南西辺沿いには周溝状の浅い（深さ約10cm）くぼみがあるが，全体にめぐるものではない。カマドは1.2×1.4m，高さ約40cmである。埋土は上・中・下と3層で，上層が「黒褐色砂層」で，中・下層は褐色系の砂層である。出土土器は30個体以上で，比較的多く，須恵器の器種が豊富であることが注目される。カマドから鉄製品の刀子（39）が出土した。時期はIII_1期頃と考えられる。

SK 340（図版5・16・138）

B6区にあるSI 339の北側にほぼ接する奈良・平安時代の土坑である。平面形は径約2.5mの円形にちかい。深さは25～30cmで，断面は皿状となる。上層に「黒褐色砂層」がある。出土土器は数個体ある。

SI 14（図版4・17・138）

C・D6区にある奈良・平安時代の竪穴住居。東側にSB355が近接する。主軸はN-50°-Wで，南東辺にカマドがある。平面形はほぼ正方形で，5.6×5.8m，面積は32.5m²である。比較的大きい。深さは35～60cmで，上部はあまり削平を受けていない。北側コーナーと北西辺に比較的大きなピットがあるが，住居の外側に張り出し，住居に伴うものではない。このほかの小さなピットは深さ約30～50cmで，住居の柱穴と考えられる。これらはカマドをはさむ両側の壁際に4～5つあり，カマドの対面にも1つある。主柱穴をもたないものである。周溝はない。カマドとその周辺の粘質土の分布は4.5×4mの範囲に広がる。カマドの構築土と考えられる。褐色粘質土はそのまま，住居中央部までのび，壁の立ち上がり付近には，この粘質土層の下に暗褐色砂層がある。カマド中より土師器（385・389・391・397・398），須恵器（373）が出土した。埋土は最上層と，間層をはさむ中層に，黒っぽい砂層がある。中層の黒ないし黒褐色砂層より比較的まとまって土器が出土した。とくにカマド前面に集中的にみられるが，床面直上ではない。土器の出土量は30個体以上で多く，土管（401）がカマドの前面から出土している。また，鉄滓が計260g出土しているが，鍛冶作業はしていないと考えられる。時期はIII_1期に比定される。

SB 355（図版4・17・141）

D6区にある2間×2間の総柱の掘立柱建物。主軸はN-52°-Wで，平面形はととのった正方形を呈さず，辺3.4～3.8mと不揃いである。面積は約13m²である。柱間は2間ほぼ等間隔である。柱掘形は円形にちかく，径35～60cm，深さ20～40cmである。埋土は暗褐色の比較的しまった砂である。奈良・平安時代の高床式倉庫と考えられる。出土土器がなく，時期ははっきりしない。

SI 15（図版4・17・139）

D5・6区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-87°-Wで，かなり西偏するグループに属する。東辺にカマドと考えられる粘質土が若干あるが，あまり明確ではない。平面形は隅丸方形で，一辺5.5×5.6m，面積約30.8m²である。比較的規模が大きい。深さは45～60cmとやや深く，上部はほとんど削平を受けていない。柱穴・周溝はいっさいない。埋土は上から2層目に「黒褐色砂層」があり，その下が暗褐色砂層で，この層に比較的土器がまとまっていた。最下層は地山砂を主体にした薄い砂層であり，土器は住居床面に近いレベルと考えられる。カマドと考えられる地点から土師器長甕（512）の約半分が横位で一括出土したが，その他は土師器が少なく，須恵器食膳具が15個体以上あり，注目される。鉄釘1点もある。時期はIII_1期である。

SI 280（図版4・17・140・163）

D6区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-67°-Wで，カマドは東辺の北寄りにある。平面形はほぼ正方形で，一辺3.7×3.5mである。面積約13m²で，小型である。深さは約40cmで，西側コーナー付近は風倒木で攪乱を受けている。北側と南側コーナーに浅いくぼみがあるが，明確な柱穴はない。周溝もな

い。カマドは1.4×1.8m，高さ約40cmで，住居外側に張り出す。中層の粘質土層がやや赤味をおびるが，明確に焼けているかどうかはわからない。カマドより須恵器無台杯（402）が倒立状態で出土した。これはカマド内に意図的に入れたものと思われる。埋土は最下層の薄い褐色砂層をのぞけば上層が「黒褐色砂層」，下層が暗褐色砂層である。カマド前方部から土師器長甕（410），住居中央床面直上より土師器長甕（408・409）が一括出土した。410はカマド左袖の芯の可能性がある。409のちかくの土層からは緑色凝灰岩の石塊が出土した。全体の出土土器量は約10個体である。時期はII_2期からIII_1期に比定されよう。

SI 1201（図版5・18・142）

A7区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SB1229に切られる。主軸はN-55°-Wで，カマドは東側コーナー付近にある。西辺には大きな撹乱坑があり，カマドの南側はない。主軸方向がやや長く，5.0m，ほかは4.2mで，面積約21㎡である。深さは約50cmで，上部はほとんど削平を受けていない。SB1229の柱穴のほかに，1つ浅いピット（深さ25cm）があるが，柱穴とは考えられない。周溝はない。カマドは1.0×1.3m，高さ約30cmで，上層は若干粘土を含む砂であるが焼けてはいない。カマド中央から須恵器折縁杯（872）が，倒立状態で検出された。埋土は上から2層目に「黒褐色砂層」があり，その下に褐色系の砂層がある。出土須恵器の多くは3層より出土した。個体数は10数点であるが，土師器はほとんどみられない。このほか，方形で中央に穴のあいた鉄製品（60）が出土している。時期はほぼⅣ期に比定されよう。

SI 1202（図版5・18・142）

A7・8区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 1201同様SB1229に切られる。主軸はN-59°-Wで，カマドは明確でない。西南辺に撹乱坑があり，この部分が不明瞭であるが，一辺3.2×3.5mほどで，面積は11.2㎡で，かなり小型である。深さは60～70cmで比較的深く，上部はほとんど削平を受けていない。床面コーナーの壁際には深さ10～20cmの小さなピットがみられ，小さな柱穴と考えられる。埋土最上層に「黒褐色砂層」がある。住居中央の床面直上に，径50cmくらいの範囲で黄褐色砂層がみられる。須恵器食膳具が10数個体と土師器長甕2点が出土している。時期はIV_2期に比定される。

SB 1229（図版5・18・142）

A7区にある廂をもつ大型の掘立柱建物。SI 1201・SI 1202を切り，奈良・平安時代に属する。主軸はN-59°-Wで，南西面に1間の出の廂をもつ。桁行は4間（9.3m），梁間3間（7.1m）で，廂の出は1間（1.9m），身舎は2間（5.2m）である。面積は約66㎡である。柱間寸法は桁行・身舎梁間ともほぼ等間で，柱掘形は身舎が径60～100cm，深さ80～100cmとかなり大きく，廂が径50cm，深さ20～40cmと小さい。掘形埋土は暗褐色砂である。出土土器がなく，時期は明確ではないが，IV_2期のSI 1201・1202を切ることから，IV_2期以降と考えられる。

SB 1280（図版5・18・143）

A8区の調査区際にある奈良・平安時代の掘立柱建物で，SB1229と北側が接する。主軸はN-82°-Wである。調査区際で，西側・北側はよくわからないが，東西2間（3.8～3.9m）×南北2間（3.2～3.4m）の可能性がある。面積は約12.5㎡である。平面形は長方形ではなく，やや菱形となる。柱間寸法は等間にはならない。柱掘形は径35～60cm，深さ30～60cmである。出土土器がなく，時期は明確ではない。

SI 1200（図版5・19）

B7区にある奈良・平安時代の竪穴で，SB1229と重複する。両者の切り合い関係は不明である。主軸はN-56°-Wで，カマドはない。出土遺物がほとんどなく，住居でない可能性もある。平面形はほぼ正方形

で，一辺3.1～3.2ｍで，面積は9.9㎡とごく小さい。深さ40～35cmで，柱穴，周溝はない。埋土は上から2層目に「黒褐色砂層」がある。出土土器がほとんどなく，時期は不明である。

SI 435（図版5・19・143）

Ｂ7区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-56°-Wで，東側コーナーにカマドがある。主軸方向がやや長く，約4.7ｍ，ほかは約3.8ｍで長方形を呈する。面積は17.9㎡である。深さは35～40cmで，上部は多少削平されていると思われる。西側とカマド付近に撹乱坑がある。床面には小さなピットが4つある。深さは10～20cmで，柱穴かどうかはわからない。周溝はない。カマドは1.3×1.5ｍ，高さ25cmである。いずれの層も粘土をあまり含まず，しまりもあまりない。埋土は上層が「黒褐色砂層」である。出土土器は10数個体で，須恵器食膳具が大半である。土錘が2点，「黒褐色砂層」より出土している。時期はⅣ期である。

SI 440（図版5・19・141・145）

Ｂ7・8区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-68°-Wで，東辺の南東コーナー付近にカマドらしきものがある。主軸方向がやや長く，5.2ｍ，ほかは4.2ｍで，面積は約21.8㎡である。深さは40cm前後で，上部はあまり削平を受けていないと思われる。深さ20cm前後のピットが5つ存在するが，柱穴かどうかは不明である。カマドらしきものは粘質土をあまり含まず，しまりもよくないが，焼けている。埋土は上から2層目に「黒褐色砂層」がある。土器は2層とその下の層から多く出土している。東辺南東側のカマドらしきところの前面からは土師器長甕（840・841）が比較的まとまって検出された。同じ地点からは人頭大よりやや小さい川原石が3点出土した。鉄製の刀子（38）と紡錘車（56）も出土している。時期は$Ⅳ_2$期である。

SI 439（図版5・19）

Ｂ7区にある古墳時代の竪穴住居。主軸はN-56°-Wである。平面形は隅丸方形で，一辺約3.2ｍ，面積約10.2㎡である。深さは約15cmと浅く，上部はかなり削平されている。床面に深さ10～25cmのピットがある。埋土はしまりのない褐色砂層の単層である。古式土師器数個体が出土している。

SI 1281（図版5・19）

Ａ8区の調査区際で一部確認された奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-58°-Wで，北東辺の長さは約4ｍである。深さは約30cmで，埋土最上層に「黒褐色砂層」がある。周溝は確認されていない。北側コーナーに深さ約40cmのピットがある。このピットよりほぼ完形の鉄製の刀子（24）が出土している。埋土からの出土遺物はほとんどない。

SB 1241（図版5・19・143）

Ａ8区にある2間（3.8ｍ）×2間（3.5ｍ）の総柱の掘立柱建物。時期は奈良・平安時代と考えられる。主軸はN-49°-Wで，主軸方向がやや長くなる。面積は約13.3㎡，柱掘形は径45～70cmの円形で，深さは50cm程度である。掘形埋土は褐色ないし黄褐色砂である。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。出土土器がなく，時期は不明である。

SI 429（図版5・20・144・149）

Ｂ・Ｃ7区にある奈良・平安時代の大型の竪穴住居で，SI 840と掘立柱建物のSB870に切られる。主軸はN-57°-Wで，カマドは南東辺の南側コーナー付近にある。主軸方向がやや長く，約7.1ｍ，ほかは約6.5ｍで，面積は約46.1㎡とかなり大きい。これより二まわりほど小さいSI 840と北側が重複しており，遺存している部分は少ない。SB 870とは南東辺でわずかに重複している。深さは20～30cmで，SI 840よりは浅い。上部は削平されていると推測される。北東辺・南西辺の壁のたちあがりはゆるく平面形はやや外側

に張り出す。周溝はないが，柱穴と考えられるピットがいくつか存在する。撹乱されている北側コーナーをのぞく各コーナーには深さ50cm前後のピットがある。南側コーナーにはSB 870の柱穴（9）がある。これは両者の柱穴が重複したものと考えられる。このほかの床面のピットのうちで30cm以上のものは，竪穴にともなう柱穴であろう。カマドは1.7×2.4m，高さ35cmで，かなり削平を受けている。カマドは基本的に3層に分かれ，上層・中層が粘土まじりで，下層は砂層である。中層・下層は，よく焼けている。カマド中より土師器甕（292・293）と土管（295）が出土している。住居の埋土には「黒褐色砂層」がなく，比較的よくしまった茶褐色系の砂層で，一部に粘土を含む。埋土上層より和銅開珎（76）1点が出土した。出土土器は10数個体である。時期はII_1期と考えられる。

SI 840（図版5・20・144）

B・C7区にある奈良・平安時代の鍛冶工房の竪穴である。SI 429を切る。主軸はN-56°-Wで，カマドはない。平面形は比較的明確な長方形で，主軸方向が長く，約5.4m，ほかは約3.9mである。面積は約21.1㎡である。深さは約30cmで，一部は削平されていると思われる。周溝はないが，床面に2列にならぶ3個ずつのピットがみられる。これらは径30～40cm，深さ10～60cmである。また撹乱されていない西側・南側コーナーにも柱穴が存在する。床面中央のやや北東辺よりの地点は，約50cmくらいの範囲で焼けており，鍛冶の作業に伴う遺構と考えられる。埋土の上から2層目に「黒褐色砂層」があり，それより下の各層から鉄滓が多く出土している。ただし，最上層には含まれない。鉄滓の総出土重量は3.8kgにのぼり，フイゴ羽口もある。出土土器は数個体と少ない。時期はIV_1期と考えられる。

SB 870（図版5・20・144）

B・C7区にある奈良・平安時代の掘立柱建物で，SI 429を切る。主軸はN-51°-Wで，主軸方向の桁行きが4間（7.5～7.7m），梁間が2間（4.7～5.0m）で，北西側の妻に廂の出1間（1.2m）がある。面積は約37.2㎡で，比較的大きい。廂の柱穴掘形は小さく，径40～50cm，深さ40～50cm，身舎の柱穴はこれより大きく，径70～90cm，深さ60～90cmである。掘形埋土は暗褐色土でよくしまる。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。掘形内より土師器片若干が出土している。時期はIV_1期のSI 429を切ることから，IV_1期以降である。

SI 850（図版4・21・144・146）

C7区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-62°-Wで，カマドは南東辺にある。主軸方向がやや長く，約6.0m，ほかは約4.6mで，比較的明確な長方形を呈する。面積は約27.6㎡で，比較的大きい。深さは40～50cmで，上部は多少削平されていると思われる。柱穴は多く存在するが，かなり規則的に配置されている。壁際には一辺4～5個がほぼ両面が対称的な位置にある。このほか北西辺から1.2mくらいの位置に2つの柱穴がある。深さは30～50cmのものが多い。また，カマドは1.4×1.5mで，高さ約30cmである。中位に焼けた赤褐色砂があり，この層の上面にカマドの芯と考えられる土師器小甕（792）が倒立状態で出土した。長甕（796）もカマドからまとまって出土しており，カマドの芯の可能性をもつ。埋土は上から2層目に「黒褐色砂層」がある。10数個体の土器が出土している。時期はIV_1期，ないしはIV_2期に比定されよう。

SI 402（図版5・21・145）

C7区にある古墳時代の竪穴住居。主軸はN-63°-Wで，カマドはない。主軸方向がやや長く，約3.6m，ほかは約3.0mで，面積約10.8㎡である。深さは25～30cmと浅い。上部は削平されていると思われる。周溝と明確な柱穴はみられない。埋土に「黒褐色砂層」はなく，上層がやや色の濃い褐色砂層である。土器

はこの層の下部から出土している。出土土器の個体数は数点で少ない。

SI 401 (図版5・21・145)

C8区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，南東側にSI 483・462が近接する。南側コーナーと中央部にかなり大きな撹乱坑がある。平面形が長辺と短辺の差の大きい長方形を呈しており，カマドの位置も一般的ではなく，1棟の竪穴でない可能性もあるが，切り合いは認められなかったことから1棟の竪穴と考えておく。長軸方向が約6.7m，短軸が約3.4mで面積約22.8m²である。主軸(長軸)はN-65°-Wで，カマドは北東辺，東寄りにある。深さは約35cmで，上部は若干削平されていると考えられる。床面には深さ10cm前後の穴が不規則に多くみられるが，明確に柱穴と考えられるものはなく，周溝もない。埋土上層に「黒褐色砂層」があり，遺物が含まれていた。出土個体数は10数点である。カマドは1.3×1.1m，高さ約20cmで，カマド内より須恵器無台杯(710)，有台杯(713・714)が出土した。時期はⅣ$_1$期である。

SI 462 (図版5・21・143・146)

C8区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 483とほぼ重複し，SI 483を切る。主軸はN-58°-Wで，南東辺東側コーナー寄りにカマドがある。平面形はほぼ正方形で，一辺4.0～4.2m，面積は16.8m²である。深さは40～50cmで，SI 483の床面より低い。床面の四隅近くに柱穴がある。柱穴は径30～50cmで，深さ40cm前後である。カマドは1.1×1.5mで，高さ約30cmで，上部二層に粘質土を含み，上から2層目は焼けている。カマド内から出土した土師器甕(108・109)は倒立状態で出土し，カマドの芯と考えられる。このほかカマド内からは土師器甕数個体が出土した。埋土は上から2層目がもっとも黒っぽいが，いわゆる「黒褐色砂層」ではない。この層はよくしまっている。遺物はこの層より上で出土したものが多い。出土土器は豊富で，30個体以上ある。転用硯(102)のほか須恵器の広口壺(100・101)，鉄鏃(16)などが含まれている。時期はⅠ期の新しい段階と考えられる。

SI 483 (図版5・21・146)

C8区にある竪穴で，SI 462にほとんど切られており，西部の一画が遺存するのみである。また西辺も大きく撹乱される。主軸はN-62°-Wで，カマドは残っていない。主軸方向の長さは明確でないが，5.4mほどと推定され，ほかは4.8mである。面積は約26m²である。深さは約35cmで，上部は削平されていると考えられる。幅約20cm，深さ約10cmの周溝があり，西側コーナーと南側コーナーに柱穴と考えられるピットがある。埋土は褐色砂層で，出土遺物はほとんどない。出土土器が少なく時期は不明。

SI 17 (図版4・22・147)

D6・7区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-55°-Wで，南東辺に幅70cm前後のテラスがある。カマドは東側コーナー付近にある。主軸方向がやや長く，5.6m，ほかは5.0mであるが，主軸方向はテラスをのぞくと，4.8mほどになる。面積は28m²である。深さは40～50cmで，上部はあまり削平されていないと思われる。周溝が各辺にあるが，部分的に途切れる。幅は約20cm，深さ10cm未満である。小さくて浅いピットが多く，柱穴もあると考えられる。カマドは1.1×1.4m，高さ約40cmである。土師器小甕(572)が，カマドの中央から出土した。またカマドの前面からは土器が集中的に出土した(562・564・565・566・568・569・575)。カマドの東側のテラス上にも小さい粘質土を含む部分がある。明確には焼けていないが，カマドに関連したものか。埋土は最上層に「黒褐色砂層」がある。出土土器は約20個体であり，時期はⅢ$_1$期と考えられる。

SI 16 (図版4・22・128)

E6・7区にある奈良・平安時代の竪穴住居かと推定される遺構である。東辺に大きな撹乱坑があり，

北東コーナー・南西コーナーも大きな土坑によって切られる。プランが整った方形を呈さず掘り込みが浅いこと，カマドがみられないことから，竪穴住居でない可能性もある。主軸はほぼ南北となり，主軸方向4.4mで，ほかは3.1m，面積13.6m²である。深さは20～30cmである。埋土上層に「黒褐色砂層」がある。出土土器は数個体と少ない。このため，時期ははっきりしないが，II_2からIII_1期の古い段階と考えられる。

SI 263（図版4・22・148・159）

D7区にある古墳時代の竪穴住居で，SB262に切られる。主軸5.6m，短軸4.7mで，短軸方向はN-60°-Wである。面積は26.3m²で，深さは20～25cmである。カマド・周溝はない。SB 262の柱穴をのぞくと，深さ約20cmの小さなピットが2ケ所にあるだけで，明確な柱穴はみられない。埋土上層は黒っぽい暗褐色砂層で，よくしまっており，奈良・平安時代の「黒褐色砂層」とは異なる。床面上約10cmの中層から古式土師器数個体が出土した。うち小型器台(115)はほぼ完形品である。

SB 262（図版4・22）

D7区にある奈良・平安時代の掘立柱建物で，SI 263を切る。2間（3.4m）×2間（3.5m）の総柱で，南東から北西方向の柱間が短い。この短軸方向はN-55°-Wである。面積は11.9m²である。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘形は径40～50cmの円形で，深さ30～40cmである。掘形埋土は暗褐色砂でよくしまる。出土土器がなく，時期は不明である。

SB 252（図版6・22・148）

D7・8区にある2間（4.1～4.2m）×2間（3.4～3.5m）の総柱の掘立柱建物である。建物方位はほぼ長軸が東西，短軸が南北の方位に一致する。面積は14.3m²である。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘形は径30～60cmで，深さは30～45cmである。掘形埋土は褐色ないし，暗褐色砂でよくしまる。出土土器がなく時期は不明である。

SI 650（図版6・23）

C8区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，古墳時代のSI 660を切る。カマドの位置は特異で，南西辺にある。主軸はN-52°-Wである。主軸方向がやや長く，4.5m，ほかは3.2mである。面積は14.4m²。深さは25～30cmで，上部は削平されていると考えられる。床面に周溝・柱穴はない。カマドは1.1×1.1m，高さ35cmで，後方の上部にやや焼けた暗褐色粘質土がある。その下にやや砂の多い焼けた粘質土がある。カマド後方の上部には須恵器無台杯(600)が逆さに伏せた状態で出土した。埋土には，「黒褐色砂層」はみられない。出土土器は20個体ほどあるが，SI 660に伴うと推定される古式土師器が約半数ある。時期はIII期と考えられる。

SI 660（図版6・23）

C8区にある古墳時代の竪穴住居で，奈良・平安時代のSI 650・SI 640に切られて，遺存する部分は少ない。かろうじて把握される一方の軸の長さは4.4mで，この方向はN-46°-Wである。深さは約15cmで，上部はかなり削平されていると考えられる。柱穴・周溝・カマドはない。埋土は褐色系の砂層で，まじりは少ない。出土土器量は少なく，時期も明確でない。

SI 640（図版6・23・149）

C・D8にある奈良・平安時代の竪穴住居で，古墳時代の竪穴住居SI 660を切り，奈良・平安時代の竪穴住居SI 27に切られる。SI 27は住居の北側にほぼ重複し，遺存している部分は南辺から西辺にかけてのわずかな部分である。主軸はN-81°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。主軸方向がやや長く7.0m，ほかは5.6mで長方形を呈し，面積は39.2m²で大型である。深さは20～30cmと浅く，上部は削平されていると考

えられる。住居を切る３つの土坑がある。部分的に深さ10cm以下の周溝がある。カマドの下にも周溝はのびる。壁際には小さなピットがあり，柱穴と考えられる。このほか，SI 27の内に存在するピットも，本住居に伴う可能性が強い。カマドは1.9×1.8m，高さ約55cmで，前面は撹乱を受けている。カマド上層は褐色の焼けていない粘質土があり，その下に部分的に焼けた暗褐色ないし褐色の粘質土を含む砂層がある。上層の粘質土から，土師器小甕（61）が出土した。埋土には「黒褐色砂層」はなく，褐色系の砂層であるSI 27に大半切られていたため，出土遺物は少ないが，床面直上から，帯金具の丸鞆（まるとも）２点（69・70）が出土した。時期はII$_1$期の古い段階かと考えられる。

SI 27（図版６・23・149）

C・D８区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 640を切る。SI 640と方向もほぼ同じでまったく重複している。主軸はN-79°-Wで，東辺にカマドがある。深さ30～40cmで，東西は4.8m，南北は4.5mで，ほぼ正方形に近い平面形である。面積は21.6m²である。周溝はなく，床面のピットはSI 640に伴う可能性が強く，この住居に伴う柱穴ははっきりしない。カマドは左側半分が撹乱されており，長さは1.1m，高さ約45cmである。上部に焼けた粘質土があり，土師器片を含む。埋土上層に「黒褐色砂層」がある。出土土器は約10個体で，鉄製の鉇（やりがんな）（46）が出土した。時期はII$_1$期と考えられるが，SI 640よりは新しい。

SI 98（図版６・23・148・159）

D８区にある古墳時代の竪穴住居で，SI 640が南側に近接する。平面形は隅丸方形で長軸3.7m，短軸3.3m，面積12.2m²である。長軸の方向はN-63°-Wである。深さは30～40cmで，たちあがりはゆるやかである。床面に深さ40cmのピットが１つある。周溝・カマドはない。埋土は基本的に上下２層で，いずれも暗褐色砂層であるが，下層がより暗い色である。出土土器はごく少量である。

SI 500（図版６・23・149）

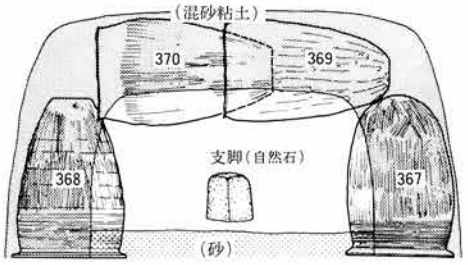
C９区にある奈良・平安時代の竪穴住居。北側にSI 670が近接する。主軸はN-50°-Wで，東側コーナーにカマドがある。主軸方向が長くて，4.3m，ほかは3.2mで，長方形を呈する。面積は13.8m²である。深さは35～40cmで，上部は多少削平されていると思われる。柱穴・周溝はいっさいみられない。カマドは1.3×1.1mで，高さ20cmで，やや焼けた粘質土を少し含む茶褐色砂層が遺存するのみである。カマドから土師器小甕（634）が出土，上から２層目の埋土は「黒褐色砂層」である。出土土器は10数個体である。時期はIV$_1$期である。

SI 20（図版７・24・150・151）

F８区にある奈良・平安時代の竪穴住居。62年度に調査区が拡張されたことから61・62年の二ケ年に分けて調査した。当初の61年の時は南側のコーナーのみ調査区内に入っていたが，竪穴住居と確定するに至らなかった。そのため竪穴住居の床面まで発掘せずに終り，62年度に竪穴住居と判明したが，全体を明らかにすることはできなかった。主軸はN-87°-Wで，ほぼ北から90度偏向する。カマドは東辺の北寄りにある。規模はおおよそ，3.8×4.8mで，南北がやや長い。面積約18m²，深さは25cmである。深さ数cmから20cmのピットがあるが，柱穴かどうかは不明である。周溝はない。

カマドは1.7×2.1m，高さは40cmで，カマドの芯に使用された土師器長甕４個体（367～370）が良好な遺存状況で検出された。カマドの具体的な構造を知り得る数少ない例として貴重である。両袖には長甕をそれぞれ１個体ずつ倒立させる。両者の間隔は約60cmで，左側は368，右側は367の甕である。これら二つの長甕の間に，２個体の長甕が横位に潰れた状況で検出された。これらは口を左側に向け，370の底部に369の口を入れた状況（入れ子状）であり，２個体とも口縁部が意図的に打ち欠かれている。これらはカマド焚き口

の天井部をなすものである。両袖の甕の側面には焼けていない粘質土が張りつき，中央の天井部の甕の上方には粘質土，下方には砂がある。上方の粘質土は下部，すなわち甕に接する部分約10cmは焼けており，その上は焼けていない。甕の下部の砂層はよく焼けている。このような状況からカマドの構造を復元すると（第31図），まず，両袖に倒立させた長甕を置きこの上に２個体の長甕を入れ子状にして，両袖の倒立した甕の底部にのせて，焚き口の天井部とする。次に，両袖の甕の外側と，天井部の甕の上部に粘土に砂をまぜた土を15～20cmの厚さで張りつける。この際，両袖の甕の内側と天井の甕の前面には粘質土を張りつけないで，甕の器面を露出させる。このことは，甕の外面約1/3程度がよく火を受けて，ススが付着していることから推定される。カマドの焚き口，燃焼部の床面には粘質土を張らないで，砂地をそのまま使う。この底面は後方（住居の外側）に向かってゆるく高くなり，支脚と考えられる細長い自然石（56）が立ててある。この石（支脚）は長さ約20cm，断面三角形で，上部約10cmが底面から出る。支脚の位置は天井部の甕前面から，奥へ70～80cmである。支脚上部の土はやや焼けた粘質土であり，この上部にカマドの口が存在したことは明瞭にはうかがえない。煙道の存否は確認できない。カマドに使用された甕はいずれも使用済のものである。これ以外ではほとんど土器は出土していない。時期はII_1期に比定される。



第31図　SI 20カマド復元模式図

SI 18（図版７・24・151）

Ｄ・Ｅ８区にある奈良・平安時代の竪穴住居。西側にSK34が近接する。主軸はＮ-90°-Ｗで，カマドは東辺北寄りにある。北東コーナーに大きな攪乱坑がある。一辺5.0ｍで，ほぼ正方形の平面形である。面積は25㎡。深さは30～50cmで，上部はほとんど削平を受けていないと考えられる。床面にいくつかピットがある。配置はととのっておらず，柱穴かどうかは不明である。このうち３はすり鉢状の形状で，埋土は黄色砂で，柱穴とは考えられない。５は底面に柱痕跡が残る。周溝はない。カマドは1.8×1.5ｍ，高さ約40cmである。カマド内から土器は出土しなかった。埋土の土から２層目は「黒褐色砂層」である。土器の出土量は少なく，10個体未満である。また鉄製の刀子（28）がある。SK34とは切り合い関係はないが出土土器からみて，当住居が新しい。時期はIII_2～IV_1期と考えられる。

SK 34（図版７・24・151）

Ｄ８区にあり，SI 18の西側に近接する。不整形の楕円形を呈し，長軸2.8ｍ，短軸1.5ｍ，深さ約65cmである。面積は4.2㎡。底面は南側が若干近くなる。埋土は暗茶褐色ないし暗褐色のやや粘質土まじりの層である。埋土の中より土器10数個体が出土した。出土土器より，SI 18よりかなり古いことがわかり，両者は関係のない遺構と考えられる。時期はII期と考えられる。

SB 1570（図版７・24・166）

Ｆ８区にある奈良・平安時代と考えられる掘立柱建物。調査区端にあり，北東側はわからない。東西は２間（3.5ｍ），南北は２間（3.7ｍ）以上で，束柱をもつ総柱建物である。柱掘形の規模や柱間寸法を勘案すると，２間×２間の総柱建物と考えられる。南北軸はＮ-10°-Ｅである。柱間寸法はそれぞれ，ほぼ等間で，柱掘形は径40cm，深さ約60cmである。掘形埋土は淡褐色砂である。出土遺物はないが，奈良・平安時代のものと考えられる。

SI 805（図版８・25・153）

B 9区にある奈良・平安時代の竪穴住居。北側にSI 804が近接するが，切り合い関係はない。主軸はN-71°-Wで，南側コーナーにカマドがある。平面形は明瞭な長方形で，東西5.4m，南北3.7m，面積20㎡である。深さは約50cmである。床面にあるピットは規格的な配置をしていない。周溝はない。カマドは1.2×2.0m，高さ約50cmで，住居の外側にむかって長くのびる平面形である。カマド後方の住居の壁は段をもっている。最下層が焼けた砂層で，その上に焼けた粘土混りの砂となる。最下層は住居の段の上までのびており，煙道になる可能性をもつ。カマドより土師器甕 (952)，その付近からも土師器甕 (951) が出土している。埋土には「黒褐色砂層」はない。出土土器は約10個体である。時期は出土土器よりII期と考えられる。

SI 458 (図版 5 ・25・160)

B 8区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-87°-Eで，カマドは東辺北寄りにある。平面形はほぼ正方形で，一辺3.9m，面積15.2㎡である。深さは40～50cmである。それぞれの壁際に3つずつとほぼ中央に9つの柱穴が比較的規則的に配置する。径25～40cm，深さ30～50cmで，比較的深い。周溝はない。カマドは1.4×2.0m，高さ約30cmで，下層に焼けた砂層があり，上層に粘土混りの土がある。カマドの後方は住居外へのびる。カマドのほぼ中央から土師器長甕 (324) が潰れた状態で出土した。埋土に「黒褐色砂層」はない。出土土器は約10個体である。時期はI期と考えられる。

SI 1307 (図版 8 ・25・152)

A 8・9区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-56°-Wで，カマドは南東辺にある。平面形はほぼ正方形で，一辺4.6～4.7m，面積21.6㎡である。深さは35～45cmである。床面北東辺側にごく浅いピットがあるが，柱穴や周溝とは考えられない。カマドは1.5～1.4m，高さ約50cmで，前方下部に焼けた砂層，その上に粘質土がのる。須恵器杯 (305・306) が右袖付近，土師器甕 (313) が左袖付近から出土した。完形品にちかい長甕 (314) は西辺の床面近くから，一括出土した。埋土は「黒褐色砂層」がなく，全般に粘土粒を含むしまりのある褐色砂層である。土器は10数個体出土している。時期はI期と考えられる。

SI 560 (図版 8 ・25・152・153)

B 9区にある奈良・平安時代の竪穴住居。北側にSI 807が近接するが，切り合い関係はない。主軸はN-69°-Wで，カマドは東辺南寄りにある。北辺部に風倒木痕がみられる。平面形はほぼ正方形で，一辺4.8mほどで，面積は23㎡である。高いところに位置しているため，深さは20cm程度と浅く，上部はかなり削平されている。床面の壁際には径30～40cm，深さ25～60cmの柱穴が，比較的規則正しく配置している。一辺4本ずつの柱と推定される。周溝はない。カマドは1.6×1.5m，高さ約40cmで，袖に土師器長甕を倒立させて使っている。調査中にカマドが乱掘されてしまい，右袖の長甕は紛失した。左袖の長甕が317である。天井部に横位に架構されていたと推定される土師器長甕が316である。支脚と考えられる自然石が出土した。出土土器は数個体と少ない。時期はII期と考えられる。

SI 803 (図版 8 ・26・153)

B 8・9区にあり，SI 802に切られる奈良・平安時代の竪穴住居。この周辺は竪穴住居が比較的密集し，切り合っている。主軸はN-85°-Wで，北東コーナー付近を大きくSI 802によって切られ，カマドはない。主軸方向がやや長く4.9m，ほかは4.2mで，ほぼ長方形を呈する。面積は20.6㎡で，深さは40～45cmである。上部は多少削平されていると考えられる。西辺・北辺に20cm前後のくぼみと小さなピットがあるが，規則的な配置ではなく，柱穴と考えられない。埋土には「黒褐色砂層」はない。出土土器は10数個体である。鉄製の帯金具 (71) もある。時期はII_1期の古い段階と考えられる。

SI 802（図版8・26・153）

B8・9区にあり，SI 803・SI 804・SI 806を切る奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-44°-Wで，南側コーナー付近にカマドがある。主軸方向がやや長く，5.0m，ほかは4.0mで，長方形を呈する。面積20m²，深さ40～45cmで，上部は削平されていると考えられる。北側コーナーと東側コーナーには柱穴の可能性もある，深さ20cmのピットがあるが，その他は明確ではない。ピット5はSI 804の柱穴であろう。カマドは1.2×1.1m，高さ約35cmである。カマド内からは支脚と考えられる自然石が出土した。このほか土師器長甕（865・866）はカマドの芯の可能性がある。埋土最上層は「黒褐色砂層」である。出土土器はカマド付近を中心に多く，20個体以上ある。時期はⅣ$_2$期である。

SI 804（図版8・26・153）

B9区にあり，SI 802・SI 807に切られる奈良・平安時代の竪穴住居。SI 802・SI 807と重複する部分は少ない。主軸はN-60°-Wで，カマドは東側コーナーにある。平面形は主軸方向がやや長く，5.2m，ほかは4.8mである。面積は25m²。深さは20～25cmとごく浅く，上部はかなり削平されていると思われる。柱穴は明確なものが，カマドの部分をのぞいて，コーナーの壁際にある。周溝はない。カマドは2×1.5m，高さ約50cmで，最上層に焼けていない粘質土があり，この層より，土師器長甕下半部と上半部（39）が出土している。埋土には「黒褐色砂層」はない。出土土器は数個体である。時期はⅠ期であろう。

SI 806（図版8・26・153）

B・C9区にあり，SI 802により西側コーナーをわずかに切られる奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-49°-Wで，南側コーナーにカマドがある。主軸方向がやや長く，3.8m，ほかは3.0mで，長方形を呈する。面積11.4m²でかなり小型である。深さは約45cmである。柱穴と考えられるピットがカマド付近をのぞく各コーナーにある。周溝はない。カマドは1.5×2m，高さ約40cmとかなり大きく，住居の外側にのびる。カマドの前部付近の床面は浅くレンズ状にくぼみ，これをはさむような形状のたかまりがある。後方部の焼けた粘質土のなかに土師器（189・190・194）が出土した。191の甕は住居外にのびる部分から出土した。埋土には「黒褐色砂層」はない。出土土器は10数個体で約半数がカマドとその周辺から出土している。時期はⅡ$_1$期と考えられる。

SI 807（図版8・26・153）

B9区にあり，SI 804を切る奈良・平安時代の竪穴住居。SI 804と西辺部が重複するが，その範囲はわずかである。主軸N-52°-Wで，東側コーナーにカマドがある。主軸方向が5m，ほかは3.5mで，面積は17.5m²である。深さは20～30cmでごく浅く，上部はかなり削平されている。西側に大きな土坑があり，これによって切られる。床面には確実な柱穴はみられない。周溝もない。カマドは1.7×1.4m，高さ35cmである。出土土器は数個体で少ない。時期はⅠ期と考えられる。

SI 670（図版6・27）

C9区にあり，SI 75に北辺を切られる奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-72°-Wで，東辺にカマドがある。SI 75に切られるため，南北長は不明であるが，東西は4.4m，南北3.5m以上，面積15.4m²以上である。深さ20～30cmと浅く，上部は削平されていると考えられる。2基の土坑によって切られる。柱穴・周溝はみられない。カマドは1.8×1.2m，高さ約45cmで，カマド内から土師器長甕が出土している。埋土には「黒褐色砂層」はみられない。出土土器は数個体である。時期はⅡ$_1$期頃かと考えられる。

SI 75（図版6・27）

C・D9区にあり，SI 670・SI 72を切る奈良・平安時代の比較的大型の竪穴住居。SI 670の北辺，SI 72

の南西コーナーと重複する。主軸はN-75°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。主軸方向が長く，6.4m，ほかは5.0mで，平面形は明瞭な長方形を呈する。面積は32㎡で，大型である。深さは約25cmで，北西コーナー付近は10cm以下である。浅く，上部は削平されていると考えられる。カマドのある東辺をのぞいて，幅20～30cm，深さ約10cmの周溝がある。北西側コーナーにあるピット4は深さ約30cmで，掘形は比較的大きく，柱穴かどうかはわからない。このほか，1・2・6のピットは柱穴の可能性をもつが，北東側と南西側のコーナーは攪乱を受けていることもあり，明確な柱穴の配置状況はうかがえない。カマドは1.3×1.1mで，高さ約35cmで，あまりよく残っていない。上部が焼けた粘質土で，その下は焼けた砂層である。カマドから土師器（425・428）が出土しているが，出土量は多くない。埋土最上層は「黒褐色砂層」であり，この層より比較的多くの土器が出土している。出土土器の個体数は20数個体である。須恵器の広口壺（419・420）は一般的ではない器種であり，住居が大きいことと関係するかもしれない。甕（420）はSI502Bに同一個体がある。時期はII_2期の新しい段階かと思われる。

SI72（図版6・27・154）

D9区にある奈良・平安時代の大型の竪穴住居。SI75に南辺・西辺を大きく切られ，東辺はSI74を切る。主軸はN-90°-Wで，東辺北寄りにカマドがある。主軸方向が長く，7.9m，ほかは5.4mで，明瞭な長方形プランである。面積は42.7㎡，深さ40～50cmである。各辺に周溝がめぐる。東辺と南辺は一条であるが，西辺は，周溝の内側約40cmにもう一条，北辺は部分的に2条となる。このほか南東のコーナー付近にはカギ状にやや太い溝（深さ数cm）がある。これと，西辺・北辺の内側の溝により，囲まれた範囲は床面がやや低い。壁はほぼ垂直にたちあがる。柱穴は比較的明瞭に把握される。周溝と重複する壁際に深さ40cm以上の柱穴がほぼ等間隔にある。長い北辺は6・12・13，南辺は24・21・20とそれぞれ3本ずつ，短い東辺は16・18，西辺は2・1，それぞれ2本ずつ配置する。このほか各コーナーにも柱穴がある。東辺のピット16はカマドの土の下部にある。床面中央には柱穴はない。カマドは1.7×1.5m，高さ約40cmである。下部によく焼けた粘質土があり，これをとりまいて焼けていない粘質土がある。カマド内より出土した土師器長甕（358）はカマドの芯であろう。埋土は上から2層目に最も黒っぽく目立つ層が存在するが，「黒褐色砂層」ではない。出土土器は20個体以上で，ほかに鉄製の鋤鍬先（10），留め金具？（50）が出土している。時期はII_1期と考えられる。

SI74（図版6・27）

D9区にありSI72に切られる奈良・平安時代の小型の竪穴住居。主軸はN-63°-Wで，カマドは東辺にある。主軸方向がやや長く，3.1m（推定），ほかは2.8mで，面積8.7㎡は最小規模である。深さ約25cmである。ピットはあるが，柱穴ではないと思われる。周溝はない。カマドは1.1×1.1m，高さ約20cmである。出土土器はわずかである。時期はよくわからない。

SB97（図版6・27）

D9区にある奈良・平安時代の桁行3間（6.1m）×梁間2間（4.6～4.7m）の掘立柱建物で，SI72を切る。面積は28㎡で，長軸はN-76°-Wである。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。この付近は白い地山砂層上に褐色の粘質土を含む層があり，検出にあたっては，これをとりのぞいた。柱掘形は径約50cm程度の隅丸の方形で，深さは50～30cmである。柱穴1はSI72を切っている。土師器小破片が数点出土しているのみである。詳細な時期は不明である。

SI82（図版6・28・155）

D9区にある奈良・平安時代の竪穴住居。SB100と重複するが，切り合い関係は確認していない。ごく

浅い（約20cm）こともあって，検出当初の平面プランが発掘後ややことなり，結果的に歪んだ平面形になった。主軸はN-76°-Eで，カマドは東辺にある。主軸方向が3.5m，ほかが3.8m，面積13.3m²で比較的小型である。柱穴・周溝はない。カマドは1.4×1.2m，高さ約20cmで，なかに須恵器無台杯1点が逆位に入っていた。その他に出土土器はほとんどない。埋土上層は「黒褐色砂層」である。時期はⅢ～Ⅳ期であろう。

SI 29（図版6・28）

D・E9区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 81・SI 33Bを切る。掘立柱建物SB 100に切られる。ただし，掘り込みが明確でなく，床面も平坦でないため，竪穴住居でない可能性もあるが，カマドと思われる焼土もあり，一応，竪穴住居としてあつかう。掘り込みの範囲は5～6mほどで，整った方形のプランではない。床面はすり鉢状になり，最も深い中央は，深さ約30cmである。カマドと思われる焼土は北辺にある。埋土は上下2層で，上層が「黒褐色砂層」である。土器はおもに上層から出土しており，10数個体ある。時期は$Ⅳ_1$期であろう。

SI 81（図版6・28・155）

D9区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 29に切られる。SI 80と接するが，撹乱されていることもあり，切り合い関係は不明である。カマドはない。長軸4.5m，短軸3.8m，主軸の方向はN-52°-Eで，北西・南東辺が長い。面積17.1m²，深さ約50cmで，壁面のたちあがりが明瞭である。北西辺と南西辺に周溝があり，北西辺には約40cmの間隔をあけてもう一つ小さな溝がある。柱穴は明確でない。床面ほぼ中央にややかたい粘質土のブロックがあった。埋土には明確な「黒褐色砂層」はないが，上層はかなり黒っぽい。出土遺物はごく少なく，時期は明確でない。

SI 80（図版6・28・155）

D・E9区にある小さな奈良・平安時代の竪穴。カマドはなく住居かどうかは不明。平面形は明瞭な方形ではなく，隅丸の方形で，一辺3m前後である。深さは約25cmで，埋土には明確な「黒褐色砂層」はみられない。出土土器は数個体である。時期はⅢ期と考えられる。

SB 100（図版7・28）

D・E9区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。桁行3間（6.2～6.3m），梁間2間（4.4～4.5m）で，長軸はN-77°-Eである。面積は27.9m²。SI 29を切るのは確認できたが，SI 81・SI 82との関係は不明である。おそらく，SI 81・82より新しいと推定される。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘形は35～50cmの円形で，深さ35～50cmである。出土遺物はない。この建物周辺にはまだ柱穴があり，ほかに建物が存在する可能性が強い。時期は$Ⅳ_1$期のSI 29を切ることから，$Ⅳ_1$期以降と考えられる。

SK 31（図版7・28）

E・F10区にある奈良・平安時代の竪穴状の土坑である。平面形は楕円形ないしは隅丸方形で，長軸3.9m，短軸3.1mである。深さは20～40cmで，底面はすり鉢状で，たちあがりもゆるい。カマドはない。埋土に「黒褐色砂層」はない。出土土器は少ないが，Ⅰ～Ⅱ期の須恵器が含まれている。

SI 33 A（図版7・29・153・155）

SI 33AとSI 33Bは検出当初は1棟の竪穴と考えていたが，のちに2棟と判明し，それぞれA・Bとしたものである。ともに奈良・平安時代の竪穴住居である。SI 33AはE9区にあり，SI 33Bを切る。南東コーナー付近はSI 41に切られる。主軸はN-83°-Wで，東辺北寄りにカマドがある。主軸方向が長く6.4m，ほかは4.5mで，明瞭な長方形を呈する。面積は28.8m²でやや大型である。深さは約20cmで浅く，上部は削平されて

いると考えられる。柱穴としては，北辺壁際にある１と２が深さ35～40cmで，住居にともなうものと考えられる。これに対応する南辺はＳＩ41・ＳＩ33Ｂと重複するが，10・11がほぼこれに沿った位置にある。ＳＩ33Ｂと切り合う南辺に周溝がみとめられた。カマドは1.3×1.2ｍ，高さ約20cmである。カマド中央から土師器甕（623・624）が一括して出土した。粘質土でなく焼けた砂層から出土しておりカマドの芯でなく，使用された甕の可能性がある。当初ＳＩ33で一括して土器をとりあげたため，この住居にともなう土器は少ない。土師器甕（622）がピット１から出土している。埋土最上層には「黒褐色砂層」がわずかに存在する。埋土最上層から帯金具のバックル（65）が出土した。時期はIII_2～IV_1期頃と考えられる。

ＳＩ33Ｂ（図版７・29・153）

Ｅ９区にあり，ＳＩ33Ａ・ＳＩ41・ＳＩ29によって切られる奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はＮ-86°-Ｅで，カマドは東辺南寄りにある。主軸方向がやや短く，3.2ｍ，ほかは3.6ｍで，面積11.5㎡の小型である。深さは約40cmで，床面はＳＩ33Ａよりも低い。周溝はなく，ピットも規則的な配置でない。カマドは1.3×1.2ｍ，高さ約30cmで，土器は出土しなかった。この住居に明確に伴う土器はごく少量である。時期はＳＩ33Ａより新しいが，これとあまり差はないと考えられる。

ＳＩ41（図版７・29・153・155）

Ｅ９区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，ＳＩ33Ａ・Ｂ，ＳＩ42を切る。平面形が方形ではなく，楕円形にちかく，カマドの位置も壁際でなく，特異である。複数の竪穴の重複の可能性も考えられるが，平面・断面の観察でも，それは認められなかった。一応，竪穴住居として記述する。長軸6.3ｍ，短軸4.5ｍ，面積28.3㎡である。長軸はＮ-49°-Ｗで，カマドは北東辺東寄りにある。床面は水平でなく，中央がゆるくくぼみ，壁のたちあがりもゆるい。最も深いところで，深さ約50cmである。北東辺のプランは外側へ大きく張り出す。周溝はなく，柱穴と考えられる配置のピットもみられない。カマドと考えられる焼土は0.7×1.0ｍである。埋土の上から２層目は「黒褐色砂層」である。出土土器は10数個体である。時期はIII_2～IV_1期と考えられ，ＳＩ33Ａ・Ｂとは大きな時期差はないと考えられる。

ＳＩ42（図版７・29・153）

Ｅ９・10区にある奈良・平安時代の竪穴で，ＳＩ41に切られる。主軸はＮ-32°-Ｗで，東側コーナーは撹乱を受ける。カマドはない。平面形はほぼ正方形で，一辺3.9～4.0ｍ，面積15.6㎡である。周溝・柱穴はない。深さ30～40cmで，最上層に部分的に「黒褐色砂層」がある。出土土器は少なく，数個体である。時期は土器が少なく明確ではないが，IV_1期頃と思われる。

ＳＩ60（図版７・29・155）

Ｅ９・10区にある奈良・平安時代の竪穴住居。平面形はやや不整形の方形で，主軸はＮ-38°-Ｗで，カマドは東側コーナーにある。一辺3.5～3.8ｍ，面積13.3㎡で，かなり小型である。深さは約50cmで，壁のたちあがりはゆるやかである。カマドは比較的大きく，２×１ｍ，高さ約50cmである。ただし，南側約半分はあまり焼けておらず，カマドでない可能性もある。カマド内に須恵器無台杯（586）・有台杯（590），土師器長甕（595）が入っていた。南西辺にピットが１つある。周溝はない。埋土の上から２層目が「黒褐色砂層」である。床面直上のほぼ中央から須恵器杯（585・587・592～594），北側コーナー付近から須恵器杯（582）が出土した。それぞれほぼ完形であり，出土状況が注目される。有台杯（591）はＳＩ29最上層出土の破片に同一個体のものがある。出土土器は約20個体である。時期はIII_2期である。

ＳＫ39（図版７・29）

Ｅ９区にある奈良・平安時代の土坑。西側にＳＩ33Ａが近接する。平面形は径約２ｍのほぼ円形で，断

面はすり鉢状となり，深さは約90cmである。埋土は下層がやや暗い色調で，この層の上面付近に比較的土器が多く集中していた。土器は約10個体であり，時期はII期である。

SK 24（図版7・29）

E8区にある奈良・平安時代の土坑。平面形は楕円形で，長軸1.2m，短軸0.8m，深さ70cmである。上から2層目の埋土は黒褐色を呈するが，いわゆる「黒褐色砂層」かどうかは不明である。出土土器は数個体あり，平底のロクロ土師器長甕が含まれる。時期はII_1期頃であろう。

SI 1302（図版8・30・156）

A9区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-58°-Wで，南東辺北寄りにカマドがある。主軸方向がやや長く，4.1m，ほかは3.2m，面積13.1m²で小型である。深さは25～50cmである。床面に小さくて浅いピットがいくつかあるが，配置は規則的でない。周溝はない。カマドは1.5×1.2m，高さ約30cmである。埋土は基本的に上下2層で，「黒褐色砂層」はない。土器は約10個体出土している。ほかに鉄製品（42）がある。時期はIII_2期と考えられる。

SI 1304（図版8・30・156）

A9区の調査区端にあり，南西半は調査区外にのびる奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-65°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。大きさは不明である。深さは40～60cmで，上層に「黒褐色砂層」がある。北辺・東辺に周溝がある。カマドは1.3×1.5m，高さ約35cmで，住居外へ若干のびる。カマド内から土師器甕（980）・須恵器無台杯（978）が出土している。出土土器は少ないが，鉄の鋤鍬先（9）と銅製品が出土している。時期はIII期と考えられる。

SI 1300（図版8・30・155）

A10区の調査区端にある奈良・平安時代の竪穴住居。北辺の一部が検出されたのみで，全体の規模は不明である。主軸はN-75°-Wで，東辺北寄りにカマドがある。深さは約40cmで，高いところに位置しているため，多少上部は削平されていると思われる。規模は不明ながら，検出された北辺は長さ5mあり，比較的大型と考えられる。北辺の壁際にある2つのピットは柱穴と考えられる。カマドの前にあるピットは浅いすり鉢状（深さ約15cm）のもので，埋土は暗茶色砂で，まじりがない。カマドは1.6×1.5mで，高さ約45cmで，下層に焼けた砂質土と粘質土があり，その上にしまった焼けていない粘質土がのる。両者の層の間付近から土師器甕（300・302・303）が出土している。また鉄鏃（13）もカマド内より出土している。このほかカマド前面床面直上より銅製品残欠（73～75），埋土下層より穴のあいた棒状の鉄製品（49・55）が出土している。住居の規模が大きいことと関連して，出土遺物の質の高さがうかがえる。埋土には「黒褐色砂層」はない。カマド以外の出土土器は土師器甕を中心に10個体以上ある。非ロクロと平底ロクロ土師器甕がある。I期ないしII_1期の古い段階に比定されよう。

SI 1311（図版8・30・156）

A11区の調査区端にあり，南西コーナーは調査区外へのびる奈良・平安時代の竪穴住居。SB1314と重複するが，直接切り合う柱穴はない。主軸はN-68°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。カマド付近から北辺は大きく撹乱を受ける。平面形はほぼ正方形で一辺4.1～4.3m，面積18m²程度である。深さは約20cmで，ごく浅い。高い位置にあるため，上部はかなり削平されていると考えられる。床面に小さなピットが1つある。カマドのある東辺に深さ数cmの周溝がある。カマドは1.5×1.1m，高さ約25cmで，下層に焼けた粘質土がある。カマド内から土師器鉢（94）が出土した。埋土はほとんど暗茶褐色砂で，「黒褐色砂層」はない。土器の出土量は少ないが，非ロクロの土師器が多く，時期はI期と考えられる。

SI 1312 (図版 8 ・30・156)

A11区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SB1314と重複する。SB1314が新しい。主軸はN-68°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。主軸方向が若干長く，3.5m，ほかは3.0mで，面積10.5m²の小型住居である。深さは約25cmで，ごく浅い。SI 1311同様，高い位置にあり，上部はかなり削平されていると考えられる。床面にSB1314の柱穴が2つ存在するが，この住居にともなう柱穴はない。カマドは1.3×1.1m，高さ約25cmである。カマド内から，支脚と思われる自然石が1個出土した。またカマドの近くから土師器甕 (59) が出土した。埋土はほとんど茶褐色砂層であり，「黒褐色砂層」はみられない。出土土器は少なく，土師器・須恵器が数個体である。土師器は非ロクロのものが多く，I期と考えられる。

SB 1314 (図版 8 ・30・156)

A11区にある奈良・平安時代の掘立柱建物で，SI 1311・SI 1312と重複する。おそらく，両者より新しいと推定される。長軸はN-68°-Wで，桁行3間 (7.2m)，梁間1間 (4.4m)，面積は31.7m²である。梁間は長さからみて，2間のものと推定されるが，ここでは中間の柱は確認できなかった。桁行の柱間寸法はほぼ等間である。柱掘形は径30～50cmの円形で，深さは10～20cmである。掘形埋土から土師器片若干が出土している。掘形埋土は暗褐色砂である。

SI 1313 (図版11・30・156)

B11区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-67°-Wで，カマドは，東辺北寄りにある。主軸方向が長く，4.2m，ほかは3.2mで，比較的明瞭な長方形を呈する。面積は13.4m²で比較的小型の住居である。かなりの傾斜地にあり，深さは一定でなく，南辺が約60cm，北辺が約20cmである。ほぼ中央にかなり大きな撹乱坑がある。西辺には周溝があり，一部分2条となっている。ピットは2つある。南辺にある大きなピットは住居を切る。カマドは1.7×1.0mで，高さ約30cmである。カマド内より土師器甕 (975) が出土した。埋土はほとんど暗褐色砂層であり，「黒褐色砂層」はみられない。ほぼ完形の非ロクロの土師器杯 (974) が南竪際の床面上数cmのところで出土した。出土土器は数個体である。時期はII_1期頃であろう。

SI 595 (図版 8 ・31)

B10区にある古墳時代の小型の竪穴住居。平面形は隅丸方形で，一辺3.0～3.5mである。面積10.5m²で小型である。長軸の方向はN-50°-Wで，カマドはない。深さ約15cmで，かなり浅い。比較的高いところに位置しており，上部はかなり削平されていると考えられる。柱穴・周溝はない。埋土はほとんど暗褐色砂層で，南東辺に古式土師器の甕 (133) が一括出土したほかは，あまり出土していない。

SI 71 (図版 6 ・31・157)

D10区にある奈良・平安時代の竪穴住居。ただし，完形品にちかい古式土師器が比較的まとまって出土しており，古墳時代の遺構と重複している可能性がある。主軸はN-67°-Wで，カマドは北西辺寄りにある。通常，カマドは東辺ないしは東南辺にあり，一般的でない位置である。平面形は正方形にちかく，一辺4.5mで，面積20.3m²である。深さは20～25cmで浅い。床面に深さ10～20cmのピットが多くある。規則的ではないが，いくつかは柱穴になると思われる。周溝はない。カマドは0.9×1.0m，高さ約30cmで，カマドの中心より土師器が出土している。またカマドに接して土師器長甕 (75・76) が一括出土している。カマドの芯の可能性もある。カマド前面からは底部穿孔の古式土師器小型壺が完形品で出土した。埋土には「黒褐色砂層」はない。奈良・平安時代の土器は10数個体あり，古式土師器も10個体ほどある。底部穿孔の小型壺2点と，小型器台2点のほか，小型壺が目立つ。時期はI期の新しい段階に比定される。

SI 70 (図版 7 ・31・157)

D・E10区にある古墳時代の竪穴住居。SB85に切られる。主軸はN-50°-Wで，カマドはない。平面形は隅丸方形で，一辺4.9～5.0m，面積24.5m²である。深さは20～25cmで，浅い。ほぼ中央に大きな撹乱坑がある。SB85の柱穴以外にもピットがいくつか存在するが，明確には住居の柱穴と考えられる周溝はない。埋土はしまりのよい褐色系の砂層で，床面直上より古式土師器数個体が出土している。

SB 85（図版6・31）

D・E10区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。SI 70と重複する。切り合い関係は確認していないが，時期からみて，SI 70より新しい。2間（5.0m）×2間（5.1～5.0m）で，束柱はもたない。平面形はほぼ正方形で，面積25m²である。南北軸の方向はN-10°-Wである。いずれもほぼ等間である。柱掘形は一辺50cmほどの隅丸方形で，深さは40～60cmである。詳細な時期は不明である。

SI 502A（図版6・31・158）

C9・10区にある古墳時代の大型の竪穴住居。奈良・平安時代の竪穴住居SI 502Bとまったく重複しており，検出当初から調査途中まで，それに気づかなかったものである。SI 502Aの平面形はほぼ正方形で，一辺7.2～7.8mである。面積56.2m²で，古墳時代の竪穴住居としては最大である。各辺は直線ではなく，わずかに外側にふくらみをもち，角も丸くなる傾向がある。主軸の方向はN-53°-Wである。深さは50～60cmである。周溝はない。柱穴は4本がほぼ正方形に配置される。柱掘形は径50～70cmの円形で，深さは35～70cmである。住居の大きさに比例して，柱穴も大きい。埋土は褐色砂が主で，床面直上を中心に多くの古式土師器が出土した。50個体ちかい量があり精製品の土器が多い。住居の性格の一面を示すと思われる。

SI 502B（図版6・31・158）

C9・10区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 502Aと完全に重複し，これを切る。主軸はN-80°-Wで，東辺にカマドがある。底面はSI 502Aよりもわずかに近く，その平面形は主軸方向が長くて，4.5m，ほかは2.7m，面積12.2m²である。しかし，断面観察によれば，壁のたちあがりは，底面の低い範囲よりも外側にあり，幅も4.3mくらいに復元され，正方形にちかい平面プランであったと考えられる。深さは約65cmで，深い。柱穴・周溝はない。カマドは2×1.5m，高さ約50cmである。カマド内から土師器甕（175・178・180）が出土した。170の土師器甕は確認調査時に出土したものである。埋土出土土器は20数個体はある。埋土には「黒褐色砂層」はない。時期はII_1期の古い段階である。

SI 610 付SK 620（図版8・32・162）

B10・11区にある奈良・平安時代の大型の竪穴住居で，ほかの竪穴住居・土坑などと複雑に切り合う。SI 600・SI 630・SK 620に切られるが，それぞれの遺構の埋土は共通しており，プランを把握するのは難しかった。SI 610の主軸はN-70°-Wで，東辺南寄りにカマドがある。平面形はほぼ正方形で，一辺7.2～7.3m，面積52.6m²の大型住居である。北東側コーナーには住居より新しい径約3mの大きな土坑がある。傾斜地にあるため，深さは40～60cmとなる。北辺と西辺には周溝がある。柱穴は規則的に配置しており明瞭に把握される。各辺にはいずれもほぼ等間隔に3本ずつ柱穴があり，コーナーにはない。これらは径40～50cm，深さ40～60cmである。周溝が存在する部分は，両者は重複するが，柱の中心は周溝の中心より内側になる。また，中心に2.8～3.3mの柱間寸法で，4本の主柱穴がある。ただし，SK 620に切られる部分にはない。これらは壁の柱穴よりやや大きい。カマドはSI 630のカマドと切り合っている。カマドは2.0×1.5m，高さ約55cmで中より芯の土師器甕（79・80・85）が出土した。80は左袖の位置から倒立状態で検出されたカマドの芯で，79はこの横から出ている。カマドの天井部の芯であろう。SI 630土師器長甕

(79) はSI 610の左袖の芯の可能性もある。これらの土師器の後方に支脚と考えられる自然石がある。埋土に「黒褐色砂層」はない。出土土器の多くは土師器で，カマド以外では数個体の出土にとどまる。鉄滓170ｇが出土している。時期はＩ期である。

SK 620はSI 610をきる径約３ｍの円形の土坑で，深さは２ｍ以上ある。埋土に「黒褐色砂層」が存在しないことから，SI 610の時期に近いものと考えられる。出土土器にはSI 741の甕 (132) と同一個体の破片がある。

SI 630（図版８・32・162）

Ｂ11区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，大型住居のSI 610を切り，SI 600に切られる。主軸はＮ-62°-Ｗで，カマドは，北東側コーナーにあり，SI 610のカマドと重複する。住居の大半がSI 610とSI 600と重複する。平面形はほぼ正方形で，一辺4.7～4.8ｍ，面積22.6㎡である。傾斜地により，南西側コーナーの深さは約70cmである。深さ約10cmの周溝が各辺にめぐる。柱穴は他の住居と重複しているため，明確ではないが，可能性のあるものが南辺側に存在する。カマド１×1.8ｍ，高さ約50cmで，SI 610のカマドを切る。カマド内より芯と考えられる土師器甕 (94) が出土した。埋土はSI 610と共通するもので，「黒褐色砂層」はない。出土土器は少ない。SK 620はこの住居と関係する土坑の可能性が考えられる。時期はＩ期である。

SI 600（図版８・32・162）

Ｂ11区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 630を切り，SI 630とほぼ重複する。主軸はＮ-75°-Ｗで，カマドは東辺にある。一辺3.2×3.7ｍで，面積は11.8㎡。深さは約40cmである。周溝・柱穴はない。カマドは1.5×1.0ｍで，高さ約40cmである。埋土に「黒褐色砂層」はない。出土遺物は土器数個体，鉄製品 (62)，フイゴ羽口である。時期はＩ期であろう。

SI 741（図版11・32・160）

Ｃ11区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はＮ-49°-Ｗで，カマドは，南東辺北寄りにある。平面形は主軸方向が短く，4.7ｍ，ほかは5.3ｍ，面積24.9㎡である。主軸方向が短い例は数少ない。深さは約50cmである。この付近には縄文土器と古式土師器の包含層が分離して確認されたが，本住居はこの包含層を切っている。周溝・柱穴はまったくみられない。カマドの右側前面にはカマドと連続した粘質土がある。この部分は焼けていない。カマドは1.5×1.8ｍで，高さ約50cmである。右袖の位置から土師器甕 (133) が直立して出土した。この甕付近から甕 (132) が出土，左袖の左横から甕 (131)，鉄の鋤鍬先 (7) が出土した。埋土は下層が黒っぽいが，「黒褐色砂層」はみられない。床面から浮いた位置で，土師器壺 (137) が一括出土した。この土器が出土した地点は粘土を含んだ土があり，壺を置くような施設があった可能性もある。出土土器は10数個体，鉄鏃 (14) １点である。なお，壺 (137) と同一個体の破片がＳK621，甕 (132) と同一個体の破片がSK 620から出土している。SK 620とSK 621はSI 741に近いところにあり，ほぼ同一の規模・形態であり，SI 741と関係した土坑，たとえば，塵芥穴（ごみあな）とも想定される。時期はＩ期である。

SB 570（図版６・33・166）

Ｃ10区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。桁行４間 (10.2ｍ)，梁間２間 (6.9～7.0ｍ)，面積71㎡の大型建物である。長軸の方向はＮ-64°-Ｅで，西側１間の柱廻りに間仕切りと考えられる２つの柱穴がある。この西側１間の柱間寸法は2.7～2.8ｍで，ほかの桁行は約2.5ｍである。柱掘形は円形で径１ｍをこえるものもある。深さは50cm～１ｍである。間仕切りと考えられる柱掘形はこれよりかなり小さく，深さも25～40cmで浅い。掘形埋土はよくしまった褐色系の砂である。埋土より土器少量が出土している。このなか

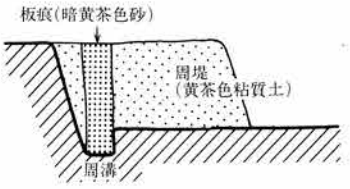
に小泊窯須恵器無台杯の小破片が含まれており，時期はⅣ$_1$期以降と考えられる。

SB 770（図版 9 ・33）

C11区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。方形周溝遺構ＳＸ795を切る。長軸はＮ-73°-Ｅである。桁行３間（6.3～6.4ｍ），梁間２間（4.6～4.8ｍ），面積29.6㎡である。束柱はない。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘形は径50～80cmの円形で，深さ30～80cmである。掘形埋土はよくしまった茶褐色砂で，土器片若干が出土している。中央がくぼんだ須恵器の壺のつまみがあり，時期はⅢ$_1$期以降と考えられる。

ＳＩ 1000　付ＳＫ701（図版 9 ・34・161・162）

D10･11区にある奈良･平安時代の大型竪穴住居。古墳時代の竪穴住居ＳＩ 1010を切る。このほか調査時には確認されなかったが，奈良・平安時代の竪穴住居が存在した可能性もある。それはことなった時期の土器が比較的まとまって出土していること，床面に周溝状の小溝が存在することから推定されるものであるが，新しい時期の土器は上層出土に多いことから，１棟の竪穴住居と考えておく。主軸はＮ-80°-Ｅで，カマドは東辺にある。北西コーナーに撹乱坑がある。主軸方向が長く，9.0ｍ，ほかは7.6ｍで，比較的明瞭な長方形を呈する。面積68.4㎡は最大規模である。深さは約40cm。この住居は壁縁辺がきわめて特殊な構造をもつ。すなわち，各辺の壁際に幅60～90cm，高さ約40cmの黄茶色粘質土がとりまいており，これと壁の間に周溝が存在する（第32図）。周溝部分の埋土は黄茶色粘質土とはことなり，これよりしまりのない暗い色調の砂層である。このことより，周溝部分に「板材」などが存在し，これを内側から粘質土でおさえたことが想定される。粘質土は住居の内側に存在する「周堤」ともいえる施設である。したがって，住居の床面は前述の大きさよりひとまわり小さくなる。このような「周堤」が確認されたのはＳＩ 1000の１棟のみである。西辺ではこの「周堤」の部分の地山面（削平面）は床面レベルより約10cm低くなる。柱穴は数多く存在する。位置などからみて，確実にＳＩ 1000の柱穴といえるものがある。ひとつは，壁際にある柱穴である。これらは径50cmほどある比較的大きなもので，深さは40cm以上ある。北・南辺の柱穴の間隔は東西両端が約１ｍと短く，中央は約３ｍずつである。東西両端の柱穴の間隔は「周堤」の幅にほぼ一致し，西辺には「周堤」の内側に当たる位置にも２つの柱穴が存在する。また北辺も周溝から50～70cmの位置に柱穴がならぶ。これらの柱穴は深さ40cm以下であり壁際のものより小型で浅い。北辺と西辺の「周堤」の内側に柱が存在したと見られる。床面中央から西側に周溝状のカギ形の小さな溝があり，この南西部分のみ床面が約10cmほど低くなっていた。この周溝上にもピットがある。このカギ状の小溝の方向はＳＩ 1000とほぼ同じである。カマドは2.5×2.5ｍ，高さ約50cm（最高部80cm）で北側を撹乱される。カマドの芯と考えられる土器はなかったが，カマド後方の粘質土のなかから，須恵器無台杯（217～219），土師器甕（243），土管（1･2）が一括出土した。カマドの後方の住居以外には径約２ｍ，約40cmの円形の土坑（ＳＫ701）がある。埋土は粘質土を主としており，ＳＩ 1000の「周堤」の土と類似する。ＳＩ 1000はⅡ期と考えられる。



第32図　ＳＩ 1000周堤模式図

ＳＩ 1010（図版 9 ・34・161）

D10区にある古墳時代の竪穴住居で，ＳＩ 1000に切られる。約半分が失われている。主軸はＮ-39°-Ｅで，一辺の長さは5.5ｍである。おそらく隅丸方形の平面形であろう。深さは約20cmで浅い。南西辺に深さ40cmの土坑がある。柱穴・周溝はなく出土土器は数個体である。

ＳＩ 1315（図版11・35・163）

A・B12区にある奈良・平安時代の竪穴住居。主軸はN-63°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。主軸方向が長く，7.1m，ほかは5.6mで，明確な長方形を呈する。面積は39.8m²で，比較的大型である。傾斜地にあり，深さは南北でことなる。南辺で約45cm，北辺で約20cmである。上部はかなり削平されていると考えられる。周溝はない。いくつかはピットのうち深さ20cm以上のものは柱穴と考えられ，その配置は比較的規則的である。すなわち，各辺ともコーナーと，そのほぼ中間に，それぞれ3つずつある。また，東西辺の中央の柱を結ぶ線上のやや北側に2つある。これらのほかは浅く，柱穴でない可能性がある。カマドとその周辺の粘質土は北東コーナー2.5×2mほどの広い範囲に広がる。このうち東辺寄りの1×0.8mの範囲がよく焼けている。全体に下層は砂で，上層が粘質土である。カマド内から土師器長甕（280）と鍋（284）が出土した。埋土最上層にわずかに，「黒褐色砂層」がある。出土土器は10数個体である。時期はⅠ期の新しい段階と考えられる。

SI 1320（図版11・35・163）

B13区の調査区南東端部の湿地にのぞむところにある，奈良・平安時代の竪穴住居。古墳時代の溝状の土坑SK1411を切る。主軸はN-79°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。主軸方向がわずかに短く3.8m，ほかは4.0mで平面形はほぼ正方形である。面積15.2m²。かなりの傾斜地にあり，深さはかなり異なる。北辺～東辺は20cm，南辺～西辺は45～50cmである。周溝は西辺をのぞいて存在するが，途切れる部分が多い。北辺に柱穴かと考えられるピットが3つあるが，明確ではない。カマドは1.8×1.8m，高さ約25cmで，下層に砂，上層に粘質土がある。カマド内より土師器が出土している。埋土に「黒褐色砂層」はないが，削平された可能性が強い。出土土器量は多く，50個体以上を数える。時期はⅣ$_1$期と考えられる。

SB 1450（図版11・35・164）

B・C，12・13区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。桁行3間（8.8m），梁間2間（4.5m）で，束柱はない。面積は39.6m²。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。長軸方向はN-66°-Wである。柱掘形は円形ないしは隅丸方形で60～80cmの大きさである。東側は地形が低くなり，柱掘形の深さはこちらが深くなる。深さ20～60cmである。詳細な時期は不明である。

SB 604（図版11・35）

A・B，13・14区にある掘立柱建物。長軸方向はほぼ南北に一致し，南北2間（3.5m），東西2間（3.1～3.2m）の総柱建物である。やや平面形は歪みがある。面積は11m²である。柱掘形は径約40cmの円形，深さ20～55cmである。詳細な時期は不明である。

SI 1124（図版9・36・165）

C11・12区にある古墳時代の大型の竪穴住居。平面形は隅丸の長方形で，長軸6.9m，短軸5.8m，面積40m²である。各辺は直線でなく，外側にかなり張り出す。短軸方向がほぼ南北に一致する。北から南にゆるく傾斜する位置にあり深さは北側約45cm，南側約25cmである。床面のピットは深さ約20cm前後で，規則的な配置でもなく，柱穴は明確でない。南辺には周溝状の小さな溝（深さ約10cm）がある。カマドはない。埋土最上層のみに奈良・平安時代の土師器，須恵器を含み，住居跡廃絶後長期にわたって完全に埋没しなかったと考えられる。それ以外の層からは土師器が20個体以上出土している。小型の器種がなく住居跡のなかでは最も新しい。

SB 1370（図版11・36・164）

C12区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。この付近には掘立柱建物がかなり集中する。2間（3.5～3.6m）×2間（3.4～3.6m）の総柱建物で，平面プランはやや歪んでいる。主軸方向はN-27°-Wで，面積12.4m²

である。柱掘形は径40～60cmの円形で，深さ20～70cmである。かなりの傾斜地にある。掘形埋土から土師器片を中心に出土している。小泊窯須恵器は含まない。

SB 1162（図版９・36）

C・D，12・13区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。SI 1165と重複するが，柱穴の切り合いはない。２間（3.4～3.5ｍ）×２間（3.3～3.6ｍ）の総柱建物で，平面プランはやや歪んでいる。面積11.9㎡，主軸方向はＮ-35°-Ｗである。柱掘形は径40～70cmの円形で，深さは15～55cmである。かなりの傾斜地にあり，南東コーナーの柱穴は削平されている。掘形埋土から土器片が出土している。小泊窯須恵器は含まない。

SB 1165（図版９・36）

C12・13区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。２間（3.3ｍ）×２間（3.2～3.3ｍ）の総柱建物である。面積は10.9㎡。長軸方向はＮ-28°-Ｗである。平面プランはほぼ正方形を呈する。柱掘形は径50～70cmの円形で，深さ25～50cmである。かなりの傾斜地にある。掘形埋土から土器片が出土している。小泊窯須恵器は含まない。

SB 1535（図版９・36）

C13区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。SB1165と重複するが，柱穴の切り合いはない。主軸はＮ-22°-Ｅで，東西２間（3.8～3.9ｍ），南北２間（3.6～3.7ｍ），面積14㎡の総柱建物である。柱掘形は径40～50cmの円形で，深さ25～35cmである。掘形埋土から土師器片が若干出土している。

SI 752（図版９・37・159）

D11区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 753・SB 790に切られる。主軸はＮ-87°-Ｗで，東辺北寄りにカマドがある。主軸方向がやや長く，5.7ｍ，ほかは5.0ｍ，面積28.5㎡である。深さは40～50cmで，東辺南側にSI 753が重複する。周溝は各辺ともにめぐる。柱穴は周溝に重複して存在する。長軸の北辺・南辺にはコーナーとその中間にそれぞれ１本ずつあり，東辺・西辺にはコーナーとその間にそれぞれ３本ずつある。コーナーと東辺・西辺の柱穴は比較的深い。カマドの右側前面にはカマドから連続する粘質土がある。この部分は焼けておらず，カマドに関連した何らかの施設と考えられる。これを除くカマドの範囲は１×2.2ｍ，高さ約50cmで，住居の外側に張り出す。カマド内はよく焼けた粘質土がある。東方の住居外の張り出す部分の底面は浅くくぼむが，焼けてはおらず，煙道かどうかは確認できない。カマド内からは土師器小甕（202）が出土したが，大きな甕は見られない。埋土には「黒褐色砂層」はない。土器の出土個体数は20個体以上である。時期はⅠ期である。

SI 753（図版９・37）

D11・12区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 752を切り，SB 790に切られる。主軸はＮ-69°-Ｗで，東辺北寄りにカマドがある。主軸方向が長く，5.2ｍ，ほかは4.2ｍ，面積21.8㎡である。北から南に傾斜するところに位置し，深さは北辺が約35cm，南東側コーナー付近は約15cmである。西辺から南辺には周溝がある。SI 752とSB 790の柱穴が床面にあるが，SI 753の柱穴は明確ではない。カマドは1.8×1.4ｍ，高さ約25cmで，カマド内から土師器長甕（783）が出土した。埋土の最上層に「黒褐色砂層」がある。出土土器は10数個体である。鉄器（48）も出土している。時期はⅣ$_2$期である。

SB 790（図版９・37）

D11・12区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。SI 752・SI 753をともに切る。桁行４間（11.1～11.3ｍ），梁間２間（5.3～5.6ｍ）で，長軸はほぼ東西方向に一致する。面積61㎡で比較的大型であり束柱はない。柱間寸法は東側１間だけが短く（2.3ｍ），ほかはほぼ等間（約３ｍ）となる。柱掘形は径70～100cmの円形，

深さ50～80cmで，比較的大きい。掘形埋土は黄茶色粘質土で，よくしまる。掘形埋土から比較的多くの土器が出土した。小泊窯須恵器を多く含む。この建物の北側にあるSK711は出土土器がほぼ同時期でこの建物と関係する。なお，建物の半分以上が竪穴住居と重複するが，重複しない部分で特に北辺部は地山面が10cmほど掘り込まれていた。その部分は建物の範囲とほぼ一致することから，若干の傾斜地を平坦に削平し，建物を建てたものと推定される。そう考えてよければ，この建物は床張り（高床）でなく，土間の平地式住居と考えられる。時期はIV_2期以降である。

SB 1161（図版9・38・165）

C・D12区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。ほぼ同じ規模の掘立柱建物SB 1199が東側にある。桁行3間（6.0～6.2m），梁間2間（4.3m）で，長軸はN-79°-Eである。面積は26.2m²である。束柱はない。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘形は50～90cmの円形で，深さ25～65cmである。北から南へむかって地形が傾斜する。掘形埋土より土器片若干が出土している。須恵器大甕の破片があり内面に平行文あて具痕が残る。これは小泊窯須恵器で，IV_1期以降に比定される。

SB 730（図版9・38）

D12区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。SB 1199と重複するが，柱穴の切り合い関係はない。この建物周辺には柱穴が比較的多く集中している。桁行3間（6.0m），梁間2間（5.2～5.4m）で，長軸はN-45°-Wである。面積は31.8m²である。束柱はない。柱掘形は径70～100cm，深さ50～80cmの円形で，比較的大きい。掘形埋土は茶褐色土で粘質土を若干含む。埋土より土器片が比較的出土している。小泊窯産のなかでも新しい様相の無台杯を含む。IV_2期以降と考えられる。

SB 1199（図版9・38）

D12区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。SB 730と重複するが，柱穴の切り合い関係はない。西側にほぼ同じ規模のSB 1161が同一方向にならぶ。桁行3間（6.1m），梁間2間（4.2～4.3m），長軸方向はN-68°-Eである。面積は25.9m²。北から南にむかって傾斜する地形にあり，南東側は削平を受け，その隅の柱は存在しない。柱掘形は約30～50cmの円形である。埋土より土器片が出土しているが，小泊窯須恵器は含まない。詳細な時期は不明であるが，SB 1161と近い時期であろう。

SI 115（図版9・39・167）

E12区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，掘立柱建物SB 110に切られる。主軸はN-41°-Wで，カマドは南東辺南側コーナー寄りにある。主軸方向が若干長く，6.4m，ほかは5.7m，面積は36.5m²である。比較的大きい。深さは40～50cmである。北から南に向って若干傾斜する地形に位置する。カマドのある南東辺をのぞく三辺には周溝がある。柱穴は床面にある大きな4本の柱穴と，周壁にある柱穴とがあり，それぞれの配置が明瞭に把握される。主柱穴は径70～100cm，深さ70～90cmの円形掘形で，かなり大きい。掘形埋土は茶褐色土で，よくしまる。このうち東側の柱穴埋土から土師器甕（34）が一括出土した。壁柱穴は各コーナーに1つずつと，カマドのある南東辺をのぞく辺のほぼ中央に1つずつある。このうち各コーナーの柱穴は深さ30cm前後で，掘形は垂直ではなく壁から外側にむかって斜めに入っている。多くの奈良・平安時代の竪穴住居のなかで，主柱穴がこれだけの規模をもつ例はごく少なく，壁柱穴の掘形が斜めになっている例は当住居のみである。カマドは1.9×1.8m，高さ約65cmである。最上層はしまりのない褐色砂で，その上にはそれが焼けた層，そして，焼けた粘質土と焼けない粘質土がのる。カマド内から土師器甕（29・35）が出土しているが，明確に芯として使用されていた出土状況ではない。埋土は褐色砂層を主体とし，「黒褐色砂層」はみられない。埋土上層より鉄斧（11），カマドの左側の壁際より鉄鎌（1）が出土し

ている。土器は20個体以上ある。出土土器からみて，Ⅰ期と考えられる。なお，古式土師器も一定量出土しており，近くに古墳時代の遺構が存在した可能性が考えられる。

SB 110（図版 9 ・39・166）

E11・12区にある奈良・平安時代の掘立柱建物で，SI 115を切る。この周辺には柱穴がかなり多く，このほかにも建物が存在する可能性が強い。桁行 3 間（6.5～6.6m），梁間 2 間（4.5～4.7m）の総柱建物である。面積は30.6m²。長軸はN-75°-Eである。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘形は径50～70cmの円形で，深さ35～70cmである。土器片が比較的出土しているが，小泊窯須恵器は含まない。

SB 109（図版 7 ・40）

E10・11区にある奈良・平安時代の掘立柱建物。桁行 3 間（5.9m），梁間 2 間（4.5～4.6m）で，面積は26.6m²。長軸はN-72°-Eである。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘形は径50～90cm，深さ25～60cmである。掘形埋土は茶褐色砂で，非ロクロ土師器の底部片が 1 点出土している。

SI 1461（図版10・40・168）

F13区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 1471・SI 1460に切られる。主軸はN-85°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。主軸方向がやや長く，5.5m，ほかは5.0mである。面積は27.5m²。北から南にかなり傾斜しており，深さは北辺が約40cm，南辺が約10cmで，上部は削平されていると考えられる。周溝はない。柱穴と考えられるピットは壁際にある。北辺の両端コーナーとその中間，南辺から約 1 m北側とその中間にならぶ。主柱穴はない。カマドは1.2×2.3m，高さ約40cmで，住居東側の外方に幅50～90cmでのびる。こののびる部分はまったく焼けておらず，炭もなく，煙道かどうかはわからない。カマドの前部にかなりよく焼けた粘質土がある。カマド内から袖の芯と考えられる土師器長甕（259・260）が出土した。このほかカマド付近から，土器が比較的まとまって出土した。また鉄製の刀子（36）もカマド内出土である。埋土には「黒褐色砂層」はない。出土土器の個体数は約10個体である。時期はⅠ期と考えられる。

SI 1471（図版10・40）

F13区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 1461・SI 1460と重複する。SI 1461との切り合い関係は確認できなかったが，土器からみて，SI 1471のほうが新しい。SI 1460は当住居を切る。主軸はN-88°-Eで，東辺北寄りにカマドがある。主軸方向の東西は4.2m，南北は不明。深さは約40cmである。北辺壁にある 2 つのピットが柱穴と考えられる。カマドは1.7×1.4m，高さ約30cmである。カマド内から須恵器有台杯（971）が一括出土した。埋土には「黒褐色砂層」がなく，出土土器は少量である。時期はⅡ期と考えられる。

SI 1460（図版10・40・168）

F13区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，SI 1461・1471・1480の 3 棟の住居を切る。重複が多いことと調査区に道路がかかっていたため，一時期に調査ができず，プランなど不明なところがある。主軸はN-87°-Wで，カマドは東辺北寄りにある。主軸方向が長く，4.3m，ほかは3.3mで，面積は14.2m²である。深さは50～70cmで，深い。住居が重複しており，柱穴は明確でないが，南西側コーナーにあるピットは，他のコーナーにピットが，みられないことから，この住居にともなうものではないと思われる。北辺と西辺には比較的幅の広い周溝がある。カマドの遺存状況はよくない。土師器長甕（808）がカマド内から出土している。埋土上層は「黒褐色砂層」である。出土土器は10数個体あるが，多くは上層出土である。古墳時代のSI 1480と切り合っており，古式土師器が多く出土している。時期は$Ⅳ_2$期である。

SI 1480（図版10・40）

F13区にある古墳時代の竪穴住居で，SI 1460に切られる。大半がSI 1460によって切られているうえ，大きな撹乱坑が南辺にあり，遺存しているのは西辺部の一部のみである。主軸はN-69°-Wで，カマドはないと考えられる。南北長は4m以下であろう。深さは約40cmである。柱穴と考えられるピットが2つある。埋土に「黒褐色砂層」はない。出土土器は20個体以上ある。

SI 1181（図版10・41）

F11区の調査区際にある奈良・平安時代の竪穴住居と考えられるが，遺構の南西側コーナーとみられる部分が検出されたにすぎない。主軸はN-26°-Wである。深さは約40cmで，上層に「黒褐色砂層」がある。埋土2層目から須恵器甕1点が出土しているほかは，土器は少ない。時期はIII期と推定される。

SI 1169（図版10・41・168）

F11区の調査区際にある奈良・平安時代の竪穴住居。北側半分以上が調査区外にのびる。主軸はN-14°-Wで，カマドの位置は南辺東端と考えられる。規模は不明であるが，西辺とカマドの位置からみて，小型の住居と推定される。西辺に深さ約35cmのピットが3つあり，柱穴の可能性がある。周溝はない。カマド内より，土師器小甕（987）が倒立状態で検出された。埋土下層に黒褐色砂層がある。出土土器は少量である。時期はI期であろう。

SI 1166（図版10・41・168）

F12区の調査区端にある奈良・平安時代の竪穴住居。北東側約1/4が調査区外にのびており，SI 1167に切られ，古墳時代のSI 1168をわずかに切る。カマドは調査区外にあると考えられる。主軸はN-81°-Eである。主軸方向の東西がやや長く7.4m，ほかは6.4mで，面積は47.4m²の大型住居である。深さは25～30cmで，上部は削平されていると考えられる。北辺と南東コーナーに周溝がある。柱穴には床面中央の主柱穴ははっきりしない。埋土に「黒褐色砂層」はない。出土土器は少なく，全体で数個体である。床面直上からは帯金具の丸鞆（72）と刺金（66）が出土した。住居が大型であることを勘案すると，帯金具はこの住居に伴うものと考えられる。時期はI～II_1期と考えられる。

SI 1167（図版10・41・120・168）

F12区にある奈良・平安時代の竪穴住居で，全体がこれより古い竪穴住居SI 1166を切る。主軸はN-77°-Eで，カマドは東辺北寄りにある。主軸方向がやや長く，3.6m，ほかは3.0mで，面積は10.8m²の比較的小型の住居である。深さは約50cmである。ピットはSI 1166にともなう柱穴が多いと考えられ，この住居の柱穴は明確でない。周溝はない。カマドは1.2×2.1m，高さ約30cmで，住居外側へのびる。カマド上面から土師器甕（922）が出土したが，芯として使用されたものはない。埋土は下層をのぞいて，「黒褐色砂層」とそれに近いものである。出土土器は50個体以上でかなり多いが，土師器にはSI 1166にともなう古いものが目立つ。土器からみて，奈良・平安時代の最も新しい時期のものである。IV_2期と考えられる。

SI 1168（図版10・41）

F12区にある古墳時代の竪穴住居。SI 1166に切られる。方向はほぼ方位に一致する。一辺2.9～3.1mの正方形にちかい平面型で，面積9m²の小型住居である。深さは20cm以下で，上部は削平されていると考えられる。カマド・周溝はない。柱穴も明確でない。出土土器は約20個体である。

SK 311（図版3・42）

A4（5）区の北西にある縄文時代の土坑。南東部を撹乱されている。平面形は不整の楕円形と推定され，短軸1.5m，長軸1.7mほどである。深さは約55cm。埋土の上層は黒褐色砂，下層は茶褐色砂で，ともによくしまる。埋土と形状が共通した土坑がいくつか散在している。

SK 1398（図版11・42）

C12（16）区にある縄文時代中期の土坑。平面形が楕円形で，長軸1.6m，短軸0.8m，深さ約40cmである。底部の一部が深くなる。埋土は中層に炭を含む層があり，色調は全体に灰褐色系の砂層である。灰色を呈するのは，レベルが低く，地下水位に近いことによるものであろう。よくしまった埋土である。縄文土器若干が出土しており，1点（図版44-2）は中期のものと確認される。

F7区ピット6（図版42）

F7区にある時期不明の土坑。平面楕円形で，長軸1.9m，短軸1.6m，深さ60cmである。断面すり鉢状で，埋土下層は「黒褐色砂層」とみられ，その上は灰褐色砂層である。これらの層は通常，奈良・平安時代の竪穴住居にみられる「黒褐色砂層」と共通している。出土土器はないが，奈良・平安時代以降と考えられる。

SK 103（図版10・42）

E12にある奈良・平安時代の土坑。平面形は径約2mの円形，深さ約70cmの大型である埋土には「黒褐色砂層」はない。

SK 102・SK 106（図版10・42）

E11（25）区にある奈良・平安時代の土坑で，SK 106に切られる。平面形は径2～2.2mの円形で，深さは約1mである。埋土には「黒褐色砂層」はない。土器は10個体ほど出土している。近くの竪穴住居の塵芥穴と考えられる。SK 106はSK 102の南側にあり，これを切る浅い土坑である。大きく撹乱を受けている。時期は奈良・平安時代である。

SK 1337（図版11・42・164）

B12区にある溝状の大きな遺構。時期は古墳時代。主軸はほぼ南北で，長さ6.7m，幅1.8～0.8m，深さ60～50cmである。北側が幅広で，細い南側は断面「V」字状となる。下層はまじりの少ない黄茶色砂層で，上層に褐色系の土層がある。土器は甕（図版54-135）のほか10個体以上ある。性格は不明である。

SK 108（図版10・42）

E11（20）区にある古墳時代の土坑。平面楕円形で，長軸2.2m，短軸1.7m，深さ約30cmの浅い土坑である。古式土師器数個体が出土している。この周辺から古式土師器が比較的まとまって出土しており，この時期の竪穴住居も存在した可能性がある。

SK 113（図版10・42・163）

E12（5）区にある奈良・平安時代の土坑。径約3mの平面形で，深さは1.2m。平面，深さとも大きい。「黒褐色砂層」はない。出土土器は多くはないが，8世紀中葉以前の時期と考えられる。

SK 621（図版8・42）

B11（14）区にある奈良・平安時代の土坑。SI 610の東側に近接する。径2.8～3mの円形の平面形で，深さ約1mである。埋土に「黒褐色砂層」はなく，出土土器は8世紀前半～中葉の時期である。SI 610などの住居にともなう土坑と考えられる。

SK 1022（図版9・42・155・159）

C11（5）区にある奈良・平安時代の土坑で，古墳時代の方形周溝遺構SX795を切る。径3.2mの円形の平面形で，深さ1.7mの大型土坑である。最下層に暗褐色砂層があり，その上はこれよりうすい色調の層がレンズ状に埋積する。上層を中心にして土器が多く出土した。個体数は10個体以上である。同時期の竪穴住居にともなう土坑と考えられ，その候補としてSI 741・SI 1000などが考えられる。なお，SI 741出

土の横瓶と同一個体の破片が最上層から出土している。時期はⅠ～Ⅱ$_1$期と考えられる。

SX 795（図版9・43・159）

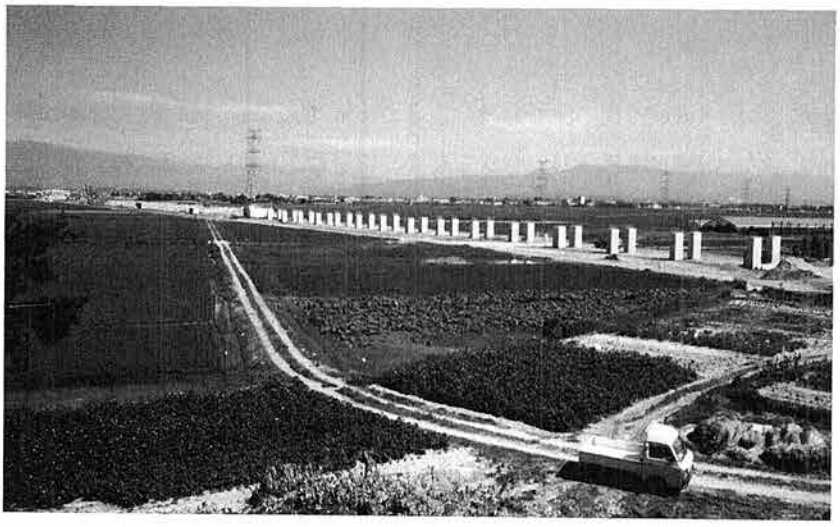
C・D11区にある性格不明の方形周溝遺構であり，時期は古墳時代である。主軸はN-19°-Wで，方形にめぐる溝の外側は，南北約6m，東西約7mである。溝は幅が広く，浅い。幅は北辺1.7m，南辺2.8m，西辺2.1m，東辺2.2m，深さは北辺が深く25cm，南辺は数cmと浅い。溝に囲まれた中央の高まりは1.9×2.9mの長方形を呈する。溝の南東側はさらに浅く外側に張り出しがみられる。出土土器は少ないが，古墳時代のものに限られる。

SK 1373（図版11・36・165）

C13（8）区にある縄文晩期～弥生時代の土坑。SB 1535柱穴に切られる。南東側の湿地に近く，底面は湧水点に達している。長楕円形の平面形で，長軸2.1m，短軸0.9m，深さ約25cmである。埋土は上下2層で，上層は暗灰褐色砂層，下層は黄褐色砂層で，上層と下層の境に深鉢（図版44-7）が一括出土した。墓坑の可能性がある。

SK 32（図版7）

E9（2・7）区にある奈良・平安時代の土坑の平面形は径約1.5mの円形で，深さは約80cm，断面はすり鉢状を呈する。埋土は上下2層で，上層はよくしまった褐色砂質土で，土器を比較的多く含む。下層は暗褐色砂層である。Ⅱ期頃かと考えられる。



砂丘の内陸側の水田とバイパスの橋脚（昭和62年7月）

遺跡が立地する砂丘の内陸側（南西側）は現在一面の水田となっている。しかし，ここは17世紀の加治川の水路つけかえにより，はじめて水田化されたところで，かつては沼地であった。昭和41年（1966）の7.17水害では，この一帯に加治川の水が湛水し，大きな被害をもたらした。バイパスがこの部分だけ盛土ではなく，橋脚になっているのは，万一の場合に，水をさえぎることのないようにするためである。ここがいかに低いかをよく示すが，ひいては古代の村を考えるとき，重要な示唆を与える（第Ⅶ章4参照）。

第Ⅴ章　出土遺物

1　縄文・弥生時代

A　縄文土器（図版44～46・169・170）

出土量はコンテナ２箱程度であるが，時期は縄文中期～晩期にわたり，晩期の土器が最も多い。

縄文中期の土器（１～３・10～15）

１は深鉢胴部で，最大径13.5cmを測る。器面全体に木目状撚糸文を施文する。この木目状撚糸文は山内清男氏の分類〔山内1979〕で単軸絡条体第1A類－３にあたる。Rの縄を軸中央の孔の左側は右巻き，右側は左巻きして縦位に施文する。中期前葉の所産と考えられる。木目状撚糸文はこの１点のみである。橙褐色～淡褐色を呈し，焼成堅致。C11（17）区II″層（縄文土器包含層）出土。

10は深鉢口縁部片である。口縁端部が剝離しているが，ほぼ現形で口縁となる。半截竹管による隆線を横位に数条引き，その間に斜格子文を施文する。口縁と頸部の主隆線上にはC字状の連続爪形文を施す。斜格子文は，右下がりに半截竹管で隆線を引いた後，左下がりに沈線を引く。中期初頭，北陸の新保式によくみられ，広く分布し，県内では所謂剣野E式に比定される。淡褐色を呈し，焼成堅致。E８（24）区出土。

11は深鉢口縁部片である。隆起線に沿ってLRの縄を押圧している。口縁部文様帯を三角形や弧状に隆起線で区画し，それに沿って押圧縄文を施す大木7b式の土器である。淡橙色を呈す。出土地点不明。

12は深鉢頸部片である。頸部の横位隆線と胴部へ垂下する隆線の交点に突起状に付けられた部分である。文様は半截竹管で施文しており，中期前葉，北陸の新崎式の土器である。橙褐色を呈し，焼成堅致。B13・14区Ⅰ・II層出土。13は深鉢口縁部片である。横位隆線間の無文部に半截竹管で連続刺突を施文する。12同様新崎式と思われる。灰白色を呈し，焼成悪い。C13（11）区II″層出土。

２は台付土器の器部で，口径20cmを測る。口縁下に突出する袋状環状突起と袋状突起を交互に付し，主隆起線上にハの字状の連続刻み目を施す。器面全体に隆起線で文様を描く土器であるが，全体の文様構成は不明である。新発田市石田遺跡〔渡辺・田中耕1980〕に文様の類似したものがあり，大木8a式併行期の火炎土器様式の土器である。茶褐色を呈し，焼成堅致。SI 733・SK 1398出土。

３は深鉢口縁部で，口径26cmを測る。緩い波状口縁で，２本の隆線が巡り，波状部に丸く突帯を貼る。胴部にLR縄文を施す。中期後半の所産であろう。ほかに胴部片が数点出土している。暗茶褐色を呈し，焼成堅致。SI７・SI５・A３区II・III層・A４区II層出土。14も同様の土器である。C９（21）区II″層出土。15は頸部でくびれ，胴の張る深鉢頸部片である。浅い曲沈線で区画し，区画内にRL縄文を施文する。区画外はみがいている。中期後半大木９式期の土器である。淡褐色を呈し，焼成堅致。C11（12）区II″層出土。

縄文後期の土器（16～19）

16は鉢形かと思われる口縁部片である。口縁下に無文帯を有し，LR縄文施文後、横位の平行沈線を数条引く。口縁無文帯と内面はていねいにみがく。淡黄茶褐色を呈し，焼成堅致。SI11下層出土。17は頸部でくびれ，胴の張る深鉢胴部片である。沈線で区画した中に細かなLR縄文を施文し，沈線に沿ってD字

状の刺突を巡らす。小千谷市三仏生遺跡〔寺村1957〕第4類土器に類例がみられるが，円形刺突である点が17と相違する。茶褐色を呈し，焼成堅致。F13区I層出土。18は胴の張る深鉢胴上部片である。RL縄文を施文後，矢羽状沈線文を施文する。淡茶褐色を呈し，E13区II層出土。16～18は後期中葉加曽利B式期の土器である。

19は口縁に小突起を配す深鉢口縁部片である。全面にLR縄文を施文し，口縁下に浅くつぶれた横位沈線を1条引く。西蒲原郡分水町幕島遺跡〔上原1963〕b類土器に類例がみられ，後期後半の所産と思われる。灰白色を呈し，焼成悪い。口縁外面に炭化物付着。E13区II層出土。

縄文晩期の土器（4～7・20～39）

本遺跡の縄文土器中で最も遺物量が多く，器種には鉢形土器・甕形土器・壷形土器・台付土器・深鉢形土器がある。おおむね縄文晩期後半・大洞A式期・A'式期に属す。

鉢形土器（4・20～26）　20～22は工字文のある土器である。20は直線的に開き，口径21cmを測る。口縁には小突起を配し，口縁部文様帯には連続三角文を施す。2条の隆線で分けられた体部文様帯には二重楕円の工字文を施文する。同一個体が図示したほかに数点出土している。淡茶褐色～黒灰色を呈し，内外面全体に炭化物が付着する。SI850出土。21は体部文様に工字文あるいは匹字文的な文様を施し，その下にLR縄文を施文する。外面には赤色塗彩の上に炭化物が薄い皮膜状に付着する。焼成は良く，C13区I層出土。22は体部文様に角張った工字文を施し，この下にLR縄文を施文する。灰白色～黒褐色を呈し，外面に炭化物が付着する。E13区II層出土。20・21は豊栄市鳥屋遺跡〔石川ほか1988〕の浅鉢形土器A2類に類似し，大洞A式期のものである。22も同期のものであろう。

4・23～26は口縁部文様に横位沈線を引き，その下に縄文を施文する土器である。縄文は全てLRであった。口縁のある4・23・24は，口縁内面に1条の横位沈線を引く。4は緩く湾曲し，口径23cmを測る。外面沈線部には赤色塗彩し，内面上部から外面全体に炭化物が付着する。C13（2）区II層出土。23は直線的に開くものである。灰褐色を呈し，外面に炭化物が付着する。SI1460出土。24は体部が緩く内湾し，口縁が直立する。淡茶褐色を呈し，E13区II層出土。25・26は口縁を欠失する。25は隆線の左側が工字文状になる可能性がある。沈線下にLR縄文を羽状に施文する。灰褐色を呈し，外面上方に炭化物が付着する。E13区II層出土。26は沈線下にほかより節の大きな縄文を施文する。灰白色を呈し，E13区II層出土。南蒲原郡栄町長畑遺跡〔戸根・本間1975〕の小形鉢形土器第2類土器は口縁部に横位沈線を数条引くもので類似する。しかし，4・23～26も長畑遺跡の土器も小破片であり，全体の文様が横位沈線だけとは断定できず，工字文などになる可能性が強い。文様帯の幅が狭まり，口縁部に集中する点が鳥屋遺跡の浅鉢形土器C類・H類と共通しており，これらと同期の大洞A式期の中の新しい時期と考えられる。

甕形土器（5・7・27・28）　5は口縁を欠失するが，内面上方に横位沈線があり，口縁近くまで残存する。最大径14cmを測る。頸部は無文で，胴上部に工字文を施し，その下にLR縄文を施文する。灰褐色を呈し，胴上部に炭化物が付着する。E13区II層出土。27は頸部に横位沈線を引き，胴上部に工字文を施文する。ほかに同一個体が数点ある。淡茶褐色を呈し，胴上部内面に炭化物が付着する。SI850出土。28は口縁に小突起を配する土器で，口縁部に3条の沈線を引く。灰白色を呈し，E13区II層出土。5・27はともに鳥屋遺跡の甕形土器A類に類似する小形の甕で，大洞A式期のものである。28も大略同期であろう。

7は口径33.5cm，推定高41.5cmを測る大形の甕である。口縁には小突起を配す。口縁部には3条の横位の平行沈線を引き，頸部は無文で，横にみがいている。胴部には5本1組の条線を縦位に引き，その後胴上部に2条の横位平行沈線を引く。橙褐色～淡茶褐色を呈する。SK1373から横倒しの状態で出土。鳥屋遺

跡の甕形土器D３類に類似する土器で，本遺跡では数少ない大洞A'式期に該当するものである。

壺形土器（29）　29は頸部は無文，肩部にはR縄文を施文し，その後頸部とのさかいに横位沈線を引く。形状・法量は鳥屋遺跡３号土坑出土の甕形土器に類似するかと思われる。大洞A'期の土器であろうか。黒褐色～淡茶褐色を呈し、焼成堅致である。D13区Ⅰ層出土。

台付土器（37～39）　台付土器の脚部は３点出土している。37は頸部径６cmを測る。体部下半に工字文を施文し，脚部にRL縄文を施す。38は底径10cm，脚部にLR縄文を斜位に施文する。39は底径８cm，脚部にLR縄文を施文する。37～39はともに淡褐色を呈し，E13区Ⅱ層出土。37は大洞A式期の土器であり，38・39も同期のものと思われる。

深鉢形土器（６・30～33）　６は口径12cmの小型な土器である。胴部に４本１組の条線を縦位に引いた後，口縁部に３本の横位沈線を引く。沈線下はややくびれ，甕形土器の可能性もある。SI 850出土。30～33は口縁部に縄文を施文後，横位沈線を引くものである。30はLR縄文を施文する。淡橙褐色を呈し，C13区Ⅰ層出土。31はLR縄文を施文する。灰茶褐色を呈し，D７・８区出土。32はLRL縄文を施文する。灰白色を呈し，SI401撹乱出土。33は沈線がほかより細い。淡橙褐色を呈し，外面に炭化物が付着する。E13区Ⅱ層出土。これらは晩期後半の所産と考えられる。図版169－ａ・ｂも同様のもので，口縁を欠失する。

不明土器（34～36）　34は口縁を横に撫でて浅い沈線状にし，その下に３条の横位沈線を引く。器形は不明であるが，晩期後半の土器かと思われる。淡褐色を呈し，焼成は悪い。Ｂ２（10）区出土。35・36は同一個体であり，35は沈線に沿って，36は沈線の上方に連続刺突する。器形・時期ともに判然としないが，晩期後半の土器かと思われる。E13区Ⅱ層出土。

その他の縄文土器（40～49）

主に地文に縄文を施文するものである。40は器厚３㎜と薄い土器で，LR縄文を施文し，浅鉢かと思われる。淡黄褐色を呈し，SK621出土。41は口縁が直立し，全体にLR縄文を施文す。黒灰色を呈し，SI360出土。42はLR縄文施文後，口縁に浅い沈線を引く。黒灰色を呈し，口縁に炭化物が付着する。E13区Ⅱ・Ⅱ'層出土。43は太さの異なる縄で，RL縄文を施す。暗茶褐色を呈し，外面に炭化物が付着する。D11（16）・C11（20）区Ⅰ層出土。40～43は縄文晩期に属すかと思われる。44は大型の胴張り深鉢である。LR縄文を施し，茶褐色を呈し，焼成堅致。B13区Ⅰ・Ⅱ層出土。45はLR縄文を施文し，内外面をみがく。同一個体が数点ある。茶褐色～淡茶褐色を呈し，焼成堅致。E13区Ⅱ層出土。46は幅広のL縄文を施す。茶褐色を呈し，焼成は悪い。SX 117出土。47はLR縄文の途中でRの縄をR巻きして結節縄文としている。淡茶褐色を呈し，Ａ５（23）区Ⅰ層出土。48はLR縄文とRL縄文をつないで羽状縄文にしたものである。暗茶褐色を呈し，C10（25）区Ⅱ層出土。49はLR縄文を施文後，条線を引く。茶褐色を呈し，焼成は悪い。出土地点不明。網目状撚糸文や所謂綾絡文の付いた土器は出土していない。

Ｂ　弥生土器（図版44・46・170）

弥生土器は数10点出土している。そのうち約10点が８の土器片であり，ほかは天王山式土器である。

８は深鉢で，口径28cmを測る。口縁部と胴部の接合点はなく，推定実測である。口縁部は外傾し，胴部は丸く張る。口唇部にはRの縄の撚糸文を施文し，その上から刻み目を入れる。外面全体には口唇部と同じ撚糸文を縦位～斜位に施文する。一部その上に刷毛目がみられる。口縁内面にも同じ撚糸文を横位～斜位に施文し，頸部以下にも刷毛目を横位に施す。胴部内面は荒れており，鮮明ではない。器形・刷毛目を用いる点で，福島県の天神原式〔猪狩1983〕に類似するが，天神原式には地文に撚糸文を用いる例はないよう

である。また，本遺跡出土の弥生土器はほかに天王山式土器しかなく，一応弥生中期後半～後期初頭の土器と考えておきたい。茶褐色を呈し，SK102・SK113・SK105・E11・E12（24）区Ⅰ・Ⅱ層出土。

天王山式土器（9・50～58）　9は広口壷で，口径24cmを測る。口縁部は緩く外湾し，頸部は上方へすぼまる筒形を呈し、胴部は緩く張ると思われる。口縁には竹管状工具による刺突のある小突起を配すが，単位は不明である。口縁部から口唇にかけてRL縄文を施文し，沈線を1本ずつ引いて2本1組にした連弧文を施す。頸部には沈線で簡略化した重菱形文を施文する。淡茶褐色を呈し，頸部外面に炭化物が付着する。D12（1・18）区Ⅰ・Ⅱ層出土。図版170－cは9と同様の口縁部片である。54は9と同様広口壷かと思われる頸部片である。黒灰色を呈し，外面に炭化物が付着する。SI753出土。

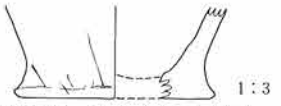
50～53は口縁部片で，器種は不明である。口縁部下方に粘土帯を貼り付け，そこに上方から竹管状工具で刺突して盛り上げ，交互刺突文と同じ効果を出している。RL縄文を施文し（51・52は口唇へも及ぶ），その上に9の連弧文と同施文法の沈線を引く。淡茶褐色を呈し，外面に炭化物が付着する。50・52はD12（19）区Ⅰ・Ⅱ層，51はSI752，53はB・C区排土出土。

55はRL縄文の上に1本ずつ引いた2本1組の沈線で連弧文を施文する。9の胴部破片の可能性も考えられる。淡茶褐色を呈し，外面に炭化物が付着する。E12区Ⅱ層出土。9・50～55は胎土に1㎜前後の小石粒を多く含み，ざらついた感触が共通する。

56は頸部片で隆線側縁に棒状工具で交互刺突をし，その下にLR縄文を施文する。淡茶褐色を呈し，胎土に金雲母を含む。SI610・SK620出土。57は口縁から口唇にかけてRL縄文を施文し，沈線を引く。黒褐色を呈し，焼成堅致。SI753出土。58はRL縄文を斜位に施文し，縦走縄文となる。黒褐色を呈し，焼成堅致。SK641出土。図版170－dも同様のものである。

北陸の天王山式系土器は田中靖氏によって三期に分類されている〔田中靖1988〕。9は頸部に重菱形文を施文するが，全体にモチーフが簡略化していることから，田中分類のⅠ期の新しい様相がうかがえるが，50～53は，刺突が正当な施文方法による交互刺突文ではないことからⅡ期に分類される。このことから本遺跡の天王山式土器は，全体としては弥生中期末～後期の天王山Ⅱ期のものと考えられる。

第33図は甕の底部である。底部は平底で，体部のたちあがりは大きくくびれる。内面はナデで，外面は粗いハケ目のような条線がわずかにみられるが，ナデ調整である。断面の観察より底部の円板の上に体部を重ねて成形したと考えられる。E12（21・22）区出土。



第33図　弥生土器実測図

C　石器（図版46・171）

石器はごく少なく，数点しか出土していない。以下の石器はいずれも縄文時代に所属するものと思われるが時期を明確にすることはできない。検出された石器は剝片石器，石核石器，礫石器である。

剝片石器（1～5）　石鏃3点及びサイド・スクレイパー1点，リタッチド・フレーク1点が検出された。

1はC12（3～23）区トレンチⅡ層中から検出された平基有茎鏃である。（黒色）頁岩の剝片を用い，表・裏両面からの大まかな調整剝離によって成形されている。平坦な基部からの中茎の作出は，これも両面からの大きな剝離によっており，その後中茎そのものは丁寧に調整されてはいない。先端部は図正面上方から裏面下方に向う力によって欠損している。約3.5ｇである。

2はE12（H）区地山上層検出の平基有茎鏃である。頁岩を用い表裏面の交互剝離によってギザギザの側

縁を成形している。中茎は両面からの大きな剥離によって作出している。先端は折損。約2.5ｇである。

3はPit1285上層中検出の凹基無茎鏃である。白濁色の硅化玉髄剥片に，表・裏両面から微細な調整剥離を加えている。基部は小剥離を総合して大きな抉りをなし，両脚は丸味をもってややすぼまる。約2.5ｇである。

1・3は図正面が突出し，裏面が平坦であるが，2は両面が突出する。3は表・裏面とも主剥離面を残しているが，1・2は調整剥離が全面を覆っている。

4はＢ９（12）区Ｉ層中検出のリタッチド・フレークである。図正面に原石面を残す赤色鉄石英の小剥片に，図下辺を除く周縁から微細な剥離が加えられている。

5はB11（25）区Ｉ・II層中検出のサイド・スクレイパーである。図上辺が砕けてしまった流紋岩の剥片を用い，図正面の右側縁に裏面からの連続した微細な剥離を認める。先端部は欠損している。左側縁はガジリ。

石核石器（６～８）　磨製石斧２点およびスクレイパー１点が検出された。

6はE12（19）区Ｉ・II層中検出の磨製石斧刃部片である。白色味の強い蛇紋岩製で，胴部以上を欠失している。表面は風化しているが，全体に調整研磨痕が残っており，方向を図中に矢印で示した。図左側面には敲打によるアバタ状の凹みが認められ，刃縁は敲打使用によってツブれ，また一部に刃こぼれが認められる。折損部分は図正面から裏面への捻れた力を想定させる。

7はＣ６区撹乱坑出土の磨製石斧刃部片である。玢岩製で，全面を調整研磨している。図右側面に，調整面が残っているが，研磨の方向まではわからない。図正面及び裏面には，斜方向の筋状の使用痕が明瞭である。刃縁は使用によってツブれ，凹凸がある。

8はB11（２）区遺構面上から検出された。緑色凝灰岩（硬質）の石核を素材とし，図上縁に二つのスクレイパーエッジを作出・使用している。一は図上面を打面とし，図正面右上辺に小さいが急角度で深い抉りを並べ，鋸歯縁状の刃部としている。刃部は使用によってやや丸くなっている。二は図正面を打面とし、図上面左下辺に小さな浅い剥離を並べている。使用によって図上面右下辺の剥離部分がトロトロになっている。

礫石器（９）　礫石錘１点のみの検出である。

9はSI 1315Ｂ区４層中検出の礫石錘である。花崗岩の扁平楕円礫の長軸両端を打欠いて抉り，網かけ部を作出している。約130ｇ。図正面の網かけ部は風化して砕けた面で，剥離ではない。

2　古墳時代

A　土器

古墳時代の土器は遺構数に比例して，奈良・平安時代の土器よりかなり少ない。古墳時代の竪穴住居は12棟あるが，土器の出土量が多かったのは半数以下である。時期は古墳時代前期を中心にし，一部中期に及ぶ。そのため，土器の大半はいわゆる古式土師器であり，明確に古墳時代中期と判断される須恵器は，1点のみである。報告にあたっては，奈良・平安時代の土器と同様，竪穴住居出土土器を中心にし，それを補うものとして，その他の遺構・包含層出土の土器をあつかった。おもな竪穴住居出土土器（SI502A・SI 1168・SI 1124・SI 1480）については，可能な限り実測するようにつとめた。実測図の表現方法についてはおおむね奈良・平安時代のものと同じである(107頁参照)。この時代の土器はもちろんロクロを使用していないが，奈良・平安時代の非ロクロの土師器に比し，口縁部などの調整はよく，回転台を使用したことがうかがえる。そのため，端部の実線・ヨコナデによる線は定規で引いた実線であらわした。

1）　古式土師器の分類（第34図）

おもに器種によって分類するが，甕については口縁部の手法によって分類する。しかし，全体の器形を知りうるものは少なく，一部分の形態により分類したものが多い。おもな器種は大きく分けて，壺・小型壺・小型鉢・高杯・小型器台・甕であり，これらについてはそれぞれさらに分類した。これら以外のものについては具体的な器形などによる器種名を付した。

壺（1～7）　全体の器形を残すものはないが，器高は少なくとも20cm以上で，小型壺とは明確に区別できる。口縁部の形態により，A・B・C・Dに分けられる。A・B・Cはいわゆる二重口縁の形態をもつ。体部は不明なものばかりであるが，いずれも球形にちかいものであろう。

壺A（1）　二重口縁のうち，口縁部が長く，大きく外反するもの。頸部は筒状となり，口縁部への屈折は明瞭である。全体に調整はていねいな精製品である。

壺B（2）　二重口縁のうち，口縁部が壺Aに比し，短くて，外反しないもの。頸部は筒状であるが，内面の口縁部との段は壺Aほど明瞭でない。ヘラミガキ調整であるが，胎土とも壺Aほどよくはない。

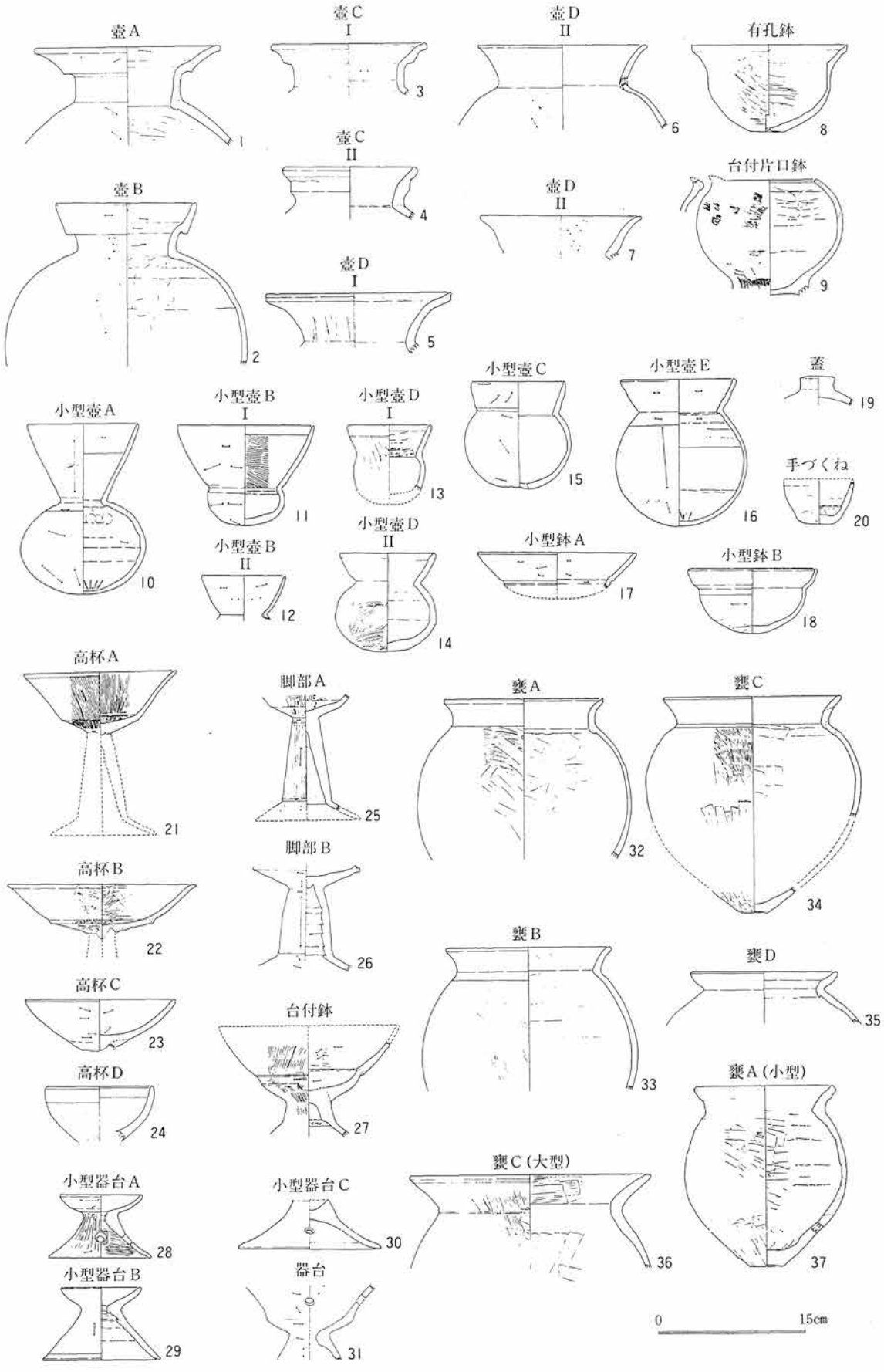
壺C（3・4）　二重口縁のうち，口縁部が短く外反するもの。頸部と口縁部との境が明瞭なC_1（3）とこれが不明瞭なC_2（4）がある。壺C_2は器壁が相対的に厚く，調整はていねいでない。

壺D（5～7）　二重口縁でなく，単純に外反するもの。D_1（5）・D_2（6・7）に分けられる。壺D_1（5）は口縁部が大きく長く外反し，端部はつまみあげられて明瞭な面をもつ。壺D_2（6・7）は口縁部がやや短く，端部に明瞭な面をもたない。

小型壺（10～16）　頸部の長いものでも器高は20cmを越えず，体部高も10cm未満のものがほとんどである。壺に比し，相対的に精製品が多い。形態・手法よりA～Eに分けられる。

小型壺A（10）　口頸部の長いもの。長頸壺で，口頸部は直線的にラッパ状に開く。体部はやや扁平である。調整はきわめてよい。

小型壺B（11・12）　いわゆる「小型丸底壺」のうち，口径が体部径より大きいもの。口縁部は大きく外反し，よく開く。調整はていねいである。B_1（11）とB_2（12）に分けられる。小型壺B_1（11）はやや大型



第34図　古式土師器の器種分類

で口縁部がとくに大きく発達したものである。口頸部の長さは体部高の2倍近くある。小型壺B_2（12）は口頸部の長さは体部高に近い。B_1よりもやや小型である。

小型壺C（15）「小型丸底壺」のうち，口径が体部径より小さいもの。小型壺Bよりも口縁部は短く，外反も小さい。全体に小型壺Bよりも大きく，体部は球形にちかい。調整は小型壺Cほどていねいでないものが多く，口縁部内面はヘラミガキ調整はみられない。

小型壺D（13・14）　調整が粗く，器壁が相対的に厚いもの。器形は小型壺B・Cと共通するものがある。体部径より口径が大きいものを小型壺D_1（13），小さいものを小型壺D_2（14）とする。

小型壺E（16）　全体にやや大きめで，口縁部が比較的短く外反するもの。調整はていねいで，赤彩される。量的にごく少ない。

小型鉢（17・18）　小型壺ほど頸部のしまりがよくなく，体部が扁平なものである。

小型鉢A（17）　器高がとくに低く，口縁部が長く外反するもの。調整はていねいで，口縁部内面までヘラミガキされる。

小型鉢B（18）　口縁部は受口状で，Aほど長くはない。

高杯（21～26）　杯部と脚部の全体を残す例がないが，杯部を優先させて分類する。A～Dに分類される。脚部はA（25）・B（26）の2形態がある。

高杯A（21）　水平にちかい底部から体部・口縁部が外反してたちあがるもののうち，その境に段や突部をもたないもの。体部・口縁部は外反する。暗文風のヘラミガキによってごくていねいに調整される。脚部はA形態になると考えられる。

高杯B（22）　高杯Aと同様に底部から体部・口縁部がたちあがるが，その境に明瞭な段や突部をもつもの。体部は杯部Aとは逆に内湾するものが多いが，外反するものもある。脚部はB形態になると考えられる。ヘラミガキ調整されるが，高杯Aほどていねいでない。

高杯C（23）　底部から体部に境がなく，内湾してたちあがるもの。底部にわずかな突部をもつもの，口縁部が明瞭に外反するものもある。

高杯D（24）　杯部が小型で口縁部が内湾するもの。

小型器台（28～30）　ヘラミガキ調整は見られるが，ていねいなものではない。

小型器台A（28）　受部と脚部に孔をもつもののうち，脚部に透かしをもつもの。

小型器台B（29）　小型器台Aと同様に受部と脚部に孔をもつが，脚部に透かしをもたないもの。

小型器台C（30）　受部と脚部に孔をもたないもの。

甕（32～37）　いずれも「く」の字状に単純に外反する形態のものであるが，口縁端部の細かなつくりから，A～Cに分けられ，さらに全体の器形がことなるDがある。法量は口径15～20cmのもの（32～34）が多いが，口径20cm以上の大型品（36），口径15cm以下の小型品（37）もある。大型品はごくわずかであるが，小型品は比較的多い。A・B・Cの口縁部はそれぞれ，頸部が直立気味で口縁部との内に屈曲点をもつもの（a形態），「く」の字状に直線的に外反するもの（b形態）がある。なお，底部に穿孔するものが1点ある。調整は口縁部内外面がヨコナデ，体部外面はハケ目，内面はナデが一般的であるが，体部は内外面ともヘラケズリもみられる。

甕A（32）　口縁端部を上方へつまみあげ，端部に明瞭な面をもつもの。

甕B（33）　口縁端部に面をもつが，上方へつまみあげられないもの。

甕C（34）　口縁端部に面をもたないで，丸くおさまるもの。

甕D（35）　A・B・Cとは全体の形態がことなる。口縁部は短く，Cのように弧状には外反しない。端部は丸くおさまる。

その他（8，9，19，20，27，31）　以上の他にいくつかの器種がある。いずれも量的にはごく少ない。

有孔鉢（8）　底部に小さな円形の孔をもつもの。

台付片口鉢（9）　体部は無頸で片口をもち，脚台をもつもの。

蓋（19）　つまみをもつ蓋である。

手づくね（20）　小型のもので，手づくねのもの。数点出土している。

台付鉢（27）　体部と口縁部の境に，内外面とも段をもつ。口縁部は大きく発達する。畿内系ではなく北陸地方の在地系の器種である。

器台（31）　小型器台よりも大型で，受部に円形の透かしをもつ。

2）　各説

a）　おもな住居跡出土土器

SI502A出土土器（図版47・48・171～174・176，観察表243頁）

SI502Aは1辺約7mの大型の住居で，出土した土器量も多い。精製品を中心とした多様な器種があり，住居の性格をうかがわせる。古墳時代の住居跡資料としては古い時期にあたる。

壺（11・12・15・16）　11の口縁部は端部の遺存状況が悪く，明確ではないが，わずかに外反した口縁部外面に貼り付けたような口縁帯をもつと考えられる。内外面ともヘラミガキするが，ハケ目が残る部分がある。12は壺D_1である。底部は胎土・色調からみて16の可能性が考えられる。体部はまったく遺存しないが，おそらく，球形にちかいものであろう。口縁部内面には粗いヘラミガキがなされるが，外面はハケ目のままである。底部（16）は内面に炭化物が付着しており，二次的に煮炊きに使用したことがうかがえる。底部（15）は器壁が厚く内外面ともハケ目である。

小型壺（1～6）　A（1）・B（3～5）・E（2）がある。1はほぼ完形品にちかいものである。調整がていねいな長頸の壺で，器壁はとくに薄い。外面の全面と口縁部内面はヘラミガキである。体部内面は粘土紐の痕跡をよく残し，上部は指頭圧痕がみられる。胎土はとくに精良である。BにはB_1（3・5）とB_2（4）がある。5はほぼ完形品で，口径14cmあるやや大型のものである。口縁部はとくに大きく発達し，体部はこれに比し，小さく扁平である。全体にていねいなヘラミガキをおこなう。口縁部内面はハケ目である。3の体部も小さく扁平で，口縁部との間のくびれは鈍い。体部内面までヘラミガキされる。4は器壁がとくに薄く，つくりはシャープで調整も頗るよい。色調は赤色系である。6はヘラミガキが粗く，調整はあまりよくない。小型壺D，あるいはCの可能性がある。口縁端部は丸くおさまらず，部分的に面をもつ。

小型器台（7～10）　完形品の8は脚部に三方の円形透かしをもつAである。脚部外面にタテ方向のヘラミガキがおこなわれるが，調整はさほどよくはない。受部の端部は丸くおさまる。これに対し，7は端部が上方へ短くたちあがる。内外面はよくヘラミガキされる。9は脚部の裾と考えられるが，破片が小さく明確ではない。外面はヘラミガキであるが，ハケ目を残す。10は器種が明確ではない。脚部とすると端部が薄く弱い感じがするし，口縁部とすると，形態がなじまない。一応，小型器台などの脚部とする。胎土は精良で，つくりや色調などは小型壺（4）に類似する。

小型鉢（13）　小型鉢Aである。内外面ともよくヘラミガキされる。胎土や調整は5に類似する。

高杯（18～22）　高杯A（21）と高杯C（18～20）がある。21は内外面に暗文風のヘラミガキをおこなうもので，調整はきわめてよい（図版176－4）。色調は赤色系の発色である。脚部はないが，22がほとんど同じ胎土・調整であり，杯底部の形態が共通することから，このような脚部をもつと推定される。高杯Cのうち，18は外面に粘土紐の接合痕を残し，外面の調整はかならずしもよくはない。内面はヘラミガキはされないが，よくナデられている。色調は赤色系で，内面の器面がとくに赤彩のような色調をする。口縁部内外面はヨコナデである。19は底部外面中央から，体部にかけてはわずかな屈曲部があり，18・20とはやや異なる。器壁は薄く，よくヘラミガキされる。脚部はかなり細い。20は18を小型化したような器形で，器壁は厚く，調整はナデである。脚部との接合部には円板充填の突出部がよく残る。

台付鉢（17）　内外面ともよくヘラミガキ調整され，赤色系の発色をする。内外面とも体部は不明である。この他に片口をもつ台付鉢（14）がある。

甕（23～30）　甕は口縁部がヨコナデ，体部外面がハケ目，内面がナデやヘラケズリである。底部外面をヘラケズリするものもある（30）。口縁部のつくりの分類ではA・B・Cの3者がある。A（上方つまみあげ）は28・29，B（面とり）は25～27，C（丸い）は23・24・30である。Aのうち，28は体部と口縁部の屈折点が鋭く，端部もシャープである。ほとんど完形品の29は全体の器形が知られる貴重な例である。器高と体部径はほぼ同じで，体部は球形にちかく，底部はわずかに平坦部をもつ。口縁部は端部ちかくで若干屈折し，上方へのつまみあげは鋭くない。Bのうち，25は端部そのものは丸くおさまるが，その外側下にわずかな面をもつ。26も丸味をもつ面であるが，27は口縁下端部がヨコナデにより明瞭な稜をもち，端部ははっきりしている。23をのぞく他の甕は口縁部外面までススの付着がみられる。

SI 1168出土土器（図版50・171・172・175・176，観察表244頁）

土器の出土個体数はさほど多くはないが，器種構成を知ることのできる良好な資料である。SI 502AとSI 1124の中間的位置を占めるものと考えられる。

壺（57・62・63）　57は壺C_2である。二重口縁ではあるが，口縁帯下辺が突部をなすだけで，かなり形骸化したものである。外面に粗いヘラミガキがみられるが，器壁も厚く，シャープさはまったくない。また粘土紐の痕跡もよく残る部分がある。底部（63）は調整や胎土からみて，57と同一個体の可能性をもつ。外面はヘラミガキではないが，器面は赤色系の色調である。体部下半のカーブからみて，体部の形態は球形にちかいと考えられる。62は壺D_2である。器壁は比較的薄く，ヘラミガキ調整されている。

小型器台（51・52）　いずれも脚部に透かしをもたないBである。両者とも調整はナデが主で，ヘラミガキはごく粗い。脚部内面上部は粘土紐痕が明瞭に残る。

高杯（53～55）　脚部が2点ある。53は太い脚筒部のB形態で，中位でふくらみ，裾部は屈折してひろがる。外面はヘラミガキで，内面は粘土紐痕のままである。54は筒部が細いA形態で，ヘラミガキも比較的ていねいである。55は全体の器形が不明であるが，高杯Dの杯部と考えておく。ヘラミガキ調整はおこなわない。

有孔鉢（56）　甕のように「く」の字状に外反する口縁部で，端部はつまみあげられる。体部も甕と同様にハケ目とヘラケズリで，小さな平底部に焼成前の穿孔がなされる（図版176－6）。内外面ともスス，炭化物の付着はない。

甕（58・59・61・64）　58・59はやや小型で，口縁部は面をもつBである。いずれも体部は下半部を欠く

ものの丸味がないものである。口縁部の外反度も小さい。61は上方へつまみあげられるAである。64は口径約25cmの大型品で，口縁部は丸いCである。外面にまったくススの付着はなく，煮炊具の甕でない可能性もあるが，内面は強いヘラケズリで，器面は熱を受けたような形跡を残している。

その他（60）　器種は明確でないが，無頸の鉢などが考えられる。調整は甕と同様で，壺とはことなる。

SI1124出土土器（図版51・171・172・175，観察表244頁）

SI1124はSI502Aよりやや小さいが，大型の住居である。小型の器種が少なく，高杯が多いなど，古墳時代の住居出土土器としてはもっとも新しい様相を示す。

壺（76・77）　いずれも底部のみである。76は小ぶりで，器壁も薄い。体部外面はヘラミガキ，底部内面中央，底部外面にはヘラケズリがなされる。底部外面が丸味をもつことからも，小型壺にちかい大きさと考えられる。77は底部から体部にかけて，大きな段がなく，底部からそのまま体部が開く。

小型壺（70・71・73・74）　70・71は器壁がうすく，ていねいにヘラミガキされる。ともにB_2で，赤彩される。古い様相が明確で，この住居に伴う土器とは考えられない。74はCと考えられるが，底部のみを二次的に再調整して口縁部をつくったものである。外面はヘラミガキである。

手づくね土器（72）　口径約7cmで，手づくね土器としては比較的大きく，調整もよい。

高杯（78・80～86）　Aはなく，B（81～86）とC（80）がある。80は杯部が比較的深く，底部付近に若干の稜をもつ。外面のヘラミガキは粗い。主体を占めるBは口径20cm以下のもの（81～83）と，20cm以上のもの（84～86）がある。杯部外面の段は，81・86の場合は断面三角形の突帯を貼りつけたもので，86は下方に垂下する。82・83の場合は底部からのたちあがり部分に段をもたせたものである。体部から口縁部は内湾し，口縁部では外反するが，82は外反せず，器壁も相対的に厚い。83・86は円板充填の突部がよく残る。脚部を残す例はないが，78のようなB形態のものであろう。78は胎土からみて，86と同一個体の可能性をもつ。ヘラミガキ調整は概して粗く，ハケ目を残す。

甕（87）　甕の個体数がとくに少ない。87は甕Dである。口縁部は短く，内湾し，端部は丸くおさまる。他にはみられないタイプで，新しい様相のものである。外面の口縁部までススが付着する。

その他（75・79）　75は器台かと思われるが，判然としない。内面に粗いヘラミガキがみられるが，調整はていねいでない。79は器台あるいは他の脚部と考えられる。SI502A（10）と同一個体の可能性をもつ。

SI1480・1460出土土器（図版49・171・173・174，観察表243頁）

SI1460は奈良・平安時代の竪穴住居であるが，古墳時代の竪穴住居であるSI1480の大半を切っている。したがってSI1460の古式土師器もSI1480にともなう可能性があるため，ここでは一緒にあつかう。

壺（45・47）　45は壺Aである。二重口縁で，端部は明瞭でないが丸い面をもつ。全体にていねいなヘラミガキで調整され，器面はなめらかである。47は壺C_1である。口縁部は短く外反し，口縁部の内端がヨコナデによってくぼみ，端部がわずかに上方へつまみあげられる。内外面ともヘラミガキであるが，外面にはヘラケズリの痕が残る。

小型壺（48）　小型壺Bである。体部からラッパ状に開き，口縁部は長い。端部では内湾気味に丸くおさまる。両面ともヘラミガキ調整で器面はなめらかである。

高杯（46）　高杯Bである。赤褐色を呈し，ヘラミガキで調整されている。器壁は薄く，つくりはよい。

甕（36～44・49・50）　口縁部のつくりの分類ではAは（37・39・41～43・49・50），Bは（40・44），Cは（36）

である。Aのうち41は口径13.5cmの小型品で，全体に器壁が厚い。50は口縁端部のつまみあげはシャープさに欠けるが，外面の面をとる部分に凹線様のくぼみをもつ。Bのうち40は口縁部はやや歪んでいるが，端部に明瞭な面をもつ。44は口縁部にヨコナデがしっかりはいり，歪みは少ない。端部は丸みをもつ面である。Cの36は，口縁端部外面がわずかにくぼむ。38は底部である。外面はハケ目で調整され，底部はわずかに平担部をもつ。いづれの甕も二次焼成をうけ，口縁部の遺存するものにはススが付着している。

b）　その他の遺構出土土器（図版48～53・171～176，観察表243頁）

SI70（31～35）　小型壺E（31）は口径が体部径より小さく，ごく薄い器壁でつくりはよい。外面と内面口縁部はていねいにヘラミガキされ，口縁部外面に文様を赤彩する。小型器台（32）は受部と脚部に孔をもつが，脚部の透かしは不明である。高杯（33）はCと考えられるが，口縁部が外反する。胎土・調整は粗い。甕B（35）は口縁部が弧状に短く外反し，端部に明瞭な面をもち，下端部がていねいに引き出される。内面底部には炭化物が付着する（図版176－7）。体部はほぼ球形で，底部は丸底で面をまったくもたず（図版176－5），器壁も一様である。製作技法が注目される。甕（34）は直径2cmの平担面をもつ。

SX795（65～69）　壺C1（65）は筒状の頸部から二重口縁が短く外反してたちあがり，端部は面をもち上方へつまみあげられる。調整は粗く器面はザラついている。二次焼成をうけており外面にはススが付着している。壺A（66）は大きく外反する口縁部のみの遺存で，端部は面をもつ。口縁部下辺の稜はヨコナデがしっかりしておらずやや歪んでいる。両面ともていねいなヘラミガキ調整で器面はなめらかである。小型壺B（67・68）のうち67は体部から立ちあがった口頸部の遺存で両面とも粗いヘラミガキで調整され，内面にはハケ目，外面にはヘラケズリの痕が残る。68は体部のみの遺存で外面はヘラミガキ調整をうけるが，器面はなめらかではない。⅔程黒斑がつく。内面はナデて調整している。甕C（69）は口縁部が比較的長く，頸部がしまり，ゆるく外反し端部に至り丸くおさまる。内面は口縁部から体部にかけ粘土紐の痕跡を残す。

SI71（88～93）　SI71は奈良・平安時代の住居であるが，古式土師器が比較的まとまって出土した。小型器台A（88）は脚部が裾にむかってゆるく外反し端部に至り，丸くおさまる。外面の脚部と受部はヘラミガキであるが，調整は粗い。小型器台C（89）は脚部径が14.7cmと大型で，脚部は低い。外面のヘラミガキ調整は粗く，器壁はやや厚い。小型壺C（90・93）のうち91は完形品で，底部は焼成後穿孔している（図版176－2）。外面のみ粗いヘラミガキ調整される。93は胎土に3～5mmの石英粒を多く含み，器面はザラついている。外面体部はヘラケズリ調整である。小型壺D_1（90）の口縁部は両面ともハケ目調整であり，端部はヨコナデにより丸くおさまる。小型壺（92）は扁平な丸底の体部のみの遺存である。内面はハケ目，外面はヘラミガキのていねいな調整である。底部は焼成後穿孔している（図版176－3）。

SI115（94～98）　SI115は奈良・平安時代の住居であるが，古式土師器が比較的まとまって出土した。94は小型壺D_2の完形品である。球形の体部から若干内湾気味にたちあがり，口縁端部は丸くおさまる。外面体部はハケ目であるが，相体的に調整が粗い。95の甕は口縁部が「く」の字に外反し，端部に至って明瞭な面をもつBである。96は口縁部がゆるく外反し，口縁内面はヨコナデによりくぼみ，端部はわずかに上方へつまみあげられ，下端部もつまみだされるAである。外面体部は粗いヘラミガキで調整されていると考えられ，器面はややなめらかである。高杯B（97）は体部と口縁部の境の段から口縁部が外反してたちあがりそのまま端部に至り，丸くおさまる。体部は内湾せず，外反する。内外面ともヘラミガキ調整をうけるが，器面には3～5mm程の石英粒，長石粒がみられる。壺B（98）は頸部が短く，口縁部下辺が肥厚

し二重口縁となる。口縁部は短い。体部外面はヘラミガキであるが，粗いためヘラケズリ痕を残す。

SI1010（99～104）　高杯C（99）は杯部がほぼ完形に遺存しており，底部にわずかに段をもち，口縁部は内湾気味にたちあがる。内外面とも粗いヘラミガキ調整である。100は口縁部のみの小型品で，小型壺B_2と考えられる。内外面ともていねいなヘラミガキ調整で，器面はなめらかである。101は小型器台の脚部である。外面はヘラミガキ調整で器面はなめらかである。脚部の透かしの有無は確認できない。102は口径13.0cmの小型の甕で，口縁部は丸くおさまるCである。103はBである。口縁部はヨコナデがしっかりはいり，端部は凹線様にくぼむ。104の甕は口縁部がゆるく外反し，内面の強いヨコナデにより端部はわずかに上方につまみあげられるAである。

SK108・SK107（105～108）　壺D_2（105）は二次焼成をうけており，外面にはススが付着する。甕底部（106）は直径4cm程の平担面をもつ。外面はハケ目，内面はナデて調整してある。甕B（107）は口縁部が「く」の字状に外反し，そのまま端部に至り，わずかに面をもつ。ヨコナデが弱く，歪んでいる。壺C_2（108）は二重口縁の口縁部が短く外反し，端部は丸くおさまる。ヘラミガキ調整が粗いため器面になめらかさを欠く。

SI439（109～113）　109・110はともに小型鉢Bで，大きさ・形態・調整はほぼ同じである。109の口縁部端部は若干つまみ出されるが，110は丸くおさまる。口縁部はヨコナデ，外面体部は粗くヘラミガキ調整をうける。小型器台（111）は頸部のみの遺存であるが，受部と脚部に孔をもつ。内面受部と外面体部はヘラミガキ調整である。112・113の甕はともにCである。112は「く」の字に外反し，先端部は外方へ屈曲する。口縁部はヨコナデがしっかりはいる。113は口縁部が明瞭に「く」の字に外反し端部に至り丸くおさまる。口縁部はヨコナデがしっかりはいり歪みは少ない。

SI263（114・115）　114・115とも小型器台Aである。受部は内湾してたちあがり端部は丸くおさまる。114は脚部に二段の三方円形透かしをもつ。受部と外面の体部はヘラミガキ調整である。115は内面体部はハケ目，受部と外面体部はヘラミガキの調整をうけるが，粗いため器面はなめらかさに欠ける。脚部に四方円形透かしをもつ。

SI402（116・117）　117は調整はあまりよくないが，形態や外面にススが付着していないことから壺と考えられる。口縁部が短く外反し，ヨコナデにより内面はくぼみ，対応する外面に稜をもつ。口縁端部は面をもち，下端部はつまみだされる。調整は粗く，器面はざらついている。端部の形状はあまり例がなく，あるいは二重口縁の擬口縁かもしれない。116は高杯Dである。口径に比較して杯部の身は深いタイプである。

SI660・650（118～120）　壺（119）は体部のみの遺存で，器壁は薄く，外面はハケ目の後ヘラミガキの調整である。器面はなめらかである。内面はハケ目調整の後ナデ調整をしている。甕B（118）は長い口縁部がゆるく外反し，先端部でわずかに外方に屈曲し，端部は明瞭な面をもつ。ヨコナデがしっかりはいり口縁部のつくりはシャープである。内外面ともハケ目で調整される。120は赤彩され，つくりはよい。

C）　その他の土器（図版53・174・175，観察表246頁）

ここでは出土個体数の少ない遺構出土の土器，遺構以外出土の土器をあわせてとりあげる。

小型壺（126・127・129）　127はB_2である。外面はヘラミガキ，内面はハケ目でていねいに調整され，器壁は薄い。SI640出土。129はD_2である。器壁は厚く，扁平な体部が遺存する。外面はヘラミガキで器面はなめらかである。外面にスス，内面に厚く炭化物が付着する。SI600出土。126はCである。球形の体部

から内湾気味にたちあがり，口縁部は短い。外面は粗いヘラミガキでなめらかさに欠ける。表面採集と確認調査の試掘坑の出土である。

小型器台（121～123）　122は，脚部に三方円形透かしをもつAである。全体に器壁が厚く重量感がある。C12（1）区出土。123は受部と脚部に孔をもたないCである。内面脚部を含む全体がヘラミガキ調整され，器面はなめらかである。外面は赤彩である。表面採集。121は受部が有段口縁で短い。内外面ともヘラミガキがていねいである。SI802出土。

器台（125）　受部が有段口縁の大型品で，段から外反して口縁部が立ちあがる。受部と脚部に孔をもち，受部には透かしがある。A12（6）区出土。

高杯（124）　脚部のみの遺存で，脚筒部が太くなるB形態である。内面は粘土紐のままである。外面は粗いヘラミガキで器面はなめらかさに欠ける。C13（7・8）区出土。

蓋（130）　つまみ部分は指頭圧痕，内面はハケ目で調整される。器面はザラついており，2㎜程の石英・長石粒がみられる。D10（8）区出土。

有孔鉢（132）　底部のみの遺存である。外面はハケ目で調整される。底部はわずかに平担部をもち焼成前に穿孔されている。E11（16）区出土。

甕（133・135）　133・135とも口縁端部が上方へつまみだされるAである。133は口縁部にヨコナデがしっかりはいり歪みは少ない。SI595・SI560出土。135は口径より体部径が大きくなる器形で，口縁端部は強いヨコナデにより，上端部・下端部ともわずかにつまみだされる。外面体部はヘラケズリで調整され，内面体部にナデの痕と思われる条線がある。SK1337出土。

手づくね土器（131）　直径約5㎝のミニチュア土器で，指頭圧痕によるくぼみが目立つ。E9（14）区出土。

須恵器（128）　唯一の古墳時代須恵器である。128は𤭯（はそう）の頸部の小破片である。外面上部にはわずかに沈線をとどめ，口縁部の段になる。櫛描波状文の下にはカキ目をとどめる。胎土は精良，焼成堅緻で，灰色を呈する。内面には自然釉がかかる。5世紀代におさまるものであろう。B13（21）区出土。

その他（134）　筒状の長い口縁部から体部が屈曲して外方へ開く器形である。口縁端部は外傾して面をもつが，ヨコナデが弱いために歪みが激しい。C12（14・19）区出土。

B　玉（図版46・229）

玉には勾玉と管玉があり，ともに古墳時代前中期の竪穴住居から出土している。78は勾玉で，頭部は一方向から穿孔され，体部には幅2㎜程の断面U字形の擦り溝が見られる。石材は滑石で重量は0.8gである。SI1124から出土した。79は管玉で，両端から穿孔されている。石材は緑色凝灰岩で重量は0.5gである。SI1168から出土した。

3　奈良・平安時代

A　土器の概観

奈良・平安時代の土器の出土総量は深さ18cmの整理箱（コンテナ）で約250箱である。このうち，遺構の主体をなす竪穴住居の出土土器は，全体の約1/4～1/5程度と推定される。接合などの整理作業に際し，竪穴住居出土土器を住居ごとにコンテナに分類したところ，約250箱に達した。土器の整理方法については前述のとおりで（第Ⅲ章2），接合は竪穴住居出土土器を中心にした。報告にあたっても，竪穴住居出土土器を中心に実測・記述し，これを補足するかたちで，その他の遺構と包含層の出土土器を報告した。出土土器はすべてほぼ8・9世紀のもので，須恵器と土師器である。土師器には少量の赤彩・黒色土器（黒色土師器）を含む。このほか，「器」でない土製品が若干ある。土製品は基本的に土師質である。施釉陶器や磁器はない。

図化にあたって　実測個体は各竪穴住居の土器のうち，遺存状況と器種を考慮して選択した。遺存状況の良好なものはおおむね実測したが，その遺構内の土器構成や個体数を勘案し，遺存状況が悪いものでも実測したものもある。出土個体数の多い須恵器杯類などは全体の1/4以上の遺存をおおよその目安にした。したがって，実測個体から出土土器のおおよその構成・様相は把握できると思う。なお，竪穴住居を切る撹乱坑出土土器も，その竪穴住居の埋土に本来含まれていたものが多いと考えられ，一応当該住居の出土土器に含めた。

観察表の作成　個々の土器については観察表（別表2）を作成し，これに土器の出土地点・種別・器種・法量・胎土・手法等を記した。観察表の項目ごとの要点基準については後述する。

1）　器種分類

器種分類はいずれの時代・時期についても容易ではない。全国レベルで比較的共通した器種が存在する8・9世紀の土器についても，器種の分類・呼称はかならずしも共通したものではない。ここでの器種分類も客観的ではない面もあるかもしれないが，その基本的な考え方を明らかにしておきたい。

当遺跡の8・9世紀の土器の器種構成は，遺跡の性格を反映して比較的単純である。また，この時期の土器の構成として，食膳具・貯蔵具は須恵器，煮炊具は土師器という機能の分担のあり方が原則的にみられる。したがって，出土土器の大半を占めるのは，須恵器杯類（食膳具）と土師器甕・鍋類（煮炊具）で，これに若干の須恵器甕類・瓶類（貯蔵具）が加わる。以下，各器種の概要を述べるが，名称はなるべく形態を表現する術語を用い，これを細分する場合にA・B・Cなどのアルファベットを付す。同一器種のうち法量のことなるものはⅠ・Ⅱ・Ⅲのローマ数字をさらに付す。須恵器の場合，製作技法による分類は基本的に必要としないが，土師器にはロクロを使用するものと使用しないもの（非ロクロ）があり，これによる大きな分類が可能である。この分類はあくまでも器種による分類ではなく，製作技法上の分類である。しかし，土器の系譜や時期を考える場合，重要な指標であり，便宜的に器種名に準じて扱うことにする。

須恵器（第35図）

無台杯（1～3）　杯のうち高台をもたないもの。食膳具の主体をなすもので，有台杯よりかなり多く全体の器種のなかでも個体数は最も多い。口径11～16cm，高さ3～4cmで，法量によりおおよそ大（無

台杯Ⅰ），小（無台杯II）の２つの器種に分類される。口径15cm前後の無台杯Ⅰ，口径12～13cmの無台杯IIにほぼ分類されるが，両者の境界は不分明なものもある。II期までの古い時期のみ無台杯Ⅰがある。

無台杯の口縁部の一部を片口にしたもの（3）が少量ある。「片口無台杯」とする。

有台杯（4～10）　杯のうち高台をもつもの。形態・法量からA・B・Cの３器種に分けられる。また体部外面に沈線をめぐらす有台杯Xがある。A・Bは基本的に有蓋と考えられる。

有台杯A（4～6）　有台杯のうち，身の浅いタイプ。有台杯ではもっとも一般的である。口径10～16cm高さ５cm以下で，法量によりほぼ大（Ⅰ）・中（II）・小（III）に分けられる。有台杯AⅠは口径14～15cm，有台杯AIIは口径13cm前後，有台杯AIIIは口径11cm前後である。AⅠは無台杯Ⅰと同様にII期まで存在し，小型のAIIIはIII期以降に目立つようになる。小型の有台杯AIIIは，深身で小型の有台杯Cと区別が不分明な部分もある。しかし，有台杯AIIIは浅身の形態の小型化したもので，有台杯Cは深身の形態（有台杯B）を小型化したもので，法量がかなり近似していても，全体のプロポーションや，底部外縁部から高台付近の形態，口縁部外面のつくりなどからおおよそ区別することができる。高さ５cm以上あるものは明確に有台杯Cといえる。また杯部のみの径高指数（器高／口径×100）が40以上のものは有台杯Cである。35以下はほぼ有台杯AIIIである。また，底部外周から高台接合部が長いもの，例えばSI 15（501）・SI 6（523）は有台杯AIIIである。有台杯AはIV期以降，少なくなる。小型の有台杯AIIIは内面に自然釉がかかり，焼成状況からも無蓋と考えられる。

有台杯B（7・8）　有台杯のうち身が深くて，大きいもの。口径13cm以上，高さ５cm以上である。深身のタイプには体部外面に沈線をめぐらすものもあるが，それは「有台杯X」とし，別の器種にする。IV期以降の佐波小泊窯（胎土B群）の有台杯は基本的には有台杯Bであるように，IV期には有台杯の主体をなす。

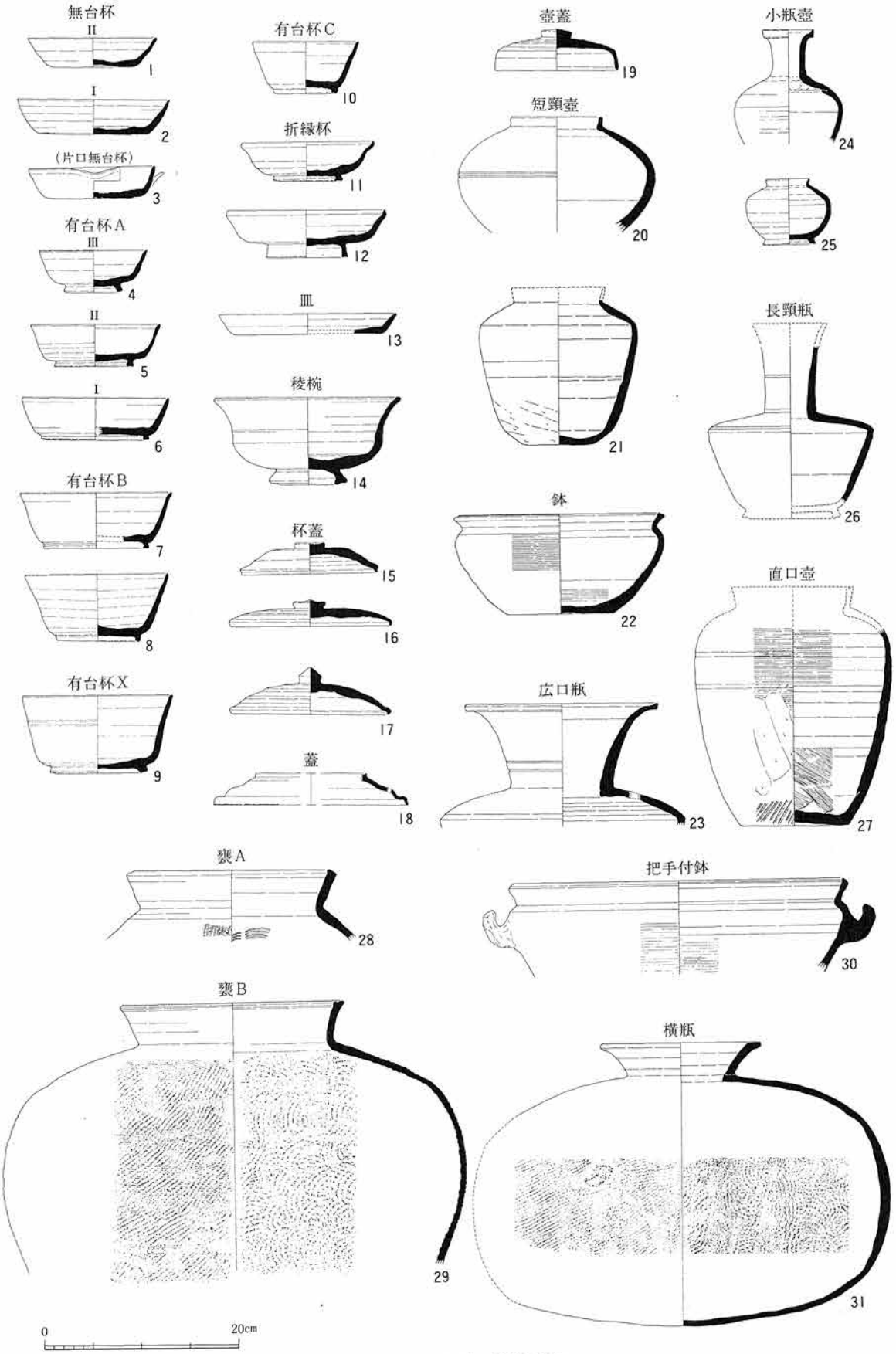
有台杯C（10）　深身で小型の有台杯。口径10～11cm，器高４cm以上である。有台杯Bの小型品で，有台杯BⅠ，BIIという分類もできるが，両者の区別が明瞭であり，「有台杯C」とする。有台杯Bと同様に９世紀以降に一般的になる。無蓋と考えられる。前述のとおり，小型の有台杯AIIIと区別しにくいものもあるが，相対的に身は深い。

有台杯X（9）　有台杯のなかで，体部外面に沈線をめぐらすタイプ。金属器写しと考えられる。一般的に浅身の有台杯より深身の形態にみられる。したがって，有台杯Bに器形が共通するものが多い。ただし，II期までは有台杯Aより深身ではあっても，さほど深身ではないものもある。

杯蓋（15～17）　有台杯にともなうもの。ただし，小型の有台杯AIIIと有台杯Cにともなうものはみられない。有台杯AⅠ・II，有台杯Bにともなうもので，数量もそれとほぼ同じである。17は天井部が丸くて高く，つまみの高さも高い。大きいことからも一般的な有台杯にともなうものではない可能性がある。

特殊な蓋として18がある。天井部に環状の突帯がめぐり，縁部が大きく屈折するもの，つまみが環状のものなどである。杯の蓋ではないと考えられる。数は少ない。

折縁杯（11・12）　口縁が外反したのち，端部が内湾する杯。あたかも蓋の縁部を逆にしたような形態をとる。越後でも阿賀北地方だけで生産が確認されている地域色の濃い器種である。口縁部の形態などから，「身」ではなく「蓋」とする見方もある。その場合，深身で体部外面に沈線をめぐらす金属器写しの有台杯Xなどが身として想定される。その理由としては，第一に口縁部の形態・つくりが蓋の縁部と同じであること，第二に「高台」が高くて、「つまみ」とも考えられることがあげられる。しかし，以下の点から「身」としたほうが妥当と考えられる。①この器種の出現期はともかく，のちになると「高台」は底くな



第35図　須恵器の器種分類

り，他の有台杯と同様の形態となり，「つまみ」としては不便な形態になる。②窯内における焼成時の置き方が「蓋」ではなく，「身」として取り扱われている。自然釉（厚い灰かぶりでなく，外面の色調の変化も含む）の付着状況から判断して，杯蓋は窯内で身とセットにして焼成する（天井部を上にして置く場合と，身の上に蓋を逆さにして重ねて置く場合が多い）。壷の蓋も使う際の位置において焼成する。しかし，この「折縁杯」は口縁部外面のみに自然釉がみられ，身とセットではなく，この器種だけで重ねて焼いたと考えられる。③これにともなう「身」がかならずしも明確ではない。これを「蓋」とした場合，これに伴うと想定される金属器写しの有台杯の数量はこの器種の量よりも少ない。生産地である須恵器窯出土の資料のうち，笹神村狼沢２号窯〔中川ほか1973〕では，法量・数量とも明確にともなう「身」は確認できない。以上の点から，古手のものに「蓋」も含まれるかもしれないが，基本的に「身」であったと考えられる。折縁杯はII期まではみられなく，III期以降に出現する。一般的な杯よりは少ない。

皿（13）　身のごく浅い皿。１点しかない。

稜椀（14）　体部に稜をもち，口縁部が外反する。金属器写しのタイプ。食膳具としては少なく，数点の出土。

短頸壷（20・21）　球形にちかい体部に短く直立した口縁部をもつ。一般に高台をもつ。体部に沈線をめぐらすものが多い。一般に自然釉がよくかかる。壷蓋が蓋である。数少ない壷類のうちでは，比較的目立つ。

小瓶壷類（24・25）　いくつかのタイプがあるが，数はごく少ない。頸部は長いものと短いものがある。

長頸瓶（26）　長い頸部をもつ瓶ないしは壷。IV期以降は体部が長いタイプになるが，数は少ない。

鉢（22）　鉢にはいくつかの器種がある。これは口縁部が短く外反し，口の広い鉢である。１・２点出土しているのみ。

把手付鉢（30）　把手をもった大型の鉢。２点程度出土。

広口瓶（23）　広く大きく外反する口縁部をもつもの。数点出土。

直口壷（27）　無台で長めの体部に短い口縁をもつもの。１点のみ出土。

横瓶（31）　甕についで一般的な貯蔵具。自然釉がよくかかるものが多い。

甕A（28）　広い口で短く外反する口縁をもつ比較的小型の甕。「広口甕」ともいえる。少ない。

甕B（29）　大きさはさまざまで，口縁部の形態も多様である。貯蔵具で最も多いが，多くは破片であり，口縁部が出土している住居跡はごく少ない。破片数は多いが，全体の個体数はそれほど多くないと考えられる。

甕C（図版111－1061～1064）　大型品で口縁部外面に波状文などを配する。

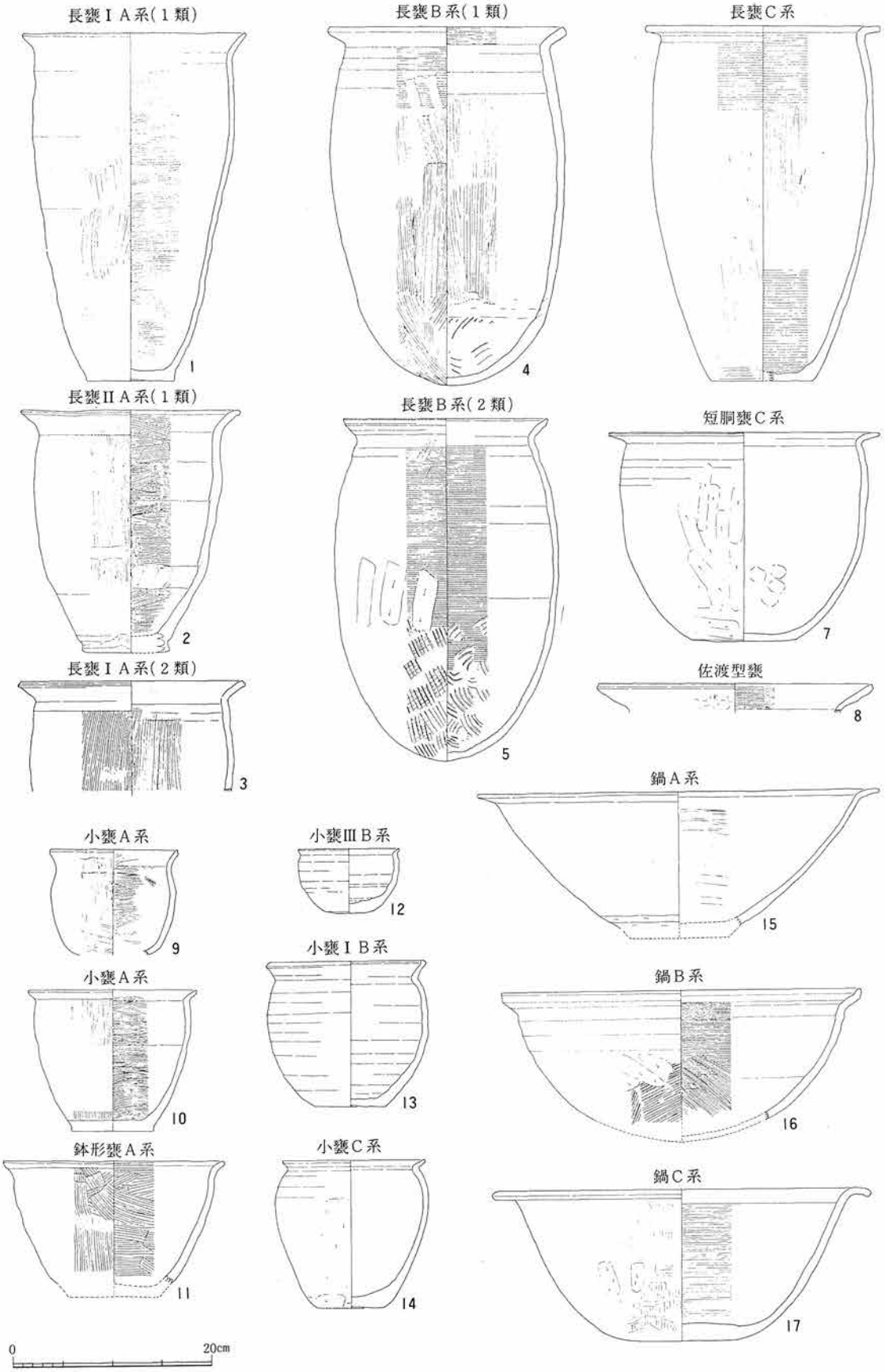
転用具　本来の器を転用したもの。

灯明皿　無台杯・有台杯にタールが付着し，灯芯の痕が残るものがある。これには意図的に口縁部を打ち欠いたものがある。

杯蓋硯　有台杯の底面，高台内側や杯蓋内面に墨痕を残すものがある。口縁部から体部を意図的に打ち欠いたものが多い。顕著に磨滅したものと，そうでないものがある。

土師器（第36・40図）

前述のとおり，土師器には製作技法が根本的にことなるものがある。それは大きくみて，ロクロを使用しているもの（ロクロ土師器）と，そうでないもの（非ロクロ土師器）である。非ロクロ土師器は古墳時代後期以来の系譜下にあるもので，ロクロ土師器は在地の須恵器生産が活発になる８世紀初頭に出現し，の

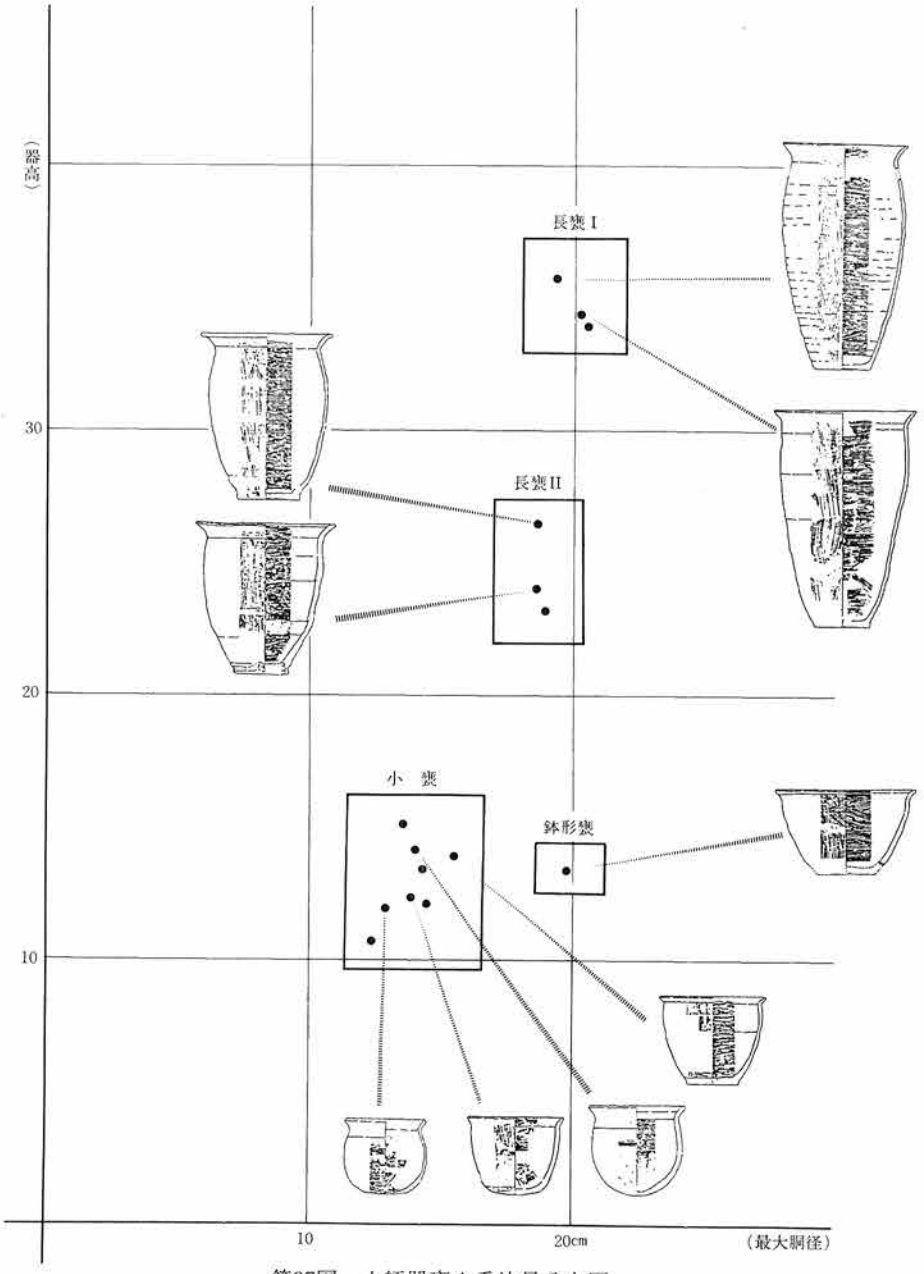


第36図　土師器の器種分類(1)

ちに普及するものである〔坂井1983a〕。古代の「ロクロ」は，多くの土器の観察からみて，粘土塊より水挽き成形が可能なものでなく、調整（整形）に使用する程度の一種の「回転台」と考えられる。したがって，「ロクロ土師器」は「ロクロ水挽き」の土師器ではなく，須恵器の製作技法でつくられた土師器を意味する。須恵器の製作技法とは，タタキ成形や粘土紐成形後のロクロ調整（成形），ロクロ回転によるカキ目などである。

長甕（1～6）　長胴の甕。小甕とならび，煮炊具の主体をなすもの。内面にまったく炭化物（おこげ）をとどめないことから，これで直接米を煮るものでない〔坂井1988c〕。器種はA系をのぞいてひとつである。製作技法は，A系（非ロクロ）・B系（ロクロ丸底タイプ）・C系（ロクロ平底タイプ）の3種に大別される。それぞれの製作技法についての詳細は後述する（103頁）ので，ここでは概略にとどめる。

長甕A系（1～3）　ロクロを使用しないもので，底部は平底である。頸部のしまりは少なく，体部のふくらみも少ない。高さは30～35cm，口径20～25cmのもの（長甕AI）が多いが，高さ25cm前後で，やや小さいもの（長甕AII）も多少ある（第37図）。

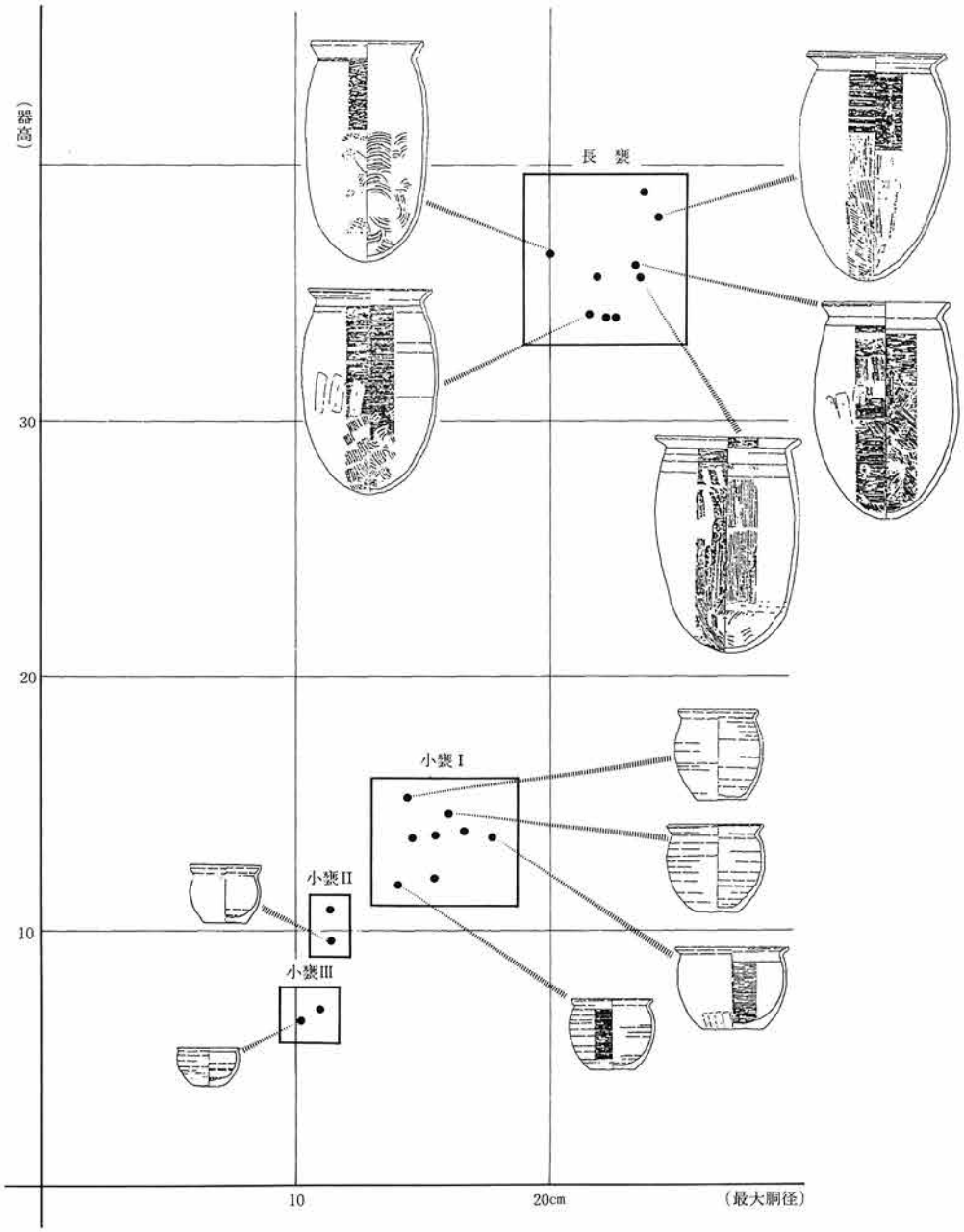


第37図　土師器甕A系法量分布図

長甕Ｂ系（４・５）　ロクロ土師器のうち，丸底形態のもの。一般的な「北陸型」の煮炊具である。口縁部は「く」の字状に外反し，体部はゆるくふくらみ，底部は丸い。

長甕Ｃ系（６）　ロクロ土師器のうち，平底形態のもの。「北陸型」ではなく，越後でも阿賀北地方に分布の中心をもつ公算が強い。ロクロ土師器成立期に一般的である。口縁部は「く」の字状ではなく，短く水平に外反し，体部はあまりふくらまない。底部は平底である。体部下半にタタキ成形はみられない。「北陸型」の煮炊具と比較し，「ロクロ土師器」と認めない見方もできよう。

小甕（９・10・12～14）　高さ15cm以下の甕で，長甕との器高差は大きい。口径は10～17cm。法量にはかなりの差がある。製作技法による分類は基本的に長甕と同様で，口縁部の形態も類似する。いずれも原則として平底である。口縁部内面のみに炭化物が帯状に付着しているものが多く，用途は汁物を煮ることが



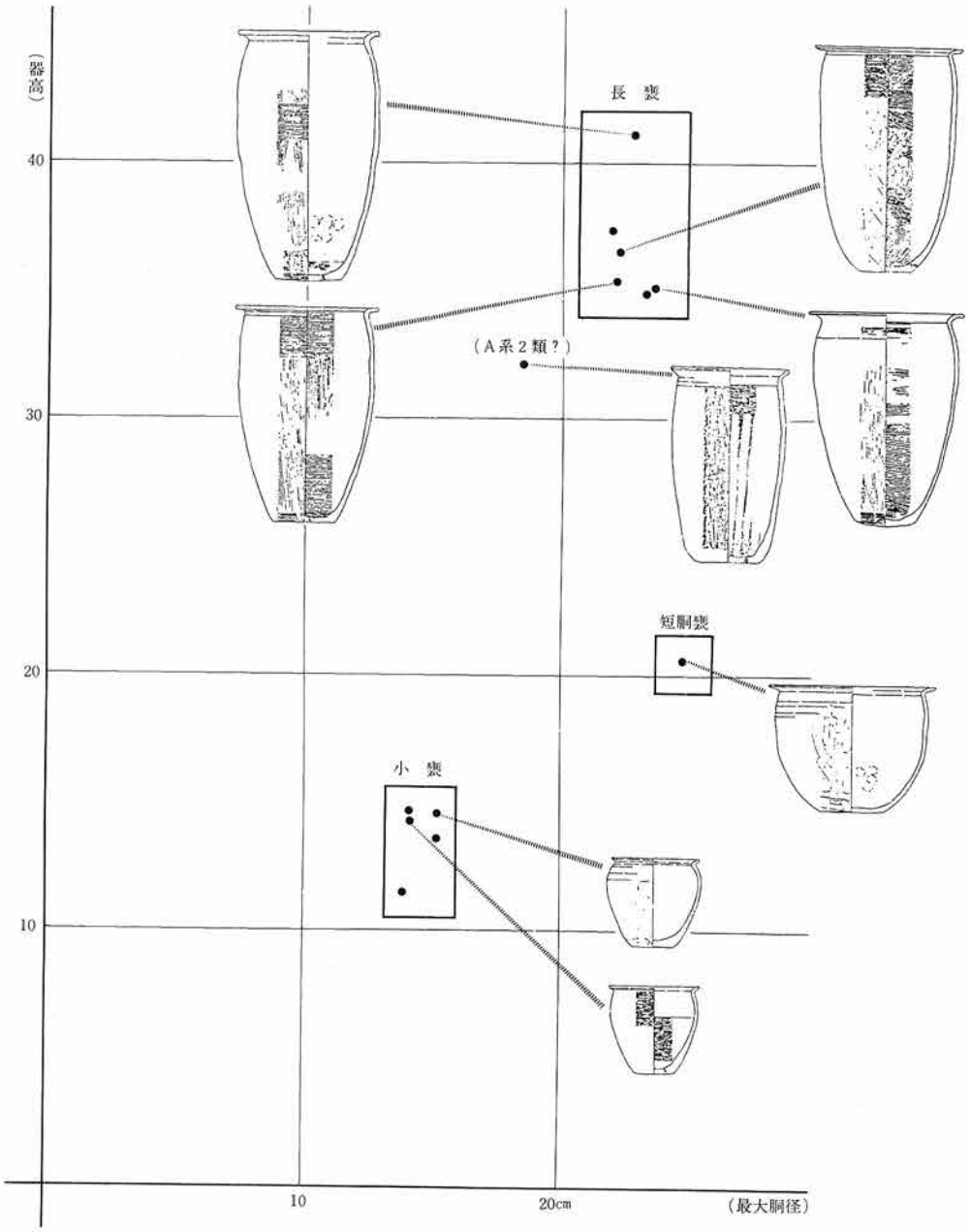
第38図　土師器甕Ｂ系法量分布図

主であったと考えられる。

小甕A系（9・10）　非ロクロの小甕。頸部のしまりがなく，体部はあまりふくらまない形態で，鉢にちかい器形のものが多い。高さ13～15cm程度のものと10cm前後のものがあるが，両者は明瞭に分離しない。まれに丸底のものがある。丸味をもつ平底もまま存在する。

小甕B系（12・13）　ロクロ土師器で，長甕B系と共通の技法により製作されたもの。口縁部は「く」の字状に外反し，体部は中位がふくらむ。底部は平底である。高さ14～15cmくらいのもの（小甕BI）と10～12cmくらいのもの（小甕BII）の2種が一般的であるが，7～8cmのごく小さいもの（小甕BIII）も少量ある。

小甕C系（14）　ロクロ土師器で，長甕C系と共通の技法により製作されたもの。口縁部は「く」の字



第39図　土師器甕C系法量分布図

状ではなく，短く水平に外方にのび，体部は上位がふくらみ，肩が張る形態である。高さ14～15cmのものが多い。

鉢形甕（11）　煮炊具で，頸部のしまりがなく，口径に比し，器高が小さいもの。形態は小甕A系と共通する面があり，製作技法は非ロクロである。量は少ない。

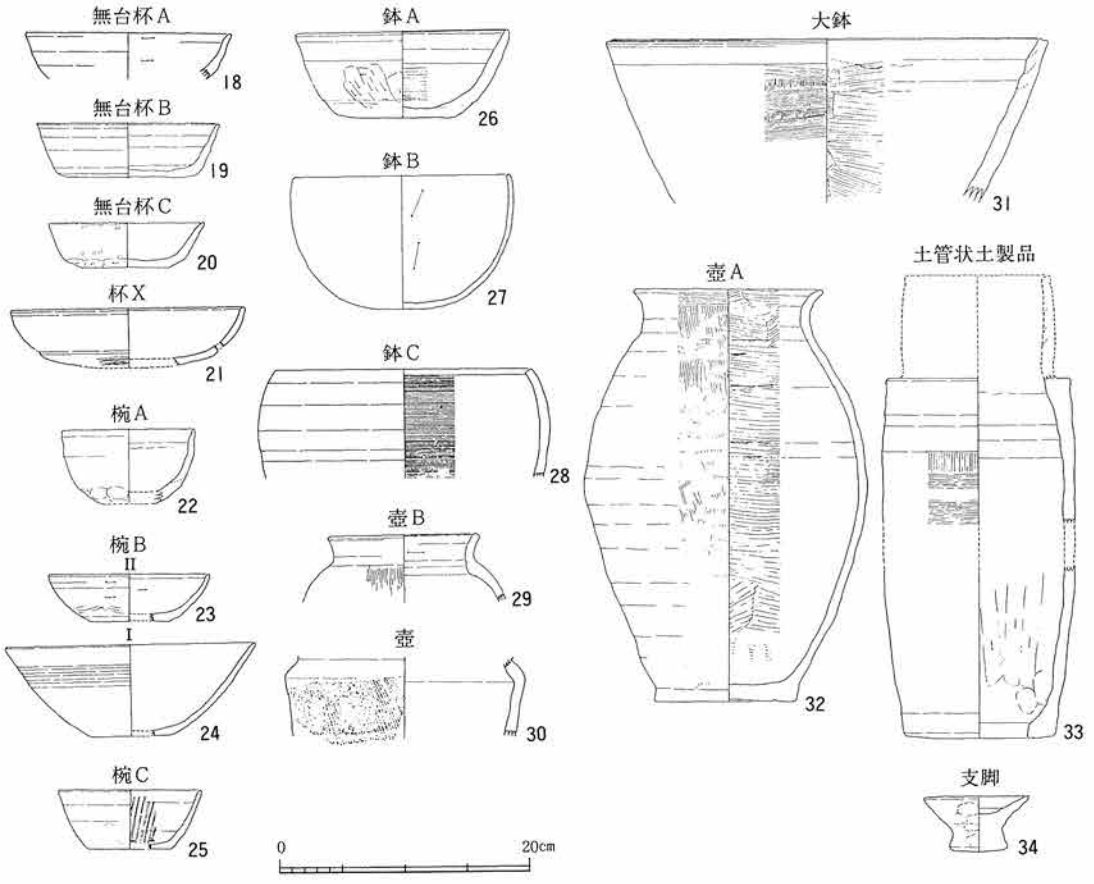
短胴甕（7）　口径25cm以上の大型の甕で，長胴の形態をとらないもの。量は少ない。製作技法は長甕と同様にA系（非ロクロ），B系（ロクロ丸底），C系（ロクロ平底）がある。

佐渡型甕（8）　製作技法が特異で，佐渡特有の特徴をもつもの。2・3点あるのみである。当遺跡出土土器には全体の器形を知りうるものがないが，非ロクロで，ごく薄い器壁と砂粒を多く含む胎土から，佐渡から搬入されたものと考えられる。平安期の佐渡においてはロクロ土師器の甕は皆無で，非ロクロである。しかも，形態は球胴で丸底であり，その系譜は畿内地方に求められる〔坂井1988b〕。越後に搬入された例は，出雲崎番場遺跡〔坂井ほか1987〕にある。

鍋（15～17）　煮炊具としては長甕，小甕に次ぐ量がある。製作技法は長甕・小甕と同様に，鍋A系（非ロクロ），鍋B系（ロクロ丸底），鍋C系（ロクロ平底）がある。鍋A系はごく少ない。それぞれ形態・製作技法は長甕に類似する。

大鉢（31）　浅めの身に直線的にひらく体部，口縁部をもつ。平底であろう。煮炊具と考えられる。ロクロ土師器にある。1～2点あるのみ。

鉢（26～28）　鉄鉢形のもの（鉢B），大きい椀形のもの（鉢A），ロクロ土師器の鉄鉢形のもの（鉢C）が



第40図　土師器の器種分類(2)

ある。鉢Aは食膳具の可能性もあるが，二次焼成がみられる。1点のみである。

壷（29・30・32）　須恵器生産がすでに始まっている時期なので，土師器の貯蔵具はごくまれである。壷A・壷Bがある。壷B（29）はやや小型で，丁寧につくられたものである。ロクロ土師器。1点のみである。壷Aは大型で，古墳時代後期以来の系譜をもつ非ロクロの土師器である。長甕A系より頸部がしまり，体部のふくらみがやや大きい。内外面をヘラミガキする。

無台杯（18～21）　19・20は須恵器の無台杯を模倣したと考えられるもの。非ロクロの土師器無台杯C（20）とロクロ調整の無台杯B（19）がある。無台杯Bは製作技法は須恵器と同一であるが，胎土が須恵器と明確に異なり，土師器に共通する。無台杯A・Bともにごく少ない。このほかに赤彩される精製品の無台杯A（18）がある。これはロクロ土師器である。特殊なものとして，東北系の黒色土器かと考えられる杯X（21）がある。

椀（22～25）　大きさ・手法ともいくつかある。

椀A（22）　非ロクロの小型品で，古墳時代後期の系譜をもつ食膳具と考えられる。数は少ない。Ⅰ期におもにみられ，片口をもつものもまれにある。

椀B（23・24）　ロクロ土師器の椀として，一般的なタイプである。平底で高台をもたず，体部は丸味ををもってたちあがるもの。口径13～15cmのもの（椀BII）と口径20cm前後のもの（椀BⅠ）がある。椀Cを含めて，ロクロ土師器の椀はIV期以降にみられるようになる。住居跡出土土器では少ない。

椀C（25）　椀Cは椀Bよりも口径に対する底部の比率が大きいもの。内面に暗文状の細かいヘラミガキがみられる。ごく少ない。

土製品（33・34）　用途不明の土製品がいくつかある。

土管状土製品（33）　ロクロ調整でタガのような段をもつもの。段は複数の個体をはめ込むためのものと考えられる。一方の端部内面は内側に厚くなる。類例に古墳時代後期にもよく見られる土製品がある。それは非ロクロであり，明瞭なタガをもっていないものが多い。二次的に焼けているものがあり，カマドなどに関連した土製品の可能性が考えられる。

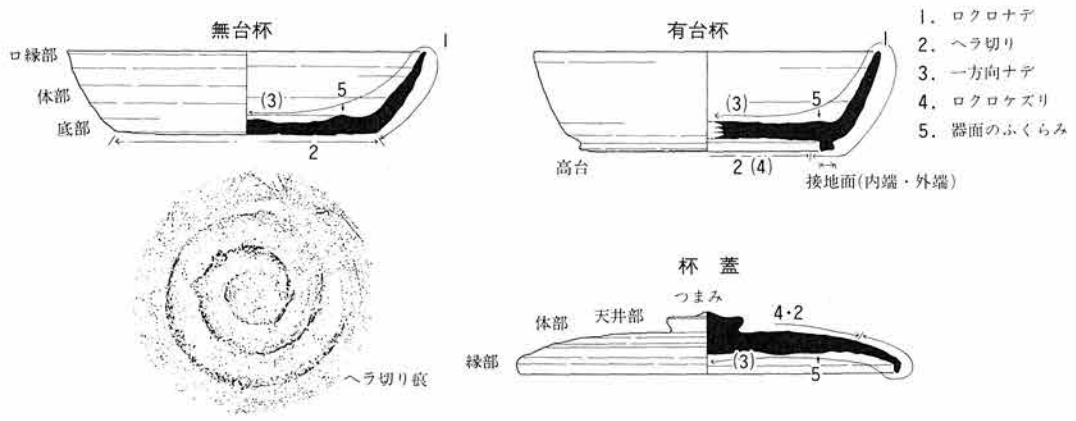
支脚（34）　棒状の土製品で，カマドに使う支脚と考えられる。数はごく少なく，調査例からみても，多くの支脚は石と考えられる。受部のような部分をもつものもカマドから出土しており，支脚の可能性がある。

2）　土器の製作技法

ここでは出土土器の大半をしめる須恵器杯類と土師器甕類の調整技法を含めた製作技法について述べておく。あわせて調整技法の定義にもふれることにする。

須恵器（図版216～220）

無台杯（第41図）　底部外面がヘラ切り不調整で，ほかがロクロナデであるのが一般的である。「ロクロナデ」はロクロの回転を利用したヨコナデである。ロクロの回転方向は右回りが一般的である。底部の切り離しが糸切りであるのは1点のみ（SI1－672）だけである。糸切りは回転糸切りである。越後で糸切り技法が確認されるのは頚城地方の浦川原村・三和村末野窯跡群〔小島ほか1983〕，上越市滝寺窯跡群，中越地方の三島町一の沢窯跡〔中村1984〕くらいで，下越地方ではみられない。したがって糸切りのSI1（672）は搬入品と考えられる（図版219－1）。なお，この糸切りの「無台杯」は東海地方の猿投窯の系譜下にあり〔坂井1988a〕，器種は「無台椀」というべきものである。



第41図　須恵器杯類の調整技法

底部の再調整は一般的にみられず，かるくロクロナデを加えるものがある程度である。まれにハケ目（1034），ロクロケズリ（1035），手持ちのヘラケズリ（1030）がある（図版219）。「ロクロケズリ」はロクロの回転を利用したヘラケズリである。底部外面に数本の条線状圧痕（図版217－4・5）がみられるものがある。底部内面の外周ちかくは器壁が厚く，その外側（底部と体部の境）が薄くなる。上から見ると，このふくらみが輪状にめぐる（図版216－1・220－4）が，これは第一次の成形時に，底部の粘土板と体部の粘土紐を貼り合わせることによって生じたものと推定される。すなわち底部の粘土板の上から体部の粘土紐を重ね，接合部の外側（底部内面外周）を強くロクロナデするのではないかと思われる。体部・口縁部の器面には接合痕をわずかにとどめる例はかなりある。糸切りのものは底部内面の凹凸は少ない。

有台杯　基本的に無台杯に高台を貼り付けたものである。高台は断面方形のものが多く，貼り付け後ロクロナデを施す。底部糸切りのものはみられない。高台内側はヘラ切りのままで，ロクロケズリは加えないものが多い。ただし，SI 1461（255）・SI 7（464）だけは丁寧にロクロケズリする（図版219－8・218－5）。前者は底部が著しく丸く，高台接地面が突出し，東海系の技術系譜のものである。後者は底部糸切り後にロクロケズリしたものと考えられ，同様に東海系と考えられる。

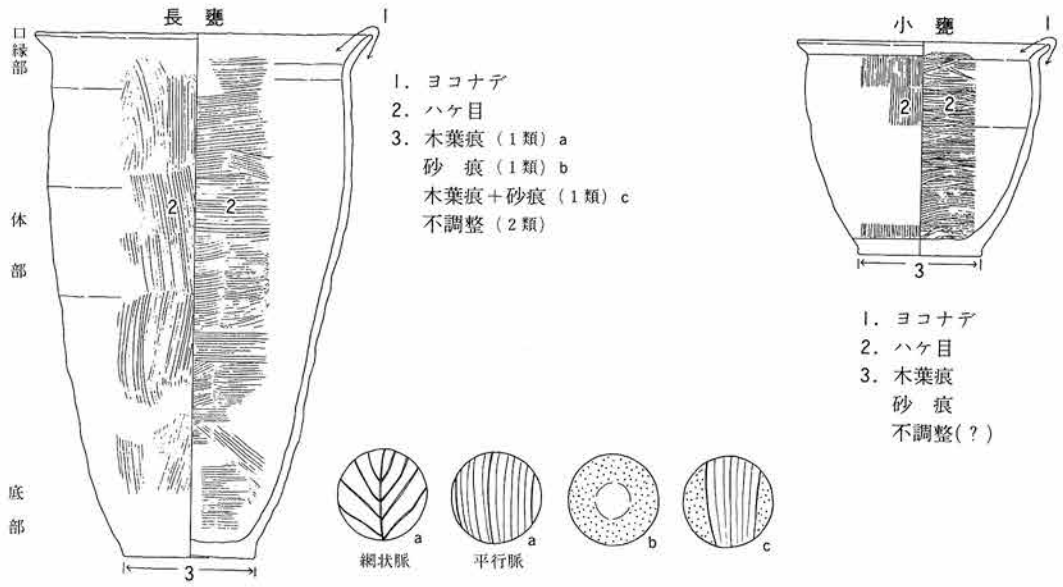
杯蓋　製作技法は基本的に杯と同一である。「無台杯」の体部のひらきを大きくし，縁部を屈曲させ，逆さにして「底部」につまみを付せば，「杯蓋」になる。一般には天井部がヘラ切り・ロクロケズリ，ほかはロクロナデである。杯と同様に天井部内面に器壁が厚く，ふくらむ部分がみられる（図版218－2）。ロクロケズリを丁寧に施し，ヘラ切り痕をすべて消すもの，ロクロケズリをまったく施さず，ヘラ切りをそのまま残すものがある。またかるくロクロナデを加えるものもある。無台杯と同じく，天井部が糸切りのものが1点（1042）ある（図版218－4）。一般に糸切りの杯蓋は糸切り痕をロクロケズリで消すが，これは糸切り痕をよく残す。

土師器（図版221～224）

長甕A系（非ロクロ，第42図）　底部は平底で，体部はふくらまず，口縁部と体部の境が不明瞭で，口縁部はゆるく弧状に外反する。Ⅰ期を中心に存在し，Ⅲ期以降はほとんどみられない。

口縁部はヨコナデであるが，ナデがごく粗いもの（1類）と丁寧にヨコナデしているもの（2類）がある。1類はハケ目がよく残り，歪みも大きいが（図版223－1），2類は口縁部に端面をもち，歪みも少ない（図版223－2）。1類は「回転台」を使用せず，土器を固定したまま，ナデているものと推定される。

体部内外面はハケ目で，外面はタテ方向，内面はヨコ方向が一般的である。器面には粘土紐のふくらみ



第42図　土師器甕Ａ系(非ロクロ)調整技法

がよく残り，接合痕をそのまま残しているものもある。

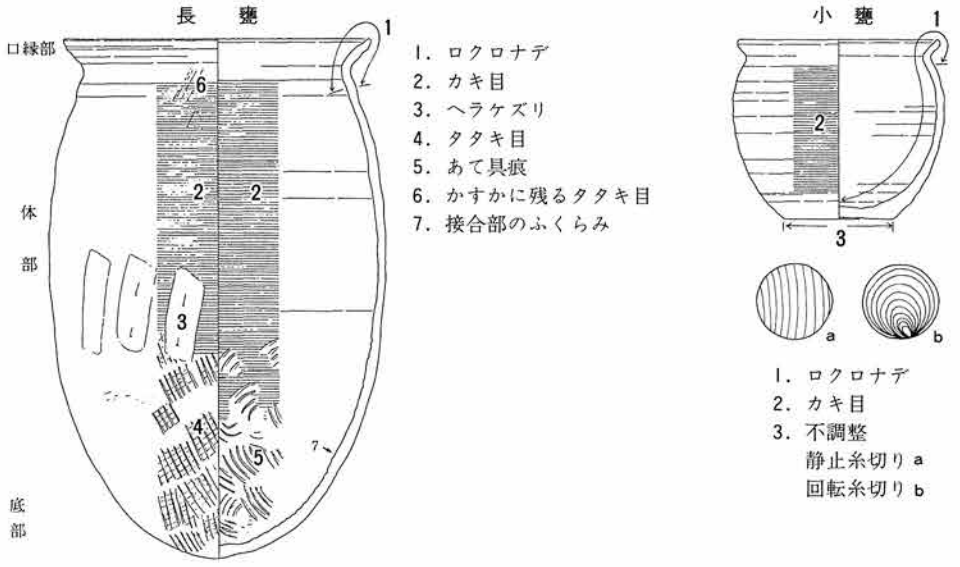
底部は安定した大きな平底である。底部外面は「木葉痕」・「砂痕」・「不調整」などがある（図版221・222)。木葉痕は木の葉の裏面の葉脈の圧痕が底面に残るもので，広葉樹の網状脈ほかに，笹のような平行脈のものもある。砂痕は砂が付着したもので，木葉と同様に底面が「土器製作の台」から離れやすくするために砂を使ったものと考えられる。砂の付着は底部の中央をのぞく周縁部のみである。これは底部中央がややくぼむことによるのであろう。砂痕と木葉痕の両方が存在するものもある。木葉痕と砂痕は１類に，明瞭な調整がみられない不調整のものは２類に多くみられる。「回転台」を使用するとすれば，木葉や砂などの「離れ材」は不必要であり，１類は「回転台」不使用，２類は「回転台」使用という想定を支持する。

長甕Ａ系の成形は平らな底部の円板の上に，粘土紐を積み上げる。体部の下部から口縁部までの積み上げは一気におこなわず，３回程度に分ける。それは粘土自体の重味で，一気に上部まで積み上げると形を崩すためと考えられ，ある程度乾燥させたのち，さらに積み上げるのであろう。積み上げの単位は土器のカーブの変化点や器壁が厚くなる部分で判別できる。粘土紐の接合方法は，実測図の断面に表現すると，左下がり右上がりの線になる。すなわち，上の粘土紐はすでに積んである下の部分の内側に張り合せ，ユビオサエで接合させる。ある程度粘土紐で成形したのち，体部内外面をハケ目で調整し，口縁部はヨコ方向にナデる。

長甕Ｂ系（ロクロ丸底タイプ，第43図)　底部は丸底で，口縁部は体部から明瞭に屈折し，直線的に「く」の字状に外反する。Ⅰ期より存在し，Ⅲ期以降の大半を占める。細部の技法は多様である。

口縁部は内外面ともロクロナデである。口縁端部は古い時期には丸いが，次第に面をもち，つまみ上げられるものが多くなる。

体部上位は内外面カキ目が一般的である。カキ目がなく，ロクロナデのもの，ごく部分的におこなうものがある。またハケ目のものもある。「カキ目」はロクロ回転を利用した「ハケ目」であり，カキ目とハケ目の原体は基本的に同じものである。したがって，同一個体に同一の原体で施したものであっても，ロクロ回転を利用したものであれば，「カキ目」であり，ロクロを静止させた状態であれば，「ハケ目」である。つまり，タテ方向の「カキ目」，非ロクロの「カキ目」は存在しない。「カキ目」の前にタテ方向の「ハケ



第43図　土師器甕Ｂ系（ロクロ丸底）調整技法

目」を施すものがII期前後にみられる。まれに外面のカキ目の下にタタキ目の痕跡が残っているものがある。それは口縁部外面のロクロナデの下にも観察される場合があり，それらはカキ目やロクロナデの前にその部分までタタく工程があったことを示す。タタキ目を残すものは概して体部から口縁部の屈折が直線的で，ロクロナデやカキ目がシャープである。製作状況を示唆する点として注目される。これに対し，器壁が厚く，口縁部の屈折やカキ目・ロクロナデなどの形態・調整がシャープでないものがある。これらは古いものに多く，シャープなものは新しいものに多い。したがって，こうした観点からＢ系は分類することが可能でありシャープなものを「２類」，そうでないものを「１類」とする。器面の内外面は幅２～３cmの間隔で若干の凹凸があり，粘土紐の積み上げにより成形していることがわかる。

体部中位から下位の外面は，タタキ目・ハケ目・ヘラケズリなどがなされる。時期などによりあり方は多様である。タタキ目をよく残すようになるのはIII期以降であり，その場合は中位だけにタテ方向にヘラケズリやユビナデを施す。なかには底部までカキ目のものもある。ヘラケズリは上から下への方向が一般的である。タタキ目は平行文が大半で格子目文が少量ある。内面はタタキ目に対応するあて具痕やハケ目である。両者とも外面と同様，あり方は多様である。あて具の文様は同心円文が多いが，放射状文もみられる。

長甕Ｂ系の製作技法は必ずしも明瞭でない部分もあるが，おおよそ次のように考えられる。

①　ロクロ上で平底の長甕のかたちを粘土紐の積み上げによって，成形する。この成形は基本的に非ロクロの長甕と同じ方法をとる。

②　ロクロを回転させ，中位から口縁部をカキ目・ロクロナデにより調整し，かたちを整える。この作業の前に，中位から上位，さらには口縁部までタタキ成形するものもある。

③　前の段階の状態で，一定の時間をおいて，やや乾燥させてから，土器を手でもちあげ下半部の内面にあて具を用い，外面からタタいて，底部を丸底形態にタタキ出す（タタキ出し）。一部にハケによる押し出し（ハケ押し出し）も考えられる。

④　逆さに置いて，ヘラケズリ・ハケ目など加える。

①のように平底形態をタタキにより丸底に押し出すことは，底部にちかい部分の器壁が一定ではなく，鉢巻き状に厚い部分がめぐることからうかがえる。平底の際は底部と体部の接合部が必然的に厚くなり，

これを丸底にタタキ出したとしてもこの厚い部分がそのまま残るからである。

長甕C系（ロクロ平底タイプ，第44図）　体部のふくらみは少なく，頸部のしまりもあまりない。口縁部は短く水平にのびる。口縁部のみの破片でもその角度により長甕B系か長甕C系かはおおよそ判断できる。体部上半部にカキ目が施され，ロクロ回転を利用した調整がみとめられるが，平底である。ロクロ土師器の古い段階，とくにII期に一般的である。III期以降にはみられない。

口縁部は内外面ロクロナデである。体部上位は内外面カキ目である。タテ方向のハケ目もままある。中位から下位の外面はタテ方向のハケ目・ヘラケズリである。タタキ技法をいっさい用いない。ハケ目の原体を強く施し，ケズリの効果をもつものもある。これはハケ目・ヘラケズリと区別する意味で，「ハケケズリ」とする。ハケ目・ヘラケズリ・ハケケズリは底部外面にまで及ぶ。体部下端は横方向のハケ目，ハケケズリをするものが多い。内面はナデ・指頭圧痕・ハケ目・ロクロナデなどである。

長甕C系の製作技法は，長甕B系のタタキにより丸底形態にする工程を省いたものである。ただし，ロクロナデやカキ目は，一部のシャープな長甕B系より確実に鈍く，「ロクロ」の機能などの差が示唆される。

小甕・鍋　小甕のA・B・C系，鍋のA・B・C系はそれぞれ長甕のA・B・C系と形態上類似するばかりでなく，共通した技法によってつくられており，対をなすことは明らかである。ただし，形態上ことなるのは小甕B系が原則として丸底ではなく，平底であることである。したがって，小甕は一部をのぞいていずれのタイプも平底形態である。

長甕と形態がことなる小甕B系以外の小甕は製作技法はほぼそれぞれの長甕と同様である。小甕B系は口縁部と体部上位については同じである。なかにはカキ目ではなく全面ロクロナデのものもある。8世紀代には，体部外面下半に斜め方向のヘラケズリがよくみられる。底部外面は不調整か，糸切りである。「不調整」は明確な切り離しや調整痕がないものである。糸切りはIII期に出現する。糸切りには回転糸切りと静止糸切りがある。

3）　実測図の表現方法

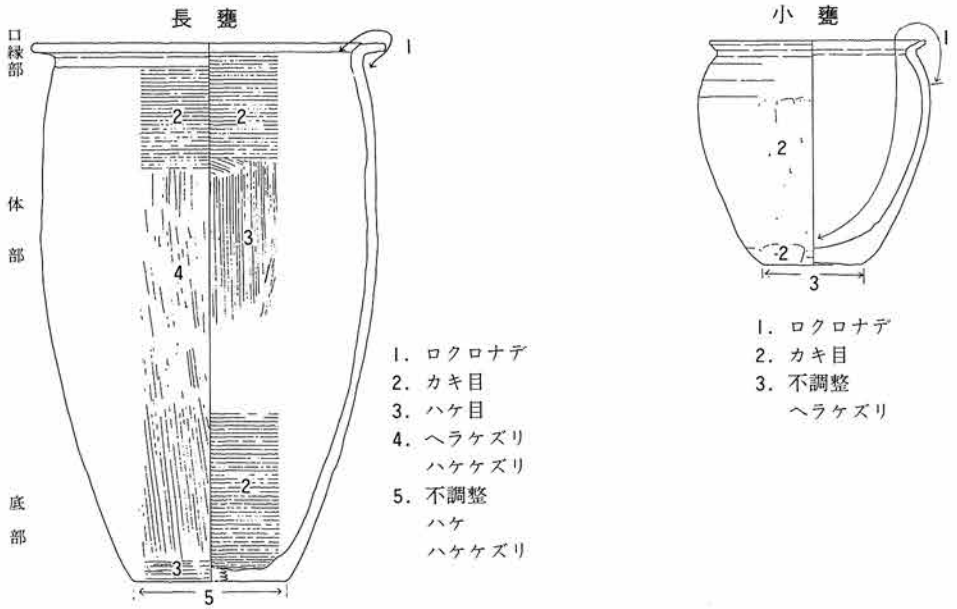
土器の実測図は原則として通例にしたがって表現したが，本書に限って，一定の基準を採用したものもあるので，あらためて実測図の表現方法を説明しておく。

① 中心線の右側は断面と内面，左側は外面を描く。

② 原則として全体（径）の2/3以上残存しているものは，中心線の両面を測り，ほぼ1/2以下のものは，片面を測って反転した。小破片で径の復元が困難なもの（ほぼ1/12以下）については，中心線と左右の図の線を離した。

③ 外形と断面以外の線には，定規で引いた直線とフリーハンドの線の2種がある。定規で引いた直線は横方向のものに限られるが，これは「ロクロ」，あるいは「回転台」の回転を利用して生じた線を意味し，それ以外のものはフリーハンドの線である。代表的なものは，口縁上端部の線であり，非ロクロ土師器のうち「回転台」を使用していないと考えられるもの（1類），すなわち，口縁部の歪みの大きいものはフリーハンドで表示し，ロクロ土師器と非ロクロ土師器でも口縁部のヨコナデがていねいなもの（2類）は口縁部を定規の直線で表示した。

④ 「ナデ」・「ヨコナデ」・「ロクロナデ」はナデの痕跡などの具体的な表現はしていないが，「ヨコナデ」と「ロクロナデ」による器面の凹凸（稜線など）は2点で切った破線で示した。この場合原則として凸部に線を入れたが，凹部が顕著な場合は，これにも線を入れた。「回転台」を使っていないと



第44図　土師器甕C系(ロクロ平底)調整技法

考えられる弱い「ヨコナデ」はフリーハンド,「ロクロナデ」と「回転台」を使ったと考えられるていねいな「ヨコナデ」は定規の直線である。また,「ヨコナデ」・「ロクロナデ」の範囲を示すところ,たとえば,口縁部と体部の境付近の内外面には調整技法の変化することを明示する意味で,実線で表示した。ただ,範囲が明確でない場合もありかならずしも一本の線で表現できないこともある。

⑤　横方向の実線はほかに有台杯の高台の張り付け部,杯蓋のつまみの張り付け部のほか,顕著な器形の変化する点にも用いた。また,沈線も2条の直線で表示した。直線の箇所や断面の凹凸などを勘案してその表現する意味を判断されたい。

⑥「カキ目」と「ハケ目」は前述のとおり同様の原体で施すものであるが,「カキ目」はロクロ回転を利用した横方向の条線であり,定規の直線,「ハケ目」はフリーハンドである。両者の表現は中心線に近い部分に限る。

⑦　ヘラケズリにはロクロ回転を利用した「ロクロケズリ」,それを利用しない「ヘラケズリ」がある。「ロクロケズリ」は定規の直線で,その調整がはじまるところは実線,それ以外のケズリの単位(稜線)は1点のみ切る破線で表示した。「ロクロケズリ」には砂粒の移動痕を表示せず,「ヘラケズリ」にはそれを行なった。また「ヘラケズリ」は1回の単位がわかるものについては,その範囲を破線で示した。

⑧「タタキ目」・「あて具痕」・「指頭圧痕(ユビオサエ)」などの調整も適宜表示した。調整以外では粘土紐の接合痕なども明確なものについて表現した。断面で明瞭に観察できる接合痕は破線で入れた。

⑨「ヘラミガキ」は原則としてその単位を表現していないが,方向を矢印で表示した。ただし暗文風に入念に施すものはこの限りではない。

⑩　底部の調整は実測図で表現できないため,観察表の手法に記入した。ただし,土師器甕類は不調整が大半で,これについてはとくに記していない。使用痕のうち灯明皿かと思われるタール状の付着物,転用硯の墨痕などは網目で表現した。「スス」・「炭化物」・「黒斑」は表示していない。観察表を参照されたい。

4）　土器の胎土

土器の胎土は一様ではない。胎土は土器の生産を示す有力な情報であり，それを明瞭に識別することは土器の生産と流通を考えるうえで，きわめて重要である。しかしながら，個々の土器について，生産地を同定することはかなりむずかしい。須恵器であっても，かならずしも生産地の状況が細かくわかっておらず，胎土等に含まれる鉱物や素地についての理解も不十分だからである。

ここでは，須恵器については3つに大別し，土師器には含まれている鉱物をわかる範囲で記入した。個々の土器の胎土は観察表に記した。

須恵器

A・B・Cの群に大別した。

A群　胎土そのものが相対的に粗く，石英・長石・金雲母を多く含む。量的に最も多い。実測個体では全体の約70%である。石英・長石・金雲母は花崗岩を起源とする鉱物で，当遺跡に最も近い笹神丘陵の笹神・真木山窯跡群を中心とする阿賀北地方の須恵器と推定される。器面はざらついたものが一般的で，含まれる鉱物の粒子は金雲母をのぞくと比較的大きい。笹神・真木山窯跡群以外の新発田市ホーロク沢窯跡（第Ⅶ章2A），加治川村下中山・貝屋窯跡群〔戸根1973，川上1982〕も，含まれる鉱物は同様で，器面の感触も類似しており，肉眼ではこれらを識別することはできない。ただ，地理的条件や窯の数からみてA群の多くは笹神・真木山窯の製品であることは確実であろう。

B群　胎土そのものが精良で，長石かと思われる白色小粒子を多く含み，器面に黒色の小さな吹き出し，斑点がみられるもの。9世紀後半以降急速に多くなるもので，産地は佐渡の小泊窯跡群と考えている。器種によって胎土がことなるようであり，無台杯は胎土がとくに精良で，器面はなめらかで，水でぬらしてロクロナデした際のヌタ状の付着がみられる。まれに，「海綿骨針」（ごく小さくて白い針状のもの）を含むものがある。甕・瓶類は白色小粒子のほかに黒い小さな斑点が多くみられる。越後の須恵器生産が急速に衰退する9世紀後半以降，10世紀前半までは佐渡小泊窯の製品は越後に数多く流通し，消費地の須恵器の大半を占めている〔坂井1988b〕ことから，とくに当遺跡のあり方が特異なものではない。

C群　A群・B群以外のものを一括した。胎土が精良であるが，長石・石英の粒子を含むものが多く，器面はなめらかである。生産地の候補は阿賀野川以南でも北側の新津丘陵の新津市七本松窯跡〔中川ほか1956〕，五泉市山崎窯跡〔川上1981〕，出雲崎町・和島村・寺泊町にかけての西古志窯跡群などである。山崎窯跡の須恵器には「海綿骨針」を多く含む。C群に含めたなかにも「海綿骨針」を含むものはいくつかある。新津丘陵以外の窯の製品もこれに含まれている可能性が高いが，多くは新津丘陵のものではないかと思われる。したがって，本遺跡出土須恵器の大半は以上の3つの地域（阿賀北地方・佐渡小泊・新津丘陵）で生産されたものと考えられる。

土師器

土師器については生産状況が須恵器ほど明確には把握できず，胎土も明瞭な識別基準をもっていない。しかし，多くの個体を通観すると，須恵器と同じくらいの種類が存在することが感じられる。まず，おおよそ識別できるのは，非ロクロ土師器（技法A系）とロクロ土師器（技法B・C系）である。後者は基本的に須恵器と同様の胎土（須恵器系胎土）と想定しているものである。素地となる粘土に大きさが比較的均一な鉱物を含むもので，須恵器A群と同じように，素地そのものが，粗雑で石英・長石・金雲母を含むものが多い。また素地は精良で，含有鉱物も少なく，須恵器のC群に対応すると考えられるものもある。一

方，非ロクロ土師器の胎土はロクロ土師器と比較して，含有鉱物が石英・長石・金雲母などに限定されず，ほかの礫を含み，しかもそれらの粒子がロクロ土師器に含有される粒子に比し，粒子の大きさが一定しておらず，形も丸味をもっている。このことから，非ロクロ土師器の胎土は粘土に川砂などを混ぜたことが推定される。川砂は大きさが一定でなく，丸く磨滅しているからである。これに対し，ロクロ土師器の胎土は山土のなかに存在する鉱物の粒子をそのまま「混入」していると推定される。

このような，非ロクロ土師器とロクロ土師器の相違は，両者がともに存在する８世紀前半代を中心とした時期に注意されるが，もうひとつの区別は９世紀に入ってから，胎土Ｂ群（佐渡小泊窯）の須恵器が流入するようになって，同じロクロ土師器のなかで生じる。それは須恵器系胎土とはことなり，胎土そのものが精良なものである。こうした胎土は須恵器とは別のものであり，両者の生産地が別であることを示唆しよう。

以上を整理すると，土師器の胎土はおおよそ次の３つに分けられる。

①　非ロクロの土師器に特有なもの。「非ロクロ系胎土」。

②　ロクロ土師器のうち，一部の新しい時期のものをのぞくもの。「須恵器系胎土」。

③　ロクロ土師器のなかで，須恵器系胎土でないもの。「非須恵器系胎土」。

胎土に含まれる鉱物等は「混和材」であり，土器作りにあたり意図的に混ぜたものという意見がある〔北野1988〕。川上貞夫氏によれば，須恵器窯が多く存在する笹神丘陵の土には，いっさい鉱物は含まれておらず，須恵器に混っている鉱物は，川から採取したものであろうという。もしそうであれば，笹神・真木山窯跡群の粗雑な胎土は意識的に混入した「混和材」によって生れたものと考えられる。しかし，筆者が豊浦町滝沢の丘陵から直接採取した土には，１～２㎜大の石英・長石・金雲母が多く含まれており，感覚的にはこのような鉱物混じりの粘土をそのまま土器の素地に使用した可能性も考えられる。なお，須恵器と土師器が同一の胎土としても煮炊具にはより多くの粒子を含んでおり（狼沢２号窯の資料など），素地作りにあたっては須恵器の食膳具・貯蔵具と土師器の煮炊具とでは明確に区別していたことがうかがえる。

５）　使用痕

土器の使用痕は土器が具体的にどのように，何に使われたかを示す重要な情報である。そのためここではできる限り，注目される使用痕を観察した。

須恵器

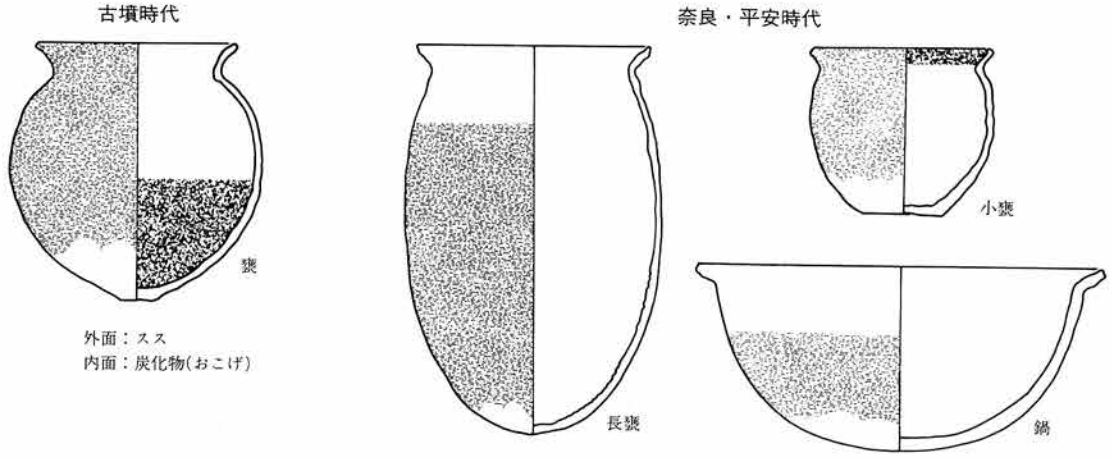
須恵器の使用痕は通常少ない。供膳・貯蔵という機能から，器そのものに使用痕が残ることが少ないからであろう。顕著なものでは灯明皿と硯がある。灯明皿は明かりとりに使用したもので，杯の口縁部内面にタール状の黒褐色の付着物がみとめられるものである。なかには灯芯の痕跡をよく残すものがある。また，杯の口縁部を意図的に打ち欠いて，灯芯をおくようにしたものもある。明確に灯明皿と判断されるものは多くはないが，タール状の付着がみとめられるものはかなりある。

硯は墨跡である。杯蓋の内面，有台杯の底部外面を利用したものが多い。しかし，明確な磨滅をともなわないものが多く，これらは墨をするものではなく，墨を留めるだけのものであろう。

墨跡をともなわず，器面がよく磨耗しているものはかなりの数にのぼる。杯の底部内面，杯蓋の内面に多い。これについては実際に食膳に際して生じたものもあるであろう〔木立1988〕。したがって杯蓋はたんなる「蓋」ではなく，「身」としての機能を兼ねたものとして考える必要がある。

土師器

土師器の大半を占める煮炊具の使用痕は，①二次焼成，②外面のスス，③内面を中心とした炭化物（おこげ）がある。従来「二次焼成・スス付着」といった観察に終ることが，多かった。しかし，具体的な煮炊方法を知る手がかりとするためには，内面の炭化物の有無，炭化物のある場合はその部位が重要な点である。現在，古代の煮炊きの方法については，「煮る」と「蒸す」というまったくことなった方法が知られている。「煮る」方法であれば，容器のなかに水と調理する米などをいっしょに入れ，加熱する結果，内面に炭化物が付着することが多い。「蒸す」方法は水を入れた容器の上に米を入れた蒸し器をのせて加熱し，水蒸気で調理する。その結果，水を入れた容器と蒸し器の内面には炭化物が付着することはない。筆者は，長甕の内面には炭化物の付着が原則として認められないことから，これで「煮」ることはなく，「蒸す」方法が古代で一般的であったと考えている〔坂井1988c〕。小甕の場合は口縁部内面のみに炭化物が付着するものが多い（図版224－４～６）。これは汁物を煮た容器と考えられる。



第45図　土師器煮炊具スス・炭化物付着状況

B　土器各説

1）竪穴住居出土土器

SI 5 出土土器（図版55・177・188・189・222，観察表 246頁）

SI 4 に切られる竪穴住居で，出土土器はほぼ図化した。須恵器は 1 個体もない。器種は長甕 6 点，小甕 3 点，鉢形甕1点，短胴甕 1 点，鍋 1 点，支脚 1 点の計13点である。非ロクロのA系が多い。須恵器を伴わず，器種に偏りがみられるが，Ⅰ期の資料である。カマドから出土した 4 ・ 6 ・ 7 ・ 8 ・10は芯材に利用された可能性をもつ。 1 ・ 3 ・13は上面，あるいは上層出土である。

土師器（ 1 ～13）　長甕・小甕・鉢形甕・鍋がある。

長甕（ 3 ・ 5 ・ 9 ～12) A系（ 3 点），C系（ 1 点)がある。A系のうち 9 は口縁部のヨコナデが強い 2 類である。ハケ目がきれいに消されている。10・11はヨコナデが弱い 1 類である。ハケ目がよく残り，口縁部の歪みも大きい。 9 は内面のハケ目がタテ方向で，ヨコ方向の 1 類とことなる。胎土も白っぽく，含まれる粒子は須恵器に類似したもの（須恵器系胎土）である。 こうした胎土は明確なロクロ使用の12と共通する。12は口縁内面に凹線様のくぼみをめぐらし，口縁端部は丸くおさまる。底部は丸底で外面をヘラケズリする。これと同じものはSI 336 (54・55)，SI 462 (122) にあり，古いロクロ土師器B系にみられる。 5 は丸底の底部の内外面に平行文タタキ目と同心円文あて具痕が明瞭に残る。この胎土も須恵器系である。平底の底部（ 3 ）は外面ヘラケズリで，C系と考えられる。

小甕（ 1 ・ 2 ・ 4 ）　口縁部（ 1 ）と底部（ 2 ・ 4 ）がある。 1 は口縁部が短く，C系かと思われる。 2 の底部外面にはあらいハケ目がみられる（ 図版 222－6 ）。体部内面はカキ目・ロクロナデとみられ，ロクロ使用と考えられる。胎土も須恵器系である。底部から体部の器壁が比較的均一で，たちあがりが丸くスムーズであることも，その特徴であろう。 4 の底部外面は，中央に木葉痕のような一条のくぼみがあり，その周囲にハケ目がなされる。

鉢形甕（ 7 ）と短胴甕かと考えられる 8 は非ロクロでヨコナデはごく弱いもので，口縁部の歪みは大きい。鍋(13)は体部から口縁部の屈折が直線的で，器壁も比較的薄く，シャープなつくりである。

6 は一応支脚としたが，類例に乏しく，他の器種の可能性もある。調整は指頭圧痕である。 6 をのぞく12点のうち，6 点がロクロ土師器B・C系，1 点が非ロクロA系の 2 類で，ほぼ半分が非ロクロである。上層・上面出土のものにロクロのB・C系が多いが，B系の 5 ・12は下層出土である。

SI115出土土器（図版56・57・177・181・188・221・223・224，観察表 247頁）

出土個体の大半を図化した。実測個体22点のうち，須恵器は 5 点、土師器は17点である。須恵器は無台杯 2 点・有台杯 2 点・杯蓋 1 点，土師器は長甕・小甕・短胴甕のほかに，無台杯A・壺B・鉢Bが各 1 点ずつある。長甕（29・31・35）はカマド出土で芯材と考えられる。非ロクロ土師器が多く，Ⅰ期の基準資料である。なお，古式土師器も一定量出土している。

須恵器（14～18）　胎土は 5 点のうち無台杯（15）と杯蓋（18）がA群，その他がC群である。 在地の阿賀北地方の製品であるA群の比率が比較的低いことが注目される。

無台杯（14・15）　14の無台杯は口縁部を一部欠くが，完形にちかいもので，口縁部に小さな片口をつくるものである。底部は若干丸味をもち，口縁部はあまり開かない形態で，全体に器壁が厚い。ていねいに調

整されており，古様をとどめるものである。

有台杯（16・17）　16の有台杯Aは口径約10cmの小型品であり，底部と体部の境は明瞭で，直線的にたちあがる。高台は内端接地で，外方にふんばる形態である。口径10～11cmの有台杯AⅢはⅢ$_1$～Ⅳ$_1$期に一定量存在するが，それに比して高さは低い。内面には自然釉がかかり，蓋とセットでは焼成していない。対応する大きさの杯蓋がないことからも，無蓋と推定される。

杯蓋（18）　天井部のロクロケズリは縁部近くまで達しており，つくりもよい。外面全体に自然釉と黒変がみられ，正位の状態で身とセットで焼成されたと考えられる。

土師器（19～35）　一般に土師器の大半は煮炊具の甕・鍋類であるが，ここではそれ以外の器種が存在することは注目される。

無台杯A（19）　ロクロ調整で，器形は口縁部の外反がやや強いが，須恵器にちかい。底部を欠くが，他に高台部は出土しておらず，無台杯と考えられる。口径約16cmの大型品である。胎土はごく精良で，内面にヨコ方向のヘラミガキがなされ，胎土・調整とも比較的あらい。無台杯Bとは明瞭にことなる。色調も赤彩こそなされていないが，明褐色で赤っぽく，他の土師器と区別される。

壺B（20）　「短頸壺」ともいえる器種で，胎土・色調とも無台杯Aに類似する。一部にヘラミガキを加えるなどつくりもよい。

鉢B（21）　丸い底部から丸味をもってたちあがり，やや内湾する口縁部をもつ。全体に器壁は薄く，底部も含めて均一である。内外面ともヘラミガキする。胎土は石英などの細粒子を多く含み，19・20とはことなり，一般的なロクロ土師器煮炊具と共通する。ロクロの使用は明確ではないが，底部から体部のつくりは非ロクロ土師器とことなった系譜を想定させる。二次焼成をよく受けており，口縁部内外面にスス・炭化物が付着し，器面ははじけて剝離している。剝離面には幅約1cmの粘土紐の接合痕が観察される。ヘラミガキされることから，本来煮炊に使用されるべき器でないと考えられる。

以上3点は器種・技法からみて在来の非ロクロ土師器の系譜とはことなるものである。

小甕（22～24）　22は非ロクロA系，23はロクロB系，24は外面にタテ方向のハケ目があり，非ロクロの可能性をもつが，口縁部のナデは強く，胎土も須恵器系と考えられる。B系ないしはA系2類であろう。

長甕（25～31・34・35）　明瞭にロクロ土師器と判断されるものは，外面平行タタキ目の体部破片（26）のみである。底部の25は大きな平底で，底部外面は不調整である。したがってロクロ土師器の小甕B・C系か，非ロクロのA系でも回転台を使用する2類かのいずれかである。大きさからみて，小甕とは考えられないから，長甕であろう。当土器群の土師器と同一個体とすれば，30のA系2類の底部の可能性が考えられる。両者の胎土は類似している。30の長甕は内外面ともタテ方向のハケ目で口縁部のヨコナデが強い非ロクロのA系2類である（図版 223－2）。口縁端部に凹線様のくぼみをもち，体部は「く」の字状に屈折し直線的にのびる。比較的シャープなつくりで同じ非ロクロでもA系1類の29とはきわだったちがいがある。胎土は須恵器系である。非ロクロA系でも特異なものに35がある。この口縁部はヨコナデが強く，体部からの屈折，直線的な「く」の字状の外反，端部の面など，シャープなつくりである。また内面はヨコ方向のハケ目ののちにタテ方向のナデを加える（図版 224－2）など調整技法が特異である。内外面とも器面の凹凸は少なく，粘土紐のふくらみはハケ目によってていねいに消されている。胎土は須恵器系である。A系2類とはいっても，C系にきわめて近い属性をもっている。一般的なC系とことなる点は，体部上半部にカキ目，ないしはロクロナデがなされないこと，体部外面中位から下半部にヘラケズリやハケによるケズリがなされないこと，口縁部が「く」の字状に外反することなどである。これ以外の長甕はA

系1類と考えられるが，28は内外面にハケ目をまったくとどめないもので，特異である。外面は斜め方向，内面はヨコ方向の強いナデと思われる。白っぽい色調で，胎土は須恵器系に類似するが，丸味をもつ細礫を多く含んでいる。29は高さ約26cmで，やや小型の長甕ＡⅡである。体部の器面は粘土紐のふくらみをよく残し，凹凸が大きい。

短胴甕（32）口縁部が長く，大きく外反するもので，類例は少ない。口縁部のヨコナデは比較的弱く，技法はＡ系1類に入るものである。

鍋（33）は内面のヨコ方向のハケ目はカキ目かとも思われるが，わずかに弧状となり，起点が認められることから，ハケ目と判断される。口縁部のヨコナデは強く，胎土は須恵器系で，明るい色調である。

土師器煮炊具12点のうちロクロ土師器は小甕2点，非ロクロのＡ系2類は長甕2点，鍋1点で，ほかは非ロクロのＡ系1類である。ロクロ土師器の割合は16%で，かなり低く，Ａ系2類を含めると42%となる。

SI804出土土器（図版57・188，観察表 247頁）

出土個体数は少ない。実測個体5点のほかに，須恵器無台杯3点，有台杯Ｂ1点，杯蓋1点の小破片と土師器鍋Ａ系（1類）1点，長甕体部タタキ目1点がある。須恵器の無台杯2点は胎土Ｃで，ほかはＡである。

小甕（38）の胎土は素地が比較的精良で，一般的な須恵器系ではない。新しい傾向がうかがえる。上層出土である。長甕（39）は器壁が全体に厚く，つくりはシャープでない。口縁部と体部の屈折は丸味をもち，口縁端部は丸い。体部外面のカキ目は水平でない部分があり，あまり直線的ではない。頸部内面には粘土紐の接合痕が残り，断面にもそれが観察される。以上の点からすると，ロクロの回転が弱く，調整が粗いことが推定される。胎土は粒子を含むがやや精良である。土器の時期は明確ではないが，長甕の39と40からⅠ～Ⅱ1期と推定される。小甕（38）はこれより新しいであろう。なお長甕（40）は海綿骨針を含む。

SI807出土土器（図版57・189，観察表 247頁）

出土個体数は少ない。実測個体のほかに，須恵器の大甕1点，杯1点，土師器のタタキ目をもつ長甕片，大鉢片1点がある。大鉢片はSI336にある58と同一個体と思われる。 土師器片は非ロクロが多い。鉢形甕（43）は比較的大きいもので，口縁部のヨコナデは弱く，歪みは大きい。二次焼成を受け，煮炊具であることをよく示す。42の小甕も非ロクロで，41の無台杯も比較的古様をとどめ，土器はⅠ期と推定される。

SI336出土土器（図版58・189，観察表 247頁）

出土個体数は実測個体15点のほか小破片10個体ほどであろう。実測個体の須恵器2点は撹乱坑出土で，この遺構に元来伴うものかどうかは不明である。このほか，土師器の椀Ａ（50），大鉢（58）も撹乱坑出土である。長甕（54・55）の2個体がカマド内から出土した。

須恵器（44・45） 有台杯Ａと考えられる44は高台がやや内側に入るタイプである。45は短頸壺の蓋の小破片である。実測個体以外に小破片がかなりある。無台杯数個体，有台杯2点，杯蓋4点，短頸壺（？）1点，大型の鉢1点がある。短頸壺（？）はSI462（101）と同一個体である。

土師器（46～58） 小甕・大鉢のほかに椀Ａ（50），片口をもつ鉢かと思われる51がある。

小甕（46～49・53） 46は非ロクロＡ系と考えられる口縁部である。47・48はともに口縁部が短く，頸部から弧状に外反することからＣ系の可能性が強い。胎土は須恵器系である。49の平底の外面には網状脈の木葉痕が明瞭に残る。器種はやや小さめの長甕ＡⅡの可能性もある。53は非ロクロＡ系で，底部は水平な面をもたない。底部外面はヘラケズリされる。非ロクロＡ系の小甕には底部が水平でないものがある。

長甕（52・53～57）　54・55はSI 5 (12) のように口縁部内面に一条の沈線をめぐらすタイプである。56は形態からみて，短胴甕と考えられる。口縁端部は丸く，ヨコナデがていねいで，内外面がタテ方向のハケ目からすると，A系のうち２類と考えられる。胎土は須恵器系である。57は非ロクロA系の１類である。胎土に粒子をあまり含まず，細かいハケ目でよく調整されてはいるが，口縁部のヨコナデは弱く，粘土紐の接合痕が器面に残る。これと同一個体かは不明であるが，木葉痕の底部がある。51の片口をもつものの器種は不明である。調整はあまりよくなく，内面の口縁部にちかい部分に炭化物が付着している。

大鉢（48）　須恵器系の胎土で，焼成も堅い。口縁端部は凹線様にくぼみ，明瞭な面をもつ。技法もロクロ土師器系であり，外面にはタテ方向のハケ目ののちに，ヨコ方向の細かなハケ目を加える。ただし，ロクロ回転を利用したカキ目のように直線的ではない。スス・炭化物の付着はみられない。これと同一個体と考えられるものが，近くのSK340から出土している。

土師器煮炊具11点のうち，ロクロ土師器は５点ある。５点のうちB系２点，C系３点である。須恵器が明確ではないがⅠ期か，あるいはⅡ1期でも古い時期にあたると考えられる。

SI 1312出土土器（図版58・189，観察表 248頁）

（59）　非ロクロA系の小甕である。体部のふくらみはまったくなく，鉢形の形態で，口縁部は短く，外反する。口縁部のヨコナデは弱い。Ⅰ期に比定される。

SI 640出土土器（図版58・190，観察表 248頁）

（60・61）　60は長甕C系である。底部外面は不調整で，指頭圧痕状のくぼみがいくつかある。外面のヘラケズリは強い。61は小甕C系である。60・61ともにカマド内出土である。Ⅱ1期と比定される。

SI 71出土土器（図版59・182・189，観察表 248頁）

この住居跡からは奈良・平安時代の土器のほかに，古式土師器がかなりまとまって出土した（図版51）。しかも完形品，あるいはそれに近いものが含まれており，遺構との関係がかならずしも明らかではない。しかし，古式土師器をのぞくと，土器の時期は比較的まとまりをもつ。実測個体14点のほか，須恵器の無台杯６点，大甕３点，土師器の長甕B系の丸底の底部１点，長甕C系の底部１点，小甕B系の平底の底部１点，鍋B系ないしC系１点がある。

須恵器（62～65）　実測個体４点のうち，63は胎土C群，65はB群かと考えられる。65は深身の有台杯Bで，形態も９世紀以降の小泊産須恵器に類似する。上層出土であり，ほかの遺構の混じりの可能性が強い。未実測のうち無台杯の３点は胎土C群であり，A群は約半数にすぎない。

無台杯（62・63）　62は口縁部が直線的に開き，端部が尖り気味になる。63は白っぽい色調で，焼成はやや軟らかい感じを与える。胎土はA群に比し精良であるが，石英を一定量含む。口縁部にタール状の付着物があり，灯明皿として使用されたと推定される。この須恵器の器面ははじけて剥離した小さな穴があり，器そのものが熱を受けたことがうかがえ、灯明皿の使用痕と考えられる。

有台杯（64・65）　64は底部が厚く，どっしりとしたものである。口径約15cmの有台杯AIで，高台は外方にふんばり，底部の外周に付いている。胎土A群のなかの古様の有台杯といえ，他にも同じタイプがいくつか出土している。外面全体に自然釉がかかっており，逆位で焼成されたものである。65は高台が外端接地で，外方へふんばりがなく，９世紀以降の新しい様相が明らかである。

土師器（66～76）　小甕（67～70・72・73）はいずれもロクロ土師器である。68の体部はやや丸く張り，67はほとんど張らない。いずれも口縁部は短い。70はとくに短く，焼成が堅く，須恵器にちかい。小甕(72)は頸部がしまり，体部中位が張るややめずらしい器形である。口縁部のヨコナデは比較的ていねいで，外面のハケ目はタテ方向ののちに，粗くヨコ方向に加える。技法はロクロのB・C系でないにしろ，非ロクロA系2類に入るべきものではなかろうか。底部（73）は外面不調整で，あるいは72と同一個体の可能性をもつが，現状での色調は明瞭にことなる。

長甕（71・74～76）　75・76の2個体はほぼ完形で，まったく同じタイプのものである。体部にほとんどふくらみがなく，底部にかけてすぼまる。口縁部はゆるく外反し，端部に面をもたない。内外面ともハケ目で，口縁部のヨコナデはごくかるいもので，口縁部の歪みは大きい。底部外面は「離れ材」として利用したと推定される砂の付着痕がみられる。これは底部が接地する外周部に著しい。器壁は全体に薄い。器面には粘土紐の凹凸がよく残り，体部のカーブには3ケ所ほど変化点が認められ，一次成形の粘土紐の積み上げ工程の区切りがよみとられる。2点とも外面にススが付着しており，甕として使用されたことが明らかであるが，片面あるいは一部の面にススが薄くなっている箇所があり，カマドの芯として再利用されたことがうかがえる。長甕（74）は内外面ともタテ方向のハケ目で，口縁部のヨコナデも強いA系2類である。口縁端部は面をもたず，丸くふくらむ。かなり硬質の焼成で，部分的に淡黄灰色を呈する。胎土は須恵器系である。平底の底部（71）は外面にヘラケズリがなされるC系である。焼成はかなり硬質である。

土師器煮炊具10点のうち非ロクロは半分の5点である。全体の土器様相は，須恵器有台杯（64）や非ロクロの長甕（75・76）からⅠ期に推定されると思われるが，小甕にロクロ土師器が多く，Ⅰ期でも新しい段階かと思われる。長甕（75・76）の器壁の薄さも同様に新しい傾向なのかもしれない。

SI610・600・630出土土器（図版60・61・181・187・190・194・221・225，観察表 248頁）

この遺構は3棟の竪穴住居がかなり重複すると考えられたものであり，カマドから非ロクロの長甕が多く出土した。カマド以外にはあまり土器は出土していない。互いの土器はほとんど様相差がなく，土器から複数の遺構をとらえることはむずかしい。

SI610（77～85）6点の長甕（77～82）のうち，77・78は高さ25cmほどの長甕Ⅱである。78は体部のカーブに2つの明瞭な変化点がみられる。口縁部を残すものはいずれもヨコナデが弱く，歪みが大きい（A系1類）。底部外面は84が木葉痕で（図版221－3），81は着面があれており不明である。77・78・79の胎土には海綿骨針を含む。80は明褐色を呈し，胎土のちがいが目立つ。実測個体で唯一の須恵器の無台杯（83）は器壁が薄く，やや新しさを感じさせる。上面出土で，あるいは他の遺構の混入かもしれない。

SI600（86～90）の須恵器有台杯（86・87）は口径14cm以上で，大型のAIである。86はSI71（64）と同じタイプで，胎土A群，87は胎土C群で，これとはことなる。87の高台は低く外方へふんばり，底部の外周に付されている。底部内面には一方向ナデが加えられ，ていねいなつくりである。

SI630（91・92）の長甕2点はいずれも胎土に海綿骨針を含む。91は口径が22cmとやや小さいが，体部は長い。以上の土器は非ロクロ土師器ばかりで，Ⅰ期にあたる。

SI1311出土土器（図版61・190，観察表 249頁）

（93・94）　93は大型の有台杯Aである。底部から体部は丸く，口縁部は外反する。高台は外方にふんばり内端接地である。高台径はさほど小さくはない。底部内面に一方向のナデが加えられ，つくりはよい。

94は鉢形甕である。口縁部は体部からほとんど屈曲しない。裏面の剝離が著しく，調整は不明な点が多いが，底部外面はヘラケズリである。胎土は須恵器系に類似する。Ⅰ～Ⅱ$_1$期に比定される。

SI462出土土器（図版62・63・181・192・222，観察表 249頁）

出土個体数は多く，30点以上を数える。実測個体の他に須恵器の小破片多数と土師器非ロクロA系1類の長甕体部，大鉢（SI336－58と同一個体？）1点がある。須恵器には広口壺かと思われるもの（100）や，短頸壺（101），転用硯（95・102）など，杯以外の器種が目立つ。非ロクロが多く，Ⅰ期の資料である。

須恵器（95～103）　無台杯，有台杯，杯蓋，壺類，転用硯がある。

無台杯（96・97）　口径12～13cmの無台杯Ⅱである。未実測のものに無台杯Ⅰが確認される。96はSI 71（63）と同じタイプで，白っぽい。97は口縁部の外反がとくに著しい。

有台杯（98・99）　深身の有台杯B（99）と深身で沈線をめぐらす有台杯X（98）がある。98は内面の灰かぶりと自然釉が著しく，淡黄緑色を呈する。沈線はごく細い。沈線をめぐらさない深身の有台杯はⅢ$_1$期以降目立つが，この時期では少ないようである。口縁端部が薄くなり，丸くおさまる。103は有台杯Aの底部である。底径10.3cmあり，口径は15cmほどと推定され，有台杯ＡⅠである。高台は低いが，外端がシャープなロクロナデによって，斜めの面をもつ。底部外面はヘラケズリされる。中央は一方向で，その外側はロクロケズリである。有台杯の底部外面にヘラケズリを加える例はSI12（143）のほか，底部が丸味をもつ東海系のもの（SI 1461－255）など少ない。当例は143と高台の形態や底部が水平なことで類似する。143は全面ロクロケズリで一方向のヘラケズリはみられず，高台の鋭さがあまりない。この土器は底部を残し体部は意図的に打ち欠かれており，底部外面中央はよく磨滅する。墨痕が明瞭にみられ，器面がやや黒ずんでおり，硯として使用された可能性が強い。

杯蓋（95・102）　95は口径16cmの大型品で，有台杯ＡⅠに対応するものである。天井部のロクロケズリはあまり強くなく，ヘラ切り痕をとどめる部分がある。つまみは比較的大きく扁平で，中央がふくらむ。内面はよく磨滅し，墨痕がみられる転用硯である。102も転用硯であり，内面中央はきわめてよく磨滅している。また，欠けた部分がさらに磨滅しており，硯として使用された後に，再度打ち欠かれ，研磨具として利用されたことが推定される。つまみはきれいに剝離している。

壺（100・101）　100は2条の沈線をめぐらす壺の頸部である。胎土は精良なC群であり，短頸壺（101）と同一である。100は外面に自然釉がかかるが，101にはこれがみられないので，同一個体とは考えられない。101の短頸壺は底部が，水平ではなく，やや丸味をもち，肩部に一条の沈線がめぐる。

土師器（104～124）　無台杯B，椀A，小甕，長甕，鍋，鉢などがある。小甕の個体数が多い。

無台杯B（104）　104は土師器にはきわめて少ない無台杯Bである。器形・技法は須恵器と同様で底部外面は回転ヘラ切り痕と思われる（図版 222－4 ）。しかし，褐色の色調と軟質の焼成で胎土も須恵器とことなる。

椀A（105）　二次焼成を受け，口縁部内面には炭化物が付着する。調整はあらく，口縁部は歪む。

小甕（106～115）　非ロクロ・ロクロ両方ある。106・107は非ロクロA系1類の小甕の小さいタイプである。107は器面のハケ目，胎土，口縁端部のつくりなどSI 5（11）に，きわめて類似する。108・109が同じA系1類の小甕の大きいタイプである。ただし，108は口縁部と体部の境が丸いのに対し，109は屈折が明瞭で，短く直線的に外反する。そして，108は口縁部の歪みが大きいのに対し，109は歪みは小さい。109の形態はC系にちかいが，底部に木葉痕があり，C系といえない。底部のみの4点のうち，117はやや小さく，体部のたちあがりも大きいため，小甕かもしれない。この底部外面は外周が高く，砂痕のようである。中央は

ナデのようであるが，一条の葉脈状のくぼみがあり，木葉痕の可能性がある。このほかの116・118・119は小甕か長甕かは明確ではない。119はわずかながら，木葉痕をとどめる。外面の色調・ハケ目は108と類似するが，内面の色調がかなりことなる。二次焼成などによる色調変化とも考えられ，同一個体の可能性は残っている。116は厚い器壁で，底部外面の調整は粗いヘラケズリとも見えるが，はっきりしない。118は体部外面下端から底部外面をヘラケズリするが，ごく粗いもので，C系のようなものではない。おそらく，底部外面の凹凸を消すためのものであろう。体部のたちあがりの角度からみて，小甕であろうか。B・C系の小甕には，114のように口径10cmのごく小型のものから，口径約17cmのもの（113）まである。110～113は丸く肩の張る体部と短く外反する口縁部の形態から，C系と考えられる。115は底部を欠くが，体部と口縁部の形態からみて，丸底になる可能性が強い。111は内外面にススが厚く付着しているが，内外面の付着範囲が対応すること，破断面にも同じように付着していることから，破棄されたのちに付着したものと考えられる。

長甕（120～122）　122はSI 5（12），SI336（54・55）と同じく，口縁内面に一条の条線をめぐらすタイプである。121は口縁部のヨコナデが強く，わずかに内面にタテ方向のハケ目がみられることから，A系2類と考えられる。口縁端部は上方へわずかにつまみあげられる。121・122ともに，白っぽい須恵器系の胎土である。120は形態・手法からみると，長甕と考えられるが，口径約15cmで，かなり小さい。口縁部は「く」の字状に直線的に体部から屈折して外反し，端部は上方へつまみあげられる。カキ目・ロクロナデがともにシャープで（B系2類），新しい感じは否めない。新しい時期のもののまじりと解釈しておく。なお，須恵器片にも胎土B群のⅣ期のものが散見される。鍋（123）はロクロのC系のものである。鍋としては全形を知りうる数少ない例である。底部は厚く，平底で，丸味をもってたちあがる。口縁は水平にのび，端部はややふくらみ垂下する。鉢（124）はロクロ土師器の鉄鉢形のものである。

以上の土師器のうちロクロ土師器は120をのぞけば，合計16点のうちの7点（44%）である。

SI741出土土器（図版63・64・177・182・191・220・221・223，観察表 250頁）

出土土器は20個体程度と推定されるが，土師器に遺存度の良好な資料がある。非ロクロ土師器が多く，Ⅰ期の基準資料となりうる。実測個体8点の土師器のうち，ロクロ土師器は2点（25%）である。カマド材にはロクロ土師器は含まれていない。

須恵器（125～128・130）　無台杯，長頸瓶，短頸壺，横瓶がある。

無台杯（125・126）　126はやや小さめであるが無台杯Ⅰ，125はⅡと考えられる。125は形態はことなるが，SI462（97）と胎土・焼成が類似する。底部はやや丸い。126は底部が水平である。

長頸瓶（127）は口頸部を欠くが，長くラッパ状に開くものであろう。　短頸壺（128）は底部が水平でなく，丸味をもつ。体部外面下半部と底部外面はヘラケズリである。内面には粘土紐の接合痕を残す（図版220－6）。胎土はきわめてよく，SI462（100・101）と同類である。胎土中に海綿骨針を含む。横瓶（130）は多くの破片からなるもので，カマド周辺から出土したが，SK1022の上層からも同一個体の破片が出土している。大型で，外面にきれいな自然釉がかかる。焼成時に付着した須恵器片がそのままの状態で付着している。

実測個体以外に口径約16cmの有台杯AⅠ（胎土A群）1点，大甕体部片（胎土A群）1点がある。

土師器（129・131～137）　長甕，小甕，壺Aがある。129・131～134はカマド周辺から出土したもので，カマドの芯材も含まれる。

小甕（129）　非ロクロで，胎土も須恵器系ではない。

長甕（131～136）　131・132・134は別個体ながら，ほとんど同一手法・胎土・焼成である。これらはかなり硬質の焼き上りで，ほかのものと明確にことなる。体部はほとんど張らず，口径・体部径とも比較的小さく，細長い形態である。外面は粘土紐の凹凸が明瞭で，内面には粘土紐の接合痕がよく残る。132の底部外面は木葉痕と砂痕である（図版221－4）。木葉痕は笹のような平行脈のもの一枚分で，葉の圧痕以外の部分に砂痕が残る。131の形態も体部の張りがない。外面は粗いヘラケズリがほどこされる。底部外面は軽くナデられてはいるものの，凹凸が著しく，葉脈かと思われる一条のくぼみがみられる。131・132・134はいずれも口縁部のヨコナデが弱いＡ系１類である。一方，133は口縁部のヨコナデがていねいで，内面のハケ目がタテとヨコの両方向にみられるうえ，ヘラケズリがなされる。体部内面のヘラケズリはタテ方向に強くなされるものであるが，ヘラケズリ自体あまりみられない技法であり，注目される。明るい色調もやや特異である。135・136はロクロ土師器のＣ系と考えられる。口径はあまり差はないが，135は口縁端部に面をもっており，136は端部が丸くおさまり小甕と考えられる。未実測のもので，Ｂ系の長甕の口縁部が１点ある。床面直上ではないが，上層出土ではない。135・136はこれより上の層から出土している。

壺Ａ（137）土師器としてはきわめてまれな大型の壺である。底部は木葉痕で（図版 221－1），器面は内外面ヘラミガキがなされているが，粘土紐の凹凸が明瞭で，内面はその接合痕もよく残る（図版 223－4・7）。非ロクロの技法が明瞭である。

実測個体８点の土師器のうち，ロクロ土師器は２点（25%）である。

SI12出土土器（図版65・177・190・218，観察表 250頁）

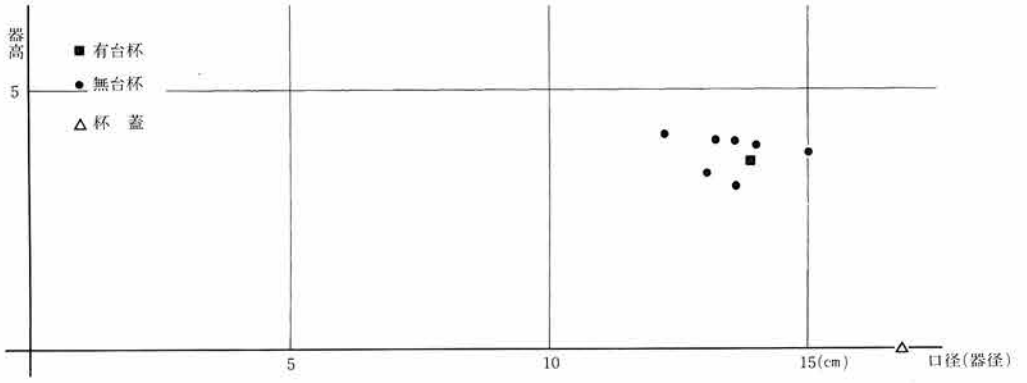
須恵器・土師器とも比較的まとまって出土しており，Ⅱ1期の基準資料である。須恵器の個体数が多くなり，土師器はほとんどロクロのＢ・Ｃ系によって占められており，Ⅰ期との差がうかがえる。なお，攪乱坑出土の土器も多い（148・150・151・157）。カマドないしその付近から出土したものが多い（138・143～145・149・154～156・158）。

須恵器（138～147）　無台杯，有台杯，杯蓋，甕がある。

無台杯（138～141）　口径15～16cmの無台杯Ⅰ（139～141）と口径13cmの無台杯Ⅱ（138）がある。前者がとくに大きいこともあって，両者の差は明瞭である。４点のうち，139のみ胎土Ｃ群で，ほかは胎土Ａ群である。胎土Ａ群の138・140・141は形態・手法とも共通している。ともに底部がほとんど水平で，体部のたちあがりと口縁部のひらきが直線的である。138は身がやや浅い形態である。140・141はまったく同一のつくりといってよく，白っぽく，やや軟質である。140の底部外面中央には墨書痕がみられるが、判然としない。139は140・141に比し，底部はやや丸味をもち底部から体部のたちあがりは丸く，口縁部はやや外反する。

有台杯（142～145）　142は無台杯の可能性もあるが，きわめて硬質の焼き上りで，胎土そのものもSI600（87）と同一であり，有台杯と考えておく。143の形態は140・141の無台杯に高台を付したものであり，同一手法によるものと考えられる。口径15cmで，有台杯ＡⅠである。SI462（103）に類似し，底部外面はロクロケズリされる。一部暗褐色を呈し，目立つ。ただし，焼成は硬質である。144・145の有台杯Ｘ・Ｂも胎土・焼成は138・140・141などと類似する。

杯蓋（146）　器径16cmある大型品で，有台杯Ａにともなうものである。外面全体に淡緑色の自然釉がみとめられるが，内面の器面は無台杯（140・141）と同一の胎土・色感であり，同一手法によることがわかる。水平な天井部からなだらかな縁部に至り，端部は比較的うすい。天井部外面の大半がていねいにロクロケズリされ，つまみは比較的大きい。内面は一方向のナデが加えられる（図版218－2）。



第46図　SI12須恵器食膳具法量分布

甕（147）は体部の破片で，外面は細かな格子タタキ目，内面は同心円文あて具痕がすり消されている。

土師器（148～158）　小甕と長甕がある。

小甕（148～153・155）　口縁部と体部上半部の6点（148～152・155）では，明確な非ロクロ（A系）はみられない、148・151はC系であり，152はC系ないしはB系である。149は口縁部がやや長いが，ゆるく外反して，非ロクロの形態にちかい。しかし，ヨコナデがていねいで，歪みもない。A系2類かB系であろう。胎土はとくに精良で，白っぽい色調で，他のものと明瞭にことなる。150は「く」の字状に外反し，端部に凹線様の面をもつ，胎土は須恵器系でない。A系2類であろうか。155は「く」の字状に外反し，端面をもつ。B系であろう。底部のみの153は底部外面不調整で，体部外面下端をロクロケズリするだけであり，C系とはことなる。器壁が薄く均質なことからもB系と考えられる。

長甕（154・156～158）　明確なところではB系（158）とC系（154・156）がある。158は口縁部・体部・底部の破片に接合部がないものの，おおよそ全体の器形を知りうる。丸底で体部中位にややふくらみをもち，口縁部は「く」の字状に外反する。端部は面をもち，ややつまみあげられる。体部上半部は内外面ともカキ目で，下半部外面はハケ目ののちヘラケズリ，内面はハケ目である。タタキ目とあて具痕は認められない。底部内面中央は若干ふくらみ，そのまわりが輪状にくぼむ，これは成形した際一時的に平底形態にした名残りと考えられる。体部下半はタタキではなく，ハケ目丸底に仕上げた可能性が考えられる。胎土に1～2㎜大の石英粒を含むが，全体に比較的精良であり，相対的に粗いC系の156とは明確にことなる。かりに須恵器の胎土に対応させれば，156はA群，158はC群になる。C系の156は口縁部が短く水平に外反し，端部はまるくおさまる。体部上半部は内外面ともカキ目であるが，口縁部から7～8㎝の範囲だけで，B系の158と比し，その範囲は狭い。その下はタテ方向のハケ目で，ケズリの効果はほとんどない。C系の底部である154は底部外面を含めて内外面ともハケ目である。156と同一個体の可能性はなくはないが，色調はかなりことなる。口縁部の157はゆるく外反し，端部は丸い。体部内面にわずかにヨコ方向のハケ目があり，非ロクロのA系の可能性があるが，ヨコナデは強い。

以上の土師器11点のうち，明確に非ロクロのものはなく，157がそれに入ったとしても1点のみ（9％）である。実測個体以外にも非ロクロはほとんどなく，ロクロ土師器が大半であることは明瞭である。

SI502B出土土器（図版66・191・224，観察表 250頁）

古墳時代の大型竪穴住居SI502Aと完全に重複する住居で，古式土師器の出土も比較的多い。奈良・平安時代の土器も比較的まとまっている。須恵器が一定量占めており，Ⅱ$_1$期の基準資料である。土師器はロクロのC系が多いが，非ロクロのA系も存在することから，SI12出土土器よりは古い様相を示す。Ⅱ$_1$期

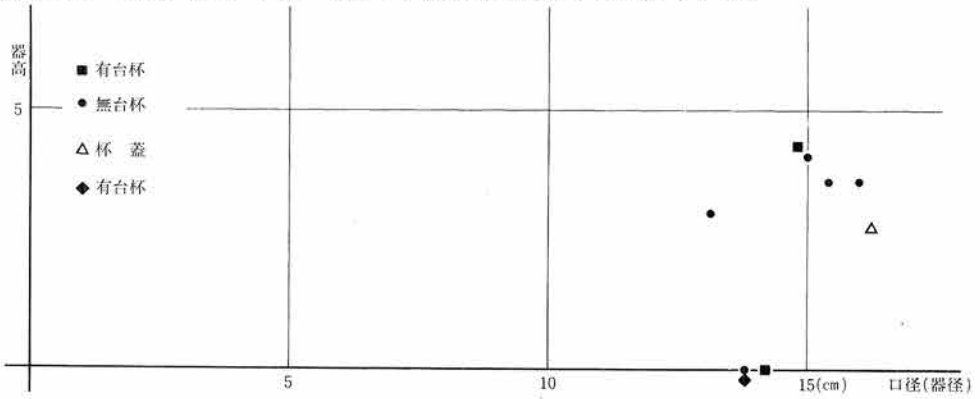
の新しい段階としておく。

須恵器（159～169）　無台杯，有台杯，杯蓋，広口甕のほか，未実測の無台杯・有台杯片数点と大甕体部破片２・３点，横瓶体部破片（SI741－130と同一個体？）１点，瓶壺類体部片１点がある。未実測の有台杯片にはSI462（103）と同一個体がある。胎土は169をのぞいてすべてＡ群である。

無台杯（159～165）　口径は12～15cmまでの差があるが，明確に２つに分離しない。これは実測個体が小さいことで，正確な口径が復元されていないことによるのかもしれない。形態はいずれも底部が水平に近く，体部から口縁部は直線的である。口縁端部は165のようにわずかに外反するものもあるが，尖り気味で丸くおさまる。全体に淡い灰色のものが多く，やや軟かい質感である。159は口径が小さく，身が深いものである。163はSI12（138）と同様に身が浅い。

有台杯（166・167）　166は口径14cmで有台杯ＡⅠとⅡの中間的な大きさである。高台は外方にふんばり内端接地となる。有台杯Ｂ（167）は内外面とも淡い自然釉がかかり，焼成時は蓋を伴っていないと考えられる。

広口甕（169）　SI75（420）と同一個体で，他に体部破片が出土している。



第47図　SI502B須恵器食膳具法量分布

土師器（170～180）　小甕，長甕がある。

小甕（170～172）　いずれもロクロ土師器で，170・172はＣ系，171はＢ系かと思われる。170は完形品にちかい。肩が張る体部に短く外反する口縁部である。体部外面にはヘラケズリがなされ，底部外面は不調整である。口縁部内面には炭化物の付着がみられる（図版224－4）。

長甕（174～180）　非ロクロのＡ系（176），ロクロのＢ系（179・180），ロクロのＣ系（174・175・177・178）がある。176は口縁部のヨコナデが弱く，歪みが大きい。Ｂ系の口縁部のうち，179は相対的に器壁が厚く，体部内外面にハケ目がなされる。180は器壁が薄く，体部内外面にハケ目は見られず，179に比しシャープなつくりである。Ｂ系の両者の手法のちがいは明らかである。Ｃ系の177・178は口縁部が水平にのび，端部に明瞭な面をもち，やや垂下気味になる。底部（174・175）はともに外面がハケ目で，Ｃ系である。

173は底部木葉痕のＡ系である。長甕の小型品と考えられるが，判然としない。

土師器11点のうちロクロは７点（64%）である。

SI806出土土器（図版67・193，観察表 251頁）

長甕・鍋などの土師器大型品が比較的まとまっている。須恵器の個体数は少ないが，ロクロ土師器Ｃ系がある。

須恵器（181～184）　無台杯，有台杯，杯蓋がある。実測個体以外には無台杯・杯蓋・甕の小破片が少量ある程度である。胎土は181がＣ群で，ほかはＡ群である。

無台杯（181・182）　181はSI12（139）とまったく同じつくり，胎土である。口縁部をのぞく内面と体部下半から底部の外反面淡褐色で環元状態でなく，それ以外も淡灰色で，焼き上りは軟質である。焼成時は同一器種を重ねたことが推定される。182は身が浅いタイプであるが，底部から体部が丸味をもつ。

有台杯（183）　口径13cm以下の有台杯ＡⅡで，内面は厚く自然釉がかかる。高台は底部のやや内側に貼り付けられる。高台の接地面は広く，ていねいに内側にロクロナデされる。

杯蓋（184）　天井部のロクロケズリは明確ではなく，ヘラ切り後ロクロナデをかるく加えるようである。

土師器（185～194）　小甕と長甕，短胴甕，鍋がある。鍋（194）のみ非ロクロのＡ系で，ほかはロクロのＢ・Ｃ系である。

小甕（185～187）　185・186はＣ系で，187はＢ系である。187は小甕としては大きい。これは「く」の字状に直線的に外反し，端部はつまみあげられて，面をなす。シャープなつくりで，Ｂ系の２類であり，新しい要素がみられる。

長甕（188～191）　190はつくりがシャープで，Ｂ系２類である。口縁部は直線的に外反し，端部は上方へつまみあげられ，外側にくぼんだ面をもつ，タタキ目は観察されないが，カキ目もシャープである。体部内面はカキ目でなく，ロクロナデと斜め方向のハケ目である。これと同一個体と考えられる体部下半の破片には，外面がタタキ目とハケ目，内面がハケ目である。もう１点のＢ系である191は器壁が比較的厚く，体部と口縁部の屈折は丸味をもち，口縁端部は丸くおさまる。Ｂ系１類である。これは体部上半部に張る部分があり，体部外面はヘラケズリである。やや特異な形態であり，胎土に海綿骨針を含む。底部（188・189）は平底であるが，いずれも大きくて器壁が厚いことから長甕Ｃ系と考えられる。

192は上半部を欠いており，明確な器種は不明であるが，体部の径の大きさと丸味をもつ形態から，短胴甕と考えられる。底部は平底であるが，器壁が体部と同じくらいに薄い。海綿骨針を含み，胎土は191と共通する。ほぼ同様の形態と手法のものがSI1307（313）であり，これも胎土に海綿骨針を含んでいる。

鍋（193・194）　193は器壁が厚く，口縁部が短く，Ｃ系とも考えられるが，口縁部が「く」の字状で，端部に面をもつこと，外面上ヘラケズリがみられないことから，Ｂ系の古いタイプである１類とみておく。194は器壁が薄いが非ロクロのＡ系で，口縁部の歪みは大きい。内面は粗雑なハケ目のような調整で，外面下端にヨコ方向のヘラケズリがみられる。

土師器10点のうち非ロクロは１点（10%）である。Ⅱ_1期の新段階と思われるが，Ⅱ_2期に下る可能性もある。

SI 752出土土器（図版68・177・194・216・222，観察表 251頁）

出土個体数と器種構成からみて，Ⅰ期の基準資料である。土師器はほとんどロクロ土師器を含まず，Ⅰ期のなかでも，もっとも古い様相を示す。

須恵器（195～199）　有台杯・杯蓋・短頸壺の高台かと思われるもの（199）がある。いずれも胎土Ａ群である。

有台杯（195～197）　195は底部を欠くが，身が深く，体部下半が丸味をもつことから，有台杯と考えられる。196・197は全く同じつくりのもので，SI600（86），SI71（64）とも同じ。底部は厚く，高台が低く，外方にふんばる形態で，外面には自然釉がかかる（図版216－1）。とくに196は瓶・壺類によくみられる淡緑色の厚い釉である。

杯蓋（198）　天井部に沈線をめぐらすもので，金属器写しと考えられる有台杯Ｘにともなうものと思わ

れる。つまみは扁平である。

土師器（200～212）　207・208はロクロ土師器の可能性をもつが，それ以外はすべて非ロクロである。実測個体以外にもロクロ土師器はほとんどみられない。杯X・小甕・鉢型甕・長甕・甕底部がある。

杯X（200）　内面黒色で，底部と体部の境に明瞭な段をもつ。底部外面はハケ目である（図版 222－7）。このタイプは当例のみで，越後でも類例はあまり知られてない。東北地方にみられる古墳時代後期以来の系譜のものである。胎土は他と明確にことなるものではなく，搬入品とは即断できない。

長甕（203～207）　207はロクロ土師器の可能性がある。口縁部は体部から直角に屈折し，外方に短くのび，体部外面にはヨコ方向の粗い条線がある。これはごくかるいもので，「カキ目」とするには問題があるが，ヨコ方向であることは注目される。また内面にはハケ目はなく，ヨコナデである。胎土は一般的な非ロクロのA系とはことなり，比較的精良である。口縁部の形態がC系にちかく，その祖形とみておきたい。これ以外のものは，非ロクロのA系1類で，いずれも口縁部のヨコナデは弱い。203は口縁部の外反が少ない。

底部（208～212）のうち，210～212は木葉痕をもつ。いずれも網状脈で，210・211は葉脈が細く，212は太い。212は木葉痕の上から外周部にうすく砂痕がみられる。この土器は筒状にたちあがり，内面に粘土紐の接合痕をよく残す。209は砂痕である。体部の器壁は相対的に薄い。この土器の胎土・色調などの質感は203と類似しており，同一個体の可能性が考えられる。208は全体の器壁が均質で，相対的に薄く，底部外面にヘラケズリ，体部下端にヨコ方向のヘラケズリをおこなう。底部中央の器壁が薄くなり，その外側が厚くなるのはC系の長甕にみられる。胎土も須恵器系であり，底部外面のヘラケズリの手法を勘案すれば，ロクロ土師器のC系と考えられる。胎土や質感からみる限り，207と同一個体の可能性がある。

鉢形甕（201）は口縁部がほとんど外反しないものであるが，煮炊具として使用された痕跡が明瞭である。

SI1000出土土器（図版68・69・177・195・216，観察表 252頁）

出土個体数は多いが，大きくわけて新旧の土器群がある。新しいものは胎土B群（佐渡小泊窯）を含み，Ⅳ期に比定され，古いものはII_1期に比定される。新しいものは基本的に上層出土であり，住居跡に伴うものは古い時期のものと考えられる。

須恵器（217～232）　無台杯・有台杯・杯蓋・甕がある。221～224は胎土B群で新しく，230もその可能性が強い。これら以外の胎土は220・225・227はC群，228・232はA群ないしC群，ほかはA群である。

無台杯（217～223）　217～219はカマド周辺から一括出土したもので，底部が水平で，胎土・つくりは同一である。220は身が浅く，口の開きが大きい形態で，底部はやや丸味をもつ。

有台杯（224・227～231）　224は小型の有台杯Cで，新しい。口縁部がやや内湾し，端部が丸くおさまる手法はB群の無台杯にもみられるものである。高台は外端接地であるが，内端はロクロナデで，ていねいにつくられる（図版 216－4）。焼成位置は同一器種を直接重ねたものである。深身の有台杯B（229～231）のうち，230は器壁が厚く，古い様相をとどめるが，229・231は器壁が薄く，229は直線的にのびることから，新しい時期に入る可能性が強い。231は高台が小さく，内端接地で，高台が底部外周に付されている。B群としては焼成はかなり硬質で，底部の器壁がやや厚い感じもするが，形態からみて，新しいものとみておきたい。B群とするならば，そのうちでもかなり古い様相を示すと考えられる。227は底部が厚いもので，SI1307（308）と同一の胎土・つくりである。228は内側に墨痕がみられる転用硯である。底部内面に一方向のナデが加えられ，なめらかであり，つくりのちがいがうかがえる。

杯蓋（225・226）　225は天井部外面にヘラ切り痕がよく残る。縁端部がきわめてシャープである。天井

部内面は磨滅し，若干墨痕がみられる。226はつまみが小さくて高い。

甕（232）口縁外面にはロクロナデの下にタタキ目痕が残る。

土師器（213～216・233～253）　甕のほかに，椀B・椀A・鍋・土製品がある。

椀B（233・234）　233は体部から口縁部がほとんど直線的に開くもので，椀Bとしてはやや特異である。内外面とも底部を含めてていねいにヘラミガキする。胎土は精良なもの（SI1167－902・921などと同一）で，須恵器系ではない。底部外面は糸切りののちにヘラミガキしたものであろう。器種と胎土からみて，新しい時期（Ⅳ期）に属するものと思われる。234は椀Aである。

甕（235～253）　このうち新しい時期と考えられるものは，236・239・246・248である。236は口縁端部が上方へたちあがるもので，B系の可能性がある。239はSI850の長甕（795）と同一個体と考えられるもので，つくりもシャープである。246もつくりがシャープで古い時期にはみられないものである。248は底部外面回転糸切りで，胎土も須恵器系でなく，新しいことは明確である。

非ロクロのA系には237・242・247がある。237は口縁部の屈折が明瞭で，ヨコナデが強く，胎土は須恵器系とも考えられる。一応A系2類に含めておく。242はゆるく外反する口縁で粘土紐の接合痕がよく残る。A系1類である。241も口縁部の形態と外面のハケ目などの調整技法からA系の可能性があるが，胎土は須恵器系に類似する。口縁部のヨコナデは強い。

これら以外の口縁部はおおよそC系と考えられる。ただし，243は「く」の字状に外反する口縁部と丸味をもつ体部から，B系であろう。ただし，器壁は厚く，端部は丸い。底部（250～253）は250が器壁が薄く，ロクロナデ・カキ目がシャープで，新しいと考えられる。253は底面までヘラケズリされ，長甕C系であろう。249は胎土が精良で，広い底部にヘラケズリがされており，特異である。

鍋（214～216）　216はつくりがシャープで，体部外面にタタキ目が残り，新しい。214は身の深い器形で，短胴甕の可能性もある。口縁部にやや歪みがあるが，胎土は須恵器系で，C系と考えておく。

土製品（213）　いわゆる土管である。外面に粗いハケ目，内面は不調整で，粘土紐の接合痕がそのまま残る。胎土は明るく，須恵器系である。

SI 1461出土土器（図版70・183・194・219，観察表 253頁）

カマドとその周辺から土器が出土した。254・255の有台杯や土師器からみて，Ⅰ期と考えられる。

須恵器（254～257）　有台杯・短頸壺脚台・小壺がある。

有台杯（254・255）　254は有台杯AⅠで，胎土はC群である。器壁が全体に薄く，つくりはとくによい。高台は低く，底部の縁部に付され，体部下半は丸味をもつ。底部外面はヘラ切りのままである。255は底部が水平でなく，高台より突出する特異な形態で，底部外面は全面ロクロケズリする（図版 219－8）。畿内・北陸系の須恵器系譜でなく，東海地方の猿投窯系と考えられる〔坂井1988a〕。底部を残し，意図的に打ち欠いており，底部内面には墨痕が付着し，中央が磨滅している。転用硯であろう。256の脚台も底部外面に墨痕がみられ，転用硯である。脚台は低く，外方に張りだし，接地面が内側にのびるが，この部分が意図的に打ち欠かれている。外面は茶褐色を呈し，本来は肩にきれいな自然釉がかかったもので，須恵器としては優品の短頸壺であったと考えられる。257の小壺はあまり類例のないものである。

土師器（258～260）長甕，鍋がある。長甕（259）は形態・手法・胎土ともSI115（35）とまったく同一のもので，非ロクロ（A系2類）でありながら，技法はロクロ土師器のC系にちかいものである。260は非ロクロのA系1類である。鍋（258）は口縁部のヨコナデが比較的強く，一応A系2類と考えられる。

SI27出土土器（図版70・194，観察表 253頁）

SI640を切る住居跡で，出土個体数は少ない。Ⅰ期新段階に比定される。無台杯（261）は底部が水平なもので，SI71（63）と同じつくりである。口縁部にタールの付着があり灯明皿と考えられる。タールは口縁部内面のわずかな欠けた面に付着しており，口縁部に意図的に細工を加えて，灯明皿として使用したと考えられる。土師器のうち，265は内外面にカキ目があり，ロクロ土師器のB系，263・264・266は非ロクロA系2類かC系かと考えられる。265はつくりがシャープではなく，端部も丸くおさまる。266はSI752（207）と胎土やつくりが類似する。鍋（267）は体部に丸味がなく，口縁部が水平にちかいことから，C系かと考えられる。胎土は須恵器系である。

SI314出土土器（図版71・187・195，観察表 253頁）

無台杯（268）は底部が水平で，白っぽく焼成がやや軟質のものである。小甕（270）は器壁が厚く，肩の張る体部である。271は体部外面がナデで，下端部がヘラケズリで技法はよくわからない。長甕（272）はカマド内から出土したものである。平底で，体部外面はほとんどハケ目であるが，上半部にヨコ方向のカキ目と思われる調整があり，口縁部も短く，外方に屈折する形態から，C系と考えられる。底部の器壁が薄いこと，底部が不調整であること，胎土が須恵器系で，明るい褐色を呈することもその特徴とみることができる。Ⅱ$_1$期新段階と思われる。

SI1315出土土器（図版71・196・225，観察表 253頁）

須恵器（273～277）　いずれも胎土A群である。ただし，275はやや胎土が精良で，C群の可能性をもつ。274の無台杯の体部外面には墨書がみられる。277は出土個体のなかでは類例のない小壺である。肩部に断面方形の突帯をもつ。この部分は上下から接合して調整したようである。

土師器（279～281）　土師器には数少ない赤彩品（278）がある。胎土は白っぽい精良なもので，内外面に赤彩される。外面はロクロケズリで，蓋の可能性もあるが，明確な縁部が出土していないこともあって，一応無台杯としておく。長甕（279～283）はいずれも非ロクロのA系である。280は外面のハケ目の条線が鮮明でなく，下部は部分的にヘラケズリであり，底部外面にもかるいヘラケズリをおこなう。しかし，C系のヘラケズリとはことなり，胎土もA系のものである。281の底部外面は網状脈の木葉痕である。鍋（284）は体部に若干の丸味をもつが，口縁部が水平にのびるC系かと考えられる。胎土もそれに多い須恵器系のものである。非ロクロ土師器が主体であり，Ⅰ期新段階に比定されよう。

SI429出土土器（図版72・196，観察表 253頁）

Ⅳ$_1$期の竪穴住居SI840に切られる住居で，和銅開珎が出土した。

須恵器（285～287）　有台杯（285）・無台杯（286）・杯蓋（287）がある。285は深身の有台杯Bで，体部外面中位にくぼみがあるが，沈線ではない。

土師器（288～296）　小甕（289～294）のほかに椀B（288）・鉢？（296）・土製品（295）がある。小甕はいずれもロクロ土師器である。289・291・294はC系と思われる。290・292・293は器壁が相対的に厚く，292・293は端部に面をもつ。ロクロナデ，カキ目は比較的シャープでB系の可能性が考えられる。288の椀BはⅣ期以降に出現するロクロ土師器のタイプと考えられ，SI840からの混入と思われる。この胎土は須恵器系である。296は体部のみで器種が明確でない。内外面にロクロナデの凹凸が明瞭で，胎土は須恵器系で，

熱を受けている。鉄鉢形の鉢と考えられる。295はいわゆる土管で，器壁は厚く，外面にヘラケズリされる。

非ロクロ土師器はなく，288をのぞくと，Ⅱ$_1$期に比定されよう。

SI1300出土土器（図版72・196，観察表 254頁）

須恵器（297・298）　無台杯（297・298）のほか，未実測の杯蓋1点，杯数点，広口壺（？）1点，甕体部2点がある。298は焼成がやや軟質で，器面がはじけて剝離する。SI71（63）と類似するものである。

土師器（299～304）　小甕（299・300・302・303）・長甕（301）・短胴甕（304）がある。299は非ロクロながら，口縁部のヨコナデが強く，歪みも少ない。体部内面のハケ目はタテ方向ののちにヨコ方向に施しており，非ロクロA系1類とはことなる。A系2類であろう。胎土・色調はSI115（30）に類似する。302は口縁部にヨコナデがほとんど施されておらず，歪みが著しい。体部は径が大きく，頸部のしまりもない。303は底部外面周縁部に砂痕がみられる。全体の器壁が薄いことは長甕（SI71－75・76）と同様である。内外面ともハケ目ののちにナデを加える。300はC系である。底径が小さく，すぼまる形態である。長甕（301）はB系の底部，短胴甕（304）は頸部がほとんどしまらず，鍋にちかい形態である。口縁部が水平にのびること，胎土がC系に多い須恵器系であることから，C系の技法である。

C系のロクロ土師器が主体で，非ロクロのA系も存在する様相はSI71・SI502Bに類似し，Ⅰ期新段階からⅡ$_1$期に比定される。

SI1307出土土器（図版73・177・186・197，観察表 254頁）

須恵器　無台杯（305），有台杯（306～308）がある。胎土は305・307がC群，306がA群，308はC群かと思われる。305は海綿骨針を含む。有台杯（306）は高台径が小さく，底部の内側に付されている。高台は断面方形である。杯部の身は深い。SI1315（276）に形態・手法が類似する。高台の内側に墨痕がある。308の有台杯はSI752（196・197）と同じ手法のもので底部が厚く，つくりが全体に粗雑なものである。SI752（196・197）と類似するつくりであるが，SI752例よりはやや器壁が薄く，高台もやや小さく，厚い自然釉はみられない。相対的に新しい可能性がある。

土師器（309～314）　小甕（309～311）・長甕（314）・短胴甕（313）・土製品（312）がある。309は体部内外面ともハケ目で，非ロクロと考えられるが，口縁部が大きく外反し，明瞭な端面をもつこと，口縁部のヨコナデが比較的強く，歪みが少ないこと，ヨコナデが体部まで及ぶことから，A系2類と考えられる。310は須恵器系胎土で，底部外面は不調整である。A系2類か。311は底部外面が網状脈の木葉痕である。長甕（314）は明確なロクロ土師器ではないが，口縁部のヨコナデは強く，口縁部は「く」の字状に外反し，明瞭な端面をもつ。体部外面下半は強いタテ方向のヘラケズリである。体部内面上半部にはラセン状に施すハケ目（カキ目？）がみられる。平底であろう。胎土は明確な須恵器系ではない。非ロクロのA系2類と考えておく。短胴甕（313）はSI806（192）と同一の胎土，手法，形態である。技法はロクロ土師器に含められる。土製品（312）は筒状のものであるが，胎土はごく粗く，熱を受けてもろくなっており，フイゴ羽口の可能性も考えられる。明瞭なロクロ土師器はなく，Ⅰ期に比定される。

SI560出土土器（図版73・177・185，観察表 254頁）

土師器（315～317）カマドの芯に使用された長甕の完形品が2点（316・317）ある。ともに平底のC系であるが，形態・手法はことなる。316は器高に対し，体部径が大きく，体部上位がやや張る形態である。口縁

部は比較的長く，端部が若干垂下する。体部外面はケズリの効果をもつハケ目で，下端にヨコ方向で，底部外面にも加える。内面中位から下位の調整はカキ目ではない。底部は水平でなく，中央がやや突出する。317は体部の張りがあまりなく，口縁部は短く水平にのび，鋭い面をもつ。体部外面中位以下はヘラケズリで，内面は指頭圧痕とハケ目である。焼成がとくに硬質である。胎土に海綿骨針を含む。この形態・手法はSI20（369），SI７（481）と同一であるが，Ｃ系のなかでは少ない。315は土師器としては少ない無台杯Ｂである。法量はやや大きく，須恵器の無台杯Ｉに相当する。若干身が深い。内面と体部外面はロクロナデ，底部外面は回転ヘラ切りののちナデで，基本的に須恵器と同一である。しかし，焼き上りは酸化焔焼成の土師器で，胎土も丸味をもつ小礫を含み，一般的な須恵器とはちがうようである。胎土には長甕（317）と同様に海綿骨針を含む。

出土土器は少ないがⅡ1期の資料と考えられる。

SI458出土土器（図版74・177・197，観察表 254頁）

須恵器（318）　杯蓋（318）は口径16cmにちかい大型品で，有台杯ＡⅠにともなうものである。天井部は器壁が厚く，つまみは比較的大型で扁平である。天井部外面のロクロケズリは弱く，一部ヘラ切り痕を残す。１～３㎜大の長石・石英を含むが，器面はなめらかで，ごくわずか海綿骨針を含む。胎土やつくりは有台杯（SI1307－308）ときわめて類似している。胎土Ｃ群と考えられる。

土師器（319～324）　小甕（319）は口縁部が短く，Ｃ系，321は木葉痕（網状脈）があり，Ａ系である。320は全体に器壁がごく薄く，体部内外面はカキ目ではないが，ヨコ方向のハケ目である。非ロクロと考えられるが，丸くふくらむ体部と，しまった頸部の形態は新しい様相が感じられる。Ａ系２類にはいるのであろうか。長甕（322～324）のうち，丸底の322はＢ系，ほかは非ロクロのＡ系である。322は硬質の焼き上りで，器壁は薄く均質で，つくりは特によい。　内面ハケ目，外面は強いヘラケズリである。杯蓋（318）の形態や非ロクロ土師器が目立つことから，Ⅰ期のなかに含められよう。

SI803出土土器（図版74・177・198，観察表 254頁）

須恵器（325～326）　無台杯（325）は底部が水平で，直線的にたちあがる。　白っぽい軟質の焼成である。326は片口をつけたものである。

土師器（327～334）　小甕（327）・甕（331・334）が非ロクロのＡ系，ほかはロクロのＣ系と考えられる。Ａ系の327は鉢に近い形態である。331は口縁部がごく短く外反する特異なものである。334は体部外面下半，底部外面を粗くヘラミガキする特異な調整である。この調整は精製品にみられる一般的なヘラミガキではなく，縄文土器の内面のように器面をつぶすものである。底部が薄いことも注目される。底部のみの332は形態・手法からみて，SI1307（313），SI806（192）などと同じタイプで，短胴甕と考えられる。胎土も明るい色調で，比較的精良であり，共通している。333は底部外面までヘラケズリするもので，器壁は薄い。330はＣ系の長甕で，端部に凹線様の面をもつ。335もＣ系の鍋である。器壁はやや厚く，口縁部は短く外反する。焼成はきわめて硬質で，一部灰色を呈する。胎土は粗く，須恵器に対応させるならば，Ａ群である。Ｃ系が多く，非ロクロを含むことから，SI502Ｂに類似する様相である。

SI８出土土器（図版75・76・177・183・187・198，観察表 255頁）

土師器の長甕に良好な資料が多いが，須恵器が少ないこと，撹乱坑出土土器が多く含まれることで，全

体の様相はやや不明確である。土師器はロクロのC系が主体である。

須恵器（336～339）　無台杯・有台杯があるが，339は攪乱坑，337・338は上面出土である。336のみカマドに接して出土した。

無台杯（336～338）　336は口径に比し，器高が3cmと低く，かなり身が浅い。底部は水平よりややくぼみ，安定しており，直線的に開く。337は口径約14cmで，身も若干深い。底部から体部は丸味をもち，つくりはよい。胎土はA群と推定されるが，精良な感じがある。338は336・337より小型で，器壁が薄い。

有台杯（339）　つくりが全体に粗雑である。高台は低いが，比較的底部の外側に付されており，明瞭な内端接地である。

土師器（340～348）小甕・長甕・短胴甕・鍋がある。

小甕（340～342）　340・342はロクロである。340は口縁部がゆるく外反することから，C系と考えられる。

底部（341）はハケ目調整のA系であるが，底部外面は不調整である。A系2類の可能性がある。　底部（342）は小甕か長甕かは不明である。底部外面は不調整で，長甕C系の底部の可能性が考えられる。胎土・色調からみて，348の底部の可能性がある。

長甕（343～345・348）すべてロクロ土師器で，344のみB系で，ほかはC系である。B系の344は口縁部が「く」の字状に直線的に外反し，端部は上方へつまみあげられ，つくりはきわめてシャープである。ロクロナデ，カキ目の下に明確なタタキ目を残さないが，B系2類である。C系のうち，343は器高40cmをこえる大型品である。口縁部は弧状に短く外反し，端部に広い面をもつ。体部外面上位はロクロナデ，中位はカキ目，下位はハケ目で，とくに下部は強いハケケズリである。体部中位には外形のカーブに変化点がある。粘土紐の積み上げの区切りと考えられる。内面は器面があれており調整不明であるが，下位に指頭圧痕がみられる。345は344よりも器高が低く，手法はややことなる。口縁部はほぼ水平で短くのび，端部に面をもつがやや丸味をもつ。体部上位内外面はカキ目で，内面下位もカキ目である。外面中位～下位，内面中位はハケ目で，外面はハケケズリである。348は体部外面上半部がハケ目であるが，かるいロクロナデが部分的になされる。内面上位にカキ目がありC系と考えられる。体部外面下半のヘラケズリは強い。342がこの底部の可能性がある。

短胴甕（347）　この器種としては全体の器形を残す唯一の例である。口径は約26cm，器高約20cmで，大型である。外面は上位をのぞいて，強いヘラケズリがなされ，内面下位には指頭圧痕が残る。底部は平底で，口縁部は器壁が薄く，焼成はかなり硬質である。これらの手法・胎土は長甕C系のうちSI560（317）・SI20（369）にもみられ，同一の製作によると考えられる。ヘラケズリが一方向のみでなく，ラフであることも両者は共通している。同一個体と考えられる破片がSI14のカマドから出土している。

鍋（346）　非ロクロのA系の数少ない例である。底部外面は網状脈の木葉痕で，外面下端はヘラケズリで，底部との境を削りとる。口縁部は比較的明確に屈折して，外反する。体部から口縁部の器壁は薄い。口縁部のヨコナデは比較的ていねいである。木葉痕をもつことからA系1類と考えられるが，このうちでは比較的つくりはよい。

土師器には非ロクロは8点のうち2点（25%）である。C系主体であることから，II_1期と考えられる。

SI72出土土器（図版76・77・177・187・197・220，観察表 255頁）

須恵器（349～354）　無台杯・有台杯・短頸壺？がある。

無台杯（349～352）　口径13～14cmでほぼ共通するが，胎土・手法はやや異なる。350は胎土に大粒の石英

を含むが，ほかはやや精良で，C群の可能性がある。底部外面はヘラ切りののちにかるくヘラケズリしたものである。これは意図的に施したもので，珍しい。349・351・352はA群と考えられるが，349のみ焼成がかなり硬質で，灰色を呈する。351・352は白っぽく，やや軟質である。349・350は底部がほとんど水平であるが，351はかなり丸い。352は口縁部に灯芯の痕が明瞭に残り，灯明皿として使用されたものである。（図版 220－1）。

有台杯（353）　胎土C群で，焼成も硬質である。口径約14cmで，有台杯AⅠに近い。高台は底部のやや内側に付される（図版 220－4）。接地面が明瞭にくぼむ。高台内面に墨痕が薄く残り，やや磨滅している。転用硯であろう。354は短頸壺の高台と考えられる。

土師器（355～364）　小甕・長甕・短胴甕がある。

小甕（355～357・361）　355は口縁部がごく短く，端部が尖るものでC系，356はきれいに「く」の字状に外反するものでB系である。357は明瞭な口縁部をもたないもので，短く外反する端部をもつ。口縁部内面に炭化物が付着しており，用途・機能は他の小甕と同一と考えられる。底部のみの361は石英を含みながら，胎土が比較的精良で，須恵器のA群には対応しない。

長甕（358～360・362・363）　363は丸底でB系であるが，ほかはC系である。358は口縁部が大きく外反し，端部が垂下する。360は体部下半部がヘラケズリされるものの，ほかはハケ目で，明確にロクロ土師器とはできないが，胎土が明瞭に須恵器系であることなどから，C系としておく。ハケ目はごく細かな条線である。B系の363はととのった丸底で，内外面ハケ目である。

短胴甕（364）　石英粒を含むものの，比較的精良な胎土である。口縁部は「く」の字状に外反するが，端部が丸くやや厚くなっており，技法はC系にちかいようにも思われる。

非ロクロ土師器はほとんど見られず，C系が主体であることから，Ⅱ$_1$期に比定される。

SI20出土土器（図版77・78・184・191・223，観察表 255頁）

カマドの芯として使用された土師器長甕4個体がある。同時に使用されたもので，ほぼ全形を残す例として貴重である。ただし，これら以外にはほとんど土器がみられない。

小甕（365）はB系であろう。底部（366）は外面に平行脈の木葉痕を残す。器壁が厚い。非ロクロA系の長甕である。

カマドの芯である長甕4個体のうち，367はB系で，他はC系である。367は「く」の字状に外反する口縁に丸底をもつ。全体に器壁は厚い。底部内面にあて具痕を残すが，外面にはタタキ目は明確に観察されない。底部付近は器壁の厚さが一定でなく，接合部と思われる厚い部分が明確である。また，体部内面には粘土紐の接合痕がよく残っている（図版 223－6）。外面上位のカキ目はほとんどシャープでなく，B系1類に含められるもので，B系では古いタイプと考えられる。368のC系の長甕はSI560（316）と法量・形態・手法などが共通するものであり，体部径が比較的大きい。369はSI560（317）と共通するつくりのC系の長甕である。器壁は薄く，焼成はごく硬い。370は内外面ともタテ方向のハケ目が主体で，カキ目は内面上位にわずかにみられるのみである。C系の土師器が主体であることからⅡ$_1$期の資料と考えられる。

SI14出土土器（図版78・79・177・199・219・226，観察表 256頁）

出土個体数が30点以上を数え，内容豊富である。Ⅱ$_1$期の基準資料である。

須恵器（371～383）　無台杯・有台杯・杯蓋・横瓶・脚台がある。実測個体以外に杯片多数，杯蓋2点，

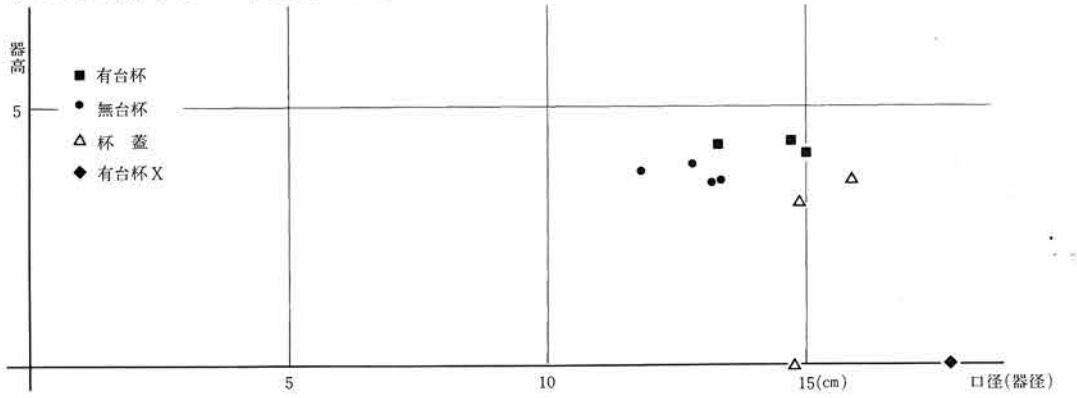
甕2点がある。胎土は374・375がC群で，他はA群である。

無台杯（371～374）　口径11.8～13.4cmで，14cm以上のものはない。371は口径12cm以下で，やや小さく，底部は丸い。373は底部が水平で，やや身が深いタイプである。374の口縁部は外反する。このような外反する口縁部のものはC群の胎土のものにままみられる（SI15－492など）。372の体部外面下半にはカキ目かと思われる調整痕がみられる。

有台杯（380～383）　有台杯A（380～382）と有台杯X（383）がある。有台杯Aは口径約15cmの有台杯AI（380・381）と約13cmのAII（382）がある。形態・手法は同一である。杯部は身が浅く，体部と底部の境は丸くなる。高台は底部の内側に付されており，高台径は口径の½程で，かなり小さい（図版 219－3 ）。こうした形態はこの住居資料の指標である。高台は接地面までていねいにロクロナデされ，内端が尖る。380・381の高台内面には「十」のヘラ記号がある。有台杯X（383）は口径が大きく，身はやや浅い。体部に二条と口縁部に一条の沈線をそれぞれめぐらす。胎土は白っぽく，内面に厚い自然釉がかかる。横瓶（379）と類似した色調・自然釉である。

杯蓋（375～377）　口径15～16cmである。377は天井部のロクロケズリがなく，ロクロナデを加えるものの，ヘラ切り痕をとどめる。376・377ともつまみは小さく，中央の突起もあまりない。375は天井部内面に一方向ナデが加えられ，器壁もやや厚い。

横瓶（379）　胎土が多孔質で，気泡がかなり多く，歪みもある。　色調は白っぽく，自然釉がかかり光沢をもつ。378は脚台であるが，器部の形態はわからない。端部はきれいに面とりされる。



第48図　SI14須恵器食膳具法量分布

土師器（384～401）　小甕・長甕・土管がある。明確に非ロクロのものは392だけである。実測個体以外にも非ロクロのA系の破片は2，3点あるのみである。

小甕（384～393）　口縁部（384～389）のうち，385・386・389はC系，384・387・388はB系かと思われる。384の口径は約11cmでとくに小さい。B系の384・387・388の口縁部は上方へつまみあげられるか，短くたちあがるかしており，つくりはシャープである。底部（390～393）のうち，392は底部外面が不調整であるが，内外面はハケ目で，A系である。器壁は全体に薄い。390・391は外面下半を斜め方向にヘラケズリするものである。391は体部の器壁が薄く，底部は体部との接合部がかなり厚くなる。底部はやや丸い。全体につくりのシャープさが感じられる。これに対し，390は器壁が厚く，内面のナデも粗い。393も含めてB系かC系かは不明であるが，391は少なくともB系と考えられる。393は底径が小さくC系であろう。

長甕（394～400）　底部（394・395）はともに大きな平底のC系である。394はとくに強い熱を受けた痕跡が明瞭である。口縁部（396～400）のうち，399・400はつくりがシャープで，B系2類である。400は端部が短くたちあがるものである。カキ目のあとの調整は明瞭なヘラケズリではなく，ナデのようである。397は

SI20（365），SI560（317）と同じタイプのC系である。398は上半部のみで，底部の形態がわからないため，技法の系譜は明瞭でない。内外面のハケ目は太い条線で，ヨコ方向のカキ目はきわめて弱く，斜めになる部分が大きい。器壁が厚く，体部と口縁部との屈折も鋭くなく，B系2類でないことは確実である。口縁部が相対的に直線的にのび，端部が垂下したり，太くなったりしていないことを重視すれば，B系と考えられる。396は口径がやや大きく，短胴甕の可能性がある。技法はC系である。

土管（401）　ロクロ土師器で，全体につくりがよく，調整はシャープである。この破片の天地は端部が肥厚することなく，面をもっておさめられていることから，上端部と考えられる。土管にもさまざまな技法が存在するが，これはロクロ土師器のB系でも2類に含められるものである。

土師器はほとんどがロクロ土師器で，しかもC系のほかにB系がかなりあり，しかもシャープなつくりの2類が一定量占めている。11点の土師器の口縁部のうち，A系は1点（10%），C系は5点（45%），B系2類は5点（45%）である。また，須恵器の杯は大型品でありながら，有台杯の高台が小さくなり，SI12よりは明確に新しい様相を呈している。したがって，SI12よりは新しい時期（Ⅱ$_2$期）に比定される。

SI 280出土土器（図版80・177・183・198・225，観察表 256頁）

須恵器（402～406）　無台杯・杯蓋・有台杯がある。いずれも胎土A群である。無台杯（402・403・406）のうち402は口径約14cmで，やや大型である。体部下半が丸く，口縁はわずかに外反する。403はこれよりもやや小型で，底部は丸く，器壁は厚い。つくりは全体に粗雑で，歪みがある。底部外面には条線状の圧痕がみられる。406は体部外面に「五」の墨書がある(墨書4)。杯蓋（404）も403と同様に器壁が厚く，つくりが粗雑である。天井部外面にはロクロケズリがなされる。403・404は同一の製作になるものである。有台杯（405）は高台がやや高いが，SI14例ほど内側に付されていない。403・404よりつくりはよい。

土師器（407～410）小甕と長甕がある。

小甕（407）　C系で，口縁部はごく短く外反するのみで，端部は尖る。体部下端のヘラケズリはごく粗く，底部外縁の突出部を削りとってはいない。

長甕（408～410）　いずれもB系に入るものであるが，408・409は器壁が相対的に厚く，薄い410と技法の系譜がことなる。408・409はB系1類，410はB系2類である。408は体部中位に外面タタキ目と内面あて具痕があるが，409はタタキ目は観察されず，内外面ハケ目とカキ目である。カキ目はシャープなものではなく，曲がった部分があり，ロクロの回転速度は遅い。408の胎土は丸味をもつ礫を含み，A系の胎土に類似する。409は比較的精良なものである。一方，410は口縁部が「く」の字状に外反し，端部が短く上方へたちあがり，その外面に凹線様のくぼみをもつ。体部下半外面にはタタキ目をよくとどめる。底部は尖り気味で，底部はヨコ方向のハケ目がかるく施される。内面はハケ目であて具痕をよく消す。様相としては409より新しい。

当土器群は土師器にC系を含み，B系にも1類を含むことから，Ⅱ$_2$期～Ⅲ$_1$期の段階に比定されよう。

SI 75出土土器（図版81・177・200・225，観察表 257頁）

SI72・670を切る住居で，比較的出土個体数は多いが，まじりがあると考えられる。

須恵器（411～421）　無台杯・有台杯・杯蓋・広口壺・広口甕がある。胎土は412・419・420・421がC群で，ほかはA群である。

無台杯（411・413・414）　411は小型で底部が丸いもので，いくつか同じつくりのものがある。(SI310－607，SI１－670など)。413・414は底部が水平で，身が浅い形態であるが，器壁が薄い。口縁部はやや外反する。

有台杯（412）　底部を欠くが，口縁部外面に凹線様のくぼみをめぐらすもので，胎土は白っぽく，やや軟質である。

杯蓋（415～418）　ともに縁部が外方に比較的長く屈折し，端部は尖る。415はSI14（305）と同じ胎土・手法である。416は天井部がほぼ水平で，明瞭な段をもって縁部にいたる。天井部外面のロクロケズリはごく一部分にある。

広口壺（419）　大型で，頸部に２条の沈線をめぐらす。胎土はＡ群と考えられるが，大きな粒子はほとんど含まない。自然釉もきれいにかかっている。SI27に同一個体の破片が出土している。

広口甕（420・421）は同一個体の口縁部と体部である。SI502に同一個体が出土している。

土師器（422～430）　小甕（422～424）・長甕（425～430）がある。小甕では422がＣ系，423・424がＢ系，長甕はＢ系である。Ｂ系でも器壁の薄いシャープなつくりの２類が多い。428にはカキ目の下にタタキ目がみられる。小甕（423）・長甕（426・429）は縁端部が短くたちあがり，外面にくぼみをもつ。430は器壁が厚く，Ｂ系２類ではないが，Ｃ系かＢ系１類かは体部下半部がなくよくわからない。口縁部の端部は丸いが，垂下はしない。体部外面はハケ目で，上位にはかるくロクロナデが加えられる。SI14（398）と同様なタイプで，口縁部が比較的直線的であることを重視すればＢ系１類と考えられる。

ロクロ土師器でもＢ系２類が多くＣ系ないしはＢ系１類を含むことから Ⅱ$_1$期の新しい段階くらいに比定できよう。

SI　339出土土器（図版82・201・220・225，観察表 257頁）

須恵器の出土個体数が多いが，土師器が少ないため，全体の様相はいまひとつ明確でない。須恵器は稜椀・壺類・鉢類など，杯以外の器種が目立つ。

須恵器（431～450）　無台杯・有台杯・杯蓋・蓋・稜椀・短頸壺・鉢がある。胎土は大半がＡ群である。

無台杯（431～436）　口径12～13cm，器高３～４cmである。431は胎土がやや精良で，Ｃ群の可能性をもつ。ほかのものより口縁部の開きが少ない。生産地による形態のちがいと考えられる。432～436のうち，432・436はとくに口縁部の開きが大きく，435は底部に丸味をもつ。

有台杯（437～440）　有台杯Ａ（437・438），有台杯Ｃ（439・440）がある。437・438は口径約13cm，器高約3.5cmで，法量・つくりとも同一である。439は胎土Ｂ群の可能性をもつもので，特異である。法量も有台杯ＢとＣの中間的な位置にある。Ｂ群とすれば，もっとも古い時期のものと考えられる。440の有台杯CはSI７（461）に比し，器壁が全体に厚く，やや古い感じを受ける。

杯蓋（444～446）　445は天井部外面はロクロケズリされない。446はつまみの形態が擬宝珠形で，特異である。天井部外面のロクロケズリは比較的ていねいで，広い範囲に及ぶ，外面全体に自然釉がかかっている。一般的な杯蓋でない可能性がある。447も特殊な蓋である。天井部に突帯をめぐらすもので，口縁部の屈折も長い。器壁がとくに薄く，つくりはよい。稜椀の蓋であろうか。

壺蓋（441～443）　ごく小型品（441）と一般的な大きさのもの（442～443）がある。442は口縁部のつくりが単純で，丸くおさまるのみであり，無台杯とも考えられるが，外面全体に厚い自然釉がかかることや無台杯としてはやや小さくて浅いことからみて，壺蓋と考えられる。443は短頸壺の蓋に一般的なつくり

で，口縁端部が尖る。

稜椀（448）　器壁が厚く，口縁端部は上方へつまみだされる。胎土はSI360（656）に類似するが，口縁部の長さがことなる。

短頸壺（449）　口縁部のたちあがりは内傾する。底部に一条の沈線をめぐらす。口縁部以外に自然釉が厚くかかり，蓋を伴って焼成したことがうかがえる。

鉢（450）　口縁部が短く外反し，肩が張り，底部は平底である。SI15に同一個体がある。底部外面はナデであろう（図版220−7）。

土師器（451〜455）　長甕・小甕・無台杯がある。

長甕（451）　体部外面と内面下半部ハケ目で，内面上半部がカキ目である。タタキ目は観察されない。体部外面上半部は粘土紐かと思われる凹凸が目立ち，タタキ調整はなされていないと考えられる。口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方につまみあげられる。SI７（486）に類似する器形・手法であるが，胎土は須恵器Ａ群に対応する粗いもので，SI７例とはことなる。

小甕（452〜455）　454は口径約17cmで，小甕では大型のものである。454・455はともに器壁が厚く，「く」の字状に外反し，端部は短くたちあがる。　452の底部は体部外面下端がヘラケズリされ，体部は直線的にたちあがらない。胎土は須恵器系でＡ系ではない。453の底部は外面に回転ヘラ切り痕が残る。器壁が厚く，体部下端はややくびれる。ヘラ切り痕を残すこと，明瞭に焼けた痕跡がないことから無台杯Ｂの可能性が考えられる。

当土器群は土師器が少なく，年代も明確にしえない面があるが，土師器甕がSI７に類似することから，おおよそⅢ$_1$期と考えられる。

SI７出土土器（図版83・84・177・185・202・218・223・224，観察表 258頁）

出土個体数が40点以上あり，良好な資料である。須恵器杯類は有台杯，無台杯とも大型品（Ｉ）がなくなり，土師器系はＢ系の２類にほぼ統一される。Ⅲ$_1$期の基準資料である。

須恵器（456〜466）　無台杯・有台杯・折縁杯・杯蓋がある。未実測個体は無台杯約10点，有台杯１点，杯蓋２点，折縁杯１点，横瓶１点，大甕１点である。横瓶はSI310（611）と同一個体で，SI６にも同一個体片がある。折縁杯はまったく同じタイプである。胎土は大半がＡ群である。

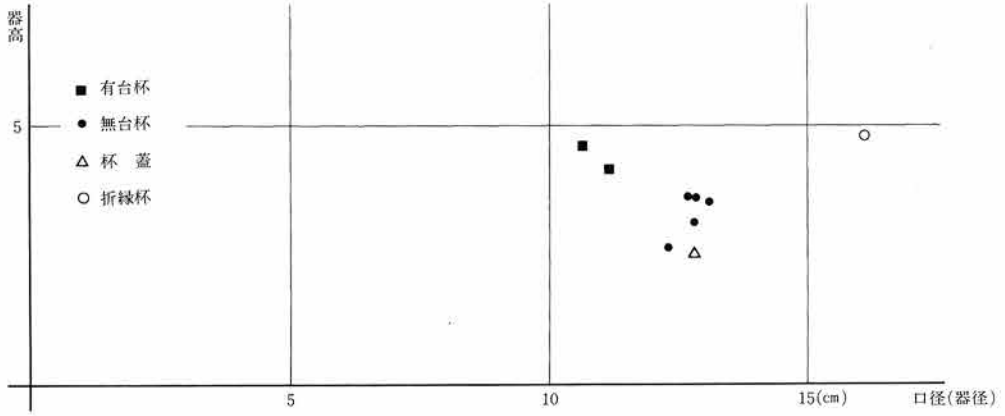
無台杯（456〜460）　５点のうちでは460が器高３cm以下でとくに身が浅い。　これは口縁部がやや内湾するもので，胎土はＡ群に類似するが，やや精良である。456〜459は口径約13cm，器高3.5cmで，ほぼ同じ法量である。しかし，つくりは同じものではない。カマド出土の457は器壁が厚く，底部はとくに水平である。458は器壁が全体に薄く，SI15（493），SI６（519・520）などと類似する。

有台杯（461〜464）　461は口径10.6cm，器高4.6cmの有台杯Ｃである。径高指数（器高／口径×100）が43である。体部から口縁部の器壁は薄いが，底部は比較的厚く，高台もしっかりしている。462は口径11.2cm，器高4.1cmで，法量は有台杯Ｃと大きな差はないが，径高指数は37で，相対的に身は浅い。　有台杯ＡⅢである。463は口縁部を欠き，器高は不明であるが，高台径と底部から体部の丸味からすると，有台杯ＡⅢであろう。これは胎土がやや精良で，Ｃ群の可能性もある。464も口縁部を欠くが，形態・手法は特異なもので，注目される（図版218−5）。　すなわち，①底部外面はロクロケズリである。②底部内面はきわめてなめらかで，器面の凹凸がない。③底部から体部は明瞭な屈折点をもって直線的にたちあがることである。これらの特徴は他の須恵器杯にほとんどみられない特徴であるが，底部糸切り技法の須恵器には一

般的なものである。底部外面はロクロケズリされているため，切り離し技法は不明であるが糸切りされていると考えられる。胎土もA・B群ではない。糸切り技法の須恵器は他に無台杯（SI 1－672），杯蓋（1042）があるのみである。

杯蓋（465）　器壁は全体に薄く，天井部から縁部まで屈曲なくつながる。天井部外面はロクロケズリはなされず，ヘラ切り痕が残る。

折縁杯（466）　口径16cm，器高4.8cmの大型の折縁杯である。高台は底部のかなり内側に付され，高くて器壁は薄い。体部はくびれ，口縁部は短く上方へ折れる。内面には火だすきがかかる。折縁杯としては出現期の古いタイプと考えられる。



第49図　SI 7 須恵器食膳具法量分布

土師器（467～491）　小甕・長甕・鍋・底部がある。476・481が非ロクロA系の可能性をもつが，他はすべてB系である。C系はない。

小甕（467～475・477～480）　法量からみて，口径約10cmのもの（467），口径13～14cmのもの（468～472），口径15～16cmのもの（473～475・477）に分けられるが，全体の器形，法量が不明なこともあり，それぞれの区別は明確ではない。477・478などはとくに体部がやや長く，法量はかなり大きいが，口径20cm以上の長甕との差は大きい。これらの口縁部内面には炭化物が付着しており，一般的な小甕と同様の用途と考えられる。小甕の技法はすべてB系である。口縁部は「く」の字状に直線的に外反し，つくりはいずれもシャープである。口縁端部が上方へつまみあげられるものが多い（471～475・477）。477はとくに明瞭である。468をのぞいていずれも口縁部内面に炭化物がよく付着する（図版224－6）。底部（480）は大きさからみて，小甕であろう。482もその可能性が強い。これは底部が水平でなく，かなり突出する。

長甕（476・481・483・486～491）　476は口縁部がゆるく外反し，非ロクロのA系の可能性がある。しかし，口縁部のヨコナデはきれいで，胎土も精良で，明るい色調である。底部（481）は木葉痕があり，476の底部の可能性が考えられる。底部は平底ではあるが，木葉痕をもつもののなかでは，突出気味で，胎土も比較的精良で特異である。内面はハケ目でていねいに調整されており，つくりもよい。

476・481以外の長甕はいずれもロクロのB系である。しかし，手法は同一でない。486・487は体部上半部にカキ目が施されているが，部分的である。これに対し，488～491はカキ目が全面に施される。486はカキ目ではなく，内外面とも全面がていねいなハケ目である。明瞭なタタキ目，あて具痕はみられない。底部は丸底である。口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方へつまみあげられる。この土器の胎土は1㎜大のさまざまな粒子を多く含むが，素地そのものは精良である。一般的な土師器の胎土には1㎜以上の大粒の石英を含むが，これにはみられず，産地のちがいが推定される。技法が一般的でないことも，そ

れによると考えられる。これに対し，487は体部上半部に，タテ方向のハケ目ののちにカキ目を部分的に施す。外面中位はヘラケズリである。体部外面下半にはタテ方向のハケ目の下にかすかなタタキ目が観察される。また，体部上半にもわずかにタタキ目が残る。ただし，タタキ目の原体の凹凸は少ない。このことから，ハケ目の前に体部上半までタタキを施していることから，下半部の丸底化はタタキによると推定される。口縁部は体部との屈折がやや丸く，端部は上方へつまみあげられる。

488～491のうち，488と489はカキ目がとくにシャープで，口縁部から体部上端の外面にタタキ目を残す（図版 223－5）。焼成も硬質である。典型的なB系2類である。490・491は体部外面中位がタタキ目とヘラケズリである。ヘラケズリは比較的強く施される。491は口縁端部がやや肥厚し，丸くおさまる。底部（483）はタタキ目，あて具痕をそのまま残すもので，B系である。A系の476とB系の486・487・491はカマドの芯に使用されたもので，488・490より相対的に古い様相をとどめている。488はSI 4（560）と同一個体である。

鍋（484・485）ともにB系であるが，484は器壁が相対的に薄く，口縁端部は上方へつまみあげられ，尖り気味である。これに対して，485はやや器壁が厚く，体部から口縁部への屈曲も丸く，端部は上方内側へつままれるもののシャープさに欠ける。

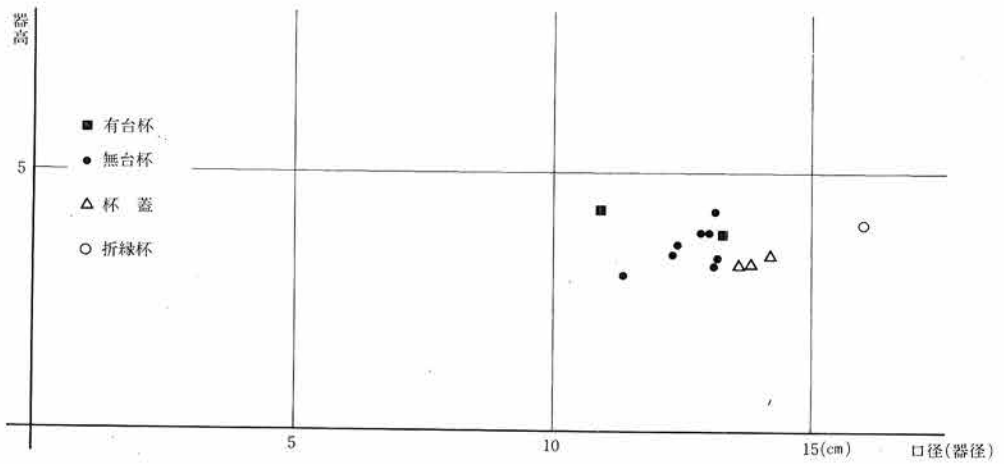
SI 15出土土器（図版85・178・200・216・223・225，観察表 259頁）

20個体以上出土しており，比較的まとまっているが，須恵器が多い。須恵器は完形品で出土したものが多い。

須恵器（492～507）　無台杯・有台杯・杯蓋・折縁杯がある。

無台杯（492～499）　492のみやや小さく，ほかは口径12.3～13.2cm，器高3.3～3.8cmである。492・499は胎土C群で，ほかはA群である。492は小さいものの器壁は比較的厚く，底部はほぼ水平で，口縁端部がわずかに外反する。493は全体に薄く，SI 7（458）と同じつくりである。495・498は胎土・調整とも特に粗雑で，底部は突出気味である。494～498はおおむね底部の器壁が厚い。この土器群の須恵器は有台杯，杯蓋も含めて，器壁の厚いものが多く，それぞれ共通のつくりであることがうかがえる。

有台杯（500～502）　500・501は小型の有台杯AⅢ，502はAⅡである。501・502は高台が底部のやや内側に付されており，底部から体部は丸い。502は身が比較的浅く，高台は小さい。わずかながら外端接地となる。



第50図　SI15須恵器食膳具法量分布

杯蓋（504～506）　いずれも天井部は水平で，つまみは扁平で中央がくぼむ。器壁はとくに厚い。504・505はまったく同一のつくりで，天井部はかるくロクロケズリする。506の天井部外面はロクロケズリしてない。

折縁杯（503）　口径16cm，器高4cmの大型品である。SI 7（466）に比し，身の開きがやや大きく，高台は低くて，底部の外縁に付される。完形品である。高台は若干「ハ」の字状に開くが，接地面は水平につくられる。高台内面はヘラ切りののちロクロナデされる（図版 216－6）。

土師器（508～512）　小甕（508～511）・長甕（512）がある。いずれもB系と考えられるが，509は口縁部が短く，古い様相を示す。底部（511）は厚い。510と同一個体の可能性がある。長甕（512）は，口縁部は体部からほぼ直角に屈折し，「く」の字状に外反する。全体につくりはシャープであり，端部は面をもつ。口縁部の外面にタタキ目かと思われるかすかな凹凸がみられる。B系2類である。体部外面下半はタタキ目，内面はハケ目で，外面中位に強いヘラケズリをおこなう（図版 223－3）。底部はやや尖り気味で，体部との接合部が内面によく残る。

SI7と類似した様相であるが，須恵器は相対的に器壁が厚く，古いと考えられる。Ⅲ$_1$期の古い段階と考えておく。

SI 11出土土器（図版85・178・200・219，観察表 259頁）

513は口径12cmの有台杯AⅢである。高台は底部の内側に付され，径はかなり小さい。白っぽい色調で，焼成はやや軟質で内外面に火だすきがみられる。高台内に「X」のヘラ記号がある（図版 219－4）。514はつまみが剥離した杯蓋で，天井部外面にはロクロケズリがなされない。土師器の小甕（515・516）はともに「く」の字状に外反するB系で，515は端部が上方へつまみあげられる。517は底部外面までヘラケズリされるもので，長甕C系と考えられるが，とくに胎土が白っぽい。SI15などに近い時期と考えられ，Ⅲ$_1$期に比定される。

SI 6出土土器（図版86・87・177・203，観察表 259頁）

20点以上の出土があり，比較的まとまった資料である。ただし，須恵器杯蓋や土師器の小甕が少ない。Ⅲ$_2$期の基準資料である。土師器小甕に糸切りがみられること，長甕にタタキ目をまったく消さないものがあることが注目される。

須恵器（518～527・536）　無台杯・有台杯・折縁杯・稜椀・壺蓋・甕・横瓶がある。横瓶は未実測であるが，SI310（611）と同一個体の体部破片である。524のみ胎土C群で，ほかはA群である。

無台杯（518～520）　口径12～13cm，器高3.3～3.4cmである。518は器壁が厚く，底部がやや丸味をもつもので，体部の開きは大きい。SI 4（539）と同一個体である。519・520は同じつくりで，器壁が薄く，底部が水平である。

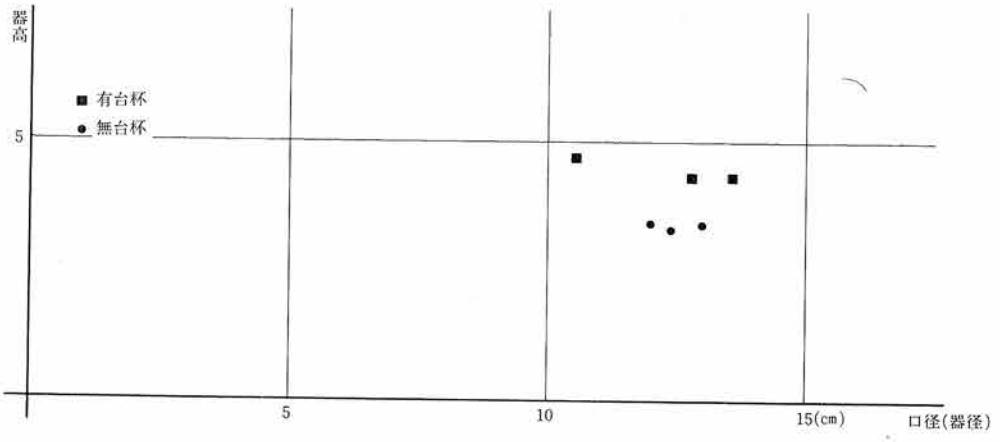
有台杯（521～524）　521・522はともに有台杯AⅡであり，胎土・調整が粗く，歪みがある。高台はともに外端接地である。522は高台が低く，ロクロナデもていねいでない。523は口径10.6cm，器高4.7cm（径高指数44）で，高台は底部のかなり内側に付される。有台杯AⅢの可能性もあるが，口縁外面には凹線様のくぼみをもち，有台杯Bのつくりに類似する。一応，有台杯Cと考えておく。524はSI60（594）と同一個体で，不明瞭ながら有台杯Cと考えられる。

折縁杯（526）　口縁部を欠くが，高台の形状からみて，大型の折縁杯と考えられる。高台は低く，薄い。底部の内側に付される。

稜椀（527）　全体に器壁が薄いもので，身はかなり深い。口縁部は上方へつまみあげられ，面をもつ。高台は「ハ」の字状に長く大きく開く。SI339の特殊な蓋（447）とつくりや胎土が類似しており，対をなす可能性がある。

壺蓋（525）　口径約10cm，小型品で，上面に厚く自然釉がかかる。

甕（536）　口頸部は小さくすぼまり，体部は球形にふくらむものである。口縁端部は水平な面をもち，外方へ大きくひき出され，内側にもつまみ出される。外面は平行タタキ目ののちカキ目，内面は同心円文あて具痕を残す。



第51図　SI 6 須恵器食膳具法量分布

土師器（528～535）　小甕と長甕がある。

小甕（528～531）　528は底部外面が回転糸切り不調整で，体部下端をかるくロクロケズリする。糸切りはこれだけである。かなり小型のものである。胎土はやや精良で，須恵器の胎土A群には対応しないと考えられる。529は口縁端部が上方へつまみあげられず，やや尖り気味になる。体部の張りがない。530は海綿骨針を含むものである。531は口縁部があまり長くなく，体部も張らない。底部は厚くて，やや丸味をもつ。

長甕（532～535）　いずれもB系である。532は口縁端部の外面にやや広い面をもつ。さほどシャープなつくりではないが，体部外面にタタキ目が残る。533～535はいずれも器壁がかなり薄く，つくりはシャープである。口縁部は体部から明瞭に「く」の字状に外反し，端部は上方へつまみあげられる。534 の体部外面のカキ目の下にタタキ目が残る。535の体部下半は外面が凹凸の大きな平行タタキ目で，内面はあて具痕が明確ではない。しかし，底部付近にはあて具状のくぼみがあり，かすかに同心円文状の痕跡がみられる。体部外面のタタキ目ののちにヘラケズリはなされない。

SI 4 出土土器（図版87・88・178・185・204・216・222・224・225，観察表 260頁）

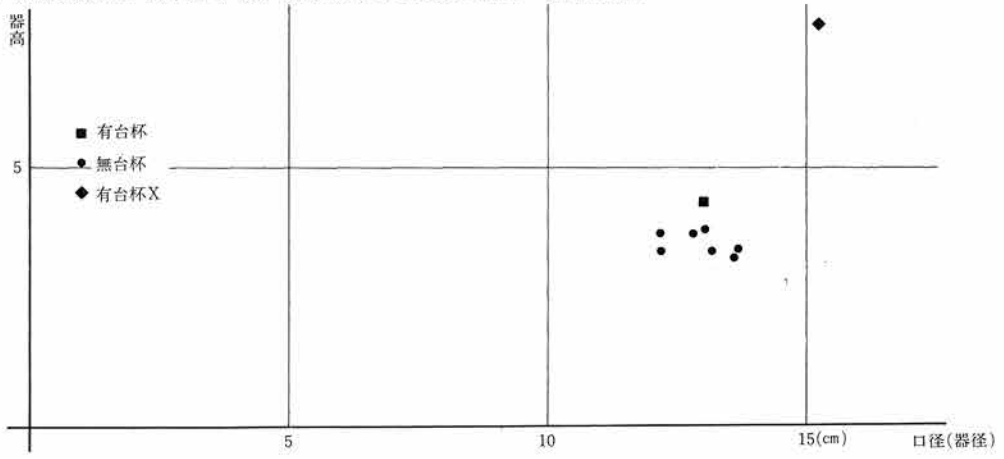
SI 4 は鍛冶工房の竪穴で，土器がかなりまとまって出土した。土師器の長甕に良好な資料がある。Ⅲ$_2$期の基準資料である。

須恵器（537～546）　無台杯・有台杯・杯蓋がある。542・543のみ胎土はA群でない可能性をもつが，ほかはA群である。

無台杯（537～543）　口径は12.1cmから13.6cmまで幅があるが，器高は3.3～3.8cmである。537は底部が水平で，口縁部が直線的に開くもので，SI15（496・497）などと類似する点がある。538はSI 6（518）と同

一個体で，底部は厚くて丸い。539・540はつくりが同一である。540は器面にはじけた小さな穴が多くあり，炭化物・鉄分等が付着した痕跡が明瞭である。鍛冶作業に関連した容器として使用されたと考えられる。541は口径がやや大きく，底部は丸い。542・543はまったく同じつくりで，胎土がやや精良なものである。底部は水平で，器壁は全体に厚く均一である。

有台杯（544・545）　有台杯ＡⅡ（544）と有台杯Ｘ（545）がある。544は器壁がやや薄いが，ＳＩ６（521）と調整や高台の形状・位置が同一で，同じつくりである。高台は底部のやや内側に付され，わずかに外端接地となる（図版 216－２）。545は口径15.2cm，器高7.5cmの有台杯で，体部外面に２条の細い沈線をめぐらす。沈線は深く鋭く施されず，目立つものではない。高台は低いが外側にふんばる。体部中位がややくびれ，口縁部は若干外反する。底部外面に墨書がある（墨書17）。



第52図　ＳＩ４須恵器食膳具法量分布

杯蓋（546）　天井部外面のロクロケズリは弱い。器壁はやや厚い。

土師器（547～561）　小甕と長甕のほかにフイゴ羽口がある。

小甕（547～555）　口縁部（547～552）のうち，547のみ体部からゆるく弧状に外反し，他は「く」の字状に外反し，端部が上方へつまみあげられる。552は上方へたちあがる。547はロクロ土師器で，Ｃ系の可能性がある。548～550は外面にカキ目がある。551は内外面にもロクロナデで，カキ目はおこなわれない。口縁部内面にはそれぞれよく炭化物が付着している（図版225－５）。底部は555をのぞいて，外面不調整で，555は静止糸切りである。553は外面下端にヘラケズリがみられ，胎土に３～５㎜大の小礫を含む。

長甕（557～561）　557は口径16.6cmで小さいが，口縁部と体部内面に炭化物の付着はまったくみられず，長甕と考えられる。この口縁部のみ，「く」の字状の外反が小さく，端部が丸くおさまる。外面のカキ目はシャープでなく，全面に施されない。器面に凹凸もみられ，調整はよくない。Ｂ系でも２類には入らないものである。ほかの558～561はいずれも口縁部から「く」の字状に外反する。とくに558・561は屈折が鋭い。全体を残す559～561の３個体のうち，559は体部外面下半のタタキ目はハケ目でかなり消され，内面のあて具痕は明瞭に残らない。また，上半部のカキ目も水平でない部分があり，カキ目の間にタテ方向のハケ目が部分的にみられる。外面下半はハケ目で一部ケズリとなる。ハケ目の条線ははっきりしない。タタキ目の凹凸は小さい。底部内面に接合部のふくらみがよく残る。体部中位がよく張る形態である。560はＳＩ７（488）と同一個体である。全体のつくりがシャープで，焼成も硬質の感じを受ける。口縁部は外反し，端部は上方へつまみあげられ，外面に明瞭な面をもつ。体部外面上半部のカキ目の下にはタタキ目がよく残る。体部外面下半は格子目にちかいタタキ目，内面は同心円文あて具痕である。あて具痕の凹凸は比較的大きく，カキ目ののちに施されるものである。外面中位には部分的にヘラケズリがなされる。561は

体部のふくらみがやや小さい形態である。口縁部は明瞭に「く」の字状に外反し，端部は上方へつまみあげられる。体部外面下半部のタタキ目は比較的凹凸が大きく，部分的にヘラケズリされている（図版222－2）。内面は凹凸の少ない同心円文あて具痕で，タテ方向のハケ目ののちに施される。長甕のうち，557は口縁部のつくりがシャープでなく，559はタタキ目が比較的よく消されていることから，ともに古い様相をもつ。

フイゴ羽口（556）　口径の小さい方の端部を欠く。大きい方は口径約７cmで，内面にヘラケズリがなされている。溶着物はみられない。これに対し，もう一方は熱を受けており，この先に溶着物がとくに付着していると考えられる。胎土は他の土師器と大きくことなるものでない。

SI 17出土土器（図版89・178・184・201・218，観察表 260頁）

須恵器（562～571）　無台杯・有台杯・杯蓋がある。

無台杯（562～566）　562は胎土Ｃ群で，ほかはＡ群である。562は口径14cm以上あり，やや大きい。ほかは口径13cm前後である。563・566は底部と体部の境が丸く，564・565は底部が水平である。565は身がやや浅く，底部が厚い。

有台杯（570・571）　570は胎土Ｃ群で，有台杯ＡⅡかＣである。高台は接地面が水平で，全体のつくりはよい。571は胎土Ｃ群の有台杯ＡⅡである。底部と体部の境は丸く，底部のかなり内側に付されている。高台は小さくて，内端接地である。内面にひろくタールが付着する灯明皿である。

杯蓋（567～569）　568は縁部をきれいに打ち欠いた転用硯で，内面全面に濁痕が残る（図版 218－１）。しかし，著しい磨滅はなく，これで墨を磨ったとは考えられない。つまみは中央がくぼむ。569の つまみは上面外周が高く，中央も若干突出する。SI14（377）と類似する。

土師器（572～575）　小甕と長甕がある。

小甕（572）　内外面ともカキ目のないもので，口縁部は「く」の字状に外反するが，さほどシャープなものではない。

長甕（573～575）　573は口縁部が「く」の字状に外反し，端部が上方に短くたちあがる。体部外面はハケ目で，さほどシャープなつくりではない。574は胎土がやや精良なもので，須恵器の胎土Ａ群には対応しない。口縁部は「く」の字状に外反し，端部は面をもつものの比較的丸くおさまる。575は明瞭に「く」の字状に屈折し，端部は上方へつまみあげられて鋭い。カキ目を含めて，つくりはとくにシャープで，焼成も硬質である。体部外面は斜格子文タタキ目で，ヘラケズリは顕著でない。内面は同心円文あて具痕がすり消されている。

土師器はいずれもＢ系と考えられ，III_1期に比定されよう。

SI 1500出土土器（図版89・178・204・222・225，観察表 261頁）

須恵器無台杯が多い。579・580は底部外面に同一の筆による「中」の墨書があるが，須恵器そのものも同一のつくりである。胎土は１㎜大の粒子をけっこう含むが，比較的精良なものである。底部から体部にかけてはやや丸味をもつ。577は胎土Ｃ群で，口縁部内面に漆状の付着物がみられる。576～578も形態は579・580にほぼ同じ。土師器甕底部（581）は厚い器壁である。底部外面は不調整で（図版222－３），体部外面はロクロナデであり，Ｃ系の長甕とは考えられない。無台杯のつくりからいえば，II_2期に比定されるのではなかろうか。

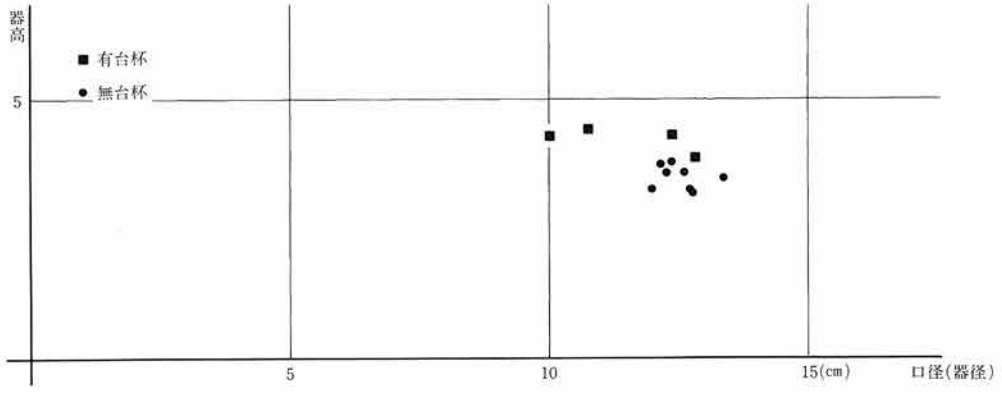
SI　60出土土器（図版90・178・187・204・216，観察表 261頁）

須恵器杯類の完形品が多い資料である。カマド内から無台杯（586）・長甕（595），カマド周辺から杯（583・584・588・590），床面直上から杯（587・592・594）が出土した。土師器はB系ばかりで，須恵器に小型の有台杯AⅢ・Cが多いことから，$Ⅲ_2$期に比定されよう。

須恵器（582～594）　無台杯・有台杯がある。小型の有台杯が多いのが注目される。587・589が胎土C群であり，591・593がA群でない可能性があるほかは全てA群である。

無台杯（582～589）　口径12.2～13.4cm，器高 3.3～3.8cmで，法量に大きなばらつきはない。胎土C群の587・589はともに同じつくりで，器高がやや高く，底部が小さい形態である。また，586と588も同じつくりで，底部と体部の境はやや丸味をもち，たちあがる。583の底部は水平よりややくぼみ，体部のたちあがりも直線的である。584・585は同じつくりであろう。

有台杯（590～594）　592は有台杯AⅡであり，ほかの4点は小型の有台杯AⅢかCである。径高指数は590が34，588・594が36で，形態からみても有台杯AⅢと考えられるが，591・593の2点は明確な決め手を欠く。口縁部外面には小さな段もなく，かなり薄く尖り気味である。高台は小さく，接地面は水平である。胎土B群の有台杯Cは口縁部外面に小さな段をもたないが，A群はこれをもつものが多いことから，一応有台杯AⅢと考えておく。591はSI 6（524）と同じつくりである。590は口径がやや大きいが，身がやや深めで，体部の開きが比較的大きい。口縁部外面に凹線様のくぼみがめぐる。こうした特徴は有台杯Cに多いことから，大きめの有台杯Cと考えられる。高台はやや内側に付され，径が小さい。底部と体部の境にロクロケズリがなされる（ 図版 216－3 ）。594は器壁がやや厚いもので，白っぽい自然釉がうすくかかっている。592は身がやや浅く，器壁は全体に厚い。高台をのぞいたつくりは，無台杯（585）などと同一と考えられる。高台は底部のやや内側に付され，小さくて低い。接地面は水平である。口縁部内面と高台をのぞいた部分にタール状の付着がみられ、灯明皿の可能性がある。タールの付着は口縁部の小さな破れ口にも付着している。



第53図　SI60須恵器食膳具法量分布

土師器（595～598）　いずれもロクロのB系の長甕である。595は底部のみを欠くものである。口縁部は比較的短く，端部は短く上方へたちあがる。体部内外面のカキ目はやや粗雑で，器面に小さな凹凸が残る。カキ目の範囲が下位まで及び，底部ちかくにタタキ目とあて具痕が残る。タタキ目ののちには顕著なヘラケズリではなく，タテ方向のナデのような調整が一部に加えられる。596は口縁部外面に広い面をもち，その下端がやや垂下する。胎土は精良で須恵器のA群には対応しない。597は器壁が薄く，シャープなつくりで，口縁端部は上方へたちあがる。598は端部が丸くおさまるものである。

SI 650出土土器（図版90・178・200，観察表 261頁）

須恵器無台杯（599）は器壁がやや厚くて，底部が丸いタイプで，SI 1（670）などとは同じタイプである。601は底部の調整があまりよくないものである。折縁杯（602）は小型で，縁部のたちあがりが短く，形骸化したものである。小瓶（603）は球形にちかい体部に細い頸部をもつ。口縁部は外反し，端部は上方へたちあがる。外側の面の下辺はロクロナデで引き出されない。体部外面にはカキ目と同じ条線がみられる。土師器小甕（604）はC系である。605は底部が小さく，C系の小甕の可能性が考えられる。604・605は少なくともⅡ$_2$期までのものであるが，須恵器はⅢ期に比定される。

SI 310出土土器（図版91・179・203・225，観察表 261頁）

須恵器（606～616）　10点以上の出土があるが攪乱坑から出土したもの（607・608・613・615・618）が多い。無台杯・有台杯・杯蓋・横瓶・甕がある。

無台杯（606・607・609・610・612）　口径約12～13cmである。606・610は同一のつくりで底部外面のヘラ切りがとくに粗く，つくりはよくない。器壁は全体に厚い。607はやや小型で底部が丸いタイプである。609はつくりがよく，やや古い感じを受ける。612は体部下端がくびれるもので，底部外面のヘラ切り痕が深い。

有台杯（608・613）　608は口径11cmで，口縁部外面に凹線様のかすかなくぼみがあり，有台杯の可能性が強い。内面に自然釉がかかることも有台杯に多い。613は口径11.6cm，高さ5.3cm（径高指数45.7）で，有台杯Cである。口縁部外面はくびれ，有台杯AⅢのつくりとはことなる。高台は底部の内側に付され，径はかなり小さい。高台は内端接地である。高台内側に文字不明の墨書がみられる。(墨書18)。

杯蓋（614・615）　614は器径約15cmで，やや大きい。天井部から縁部までなだらかである。これに対し，615は天井部がほぼ水平で，体部は明瞭に屈折する。天井部外面はともにロクロケズリが明確ではない。

横瓶（611）　SI 6に同一個体がある。口縁部は外反し，端部は上面にくぼみをもつ。

甕（616）　大型のものでなく，器壁は薄い。外面は平行タタキ目，内面は同心円文あて具痕で，大きな歪みをもつ。

土師器（617～619）　小甕と長甕があるが，量は少ない。口縁部はいずれもロクロのB系である。小甕の口縁部（618）は端部が短く上方へたちあがるが，SI1100（687）ほどたちあがりは長くない。底部（619）は外面不調整で，底部と体部の接合部で剥離している。これからみると底部内面の外周の器壁が厚くなるのは接合によるものと考えられる。

長甕（617）は口縁部の外反が明確で，端部が短くたちあがる。器壁は全体にうすい。口縁部と体部の外面にはかすかにタタキ目が残る。

当土器群は609・614など古いものも含むが，Ⅲ期に比定される。

SI 33出土土器（図版91・205，観察表 262頁）

SI33は2棟の切り合いで，それぞれA（旧）・B（新）とした。しかし，Bと確定してとりあげられたものは少ない。626のみBで，622～624はAで，ほかは区別されていない。無台杯（620）は胎土が精良であるが，石英を含み，A群と考えられる。体部の開きが大きく，胎土B群のものに類似する。621は台付の壺か鉢である。口縁部は短く直立し，面をもつ。小甕（624）は口縁部が内湾するものである。626は器壁がかなり薄く，体部のロクロナデの凹凸が大きい。SI670（976）に類似する。627の底部は須恵器系胎土の回

転糸切りである。長甕（622）は内湾し，上方へ長くたちあがる。胎土は比較的精良である。623は「く」の字状に外反するシャープなつくりの長甕B系である。鍋（625）は底部外面までカキ目のめずらしい調整である。SI33A・Bはあまり大きな時期差はないと考えられる。Ⅲ$_2$～Ⅳ$_1$期に比定されよう。

SI 500出土土器（図版92・205・225，観察表 262頁）

須恵器（628～632）　無台杯のみである。631のみ胎土B群である。628・629は胎土A群であるが，器壁は薄く，体部と底部の屈折が明瞭なものである。こうした特徴は胎土B群のものに類似し，胎土A群のなかでは新しい様相と考えられる。630は器高が2.5cmで，身がかなり浅い。631は体部外面のロクロナデによる凹凸が著しい。632は底部外面に墨書があるものである（墨書15）。底部を意図的に円形に打ち欠いたと考えられる。器壁は比較的厚い。

土師器（633～636）　底部（633・634）は外面下端と底部外面にかるいヘラケズリをおこなう。ともに小甕である。635は小甕の口縁部で，「く」の字状に外反し，端部が上方につまみあげられる。636は長甕である。「く」の字状に外反するシャープなつくりで，口縁端部は短く，上方へたちあがる。635・636ともにB系2類である。

当土器群は須恵器にわずかに胎土B群を含むこと，胎土A群の無台杯が薄いことから，Ⅳ$_1$期に比定されよう。

SI 10出土土器（図版92・178・205・217，観察表 262頁）

無台杯（637）　は底部がかなり丸く突出するものである（図版217－1）。杯蓋（638）は胎土C群で，天井部外面のロクロケズリはていねいである。天井部内面はきわめてよく磨滅する。杯蓋（639）はつまみ上部中央がくぼむ。640は小甕B系で，端部はつまみあげられる。641は小甕B系の底部で，底部外面は不調整である。小甕の口縁部などからⅢ$_1$期に比定される。

SI 41出土土器（図版92・179・205・220，観察表 262頁）

須恵器（642～648）　無台杯・杯蓋・広口壺・直口壺がある。胎土は645がC群，646がB群で，ほかはA群である。

無台杯（642～644）　642は底部が水平で，つくりは比較的よい。643は口径11.2cmと小さく，底部は器壁が厚く，丸いものである。SI310(607)，SI 1 (670)などと類似する。644は器壁が全体に薄いものであるが，底部は若干丸味をもつ。

杯蓋（645・646）　645は胎土がきわめて精良で，焼成はとくに堅緻である。天井部から縁部は丸味をもってくびれる。つまみは扁平な擬宝珠形である。外面全体にアメ状の自然釉がかかる。646は胎土B群の杯蓋で，口径15.6cmと大型である。深身の有台杯Bに伴うものであろう。天井部のロクロケズリはていねいで，つまみは中央が若干突出する。

広口壺（647）　胎土が白っぽく，外面全体にかかる自然釉は淡緑色で，きれいである。口縁端部が上方へたちあがる。

直口壺（648）　体部上端から口縁部を欠くが，大きな個体である。体部外面上半はカキ目，下半は強いヘラケズリで，下端にはタタキ目が残る。底部は広い平底で，指頭圧痕のようなくぼみとかるいタタキ目のような痕跡がみられる。内面下半はハケ目で，粘土紐の接合痕が残る（図版 220－2・3 ）。SI1320に

同一個体の破片（752）がある。

土師器（649・650）　長甕（649）は口縁部が「く」の字状に外反し，端部は上方へたちあがる。体部下半外面にはタタキ目と強いヘラケズリがおこなわれる。カキ目も含めて，つくりはシャープで，B系2類である。650は口縁部を欠くが，小甕で，器壁が全体に薄い。

当土器群は642・643・647などやや古いものも含まれるが，胎土B群を含みⅣ$_1$期に比定される。

SI 360出土土器（図版93・179・206，観察表 263頁）

土師器がやや少ない土器群である。SI360は大型住居で，稜椀・把手付鉢などの 器種の存在が住居の階層を示唆する。

須恵器（651～657・662）　651のみ胎土C群で，ほかはA群である。

無台杯（651・652）　651は底部がごく水平で，体部との境が明瞭である。口縁部はやや外反する。器高2.8cmで，やや浅い。胎土はごく精良で，焼成はよいが，黄白色を呈する。

杯蓋（653～655）　653・654は天井部のロクロケズリがほとんどなされず，ヘラ切り痕を残す。ともに器高が低く，扁平な形態である。654は器壁が全体に薄く，縁部内面の身の受け部が 明瞭にくぼむ。

稜椀（656）　器壁が厚く，体部から口縁部が大きく外反する。高台は径が小さく，大きく「ハ」の字状に開き，内端がていねいに引き出される。有台杯（657）は墨痕をもつもので，底部を残し，意図的に打ち欠かれている。高台は底部のやや内側に付され，内端がロクロナデで尖る。

把手付鉢（662）　口径30cm以上の大きなものである。口縁は短く外反し，端部は上方へつまみあげられる。体部肩に角状の把手が付される。

土師器（658～661）　長甕（658・659），小甕（660），土製品（661）がある。658・659はいずれもシャープなつくりのB系2類である。659はとくに器壁が薄く，体部がやや張る。短胴甕にちかい形態の可能性もある。661は全体の器形が不明なものである。図の上方は端部で，ヘラできれいに面がとられている。図の正面はハケ目で，わずかに凸面をなし，裏面はハケ目ののちナデで凹面をなす。胎土は須恵器系である。断面のカーブと端部からみて，一般的な器種ではなく特殊な土製品と考えられる。

土師器はB系が主体で，SI14よりは新しいと考えられるが，SI 7よりは須恵器に古い要素がのこっている。Ⅱ$_2$期の新段階からⅢ$_1$期古段階に比定されよう。

SI 1302出土土器（図版93・179・206，観察表 263頁）

無台杯（663～665）のうち，664・665は底部が突出し，調整が粗いもので，まったく同じつくりである。663はこれらより底部は水平である。有台杯AⅡ（666）はSI1100（680）と同一個体である。身は浅く，高台は低い。壺蓋（667）もSI1100（679）と同一個体である。668は口径がやや小さく，身の深い稜椀である。口縁端部は丸くおさまる。土師器小甕（669）はB系で，口縁端部は上方へたちあがる。SI1100 と同時期で，Ⅲ$_2$期に比定される。

SI 1出土土器（図版93・179・205・217・219・222，観察表 263頁）

須恵器（670～672）　無台杯（670）は小さくて，底部が丸いタイプである。外面の底部と体部の境はヘラ切り痕かとも思われるくぼみがめぐる（図版217－2）。672は底部外面が回転糸切りの例である（図版219－1）。糸切りの無台杯はこれ1点のみである。口径は12.8cm，器高 4 cmで，形態はヘラ切りの無台杯ではな

く，土師器の椀Bに類似する。底部内面はきわめてなめらかで凹凸がなく，体部との境が明瞭である。胎土C群であるが，上越地方か中越地方西部からの搬入品と考えられる。小甕（673）も胎土や形態が特異である。ロクロ土師器であり，器壁は全体に薄く，口縁部はゆるく長く外反する。胎土はよく精良である。小甕（675）の底部外面はかすかにヘラ切り痕のような渦巻をとどめる（図版222－5）。Ⅲ$_1$期に比定されよう。

SI 1100出土土器（図版94・179・206，観察表 263頁）

当住居は鍛冶工房であり，一般的な住居とはことなる。比較的器種がそろっており，B群の古いタイプを伴う例として貴重である。B群の無台杯1点を含むものの，他に主体的なB群より先行するタイプと考えられ，Ⅲ$_2$期に比定される。

須恵器（676～682）　無台杯・有台杯・壺蓋・短頸壺がある。無台杯の676が胎土B群，682がC群である。実測個体以外に有台杯，無台杯，杯蓋，甕がある。

無台杯（676～678）　676は口径12.3cm，器高3.3cmのB群（佐渡小泊窯）の無台杯である。B群のうちでは最も古い様相をもつ。底部はほぼ水平で，体部と口縁部は直線的にひらくが，やや内湾気味である。器壁はB群のなかではやや厚く，口縁部の開きも小さい。体部内外面はロクロナデによる小さな凹凸がみられる。677は底部が水平で，やや厚いものである。678は口径13.5cmで，やや大きく，器面のロクロナデはていねいで，凹凸が少ない。底部外面に「×」のヘラ記号がある。

有台杯（680・681）　680はSI 1302（666）と同一個体の有台杯AⅡである。　器壁は全体にやや薄く，底部内面縁部のふくらみも顕著でない。高台は底部の周縁部に付される。高台の外端部が強くロクロナデで調整され，接地面は大きくくぼむ。681は高台が剝離した有台杯Bで，歪みが大きい。体部，口縁部はほとんど直線的にたちあがる。口縁部外面と体部内面はロクロナデの小さな凹凸が目立つ。口縁部外面は顕著である。これは有台杯B・Cにみられる手法である。

短頸壺（682）　体部肩に淡緑色のきれいな自然釉がかかり，胎土・焼成もよい。肩部は比較的明瞭に屈折し，一条の沈線がめぐる。壺蓋（679）は白っぽい色調で，外面に淡緑色の薄い自然釉がかかる。端部は面をもち，つまみは擬宝珠形である。これもSI1302（667）と同一個体である。両者の住居は約100m 離れているにもかかわらず，接合個体が2点ある。

土師器（683～695）　鉢A・小甕・長甕・鍋・フイゴ羽口がある。甕はすべてロクロのB系である。

鉢A（683）　口径16.9cm，高さ6.9cmで，器壁は厚い。底部外面は不調整で，口縁部内外面はロクロナデ，体部外面はヘラケズリ，体部内面はカキ目である。底部から体部の手法は小甕と同様である。内面の器面は赤っぽい発色である。口縁部内面に炭化物が付着しており，火を受けた痕跡は明瞭である。住居跡出土土器としては1点しかない器種である。

小甕（684～688）　684は口径約10cm，器高6.4cmの最も小さいタイプである。SI299（705）と同じものである。底部は丸味をもち，体部は短く，口縁部は短く外反する。底部外面は不調整で，体部外面下半はヘラケズリとナデをおこなう。火を受けた痕跡がある。胎土は鉢A（683）に類似する。685は底部外面が静止糸切りである。口縁部（686～688）のうち，686はゆるく外反するもので，687は端部が屈折して上方へたちあがるものである。688は体部が丸いが，口縁部は686に類似する。

長甕（689～692）　口縁部（689～691）のうち，690は器壁が厚く，「く」の字状に外反した口縁端部は丸くおさまる。比較的精良な胎土で，丸底の底部（692）と共通する。692は器壁が厚く，内外面ともハケ

目調整である。内面にあて具痕，外面にタタキ目を残すが，接合部のふくらみが内面によくとどめられており，調整はあまりよくない。技法はB系であるが，2類には含められない。胎土に大きな石英・金雲母を含む。689・691は端部がつまみあげられる。689は端部外面が丸味をもつ。

鍋（695）　口縁部は外反し，端部は上方へたちあがる。その外面は丸味をもつ。カキ目はシャープで，底部内面にあて具痕，外面にタタキ目が残る。ヘラケズリは顕著である。内面は灰色にちかい色調である。技法はB系2類である。

フイゴ羽口（693・694）　693は狭端部を残すもので，溶着物が付く。694は広端部を残すものである。

SI 1101出土土器（図版95・179・186・206・221，観察表 264頁）

SI 1100を切る住居である。Ⅳ期に比定される。

須恵器（696～698）　696は胎土A群で，697・698がB群である。杯蓋（698）の器高は低く，全体に扁平な形態である。つまみ上部はくぼまず，中央が小さく尖る。天井部外面のロクロケズリは広い範囲にていねいにおこなわれる。

土師器（699～701）　小甕（699）は底部外面が回転糸切りである。糸切り痕には1回失敗した痕跡がある（図版 221－8 ）。口径約12cm、高さ14cmで，体部はあまり丸味をもたず，口縁部は内湾し，上方へ短くたちあがる。外面はわずかなくぼみをもつ。器壁はやや厚く，シャープな感じはない。胎土に海綿骨針を含む。長甕（700・701）はまったく同一のつくりである。口縁部は端部が内側に折れ，たちあがり，内面に大きなくぼみをもつ。また，外面も凹線様のくぼみがみられる。体部外面のタタキ目と内面のあて具痕は凹凸が大きい。外面のヘラケズリは弱く，部分的である。胎土は金雲母や石英を含むが，比較的精良で，器面の感触はなめらかである。須恵器系の胎土とはことなる。

SI 299出土土器（図版95・179・207，観察表 264頁）

須恵器（702・703）　有台杯（703）は口径11cm，高さ4.3cmで，身はやや浅く，有台杯AⅢと考えられるが，口縁部外面に小さな段があり，有台杯Cとも考えられる。高台は底部の内側に付され，径は小さい。

土師器（704～707）704は内面黒色処理の椀Bとも考えられる。外面は器面が剥離しており，調整は不明である。小甕の705はもっとも小さいタイプで，SI 1100（684）と同じ形態である。長甕（707）は外面全面にヘラケズリする。C系かと思われる。一部古いものがあるが，SI 1100と同じ$Ⅲ_2$期に比定される。
内面黒色の椀Bと推定される704は新しい器種として注目される。

SI 401出土土器（図版95・179・207，観察表 264頁）

B群の須恵器主体の資料で，$Ⅳ_2$期に比定される。

須恵器（708～715）　無台杯・有台杯・壺蓋がある。715のみA群で，ほかはB群である。未実測の須恵器杯片も大半がB群である。708・710・713・714はカマド出土で，火を受けた痕跡がある。

無台杯（708～712）　口径12～13cm，器高3～3.5cmである。708～710は口径に対し，器高が低い。709・710は径高指数25以下で，身の開きも比較的大きい。708・710は口縁部が内湾するが，他はほぼ直線的である。708～710は器壁が薄い。身が浅いこととあわせて胎土B群では新しい様相と考えられる。709は口縁部を打ち欠き灯明皿に利用している。711は底部がB群では厚く，SI 1320（729）と同じ。712は内面の器面の凹凸が少なく，口縁部はとくに直線的である。やや古いタイプかもしれない。

有台杯（713・714）　深身の有台杯Cのみである。未実測個体にも，浅身の有台杯Aはみられない。口径約14cm，高さ6.5～7.1cmである。体部はやや丸味をもつが、口縁部は直線的に開く。内外面ともロクロナデの凹凸が明瞭である。高台は底部の外周に付され，内側に傾き，外端接地となる。ただし，断面は方形で，接地面はロクロナデされる。壺蓋（715）は端部が鋭く細くなる。

土師器（716～719）　小甕・長甕・椀Aがある。未実測個体に土管がある。椀A（718）は非ロクロで，明らかに古い時期のものである。小甕（716）の口縁部は外反があまり大きくなく，端部は上方へたちあがる。たちあがりはやや長い。胎土は比較的精良で，須恵器系でない可能性がある。717 は器壁が厚く，調整がていねいである。719 は長甕の体部破片で，器壁は厚く，外面のタタキ目と内面のあて具痕の凹凸は比較的大きい。あて具痕は扇形文で，類例の少ないものである。胎土は須恵器系でないと考えられる。

SI 1320出土土器（図版96～98・179・208・209・224・225，観察表 264頁）

出土個体数は50点以上を数える。須恵器杯類がとくに多い。できる限り図化した資料で，実測図よりほぼ全体の様相がうかがえる。胎土B群の須恵器（無台杯・有台杯に限る）が23%であるが，これが主体になっていない。また，土器師の食膳具もないことから，IV_1 期の基準資料である。

須恵器（720～753・770）　無台杯・有台杯・折縁杯・杯蓋・稜椀・横瓶・小瓶類・甕がある。

無台杯（720～734）　729～734が胎土B群，726がC群，ほかがA群である。ただし，726は海綿骨針を微量に含むが，石英，長石粒を含み，相対的にやや粗い。法量は口径10.6～13.0cm，器高2.8～3.8cmで，かなりばらつきがある。胎土A・C群では器壁の厚いものと薄いものがある。720～722は全体に厚い。とくに721は底部が厚い。720・722は同一のつくりとみられる。723・724は体部・口縁部は薄く，つくりは共通する。727・728は全体が，とくに薄い。728は身の開きが大きく，口径に対し，底径がかなり小さい形態で，特異である。体部のたちあがりの角度は約45°である。胎土A群のなかでも最も新しい様相をみせる。

胎土B群（729～734）はA群に比し，相対的に器壁がかなり薄い。729は底部のみやや厚く，体部と底部の境がやや丸味をもつ。B群のなかでは古い様相かもしれない。口縁部のたちあがり角度は約60°である。731は体部外面のロクロナデには凹凸がとくに顕著である。焼成はやや軟質なもの（729・733）と，硬質のもの（730・731）がある。

有台杯（735・736～738・743～746）　有台杯A（738）・有台杯B（745・746）・有台杯C（735・736）・有台杯X（743・744）がある。浅身の有台杯Aが1点のみで，少ないことが注目される。746のみ胎土B群で，ほかはA群と考えられる。ただし，738は無台杯（726）に類似する。小型の有台杯Cのうち735は口縁部外面に鋭い沈線をめぐらすもので，有台杯Xの小型品ともいえる。体部・口縁部の器壁は薄く，口縁部は内湾する。高台は外端部がロクロナデで引き出される。736は高さ4.3cmで，やや低く，有台杯AⅢの可能性もあるが，口縁部は内湾気味になる。底部のみの737は高台がやや高く，そのつくりから折縁杯の可能性が考えられる。有台杯Aの738は器壁が全体に薄く，無台杯（727）と共通するつくりである。高台は接地面がよくロクロナデで面取りされる。有台杯B（745・746）のうち，745は胎土A群であるが，器壁は薄く，口縁部は若干内湾し，外面に凹線様のくぼみをもつ。身の開きも大きい。746は胎土B群である。全体に器壁が薄く，無台杯同様ロクロナデの凹凸が比較的大きい。高台は薄く，内側に傾斜し，外端接地となる。外面全体が若干黒変することから，逆位で焼成されたと考えられる。無台杯に比し，白色小粒子を多く含み，発色もややことなる。有台杯Xのうち，743 は身の開きが大きく，2条の沈線をめぐらす。体部外面はカキ目と同じ条線がみられる。744は器壁が厚く，身の開きも大きくなく，時期的に古いと考えられる。

杯蓋（747・748）　ともに胎土A群で，口径16cm以上で大型である。器壁も厚く，つくりもていねいであることから，他の土器より古いと考えられる。

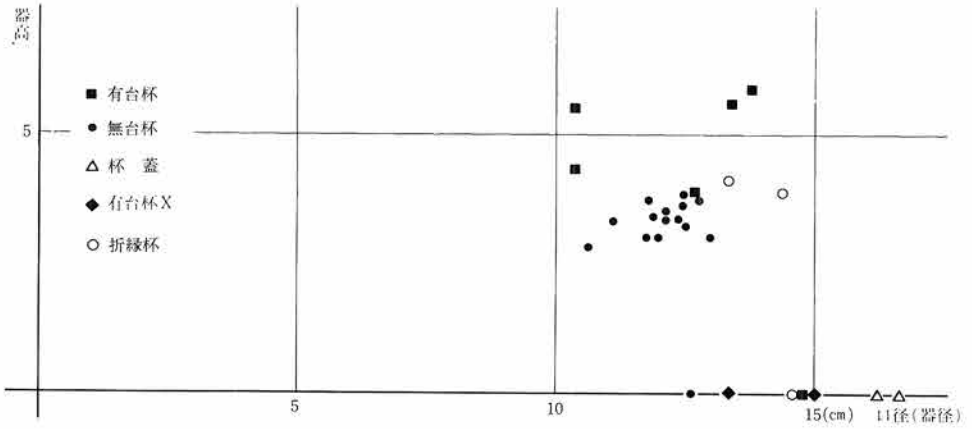
折縁杯（739～741）　口径13.3～14.6cmでSI 7（466）・SI 15（503）例よりはかなり小さく，高台も低い。器壁も全体に薄く，新しい様相がはっきりしている。739・740は口縁部が杯蓋のように屈曲し，古い形態を踏襲しているが，741は端部のたちあがりがごく小さく，外側に面をもつなど，つくりは退化している。

稜椀（742）　口縁部は比較的短く，端部は上部にかすかな面をもつものの，つまみあげはみられない。

小瓶（749・750）　口縁部のみで，全体の器形はわからない。749は胎土A群，750はB群と推定される。749は端部がつまみあげられ，750は端部外側に上下から引き出した面をもつ。小泊窯に多い長頸瓶の口縁部のつくりと同一である。小型の長頸瓶であろう。

横瓶（751）　口縁部のみで，器種は明確ではないが，大きさからみて横瓶と考えられる。端部は内側に強く折れ，上部に面をもつ，一般的な横瓶の口縁端部は広くて水平な面をもち，外方に引き出されるが，その退化した手法とも考えられる。752はSI 41（648）と同じ直口壺の破片である。

大甕（770）　直線的に外反する口縁部に丸い体部をもつ。口縁端部に面をもち，内側につまみ出されるが，外方への引き出しは強くなく，SI 6（536）例よりも新しい様相が感じられる。753は体部片である。



第54図　SI1320須恵器食膳具法量分布

土師器（754～769）　小甕・長甕のほか製塩土器と考えられる土器（761）と，小型の椀（766）がある。

小甕（755～760・764・765）　口縁部（755～759）のうち，755は口縁部が短く，体部と口縁部の境はロクロナデによる段が明瞭である。一般的なB系の形態とはことなり，C系の可能性も考えられる。756～759は「く」の字状に外反する典型的なB系の形態で，端部は上方へつまみあげられる。757は器壁がやや厚く，口縁部が内湾する。端部外面が丸くなり，鋭さはない。こうしたつくりはSI 1101（699）にみられ，直線的で，シャープなつくりのものより新しい様相と考えられる。759は口縁部が内湾する。760・764・765の底部のうち，760は764・765に比し，体部は直線的にたち上がる。764・765は底部内面の凹凸が大きく，調整は粗い。765は体部にふくらみがなく，筒形である。こうした形態も新しい様相と考えられる。胎土からみると，764と759・765と757は同一個体の可能性が考えられる。

長甕（762・763・767～769）　口縁部の762は最も「く」の字状に直線的に屈折し，端部のつまみあげもシャープである。また，体部にふくらみをもつ762・763は口縁部の外反は762よりも大きく，端部は上方へ短くたちがある。768は外面にタタキ目が残る。ともに体部のふくらみは762よりも小さい。763は口縁部の外反がやや弱く，端部は内湾し，丸くなる。体部のふくらみはある。体部上位より上を欠く769は，下半部の内外面がハケ目で，タタキ目はみられない。

766はカマド内から出土した非ロクロの小型品である。器壁は厚く，ナデと指頭圧痕でかんたんに仕上げたもので，口縁部にもヨコナデはされない。底部外面は木葉痕ののちにヘラケズリをおこなう。火は受けているが，スス・炭化物の付着はまったくなく，この器で煮炊きしたことは考えられない。類例もなく，器種を明確にしがたい。

製塩土器（761・図版224－1）　器径約13cmの筒形の土器で，外面に粘土紐の痕跡が明瞭で，調整はきわめて粗い。端部は水平な面をもち，円形の透かしをもつ。この端部が上・下どちらにあたるかははっきりしないが，粘土紐の接合方法が他の土器と同じとすれば，図のように上端部となる。胎土はやや粗いが，含まれる鉱物は土師器と共通した須恵器系である。かなり強い熱を受けた痕跡がある。

SI 753出土土器（図版98・179・207・217・218・221，観察表 265頁）

Ⅰ期のSI 752を切る住居である。須恵器はB群主体で，土師器食膳具が存在する。器種はある程度そろっており，$Ⅳ_2$期の基準資料である。ただし，SI 752に伴うと考えられる古い土器がいくつか含まれる。

須恵器（771～778）　無台杯・有台林・杯蓋・甕がある。774のみ胎土A群でほかはB群である。未実測個体にはわずかにA群の無台杯がある。これは身の開きがかなり大きいものである。

無台杯（771・772）　口径約12cm，高さ約3.5cmである。底部はややくぼみ（図版 217－3），体部へは明瞭に折れ，直線的に開く。器面は外面にとくにロクロナデの凹凸がみられる。

有台杯（773）は底部がやや厚く，高台はやや細くて高い。底部と体部の境はロクロケズリされ，高台が付される。外面全体に灰白色の薄い自然釉がかかる。

杯蓋（774～776）　口径約16cmのもの（774・775）と約12cmのもの（776）がある。774は胎土A群で，つくりはよく，SI 752に伴うものであろう。775・776は胎土B群である。775は大きいが器壁は薄く，縁部は内側に丸く折られる。776は完形品で，内面に墨痕と磨滅がみられる転用硯である（図版 218－3）。つまみ上面はくぼみ，中央は小さな突起がある。

壺蓋（777）　短頸壺の蓋である。丸い天井部から縁部は屈折し，端部は丸くおさまる。つまみ上面はくぼまない。天井部は全面ていねいにロクロケズリされる。天井部外面中央の径約8cmの部分をのぞいて，黒く変色し，内面は厚く自然釉がかかる。伴う壺の口縁部上に，逆位に置かれて焼成されたと考えられる。

甕（778）はB群としては数少ない例である。ゆるく弧状に外反する口縁端部は上方へつまみあげられ，外面に広い面をもつ。この面の下辺もロクロナデによりていねいに引き出される。内外面にアメ状の薄い自然釉がかかる。これと同一個体と考えられる破片（第55図）は外面斜格子タタキ目で，内面のあて具は平行文，重弧文が重なる。

第55図　SI753出土須恵器甕拓影

土師器（779～784）　小甕・長甕・鍋の煮炊具のほかに，椀Bがある。

小甕（781・782）　782は口縁部端部が上方へたちあがり，外面に比較的広い面をもつ。体部の器壁は比較的薄い。底部（781）は胎土がやや精良で，須恵器系の可能性がある。体部外面には部分的に弱いヘラケズリ（ロクロケズリ？）がなされている。

長甕（783）　口縁端部が上方へつまみあげられ，外面にくぼむ面をもつ，体部と口縁部は比較的ゆるく屈折する。体部外面下半のタタキ目ののちのヘラケズリはなされない。

鍋（784）　技法がC系で，明らかに古い。SI 752に伴うものと考えられる。口縁部は短く外反し，やや垂下する。焼成はきわめて硬質で，一部表面が灰色がかる。内面は口縁部と体部と色がちがう。口縁部がやや白っぽいのに対し，体部は赤っぽい。使用後の変色の可能性もあるが焼成時の重ね焼きによると考えられる。

椀B（779・780）　779は口径11.7cm，高さ4.1cmで，底部外面は回転糸切りである。体部下端の底部との境は糸切り後ヘラケズリである（図版 221－6）。底径は口径の約½で安定しており，体部は丸くなり，口縁部は外反しない。内面のロクロナデはきわめてていねいで，凹凸はほとんどない。胎土はとくに精良で，硬質に焼き上っている。体部から底部外面と，それ以外の部分は色がことなる。重ね焼きによる変色の可能性が強い。780も胎土精良であるが，779のように須恵器にちかい焼き上りではない。内外面ともていねいにヘラミガキをおこなう。

SI 850 出土土器（図版99・179・186・209・216・220，観察表 266頁）

須恵器（785～791）　無台杯・有台杯・杯蓋がある。胎土は786・787・790がB群，788・789がA群，785がC群である。未実測を含めると，B群以外のものがやや多いようである。

無台杯（785～787）　785は胎土に海綿骨針を含み，SI 1320（726）に類似する。器壁はこれよりもさらに薄い。体部は丸みをもち，たちあがる。786・787は胎土B群で，786 は底部がやや厚い。786・787ともに水平な底部から，直線的に開く。しかし，身はさほど開かない。

有台杯（788～790）　788は口径11cmの有台杯AⅢであり，口縁部を打ち欠き，灯明皿として使用したもので，灯芯の痕跡がよく残る（図版 220－5）。789は口縁部を欠き，有台杯AかCか不明である。高台径は小さい。790は胎土B群のなかでは，全体に器壁が厚い。高台は内側に傾き，外端接地となる（図版 216－5）。

杯蓋（791）　胎土がきわめて精良で，焼成は硬い。天井部のロクロケズリはていねいで，縁部は鋭く屈折し，つくりはよく，他の土器よりも古いと考えられる。

土師器（792～796）　小甕・長甕がある。793は非ロクロで，甕かと考えられるが，内面ヘラミガキをおこなうもので，時期が大きくことなる可能性がある。

小甕（792・794）　792は完形品でカマド内から出土した。口縁部は比較的短く，あまり外反しないで，端部は上方へたちあがる。体部はあまり丸味をもたない。器壁は全体に薄い。底部外面は不調整であるが，粗いヘラケズリがなされる。胎土はSI 1101（699）とことなり，白っぽく，須恵器系である。明確な二次焼成を受けておらず，スス・炭化物の付着もない。実際に使用されていないと考えられる。794 は口径より高さが小さい小型品である。口縁部は内湾し，たちあがりが長い。底部外面は回転糸切りである。

長甕（795・796）　796の体部はほとんどふくらまず，口縁部の外反も弱い，口縁端部は上方へたちあがり，尖り気味におさまる。器壁は薄い。体部外面下半は凹凸の大きいタタキ目で，ヘラケズリはみられない。内面は斜め方向のハケ目であるが，あて具痕と考えられるくぼみも残る。795 は小破片であるが，特異な口縁形態である。端部は若干内側に屈折し，面をもつ。

土器の個体数がやや少ないので，時期を明確にできない面もあるが，須恵器はB群が主体にはなりきっていないと考えられる。SI 1320と近い様相とみられ，IV_1期に比定される。

SI 1460出土土器（図版99・180・209，観察表 266頁）

胎土B群の須恵器を主体にする。土師器食膳具も含まれる。IV_2 期の資料と考えられる。

須恵器（797～803）　無台杯・有台杯・杯蓋がある。胎土は797・801のみA群で，他はB群である。

無台杯（797～800）　A群の797は全体に器壁がとくに薄く，形態もB群に類似している。底部はほぼ水平で，身は直線的に大きく開く。口縁部はまったく内湾せず，B群とのちがいがみられる。胎土もやや精良である。A群のなかで最も新しいタイプといえる。798～800のB群の無台杯のうち，800は体部が直線的で798・799はやや丸味をもつ。798は身がやや浅く，つくりはSI 401（709・710）などに類似する。

有台杯（801・802）　801は小型の有台杯AⅢかCで，内面に自然釉がかかる。高台径は小さい。802はB群の有台杯Bである。やや浅い器形で，SI 850（790）などに比し，器壁は薄い。高台は外端接地であるが，外側に開く。接地面をていねいにロクロナデでつくっている。

杯蓋（803）　有台杯Bに伴うものである。内面のロクロナデはていねいでなく，接合痕と考えられるくぼみが，天井部と体部の境にみられる。

土師器（804～808）　長甕のほかに椀Bがある。

長甕（807・808）　両者は同一個体と考えられる。口縁部は「く」の字状に外反するが，大きく開かない。端部は上方へつまみあげられる。体部破片（807）は外面格子タタキ目で，内面はナデであるが，あて具痕のようなくぼみがみられる。外面の格子目文はあまり例がない。

椀B（804～806）　804・805はともに土師器，食膳具としては，胎土の粗いもので，須恵器系胎土である。色調・焼成も類似しており，両者は同一個体の可能性が考えられる。体部外面下端はロクロケズリである。これに対し，806は胎土精良で，須恵器系胎土ではない。底部外面は回転糸切りで，ヘラケズリはなされない。体部は大きく開き丸味をもつ形態であろう。

SI 1202出土土器（図版100・180・210，観察表 266頁）

須恵器は胎土B群が主体で，IV_2 期の資料である。

須恵器（809～820）　無台杯・有台杯・杯蓋・折縁杯がある。未実測個体にSI 1320と同じタイプの甕との口縁部がある。胎土は816・817・819がA群で，他はC群である。

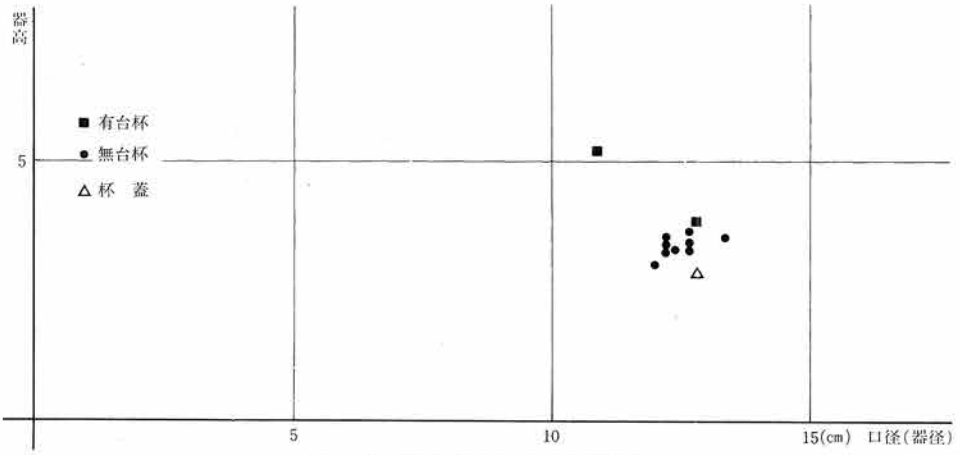
無台杯（809～817）　胎土B群の809～815は口径12～12.6cm，高さ3～3.4cmで，大きなばらつきはない。口縁部内面はくぼむものが多いが，810・814はとくに大きくくぼむ。813は底部と体部の境が明瞭である。胎土A群の816・817はB群より若干大きく，口径12.7～15.4cm，高さ3.5～3.6cmである。また器壁もやや厚い。形態はB群のものと大きな差はない。焼成は両者ともやや軟質である。817は内面全体にタール状の付着物がある。

有台杯（820）　口径約11cm，高さ約5cmの有台杯Cである。体部から口縁部はほとんど直線的で，高台は，底部外縁部に付される。しっかりとした高台で，接地面がロクロナデでくぼむ。

杯蓋（818）　口径12.8cmの小型のものである。天井部から縁部は丸く，縁部の屈折は顕著でなく，下方につまみ出される程度である。つまみは小さく，中央がくぼむ。内外面ともロクロナデの凹凸は少ない。

折縁杯（819）　口径12.8cm，高さ3.8cmの完形品である。小型で身は浅く，縁部のたちあがりはきわめて小さい。高台は比較的薄く，高い。SI 1320（739～741）例よりもさらに小さく，縁部のたちあがりも形骸化しており，さらに新しい様相がうかがえる。

3　奈良・平安時代



第56図　SI1202須恵器食膳具法量分布

土師器（821・822）　小甕は良好なものがない。長甕（821・822）のほかに，SI 850（796）と同一個体の体部片がある。821は体部外面下半に強いヘラケズリをおこなうもので，タタキ目は明確ではない。内面はカキ目が広く及ぶ。上半部はカキ目であるが，凹凸が比較的みられ，調整が粗い面もある。口縁部は「く」の字状に外反し，端面は丸味をもつ。胎土は比較的精良で，須恵器系ではない。822は体部下半部で，全体に器壁がかなり厚く，つくりは雑な感じが強い。タタキ目は細い平行文であり，あて具痕は同心円文である。胎土は821とはことなり，石英等を多く含む須恵器系と考えられる。外面のヘラケズリはまったくおこなわれない。

SI 435 出土土器（図版 100・210，観察表 267頁）

須恵器は胎土B群が主体で，N_2期の資料である。

須恵器（823～830）　無台杯・杯蓋・折縁杯・壺蓋がある。胎土は823・826・827がA群，828がC群，ほかがB群である。無台杯の胎土A群の823・826は器壁が薄く，B群とちかい。杯蓋（829・830）はともにB群である。小型（829）と大型（830）がある。829はつまみが小さく，上部の外周が比較的鋭い。口縁部外面と内面全体に自然釉がかかり，有台杯の上で逆位で焼成されたと考えられる。830は胎土B群のなかでは硬質の焼成である。扁平な形態で，内面に墨痕がみられる。

土師器（831・832）　長甕の口縁部（831）と体部（832）であるが，胎土・手法からみて，同一個体と考えられる。口縁部は「く」の字状に外反するが，器壁が厚く，端部も丸味をもつ。シャープさに欠ける。体部外面上半部はカキ目であるが，調整がていねいでなく，器面にくぼみが多い。外面下半部はタタキ目で，内面はあて具痕である。原体の凹凸は小さい。胎土は精良で，須恵器系ではない。

SI 440 出土土器（図版 101・180・186・210・222・224・225，観察表 267頁）

須恵器は胎土B群が主体で，N_2期の資料である。

須恵器（833～839）　無台杯・杯蓋・小壺がある。無台杯（833～836）はすべて胎土B群である。これらのうち墨書土器の836は身がやや浅く（径高指数24），体部の腰がやや張る。ヘラ切り痕や調整はやや粗雑で，新しい様相が感じられる。杯蓋（837）は口径17cmの大型品で，胎土B群である。天井部のロクロケズリは広い範囲に及ぶ。つまみ上部はくぼみ，中央は小さな突起がある。838は胎土A群の杯蓋で器壁も厚く，つくりはよい。他の土器よりも古い。小壺（839）は口頸部のみ欠き，他は完存する。体部上半に厚い黒色の自然釉がかかる。肩には沈線がめぐる。高台は内端接地で，底部外面はヘラ切りと考えられる。胎土はB群と考えられる。

土師器（840・841）　ともに一括出土した長甕のほぼ完形品で，カマドの芯材である。840は口径約18cm，高さ約36.5cmで，高さに比し，口径がかなり小さい。口縁部は外反が弱く，端部は上方へつまみあげられ，外側に面をもつ。外面の口縁部と体部の境はロクロナデによる段がみられる。体部はほとんどふくらみをもたない。体部外面上半は条線のこまかいカキ目であるが，その方向は水平に整っておらず，口縁部や器面に歪みもみられる。体部外面下半はタタキ目，内面は同心円文あて具痕で，顕著なヘラケズリはみられない。胎土は一応須恵器系と考えられる。841は840に比し，つくりはシャープである。口縁部は「く」の字状に外反し，端部はつまみあげられる。体部外面下半はタタキ目，内面は放射状あて具痕である（図版222－1・224－3）。外面中位には部分的にヘラケズリされている。

SI 840 出土土器（図版 101・180・207，観察表 267頁）

須恵器無台杯（842）は器壁がやや厚いが，口縁部の開きは大きい。843は底部がややくぼみ，体部との境は明瞭で，口縁部は内湾気味である。器壁も薄く，胎土B群のものに類似する。焼成はやや軟質である。844は高さ3cm以下で，身は浅い。底部から体部は丸味をもち，端部は尖り気味である。845は有台杯Bかと考えられる。高台は調整がていねいでなく，丸味をもつ。胎土はC群である。小甕（846）は体部にふくらみがなく，口縁部はあまり外反せず，端部が内側上方へたちあがる。胎土はやや精良で，小さな（1㎜大以下）丸い礫を含む。須恵器のA群には対応しない。847は「く」の字状に外反し，上方にたちあがるもので，つくりはシャープである。当竪穴は鍛冶工房であり，フイゴ羽口（848）がかなり出土している。この竪穴上層には胎土B群が含まれる。このようなA群でも新しいタイプが含まれており，IV_1期に比定される。

SI 802 出土土器（図版 102・180・211・217・225，観察表 267頁）

SI 803と切り合う住居で，かなり古い土器を含む。これを除くと，須恵器は胎土B群が目立つ。Ⅳ期の資料と考えられる。

須恵器（849～858）　無台杯・有台杯・杯蓋・短頸壺がある。短頸壺（858）は古く，SI 803に伴うものであろう。

無台杯（849～852）　すべて胎土B群である。849は底部外面のヘラ切りやロクロナデの調整が粗雑なものである（図版 217－4）。850は底部から体部のたちあがりが明瞭で，直線的に開く。口径12cm以下で小さい。851・852は底部外面に判読不明の墨書がある（墨書8・16）。851は底部の器壁が厚い。852は焼成がやや軟質で白っぽい。

有台杯（853・854）　853は口径11cmの有台杯AⅢである。胎土A群で，内面に自然釉がかかる。854は高さ5.7cmで，有台杯Bとしては低いものである。口縁部は外反し，内面の底部と体部の境が凹線様にくぼむことなど，B群にはみられない手法である。高台は底部外縁部に付されるが，内傾はしない。胎土はきわめて精良で，一見B群かと思うものであるが，焼成がとくに硬質で，白色小粒子を含まないことから，C群と判断される。やや浅い器形と胎土からみて，古い時期に比定される可能性が強い。

杯蓋（856・857）　856・857ともに胎土A群である。856は天井部外面にロクロケズリはされず，ヘラ切り痕が残る。縁部は鋭くつくられている。

短頸壺（858）　器壁は厚く，扁平な体部に短く直立する口縁部をもつ。体部中位に2条の沈線をめぐらす。白っぽい色調で，外面に淡緑色の自然釉がかかる。口縁部は体部に貼りつけられたもので，内面の接合部にくぼみをとどめる。855はごく小型で，小壺の口縁部か蓋のいずれかであろう。内外面とも厚い自

然釉がかかる。

土師器（859～866）　小甕・長甕のほかに椀かと考えられる黒色土器（859）がある。

小甕（860～862）　底部の860・861はともに糸切りであるが，860は静止，861は回転である。861は糸切り痕ののちになんらかの圧痕がみられる。小型の862は底部不調整である。口縁部はほとんど外反せず，体部のふくらみもあまりない。端部は上方へつまみあげられる。

長甕（863～866）　863・864は技法がC系で，確実に古い。863は端部が鋭く調整され，焼成も硬質である。865・866は胎土や手法からみて同一個体と考えられる。口縁部から体部上半は器壁が厚く，つくりはシャープである。体部下半部は内面同心円文あて具痕，外面タタキ目で，ハケ目で一部タタキ目が消される。

SI 1201出土土器（図版102・180・210・216，観察表 268頁）

須恵器（867～875）　無台杯・有台杯・折縁杯・杯蓋がある。胎土は867・872～874がA群で，他はB群である。無台杯（867～871）のうち，A群の867はやや器壁が厚く，体部が内湾する。868～871のB群は相対的に身が浅い。871は底部のヘラ切りが粗い。口縁部内面にタール状の付着があり，一部口縁端部がわずかに打ち欠かれている。杯蓋（873）は天井部が水平で，器壁もやや厚い。天井部外面はカキ目のような調整痕がみられる。つまみはごく扁平で，上面はくぼむが，中央に小さな突起がある。有台杯（875）は口径約10cmの小型の有台杯Cで，高さも4cm以下である。折縁杯（872）は口径12.6cm，高さ3cmで，体部は丸く，浅い。口縁部の器壁は薄く，端部は上方へつまみあげられるが，内側のくぼみはほとんどみられない。高台は薄くて「ハ」の字状に高く開く（図版 216－7）。874は底部のみで，器種不明であるが，高台が薄く，折縁杯の可能性がある。

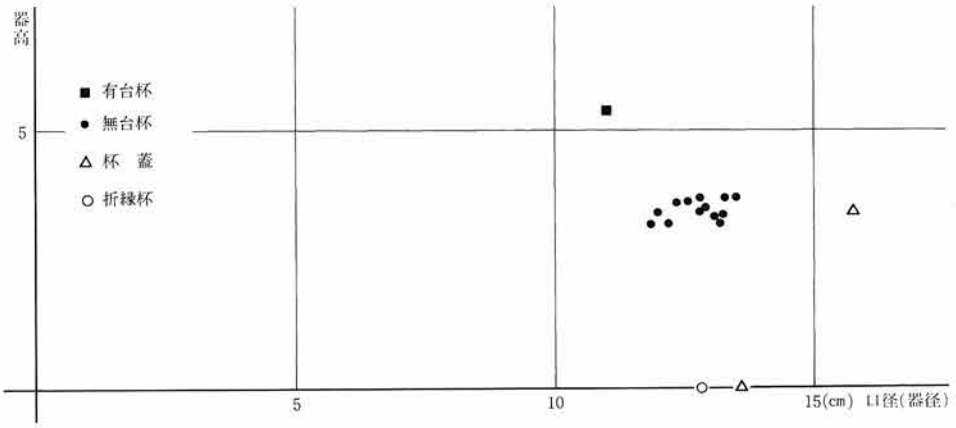
土師器（876）　口縁部のみで，器種は不明であるが，椀Bの可能性がある。口縁部は外反する。ロクロ調整ののちに，内外面ヨコ方向のヘラミガキである。口縁端部内面から外面にかけて，黒い付着物がある。須恵器に胎土B群が多いことからⅣ$_2$期に比定される。

SI 1167出土土器（図版103～105・180・184・212・213・217，観察表 268頁）

古い時期のSI 1166を切る住居で，出土個体数は多い。ただし，SI 1166に伴うと考えられるものもかなり含まれている。須恵器は胎土B群が多いこと，土師器に食膳具が一定量存在することから，Ⅳ$_2$期に比定される。

須恵器（877～899・931）　無台杯・有台杯・杯蓋・折縁杯・小瓶・壺・大甕がある。口径の大きい有台杯A（887），底部が丸くよいつくりの無台杯（889）は明確に古いものである。

無台杯（877～880・883～886・889～894）　胎土は877～880・883～886がB群，890～894がA群，889がC群である。B群は口径12～13.2cm，高さ3.2～3.6cmである。878・880は底部と体部の境が明瞭で，他はやや不明瞭である。口縁部は若干内湾気味のものが多い。やや軟質の焼成のものが多く，878・880・884をのぞくと底部のヘラ切り痕もやや粗雑である（図版 217－5）。A群の890～894は893が口径がやや小さく，身も浅いが，他は口径13cm前後である。893は焼成が硬いが，他の4点はいずれも焼成が軟質で，白っぽい。胎土も893をのぞくとA群としては精良である。890・894は底部が水平で，体部から口縁部が直線的で，A群のなかでも新しい様相が感じられる。C群の889は底部が丸く，体部との境も明瞭でなく，古い形態である。　有台杯（881・882・887）　881・882は胎土B群である。881は口径11cm，高さ5.4cmの有台杯Cである。体部は内湾気味である。高台は薄く，外方へふんばり，内端接地である。882は底部のみで



第57図　SI 1167須恵器食膳具法量分布

器種は明確ではないが，881 よりもひとまわり大きく，高台はしっかりしていることから，有台杯Bと考えられる。887 は胎土A群で，口径15cmの有台杯AⅠである。器種からみて古い。

杯蓋（895・896）　895 は口径13.6cmで，器壁はやや厚い。縁部の屈折部も鋭い。胎土精良で，A群ではないが，つくりからみて，C群の可能性もある。896 は口径約16cmの大型の杯である。縁部は器壁が薄く，下方へ折れる。天井部外面はロクロケズリされる。つまみの上部はくぼみ，中央の突起はない。

折縁杯（888）　胎土A群で，口径12.8cmである。縁部は短くつまみあげられ，内側のくぼみは小さい。接合部はないが，SI 1201（874）と同一の胎土，つくりである。

小瓶（897）　胎土B群で，大きく外反した端部はつまみあげられ，外側にくぼんだ面をもつ。

短頸壺（898・899）　898 は胎土A群で，器壁が厚く，高台は外方へ強くふんばる。899 は体部上端から口縁部を欠くが，ほかは完形である。胎土は大きな礫を含むものの，比較的精良で，C群の可能性もある。肩に径1.5cmほどの円形の剝離痕がある。耳がついていたにしては小さい。体部下半はロクロケズリである。底部外面は丸く突出し，粗いヘラミガキのような調整がみられる。898・899ともに古いものの可能性が強い。

大甕（931）　口縁部は直立気味で，端部に水平な面をもつ。端部の内側は鋭く引き出されるのではなく，丸味をもつ。肩部外面に径約6cmの円形に自然釉がかからない部分がある。胎土A群である。

土師器（900～930）　小甕・長甕・鍋のほかに椀Bがある。椀B以外にはSI 1166に伴うと考えられる古い時期のものが多い。

小甕（906～911・915～923）　口縁部の906～911のうち，907・908は口縁部が短くC系であり，909 は弧状に外反することから，古いと考えられる。906 は口縁部がとくに短く，口縁部も含めて，全面ハケ目である。カキ目，ロクロナデはみられず，A系と考えられるが，類例はあまりないものである。910・911はB系で，端部はつまみあげられる。911 はとくにシャープなつくりである。910 は体部がふくらまず，口縁部が短く，「く」の字状に外反する。底部の915～922のうち，916・918は底部が小さく，C系と考えられる。915・917・919は底部不調整であるが，920・921 は回転糸切りである。920 は須恵器系胎土であるが，921は明確な石英の粒子を含くまず，精良であり，須恵器系胎土でない。この胎土は椀B（900～903）と類似しており，両者が同一の製作にかかることを想定させる。新しい様相を示すこととして注目される。923は丸底のめずらしい例である。口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸くおさまる。体部内外面はハケ目で，外面下半はヘラケズリである。明確にロクロ土師器とされる点はなく胎土もA系非ロクロのものに類似する。ただし，口縁部のヨコナデはていねいであり，A系2類としておく。SI 1166 に伴う古い時期のものであろう。なお底部付近の器壁に接合部の厚い部分があるが，平底のものをヘラケズリによって

丸底化したものではなく，ハケなどの「押し出し」による丸底化と考えられる。こうした非ロクロの土師器における「押し出し丸底化」は在来の越後の土師器にはみられない技法である。

長甕（912～914・924～927）　底部（912～914）のうち912は網状脈の木葉痕のA系で，913・914は底部外面までハケ目のC系である。口縁部（926・927）は外方へ短く外反することからC系である。したがって，912～914・926・927は古い時期のものであり，SI 1166に伴うものであろう。口縁部（925）は「く」の字状に外反し，端部はつまみあげられ，体部はかなり張る。球胴にちかい短胴壺の可能性もある。丸底の底部（924）は外面タタキ目，内面あて具痕ののちに，ともにハケ目を施す。

佐渡型甕（928）　口縁部と体部の一部破片がある。全体の器形は不明であるが，手法・胎土から，佐渡形甕と考えられる。口縁部は長く，直線的に外反し，内面はごく細かなハケ目，外面は指頭圧痕で，端部にくぼみをもつ。非ロクロである。他に佐渡型甕と考えられる小破片が多少ある程度で，出土量はごく少ない。

鍋（929・930）　ともに口縁部が外方に水平にのびることからC系で，SI 1166に伴うものと考えられる。

椀B（900～903）　4点の法量・形態は多様である。901は口径12.6cm，高さ3.7cmで，底部外面は糸切り（静止か回転か不明）で，ほかは内外面ヘラミガキである。901はこれよりひとまわり大きく，口径15cmである。この部分と思われるのが900である。ヘラミガキはおこなわれない。903は口径約20cmの大型のもので，外面は底部までヘラミガキである。内面は遺存状況がよくなく，不明であるが，ヘラミガキであろう。外面の器面は白っぽい器内とはことなり，赤っぽい。904は口径11cmでやや小さい。口径に対して底径が大きい形態である。器壁はとくに薄く，内面に暗文風のタテ方向のヘラミガキが施される。胎土は褐色で精良，焼成はとくに硬質である。器形，胎土などが異質であり，搬入品の可能性もある。いわゆる「甲斐型杯」に類似するともいえるが，明確ではない。905は器種不明の小型品で，非ロクロである。所属時期も不明である。

SI 29出土土器（図版105・177・211，観察表 269頁）

住居そのものは掘り込みが明瞭でないものである。胎土B群の須恵器を含みⅣ$_2$期に比定される。

須恵器（932～937）　無台杯（932～934）はいずれも胎土B群である。有台杯（936）はSI 60（591）と同一個体である。有台杯Cと考えられる。935は口縁部を欠くが，高台は細くて，やや長いことから，折縁杯と考えられる。937は長頸瓶である。底部と口縁部を欠く。体部は肩が張り，扁平で，頸部は細い。肩部と頸部に沈線をめぐらす。胎土はやや精良であり，C群の可能性も考えられる。全体に茶褐色から暗褐色の自然釉がきれいにかかる。体部が扁平なことから，杯類に比して，古い時期に比定されよう。

土師器（938～943）　小甕の底部（938・939）はともに底部回転糸切りである。胎土は須恵器系である。939は941と同一個体の可能性がある。口縁部（941）は器壁が薄く，上方へたちあがる。SI 850（792）と類似する。942は口縁部が上方へつまみあげられ，内面は凹線様のくぼみをつくる。外側はやや丸くなる。胎土はやや精良である。長甕（940）は「く」の字状に外反し，端部か上方へつまみあげられるもので，つくりはシャープである。鍋（943）も940と同様「く」の字状に外反し，つまみあげられる。体部～底部外面はタタキ目で，部分的にヘラケズリする。

SI 1166出土土器（図版106・210，観察表 269頁）

SI 1167に切られる竪穴住居である。

須恵器の有台杯（944）は有台杯AIIで，高台は低いが，外方へふんばり内端接地する。底部外面の高台

の内側に墨痕が付き，磨滅している転用硯である。

土師器には小甕（945）と長甕（946・947）がある。945は非ロクロであるが，ヨコナデはていねいで，A系2類と考えられる。口縁はゆるく外反し，端部はやや尖る。946は体部から外反してたちあがった口縁が端部では内湾気味に丸くおさまる。外面にロクロナデで消されたタタキ目痕が若干残る。B系であるが，口縁部の屈折は弧状で，直線的でない特異な形態である。B系でも古いタイプであろう。947は口縁が水平に短くのび，端部には面をもつC系である。内面には斜のハケ目がはいり，外面はカキ目をタテのハケ目で消している。時期はⅠ期からII_1期頃に比定される。

SI 805 出土土器（図版106・180・186・213，観察表 270頁）

図化したほかにも須恵器には胎土B群の無台杯2片を含む6点，土師器小片は多数ある。

須恵器の無台杯（948）は無台杯Ⅱで，胎土は海綿骨針を含み，精良なC群である。内面にはタールが付着し，灯芯の痕も残ることから灯明皿として使用されている。

土師器には小甕（949～951）甕（952）甑（953）がある。小甕（949）はC系と考えられる。口縁が水平に短くのび，体部はあまり張らない。951は口縁が外反し，端部が若干上方へつまみあげられる。内面は底部までカキ目がはいり，外面下半部はタテ方向のヘラケズリである。外面底部もヘラケズリ調整がはいる。B系である。950は口縁部が体部から直角に屈折し，内面にヨコ方向のハケ目がはいる。ヨコナデがしっかりしており，口縁部に歪みはない。遺存が口縁部のみなので明確ではないが，ロクロ土師器C系もしくは非ロクロA系2類の可能性がある。口径17.4cmとやや大きいが，口縁部内面に厚く炭化物が付着していることから，小甕と考えられる。甕底部（952）は外面下半部にタテ方向のヘラケズリ，最下部にヨコ方向のヘラケズリがはいる。長甕か小甕かは明確ではない。甑（953）は底径12.5cm，孔径8.4 cmをはかる。調整は内面がハケ目，外面が指頭圧痕であり，内面には粘土ひもの継ぎ目の痕が明瞭に残る。遺存が1/6程度なので明確に甑であるとはいえず，土管の可能性もある。時期はII_2期頃に比定されよう。

SI 18出土土器（図版106・211，観察表 270頁）

未実測の須恵器小片に胎土B群の無台杯片を多く含んでいる。

須恵器には無台杯（954・955），短頸壺（956）がある。955は厚く丸い底部から直線的にたちあがり，そのまま口縁部に至る。端部は丸くおさまる。ロクロナデの凹凸が若干目立つ，胎土はA群である。954は胎土B群で薄いつくりである。口縁端部はやや内湾気味になる。短頸壺（956）は口縁端部がやや外反する。胎土はA群である。外面に口縁部を除いて自然釉がかかっていることから，焼成時は蓋をしていたと考えられる。

土師器には小甕（957），長甕（958）がある。957はB系である。口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方へかるくつまみあげられる。体部はやや丸く張る。958はC系である。口縁は水平に外方にのび，端部は面をもつ。内面はハケ目の後カキ目がはいり，外面はタテ方向のハケ目をロクロナデで消している。時期は958は古いが，他はIII_2期からIV_1期頃に比定される。

SI 42出土土器（図版106・213，観察表 270頁）

須恵器には無台杯（963）がある。口径11.1cmとやや小さいもので，淡灰色を呈し焼成はあまい。胎土はA群である。丸い底部からやや開き気味にたちあがり，口縁端部は丸くおさまる。

土師器には小甕（964）がある。口縁が「く」の字状に外反し，端部ははっきりした面をもたず，上方へつまみあげられる。B系である。このほかSI69（595）と同一個体の長甕の破片がある。時期はⅣ$_1$期頃に比定される。

SI 325出土土器（図版106・213，観察表 270頁）

須恵器には無台杯（959）と杯蓋（960）がある。どちらも胎土A群である。959は口径10.5cmとやや小さいもので，底部から直線的にたちあがり，そのまま口縁に至る。

土師器には小甕（961・962）がある。961は口縁部が「く」の字状に外反し，外面の端部には凹線様のくぼみがある，つくりは全体的にシャープさに欠ける。内面はヨコ方向のハケ目，外面はヨコ方向ののちタテ方向のハケ目である。胎土はSI 7の長甕（486）と同じで，須恵器のA群には対応しない。この土器は口縁部のつくりも特異であるが，技法はB系と考えられる。962はつくりがシャープで口縁部は「く」の字状に外反し，端部ははっきりした面をもたず，わずかに上方につまみあげられる。時期はⅢ期頃に比定される。

SI 16出土土器（図版107・214，観察表 270頁）

須恵器には無台杯（965～967）のほか，未実測の甕体部1点，杯数点がある。965は胎土A群で，底部から直線的にたちあがり，そのまま口縁部に至る。966・967はC群と考えられ，966は底部がやや丸く，967は口縁部がゆるく外反し，端部は丸くおさまる。

土師器には甕（968）・小甕（969）・長甕（970）のほか小片が多数あり，実測個体はすべてロクロ土師器である。968は体部外面にヘラケズリ調整がなされており，底部外面は不調整である。C系の可能性があるが，小甕か長甕かは明確ではない。969は口縁が「く」の字状に外反し，端部はややつまみあげられるB系である。970は口縁が「く」の字に外反し，端部は面をもち，ややつまみあげられるB系である。外面は体部にカキ目，内面は口縁部にカキ目，体部にカキ目後ハケ目である。胎土に2～3㎜の石英粒を含むが比較的精良で須恵器の胎土に対応させればC群であろう。時期はⅡ$_2$期からⅢ$_1$期の古い段階と考えられる。

SI 1471出土土器（図版107・181・213，観察表 270頁）

図化したものは須恵器2点のみで，そのほかに須恵器片7点と土師器の鍋1点，小片多数がある。有台杯（971）は口径約14cmの有台杯AⅠで，高台は底部のやや内側に貼りつけられ，接地面は広い。内面底部は一方向のナデである。SK39（992）に類似する。壺（972）は内外面に自然釉がかかる。内面にも自然釉がかかることから広口壺かと考えられる。Ⅱ期に比定される。

SI 1313出土土器（図版107・181・213，観察表 270頁）

須恵器は実測個体1点のほかは，無台杯2点，杯蓋片1点，甕片3点である。有台杯Cと思われる973は両面に自然釉がかかり，口縁はゆるく外反し，端部は丸くおさまる。

土師器は実測個体2点のほかは，小片が多数あり，古式土師器片もある。無台杯（974）は非ロクロで，口縁はわずかに外反する。外面下半部は横のヘラケズリ調整をうけ，外面底部は不調整である。黒い色調であるが，黒色土器ではない。長甕（975）は口縁部はゆるく外反し，端部に面をもたない非ロクロA系2類であると思われる。ヨコナデがしっかりしているため，口縁部の歪みは少ない。時期はⅡ$_1$期頃であろう。

SI 670出土土器（図版107・213，観察表 270頁）

須恵器片は2点のみで，ほかはすべて土師器であり，そのうち2点を図化した。小甕（976）は薄いつくりで，口縁部は短く「く」の字状に外反し，体部はやや丸く張る。器壁はとくに薄く，ロクロナデの凹凸が著しい。小甕B系である。長甕（977）は明確ではないが，ロクロ土師器の可能性がある。外面はハケ目，内面はタテ方向のハケ目の後，ヨコ向方のナデを加えている。時期はII_1期頃と考えられる。

SI 1304出土土器（図版107・181・213，観察表 270頁）

須恵器は無台杯（978・979）のほか小片が数点ある。2点とも胎土はA群であり，978は口縁部がわずかに外反し，底部外面に明瞭なヘラ切り痕を残す。979は底部から直線的にたちあがりそのまま口縁に至る。どちらも無台杯IIである。

土師器は長甕（980）がある。口縁は「く」の字状に外反し，端部は面をもち，つまみあげられる。外面は体部にカキ目がはいる。B系である。時期はIII期頃と考えられる。

SI 80出土土器（図版107・213，観察表 270頁）

須恵器は無台杯（981）と杯蓋（982）の2点のみである。981は胎土に2～3㎜の石英粒のほか海綿骨針を含みやや精良である。C群である。形態は底部が水平で，底部から直線的にたちあがる。982は口径16.0cmで大きい。有台杯AIか有台杯Bに対応すると考えられる。天井部はロクロケズリが強くなく，ヘラ切り痕をとどめている。外面に自然釉がかかり，胎土は石英を含まずやや精良である。これもC群と思われる。

土師器は小甕（983）のほか小片が数点ある。983は口縁が「く」の字状に外反し，端部はわずかに面をもち，かるくつまみあげられる。体部はやや丸く張る。B系である。内面と外面には体部に同一の原体と思われる粗いカキ目がはいる。時期はIII_2期頃と考えられる。

SI 9 出土土器（図版107・213，観察表 271頁）

2点のみ図化したがそのほかは，須恵器片2点，土師器片数点である。須恵器の無台杯（984）は口径11.2cmの無台杯IIで口縁部のみしか遺存しないが，端部は丸くおさまる。胎土はA群である。

土師器の小甕（985）は体部のみ遺存しているが，ロクロナデがされており，BあるいはC系と考えられる。土器が少ないため時期は明確ではないが，III_2期と推定される。

SI 1181出土土器（図版107・181，観察表 271頁）

須恵器の杯蓋（986）1点のみ出土している。全体にはげしく歪んでおり，天井部はヘラ切り後ロクロナデをかるく加えている。胎土はA群である。時期はIII_2期頃であろう。

SI 1169出土土器（図版107・184，観察表 271頁）

土師器の小甕（987）のほか小片が数点あるがすべて土師器で，須恵器は皆無である。987は小甕A系1類で，口縁は短くゆるく外反しており，ヨコナデは強くないため多少歪んでいる。体部の外面はタテ方向のハケ目，内面はヨコ方向のハケ目である。底部外面は不調整である。I期に比定される。

SI 82出土土器（図版107・181，観察表 271頁）

須恵器の無台杯（988）のほか，須恵器・土師器の小片が数点ある。988は口径11.8cmの無台杯IIで，胎土は石英，長石粒を含むが精良なC群である。内面と外面に火だすきを残し，両面の火だすきはほぼ対応している。未実測のなかに土師器の小甕B系が1点ある。時期はIII_2期からIV_1期頃と考えられる。

2）おもな遺構出土土器

SK39出土土器（図版108・181・214・217，観察表 271頁）

図化したもののほかに須恵器片数点，土師器片多数がある。

須恵器（989～994）　無台杯・有台杯・広口壺・環状鈕蓋がある。胎土は無台杯（989・990）が海綿骨針を含みやや精良なC群で，そのほかはすべてA群である。無台杯(989～991)の形態はいずれも底部がほぼ水平で体部から口縁部は直線的である。989と990は胎土・法量・色調とも類似しており，底部のヘラ切りは粗雑である（図版 217－6）。991とは異なる。有台杯（992）は口径14.1cmの有台杯AIで，高台はていねいなロクロナデをうけ内端接地する。底部外面の高台の内側には墨痕があり，転用硯と考えられるが，著しい磨滅はない。広口壺（993）は内面に淡緑色の自然釉がかかり，口縁端部は上方へたちあがる。環状鈕蓋（994）はつまみのみ遺存しており，つまみは環状で直径4.8cmをはかる大きなものである。外面に自然釉がかかる。金属器の写しで，特殊なタイプである。

土師器（995～997）　甕・長甕・鍋がある。甕（995）は外面にタテ方向のハケ目ののちヨコ方向のハケ目をうけ，内面には粘土紐のつぎ目が明瞭に残る。非ロクロのA系と考えられるが，長甕か小甕かははっきりしない。長甕（996）は底部のみの残存である。厚いつくりで，ロクロ土師器のC系である。鍋(997)は口縁は短く，水平にのび，端部はわずかに上方へつまみあげられる。胎土は須恵器のA群に対応する。時期はII_1期頃と考えられる。

SK1022出土土器（図版108・214，観察表271頁）

図化したもののほかに須恵器片数点，土師器片多数が出土している。

須恵器には無台杯（998～1001）がある。胎土はすべてA群。998～1000は無台杯II，1001は口径15.4cmと大きい無台杯Iである。998～1000は色調が暗灰色で，底部の残る1001は底部から直線的にやや開き気味にたちあがり，口縁は尖り気味になる。

土師器には長甕・小甕・甕・鍋がある。長甕（1002）はC系で，口縁部が水平にのび，端部に面をもちやや垂下気味になる。甕（1003）はA系で，底部からほぼ垂直にたちあがり，底部外面に木葉痕を残す。小甕（1004）は口縁が短く，端部は尖り気味になる。体部はやや丸く張り，外面は焼成をうけ剝離が目立つ。外面下半部はヨコ方向のヘラケズリがされ，内面は体部全体にカキ目がはいる。底部は不調整である。口縁部の形態からみて，C系と考えられる。鍋（1005）は非ロクロのA系2類で，口縁は短くヨコナデがしっかりしており端部は丸くおさまる。内面はヨコ方向のハケ目，外面はタテ方向のハケ目がはいる。底部外面には一条の葉脈状のくぼみがあり，木葉痕と考えられる。底部内面に砂痕がある。焼成以前に別の個体を重ね，その際付着した可能性が考えられる。時期はI～II_2期と考えられる。

SK102出土土器（図版108・214，観察表 271頁）

図化したほかに須恵器の甕片3点をはじめ数点，土師器小片が多数ある。

須恵器は無台杯（1006）がある。平らな底部から開き気味にたちあがり，そのまま口縁に至る。端部は丸くおさまる。淡灰色を呈し，胎土は石英粒を含むがやや精良であることからC群と考えられる。

土師器は，甕と小甕がある。甕（1007）は非ロクロA系の底部で，外面にタテ方向のハケ目が残る。底部は不調整である。大きさからみて小甕かと思われる。小甕（1008・1009）はB系である。1008は体部があまり丸く張らず，口縁はゆるく外反して端部は丸くおさまる。1009は体部がやや厚く，口縁は「く」の字状に短く外反し，端部は上方へつまみあげられ，尖る。どちらも胎土は須恵器のA群に対応する。時期はII_1期頃に比定される。

SK34出土土器（図版109・214，観察表 271頁）

図化したほかに須恵器片が数点，土師器小片が多数ある。

須恵器には無台杯（1010・1011）・杯蓋（1012）がある。1010は口径13.0cmの無台杯IIで，胎土は海綿骨針を含み，精良なC群である。1011は身の深いタイプで内面に自然釉がかかる。平らな底部から直線的にたちあがり，そのまま口縁に至る。端部はやや尖る。胎土はA群である。杯蓋（1012）は外面に自然釉がかかり，ヘラ切り後のロクロケズリはごくかるいものである。大型で有台杯AIに対応するものであろう。内面は墨痕が付着し，磨滅しており転用硯である。転用硯として使用するために意図的につまみは打ち欠いている。胎土はA群である。

土師器には小甕（1013・1015・1016）・長甕（1014）・無台杯（1017）がある。小甕1013・1016はB系，1015はA系と考えられる。1013は体部がやや丸く張り，口縁は外反し端部は丸くおさまる。1016は内面の下半部までカキ目がはいる。いずれも胎土は須恵器A群に対応する。1015は口縁が短く弱いヨコナデをうける。長甕(1014)はC系で体部と口縁部の境に凹線様のくぼみがある。内面にカキ目がはいっているが，ロクロの回転が弱いためか粘土紐のつなぎ目が残る。無台杯（1017）は黒色土器で両面黒色を呈し，ヘラミガキ調整されている。時期はII_1期頃と考えられる。

SK32出土土器（図版109・214，観察表 271頁）

須恵器は実測個体のほかに小片が4点，土師器は実測個体のほか長甕B系，C系の破片が各1点，その他小片が多数ある。

須恵器には無台杯（1019）と杯蓋（1018）がある。1019は口径12.6cmの無台杯IIで，淡灰色を呈し，焼成があまい。胎土はA群である。1018は天井部のロクロケズリがしっかりはいっており，ヘラ切り痕が消されている。環元焔焼成が不十分だったためか淡褐色を呈している。胎土は石英粒を含むがやや精良なC群である。

土師器には小甕（1020）と長甕（1021）がある。1020はB系で，体部がやや張りだす。1021はB系で薄いつくりである。口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方へつまみあげられる。両者とも胎土は須恵器A群に対応する。時期はII_1期頃であろう。

SK340出土土器（図版109・272頁）

須恵器は実測個体のほかに小片が8点，土師器は小片が多数ある。

須恵器には有台杯（1022）がある。口径13.0cmの無台杯IIで平らな底部から直線的にたちあがる。淡灰色を呈し焼成はあまい。底部外面中央にヘラ記号「X」がある。胎土はA群である。

土師器には小甕（1023）と長甕（1024・1025）がある。1023の口縁は水平にのびヨコナデがしっかりして

いる。A系2類かと考えられるが，明確でない。内面はヨコ方向のハケ目である。口径は18.0cmをはかり，長甕でも小型のもの（SI 610－77・78）の可能性もある。長甕1024はロクロ土師器のC系で，内面にカキ目がはいり，口縁はゆるく外反し，端部は丸くおさまる。1025は口縁部のみの残存であるが，水平に短くのび，端部は丸くおさまる。A系2類，ないしはC系と考えられる。この土坑の土師器は一様に二次焼成をうけ，器面の剥離が著しい。時期はII_1期頃と考えられる。

SB730・790出土土器（図版109・215，観察表 272頁）

SB730は図化したほかに須恵器片数点，土師器片数点がある。須恵器無台杯（1026・1027）は胎土B群で口径約12cmの無台杯IIである。ともに身は浅く，体部の開きは大きく，B群のなかでも新しい傾向を示している。底部と体部の境は明瞭であり，ロクロナデの凹凸痕もはっきり残る。口縁部はやや内湾する。

SB790は図化したほかに須恵器片2点，土師器は小甕C系の破片1点を含む小片数点がある。須恵器無台杯（1028）も胎土B群である。口径は14.0cmとやや大きい。器面にロクロナデの凹凸痕を残し，口縁部はやや内湾し丸くおさまる。SB730と同様に体部の開きは大きい。時期はIV_2期以降と考えられる。

3）その他の土器

ここではおもな遺構出土以外の土器で，出土個体数の少ない器種を中心にとりあげる。

須恵器（図版109～111・181・215・218～220，観察表 272頁）

無台杯（1030・1033～1035）　無台杯は底部外面ヘラ切りののち，再調整を施さないものが一般的であるが，再調整を施す例も少数ながらみられる。1030は底部外面ヘラケズリ，1034はハケ目，1035はロクロケズリである(図版 219－5～7)。1030は2方向からのヘラケズリが強く施され，内面に自然釉がかかる。胎土はA群である。1034は一方にハケ目を加えるもので，胎土は石英・長石を含むが，精良なもので，C群と考えられる。SK1211上層出土。1035は体部外面下半から底部外面をていねいにロクロケズリする。口径13.5cm，器高4.4cmで，全体にやや大型で，身の深い形態である。胎土はC群であるが，白色粒を多く含み，石英を含まないもので，新津丘陵のものではないと考えられる。一部の口縁部内外面にタールが付着しており，灯明皿と考えられる。E 9（14）区の遺構上面出土で，SI 33Aに伴う可能性が強い。1033は再調整しないものであるが，身の深い形態である。こうした器形はSI 502Bなどにみられ，II_1期頃のものと考えられる。

有台杯（1036・1040）　1036はやや大型の有台杯Xである。体部外面に細い沈線を2条，口縁部外面に凹線様のくぼみをめぐらす。胎土は白っぽく，内面に薄く淡緑色の自然釉がきれいにかかる。つくりは全体によく，I～II_1期のものと考えられる。E13区出土。1040は口径約11cm，器高約9cmの有台杯Cである。有台杯Cは一般にIII_1期以降にみられるが，これは器壁が全体に厚く，身の開きもない形態で，II_2期以前に比定されるのではなかろうか。胎土はA群である。

折縁杯（1038・1039）　1038は口径約12cm，器高約5cmで，口径が小さくて身の深いものである。器壁は全体に厚く，口縁部はあまり外反せず，内面のくぼみも小さい。この部分は蓋の「身受け」としてはとうてい機能しないものであり，明確に「身」と判断される例である。高台は薄く，外方に張る。高台内面に「X」のヘラ記号がみられる。つくりからみてIV_1期のものと推定される。胎土はA群と考えられるが，混じりは少なく，素地は精良である。E 9（12）区の遺構上面出土で，SI29に伴う可能性が強い。1039はやや身が浅く，体部の開きは直線的で，大きい。口縁部は短く内側にたちあがるのみで，外面の屈曲はない。高台は底部の外縁に付され，形態は一般的な有台杯と同じ方形のものである。胎土はA群である。

皿（1041）　1個体しか出土していないものである。底部外面はヘラ切りで，ほかはロクロナデである。胎土は精良で，石英を含まないC群である。

蓋（1042～1047）　1042は杯蓋である。天井部外面は糸切り痕とロクロケズリである。杯蓋で糸切り痕を残すのはこれ1点のみである。ロクロケズリを施すのは糸切りの範囲の外縁部だけであり，糸切り痕の上につまみを付す。天井部内面は器面がなめらかで，凹凸がほとんどない（図版 218－4）。明褐色の色調であるが，焼成は硬質である。胎土は精良で海綿骨針を含む。F13区出土。1043は杯蓋とも考えられるが，縁部の屈折部が長く，端部外面に段をもち，尖り気味になる。こうしたつくりは短頸壺の蓋に多いことから，これも同様と考えられる。外面に自然釉がかかる。胎土はA群である。

1044～1046は環状つまみをもつものである。伴う器種は不明である。いずれも白っぽい胎土で，外面に淡緑色の自然釉が厚くかかるものである。1046の天井部外面には2条の沈線がめぐる。1046は天井部から体部の屈曲が大きくなく，短頸壺の蓋とややおもむきがことなる。稜椀，金属器模作の有台杯Xなどの蓋と考えておきたい。

1047は短頸壺の蓋である。天井部は水平で，縁端部は尖る。つまみは上部がくぼむ。

稜椀（1037・1050）　1050は底部から体部は丸く，口縁部は大きく外反する。端部外面は丸く肥厚し，内面はくぼみをもつ。高台径はとくに小さく，SI 360（656）に類似する。1037は小型の稜椀かと思われる。

瓶・壺類（1031・1048・1049・1051～1053・1059・1060）　1048・1049は小壺である。1049は底部外面が回転糸切りである（図版 219—2）。胎土はA群かと考えられる。1051は長頸瓶の体部である。肩が張り，扁平な形態で，8世紀のものである。胎土はC群で体部上半部に厚く自然釉がかかる。1059は長頸瓶の頸部である。頸部は細くしまり，口縁部は外反すると予想される。1060は双耳瓶の耳である（図版 220－8）。1051・1053は短頸壺である。1053は胎土B群と考えられる。1031は小壺と考えられる底部である。底部外面はヘラ切りである。

鉢（1055・1058）　1055は口縁部が内湾し，面をもつ鉄鉢形のものである。1058は短く直立する口縁部に，肩の張る体部をもつ。把手付鉢の可能性がある。

甕（1054・1056・1057・1061～1064）　1054は口縁部が短く直立するもので，大きなものではない。外面は粗い原体のカキ目，内面は同じ原体のハケ目である。1056は口縁端部の面が内傾するもので，鋭さはない。黄灰色であるが，焼成は硬い。1057は1056と同様口縁端部の面が内傾する。1061～1064は口縁部外面に櫛描波状文をめぐらすもので，端部が肥厚したり，突帯をもつ大型品である。

鍋（1065）　淡灰色で，一部淡褐色を呈するものであるが，軟質の焼き上りで，胎土がとくに粗雑であることから，本来は土師質の鍋と考えられる。

その他（1029・1032）　1029は底部に径約1.5cmの孔をもつもので，灰色を呈する。しかし，胎土がとくに精良で，器面の感触も他の須恵器とはことなる。器種からみても，須恵器ではなく，近世陶器の可能性が強い。1032は小型の杯か，蓋かと考えられるものである。淡黄灰色で，土師器かとも思われるが，ロクロ整形で，胎土は須恵器系である。

土師器（図版111・181・182・215・221，観察表 273頁）

椀B（1066～1071）　底部外面が回転糸切りのものである（図版 221－5）。1066のみ口径が約15cmで，他のものより大きい。1066・1067は体部が比較的直線的で，1069もそれにちかい。1068・1070・1071は体部に丸味をもち，身がやや浅い。1066・1068・1069は外面の底部と体部の境に糸切り後にロクロケズリをおこなう。ロクロナデは外面より内面がていねいであるが，1066と1069は内面のロクロナデの凹凸が明瞭であ

る。この2点は胎土が須恵器系であり，2～3㎜の石英・長石を含む。また，1067は部分的に器面が灰褐色を呈し，焼成もかなり硬質である。須恵器ときわめて近い属性をもつものとして注目される。これに対し，他の4点の胎土は精良で，須恵器系ではない。とくに1071は粒子をほとんど含まない精良な胎土で，焼成もやや軟質である。のちに普遍化するロクロ土師器の椀と同じと考えられる。なお，1067の底部外面には「メ」のヘラ記号がみられる(図版 221－7)。

赤彩土器（1073・1074）　ともに無台の杯と考えられる。出土地点が近く，胎土や表面の赤彩も類似しており，同一個体の可能性がある。胎土は淡褐色の精良なもので，表面の赤彩は赤茶色を呈する。底部外面はロクロケズリで，ほかはていねいなロクロナデである。

黒色土器（1072）　1072は内面黒色処理の椀と考えられる。器壁も厚く，口径15cm以上になるものであろう。胎土は須恵器系でなく，椀B（1067）と類似する。

鉢（1075）　非ロクロの鉢で，器高が低い。底部は太い網状脈の葉脈らしきものがみられる。体部外面にヘラケズリをおこなう，煮炊に使用している。

壺（1076）　体部肩部のみで，全体の器形は不明であるが，口縁部のたちあがりをわずかにとどめることから，広い口のもので，口縁部は短いと推定される。ロクロ土師器で，胎土は須恵器系である。外面にハケ目と同じ原体で，斜め方向に施文する。焼成は硬い。

長甕（1077）　B系の完形品である。体部は肩が張らず，下半部がくびれ，口縁部は「く」の字状に外反する。端部は上方へたちあがり，その内側は沈線様になる。底部外面にタタキ目をわずかにとどめ，体部外面はヘラケズリである。胎土は須恵器のC群に対応し、比較的精良である。A10（16）区出土で，SI 1300に伴う可能性がある。Ⅰ～Ⅱ期の古手のB系であろう。

C　墨書土器　（図版112・225，観察表 273頁）

墨書土器は21点が出土している。いずれも須恵器の杯と杯蓋に書かれたものであり，このうち判読できた土器が8点，不確定および不明なものが13点である。

1の「大」は有台杯の底部外面に書かれたものであり，字体は小さく整っており，特に二画目の反りが伸びやかで三画目への勢いを感じさせる。

2は比較的大きな有台杯の底部外面に，文字も大きく書かれたものと思われるが判読しがたい。

3は無台杯の底部外面の端に小さく記されている。下の二画を除いて「庄」と読み，二文字以上につながることも考えられるが確定はできない。

4の「五」は無台杯の体部外面に口縁を右にして書かれている。字体は整っているが，筆使いは固い。

5も無台杯の体部外面に記されたもので，三本の固い線が確認される。数字を記した4と7の「五」はともに口縁部を右にした横書であることからすれば「三」と読める。また，口縁部を上下して読めば「川」あるいは「小」と読めないこともない。ただ，口径12.5cm，器高3cmのほぼ完形な無台杯であり，同じくSI 15から出土した多数の須恵器食膳具のひとつでもあり，7（「五」）も同様の出土であることから，数字の「三」と読んだほうがよいように考えられる。

6は有台杯の底部外面に認められるものであるが，文字にはみえず記号であるように思われるが不明である。

7の「五」は同じくSI 15出土の5と口径・器高ともほぼ同形の無台杯体部外面に記されているもので

ある。やはりともに出土した須恵器食膳具のひとつであるが，字体は4の「五」の字と類似し，第一画目が太く入り，三画目の横線が長く，折れてからの角度も似かよっている。また，四画目の押え部分も似た角度といえよう。字の大きさは7の方がひとまわり小さい。

8は住居跡カマド付近より出土したもので無台杯底部外面のほぼ真中に記されている。これも文字というよりは何かの記号ではないかと考えられるが，欠損により全体は不明である。

9は無台杯口縁部外面の一部が遺存したものに記されたもので，文字の一部も欠損してしまっている。「土部」の文字を予想できるが，それ以上は不明である。

10も無台杯体部の破片に記されたものであるが，単字ではない。磨滅により薄墨となっているが「古稲万」と読める。二字目の「稲」は間違いないと思われるが，両側の「古」と「万」は別字である可能性もあり確定しがたい。三文字とも行書風の書体で筆勢が感じられる。

11の「主」は口径12.5cm，器高3cmの無台杯完形品の底部外面に記されている。調整も精巧である。字体は太くて力強い。

12・13は同じ遺構（SI 1500）からの出土で，無台杯の大きさや底部外面中央に記された「中」の大きさや字体も類似していることから，同一の筆で使用目的も同じではなかったかと考えられる。

14は無台杯の底部外面に大きく書かれた単字と思われるが欠損により判読できない。「大」の一部ではないかと推測される。

15の「人」は無台杯の底部外面の中央やや上に整った字体で記されており，特に二画目のたっぷりした墨つけが特徴的である。底部周囲が意図的に砕かれているが，墨書の意味と関連があるのだろうか。

16も無台杯の底部外面に行書風の筆勢で三文字ほど記されたものとみられるが，いずれも判読しがたい。一文字目は「亠部」の漢字と思われ，「亶」あるいは「畜」・「富」（享の正字）であるかもしれない。同じ遺構からは8も出土しており，二字目，三字目も含めて興味深い墨書といえる。

17は杯蓋のつまみ上部に記された珍しいもので，やや磨滅しているが「大」と読める。

18・19はどちらも有台杯の底部外面に記されているものであるが，欠損や磨滅などで何を記したものか不明である。

20は無台杯底部外面に記されたものだが「井」とも「牛」とも予想されるものの，やはり確定しがたい。

21も無台杯であり，体部から底部にかけて一本の線がひかれている。筆の入り具合からおそらく横線であると思われるが文字というより単なる印であろう。

第9表　墨書土器一覧

番	墨書文字	器種・記載位置	出土地点	番	墨書文字	器種・記載位置	出土地点
1	大	有台杯・底部外面	A 9 区	12	中	無台杯・底部外面	SI 1500
2	（不　明）	有台杯・底部外面	D12区	13	中	無台杯・底部外面	SI 1500
3	（庄　か）	無台杯・底部外面	F13区	14	（不　明）	無台杯・底部外面	SI 610
4	五	無台杯・体部外面	SI 280	15	人	無台杯・底部外面	SI 500
5	（三　か）	無台杯・体部外面	SI 15	16	（不　明）	無台杯・底部外面	SI 802
6	（記号か）	有台杯・底部外面	D 5 区	17	大	杯蓋・つまみ上部	SI 75
7	五	無台杯・体部外面	SI 15	18	（不　明）	有台杯・底部外面	SI 4
8	（記号か）	無台杯・底部外面	SI 802	19	（不　明）	有台杯・底部外面	SI 310
9	（不　明）	無台杯・体部外面	A 8 区	20	（井・牛か）	無台杯・底部外面	SI 1320
10	（古稲万か）	無台杯・体部外面	SI 1315	21	（記　号）	無台杯・体部～底部外面	SI 339
11	主	無台杯・底部外面	SI 440				

（すべて須恵器）

3　奈良・平安時代

このように山三賀Ⅱ遺跡より出土した墨書土器は判断不明なものが多く含まれるものの，いくつかの事例を提示することができる。判読できた9文字をみると「大」・「五」・「中」が2点ずつ，「主」・「人」「稲」を記した土器が1点ずつとなる。県内においても墨書土器の出土例がいくつか紹介されつつあり，それぞれ出土文字の量的分布に特色をもつようであるが，当遺跡の場合は文字数のかたよりに大きな特徴はみられない。二文字以上確認された「大」・「中」や数字（「五」・「三」）は曽根遺跡〔豊浦町教育委員会1981・1982〕や若宮遺跡〔真野町教育委員会1969〕で，「稲」は長表遺跡〔池田1975〕や今池遺跡〔木村1984〕で，「人」は本屋敷遺跡〔椎名1959〕でそれぞれ出土例が紹介されている。なお，「主」については山田英雄が曽根遺跡出土の墨書より「『主』字のみは全画に力を入れ肥痩がなく，黒々と書かれている」と静岡県伊場遺跡の例をも引用しながら指摘しているが，11の「主」からも同様のことがうかがわれる〔山田1982〕。一般に墨書される土器の器種は無台杯が多い。有台杯自体の割合が少ないこともあるが，当遺跡における有台杯への墨書の割合は全体の¼あまりしかない。288点の墨書土器を出土した曽根遺跡においても有台杯の割合は全体の⅕，長表遺跡では1点（42点中），今池遺跡では3点（21点中）出土しているのみである。また，土器のどの部分に墨書されるかということについては，底部外面が圧倒的に多い。他は口縁近くの外面に記されることもあるが全体の割合は少ない。さらに杯蓋に墨書されることも稀にみられる。その意味で17のつまみ上部に記されていることは非常に珍しい例といえる。以上のような墨書土器の傾向は，649点もの大量の墨書土器の出土した秋田城の場合〔秋田市1984〕においても同様のことが

第58図　墨書文字

認められることから，墨書土器は無台杯の底部外面に記されるものが基本といえようか。ほかに転用硯が10数点出土していることや近接する曽根遺跡との関連も含めて，８世紀から９世紀に記された墨書文字の意味するところは今後の興味深い課題である。

D　土製品　(図版113・116・226，観察表 274頁)

土管（１～６）　１はロクロ成形されており，外面にカキ目がはいる。下部の端部は器壁が肥厚し，内側にはりだす。内面には面をもつ。上部ではいちど器壁が肥厚し，外側に段をもち，内側からふたたび体部と同じ厚さで上方にたちあがる。外面は二次焼成を受け，一部にはススが付着している。SI 1000出土。２は１と同様の段をもつ。上半部で外側の段の端部はかるく上方につまみあげられる。段の内側から上方に約８cmたちあがった端部は面をもつが，１の下部のように肥厚しない。内面には粘土紐の痕を明瞭にのこす。淡褐色の色調で，胎土は石英・長石・金雲母・小礫を含む。器形が１と類似し出土地点が同じであることから同一個体の可能性がある。３はロクロ成形で，両面にカキ目がはいる。上部のみ遺存し，器壁が肥厚して外側にはりだし，段をもつ。外面は二次焼成をうけている。Ｂ９（12）区出土。４は非ロクロで内面に粘土紐の痕をのこす。外面はタテ方向のヘラケズリである。下部の端部はやや歪み，端部に明瞭な面をもたない。D11（21・22）区，D12（1・2）区出土。５はロクロで成形され，外面にタタキ目をのこす。下部の端部は１のように肥厚せずに面をもつ。４と５は下端部の内側へのはり出しがなく，土管ではなく，甑の可能性も考えられる。６は特殊なもので，土管でない可能性がある。上部の端部に面をもち，約６cm内にはいりながら下部にのびた後屈折して「ハ」の字状に開く。上部に透かしがあり「ハ」の字状に開いた下部に２つの穿孔がある。透かし・穿孔の総数は不明である。上部の端部の面にはロクロケズリがはいる。胎土は石英粒を含まず精良で，他の土管とは異なる。古代のものではなく，新しい時期の可能性も強い。　D９区出土。土管の用途は不明であるがカマドに関係したものと考えられる。

支脚（７・８）　７・８ともに円柱形の支脚である。調整は指頭圧痕であり，二次焼成をうける。７は胎土に石英粒を含み，淡褐色を呈す。頭部の中央には深さ約５mmのくぼみがある。SI 1320出土。８は茶褐色を呈し，胎土は石英粒を含むが精良である。SI 1124出土。SI 1124は古墳時代の住居跡であるが，上層からは奈良・平安時代の土器が出土しており，これら支脚は奈良・平安時代の可能性もある。土製支脚の出土量はごく少なく，一般的には石がカマドの支脚として使われていたと考えられる。

紡錘車（10～12）　10は下面径 7.2cmで中央部にかけ肥厚し，最大の厚さは3.4cmである。中央に円形の孔があり，孔径は８mmである。指頭圧痕で調整され，胎土は石英粒を含むが精良である。SI 280出土。11は器径6.4cm，厚さ1.4cmの盤状で中央に円形と思われる孔がある。孔径は５mmである。胎土は細礫を多く含みざらついている。Ａ３（17・18）区出土。12は断面が台形で，下面径5.8cm，上面径4.9cmをはかり，厚さは2.5cmである。中央に紡茎を通す孔があるが，孔の器形・法量は不明である。側面はハケ目，下部はヘラケズリの調整である。SK1022出土。出土した竪穴住居は12が奈良・平安時代のⅠ～Ⅱ期，10がⅡ～Ⅲ期でともに８世紀代の可能性が考えられる。ただし，鉄製の紡錘車が存在することから11については古墳時代の可能性も考慮される。

鍛冶関連（13）　口径3.1cm，器高6.0cmをはかる完形品で，須恵質である。砲弾形の底部には突起があり，胎土に細礫を多く含む。内面にさび，外面に溶解鉄が付着している。器壁は全体に薄いが，底部は肥厚す

る。C10（25）区出土。奈良・平安時代のものと考えられる。

土錘（1～19）　土錘は形態からA・B・Cに分けられる。

A類（1・2）　大型品で円筒形を呈するもの。1は全長7.4cm，孔径2.0cm，重量155gである。SI 1167の出土。2は全長5.8cm，孔径1.5cm，重量115gと1よりもやや小型である。胎土は石英粒を多く含みザラついている。

B類（3～7）　球状のもの。いずれも色調が茶褐色で，胎土がやや精良な点が類似している。3～6は全長2.8～3.3cm，重量25～30gで，7は全長2.5cm，重量15gとやや小型である。3・4はSI 41の出土である。

C類（8～19）　小型で管状を呈するもの。器形・重量からC_1（8・10・11・18），C_2（9・12～14・17），C_3（15・16）に分けられる。C_1は小型管状形のうちでも重量があり，器壁がなめらかで，つくりがていねいなものである。完形品の8は全長4.4cm，重量9gをはかる。一部欠損する10が9g，約半分欠損する18が4gをはかり，平均は約10gである。11は胎土が須恵質で外面には自然釉がかかる。C_2はやや細身の器形で重量も軽い。完形品の12は全長4.3cm，重量7g，13は全長4.7cm，重量4gをはかる。平均は5g前後である。14は比較的ていねいなつくりであるが，そのほかは指頭圧痕の調整でやや歪んでいる。C_3は全長が短く，中心部がやや膨らむ器形である。15は全長3.3cm，重量5gである。19は約半分欠損していると考えられ，残存高1.8cm，残存重2gで中心部にかけやや膨らむことからC_3の可能性が考えられる。13はSI 402，14・16～18はSI 435，19はSI 401の出土である。

古墳時代の竪穴住居であるSI 402から出土した13を除いて奈良・平安時代のものと考えられ，11は須恵質の胎土から奈良・平安時代のものである。しかしそのほかのものについては古墳時代のものも含まれている可能性がある。

いづれの土錘も中心部において孔のくい違いが確認できないことから，丸い棒状工具に粘土をまきつけ，ナデて調整した後に引き抜いたものと考えられる。

このほかに近現代の土錘が出土している。これらも古代のものと類似している。全長約5cm，体部径約1.5cm，重量約10gの管状のもの（20），全長4.8cm，体部径3.1cm，重量40gのやや大型品（21）がある。これらは一様に胎土が精良で，端部に明瞭な面をもつことから古代のものと区別できる。

その他（9・14・15）　14は楕円形と考えられる底部を有する小型土器である。外面はナデ，内面は指頭圧痕で調整されている。底部は平底である。胎土は石英粒を含むが精良であり，新しい感じを受ける。近世以降の可能性も考えられる。D7区出土。9は底径が8.4cmをはかり，器壁が肥厚する。遺存が⅓程度のため内面を有する器種か，円柱形のものかは明確ではない。外面は指頭圧痕で，底部には一条の葉脈痕と思われるくぼみがある。石英粒を含むが精良な胎土である。支脚の可能性もある。C11（7）区出土。15は全長8.5cm，器径2cmの棒状土製品である。上端から約3cm，下端から約2.5cmの2箇所に突起があり，左右対称の位置に明瞭ではないが突起の痕がのこる。指頭圧痕で調整される。胎土は細かい石英粒，細礫を含むが精良である。D10（2）区出土。9・15は時期不明である。

E　金属製品　（図版114～116・227・228）

山三賀II遺跡では，砂丘上の立地という好条件により金属器の遺存状態が良好で，約400点の金属器が出土した。これらのうち，奈良・平安時代のものについて検討する。器種には鎌・鋤鍬先・手斧（ちょうな）・鉄鏃・

釘・刀子・鉇・紡錘車・和銅開珎・帯金具などがある。

鉄製品（1～64，75）

鎌（1～6）　直刃鎌1点と曲刃鎌5点が出土した。1は曲刃鎌で基端部に折返しを有する。重量は39gで，SI 115（I期：本遺跡における時期区分，以下同じ）から出土した。2も曲刃鎌である。重量は15gで，D10（1）区から出土した。3は直刃鎌で，基端部に斜めの折返しを有する。重量は188gで，SI 440（IV_2期）から出土した。4は曲刃鎌で刃部の半ばより折れ曲がっている。基端部は欠損しており，折返しの有無は不明である。重量は12.2gで，SI 1101（IV_1期）から出土した。5は曲刃鎌で，折返し内面に柄の木質が遺存している。重量は54gで，SI 1124の埋土上層から出土した。6は基端部のみ遺存しており，折返しを有する。重量は5gで，SI 6（III_2期）から出土した。

鋤鍬先（7～10）　U字形の鋤鍬先が4点出土した。7はほぼ完存しており，重量は189gである。SI 741（I期）のカマドの東袖から出土した。8は耳部のみ遺存しており，重量40gである。SI 9（III_1期～III_2期）から出土した。9は耳部と刃部の一部が遺存しており，重量は71gである。SI 1304（III_1期～III_2期）から出土した。10は小型でほぼ完存しており，重量は25gである。SI 72（II_1期）から出土した。

手斧（11）　11は有袋式・無肩の手斧で，ほぼ完存している、厚さ5mmの鉄板を折り曲げて袋部を形成している。重量は99gで，SX107から出土した。

鉄鏃（12～19）　鉄鏃は8点出土している。種類には飛燕式有茎鏃，長三角形腸抉式無茎鏃，鏨箭式棘篦被鏃，正三角形腸抉篦被式有茎鏃，長三角形腸抉式有茎鏃がある。12は飛燕式有茎鏃である。腸抉と茎の一部を欠くが，ほぼ完存している。重量は17.5gで，SI 1101（IV_1期）から出土した。13は正三角形腸抉篦被式有茎鏃である。重量は8.9gで，SI 1300（I期～II_1期）のカマド内から出土した。14は正三角形腸抉式有茎鏃である。腸抉は両方とも欠損している。重量は9.9gで，SI 741（I期）から出土した。15は長三角形式有茎鏃である。重量は7.0gで，SI 9（III_1期～III_2期）から出土した。16は長三角形腸抉式無茎鏃である。重量は3.1gで，SI 462（I期）から出土した。17は長三角形腸抉篦被式有茎鏃である。重量は8.8gで，D12（18）区から出土した。18は長三角形腸抉篦被式有茎鏃である。重量は10.9gで，SI 1471（II_1期～II_2期）から出土した。19は鏨箭式棘篦被鏃である。断面形は方形で頭部には鉄が熔着している。重量は29gで，SI 1315（I期）から出土した。

釘（20～23）　釘と見られるもの4点について説明する。20は頭部を折り曲げて皿部を作り出している。断面は長方形を呈し，重量は28.5gで，C13（1）区から出土した。21は断面形が方形を呈し，ほぼ正方形の皿部をもつ。重量は12gで，包含層から出土した。22は断面形が方形を呈し，皿部は認められない。重量は5gで，SI 75（II_2期）から出土した。23は断面形が方形を呈し皿部は認められない。重量は19g。SI 339（III_1期）から出土した。

刀子（24～44，47）　刀子は22点について検討する。刀子の多くは研ぎ減って刃部が内湾している。24は平棟造り・両関式の刀子で刃部は内湾しており，柄の木質が遺存している。刃部は内湾し，刃部の関は鈍角で不明瞭である。重量は13gで，SI 280（II_2期～III_1期）から出土した。26は平棟造りの刀子で，刃部は内湾し，刃部の関は不明瞭である。重量は12gで，SI 325（III_1期～III_2期）から出土した。27は平棟造り・両関式の刀子で，刃部は内湾し，刃部の関は鈍角で不明瞭である。重量は20gで，SK 31から出土した。28は平棟造りの刀子で，柄の木質が遺存している。刃部は内湾し，刃部の関は鈍角で不明瞭である。重量は26gで，SI 18（III_2期～IV_1期）から出土した。29は平棟造り・両関式の刀子で，刃部はわずかに内湾する。鎺の内面には柄の木質が遺存している。刃部の関は鈍角で不明瞭である。重量は10gで，SI

60（II$_2$期）の床面直上から出土した。30は平棟造りの刀子で，刃部は内湾し，関は不明瞭である。SI 8（II$_1$期）から出土した。31は両関式の刀子で，柄の木質が遺存している。刃部は内湾している。重量は9.9ｇで，SI 1166（I期～II$_1$期）から出土した。32は平棟造り・両関式の刀子でほぼ完存している。刃部はわずかに内湾し，刃部の関は不明瞭である。重量は8ｇで，B8区から出土した。33は平棟造りの刀子で，刃部は内湾する。重量は20ｇで，B 8（25）区から出土した。34は平棟造り・両関式の刀子で関部付近のみ遺存しており，刃部はわずかに内湾している。関は刃部・峰部とも鈍角で不明瞭である。重量は20ｇで，B 9（9）区から出土した。35は平棟造りの刀子で，刃部は外湾する。重量は9.2ｇで，SI 360（II$_2$期～III$_1$期）から出土した。36は刃部のみ遺存しており，刃部の湾曲は認められない。重量は8 ｇで，SI 1461（I期）から出土した。37は刃部の一部のみ遺存している。重量は13ｇで，SI 11（III$_1$期～III$_2$期）から出土した。38は平棟造りの刀子で，関部と刃部先端は欠損している。刃部の湾曲は認められない。SI 440（IV$_2$期）から出土した。39は平棟造りの刀子で，刃部先端のみ遺存している。重量は5ｇで，SI 339（III$_1$期）から出土した。40は平棟造り・両関式の刀子で，柄の木質が一部遺存している。重量は18gで，B6区から出土した。41は平棟造り・両関式の刀子で，関は刃部・峰部とも明瞭である。重量は18ｇで，B12（13・14）区から出土した。42は柄と関部のみが遺存しており，鏃（ほこさき）の一部と柄の木質が遺存している。鏃は柄からはずれ刃部に錆着している。重量は18ｇで，SI 752（I期）から出土した。43は茎（なかご）のみ遺存しており，目釘穴が見られる。重量は23ｇで，SI 1302（III$_2$期）から出土した。44は茎のみ遺存している。重量は8ｇで，B13（4・5）区から出土した。47は両関式の刀子で，重量は26ｇである。B12区から出土した。

鉇（やりがんな）（45～46）　45，46ともに先端のみ両刃がついている。45は重量26ｇで，SI 440（IV$_2$期）から出土した。46には柄の木質が遺存している。重量26ｇで，SI 27（I期～II$_1$期）から出土した。

器種不明鉄製品（48～55・59～64）　48は端部が折れ曲がっているが刃部は認められない。重量は18ｇで，A13区から出土した。49は端部が尖った棒状を呈し，断面形はやや膨らみをもった方形である。釘または紡錘軸の一部と考えられる。奈良・平安時代の遺物包含層から出土した。50は頭部が環状になっている。重量は11ｇで，SI 72（II$_1$期）から出土した。51は頭部を薄く作り穿孔してあり，55との類似が認められる。重量は13ｇで，SI 1300（I期～II$_1$期）から出土した。52は棒状を呈し，鏃（ほこさき）柄の木質が遺在している。茎の断面形は方形で，鏃（ほこさき）より先の断面形は円形である。重量は14ｇで，SI 753（IV$_1$期～IV$_2$期）から出土した。53は断面形が方形から徐々に扁平になる鉄製品で，半ばよりねじれており，55との類似が認められる。重量は9 ｇで，SI 4（III$_2$期）から出土した。54は断面形が台形の鉄製品で，半ばよりねじれている。重量は45ｇで，A14区から出土した。55は扁平な頭部に穿孔されている。半ばから尖端にかけては断面形は方形で，ねじれている。重量は45ｇで，SI 1300（I期～II$_1$期）から出土した。59は鉄板を折り曲げて成形している。重量は18ｇで，SI 752（I期）から出土した。60は正方形の板状を呈し，中央に方形の穿孔がなされている。重量は5 ｇで，SI 1201 の埋土上層から出土した。近世の仙台通宝の可能性が高い。61は円形で板状を呈し，錆化が著しい。SI 600（I期）から出土した。62～64はいずれも遺構の埋土上層から出土しており，遺構との関連は不明である。62はSI 600，63はSI 8，64はSK37から出土している。

紡錘車（56～58）　紡錘車は3個体出土した。56は紡錘輪と軸の一部が遺存している。重量は24ｇで，SI440（IV$_2$期）から出土した。57は紡錘輪と軸の一部が遺存している。重量は25ｇで，C12（4）区から出土した。58は紡錘輪と軸二片に分かれて遺存している。重量は20ｇで，D11（23）区から出土した。

銅製品（65～70・72～75）

帯金具（65～72）　帯金具には鉸具の板金具・刺金，丸鞆，鉄製の山形巡方がある。[1]帯金具は阿部義平と佐藤興治らにより分類され，官位との対応案が示されている（佐藤ほか1975・阿部 1976）。両氏の分類における銙（丸鞆・巡方）の規格と位階との対応を示したのが第10表[2]であり，本項では両氏の分類にしたがって説明する。65は鉸具の板金具で表面には擦痕が見られ，鉄製の鋲の一部が遺存している。佐藤分類ではＡⅣ類（大初位），阿部分類ではＡ６類（従八位）に相当する。長さ37cm，縦幅27cm，厚さ1.5㎜，重量13ｇでSI 33Aの埋土上層から出土した。66は鉸具の刺金で，鉸具のC字形金具と接する部分はわずかにくぼんでいる。幅は鉸具の板金具（65）に合致する。長さ16cm，幅６㎜，厚さ３㎜，重量1.2ｇで，SI 1166（Ⅰ期～II_1期）から出土した。67は丸鞆の表金具で，阿部分類のＡ４類（従七位），佐藤分類のＡⅢ類（八位）に相当する。表面は磨かれて平滑に仕上げられ，黒漆が部分的に遺存している。裏面は鋳放したままで，鋲足と裏金具の一部が遺存している。横幅32～33㎜，厚さ4.5㎜で，SI ４の埋土上層から出土した。68は丸鞆の裏金具で，黒漆が部分的に遺存している。垂孔はなく，鋲留孔は一か所しか確認できない。縦幅21㎜，横幅31㎜，厚さ1.5㎜，重量2.9ｇで，SI1100の埋土上層から出土した。69は丸鞆の表金具，70は丸鞆の裏金具で，SI 640（II_1期）とSI 660との切り合い部分から一括出土した。ともに表面には擦痕がみられ，黒漆が部分的に遺存している。69には上方の鋲足のみ遺存しており，70は下方の二つの鋲留孔に鋲の一部が遺存している。阿部分類のＡ８類（少初位），佐藤分類のＡⅥ類（無位）に相当する。69は縦幅15㎜，横幅22㎜，厚さ1.8㎜，重量1.1ｇで，70は縦幅15㎜，横幅22㎜，厚さ1.3㎜，重量1.1ｇである。阿部分類ではＡ８類（少初位），佐藤分類ではＡⅥ類（無位）に相当する。71は鉄製の山形巡方の表金具である。縦幅19㎜，横幅27㎜，厚さ3.5㎜，重量３ｇで，SI 803（II_1期）から出土した。72は丸鞆の裏金具で，阿部分類のＡ８類（少初位），佐藤分類のＡⅥ類（無位）に相当する。縦幅14.5㎜，横幅21㎜，厚さ1.5㎜，重量0.8ｇで，SI1166（Ⅰ期～II_1期）から出土した。

第10表　帯金具の分類

阿部分類	銙横幅（㎜）	佐藤分類
Ａ１類・正六位	42	－六　位・ＡⅠ類
	41	
	40	
Ａ２類・従六位	39	
	38	
	37	－七　位・ＡⅡ類
Ａ３類・正七位	36	
	35	
	34	
Ａ４類・従七位	33	
	32	－八　位・ＡⅢ類
	31	
Ａ５類・正八位	30	
	29	
	28	
Ａ６類・従八位	27	－大初位・ＡⅣ類
	26	
	25	－少初位・ＡⅤ類
Ａ７類・大初位	24	
	23	
	22	－無　位・ＡⅥ類
Ａ８類・少初位	21	
	20	
	19	
Ｂ　類・無　位	18	

器種不明銅製品（73～75）　73～75はSI 1300（Ⅰ期～II_1期）から一括出土した。73は厚さ約0.5㎜の板状を呈し，方形の型押しが見られる。重量は0.5ｇである。74は断面台形の棒状を呈し，重量は1.5ｇである。75は球形を呈し，中央に紐をもつ。鈴の可能性が高いものと思われる。重量は0.3ｇである。

銭貨（76・77）

銭貨には和銅開珎（76・77）がある。76はSI429の埋土上層から出土した。77はSI1100（III_2期）から出土した。

1）鉄製の帯金具は本遺跡をはじめ，群馬県高崎市の上野国分寺周辺と前橋市中島遺跡，埼玉県富士見市殿山遺跡，宮城県栗原郡伊治城跡など東国でのみ出土しており，中央からの支給品とは別に地方において補助的な生産を行なった可能性を考えるべきであろう。

2）佐藤興治は銙帯の縦幅を中心に分類し，位階の比定を行なっているが，佐藤興治の分類においても，むしろ銙（巡方・丸鞆）の横幅に強い規格性が表われており，阿部義平の分類との対比には銙（巡方・丸鞆）の横幅と位階との対応を示した。

F．石製品　(図版117・118・229・230)

石製品には砥石・敲き石・台石・石錘があり，また多数の自然礫が出土している。本遺跡は砂丘上に立地するため自然礫は遺跡内および遺跡の近接地には存在せず，出土した自然礫は全て意識的に本遺跡に搬入されたものと考えられるが，その性格を推定できるものは少数にすぎない。

砥石（1～28)

砥石には手持砥石（A類：重量330g以下，幅6cm以下）と置き砥石（B類：重量530g以上）があり，それぞれ素材から切り出して直方体に調整したもの（1類）と素材をそのまま利用したもの（2類）に分類され，さらに重量によって細分される。

A類（1～15・20・23・27・28)　手持砥石（A類）は重量によってa類（105g以下）とb類（150～330g）に細分される。

A1a類（1～4・7～13)　1は一方は厚く，他方は細く絞り込まれている直方体を呈し，正・裏面と両側面に作業面をもつ。石材は凝灰岩で重量は85gである。SI502Aの埋土上層から出土した。2は直方体を呈し，正・裏面と両側面に作業面をもつ。頭部には垂下用の穿孔がなされ，正面には断面U字形の擦り溝が具られる。下端は四方からそれぞれ5mmほど擦り切った後，折断されている。石材は凝灰岩で重量は92gである。SI1101（IV_1期：本遺跡における時期区分，以下同じ）から出土した。3は一方を厚く，他方は細く絞り込まれている直方体を呈し，正・裏・両側面と一方の端部に作業面をもつ。石材は凝灰岩で重量は94gである。B6区から出土した。4は直方体を呈し，正・裏・両側面と一方の端部に作業面をもつ。石材は凝灰岩で重量は64gである。B12区から出土した。7は扁平な直方体を呈し，正・裏面と一側面に作業面をもつ。正面と一側面に断面U字形の擦り溝が見られる。石材は凝灰岩で重量は69gである。A5区から出土した。8は直方体を呈し，正・裏・両側面と一端部に作業面をもつ。一側面には断面U字形の擦り溝が見られる。石材は凝灰岩で重量は68gである。B12区から出土した。9は直方体を呈し，正・裏・両側面に作業面をもつ。石材は凝灰岩で重量は40gである。SI805（II_2期）ら出土した。10は直方体を呈し，正面にのみ作業面をもつ。両側面と一端部には素材切り出し時の鋸（のこぎり）による溝状の工具痕を残す。石材は凝灰岩で重量は90gである。A10区出土。鋸の痕跡が残るものにはこの他に5があるが，ともに表土層から出土しており時期は降る可能性がある。11は一方は厚く，他方は細く絞り込まれている直方体を呈する。正・裏・両側面，正・裏面と両側面とがなす稜に作業面をもつ。石材は凝灰岩で重量は30gである。SI75（II_2期）から出土した。12は扁平な直方体を呈し，正・裏・両側面と両端部に作業面をもつ。また一端部と側面がなす稜には断面U字形の擦り溝がみられる。石材は凝灰岩で重量は105gである。B13区から出土した。13は直方体を呈し，正・裏面・両端部と側面の一部に作業面をもつ。石材は凝灰岩で重量は50gである。SI1202から出土した。

A1b類（5・6)　5は直方体を呈し，正・裏・両側面と一端部に作業面をもつ。石材は凝灰岩で両端部には素材切り出し時の鋸による溝状の工具痕を残す。重量は220gで，B11区から出土した。6は一方は厚く，他方は薄い直方体を呈し，正・裏・両側面に作業面をもつ。石材は凝灰岩で，重量は150gである。SI75（II_2期）から出土した。

A2a類（14・15・27)　14は棒状の凝灰岩を素材とし，正面・一側面と裏面の一部に作業面をもつ。重量は63gで，SI1124から出土した。15は棒状の頁岩を素材とし，正・裏・両側面と端部に作業面をもつ。

重量は21ｇで，SI640の埋土上層から出土した。27は凝灰岩の扁平礫を素材とし，正・裏・両側面に作業面をもつ。一側面には断面Ｕ字形の擦り溝が見られる。重量は98ｇで，Ｄ７区から出土した。

Ａ２ｂ類（20・23・28）　20は棒状の輝石安山岩を素材とする手持砥石・敲き石で，ほぼ全面に作業面をもつ。両端部は敲打によりつぶれ，短軸中央は磨耗している。重量は190ｇで，SI741埋土上層から出土した。23は頁岩の手持砥石で，表面・両側面と両端部に作業面をもつ。重量は330ｇで，SI 435（Ⅳ期）から出土した。28は扁平な砂岩を素材とし，正面と側面に作業面をもつ。正面と端部との境には断面Ｖ字形の擦り溝が見られる。重量は260ｇで，SI 840（$Ⅳ_1$期）のカマドから出土した。

Ｂ類（16～19・21・22・24～26）　置き砥石（Ｂ類）は重量によってａ類（530～680ｇ）とｂ類（1100ｇ以上）に細分される。

Ｂ1ａ類（17・19）　17は直方体を呈し，正・裏面と一側面に作業面をもつ。正面には断面Ｕ字形の擦り溝が見られ，一側面には素材切り出し時の手斧状の工具による成形痕が残る。石材は凝灰岩で重量は625ｇである。二つに分離し，Ｃ５区とＢ９区から出土した。19は平面形長方形の扁平な凝灰岩を素材とし，正・裏面と両側面に作業面をもつ。両側面には断面Ｕ字形の擦り溝が見られる。石材は凝灰岩で重量は540ｇである。Ｅ７区から出土した。22は扁平な砂岩を素材とし，裏面からの敲打により平面形をほぼ方形に成形している。作業面は正・裏面と側面の一部に見られ，側面の一部には浅い断面Ｕ字形の擦り溝がみられる。重量は300ｇで，SI502Ａの埋土上層から出土した。本例は置き砥石としてはやや軽量であるが，手持ち砥石とするには幅が広すぎるので本類に含めた。

Ｂ１ｂ類（16）　16は直方体を呈し，正面と一側面に作業面をもつ。一側面には素材切り出し時の手斧状の工具による成形痕が残る。石材は凝灰岩で重量は1180ｇである。SI1202（$Ⅳ_1$～$Ⅳ_2$期）から出土した。

Ｂ２ａ類（21・24）　21は輝石安山岩の扁平礫を素材とし，正・裏面と側面の一部に作業面をもつ。重量は680ｇで，SI1460（$Ⅳ_2$期）から出土した。24は棒状の安山岩を素材とし，被熱後全面擦られている。重量は680ｇである。Ｂ７区から出土した。

Ｂ２ｂ類（18・25・26）　18は扁平な輝石安山岩を素材とし，側縁からの敲打によってほぼ円形に成形している。作業面は正面と裏面に見られ，不定方向の擦痕が見られる。重量は1360ｇで，SI 29（Ⅳ期）から出土した。25は花崗岩の円礫を素材とし，作業面は正面のみである。作業面ほぼ全面が被熱し煤（ススが付着している。重量は1140ｇで，D12区から出土した。26は安山岩の置き砥石・台石で作業面は正面のみである。裏面と側面には鉄滓が付着し、被熱により素材の硅質分が溶解している。重量は1740ｇで，SI600の埋土上層からフイゴ羽口とともに出土した。56は三角柱状の花崗岩を素材とし，二側面に作業面をもつ。置き砥として使用された後，カマドの支脚に転用され，頭部はつぶれている。下部約⅓を除いて被熱しススが付着している。重量は2620ｇでSI1202（$Ⅳ_2$期）のカマド底面中央から出土した。

石錘（29・39～55）

石錘には網を通すために穿孔されたもの（Ａ類）と短軸中央がくびれた棒状の自然礫を利用したもの（Ｂ類）がある。

Ａ類（29）　29は長楕円形の凝灰岩を素材とした石錘である。正面ほぼ中央から裏面に向って網を通す孔が穿孔されており，孔から頭部にかけて網を掛ける断面Ｖ字形の溝が見られる。また網との摩擦により孔から側方にかけてはごく浅い断面Ｕ字形の溝状を呈する。頭部は敲打によりくぼんでいる。重量は210ｇである。SI429（$Ⅱ_1$期）から出土した。

Ｂ類（39～55）　短軸中央がくびれた棒状の自然礫を利用した石錘は，全く調整を受けていないもの（1

類）と，くびれを強くするため短軸中央に敲打を加えたもの（2類）に分類される。Ｂ1類は重量と長さによって，Ｂ1ａ類（120～190ｇ・84～107㎜），Ｂ1ｂ類（280～450ｇ・112～126㎜），Ｂ1ｃ類（580～720ｇ，137～152㎜）に分類され，II_1期～IV_2期にわたって普遍的にみられる。

Ｂ1ａ類（39～43）　39は重量140ｇ，長さ84㎜で短軸の断面形は三角形である。石材は角礫凝灰岩で，SI 429（II_1期）から41・44とともに出土した。40は重量160ｇ，長さ94㎜で短軸の断面形は半円形である。石材は輝緑岩で，SI402の床面直上から43とともに出土した。41は重量170ｇ，長さ107㎜で短軸の断面形は長方形である。石材は凝灰岩で，SI 429（II_1期）から39・44とともに出土した。42は重量180ｇ，長さ105㎜で短軸の断面形は楕円形である。石材は流紋岩である。43は重量190ｇ，長さ98㎜で短軸の断面形は三角形である。石材は花崗岩で，SI402床面直上から41とともに出土した。

Ｂ1ｂ類（44～49）　44は重量280ｇ，長さ122㎜で短軸の断面形は長楕円形である。石材は輝緑凝灰岩である。SI 429（II_1期）から39・41とともに出土した。45は重量280ｇ，長さ126㎜で短軸の断面形は三角形である。石材は流紋岩で，SI753（IV_1期～IV_2期）から出土した。46は重量340ｇ，長さ124㎜で短軸の断面形は台形である。石材はホルンフェルスである。Ｂ7区から出土した。47は重量360ｇ，長さ119㎜で短軸の断面形は三角形である。石材は輝緑岩である。SI10（Ⅲ期）から49とともに出土した。48は重量410ｇ，長さ112㎜で短軸の断面形は三角形である。石材は花崗岩である。SI14（III_1期）から51とともに出土した。49は重量450ｇ，長さ131㎜で短軸の断面形は三角形である。石材は輝緑岩である。SI10（Ⅲ期）から47とともに出土した。

Ｂ1ｃ類（50～52）　50は重量580ｇ，長さ137㎝で短軸の断面形は菱形である。石材は砂岩で，Ｂ9(12)区から出土した。51は重量670ｇ，長さ142㎜で石材はホルンフェルスである。SI14（III_1期）から出土した。52は重量720ｇ，長さ152㎜で短軸の断面形は三角形である。石材は花崗岩で，SI 1302（III_2期）から出土した。

Ｂ2類（53～55）　53は断面半円形の素材の側縁中央に敲打を加えてくびれを作り出している。重量470ｇ，長さ131㎜で石材はチャートである。SI440（IV_2期）の南西コーナー付近において55の東5㎝の地点から出土した。54は断面四角形の素材の一側縁中央に敲打を加えてくびれを作り出し，短軸中央の断面形をほぼ三角形にしている。重量550ｇ，長さ131㎜で石材は流紋岩である。SI805のカマド西袖から出土した。55は重量560ｇ，長さ100㎜で石材は砂岩である。SI440（IV_2期）の南西コーナー付近において53の西5㎝の地点から出土した。短軸中央がくびれた棒状の自然礫（Ｂ類）の用途については民俗例から漁錘のほか，編物用の錘具であるとの指摘もなされており〔渡辺 1981〕，今後竪穴住居跡から出土する自然礫の取扱いには注意を要する。

用途不明石製品（30～38）

用途不明石製品にはベンガラの付着した球形の石製品（30）と未調整の小礫（31～38）がある。30は球形の石製品で，被熱後部分的にベンガラが付着している。ベンガラが良好に遺存している部分は面をなしており，用途はベンガラをつぶしたものと思われる。重量は290ｇでSI1124（古墳時代中期）から出土した。未調整の小礫はSI1304（Ⅲ期）から8個が一括出土した。重量は0.8～2.2ｇ，長径11～22㎜である。31の石材は頁岩で重量は2.0ｇである。32の石材は頁岩で重量は1.1ｇである。33の石材は頁岩で重量は2.2ｇである。34の石材は凝灰岩で重量は0.9ｇである。35の石材はチャートで重量は1.2ｇである。36の石材は砂岩で重量は1.1ｇである。37の石材は頁岩で重量は0.8ｇである。38の石材はチャートで，重量は0.9ｇである。

第VI章　自然科学の分析・調査

1　山三賀II遺跡出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

A　はじめに

律令体制下の須恵器の伝播・流通に関する研究は窯跡や遺跡の数が多いだけに，はなはだ困難であるように見える。しかし，須恵器の伝播・流通における近距離優先の原理を導入することにより，器形観察による吟味と併わせて，律令体制下の須恵器の伝播・流通の研究の突破口を開くことは可能と思われる。例えば，長野県北佐久郡御代田町の鋳師屋遺跡群の十二遺跡の例をみると，８世紀前半では地元産の須恵器は未だ少数であったが，８世紀後半になると，俄然，地元産の須恵器が数多く検出された。このことは８世紀前半には既に地元で須恵器生産が開始されてはいたものの，未だ本格化していないが，８世紀後半に入ると，地元の須恵器生産が本格化したことを明示する。そして，地元の須恵器生産が本格化する前の段階では２・３の地域からの搬入品が検出されたが，その多くは愛知県産と推定された。これらの流通ルートは完全に解明された訳ではないが，少なくとも，筆者が提案する手法で律令体制下の須恵器の伝播・流通に関する研究も十分可能であることを示している。現在，各地でこの研究も推進されている。本項では山三賀II遺跡その他の新潟県下の遺跡出土須恵器の胎土分析の結果について報告する。

B　分析方法

須恵器試料は表面を研磨して付着物を除去したのち，均質な測定用試料を得るためタングステンカーバイド製乳鉢の中で200メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠として，約15トンの圧力を加えてプレスし，直径20㎜，厚さ３～５㎜の錠剤状の蛍光X線分析試料を作成した。分析には２次ターゲット方式による蛍光X線分析装置を使用した。Tiを２次ターゲットとして真空下でK，Caを，また，Moを２次ターゲットとして空気中でFe，Rb，Srを定量した。分析値は岩石標準試料JG－１による標準化値で表示された。

C　分析結果

胎土分析による産地推定の作業は分析結果を地元産の須恵器の化学特性に対応させ，地元産と推定される須恵器を抽出することから始められる。そのためにはまず，地元産の須恵器の化学特性を把握しておかなければならない。第11表には地元の笹神群と佐渡の小泊群の須恵器の化学特性を示してある。K，Rb量が笹神群の方に多く，逆に，Ca，Sr量は小泊群の方に多いことがわかる。実際に，K，Ca，Rb，Srの４因子を使って両群の重心からのマハラノビスの汎距離を計算し，$D^2_{(1)}-D^2_{(2)}$分布図を作製した結果を第59図に示す。$D^2_{(1)}$，$D^2_{(2)}$はそれぞれ，笹神群，小泊群からのマハラノビスの汎距離の二乗である。そして，筆者が提案している笹神群への経験的帰属条件は$D^2_{(1)}<10$，$D^2_{(2)}>10$であり，小泊群への帰属条件は$D^2_{(1)}>10$，$D^2_{(2)}<10$である。$D^2_{(1)}<10$，$D^2_{(2)}<10$の領域は両群に帰属することは間違いないが，いずれの群に帰属するかの

判別が難しい領域であり，不明領域と名付けている。一方，$D^2_{(1)}>10$，$D^2_{(2)}>10$の領域は地元の両群には帰属しない領域であり，したがって，外部からの搬入品と推定されるものが分布する領域である。第59図をみると，一部に不明領域に分布するものがあるものの，両群の相互識別は十分可能であることがわかる。この結果を使って，山三賀II遺跡をはじめ，新潟県下の遺跡出土須恵器の産地を推定した結果について以下に説明する。第12表には分析値と判定結果を示してある。まず，山三賀II遺跡出土須恵器の分析データから，K，Ca，Rb，Srの4因子を使って笹神群，小泊群からのマハラノビスの汎距離を計算し，$D^2_{(1)}-D^2_{(2)}$分布図を作成した結果を第60図に示す。笹神群に帰属するのはNo.7，10，12，15，25，28，29，30，35，36，37，39の12点であり，小泊群に帰属するのはNo.18，19，20，22の4点にすぎない。不明領域に分布したNo.1，2，3，4，5，9，16，17，21，23，32のうち，No.2，4，17の3点は小泊窯跡群産の可能性が強く，また，No.9，23の2点は笹神群産の可能性が大きい。No.40は両群からの距離は遠く，明らかに外部からの搬入品である。この他に，No.6，13，14，24，26，27，31，34，38，41，42の12点も外部からの搬入品である可能性をもつが，このうち，No.8，11の2点は多少，笹神領域をずれるが，笹神群産の可能性も十分ある。念のため，第62図にはRb－Sr分布図を示しておく。その分布位置より，やはり，No.6，13，24，26，33，34の6点は同一産地で作られた可能性が強く，また，No.41，42もともに同一産地のものであるとみられる。No.33～40は土師器である。もし，土師器胎土に地元産の窯跡出土須恵器の分析結果が適用できるとすれば，No.35，36，37，39の4点は笹神周辺で作られた在地産の土師器ということになり，No.33，34，38の3点は同一産地で作られた外来品の土師器ということになる。No.40は全く異質の胎土をもつ外来の土師器である。

次に，美山遺跡出土須恵器の$D^2_{(1)}-D^2_{(2)}$分布図を第61図に示す。No.11は笹神群産であり，No.16とNo.3，4も笹神群産の可能性をもつ。一方，No.1，5，6，8，9，10，13の7点は小泊群産であり，No.2，12，14，それにNo.7も小泊群産の可能性が高い。No.17，18は笹神群産か小泊群産かの判別がつかない地元産の須恵器である。No.15のみは外部からの搬入品とみられる。これらの須恵器のRb－Sr分布図を第63図に示す。

他の遺跡の須恵器の産地推定の結果は表13にまとめてある。帰属条件は前述したとおりである。笹神群産か小泊群産かの判別がつかない場合を地元産とした。また，金屋遺跡のNo.23，24の須恵器は笹神群産ではあり得ないが，小泊群産の可能性は十分あり，ここでは小泊群（？）とした。外部からの搬入品が全くない点が注目される。

これらの推定結果は器形観察などにより再度吟味される必要がある。こうして，難しいとみられる律令体制下の須恵器の伝播・流通に関する研究の突破口が開かれるものと筆者は確信している。

第11表　地元産須恵器の化学特性

窯跡群名	K	Ca	Rb	Sr
笹神群	0.531 ±0.090	0.111 ±0.029	0.574 ±0.075	0.264 ±0.061
小泊群	0.371 ±0.051	0.216 ±0.084	0.463 ±0.070	0.436 ±0.142

第12表　遺跡出土須恵器の分析値　（種別・器種・出土地・胎土は坂井が補筆）

遺跡名	資料番号(実測図番号)	種別	器種	出土地	胎土	K	Ca	Fe	Rb	Sr	推定産地
山三賀II遺跡	1	須恵器	杯	SI1320	B群	0.426	0.144	2.77	0.547	0.364	笹神群 or 小泊群
	2	〃	〃	〃	〃	0.398	0.152	2.91	0.515	0.357	小泊群(?)
	3	〃	〃	〃	〃	0.370	0.082	3.55	0.456	0.261	笹神群 or 小泊群
	4	〃	〃	〃	〃	0.404	0.165	2.70	0.505	0.424	小泊群(?)
	5	〃	〃	〃	〃	0.366	0.097	2.89	0.515	0.280	笹神群 or 小泊群
	6	〃	〃	〃	A群	0.698	0.084	2.06	0.840	0.280	外来品
	7	〃	〃	〃	〃	0.476	0.091	1.53	0.573	0.329	笹神群
	8	〃	〃	〃	〃	0.579	0.061	2.28	0.709	0.240	笹神群(?)
	9	〃	〃	〃	〃	0.464	0.105	2.05	0.518	0.284	笹神群(?)
	10	〃	〃	〃	〃	0.505	0.125	2.24	0.658	0.315	笹神群
	11	〃	〃	〃	〃	0.590	0.082	1.52	0.712	0.290	笹神群(?)
	12	〃	〃	〃	〃	0.564	0.067	2.02	0.686	0.252	笹神群
	13	〃	甕	〃	〃	0.664	0.098	0.938	0.859	0.332	外来品
	14	〃	〃	〃	〃	0.482	0.195	0.920	0.599	0.348	〃
	15	〃	杯	〃	〃	0.432	0.112	1.62	0.647	0.315	笹神群
	16	〃	〃	SI1000	B群	0.425	0.143	3.78	0.524	0.328	笹神群 or 小泊群
	17	〃	〃	〃	〃	0.369	0.126	3.43	0.484	0.310	小泊群(?)
	18	〃	〃	〃	〃	0.310	0.168	3.75	0.348	0.358	小泊群
	19	〃	〃	〃	〃	0.308	0.176	3.87	0.354	0.362	〃
	20	〃	〃	〃	〃	0.291	0.108	4.14	0.394	0.278	〃
	21	〃	〃	〃	〃	0.436	0.137	3.72	0.531	0.323	笹神群 or 小泊群
	22	〃	〃	〃	〃	0.443	0.225	2.88	0.576	0.446	小泊群
	23	〃	〃	〃	A群	0.470	0.147	1.69	0.602	0.366	笹神群(?)
	24	〃	〃	〃	〃	0.658	0.092	1.60	0.798	0.287	外来品
	25	〃	〃	〃	〃	0.497	0.172	1.30	0.654	0.420	笹神群
	26	〃	〃	〃	〃	0.709	0.087	1.58	0.789	0.291	外来品
	27	〃	〃	〃	〃	0.533	0.133	1.37	0.672	0.422	〃
	28	〃	〃	〃	〃	0.471	0.076	1.86	0.588	0.272	笹神群
	29	〃	〃	〃	〃	0.457	0.103	2.14	0.536	0.211	〃
	30	〃	杯蓋	〃	C群	0.507	0.139	2.09	0.489	0.279	〃
	31	〃	杯	SI15	〃	0.429	0.094	3.53	0.436	0.170	外来品
	32	〃	〃	SI1167	〃	0.412	0.093	2.43	0.521	0.272	笹神群 or 小泊群
	33 (11)	土師器	甕	SI5		0.535	0.109	1.06	0.809	0.359	外来の土師器
	34 (10)	〃	〃	〃		0.617	0.114	0.971	0.720	0.400	〃
	35 (12)	〃	〃	〃		0.533	0.125	0.900	0.563	0.353	笹神周辺産の土師器
	36 (923)	〃	〃	SI1167		0.558	0.181	2.41	0.540	0.366	〃
	37 (925)	〃	〃	〃		0.613	0.099	2.04	0.667	0.273	〃
	38	〃	〃	〃		0.546	0.150	2.56	0.405	0.291	外来の土師器
	39	〃	〃	〃		0.489	0.120	3.66	0.402	0.251	笹神周辺産の土師器
	40	〃	椀	〃		0.278	0.862	4.28	0.196	0.597	外来の土師器
	41	?				0.451	0.231	2.04	0.497	0.624	外来品
	42	?				0.505	0.260	1.04	0.683	0.568	〃
美山遺跡	1	須恵器	甕			0.472	0.207	1.97	0.528	0.389	小泊群
	2	〃	〃			0.403	0.140	1.68	0.449	0.299	小泊群(?)
	3	〃	〃			0.641	0.172	3.08	0.560	0.313	笹神群(?)

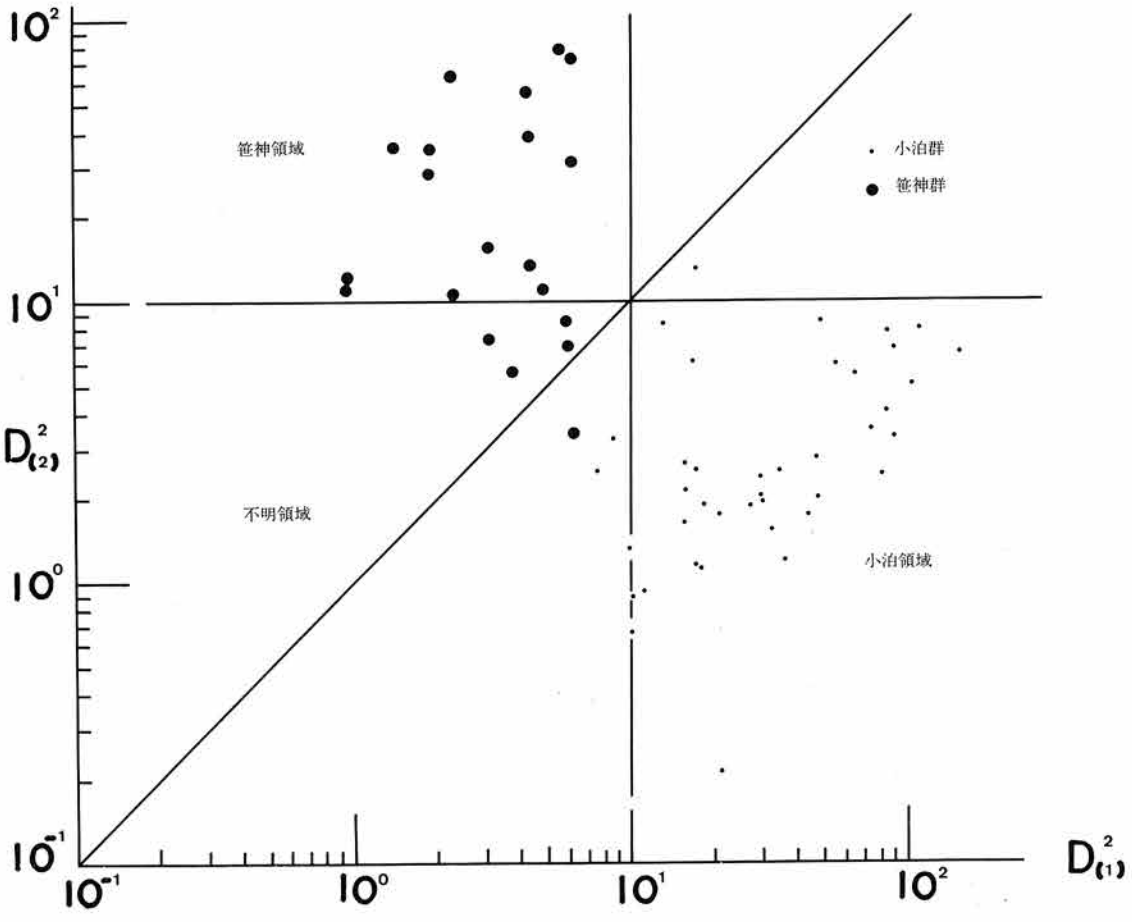
1　山三賀II遺跡出土須恵器の胎土分析

遺跡名	資料番号(実測図番号)	種別	器種	出土地	胎土	K	Ca	Fe	Rb	Sr	推定産地
美山遺跡	4	須恵器	甕			0.662	0.180	3.00	0.585	0.325	笹神群(?)
	5	〃	〃			0.436	0.204	2.04	0.518	0.396	小泊群
	6	〃	〃			0.336	0.360	2.68	0.413	0.582	〃
	7	〃	〃			0.287	0.342	2.74	0.375	0.512	小泊群(?)
	8	〃	〃			0.372	0.264	2.84	0.466	0.497	小泊群
	9	〃	〃			0.385	0.344	1.56	0.472	0.640	〃
	10	〃	〃			0.401	0.258	2.03	0.500	0.523	〃
	11	〃	〃			0.584	0.149	2.15	0.609	0.289	笹神群
	12	〃	杯			0.392	0.088	3.33	0.505	0.231	小泊群(?)
	13	〃	〃			0.321	0.094	3.64	0.335	0.265	小泊群
	14	〃	〃			0.352	0.071	3.73	0.432	0.235	小泊群(?)
	15	〃	〃			0.582	0.162	1.88	0.597	0.515	外来品
	16	〃	〃			0.445	0.092	3.91	0.499	0.240	笹神群(?)
	17	〃	〃			0.377	0.074	3.85	0.409	0.206	笹神群 or 小泊群
	18	〃	〃			0.401	0.123	3.26	0.420	0.291	〃
今池遺跡	1 (308)	須恵器	杯			0.515	0.101	2.68	0.608	0.318	
	2 (310)	〃	〃			0.374	0.084	2.77	0.446	0.277	
	3 (311)	〃	〃			0.386	0.120	3.08	0.473	0.286	
	4 (315)	〃	〃			0.476	0.092	3.68	0.533	0.281	
	5 (316)	〃	〃			0.357	0.087	2.53	0.468	0.277	
	6 (317)	〃	〃			0.390	0.178	2.43	0.495	0.453	
	7 (319)	〃	〃			0.362	0.096	2.78	0.431	0.347	
半ノ木遺跡	8	須恵器	杯			0.291	0.110	3.44	0.369	0.268	
	9	〃	〃			0.397	0.105	2.60	0.515	0.331	
	10	〃	〃			0.408	0.112	3.09	0.506	0.337	
	11	〃	〃			0.363	0.084	2.32	0.434	0.334	
鶴巻田遺跡	12	須恵器	杯			0.357	0.147	2.74	0.467	0.393	
	13	〃	〃			0.373	0.167	3.09	0.452	0.390	
	14	〃	椀?			0.312	0.161	3.32	0.379	0.317	
	15	〃	杯			0.347	0.151	2.55	0.491	0.373	
岩野下遺跡	16 (122)	須恵器	杯			0.376	0.082	3.72	0.479	0.249	
	17 (124)	〃	〃			0.375	0.100	2.76	0.503	0.282	
金屋遺跡	18(76-5)	須恵器	杯			0.488	0.139	2.57	0.648	0.366	
	19(76-3)	〃	〃			0.289	0.090	3.02	0.353	0.258	
	20(76-2)	〃	〃			0.486	0.131	3.26	0.548	0.281	
	21(76-7)	〃	〃			0.383	0.186	1.97	0.498	0.398	
	22	〃	〃		群馬?	0.380	0.287	1.67	0.427	0.481	
	23	〃	〃		〃	0.443	0.289	1.78	0.427	0.451	
	24	〃	〃		〃	0.381	0.294	2.74	0.518	0.445	
戸口遺跡	25	須恵器	杯			0.430	0.122	3.60	0.541	0.274	
	26	〃	〃			0.455	0.083	2.59	0.649	0.300	
	27	〃	甕			0.398	0.164	3.02	0.443	0.324	
	28	〃	〃			0.469	0.250	1.92	0.608	0.527	
	29	〃	〃			0.403	0.240	3.85	0.473	0.411	
	30	〃	〃			0.401	0.258	2.79	0.517	0.484	
吉井水上II遺跡	31	須恵器	杯			0.404	0.114	2.83	0.545	0.312	
	32	〃	〃			0.408	0.165	3.53	0.453	0.358	

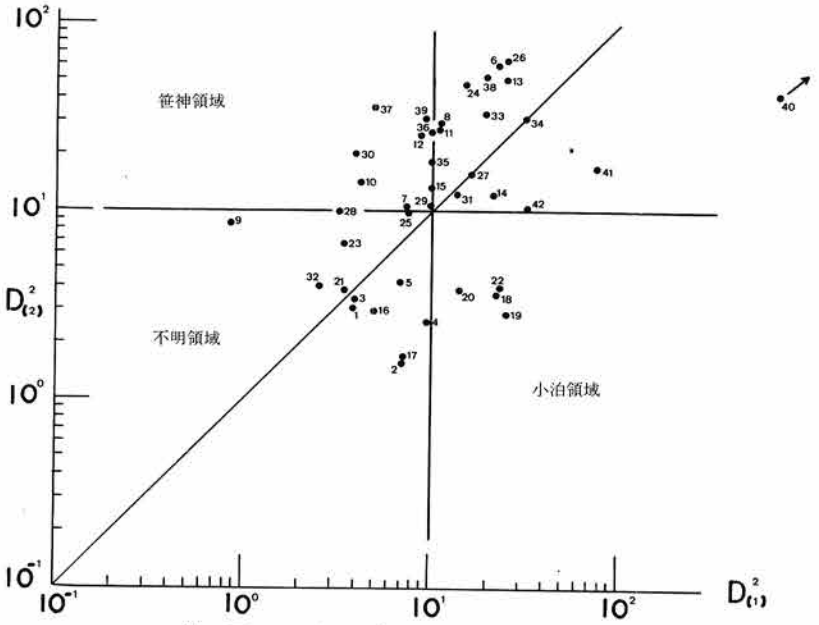
第13表　他の遺跡出土須恵器の産地推定

遺跡名	試料番号	$D^2_{(1)}$	$D^2_{(2)}$	判定
今池遺跡	1	4.2	13.6	笹神群
	2	3.7	4.3	地元産
	3	6.4	1.9	〃
	4	1.8	10.3	笹神群
	5	4.4	3.3	地元産
	6	13.4	2.8	小泊群
	7	9.9	8.5	地元産
半ノ木遺跡	8	16.1	3.5	小泊群
	9	2.8	4.1	地元産
	10	2.9	3.9	地元産
	11	10.6	9.4	小泊群
鶴巻田遺跡	12	7.8	2.9	地元産
	13	11.0	1.1	小泊群
	14	25.9	1.6	〃
	15	9.9	2.7	地元産
岩野下遺跡	16	4.9	3.1	地元産
	17	5.1	3.0	〃

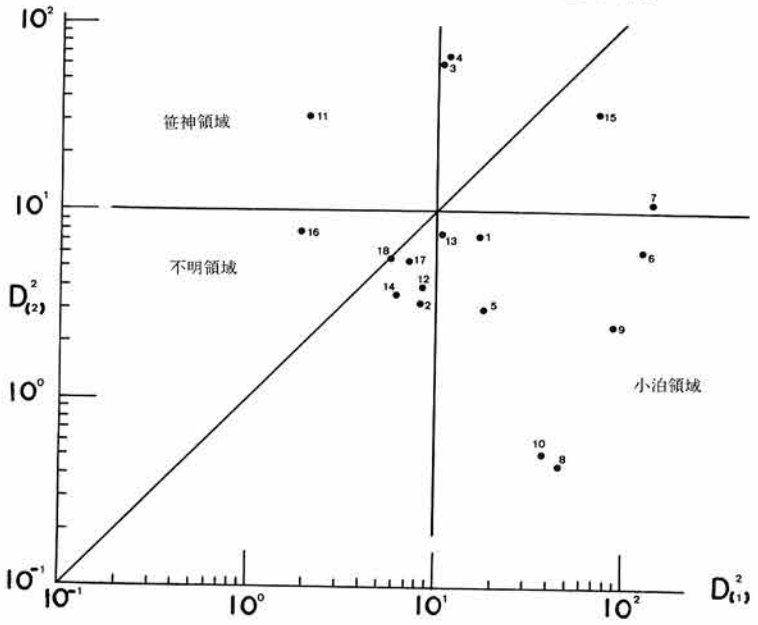
遺跡名	試料番号	$D^2_{(1)}$	$D^2_{(2)}$	判定
金屋遺跡	18	4.1	10.5	笹神群
	19	12.0	5.4	小泊群
	20	2.6	11.1	笹神群
	21	15.5	0.58	小泊群
	22	66.1	3.2	〃
	23	64.9	13.4	小泊群(?)
	24	95.2	11.4	〃
戸口遺跡	25	7.2	5.3	地元産
	26	7.0	13.0	笹神群
	27	13.9	2.7	小泊群
	28	27.8	4.6	〃
	29	41.3	3.1	〃
	30	40.4	1.4	〃
吉井水上II遺跡	31	3.7	4.0	地元産
	32	9.9	2.7	〃



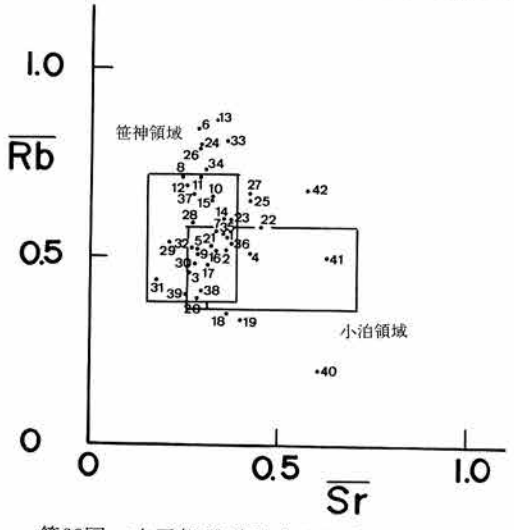
第59図　小泊群と笹神群の須恵器の相互識別



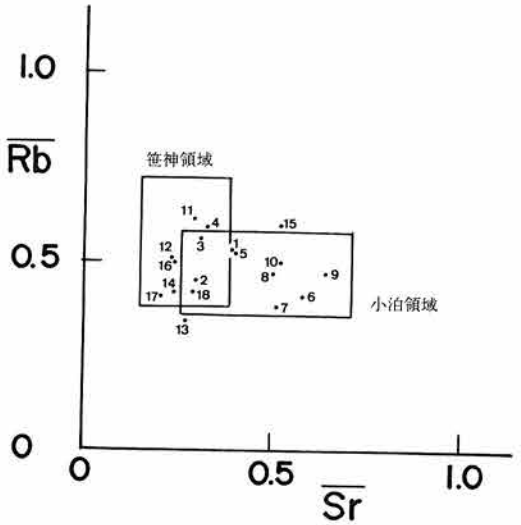
第60図　山三賀II 遺跡出土須恵器の産地推定



第61図　美山遺跡出土須恵器の産地推定



第62図　山三賀 II 遺跡出土須恵器Ｒb-Ｓr分布図



第63図　美山遺跡出土須恵器のＲb-Ｓr分布図

2　山三賀II遺跡出土鉄滓の金属学的調査

大　澤　正　己

概要

奈良・平安時代初頭（8・9世紀）に比定される山三賀II遺跡出土の鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

(1)　鉄滓は鍛冶炉の炉底に堆積した椀形状鍛冶滓が多い。遺構SI 840（住居跡）出土品は，鉄製品鍛造時に排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）と，鉄素材成分調整時の排出物である精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）が混在し，遺構SI 4（住居跡）出土品は鍛錬鍛冶滓である。両遺構ともに鍛冶工房が想定される。

(2)　鍛冶に供された鉄素材は，砂鉄系原料に由来し，笹神丘陵製鉄遺跡群出土製錬滓の成分系に属するものと推定される。

(3)　当遺跡より銅製の銙帯金具が出土しており，鍛冶工房は官人関与の可能性が考えられる。

A　いきさつ

山三賀II遺跡は，新潟県北蒲原郡聖篭町大字三賀・大夫（だいぶ）の砂丘地に所在し，縄文時代，古墳時代，古代にわたる複合遺跡である。この遺跡は，奈良・平安時代（西歴8・9世紀）の集落跡が主体をなし，竪穴式住居跡約90棟，掘立柱建物約27棟が検出され，このうち2軒の住居跡（SI 840・SI 4）から多量の鉄滓と焼粘土が出土した。また，数多くの金属器（鉄製の鍬，斧，刀子，釘，紡錘車）が存在し，鉄滓と鉄器製作の関係が注目される。

今度，新潟県教育委員会より鉄滓の調査依頼を要請されたので，鉄滓の鉱物組成と化学組成の調査結果にもとづき遺構の性格づけを行なった。

B　調査方法

供試材

第14表に調査に供した鉄滓の履歴を示す。SI 840（住居跡）出土品3点，SI 4（住居跡）2点である。2遺構の出土鉄滓のうち，代表する外観のものを選び出した。

調査項目

(1)　肉眼観察

(2)　顕微鏡組織

各鉄滓は水道水でよく洗滌後，中核部をベークライト樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の#150，#240，#320，#600，#1,000と順を追って研磨し，最後は被研面をダイヤモンドの3μ（ミクロン）と1μで仕上げて光学顕微鏡で組織観察を行なった。

(3)　化学組成

鉄滓の分析は次の方法をとっている。

重クロム酸使用の重量法……酸化第1鉄（FeO），二酸化珪素（SiO_2）。赤外吸収法……炭素（C），硫黄（S）。原子吸光法……全鉄分（Total Fe），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），バナジウム（V），銅（Cu）。中和滴定法

第14表　供試材の履歴と調査項目

符号	試　料	外　観	出　土　位　置	推定年代	試料大きさ		調　査　項　目		
					サイズ(mm)	重量(g)	外観写真	顕微鏡組織	化学組成
W-866	鍛錬鍛冶滓	椀形状	SI840(カマド？) 4層 86.10.27	奈良・平安時代(8・9世紀)	45×80×20	115	○	○	○
W-867	〃	含鉄鉄滓	SI840 4層 86.10.21	〃	30×40×25	35	○	○	○
W-868	精錬鍛冶滓	超小型椀形状	SI840 4層 86.10.21	〃	60×40×25	80	○	○	○
W-869	鍛錬鍛冶滓	椀形状	SI4 2層黒色土 85.11.21	〃	85×65×30	140	○	○	○
W-860	〃	椀形状	SI4 北東2層黒色土 85.11.6	〃	100×70×25	335	○	○	○

……五酸化燐（P_2O_5）。酸化第２鉄（Fe_2O_3）は計算式による。

C　調査結果

W-866　鍛錬鍛冶滓（SI 840出土）

①　肉眼観察

全体外観は小ぶりで鉄錆を発した椀形状鍛冶滓で，よく観るタイプである。すなわち，表皮は灰茶色地に赤褐色の鉄錆を発し，木炭痕を残す肌であるが，比較的凹凸は少ない。裏面は表皮と同色で滴下状反応痕を呈し，多くの木炭痕が認められ，局部的に鉄錆を発している。破面は黒色コークス状で鍛冶滓の特徴を示す。該品は鍛冶炉の炉底で堆積生成した滓である。赤熱鉄素材と鍛冶炉内貼り粘土の珪酸分が反応して形成されているので，鉄分の高い滓と予測される。

②　顕微鏡組織

Photo 1 の１段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）と灰色短柱状結晶のフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$），これに基地の暗黒色ガラス質スラグより構成される。鉄滓は鍛冶炉内で徐冷を受けているため，各結晶は大きく成長している。鍛錬鍛冶滓の晶癖を表わしている

③　化学組成

第15表に示す。鍛錬鍛冶滓は鉄分の多い鉄滓である。全鉄分（Total Fe）は55.4％あり，このうち酸化第１鉄（FeO）が51.4％，酸化第２鉄（Fe_2O_3）が22.08％の割合である。顕微鏡組織でヴスタイト（Wüstite：FeO）の晶出が多く認められたのは，この化学組成にも対応している。滓としての造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は20.42％と左程多くない。このうち，酸化カルシウム（CaO）が1.33％と高目が特徴的である。砂鉄系素材の指標となる二酸化チタン（TiO_2）とバナジウム（V）は低目で，前者が0.20％，後者が0.005％で鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）の傾向を示す。

随伴微量元素は，中間レベルで酸化マンガン（MnO）0.065％，酸化クロム（Cr_2O_3）0.006％，硫黄（S）0.039％，五酸化燐（P_2O_5）0.33％となる。銅（Cu）は高目で0.008％であった。以上の成分構成からも該滓は，鍛錬鍛冶滓に分類できる。

W-867　鍛錬鍛冶滓（SI 840出土）

①　肉眼観察

鉄酸化物の多い小鉄塊で，赤黒色鉄錆に覆われ，この鉄錆が砂粒をまぶす様に巻込んでいる。１個体が

第15表　新潟県下の鉄滓と砂鉄の科学組成

符号	遺跡名	市町別	出土位置	試料	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 (Total Fe)	TiO_2 (Total Fe)	注
W-866	山三賀II	聖籠町	SI840(カマド？)4層	鍛錬鍛冶滓	奈良・平安	55.4	51.4	22.08	14.80	3.68	1.33	0.61	0.065	0.20	0.006	0.039	0.33	0.36	0.005	0.008	20.42	0.369	0.004	1
7	〃	〃	SI840 4層	〃	〃	55.5	19.83	57.3	13.42	2.70	0.39	0.22	0.032	0.046	0.013	0.123	0.20	0.73	0.030	0.007	16.73	0.301	0.001	〃
8	〃	〃	〃	精錬鍛冶滓	〃	48.0	46.4	17.04	21.66	5.44	0.66	1.03	0.16	4.25	0.11	0.067	0.31	0.36	0.12	0.009	28.79	0.600	0.089	〃
9	〃	〃	SI4 2層黒色土	鍛錬鍛冶滓	〃	52.0	56.7	11.33	24.26	5.29	0.50	0.45	0.032	0.14	0.007	0.023	0.35	0.16	0.002	Nil	30.50	0.587	0.003	〃
0	〃	〃	SI4 北東2層黒色土	〃	〃	59.0	58.9	18.87	14.46	3.40	0.60	0.41	0.045	0.11	0.007	0.059	0.17	0.16	0.003	0.042	18.87	0.320	0.002	〃
TAKA-1	高沢入	吉川町	III D-18	鍛錬鍛冶滓	9C末頃	64.8	71.4	13.30	10.16	2.52	0.65	0.39	0.04	0.13	0.07	0.022	0.68	0.08	0.018	0.006	13.72	0.212	0.002	2
2	〃	〃	〃	〃	〃	54.1	56.6	14.46	19.22	3.96	1.58	0.96	0.09	0.20	0.04	0.054	0.51	0.04	0.074	0.005	25.72	0.475	0.004	〃
3	〃	〃	III F-17	〃	〃	54.3	51.9	19.98	17.16	5.79	0.85	0.78	0.04	0.62	0.03	0.029	0.26	0.14	0.021	0.005	24.58	0.453	0.011	〃
4	〃	〃	III F-24	精錬鍛冶滓	〃	55.6	57.9	15.19	12.54	5.23	0.79	1.41	0.14	3.66	0.08	0.017	0.29	0.16	0.24	0.005	19.97	0.359	0.066	〃
5	〃	〃	III G-11	砂鉄製錬滓	〃	35.6	28.9	18.76	28.8	7.02	1.21	1.97	0.28	6.35	0.05	0.056	0.47	0.40	0.25	0.005	39.00	1.096	0.178	〃
6	〃	〃	III F-24	〃	〃	41.8	28.2	28.4	19.68	5.32	1.04	1.84	0.28	6.72	0.07	0.036	0.43	0.31	0.28	0.006	27.88	0.667	0.161	〃
7	〃	〃	III G-11	鍛錬鍛冶滓	〃	61.1	59.2	21.27	9.90	2.77	0.66	0.58	0.04	0.23	0.04	0.032	0.23	0.22	0.029	0.006	13.91	0.228	0.004	〃
Z-851	番場	出雲崎町	A 9V層	精錬鍛冶滓	9C後半～10C頃	58.9	54.2	24.01	9.72	3.43	0.57	0.95	0.19	3.75	0.024	0.023	0.23	0.12	0.12	0.004	14.67	0.249	0.0637	3
2	〃	〃	B 5 (16～18)	ガラス質鉱物	〃	3.01	1.80	2.30	68.1	21.41	0.36	0.94	0.03	0.52	Nil	0.005	0.089	0.18	0.014	0.003	90.81	30.169	0.1728	〃
3	〃	〃	B 5 (21) V層下の砂	〃	〃	6.00	5.46	2.51	65.7	16.53	1.18	1.24	0.17	1.52	Nil	0.008	0.071	0.052	0.040	0.003	84.65	14.108	0.2533	〃
4	〃	〃	B 6 (21～25) V層	鍛錬鍛冶滓	〃	70.0	65.8	26.9	2.90	1.93	0.09	0.21	0.04	0.52	0.069	0.026	0.28	0.11	0.088	0.004	5.13	0.073	0.0074	〃
5	〃	〃	SK24	〃	〃	70.0	67.8	24.70	2.74	1.38	0.13	0.27	0.07	1.47	0.058	0.043	0.28	0.075	0.11	0.004	4.52	0.065	0.021	〃
6	〃	〃	〃	精錬鍛冶滓	〃	66.3	62.9	24.89	3.70	2.34	0.15	0.38	0.09	3.71	0.058	0.024	0.25	0.11	0.11	0.003	6.57	0.099	0.056	〃
7	〃	〃	SK60	砂鉄製錬滓	〃	26.0	28.60	5.39	23.08	10.30	1.75	4.15	0.97	21.68	0.037	0.015	0.20	0.37	0.24	0.004	39.28	1.511	0.834	〃
W-861	内越	西山町	トレンチSK26西	砂鉄製錬滓	平安時代	38.5	46.0	3.95	16.80	6.76	2.42	3.28	0.81	18.18	0.076	0.024	0.26	0.06	0.33	Nil	29.26	0.760	0.472	4
2	〃	〃	〃	〃	〃	33.5	41.2	2.14	21.30	7.75	3.26	3.68	0.81	16.18	0.035	0.026	0.21	0.04	0.16	Nil	35.99	1.074	0.483	〃
3	〃	〃	SK21	小鉄塊酸化物	〃	47.0	19.62	45.4	9.54	4.12	0.50	1.27	0.27	10.01	0.14	0.062	0.23	0.79	0.62	Nil	15.43	0.328	0.213	〃
4	〃	〃	〃	砂鉄製錬滓	〃	36.5	43.5	3.80	20.72	6.99	2.77	2.97	0.74	16.01	0.063	0.037	0.045	0.09	0.35	Nil	33.45	0.916	0.439	〃
5	〃	〃	〃	〃	〃	40.5	46.3	6.42	15.34	6.39	1.82	2.84	0.71	17.43	0.082	0.061	0.27	0.09	0.39	Nil	26.39	0.652	0.430	〃
Z-858	鶴巻田	柏崎	TD10-12-G-I-10	ガラス質鉱物	平安～中世	10.20	6.61	7.24	62.4	22.67	0.15	0.27	0.17	0.17	Nil	0.005	0.12	0.051	0.040	0.004	85.49	8.381	0.017	5
9	〃	〃	TD14-H-12	〃	〃	11.63	6.39	9.53	53.0	28.9	0.39	0.55	0.18	0.25	Nil	0.005	0.14	0.086	0.061	0.004	82.84	7.123	0.021	〃
0	〃	〃	TD-17-I-7	砂鉄製錬滓	〃	44.9	47.4	11.57	10.90	7.65	1.19	3.96	0.74	13.76	0.13	0.018	0.19	0.31	0.84	Nil	23.70	0.528	0.306	〃
4B-6	真木山	豊浦町	B地点	砂鉄製錬滓	平安初期	37.82	33.16	17.01	18.61	9.36	2.35	2.90	0.87	13.77	0.16	0.074	0.206	0.09	0.31	0.01	33.22	0.875	0.364	6
S-18	〃	〃	〃	〃	〃	20.6	8.0	20. 3	46.0	5.6	1.2	2.2	0.56	11.8	0.12	0.017	0.07	0.376	0.19	0.004	55.00	2.670	0.573	〃
19	〃	〃	C地点	〃	〃	34.7	24.8	21.7	20.0	5.1	1.4	2.9	0.88	17.6	0.14	0.021	0.16	0.213	0.43	0.004	29.4	0.847	0.507	〃
2I-821	馬場	相川町	B6 2層(No.64)	鍛錬鍛冶滓	8C	57.9	37.5	41.7	13.02	3.85	2.38	0.55	0.036	0.18	0.009	0.015	0.30	0.40	Nil	0.005	19.80	0.341	0.003	7
2	〃	〃	E6 2層	〃	〃	44.3	47.2	10.9	27.3	8.24	4.63	0.88	0.046	0.25	0.009	0.014	0.37	0.07	0.006	0.002	41.05	0.927	0.006	〃
1	〃	〃	遺跡内	砂鉄	自然堆積	27.3	5.17	33.3	33.5	10.96	3.62	2.44	0.36	3.40	0.064	0.016	0.61	0.27	0.10	0.005	—	—	0.125	〃
2	〃	〃	〃	〃	〃	29.6	5.60	36.2	29.9	9.60	3.69	2.34	0.40	4.10	0.076	0.015	0.60	0.19	0.12	0.002	—	—	0.139	〃
3	馬場周辺	〃	海岸 浜砂鉄	〃	現代	41.2	8.91	48.9	17.82	6.20	2.10	1.43	0.84	5.09	0.058	0.022	0.44	0.11	0.13	0.002	—	—	0.124	〃
4	〃	〃	石花川右岸	〃	〃	22.5	4.31	27.4	—	—	—	—	—	3.17	—	—	—	—	—	—	—	—	0.141	〃
5	〃	〃	〃 左岸	〃	〃	32.5	6.90	38.8	—	—	—	—	—	4.29	—	—	—	—	—	—	—	—	0.132	〃
Q-881	扇田	与板町	岩方たたら	砂鉄製錬滓	8C末～9C前半と9C後半	42.5	49.9	5.32	20.26	4.96	2.07	3.96	0.60	11.34	0.19	0.023	0.23	0.05	0.38	0.007	31.25	0.735	0.267	8
2	〃	〃	〃	〃	〃	45.7	50.4	9.31	16.50	4.49	1.20	3.08	0.62	10.74	0.11	0.040	0.17	0.06	0.27	0.003	25.27	0.553	0.235	〃
3	〃	〃	〃	〃	〃	48.2	48.0	15.61	11.12	4.29	1.23	2.53	0.42	12.62	0.68	0.049	0.20	0.08	1.02	0.008	19.17	0.398	0.262	〃
4	鍛冶池	〃		〃		26.18	14.66	21.14	20.98	8.90	2.07	2.39	0.62	19.26	0.16	0.13	0.019	1.49	0.47	0.004	34.34	1.312	0.736	〃

注1．大澤正己「山三賀II遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『山三賀II遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集)新潟県教育委員会1989.
2．大澤正己「高沢入遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『高沢入遺跡』(新潟県中頸城郡吉川町高沢入遺跡発掘調査報告)吉川町教育委員会1988.
3．大澤正己「出雲崎町番場遺跡出土鉄滓・炉材鉱物及び内越遺跡出土鉄滓・小鉄塊の金属学的調査」『三島郡出雲崎町番場遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集)新潟県教育委員会1987.
4．同上
5．大澤正己「鶴巻田遺跡出土の炉材付着鉱物および胎土と鉄滓の金属学的調査」『西田・鶴巻田遺跡群』(新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第27集)新潟県教育委員会1988.
6．大澤正己「真木山遺跡出土の鉄滓・鉄塊の調査」『真木山製鉄遺跡』(豊浦町文化財報告2)豊浦町教育委員会1981.
7．大澤正己「馬場遺跡出土の砂鉄・鉄滓調査」『馬場遺跡』(新潟県佐渡郡相川町北片辺馬場遺跡発掘調査報告)相川町教育委員会1983.
8．与板町史関連試料、後日坂井秀弥氏より報告予定。

35gの小型含鉄鉄滓である。

②　顕微鏡組織

鉄錆組織のゲーサイト（Goethite：α-FeO・OH）と，Photo 1の2段目に示す鉱物組成から構成される。顕微鏡組織写真の鉱物組成は微小白色結晶のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）とヴスタイト（Wüstite：FeO）が混在し，これに灰色盤状結晶となるフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が存在する。小型鉄滓でかつ急冷を受け，各結晶は成長する暇がなく，未発達で小さい。

③　化学組成

第15表に示す。全鉄分（Total Fe）は55.5%と，これも高目であるが，酸化第1鉄（FeO）は19.83%と低目で，酸化第2鉄（Fe_2O_3）は57.3%と逆に高い。これは金属鉄の酸化物を含有するためで，含鉄鉄滓といわれる所以である。更に造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）も低目で16.73%となり，鉄分に見合った含有量と考えられる。

次に二酸化チタン（TiO_2）は0.046%と極端に少ないのは，鉄滓本来の成分ではなく，鉄酸化物に由来するためである。しかし，バナジウム（V）は，0.030%とやや高目傾向を示している。なお，随伴微量元素のうち，硫黄（S）が0.123%と高目は，炉材粘土か木炭樹種の影響であろうか。色々と特異現象をもつ鉄滓であるが，大局的には鍛錬鍛冶滓に分類される。

W-868　精錬鍛冶滓（SI 840出土）

①　肉眼観察

表裏ともに赤黒色を呈し，表側は平坦で木炭痕を残すが，左程粗鬆さをもたない超小型椀形滓である。裏面は滴下状反応痕と木炭痕が認められる。破面は黒色光沢質で気泡は少なく，鍛冶滓タイプを示している。

②　顕微鏡組織

Photo 1の3段目に示す。鉱物組成は大型白色粒状ヴスタイト（Wüstite：FeO）に淡灰色析出物のチタン配化物を析出し，他に少量の多角形結晶のウルボスピネル（Ulvöspinel $2FeO \cdot TiO_2$）を混在させ，これらの粒間に灰色長柱状結晶のフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）を晶出させる。

前述した2種の鉄滓に比べて該滓は鉄－チタン酸化物を析出させて，組織の違いが認められる。製鉄炉で還元された小鉄塊を成分調整のため再加熱して排出された鉄滓で精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）に分類される。製錬→精錬→鍛錬の工程を経て排出される中間排出物である。

③　化学組成

第15表に示す。全鉄分（Total Fe）は若干低目で48.0%，酸化第1鉄（FeO）は46.4%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）は17.04%の割合である。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）も高目で28.79%を占める。二酸化チタン（TiO_2）は4.25 %と高く，かつバナジウム（V）も0.12%と多く，砂鉄製錬滓に近づく成分値である。顕微鏡組織で指摘したウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の存在は成分にも反映されて対応づけがとれる。

随伴微量元素も高目傾向で，酸化マンガン（MnO）0.16%，酸化クロム（Cr_2O_3）0.11%，硫黄（S）0.067%，五酸化燐（P_2O_5）0.31%，銅（Cu）0.009%である。全体の成分構成から精錬鍛冶滓に分類される。

SI 840住居跡は，鍛冶工房跡の可能性をもち，鍛冶作業としては，精錬鍛冶（大鍛冶），鍛錬鍛冶（小鍛冶）の2段工程の作業が操業されたと想定される。

W-869　鍛錬鍛冶滓（SI 4 出土）

表皮は黒褐色を呈し，凹凸激しく粗鬆な肌に木炭痕を多く残す。また，鉄分が多いために赤褐色の鉄錆が局所に発生している。裏面は青灰色炉材粘土と白色漆喰状物質が付着した状態で底部が形成され，これに滴下状反応痕と鉄錆が混じり合う。破面は赤褐色を呈し，多孔質で気泡を有し，鍛冶滓であることが判る。

② 顕微鏡組織

Photo 1の4段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）が多量に晶出し，粒間隙に灰色盤状結晶のフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が析出する鍛冶滓の特徴組織を示す。

③ 化学組成

第15表に示す。全鉄分（Total Fe）は52.0%と高目で，酸化第1鉄（FeO）が56.7%と酸化第2鉄（Fe_2O_3）は11.33%の割合である。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は高目で30.50%であるが，この主成分は二酸化珪素（SiO_2）の24.26%である。鉄滓底部に付着した漆喰状物質は，石灰質成分ではなかった。二酸化チタン（TiO_2）は0.14%，バナジウム（V）0.002%と低く，他の随伴微量元素も低目傾向にある。酸化マンガン（MnO）は0.032%，酸化クロム（Cr_2O_3）0.007%，硫黄（S）0.023%，五酸化燐（P_2O_5）0.35%，銅（Cu）はNilであった。該滓はSI 4遺構出土品であるが，前述したSI 840遺構出土鉄滓と構成成分に大きなひらきはない。

W-860　鍛錬鍛冶滓（SI 4出土）

① 肉眼観察

大型椀形滓で一部を欠損する。表皮は赤褐色を呈し，小波状肌に木炭痕を多く残す。裏面は灰褐色で炉材粘土を一部に付着し，わずかの滴下反応痕に木炭痕をとどめる。底部は突起はなく平坦状である。破面は黒色コークス状多孔質であるが比重は大きい。

② 顕微鏡組織

Photo 1の5段目に示す。鉱物組成は大きく成長し凝集したヴスタイト（Wüstite：FeO）で大部分が占められ，粒間にわずかのフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が析出する。鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）の典型的晶癖を示す。

③ 化学組成

第15表に示す。全鉄分（Total Fe）は今回調査試料で最も高く，59.0%含有され，酸化第1鉄（FeO）58.9%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）18.87%である。顕微鏡組織の巨大ヴスタイト（Wüstite：FeO）の量とよく対応がとれている。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は18.87%と低目であり，二酸化チタン（TiO_2）0.11%，バナジウム（V）0.003%とこれら砂鉄系成分を表わす代表値も少なく，鍛錬鍛冶滓の典型的傾向を示す。更に，随伴微量元素も低減されている。酸化マンガン（MnO）0.045%，酸化クロム（Cr_2O_3）0.007%，硫黄（S）0.059%，五酸化燐（P_2O_5）0.17%であるが，銅（Cu）のみは0.042%と突出して高目である。銅（Cu）は鉄中に固溶する成分である。該滓は高鉄分にしても，やはり高銅傾向は，やや異常である。今後の検討課題としておきたい。

D　まとめ

山三賀II遺跡の奈良・平安時代（8・9世紀）に比定されるSI 840，SI 4遺構から出土した鉄滓を調査して，同時期の鍛冶工房の存在が明らかになった。

出土鉄滓は砂鉄系鉄素材を原料として鉄器製作や鉄素材の成分調整を目的とした鍛冶作業で排出された

滓である。すなわち，前者が鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓），後者が精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）に分類できる。両者は鍛冶炉の炉底に堆積生成されるので椀形状を呈している。

鍛錬鍛冶滓の鉱物組成は，成長したヴスタイト（Wüstite：FeO）にフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）を晶出させ，化学組成は，全鉄分（Total Fe）が50%以上で二酸化チタン（TiO_2）１%以下，バナジウム（V）0.01%以下，これに加えて随伴微量元素らも低目傾向である。

これに対して精錬鍛冶滓は，夾雑成分（脈石成分）が若干高目となる。鉱物組成はヴスタイト結晶中に鉄ーチタン酸化物のウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）を析出させ，また，独立ウルボスピネルの結晶も少量ながら混在させる。化学成分は，全鉄分（Total Fe）が50%を割り，逆に造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は増加し，かつ二酸化チタン（TiO_2）は４%台，バナジウム（V）は0.1%台と高目となり，合せて他の随伴微量元素も高目となる。

山三賀Ⅱ遺跡出土鍛冶滓の成分系は，笹神丘陵に立地する製鉄遺跡群の製錬滓に近似するもので，特に真木山遺跡出土製錬滓の随伴微量元素と関係が深い。酸化マンガン（MnO），酸化クロム（Cr_2O_3），硫黄（S），銅（Cu）成分らが，その指標となる。また，酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO）も無視できない。

次に山三賀Ⅱ遺跡からは，官衙役人が身につけた銙帯金具が検出されており，鍛冶工房址は，官営操業の可能性も考えられる。同県内では，佐渡郡相川町所在の馬場遺跡において鍛冶工房址が想定されて帯飾り金具（銙板）が検出されている〔大澤1983〕。律令体制期には各地に官営色の濃厚な鍛冶工房址が散見されて[1)]〔大澤1983，1988〕，在地での鉄器調達の動向が伺われる。

（1988年12月３日）

1）大澤1983の186頁に帯飾り金具と鍛冶炉の共伴関係を５例挙げている。

第Ⅶ章　ま　と　め

1　古墳時代の土器と遺跡

A　土器の編年

古式土師器は奈良・平安時代の土器に比較すれば量的に少ないが，まとまって出土した竪穴住居が数棟ある。これらには須恵器は伴っておらず，他の遺構の包含層出土土器を含めても，須恵器は瑕(はそう)が1点あるのみである。しかしながら，おもな竪穴住居の古式土師器だけでも，明確な様相差を見い出すことができ，一定の時期幅が存在することが知られる。県内における古墳時代前期から中期にかけての資料は，かなり少ないうえに，遺構出土の資料がとくに少なかったため，当遺跡の資料の占める位置は大きいといえる。ここではまず当遺跡の土器の編年をおこなったうえで，その編年的位置を考えることにしたい。

1）　出土土器の編年（第64図）

11棟の竪穴住居のうち，土器が比較的まとまって出土したのは，SI 502A・SI 1480・SI 1168・SI 1124で，他にSI 70・SI 71・SI 115が次ぐ。しかし，SI 71・SI 115は奈良・平安時代の竪穴住居である。さきにあげた4棟の土器にも器種の偏りがあり，時期の比定を的確に判断できない面もあるが，これらの資料を基本にすると，古墳Ⅰ期（SI 502A），古墳Ⅱ期（SI 1168），古墳Ⅲ期（SI 1124）の三時期に分けることができる。

古墳Ⅰ期　SI 502A出土土器は，小型壺や小型鉢の小型土器，高杯などの器種がきわめて豊富であり，調整のよい精製品が主体であることに特徴がある。小型壺のA（15）・B_1（17）・B_2（16）・E（19），小型鉢A（20），高杯A（24），台付鉢（21）はいずれも器壁がとくに薄く，つくりがよく，ていねいにヘラミガキされる。赤彩されるものは小型壺Eのみであるが，高杯Aのヘラミガキは暗文風で，赤色系の色調とあいまって，目立つ存在である。このほかにも小型壺B_2（16）・台付鉢（21）・高杯C（25～27）は赤色系の色調で，相対的に他の土器群よりも赤色系の土器がめだつ。小型器台は脚部に円孔をもつAで，小型土器ほどていねいではないが，ヘラミガキされる。甕は口縁部のつくりに，A（つまみあげ面取り），B（面取り），C（丸い）の3種がある。Aのつまみあげは顕著でないものがある。体部はA・B・Cともほぼ球形であるが，底部を残すものは完全な丸底ではなく，若干の平底をとどめる。

古墳Ⅱ期　SI 1168出土土器はSI 502A土器にみられた豊富な小型土器がほとんどなく，調整も粗いものが中心である。小型壺を欠くことは器種の偏りのためと考えられるが，SI 502A土器より新しい様相がいくつかの点で指摘できる。まず，小型器台（46・47）は脚部に円形透かしをもたないBで，調整は粗いヘラミガキであり，精製品というにふさわしいものではない。壺も同様で，壺D（42）はさほど調整は悪くないが，二重口縁のC_2（43）は二重口縁が全く形骸化しており，調整も外面に接合痕を残すなど，かなり粗い。高杯では脚部が細いA形態のほかに太いB形態が存在する。赤色系の土器も壺D（42）以外はない。甕は個体数は少ないが，Bの51・52は小型で体部が長く，つくりは粗雑である。また，Aは小破片があるのみであり，明確でない。

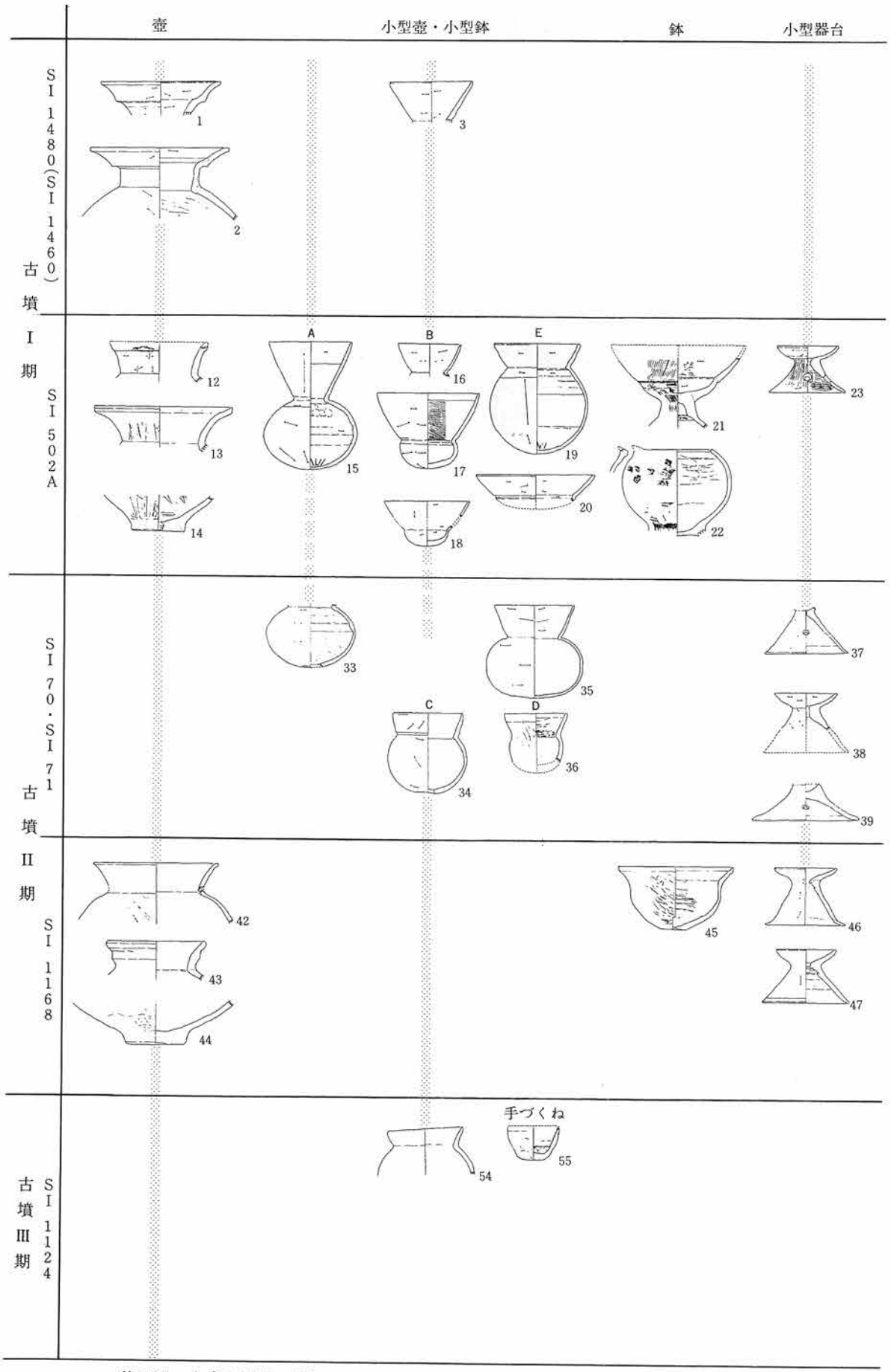
古墳Ⅲ期　SI 1124出土土器はSI 1168出土土器よりさらに新しい様相がみられる。まず小型土器としてもっとも普遍的な小型器台がみられない。小型壺はやや大型のC (54) があるが，まったくヘラミガキがなされず，調整の粗雑化は著しい。また，高杯はBが明確になり，これが主体を占めている。これらの器壁は相対的に厚く，ヘラミガキがなされてはいるものの，ハケ目をとどめたり，器面に凹凸を残したりしており，調整はよくない。全体のつくりのシャープさはどの器種にもみられない。小型土器としては手づくね土器が存在することが注目される。甕は1点しかなく全体の様相は不明であるが，D (61) は口縁部が短く，A・B・Cとは大きくちがうともいえる。

これらの他にSI 1480出土土器がある。当土器群は甕が多いが，他の器種，とくに小型壺が少なく，様相はいまひとつ明確ではない。しかし，口縁が大きく外反したつくりのよい二重口縁壺の壺A (2) からみて，SI 1168のII期には下らず，I期に比定されることがわかる。I期とすると甕のなかにAがB・Cより多いことが注目される。Aは越後を含めた北陸東北部（能登・越中・佐渡）における，弥生時代から古墳時代にかけての在地系のものであり，A・B・Cのなかでは相対的に古い手法である。したがって，Aが主体ではないSI 502A土器よりもやや古いことも考えられる。6・7のように顕著につまみあげるものはSI 502Aにはみられない。また，10などの体部の形態は球形よりやや長くなるようであり，若干の古さを看取できる。以上の点からI期の古い段階としたい。体部が長い形態はSI 595の甕（図版54-133）に典型的にみられる。これは底部が比較的広い平底であり，体部下半はSI 502Aの28と比較すれば，明瞭に両者の差を指摘できる。したがって，SI 595例は相対的に古いことが考えられる。SI 1480よりも古い可能性があるが，1個体のみの出土であり，時期ははっきりしない。

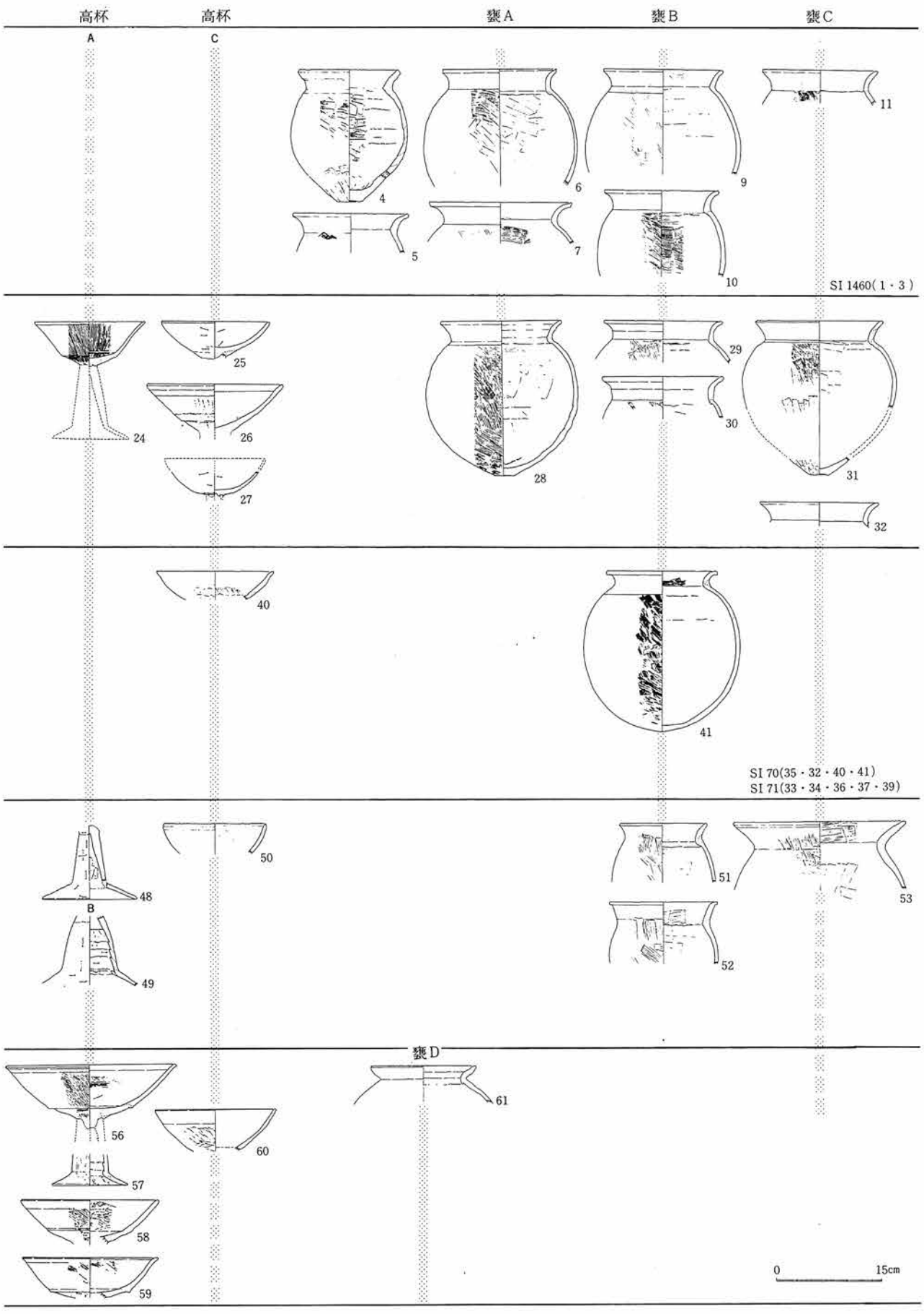
SI 1168のほかにII期と考えられるものに，SI 70・SI 71出土土器がある。SI 70の小型壺E (35) は器壁がごく薄く，つくりもよく，I期にさかのぼる可能性も考えられるが，形態はI期よりも新しいと思われる。また高杯 (40) は調整が粗く，I期よりは新しいと考えられ，甕B (41) は体部が球形で底部が丸底であり，SI 502A (28) より後出的要素がうかがえる。SI 71は奈良・平安時代の竪穴住居であるが，古式土師器が比較的まとまっていることと，底部穿孔の小型壺が2個体含まれていることが注目される。一括性に疑問が残るが，小型壺Cや小型壺Dは調整のよい小型壺Bの系譜下にあるかどうかはともかく，I期にはない器種と考えられ，II期に包括しておきたい。ただし，SI 70・SI 71はともに，小型壺・小型器台を比較すると，SI 1168よりは古い様相をとどめており，II期の古い段階と考えられる。

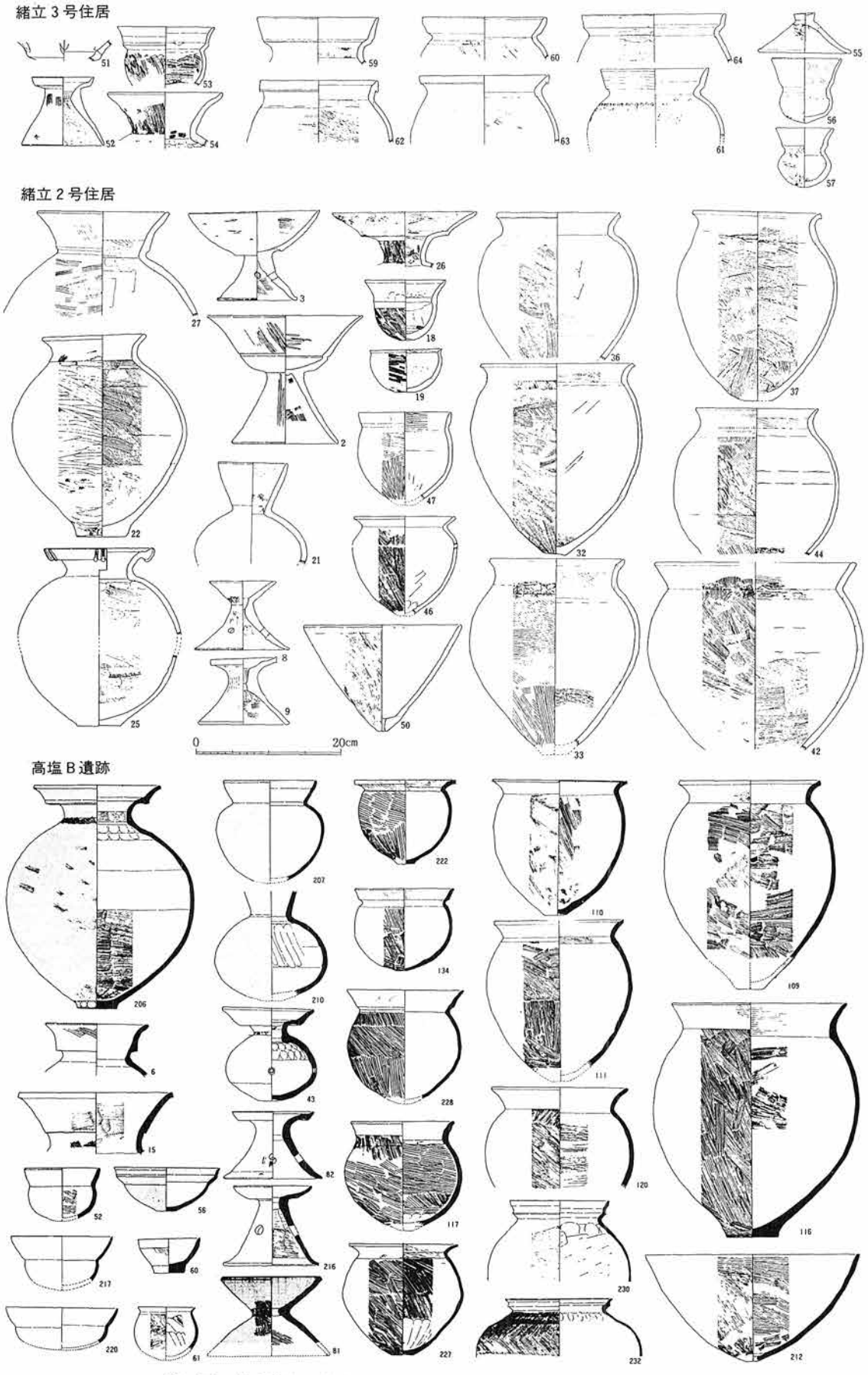
2）編年的位置

ここで設定した古墳I～Ⅲ期の段階は，大局的にみれば，I・II期とⅢ期の間に大きな画期がある。それは小型壺・小型器台という古墳時代前期の土器様式を代表する器種の存否，および赤彩や調整にみる精製品の消長からうかがうことができる。したがって土器様式は，I・II期は古墳時代前期，Ⅲ期は中期ということが可能である。従来，越後における古墳時代前期の土器は西山町高塩B遺跡〔金子・坂井1983〕の資料（第65図）を代表に考えてきた〔坂井ほか1983〕。この資料は遺構に伴った土器ではなく，一定の年代幅を考慮しなければならないものであり，実際に土器型式にも幅がみられる。しかし，これより相対的に古相を呈する緒立遺跡2号住居跡出土土器〔坂井1983d〕（第65図）と比較すると，小型器台は両者にみられるが，高塩Bには畿内系の小型丸底壺（ここでいう「小型壺B」）が存在するという点に大きな差異が見い出せる。また，高塩Bに甕の体部の形態が短胴（球胴）傾向にあるものがかなり含まれることが注目される。したがって，緒立2号住と高塩Bとを比較すれば，一部に重複する時期があるとしても，大局的には「緒立2号住」



第64図　古式土師器の編年


高杯
高杯
甕A
甕B
甕C
A
C
4
5
6
7
9
10
11
SI 1460(1・3)
24
25
26
27
28
29
30
31
32
40
41
SI 70(35・32・40・41)
SI 71(33・34・36・37・39)
48
B
49
50
51
52
53
甕D
56
57
58
59
60
61
0
15cm



第65図　緒立遺跡・高塩Ｂ遺跡の出土土器　〔坂井1983ｄ、金子・坂井1983原図〕（番号は報告書に同じ）

から「高塩Ｂ」への変遷をとらえることができる。高塩Ｂは畿内系の小型丸底壺の成立と甕体部の球胴化に着目するならば，畿内布留式に一部併行すると考えてよかろう。

次に，高塩Ｂと本遺跡を比較すると，高塩Ｂがもっとも古い古墳Ｉ期よりも相対的に古いことがわかる。すなわち，高塩Ｂは，①全体に赤彩品が多い。②小型丸底壺は口縁部の発達が著しいもの（小型壺B_1）がない。③小型器台は受部が有段となるものが多い。④甕の口縁部形態に二重口縁（有段）のものが存在し，端部はつまみあげのＡが多い。⑤甕の体部形態は一部の小型品をのぞいて，球形になるものはごく少ない。⑥甕Ａにおいても器壁が相対的に厚い。

本遺跡の古墳Ｉ期は小型壺Ｂからみて，畿内布留式の中段階に比定できると考えられ，高塩Ｂはその前の布留式古段階に中心をおくと推測される。北陸の加賀地方の漆町編年〔田嶋1986〕と対比すれば，古墳Ｉ期は９群土器にほぼ対比されよう。一方，中期の古墳Ⅲ期は小型器台がなく，食膳具である杯が出現していないことから，漆町12群土器におおよそ対比されよう。したがって，Ⅱ期は10・11群にほぼあたるものと考えられる。以上を整理すると，第16表のとおりである。

第16表　古式土師器の編年的位置

山三賀（時期）			古墳Ｉ	古墳Ⅱ	古墳Ⅲ
山三賀（遺構）			(SI 1480)・SI 502A	(SI 70, SI 71)・SI 1168	SI 1124
緒　立〔坂井1983〕	3号住	2号住			
高塩Ｂ〔金子・坂井1983〕	高塩Ｂ				
漆　町〔田嶋1986〕	5・6群	(7・8群)	9群	10・11群	12群
畿　内	庄内（新）	布留（古）	布　留（中）	布　留（新）	

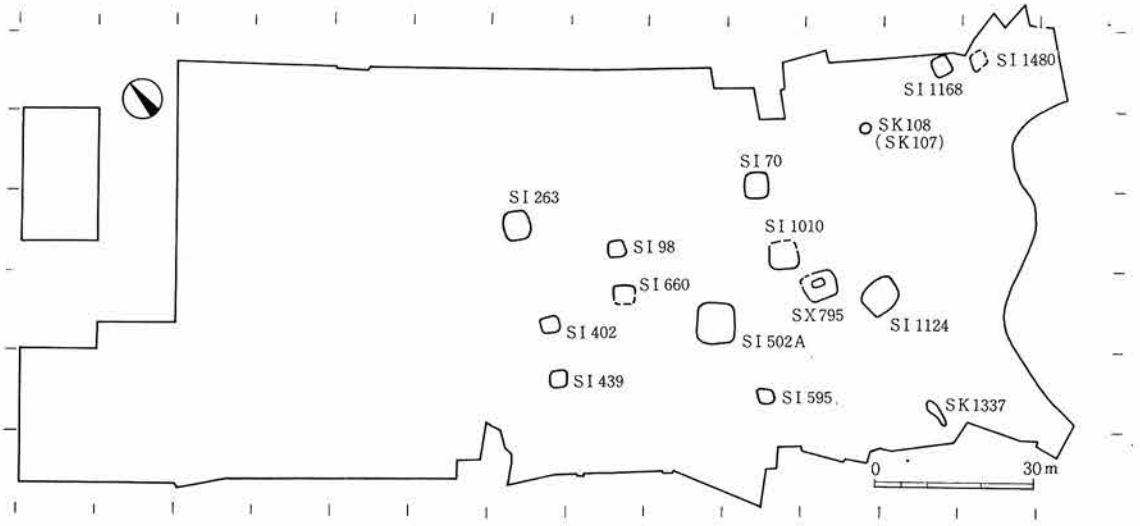
Ｂ　遺構と遺跡

1）遺　　構

検出された古墳時代の遺構は，竪穴住居12棟のほか，方形周溝遺構１基，土坑数基である。これらの遺構は調査区の中央から南東側に分布し，互いに重複することはない。しかし，奈良・平安時代の竪穴住居が多く重複するため，これらによって切られているものが多い。

遺構の時期　竪穴住居の出土土器はかならずしも多くはなく，住居の時期は明確でないものも多い。出土土器の多いSI 502Ａ・SI 1480・SI 1168・SI 1124以外の住居のおおよその時期は，SI 1010・SI 660・SI 595・SX795・SK108・SK1337が古墳Ｉ期，SI 263・SI 402・SI 439・SI 70が古墳Ⅱ期と推定される。古墳Ⅲ期の遺構はSI 1124の１基のみである。SI 98は不明である。古墳Ｉ・Ⅱ期ともある程度の時間幅が考えられるため，それぞれの時期の遺構がすべて同時に存在したとは限らない。少なくともＩ・Ⅱ期は前後二時期に分れると推定されることから，一時期には１～３棟の住居が存在したと考えられる。Ｉ期とⅡ期の竪穴住居はそれぞれ調査区中央にまとまる傾向はあるが，この他に調査区東側にも分布する。この二つのまとまりがそれぞれ「竪穴グループ」や「単位集団」と称されるものに相当するかどうかは，詳細な時期の検討を経なければ確定できない。また，調査区外にも同時期の遺構が分布することを考慮する必要もある。

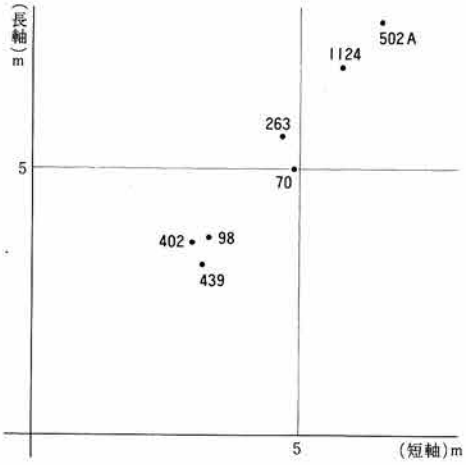
竪穴住居の他に土坑や方形周溝遺構が存在する。土坑のうちSK1337は長さ約７ｍ，幅１～２ｍ，深さ



第66図　古墳時代の遺構分布図

50～60cmの溝状の形態で，一般的な土坑とは性格がことなるものと推定される。また，方形周溝遺構（SX 795）についても，性格は明らかではない。

竪穴住居　検出された12棟の住居のうちで，ほぼ全体の形状を把握できるのは，半分ほどの７棟のみである。古墳時代の竪穴住居は奈良・平安時代のものとことなり，カマドをもっていない。第67図はこれらの住居の軸長分布図である。面積はほぼ大・中・小の３つに分かれる。大型のSI 1124・SI 502Aは約40m²，中型のSI 70・SI 263は約25m²，小型のSI 98・SI 402・SI 439は10～12m²である。平面形はほぼ正方形にちかいもので，奈良・平安時代のように明確に長方形を呈するものはない。また，奈良・平安時代のものに比して，直線的な輪郭ではなく，四辺が外側にふくらみ隅丸方形の形状をとる特徴がある。一辺の長さは大きいもので約７m，小さいもので約3.5mである。最大規模のSI 502Aからは住居に伴うと考えられる土器が多く出土しているが，とくに器種が豊富で，小型品を中心とした精製土器が多いことが注目される。こうした土器構成は住居の大きさを勘案すると，居住者の階層や性格と密接に関連したものと考えられる。



第67図　古墳時代の竪穴住居軸長分布図

またSI 1124出土土器は高杯が多い器種構成であり，この点も居住者と関連するのではないかと考えられる。一辺3.5～７mという大きさの幅は約90棟存在する奈良・平安時代の住居跡とほとんど同じものであり，規模の格差や一棟あたりの居住者数は両者の時代でほとんど差がなかったものと考えられる。柱穴は最大規模のSI 502Aのみに存在するが，他にはみられない。SI 502Aの柱は中央に４本配されるもので，柱穴は径50～70cmもある。ほぼ正方形に位置するこれらの柱穴以外には柱穴は存在しない。周溝はSI 1124にそれらしきものが存在するが，他では明確ではない。奈良・平安時代の住居も柱穴と周溝をもたない例が多い。周溝はともかく，柱穴がないことは，基本的な住居の構造・構築方法を考えるうえで，大きな問題であるが，柱のない上屋構造は考えられないことから，穴を掘らず柱を立てたと推測される。

2） 遺跡をめぐる問題

本遺跡出土の古式土師器は畿内における布留式土器盛期の影響下にあることが容易によみとることができ，当地域まで大和政権を背景にした古墳文化の圏内にあったことが確認される。阿賀野川以北の阿賀北地方における古墳時代の評価は，従来この地域に明確な古墳が確認されていないこともあって，古墳文化の浸透は強く考えられていなかった。それは7世紀中葉に中央政府により城柵（淳足・磐舟）が設定されていることからも類推されることでもあった。前述のとおり（17頁），磐舟石廓堡は7世紀代の古墳と考えられるが，それ以前の古墳は阿賀野川以南の蒲原地方には多く確認されてはいるものの，阿賀北地方では明確ではない。しかしながら，本遺跡の土器からみて，畿内との関係による古墳文化は阿賀野川という「境界」で明瞭にとどまっていたのではなく，その北側にも及んでいたことが判明した。このことは豊栄市内の上黒山遺跡（畿内系二重口縁壺出土）などの存在からも肯定される。

近年，蒲原地方においては古墳の発見が相次いでいる（15頁）。とりわけ丘陵尾根上に立地する条件などから，前期と推定される古墳が多い（第1図）。現在この地方は越後で前期古墳がもっとも集中する地域として注目される。こうした古墳の分布をみるとき，初期大和政権と蒲原地方の交流ルートは日本海沿岸から信濃川と阿賀野川の河口を経由したものと想定される。当時の信濃川と阿賀野川は現在のように固定した一本の河道ではなかったと考えられ，これと沖積地内の広大な内水面により，河口からは阿賀野川以南の蒲原地方ばかりでなく，北側の地域にも容易に到達することができたと思われる。本遺跡の立地は水田耕作を基盤におく農業生産には必ずしも適してはおらず（227頁），在地の農業集団が自発的に集落を営むことは想定しにくい。また，SI 502Aを代表とした土器組成は畿内の影響を強く受けており，直接的ではないにしろ大和政権とのなんらかの関連で集落が成立したことも十分推測される[1)]。土器の様相からみれば，阿賀北地方のこの周辺に，前期から中期にかけての古墳が存在する可能性はいまだ残されているといえよう。いずれにしろ当時の古墳文化圏は明確に阿賀野川によって区切られるのではなく，内水面を通じて北側にも広く及んでいたと考えるべきであろう。

現在確認されている蒲原地方の古墳は発掘されたものが少なく，詳細な時期はよくわからない。しかし，発掘資料からみる限り，前期古墳と木棺直葬の群集墳を中心とする古墳の間には時期の断絶が認められる[2)]。古墳が大和政権との何らかの関係によって造営されるとすれば，中期の段階に一時大和政権とのつながりが薄くなることも考慮される。本遺跡の古墳時代の集落は出土土器からみると，中期中葉には衰退するが，このような古墳のあり方と当集落の消長が関連する可能性もあろう。少なくとも蒲原地方の古墳の造営勢力と本遺跡の居住者は，同一の文化圏内にあったことは認められ，中期段階における在地の動向が注目されるところである。今後の調査により，蒲原地方と阿賀北地方における古墳時代の状況が明確になることを期待したい。

1） 信濃川と阿賀野川の下流域は，阿賀野川を遡上して会津へ至るルートと日本海沿岸から東北地方へ至るルートの起点にあたる。このような地理的な条件は大和政権にとって重要な側面をもっていたと考えられ，前期古墳が多いこととの関連が注目される。

2） たとえば三条市三王山古墳群は，17基のうち5基が調査されているが〔荒木1987など〕，初期から前期の1号墳（前方後円墳）・4号墳（前方後方墳）・11号墳（造り出し付円墳）と，5世紀末葉から6世紀前半の5号墳・12号墳とは時期的に連続しない。

2　奈良・平安時代の土器

A　出土土器の編年

1）　は　じ　め　に

奈良・平安時代の土器は約90棟の竪穴住居を中心に多量に出土した。土器は須恵器・土師器で，時期はおおよそ8・9世紀のものである。これらのおもな土器についてはすでに述べてきたところである（第Ⅴ章3A・B）が，ここでは土器の編年について概観しておきたい。

土器の編年の基準となる資料は豊富な竪穴住居出土土器であり，これをもとに変遷をみることにしたい。ところで，集落という消費の場における土器のあり方は，生産地のように一様ではない。いうまでもなく，土器は製作されて集落にもたらされ，そこで使用される。そして破損や消耗，あるいは他の何らかの理由により，廃棄されたり，埋置されたりする。土器を使用する場は煮炊・食膳などの機能・用途に応じて複数存在し，ひとつの場にあってはいくつかの土器が組み合わされて使用される。廃棄され，埋置される遺構内の土器のあり方には，使用される状況をある程度反映して存在すると想定される。しかし，使用される状況をほとんど反映しないものも当然のこととして含まれる。ひとつの遺構から出土する土器であっても製作年代にある程度の時期幅が存在することはいうまでもないが，かなり時期が隔たるものが存在することも，また考慮しなければならない。

竪穴住居は居住用の施設であり，そこから出土する土器の内容は一般的な土坑とはことなる面をもっている。それは出土する土器が一時期に廃棄されたものではなく，住居の，①構築，②使用，③廃棄後という三段階に伴うものであることである。そのため，ひとつの竪穴住居の出土土器にも一定の時期幅が想定される。出土状況からそれぞれの段階にともなう土器を考えると，①構築時は，カマドに芯材として使用された土器，②使用時（廃棄時）は，床面直上・カマド付近の土器，③廃棄後は，埋土の中層・上層出土の土器である。①のカマドの芯として使用される土器はすでに煮炊具として使用されたものであり，この土器が製作された時期は竪穴が構築された時期よりも古い。実際にひとつの竪穴住居出土土器のなかで，①の土器が相対的に古い様相を示すことは一般的である。

竪穴住居の使用期間についてはこれまで明確に算出されたことはあまりないが，当遺跡の土器からみれば20～25年程度と考えられる。[1)]

一方，埋土内の土器の時期幅であるが，これは掘り込みの埋没の時期幅に対応するものであり，当然個々の遺構でことなることが予想される。もっとも典型的な例であるSI 1124は，古墳時代中期初頭の竪穴住居でありながら，埋土上層では奈良・平安時代の土器が主体的である。奈良・平安時代の竪穴住居にしても明確に時期差を指摘できる例もあり，すべての埋土出土土器を一括資料としてとらえることは無理である。

以上のことをあらかじめ念頭に置いて，土器編年を考えることにする。

2）　変遷の画期（第68～70図）

土器の年代は他地域の資料と対比してみて，8・9世紀にほぼ相当する。住居出土土器のあり方は一様で

1）　上田〔1987〕は相模地方の土器の検討により，20～30年とする。

はなく，時期により変化していることがわかる。それは器種構成や土師器の製作技法，須恵器・土師器の胎土などの変化にあらわれている。土器の，①器種分類，②製作技法，③胎土（生産地），については前述した（第Ⅴ章3A）が，あらためて②と③について簡単にまとめると以下のとおりである。

土師器の製作技法

・A系（非ロクロ）
- 1類：ヨコナデが弱い（回転台不使用）。
- 2類：ヨコナデが強い（回転台使用）。

・B系（ロクロ丸底）
- 1類：つくりシャープでない。
- 2類：つくりシャープ。

・C系（ロクロ平底）

須恵器の胎土・産地

・A群（阿賀北地方）　：　主体は笹神・真木山窯。在地窯。

・B群（佐渡小泊窯跡群）　：　非在地窯。

・C群（A・B群以外）　：　主体は新津丘陵の窯跡群で，それ以外も含む。

土師器の胎土

・非ロクロ系　：　非ロクロ土師器に特有なもの。

・須恵器系　：　ロクロ土師器のうちの大半。須恵器のA群・C群に対応するものがある。

・非須恵器系　：　ロクロ土師器のうちの一部の新しいもの。

これら，技法・胎土に加えて，器種構成の変化に注目すると，次の4つの段階に分けることができる。

第Ⅰ期：土師器は非ロクロのA系が主体で，須恵器の数量が相対的に少ない段階。

第Ⅱ期：土師器は非ロクロがほとんどなくなり，ロクロ土師器のB・C系が主体を占め，須恵器の数量が増加する段階。土師器B・C系の2者ではC系が主体か，もしくは目立つ。

第Ⅲ期：土師器がほとんどB系に統一される。須恵器は口径14～15cmの大型食膳具（有台杯AⅠ・無台杯Ⅰ）が消滅し，深身の有台杯B，小型の有台杯（有台杯C・有台杯AⅢ）が定着する。また，折縁杯が出現する。

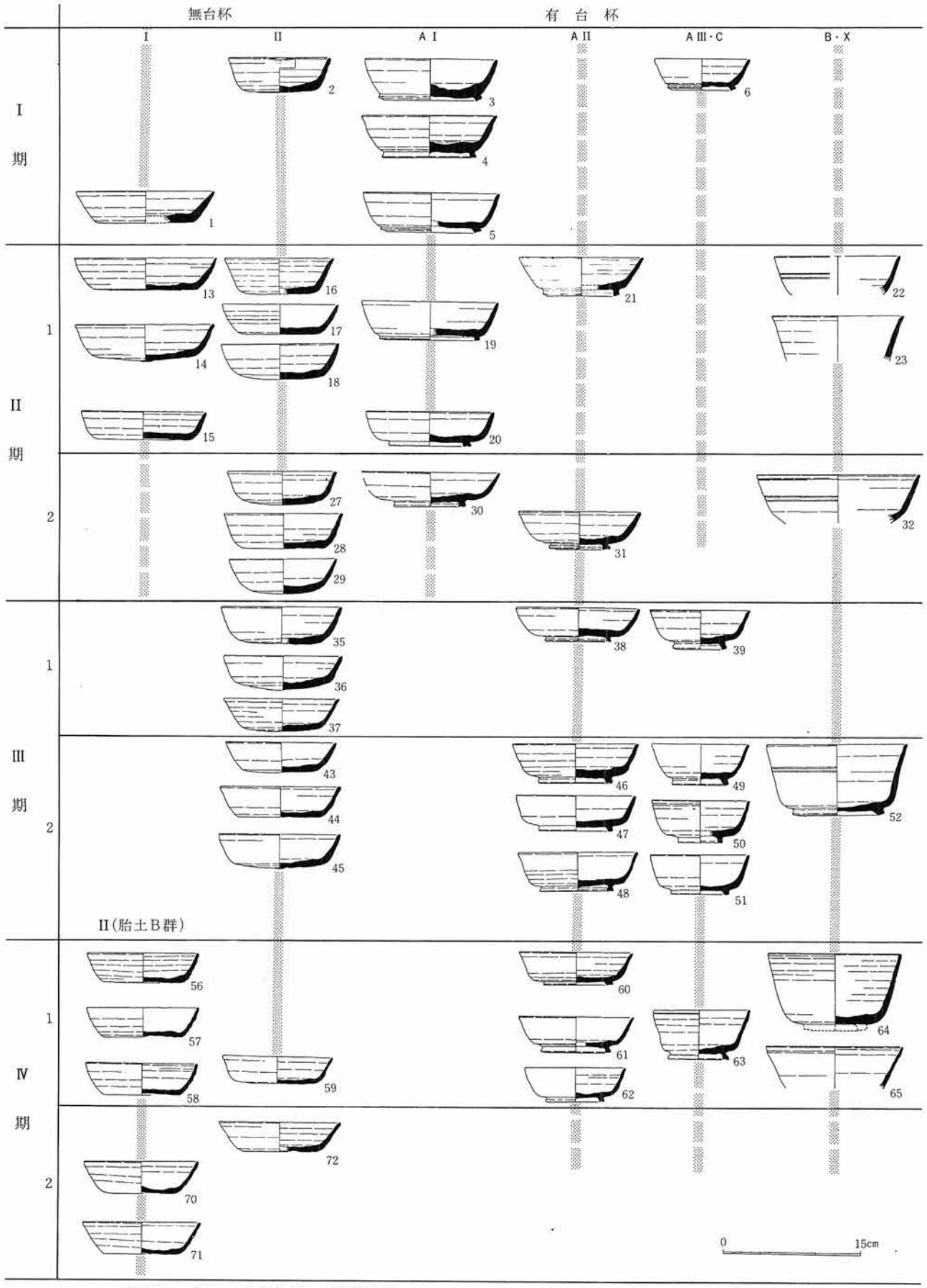
第Ⅳ期：須恵器に佐渡小泊窯のB群が一定量占めるようになる段階。この時期に土師器は非須恵器系胎土の煮炊具が出現し，食膳具も少量ながら存在する。

第Ⅰ期

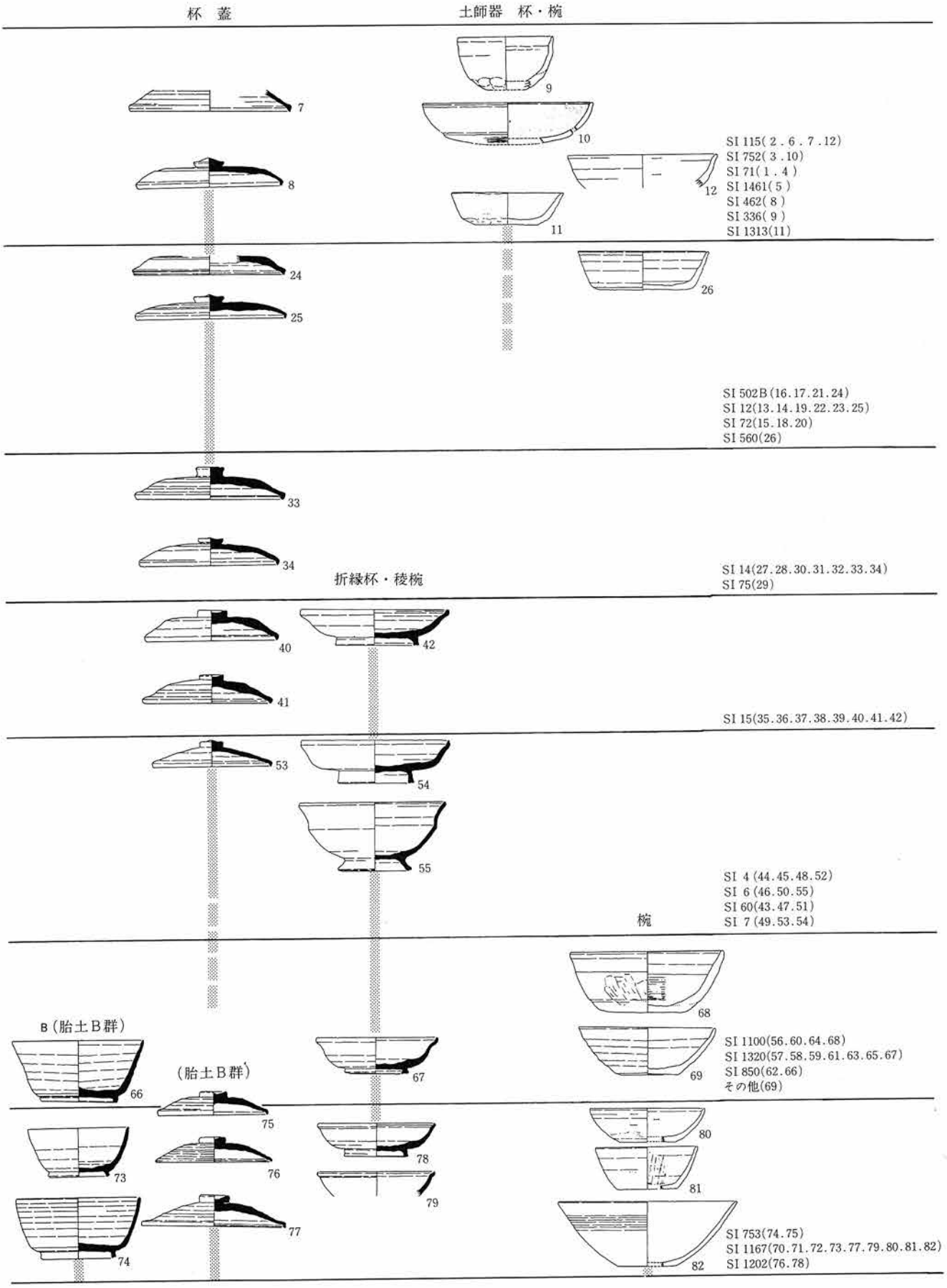
土師器は非ロクロのA系が主体で，須恵器の数量が相対的に少ない段階である。SI 5・SI 115・SI 752・SI 336・SI 462・SI 741を標式とする。

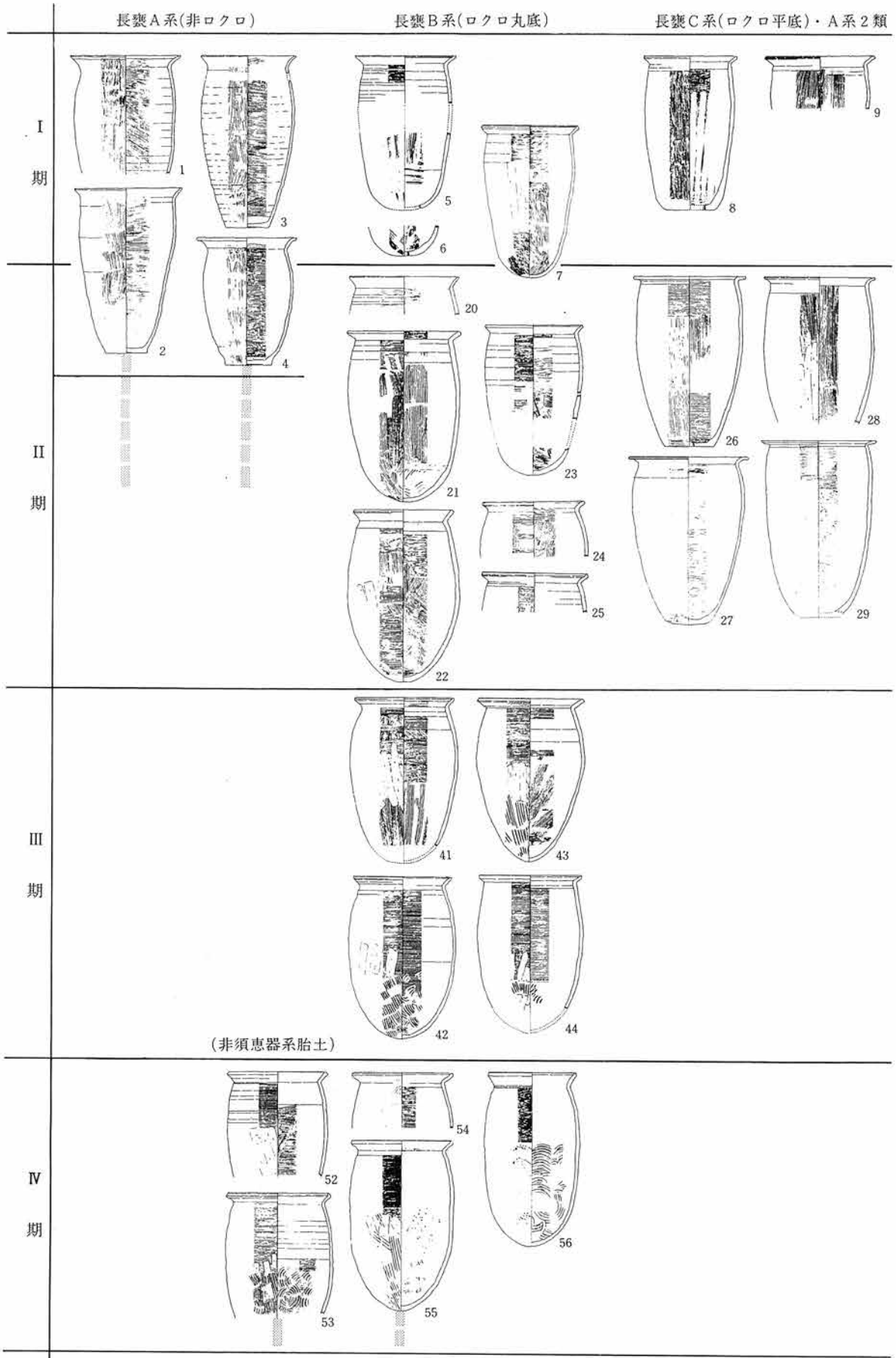
土師器　煮炊具（長甕・小甕・鍋など）のうち，非ロクロのA系がすべて占めるものはないが，全体のうち，多くても50%（SI 5・SI 71）であり，少ないものは20%以下である（SI 115・SI 752）。次のⅡ期でも古いSI 502Bは64%である。器種別にみると，大型である長甕は小甕に比して，非ロクロの割合が高いようである。

ロクロ土師器にはB系とC系があるが，C系はあまり明確ではない。とくに両者の区別がしやすい長甕においてはC系はほとんどみられない。B系はつくりがシャープではない1類ばかりである。口縁部内面に凹線様のくぼみをもつもの（5ほかにSI 336—54・55など）がある。1点だけ底部にタタキ目とあて具痕を残すもの（6）があり，底部の「タタキ出し丸底」の技法の存在が確認される。しかし，全体にハケ目調整のものが主体である。非ロクロのA系の多くは1類であるが，少数ながらヨコナデの強い2類が存在する

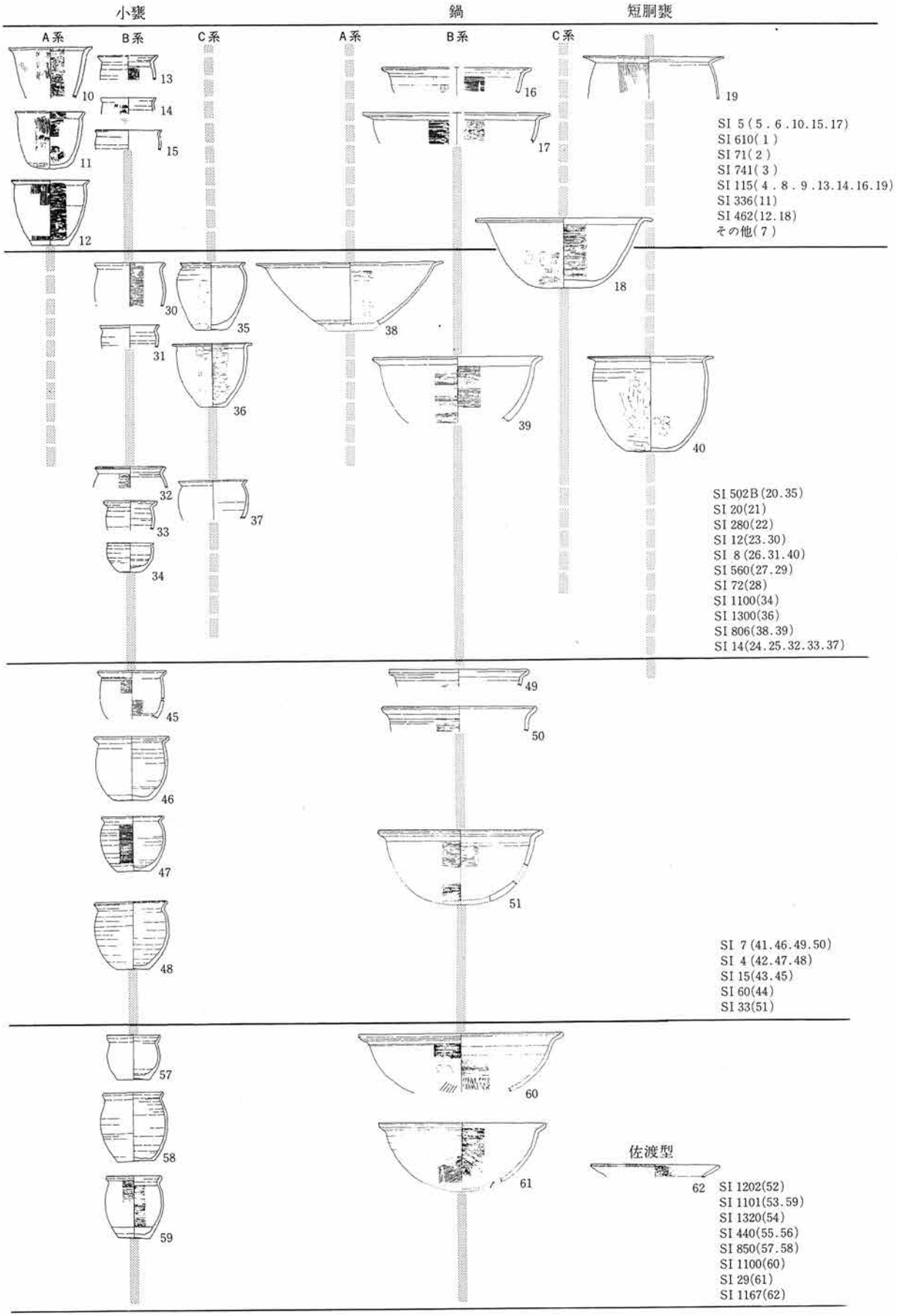


第68図　奈良・平安時代の土器編年(1)


杯 蓋
土師器 杯・椀
7
8
9
10
11
12
SI 115(2.6.7.12)
SI 752(3.10)
SI 71(1.4)
SI 1461(5)
SI 462(8)
SI 336(9)
SI 1313(11)
24
25
26
SI 502B(16.17.21.24)
SI 12(13.14.19.22.23.25)
SI 72(15.18.20)
SI 560(26)
33
34
折縁杯・稜椀
SI 14(27.28.30.31.32.33.34)
SI 75(29)
40
41
42
SI 15(35.36.37.38.39.40.41.42)
53
54
55
SI 4(44.45.48.52)
SI 6(46.50.55)
SI 60(43.47.51)
SI 7(49.53.54)
椀
68
69
SI 1100(56.60.64.68)
SI 1320(57.58.59.61.63.65.67)
SI 850(62.66)
その他(69)
B(胎土B群)
66
(胎土B群)
67
75
73
76
78
79
80
81
74
77
82
SI 753(74.75)
SI 1167(70.71.72.73.77.79.80.81.82)
SI 1202(76.78)



第69図　奈良・平安時代の土器編年(2)


小甕
鍋
短胴甕
A系
B系
C系
A系
B系
C系
10
11
12
13
14
15
16
17
19
18
30
31
35
36
38
39
40
32
33
34
37
45
46
47
48
49
50
51
57
58
59
60
61
62
佐渡型
SI 5(5.6.10.15.17)
SI 610(1)
SI 71(2)
SI 741(3)
SI 115(4.8.9.13.14.16.19)
SI 336(11)
SI 462(12.18)
その他(7)
SI 502B(20.35)
SI 20(21)
SI 280(22)
SI 12(23.30)
SI 8(26.31.40)
SI 560(27.29)
SI 72(28)
SI 1100(34)
SI 1300(36)
SI 806(38.39)
SI 14(24.25.32.33.37)
SI 7(41.46.49.50)
SI 4(42.47.48)
SI 15(43.45)
SI 60(44)
SI 33(51)
SI 1202(52)
SI 1101(53.59)
SI 1320(54)
SI 440(55.56)
SI 850(57.58)
SI 1100(60)
SI 29(61)
SI 1167(62)

(9)。非ロクロのなかでも新しい技法と考えられる。

須恵器　食膳具が主体であるが，土師器に比し，数量は少ない。SI 5はまったく須恵器がなく，SI 115は全体の約25%，SI 752・SI 741は約30%である。これに対し，第2段階のSI 502B・SI 12は約50%に達しており，その差は大きい。前述のとおり全時期を通じて食膳具の大半は須恵器であるが，土師器の食膳具が少量ながら含まれるのはこの時期の特色である。これには非ロクロの椀A (9)，ロクロの無台杯A (12) がある。しかし，これらの出土量は少なく，須恵器の食膳具を補っていたとは考えられない。したがって，この段階はのちの段階より，食膳具の占める割合が相対的に低かったと考えられる。

この段階の須恵器の杯類は量的に少なく，全体の様相は明確ではないが，SI 115の小型の無台杯 (6)，SI 752の有台杯 (3) が代表的である。器壁は全体に厚く，有台杯は腰が張り，高台が底部の外縁に付されるものである。有台杯の口径は14～15cmの有台杯AIが多い。

須恵器の胎土はのちに比してA群の占める割合が少ない。資料が少ないため，数値はやや不安定ではあるがSI 115ではA群の占める割合は40% (2/5) である。

第II期

土師器は非ロクロのA系がほとんどなくなり，須恵器の数量が増加する段階である。前後2時期に区別される。II_1期は土師器がC系主体の時期であり，II_2期はC系が減少する時期である。II_1期はSI 502B・SI 8・SI 12・SI 72，II_2期はSI 14を標式とする。

土師器　A系・B系・C系の技法別の割合はII_1期ではC系が半数かそれ以上を占め，次いでB系が多く，A系はごく少ない。II_2期はB系が増加し，C系より多くなり，A系は姿を消す。第II期のB系はハケ目調整が多く，タタキ目をそのまま残すものは少量である。B系の2類も若干出現する。

須恵器　数量が全体の50%くらいに達し，食膳具が定着する。無台杯は底部が水平で，直線的にひらくものが多い。身のやや深いものもみられる。口径14～15cmのもの（無台杯I）が多い。有台杯はII_1期では高台が底部外縁に付されるが，II_2期では内側に付される。無台杯同様，大型のものが目立つ。高台が底部の内側に付されるのは，在地色ともいえ，II期からIII期にかけてみられる。杯蓋は天井部のロクロケズリがていねいなものから粗くなる。つまみはII_2期には上部の突起が小さくなる。

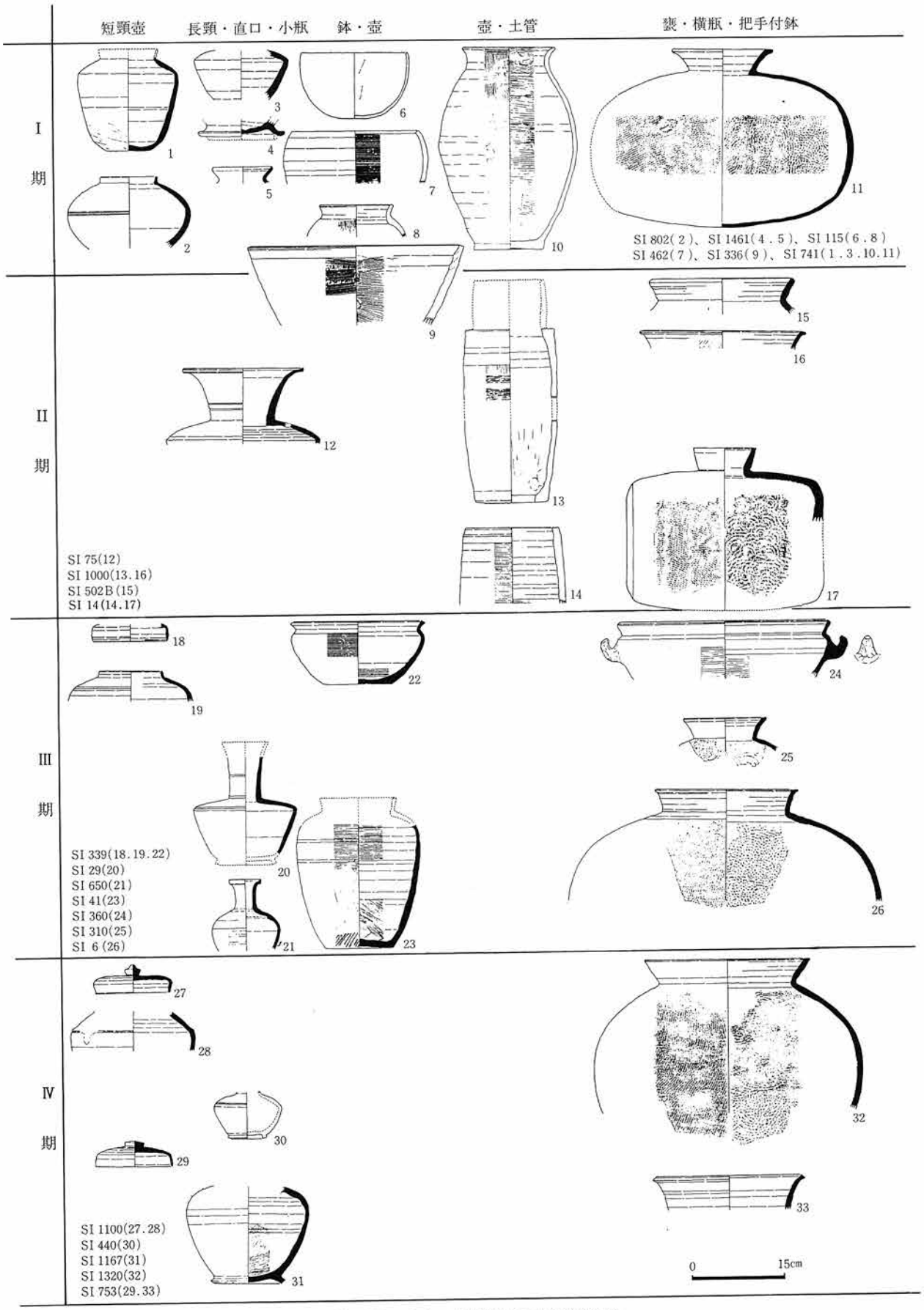
第III期

土師器はB系のみになり，須恵器は器種の交代が著しい段階である。SI 15・SI 7・SI 4・SI 6などを標式とする。前後2時期に分けられるようであるが，顕著な様相差はない。III_1期はSI 15，III_2期はSI 4・SI 6を標式とする。

土師器　すべてB系であり，A系・C系はみられない。長甕・小甕ともに口縁部が「く」の字状に強く外反し，体部はふくらむ形態をとる。つくりはシャープで，端部をつまみあげるものが多い。長甕にはタタキ目を残すものが多くなる。とくに，III_2期ではヘラケズリも部分的になる。小甕では底部糸切り（静止・回転）技法がIII_2期には確認される。

須恵器　器種の交代が明瞭である。口径14～15cmの大型の無台杯I・有台杯Iが消滅する。一方，口径10～11cmの有台杯C，有台杯AIIIが定着する。深身の有台杯Bは径高指数40以上となり，やや小型で深くなる。また，まったく新しい器種として，折縁杯が出現する。この時期の折縁杯は次のIV期のものより大型で厚い。杯蓋はロクロケズリがていねいなものはほとんどなく，まったく施さないものも多い。つまみの上部中央はくぼむ。器壁はIII_1期には厚いものもあるが，III_2期には薄くなるものがみられる。

第IV期



第70図　奈良・平安時代の土器編年(3)

須恵器に胎土B群（佐渡小泊窯産）が一定量を占めるようになる段階。B群が約半数かそれ以下の時期（Ⅳ$_1$期）とB群が主体となる時期（Ⅳ$_2$期）に分けられる。Ⅳ$_1$期の標式はSI 1320・SI 500・SI 850，Ⅳ$_2$期の標式はSI 753・SI 1460・SI 1167などである。

須恵器　B群の割合を食膳具（杯蓋をのぞく）でみると，SI 500・SI 1300は1/4以下，SI 850は約半数であり，他はおおよそ70%以上を占める。器種は有台杯Aはごく少なくなり，かわって有台杯B・Cが主体となる。胎土B群には有台杯Aはみられない。A群ではⅣ$_1$期のみ有台杯Aが存在する。B群は器壁が薄く，器面のロクロナデの凹凸が著しく，器形は底部が水平で，直線的に大きく身が開く。A群もこれと類似した傾向を示す。B群のなかでは新しくなると器壁がやや薄くなり，身の開きが大きくなる傾向がある。しかし，Ⅳ$_1$期とⅣ$_2$期とで著しい差はみとめられない。明瞭に新しい様相がみられるのはⅣ$_2$期より新しい可能性をもつSB 730（1026・1027）である。Ⅲ期に出現した折縁杯は小型になり，器壁も薄い。また口縁部の引き出しも弱い。

土師器　新しい器種として，ロクロ土師器の食膳具がある。これはⅣ$_2$期には確実に一定量存在するが，食膳具の全体のなかではなお少量である。全体に出土個体数の多いSI 1167では食膳具の約25%を土師器が占める。Ⅳ$_2$期のあり方としてはおそらくこの数字を上まわることはないと考えられる。このロクロ土師器食膳具は無台椀Bが主体である。底部は回転糸切りで，ヘラケズリ・ロクロナデの再調整を施すものが一般的である。この無台椀Bの胎土には須恵器系と非須恵器系の2者がある。量的には非須恵器系が多い。両者は胎土ばかりでなく，調整・器形がことなる。前者はとくに内面のロクロナデの凹凸が目立ち，焼成は硬質である。形態は身がやや深い。これに対し，後者は内面の調整はていねいで，身はやや浅い。

煮炊具の小甕・長甕はともにⅢ期より口縁部の外反度が小さくなり，体部は張らなくなる。口縁端部は上方へたちあがるものが多く，外面にくぼみをもったり，内湾して，外面が丸味をもつものが多くなる。Ⅳ$_2$期には器壁が厚くなり，シャープさを失う。長甕は体部のヘラケズリをほとんど施さないものが多く，小甕は糸切りが目立つようになる。長甕のタタキ目は格子目文，あて具痕には放射状文で，Ⅲ期までにはみられなかった文様があらわれる。食膳具と同様に非須恵器系胎土のものが一定量存在する。

3）　須恵器窯との関係

本遺跡に供給された須恵器の大半は，胎土からみて阿賀北地方，新津丘陵，佐渡小泊窯の製品である。これらの須恵器窯の調査はあまり進んでない面もあって，その全容は不明な点が多い。報告されているものは，阿賀北地方では加治川村下小中山窯跡〔戸根1973〕，同貝屋窯跡〔川上1982〕，笹神・真木山窯に属する豊浦町岡屋敷・清見寺窯跡〔中川ほか1962〕，同馬上窯跡〔戸根1986〕，新津丘陵では五泉市山崎窯跡〔川上1981〕，新津市七本松窯跡〔中川ほか1956〕，佐渡小泊窯では羽茂町カメ畑窯跡群〔本間ほか1958，本間1986，山本1987〕である。ここでは調査されている窯跡資料のおもなものについて，本遺跡の土器編年との関係で概観する。あわせて新発田市ホーロク沢窯跡，小泊窯に属する佐渡羽茂（はもち）町江ノ下窯跡の資料を，新発田市と羽茂町の教育委員会の快諾を得て，今回はじめて報告するものである。

Ⅰ～Ⅱ期に比定されるものは，下小中山窯跡と山崎窯跡である。両者とも杯類に大型品があり，Ⅲ期以降に降ることはない（第71図）。両者を比較すると，下小中山窯跡が相対的に古いことがわかる。すなわち，下小中山窯跡は有台杯の器壁が全体に厚く，高台が底部の外縁部に付されており，Ⅰ期のものに類似する。これに対し，山崎窯跡は高台が底部の中央寄りに付されており，Ⅱ期でも後半のものに近くなっている。ただし，SI 14例（第68図30・31）ほど内側には入っておらず，SI 72例（20）に類似する。杯蓋は下小中山

窯跡は器高が高いのに対し，山崎窯跡では全体に器壁が薄く，より扁平になっている。つまみも小さい。したがって山崎窯跡はSI 502B・SI 12出土土器よりも新しく，SI 14出土土器よりは古く位置づけられる。II期の中間的な時期に比定しておきたい。なお下小中山窯跡の杯類は体部から口縁部が直線的で，口縁端部が尖り気味になり，胎土A群の特徴をよく示している。阿賀北地方の中心的な窯である笹神・真木山窯はこの時期の窯が確認されておらず，I期の窯の主体はこれ以外であった可能性もある。

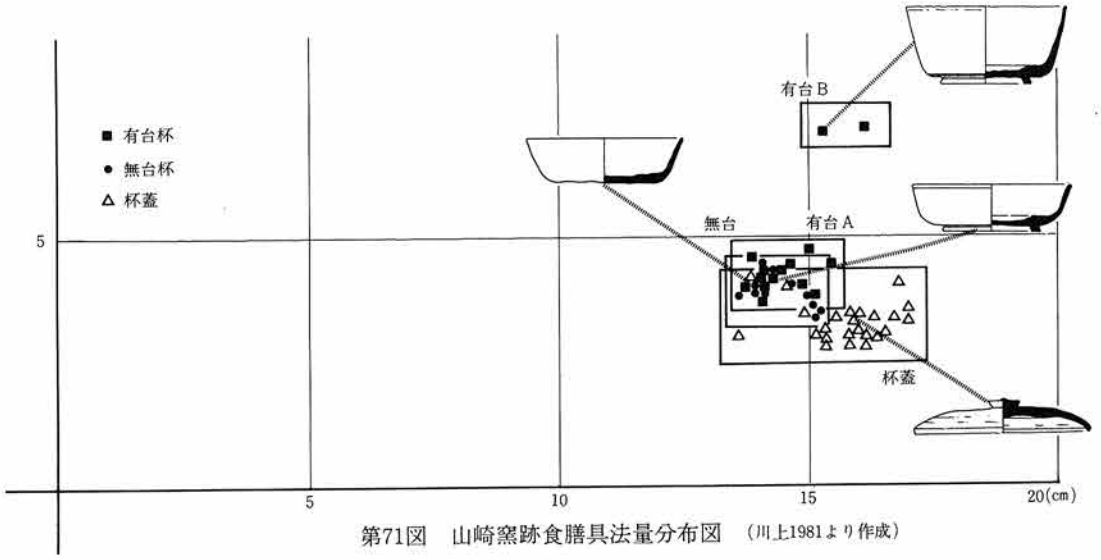
III期を代表するものは下小中山窯跡と同一の窯跡群にある貝屋窯跡である（第72図）。貝屋窯跡は3基の存在が推定されている。資料の大半が灰原出土で，ある程度の時期幅も考慮される。杯類はわずかに口径14cmほどのものがみられるが，基本的に小型のものである。口径10～11cmの有台杯AIII・Cもかなりの量がある。また，折縁杯も存在する。折縁杯は口径15cmをこえる大型のもので，この器種としては古い。III_1期を中心にその前後を含む時期に比定しておきたい。

笹神・真木山窯跡に属する馬上窯跡（第74図）は貝屋窯跡と狼沢(おおえんざわ)2号窯跡の中間に位置づけられる。貝屋窯跡と比較して，新しい要素は次の点である。長頸瓶（22）は口縁端部が屈折し，外側に面をもち，体部は扁平ではない。この形態は，貝屋窯跡にある単純なつくりの口縁端部と扁平な体部とをもつ長甕瓶より新しいものである。折縁杯は口径15cm以下であり，貝屋窯跡よりは小型で，縁部のつくりも形骸化している。狼沢2号窯跡より古い要素は有台杯Aが存在することである。杯には1点のみであるが底部回転糸切りのもの（1）が含まれる。この地域の須恵器においては糸切り技法はまれであるが，III_2期には土師器小甕に一定量の糸切り技法がみとめられることとの関連が注目される。馬上窯跡の時期はIII_2期かもしくはIV_1期にかかるものと考えられる。

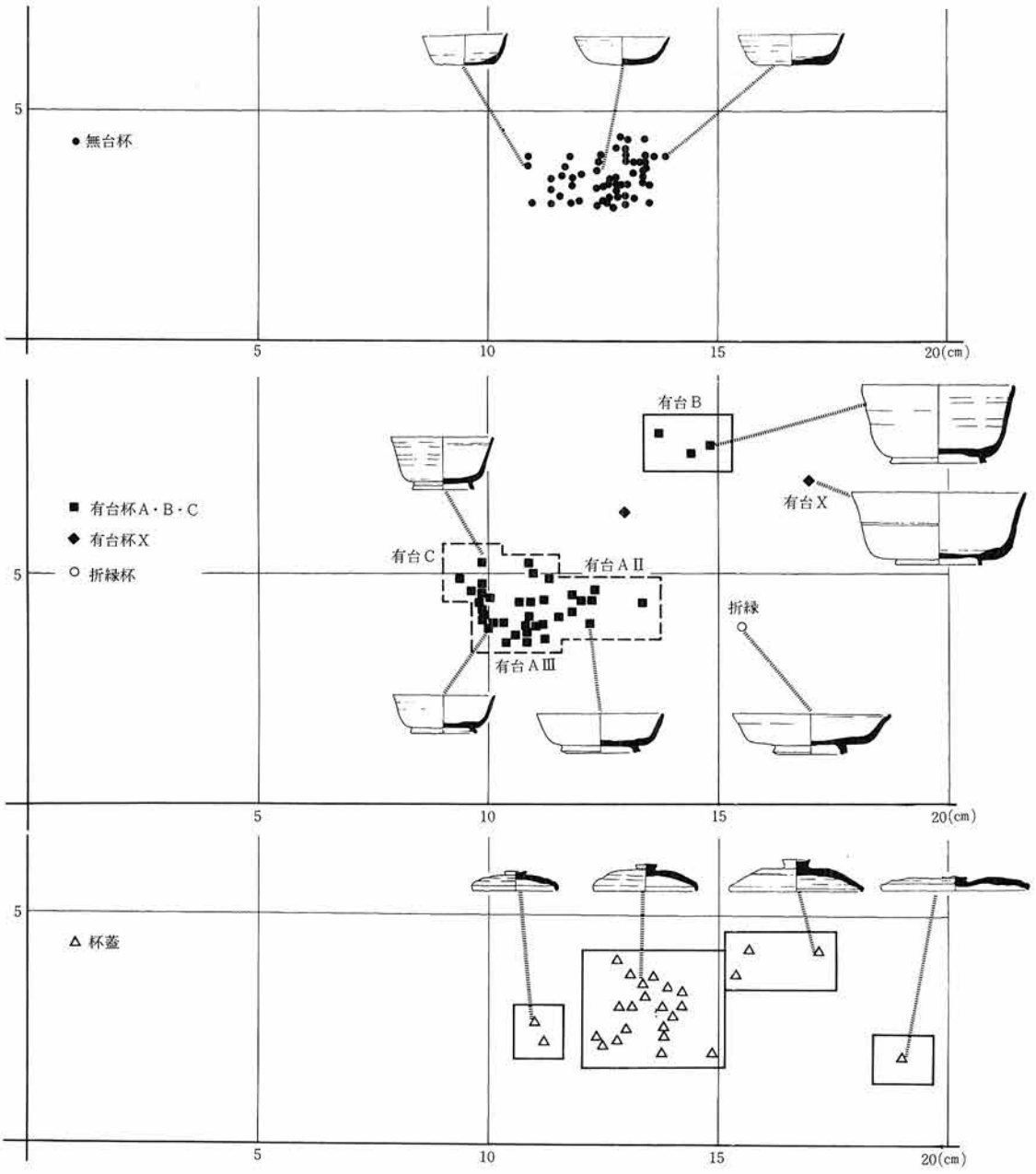
新発田市ホーロク沢窯跡（第75図）も有台杯A・Cが確認され，III期に比定できよう。七本松・岡屋敷・清見寺の各窯跡は不分明ながらII期～III期に比定されると考えられる。

狼沢2号窯跡は有台杯Aが皆無で，有台杯B・Cが主体となり，有台杯のなかの器種の交代がはっきりしている。また，本来土師器の無台椀として供給されたと考えられるものが少量存在することも注目される。これは本遺跡のIV期に出現する土師器無台椀のうち，須恵器系胎土のものにあたると考えられる（第68図69）。底部は回転糸切りである。時期はほぼIV_1期に比定されよう。

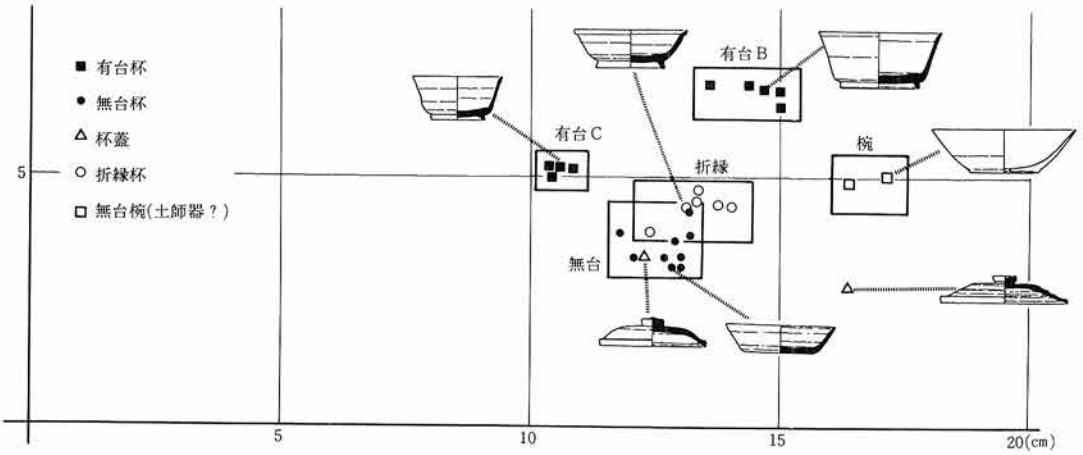
IV期を特徴づける小泊窯の資料として，カメ畑窯跡群（第76図）と江ノ下窯跡（第77・78図）の資料がある。両者は器種や形態・手法から，カメ畑から江ノ下へ時期的に変遷すると考えられる。器種としては江ノ



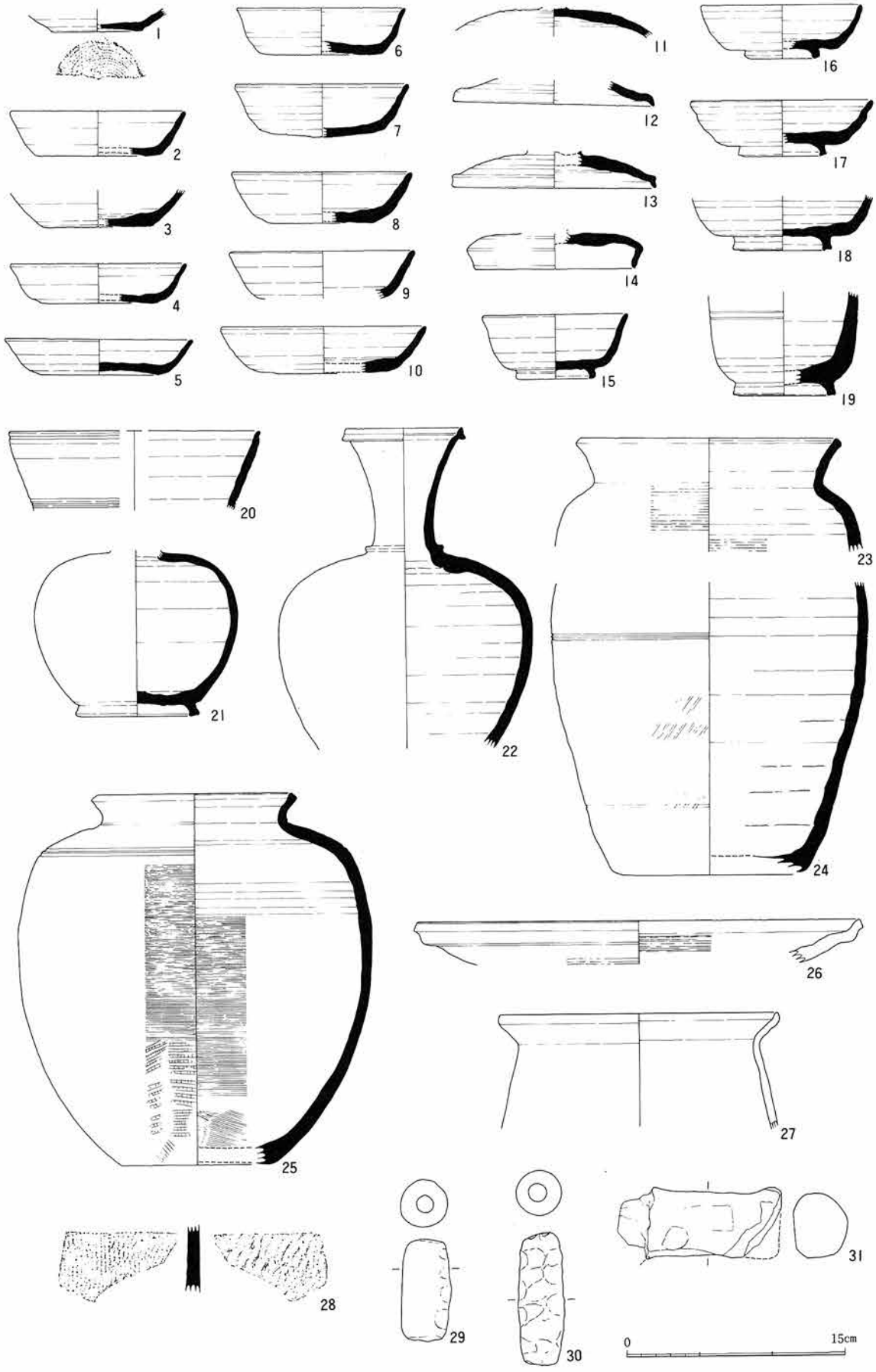
第71図　山崎窯跡食膳具法量分布図　（川上1981より作成）



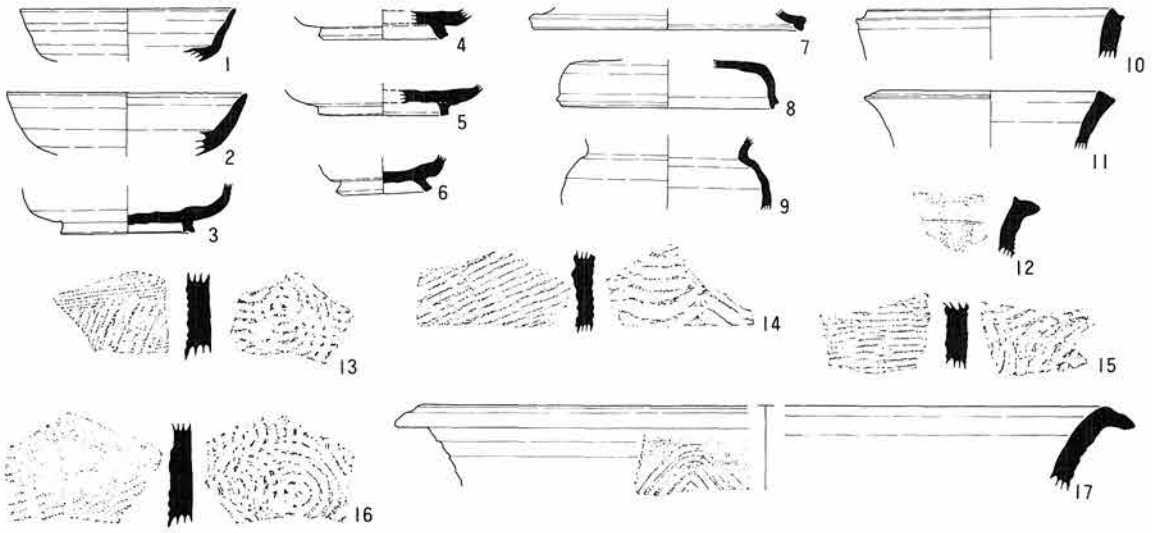
第72図　貝屋窯跡食膳具法量分布図　（川上1982より作成）



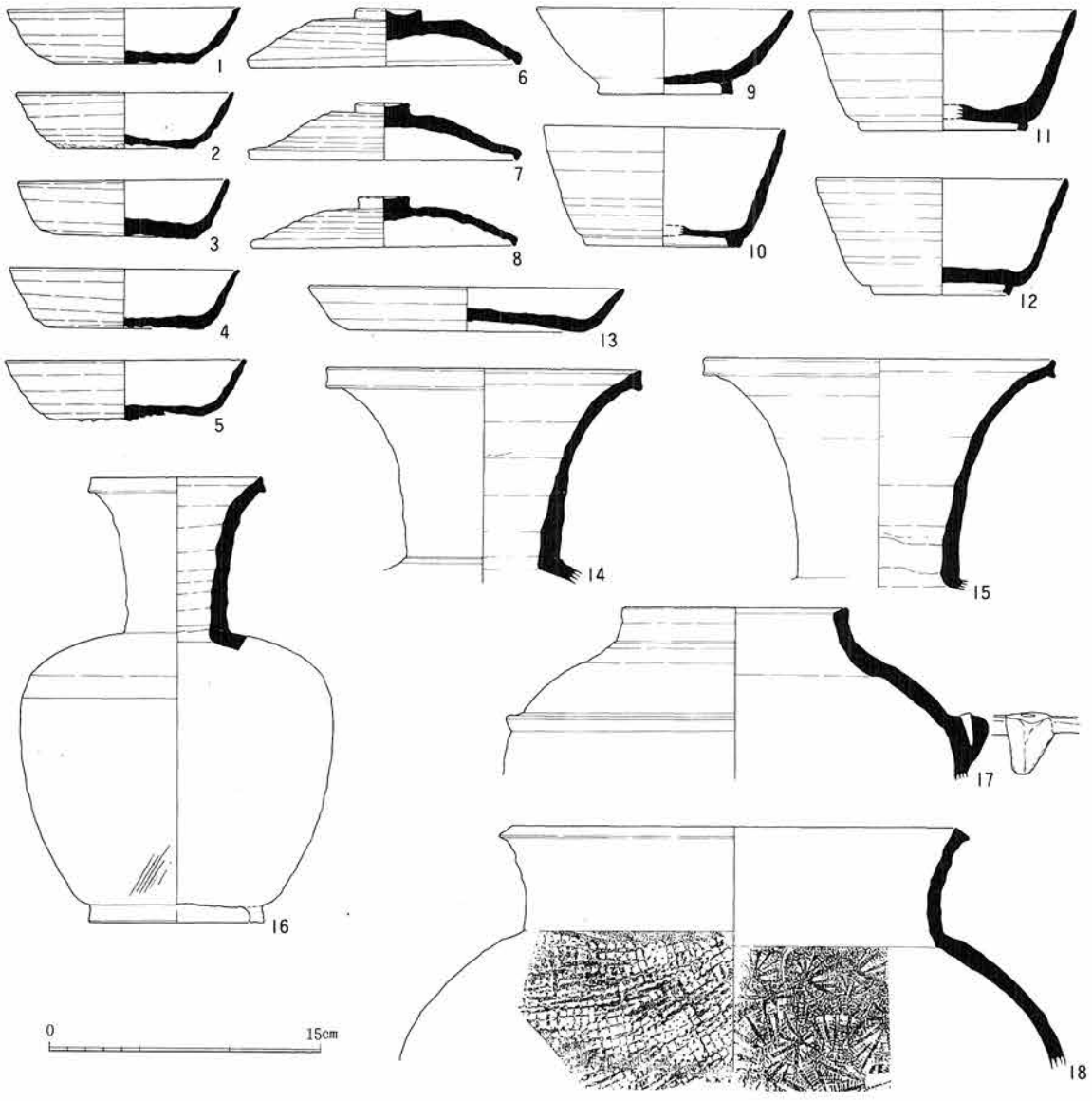
第73図　狼沢２号窯跡食膳具法量分布図　（中川ほか1973より作成）



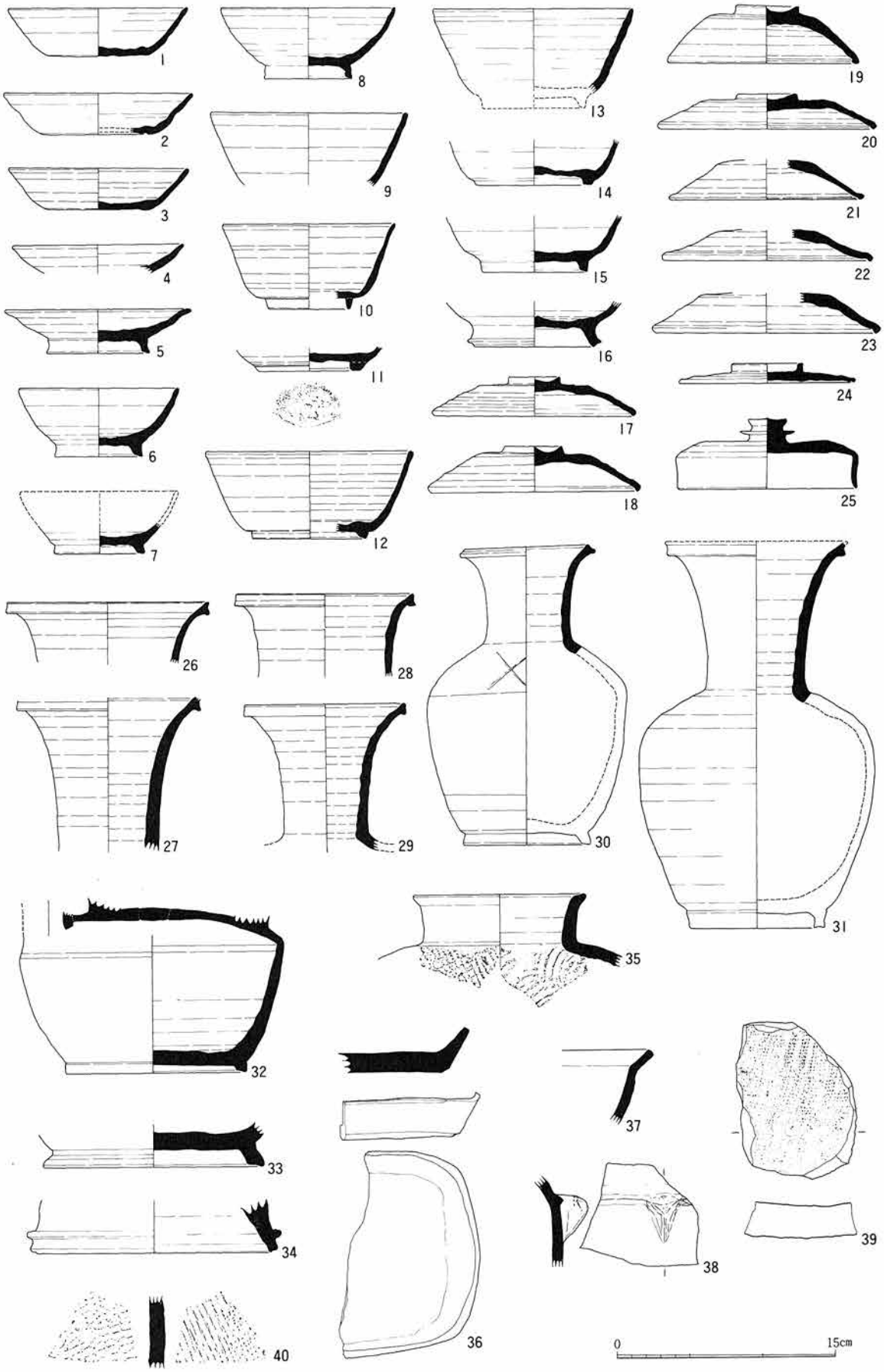
第74図　馬上窯跡出土須恵器実測図　（新潟県教育委員会所蔵）



第75図　ホーロク沢窯跡採集須恵器実測図　　（新発田市教育委員会所蔵）

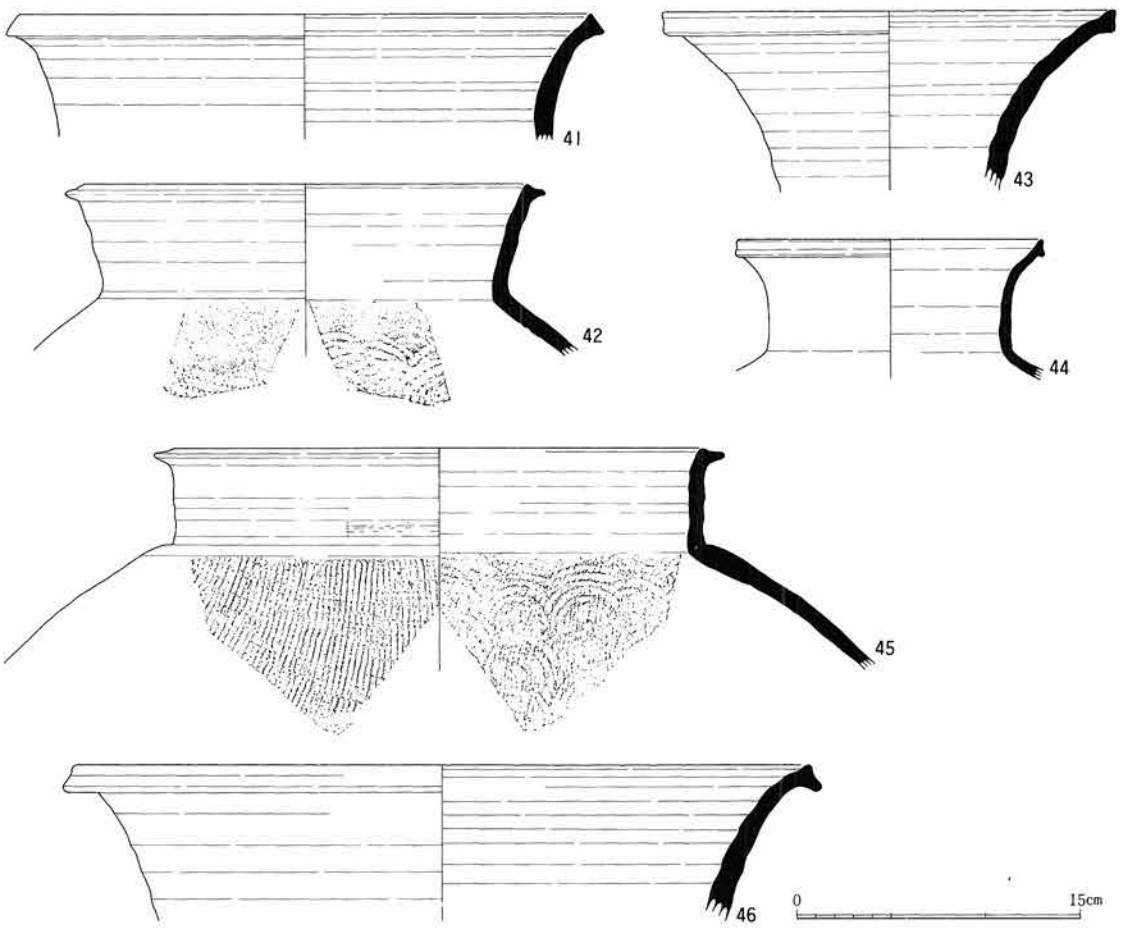


第76図　小泊窯カメ畑窯跡群出土須恵器実測図　　〔本間1986原図，山本肇実測〕



（羽茂町教育委員会所蔵）
25.32 春日真実実測

第77図　小泊窯江ノ下窯跡採集須恵器実測図(1)



第78図　小泊窯江ノ下窯跡採集須恵器実測図(2)（羽茂町教育委員会所蔵）

下に有台の椀・皿が存在することが注目される。形態・手法を同一器種で比較すると，江ノ下は全般的に器壁が薄くなっており，有台杯の高台，杯蓋の縁部のつくりが簡略化されていることが明瞭である。杯蓋のつまみも上部のくぼみが著しく，環状つまみのようになっている。有台杯・無台杯はともに身が開く傾向にあり，それぞれ椀・皿にちかい形態になっている。当遺跡との対比からすればカメ畑はIV_2期にちかく，江ノ下はそれより新しい。ただし，カメ畑と江ノ下は連続するものではなく，両者の間にさらに一段階介在することも考えられる。明確な根拠は示せないが，江ノ下は10世紀前半という年代観でとらえておきたい。小泊窯は遅くとも９世紀中葉には生産が始まり，カメ畑の段階から江ノ下の段階までは活発に生産を続け，その後少なくとも一段階は生産を継続していると考えられる。

4）年代の比定

当遺跡出土土器には直接，年代を決定できる根拠・資料はまったくない。現在のところ県内における８・９世紀の比較資料は少ない。８・９世紀全般の様相がおおよそ知られるのは上越市今池遺跡群の「今池編年」〔坂井1984〕だけであり，県内でも明確な年代比定はできていない。そのため，次にあげる二，三の点から，おおよその年代を求めるにとどめたい。

第１点としてII期のSI 12出土の須恵器杯蓋（第68図25）がある。大型で扁平な形態，大きなつまみは平城Ⅰ・II型式に対比でき８世紀前半代に比定される。詳細にみれば，縁部は折り曲げただけの単純なつくりで，平城Ⅰに比定しうる新井市栗原遺跡ＳＤ25出土土器〔坂井1982〕より，明らかに新しい様相をもつ。した

がって，これをひとまず平城Ⅱあたりに比定しておく．杯蓋に伴う有台杯（19）も器壁は薄く，平城Ⅱにちかい。かえりをもつ杯蓋は以前この遺跡周辺で1点採集されているが，今回はまったく検出されていない。Ⅱ期の1点を平城Ⅱに比定してよければ，Ⅰ期は平城Ⅰにおおむね併行すると考えられる。

第2点として，小泊窯須恵器の大量流通の時期である。当遺跡の最終末の時期では，須恵器の大半は小泊窯の製品である。小泊窯須恵器はこの遺跡ばかりではなく，越後全域に大量に流通しており（211頁），他地域との併行関係を検討できる。今池編年のⅥ期は小泊窯須恵器が主体である。しかし，食膳具全体をみると，土師器が半数以上を占めており，山三賀のⅣ$_2$期より新しい様相を示す。地域によってロクロ土師器の食膳具の出現時期が同一でない可能性も考慮されるが，今池Ⅵ期の様相は山三賀に近い新潟市小丸山遺跡〔藤塚ほか1987〕にも同様にみられ，両者に伴っている小泊窯須恵器の型式も共通しており，ほぼ同じ時期のものと考えられる。したがって，山三賀Ⅳ$_2$期は土師器食膳具を多く伴わない点で今池Ⅵ期より古く，小泊窯須恵器が主体である点で今池Ⅴ期よりも新しい。今池Ⅴ期とⅥ期は様相差が大きく，両者の時期は連続しないと考えられる。今池Ⅴ期は9世紀前半から中葉に比定したが，これが正しいとすれば，山三賀Ⅳ$_2$期はおおよそ9世紀後半に比定しうる。このことはⅣ$_1$期の須恵器が狼沢2号窯跡に類似し，これが9世紀前半～中葉に比定できることからも妥当と考えられる。これより，小泊窯の生産開始は遅くとも9世紀中葉には開始されていたと考えられる。

もう1点あげるとすれば，Ⅲ期のSI 7出土の糸切りと考えられる須恵器有台杯（464）がある。この底部外面は全面ロクロケズリである。有台杯の底部を全面ロクロケズリする技法は，糸切りの技法のなかでも相対的に古く，頸城地方の滝寺窯跡のものに共通する。この窯の製品とは断定できないが，滝寺窯跡は今池Ⅳ期（8世紀末～9世紀前半）に併行すると考えられる。

以上の点から第Ⅱ$_1$期の1点は8世紀第2四半期を含む。第Ⅲ期の1点は8世紀末から9世紀前半を含み，第Ⅳ$_1$期の1点は9世紀前半から中葉を含む。これより，それぞれの時期をおおよそ推定すると，第Ⅰ期は8世紀第1四半期前後，第Ⅱ期は第2四半期から第3四半期にかけて，第Ⅲ期は8世紀第4四半期から9世紀第1四半期にかけて，第Ⅳ期は9世紀第2四半期から第3四半期にかけて，それぞれ比定できる。

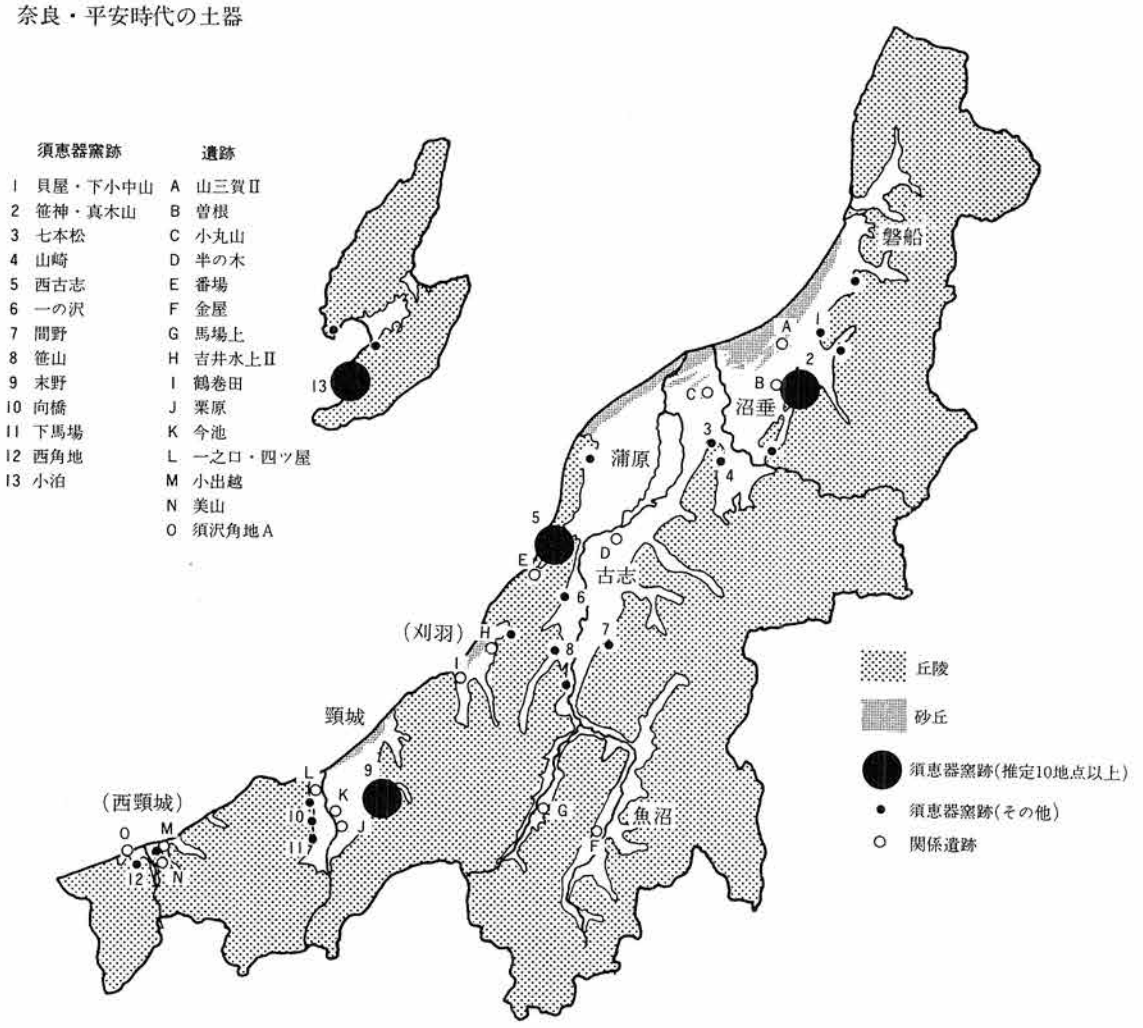
B　山三賀Ⅱ遺跡をめぐる土器の生産と流通

1）　越後・佐渡の須恵器窯

現在確認される須恵器窯のおおよその分布状況は第79図のとおりである。須恵器窯は群のとらえ方などにより，名称は必ずしも統一されていない。それは分布状況が詳細に把握されていないことにもよる。ここではなるべく巨視的に把握することを考慮して名称を付した。おおよそのまとまりを指す場合は「窯跡群」とはせず，単に「窯」とし，個々の窯跡を指す場合に「窯跡」とする。

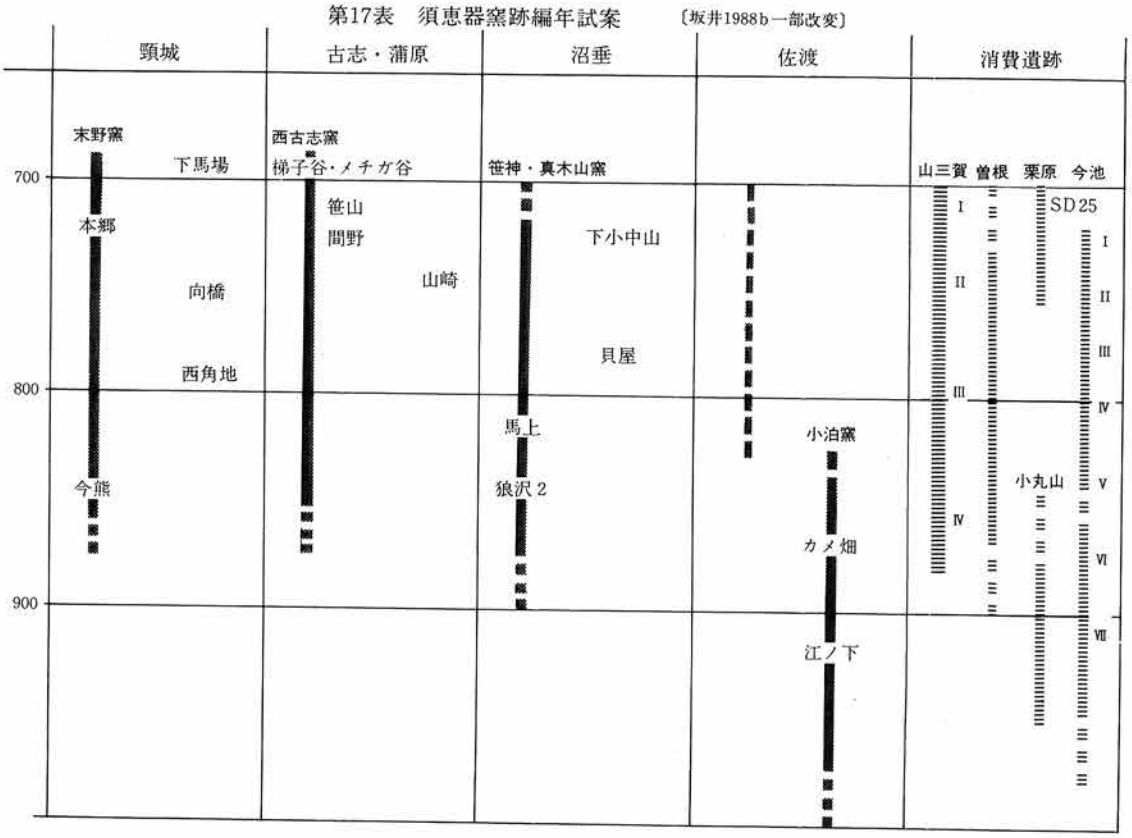
須恵器窯の分布がもっとも集中するのは，笹神・真木山窯と佐渡の小泊窯〔本間ほか1958〕である。両者は30地点以上で窯跡が確認されており，実際の窯体数はかなりの数にのぼるものと推定される。笹神・真木山窯は隣接する笹神村と豊浦町の丘陵上（南北約10km）に分布する窯跡群について，従来「笹神窯跡群」や「真木山窯跡群」と称していたものを総称したものである。

笹神・真木山窯と小泊窯以外では三島郡の西古志窯，頸城郡の末野窯が比較的規模が大きい。西古志窯は三島郡寺泊町・和島村・出雲崎町にかけての島崎川流域の丘陵上（南北約10km）の範囲に分布する。従来この地域の窯跡は個々に名称が付され，このような群としてはとらえられていなかった。また，現在確認



第79図　越後・佐渡のおもな須恵器窯と遺跡分布

第17表　須恵器窯跡編年試案　〔坂井1988b一部改変〕



される窯の数も10基に満たない。しかし，最近の出雲崎町梯子谷窯跡の調査〔山本1988〕を契機に新たな窯跡が発見され，同一地域内で製鉄遺跡も数多く発見されている。こうした状況を勘案すると須恵器窯の分布は小さなブロックをなしてはいるものの，これらが大きなブロックを形成することが予想される。そのため仮称として「西古志窯」を設定することにした。

末野窯は頸城平野の東側丘陵に位置し，本郷・神田長峰・末野・今熊などの窯跡がある〔小島ほか1983〕。現在，窯跡7地点で確認しているが，10基以上を数えるものと推定される。

以上の四つの群は，おおよそ，上・中・下越と佐渡に分布しており，それぞれの地域の中心的な生産地であったと考えられる。これら以外の窯跡の規模はあまり大きくない。

現在確認されている最古の窯は上越市下馬場窯跡と西古志窯の出雲崎町梯子谷窯跡〔山本1988〕，同メチガ谷窯跡〔山本1988〕である。いずれも杯蓋には退化したかえりをとどめるものである。飛鳥Ⅳ型式に比定される。実年代は7世紀末葉と考えられる。この時期がほぼ越後の須恵器生産の開始期と考えられる。

2） 山三賀Ⅱ遺跡出土須恵器の生産地

胎土分析　出土した須恵器については胎土により3者に大別し，その生産地を推定した。これはあくまでも肉眼観察による胎土の識別であり，その妥当性について検証する目的で，三辻利一氏に依頼して胎土分析をおこなった（第Ⅵ章1）。分析にはまず生産地のデータを豊富にするため，小泊窯と笹神・真木山窯の窯資料を加えた。小泊窯の分析資料は江ノ下・下口沢・杢田谷地・宮田・栗ノ木沢・高畑・奥田・カメ畑・フスベの各地点で県教委が採集した須恵器片である。笹神・真木山窯の分析資料は昭和48年に豊浦町教育委員会が発掘した馬上窯跡〔戸根1986〕の出土品である。三辻氏の産地データは，「笹神群」が同じ窯跡群の笹神村狼沢2号窯跡〔中川ほか1973〕を含めたもので，「小泊群」は前述の地点のものによる。次に，本遺跡出土須恵器の資料を分析した（第12表）。これらのうち，胎土識別によりB群としたのは1～5，16～22で，A群としたのは6～15，23～29，C群としたのは30～32である。

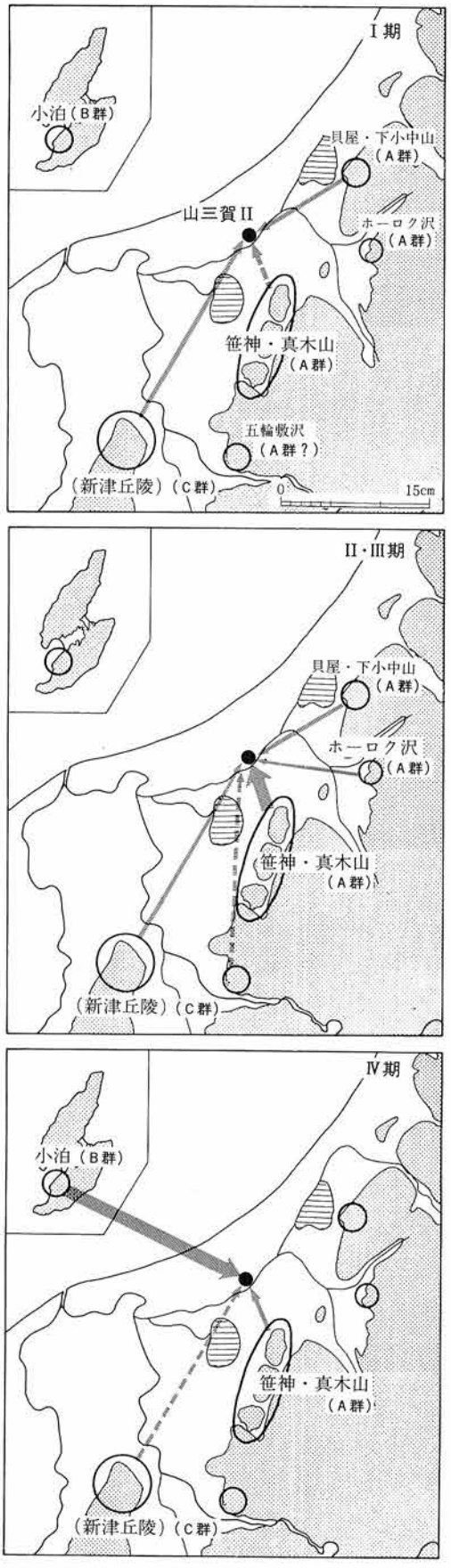
分析の結果，生産地の小泊群と笹神・真木山群の領域はおおよそ分離するものの，一部で重複し生産地をどちらかに特定できないものもあることが判明した。

このデータにより，本遺跡出土の須恵器の生産地を推定した結果は，胎土識別でB群とした12点はいずれも小泊群か，笹神群ないしは小泊群とされた。一方に特定できないのは前述の理由によるものと考えられ，胎土識別によるB群の識別が妥当なことを示している。

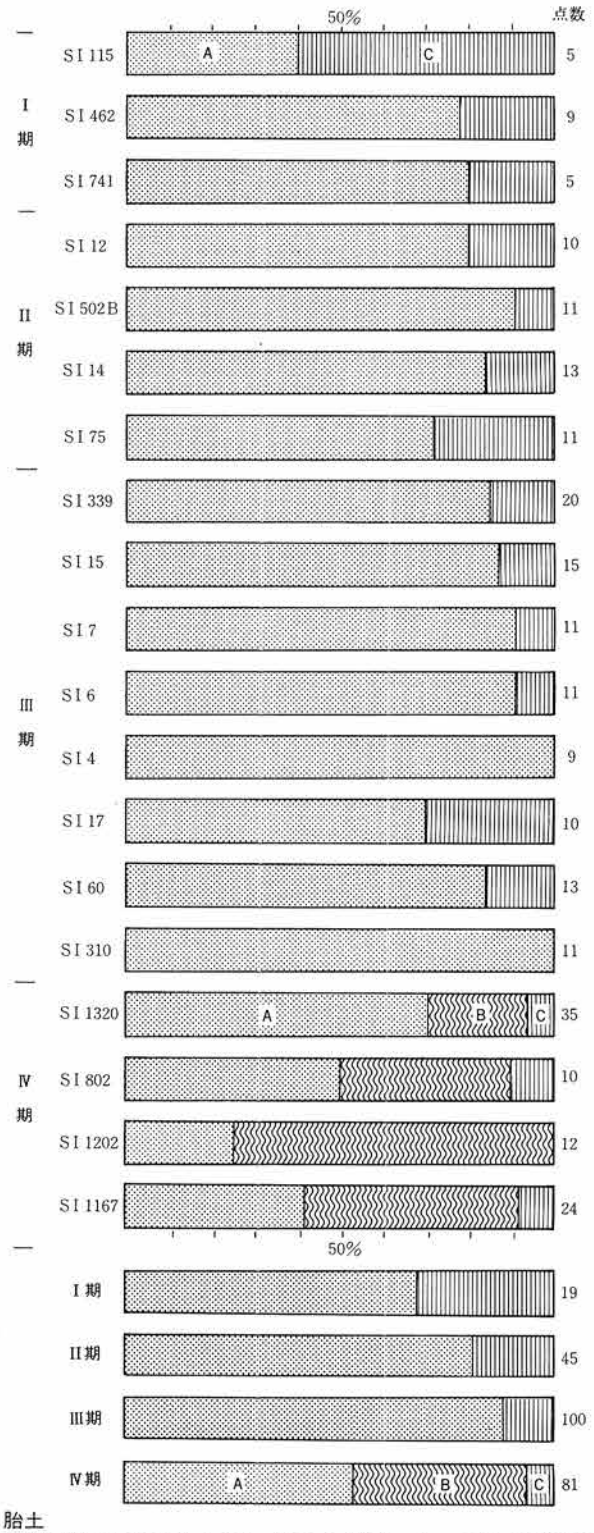
A群と識別したものについては笹神群という結果が多いが，外来品というものもいくつかある。外来品とされたもののうち，6・13・14は淡灰色で白っぽく長石の多い胎土である。これらを含め，外来品とされたものは胎土分析をおこなっていない阿賀北地方の窯跡，たとえば加治川村貝屋・下小中山窯跡群，新発田市ホーロク沢窯跡などの製品の可能性や，場合によっては阿賀北地方以外の可能性も考えられよう。C群と識別したものについては外来品と笹神群とされるものがある。以上の胎土識別と分析結果をつき合わせると，肉眼による胎土識別はおおむね妥当なものであると考えられる。そして，胎土から比較的容易に識別できるA群とB群が，胎土分析ではどちらかに区別できないものがあるとすれば，生産地の同定には胎土識別がより有効な場合もあるといえる。

出土須恵器からみた生産状況（第80・81図）　出土した須恵器から，その生産状況を考えると，第一に須恵器の数量からみた生産量，第二に地域別の須恵器の生産状況が推定される。

まず第一の須恵器の数量であるが，Ⅰ期とⅡ期以降の差が注目される。Ⅰ期には全器種において須恵器



第80図　時期別の須恵器供給状況推定図



胎土
A群：阿賀北地方（笹神・真木山、貝屋・下小中山、ホーロク沢、五輪敷沢）
B群：佐渡小泊
C群：その他（新津丘陵など）
1）点数は実測個体
2）下段のⅠ～Ⅳ期は上の遺構資料を合計したもの
3）群は断定できないものも含む

第81図　須恵器の胎土別比率

の占める割合は25～30%で，II期以降は50%以上に増加する。このことはII期以降須恵器生産が活発になり，生産量そのものが増加したことによると考えられる。越後で須恵器生産が開始されるのは，現在の資料によれば，7世紀末葉頃である。この時期の窯跡は阿賀北地方では確認されていない。当遺跡のⅠ期は8世紀の第1四半期を中心とする時期であり，越後で須恵器生産が開始されて間もない時期にあたる。したがって，須恵器生産は始まっていたにしろ，その絶対量が少なかったと考えられる。そして，II期（8世紀第2四半期）以降，須恵器生産が急速に進展し，生産量そのものが拡大したと考えられる。

ところで，須恵器の器種・機能は当初から食膳具と貯蔵具であり，量的に多いのは食膳具である。Ⅰ期には相対的に須恵器が少なく，当然のこととして須恵器の食膳具も少ない。土師器の食膳具も多少はあるが，これを補うだけの量はない。他地域の状況からみると，考えにくいことではあるが，II期以降の須恵器生産の隆盛とともに，食膳具が盛行したことも考慮される。

次に，地域別の須恵器生産の問題である。須恵器の胎土識別によるA・B・Cの3群のあり方は，8・9世紀の期間でかなり大きく変化する。大局的にはⅠ期とII期，Ⅲ期とⅣ期の2つの時期の間に変化がみられる。8世紀前半を中心とするⅠ期は，A群の占める割合がII期以降より相対的に低いことである。II期・Ⅲ期におけるA群以外の占める割合はおおむね15%前後，多くても30%以内であり，大部分がA群で占められる。Ⅰ期にA群の割合が少ないことは，須恵器の絶対量が少ないことと関連してこの段階では阿賀北地方における生産規模が小さく，他地域の須恵器が流入していたことを示す。具体的には阿賀野川の南，おもに蒲原郡域からもたらされるものが多かったと推測される。阿賀北地方では加治川村下小中山窯跡〔戸根1973〕がこの時期にあたるが，笹神・真木山窯で確認されている窯跡のうち，時期が8世紀第1四半期にさかのぼるものはない。当遺跡の須恵器の胎土からみる限り，阿賀北地方において生産規模は小さいながら8世紀第1四半期には生産開始していることが推測され，笹神・真木山窯も生産開始している可能性があろう。

II期以降のA群のあり方からすれば，阿賀北地方の窯は8世紀第2四半期以降生産規模を拡大し，あらゆる階層まで須恵器の食膳具を供給するに至っている。須恵器の80%以上をA群が占める状況は$Ⅲ_2$期まで続く。おおよそ9世紀第1四半期までは，きわめて生産がさかんであったと考えられる。

このような状況が変化するのはⅣ期以降である。Ⅳ期にはいると，佐渡の小泊窯の製品が一定量存在するようになり，その後半（$Ⅳ_2$期）には全体の70%以上を占めるようになる。A群はそれだけ著しく減少することから，A群の主体をなす笹神・真木山窯の生産規模は9世紀中葉以降急速に縮小すると考えられる。同一郡内の10km程度の距離しか離れていない笹神・真木山窯の製品ではなく，海をこえた佐渡の須恵器がこのように大量にもたらされることは，この時期に生じた須恵器の生産と流通のあり方が大きく転換したことを如実にあらわしている。

以上のことから，この地域の在地窯ともいうべき阿賀北地方の須恵器窯は8世紀第1四半期には小規模ながら生産開始し，第2四半期以降生産を拡大して，9世紀中葉に至る。9世紀後半には急速に衰退し，これにかわって佐渡小泊窯の製品が大量に流通するようになる。

3） 佐渡小泊窯製品の広域流通

9世紀後半以降にみられる佐渡小泊窯の製品の大量流通は本遺跡だけではなく，越後全体で普遍的にみられることである。

越後に小泊窯の製品が流通していることが，明らかになったのは最近である。1984年の『今池報告』

〔坂井ほか1984〕においては，9世紀後半以降のⅥ期・Ⅶ期の須恵器がそれまでの須恵器と明瞭にことなるものであることは認識していた。そして，その須恵器が上越地方ばかりではなく，中越地方（栄町半ノ木遺跡など）にも同じ胎土・手法のものが存在することから，頸城地方を単位とした生産と流通体制が崩壊し，広域の生産体制が成立したことを示唆した。しかし，その生産地についてはわからなかった。

小泊窯という具体的な生産地を指摘したのは，1987年の『番場報告』〔坂井ほか1987〕である。佐渡において小泊窯の須恵器を観察する機会を得たことを契機に，その可能性を想定するに至り，報告では三辻利一氏による須恵器の胎土分析の結果も考慮し，小泊窯と推定するにいたった。ただし，消費地と生産地のデータがごく少ないことからその後の検討に多くをゆだねた。その後，さらに越後の9世紀後半以降の須恵器と小泊窯のさまざまな須恵器を観察するなかで，越後における9世紀後半以降の須恵器の大半は，小泊窯の製品であるとの認識をもつに至った〔坂井1988b〕。それは，本遺跡において在地窯とそれ以外の窯の製品が，胎土から比較的容易に識別できたことにもよる。

今回の胎土分析においては，県教育委員会と柏崎市教育委員会の発掘資料を分析した（第Ⅵ章1）。遺跡は糸魚川市美山・鰐口下遺跡〔鈴木ほか1989〕，上越市今池遺跡〔坂井ほか1984〕，栄町半ノ木遺跡〔関ほか1973〕，柏崎市鶴巻田遺跡〔藤巻1988〕，糸魚川市岩野下遺跡〔和田ほか1987〕，六日町金屋遺跡〔山本ほか1985〕（以上，県教委資料），柏崎市戸口遺跡〔品田1987〕，同吉井水上Ⅱ遺跡〔品田1985〕（以上，柏崎市教委資料）である。それぞれの遺跡の位置は第79図のとおりで，ほぼ県内全域に分布する。

分析した資料は一部をのぞいて，小泊窯製品と識別できたものである。小泊窯以外の所見を得たのは金屋遺跡の22～24である。この3点（22・23—報告390・327，24—同154）は有台杯高台の形状・手法からみて，群馬産と考えられた。胎土分析による産地推定（第12・13表）は小泊群・笹神群・地元産・外来品であった。この産地推定の結果は胎土認識によるものとかなりことなるものであるが，それは越後における産地の分析データが少ないことと，小泊群と笹神群の領域が一部重複することに，多くが起因するといえる。すなわち，ここで地元産とされたものは笹神群産か小泊群産か判別がつかないものであり，これは小泊群の可能性が強いと考えられる。また，笹神群とされる今池遺跡の1・4は，ともに胎土に石英粒をまったく含まないことから，胎土識別では笹神産と認定することはできない。他の笹神群とされたものについても同様である。群馬産と考えられる金屋遺跡（22～24）も，手法・胎土からみて小泊産とは考えられない。今後，胎土分析を有効に活用するためには，生産地の分析データを蓄積することと，土器についての考古学的所見を確立することが要請される。

胎土分析の結果においては，胎土や手法による考古学的所見と完全に合致しなかったが，その大半が小泊産の可能性を否定しきれないことも明らかになったといえる。分析資料の遺跡は広大な領域をもつ越後のほぼ全域に分布しており，その流通範囲の広さと流通量の多さを示す。越後の大半の地域で，しかも海岸部ばかりではなく，内陸部の魚沼地方まで多量に流入していることは，水運による須恵器の流通を明確に示す。上越と中越・下越の一部をのぞく越後は，ひとつになった信濃川・阿賀野川の河口から内水面により到達することが可能である。これらの地域については河川，それ以外は海上交通により流通したといえよう。現在の調査資料からみれば，越後における在地窯と小泊窯の製品の推移はほぼ本遺跡と同じあり方であり，9世紀後半以降，10世紀前半にはほとんどが小泊窯のもので占められると考えられる。越後ばかりではなく，越中東部のじょうべのま遺跡〔高島ほか1974〕にも小泊窯製品は認められ，在地の須恵器生産が弱い地域に，小泊窯製品が積極的に進出した状況がうかがえる。越後の在地窯は小泊窯製品が流通する9世紀後半には急速に衰退している。これらの窯は1郡ないしは2～3郡単位の生産規模であり，小泊窯の

流通規模と格段の差がある。本遺跡の終末であるⅣ$_2$期には全体の10～20%程度の在地窯製品はあり，上越地方の今池遺跡・四ツ屋遺跡〔中村ほか1988〕にも9世紀後半～末葉の在地窯製品とみなされるものが若干はある。したがってこの段階において，きわめて小規模の生産はなお維持されていたと思われるが，10世紀に入る段階ではほぼ終息していたと考えられる。

4） 土師器と土器生産

本遺跡の土師器はⅠ期をのぞけば，大半がいわゆるロクロ土師器である。ロクロ土師器は須恵器と密接に関連したものと考えられる。以下，このロクロ土師器を検討することにより，その生産形態と土器の生産体制について考えることにする。ロクロ土師器の多くはごく少量の赤彩の杯（Ⅰ・Ⅱ期）とⅣ期の無台椀をのぞけば，煮炊具の甕（長甕・小甕）と鍋である。ロクロ土師器が須恵器と密接な関係なことは，おもに製作技法，須恵器の消長との関係，胎土などから推定することができる。

製作にはロクロを二次的成形と調整（ナデ・カキ目）に使用し，技法として「タタキ」による成形・調整と「ヘラケズリ」を伴う。こうした特徴は須恵器と関連することはいうまでもない。

次にロクロ土師器と須恵器の消長との関係であるが，ロクロ土師器はⅠ期には確実に存在するが，この時期はなお非ロクロ土師器が多くを占めている。Ⅰ期の須恵器はⅡ期以降に比し絶対量が相対的に少なく，須恵器生産そのものが，Ⅱ期以降より生産規模が小さかったと考えられる。また，Ⅰ期においては，在地窯ともいうべき阿賀北地方の須恵器A群の占める割合が，Ⅱ期以降よりも小さい。こうした点を考慮すると，阿賀北地方におけるⅠ期の須恵器生産そのものは，Ⅱ期以降に比しかなり規模が小さかったと推定される。ロクロ土師器の流通量がⅡ期以降より著しく少ない状況は，こうした在地の須恵器の生産量を直接反映しているといえる。一方，在地の須恵器生産が衰退傾向になる時期に，ロクロ土師器は衰退することはない。古代末に至るまで，土師器はロクロ土師器主体である。しかし，この時期のロクロ土師器には次に述べる胎土に変化がみられ，須恵器生産の衰退期についても両者の関連がうかがえる。

第3点として，胎土がある（109頁）。非ロクロ（A系）とロクロ土師器（B系・C系）は基本的に胎土がちがう。このことは胎土分析の結果にもあらわれている（第12表）。Ⅳ期の一部をのぞけば，ロクロ土師器の大半は基本的に須恵器に共通する胎土と考えられる。須恵器にはⅣ期に存在する胎土B群をのぞくと，A群が多い。A群は花崗岩起源の石英・長石・金雲母を多く含み特徴的なことから容易に抽出できるが，ロクロ土師器の胎土に着目すると，これと同じ鉱物を多く含むものがかなりを占めることがわかる。同時にC群のように鉱物を多く含まず，精良なものも一定量認められる。これらは須恵器のC群に一致すると考えられる。ロクロ土師器の胎土がこのように須恵器の胎土にほぼ対応することは，両者の関係を端的に示すといえよう。

ここで，ロクロ土師器において技法のちがうB系（長甕丸底）とC系（長甕平底）の二者の胎土が注目される。C系はⅡ期に特徴的であり，その前半期では主体を占める。C系の胎土は須恵器A群に対応するものが多い。すなわち，平底形態のものは阿賀北地方，おもに笹神・真木山窯で生産されたものであり，この地域に特徴的な技法であったと考えられる。そして，C系がⅢ期には消滅することは，この時期に至り，阿賀北地方でも丸底形態を作る技法に変化したことがうかがえる。いわゆる北陸型の煮炊具は当初より丸底形態であるが，阿賀北地方には当初この技法が確立せず，Ⅲ期（8世紀後半以降）の段階でこれが定着したといえる。C系とB系の大きな差はC系におけるタタキ技法の欠如である。B系は成形にタタキ技法を用い，製作の最終段階においてタタキにより丸底を作るものであり，この時期に阿賀北地方にもタタキ技

法が定着したと考えられる。いわゆる北陸型の煮炊具は遠く出羽の秋田城までは波及しているが，その定着は阿賀北地方と同じ時期にみられるのかもしれない。

一方，Ⅰ・Ⅱ期にあっても丸底形態のB系は一定量認められる。これらには胎土分析により笹神群と推定されたものもある（第12表35—SI 5の12）が，他のB系のものには須恵器胎土のA群ではなく，C群に対応すると考えられるものがかなりある。そして，C系がきわめて盛行するⅡ期に比定しうる五泉市山崎窯跡の土師器長甕は丸底のB系であり，阿賀野川の南の地域ではC系は生産されず，生産当初からB系であった可能性が強い。このようにみると，ロクロ土師器のB系とC系という技法は，Ⅱ期においては阿賀野川の南北にそれぞれ対比できると思われる。ここで，690年頃の越国三分当初には，阿賀野川を境に越中と越後に分離していた歴史的な事実が想起される。土器の製作技法にもこうした政治的な境界が反映されることは，さまざまな点でことなるあり方を示す阿賀野川の南北の地域性をもの語る一側面として注目される。

さて，このように須恵器とロクロ土師器が密接な関係にあるとすると，在地の須恵器生産の衰退期のロクロ土師器の胎土の変化もまた注目される。すなわち，Ⅳ期になると須恵器系胎土ではないもの（非須恵器系胎土）が少量ながらも一定量出現することである。$Ⅳ_2$期には非須恵器系胎土のものが煮炊具と食膳具の両者にみられる。これらの製作技法は須恵器系胎土のものと基本的に同一であることから，胎土のちがいは生産の場のちがいを反映したものと考えられる。

胎土からみれば，ロクロ土師器の多くを占める須恵器系胎土のものは，須恵器と同じ粘土を素地にして製作されたことがうかがえる。素地が同じであれば，製作・焼成の場とこれにたずさわる者も共通していたと考えるのが妥当であろう。焼成の場における共通性は，須恵器窯出土の「ロクロ土師器」に示される。前述の五泉市山崎窯跡，加治川村貝屋窯跡，笹神・真木山窯（馬上窯跡・狼沢2号窯跡）には一定量の甕・鍋が出土しており，Ⅳ期にかかる狼沢2号窯跡においては食膳具も含まれている。これらの「ロクロ土師器」の焼成施設は須恵器のような窖窯ではなく，石川県戸津窯跡〔小村ほか1983〕や糸魚川市小出越遺跡にみられるような焼成土坑〔鈴木1988〕であった可能性も考えられるが，生産の場は同じであったと考えられる。

このように想定してよければ，在地の須恵器生産が活発な時期のロクロ土師器の大部分は，須恵器と一体に生産されたと考えられる。在地で須恵器生産がはじまると，同時にその生産体制下で土師器の生産も開始され，在地の須恵器生産が衰退にむかうまでは，土器生産は須恵器と土師器が一体であったと考えられる。そして，須恵器生産が衰退すると，それにともない須恵器生産とは別の場でも土師器生産がはじまるものと考えられる。$Ⅳ_2$期の土師器甕は依然須恵器系胎土のものが非須恵器系胎土よりも多いことから，この時期の在地の須恵器生産はかなり小規模であったが，それと一体となった土師器生産は，この体制外の土師器生産よりは生産量が多かったと推定される。$Ⅳ_2$期より新しい9世紀後半から10世紀初頭の時期においては，新潟市小丸山遺跡や上越市今池遺跡などの状況からみて，須恵器生産と離れた土師器が盛行している。少なくとも食膳具の半数以上は土師器によって占められており，須恵器生産の衰退とそれと一体になった土師器生産の衰退が密接にかかわっていたことがわかる。この時期にはすでに従来の土器生産体制は崩壊しているといえよう。

佐渡ではロクロ土師器の煮炊具が存在しないため，小泊窯で須恵器と土師器が一体となって生産されることはなかったと考えられる。したがって，土師器食膳具が盛行する時期の越後においては，須恵器は小泊窯から供給され，土師器は在地で生産されるという，両者が分離した生産・流通体制と考えられる。

在地で須恵器・土師器の一体生産が8世紀から9世紀中葉まで基本的にみられるとすれば，こうした生産は律令期の生産体制といえよう。さらに一歩進めて，このような生産体制を支えうる勢力を在地で想定するとすれば，郡司層が有力な候補である[1]。律令体制のもとで土器生産の労働力を編成できるのは，公的に農民を徴発することが可能な郡司層であろう[2]。律令体制の変質・衰退にともなって，律令期の生産体制も崩壊してゆくことは，その生産を支えたものを暗示していると思われる[3]。

このような生産体制が北陸型煮炊具の分布する北陸地方全域で成立したかどうかはわからない。北陸地方中西部でそうした体制が考えにくい〔田嶋1987〕とすれば，それは6・7世紀から食膳具の主体を占めるほど須恵器生産が活発であったという歴史的背景の大きなちがいを考慮すべきであろう。また，越後においてもかならずしも一律ではなかったことも考えておくべきであろう。9世紀前半からのロクロ土師器食膳具の一定量の存在（頸城・今池遺跡），その時期の須恵器窯から離れた土師器専用の焼成施設の存在（西頸城・小出越遺跡），ロクロ土師器煮炊具の遅い普及（西頸城）〔坂井1988b〕などはそれを示している可能性がある。

1） 文献史学の立場からも，須恵器生産が郡衙とこれに連なる郡領層によって掌握されていたとする意見がある〔浅香1971〕。

2） 令規定のなかにこれを具体的に見い出すことは困難な一面はあるが，たとえば，雑徭，あるいは雑役の徴発・使役には郡司が直接当ったとされる〔岸1962〕。

3） 須恵器と土師器が同一の体制下で生産されたとすると，郡司層に掌握された土器工人が恒常的に存在したと考えられやすい。しかし，ここで想定しうる生産形態は，窯場と一体となった恒常的・通年的な工房や，それに付帯する恒常的な工人集落の存在を必ずしも認めるものではない。必要に応じて，集落内に住む土器作り手が郡司層により窯場の工房に動員されたことも考慮される。ただし，ひとつの集落内かいくつかの集落ごとに土器作り手の集団が存在し，彼らが自律的に土器を生産し，焼成にあたって窯場を共用するような状況は越後の阿賀北地方においては想定しにくい。

3．奈良・平安時代の遺構と遺跡

A．竪穴住居と掘立柱建物

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居約90棟，掘立柱建物27棟，土坑・ピット多数である。これらは8世紀初頭から9世紀後半までの間に営まれたものである。

1）竪穴住居の構造

もっとも多い遺構である竪穴住居の基本構造は，四角形の平面形で，数10cm掘り込んだものである。これに付属する遺構にカマド・柱穴・周溝などがある。本来，入り口があるはずであるが，調査では明らかにできなかった。90棟のうち，約80棟はほぼ規模が把握できた。

平面形　平面形は正方形ないしは長方形である。正確に正方形を呈するものは少なく，多くは長方形を呈する（第82・84図）。ただ，長方形といっても，短軸と長軸の差はあまりなく，長軸は短軸の1.2～1.3倍程度である。短軸と長軸の差が大きい例はSI12・SI401・SI502Bなど少ない。長軸は住居の主軸方向（カマドのある辺とその対辺に直交する方向）の場合が多い。カマドは南東辺，あるいは東辺に多く，長軸方向も東西方向，あるいは北西－南東方向のものが多い。SI12は南北方向に長い珍しい例である。古墳時代の住居は四辺が直線的でなく，外にふくらむ傾向があるが，この時代のものは直線的で，角も直角にちかい。ただし，SI15のように隅丸方形にちかいものもある。

規模　面積は最小約9㎡から最大70㎡までの格差がある。一辺の長さは約3ｍから約8ｍの差がある。9㎡は6畳にも満たないが，70㎡は40畳を越える広さである。もっとも多いのは10～25㎡未満のもので，59棟（約73%）を数える（第83図）。これに30㎡未満のものを加えると，全体の約80%に達する。一辺4～5ｍ前後の住居が標準的といえる。4ｍ×5ｍの住居（20㎡）であれば，約12畳である。ただし，これは掘り方の大きさであり，住居構造を勘案すれば，内部の空間はもっと狭いと考えられる。

竪穴住居の規模はそこに住む人の人数を反映すると思われるが，一方では居住者の階層によるとも考えられる。50㎡以上のSI610・SI1000では出土遺物に，とくに関連づけて考えられるものはないが，SI336には須恵器に大ぶりな稜椀や把手付鉢など，稀少な器種があり，注目される。また，SI1166（約50㎡）とSI640（約40㎡）からは小さい帯金具の丸鞆・刺金が，SI429（約45㎡）からは和同開珎が出土している。また，全容は不明であるが，柱穴のあり方からⅠ～Ⅱ期の大型のものと推定される，SI1300からは銅製品が出土している。これらはいずれも埋土下層から出土しており，元来住居に伴う可能性が強い。帯金具や和同開珎は一定の有力階層の所有にかかるものであろうから，大型の住居は一定の有力階層の住まいと考えられる。具体的には有力郷戸主クラスであろう。

カマド　カマドはおおよそ一棟の竪穴住居につき一基存在する。全体が残る竪穴住居で明確にカマドをもたないものは，SI81・SI325・SI80など少ない。これらはいずれも20㎡以下のものである。しかし，約9㎡のSI74にはカマドがあり，小型のものは一様にカマドをもたないわけではない。カマドの位置はほとんど住居の南側から東側にある。例外として北西側にあるのがSI71である。これ以外はすべて共通しており，規則性がある。竪穴住居にカマドが出現する古墳時代後期以降の県内の集落例もカマドの位置は住居の南側から東側である（第90図）。こうした規則性についての解釈はいくつか考えられるが，ひとつに風向きの問題がある。越後では冬期の北西の季節風がとくに強く，これを考慮してカマドの位置を決めた

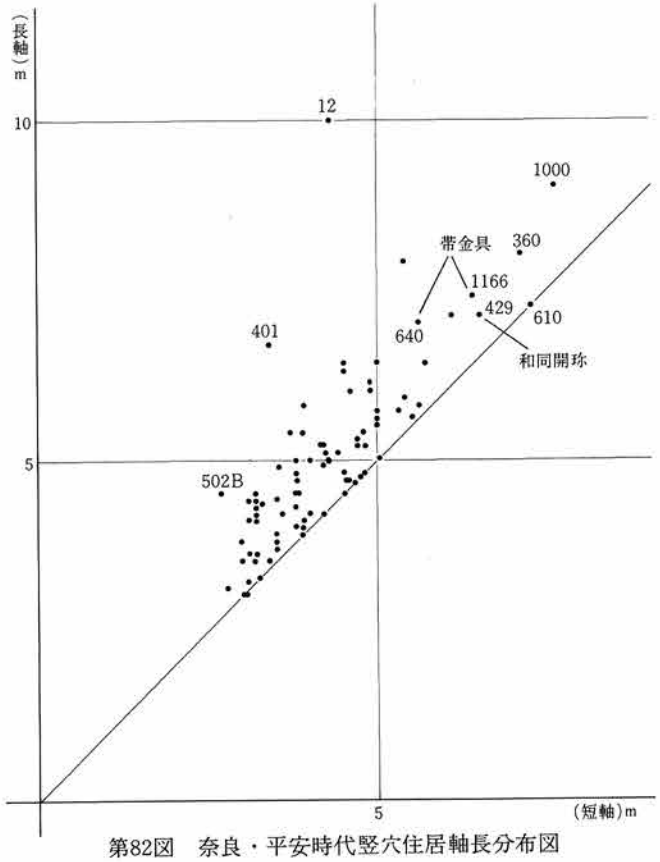
という考え方である。これが妥当であるかどうかは各地の事例を検討する必要があろう。また，もうひとつには方位に関する何らかの考え方や思想によるとの解釈もできよう。いずれにしろ，一定の規則性のもとでしつらえられている。

カマドは住居の南側から東側に存在するが，一辺の中央に位置することはほとんどなく，どちらかによっていたり，コーナーに位置する。

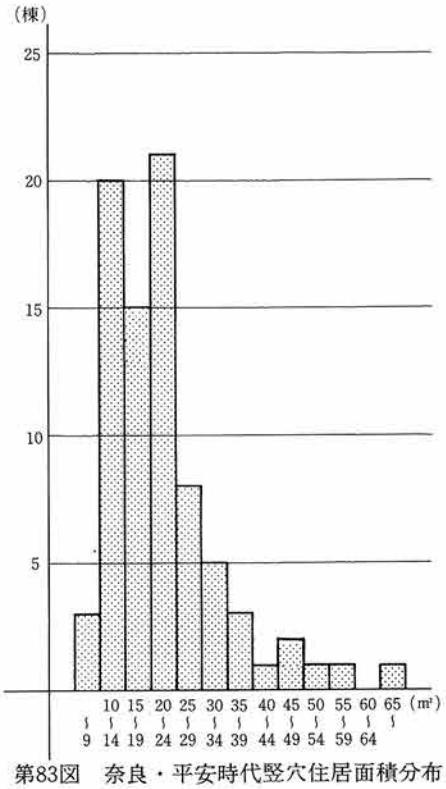
砂丘上に立地するなかで，カマドは粘土まじりの土で構築されており，その存在は調査時によく確認できた。しかし，具体的な構造となると，よくわからない部分が多い。そうしたなかで，ＳＩ20のカマドはきわめて遺存状況がよく，その構造をよく示していた（第31図）。両袖にはカマドの芯として土師器長甕１個体ずつを倒立状態に入れ，たき口の上部に長甕を入れていた。上部に長甕を入れた例は少ないが，袖に入れている例は多い。また須恵器の杯が逆位に置かれた状況で検出された例がいくつかある。

カマドの芯としては新井市栗原遺跡〔坂井1983c〕，青海町須沢角地Ａ遺跡〔土田ほか1988〕などのように川原石を用いる場合があるが，本遺跡では砂丘のため川原石をふんだんに入手しにくいため，使用済みの土師器を再利用したものと考えられる。粘土もどこかからか採取し，運んできたものであろう。支脚については川原石を使用しているのが多い。土製支脚はほとんどみられない。石の支脚には長細いものを用い，カマドの床面に半分ほど埋め立ててる。床面には粘土まじりの土は敷かず，砂をそのまま使用している。

カマドでもっともわからなかった部分は甕をかけるカマド上部の穴と煙道である。調査によってこれらが確認できた例はほとんどない。煙道についてはＳＩ5やＳＩ1461などのようにカマドが住居の外側に明瞭にのびているものがあり，これが煙を住居外に導く煙道の可能性がある。こうした外側への張り出しがな



第82図　奈良・平安時代竪穴住居軸長分布図



第83図　奈良・平安時代竪穴住居面積分布

第84図　竪穴住居一覧図

（掘立住居は時期と対応しない）

いものはすべて上部の削平によって煙道が破壊された可能性もあるが，本来煙道をもたないカマドもあったのではないかと推定される。時期的にはSI 5やSI 1461のようにI～II期の古いものに煙道と考えられる張り出しがあることは，古い段階には伝統的なカマドの構造をもっていた可能性も示唆する。それは後述する柱穴や平面形の変化ともかかわっているように思われる。

土製品の土管についての用途は不明であるが，カマドと関連した道具との見方もできよう。それはカマド出現とともに筒状の土製品が出現するが，ここでいう土管との形態的類似が考えられるからである。6・7世紀の筒状の土製品は上越市一之口遺跡〔坂井ほか1986〕，同山畑遺跡〔小島1979〕，新発田市馬見坂遺跡〔新潟県史編纂室1982〕などで散見される。これらには段はみられないが，土管は有段でソケット状になり，複数のものをつなげられる構造になっている。表面にはススの付着はみられないが熱を受けたものもある。出土状況も積極的にカマドとは関連づけられないが，ひとつの見解として提示しておきたい。

柱穴　柱穴はすべての竪穴住居にみられるものではない。むしろ柱穴がないもののほうが多い（第84図）。面積40m²以上の大型のものにはほとんど柱穴が伴っている。これには床面中央に4本の主柱穴をもつものともたないものがある。SI 115・SI 610・SI 1166は主柱穴をもつが，例は少ない。これらはおもにI期からII期にかけての古い時期にみられることが注目される。主柱穴以外には壁のちかくにある壁柱穴と，床面上にある小さな柱穴がある。大型で主柱穴をもたないタイプに床面に小柱穴がみられる（SI 1000・SI 1315・SI 360）。

30m²以下の小さなものはまったく柱穴をもたないものが多い。しかし，I期からII期にかけての時期には，25m²以下のものでも柱穴をもつ例が多い。たとえばSI 458は14m²とかなり小さいにもかかわらず，9つの柱穴をもっている。さきの主柱穴のあり方を勘案すると，I期からII期にかけての時期と，それ以降では柱の構造が変化したことがうかがえる。8世紀前半頃までの大型住居は主柱穴を配し，小さいものでも柱穴をもつという構築方法が，のちには大型住居の主柱穴を省略し，小型のものについては柱穴をもたないような方法に変化している。これにともない住居の構造も変化しているものと考えられる。このことはI期に正方形の平面形のものが多いこととも関連していると考えられる。II_2期以降は相対的に柱穴が少なくなり，長方形の平面形をとるようになっているのであり，伝統的な住居構造から脱したとも評価できよう。

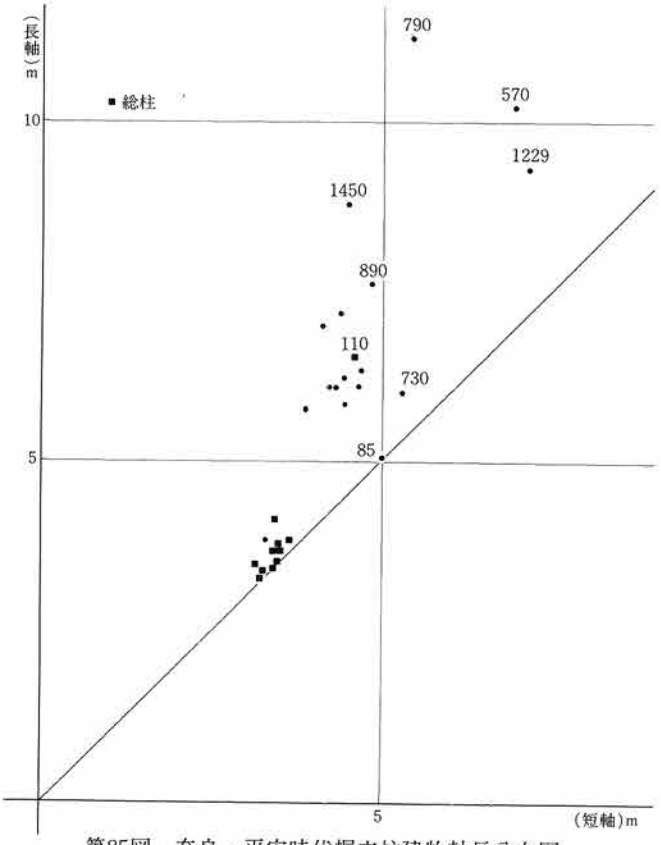
周溝　周溝も柱穴と同様にすべての住居にみられるものではない。ただし，周溝の有無は柱穴のように規模や時期などとの明確な関連をよみとれない。また，その機能についてもかならずしも明らかではないが，SI 1000では埋土から周溝の部分に板材が本来存在し，その内側から粘土まじりの土でその板材をおさえていることが判明した。住居内部の「周堤」ともいうべきもので，周溝部分には壁と一体となった部材が入っていたと考えられる。

2）掘立柱建物と土坑

竪穴住居は時期の変遷のなかで，大型のものがなくなってゆく（第84図）。50m²以上のものは，SI 360がもっとも新しい。この時期は新しくともIII_1期である。III_2期以降には最大でもほぼ30m²を限度とし，大型の竪穴住居がなくなる傾向は顕著である。ここで，注目されるのが掘立柱建物である。

掘立柱建物　掘立柱建物は27棟ある。掘立柱建物には束柱をもつ総柱建物とこれをもたないものがある。前者は床束をもつ高床式と考えられ，11棟ある。これらは2間×3間のものが1棟みられるほかは，いずれも2間×2間の小規模なもので，面積は15m²未満である。この大きさと高床式の構造からみて，これら

の総柱建物は居住用の建物ではなく，倉庫と考えられる。他方，束柱をもたない建物は梁間２間（有廂のＳＩ1229はこれを含めて３間），桁行は２間から４間で，面積は25㎡から66㎡である。これらは居住用の建物と考えてよいであろう。したがって，束柱をもつ建物は高床式倉庫（以下「倉庫」とする），束柱をもたない建物は居住用の建物と考えられる。ここでは居住用の建物については，竪穴住居と対比する意味で，かりに「掘立住居」とする。掘立柱建物の時期は出土遺物の多い竪穴住居とちがい明確でないものが多い。柱穴出土の土器や竪穴住居との切り合い関係で，時期がおおよそわかるのは，ＳＩ1229・ＳＢ790・ＳＢ730（IV_2期以降），ＳＢ1161・ＳＢ870・ＳＢ570（IV_1期以降）などである。他のものについては不明で，倉庫についてはほとんど確認できない。しかしながら，掘立住居はⅣ期以降のものがかなり存在するのに対し，明確に古いものが確認できないことから，相対的に新しい時期のものが多いと推定される。ここで前述した大型の竪穴住居がIII_2期以降なくなることを想起すると，大型の竪穴住居にかわって掘立住居があらたにつくられるようになったと考えられる。竪穴住居の規模と時期をみるとき，III_2期以降の大型の竪穴住居を掘立住居が補っていることが理解される。一定の有力階層はIII_2期以降，すなわち９世紀前半には竪穴住居に住まなくなり，掘立柱建物を建てて住むようになったと考えられる。

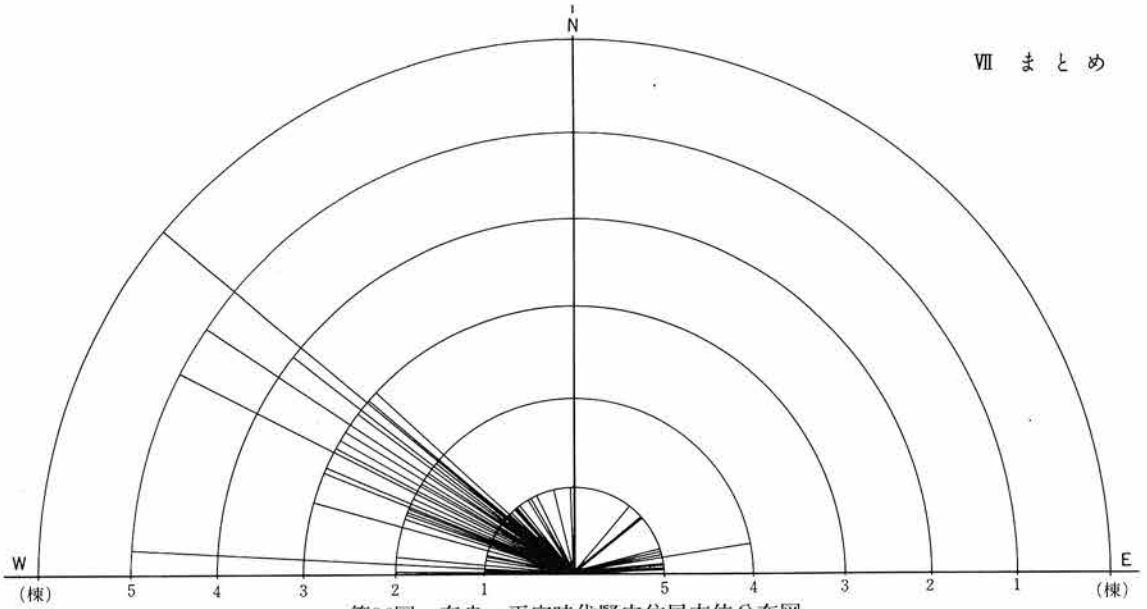


第85図　奈良・平安時代掘立柱建物軸長分布図

土坑の性格　奈良・平安時代には大きな土坑が目立つ。平面形は円形で，直径1～2.5m，深さ数10cmから1.5mほどで，断面はすり鉢状のものである（図版42）。これらの時期は出土土器からみて，おおよそⅠ期ないしはII_1期である。しかも分布は調査区中央から南東側縁辺に多い。土坑の性格と機能についてはよくわからないが，とくに何かを埋納した状況ではなく，塵芥穴かと推測される。したがって，集落の形成からまもない時期には，塵芥の処理にあたっては，穴を掘ったことが想定される。これらの土坑がⅠ期からⅡ期の住居に近接して存在することはそれを裏付ける。一方，II_2期以降にこうした形態の土坑がなくなることは，他に塵芥の処理をしたことを示す。おそらく，すでに放棄されていた竪穴住居の落ち込みがそれにあたると思われる。大型のＳＩ360に近接するＳＩ339は，20㎡ほどの平均的な住居でありながら，鉢・稜椀・壺蓋・特殊蓋など，稀少で多様な器種が目立つ。これは本来ＳＩ360などで使われたものが，すでに廃棄されていたこの住居「跡」に棄てられたことによると考えられる。

B．遺跡の変遷（第87・88図）

竪穴住居と掘立柱建物は調査区のほぼ全域に分布するが，分布の疎密がみられる。竪穴住居は砂丘の中央部に近い調査区の北側に少なく，中央部にもっとも集中し，内陸側の湿地に落ち込む南側もまた少なく



第86図　奈良・平安時代竪穴住居方位分布図

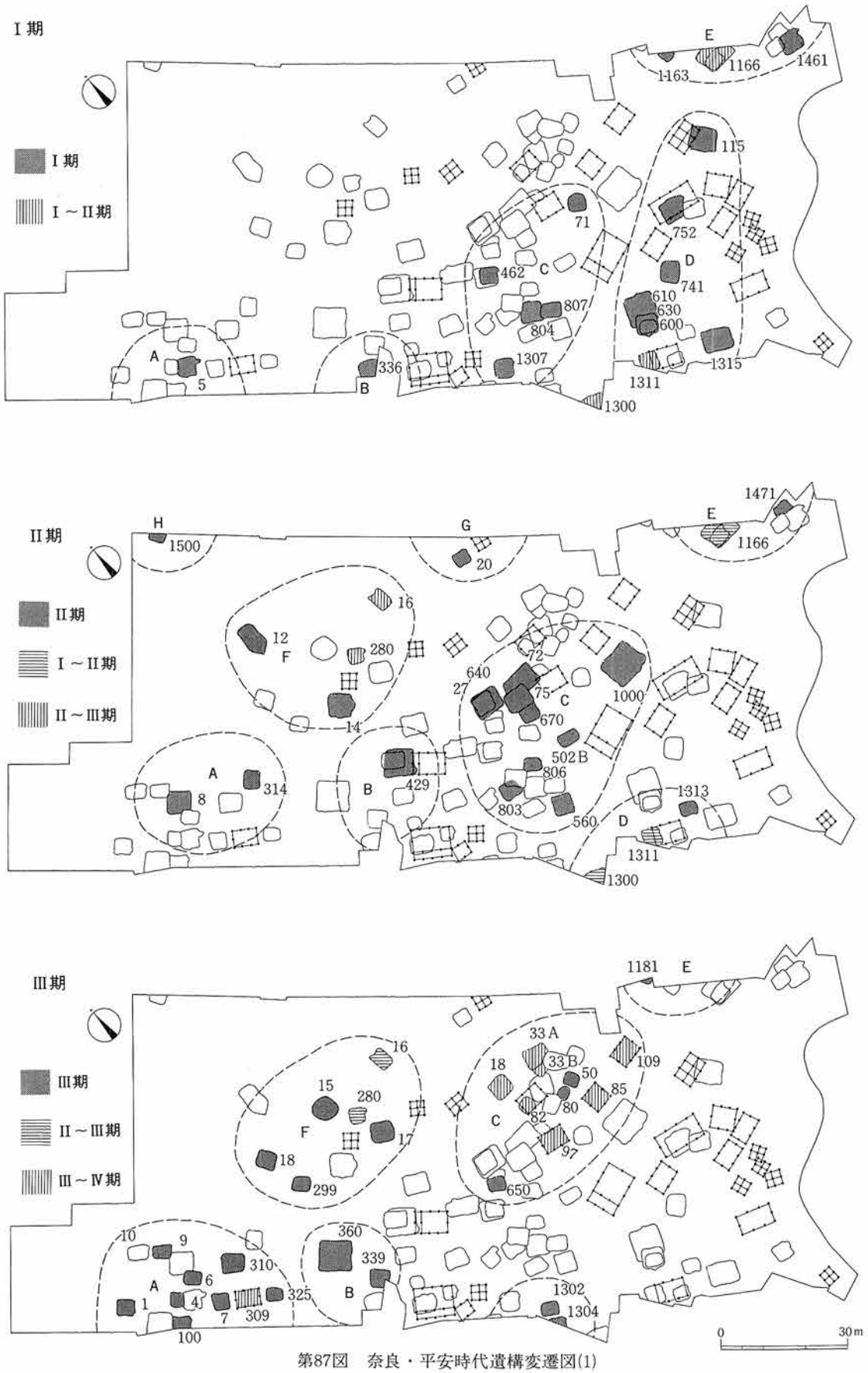
なる。中央部の密集部分は重複が多い。調査区内だけの分布から見れば，南西側と東側にさらに集落がのびるものと推定される。竪穴住居の方位（主軸方向）は第86図のような分布を示す。これを見ると，北から45度前後西にふれた方向，すなわち調査区のグリッド方向にほぼ一致するものが多いことが分かる。これについで西に近いものも多数みられる。

掘立柱建物のうち，総柱の倉庫は調査区中央に１棟のみ分布するが，竪穴住居が少ない北側と南東側縁辺部にそれぞれ群をなす。北側にはSB355・SB262・SB252・SB1570の４棟があり，南東側縁辺部にはSB110・SB1370・SB1165・SB1535・SB1162・SB604の６棟がある。集落全体に散在するのではなく，その縁辺部に集中的に分布することは，村落構造を考える場合とくに重要なことである。束柱をもたず住居と考えられる掘立柱建物，すなわち掘立住居は倉庫とはことなり，かなり広く分布する。ただし，調査区中央部より南東側に比較的多い。掘立柱建物の方位は様々であり一定の規則性は看取できない。長方形の平面形を呈する掘立柱建物の場合，長軸となる桁行の方向はおおむね東西方向か，北西－南東方向である。このことは長方形を呈する竪穴住居の方向と一致することが留意される。

さて，個々の遺構の時期であるが，前述の検討から遺構の構成は「竪穴住居（大型・小型）＋倉庫」から「掘立住居＋竪穴住居（小型）＋倉庫」に変化することが推測された。第87・88図は竪穴住居を主にしたⅠ～Ⅳ期の変遷である。時期の比定は出土土器によったが，竪穴住居が使用された時期を明確にすることはなかなか容易ではない。まして同時に存在したものを抽出することは難しい。ここでは大まかな時期比定により，遺構の変遷をたどることにしたい。

Ⅰ期　約20棟の竪穴住居があり，比較的多い。調査区の西側には１棟のみで，中央部から東側に多い。おおよそ，A～Eの５群に分けられる。A・B群は１棟ずつであるが調査区以外に近接して同時期のものが存在するものと推定される。棟数はC・D群が６棟以上で多いが，これらにⅠ期でも新しい傾向を示す住居がいくつか含まれており，同時に存在したものは３～４棟と考えられる。

Ⅱ期　20～25棟の竪穴住居がある。Ⅰ期に形成されたA～E群の５群の中にF・G・Hの３群があらたにでき，広い範囲に分布する。調査区端にあるE・H・G群は他の群よりかなり離れており，群としての把握は容易であるが，全体はよくわからない。A群はⅠ期の１棟から２棟になる。SI429は一応B群としたが，１棟のみで群をなさない。ただし大型である。C群はⅠ期にひき続き数が多く，10棟前後を数える。大型住居であるSI1000が群からやや離れた位置にあり，別に把握される可能性もある。またC群はさらに北側と南側の２つに細分できる可能性もある。Ⅰ期にかなりの数が存在したD群は中心が調査区端に移



第87図　奈良・平安時代遺構変遷図(1)

第88図　奈良・平安時代遺構変遷図(2)

動する。II期で問題なのは相対的に新しいII$_2$期の遺構が少ないことである。SI14・SI75はこの時期と考えているが，これら以外では明確でなく，群そのものが継続したかどうかははっきりしない。

III期　20～25棟の竪穴住居がある。この時期の後半（III$_2$期）には掘立住居が出現する可能性が強い。A群はI・II期よりも著しく増加する。これらは竪穴住居の方向もほぼ一致しており，はっきりとした群をとらえることが可能である。A群についてはIII期以外もすべて方向が一致する。この群にはSI4・SI1100という2棟の鍛冶工房が含まれている。I・II期では鍛冶工房は検出されていないが，鉄滓・フイゴ羽口の出土から近くに存在したものと推定される。掘立住居のSB309はこの時期から次のIV期にかかるものであろう。B群はSI360とSI339の2棟のみで，依然数が少ない。SI360は55m²を越える大型住居で，SI429との系譜が考えられる。C群はII期で南北に二分される傾向にあったが，この時期にはC群とI群の2つに明確に分離する。I群は調査区端にありよく分からないが，他の群からはかなり離れており，群として把握しやすい。C群にはIV期に入る可能性のあるものもいくつかある。3棟の掘立住居が並ぶSB97・SB85・SB109にはこの時期に含まれるものもあるであろう。II期に存在したD群・G群・H群は調査区端に位置することもあってか確認されていない。E群は調査区端に1棟のみ確認される。

IV期　20棟前後の竪穴住居がある。掘立柱建物にはこの時期に比定できるものが多く，6棟以上が確認される。III期からのA・B・E群のほかにJ群がある。III期にあったF群・I群はなくなり，あらたにJ群が形成される。A群はSI1101の1棟のみでIII期に比し，著しく減少する。B群は7棟の竪穴住居のほかに，大型の掘立住居2棟を含む。1棟のみ存在する倉庫のSB1241はSB1229と方向がほぼ同じで近接することから，この時期に入る可能性が考えられる。SB1229はIV$_2$期のSI1202を切っており，相対的にもっとも新しい時期のものである。この群はIII期のB群を継承するものかどうかは不明である。SI840は鍛冶工房である。C群はIII期とほぼ重複する位置で，それを継承したものと考えられる。この付近の4棟の掘立住居のうち少なくともSB100だけはこの時期に含まれる。E群はIV$_2$期の2棟がある。IV$_1$期のものは確認できない。B群とならんでIV期の中心をなすのがJ群である。竪穴住居は2棟のみであるが，掘立住居のSB570・SB790・SB730・SB1161は出土遺物や切り合い関係から，この時期に確定できるものである。この他の3棟の掘立住居であるSB770・SB1199・SB1450もこの時期に含められる可能性が強い。III期にはこの付近に竪穴住居はまったく営まれておらず，掘立住居だけが単独で存在することはあまり考えられない

からである。掘立住居のなかにはSB570・SB790のように50㎡を越えるものが含まれている。 SB790はIV2期のSI753を切っており,SB1229と同様にもっとも新しい段階に比定される。IV2期に限ってみれば，B・J・Eの3群のみである。内容から見て、B群・J群が有力グループとみなされる。

以上，I～IV期の区分にしたがって，遺構の変遷を概観したが，それぞれの時期に20棟前後の竪穴住居と掘立住居が存在することが判明した。しかし，それぞれの時期は30年から50年ほどの時期幅があり，土器だけから言えば細分可能なものである。竪穴住居の使用年数は20～25年程度に見積もられることから，同じ時期であっても，同時に存在したかどうかはわからない。しかし，それを考慮してもなお，竪穴住居と掘立住居はいくつかのまとまりをなすものが多い。それは「竪穴住居小グループ」〔鬼頭1976〕と称されるものである。1グループの竪穴住居の数は全容が把握されていないこともあって必ずしも明確ではない。ただ，近接する2～4棟が一つの単位として把握される例が多いようである。また50㎡以上の大型の住居は1棟のみ他からやや離れて存在する傾向もみられる。

掘立柱建物のうち，倉庫の時期はほとんど明確でない。そのため，これが竪穴住居のグループとどういった関係にあるのかよくわからないが，注目されるのは個々の竪穴住居のグループが必ずしも倉庫を伴わないことである。SB1241のみIV2期の大型掘立柱建物のグループに伴う可能性があるが，これをのぞいた倉庫は竪穴住居が集中する範囲の縁辺に分布し，特定の竪穴住居グループには伴わないと考えられる。このように考えてよければ，この集落における倉庫はIV2期（9世紀後半前後）をのぞいて竪穴住居のグループに所有されるものではなく，これより大きなグループ，もしくは集落全体にかかる施設といえよう。仮に倉庫が住居グループと重複しないとすれば、F群・G群と近接する4棟はI・IV期，D群・J群と近接する6棟はII・III期に存在したと考えることもできる。従来の集落研究ではこの倉庫のあり方により，集落構造や経営単位が考えられてきたが，このように竪穴住居のグループに倉庫が伴っていない状況は，竪穴住居のグループが農業経営として充分な自立性をもっていないことを示していよう〔鬼頭1976〕。後述する律令期以後の集落と対比すればその違いは明確である。

倉庫とならんで注目される遺構は井戸である。本遺跡では井戸は1基も検出されていない。県内の他の遺跡例からみて，おそらく8・9世紀の竪穴住居を主体とする集落では，井戸をもたないのが一般的であったと考えられる。飲料水は不可欠であるから，本遺跡では砂丘縁辺部の湧水を集落共同で利用していたことが予想される。律令期以後の集落では建物などの単位ごとに井戸をもつものが確認され，飲料水の確保方法にも大きな差が認められる。井戸を掘って水を得るという作法が普及することが注目されるとともに，「家」ごとに水を得るという基本的理念のあらわれもまた，倉庫と同様に「家」の「自立」を示す重要な指標と評価できよう。

4．古代集落としての山三賀Ⅱ遺跡

A．成立とその背景

山三賀Ⅱ遺跡は砂丘上に営まれた奈良・平安時代の集落跡である。今回調査したのは13,600㎡であるが，集落跡全体からみればその一部にすぎない。そのため，この集落についてさまざまな問題を分析することはむずかしい。しかし，今回の調査成果をまとめ，若干の考察を述べておきたい。遺跡についてこれまで述べてきた成果は，以下のようにまとめられる。

1．遺跡は８世紀初頭に成立し，９世紀後半に衰退する。この間の約 200年間，連続して集落が営まれる。８世紀初頭に集落が成立する前は２世紀以上無住の地であり，９世紀後半以降も近世前期まで無住の地であった。

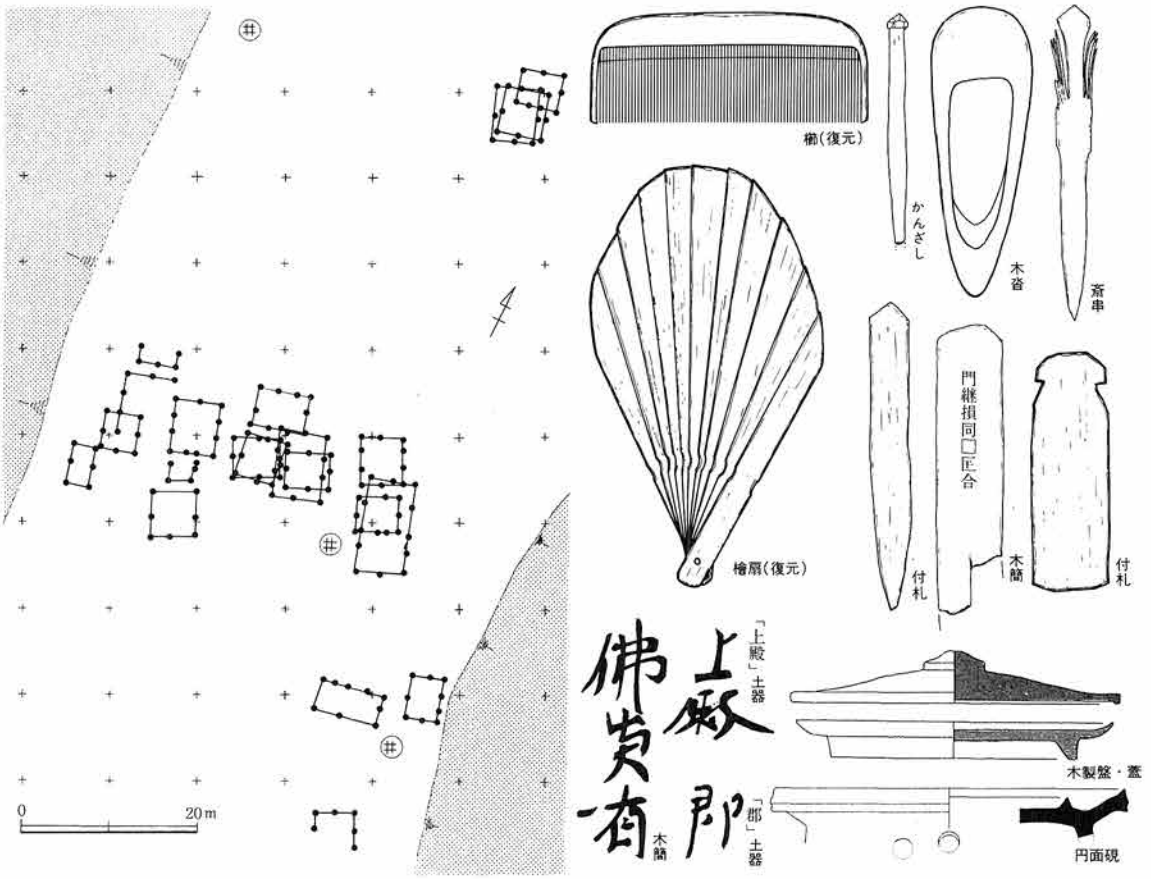
2．遺跡はおもに竪穴住居と掘立柱建物から構成される。掘立柱建物は小規模な高床式倉庫と住居（掘立住居）がある。８世紀代までは住居はすべて竪穴住居からなり，９世紀以降，大型の竪穴住居にかわって掘立住居が出現する。高床式倉庫はどの時期にも存在すると推定される。井戸はまったく存在しない。

3．出土遺物には，帯金具８点，和同開珎２点がある。帯金具の大きさからみて，７位～８位の有位のものが居住していたと考えられる。墨書土器は約20点あるが，一文字のものが多く，硯は杯蓋を転用したものだけである。

4．鉄製農工具（鋤鍬先・鎌など）の出土から，農耕集落と考えられる。また鉄滓・紡錘車の出土から集落内で鉄製品と布の生産をおこなっていたと考えられる。

性格　以上の点から，遺跡の性格は有位者を含む農民の集落と結論づけられる。このことは同じ沼垂郡内にある豊浦町曽根遺跡（第89図）との比較から，明確に導くことができる。曽根遺跡は福島潟の湖岸砂丘上に立地した奈良・平安時代の官衙関連遺跡である。この遺跡は出土土器からみて，８世紀前半に成立し，９世紀末葉には衰退する。時期的にまさに本遺跡と重なり，立地条件も砂丘という点で共通している。このような共通点がある反面，遺構・出土遺物のあり方はかなりことなっている。まず，遺構は掘立柱建物ばかりで，竪穴住居は一棟も検出されていない。そして井戸が７基存在する。遺物には墨書土器が 280点もあり，意味・内容がある程度判明するものも含まれている。なかでも「郡」・「上殿」などは注目される。硯には円面硯が数点含まれている。また，きわめて豊富な木製品がある。木簡・荷札・桧扇・櫛・斎串・木沓・かんざし・盤・蓋などである。これらの点からみると曽根遺跡は一般集落ではなく，官衙に関連した性格と規定することができる。そして，木製品は別にして，両者の遺構・遺物の内容を比較すれば，山三賀Ⅱ遺跡は地方官人になりうる有位者が居住していたとしても，官衙に関連したものではなく，農耕集落ということができる。本遺跡では８世紀代の住居はすべて竪穴であり，９世紀においても住居の多くは竪穴である。硯は円面硯は１点もなく，墨書土器にしても内容が貧弱である。

成立背景　この集落は８世紀初頭に突如として砂丘上に出現する。調査区内の状況からみると，ここには少なくとも古墳時代中期以降２世紀以上の間，人々が住んだ形跡はない。それでは８世紀初頭に集落が成立する要因は何であろうか。この問題について考えるためには，集落の存在する地域的条件，集落が成立する時期（歴史）的条件，そして集落の立地条件（環境）を明確にする必要があろう。時期的な条件は当然地域的条件と密接にかかわるところである。



第89図　曽根遺跡の遺構・遺物　〔家田ほか1981・1982原図、改変〕

第一に地域的条件。この集落は古代において，越後国沼垂郡に存在した。沼垂郡は大化３年（647）に畿内王権により渟足柵が設置された地域である。翌年には渟足柵のさらに北側に磐舟柵が設置され，７世紀中葉に阿賀北地方に畿内王権の支配が強く及んだことがわかる。そしてこのことは，阿賀北地方がそれ以前においては畿内王権とのかかわりが相対的に薄く，阿賀野川の南までの地域と明確に一線を画す地域であったことをはっきり示す。阿賀北地方は畿内王権にとっては「辺境」であり，「蝦夷」として位置づけられていたのである。『書紀』大化４年条によれば，畿内王権は磐舟柵戸を置き，越と信濃の民を配置しており，「植民」により辺境の開発にあたったことが知られる。沼垂郡の３つの郷のうち足羽・賀地の２郷はともに越前国に起源をもつ郷名であり，実際に移住があったことが推定される。

第二に時期的条件。８世紀初頭の時期は，この地域が律令体制に組み込まれ，安定してゆく時期である。持統朝の690年頃に越国が三分され[1)]，阿賀北地方は越後国となり，大宝２年（702）には阿賀野川の南の蒲原・古志・魚沼・頸城の越中国四郡が越後国に編入され，律令体制下の地方行政組織が安定する。持統４年（690）には飛鳥浄御原令の戸令にもとずく庚寅年籍の作成を契機にして，全国的に国郡里制が施行されたとされ〔原1976〕，大宝２年には大宝律令が天下諸国に頒布され，ここに律令体制の確立をみる。本遺跡が成立するのはまさにこの時期なのである。

第三に遺跡周辺の立地条件。古代の集落が存在した時点での周辺の土地の状況であるが，遺跡が立地する砂丘の内陸側は広大な低湿地が広がっており，水田として利用できる土地ではなかったと考えられる。

1）持統４年（690）に作成された庚寅年籍の時点で広大な越国が三分された可能性も考えられる〔坂井1983c〕。

現在この地は一面の水田地帯であるが，ここが水田化されたのは近世前期（17世紀中葉）の加治川の分水路である聖篭新川の開削によると考えられる（第Ⅱ章４Ａ）。それまでは湛水部分をかなり伴う沼地に近い状況であり，水田には不適当な土地であったはずである。したがって，砂丘上は洪水に見舞われることはなく居住に適してはいたものの，水田による農業生産で生活を営む場合，水田は砂丘の内陸側に沿ったところではなく，東側の沖積地の中央に求めなければならなかったと考えられる。水田と集落との往来はもちろん船によっていたのであろう。

以上の諸条件を勘案するとき，在来の農民が自発的にこの地を選び住んだとはとうてい考えられない。あくまで農業生産を基盤に考えた場合，この土地の生活条件はけっしてよくない。したがって，８世紀初頭の無住の地に集落が成立するその背景に，農民の自律的な要因よりも何らかの外的要因が考えられる。その時期と地域性を重視すれば，律令国家の確立との強い関連性が想定されるのである。

ここで，沼垂郡という地域性を強調するならば，この集落は「柵戸」のような性格であり，その構成員は他地域の人々の移住によるもの[1)]と考えることもできよう。しかし，この集落の成立は大宝２年以降とみられ，すでに律令制のもとに沼垂郡が機能していた時期であり，渟足柵は城柵としての機能を停止していたものとみられる。したがって，この段階で成立する集落を「柵戸」としてはとらえられない。そして，この集落が出羽に対する東北経営と直接関連したものとの積極的な評価も，また妥当でないと思われる。東北経営に必要な軍事力，たとえば兵士・武器・食料等の供給源としての集落であるならば，もっと鉄器生産にかかる鍛冶工房があってよいだろうし，なによりも８世紀前半から９世紀後半までの間，継続して営まれる必然性はないであろう。むしろ，農耕村落であったがゆえに，９世紀後半まで再生産により維持されたといえよう。

このようにみてゆくと，律令国家がこの集落を編成した目的は，この地域の生産力を高めるための開発に主眼をおいたものであったと考えられる。この砂丘上には本遺跡ばかりではなく，かなり多くの集落遺跡が存在している。そして，これらの遺跡の多くが，本遺跡とほぼ同じ時期に成立していると予想されることから，８世紀初頭から前半の時期に，この周辺の地域の集落が一円的に編成されたものと考えられる。

８世紀初頭に出現するこれらの集落は，その成立背景からみて，当然律令制のもとに支配されたであろう。農民は戸籍により掌握され，租税が果せられるとともに，班田収授法により口分田を班給されたはずである。日本の班田制は「農民の水田にたいする権利の弱さを前提としている」〔吉田1976〕といわれるが，この山三賀のように耕地と集落が一体とはならず，かなり距離的に離れていたことはそれを象徴しているように思われる。逆に言えば，この集落はこうした班田制を実現することを前提に設定された集落であり，その設定にあたって律令国家は農民の律令的支配のための編戸（五十戸一里制）などを考慮したはずである。したがって，この集落は律令国家によって編成された律令制下村落の典型例といえる。律令制のもとに編成された集落であれば，律令体制の変質・弛緩とともに９世紀後半に衰退してゆくことも自然であろう。

1）他地域からの移住については，出土遺物や遺構のなかに，地域を特定できるようなものはとくにみられない。沼垂郡では足羽・賀地の郷名から，北陸道西部の越前国に出自をもつ人々の移住は十分考えられるところであるが，遺構・遺物に地域的特徴を見い出すことはかなりむずかしいことと思われる。そのため，この集落の出自を他国に求めることが妥当かどうかは，現段階では判断できない。いずれにしろこの集落の構成員は律令国家の政策のもとに，他の土地からこの地に移住したものであろう。

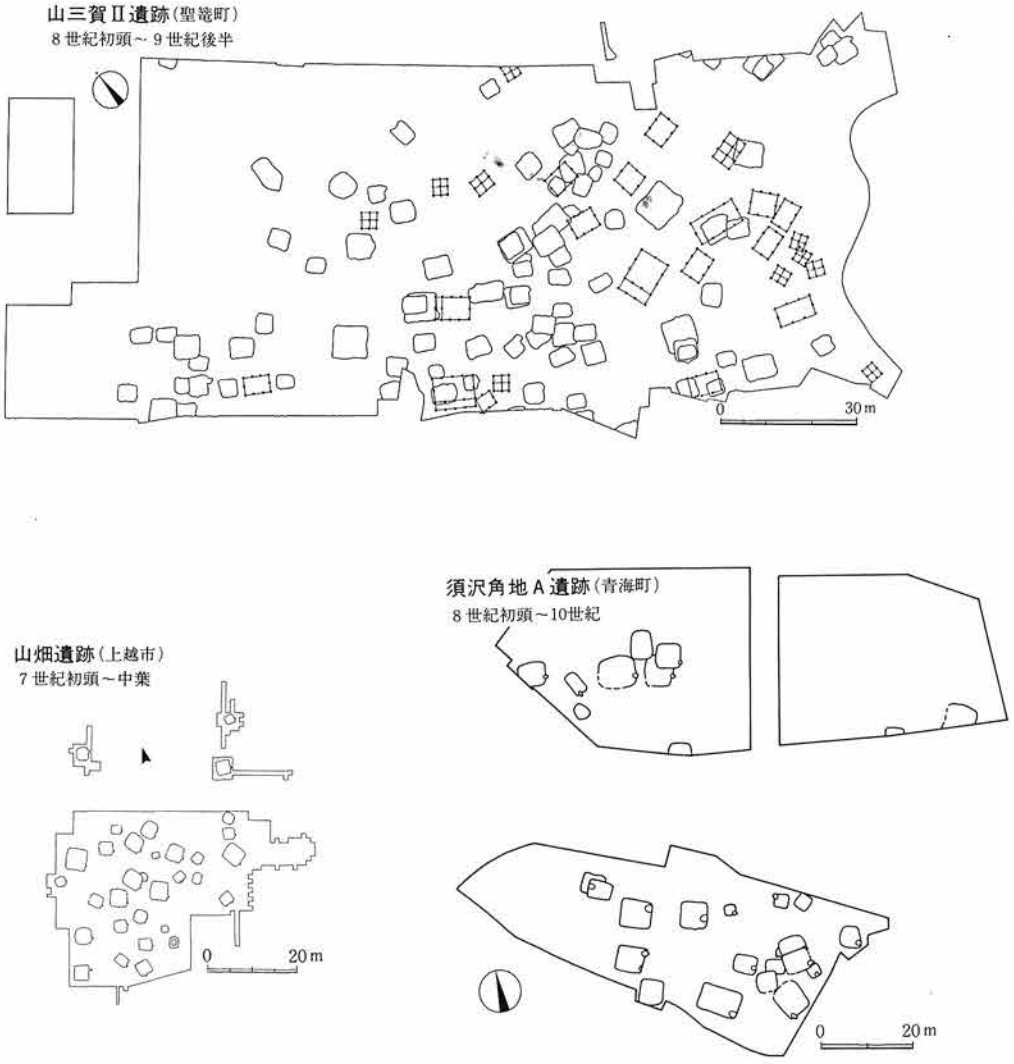
B．山三賀Ⅱ遺跡と県内の古代集落遺跡

律令期の集落　本遺跡は律令国家との強い関連のもとで生れた集落と考えられるが，このような集落は越後の古代集落のなかで，どのように位置づけられるであろうか。沼垂郡という地域的特性により，これを特殊な集落とみることができるであろうか。以下，県内の古代集落遺跡の事例を検討することにしたい。

県内の古代遺跡の調査は必ずしも多くはないが，竪穴住居を主体にした遺跡はいくつかある。代表的な例は上越市山畑遺跡〔小島1979〕，同一之口遺跡〔新潟県教育委員会1986〕，十日町市馬場上遺跡〔十日町市教育委員会1975・1976〕，青海町須沢角地Ａ遺跡〔土田ほか1988〕などがある（第90図）。山畑遺跡・一之口遺跡は古墳時代後期の遺跡で，馬場上遺跡・須沢角地Ａ遺跡は奈良・平安時代の遺跡である。本遺跡と同じ奈良・平安時代の２例はいずれも８世紀前半には成立し，10世紀代には廃絶する。馬場上遺跡には居住用の掘立柱建物があるが，須沢角地Ａ遺跡ではこれが明確ではない。いずれにしろ竪穴住居を主体にし，100年から200年は継続して営まれており，構造は山三賀Ⅱ遺跡ととくにかわるところはない。ここで注目されることは，本遺跡とほぼ同じ８世紀前半に同じような竪穴住居を主体とする集落が形成されていることである。馬場上遺跡は古代律令制下の魚沼郡，須沢角地Ａ遺跡は頸城郡にあり，ともに阿賀北地方のように「辺境」とされている地域ではない。この２例をもってすべてを推測することは危険であろうが，阿賀北地方に限らず，越後においてはこの時期が集落形成のひとつの画期であることが考えられる。そして，10世紀にはこのような集落が衰退してゆくという傾向も同様にうかがうことができる。10世紀以降にはこのような竪穴住居が群をなす比較的規模の大きい集落はもはや成立することはない。したがって，これらの集落について，８世紀前半という成立時期に着目するならば，前述の山三賀Ⅱ遺跡と同様に律令体制との関連でとらえることが可能であろう。それは律令体制が崩壊するとされる９世紀末から10世紀にこれらの集落が廃絶することとも表裏一体といえる。このことは律令体制と一体ともいえる官衙遺跡も８世紀前半に成立し，９世紀後半以降衰退してゆく動向とも関連し考慮されることである。以上の点から，山三賀Ⅱ遺跡のように竪穴住居を主体とした集落は越後における８・９世紀の律令期集落の典型といえる。

律令期以後の集落　山三賀Ⅱ遺跡が衰退・廃絶する９世紀後半以降の集落遺跡はどのように展開するのであろうか。まず注目されることはこの時期の遺跡のあり方である。それは全県的に９世紀後半以降の遺跡数が著しく増加することである。これまでに調査された遺跡例もこの時期のものが多いし，分布調査で把握される状況も同様である〔坂井1985・坂井ほか1986・坂井1987〕。このような遺跡数の増加はおそらく山三賀Ⅱ遺跡のような大規模な集落の解体と密接にかかわるであろう。

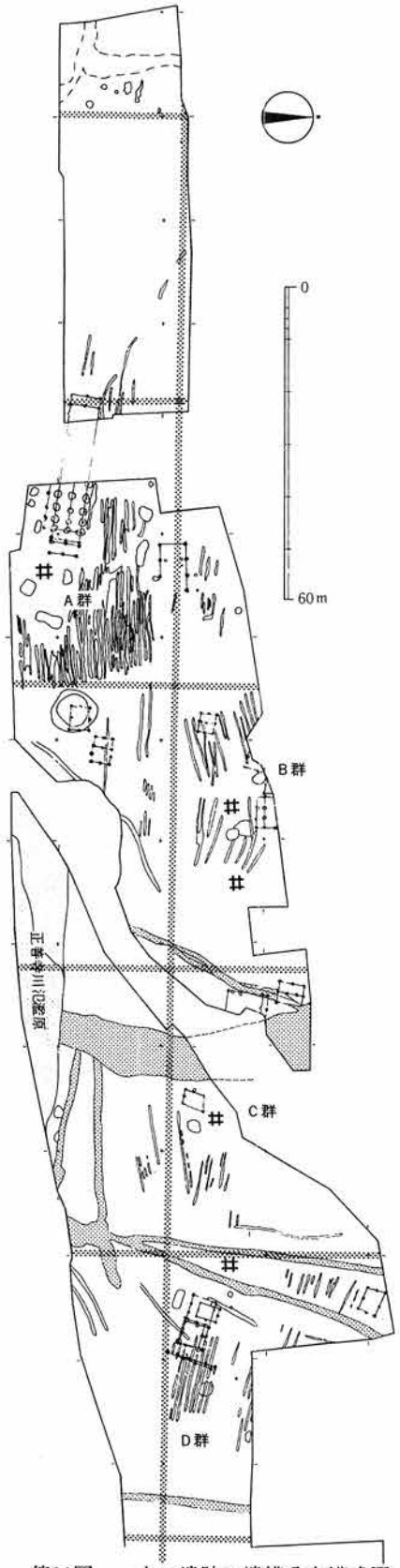
次に，９世紀後半以降の集落遺跡の構造であるが，代表例として上越市一之口遺跡（西地区）〔坂井ほか1986〕をあげることができる（第91図）。遺構は掘立柱建物・井戸・土坑・畠（畝状小溝）・溝などであり，竪穴住居はない。これらの分布をみると，掘立柱建物と井戸・土坑がまとまりをもち，これに畠が伴うことがわかる。すなわち，少なくともＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ群の４つの遺構の単位が存在する。掘立柱建物には住居と倉庫（総柱建物）がある。廂をもつ大規模な総柱建物（Ａ群）は灰釉陶器の集中的な出土からもかなりの有力者の住居と考えられる。図上の方格状の線（網目）は遺構のあり方を勘案して，半町（約55ｍ）間隔で仮に引いたものである。こうしてみると，さきの４つの単位が半町を単位とした条里的地割のもとに配置されていることもうかがえる。それはともかく，この遺跡にみられる集落構造は住居と井戸を基本単位とし，これに倉庫や畠が伴うものであり，それぞれの遺構単位が消費ばかりではなく，農業経営においても自立した単位であり，それぞれが一定の区画からなる「宅（家）地」を所有していたことを示している。山



第90図　県内の竪穴住居集落遺跡　（同一スケール，各報告原図，一部改変）

三賀Ⅱ遺跡のような８・９世紀の集落においては竪穴住居がグループを形成していたとしても，それぞれのグループは倉庫を所有しておらず，「個々の家が自立していない族制的な社会」〔吉田1976〕を反映したあり方と考えられる。両者の集落構造のきわだったちがいは，社会そのものの構造変化を感じさせる。９世紀後半以降の集落がすべてこのように「宅地」をもった自立した単位から構成されるとは考えられず，階層差や生活基盤の差により当然その構造もちがったものになろう[1]。しかし，ほぼ同時期の新潟市小丸山遺跡〔藤塚ほか1987〕なども同じ遺跡のあり方をしており，越後における地域的な偏差はないものと考えられる。頸城地方が先進地域であり，生産性も高いことから，一之口遺跡のような集落が成立したとは考えられず，一定の有力者は宅地を所有したといえる。

９世紀後半以降の集落は構造ばかりではなく，立地もそれ以前の集落とはことなる傾向がある。山三賀のような砂丘上や馬場上遺跡のような河岸段丘上ではなく，沖積地内の微高地に立地することである。つまり，集落に近接して耕地が得られるような立地であり，ここに集落（宅地）と耕地が一体となった姿をみることができる。山三賀Ⅱ遺跡が衰退した後，この砂丘上は近世の新田開発まで，まったく人々が住むことはなかった。耕地が近くに存在し，農業生産に適しているところであれば，古代律令期以降中世までの長い間に当然人々が住んだはずである。律令期に国家が集落の形成に介在すればこそ，またそれを受け入れる社会構造であればこそ，農耕を営むうえで不便なところにも，このような大規模な集落が成立したといえる。



第91図　一之口遺跡の遺構分布模式図
（坂井ほか1986より作成）

1）たとえば，鍛冶工房という性格を想定できるような小規模な遺跡は，この時期によくみられるが，これらは段丘上に立地し，竪穴住居を伴うことが多く〔坂井ほか1987〕，構造のちがいは大きい。

2）このような構造をもつ集落は，他地域ではこれより前から存在する。たとえば，畿内では著名な大阪府高槻市郡家今城遺跡〔原口1977〕にみるように，８世紀代に確認される。したがって，ここで「王朝国家期の集落」とするのは，あくまで越後におけるものである。しかし，８世紀代の集落類型が画一的であるかどうかは，今後の調査例の増加をまって，あらためて検討する必要がある。ただ，８世紀代の土地制度の変化に呼応した動きは考慮に入れておくべきであろう。

一之口遺跡に代表できるような集落は律令期以後成立するのであり，社会体制とのかかわりでいうならば，「王朝国家期（前期）」の集落とすることができる[2]。したがって，山三賀Ⅱ遺跡と一之口遺跡を古代村落史のなかに位置づければ，両者の構造は越後における「律令（型）村落」から「王朝国家（型）村落」への歴史的変化を典型的にあらわしているといえる。それはまさに社会体制と無関係ではありえない古代集落の実態を反映しているといえよう。

C．古代における沼垂郡の動向（第92図・第18表）

最後に山三賀Ⅱ遺跡に集落が営まれた古代，とくに律令期における沼垂郡の状況について，遺跡の動向から概観し，報告の結びとしたい。

現在，判明している古代遺跡のあり方をみると，本遺跡が成立する８世紀初頭から前半の時期は，集落ばかりではなく，さまざまの遺跡において，大きな画期とすることができる（第18表）。集落は山三賀周辺の砂丘上にいっせいに成立する。こうした状況は山三賀の砂丘と同じ砂丘列にあたる亀田砂丘（新潟市・亀田町・横越村）においてもみられる〔酒井ほか1987〕。おそらく，律令制の成立にともなって村落の「再編」がこの時期かなり広汎におこなわれたものと考えられる。沼垂郡は３郷しかなく，令制における５段階の等級では最下の小郡である。したがって，人口・耕地面積はかなり少なく，土地の生産性は低かったであろう。それは沖積地内に水田になりえない広大な砂丘と低湿地が存在したからであろう。この地域の開発には越前などを含めて，他地域からの「移民」によるところが多かったと思われる。当然この背景には国家の力が介在したはずである。

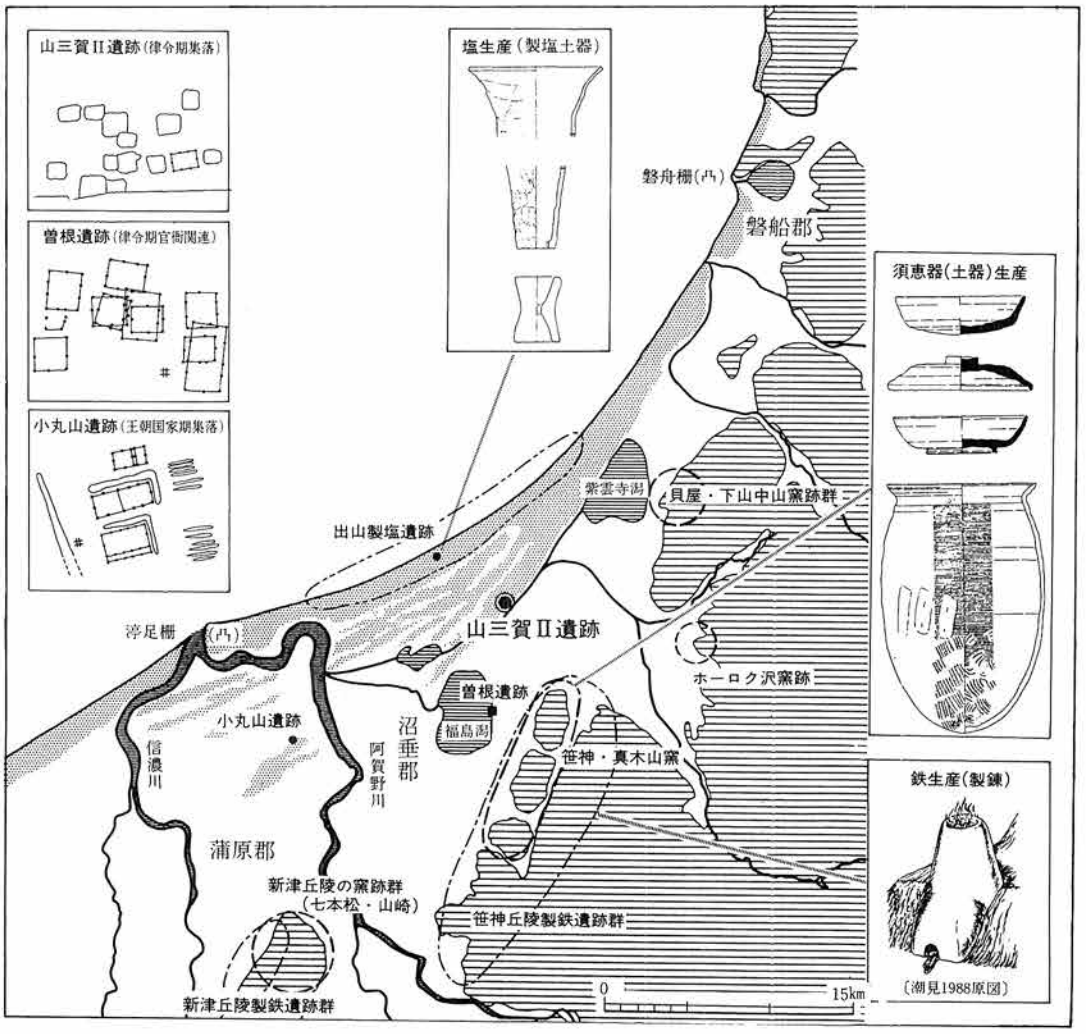
律令制そのものを体現する官衙関連遺跡もこの時期に成立する。遺構・遺物からみて，豊浦町曽根遺跡は沼垂郡衙に関係する遺跡である。この遺跡は郡衙の政庁にあたる郡庁ではないであろうが，８世紀前半に成立し，９世紀後半～末葉には廃絶する。

一方，生産関係も８世紀前半に各分野でいっせいにはじまる。まず須恵器生産は阿賀北地方でも８世紀第１四半期にはじまり，大規模な窯群である笹神丘陵の笹神・真木山窯も，おそくとも第２四半期には開窯し，きわめて活発な生産をおこなう。ここでは須恵器ばかりではなく，土師器もかなり生産されたと考えられ，土器の集中的生産がなされたものと思われる。土器生産を掌握したのは，工人組織の編成にかかる労働力の差配権の所在を前提にすれば，郡司層に比定しうるであろう。笹神丘陵における須恵器生産は９世紀後半には著しく衰退し，まもなく廃絶する。この地域の須恵器生産が律令制をバックにして成り立っていたとすれば，この時期の衰退は当然であろう。

笹神丘陵では須恵器（土器）のほかに，鉄生産も大規模におこなわれている。製鉄遺跡の調査例はごく少なく，生産の開始と衰退の時期はよくわかっていないが，他地域の状況からみて，８世紀前半には開始されるものと推測される。ここではおもに砂鉄を製錬して，鉄素材が生産され，これが本遺跡のような集落にもちこまれ，集落内の鍛冶工房において鉄製品が製作されたと考えられる。製鉄遺跡が須恵器窯と同じ丘陵内に分布する例は北陸地方ではかなり一般的であり，両者の生産が密接な関係をもっていたことが考えられ，鉄生産にも郡司層の関与を想定できよう[1]。鉄生産が終る時期も明らかではないが，11世紀には衰退するものと推測しておきたい。

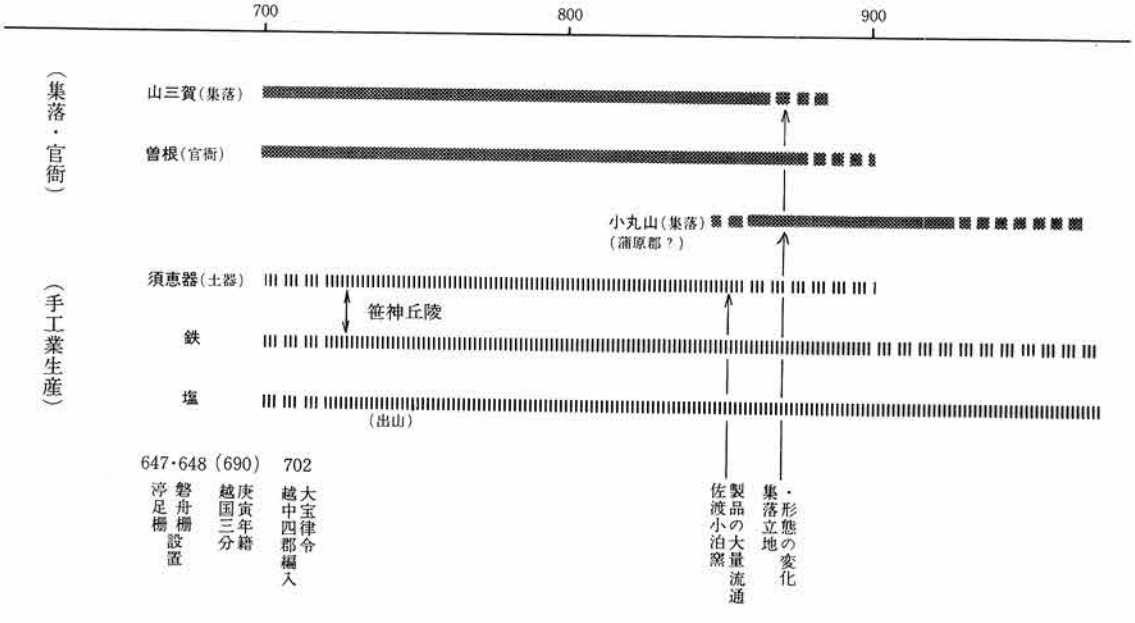
笹神丘陵で生産された須恵器（土器）や鉄素材は生産遺跡の分布からみて，おもに沼垂郡と磐船郡内に供

1）文献史学の立場から，７・８世紀の製鉄経営者は郡司層にあったとする意見がある〔原島1968〕。



第92図　古代沼垂郡の概要図

第18表　山三賀Ⅱ遺跡と古代沼垂郡の遺跡動向



給されたと考えられる。また，出羽に対する東北経営を考慮すると，ある時期に出羽にも供給されたことも考えられる。ここで想起されるのは笹神丘陵の眼下に立地する前述の曽根遺跡である。官衙に関連すると考えられるこの遺跡の機能・性格については具体的に示しえないが，須恵器（土器）と鉄の一大生産地をひかえていること，福島潟の湖岸に立地することを考慮すると，須恵器や鉄などの物資の生産と流通にかかるものとの想定もできる〔家田ほか1981〕。福島潟は内水面により新潟平野のほぼ全域，及び阿賀野川・信濃川河口を経て日本海へも通じている。船による物資の流通を考えればまさに好条件である。

生産関係ではこの他に塩の生産がおそらく８世紀前半には始まる。これも調査例が少なくよくわからない部分が多いが，越後・佐渡では古墳時代の土器製塩は確認されておらず，７世紀末葉から８世紀初頭の柏崎市刈羽大平遺跡〔品田ほか1985〕が最も古い。沼垂郡内では本遺跡に近い海岸に，新潟市出山遺跡がある。時期は８世紀代の中葉前後と推定される。越後・佐渡の土器製塩は若狭で発達し，能登で確立された技術が伝わったと考えられ，その背景に東北経営との関係も想定されるという〔小嶋1988〕。延暦年間に佐渡・越後両国から出羽の雄勝城と陸奥の志波城に米と塩が送られていること（続日本紀）は，その意味で興味深い。

このように沼垂郡における集落・官衙（関連）の成立・再編，須恵器（土器）・鉄・塩といった手工業生産は，８世紀前半にいっせいに開始する。そこに律令国家を背景にした大きな動きをみることは容易である。鉄や塩の生産は別にして，集落と官衙，そして土器生産は９世紀後半に再び大きな変化が生じる。砂丘上の多くの集落は衰退・廃絶し，おそらく耕地を近くにもつ沖積地内の微高地へ移動すると推定される。新たに成立した集落はすでに竪穴住居が主体ではなく，掘立柱建物が普遍的にみられ，私有地としての明確な「宅地」をもつものも出現していたであろう。そこには自立した経営単位をはっきりと見い出すことができる。この集落の変化は，律令制下の村落を規定していた造籍や班田の制が，９世紀の30年代から急速に解体しはじめ，延喜の諸改革を経て10世紀には崩壊するという歴史的事実〔吉田1976〕とも符合する。また，そうした変化をひき起す要因たりえたであろう，農民の自立とそれをささえた生産力の向上も見落とせない。

集落の形態・立地の変化に呼応するかのように，須恵器生産も９世紀後半に急速に衰退する。ここに郡単位，あるいは２～３郡単位の土器の生産・流通体制は崩壊し，海を越えた佐渡小泊窯製品の大量流通がはじまり，国を越えた広域流通が成立する。律令期の生産形態がまさしく律令制と深くかかわっていたことを示しているといえよう。

古代の沼垂郡は大化３年（647）に渟足柵が設置され，畿内王権による「辺境」支配と開発がはじまる。そしてその約半世紀後，律令国家体制が確立し，急速に変貌する。その大きな変貌をもたらした農業生産・手工業生産もある意味で国家の力によって，ささえられていたといえる。これ以降の沼垂郡の歴史をかえりみれば，おそらくこの段階においてのちの沼垂郡の基礎が形成されたと評価しうるであろう。

これまで今回の調査によって得られた成果について述べてきた。発掘面積13,600㎡，のべ12ヶ月を要した調査の資料は実にぼう大であった。約130棟の竪穴住居と掘立柱建物という多くの遺構を残していた遺跡の報告としては，本書はあまりにも不備が多い。しかし，この調査によりはじめて明らかにできたことも多いと思う。古代の集落の一部分の調査ではあったが，文献史料からだけではわからないこの地域の歴史の一端は把握できたように思う。山三賀という土地にかつて営まれたひとつのムラの跡にも，歴史の一断面があざやかに投影されている。これが調査・報告を通じて得られた結論である。残された課題は多いが，この成果をもとにこの地域の古代史を解明してゆくことを期し，この報告を終えたい。

要　　約

1．山三賀II遺跡は新潟県の北部，聖篭町大字三賀字白通り他に所在する。遺跡は海岸砂丘上，標高約５ｍに立地するが，現在の海岸線より約５km内陸側にあり，古代から現代に至るまで生活基盤は海と関係ない農村地帯である。古代にあっては淳足柵が設置された越後国沼垂郡内に含まれる。

2．調査は新新バイパス（国道７号）の建設に伴って，昭和60年から62年に実施した。調査範囲はバイパス線部分の幅約80ｍ，長さ約180ｍ，面積13,600㎡である。遺跡の範囲は法線外にかなりひろがる。

3．調査の結果、①縄文・弥生時代，②古墳時代，③奈良・平安時代の遺構・遺物が検出された。縄文・弥生時代の遺構・遺物はごく少なく，主体は古墳時代と奈良・平安時代の集落跡である。

4．縄文・弥生時代でもっとも古い土器は縄文中期初頭で，これ以前に遺跡が立地する砂丘（Ｉ－２列）が形成され，以後ほとんど飛砂や砂の堆積がなく砂丘そのものは変化していない。土器は縄文中期以降弥生時代中・後期まで断続的かつ散発的に存在する。

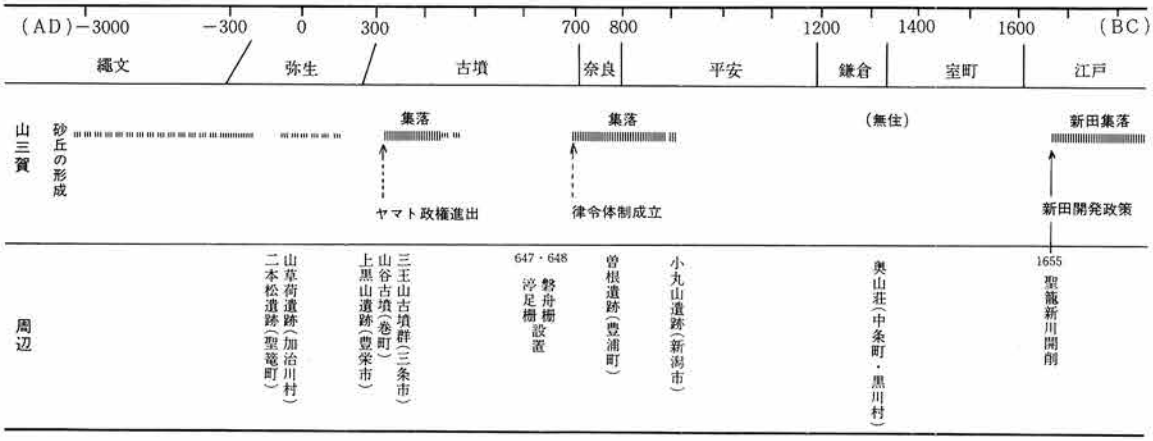
5．古墳時代の遺構には竪穴住居12棟，方形周溝遺構１基のほか土坑がある。時期は前期から中期初頭が主体である。土器のなかには畿内布留式の強い影響を受けたものが多くあり，この時期に大和政権の進出に伴う古墳文化が，越後北部の阿賀野川以北の地域まで浸透していたことが確認される。

6．奈良・平安時代の遺構には竪穴住居約90棟，掘立柱建物27棟の他に，土坑・ピットがある。集落の成立は８世紀初頭で，衰退は９世紀後半である。掘立柱建物には高床式倉庫と考えられる束柱をもつもの（総柱建物）と住居と考えられる束柱をもたないものがある。後者は大型の竪穴住居にかわっておもに９世紀以降に出現すると考えられる。遺跡の性格は遺構や出土遺物からみて，律令期の農耕集落と考えられるが，その成立背景には時期や立地条件からみて律令国家との強い関係が想定される。

7．奈良・平安時代の出土遺物には大量の土器（須恵器・土師器）のほか金属製品・石製品がある。金属製品には多量の鉄製品（鋤鍬先・鎌・刀子・鉄鏃・紡錘車など）と銅製品の帯金具（計８点），和同開珎２点がある。石製品はおもに砥石である。帯金具からみて 集落内に有位の人物が居住していたことが考えられる。また，鍛冶工房の竪穴が３棟検出され，集落内で鉄器生産がおこなわれていたことが知られる。

8．奈良・平安時代の土器は，８世紀初頭から９世紀後半までの間をⅠ～Ⅳ期に分けられる。Ⅰ期（８世紀前半頃）には土師器は非ロクロが多く，須恵器も量的に少ないが，II期（８世紀中葉頃）以降ロクロ

第19表　山三賀II遺跡の動態



土師器になり，須恵器も増加する。須恵器は同一郡内にある笹神・真木山窯の製品が多いが，IV期（9世紀中葉～後半）　以降，佐渡小泊窯の製品が多くなる。ロクロ土師器は胎土・手法からみておもに須恵器と同一生産体制内にあったと推測される。

9．9世紀後半に集落が衰退すると，以後17世紀の新田村落の成立まで，この地はまったく無住の地となる。本遺跡の集落形態は越後における律令期の集落として一般的なものと考えられるが，こうしたあり方は集落の立地を含めて9世紀後半以降に変化する。9世紀後半から10世紀には，越後でも掘立柱建物を主にした集落が成立すると考えられる。

引用・参考文献

ア赤羽正春　1977　「新潟県川舟造船技術の系譜」『民具マンスリー』14－9　日本常民文化研究所
赤羽正春　1978　「郷地について」『豊栄市史研究』1　豊栄市教育委員会
赤羽正春　1986　「舫－操船技術の一方法(1)」『民具マンスリー』23－6　日本常民文化研究所
赤羽正春　1987　「タラ漁業の展開と二枚棚漁船の導入」『海と民具』雄山閣
秋田市遺跡保存会　1984　『秋田城文字資料集』Ⅰ
浅香年木　1971　「平安期の窯業生産をめぐる諸問題」『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局
阿部洋輔・木村宗文・荻野正博　1980　「荘園の成立」『新発田市史』上　新潟県新発田市
阿部義平　1976　「銙帯位制について」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社
阿部義平　1987　「遺跡からみた国府」『シンポジューム「古代の国府」資料』国立歴史民俗博物館
阿部恭平　1986　「馬場上遺跡」『新潟県史』通史編1　原始・古代
甘粕　健　1986　「古墳時代の社会と文化」『新潟県史』通史編1　原始・古代
荒木勇次　1987　「保内三王山古墳群」『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第8回三県シンポジジウム資料　千曲川水系古文化研究所ほか
イ家田順一郎ほか　1981　『曽根遺跡Ⅰ』新潟県豊浦町教育委員会
家田順一郎ほか　1982　『曽根遺跡Ⅱ』新潟県豊浦町教育委員会
猪狩忠雄　1983　『四郎作遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書第10冊　いわき市教育委員会ほか
池田哲夫ほか　1986　『北佐渡の漁撈習俗』新潟県両津市立博物館
池田　亨　1975　「墨書土器考」『長表遺跡』新潟県六日町教育委員会
石川日出志ほか　1988　「鳥屋遺跡Ⅰ・Ⅱ－新潟県豊栄市鳥屋遺跡発掘調査報告－」『豊栄市史』資料編1　考古編　新潟県豊栄市
伊藤　充　1980　「新田開発と治水事業」『新発田市史』上　新潟県新発田市
ウ上田　真　1987　「土器編年の年代幅と集落研究について－相模地域の奈良・平安時代集落遺跡出土土器から－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』6
上原甲子郎　1963　『幕島』分水町文化財調査報告第一集　新潟県分水町教育委員会
内嶋善兵衛　1986　「日本のスノーベルト　日本海岸の気候」『日本の気候』日本の自然5　岩波書店
宇野隆夫　1988　「北陸の須恵器生産とその展開」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
オ大熊　孝　1979　「信濃川治水の歴史」『アーバンクボタ』17　久保田鉄工株式会社
大澤正己　1983　「馬場遺跡出土の鉄滓・砂鉄調査」『馬場遺跡』新潟県相川町教育委員会
大澤正己　1988　「寺家遺跡出土鉄滓および鍛造剝片の金属学的調査」『寺家遺跡調査報告』Ⅱ　石川県立埋蔵文化財センター
大澤正己　1983　「曲野・寺尾遺跡の鉄滓調査」『曲野遺跡Ⅰ』熊本県教育委員会
小笠原好彦　1983　「東日本における掘立柱建物集落の展開」『考古学論叢Ⅰ』東出版寧楽社
小村　弋　1983　『幕藩制成立史の基礎的研究』吉川弘文館
カ金津丘陵埋蔵文化財発掘調査団　1988　『八幡山遺跡現地説明会資料』
金子拓男　1981　「渟足柵の所在についての覚書」『郷土新潟』23　新潟郷土史研究会
金子拓男　1983　「蒲原郡の古代」『三条市史』上巻　新潟県三条市
金子拓男　1986　「大化元年における越国の奏上について」『新潟江南高校研究収録』14　新潟県立新潟江南高校
金子拓男　1987　「古代における信濃川・阿賀野川の河口と流路について」『新潟江南高校研究収録』15　新潟県立新潟江南高校
金子拓男・坂井秀弥　1983　『高塩Ｂ遺跡発掘調査報告書』新潟県西山町教育委員会
亀田　博　1983　「銙帯と石帯」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念考古学論叢』関西大学
樋根　勇　1985　『越後平野の1000年』新潟日報事業社
川上貞夫　1981　『山崎須恵器窯址』新潟県五泉市教育委員会
川上貞夫　1982　『貝屋須恵器窯址』新潟県加治川村教育委員会
キ菊地利夫　1958　『新田開発』古今書院
岸　俊男　1962　「律令制下の豪族と農民」『岩波講座日本歴史』3　岩波書店
北島正元　1981　「三潟開発計画と江戸の商業資本」『越後地方史の研究』上越郷土研究会
木立雅朗　1988　「須恵器の生産と流通」・「須恵器の使用痕について」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

北野博司　1988　「土師器の生産と供給」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
鬼頭清明　1976　「八世紀の社会構成史的特質—首長制論をめぐって—」『日本史研究』172　日本史研究会
鬼頭清明　1985　『古代の村』古代日本を発掘する6　岩波書店
木村宗文　1984　「墨書・篦書土器」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集　今池・下新町・子安遺跡』新潟県教育委員会
ケ建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所　1986　『昭和60年度新新バイパス新発田地区地質調査作業報告書』建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所
コ小島幸雄　1979　『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』新潟県上越市教育委員会
小島幸雄・秦　繁治・水沢省吾　1983　「末野窯跡群」『保倉川流域』新潟県教育委員会
小嶋芳孝　1988　「平底製塩土器の研究」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ　同志社大学考古学シリーズ刊行会
後藤守一　1939　「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』54—4　東京人類学会
小林昌二　1983　「律令制下村落の展開」『日本史研究』247　日本史研究会
小村茂ほか　1983　『戸津』石川県小松市教育委員会
サ斉藤　忠・本間嘉晴ほか　1962『磐舟—磐舟柵跡推定地調査報告書—』新潟県文化財調査報告書9　新潟県教育委員会
酒井和男ほか　1987　『大江山地区の遺跡』新潟市教育委員会
坂井秀弥　1982　『栗原遺跡第4次・5次発掘調査概報』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1983a　「越後における7・8世紀の土器様相と画期—新井市栗原遺跡出土土器をめぐって—」『信濃』35—4　信濃史学会
坂井秀弥　1983b　「新潟県上越市本長者原廃寺の再検討—越後国分寺推定地の一例—」『新潟史学』16　新潟史学会
坂井秀弥　1983c　『栗原遺跡第6次発掘調査概報』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1983d　「古式土師器」『緒立遺跡発掘調査報告書』新潟県黒埼町教育委員会
坂井秀弥・横山勝栄・山本　肇　1983　「内越遺跡出土土器の越後における編年的位置」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第33集　内越遺跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥・戸根与八郎ほか　1984　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集　今池・下新町・子安遺跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1984　「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集　今池・下新町・子安遺跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1985　「頸城平野古代・中世開発史の一考察—頸城村を中心にして—」『新潟史学』18　新潟史学会
坂井秀弥・高橋　保・田辺早苗　1986　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第40集　一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1987　「(研究発表要旨)古代・中世における開発史の諸問題—考古資料からみた9・10世紀の画期—」『新潟史学』20　新潟史学会
坂井秀弥・金沢道篤・田辺早苗　1987　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第48集　三島郡出雲崎町番場遺跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1988a　「律令期の須恵器系譜—越後西南部における二つの系譜をめぐって—」『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史と考古学』真陽社
坂井秀弥　1988b　「越後・佐渡における古代土器の生産と流通—8～10世紀を中心として—」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
坂井秀弥　1988c　「古代のごはんは蒸した『飯』であった　—古代の米調理法復原メモ—」『新潟考古学談話会会報』2　新潟考古学談話会
坂詰秀一　1960　「相模南足柄出土の墨書土器」『古代』34　早稲田大学考古学会
坂本賞三　1970　「王朝国家体制」『講座日本史』2　東京大学出版会
坂本賞三　1974　『摂関政治』日本の歴史6　小学館
佐久間淳一　1970　「水運」『福島潟—福島潟干拓地域民俗緊急調査報告書—』新潟県教育委員会
佐藤興治ほか　1975　「考察・遺物・金属器」『平城宮発掘調査報告書Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第23冊　奈良国立文化財研究所
沢田吾一　1927　『奈良朝時代民政経済の数的研究』(柏書房1972復刻)
シ椎名仙卓　1959　「佐渡金井村本屋敷出土の墨書土器」『古代』32　早稲田大学考古学会

潮見　浩　1988　『図解　技術の考古学』有斐閣選書
品田高志ほか　1985　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第５　刈羽大平・小丸山』新潟県柏崎市教育委員会
品田高志　1985　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第４　吉井遺跡群』新潟県柏崎市教育委員会
品田高志　1987　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第８　吉井水上Ｉ遺跡・戸口遺跡』新潟県柏崎市教育委員会
ス鈴木俊成・和田寿久・高橋保雄　1988　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第51集 小出越遺跡』新潟県教育委員会
鈴木俊成・高橋昌也・川村浩司・國島　聡 1989　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第54集　美山・鰐口下遺跡』新潟県教育委員会
セ聖篭町教育委員会・聖篭町山三賀遺跡を語り継ぐ会　1987　『山三賀遺跡発掘調査誌』聖篭町教育委員会・聖篭町山三賀遺跡を語り継ぐ会
聖篭町教育委員会　1988　「土師器を文化創造のスタートに」『新潟県教育月報―原始の心を識る―』38－12　新潟県教育委員会
聖篭町誌編集委員会　1978　『聖篭町誌』(増補版)
関　　清　1984　「富山県における古代製鉄炉」『大境』８　富山考古学会
関　　清　1985　「製鉄用炭窯とその意義」『大境』９　富山考古学会
関　雅之　1972　『滝ノ前遺跡』新潟県村上市教育委員会
関　雅之・本間信昭　1973　「半ノ木遺跡」『北陸高速自動車道埋蔵文化財緊急調査報告書』１　新潟県教育委員会
関　雅之・本間信昭ほか　1973　『下金田遺跡』新潟県水原博物館
関　雅之・本間信昭ほか　1981　『真木山製鉄遺跡』新潟県豊浦町教育委員会
関　雅之・中島栄一・戸根与八郎　1986　「集落と生産遺跡」『新潟県史』通史編１　原始・古代
関　雅之・石川日出志・阿部朝衛ほか　1988　『豊栄市史』資料編１　考古編　新潟県豊栄市
千家和比古・山本　肇 1979　「西角地窯跡」『大角地遺跡』新潟県青海町教育委員会
タ高島忠平・橋本　正・舟崎久雄 1974　「じょうべのま遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ　富山県教育委員会
高橋一夫　1979　「計画村落について」『古代を考える』20　古代を考える会
高橋　保・高橋保雄 1988　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第49集　立ノ内遺跡』新潟県教育委員会
高橋　保 1988　「新潟県における古代の土器製塩」『新潟考古学談話会会報』２　新潟考古学談話会
高橋富雄　1970　「石船柵おぼえがき」『東北学院大学東北文化研究所紀要』２　東北学院大学東北文化研究所
武田広昭　1970　「福島潟における新田村落の展開」『福島潟―福島潟干拓地域民俗緊急調査報告書―』新潟県教育委員会
武田広昭　1976　「新発田藩領域からみた福島潟における新田村落の構造」『近世越後・佐渡史の研究』名著出版
田嶋明人　1986　「土師器よりみた古墳時代土器の変遷」『漆町遺跡』Ｉ　石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人　1987　「古代土器の編年軸設定」『篠原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人　1988　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
田中耕作　1987　『新発田城跡発掘調査報告（Ｉ～Ⅲ区)』　新潟県新発田市教育委員会
田中　靖　1988　「北陸地方における天王山式系土器について」『新潟考古学談話会会報』２　新潟考古学談話会
ツ土田孝雄・小池義人・中村美恵子　1988　『須沢角地Ａ遺跡発掘調査報告書』新潟県青海町教育委員会
テ寺村光晴ほか　1957　『三佛生』長岡科学博物館研究調査報告第１冊　新潟県長岡市立科学博物館考古研究室
ト十日町市教育委員会　1975　『馬場上遺跡―第１次・第２次発掘調査概報―』新潟県十日町市教育委員会
十日町市教育委員会　1976　『馬場上遺跡―第３次・第４次発掘調査概報―』新潟県十日町市教育委員会
戸田芳実　1974　「律令制からの開放」『土一揆と内乱』日本民衆の歴史２　三省堂
戸根与八郎　1973　「新潟県北蒲原郡加治川村下小中山の須恵器窯址」『越佐研究』33　新潟県人文研究会
戸根与八郎・本間信昭　1975　『埋蔵文化財緊急調査報告書第４　長畑遺跡』新潟県教育委員会
戸根与八郎　1986　「真木山窯址群」『新潟県史』通史編１
ナ直木孝次郎　1968　「古代国家と村落」『奈良時代史の諸問題』塙書房
中川成夫・倉田芳郎　1956　「新津田屋七本松須恵器窯跡発掘調査報告」『越佐研究』11　新潟県人文研究会
中川成夫・小出義治・甘粕　健　1958　「古志郡山本村間野窯跡発掘調査報告」『越佐研究』13　新潟県人文研究会
中川成夫・倉田芳郎　1962　『新潟県北蒲原郡における二窯址』新潟県豊浦町教育委員会
中川成夫・土井義雄・川上貞雄　1973　『狼沢窯址群の調査』新潟県笹神村教育委員会
中村孝三郎　1984　「三島町における古代期集落・窯業・墳墓址」『三島町史』新潟県三島町
中村五郎・大木直枝　1970　「山草荷２式土器について」『信濃』22－9　信濃史学会

中村美恵子ほか　1988　『四ツ屋遺跡発掘調査報告書』四ツ屋遺跡調査団
奈良国立文化財研究所　1983　『平城宮出土墨書土器集成』Ⅰ　奈良国立文化財研究所
ニ新潟県教育委員会　1969　『岩船―文化財総合調査報告―』新潟県文化財調査年報第9　新潟県教育委員会
新潟県教育委員会　1986　「一之口遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』1
新潟県史編纂室　1980　『新潟県史』資料編8　近世三　下越編
新潟県史編纂室　1982　『新潟県史』資料編1　原始・古代
新潟県総務部自治行政会　1962　『新潟県市町村合併誌』上巻　新潟県総務部自治行政会
新潟古砂丘グループ　1974　「新潟砂丘と人類遺跡―新潟砂丘の形成史Ⅰ―」『第四紀研究』13―2　第四紀学会
新潟古砂丘グループ　1976　「新潟県の砂丘―その研究史と問題点―」『新潟大学理学部地質鉱物学教室研究報告』4　新潟大学理学部地質鉱物学教室
新潟古砂丘グループ　1979　「砂丘と平野」『アーバン・クボタ』17　久保田鉄工株式会社
新潟第四紀研究グループ　1971　「地形分類図よりみた新潟県の地形区―新潟県の第四系・そのⅣ―」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』16
西井龍儀　1987　「北陸の塔心礎―柱穴式を中心に―」『北陸の古代寺院―その源流と古瓦―』　桂書房
西　弘海　1986　「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社
ハ浜名徳永　1977　「出土墨書の集成と考察」『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会
原秀三郎　1976　「郡司と地方豪族」『岩波講座日本歴史』3　岩波書店
原口正三　1977　「古代・中世の集落」『考古学研究』92
原島礼二　1968　「八世紀における鉄の生産と流通」『日本古代社会の基礎構造』未来社
ヒ平川　南　1982　「古代における東北の城柵について」『日本史研究』236　日本史研究会
フ藤塚　明・小池邦明・渡辺朋和　1987　『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』新潟市教育委員会
藤巻正信　1988　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第27集　西田・鶴巻田遺跡』新潟県教育委員会
ホ本間嘉晴ほか　1958　「佐渡小木半島の考古学的調査」『南佐渡』新潟県教育委員会
本間嘉晴・金沢和夫ほか　1983　『馬場遺跡』新潟県相川町教育委員会
本間嘉晴　1986　「小泊窯址群」『新潟県史』通史編1　原始・古代　新潟県
マ松村恵司　1977　「出土鉄製品の集成と考察」『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会
松村恵司　1987　「銙帯の復原的研究」『日本考古学協会第53回総会研究発表要旨』日本考古学協会
真野町教育委員会　1969　『佐渡国府緊急調査報告書Ⅱ 若宮遺跡』新潟県真野町教育委員会
ミ宮本常一　1970　『海の民』未来社
ヤ山下　昇　1970　「柏崎―銚子線の提唱」『島弧と海洋』東海大学出版会
山田英雄　1982　「文字について」『曽根遺跡Ⅱ』新潟県豊浦町教育委員会
山田英雄・宮　栄二編　1986　『新潟県の地名』平凡社
山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
山本　肇・北村　亮・田辺早苗　1985　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第37集　金屋遺跡』新潟県教育委員会
山本　肇　1987　「小泊窯跡群」『北陸の古代寺院―その源流と古瓦―』桂書房
山本　肇　1988　「梯子谷窯跡の概要」・「メチガ谷窯跡の概要」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』資料編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
山本幸俊　1986　「越後平野南部の新田開発―円上寺潟と潟七カ村の場合―」『社会科研究紀要』21　新潟県社会科教育研究会
ヨ吉岡康暢　1983　「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
吉田　孝　1976　「律令制と村落」『岩波講座日本歴史』3　岩波書店
米沢　康　1980　「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32―6　信濃史学会
ワ和田寿久・高橋保雄・北村　亮・高橋昌也・竹田和夫・遠藤孝司ほか　1987　『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第46集　岩野下遺跡』新潟県教育委員会
渡辺卓司　1987　『豊栄の潟舟』新潟県豊栄市教育委員会
渡辺剛義・田中耕作　1980　『石田遺跡発掘調査概報』新潟県新発田市教育委員会
渡辺文男　1982　「筆跡のまとまり・土器のまとまり―土器墨書の計数的検討から―」『曽根遺跡Ⅱ』新潟県豊浦町教育委員会
渡辺　誠　1981　「編み物用錘具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集』LXXX　史学27　名古屋大学文学部

別表1　主要遺構一覧表

竪穴住居

遺構名	図版番号	位置	切り合い（新＞旧）	規模（長軸×短軸）	面積(㎡)	方位	カマド	柱穴	周溝	時期	備考
SI 1	12	A 2		4.3×3.8	16.3	N-47°-W	○			Ⅲ-1期	
SI 4	12	A 3	SI 4＞SI 5	3.4×3.5	11.9	N-53°-W	○			Ⅲ-2期	鍛冶工房 帯金具（丸鞆表金具）
SI 5	12	A 3	SI 5＜SI 4	4.6×4.7	21.6	N-60°-W	○			Ⅰ 期	
SI 6	13	B 3	SI 6＞SI 8	4.2×3.6	15.1	N-43°-W	○			Ⅲ-2期	
SI 7	14	A 4		4.0～4.2×3.9	16.0	N-54°-W	○		○	Ⅲ-2期	
SI 8	13	B 3	SI 8＜SI 9	5.7×5.3	30.2	N-52°-W	○	○	○	Ⅱ-1期	
SI 9	13	B 3	SI 9＞SI 8	4.4×3.2	14.1	N-53°-W	○			Ⅲ-1期	
SI 10	13	B 2・3		5.0×3.8	19.0	N-50°-W	○			Ⅲ 期	
SI 11	15	C・D 4・5		4.9×4.2	20.6	N-30°-W	○			Ⅲ 期	
SI 12	15	D・E 4・5		10 ×4.3	43.0	N-89°-E	○	○		Ⅱ-1期	
SI 14	17	C・D 6		5.6×5.8	32.5	N-50°-W	○	○		Ⅲ-1期	
SI 15	17	D 5・6		5.5×5.6	30.8	N-87°-W				Ⅲ-1期	
SI 16	22	E 6・7		3.1×4.4	13.6	N-4°-W				Ⅱ-2～Ⅲ-1期	
SI 17	22	D 6・7		5.6×5.0	28.0	N-55°-W	○		○	Ⅲ-1期	
SI 18	24	D・E 8		5.0×5.0	25.0	N-90°-W	○			Ⅲ-2～Ⅳ-1期	
SI 20	24	F 8		3.8×4.8	18.0	N-87°-W	○			Ⅱ-1期	
SI 27	23	C・D 8		4.8×4.5	21.6	N-81°-E	○			Ⅰ 期	
SI 29	28	D・E 9	SI 29＜SB 100 SI 29＞SI 81 SI 29＞SI 33B	5.9(?)×5.4(?)	31.9					Ⅳ-1期	
SI 33A	29	E 9	SI 33A＞SI 33B SI 33A＜SI 41	6.4×4.5	28.8	N-83°-W	○			Ⅲ-2～Ⅳ-1期	帯金具（鉸具板金具）
SI 33B	29	E 9	SI 33B＜SI 41 SI 33A SI 29	3.2×3.6	11.5	N-86°-E	○			Ⅲ-2～Ⅳ-1期	
SI 41	29	E 9	SI 41＞SI 33A・B SI 42	6.3×4.5	28.3	N-49°-W	○			Ⅳ-1期	
SI 42	29	E 9・10	SI 42＜SI 41	3.9×4.0	15.6	N-32°-W				Ⅳ-1期	
SI 60	29	E 9・10		3.5×3.8	13.3	N-38°-W	○			Ⅲ-2期	
SI 70	31	E 10	SI 70＜SB 85	5.0×4.9	24.5	N-50°-W					
SI 71	31	D 10		4.5×4.5	20.3	N-67°-W	○			Ⅰ 期	
SI 72	27	D 9	SI 72＜SB 97 SI 75 SI 72＞SI 74	7.9×5.4	42.7	N-90°-W	○	○	○	Ⅱ-1期	
SI 74	27	D 9	SI 74＜SI 72	2.8×3.1	8.7	N-63°-W	○				
SI 75	27	C・D 9	SI 75＞SI 72 SI 670	6.4×5.0	32.0	N-75°-W	○	○	○	Ⅱ-2期	
SI 80	28	D・E 9		3.0×3.0	9.0	N-50°-E				Ⅲ-1～Ⅲ-2期	
SI 81	28	D 9	SI 81＜SI 29	3.8×4.5	17.1	N-52°-E			○		
SI 82	28	D 9		3.5×3.8	13.3	N-76°-E	○			Ⅲ-2～Ⅳ-1期	
SI 98	23	D 8		3.7×3.3	12.21	N-63°-W				古 墳	
SI 115	39	E 12	SI 115＜SB 110	6.4×5.7	36.5	N-41°-W	○	○	○	Ⅰ 期	
SI 263	22	D 7	SI 263＜SB 262	5.6×4.7	26.3	N-60°-W				古 墳	
SI 280	17	D 6		3.7×3.5	13.0	N-67°-W	○			Ⅱ-2～Ⅲ-1期	
SI 299	15	C 5		4.4×3.1	13.6	N-51°-W	○			Ⅲ-2期	
SI 310	14	B 4		5.2×4.7	24.4	N-53°-W	○			Ⅲ 期	
SI 314	14	B 4		3.8×4.5	17.1	N-47°-W	○			Ⅱ-1期新	
SI 325	15	A 5		4.1×3.1	12.7	N-52°-W				Ⅲ 期	
SI 336	16	A 6		4.4×5.1	22.4	N-63°-W	○			Ⅰ～Ⅱ-1期	
SI 339	16	B 6		4.2×5.1	21.4	N-47°-W	○			Ⅲ-1期	
SI 360	16	B 5・6		8.0×7.1	56.8	N-48°-W	○	○	○	Ⅲ-1期	
SI 401	21	C 8		6.7×3.4	22.8	N-65°-W	○			Ⅳ-1期	
SI 402	21	C 7		3.6×3.0	10.8	N-63°-W					
SI 429	20	B・C 8	SI 429＜SI 840 SI 429＜SB 870	7.1×6.5	46.2	N-57°-W	○	○		Ⅱ-1期	和銅開珎出土
SI 435	19	B 7		4.7×3.8	17.9	N-56°-W	○			Ⅵ-1～Ⅳ-2期	
SI 439	19	B 7		3.2×3.2	10.2	N-56°-W				古 墳	
SI 440	19	B 7・8		5.2×4.2	21.8	N-68°-W	○			Ⅳ-2期	
SI 458	25	B 8		3.9×3.9	15.2	N-87°-E	○	○		Ⅰ 期	
SI 462	21	C 8	SI 462＞SI 483	4.2×4.0	16.8	N-58°-W	○	○		Ⅰ期新	

遺構名	図版番号	位置	切り合い（新＞旧）	規模（長軸×短軸）	面積(㎡)	方位	カマド	柱穴	周溝	時期	備考
SI 483	21	C 8	SI 483＜SI 462	5.4×4.8	26.0	N-62°-W			○		
SI 500	23	C 9		4.3×3.2	13.8	N-50°-W	○			Ⅲ-1期	
SI 502A	31	C 9・10		7.2×7.8	56.2	N-53°-W				古墳Ⅰ期	
SI 502B	31	C 9・10		4.5×2.7	12.2	N-80°-W	○			Ⅱ-1期	
SI 560	25	B 9・10		4.8×4.8	23.0	N-69°-W	○	○		Ⅱ-1期	
SI 595	31	B10		3.0×3.5	10.5	N-50°-W				古墳	
SI 600	32	B11	SI 600＞SI 630	3.2×3.7	11.8	N-75°-W	○			Ⅰ期	
SI 610	32	B 10・11	SI 610＜SI 600, SI 630	7.2×7.3	52.6	N-70°-W	○	○	○	Ⅰ期	
SI 630	32	B11	SI 630＞SI 610, SI 630＜SI 600	4.7×4.8	22.6	N-62°-W	○		○	Ⅰ期	
SI 640	23	C・D 8	SI 640＞SI 660, SI 640＜SI 27	7.0×5.6	39.2	N-87°-W	○	○	○	Ⅱ-1期	帯金具（丸鞆，表1，裏1）
SI 650	23	C 8	SI 650＞SI 660	4.5×3.2	14.4	N-52°-W	○			Ⅲ-1～Ⅲ-2期	
SI 660	23	C 8	SI 660＜SI 650, SI 660＜SI 640	4.4×		N-46°-W				古墳	
SI 670	27	C 9	SI 670＜SI 75	4.4×3.5(+α)	15.4(+)	N-72°-W	○			Ⅱ-1期	
SI 741	32	C11		4.7×5.3	24.9	N-49°-W	○			Ⅰ期	
SI 752	37	D11	SI 752＜SI 753, SB790	5.7×5.0	28.5	N-87°-W	○	○	○	Ⅰ期	
SI 753	37	D 11・12	SI 753＞SI 752, SI 753＜SB790	5.2×4.2	21.8	N-69°-W	○		○	Ⅳ-2期	
SI 802	26	B 8・9	SI 802＞SI 804, SI 806, SI 803	5.0×4.0	20.0	N-44°-W	○			Ⅳ-1～Ⅳ-2期	
SI 803	26	B 8・9	SI 803＜SI 802	4.9×4.2	20.6	N-85°-W				Ⅱ-1期	帯金具（鉄製山形巡方）
SI 804	26	B 9	SI 804＜SI 802, SI 807	5.2×4.8	24.9	N-60°-W	○			Ⅰ期	
SI 805	25	B 9		5.4×3.7	20.0	N-71°-W	○			Ⅱ-1～Ⅱ-2期	
SI 806	26	B・C 9	SI 806＜SI 802	3.8×3.0	11.4	N-49°-W	○			Ⅱ-1期	
SI 807	26	B 9	SI 807＞SI 804	4.9×3.6	17.6	N-52°-W	○			Ⅰ期	
SI 840	20	B・C 7	SI 840＞SI 429	5.4×3.9	21.1	N-56°-W		○		Ⅳ-1期	鍛冶工房
SI 850	21	C 7		6.0×4.6	27.6	N-62°-W	○	○		Ⅳ-1～Ⅳ-2期	
SI 1000	34	D10・11	SI 1000＞SI 1010	7.6×9.0	68.4	N-80°-E	○	○	○	Ⅱ期	
SI 1010	34	D10	SI 1010＜SI 1000	5.5×		N-40°-E				古墳	
SI 1100	12	A 3	SI 1100＜SI 1101	4.5(+α)×		N-51°-W	○			Ⅲ-2期	鍛冶工房 帯金具（丸鞆裏金具）
SI 1101	12	A 3	SI 1101＞SI 1100	6.0×4.9(+α)	30.(+)	N-50°-W	○	○		Ⅳ-1期	
SI 1124	36	C 11・12		6.9×5.8	40.0	N-1°-W				古墳Ⅲ期	
SI 1166	41	F12	SI 1166＜SI 1167, SI 1166＞SI 1168	6.4×7.4	47.4	N-81°-E	○	○	○	Ⅰ～Ⅱ-1期	帯金具（剣金・丸鞆裏金具）
SI 1167	41	F12	SI 1167＞SI 1166	3.6×3.0	10.8	N-77°-E	○			Ⅳ-2期	
SI 1168	41	F12	SI 1168＜SI 1166	2.9×3.1	9.0	N-89°-W				古墳Ⅱ期	
SI 1169	41	F11				N-14°-W	○			Ⅰ期	
SI 1181	41	F11				N-26°-W				Ⅲ-1～Ⅲ-2期	
SI 1200	19	B 7		3.2×3.1	9.9	N-56°-W					
SI 1201	18	A 7	SI 1201＜SB1229	5.0×4.2	21.0	N-55°-W	○			Ⅳ-1～Ⅳ-2期	
SI 1202	18	A 7・8	SI 1202＜SB1229	3.5×3.2	11.2	N-59°-W				Ⅳ-2期	
SI 1281	19	A 8		4.0×		N-58°-W					
SI 1300	30	A10				N-75°-W	○			Ⅰ～Ⅱ-1期	
SI 1302	30	A 9		4.1×3.2	13.1	N-58°-W	○			Ⅲ-2期	
SI 1304	30	A 9				N-65°-W	○		○	Ⅲ-1～Ⅲ-2期	
SI 1307	25	A 8・9		4.6×4.7	21.6	N-56°-W	○			Ⅰ期	
SI 1311	30	A11		4.1×4.3	18.0	N-68°-W	○		○	Ⅰ期	
SI 1312	30	A11	SI 1312＜SB1314	3.5×3.0	10.5	N-68°-W	○			Ⅰ期	
SI 1313	30	B11		4.2×3.2	13.4	N-67°-W	○		○	Ⅱ-1期	
SI 1315	35	A・B 12		7.1×5.6	39.8	N-63°-W	○			Ⅰ期	
SI 1320	35	B13		4.0×3.8	15.2	N-79°-W	○		○	Ⅳ-1期	
SI 1460	40	F13	SI 1460＞SI 1461, SI 1471, SI 1480	4.3×3.3	14.2	N-87°-W	○		○	Ⅳ-2期	
SI 1461	40	F13	SI 1461＜SI 1460, SI 1461＜SI 1471	5.5×5.0	27.5	N-85°-W	○	○		Ⅰ期	
SI 1471	40	F13	SI 1471＞SI 1461, SI 1471＜SI 1460	4.2×		N-88°-E	○	○		Ⅱ-1～Ⅱ-2期	
SI 1480	40	F13	SI 1480＜SI 1460			N-69°-W		○		古墳Ⅰ期	
SI 1500	15	F 3		3.5×		N-43°-W				Ⅱ-2期	

掘立柱建物

遺構名	図版番号	位置	切り合い（新＞旧）	規模（長軸×短軸）	面積(m²)	方位	廂	柱痕	時期	備考
SB 85	31	D・E 10	SB 85＞SI 70	2 (5.1/5.0) × 2 (5.0)	25.0	N-10°-W		○		
SB 97	27	D 9	SB 97＞SI 72	3 (6.1) × 2 (4.7/4.6)	28.6	N-76°-W		○		
SB 100	28	D・E 9	SB 100＞SI 29	3 (6.3/6.2) × 2 (4.5/4.4)	27.9	N-77°-E		○	Ⅳ-1期～	
SB 109	40	E 10		3 (5.9) × 2 (4.6/4.5)	15.0	N-72°-E				
SB 110	39	E 11	SB 110＞SI 115	3 (6.6/6.5) × 2 (4.7/4.5)	30.1	N-75°-E				総柱
SB 252	22	D 7・8		2 (4.2/4.1) × 2 (3.5/3.4)	14.3	N-87°-W				総柱
SB 262	22	D 7	SB 262＞SI 263	2 (3.5) × 2 (3.4)	11.9	N-55°-W				総柱
SB 309	14	A 4		3 (5.8) × 2 (3.9)	22.6	N-59°-W		○		
SB 355	17	D 6		2 (3.8/3.6) × 2 (3.5/3.4)	12.7	N-52°-W				総柱
SB 570	33	C 10		4 (10.2) × 2 (6.9/7.0)	71.0	N-64°-E		○	Ⅳ-1期～	
SB 604	35	A・B 13・14		2 (3.5) × 2 (3.2/3.1)	11.0	N-2°-W		○		総柱
SB 730	38	D 12		3 (6.0) × 2 (5.4/5.2)	31.8	N-45°-W		○	Ⅳ-2期～	
SB 770	33	C 11	SB 770＞SX 795	3 (6.4/6.3) × 2 (4.8/4.6)	29.6	N-73°-E		○	Ⅲ-1期～	
SB 790	37	D 11	SB 790＞SI 752, SI 753	4 (11.3/11.1) × 2 (5.6/5.3)	61.0	N-90°-W		○	Ⅳ-2期～	
SB 870	20	B・C 7	SB 870＞SI 429	4 (7.7/7.5) × 2 (5.0/4.7)	37.2	N-51°-W	○	○	Ⅳ-1期～	
SB 1161	38	C・D 12		3 (6.2/6.0) × 2 (4.3)	26.2	N-79°-E		○	Ⅳ-1期～	
SB 1162	36	C・D 12・13		2 (3.6/3.3) × 2 (3.5/3.4)	11.9	N-35°-W				総柱
SB 1165	36	C 12・13		2 (3.3) × 2 (3.3/3.2)	10.9	N-28°-W				総柱
SB 1199	38	D 12		3 (6.1) × 2 (4.3/4.2)	25.9	N-68°-E				
SB 1229	18	A 7	SB 1229＞SI 1201, SI 1202	4 (9.3) × 3 (7.2/7.1)	66.0	N-59°-W		○	Ⅳ-2期～	廂
SB 1241	19	A 8		2 (3.8) × 2 (3.5)	13.3	N-49°-W				総柱
SB 1280	18	A 8		2 (3.9/3.8) × 2 (3.4/3.2)	12.7	N-82°-W		○		
SB 1314	30	A 11	SB 1314＞SI 1312	3 (7.2) × 1 (4.4)	31.7	N-68°-W		○		
SB 1370	36	C 12		2 (3.6/3.5) × 2 (3.6/3.4)	12.4	N-27°-W				総柱
SB 1450	35	B・C 12・13		3 (8.8) × 2 (4.5)	39.6	N-66°-W		○		
SB 1535	36	C 13		2 (3.9/3.8) × 2 (3.7/3.6)	14.0	N-22°-E				総柱
SB 1570	24	F 8		2 (3.7) × 2 (3.5)	12.9	N-10°-E				総柱

別表2　古墳時代，奈良・平安時代土器観察表

凡例

英：石英　　中礫：3～5mm(石英，長石をのぞく)
長：長石　　小礫：1～3mm(　〃　)
雲：金雲母(小：1mm以上，細：1mm以下)　　細礫：1mm以下(　〃　)
海針：海綿骨針

古墳時代

SI 502A　(本文87頁，図版47・48)

番号	地　点	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
1	No.5，No.6	小型壺A	口11.2 高22.4	英，長 雲(細)	淡褐	堅	完形	口縁内面と外面全体ヘラミガキ	
2	No.1	小型壺E	口11.5 高15.2	英，長 小礫	赤褐	堅	(口)一部欠	口縁内面と外面全体ヘラミガキと赤彩	
3	No.5，No.9，1層	小型壺B_1	口10.7 高(6.2)	英，長 雲(細)	淡褐	堅	(口)1/8 (底)一部欠	内外面ていねいなヘラミガキ	底部内面は黒褐色
4	No.4	小型壺B_2	口8.6	英，長 雲(細) 細礫	赤褐	堅	(口)全存	内外面ていねいなヘラミガキ	
5	No.12，No.11，A1層	小型壺B_1	口14.0 高10.4	雲(細)	茶褐	堅	一部欠	外面ヘラミガキ	外面の一部に黒斑
6	3層一括	小型壺D？	口11.0	英，長 雲(細)	淡褐	堅	1/5	内外面ヘラミガキ	
7	1層	小型器台	口 8.2	英，長 雲(細)	淡褐	堅	1/4	内外面ヘラミガキ	
8	No.3	小型器台A	口 8.5 高 6.5 底10.5	雲(細)	淡褐	堅	完形	内外面ヘラミガキ	脚部三方透かし
9	1層	小型器台？	底10.5	英，長 雲(細)	茶褐	堅	1/6	内外面粗いヘラミガキ	
10	1層	小型器台？	底 8.4	英，長 雲(細)	茶褐	堅	1/2		
11	No.13カマド	壺C_3？		英，長 雲(細) 細礫	茶褐	堅	1/4	外面ヘラミガキ	
12	1層	壺D_1	口20.0	英，長 雲(細)	淡褐	堅	1/3		外面の一部にスス
13	1層	小型鉢A	口16.3	英， 雲(細) 海針	淡褐	堅	1/5	内外面ていねいなヘラミガキ	
14	No.10	片口鉢	口 9.7	英，長 雲(細)	淡褐	堅	一部欠	外面粗いヘラミガキ	
15	SI 502A	壺	底 8.5	英，長 雲(細)	茶褐	堅	底部全存		
16	南北トレンチ	壺	底 7.2	英，長 雲(細)	淡褐	堅	1/2	外面粗いヘラミガキ	内面炭化物
17	床面，3層	台付鉢		英， 雲(細) 細礫	赤褐	堅	1/3	内外面粗いヘラミガキ	
18	2層・3層	高杯C	口19.1	英， 雲(細)	茶褐	堅	杯部一部欠，脚部欠	外面下半部粗いヘラミガキ	
19	No.2，1層	高杯C		英，長 雲(細) 細礫	茶褐	堅	杯部2/3	内外面ヘラミガキ	
20	No.6	高杯C	口14.4	英，長 雲(小細) 細礫	赤褐	堅	杯部一部欠	内外面強いナデ	
21	No.11一括	高杯A	口15.8	英，長 雲(細) 海針	赤褐	堅	(口)一部欠	内外面ていねいな暗文風ヘラミガキ	外面の一部にスス
22	No.12	高杯脚部A		英，長 雲(細) 海針	赤褐	堅	脚部一部欠	外面と杯部内面暗文風ヘラミガキ，脚部内面ヘラケズリ	
23	1層	甕C	口12.5	英，長 雲(細)	淡褐	堅	1/8		
24	1層	甕C	口16.7	英，長 雲(小細)	茶褐	堅	1/8		外面口縁端部にスス
25	一括， 1層・2層	甕B？	口17.1	英，長 雲(細)	淡褐	堅	1/3		外面に厚くスス
26	1層，No.10	甕B	口16.7	英，長 雲(細)	茶褐	堅	1/4		
27	SI 502A	甕B	口17.0	英 雲(細) 小礫 海針	淡褐	堅	1/8		外面に厚くスス
28	1層	甕A	口18.3	英，長 雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/8		外面にスス
29	No.14，No.9	甕A	口17.0 高22.4	英，長 雲(細)	淡褐	堅	一部欠		底部内面炭化物，口縁～体部外面にスス
30	No.9，No.11	甕C	口18.2	英，長 雲(細) 細礫	淡褐	堅	(口)一部欠 体部1/2		底部内面炭化物，口縁～体部外面にスス

SI 70　(本文90頁，図版48)

番号	地　点	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
31	2層	小型壺E	口10.8 高12.8	英，長 雲(細)	茶褐	堅	1/2	外面と口縁内面ていねいなヘラミガキ，口縁外面に幅1cm，8条の帯状の赤彩	
32	E10	小型器台B	口 8.7	英，長 雲(細)	淡褐	堅	1/3	内外面ヘラミガキ	
33	2層	高杯C	口16.5	英， 雲(細)	明褐	堅	1/8		内外面に黒斑
34	E10，2層	甕		英，長 雲(細)	茶褐	堅	(底)一部欠		内外面に黒斑
35	2層	甕B	口15.8	英，長 雲(細)	茶褐	堅	一部欠		口縁～体部外面にスス，底部内面炭化物

SI 1480・1460　(本文89頁，図版49)

番号	地　点	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
36	SI 1480 A区	甕C	口16.0	英，長 雲(細)	明褐	堅	1/4		口縁外面にスス

番号	地　点	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
37	SI 1480 A区	甕A	口15.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8		
38	SI 1480 A区,アゼ	甕		英,長雲(細)	明褐	堅	底部 1/3		
39	SI 1480 A区	甕A	口16.0	英,長雲(細)	淡褐	堅	3/4		外面にスス,口縁内面端部の一部にスス(炭化物?)
40	SI 1480 A区	甕B	口15.8	英,長雲(細)	明褐	堅	3/4		口縁～体部外面にスス
41	SI 1480 A区	甕A	口13.5 高18.5	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/2		口縁～体部外面にスス
42	SI 1480 A区	甕A	口15.8	英,長雲(小細)	茶褐	堅	1/3		口縁～体部外面にスス
43	SI 1480 A区	甕A	口19.7	英,長小礫	淡褐	堅	1/6		頸部外面に厚くスス
44	SI 1480 A区,アゼ	甕B	口16.2	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	2/3		口縁～体部外面にスス
45	SI 1480 B区撹乱	壺A	口18.3	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/2	内外面ていねいなヘラミガキ	
46	SI 1460	高杯B	口17.4	英雲(細)海針	赤褐	堅	1/3	内外面ヘラミガキ	
47	SI 1460 2層下部	壺C_1	口16.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/3	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ,内面ヘラミガキ	
48	SI 1460 トレンチ	小型壺B	口11.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/8	内外面ヘラミガキ	
49	SI 1460 B区撹乱	甕A	口16.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/4		口縁外面にスス
50	SI 1460 B区撹乱	甕A	口18.6	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/4		口縁外面にスス

SI 1168 （本文88頁，図版50）

51	No.14，D区	小型器台B	口 8.6 底11.0 高 8.0	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	3/4	受部ヨコナデとナデ，脚部外面ヘラミガキ	
52	SI 1167 A区黒褐色土	小型器台B	口 8.2 底12.0 高 7.4	英雲(細)小礫細礫	赤褐	堅	2/3	受部ヨコナデ，脚部外面ヘラミガキ	
53	1層	高杯脚部B		英雲(細)小礫	淡褐	堅	脚部一部欠	外面ていねいなヘラミガキ一部に赤彩痕	
54	No.15，D区	高杯脚部A	底12.3	英,長雲(細)	淡褐	堅	脚部一部欠	外面ヘラミガキ	
55	D区	高杯D	口14.5	英雲(細)細礫	茶褐	堅	1/6		外面に黒斑

番号	地　点	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
56	No.16	有孔鉢	口15.8 高 8.8	英雲(細)小礫海針	明褐	堅	1/3		胎土に海綿骨針を多量に含む
57	No.14，D区	壺C_2	口13.2	英,長雲(小細)小礫	赤褐	堅	(II)一部欠	外面粗いヘラミガキ	
58	A区一括	甕B	口12.1	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/4		口縁～体部外面にスス
59	No.12	甕B	口15.4	英,長雲(細)小礫	明褐	堅	1/3		口縁～体部外面にスス
60	No.2	無頸鉢?	口14.6	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/3		口縁外面にスス
61	D区	甕A	口20.5	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/10		
62	1層，A区一括	壺D_2	口17.2	英,長雲(細)小礫	明褐	堅	1/8		
63	No.8，A区南北トレンチ	壺	底 8.2	英雲(細)小礫海針	赤褐	堅	底部全存	外面赤彩?	
64	No.10	甕C	口24.6	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/3		

SX 795 （本文90頁，図50）

65	SX 733 図面土器	壺C_1	口15.7	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	3/4		口縁外面にスス
66	SX 737	壺A	口22.2	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/4	内外面ていねいなヘラミガキ	内面に黒斑
67	SX 737	小型壺B		英雲(細)	淡褐	堅	1/3	内外面粗いヘラミガキ	
68	SX 733	小型壺B		英雲(細)細礫	茶褐	堅	体部全存	外面ヘラミガキ	
69	SX 737	甕C	口16.1	英,長雲(細)小礫海針	淡褐	堅	1/2		口縁～体部外面にスス

SI 1124 （本文89頁，図版51）

70	A区	小型壺B_2	口 9.4	英,長	赤褐	堅	1/10	内外面ていねいなヘラミガキ，赤彩	外面黒斑
71	C区南北トレ，D区南北トレ	小型壺B_2		英雲(細)	赤褐	堅	1/3	外面赤彩	
72	A区東西トレ	手づくね土器	底 3.3	英,長雲(細)	茶褐	堅	一部欠		外面の一部にスス
73	A区，C区7層	小型壺C	口10.2	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/4		
74	D区床面直上	小型壺		英,長雲(細)	茶褐	堅	底部全存	外面ヘラミガキ	壺底部転用土器，底部内面に炭化物，外面に黒斑

番号	地点	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
75	A区7層	小型器台？	口11.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/6		口縁外面に黒斑
76	7層	壺	底 5.4	英雲(細)海針	茶褐	堅	底部全存	底部内外面ヘラケズリ	
77	東西ベルト，CD区間，7層	壺	底 6.8	英,長雲(細)	淡褐	堅	底部全存		
78	A区，南北ベルト9層	高杯脚部B	底10.7	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/3	外面ヘラミガキ	
79	A区上層C区	器台脚部？	底12.4	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/3		
80	南北ベルト2層，7層，B区7層	高杯C	口17.2	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	内外面ヘラミガキ	
81	B区床直	高杯B	口19.4	英,長雲(細)	明褐	堅	杯部全存	外面粗いヘラミガキ	内外面の対応する箇所に黒斑
82	A区7層南北ベルト9層	高杯B	口19.6	英,長雲(細)小礫	明褐	堅	1/3	外面ヘラミガキ	
83	1層C区C区6層	高杯B	口19.2	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/6	内外面ヘラミガキ	杯部底部内面に黒斑
84	B区7層	高杯B？	口22.5	英,長小礫	茶褐	堅	1/10	内外面ヘラミガキ	
85	D区7層	高杯B？	口22.6	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/6	内外面粗いヘラミガキ	
86	A区7層B区7層	高杯B	口23.9	英,長雲(小細)	茶褐	堅	杯部1/2	外面粗いヘラミガキ	
87	7層	甕D	口14.8	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/2		口縁～体部外面にスス

SI 71 （本文90頁，図版51）

88	トレンチ	小型器台A	底11.4	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	脚部1/3	外面ヘラミガキ	脚部四方透かし
89	No.1，2層No.3，2層D10トレンチ	小型器台C	底14.7	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	脚部1/6		脚部四方透かし
90	トレンチ1層	小型壺D_1	口 8.5	英,長雲(細)小礫海針	茶褐	堅	1/3		
91	2層1地点	小型壺C	口 9.4 高11.2	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	完形	外面ヘラミガキ	底部穿孔
92	D10,No.1 2層	小型壺		英,長雲(細)	赤褐	堅	体部1/2	外面ていねいなヘラミガキ	底部穿孔
93	トレンチ1層	小型壺C	口(8.5)	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/3		

SI 115 （本文90頁，図版52）

94	上層	小型壺D_2	口 9.6 高10.1	英,長雲(細)	淡褐	堅	完形		底部外面に黒斑

番号	地点	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
95	覆土上層	甕B	口18.4	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/4		
96	覆土上層	甕A	口17.3	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/6	体部外面粗いヘラミガキ	
97	2層，床面，上面	高杯B	口19.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	杯部1/4	内外面ヘラミガキ	外面の一部に黒斑
98	上面一括	壺B	口14.1	英,長雲(細)	淡褐	堅	(口)一部欠体部1/2	外面ヘラミガキ	

SI 1010 （本文91頁，図版52）

99	SI 1010	高杯C	口16.8	英,長雲(細)	淡褐	堅	杯部一部欠	内外面ヘラミガキ（外面は磨耗が著しい）	
100	SI 1010	小型壺B_2	口11.9	英,長雲(細)	淡褐	堅	杯部1/8	内外面ヘラミガキ	
101	SI 1010	小型器台	底13.4	英,長雲(細)	淡褐	堅	脚部1/6	外面ヘラミガキ	
102	カクラン	甕C	口13.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/3		
103	カクラン坑	甕B	口20.4	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/6		体部外面にスス
104	SI 1010	甕A	口17.2	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/3		口縁～体部外面に厚くスス口縁内面端部にスス（炭化物？）

SK 108 （本文91頁，図版52）

105	2層，中層	壺D_2	口16.4	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/2		口縁外面一部に厚くスス，口縁内面端部に炭化物
106	中層	甕	底 4.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	底部1/3		外面にスス，底部内面に炭化物

SK 107 （本文91頁，図版52）

107	サブトレSK 108中層	甕B	口21.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	2/3		口縁～体部外面にスス，口縁内面一部と体部に炭化物
108	SK 107 E11(19)遺構上面	壺C_2	口19.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	内外面粗いヘラミガキ	

SI 439 （本文91頁，図版53）

109	南東コーナー	小型鉢B	口13.3 高 6.7	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/3	体部外面ヘラミガキ	
110	南東コーナー	小型鉢B	口13.8 高 6.9	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/6		
111	SI 439	小型器台		英,長雲(細)	茶褐	堅	頸部1/2	受部内面ヘラミガキ	
112	東側カクラン	甕C	口13.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/3	-	口縁～体部外面にスス

番号	地点	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
113	SI 439	甕C	口21.0	英,長雲(細)海針	(内)暗褐(外)淡褐	堅	1/6		

SI 263 (本文91頁, 図版53)

114	2層一括	小型器台A	口 8.4 底12.2 高 8.1	英,長雲(細)	淡褐	普通	3/4	外面ヘラミガキ	脚部二段三方透かし
115	2層一括	小型器台A	口 8.6 底11.3 高 9.4	英,長雲(細)細礫	淡褐	堅	受部1/4 脚部全存	受部内面と外面ヘラミガキ	脚部四方透かし

SI 402 (本文91頁, 図版53)

116	1層	高杯D	口10.6	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	杯部1/4		
117	1層	壺	口14.3	英,長雲(細)	茶褐	堅	杯部1/4		

SI 660・650 (本文91頁, 図版53)

118	1層	甕B	口(25.0)	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/8		口縁～体部外面に薄くスス
119	SI 650 1層, SI 660トレンチ	壺		英,長雲	(内)淡褐(外)黒褐	堅	体部1/2	外面ヘラミガキ	
120	SI 650 No.1, 1層	小型器台A	底11.2	英雲(細)	(内)淡褐(外)赤褐	堅	脚部一部欠,受部1/10	外面ヘラミガキ,脚部外面と受部赤彩	脚部四方透かし

その他の土器 (本文91頁, 図版53・54)

121	SI 802	小型器台	口 9.5	長雲(細)	(内)黒褐(外)淡褐	堅	受部1/3	内外面ヘラミガキ	
122	C-12(1) 2層上面	小型器台A	口10.6 底10.0 高 8.4	英,長雲(細)	淡褐	堅	脚部一部欠	受部内面脚部外面ヘラミガキ	脚部三方透かし
123	表採	小型器台C		雲(細)	明褐	堅	頸部のみ	内外面ていねいなヘラミガキ, 外面赤彩	
124	C13(7·8)	高杯脚部B		英,長雲(細)	淡褐	堅	脚部一部欠,杯部1/8	杯部と脚部外面ヘラミガキ	
125	A12(6) 1層	器台		英,長雲(細)	茶褐	堅	頸部全存受部1/8	受部と脚部外面ヘラミガキ	受部に透かし数は不明
126	試掘, 表採	小型壺C	口10.2 高14.1	英,長雲(小細)	茶褐	堅	1/3	体部外面ヘラミガキ	体部外面にスス
127	SI 640 トレンチ	小型壺B_2	口12.2	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/6	体部外面ヘラミガキ	
128	B13(21) 2層	鉢			灰	堅	頸部小破片		須恵器, 内面に自然釉
129	SI 600 遺構上面	小型壺D_2		英,長雲(細)	茶褐	堅	体部1/2	外面ヘラミガキ	体部,底部内面に炭化物, 体部外面にスス
130	D10(18) 1,2層	蓋		英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	ツマミ全存		
131	E9(14) カクラン坑	手づくね土器	底 3.4	長雲(細)小礫	茶褐	堅	一部欠		
132	E11(16) 1層	有孔鉢	底 3.2	長雲(細)細礫	(内)茶褐(外)黒褐	堅	底部全存		底部穿孔
133	SI 595 SI 560 カマド	甕A	口16.0 底 5.8 高23.8	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/2		底部内面に炭化物, 口縁～体部外面にスス
134	C12(14) 1層(19) 2層	壺?	口23.2	英,長雲(細)細礫	淡褐	堅	1/3		
135	SK 1337 B12(21) 上面	甕A	口20.2	英,長雲(細)細礫	淡褐	堅	1/3		口縁～体部外面にスス

奈良・平安時代

SI 5 (本文111頁, 図版55)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
1	北西上層	土師	小甕C?	口13.0	英細礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	口縁内面炭化物
2	カマド No.8	土師	小甕	底 6.5	英雲(細)	淡褐	普通	底部全存	底外ハケ目	外面一部スス
3	下層 北東上層	土師	長甕C	底 7.7	英	淡黄褐	堅	1/6	ロクロ, 底外ヘラケズリ	
4	カマド No.1	土師	小甕A	底 3.0	英雲(細)細礫	淡褐	堅	底部全存	非ロクロ 底外木葉痕	
5	下層	土師	長甕B		英雲(小細)小礫	明褐	堅	1/5	ロクロ	
6	No.3 カマドソデ内	土製品	支脚?	口 8.2 4.0 底 4.5 高 4.4	英雲(細)細礫	淡褐	普通	完形	非ロクロ	外面一部スス
7	カマドソデ	土師	鉢形甕	口17.8	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	非ロクロ1類	内面全体炭化物, 外面スス。口縁ゆがみは比較的大
8	カマドソデ No.2, No.9 北トレ	土師	短胴甕A	口24.0	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/3	非ロクロ1類	口縁内面炭化物
9	カマド No.1	土師	長甕A	口22.8	英雲(細)中礫小礫	淡褐	普通	1/4	非ロクロ2類	外面全体薄くスス
10	カマド付近 下層撹乱 北東上層	土師	長甕A	口23.3	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	非ロクロ1類	外面全体薄くスス

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
11	カマド No.10 下層撹乱 北東上層 北トレ	土師	長甕A	口23.8	英 雲(細) 小礫	黒褐	堅	1/3	非ロクロ 1類	
12	No.12下層 No.9	土師	長甕B	口20.8	英,長 雲(細)	淡褐	普通	1/2	ロクロ 口縁内面に沈線上くぼみ	内面は黒くしまっている
13	北トレンチ 北西上面	土師	鍋	口40.2	英 雲(細) 細礫	淡褐	堅	1/15	ロクロ	

SI 115 （本文111頁，図版56・57）

14	No.1	須恵	無台杯(片口)	口11.0 底 7.9 高 3.9	C	灰	堅	ほぼ完形	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕。胎土に石英を含まずやや精良
15	カマド	須恵	無台杯	口11.0	A	灰	堅	1/10		
16	上層 覆土上層	須恵	有台杯	口10.2 台 7.4 高 3.5	C	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	胎土に石英を含まずやや精良
17	2層	須恵	有台杯A	台 8.6	C	灰	堅	1/8	底外ヘラ切り	胎土に石英を含まずやや精良
18	覆土上面	須恵	杯蓋	器17.4	A	灰	堅	1/6	天外ロクロケズリ	外面に自然釉
19	上面	土師	無台杯A	口16.2	雲(細)	明褐	堅	1/15	ロクロ 内面ヘラミガキ	
20	カマド5層	土師	壺B	口11.4	長 細礫	赤褐	堅	1/4	ロクロ 口縁内面体部外面ヘラミガキ	胎土，色調，調整，形態から一般的な土師器ではない
21	カマド上面1層，北側3層	土師	鉢B	口17.0 高10.4	英 雲(細) 小礫	赤褐	堅	1/6	内外面ヘラミガキ	口縁内面炭化物。二次焼成をうける
22	2層	土師	小甕A	口13.0	英 雲(細)	茶褐	堅	1/8	非ロクロ	
23	カマド北側	土師	小甕B	口12.6	英 雲(細) 小礫	茶褐	堅	1/8	ロクロ	
24	カマド東4層	土師	小甕B?	口11.8	英 雲(細)	茶褐	堅	1/8	ロクロ？	口縁内面炭化物
25	3層	土師	長甕	底13.0	英,長 雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/4		内面炭化物，外面ススス
26	カマド	土師	長甕B		英,長 雲(細)	茶褐	堅	小片	ロクロ	
27	2層	土師	長甕A	口21.2	英 雲(細) 小礫	茶褐	堅	1/8	非ロクロ	
28	Pit 1	土師	長甕A	口22.4	英,長 雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/4	非ロクロ	外面に黒くなっている部分。カマドの芯に使用した可能性がある
29	3層カマド，2層カマド1層	土師	長甕A	口20.2 底 9.7 高26.6	英,長 雲(細) 小礫	茶褐	堅	一部欠	非ロクロ 1類，底外木葉痕	
30	カマド北側	土師	長甕A	口22.2	英,長 雲(小細)	茶褐	堅	1/4	非ロクロ 2類	外面全体薄くススス。内面は黒斑
31	カマド4層，カマド上面	土師	長甕A		英,長 雲(細) 小礫	茶褐	堅	1/5	非ロクロ 1類	外面黒斑状のシミ，内面薄くススス
32	上面	土師	短胴甕A	口30.0	英 雲(細) 細礫	暗褐	堅	1/4	非ロクロ 1類	全体に薄い作り。口縁「く」の字に屈曲外反。非在地，佐渡産か？
33	カマド北側	土師	鍋A	口31.6	英,長 雲(細) 細礫	明褐	堅	1/12	非ロクロ 2類	口縁内面に薄く炭化物
34	Pit 2一括	土師	長甕A	口25.4	英,長 雲(細) 細礫	茶褐	堅	一部欠	非ロクロ 1類	口縁～体部外面にススス
35	上層 カマド東4層，2層，カマド北側，カマド1層上面	土師	長甕A	口19.0 底10.0 高32.1	英,長 雲(細)	淡褐	堅	(口) 1/10 (体) 5/6	非ロクロ 2類 底外にかすかな砂痕	外面の約半分に薄くススス。伝統的非ロクロ成型と技法，形態，胎土が異なる

SI 804 （本文113頁，図版57）

36	1層	土師	小甕B?	口12.0	英 雲(細) 小礫	茶褐	堅	1/8	ロクロ	内面全体炭化物，体部外面にススス
37	1層，2層	土師	小甕B	口13.8	英 雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	頸部内面炭化物
38	1層，2層 No.8	土師	小甕B	口16.0 底 7.7 高14.0	英,長 小礫	茶褐	堅	1/6	ロクロ	口縁内面炭化物，口縁外面～体都にかけてススス
39	カマドNo.8，SI 806，1層	土師	長甕C	口21.4	英,長 雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	外面全体に薄いススス
40	上面	土師	長甕A	口21.4	英,長 雲(細) 小礫 海針	淡褐	堅	1/8	非ロクロ	体部外面にススス

SI 807 （本文113頁，図版57）

41	1層	須恵	無台杯	口13.1 底 9.0 高 3.2	A	灰	堅	1/6		
42	No.1	土師	小甕A	口10.5	英 雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/8	非ロクロ	外面全体にススス
43	No.2 トレンチ出土	土師	鉢形甕	口23.6	英,長 雲(細)	暗褐	堅	1/3	非ロクロ	

SI 336 （本文113頁，図版58）

44	撹乱	須恵	有台杯A	台 8.2	A	淡灰	普通	1/5	底外ヘラ切り	底部にヘラ記号
45	撹乱	須恵	壺蓋	器12.6	A	灰	普通	1/10		口縁外面自然釉
46	トレンチ2層	土師	小甕A	口17.4	英 雲(細) 細礫	淡褐	堅	1/6	非ロクロ	体部内面炭化物
47	1層	土師	小甕C	口15.6	英 雲(細) 細礫	明褐	堅	1/6	ロクロ	口縁内外面対応部ススス

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
48	トレンチ	土師	小甕C	口13.6	英雲(細)細礫	明褐	堅	1/6	ロクロ	
49	No.9カマド	土師	甕A	底 7.4	英,長雲(小細)細礫	赤褐	普通	1/2	非ロクロ底外木葉痕	
50	西側撹乱	土師	椀A	口10.4	英雲(細)細礫	淡褐	堅	1/3	非ロクロ	
51	カマドNo.2	土師	片口鉢?	残存高6.0	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/5	非ロクロ	口縁内面炭化物，体部外面割れ口にスス
52	No.4	土師	長甕C	底 8.0	英,長小礫細礫	淡黄褐	普通	1/5	ロクロ底外ハケケズリ	外面底部と体部につながる黒斑
53	トレンチ2層，3層	土師	小甕A	口14.6 底 7.1 高12.4	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/4 口縁1/12	非ロクロ底外ヘラケズリ	頸部と底部外面に薄くスス
54	カマド内No.8	土師	長甕B	口18.6	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	口縁～体部外面に一部薄いスス
55	カマド内No.7	土師	長甕B	口23.0	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	体部内面に部分的に炭化物
56	1層	土師	短胴甕A?	口19.0	英,長小礫	淡褐	堅	1/8	非ロクロ2類	
57	No.3	土師	長甕A	口22.6	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/2	非ロクロ1類	
58	撹乱	土師	大鉢	口34.9	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	SK340に同一個体あり

SI 1312 （本文114頁，図版58）

59	カマド西側	土師	小甕A	口14.0	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	非ロクロ	

SI 640 （本文114頁，図版58）

60	カマド一括	土師	長甕C	底 8.6	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	2/3	底外周辺ヘラケズリ，中心部指頭圧痕	体部外面薄くスス
61	カマド一括	土師	小甕C	口14.4 底 6.4 高14.4	英,長雲(細)小礫	明褐	堅	1/3	ロクロ	頸部～体部内面炭化物

SI 71 （本文114頁，図版59）

62	上層	須恵	無台杯	口15.0 底10.6 高 3.5	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面重ね焼痕
63	トレンチ	須恵	無台杯	口12.6 底 9.4 高 4.1	C?	淡灰	普通	1/2	底外ヘラ切り	灯明皿。割れ口にタール
64	上層	須恵	有台杯A	口14.6 台10.2 高 5.6	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	底部外面ヘラ記号。外面全体に自然釉
65	上層	須恵	有台杯B	口13.3 台 9.1 高 6.6	B	淡灰	軟	1/5		底部ロクロナデのため切り離し手法不明
66	1層	土師	椀A	口10.1	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面に炭化物
67	1層	土師	小甕B	口16.4	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/4	ロクロ	内面全体，口縁厚く炭化物
68	1層	土師	小甕B	口14.1	英雲(細)	淡褐	普通	1/5	ロクロ	口縁～頸部内面炭化物，下部にはなし
69	1層	土師	小甕B	口17.2	英,長雲(小細)	淡褐	堅	1/5	ロクロ	
70	1層	土師	小甕B	口17.8	英,長雲(小)	明褐	堅	1/8	ロクロ	
71	No.5 2層	土師	長甕C	底 6.8	英,長雲(小)	明褐	堅	1/2	ロクロ	外面に薄くスス
72	1層	土師	小甕A	口12.6 底 6.7	英,長雲(小)小礫	淡褐	堅	口縁1/4	非ロクロ2類	口縁端部内面に薄くスス
73	1層	土師	甕A	底 6.7	英,長雲(細)小礫	(内)黒褐(外)淡褐	普通	底部全存	非ロクロ	
74	1層	土師	長甕A	口24.6	英,長中礫小礫	明褐	堅	1/5	非ロクロ2類	頸部内面一部炭化物
75	No.2 2層	土師	長甕A	口24.5 底 9.0 高34.2	英,長雲(細)小礫	明褐	堅	口縁一部欠	非ロクロ1類，底外砂痕	外面片面スス。カマドの芯の可能性
76	No.1 2層	土師	長甕A	口22.3 底 8.6 高34.6	英,長雲(小)	淡褐	堅	口縁一部欠	非ロクロ1類，底外砂痕	外面全体スス。片側に厚く，カマドの芯の可能性

SI 610 （本文115頁，図版60・61）

77	カマド	土師	長甕A	口19.2 底 8.8 高23.3	英,長雲(細)海針	淡褐	堅	1/2 口縁1/20	非ロクロ1類，底外木葉痕	体部外面中央に直径3cmほどの2つの黒斑
78	カマドNo.11	土師	長甕A	口21.6 底 9.7 高24.2	英,長雲(細)海針	暗褐	堅	4/5	非ロクロ1類	体部外面スス
79	カマドNo.12，No.10	土師	長甕A	口22.8	英,長雲(細)海針	淡褐	堅	口縁一部欠 体部4/5	非ロクロ1類	体部外面に約1/3スス
80	カマドNo.11	土師	長甕A	口19.6	英,長雲(細)小礫	明褐	普通	1/2	非ロクロ1類	二次焼成を受けるがススはない
81	No.1 2層	土師	長甕A	底 9.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/2	非ロクロ	外面全体スス
82	カマド	土師	長甕A	口21.3	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/2	非ロクロ1類	体部外面に1cm×3cmほどの黒斑が2つ
83	遺構上面	須恵	無台杯	口12.4 底 7.8 高 3.4	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	底部墨書。文字不明。口縁外面重ね焼痕
84	トレンチ2層カマド付近	土師	甕A	底 8.6	英,長	淡褐	堅	底部全存	非ロクロ底外木葉痕	底部片側周辺～体部外面にスス
85	2層	土師	長甕A	口18.4	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/5	非ロクロ	

SI 600 （本文115頁，図版61）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
86	トレンチ	須恵	有台杯A	口14.1 台10.4 高 4.6	A	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	
87	トレンチ	須恵	有台杯A	台 8.6	C	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り，内面ロクロナデ後一方向ナデ	底部内面は使用による磨滅
88	トレンチ	土師	小甕A	口14.7	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	非ロクロ	
89	遺構上面	土師	長甕A	口23.8	英，長雲(小細)	明褐	堅	1/5	非ロクロ	口縁外面に厚く，体部に薄くスス
90	トレンチ	土製品	フイゴ羽口		英，長雲(細)小礫	淡褐	堅			

SI 630 （本文115頁，図版61）

91	カマドNo.8	土師	長甕A	口22.2	英，長雲(細)小礫海針	明褐	堅	1/2	非ロクロ	頸部外面1cm程の黒斑が2つ
92	カマドNo.5	土師	長甕A	口25.0	英，長雲(細)海針	明褐	堅	1/6	非ロクロ	体部外面厚くスス

SI 1311 （本文115頁，図版61）

93	B区	須恵	有台杯A	口14.2 台 8.6 高 4.3	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
94	カマドトレンチ	土師	鉢形甕	口18.0 底 6.2 高13.0	英，長雲(細)小礫	淡灰	堅	1/5	非ロクロ 底外ヘラケズリ	

SI 462 （本文116頁，図版62・63）

95	No.13	須恵	杯蓋	器16.0 高 3.3	A	灰	堅	1/2	天外ロクロケズリ	外面全体自然釉，内面転用硯
96	2層	須恵	無台杯	口12.4 底 8.8 高 3.6	A	淡灰	軟	1/6	底外ヘラ切り	
97	2層	須恵	無台杯	口13.4 底 9.8	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
98	上面	須恵	有台杯X	口16.0	A	灰	堅	1/8		内面全体自然釉
99	サブトレ	須恵	有台杯B	口13.3	A	灰	堅	1/4		
100	SK840，2・3層	須恵	広口壺？		C	灰	堅	1/5		外面薄く自然釉
101	2層	須恵	短頸壺	底11.0	C	黄灰	普通	1/3	底外板状圧痕	胎土に石英を含まず精良。SI 336に同一個体あり
102	No.10	須恵	杯蓋		A	灰	堅	1/2	天外ロクロケズリ	内面転用硯。ツマミ剝離
103	No.12	須恵	有台杯A	底10.3	A	灰	堅	全存	底外ロクロケズリ	転用硯か。底部外面黒っぽく磨滅著しいが墨痕認められず
104	3層，No.8	土師	無台杯B	口12.6 底 7.1 高 3.8	英，長雲(細)細礫	淡褐	堅	1/3	底外ヘラ切り	土師器の胎土・焼成・色調を呈す

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
105	No.2	土師	椀A	口10.4	英，長雲(細)海針	(内)黒褐(外)淡褐	堅	1/3	非ロクロ	口縁内面炭化物，口縁外面スス。二次焼成を受ける
106	3層	土師	小甕A	口14.0	英雲(細)小礫	(内)黒褐(外)暗褐	堅	1/6	非ロクロ 1類	口縁内面炭化物
107	サブトレ1－4 SI 483他	土師	小甕A	口12.6	英，長雲(細)	黒褐	堅	口縁1/10 体部1/3	非ロクロ 1類	
108	No.1，No.3	土師	小甕A	口17.2	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/4	非ロクロ 1類	口縁内面薄く炭化物，体部外面一部スス
109	サブトレンチ，No.1－No.5	土師	小甕A	口16.6 底 8.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	非ロクロ 1類 底外木葉痕	口縁内面に炭化物
110	4層	土師	小甕C	口12.6	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面薄く黒色付着物
111	3層	土師	甕C	底 5.8	英，長雲(細)	淡褐	堅	(底)全存(体)1/3	ロクロ	内外面の対応する箇所にスス
112	2層	土師	小甕C	口17.4	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	頸部～体部内面薄く炭化物
113	2層，3層，No.9	土師	小甕C	口16.8	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	頸部～体部外面スス
114	Pit 1	土師	小甕C？	口10.0	長雲(細)海針	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面に炭化物
115	カマドNo.4	土師	小甕B？	口14.0	英，長雲(細)中礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ	
116	カマドNo.5	土師	甕A	底 8.6	英，長雲(細)小礫	淡褐	普通	底部全存	底外圧痕	
117	No.7	土師	甕A	底 7.8	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/2	底外圧痕	
118	カマドNo.6	土師	甕A	底 6.6	英，長雲(細)	淡褐	普通	底部一部欠	底外ヘラケズリ	底部外面近くハケの原体によるくぼみか
119	4層	土師	甕A	底 8.8	英，長雲(細)小礫	(内)明褐(外)淡褐	普通	1/6	底外圧痕	体部外面一部スス
120	2層	土師	長甕B	口15.4	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ 2類	
121	2層	土師	長甕A	口21.8	英，長雲(細)	白褐	普通	1/10	非ロクロ 2類	
122	SI 462，464他	土師	長甕B		英雲(小)小礫	淡褐	普通	口縁部小破片	ロクロ	口縁外面一部スス
123	No.5，1層 サブトレ	土師	鍋C	口38.0 高15.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ 底外ハケ目	体部外面一部スス
124	C 8 (11) 1層	土師	鉢	口20.4	長雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	

SI 741 （本文117頁，図版63・64）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
125	3層	須恵	無台杯	口12.1 底 9.0 高 3.7	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	外面1/3と対応する内面に薄く自然釉
126	2層アゼ	須恵	無台杯	口13.8 底 9.6 高 3.2	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
127	アゼ1層 C11(17, 22)	須恵	長頸瓶	肩15.2	A	灰	堅	1/8		肩部外面薄く自然釉
128	2層アゼ	須恵	短頸壺	肩16.0 底 7.4	C 海針	灰	堅	1/6	底外ヘラケズリ	頸部内面薄く自然釉
129	カマド	土師	小甕A	口16.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6	非ロクロ	頸部～体部内面炭化物
130	SI 741, 502その他	須恵	横瓶	口16.3	A	灰	堅	口縁1/2 体部3/4		頸部内面体部外面半分自然釉
131	カマドNo.9, No.10上面3層	土師	長甕A	口19.5 底 7.6 高31.0	英,長雲(細)小礫	赤褐	堅	口縁2/3 底部全存	非ロクロ1類	口縁外面全体にスス。体部外面下部一部黒斑
132	No.6, No.9 3層	土師	長甕A	口19.8 底 8.6 高36.0	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	口縁1/6 体部1/2	非ロクロ1類，底外木葉痕と砂痕	体部外面1/4にスス，カマドの芯として使用
133	SI 741	土師	長甕A	口18.7	英雲(細)小礫	淡褐	堅	口縁2/3	非ロクロ2類？	
134	カマド内	土師	長甕A	口22.8	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	非ロクロ1類	
135	最上層	土師	甕C？	口18.8	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	
136	2層	土師	小甕C	口18.6	英雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	頸部～体部内面炭化物
137	No.10	土師	壺A	口14.6 底11.0 高32.7	英雲(小細)海針	淡褐	堅	一部欠	非ロクロ 内外面ていねいなヘラミガキ	内外面対応する箇所に黒斑

SI 12 （本文118頁，図版65）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
138	カマド	須恵	無台杯	口13.1 底10.4 高 3.0	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	口縁外面に重ね焼痕
139	下層	須恵	無台杯	口15.0 底 9.4 高 4.1	C	淡灰	普通	1/3	底外ヘラ切り。底部内面ロクロナデ後一方向のナデ	胎土に石英，長石を含むがやや精良
140	D4, D5 撹乱	須恵	無台杯	口15.4 底11.3 高 3.6	A	淡灰	軟	1/4	底外ヘラ切り。底部内面ロクロナデ後一方向のナデ	底部外面墨書
141	下層	須恵	無台杯	口16.0 底12.0 高 3.6	A	淡灰	普通	1/3	底外ヘラ切り	内外面に対応する箇所にスス
142	下層	須恵	有台杯	口13.8	C	灰	堅	1/10		口縁外面に重ね焼痕。胎土に石英を含まずやや精良
143	カマド付近，下層	須恵	有台杯A	口14.8 台11.0 高 4.3	A	(内)暗褐(外)黒褐	堅	1/3	底外ロクロケズリ	
144	カマド付近	須恵	有台杯X	口13.8	A	灰	堅	1/8		
145	カマド付近	須恵	有台杯B	口14.2	A	淡灰	普通	1/10		
146	下層	須恵	杯蓋	器16.3 高 2.7	A	淡黄灰	堅	2/3	天外ロクロケズリ	外面全体に淡緑色のアメ状自然釉
147	撹乱	須恵	甕		A	暗茶	堅	(体)破片		
148	撹乱	土師	小甕C	口12.4	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	
149	カマド	土師	小甕B？	口14.0	英,長雲(小)小礫	淡褐	普通	1/8	ロクロ？	口縁内面にスス
150	撹乱	土師	小甕A	口13.6	英,長雲(細)細礫	淡褐	普通	1/10	非ロクロ2類？	頸部内面に薄く炭化物
151	撹乱	土師	小甕C	口11.7	英,長雲(細)	明褐	堅	1/8	ロクロ	
152	中層	土師	小甕C？	口12.0	英,長雲(細)	明褐	堅	1/10	ロクロ	頸部～体部外面に一部スス
153	下層	土師	小甕B	底 7.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	底部一部欠	ロクロ	体部内面一部炭化物
154	カマド付近	土師	長甕C	底11.0	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/6		体部外面に一部スス
155	カマド	土師	小甕B	口14.6	英,長雲(細)小礫	明褐	堅	1/4	ロクロ	外面の頸部より下の体部にかけ剝離，調整不明
156	カマド	土師	長甕C	口21.0	英,長雲(細)小礫	明褐	堅	1/4	ロクロ	
157	撹乱	土師	長甕A？	口20.1	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	非ロクロ2類？	
158	カマド，カマド付近，下層	土師	長甕B	口19.9 高31.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	体部～底部外面にスス

SI 502 B （本文119頁，図版66）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
159	1層，床面	須恵	無台杯	口12.2 底 7.6 高 4.1	A	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	
160	南北トレンチ	須恵	無台杯	口13.6 底10.1 高 4.0	A	(内)灰(外)淡褐	堅	1/5	底外ヘラ切り	
161	カマド内	須恵	無台杯	口13.2 底 8.6 高 4.6	A	淡褐	軟	1/5	底外ヘラ切り	内外面黒褐色の付着物
162	1層	須恵	無台杯	口13.0 底 8.2 高 3.9	A	灰	堅	1/10	底外ヘラ切り	口縁外面及内面全体に重ね焼痕。最上部位置で焼成か？

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
163	2層	須恵	無台杯	口13.6 底10.5 高 3.1	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
164	床面	須恵	無台杯	口14.0 底 9.2 高 3.9	A	淡灰	軟	1/6	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕。金雲母が胎土中に微量
165	床面，南北トレンチ	須恵	無台杯	口15.0 底 8.7 高 3.8	A	淡灰	軟	1/4	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕。胎土，焼成は164に類似
166	床面，2層	須恵	有台杯A	口13.8 台 7.2 高 3.6	A	灰	堅	底部1/2	底外ヘラ切り	底部高台内側に黒色付着物（ススか墨）
167	1層	須恵	有台杯B	口15.1	A	淡灰	堅	1/10		内外面全体自然釉
168	床面	須恵	杯蓋	器16.8	A	灰	堅	1/4	天外ロクロケズリ	内面磨滅，墨痕，転用硯
169	A 1層	須恵	広口甕	口23.0	C 海針?	灰	堅	1/10		口縁外面自然釉
170	カマド西	土師	小甕C	口14.0 底 6.6 高14.7	英，長雲(小細)小礫 海針?	茶褐	堅	5/6	ロクロ	口縁内面全体と体部内面1/3に炭化物
171	南北トレ	土師	小甕B	口13.2	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/10	ロクロ	
172	東西トレンチ	土師	小甕C	口13.0	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/10	ロクロ	
173	床面	土師	甕A	底 7.0	英，長雲(細)小礫	赤褐	堅	底部全存	非ロクロ底外木葉痕	
174	SI 502B	土師	長甕C	底 9.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	2/3	ロクロ底外ハケ目	
175	No.13カマド	土師	長甕C	底 7.6	英，長雲(細)	淡褐	堅	3/4	ロクロ底外ハケ目	
176	2層	土師	長甕A	口22.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	非ロクロ1類	
177	2層	土師	長甕C	口22.4	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ	
178	No.13カマド	土師	長甕C	口20.2	英，長雲(小細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	頸部外面一部ススス
179	1層	土師	長甕B	口22.4	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/6	ロクロ	口縁外面一部ススス。口縁部は歪む
180	No.13カマド付近	土師	長甕B	口23.0	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	

SI 806（本文120頁，図版67）

181	1～3層遺構上面その他	須恵	無台杯	口14.2 底 9.4 高 3.4	C	淡褐	軟	1/3	底外ヘラ切り	底部外面一部ススス。Aより胎土精良(英)(長)を多く含む
182	南東部1層	須恵	無台杯	口13.0 底 9.2 高 2.8	A	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	
183	南部1層	須恵	有台杯A	台 7.3	A	暗灰	堅	底部全存	底外ヘラ切り	内面緑灰色の自然釉
184	上面	須恵	杯蓋	器14.0	A	灰	堅	1/3	天外ヘラ切り	
185	南東部1層	土師	小甕C	口13.4	英，長雲(細)	淡褐	普通	1/8	ロクロ	
186	3層	土師	小甕C	口15.8	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	1/8	ロクロ	口縁内面薄くスス(炭化物?)口縁～体部外面薄くスス
187	1層	土師	小甕B	口18.0	英雲(細)小礫	赤褐	普通	1/4	ロクロ2類	頸部内面炭化物
188	南東部1層	土師	長甕C	底10.4	英雲(細)小礫	淡褐	堅	(底)一部欠	底外板状圧痕	体部外面片側ススス
189	カマドNo.7	土師	長甕C	底 8.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	(底)全存(体)1/3	ロクロ	
190	カマドNo.3	土師	長甕B	口24.1	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ2類	
191	カマドNo.7，1層，トレンチ	土師	長甕B	口21.2	英雲(細)小礫 海針	茶褐	堅	(口)1/3 (体)1/4	ロクロ1類	体部外面一部薄くススス
192	カマド	土師	短胴甕?	底 7.0	英雲(細)海針	淡褐	堅	(底)全存(体)2/3		体部外面一部ススス
193	カマド	土師	鍋B	口36.4	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/8	ロクロ1類	
194	カマド	土師	鍋A	口40.0	英雲(細)小礫	茶褐	普通	1/6	非ロクロ	

SI 752（本文121頁，図版68）

195	東西トレンチ	須恵	有台杯A	口14.6	A	灰	堅	1/6		
196	南北トレンチ	須恵	有台杯A	口14.2 台10.2 高 4.6	A	灰	堅	(口)1/2 (底)一部欠	底外ヘラ切り	体部外面アメ状淡緑色自然釉
197	No.1	須恵	有台杯A	口14.0 台10.2 高 4.5	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り後ナデ	外面全体薄く自然釉
198	2層南西	須恵	杯蓋		A	灰	堅	ツマミ全存		胎土精良
199	1層	須恵	短頸壺	台11.2	A	灰	堅	1/4		高台外面濃緑色自然釉
200	E12(21，22) D11，1，2層	土師	無台杯X	口18.5 底14.1 高(4.7)	英，長小礫細礫海針	(内)黒褐(外)茶褐	堅	1/8	内面ヘラミガキ，底外ハケ目，内面黒色処理	
201	3層	土師	鉢形甕	口17.8	英雲(細)小礫	茶褐	普通	1/4	非ロクロ	口縁内面ススス(炭化物?)。口縁～体部外面にススス。内外面のススは対応
202	カマド内トレンチ	土師	甕A	口14.2	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/6	非ロクロ	口縁内面～体部に炭化物
203	東西トレンチ	土師	長甕A	口17.2	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	非ロクロ1類	頸部外面～体部薄くススス

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
204	東西トレンチ1層	土師	長甕A	口20.2	英雲(細)小礫	白褐	堅	1/3	非ロクロ1類	
205	上面	土師	長甕A	口19.6	英,長雲(細)	茶褐	普通	1/4	非ロクロ1類	
206	1層	土師	長甕A	口19.8	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6	非ロクロ1類	
207	東西トレンチ	土師	長甕C?	口22.4	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ?	
208	トレンチ	土師	長甕C	底 8.6	英,長雲(細)小礫	茶褐	普通	1/3	底外ヘラケズリ	体部内面一部黒い付着物
209	南北トレンチ	土師	甕A	底 6.8	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/2	底外砂痕	
210	南北トレンチ	土師	甕A	底 7.6	英,長雲(細)	茶褐	普通	1/2	非ロクロ底外木葉痕	
211	2層	土師	甕A	底 8.0	英雲(小細)小礫	暗褐	普通	底部全存	非ロクロ底外木葉痕	
212	南北トレンチ	土師	甕A	底 9.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	3/4	非ロクロ底外木葉痕	

SI 1000 (本文122頁, 図版68・69)

213	カマド西周堤一括	土製品	土管?		英,長雲(細)小礫	明褐	普通	1/2		
214	C2層	土師	鍋C	口34.7	英,長雲(細)小礫	明褐	普通	1/10	ロクロ	
215	トレンチ2,3層	土師	鍋B	口(34.2)	英,長雲(小細)小礫海針	淡褐	堅	1/10	ロクロ	口縁～体部外面にスス
216	攪乱坑	土師	鍋B	口(34.9)	英,長雲(細)	淡褐	普通	1/10	ロクロ	
217	カマド一括No.1	須恵	無台杯	口12.3 底 8.4 高 3.4	A	灰	堅	3/4	底外ヘラ切り,底部内面一方向ナデ	口縁外面重ね焼痕
218	カマド一括No.2	須恵	無台杯	口12.7 底 8.1 高 3.4	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り後一方向ナデ	
219	カマド一括No.3その他	須恵	無台杯	口13.2 底 8.1 高 3.4	A	黄灰	普通	(口)一部欠	底外ヘラ切り	
220	B2層	須恵	無台杯?	口13.2 底 7.1 高 2.8	C?	灰	堅	1/10	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕。胎土,形態が特異。Aより胎土精良。皿とも思われる。
221	C1層	須恵	無台杯	口11.6 底 8.2 高 2.9	B	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
222	アゼ1層	須恵	無台杯	口12.1 底 8.3 高 2.9	B	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
223	C2層	須恵	無台杯	口13.0 底 8.7 高 2.9	B	淡灰	軟	1/4	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
224	アゼ1層C1,2層その他	須恵	有台杯C	口10.3 台 6.4 高 5.2	B?	灰	堅	3/4	底外ヘラ切り	体部内面ロクロナデは無台杯と同様
225	カマドその他	須恵	杯蓋	器13.6 高 2.2	C 海針	灰	堅	1/2	天外ヘラ切り	内面磨滅,薄い墨痕。転用硯
226	C2層,カマドトレンチ	須恵	杯蓋	器16.2 高 3.5	A	灰	堅	1/2	天外ロクロケズリとナデ	
227	A1層	須恵	有台杯	台11.0	C	灰	堅	(底)1/3	底外ヘラ切り	胎土に石英なし,Aより精良
228	アゼ3層	須恵	有台杯	台 9.2	C?	灰	堅	(底)1/3	底外ヘラ切り,内面ロクロナデ後一方向ナデ	底外転用硯。胎土Aより精良。体部をていねいに剥離
229	A1層	須恵	有台杯B	口15.0	A	灰	堅	1/10		
230	1層	須恵	有台杯B	口16.3	B	灰	堅	1/10		外面薄く自然釉
231	A1層	須恵	有台杯B	台 9.0	B?	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	胎土に石英含まず精良
232	A1層	須恵	甕	口25.4	A?	灰	堅	1/8		胎土はAより精良
233	西側A2層その他	土師	椀B	口16.0 底 7.6 高 5.3	英,長雲(細)	明褐	普通	1/4	ロクロ	内外面全体薄くスス(内面は炭化物?)。胎土精良
234	カマド西	土師	椀A	口10.3	英,長雲(細)	淡褐	普通	1/8	ロクロ	口縁～体部内面炭化物,口縁～頸部外面スス。二次焼成をうける
235	A2層	土師	小甕C	口12.1	英,長雲(細)	淡褐	普通	1/8	ロクロ	口縁～体部内面一部炭化物,口縁～体部外面薄くスス
236	SI 1000	土師	小甕B	口12.2	英雲(細)	淡褐	普通	1/6	ロクロ	口縁～体部内面炭化物
237	上面	土師	長甕A	口19.5	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	非ロクロ2類	
238	アゼ3層	土師	小甕C	口15.8	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	頸部内面炭化物
239	SI 1000	土師	小甕B	口16.6	英雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	頸部～体部外面スス
240	3層	土師	小甕C	口15.8	英雲(細)	茶褐	堅	1/4	ロクロ	頸部～体部内面炭化物
241	東周堤内	土師	小甕A	口16.4	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/4	非ロクロ	
242	カマドアゼ	土師	長甕A	口23.6	英,長雲(小細)	淡褐	普通	1/3	非ロクロ1類	
243	カマド	土師	長甕B	口22.3	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	口縁一部～体部外面薄くスス
244	C3層	土師	長甕C?	口20.2	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6	ロクロ	
245	カマド攪乱	土師	長甕C?	口18.8	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6	ロクロ	

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
246	西側アゼ周堤	土師	長甕B	口22.3	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
247	カマド一括	土師	甕A	底 7.4	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	非ロクロ底外木葉痕	
248	A1層	土師	甕B	底 6.8	英小礫細礫	(内)淡褐(外)茶褐	堅	1/3	底外回転糸切り	
249	A1層	土師	甕	底10.8	英雲(細)小礫	明褐	堅	2/3	底外ヘラケズリ，内面底部強いナデ	
250	A1層	土師	甕	底 7.8	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	体部外面薄くスス
251	カマド	土師	甕	底 7.6	英，長雲(細)中礫小礫	明褐	堅	1/6		
252	上面D1層	土師	甕	底 9.0	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	2/3		
253	D3，3層	土師	長甕C	底 7.6	英雲(小細)小礫	(内)暗褐(外)淡褐	普通	1/4	底外ヘラケズリ	体部外面スス

SI 1461 （本文123頁，図版70）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
254	カマドNo.5	須恵	有台杯A	口14.8 台10.9 高 4.4	C	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	胎土に石英含まず，やや精良
255	カマドNo.5	須恵	有台杯A	台11.8	C	灰	堅	底部全存	底外ロクロケズリ	東海系土器。底部外面墨痕，一部磨滅
256	カマドNo.1	須恵	短頸壺		A？	茶褐	堅	底部全存	底外ロクロケズリ	底部外面転用硯，高台意図的に打ち欠く
257	カマド	須恵	小壺	口 9.6	A	灰	堅	1/8		内外面自然釉
258	カマドNo.5，D区	土師	鍋A	口28.7	英，長雲(細)	明褐	普通	1/6	非ロクロ2類	
259	カマドNo.3	土師	長甕A	口20.4	英，長雲(細)	淡褐	普通	1/3	非ロクロ2類	体部外面スス
260	カマドNo.2	土師	長甕A	口22.6	英，長雲(細)小礫	淡褐	普通	(口)一部欠	非ロクロ1類	内面一部炭化物，外面約1/3スス

SI 27 （本文124頁，図版70）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
261	2，3層	須恵	無台杯	口11.0 底 7.6 高 3.4	A	淡灰	普通	1/6	底外ヘラ切り	灯明皿，口縁外面重ね焼痕
262	2，3層	須恵	杯蓋	器14.9	A	灰	堅	1/8		外面薄く自然釉
263	2，3層	土師	長甕A？	口21.8	英，長雲(細)	茶褐	堅	1/8	非ロクロ？	
264	遺構最上面	土師	長甕A？	口20.0	英，長雲(細)	茶褐	堅	1/10	非ロクロ？	口縁内外面薄くスス
265	4層	土師	長甕B	口21.5	英，長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
266	2，3層	土師	長甕A	口24.4	英，長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/8	非ロクロ	
267	遺構上面	土師	鍋C？	口36.9	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ？	体部外面スス

SI 314 （本文124頁，図版71）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
268	撹乱	須恵	無台杯	底 9.2	A？	淡灰	軟	1/4	底外ヘラ切り	底部ヘラ記号「×」。Aより胎土精良。長石を含まない
269	南西	須恵	杯蓋	器(14.0)	A	灰	堅	1/8	天外ヘラ切り	外面薄く自然釉
270	北東コーナー	土師	小甕B	口15.0	英，長	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面一部薄く炭化物，口縁～体部外面スス
271	北西	土師	甕	底(8.1)	英雲(細)小礫細礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	
272	カマド上面	土師	長甕C	口(23.0) 底 7.8 高(30.0)	英，長雲(細)小礫海針	明褐	普通	(口)1/12 (体)1/2 底部全存	ロクロ	体部外面スス

SI 1315 （本文124頁，図版71）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
273	カマド内	須恵	無台杯	口13.0	A	黄灰	普通	1/8		口縁外面重ね焼痕
274	南北アゼ2層	須恵	無台杯	口13.0	A	灰	堅	1/12		体部外面墨書「□稲□」
275	南北アゼ2層	須恵	無台杯	底10.8	A？	黄灰	普通	1/3	底外ヘラ切り	
276	Bトレンチ	須恵	有台杯	台 8.0	A	灰	堅	1/6		
277	A区上面その他	須恵	小壺	肩12.8	A	灰	堅	1/6		肩部外面薄く自然釉
278	カマド内	土師	無台杯	底 6.8	英，長雲(細)	赤褐	堅	1/8	底外ロクロケズリ	内外面赤彩
279	カマド西4，6層その他	土師	長甕A	口17.8	英，長雲(小細)小礫	淡褐	堅	4/5	非ロクロ	
280	カマド	土師	長甕A	底 7.0	英，長雲(小細)小礫	淡褐	普通	1/3	非ロクロ。底外ヘラケズリ	体部外面薄くスス
281	カマド西4，6層	土師	長甕A	底10.4	英，長雲(小細)小礫海針	淡褐	堅	1/4	非ロクロ底外木葉痕	
282	カマド西側一括	土師	長甕A	口20.6	英，長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/4	非ロクロ	
283	カマド西側一括	土師	長甕A	口22.0	英，長雲(小細)中礫	淡褐	普通	1/3	非ロクロ	口縁～体部外面薄くスス
284	カマド	土師	鍋C	口33.2	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	1/8	ロクロ	

SI 429 （本文124頁，図版72）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
285	カマドNo.1	須恵	有台杯B	口13.0	A	灰	堅	1/5		
286	カマドNo.3，No.8	須恵	無台杯	口13.8 底 8.1 高 3.7	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
287	カマド周辺	須恵	杯蓋	器16.0	A	灰	堅	1/8	天外ヘラ切り	
288	カマド2層	土師	椀B	口13.0	英,長雲(細)	明褐	堅	1/10	ロクロ	
289	No.5	土師	小甕C	口14.8	英,長雲(細)小礫	茶褐	普通	1/6	ロクロ	口縁内面炭化物
290	カマドNo.1，カマド周辺	土師	小甕B	口15.0	英,長雲(細)中礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	口縁内面炭化物
291	カマドNo.1	土師	小甕C	口15.8	英,長雲(小細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	
292	カマドNo.2	土師	小甕B	口16.4	英,長雲(細)	明褐	堅	1/8	ロクロ	
293	カマド，トレンチ	土師	小甕B	口15.2	英,長雲(細)	明褐	堅	1/6	ロクロ	口縁～頸部内面炭化物，体部外面ススト
294	No.1，1～3層	土師	小甕C	口17.1	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	
295	カマド	土製品	土管		英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	
296	No.9	土師	鉢？		英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	

SI 1300 （本文125頁，図版72）

297	カマド内	須恵	無台杯	底 8.7	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	
298	C区2層	須恵	無台杯	口(14.0)底(8.5)高 3.6	A	淡灰	軟	1/12	底外ヘラ切り	
299	D区3層	土師	小甕A	口15.6	英,長雲(小細)	淡褐	堅	1/8	非ロクロ2類	口縁内面薄く炭化物，外面全体薄くスス
300	カマドNo.3	土師	小甕C	口17.0底 5.2高13.7	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/2	ロクロ	口縁内面薄く炭化物，体部外面薄くスス
301	C区3層	土師	長甕B	底 8.4	英,長雲(小細)小礫	茶褐	堅	1/2	底外ハケ目	
302	カマドNo.4	土師	小甕A	口17.4底 5.5高12.2	英,長雲(細)中礫小礫	明褐	普通	1/3	非ロクロ1類	
303	カマドNo.1	土師	小甕A	口14.6底 7.6高13.5	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/3	非ロクロ底外砂痕	口縁内面炭化物
304	C区2層	土師	短胴甕C	口27.0	英,長雲(細)	明褐	堅	1/8	ロクロ	体部外面厚くスス

SI 1307 （本文125頁，図版73）

305	No.1	須恵	無台杯	口12.8底 9.0高 3.8	C海針	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
306	B区2層	須恵	有台杯A	口11.5台 6.3高 3.6	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	底部外面薄く墨痕，転用硯
307	上面	須恵	有台杯	台 9.2	C	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	体部外面自然釉

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
308	No.2	須恵	有台杯A	口14.2台10.0高 4.0	C？	灰	堅	一部欠	底外ヘラ切り	
309	トレンチ	土師	小甕A	口15.2	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/4	非ロクロ2類	口縁内面炭化物
310	南北ベルト内	土師	甕A？	底 6.2	英,長雲(細)	淡褐	堅	底部全存	非ロクロ2類？	
311	D区	土師	小甕A	底 7.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	底部全存	非ロクロ底外木葉痕	体部内面炭化物，体部外面ススト
312	D区1層	土製品		体 7.5	英,長雲(細)	淡褐	堅			内面熱を受け風化著しい
313	No.3	土師	短胴甕	底 7.6	英,長雲(細)小礫海針	茶褐	堅	1/4	ロクロ	
314	No.4	土師	長甕A	口20.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/2	非ロクロ2類	体部外面ススト

SI 560 （本文125頁，図版73）

315	カマド	土師	無台杯B	口14.4底11.0高 4.2	英,長雲(細)小礫海針	淡褐	堅	1/3	底外ヘラ切り	
316	カマドB-10遺構上面	土師	長甕C	口25.0底 9.2高35.1	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ底外ハケ目	体部外面片側薄くスス。カマドの芯
317	カマド	土師	長甕C	口24.0高(42.0)	英,長雲(細)小礫海針	茶褐	堅	1/3	ロクロ	体部外面上部黒斑。頸部～体部外面薄くスス体部片側厚くスス。カマドの芯

SI 458 （本文126頁，図版74）

318	SI 458	須恵	杯蓋	器15.7高 3.2	C海針	灰	堅	(口)一部欠	天外ヘラ切り後弱いロクロケズリ	内面磨滅。胎土に石英，長石を多く含む
319	2層	土師	小甕C	口14.4	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	頸部内面薄く炭化物
320	カマド	土師	小甕A	口12.5底 6.5高12.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/3	非ロクロ2類	口縁内面薄く炭化物，底部～体部外面ススト
321	サブトレンチ	土師	甕A	底 6.8	英,長雲(小細)小礫	(内)黒褐(外)淡褐	堅	2/3	非ロクロ底外木葉痕	
322	No.3	土師	長甕B		英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	内外面薄くスス
323	No.4	土師	長甕A	口21.3	英,長雲(細)小礫海針	淡褐	普通	1/8	非ロクロ	口縁外面に薄くスス
324	カマド	土師	長甕A	口20.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	非ロクロ	

SI 803 （本文126頁，図版74）

325	No.1	須恵	無台杯	口14.0底10.2高 3.8	A	淡灰	軟	2/3	底外ヘラ切り	

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
326	1層上面	須恵	無台杯(片口)	口13.2 底 9.5 高 3.0	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	内面自然釉
327	北東部2層，SI 804，1層	土師	小甕A	口14.4	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	非ロクロ	口縁内面厚く炭化物
328	3層	土師	小甕C？	口13.0	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/10	ロクロ	体部外面スス
329	3層 サブトレ	土師	小甕C？	口15.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面炭化物，体部外面薄くスス
330	2層	土師	長甕C	口22.4	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	1/8	ロクロ	体部外面薄くスス
331	1～3層 その他	土師	甕A	口17.0	英，長雲(小細)小礫	淡褐	堅	2/3	非ロクロ	頸部内面炭化物，体部外面薄くスス
332	2層	土師	短胴甕	底 4.7	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	底部全存	ロクロ？	体部外面薄くスス
333	2層	土師	甕	底 8.2	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/5	ロクロ	体部外面薄くスス
334	2層3層	土師	甕A	底 9.2	英，長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/3	非ロクロ 外面下部一部ヘラミガキ	体部外面薄くスス
335	1～3層 トレンチ	土師	鍋C	口32.2	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	体部外面スス

SI 8 （本文126頁，図版75・76）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
336	カマド東No.2	須恵	無台杯	口13.5 底 9.8 高 3.0	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	
337	上層，撹乱	須恵	無台杯	口13.8 底 7.7 高 3.8	A？	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	
338	上面，カマド撹乱	須恵	無台杯	口12.2 底 8.3 高 3.2	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
339	撹乱，カマド撹乱	須恵	有台杯A	口12.3 台 7.3 高 4.1	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	
340	上層	土師	小甕C	口12.5	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	口縁～体部内面厚く炭化物
341	下層その他	土師	甕A	底 7.6	雲(細)小礫	明褐	堅	3/4		
342	カマド内No.3	土師	長甕C	底 8.0	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	1/3	ロクロ 底外板状圧痕	
343	カマドNo.8	土師	甕C	口22.3 底10.4 高41.2	英，長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/3	ロクロ 底外ヘラケズリ？	体部外面中央部と下部一部薄くスス
344	カマド上層，下層	土師	長甕B	口24.2	英，長雲(小細)中礫小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ 2類	
345	カマド西撹乱坑	土師	長甕C	口23.0 底10.0 高35.5	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/2～1/4	ロクロ	
346	カマド西撹乱坑 その他	土師	鍋A	口35.6 底 6.6	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	(口)1/6底部全存	非ロクロ 1類底外木葉痕	口縁外面一部薄くスス
347	カマド東No.3	土師	短胴甕C	口25.8 底10.4 高20.1	英，長雲(細)中礫小礫	茶褐	堅	2/3	ロクロ 底外ヘラケズリ	
348	No.1カマド東	土師	長甕C	口20.5	英，長雲(小細)小礫	明褐	堅	(口)一部欠	ロクロ	体部外面片側スス

SI 72 （本文127頁，図版76・77）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
349	4層	須恵	無台杯	口13.6 底10.4 高 3.2	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
350	5層	須恵	無台杯	口13.7 底10.8 高 3.4	C	灰	堅	3/4	底外ヘラ切り後ヘラケズリ	胎土(英)(長)含むがやや精良。口縁外面重ね焼痕
351	2層，トレンチ	須恵	無台杯	口12.8 底 7.7 高 3.9	A	淡灰	軟	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面1/3重ね焼痕
352	北側	須恵	無台杯	口13.7 底 9.3 高 3.8	A	(内)淡灰(外)灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	灯明皿
353	D9，トレンチ	須恵	有台杯A	口14.2 台 9.1 高 3.8	C	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	底部外面ヘラ記号，薄い墨痕転用硯か？胎土に(英)含まない
354	北側	須恵	短頸壺？	台14.4	C？	灰	堅	1/6		胎土に石英を含まない
355	D9区，2層	土師	小甕C	口14.6	英，長雲(細)小礫	茶褐	堅	(口)全存	ロクロ	口縁～頸部内面炭化物
356	南側3層	土師	小甕B	口13.8	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	口縁内面炭化物，外面全体薄くスス
357	D10 トレンチ	土師	小甕	口11.5	英雲(細)	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁内面炭化物，外面全体スス
358	No.3，カマド内	土師	長甕C	口22.8	英，長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	
359	南側2層	土師	長甕C	口20.0	英雲(細)	淡褐	堅	1/10	ロクロ	
360	カマド内No.5 その他	土師	長甕C？	口23.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ？	
361	1層，D9区その他	土師	甕C	底 7.1	英雲(細)小礫	淡褐	堅	(底)一部欠	ロクロ	体部外面薄くスス
362	南側3層	土師	長甕C		英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/6	ロクロ	
363	南側2層 その他	土師	長甕B		英，長雲(細)	茶褐	堅	1/2	ロクロ	
364	撹乱	土師	短胴甕C？	口31.9	英雲(細)	明褐	堅	1/6	ロクロ	体部外面スス

SI 20 （本文128頁，図版77・78）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
365	D区カマド西側	土師	小甕B	口14.5	英，長雲(小)小礫	茶褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面厚く炭化物
366	D区カマド西側	土師	長甕A	底10.3	英，長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/2	非ロクロ 底外木葉痕	

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
367	カマドNo.4	土師	長甕B	口23.2 高36.7	英雲(細)小礫	淡褐	堅	ほぼ完形	ロクロ1類	体部外面1/3ス ス。ス ス付着部カマド内側
368	カマドNo.3	土師	長甕C	口25.2 底(8.0) 高35.2	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	4/5	ロクロ	体部外面1/3ス ス。ス ス付着部カマド内側
369	カマドNo.5	土師	長甕C	口(24.0) 底 5.6 高(37.5)	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	ほぼ完形	ロクロ	体部外面1/3ス ス。口縁意図的に打ち欠く
370	カマドNo.6	土師	長甕C	口(23.0) 底 9.4 高(40.0)	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	ほぼ完形	ロクロ	体部外面1/3ス ス。口縁意図的に打ち欠く

SI 14 (本文128頁, 図版78・79)

371	No.21,3層	須恵	無台杯	口11.8 底 7.0 高 3.7	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
372	No.6,3層	須恵	無台杯	口13.3 底 8.6 高 3.5	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	胎土(英)(長)含みやや精良
373	カマド3層, No.39	須恵	無台杯	口12.8 底 8.9 高 3.9	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
374	上面, その他	須恵	無台杯	口13.2 底 8.7 高 3.5	C	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	胎土(英)(長)含みやや精良
375	カマド2層	須恵	杯蓋	器14.8	C	灰	堅	1/4	天外ヘラ切り後ロクロナデ内面一方向のナデ	内面磨滅, 薄く墨痕。転用硯?
376	No.30カマド	須恵	杯蓋	器15.9 高 3.5	A	灰	堅	1/4	天外ロクロケズリ	
377	No.3,3層 No.26,3層	須恵	杯蓋	器14.9 高 3.1	A	灰	堅	1/2	天外ヘラ切り後軽いロクロナデ	
378	カマド	須恵	(脚台)	台 9.6	A	灰	堅	1/8		
379	3層, No.14	須恵	横瓶	口10.1	A	淡灰	堅	1/4		器壁は発泡し凹凸がある。胎土(石)(長)を含まず, 両面に淡緑色の自然釉
380	トレンチ2層	須恵	有台杯A	口15.0 台 7.8 高 4.0	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り後軽いロクロナデ	底部外面ヘラ記号「+」
381	No.4, 3層	須恵	有台杯A	口14.7 台 7.4 高 4.3	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り後軽いロクロナデ	底部外面ヘラ記号「+」
382	No.28カマド上	須恵	有台杯A	口13.3 台 6.7 高 4.2	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	
383	3, 2層上面	須恵	有台杯X	口17.2	A	淡灰	堅	1/10		内面厚く淡黄緑色自然釉
384	No.7,3層	土師	小甕B	口11.2	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁内面薄く炭化物
385	カマド2層No.21, No.35	土師	小甕C	口12.6	英,長雲(細)小礫	茶褐	普通	1/5	ロクロ	口縁内面薄く炭化物

386	2層3層	土師	小甕C	口13.8	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6	ロクロ	口縁内面炭化物
387	3層上面	土師	小甕B	口14.8	英,長雲(細)中礫小礫	茶褐	普通	1/3	ロクロ	口縁内面炭化物, 口縁～体部外面ス ス
388	3層上面	土師	小甕B	口14.8	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ	口縁内面厚く炭化物
389	No.41 3層カマド	土師	小甕C	口14.8	英,長雲(小細)小礫	茶褐	堅	1/4	ロクロ	
390	No.11 3層	土師	甕C?	底 6.9	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	底部全存		
391	カマド2層, No.35	土師	甕B	底 6.5	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	底部全存	ロクロ	体部外面薄くス ス
392	2, 3層	土師	甕A	底 7.5	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	底部全存		
393	カマド3層	土師	甕C	底 6.2	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/2	ロクロ	
394	No.12 2, 3層	土師	長甕C	底10.6	英,長雲(細)小礫	明褐	堅	1/4	底外ハケ目	
395	カマドNo.32	土師	長甕C	底13.0	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6		体部外面ス ス
396	3層	土師	長甕C?	口22.8	英雲(細)	淡褐	堅	1/12	ロクロ	短胴甕の可能性あり
397	カマド中	土師	長甕C	口20.4	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/10	ロクロ	
398	カマド2層(一括)	土師	長甕B	口21.0	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	
399	1, 3層	土師	長甕B	口21.4	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ2類	
400	No.5,3層, 2層上面3層	土師	長甕B	口21.8	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/4	ロクロ2類	
401	No.10,3層 No.20,3層	土製品	土管	底15.0	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/2	ロクロ	外面一部ス ス

SI 280 (本文130頁, 図版80)

402	カマド1層	須恵	無台杯	口14.1 底10.0 高 3.3	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面重ね焼痕
403	1層トレンチ	須恵	無台杯	口13.1	A	灰	堅	口縁一部欠	底外ヘラ切り, 板状圧痕	口縁外面重ね焼痕
404	1, 2層トレンチ	須恵	杯蓋	器14.8 高 2.8	A	灰	堅	2/3	天外ロクロケズリ	
405	D6,2層	須恵	有台杯A	台 8.2	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
406	1層	須恵	無台杯		A	灰	堅	口縁一部		外面に墨書「五」

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
407	撹乱	土師	小甕C	口13.6 底 7.4 高14.7	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	口縁内面一部炭化物，頸部～体部外面にかけスス
408	No.1,2,3層	土師	長甕B	口22.8	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/10	ロクロ1類	
409	No.1,2層	土師	長甕B	口20.0 高36.0	英,長雲(細)	淡褐	堅	4/5	ロクロ1類	体部外面全体にスス
410	カマド1層No.12トレンチ	土師	長甕B	口23.4 高39.0	英,長雲(小細)	淡褐	堅	2/3	ロクロ2類	体部外面スス。カマドの芯に再利用

SI 75 （本文130頁，図版81）

411	遺構上面トレンチ1層	須恵	無台杯	口11.8 底 7.1 高 3.9	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面焼ね焼痕
412	1層	須恵	有台杯	口11.0	C？	淡灰	軟	1/6		胎土に石英を含まない
413	1層トレンチ	須恵	無台杯	口12.4 底 8.3 高 3.0	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
414	遺構上面1層	須恵	無台杯	口12.2 底 8.6 高 2.9	A	淡灰	普通	1/4	底外ヘラ切り	
415	遺構上面1層	須恵	杯蓋	器14.6	A	灰	堅	1/6	天外ロクロケズリ	
416	1層	須恵	杯蓋	器14.8 高 3.1	A	灰	堅	(口)一部欠	天外ヘラ切り，一部ロクロケズリ	外面片側薄く自然釉
417	カマド上面	須恵	杯蓋		A	淡灰	堅	ツマミ全存		ツマミ上部に「大」の墨書
418	上面	須恵	杯蓋	器14.8	A	灰	堅	1/6		
419	遺構上面1～3層その他	須恵	広口壺	肩24.9 口19.4	A？	灰	堅	1/4		内面頸部，外面頸部薄く自然釉。胎土に石英含まず
420	遺構上面	須恵	広口甕	口19.9	C	灰	堅	1/6		胎土に石英を含まず精良
421	1層	須恵	広口甕		C	灰	堅			420と同一個体
422	遺構上面	土師	小甕C	口15.9	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/8	ロクロ	口縁内面炭化物
423	遺構上面	土師	小甕B	口15.1	英雲(細)	淡褐	普通	1/10	ロクロ	体部外面スス
424	1層	土師	小甕B	口15.6	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/10	ロクロ	口縁内面炭化物，口縁外面スス
425	2，3層	土師	長甕B	口20.8	英雲(細)	茶褐	堅	1/8	ロクロ	頸部～体部内面炭化物
426	カマドトレンチ	土師	長甕B	口20.6	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6	ロクロ	
427	2，3層	土師	長甕B	口20.4	雲(細)小礫	淡褐	普通	1/8	ロクロ	
428	4層	土師	長甕B	口23.4	英雲(細)小礫	茶褐	普通	1/8	ロクロ	
429	カマド上面	土師	長甕B	口25.2	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	
430	2，3層	土師	長甕B？	口19.2	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	口縁内面，口縁～体部外面スス

SI 339 （本文131頁，図版82）

431	トレンチ2層	須恵	無台杯	口12.0 底 7.1 高 3.4	C？	淡灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	口縁内面スス(タール)？灯明皿？胎土やや精良
432	2層	須恵	無台杯	口12.8 底 7.1 高 3.1	A	淡灰	普通	1/5	底外ヘラ切り	
433	北西コーナー	須恵	無台杯	口12.0 底 7.2 高 3.5	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	
434	3層	須恵	無台杯	口12.8 底 9.1 高 3.4	A	淡灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	底部外面墨書胎土やや精良口縁外面重ね焼痕
435	撹乱，上面	須恵	無台杯	口12.4 底 8.8 高 4.0	A	淡灰	普通	1/3	底外ヘラ切り	
436	3層	須恵	無台杯	口13.0 底 7.1 高 3.2	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
437	北西コーナー	須恵	有台杯A	口13.2 台 8.9 高 3.6	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	
438	No.1	須恵	有台杯A	口12.9 台 8.1 高 3.5	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り，板状圧痕	
439	3層	須恵	有台杯C？	口12.2 台 7.2 高 4.5	B？	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	胎土石英含まず精良
440	2層	須恵	有台杯C	口 9.2 台 6.0 高 4.4	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	内面全体，体部外面薄く自然釉
441	カマド	須恵	壺蓋	器 7.0	C？	灰	堅	1/3	天外ロクロケズリ	胎土石英含まない
442	SI 339	須恵	壺蓋	器11.0	A	淡灰	堅	1/6		外面全体自然釉
443	3層	須恵	壺蓋	器12.0	A	灰	堅	1/6		外面全体自然釉
444	トレンチ	須恵	杯蓋	器16.0 高 4.8	A	灰	堅	1/5	天外ロクロケズリ	446と同一個体
445	1層，3層，撹乱	須恵	杯蓋	器14.6	A	灰	堅	1/5	天外ヘラ切り後軽いロクロナデ	
446	2層	須恵	杯蓋	器16.0 高 4.8	A	灰	堅	1/5	天外ロクロケズリ	擬宝珠形つまみ
447	撹乱，他	須恵	蓋	器(19.7)	A	灰	堅	1/10		天井部に環状突起がめぐる特殊タイプ
448	3層，他	須恵	稜椀	口18.3	A	灰	堅	1/4		外面自然釉
449	トレンチ2層	須恵	短頸壺	口10.2	A	灰	堅	1/5		外面アメ状濃緑色自然釉

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
450	2層，撹乱	須恵	鉢	口20.5 底10.8 高10.3	A	灰	堅	1/4		
451	トレンチ2層，1層	土師	長甕B	口22.6	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	体部外面ススI
452	3層	土師	甕	底 6.8	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/4		
453	2層，トレンチ	土師	無台杯B？	底 8.2	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/2	底外ヘラ切り	
454	トレンチ	土師	小甕B	口16.9	英雲(細)	淡褐	普通	1/5	ロクロ	口縁内面厚く炭化物，口縁外面ススI
455	2層	土師	小甕B	口14.6	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面厚く炭化物

SI7 （本文132頁，図版83・84）

456	SI 7	須恵	無台杯	口12.8 底 9.5 高 3.6	A	淡灰	軟	(口)一部欠	底外ヘラ切り	胎土やや精良
457	カマド	須恵	無台杯	口13.1 底 9.9 高 3.5	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り，板状圧痕	
458	1層，北東2層	須恵	無台杯	口12.8 底 8.4 高 3.1	A？	灰	堅	一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面片側重ね焼痕
459	北西トレンチ	須恵	無台杯	口12.7 底 9.0 高 3.6	A	淡灰	軟	1/2	底外ヘラ切り	
460	1層	須恵	無台杯？	口12.3 底 8.4 高 2.7	A？	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	胎土(芙)(長)含むがやや精良，身が浅く皿か？
461	1層，北東2層	須恵	有台杯C	口10.6 台 6.2 高 4.6	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	
462	北西トレンチ	須恵	有台杯A	口11.2 台 7.1 高 4.1	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
463	カマド東側	須恵	有台杯A	台 7.0	A？	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	
464	北西トレンチ	須恵	有台杯	台 9.2	C	灰	堅	1/4	底外ロクロケズリ(糸切りか)	
465	北東2層	須恵	杯蓋	器12.8 高 3.1	A	灰	堅	1/4	天外ヘラ切り後ロクロナデ	
466	1層 北東2層	須恵	折縁杯	口16.1 台 8.3 高 4.8	A	灰	堅	一部欠	底外ヘラ切り	底部外面ヘラ記号「＋」。内面火だすき
467	2，3層 アゼ1層 カマド東側	土師	小甕B	口10.4	英雲(細)	淡褐	普通	2/3	ロクロ	口縁内面一部炭化物，口縁外面一部ススI
468	カマド内下層	土師	小甕B	口13.4	雲(細)小礫	淡褐	普通	1/10	ロクロ	
469	2，3層	土師	小甕B	口13.8	英雲(小細)	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁端部内面薄く炭化物，外面全体薄くススI

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
470	No.10	土師	小甕B	口14.6	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/6	ロクロ	口縁内面厚く炭化物
471	北東2層	土師	小甕B	口14.2	英	淡褐	普通	1/4	ロクロ	頸部内面炭化物
472	2，3層	土師	小甕B	口12.8	英雲(小)小礫	淡褐	普通	1/2	ロクロ	口縁内面薄く炭化物
473	1層	土師	小甕B	口14.8	英雲(小細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	口縁端内面厚く炭化物，口縁外面ススI
474	カマド北西2層トレンチ	土師	小甕B	口15.0	英，長雲(小細)	茶褐	堅	1/3	ロクロ	口縁内面炭化物
475	No.9	土師	小甕B	口15.8 底 8.0 高13.7	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	頸部内面炭化物
476	カマド内下層	土師	長甕A？	口18.6	英小礫	明褐	普通	1/10	非ロクロ2類？	
477	2層	土師	小甕B	口15.8	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面炭化物，体部外面ススI
478	1層	土師	小甕	底 8.1	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/6	ロクロ	体部内面炭化物
479	撹乱	土師	小甕	底 8.0	英雲(細)	茶褐	堅	1/6	ロクロ	
480	北東トレ2，3層	土師	小甕	底 7.2	英雲(細)	淡褐	普通	1/2	ロクロ？	
481	トレンチNo.4	土師	甕A	底 6.6	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/3	非ロクロ底外木葉痕	
482	カマド内	土師	小甕	底 7.9	英雲(細)小礫	明褐	普通	底部全存		
483	カマド内東	土師	長甕B		英雲(細)	淡褐	普通	2/3		外面薄くスス。底部外面に径4cm程の円形黒色斑（支柱痕？）
484	1層	土師	鍋B	口30.0	英雲(細)	淡褐	堅	1/10	ロクロ	頸部外面ススI
485	No.3	土師	鍋B	口32.6	英雲(細)	淡褐	堅	1/12	ロクロ	
486	カマド上層 その他	土師	長甕B	口21.4 高(32.0)	英雲(細)小礫	茶褐	普通	1/4	ロクロ	体部外面薄くススI
487	カマド内	土師	長甕B	口20.4	英雲(細)小礫	淡褐	堅	3/4	ロクロ	体部外面1/6薄くスス。甕として使用した形跡なし
488	撹乱	土師	長甕B	口19.8	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ2類，カキ目の下にタタキ目	
489	2，3層 北東トレ	土師	長甕B	口21.0	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/2	ロクロ2類，カキ目の下にタタキ目	頸部内面一部ススI，(炭化物？)
490	No.3，2層 1層 中央アゼ	土師	長甕B	口20.0	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	体部外面薄くススI

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
491	カマド内	土師	長甕B	口21.6	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	体部外面薄くスス

SI 15 （本文134頁，図版85）

492	No.5，3層	須恵	無台杯	口11.4 底 9.2 高 3.0	C	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	胎土に(英)含まず精良
493	覆土上層	須恵	無台杯	口13.2 底 8.6 高 3.3	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	体部外面墨書「五」
494	No.20，3層，カマド	須恵	無台杯	口13.0 底 9.7 高 3.8	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕，灯明皿？
495	No.19，2層，3層	須恵	無台杯	口13.1 底 8.2 高 4.2	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	内外面磨滅，深身，丸底
496	No.8，3層	須恵	無台杯	口12.3 底 8.8 高 3.4	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	体部外面墨書「三」。口縁外面重ね焼痕
497	No.15，3層	須恵	無台杯	口13.1 底 9.4 高 3.2	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り，板状圧痕	口縁外面重ね焼痕
498	No.4，2，3層	須恵	無台杯	口12.9 底10.2 高 3.8	A	黄灰	堅	一部欠	底外ヘラ切り	
499	No.3，3層	須恵	無台杯	口12.4 底 8.2 高 3.6	C	淡灰	軟	完形	底外ヘラ切り，板状圧痕	胎土(英)含まず精良，口縁外面重ね焼痕
500	No.6，3層	須恵	有台杯A	台 6.6	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	外面薄く自然釉
501	No.9，3層	須恵	有台杯A	口10.9 台 6.0 高 4.3	A	灰	堅	3/4	底外ヘラ切り	
502	No.14，3層	須恵	有台杯A	口13.3 台 7.1 高 3.8	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	
503	No.7，3層	須恵	折縁杯	口16.0 台 9.1 高 4.0	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	体部外面1/3薄く自然釉
504	No.2，3層	須恵	杯蓋	器13.6 高 3.2	A	灰	堅	完形	天外ヘラ切り	外面片側薄く自然釉
505	No.16，3層	須恵	杯蓋	器14.2 高 3.4	A	灰	堅	完形	天外ヘラ切り後軽いロクロケズリ	
506	No.1，3層	須恵	杯蓋	器13.8 高 3.2	A	淡灰	堅	完形	天外ヘラ切り	504，505と同一タイプ
507	2・3層	須恵	鉢							SI 339-450と同一個体
508	2層	土師	小甕B	口12.5	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁内面厚く炭化物
509	3層	土師	小甕B	口15.0	英	淡褐	普通	1/10	ロクロ	口縁内面炭化物，口縁～体部外面スス
510	1層 3層	土師	小甕B	口14.4	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6	ロクロ	
511	No.10，3層	土師	小甕	底 7.8	英雲(細)小礫	淡褐	普通	(底)一部欠(体)1/8	ロクロ	
512	No.12，3層	土師	長甕B	口21.6 高34.3	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/2	ロクロ 2類	体部外面スス

SI 11 （本文135頁，図版85）

513	カマド西撹乱坑	須恵	有台杯A	口12.0 台 5.8 高 4.8	A	淡灰	軟	(口)一部欠	底外ヘラ切り後ロクロナデ	底部外面ヘラ記号「×」。胎土(英)含むがやや精良
514	上層	須恵	杯蓋	器15.3	A	灰	堅	1/2	天外ヘラ切り	ツマミ剝離，内外面口縁部重ね焼痕
515	下層	土師	小甕B	口13.6	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/8	ロクロ	
516	カマド	土師	小甕B	口17.6	英，長雲(細)中礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	
517	下層	土師	長甕C	底 7.8	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/2	ロクロ 底外ヘラケズリ	

SI 6 （本文135頁，図版86・87）

518	SI 6 南西3層	須恵	無台杯	口12.1 底 8.4 高 3.4	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り，板状圧痕	口縁外面一部重ね焼痕
519	カマド付近	須恵	無台杯	口13.0 底 8.9 高 3.4	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
520	2，3層	須恵	無台杯	口12.4 底 8.9 高 3.3	A	灰	堅	(底)全存(口)1/4	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
521	3層	須恵	有台杯A	口13.6 台 8.0 高 4.3	A	淡灰	軟	(底)全存(口)1/2	底外ヘラ切り	
522	No.2	須恵	有台杯A	口12.8 台 7.6 高 4.3	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	体部外面片側自然釉
523	SI 6	須恵	有台杯C	口10.6 台 5.6 高 4.7	A	灰	堅	1/4	高台底部板状圧痕	内外面薄く自然釉
524	南西3層	須恵	有台杯C	台 5.4	C	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	胎土(英)含まず精良
525	2層	須恵	壺蓋	器10.2	A？	灰	堅	1/2		天井部厚く自然釉。胎土(英)(長)含むがやや精良
526	SI 6	須恵	折縁杯	台 6.8	A	淡灰	堅	1/8	底外ヘラ切り後ロクロナデ	
527	No.1 No.3	須恵	稜椀	口15.8 台 8.0 高 7.6	A	灰	堅	一部欠	底外ヘラ切り	
528	カマドソデ	土師	小甕B	底 5.9	英，長雲(細)	淡褐	堅	2/3	底部回転糸切り	内面炭化物，外面スス
529	3層	土師	小甕B	口14.0	英雲(細)	淡褐	普通	1/8	ロクロ	口縁内面炭化物
530	3層	土師	甕	底 5.6	英雲(細)海針	淡褐	堅	1/6	ロクロ	

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
531	No.3	土師	小甕B	口15.4 底 8.4 高(12.0)	英 雲(細) 小礫	淡褐	軟	1/6	ロクロ	
532	カマド西 側	土師	長甕B	口21.8	英,長 雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ, 外面タタ キ目かす かに残る	口縁～体部外 面ススス
533	No.4	土師	長甕B	ロ19.6	英 雲(細) 小礫	淡褐	軟	1/5	ロクロ, 外面タタ キ目かす かに残る	
534	No.4	土師	長甕B	口21.4	英 雲(細) 小礫	明褐	堅	1/4	ロクロ	
535	カマド東 攪乱 その他	土師	長甕B	口21.8 高(34.0)	英 雲(細) 小礫	明褐	堅	1/6	ロクロ	底部外面薄く ススス
536	SI 6	須恵	甕	口23.0	A	灰	堅	1/10		外面全体薄く 自然釉

SI 4 （本文136頁，図版87・88）

537	カマド西 ソデ	須恵	無台杯	口12.2 底 9.2 高 3.4	A	淡灰	普通	1/3	底外ヘラ 切り	口縁内面一部 やや黒ずむ
538	南西3層	須恵	無台杯							SI 6-518に同 じ
539	南西3層	須恵	無台杯	口12.8 底 8.1 高 3.7	A	淡灰	軟	1/3	底外ヘラ 切り	胎土(英)(長) 含むが，やや 精良
540	2層，上層	須恵	無台杯	口13.0 底 8.8 高 3.8	A	淡褐	軟	1/2	底外ヘラ 切り	内面炭火物， 鉄分付着，熱 を受ける。鍛冶 作業関連か？
541	1層	須恵	無台杯	口13.7 底 9.0 高 3.4	A	灰	堅	3/4	底外ヘラ 切り，板 状圧痕	
542	南西3層	須恵	無台杯	口13.6 底 9.5 高 3.3	A ？	淡灰	軟	1/3	底外ヘラ 切り	口縁外面重ね 焼痕，　胎土 (英)(長)含む が，やや精良
543	2層	須恵	無台杯	口13.2 底 9.1 高 3.4	A ？	淡灰	軟	3/4	底外ヘラ 切り	底部外面ヘラ 記号「＋」
544	2層	須恵	有台杯 A	口13.0 台 8.1 高 4.3	A	灰	堅	(II)一 部欠	底外ヘラ 切り後ナ デ	
545	No.1	須恵	有台杯 X	口15.2 台10.0 高 7.5	A	灰	堅	(II)一 部欠	底外ヘラ 切り	底部外面黒書
546	カマド付 近	須恵	杯蓋		A	灰	堅	1/2	天外ロク ロケズリ	外面薄く自然 釉
547	No.4，カ マド	土師	小甕C ？	口15.8	英,長 雲(小細)	茶褐	堅	1/3		頸部内面炭化 物
548	2層	土師	小甕B	口13.8	英 雲(細) 小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ	口縁～体部内 面炭化物
549	2層	土師	小甕B	口15.6	英 小礫	茶褐	普通	1/5	ロクロ	口縁内面炭化 物
550	2層	土師	小甕B	口13.2 底 7.2 高11.8	英 雲(小細) 中礫 小礫	淡褐	普通	1/2	ロクロ	口縁内面炭化 物，体部外面 ススス

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
551	2層 トレンチ	土師	小甕B	口15.2 底 6.8 高14.4	英,長 雲(細)	茶褐	堅	一部 欠	ロクロ	口縁～体部内 面炭化物
552	カマド	土師	小甕B	口14.8	英 雲(細)	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁内面炭化 物
553	下層	土師	小甕	底 8.0	英 雲(細) 中礫 小礫	淡褐	普通	1/2		
554	攪乱	土師	小甕	底 7.0	英 雲(細)	淡褐	堅	1/5	ロクロ， 底外板状 圧痕	
555	2層	土師	小甕	底 8.0	英 雲(細) 小礫	淡褐	普通	3/4	ロクロ 底外静止 糸切り	
556	3層	土製 品	フイゴ 羽口		英 雲(細)	淡褐	普通	1/2		
557	No.6	土師	長甕B	口16.6	英,長 雲(細)	淡褐	普通	1/6	ロクロ	
558	2層	土師	長甕B	口20.2	英,長 雲(細) 小礫	茶褐	堅	1/10	ロクロ	
559	2層一括	土師	長甕B	口21.7 高38.0	英,長 雲(細)	淡褐	堅	2/3	ロクロ	体部外面片側 薄くスス
560	No.2	土師	長甕B	口20.2 高34.2	英 雲(細) 小礫	淡褐	堅	3/4	ロクロ， カキ目の ドにタタ キ目	体部外面片側 スス。
561	No.5	土師	長甕B	口20.0 高34.2	英,長 雲(細) 小礫	淡褐	堅	一部 欠	ロクロ， カキ目の ドにタタ キ目	体部外面スス。

SI 17 （本文138頁，図版89）

562	4地点	須恵	無台杯	口14.3 底 8.7 高 3.1	C	灰	堅	1/2	底外ヘラ 切り	胎土(英)含む が，精良
563	D 6，2層	須恵	無台杯	口12.9 底 6.5 高 3.3	A	灰	堅	1/8	底外ヘラ 切り	外面ススス
564	13地点	須恵	無台杯	口13.4 底10.4 高 3.4	A	淡灰	軟	2/3	底外ヘラ 切り	
565	5地点	須恵	無台杯	口12.6 底 7.0 高 2.9	A	灰	堅	(II)一 部欠	底外ヘラ 切り	口縁外面一部 重ね焼痕
566	6地点	須恵	無台杯	口12.6 底 7.8	A	黄灰	普通	1/6	底外ヘラ 切り	
567	D 6，1， 2層	須恵	杯蓋	器15.2	A	灰	堅	1/6	天外ロク ロケズリ	
568	17地点	須恵	杯蓋		A	灰	堅	一部 欠	天外ヘラ 切り	内面転用硯， 外面全体薄く 自然釉，口縁 打ち欠く
569	D 6 トレ ンチ	須恵	杯蓋		A	灰	堅	ツマミ 3/4		
570	D 6，2層	須恵	有台杯	台 7.2	C	灰	堅	1/6	底外ヘラ 切り	両面薄く自然 釉，胎土(英)含 まずやや精良
571	2地点， D 6，2層	須恵	有台杯 A	口12.8 台 7.0 高 4.1	C	灰	堅	1/3	底外ヘラ 切り	灯明皿，胎土 (英)含まず， やや精良
572	カマド1 層，10地 点	土師	小甕B	口14.0 底 8.8 高13.7	英 雲(細) 小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ	口縁内面炭化 物

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
573	1地点	土師	長甕B	口21.2	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	頸部～体部外面ススA
574	9地点	土師	長甕B	口21.0	英雲(小細)小礫	淡褐	普通	1/6	ロクロ	
575	2層 6地点	土師	長甕B	口21.0	英,長雲(細)	明褐	堅	1/4	ロクロ	頸部～体部外面薄くスス,調整がしっかりしており須恵器窯焼成か?

SI 1500 （本文138頁，図版89）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
576	No.1	須恵	無台杯	口12.8 底 9.0 高 3.3	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り後ロクロナデ	口縁外面重ね焼痕
577	No.6 B,D区3層	須恵	無台杯	口12.5 底 8.5 高 3.3	C ?	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	底部外面ヘラ記号?内面付着物(うるし)?胎土(英)含まず精良
578	南北トレンチ	須恵	無台杯	口13.0 底 9.0 高 3.3	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り，板状圧痕	口縁外面重ね焼痕
579	No.3 アゼ3層	須恵	無台杯	口13.0 底 9.8 高 3.9	A ?	黄灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面重ね焼痕，底部外面墨書「中」，胎土(英)(長)含むがやや精良
580	No.2 アゼ3層	須恵	無台杯	口12.4 底 9.8 高 3.2	A ?	黄灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕，底部外面墨書「中」，胎土579と同じ
581	上面	土師	小甕	底 8.8	英雲(小細)小礫	淡褐	堅	底部全存(体)1/3	ロクロ	

SI 60 （本文139頁，図版90）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
582	床直No.6	須恵	無台杯	口12.8 底10.1 高 3.3	A	黄灰	普通	完形	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面重ね焼痕，外面ススA
583	カマドNo.7	須恵	無台杯	口13.0 底 9.6 高 3.3	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り，板状圧痕	
584	No.5カマド	須恵	無台杯	口13.4 底 8.6 高 3.5	A	黄灰	普通	(口)一部欠	底外ヘラ切り	
585	床直No.1	須恵	無台杯	口12.8 底 8.7 高 3.6	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	
586	カマド内	須恵	無台杯	口12.1 底 7.8 高 3.3	A	灰	堅	3/4	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面重ね焼痕
587	床直No.5	須恵	無台杯	口12.4 底 8.1 高 3.6	C	淡灰	軟	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕。内面シミ有。表面白っぽい
588	No.1カマド	須恵	無台杯	口12.2 底 8.5 高 3.8	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	
589	トレンチ	須恵	無台杯	口12.4 底 7.0 高 3.8	C	茶褐	軟	(口)一部欠	底外ヘラ切り	内面一部ススA胎土(英)(長)含むが精良
590	No.6カマド	須恵	有台杯C?	口12.4 台 6.4 高 4.3	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	底部外面墨痕転用硯?
591	2層，SI 29，最上層	須恵	有台杯C	口11.6	A?	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	胎土(英)(長)含むがやや精良，器壁は薄い
592	床直No.4	須恵	有台杯A	口13.0 台 8.0 高 3.9	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	灯明皿?
593	床直No.2	須恵	有台杯A?	口10.1 台 6.3 高 4.3	A ?	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕,胎土(英)含まずやや精良
594	床直No.3	須恵	有台杯A?	口10.8 台 6.4 高 4.5	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	内外面薄く自然釉
595	カマド内No.2	土師	長甕B	口21.3	英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/4	ロクロ	体部外面ススA
596	1層，2層	土師	長甕B	口20.1	英雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	胎土精良
597	最上層，1～3層	土師	長甕B	口19.8	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/6	ロクロ	
598	最上層	土師	長甕B	口22.0	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	体部外面ススA

SI 650 （本文140頁，図版90）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
599	カマド	須恵	無台杯	口13.8 底 8.8 高 4.0	A	淡灰	軟	1/3	底外ヘラ切り	
600	カマドNo.12	須恵	無台杯	口13.0 底 8.2 高 3.2	A ?	淡灰	軟	2/3	底外ヘラ切り	胎土(英)(長)含むが精良
601	カマド	須恵	無台杯	口12.8 底 7.9 高 3.3	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
602	遺構上面	須恵	折縁杯	口12.8	A	灰	堅	1/8		
603	遺構上面	須恵	小瓶	口 5.0	A	灰	堅	2/3		
604	カマド	土師	小甕C	口15.8	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/12	ロクロ	
605	遺構上面	土師	小甕C?	底 6.0	英,長雲(細)	淡褐	堅	底部全存	ロクロ	内面一部炭化物，外面一部ススA

SI 310 （本文140頁，図版91）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
606	トレンチ1層	須恵	無台杯	口12.3 底 7.2 高 3.6	A	淡灰	軟	3/4	底外ヘラ切り	
607	西側撹乱1層	須恵	無台杯	口11.8 底 7.3 高 3.8	A	淡灰	普通	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
608	北西撹乱	須恵	有台杯	口11.0 底 6.7 高 3.5	A	灰	堅	1/8		
609	南東	須恵	無台杯	口13.4 底 9.4 高 3.5	A	淡灰	普通	1/6	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
610	トレンチアゼ2層	須恵	無台杯	口13.0 底 8.6 高 3.6	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
611	上面	須恵	横瓶	口13.4	A	灰	堅	1/8		外面自然釉，SI 6に同一個体有
612	アゼ1層，2層	須恵	無台杯	底 7.6	A	灰	堅	1/8	底外ヘラ切り	
613	1層	須恵	有台杯C	口11.6 台 5.1 高 5.3	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	底部外面墨書
614	1層	須恵	杯蓋	器15.2	A	灰	堅	1/3	天外ヘラ切り	外面自然釉
615	アゼ撹乱1層	須恵	杯蓋	器13.1	A	灰	堅	1/8	天外ヘラ切り	
616	1層，アゼ2層	須恵	甕		A？	灰	堅	1/4		頸部内外面自然釉
617	3層	土師	長甕B	口22.4	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ，口縁外面タタキ目残る	
618	西側撹乱	土師	小甕B	口15.6	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/10	ロクロ	口縁内面炭化物
619	1層，トレンチ	土師	甕	底 7.6	英雲(細)	淡褐	普通	1/4	ロクロ	内面一部炭化物

SI 33 （本文140頁，図版91）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
620	SI 33	須恵	無台杯	口12.8 底 7.2 高 3.2	A？	灰	堅	1/8	底外ヘラ切り	胎土(英)(長)含むが精良
621	SK33最上層	須恵	短頸壺？	口20.6	C？	淡灰	軟	1/8		胎土(英)(長)含むがやや精良
622	A pit 4	土師	長甕B	口20.4	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	1/4	ロクロ	
623	Aカマド一括	土師	長甕B	口18.7	英，長雲(細)小礫	明褐	普通	1/8	ロクロ	口縁外面薄くスス
624	Aカマド一括	土師	小甕B	口12.6	英，長雲(細)	茶褐	堅	1/6	ロクロ	口縁内面薄く炭化物，口縁外面スス
625	SI 33	土師	鍋B	口35.2	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ	
626	SI 33 B	土師	小甕B	口14.4	英，長雲(細)	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁～体部内面炭化物，体部外面スス
627	SI 33	土師	小甕	底 6.9	英，長雲(細)	淡褐	普通	1/8	底部回転糸切り	胎土626と類似同一個体の可能性

SI 500 （本文141頁，図版92）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
628	2層	須恵	無台杯	口11.4 底 6.8 高 3.0	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	胎土(英)(長)含むがやや精良器壁薄い。口縁外面重ね焼痕
629	トレンチ2層	須恵	無台杯	口11.0 底 7.6 高 2.7	A	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	
630	3層	須恵	無台杯	口11.6 底 7.6 高 2.5	A	淡灰	普通	1/8	底外ヘラ切り	
631	トレンチ	須恵	無台杯	口12.0	B	灰	堅	1/5		口縁外面重ね焼痕，胎土(英)含まずやや精良
632	2層	須恵	無台杯	底 7.1	A	淡灰	軟	底部全存	底外ヘラ切り	底部外面墨書「人」
633	3層	土師	小甕	底 8.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	底部全存	ロクロ，底外ヘラケズリ	体部内面一部炭化物
634	カマド	土師	小甕	底 8.0	英，長雲(細)小礫	茶褐	普通	2/3	ロクロ，底外かるいヘラケズリ	体部内面一部炭化物
635	3層	土師	小甕B	口14.0	英雲(小細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ 2類	口縁内面炭化物，口縁～体部外面
636	SI 500	土師	長甕B	口20.0	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/12	ロクロ 2類	

SI 10 （本文141頁，図版92）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
637	No. 1	須恵	無台杯	口12.9 底10.1 高 3.9	A	黄灰	普通	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
638	No. 2	須恵	杯蓋	器13.4 高 2.1	C	暗灰	堅	1/4	天外ロクロケズリ	口縁内面と外面自然釉，内面はよく磨滅している
639	No. 3	須恵	杯蓋	器15.6 高 3.0	A	灰	堅	1/4	天外ロクロケズリ	
640	No. 4	土師	小甕B	口13.6	英雲(細)	茶褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面薄く炭化物
641	カマド内	土師	小甕B	底 8.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	

SI 41 （本文141頁，図版92）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
642	2層	須恵	無台杯	口12.8 底 9.3 高 3.3	A？	淡灰	軟	3/4	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕，胎土やや精良
643	2層，最上層	須恵	無台杯	口11.2 底 7.2 高 3.6	A	黄灰	普通	1/4	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
644	3層	須恵	無台杯	口11.5 底 8.2 高 3.1	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	
645	SI 41	須恵	杯蓋	器13.1 高 3.1	C	灰	堅	(口)一部欠	天外ロクロケズリ	外面自然釉，内面磨滅，胎土(英)含まず精良
646	2層	須恵	杯蓋	器15.6 高 3.5	B	黄灰	普通	2/3	天外ロクロケズリ	
647	上層	須恵	広口壺	口24.0	A	淡灰	堅	1/8		外面淡緑色自然釉
648	3層	須恵	直口壺	底11.0	A	灰	堅	1/2		外面一部薄く自然釉
649	3層	土師	長甕B	器19.6	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ 2類	頸部～体部外面スス
650	SI 41	土師	小甕	底 8.7	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	体部内面一部炭化物，体部外面一部スス

SI 360 （本文142頁，図版93）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
651	1層，SI 365攪乱	須恵	無台杯	口11.9 底 8.0 高 2.8	C	黄白	普通	1/4	底外ヘラ切り	胎土(英)含まず精良
652	1層	須恵	無台杯	口12.4 底 9.6 高 3.8	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
653	トレンチ2層	須恵	杯蓋	器15.0 高 2.6	A	灰	堅	1/3	天外ヘラ切り	
654	1層	須恵	杯蓋	器14.8 高 2.4	A	灰	堅	1/3	天外ヘラ切り	外面自然釉，器壁は薄い
655	カマド中	須恵	杯蓋	器15.2	A	灰	堅	1/8		口縁外面重ね焼痕
656	No.13床直上	須恵	稜椀	口18.8 台 7.8 高 8.8	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	外面全体自然釉
657	No.3，3層	須恵	有台杯	台 7.7	A	灰	堅	底部全存	底外ヘラ切り	底部外面転用硯
658	遺構上面	土師	長甕B	口20.8	英，長雲(細)	明褐	堅	1/10	ロクロ2類	
659	トレンチ	土師	長甕B	口20.2	英雲(細)	淡褐	普通	1/6	ロクロ2類	口縁～体部外面ススI
660	No.12，2層	土師	小甕	底10.0	英，長雲(細)	茶褐	普通	1/6		体部外面一部ススI
661	No.6，2層	土製品			英，長雲(細)	淡褐	堅			
662	トレンチ	須恵	把手付鉢	口33.8	A	黄灰	普通	1/8		

SI 1302 （本文142頁，図版93）

663	A区2層上面	須恵	無台杯	口12.0 底 8.7 高 3.7	A	淡灰	軟	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
664	A区2層上面	須恵	無台杯	口12.6 底 7.9 高 4.1	A	黄灰	普通	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
665	A区2層上面	須恵	無台杯	口12.7 底 8.7 高 3.8	A	淡灰	軟	3/4	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
666	B区トレ	須恵	有台杯A	口12.8 台 8.0 高 3.6	A	灰	堅	一部欠	底外ヘラ切り	外面一部薄く自然釉，SI 1100－680と同一個体
667	アゼ1層	須恵	壺蓋	器11.8 高 4.7	A	灰	堅	1/6	天外ロクロケズリ	外面全体自然釉SI 1100－679と同一個体
668	D区1層	須恵	稜椀	口14.2	A	灰	堅	1/8		外面薄く自然釉
669	カマド内	土師	小甕B	口16.4	英，長雲(細)小礫	淡褐	軟	1/3	ロクロ	口縁内面炭化物

SI 1 （本文142頁，図版93）

670	No.1	須恵	無台杯	口11.4 底 7.2 高 3.9	A	黄灰	普通	完形	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
671	カマド	須恵	杯蓋	器12.6	A	灰	堅	1/6	天外ヘラ切り後ナデ？	

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
672	南東	須恵	無台杯	口12.8 底 7.0 高 4.0	C	灰	堅	1/10	底外回転糸切り	胎土(英)(長)含まず精良，頸城末野窯か？
673	カマド付近	土師	小甕	口12.4	雲(細)	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁内面炭化物，胎土(英)(長)含まず精良
674	3層，No.1南東	土師	小甕	口10.2 底 6.1 高(8.0)	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ	
675	南東最下層カマド	土師	小甕B	口11.2 底 8.2 高(11.5)	英，長雲(細)	茶褐	堅	1/2	ロクロ，底外ヘラ切り	口縁内面薄く炭化物，体部外面ススI

SI 1100 （本文143頁，図版94）

676	C区南北トレ4層その他	須恵	無台杯	口12.3 底 9.0 高 3.3	B	灰	堅	一部欠	底外ヘラ切り	
677	A区4層	須恵	無台杯	口12.6 底 8.0 高 3.4	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り，板状圧痕	口縁外面一部重ね焼痕。
678	C区2層～4層 A区4層	須恵	無台杯	口13.5 底 9.4 高 3.5	A	黄灰	普通	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕，底部ヘラ記号「×」
679	C区南北トレ	須恵	壺蓋							SI 1302－667と同一個体
680	C区南北トレ	須恵	有台杯A							SI 1302－666と同一個体
681	B区5層一括	須恵	有台杯B	口14.5	A	灰	堅	3/4	底外ヘラ切り後ナデ	外面一部薄く自然釉，全体にゆがみ，高台剝離
682	C区，E 10，1，2層その他	須恵	短頸壺	肩19.8	C	灰	堅	1/5		胎土(英)含まず精良，肩部外面淡緑色の自然釉
683	C区一括 C区境界壁その他	土師	鉢A	口16.9 底 8.0 高 6.9	英雲(細)小礫	茶褐	堅	(口)一部欠	ロクロ	口縁内面炭化物，体部外面ススI
684	C区境界壁一括 その他	土師	小甕	口10.0 底 4.7 高 6.4	英，長雲(細)小礫	(内)暗褐(外)明褐	普通	3/4	ロクロ	
685	カマドNo.7	土師	小甕	底 7.6	英，長雲(細)小礫	明褐	堅	3/4	ロクロ，底外静止糸切り	
686	A区4層	土師	小甕B	口12.0	英，長小礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	口縁内面炭化物
687	AC区ベルト2層	土師	小甕B	口(12.0)	英雲(細)小礫	茶褐	堅	1/10	ロクロ	
688	A区4層	土師	小甕B	口12.0	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	
689	C区5層	土師	長甕B	口19.6	英雲(小細)小礫	暗褐	普通	1/5	ロクロ	
690	C区一括No.2	土師	長甕B	口19.6	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/5	ロクロ	692と同一個体？
691	C区No.2	土師	長甕B	口19.0	英雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
692	C区No.3～No.9	土師	長甕B		英雲(細)小礫	淡褐	堅	底部全存	ロクロ	外面薄くスス690と同一個体?
693	カマドNo.4	土製品	フイゴ羽口	残存幅5.4 長6.7	細礫	黄灰				
694	カマドNo.12	土製品	フイゴ羽口	残存幅7.0 長11.3	英	淡灰				
695	D区5層一括	土師	鍋B	口43.4	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ2類	内面下半部灰色を呈す。

SI 1101 (本文144頁, 図版95)

696	D区2層	須恵	無台杯	口11.7 底8.5 高3.6	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
697	D区3層	須恵	無台杯	口12.0 底8.5 高3.3	B	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕, 胎土(英)含まず精良
698	D区2層	須恵	杯蓋	器12.0 高2.7	B	灰	堅	(口)一部欠	天外ロクロケズリ	
699	C区5層	土師	小甕B	口11.6 底6.8 高14.0	英,長雲(細)小礫海針	淡褐	堅	1/2	ロクロ, 底外回転糸切り	口縁内面一部炭化物, 頸部外面一部ススス
700	CD区ベルト一括	土師	長甕B	口19.8	英雲(小細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	
701	C区4層一括	土師	長甕B	口20.8	英雲(小細)	淡褐	堅	2/3	ロクロ	体部外面全体ススス。胎土(英)含むが精良。須恵器窯焼成か?

SI 299 (本文144頁, 図版95)

702	2層	須恵	杯蓋	器14.0	A	灰	堅	1/3	天外ロクロケズリ	
703	トレンチ撹乱	須恵	有台杯A?	口11.0 台5.0 高4.3	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	内面全体薄く自然釉
704	No.3	土師	椀B?	底6.4	雲(細)	(内)黒(外)明褐	堅	1/8	底外ロクロナデ, 内面黒色処理	
705	カマド2層	土師	小甕	口10.3 底7.4 高7.4	英,長雲(小細)	明褐	堅	(口)一部欠	ロクロ	
706	1層No.6 カマド2層他	土師	小甕	口15.2 底6.4 高11.9	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	体部内面一部炭化物
707	カマド3層	土師	長甕C	底6.0	英,長雲(細)	茶褐	普通	(底)全存(体)2/3		

SI 401 (本文144頁, 図版95)

708	4層	須恵	無台杯	口12.4	B	赤灰	堅	1/4		
709	No.1撹乱	須恵	無台杯	口12.6 底7.6 高2.9	B	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕, 灯明皿
710	No.3 カマド3, 4層	須恵	無台杯	口12.5 底8.9 高3.0	B	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
711	No.6 3層, 4層	須恵	無台杯	口12.8 底8.2 高3.2	B? 海針	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	胎土に海針微量含むが, Bに近い
712	サブトレ4層その他	須恵	無台杯	口11.9 底9.0 高3.5	B	灰	堅	1/8	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面重ね焼痕, 内面磨滅
713	サブトレ1～4層その他	須恵	有台杯B	口14.2 台9.0 高7.1	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	
714	カマドNo.2, No.4その他	須恵	有台杯B	口14.1 台8.6 高6.5	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面一部重ね焼痕
715	3層	須恵	壺蓋	器(14.0)	A	灰	堅	1/8		外面自然釉, 口縁端部意図的に打ち欠く
716	4層	土師	小甕B	口11.6	英雲(細)	淡褐	堅	1/4	ロクロ	頸部内面炭化物
717	トレンチ	土師	甕	底9.6	英雲(小細)	淡褐	堅	1/10	ロクロ, 底外ヘラケズリ	体部外面一部薄くスス
718	SI401	土師	椀A	口12.0	英雲(小細)	茶褐	堅	1/4	非ロクロ	椀であるが二次焼成受ける
719	サブトレ4層	土師	長甕B		英雲(細)小礫	淡褐	堅	体部破片		外面一部スス

SI 1320 (本文145頁, 図版96～98)

720	D区1層	須恵	無台杯	口11.9 底8.8 高3.4	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り, 板状圧痕	口縁外面重ね焼痕
721	トレンチ上面	須恵	無台杯	口12.4 底9.0 高3.4	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
722	アゼ3層	須恵	無台杯	口12.5 底8.8 高3.3	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	
723	トレンチアゼ2層	須恵	無台杯	口12.8 底7.4 高3.1	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
724	C区2層その他	須恵	無台杯	口11.8 底8.5 高3.7	A	黄灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕, 底部外面墨書「井」?
725	アゼ2層トレンチ	須恵	無台杯	口12.6	A	淡灰	軟	1/4		口縁外面重ね焼痕
726	アゼ2層トレンチ	須恵	無台杯	口11.8 底8.5 高3.0	C 海針	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕, 胎土は比較的粗い
727	B区2層	須恵	無台杯	口12.0 底9.2 高3.0	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面重ね焼痕, 内外面一部ススス状の付着物
728	トレンチ	須恵	無台杯	口13.0 底7.0 高3.0	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕, 器壁は薄い
729	トレンチアゼ2層	須恵	無台杯	口12.5 底9.0 高3.8	B	淡灰	軟	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
730	トレンチ	須恵	無台杯	口10.6 底7.0 高2.8	B	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
731	トレンチ アゼ2層	須恵	無台杯	口11.1 底6.7 高 3.3	B 海針	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕，口縁内面一部ススト
732	トレンチ アゼ1～3層 他	須恵	無台杯	口12.1 底 8.3 高 3.5	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
733	No.1	須恵	無台杯	口12.4 底 7.3 高 3.6	B	淡灰	軟	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
734	トレンチ	須恵	無台杯	口12.1 底 8.4 高 3.3	B	灰	堅	底部全存 (口)1/12	底外ヘラ切り，板状圧痕	
735	No.4	須恵	有台杯C	口10.4 台 6.8 高 5.5	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	
736	No.3	須恵	有台杯C	口10.4 台 5.5 高 4.3	A	暗灰	堅	2/3		内面自然釉
737	D区3層 アゼ3層 その他	須恵	有台杯	台 6.4	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
738	トレンチ アゼ	須恵	有台杯A	口12.6 台 7.8 高 3.9	C 海針	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
739	D区1層 アゼ2層	須恵	折縁杯	口13.3 台 7.2 高 4.1	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	
740	C区 D区2層 その他	須恵	折縁杯	口14.3 台 7.5 高 3.9	A	灰	堅	1/3		胎土(英)含むがやや精良
741	トレンチ アゼ1層	須恵	折縁杯	口14.6	A ?	灰	堅	1/8		胎土(英)含まず
742	カマド	須恵	稜椀	口15.4	A	灰	堅	1/10		
743	No.3 B区2層	須恵	有台杯X	口13.4	A	灰	堅	1/6		外面カキ目の様な条線
744	No.2 アゼ2層	須恵	有台杯X	口15.0	A	灰	堅	1/6		
745	アゼ3層 B区2層	須恵	有台杯B	口14.8	A	灰	堅	1/6		口縁外面重ね焼痕
746	SI1320	須恵	有台杯B	口13.9 台 8.2 高 5.8	B	暗灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	内面ススト状付着物
747	東壁際2，3層	須恵	杯蓋	器16.2	A	灰	堅	1/6	天外ロクロケズリ	内面薄く墨痕転用硯？
748	トレンチ	須恵	杯蓋	器16.6	A	灰	堅	1/8		
749	アゼ	須恵	小瓶	口 6.4	A	暗灰	堅	1/3		内面自然釉
750	SI1320	須恵	小瓶	口18.6	B ?	暗灰	堅	1/3		胎土(英)含まずやや精良
751	SI1320	須恵	横瓶	口12.9	A	灰	堅	1/8		外面自然釉
752	アゼ1層	須恵	直口壺 ?		A	灰	堅		外面タタキ目後カキ目	SI41-648と同一個体
753	トレンチ	須恵	甕		A	灰	堅		外面タタキ目後カキ目	外面自然釉，770と同一個体
754	トレンチ アゼ2層	土師	甕		英，長雲(細)	(内)淡褐(外)赤褐	堅			

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
755	トレンチ	土師	小甕C ?	口15.2	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
756	トレンチ	土師	小甕B	口15.4	英，長雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
757	トレンチ	土師	小甕B	口17.2	英，長雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	口縁外面薄くスス
758	アゼ1層	土師	小甕B	口16.6	英，長雲(細)	茶褐	堅	1/6	ロクロ	口縁内面厚く炭化物，頸部外面スス
759	カマド	土師	小甕B	口15.4	英雲(細) 小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ	口縁内面薄く炭化物
760	トレンチ	土師	小甕	底 9.2	英，長雲(細) 小礫	茶褐	堅	1/4	ロクロ，底外板状圧痕	内面一部ススト(炭化物)？
761	SI1320	製塩土器		器13.2	英，長	淡褐	軟	1/3		強い二次焼成を受ける
762	トレンチ	土師	長甕B	口19.3	英雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ	
763	アゼ1層 トレンチ	土師	長甕B	口18.0	英，長雲(小細) 小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
764	No.2	土師	小甕	底 6.8	英，長雲(細) 小礫	淡褐	堅	底部全存 (体)1/2	底外かるいナデ	体部外面ススト
765	アゼ2層 その他	土師	小甕B	底 9.2	英，長雲(細)	淡褐	堅	底部一部欠	ロクロ	
766	カマド	土師	椀	口 8.5 底 5.8 高 7.4	英	淡褐	堅	一部欠	非ロクロ底外ヘラケズリ	椀であるが二次焼成を受ける
767	トレンチ	土師	長甕B	口23.2	英，長雲(細) 小礫	淡褐	普通	1/6	ロクロ	
768	No.1，アゼ3層，トレンチ	土師	長甕B	口20.4	英，長雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ，外面にタタキ目残る	
769	トレンチ アゼ2層	土師	長甕B		英，長雲(細) 小礫	茶褐	堅	1/4	ロクロ	外面ススト
770	アゼ1層 その他	須恵	大甕	口26.6	A	灰	堅	(口)1/12 (体)1/5		

SI 753 （本文147頁，図版98）

771	上面	須恵	無台杯	口12.2 底 8.2 高 3.3	B	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
772	SI752 D11(17)	須恵	無台杯	口11.6 底 7.8 高 3.5	B	灰	堅	1/3		口縁外面一部重ね焼痕
773	SI752 トレンチ	須恵	有台杯B	口13.6 台 8.2 高 6.8	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り後ナデ	外面全体自然釉，胎土(英)含まずやや精良
774	下層，床直	須恵	杯蓋	器16.2	A	灰	堅	1/4		
775	上層 アゼ上層	須恵	杯蓋	器16.0	B ?	灰	堅	1/3	天外ロクロケズリ	胎土(英)含まず
776	D12(2)地上上面	須恵	杯蓋	器12.1 高 2.6	B	灰	堅	完形	天外ロクロケズリ	内面磨滅，薄く墨痕，転用硯

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
777	SI753	須恵	壺蓋	器12.5 高 4.2	B	灰	堅	2/3	天外ロクロケズリ	内面濃緑色自然釉
778	撹乱	須恵	甕	口23.5	B	灰	堅	1/10		内外面自然釉
779	床面	土師	椀B	口11.7 底 6.7 高 4.1	長 雲(細)	明褐	軟	1/3	底外回転糸切り	胎土精良
780	上面	土師	椀B	底 6.0	雲(細)	淡褐	堅	1/8	内外面ヘラミガキ	胎土精良
781	上面	土師	小甕	底 8.0	長 雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ,	体部外面薄くスス
782	上面	土師	小甕B	口12.0	英,長 雲(細)	淡褐	普通	1/3	ロクロ	口縁内面炭化物, 口縁～体部外面
783	カマド内 その他	土師	長甕B	口23.0	英,長 雲(細)	明褐	堅	1/6	ロクロ	
784	No.6	土師	鍋C	口35.2	英,長 雲(細)	淡褐	堅	1/12	ロクロ	SI752 の混入か

SI 850 (本文148頁, 図版99)

785	トレンチ 1～3層	須恵	無台杯	口11.6 底 8.0 高 3.0	C 海針	茶褐	堅	1/3	底外ヘラ切り	
786	カマド	須恵	無台杯	口12.8 底 8.6 高 3.4	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	両面スス (灯明皿?)
787	カマドNo. 1	須恵	無台杯	口12.5 底 8.8 高 3.6	B	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕, 内面薄くスス
788	No.1	須恵	有台杯 A	口11.0 台 6.4 高 3.8	A	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	灯明皿, 内面厚く外面薄く自然釉
789	上面	須恵	有台杯 A?	台 6.0	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
790	上面	須恵	有台杯 B	口14.5 台 8.4 高 6.9	B	灰	堅	3/4	底外ヘラ切り	体部外面片側自然釉
791	トレンチ	須恵	杯蓋	器16.3	C	灰	堅	1/8	天外ロクロケズリ	口縁内面自然釉
792	カマドNo. 2	土師	小甕B	口12.7 底 7.9 高15.1	英,長 雲(細)	淡褐	普通	完形	ロクロ,	
793	3層	土師	小甕?	底 6.6	英 雲(細)	淡褐	堅	(底)全 存(体) 2/3	非ロクロ 内面ヘラミガキ	内面炭化物
794	No.4～5 3層	土師	小甕B	口10.2 底 6.7 高 9.5	英,長 雲(細) 小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ	口縁内面厚く炭化物
795	上面	土師	長甕	口(18.5)	英,長 雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
796	カマドNo. 3他	土師	長甕B	口21.6	雲(細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	体部外面スス

SI 1460 (本文149頁, 図版99)

797	A区1層	須恵	無台杯	口13.2 底 8.6 高 3.3	A	灰	堅	3/4	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
798	トレンチ 1層	須恵	無台杯	口12.6 底 7.5 高 3.1	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
799	1層	須恵	無台杯	口11.8 底 7.0 高 3.3	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕。
800	1層	須恵	無台杯	口13.4 底 9.0 高 3.2	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
801	トレンチ 1層	須恵	有台杯	台 5.2	A	灰	堅	底部 全存	底外ヘラ切り	内面厚く濃緑色自然釉
802	C区1層	須恵	有台杯 B	口14.4 台 8.4 高 6.0	B	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	外面全体自然釉
803	C区1層 B区1～ 2層	須恵	杯蓋	器14.6	B?	灰	堅	1/6	天外ロクロケズリ	内外面口縁重ね焼痕
804	2層	土師	椀B	口11.2	長 雲(細)	明褐	普通	1/8	ロクロ	
805	C区1層	土師	椀B	底 6.8	英,長 雲(細) 小礫	明褐	普通	1/6	ロクロ	804 と同一個体の可能性あり
806	SI1460	土師	椀B	底 7.0	長 雲(細) 細礫	明褐	堅	1/4	底外回転糸切り	
807	CD区 アゼ3層 C区1層	土師	長甕B		英 雲(細) 小礫	淡褐	堅	体部 破片	外面格子タタキ目	808 と同一個体の可能性あり
808	一括	土師	長甕B	口18.4	英,長 雲(小細) 小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ	体部外面一部スス, 807 と同一個体か

SI 1202 (本文149頁, 図版100)

809	No.5	須恵	無台杯	口12.4 底 8.0 高 3.1	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
810	No.4	須恵	無台杯	口12.2 底 8.0 高 3.0	B	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	
811	トレンチ 撹乱 他	須恵	無台杯	口12.2 底 7.6 高 3.4	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
812	C1層3 層 覆土 その他	須恵	無台杯	口12.6 底 8.7 高 3.4	B	灰	堅	(口)一 部欠	底外ヘラ切り	
813	D区3層 その他	須恵	無台杯	口12.0 底 8.8 高 3.0	B	暗灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
814	南側トレ ンチ, 遺 構上面	須恵	無台杯	口12.4 底 8.7 高 3.3	B	灰	堅	(口)一 部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
815	No.1	須恵	無台杯	口12.6 底 7.2 高 3.3	B	灰	堅	(口)一 部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
816	No.3	須恵	無台杯	口13.4 底 8.4 高 3.5	A	淡灰	軟	完形	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
817	トレンチ 遺構上面	須恵	無台杯	口12.7 底 7.9 高 3.6	A	淡灰	軟	1/3	底外ヘラ切り	内面タール, 灯明皿?
818	南北トレ ンチ撹乱	須恵	杯蓋	器12.8 高 2.8	B	灰	堅	(口)一 部欠	天外ロクロケズリ	口縁外面重ね焼痕
819	No.2	須恵	折縁杯	口12.8 台 7.0 高 3.8	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
820	No.2、SX1203上面	須恵	有台杯C	口10.9 台 6.2 高 5.2	B	暗灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
821	トレンチ遺構上面その他	土師	長甕B	口20.0	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	体部外面一部ススス
822	トレンチ遺構上面その他	土師	長甕B		英,長雲(細)小礫	茶褐	堅	1/3	ロクロ	体部外面ススス

SI 435 (本文150頁, 図版100)

823	トレンチ	須恵	無台杯	口11.6 底 7.3 高 3.2	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	
824	1層	須恵	無台杯	口12.8	B	灰	普通	1/10		口縁外面重ね焼痕
825	4層	須恵	無台杯	口13.6 底 9.0 高 3.2	B	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
826	カマド	須恵	無台杯	口14.0 底 9.0 高 3.0	A	黄灰	普通	1/4	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
827	4層	須恵	折縁杯	口11.4	A	灰	堅	1/6		口縁外面重ね焼痕
828	2層	須恵	杯蓋	器 8.6	C	灰	堅	1/6	天外ヘラ切り	胎土(英)含まずやや精良,内面磨滅
829	2層	須恵	杯蓋	器12.6 高 2.3	B	灰	堅	1/3	天外ロクロケズリ	口縁外内面全体重ね焼痕
830	3層	須恵	杯蓋	器15.0	B	灰	堅	1/4	天外ロクロケズリ	内面磨滅,墨痕転用硯
831	2層	土師	長甕B	口20.0	雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ	頸部内面一部炭化物,胎土精良
832	1～3層	土師	長甕B		雲(細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	内面一部炭化物,外面一部ススス,831と同一個体の可能性

SI 440 (本文150頁, 図版101)

833	No.9	須恵	無台杯	口12.2 底 7.6 高 3.5	B	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	体部外面1/4程ススス
834	No.1	須恵	無台杯	口12.5 底 8.3 高 3.3	B	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
835	No.4	須恵	無台杯	口12.3 底 8.1 高 3.2	B	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
836	No.2,南西コーナー	須恵	無台杯	口12.7 底 7.9 高 3.1	B	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕,底部外面墨書「主」
837	No.3,No.11	須恵	杯蓋	器17.2 高 2.8	B	灰	堅	2/3	天外ロクロケズリ	口縁外面一部重ね焼痕,内面磨滅,薄く墨痕,転用硯
838	サブトレ2層	須恵	杯蓋	器15.4	A	灰	堅	1/5		口縁外面重ね焼痕,内面薄く墨痕
839	No.5	須恵	小壺	肩10.7	B	灰	堅	口縁部欠	底外ヘラ切り	肩部外面自然釉
840	No.2,3,4,6,7,10,13,15,16	土師	長甕B	口18.1 高36.5	英,長雲(小細)小礫	淡褐	堅	2/3	ロクロ	体部外面ススス口縁部の歪み大きい。カマドの芯
841	No.2,4,5,6,9,12,13,15,16	土師	長甕B	口20.8 高35.7	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	3/4	ロクロ	体部外面ススカマドの芯

SI 840 (本文151頁, 図版101)

842	No.2	須恵	無台杯	口12.9 底 8.2 高 3.4	A	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
843	No.4	須恵	無台杯	口12.8 底 7.8 高 3.2	A	黄灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	底部内面一部ススス(タール)?器壁薄い
844	No.1	須恵	無台杯	口12.4 底 8.7 高 2.9	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
845	No.5	須恵	有台杯B	台 8.4	C?	灰	堅	底部全存	底外ヘラ切り	外面全体自然釉,胎土(英)含むがAより精良
846	No.3,東西トレンチ	土師	小甕B	口16.4	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	口縁～体部内面一部炭化物頸部外面薄くスス
847	東西トレンチ	土師	長甕B	口(19.5)	長雲(細)	茶褐	堅	1/12	ロクロ	口縁内面炭化物,口縁外面スス
848	4層	土製品	フイゴ羽口	径(7.0)	英,長小礫	(内)茶褐(外)黒褐	堅	1/2		

SI 802 (本文151頁, 図版102)

849	No.1	須恵	無台杯	口12.3 底 7.1 高 3.6	B	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り,板状圧痕	底部外面ウルシ付着
850	カマドNo.1	須恵	無台杯	口11.6 底 8.2 高 3.0	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り,板状圧痕	口縁外面重ね焼痕
851	2, 3層	須恵	無台杯	口12.5 底 8.0 高 3.7	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り,板状圧痕	口縁外面一部重ね焼痕,底部外面墨書,文字不明
852	カマド付近	須恵	無台杯	口12.3 底 8.0 高 3.6	B	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り,板状圧痕	底部外面墨書文字不明
853	2, 3層	須恵	有台杯A	口11.0 台 9.1 高 3.9	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	内面自然釉
854	2, 3層	須恵	有台杯B	口15.4 台10.7 高 5.7	C	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	
855	SI802	須恵	壺蓋?	器 6.8	A	灰	堅	1/6		両面淡黄緑色自然釉
856	カマド付近	須恵	杯蓋	器14.0	A	灰	堅	1/4	天外ヘラ切り	外面自然釉
857	2層	須恵	杯蓋	器16.1	A	灰	堅	1/6	天外ロクロケズリ	口縁外面重ね焼痕
858	2, 3層	須恵	短頸壺	口 9.0 肩19.9	A	灰	堅	1/4		外面淡緑色自然釉(SI803)

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
859	2層	土師	無台杯	底 6.8	長 雲(細)	黒	堅	1/8	内外面黒色処理	内外面磨滅
860	2層	土師	小甕B	底 7.2	英,長 雲(細) 小礫	明褐	普通	1/3	ロクロ, 底外静止糸切り	
861	カマド付近	土師	小甕B	底 6.6	英,長 雲(細)	淡褐	堅	底部全存	ロクロ, 底外回転糸切り, 板状圧痕	
862	カマドNo.4	土師	小甕B	口10.3 底 6.9 高10.8	英,長 雲(小細) 小礫	茶褐	堅	1/4	ロクロ	口縁～底部内面, 炭化物
863	2層	土師	長甕C	口20.8	長	明褐	堅	1/10	ロクロ	焼成きわめて堅い (SI 803)
864	カマドNo.5	土師	長甕C	口23.8	英,長 雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	(SI 803)
865	カマド付近	土師	長甕B	口(22.0)	英,長 雲(細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	内面一部,体部外面スス,866と同一個体か
866	カマド付近, 他	土師	長甕B	体19.6	英,長 雲(細)	淡褐	堅	1/3	ロクロ	865と同一個体か

SI 1201 (本文152頁, 図版102)

867	C－3層 その他	須恵	無台杯	口13.4	A	灰	堅	1/3		口縁外面重ね焼痕
868	No.3	須恵	無台杯	口12.4 底 8.0 高 3.0	B	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
869	No.2 その他	須恵	無台杯	口12.8 底 4.0 高 3.1	B	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
870	No.4	須恵	無台杯	口11.7 底 8.2 高 3.1	B	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り, 板状圧痕	口縁外面重ね焼痕
871	No.2, No.4, トレンチ その他	須恵	無台杯	口12.0 底 7.8 高 3.0	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕。
872	No.5	須恵	折縁杯	口12.6 台 6.8 高 3.0	A	黄灰	普通	完形	底外ヘラ切り	
873	B 3層	須恵	杯蓋	器14.0 高 3.0	A	灰	堅	1/4	天外粗いカキ目?	
874	トレンチ	須恵	折縁杯	台 7.0	A?	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	
875	1－3層	須恵	有台杯C	口 9.8 台 6.2 高 4.3	B	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	
876	D撹乱	土師	椀B	口14.6	英 雲(細)	明褐	堅	1/12	内外面ヘラミガキ	

SI 1167 (本文152頁, 図版103～105)

877	D区トレンチ その他	須恵	無台杯	口12.9 底 8.2 高 3.5	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
878	ベルト3層, 4層 その他	須恵	無台杯	口12.8 底 8.3 高 3.4	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
879	ベルト3層, D区黒色土層	須恵	無台杯	口12.4 底 7.9 高 3.6	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り, 板状圧痕	口縁外面重ね焼痕

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
880	D区4層	須恵	無台杯	口12.6 底 8.5 高 3.6	B	黄灰	普通	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
881	D区4層 D区南北トレンチ	須恵	有台杯C	口11.0 台 6.8 高 5.4	B	灰	堅	一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
882	B区東西トレンチ	須恵	有台杯B?	台 8.2	B	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	
883	D区4層	須恵	無台杯	口13.2 底 9.0 高 3.2	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
884	D, E区 4層, 1層	須恵	無台杯	口12.1 底 9.2 高 3.3	B? 海針	黄灰	普通	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕, Bと思われるが胎土に微量の海綿骨針混入
885	南北ベルト3層 その他	須恵	無台杯	口12.2 底 7.2 高 3.2	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り, 板状圧痕	口縁外面一部重ね焼痕
886	B区黒色土層 その他	須恵	無台杯	口12.0 底 7.9 高 3.4	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
887	ベルト3層 他	須恵	有台杯A	口15.0	A	淡灰	軟	1/2		(SI 1166)
888	A区トレンチ 他	須恵	折縁杯	口12.8	A	灰	堅	1/4		口縁外面一部重ね焼痕
889	トレンチ 3層	須恵	無台杯	口12.9 底10.4 高 3.9	C	黄灰	普通	1/6	底外ヘラ切り	胎土(英)含まず精良 (SI 1166)
890	B区黒色土上層 括	須恵	無台杯	口12.8 底 8.5 高 3.7	A	淡灰	軟	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
891	A区 ベルト5層	須恵	無台杯	口13.5 底 9.5 高 3.7	A	淡灰	軟	一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面一部重ね焼痕
892	D区 黒色土 1, 3層	須恵	無台杯	口13.3 底 9.7 高 3.7	A	淡灰	軟	1/3	底外ヘラ切り	
893	トレンチ 3層	須恵	無台杯	口11.9 底 9.2 高 3.2	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
894	D区4層	須恵	無台杯	口13.2 底 8.2 高 3.3	A	淡灰	軟	1/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
895	B区 他	須恵	杯蓋	器13.6	C?	灰	堅	1/6		
896	D区3層 その他	須恵	杯蓋	器15.8 高3.45	B	灰	堅	一部欠	天外ロクロケズリ	口縁端部重ね焼痕
897	黒色土上層	須恵	小瓶	口 9.7	B	灰	堅	1/6		内外面濃緑色自然釉, 胎土(英)含まずやや精良
898	B区2層	須恵	短頸壺	台11.9	A	灰	堅	1/4	底外ナデ	(SI 1166)
899	A区2層	須恵	短頸壺	底12.0	C?	灰	堅	体部完形	底外ナデ	外面自然釉, 肩部円形剥離痕2ケ。環状の把手か? 胎土(英)(長)含むがやや精良 (SI 1166?)
900	南北ベルト3層	土師	椀 B	底 8.0	雲(細) 細礫	明褐	堅	1/5	底外回転糸切り	外面スス, 902と同一個体か

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
901	B区黒色土上層その他	土師	椀 B	口12.6 底 6.9 高 3.7	長雲(細)	明褐	堅	1/5	底外糸切り	内外面一部スス
902	D区南北トレンチ	土師	椀 B	口15.0	雲(細)細礫	明褐	堅	1/5	ロクロ	内外面一部スス 900と同一個体か
903	SI 1166	土師	椀 B	口19.5 底 6.4 高 7.2	雲(細)	(内)淡褐(外)赤褐	堅	1/5	底外ヘラ切り後ヘラミガキ	
904	B区黒色土上層	土師	椀 C	口11.0 底 6.6 高 4.6	雲(細)	茶褐	堅	1/4	底外ヘラケズリ？	
905	A区東西トレンチ	土師		底 7.6	英雲(細)細礫	茶褐	普通	1/4	非ロクロ	二次焼成受ける
906	ベルト5層	土師	小甕A	口15.6	雲(細)細礫	暗褐	堅	1/4	非ロクロ	(SI 1166)
907	D区南北トレンチ	土師	小甕C	口12.2	英,長雲(細)	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁～体部内面炭化物
908	B区黒色土層 他	土師	小甕C	口14.0	英,長細礫	明褐	普通	1/6	ロクロ	
909	B区黒色土	土師	小甕C？	口18.0	英雲(細)	淡褐	普通	1/4	ロクロ	頸部内面厚く炭化物,(SI 1166？)
910	南北ベルト5層	土師	小甕B	口17.5	英,長雲(小細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	口縁内面厚く炭化物
911	南北ベルト	土師	小甕B	口15.0	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面炭化物
912	A区東西トレンチその他	土師	長甕A	底 8.8	英,長雲(細)	明褐	堅	1/4	非ロクロ底外木葉痕	(SI 1166)
913	D区黒色土層(3層)	土師	長甕C	底 9.4	英,長雲(細)	明褐	堅	1/6	底外ハケ目	(SI 1166)
914	B区黒色土層	土師	長甕C	底 8.0	英細礫	淡褐	普通	1/4	底外ハケ目	(SI 1166)
915	南北ベルト3層2層	土師	小甕B？	底 7.6	英,長雲(細)小礫	淡褐	普通	1/2	ロクロ	
916	D区4層	土師	小甕C？	底 5.5	英雲(細)中礫小礫	淡褐	普通	一部欠	ロクロ	(SI 1166)
917	D区南北トレンチ	土師	小甕B？	底 8.4	英,長雲(細)	明褐	普通	1/3	ロクロ	(SI 1166)
918	D区4層	土師	小甕C？	底 5.0	英雲(細)中礫	淡褐	普通	底部全存	ロクロ,内面ヨコナデ	
919	D区南北トレンチ	土師	小甕B？	底 7.1	英雲(細)細礫	明褐	普通	底部全存		
920	AB区東西ベルト黒色土上層	土師	小甕B	底 6.6	英雲(細)	明褐	普通	1/3	底外回転糸切り後周辺ヘラケズリ	
921	D区南北トレンチ	土師	小甕B	底 7.6	長雲(細)精良	明褐	普通	1/4	底外回転糸切り	
922	カマド上層	土師	甕	底 8.4	英雲(細)小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ,底外ヘラケズリ	外面一部スス
923	B区黒色土 他	土師	小甕A	口14.8 高14.3	英,長雲(小細)	淡褐	普通	2/3	非ロクロ2類	(SI 1166)
924	南北ベルト3層他	土師	長甕B	体20.2	英雲(細)	淡褐	堅	一部欠	ロクロ	外面一部スス 胎土精良
925	東西トレンチ3層	土師	長甕？	口21.6	英雲(細)	淡褐	堅	1/5	ロクロ	
926	東西トレンチベルト5層	土師	長甕C	口23.8	英雲(小細)	淡褐	堅	1/6	ロクロ	(SI 1166)
927	南北ベルト3層	土師	長甕C	口22.6	英,長雲(細)小礫	明褐	普通	1/6		(SI 1166)
928	B区南北トレンチD区4層	土師	佐渡型甕	口27.3	英雲(細)細礫	赤褐	堅	1/10	非ロクロ	口縁外面スス,手法,胎土から佐渡産
929	D区黒褐色土	土師	鍋 C	口38.0	英,長雲(細)	淡褐	普通	1/12	ロクロ	体部外面一部スス (SI 1166)
930	D区4層	土師	鍋 C	口40.0	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/10	ロクロ	(SI 1166)
931	南北ベルト3層,黒色土山トレンチ	須恵	大甕	口22.5	A	灰	堅	1/3		体部外面径6cm位の円形痕。焼成時物を乗せたと思われる

SI 29 （本文154頁，図版105）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
932	最上層	須恵	無台杯	口12.4 底 8.4 高 3.3	B	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
933	最上層,2層	須恵	無台杯	口12.0	B	灰	堅	1/8		口縁外面重ね焼痕
934	最上層	須恵	無台杯	底 7.6	B	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	
935	最上層	須恵	折縁杯	台 6.8	A	灰	堅	(底)一部欠	底外ヘラ切り,板状圧痕	
936	最上層	須恵	有台杯C							SI 60-591と同一個体
937	上層2層	須恵	長頸瓶	肩16.7	C？	灰	堅	一部欠		外面自然釉,胎土(英)(長)含むが精良
938	最上層	土師	小甕B	底 7.6	英,長雲(細)	淡褐	堅	1/3	底外回転糸切り	
939	最上層	土師	小甕B	底 8.3	英,長雲(細)	淡褐	普通	一部欠	底外回転糸切り	941と同一個体か
940	2層	土師	長甕B	口24.1	英雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	口縁外面スス
941	最上層	土師	小甕B	口12.0	英,長雲(細)	淡褐	普通	1/8	ロクロ	939と同一個体か
942	最上層	土師	小甕B	口16.6	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/4	ロクロ	
943	最上層	土師	鍋B	口35.8	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ	口縁,体部外面一部スス

SI 1166 （本文154頁，図版106）

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
944	1層	須恵	有台杯A	口13.4 台 9.6 高 3.8	C	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	底部外面磨滅黒痕，転用硯

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
945	A区東西トレンチ	土師	小甕A	口10.3	英雲(小細)小礫	淡褐	普通	1/6	非ロクロ2類	口縁内面炭化物
946	2層	土師	長甕B	口17.2	英雲(細)	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁外面一部ススス
947	D8東西トレンチ	土師	長甕C	口21.4	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/12	ロクロ	

SI 805　(本文155頁，図版106)

948	No.1	須恵	無台杯	口13.0 底 9.1 高 3.7	C 海針	黄灰	堅	3/4	底外ヘラ切り後ナデ	口縁外面一部重ね焼痕，内面一部タール灯用皿
949	1～3層	土師	小甕C	口17.4	英雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	口縁内面一部炭化物
950	2層	土師	小甕	口17.4	英雲(細)	淡褐	普通	1/4	口縁部ヨコナデ	口縁内面厚く炭化物
951	カマド東側No.2	土師	小甕B	口18.3 底 9.6 高13.5	英雲(細)小礫	茶褐	普通	1/2	ロクロ	口縁内面～体部炭化物
952	カマドNo.I　他	土師	甕	底 7.0	英,長雲(細)	茶褐	普通	一部欠		
953	トレンチ	土師	甑?	底12.5	英,長雲(細)	淡褐	普通	1/6		

SI 18　(本文155頁，図版106)

954	3層	須恵	無台杯	口13.6 底 9.8 高 3.1	B	灰	堅	1/8		口縁外面重ね焼痕
955	3層	須恵	無台杯	口13.0 底 9.1 高 4.1	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り後ナデ	
956	最上層	須恵	短頸壺		A	灰	堅			外面自然釉
957	3層	土師	小甕B	口14.4	英雲(小細)小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	口縁内面炭化物，口縁～体部外面ススス
958	最上層	土師	長甕C	口21.6	英,長雲(小細)	茶褐	堅	1/2	ロクロ	

SI 325　(本文156頁，図版106)

959	2層	須恵	無台杯	口10.5 底 7.5 高 3.5	A	灰	堅	1/5	底外ヘラ切り	
960	2層	須恵	杯蓋	器15.6	A	灰	堅	1/6		
961	1層	土師	小甕B	口12.0	英,長小礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	
962	1層	土師	小甕B	口14.6 底 7.1 高12.0	淡褐雲(細)小礫	英	堅	1/3	ロクロ	口縁内面厚く炭化物，体部外面一部薄くススス

SI 42　(本文155頁，図版106)

963	SI42	須恵	無台杯	口11.1 底 8.0 高 3.6	A	淡灰	軟	1/5	底外ヘラ切り	
964	SI42	土師	小甕B	口12.7	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	

SI 16　(本文156頁，図版107)

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
965	3層	須恵	無台杯	口14.0 底 9.6 高 4.0	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	
966	3層	須恵	無台杯	底 9.2	C?	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	胎土に(英)(長)含むがやや精良
967	SI16カマド内	須恵	無台杯	口11.4 底 8.4 高 3.4	C	黄灰	普通	1/5	底外ヘラ切り	口縁外面に重ね焼痕
968	SI 16	土師	甕C?	底 6.6	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/6		
969	SI 16	土師	小甕B	口(15.2)	英雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	頸部内面に炭化物
970	SI 16	土師	長甕B	口24.6	英,長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/10	ロクロ	

SI 1471　(本文156頁，図版107)

971	カマド一括	須恵	有台杯A	口14.2 台 7.6 高 4.3	A	淡灰	軟	(口)一部欠	底外ヘラ切り，底部内面一方向ナデ	
972	東西トレ	須恵	壺	肩20.7	A	灰	堅	1/6		内外面自然釉

SI 1313　(本文156頁，図版107)

973	アゼ攪乱抗	須恵	有台杯C	口11.0	C?			1/10		内外面自然釉胎土(英)(長)含むがやや精良
974	No.1	土師	無台杯	口12.2 底 7.0 高 3.5	英,長雲(細)	黒褐	普通	(口)一部欠	非ロクロ	内外面の器面は黒色処理をした様な黒さを呈する
975	カマド内	土師	長甕A	口18.2	英,長雲(小細)	淡褐	軟	1/8	非ロクロ2類	口縁外面一部薄くスス

SI 670　(本文157頁，図版107)

976	トレンチ	土師	小甕B	口12.8	雲(細)細礫	淡褐	堅	1/6	ロクロ	口縁内面厚く炭化物，口縁～体部外面スス
977	遺構上面	土師	長甕	口17.6	英雲(細)	茶褐	堅	1/8	ロクロ	

SI 1304　(本文157頁，図版107)

978	カマド内	須恵	無台杯	口13.0 底10.3 高 3.3	A	黄灰	普通	(口)一部欠	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
979	2層上面	須恵	無台杯	口12.2 底 9.6 高 3.2	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	
980	カマド	土師	長甕B	口21.0	英,長雲(細)	茶褐	堅	1/12	ロクロ	口縁内面炭化物

SI 80　(本文157頁，図版107)

981	SI80	須恵	無台杯	口12.6 底 8.4 高 3.2	C 海針	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕
982	トレンチ	須恵	杯蓋	器16.0	C?	暗灰	堅	1/6	天外ロクロケズリ	外面自然釉

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
983	上層	土師	小甕B	口14.0	英 雲(細) 小礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ	外面全体スス

SI 9 (本文157頁, 図版107)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
984	トレンチ	須恵	無台杯	口11.2	A	灰	堅	1/6		内面自然釉
985	上面	土師	小甕	体10.0	英 細礫	茶褐	堅	1/10	ロクロ	

SI 1181 (本文157頁, 図版107)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
986	2層	須恵	杯蓋	器14.8 高 3.5	A	灰	堅	3/4	天外ヘラ切り	

SI 1169 (本文157頁, 図版107)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
987	カマド	土師	小甕A	口13.8 底 7.0 高15.2	英,長 雲(細) 小礫	淡褐	普通	一部欠	非ロクロ	体部外面一部スス

SI 82 (本文158頁, 図版107)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
988	カマド	須恵	無台杯	口11.8 底 8.5 高 3.3	C	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	内外面火だすき, 胎土(英)(長)含むが精良

SK39 (本文158頁, 図版108)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
989	下層	須恵	無台杯	口13.3 底 8.0 高 3.9	C 海針	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	胎土中の(英)(長)の量は多い
990	下層	須恵	無台杯	口13.6 底 8.1 高 3.9	C 海針	灰	堅	完形	底外ヘラ切り	胎土は989と同様, 口縁外面重ね焼痕
991	下層	須恵	無台杯	口14.2 底 9.1 高 3.5	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	
992	上層	須恵	有台杯A	口14.1 台 8.9 高 4.5	A	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り	底部外面転用硯
993	SK39	須恵	広口壺	口(14.8)	A	灰	堅	1/12		内面自然釉
994	上層	須恵	環状鈕蓋		A	灰	堅	ツマミ全存		外面全体自然釉
995	上層	土師	甕A?	底 8.5	英,長 雲(細)	淡褐	普通	2/3		
996	上層	土師	長甕C	底 7.6	英,長 雲(細) 中礫 小礫	淡褐	堅	底部全存	ロクロ	体部外面1/3スス
997	最上層	土師	鍋	口40.0	英,長 雲(小細) 小礫	茶褐	堅	1/8	ロクロ	全体に調整が悪く口縁は歪む

SK1022 (本文158頁, 図版108)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
998	1層,上層	須恵	無台杯	口13.6	A	暗灰	堅	1/5		外面上半部に重ね焼痕
999	SK795上	須恵	無台杯	口13.9	A	暗灰	堅	1/4		口縁外面に重ね焼痕
1000	1層	須恵	無台杯	口13.4 底 9.8 高 3.0	A	暗灰	堅	1/8	底外ヘラ切り	
1001	SK795上	須恵	無台杯	口15.4 底11.5 高 3.0	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	口縁外面に重ね焼痕
1002	SK1022	土師	長甕C	口19.3	英,長 雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
1003	2層	土師	甕A	底 8.1	英,長 雲(細) 細礫	淡褐	堅	1/2	非ロクロ 底外木葉痕	
1004	D最上層 上層	土師	小甕C	口14.6 底 7.6 高12.5	英,長 雲(小細) 小礫	淡褐	堅	(底)全存(口)1/10	ロクロ	口縁～体部内面に炭化物
1005	SK1022 SK795 上	土師	鍋A	口37.4 底11.0 高(21.5)	英 雲(小) 小礫	淡褐	堅	1/6	非ロクロ 2類, 底外木葉痕, 砂痕	頸部内面に炭化物, 体部外面の一部厚くスス。底部内面に砂付着

SK102 (本文158頁, 図版108)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
1006	1層	須恵	無台杯	口14.4 底11.4 高 3.4	C	淡灰	普通	1/2	底外ヘラ切り	口縁外面重ね焼痕, Aより胎土精良, (英)(長)が多く混入
1007	サブトレ	土師	小甕A	底 6.9	英 雲(細) 小礫	淡褐	堅	底部全存	非ロクロ	底部外面中心部に黒い付着物
1008	1層	土師	小甕B	口15.4	英,長 雲(細)	淡褐	堅	1/8	ロクロ	口縁～体部内面炭化物, 頸部外面スス
1009	1層	土師	小甕B	口15.0	英,長 雲(細) 小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面全体と頸部～体部内面一部炭化物

SK34 (本文159頁, 図版109)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
1010	SK34	須恵	無台杯	口13.0	C 海針	灰	堅	1/4		胎土に石英を含まず精良
1011	SK34	須恵	無台杯	口12.8 底 8.9 高 4.2	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	内面全体～外面上半部に自然釉
1012	トレンチ	須恵	杯蓋	器17.6	A	灰	堅	1/2	天外ロクロケズリ	内面転用硯, つまみは転用硯のため打ち欠いている。外面自然釉
1013	下層	土師	小甕B	口14.5	英,長 雲(細) 細礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	頸部内面に炭化物
1014	下層	土師	長甕C	口21.0	英,長 雲(細) 小礫	茶褐	堅	1/5	ロクロ	
1015	トレンチ	土師	小甕A	口10.4	長, 雲(細) 小礫	暗褐	堅	1/5	非ロクロ	
1016	下層	土師	小甕B	底 6.0	英,長 雲(細) 小礫	淡褐	堅	底部全存	ロクロ	
1017	トレンチ	土師	無台杯	口(13.0)	英,長 雲(細)	黒褐	堅	1/12	内外面黒色処理, ヘラミガキ	

SK32 (本文159頁, 図版109)

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
1018	1層	須恵	杯蓋	器15.9	C	淡褐	普通	1/3	天外ロクロケズリ	
1019	1層	須恵	無台杯	口12.6 底 7.9 高 3.6	A	淡灰	軟	1/5	底外ヘラ切り	

番号	地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手法	備考
1020	SK32	土師	小甕B	口13.3	英,長雲(細)細礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	口縁内面に炭化物
1021	SK32	土師	長甕B	口27.1	英,長雲(細)中礫小礫					

SK340 (本文159頁, 図版109)

1022	SK340	須恵	無台杯	口13.0 底 8.2 高 3.7	A	淡灰	軟	1/2	底外ヘラ切り	底外ヘラ記号「×」口縁外面に重ね焼痕
1023	SK340	土師	小甕A	口18.0	英,長雲(細)	淡褐	普通	1/6	非ロクロ2類?	
1024	SK340	土師	長甕C	口22.8	英,長雲(細)細礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
1025	SK340	土師	長甕C?	口22.6	英,長雲(細)細礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ?	

SB730・790 (本文160頁, 図版109)

1026	上層	須恵	無台杯	口12.3 底 7.9 高 2.8	B	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	
1027	SB730－8, P760	須恵	無台杯	口12.3 底 7.2 高 3.1	B	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	口縁外面に重ね焼痕
1028	SB790－9	須恵	無台杯	口14.0	B	灰	堅	1/8		

その他の須恵器 (本文160頁, 図版109～111)

1029	E7, 1層	須恵?	有孔土器	底 6.4	C	灰	堅	1/4	底外回転糸切り	胎土に(英)(雲)含まず精良,須恵器でなく新しいものか?
1030	E13, 1・2層	須恵	無台杯	底10.0	A	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り後,二方向ヘラケズリ	
1031	B8(1)地山上面	須恵	小壺?	底 6.1	A	灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	
1032	SI337 撹乱	須恵	無台杯?	口 8.0 底 5.8 高 2.4	A	淡黄灰	普通	1/6	底外ヘラ切り	須恵器と思われるが,淡褐色で土師器の様でもある
1033	A9(8)2層	須恵	無台杯	口12.8 底 8.0	A	暗灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	外面に自然釉 底外ヘラ記号
1034	SK1211 1層	須恵	無台杯	口12.5 底 8.4 高 3.4	C	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り後ハケ目	口縁外面重ね焼痕
1035	E9(14)遺構内	須恵	無台杯	口13.5 底 8.8 高 4.4	C	灰	堅	(口)一部欠	底外ヘラ切り後ロクロケズリ	灯明皿
1036	E13, C区1, 2層	須恵	有台杯X	口17.8	A	淡灰	堅	1/6		内面に自然釉
1037	C11(22)1 2層	須恵	稜椀	口12.0	C	灰	堅	1/12		胎土に(英)を含まずやや精良
1038	E9(12)遺構上面一括	須恵	折縁杯	口12.6 台 7.4 高 5.1	A	黄灰	普通	2/3	底外ヘラ切り後ナデ	底外にヘラ記号「×」, 胎土に(英)(長)を含むがやや精良
1039	B14, 2層	須恵	折縁杯	口13.2 台 6.4 高 4.0	A	灰	堅	1/3	底外ヘラ切り	
1040	C7(23), 1層	須恵	有台杯C	口11.2 台 7.0 高 7.1	A	黄灰	堅	1/2	底外ヘラ切り	内面に自然釉
1041	C10(17), 1層	須恵	皿	口18.2 底15.1 高 2.1	C 海針	灰	堅	1/8	底外ヘラ切り	胎土に(英)を含まず精良, 内外面に薄くスス
1042	F3区町道下1層	須恵	杯蓋		C 海針	明褐	堅	1/3	天外回転糸切り後ロクロケズリ	内面の一部に重ね焼痕
1043	D10(23)	須恵	壺蓋	器15.4	A	灰	堅	1/8	天外ヘラ切り	外面に自然釉
1044	D9排土	須恵	環状鈕蓋		A	灰	堅	ツマミ一部欠		外面に自然釉
1045	D7, C7 1層排土	須恵	環状鈕蓋		A?	灰	堅	ツマミ2/3		外面に自然釉 胎土に(英)(長)を含むがやや精良
1046	A4(8), 1層	須恵	杯蓋		A	灰	堅	1/4		外面に自然釉
1047	E・F12 1, 2層	須恵	壺蓋	器13.0 高 3.4	A	灰	堅	2/3	天外ヘラ切り後軽いロクロケズリ	外面に自然釉
1048	SK287 D5区	須恵	小壺	口 5.8	C	灰	堅	1/4		胎土に(英)を含まずやや精良
1049	C6(24)地山上	須恵	小壺	口 4.4 台 5.4 高 6.7	A	灰	堅	(口)一部欠	底外回転糸切り	胎土に(英)(長)を含むがやや精良, 外面1/2に薄く自然釉
1050	C5	須恵	稜椀	口18.2	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	外面に自然釉
1051	D12(24, 25)1, 2層	須恵	長頸瓶	肩17.9	C	灰	堅	1/3		肩部外面に自然釉, 胎土に(英)を含まず精良
1052	A14, 1・2層, B14 1・2層	須恵	短頸壺	口10.8	A?	灰	堅	1/5		口縁端部に自然釉
1053	E・F12 (11～20) 2層	須恵	短頸壺	口11.7	B	灰	堅	1/5		外面に自然釉 胎土に(英)を含まず精良
1054	B11(2)1, 2層	須恵	甕	口18.3	A	黄灰	堅	1/10		
1055	E13, 2層	須恵	鉢	口19.0	C?	淡灰	軟	1/12		胎土に(英)(長)を含むがやや精良
1056	B12(2), 1・2層	須恵	甕	口21.0	C?	茶灰	堅	1/6		胎土に(英)(長)を含むがやや精良

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
1057	C 9 (12) 1 層	須恵	甕	口(28.0)	A	灰	堅	1/12		
1058	試掘抜根坑	須恵	把手付鉢？	口29.0	A	淡灰	軟	1/6		胎土に(英)(長)を含むがやや精良
1059	B 12 (1, 6, 7) 1, 2 層, C 13 (3, 4) 1 層	須恵	長頸瓶		A	灰	堅	1/3		
1060	E 12 (6, 7, 11, 12) 2 層	須恵	双耳瓶		A	暗灰	堅	ツマミ全存		
1061	A 9 (17) 1 層	須恵	甕		A	灰	堅	(口)一部		胎土はAだがやや精良
1062	A 141, 2 層	須恵	甕		A	灰	堅	(口)一部		胎土はAだがやや精良
1063	B 7 地山上面	須恵	甕		C	灰	堅	(口)一部		胎土に(英)を含まずやや精良,内面自然釉
1064	No. 4 トレンチ南湿	須恵	甕		C	灰	堅	(口)一部		胎土に(英)(長)含むがやや精良
1065	B, C 12 排土	須恵	鍋		A	灰	堅	(口)一部		

その他の土師器　(本文161頁, 図版111)

1066	D 12 (9) 1, 2 層	土師	椀 B	口14.9 底 6.3 高 5.3	英, 長細礫	明褐	堅	4/5	ロクロ, 底外回転糸切り	胎土はA, 須恵器窯焼成？狼沢2号窯に類例あり
1067	B 13 (13, 14, 17, 18)	土師	椀 B	底 5.6	英, 長細礫	淡褐	堅	底部全存	ロクロ, 底外回転糸切り	甕の可能性, 底外にヘラ記号「×」
1068	D 12 (9) 1, 2 層	土師	椀 B	底 4.8	英, 長雲(細)細礫	茶褐	堅	底部全存	ロクロ, 底外回転糸切り	体部外面にヘラ記号「×」
1069	D 11 (24)	土師	椀 B	口12.8 底 4.8 高 3.6	英, 長細礫	茶褐	堅	1/3	ロクロ, 底外糸切り(静止の可能性)	体部外面の一部にスス
1070	B 13 (4) 2 層, B 12 (25) 2 層	土師	椀 B	口12.2 底 4.7 高 3.8	長雲(細)細礫	淡褐	普通	1/3	ロクロ, 底外回転糸切り	胎土精良
1071		土師	椀 B	口11.8 底 4.3 高 3.6	長小礫細礫海針	淡褐	軟	1/4	ロクロ, 底外回転糸切り	
1072	E 12 (1) 1, 2 層	土師	椀	底10.2	英, 長細礫	(内)黒褐(外)淡褐	堅	1/6	内面ミガキ, 黒色処理	
1073	D 10 (5) 1, 2 層	土師	無台杯	口18.0	小礫細礫	赤褐	堅	1/10		内外面赤彩
1074	D 10 (4) 1, 2 層	土師	無台杯	底10.4	細礫	赤褐	堅	1/4	底外ロクロケズリ	内外面赤彩
1075	No. 2	土師	鉢	口12.4 底 9.0 高 8.2	英, 長雲(細)小礫	淡褐	堅	一部欠	非ロクロ	内面一部に炭化物, 外面一部にスス
1076	B 8 (24, 25)	土師	壺	肩19.0	英, 長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/8	ロクロ	
1077	A 10 (16) 表土, 試掘坑	土師	長甕B	口22.4 高35.1	英, 長雲(細)小礫	茶褐	堅	3/4	ロクロ	外面にスス

墨書土器　(本文162頁, 図版112)

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
1	A 9 (19) 1 層	須恵	有台杯	台 8.6	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	底部外面に墨書「大」
2	D 12 (1) 1, 2 層	須恵	有台杯	台10.6	C	灰	堅	2/3	底外ヘラ切り	底部外面に墨書, 文字不明
3	F 13 (8, 13, 14)	須恵	無台杯	底 7.8	B	灰	堅	1/6	底外ヘラ切り	底部外面に墨書, 文字不明
4	SI 280 1 層	須恵	無台杯							SI 280-406 に同じ
5	SI 15 No. 8, 3 層	須恵	無台杯							SI 15-496 に同じ
6	D 5 表土	須恵	有台杯	底 4.6	A	灰	堅	1/4	底外ヘラ切り	底部外面に墨書, 文字不明外面に自然釉
7	SI 15 覆土上層	須恵	無台杯							SI 15-493 に同じ
8	SI 802 カマド付近	須恵	無台杯							SI 802-852 に同じ
9	A 8 (18, 23) 2 層	須恵	無台杯	口(14.5)	A	灰	堅	1/8		口縁外面に重ね焼痕, 外面に墨書, 文字不明
10	SI 1315 南北アゼ 2 層	須恵	無台杯							SI 1315-274 に同じ
11	SI 440 No. 2, 南西コーナー	須恵	無台杯							SI 440-836 に同じ
12	SI 1500 No. 3, アゼ 3 層	須恵	無台杯							SI 1500-579 に同じ
13	SI 1500 No. 2, アゼ 3 層	須恵	無台杯							SI 1500-580 に同じ
14	SI 610 遺構上面	須恵	無台杯							SI 610-83 に同じ
15	SI 500 2 層	須恵	無台杯							SI 500-632 に同じ
16	SI 802 2 層, 3 層	須恵	無台杯							SI 802-851 に同じ
17	SI 4 No. 1	須恵	有台杯 X							SI 4-545 に同じ
18	SI 310 1 層	須恵	有台杯 C							SI 310-613 に同じ
19	SI 75 カマド上面	須恵	杯蓋							SI 75-417 に同じ
20	SI 1320 C区2, 2 層その他	須恵	無台杯							SI 1320-724 に同じ
21	SI 339 3 層	須恵	無台杯							SI 339-434 に同じ

土製品（本文165頁，図版113）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
1	SI 1000 カマド一括，No.6 カマドアゼ	土製品	土管	底11.6	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	ロクロ	体部外面一部ススス
2	SI 1000 カマド西一括	土製品	土管	口11.0	英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	
3	B 9 (12) 1，2層	土製品	土管	器11.5	英，長小礫	淡褐	堅	1/3	ロクロ	
4	D11 (21, 22) D12 (1,2) 1,2層	土製品	土管	口12.0	英，長雲(細)中礫小礫	淡褐	堅	1/2	非ロクロ	
5	C 7区 1，2層	土製品	土管	底12.1	英，長細礫	淡褐	普通	1/4	ロクロ	
6	D 9区排土	土製品	特殊土管	口 8.4	長細礫	淡褐	堅	1/5	ロクロ	
7	SI 1320 C区2，3層	土製品	支脚		英雲(細)細礫	淡褐	堅			
8	SI 1124 南北ベルト	土製品	支脚	底 4.2	英雲(細)細礫	茶褐	堅			
9	C11 (7)，2層	土製品	支脚？	底 8.4	英，長細礫	茶褐	堅	1/3	底外木葉痕	
10	SI 280 2層	土製品	紡錘車		英雲(細)	淡褐	堅	一部欠		
11	A 3 (17, 18) 2, 3層	土製品	紡錘車		英雲(細)細礫	淡褐	普通	1/2		
12	SK 1022 上層	土製品	紡錘車		英，長雲(細)小礫	淡褐	堅	1/4	外面上部にスス	
13	C10(25) 2層	土製品	鍛冶関連		長小礫	茶褐	堅	完形		須恵質，内面にさび，外面に製鉄の際の溶解鉄が付着
14	D 7排土	土製品			英雲(細)	淡褐	堅	1/2		
15	D10 (2) 1，2層	土製品			英雲(細)小礫	淡褐	堅	完形		左右対応する2点に突起がある

土　錘（本文166頁，図版116）

番号	地　点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存	手　法	備　考
1	SI 1167 東西トレンチ3層	土製品	土錘	長 7.0 径 4.7 重155g	英小礫	淡褐	堅	完形		
2	排土	土製品	土錘	長 5.4 径 4.1 重115g	英小礫細礫	明褐	堅	完形		
3	SI 41	土製品	土錘	長 2.6 径 3.4 重 28g	雲(細)細礫	茶褐	堅	完形		
4	SI 41 3層	土製品	土錘	長 2.8 径 3.0 重 25g	雲(細)細礫	茶褐	堅	完形		
5	E10, 2層	土製品	土錘	長 3.3 径 2.9 重 30g	英細礫	茶褐	堅	完形		
6	F10トレンチ	土製品	土錘	長 2.8 径 3.0 重 24g	細礫	茶褐	堅	完形		
7	F10トレンチ	土製品	土錘	長 2.5 径 2.8 重 15g	英細礫	茶褐	堅	完形		
8	表採	土製品	土錘	長 4.4 径 1.5 重 9g	細礫	淡褐	堅	完形		
9	A12	土製品	土錘	長 4.3 径 1.3 重 6g	細礫	淡褐	堅	完形		
10	表採	土製品	土錘	径 1.7 重 9g	細礫	茶褐	堅	一部欠		
11	B 8 (22) 2層	土製品	土錘	径 1.6 重 8g	英，長	灰	堅	一部欠		須恵質，外面に自然釉
12		土製品	土錘	長 4.3 径 1.3 重 7g	細礫	淡褐	堅	完形		
13	SI 402 カマドNo.5	土製品	土錘	長 4.7 径 1.0 重 4g	細礫	淡褐	普通	完形	外面ヘラミガキ	
14	SI 435 4層	土製品	土錘	径 1.0 重 4g	細礫	暗褐	堅	一部欠		
15	828カクラン	土製品	土錘	長 3.3 径 1.3 重 5g	英細礫	淡褐	堅	完形		
16	SI 435	土製品	土錘	長 3.3 径 1.1 重4.5g	細礫	淡褐	堅	完形		
17	SI 435 3層	土製品	土錘	径 1.2 重 5g	英雲(細)細礫	淡褐	堅	一部欠		
18	SI 435 南北トレンチ	土製品	土錘	径 1.3 重 4g	雲(細)細礫	淡褐	堅	一部欠		
19	SI 401	土製品	土錘	径 1.0 重 2g	細礫	淡褐	堅	一部欠	外面ヘラミガキ	

遺構別索引

1）索引の順番は種別にかかわらず遺構番号による。
2）ここにかかげた項目は遺構とそれより出土した遺物に関係する箇所を示す。
3）実測図と写真は図版番号，説明と観察表は本文の頁である。

遺構	位置	遺構			遺物			
		実測図	説明	写真	実測図	説明	観察表	写真
SI 1	A2	3・12	48	131	93	142	263	179・205 217・219 222
SI 4	A3	3・12	49	129	87・88	136	260	178・185 204・216 222・224 225
SI 5	A3	3・12	49	129	55	111	246	177・188 189・222
SI 6	B3	3・13	50	132 133	86・87	135	259	177・203
SI 7	A4	3・14	51	134	83・84	132	258	177・185 202・218 223・224
SI 8	B3	3・13	50	133	75・76	126	255	177・183 187・198
SI 9	B3	3・13	50	133	107	157	271	213
SI 10	B2・3	3・13	51	133	92	141	262	178・205 217
SI 11	C・D 4・5	4・15	52	134	85	135	259	178・200 219
SI 12	D・E 4・5	4・15	52	136	65	118	250	177・190 218
SI 14	C・D6	4・17	54	138	78・79	128	256	177・199 219・226
SI 15	D5・6	4・17	54	139	85	134	259	178・200 216・223 225
SI 16	E6・7	4・22	58	128	107	156	270	214
SI 17	D6・7	4・22	58	147	89	138	260	178・184 201・218
SI 18	D・E8	7・24	61	151	106	155	270	211
SI 20	F8	7・24	60	150 151	77・78	128	255	184・191 223
SK 24	E8	7・29	67					
SI 27	C・D8	6・23	60	149	70	124	253	194
SI 29	D・E9	6・28	65		105	154	269	177・211
SK 31	E・F10	7・28	65					
SK 32	E9	7	78		109	159	271	214
SI 33A	E9	7・29	65	153 155	91	140	262	205
SI 33B	E9	7・29	66	153	91	140	262	205
SK 34	D8	7・24	61	151	109	159	271	214
SK 39	E9	7・29	66		108	158	271	181・214 217

遺構	位置	遺構			遺物			
		実測図	説明	写真	実測図	説明	観察表	写真
SI 41	E9	7・29	66	153 155	92	141	262	179・205 220
SI 42	E9・10	7・29	66	153	106	155	270	213
SI 60	E9・10	7・29	66	155	90	139	261	178・187 204・216
SI 70	D・E10	7・31	68	157	48	90	243	171～174 176
SI 71	D10	6・31	68	157	51・59	90 114	245 248	171・174 182・189
SI 72	D9	6・27	64	154	76・77	127	255	177・187 197・220
SI 74	D9	6・27	64					
SI 75	C・D9	6・27	63		81	130	257	177・200 225
SI 80	D・E9	6・28	65	155	107	157	270	213
SI 81	D9	6・28	65	155				
SI 82	D9	6・28	64	155	107	158	271	181
SB 85	D・E10	6・31	69					
SB 97	D9	6・27	64					
SI 98	D8	6・23	60	148 159				
SB 100	D・E9	7・28	65					
SK 102 (106)	E11 (25)	10・42	77		108	158	271	214
SK 103	E12	10・42	77					
SK 108 (107)	E11 (20)	10・42	77		52	91	245	173・176
SB 109	E10・11	7・40	75					
SB 110	E11・12	9・39	75	166				
SK 113	E12(5)	10・42	77	163				
SI 115	E12	9・39	74	167	52・56 57	90 111	245 247	171・174 177・181 188・221 223・224
SB 252	D8	6・22	59	148				
SB 262	D7	4・22	59					
SI 263	D7	4・22	59	148 159	53	91	246	172

遺構	位置	遺構			遺物			
		実測図	説明	写真	実測図	説明	観察表	写真
SI 280	D6	4・17	54	140 163	80	130	256	177・183 198・225
SI 299	C5	4・15	52	136 138	95	144	264	179・207
SB 309	A4	3・14	52					
SI 310	B4	3・14	51	135	91	140	261	179・203 225
SK 311	A4(5)	3・42	76					
SI 314	B4	3・14	51	135	71	124	253	187・195
SI 325	A5	3・15	52	136	106	156	270	213
SI 336	A6	5・16	53	137	58	113	247	189
SI 339	B6	5・16	53	137	82	131	257	201・220 225
SK 340	B6	5・16	54	138	109	159	272	
SB 355	D6	4・17	54	141				
SI 360	B5・6	5・16	53	137	93	142	263	179・206
SI 401	C8	5・21	58	145	95	144	264	179・207
SI 402	C7	5・21	57	145	53	91	246	174
SI 429	B・C7	5・20	56	144 149	72	124	253	196
SI 435	B7	5・19	56	143	100	150	267	210
SI 439	B7	5・19	56		53	91	245	172・176
SI 440	B7・8	5・19	56	141 145	101	150	267	180・186 210・222 224・225
SI 458	B8	5・25	62	160	74	126	254	177・197
SI 462	C8	5・21	58	143 146	62・63	116	249	181・192 222
SI 483	C8	5・21	58	146				
SI 500	C9	6・23	60	149	92	141	262	205・225
SI 502A	C9・10	6・31	69	158	47・48	87	243	171～174 176
SI 502B	C9・10	6・31	69	158	66	119	250	191・224
SI 560	B9	8・25	62	152 153	73	125	254	177・185

遺構	位置	遺構			遺物			
		実測図	説明	写真	実測図	説明	観察表	写真
SB 570	C10	6・33	70	166				
SI 595	B10	8・31	68		54	92	246	173
SI 600	B11	8・32	70	162	61	115	249	190
SB 604	A・B 13・14	11・35	72					
SI 610	B 10/11	8・32	69	162	60・61	115	248	181・187 221・225
SK 621	B11 (14)	8・42	77					
SI 630	B11	8・32	70	162	61	115	249	187・194
SI 640	C・D8	6・23	59	149	58	114	248	190
SI 650	C8	6・23	59		53・90	91 140	246 261	172・178 200
SI 660	C8	6・23	59		53	91	246	174
SI 670	C9	6・27	63		107	157	270	213
SB 730	D12	9・38	74		109	160	272	215
SI 741	C11	11・32	70	160	63・64	117	250	177・182 191・220 221・223
SI 752	D11	9・37	73	159	68	121	251	177・194 216・222
SI 753	D 11/12	9・37	73		98	147	265	179・207 217・218 221
SB 770	C11	9・33	71					
SB 790	D 11/12	9・37	73		109	160	272	215
SX 795	C・D11	9・43	78	159	50	90	244	171・176
SI 802	B8・9	8・26	63	153	102	151	267	180・211 217・225
SI 803	B8・9	8・26	62	153	74	126	254	177・198
SI 804	B9	8・26	63	153	57	113	247	188
SI 805	B9	8・25	61	153	106	155	270	180・186 213
SI 806	B・C9	8・26	63	153	67	120	251	193
SI 807	B9	8・26	63	153	57	113	247	189

遺構	位置	遺構			遺物			
		実測図	説明	写真	実測図	説明	観察表	写真
SI 840	B・C7	5・20	57	144	101	151	267	180・207
SI 850	C7	4・21	57	144 146	99	148	266	179・186 209・216 220
SB 870	B・C7	5・20	57	144				
SI 1000 (SK 701)	D10・11	9・34	71	161 162	68・69	122	252	177・195 216
SI 1010	D10	9・34	71	161	52	91	245	172・175
SK 1022	C11 (5)	9・42	77	155 159	108	158	271	214
SI 1100	A3	3・12	49	130 131	94	143	263	179・206
SI 1101	A3	3・12	49	130 131	95	144	264	179・186 206・221
SI 1124	C11・12	9・36	72	165	51	89	244	171・172 175
SB 1161	C・D12	9・38	74	165				
SB 1162	C・D 12・13	9・36	73					
SB 1165	C12・13	9・36	73					
SI 1166	F12	10・41	76	168	106	154	269	210
SI 1167	F12	10・41	76	120 168	103 ～105	152	268	180・184 212・213 217
SI 1168	F12	10・41	76		50	88	244	171・172 175・176
SI 1169	F11	10・41	76	168	107	157	271	184
SI 1181	F11	10・41	76		107	157	271	181
SB 1199	D12	9・38	74					
SI 1200	B7	5・19	55					
SI 1201	A7	5・18	55	142	102	152	268	180・210 216
SI 1202	A7・8	5・18	55	142	100	149	266	180・210
SB 1229	A7	5・18	55	142				
SB 1241	A8	5・19	56	143				
SB 1280	A8	5・18	55	143				
SI 1281	A8	5・19	56					

遺構	位置	遺構			遺物			
		実測図	説明	写真	実測図	説明	観察表	写真
SI 1300	A10	8・30	67	155	72	125	254	196
SI 1302	A9	8・30	67	156	93	142	263	179・206
SI 1304	A9	8・30	67	156	107	157	270	181・213
SI 1307	A8・9	8・25	62	152	73	125	254	177・186 197
SI 1311	A11	8・30	67	156	61	115	249	190
SI 1312	A11	8・30	68	156	58	114	248	189
SI 1313	B11	11・30	68	156	107	156	270	181・213
SB 1314	A11	8・30	68	156				
SI 1315	A・B12	11・35	71	163	71	124	253	196・225
SI 1320	B13	11・35	72	163	96～98	145	264	179・208 209・224 225
SK 1337	B12	11・42	77	164	54	92	246	175
SB 1370	C12	11・36	72	164				
SK 1373	C13 (8)	11・36	78	165				
SK 1398	C12 (16)	11・42	77					
SB 1450	B・C 12・13	11・35	72	164				
SI 1460	F13	10・40	75	168	49・99	89 149	243 266	174・180 209
SI 1461	F13	10・40	75	168	70	123	253	183・194 219
SI 1471	F13	10・40	75		107	156	270	181・213
SI 1480	F13	10・40	75		49	89	243	171・173 174
SI 1500	F3	15	52	135	89	138	261	178・204 222・225
SB 1535	C13	9・36	73					
SB 1570	F8	7・24	61	166				

図　　版

凡　例

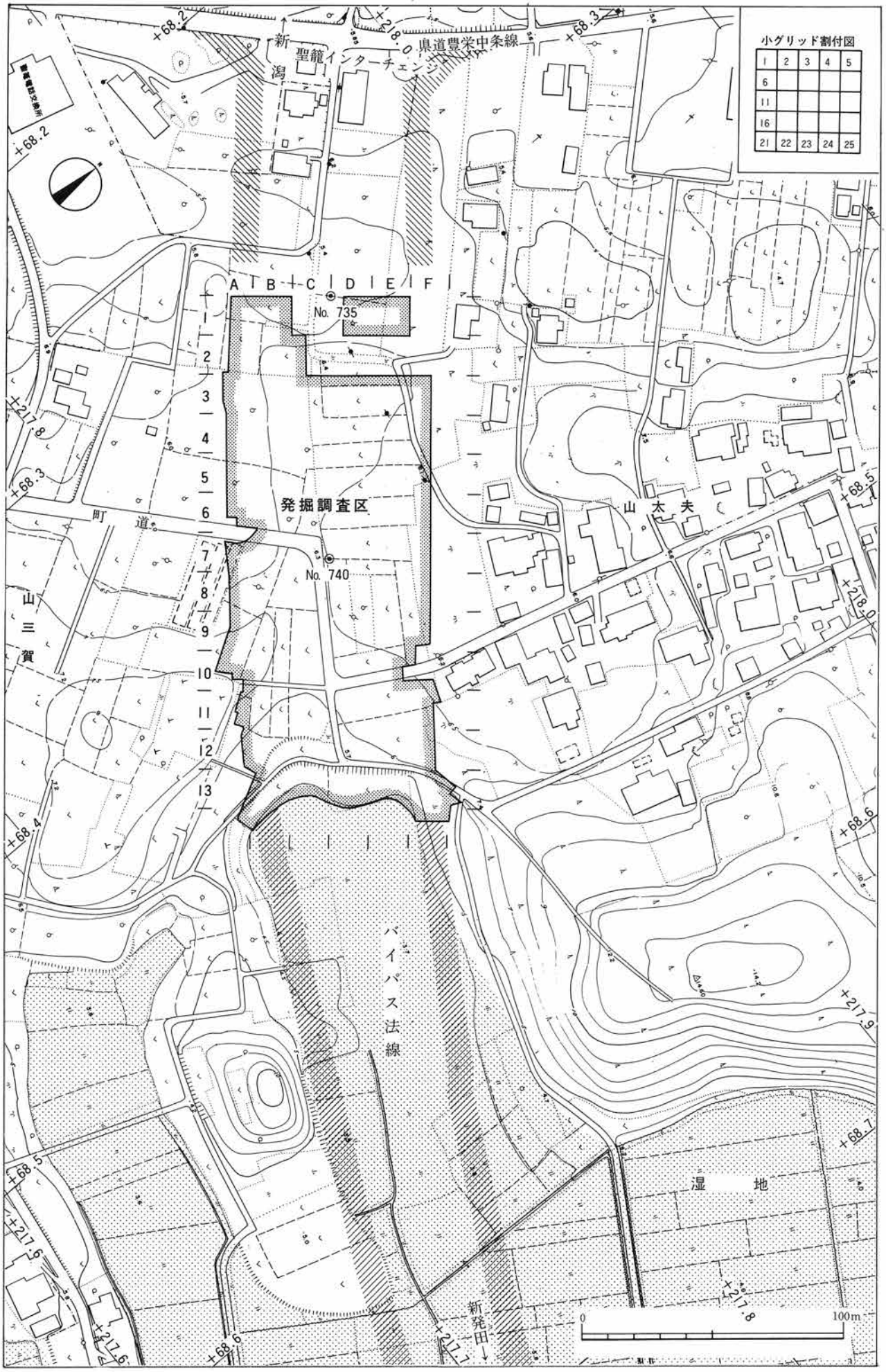
1．ここにはおもな遺構・遺物の実測図と写真をおさめた。

2．実測図については巻頭の凡例を参照されたい。また，遺構実測図については本文42・48頁，遺物実測図については本文106頁を参照されたい。

3．遺物の番号は縄文・弥生時代，古墳時代，奈良・平安時代の土器，墨書土器，土製品，金属製品，石製品ごとに通し番号を付し，写真にもその番号で示した。

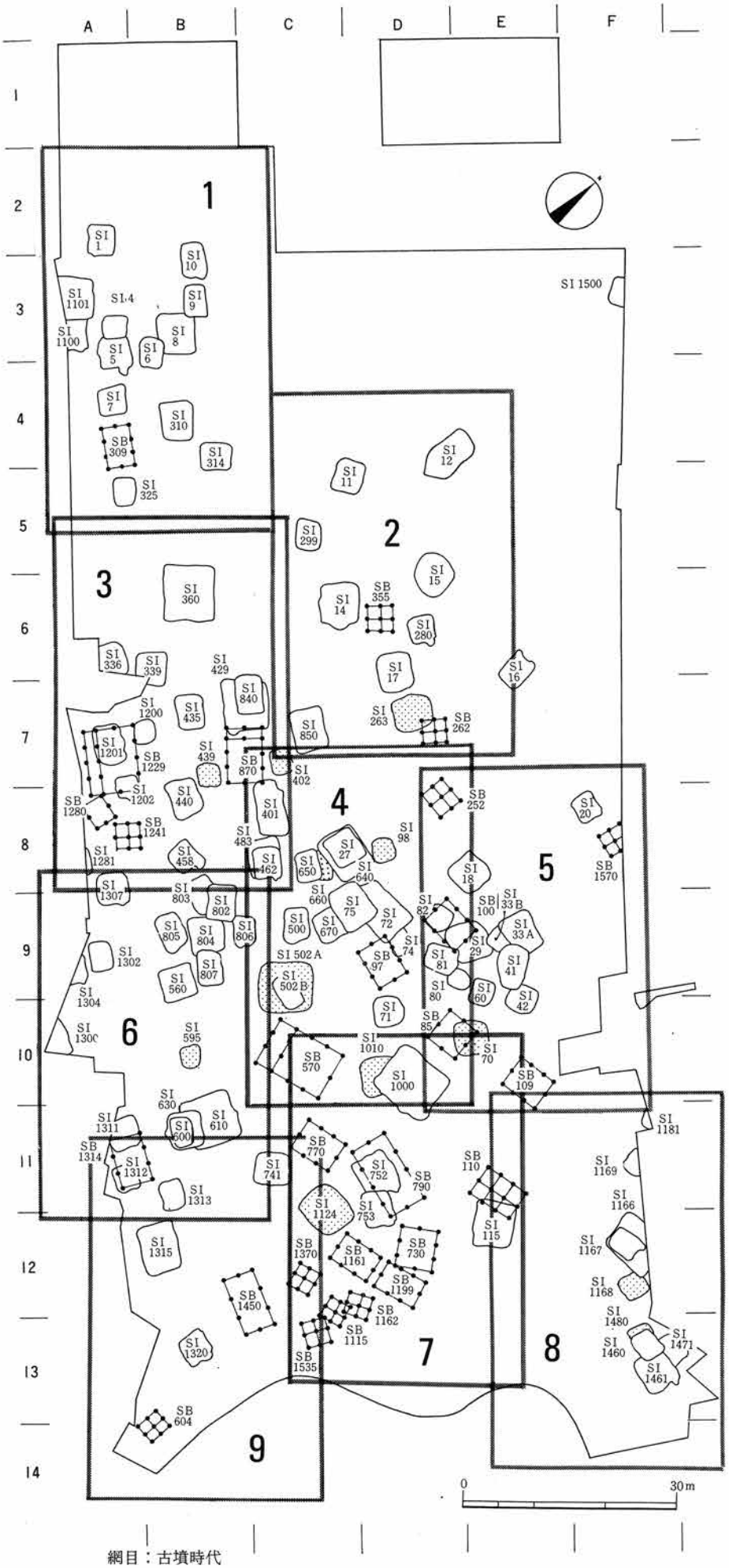
4．遺物写真の左下と土器右下の番号は遺物番号を示す。

5．遺構・遺物実測図の図版下の本文，観察表の頁はこれに関係する箇所を示す。



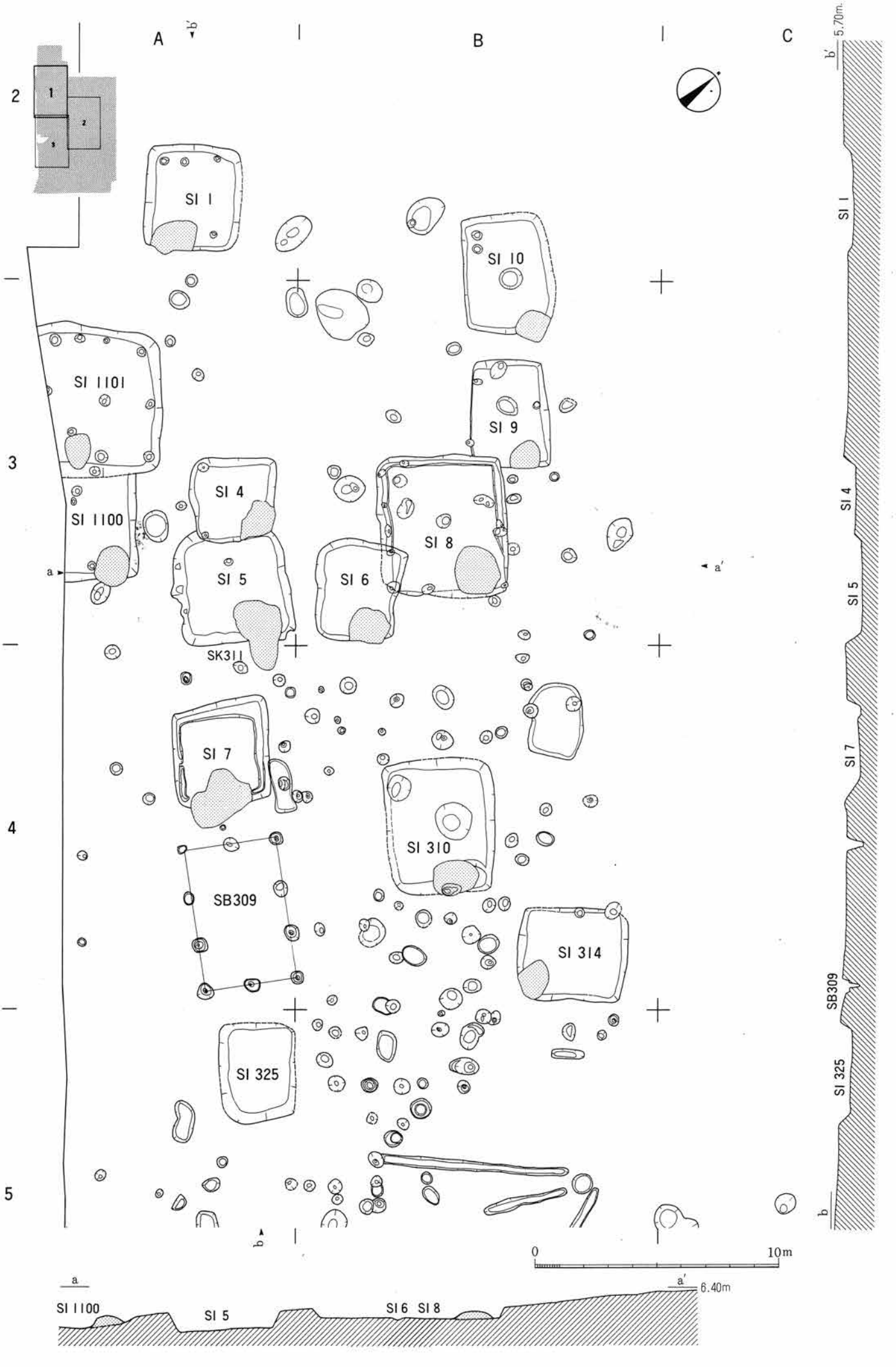
建設省北陸地建新潟国道工事事務所
1980年撮影・1983年測図　1：1000

遺構配置と遺構全体図（1～9）の割付図



網目：古墳時代

遺構全体実測図 I　1 : 200



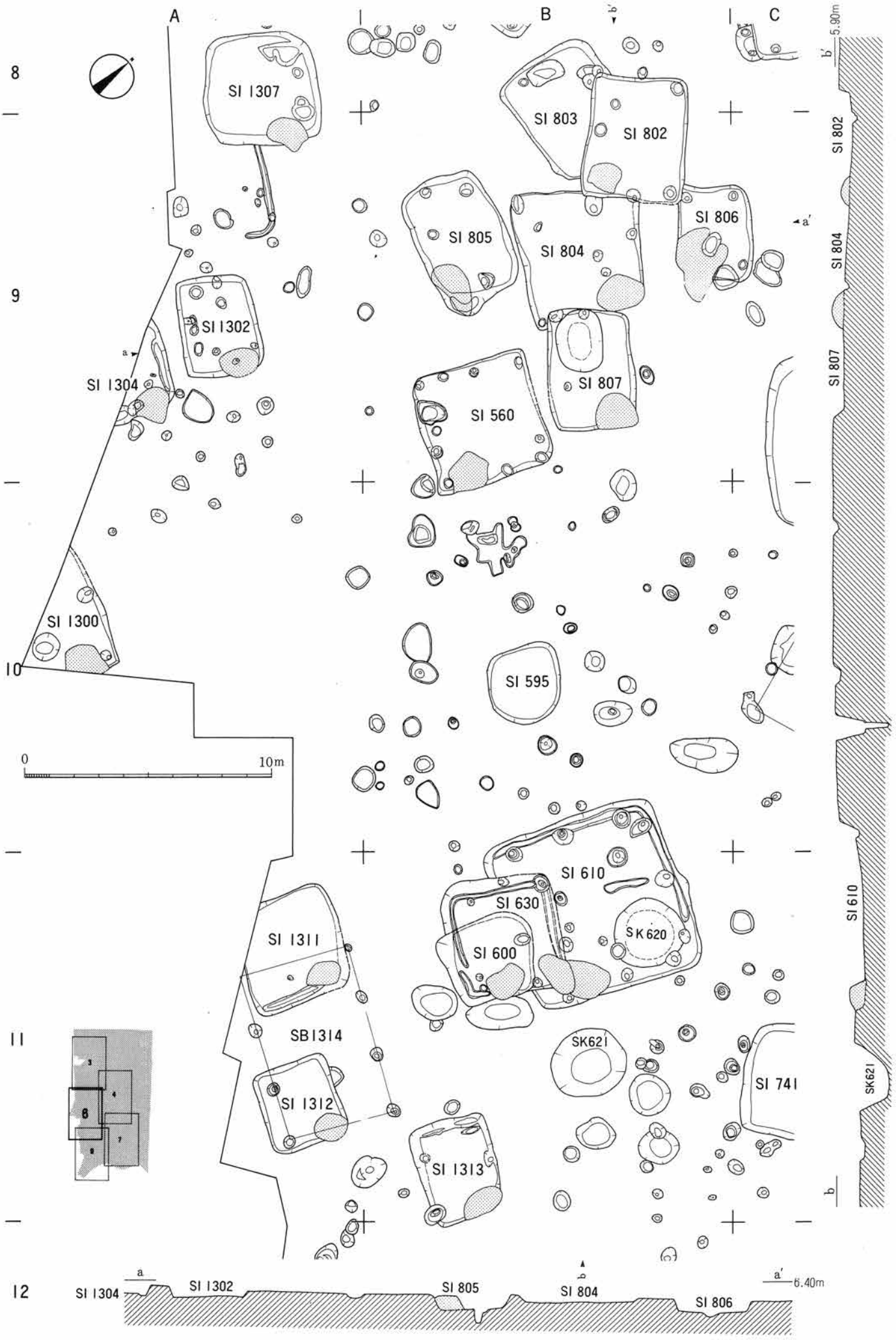
遺構全体実測図 2　1：200

遺構全体実測図 3　1：200

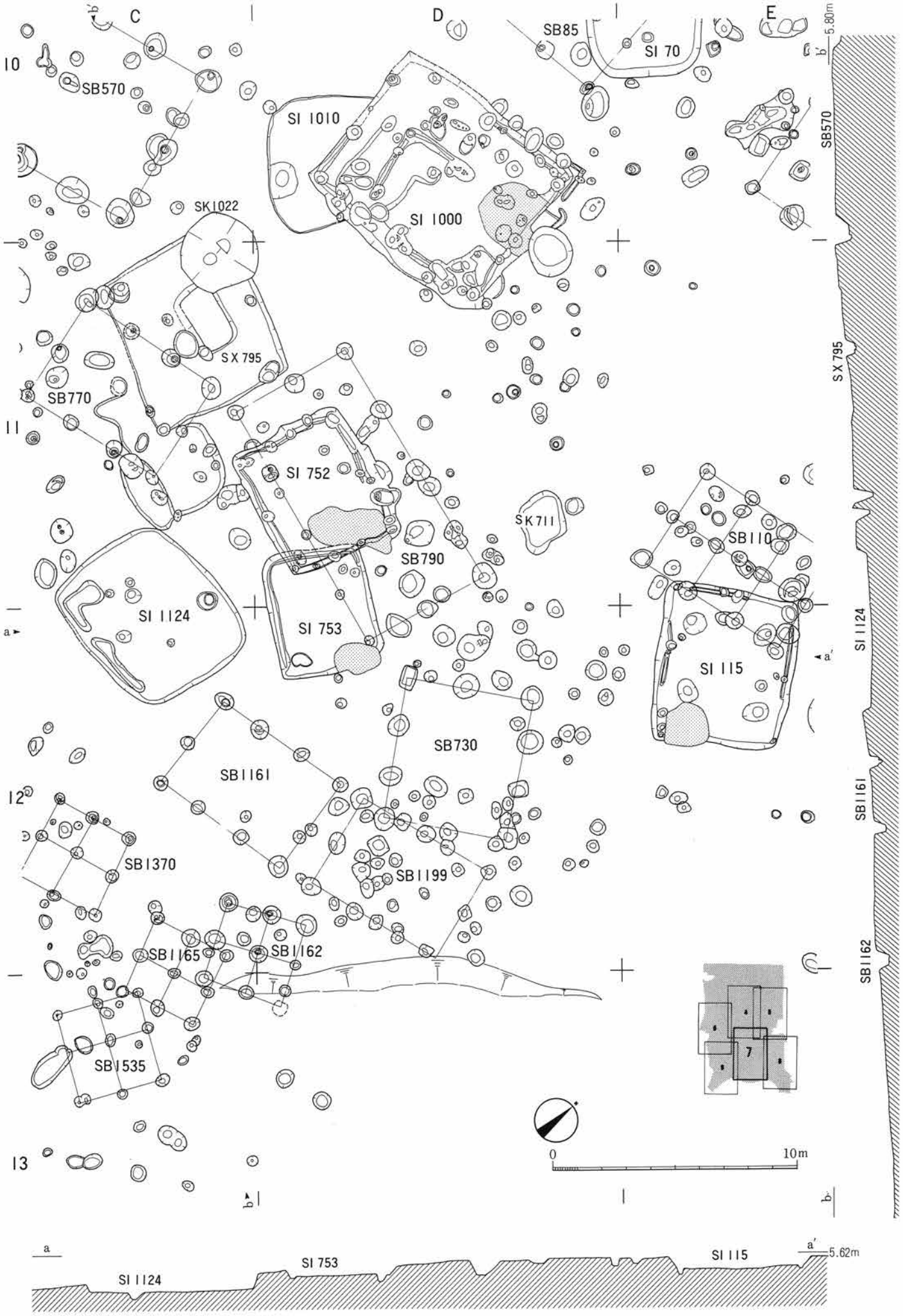
遺構全体実測図 4　1：200

D
E
F
7
8
9
10
11
SB252
SK24
SI 20
SB1570
SK34
SI 18
SK32
SB100
SI 82
SI 33A
SI 33B
SK39
SI 29
SI 81
SI 41
SI 80
SI 60
SI 42
SK31
SB85
SI 70
SI 1000
SB109
a
a'
b
b'
6.10m
5.60m
0
10m
SI 33A
SI 41
SI 42
SB109
SI 81
SI 29
SI 33B
SI 33A

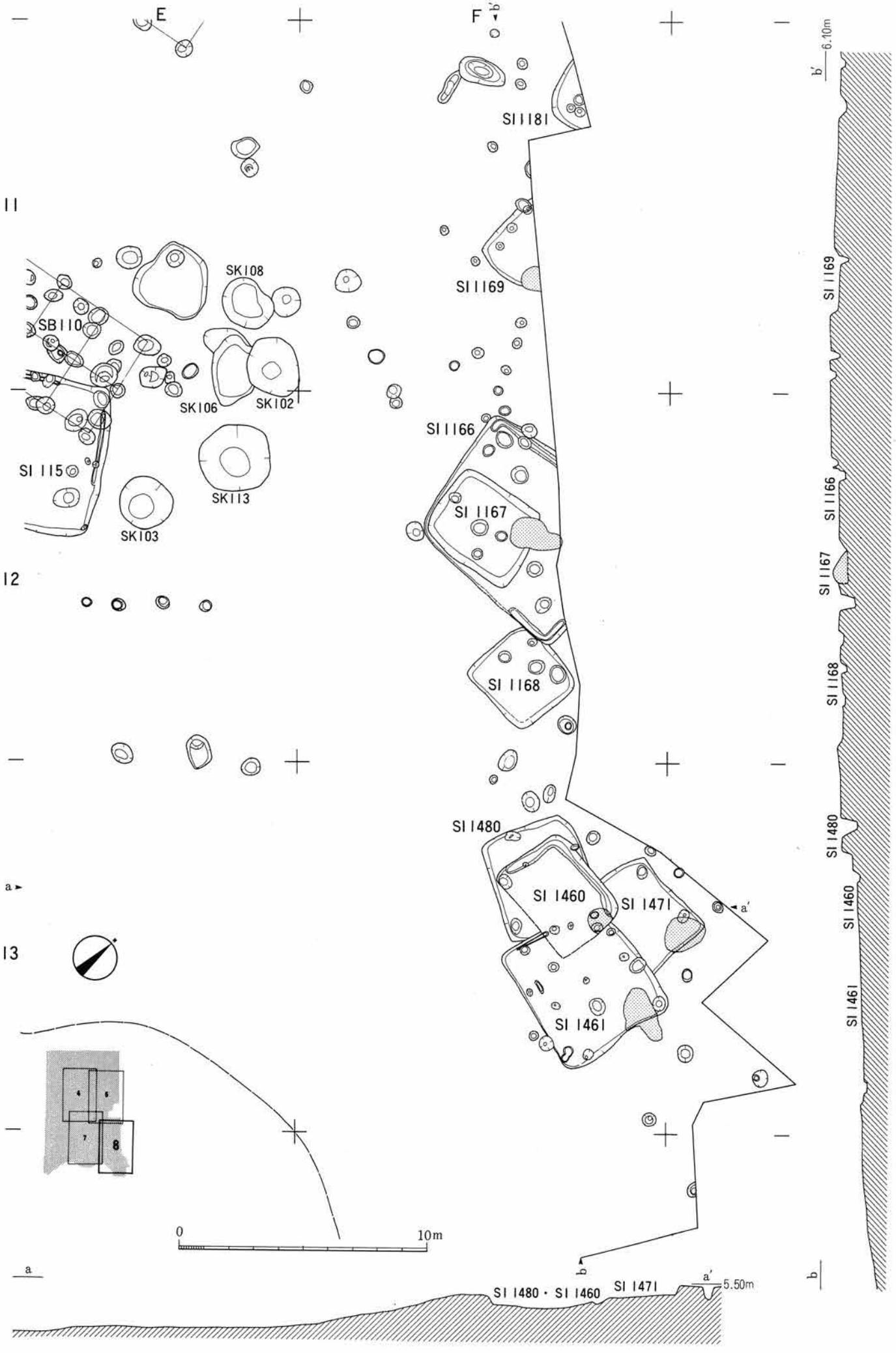
遺構全体実測図 6　1：200



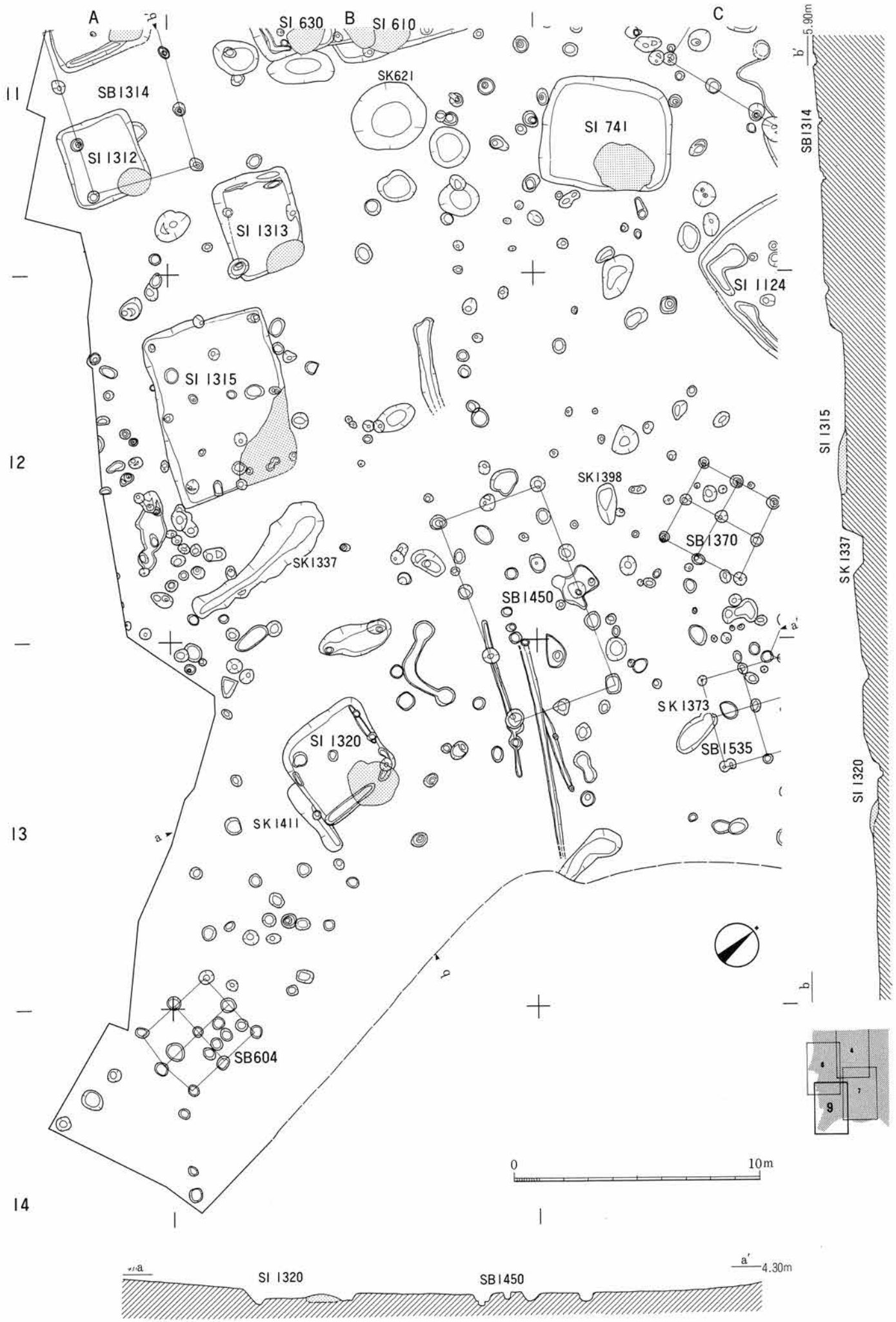
遺構全体実測図 7　1：200



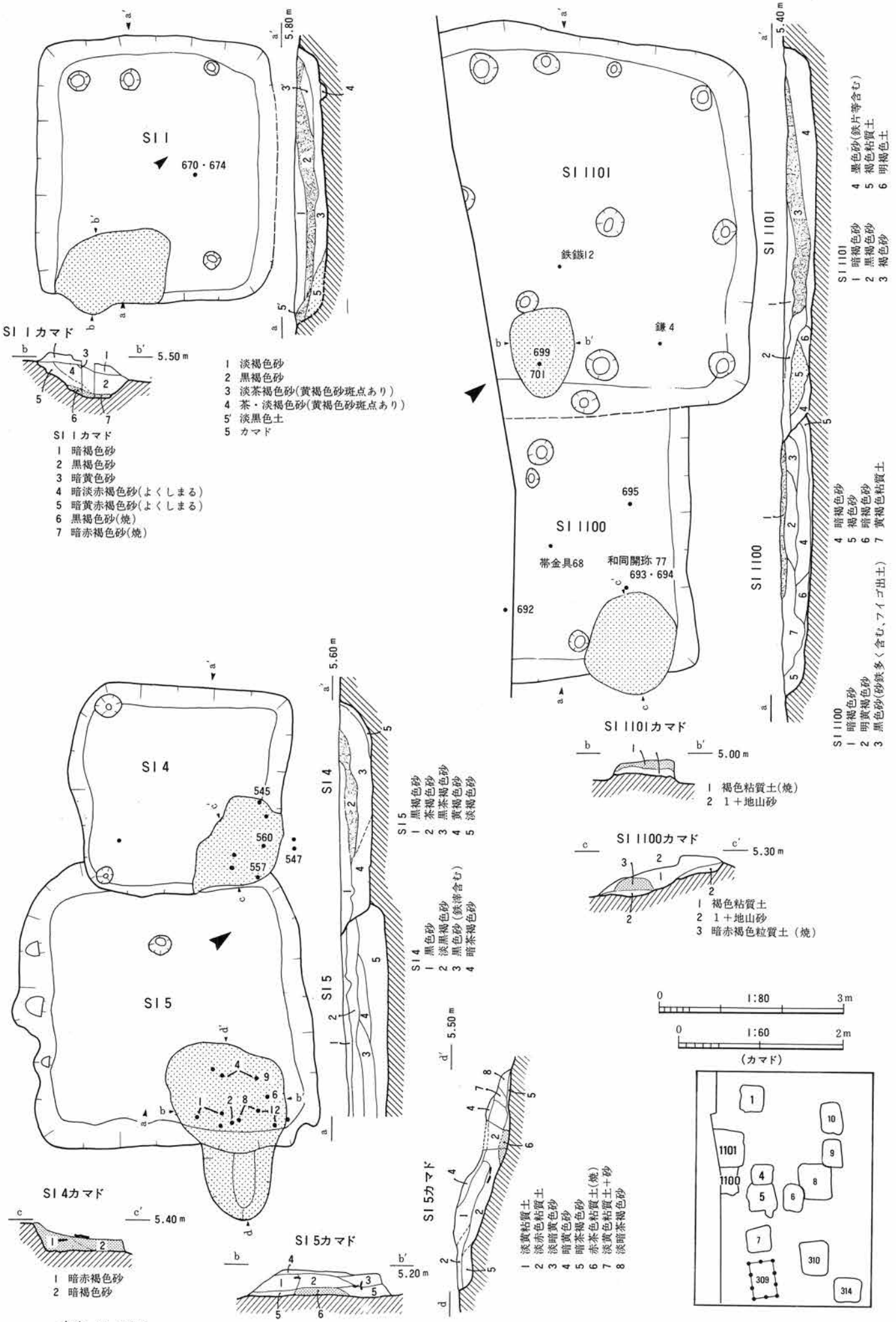
遺構全体実測図 8　1：200



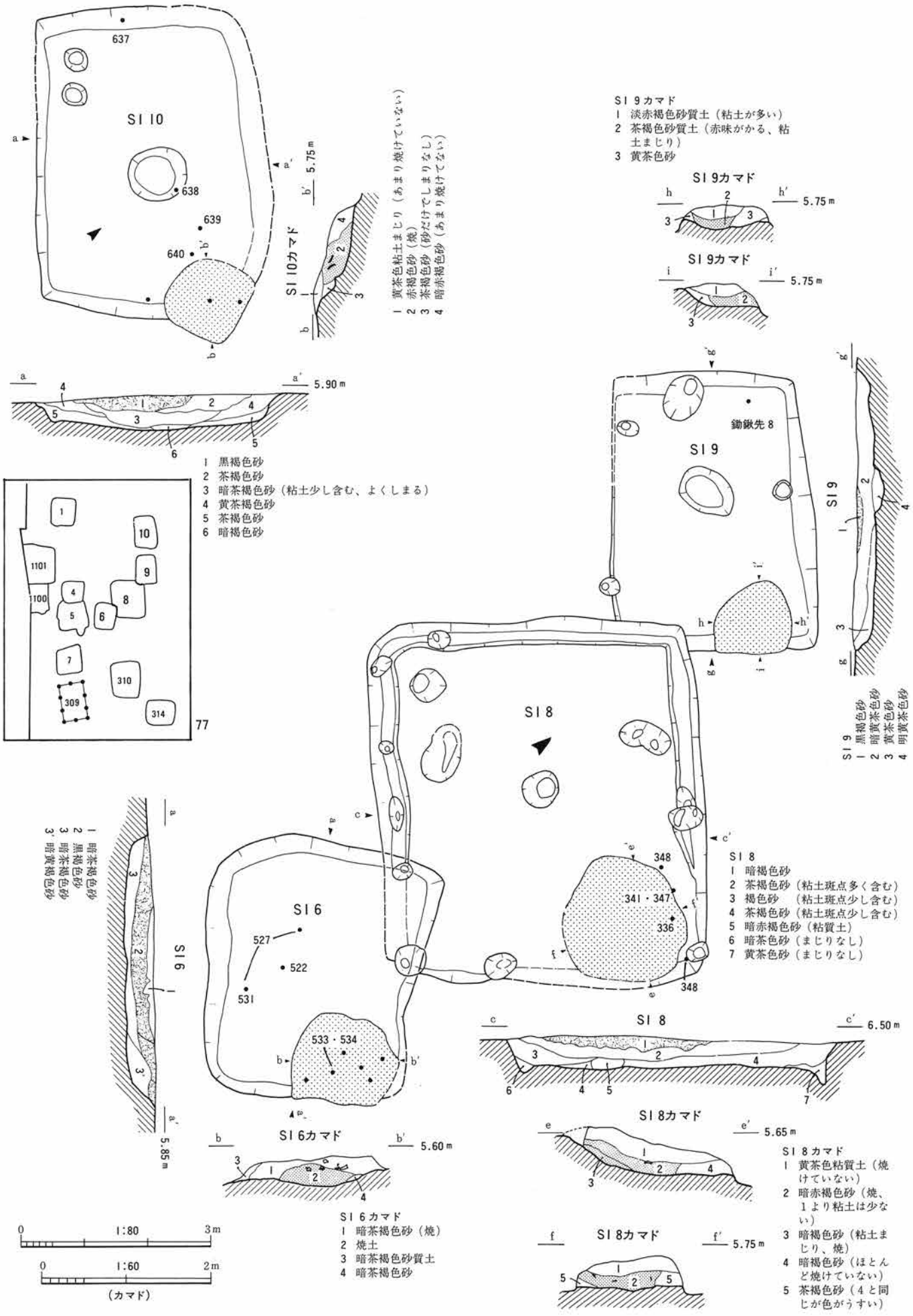
遺構全体実測図 9　1：200



遺構個別実測図 1　1:80　SI 1、SI 4、SI 5、SI 1100、SI 1101

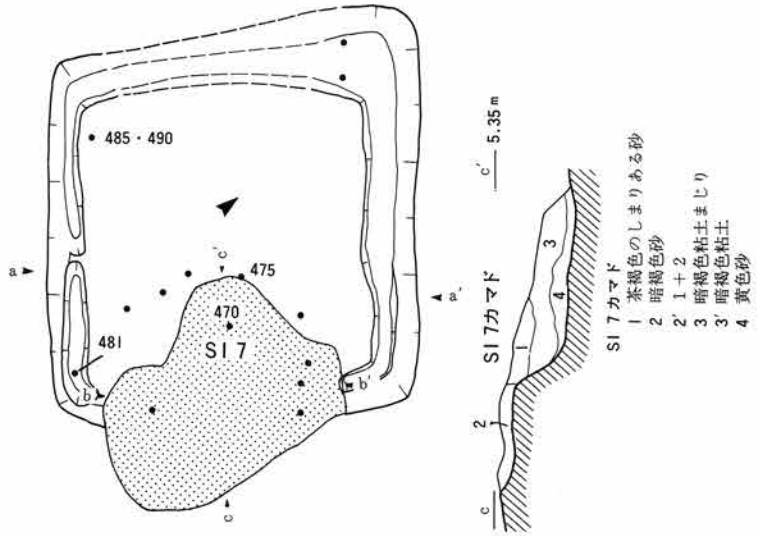


本文 48～50頁

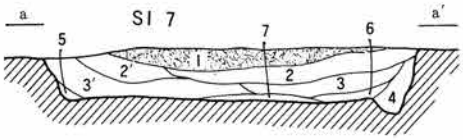

SI10
637
638
639
640
SI10カマド
1 黄茶色粘土まじり（あまり焼けていない）
2 赤褐色砂（焼）
3 茶褐色砂（砂だけでしまりなし）
4 暗赤褐色砂（あまり焼けてない）
5.75m
5.90m
1 黒褐色砂
2 茶褐色砂
3 暗茶褐色砂（粘土少し含む、よくしまる）
4 黄茶褐色砂
5 茶褐色砂
6 暗褐色砂
SI9カマド
1 淡赤褐色砂質土（粘土が多い）
2 茶褐色砂質土（赤味がかる、粘土まじり）
3 黄茶色砂
SI9
鋤鍬先8
SI9
1 黒褐色砂
2 暗黄茶色砂
3 黄茶色砂
4 明黄茶色砂
SI8
SI8
1 暗褐色砂
2 茶褐色砂（粘土斑点多く含む）
3 褐色砂　（粘土斑点少し含む）
4 茶褐色砂（粘土斑点少し含む）
5 暗赤褐色砂（粘質土）
6 暗茶色砂（まじりなし）
7 黄茶色砂（まじりなし）
348
341・347
336
SI8カマド
1 黄茶色粘質土（焼けていない）
2 暗赤褐色砂（焼、1より粘土は少ない）
3 暗褐色砂（粘土まじり、焼）
4 暗褐色砂（ほとんど焼けていない）
5 茶褐色砂（4と同じが色がうすい）
6.50m
5.65m
SI6
527
522
531
533・534
SI6
1 暗茶褐色砂
2 黒褐色砂
3 暗茶褐色砂
3' 暗茶褐色砂
5.85m
SI6カマド
1 暗茶褐色砂（焼）
2 焼土
3 暗茶褐色砂質土
4 暗茶褐色砂
5.60m
SI8カマド
5.75m
0　1:80　3m
0　1:60　2m
（カマド）

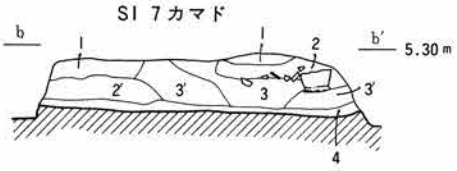
本文 50～51頁

遺構個別実測図 3　1:80　SI 7、SB 309、SI 310、SI 314

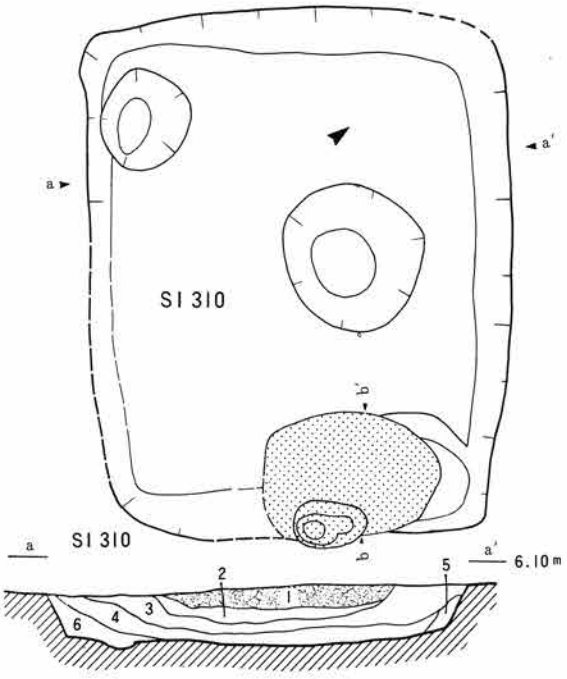


SI 7カマド
1 茶褐色のしまりある砂
2 暗褐色砂
2' 1＋2
3 暗褐色粘土まじり
3' 暗褐色粘土
4 黄色砂

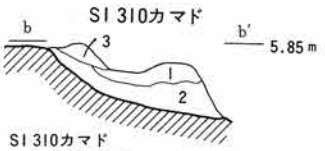




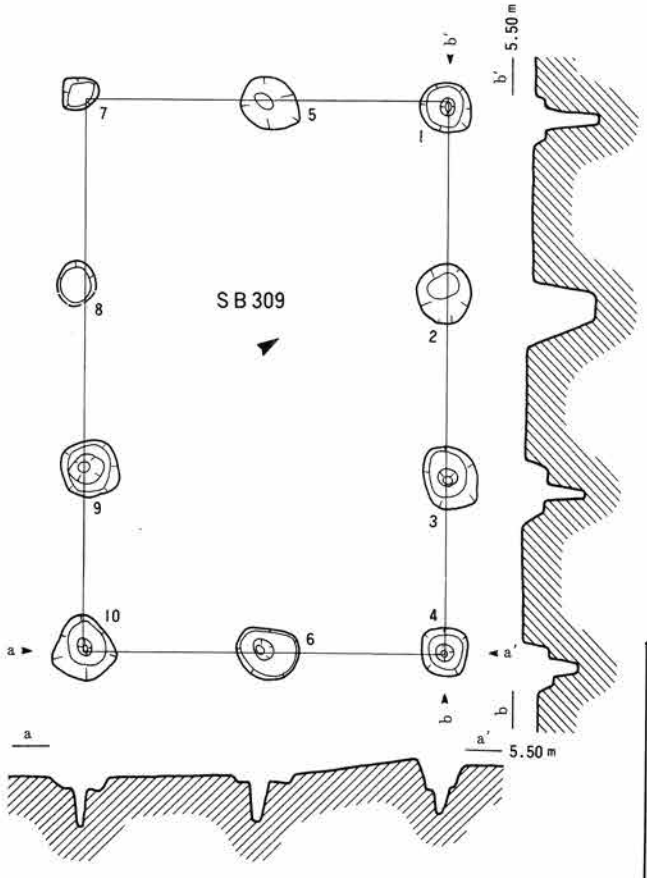
SI 7
1 黒褐色砂
2 黒灰褐色砂
3 黒褐色砂（かなりしまりあり1より黒味うすい）
3' 茶褐色砂（しまりあり、3より明るい）
4 暗茶褐色砂
5 黄茶褐色砂
6 暗褐色砂
7 淡茶褐色砂

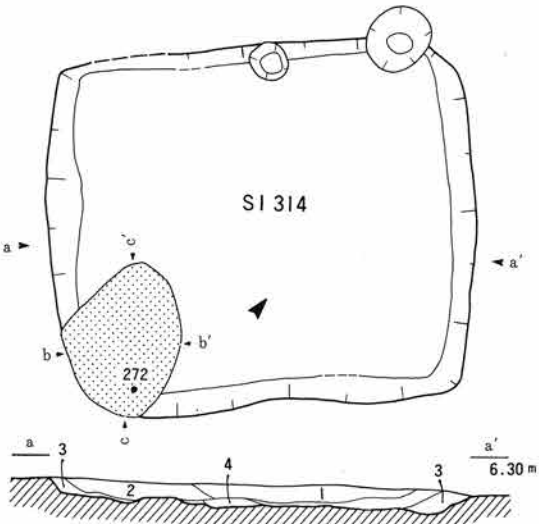


SI 310
1 黒褐色砂　4 黄灰色砂
2 暗褐色砂　5 黄褐色砂
3 黄灰色砂　6 茶褐色砂

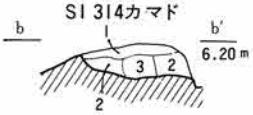


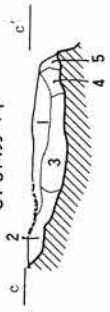
SI 310カマド
1 赤褐色砂（粘土を含む）
2 暗赤褐色砂
3 暗赤褐色砂

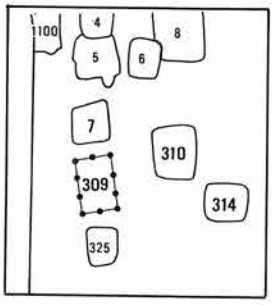




1 暗褐色砂
2 茶褐色砂（しまりなし）
3 淡茶褐色砂
4 黄茶色砂



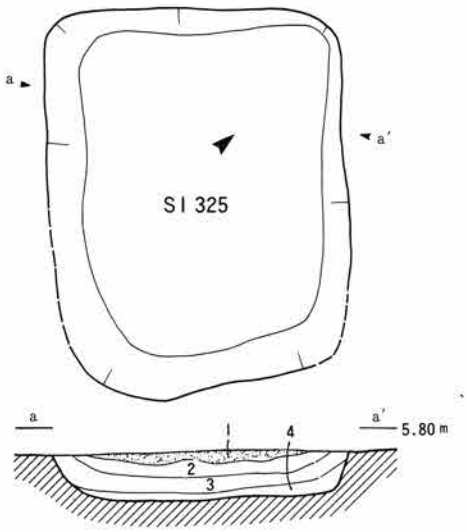




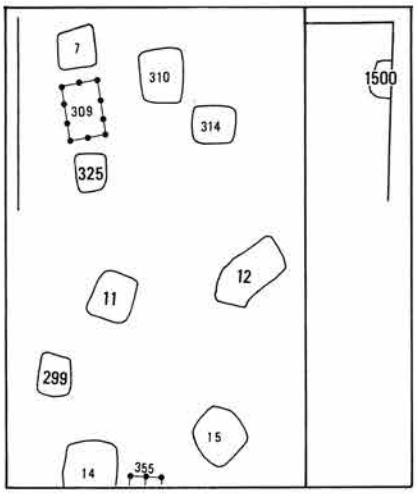
カマド
1 赤褐色粘質土
2 暗褐色砂（焼）
3 赤褐色砂（粘土を含む、焼）
4 暗褐色砂（やや焼けている）
5 暗褐色砂

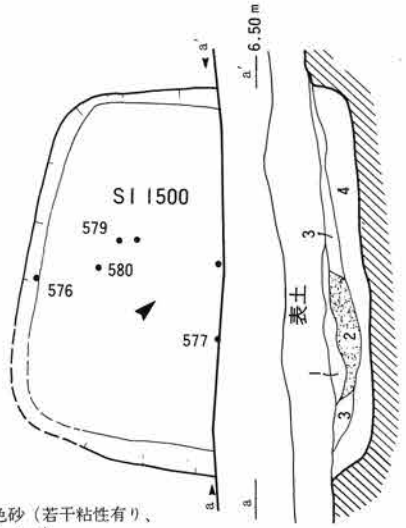
0　1:80　3m
0　1:60　2m
（カマド）

本文 51～52頁

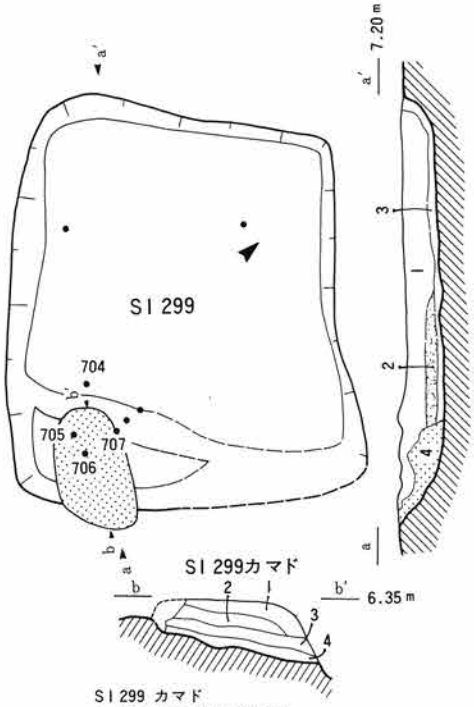


SI 325
1 黒褐色砂　3 暗茶褐色砂
2 暗褐色砂　4 黄茶色砂



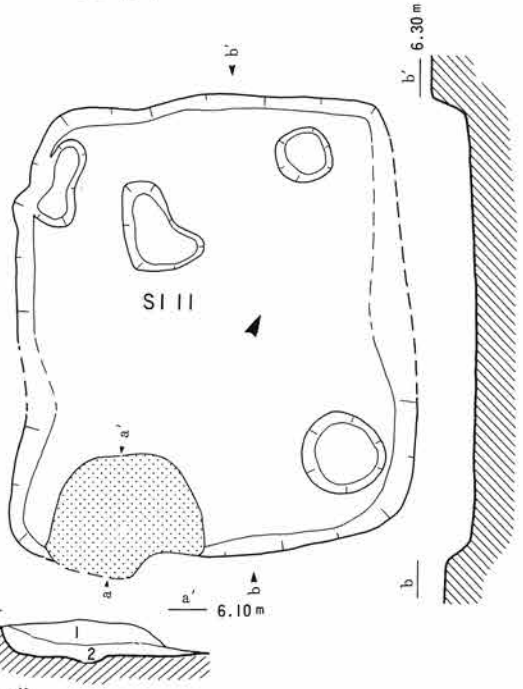


SI 1500
1 茶褐色砂（若干粘性有り、しまりあり）
2 黒褐色砂
3 淡暗褐褐色砂
4 褐色砂（黄褐色砂の斑点共に有り）

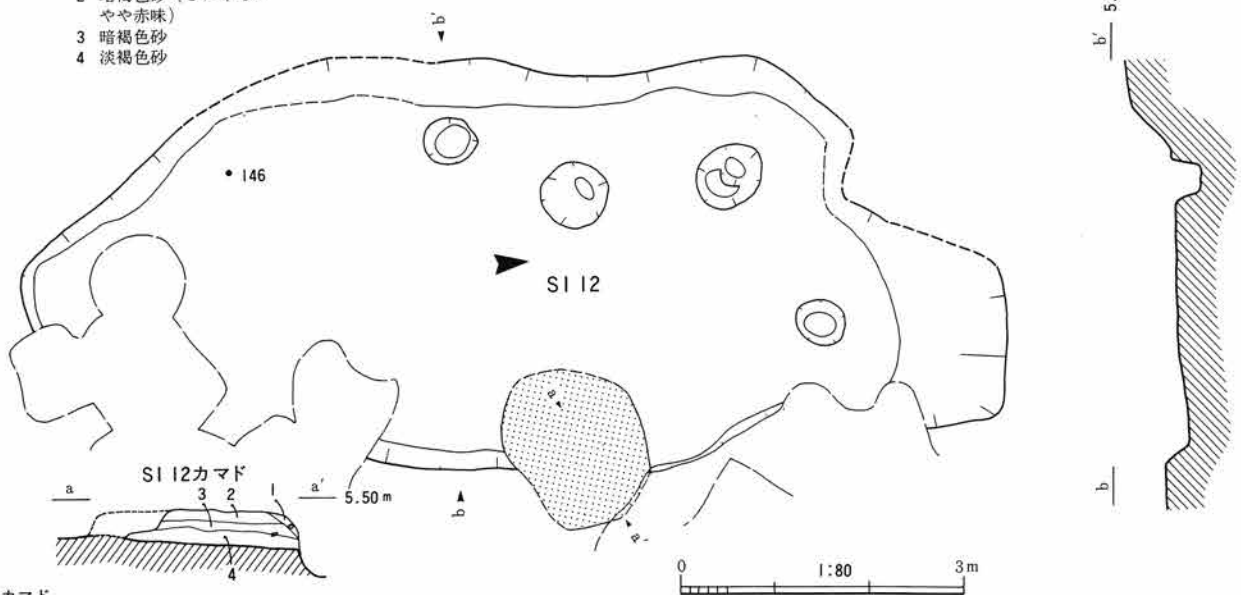


SI 299
1 暗～褐色砂
2 黒褐色砂
3 淡褐色砂
4 褐色粘土質（カマド）

SI 299 カマド
1 暗褐色砂（褐色砂斑状に含む）
2 暗褐色砂（3にくらべやや赤味）
3 暗褐色砂
4 淡褐色砂



SI 11カマド
1 赤茶褐色砂灰（粘性有りしまりよし）
2 明黄褐色砂＋暗褐色砂（しまりなし）

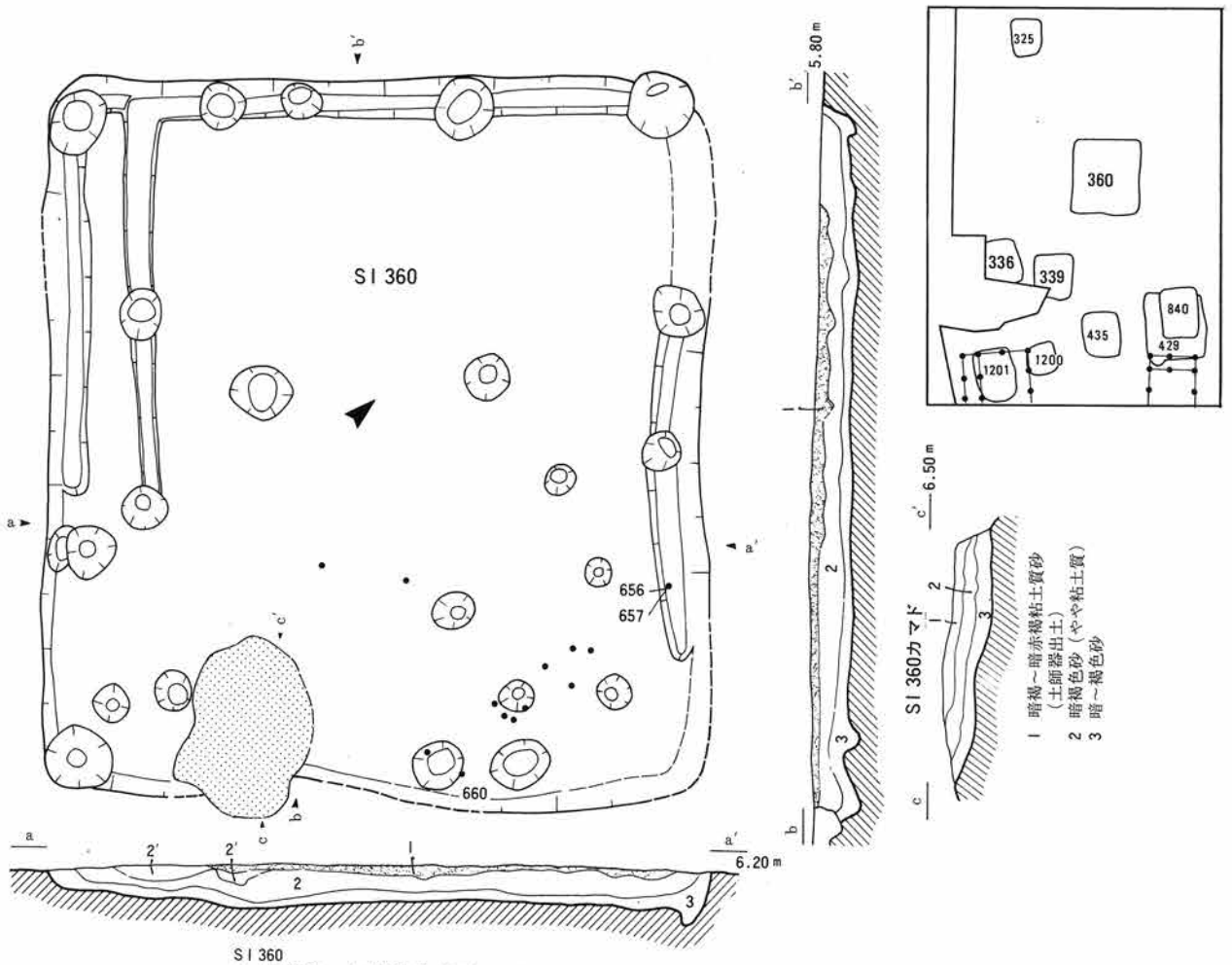


カマド
1 暗褐色粘質砂（黄褐色の斑点有り）
2 暗黄褐粘質砂（1より粘性が有り粒子最も細かい）
3 暗黄褐粘質砂（粘土無く粒子の大きい砂）
4 黄褐色砂

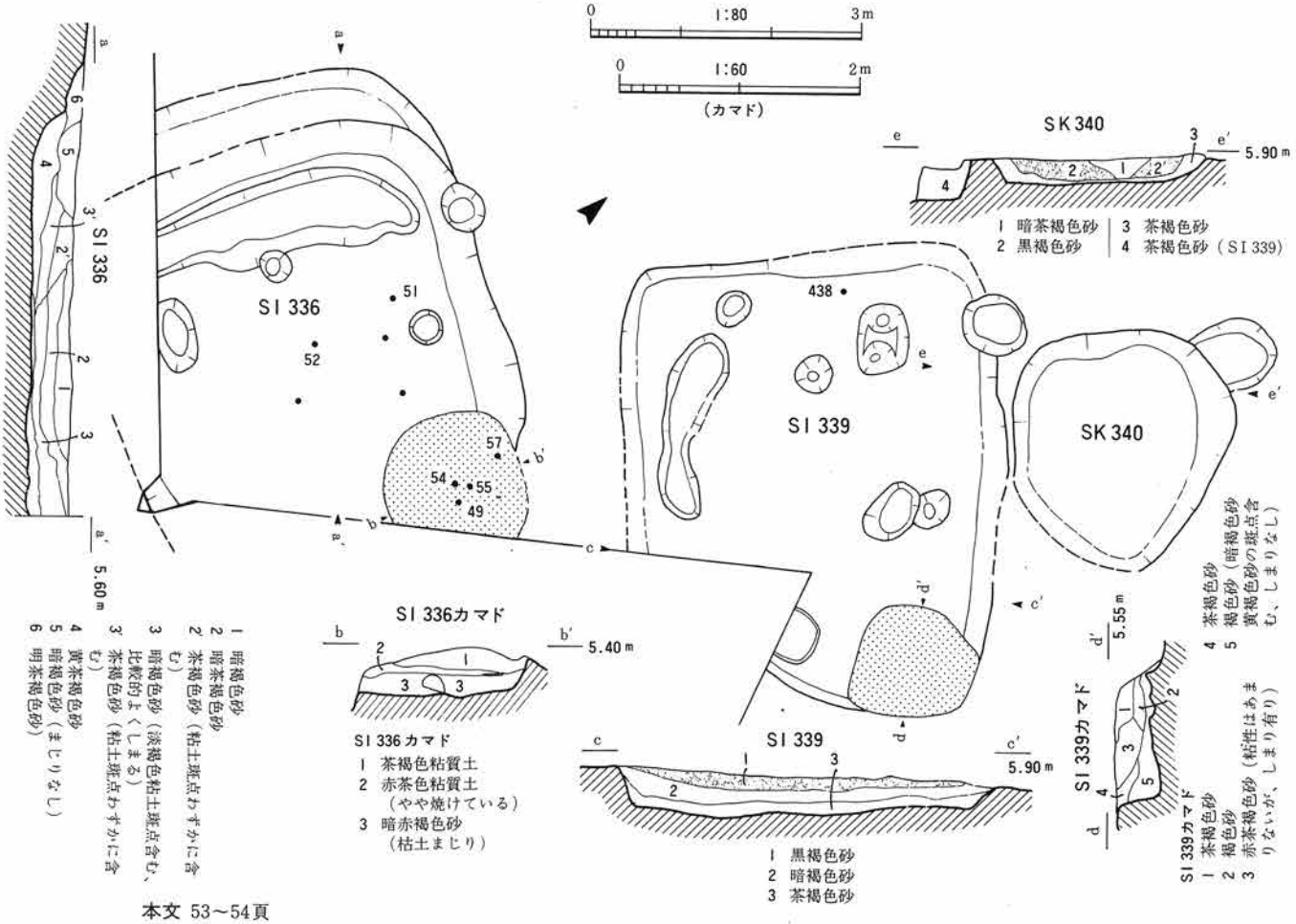
0　1:80　3m
0　1:60　2m
（カマド）

本文 52～53頁

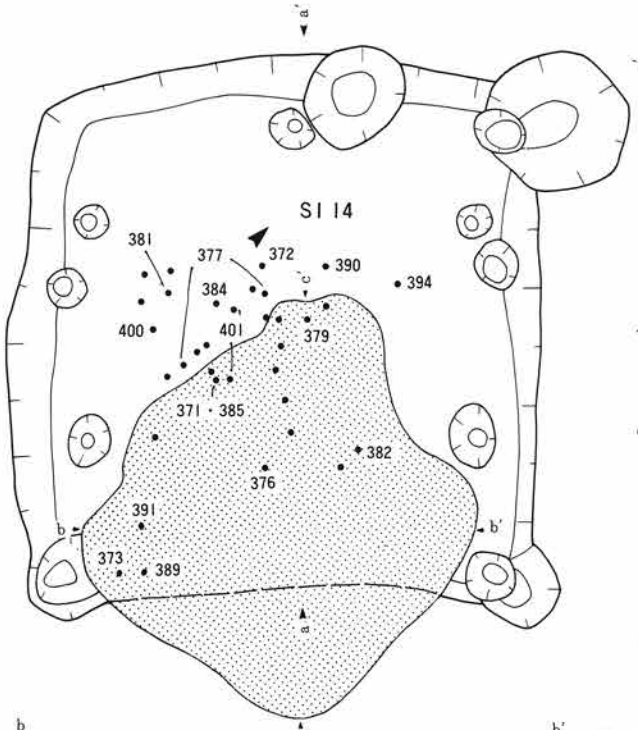
遺構個別実測図 5　1:80　SI 360、SI 336、SI 339、SK 340

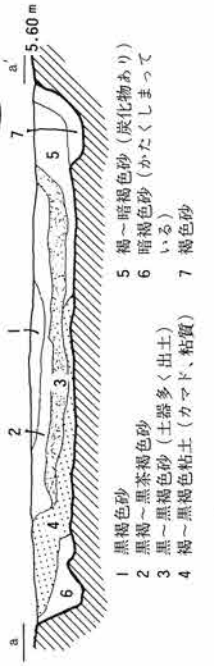


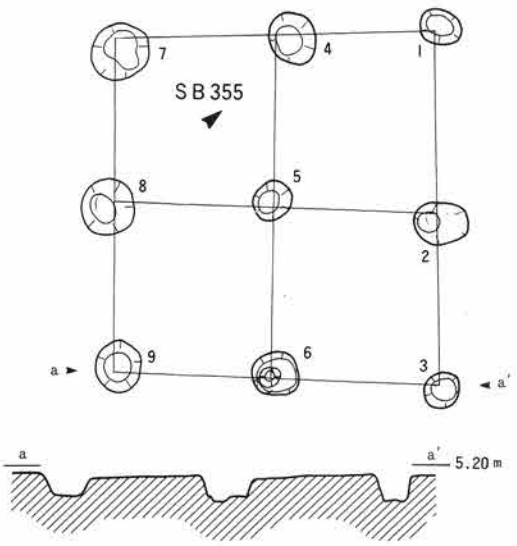
SI 360
1 黒褐色砂　2' 暗褐色砂（褐色斑点多く含む）
2 暗褐色砂　3 褐色砂

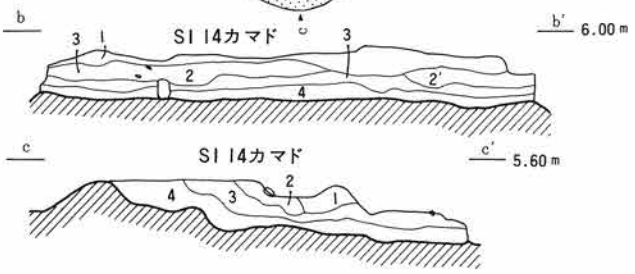


本文 53～54頁

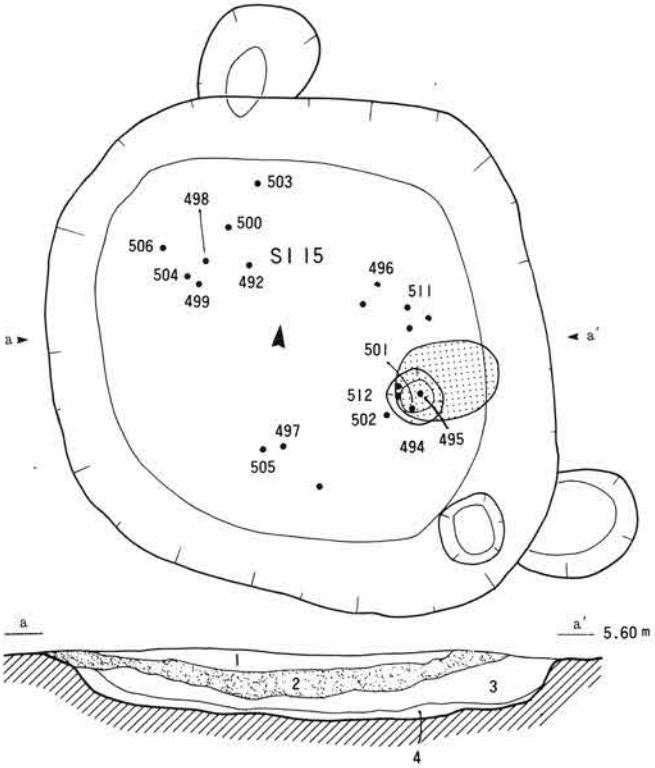


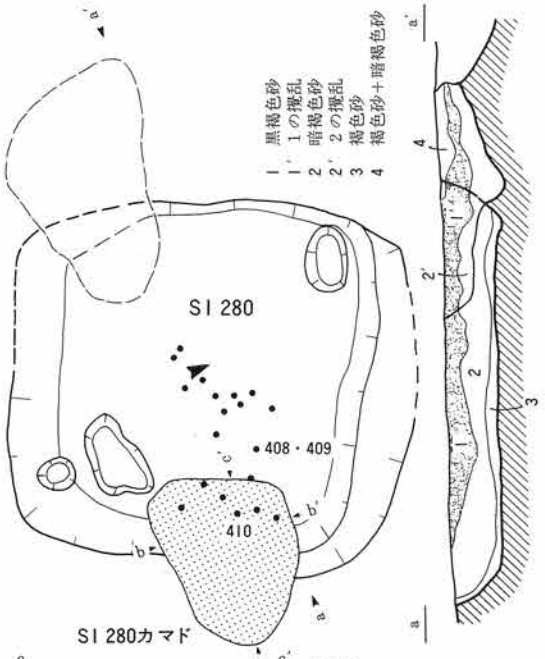


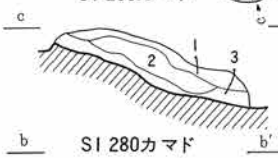


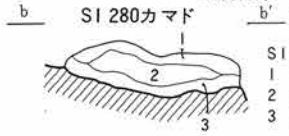


1 暗褐～暗赤褐色砂（やや粘土質）
2 暗赤褐色粘土質砂（最も赤味呈す、土器多い）
2' 暗赤褐色粘土質砂（2よりやや明るい、最も粘土質）
3 暗褐～褐色砂（やや粘土質）
4 暗褐～褐色砂

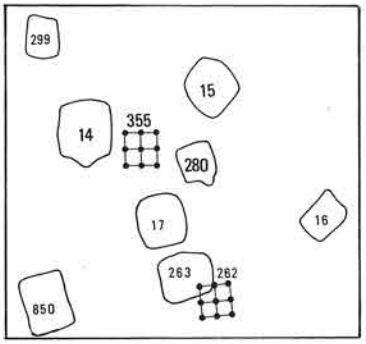


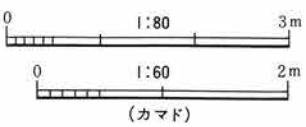






SI 280カマド
1 暗褐色砂（かたい、やや粘質）
2 暗褐色粘質土（やや赤味、かたい）
3 茶褐色粘質土（粘性、斑点漸移層）

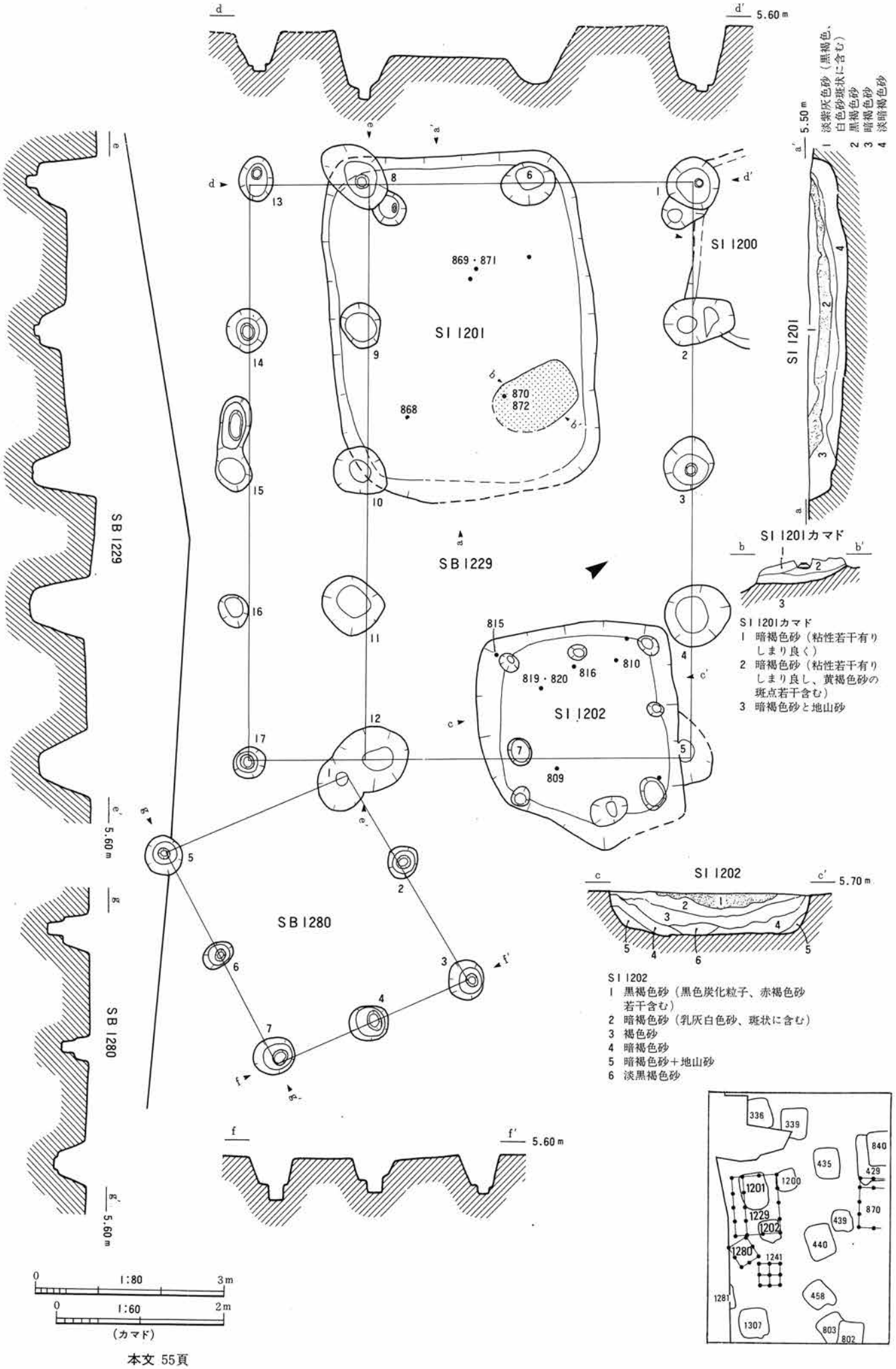




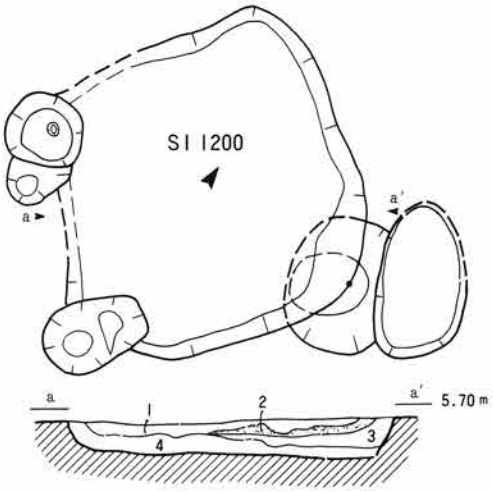
1 褐色砂
2 黒褐色砂
3 暗褐色砂（砂を斑状に含む、遺物を多く含む）
4 褐色砂（地山砂主体）

本文 54～55頁

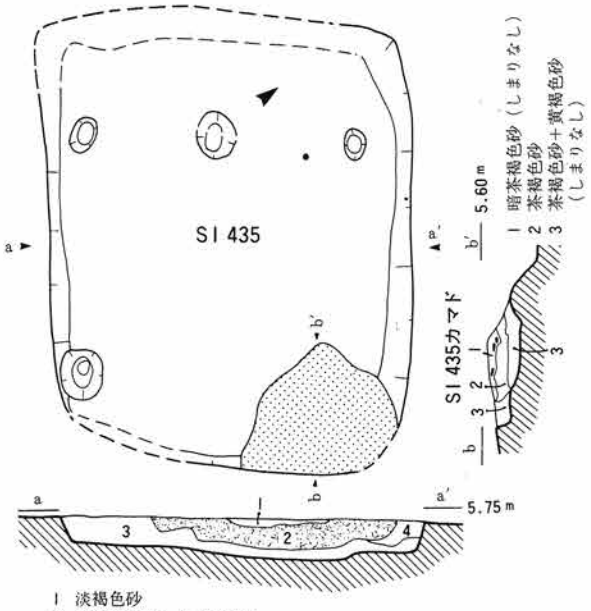
遺構個別実測図 7　1:80　SI 1201、SI 1202、SB 1229、SB 1280



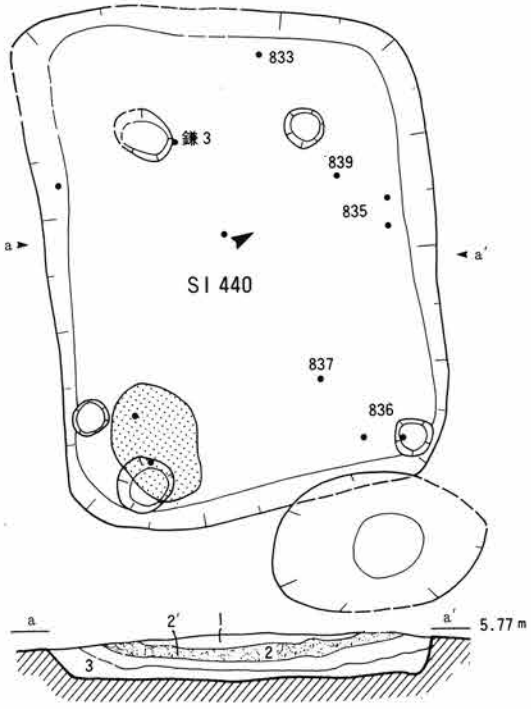
本文 55頁



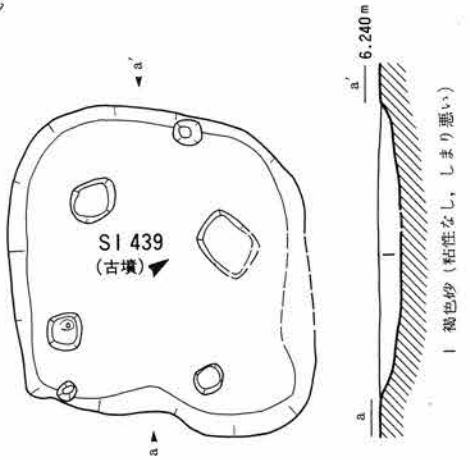
1 褐色砂＋暗褐色砂
2 暗褐色砂＋黒褐色砂
3 褐色砂
4 褐色砂＋地山砂

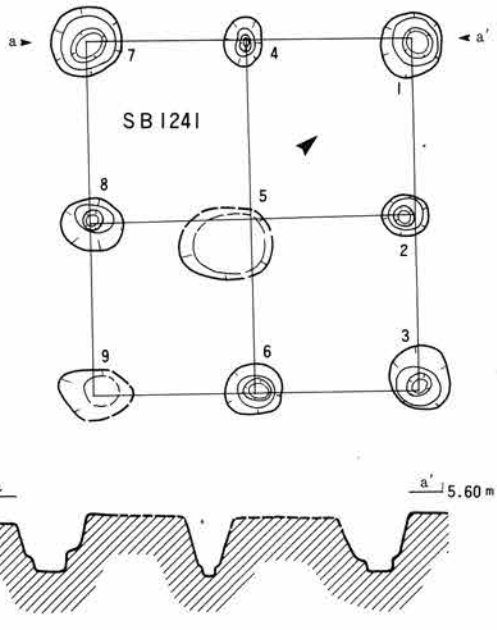


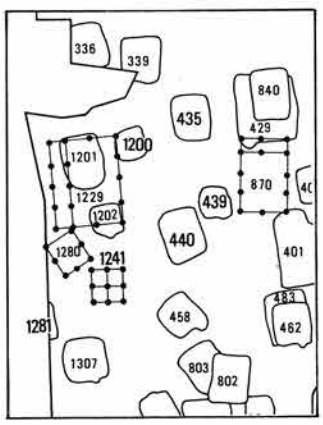
1 淡褐色砂
2 黒褐色砂（しまり良好）
3 暗褐色砂（しまりややあり）
4 褐色砂

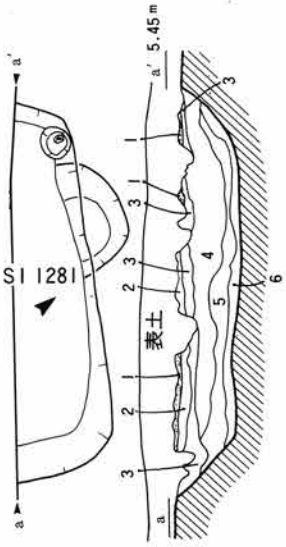


1 灰褐～茶褐色砂
2 黒褐色砂
2' 2層よりやや明るい黒褐色砂
3 褐色砂







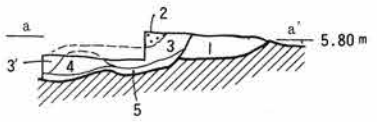


1 黒褐色砂
2 暗褐色砂
3 2より若干明るい暗褐色砂（黄褐色砂、斑点有り）
4 褐色砂
5 茶褐色砂
6 茶褐色砂＋黄褐色砂

0　1:80　3m
0　1:60　2m
（カマド）

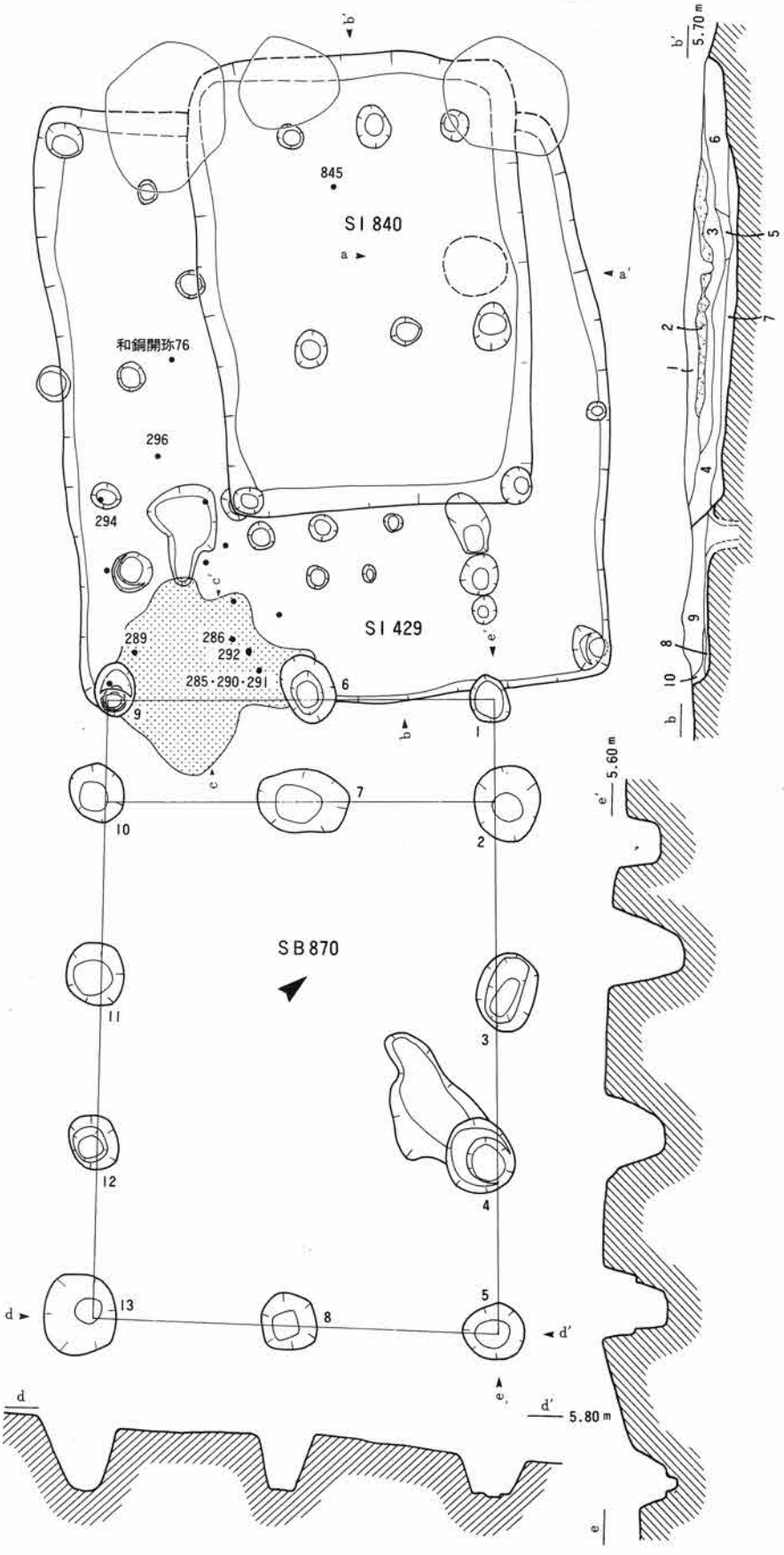
本文 55～56頁

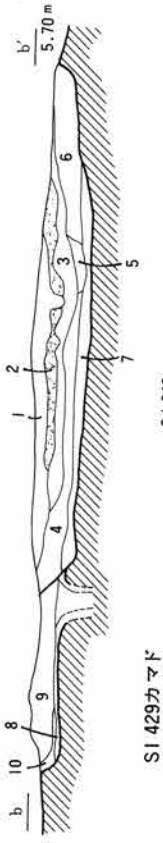
遺構個別実測図 9　1:80　SI 429、SI 840、SB 870



SI 429
1 （明）茶褐色砂

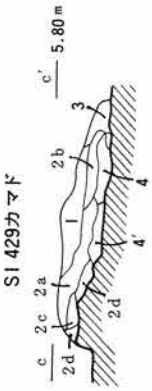
SI 840
2 黒褐色砂
3 暗褐色砂（鉄滓を含む）
3' 暗褐色砂（灰褐色粘土斑点若干含む）
4 赤(茶）褐色砂（焼、粘性無く粒子粗い
5 暗褐色砂＋黄褐色砂（粒子粗くしまりなし）



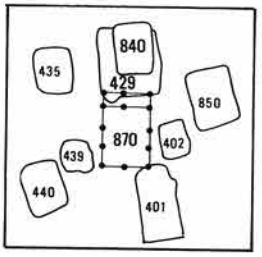


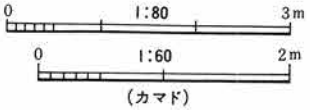
SI 840
1 褐色砂＋黒褐色砂＋黄褐色砂（全体に明褐色を呈する）
2 黒褐色砂（若干粘性があり、しまり良し）
3 暗褐色砂（鉄滓を含む）
4 暗褐色砂＋淡褐色砂（粒子粗く、しまり無し）
5 暗灰褐色砂（鉄滓を含む）
6 淡暗褐色砂
7 黄褐色砂＋淡暗褐色砂

SI 429
8 淡褐色砂＋地山砂（しまり悪い）
9 褐色砂（しまり良し）
10 淡暗褐色砂

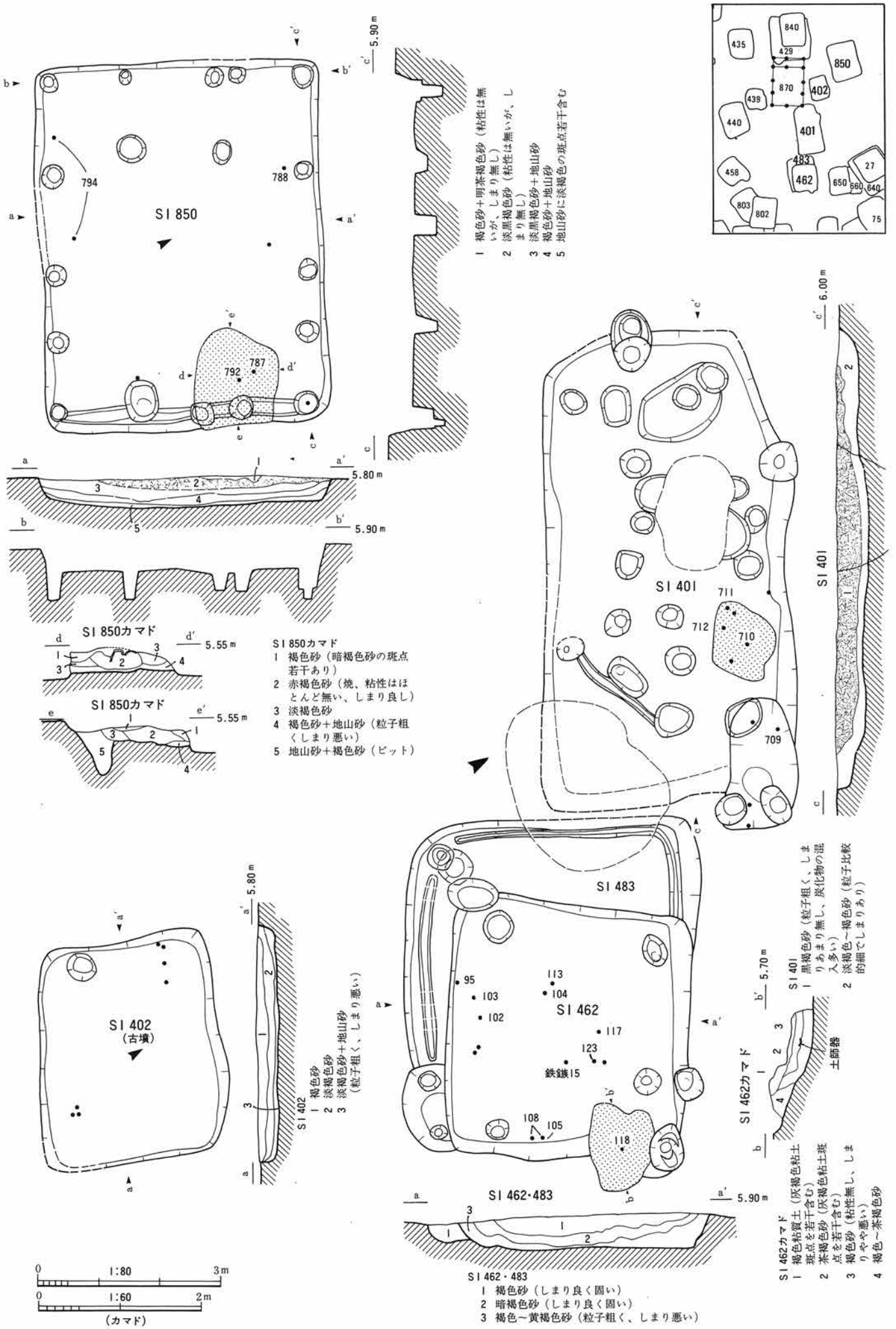


SI 429カマド
1 灰白色粘質土
2a 赤褐色粘質土（1に比べて砂質分が多い粘土）
2b 赤褐色粘質土（半分近くの砂は4層が混入）
2c 赤褐色粘質土（2aよりも粘性弱い）
2d 赤褐色粘質土（2c層と同じが地山砂が混入）
3 暗褐色砂（しまりあまりなし、攪乱か）
4 赤褐色砂（まったく粘性ない）
4' 赤褐色砂＋地山砂



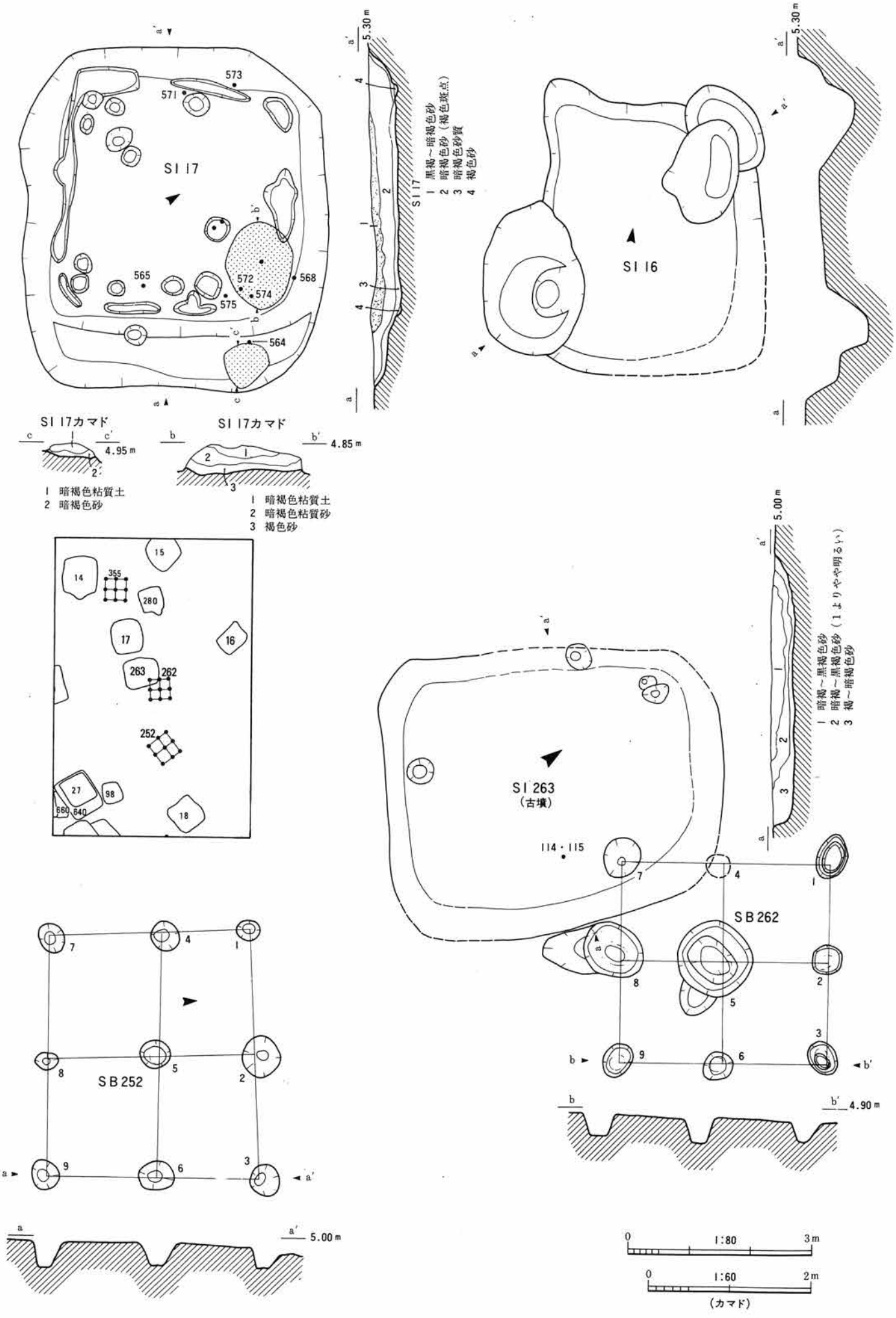


本文 56～57頁

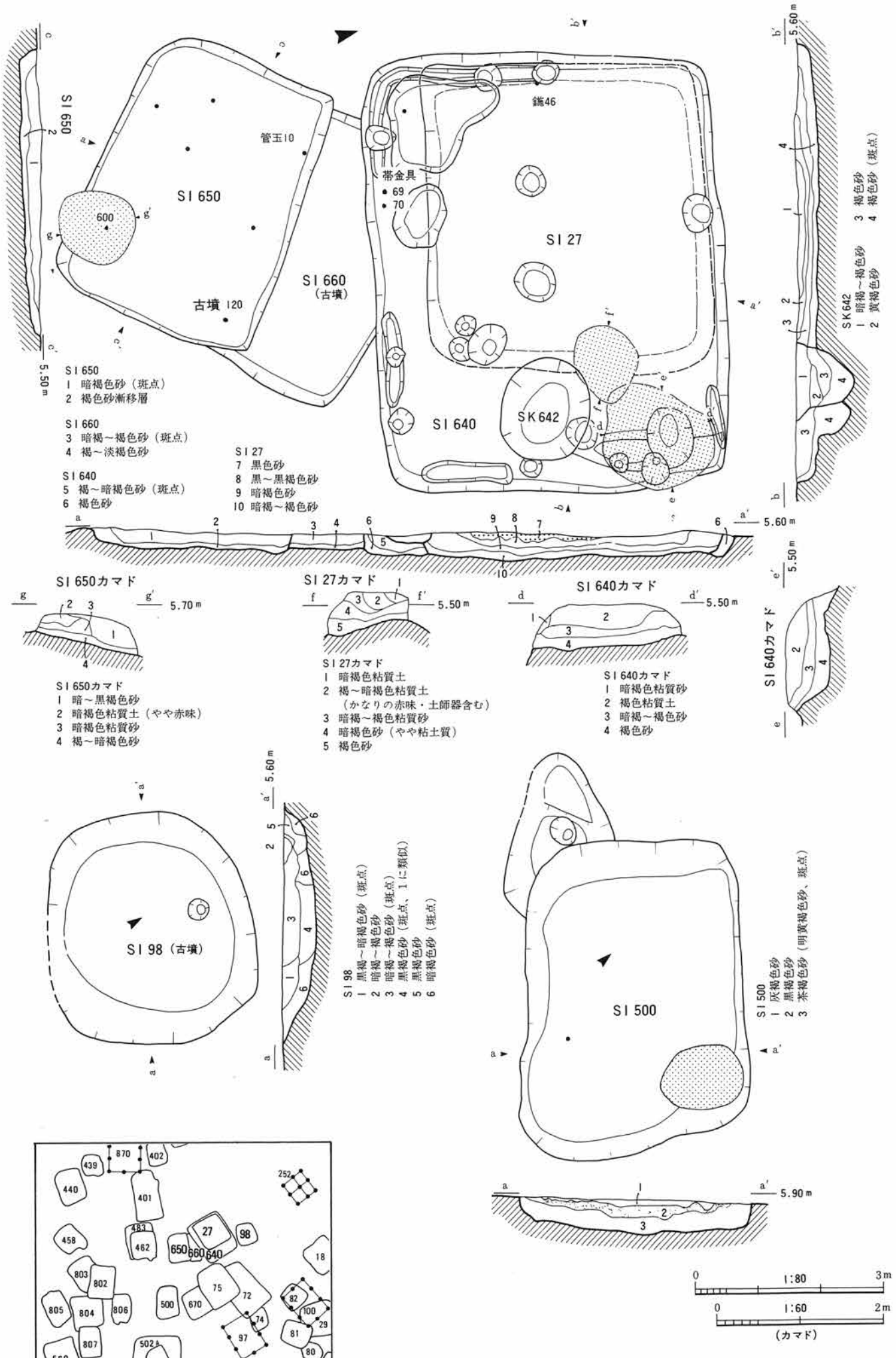

SI 850
794
788
792
787
SI 850カマド
SI 850カマド
SI 850カマド
1 褐色砂＋明茶褐色砂（粘性は無いが、しまり無し）
2 淡黒褐色砂（粘性は無いが、しまり無し）
3 淡黒褐色砂＋地山砂
4 褐色砂＋地山砂
5 地山砂に淡褐色の斑点若干含む
1 褐色砂（暗褐色砂の斑点若干あり）
2 赤褐色砂（焼、粘性はほとんど無い、しまり良し）
3 淡褐色砂
4 褐色砂＋地山砂（粒子粗くしまり悪い）
5 地山砂＋褐色砂（ピット）
SI 401
711
712
710
709
SI 483
SI 462
95
103
102
113
104
117
123
鉄鏃15
108
105
118
SI 462・483
1 褐色砂（しまり良く固い）
2 暗褐色砂（しまり良く固い）
3 褐色～黄褐色砂（粒子粗く、しまり悪い）
SI 402
（古墳）
SI 402
1 褐色砂
2 淡褐色砂
3 淡褐色砂＋地山砂（粒子粗く、しまり悪い）
SI 401
1 黒褐色砂（粒子粗く、しまりあまり無し、炭化物の混入多い）
2 淡褐色～褐色砂（粒子比較的細でしまりあり）
SI 462カマド
土師器
SI 462カマド
1 褐色粘質土（灰褐色粘土斑点を若干含む）
2 茶褐色砂（灰褐色粘土斑点を若干含む）
3 褐色砂（粘性無し、しまりやや悪い）
4 褐色～茶褐色砂
0 1:80 3m
0 1:60 2m
（カマド）

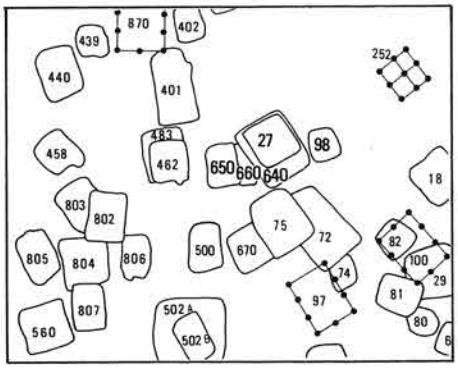
本文 57～58頁

遺構個別実測図11 1:80 SI 17、SI 16、SI 263、SB 262、SB 252



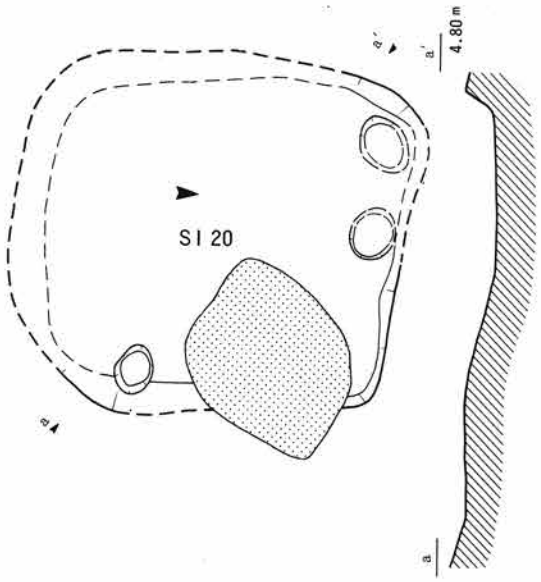
本文 58～59頁

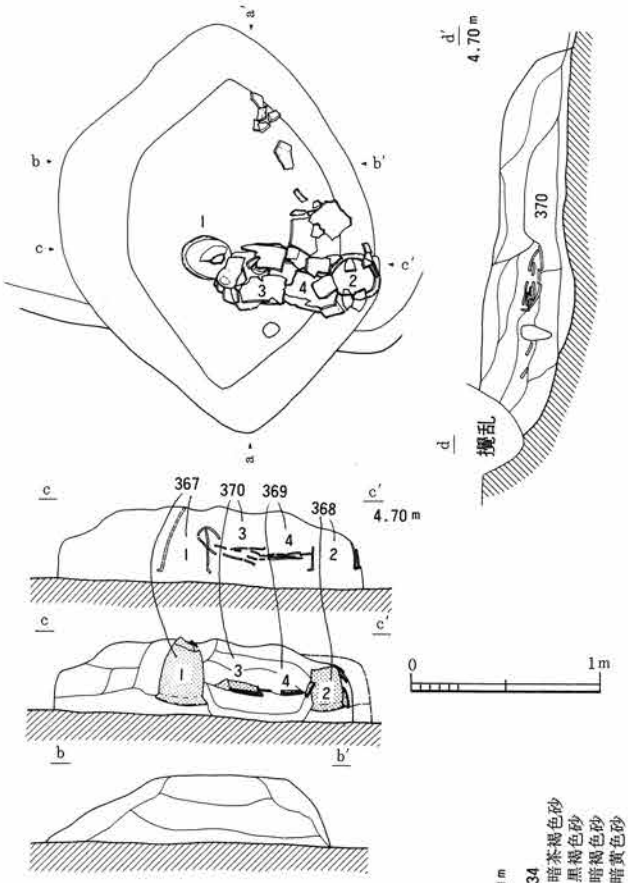

SI 650
管玉10
600
SI 660
（古墳）
古墳 120
鏃46
帯金具
69
70
SI 27
SI 640
SK 642
5.50m
5.60m
SI 650
1 暗褐色砂（斑点）
2 褐色砂漸移層
SI 660
3 暗褐～褐色砂（斑点）
4 褐～淡褐色砂
SI 640
5 褐～暗褐色砂（斑点）
6 褐色砂
SI 27
7 黒色砂
8 黒～黒褐色砂
9 暗褐色砂
10 暗褐～褐色砂
SK 642
1 暗褐～褐色砂
2 黄褐色砂
3 褐色砂
4 褐色砂（斑点）
SI 650カマド
5.70m
SI 650カマド
1 暗～黒褐色砂
2 暗褐色粘質土（やや赤味）
3 暗褐色粘質砂
4 褐～暗褐色砂
SI 27カマド
5.50m
SI 27カマド
1 暗褐色粘質土
2 褐～暗褐色粘質土
（かなりの赤味・土師器含む）
3 暗褐～褐色粘質砂
4 暗褐色砂（やや粘土質）
5 褐色砂
SI 640カマド
5.50m
SI 640カマド
1 暗褐色粘質砂
2 褐色粘質土
3 暗褐～褐色砂
4 褐色砂
SI 640カマド
SI 98（古墳）
5.60m
SI 98
1 黒褐～暗褐色砂（斑点）
2 暗褐～褐色砂
3 暗褐～褐色砂（斑点）
4 黒褐色砂（斑点、1に類似）
5 黒褐色砂
6 暗褐色砂（斑点）
SI 500
5.90m
SI 500
1 灰褐色砂
2 黒褐色砂
3 茶褐色砂（明黄褐色砂、斑点）
0 1:80 3m
0 1:60 2m
（カマド）

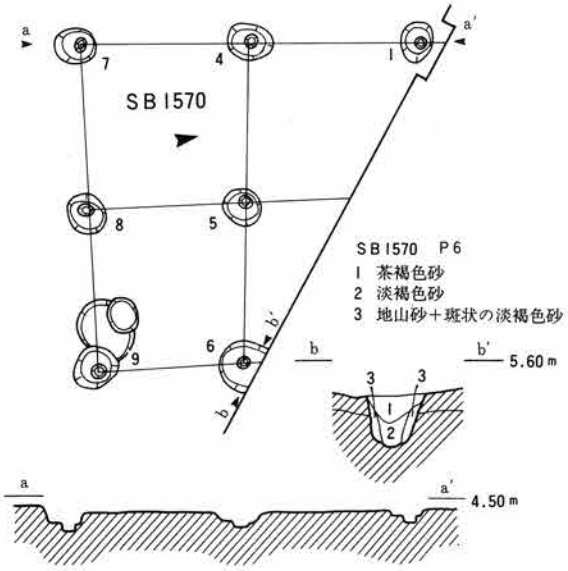

870
402
439
440
401
252
27
98
458
462
650
660
640
18
803
802
75
72
82
805
804
806
500
670
100
74
29
97
81
807
80
560
502a
502b
6

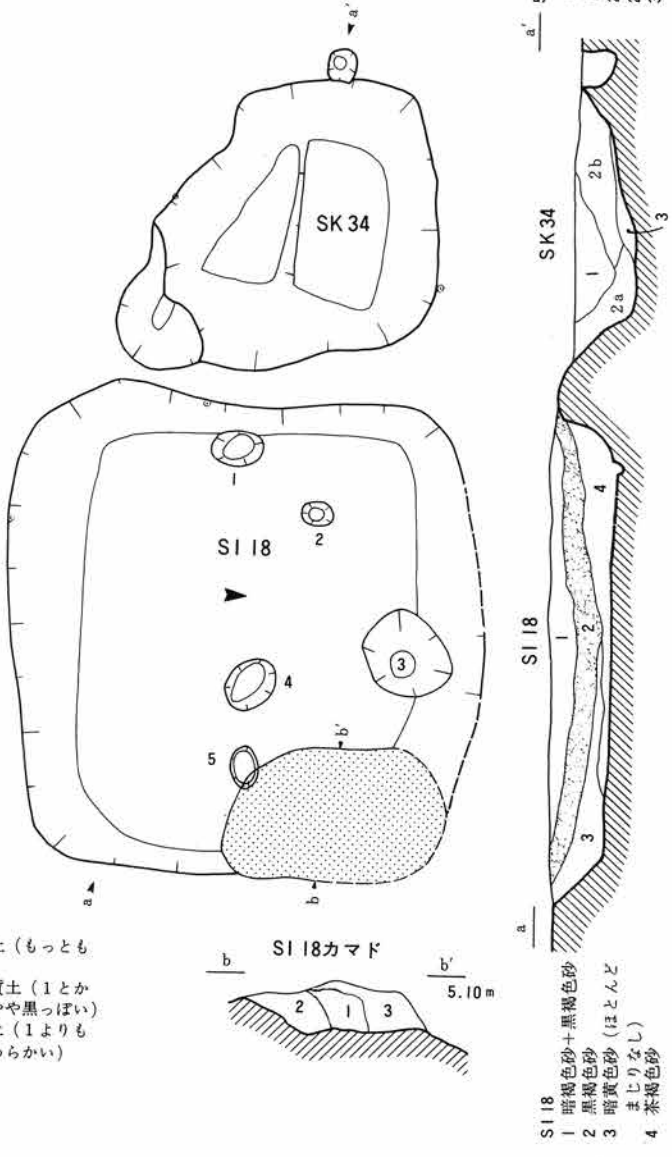
本文 59～60頁

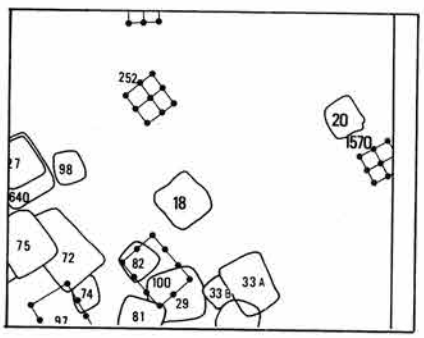
遺構個別実測図13　1:80　SI 20、SB 1570、SI 18、SK 34

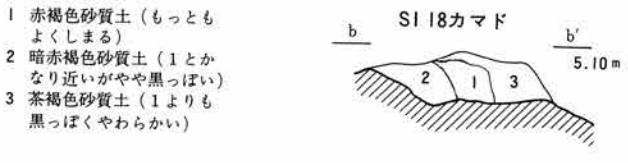




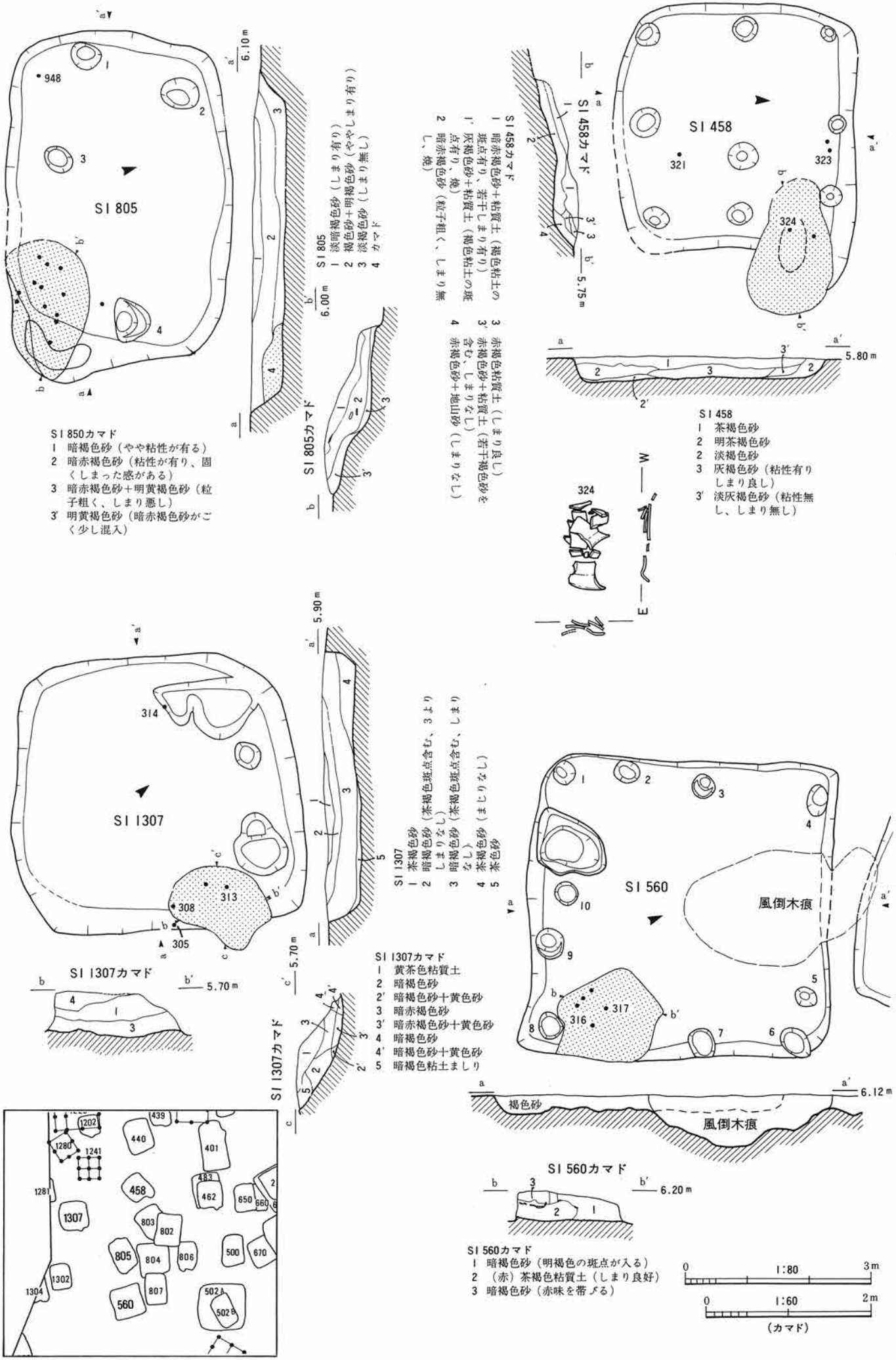






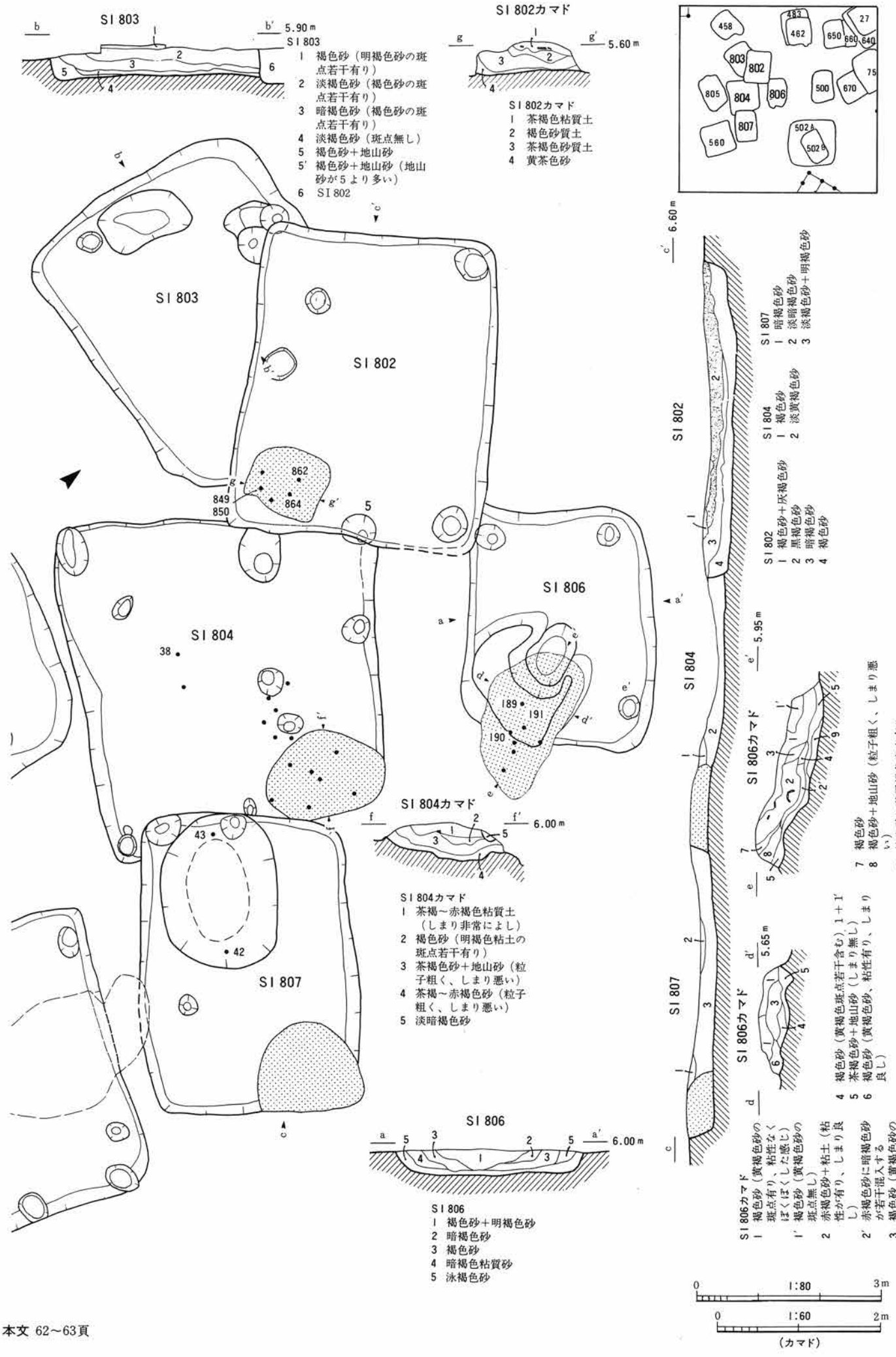


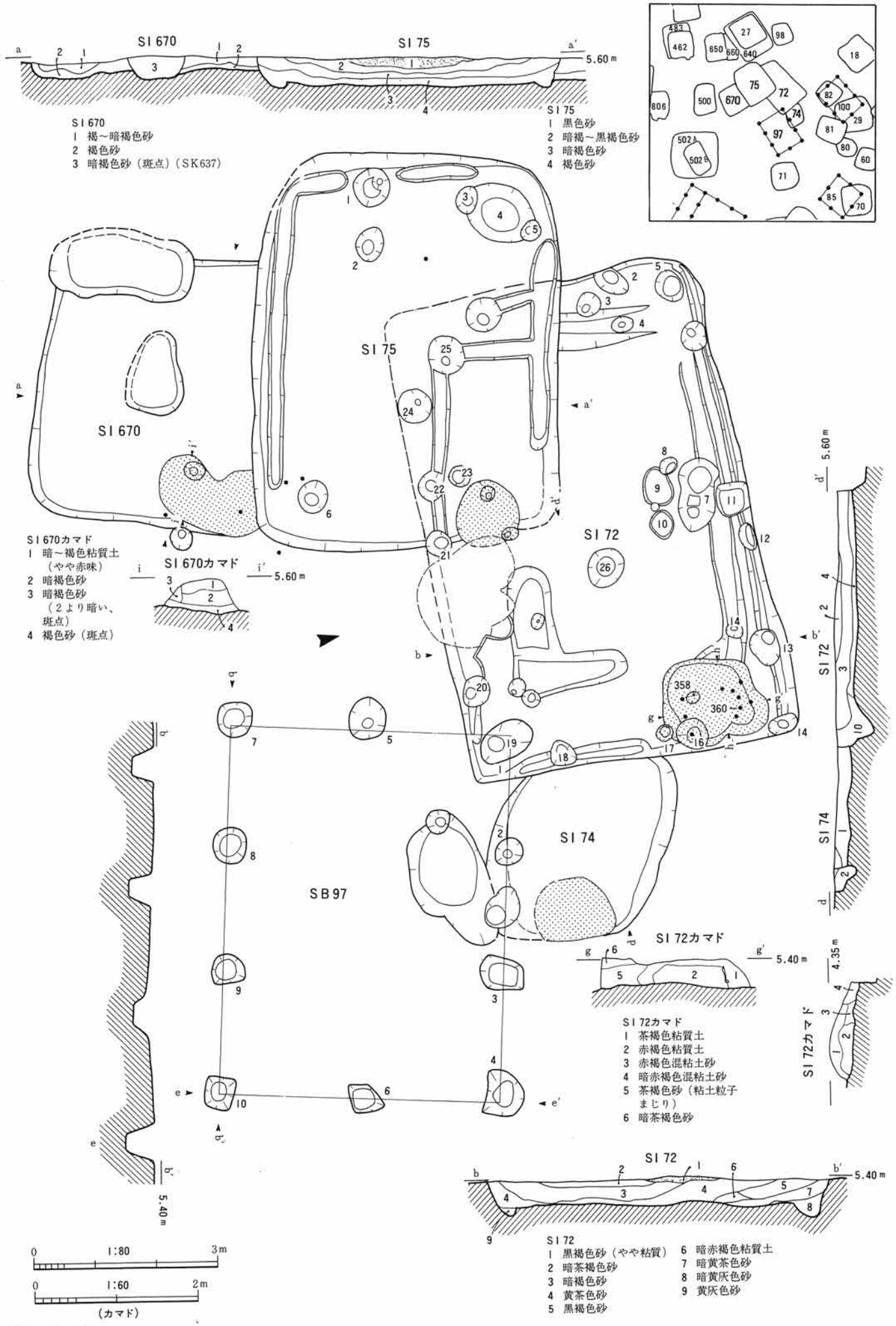
本文 60～61頁　（カマド）


SI 805
948
SI 805カマド
SI 805
1 淡暗褐色砂（しまり有り）
2 褐色砂＋明褐色砂（ややしまり有り）
3 淡褐色砂（しまり無し）
4 カマド
SI 850カマド
1 暗褐色砂（やや粘性が有る）
2 暗赤褐色砂（粘性が有り、固くしまった感がある）
3 暗赤褐色砂＋明黄褐色砂（粒子粗く、しまり悪し）
3' 明黄褐色砂（暗赤褐色砂がごく少し混入）
SI 458
321
323
324
SI 458カマド
SI 458
1 暗赤褐色砂＋粘質土（褐色粘土の斑点有り、若干しまり有り）
1' 灰褐色砂＋粘質土（褐色粘土の斑点有り、やや粘性有り、しまり無し）
2 暗赤褐色砂（粒子粗く、しまり無し）
3 赤褐色粘質土（しまり良し）
3' 赤褐色砂＋粘質土（若干しまり無し）
4 赤褐色砂＋地山砂（しまりなし）
SI 458
1 茶褐色砂
2 明茶褐色砂
2 淡褐色砂
3 灰褐色砂（粘性有りしまり良し）
3' 淡灰褐色砂（粘性無し、しまり無し）
SI 1307
314
313
308
305
SI 1307カマド
SI 1307
1 茶褐色砂
2 暗褐色砂（茶褐色斑点含む、3よりしまりなし）
3 暗褐色砂（茶褐色斑点含む、しまりなし）
4 茶褐色砂（まじりなし）
5 茶色砂
SI 1307カマド
1 黄茶色粘質土
2 暗褐色砂
2' 暗褐色砂＋黄色砂
3 暗赤褐色砂
3' 暗赤褐色砂＋黄色砂
4 暗褐色砂
4' 暗褐色砂＋黄色砂
5 暗褐色粘土まじり
SI 560
風倒木痕
317
316
褐色砂
風倒木痕
SI 560カマド
SI 560カマド
1 暗褐色砂（明褐色の斑点が入る）
2 （赤）茶褐色粘質土（しまり良好）
3 暗褐色砂（赤味を帯びる）
1202
1280
1241
1281
439
440
401
458
483
462
650
660
1307
803
802
805
804
806
500
670
1302
1304
807
560
502A
502B
0 1:80 3m
0 1:60 2m
（カマド）

本文 62頁

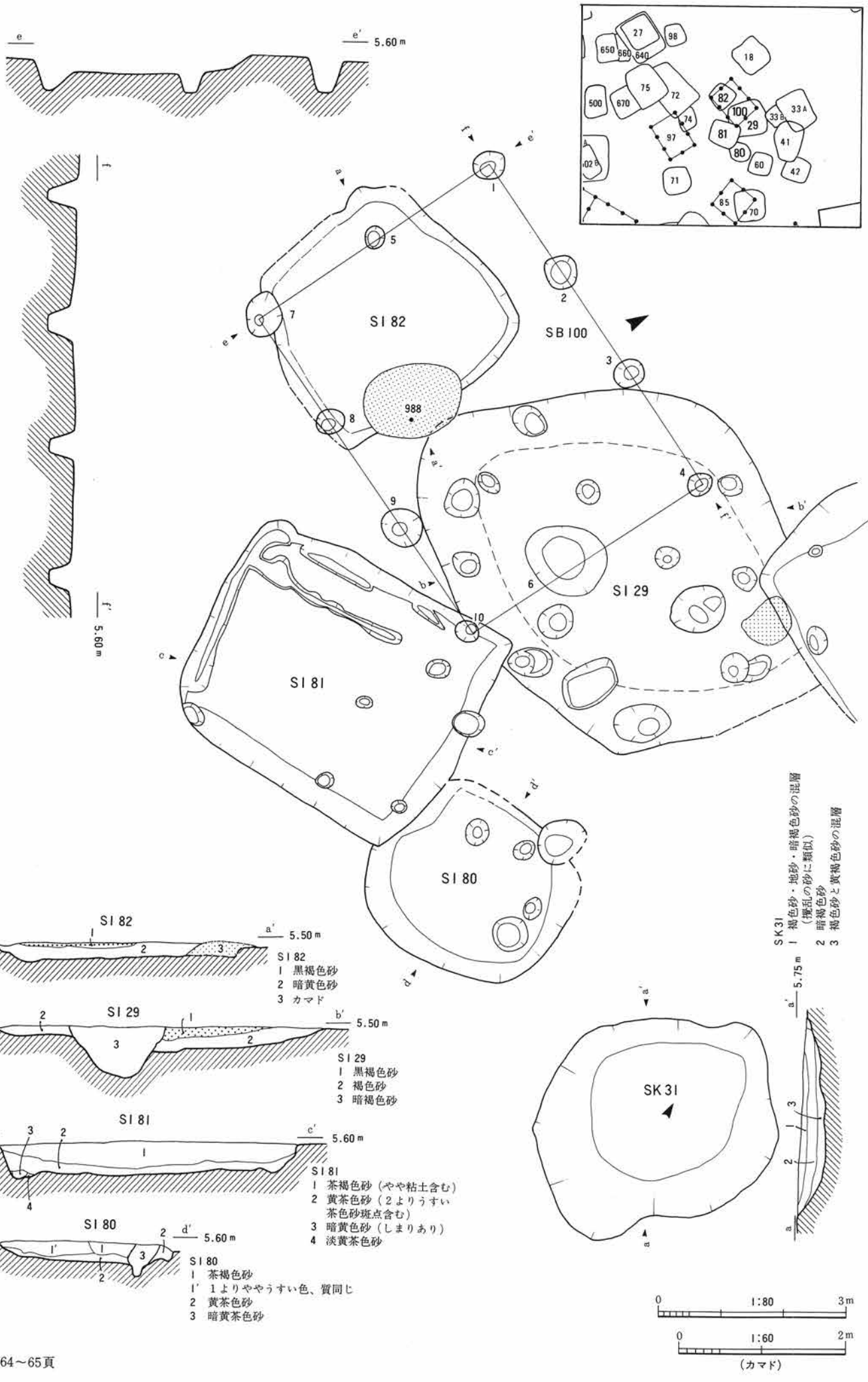
遺構個別実測図15　1:80　SI 803、SI 802、SI 804、SI 806、SI 807

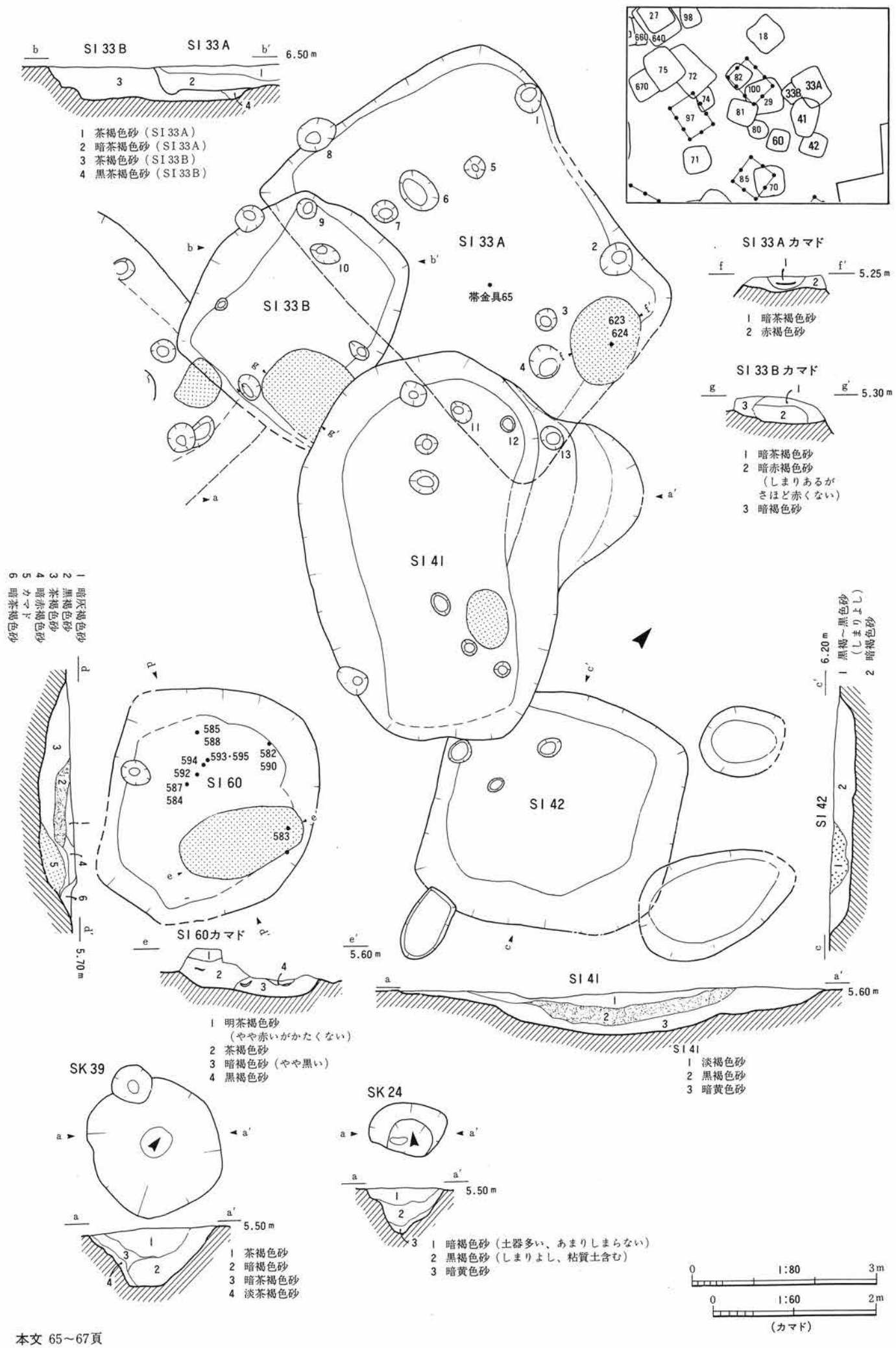



SI 670
SI 75
5.60m
SI 670
1 褐～暗褐色砂
2 褐色砂
3 暗褐色砂（斑点）（SK637）
SI 75
1 黒色砂
2 暗褐～黒褐色砂
3 暗褐色砂
4 褐色砂
SI 670カマド
1 暗～褐色粘質土（やや赤味）
2 暗褐色砂
3 暗褐色砂（2より暗い、斑点）
4 褐色砂（斑点）
SI 670カマド
5.60m
SI 72
SI 74
SB 97
SI 72カマド
5.40m
SI 72カマド
1 茶褐色粘質土
2 赤褐色粘質土
3 赤褐色混粘土砂
4 暗赤褐色混粘土砂
5 茶褐色砂（粘土粒子まじり）
6 暗茶褐色砂
SI 72
5.40m
SI 72
1 黒褐色砂（やや粘質）
2 暗茶褐色砂
3 暗褐色砂
4 黄茶色砂
5 黒褐色砂
6 暗赤褐色粘質土
7 暗黄茶色砂
8 暗黄灰色砂
9 黄灰色砂
0 1:80 3m
0 1:60 2m
（カマド）

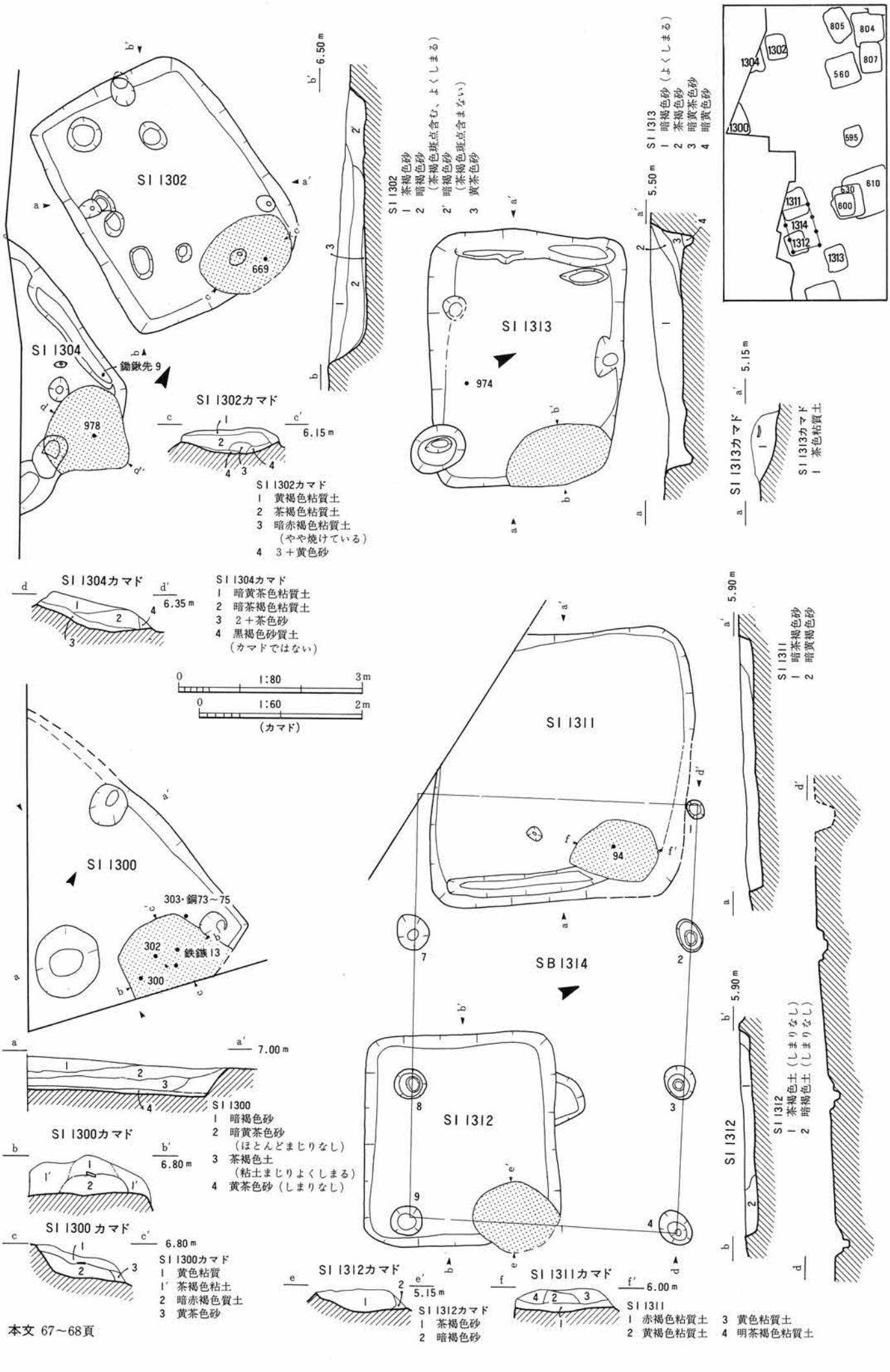
本文 63～64頁

遺構個別実測図17　1:80　SI 82、SI 29、SI 81、SI 80、SB 100、SK 31

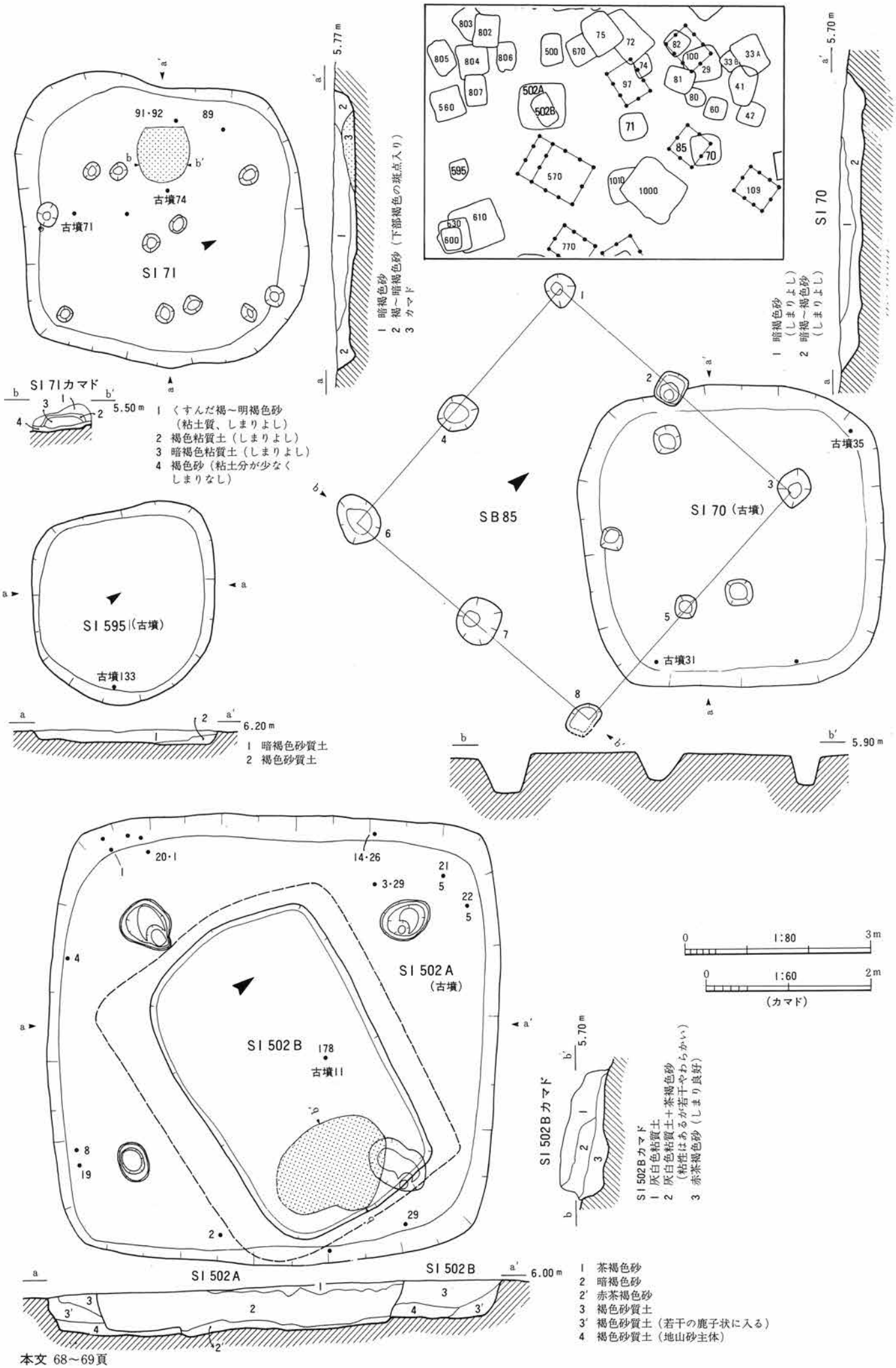



SI 33B
SI 33A
6.50 m
1 茶褐色砂（SI 33A）
2 暗茶褐色砂（SI 33A）
3 茶褐色砂（SI 33B）
4 黒茶褐色砂（SI 33B）
SI 33A
SI 33B
帯金具65
SI 41
SI 42
SI 60
SI 60カマド
5.70 m
5.60 m
1 暗灰褐色砂
2 黒褐色砂
3 茶褐色砂
4 暗赤褐色砂
5 カマド
6 暗茶褐色砂
SI 33Aカマド
5.25 m
1 暗茶褐色砂
2 赤褐色砂
SI 33Bカマド
5.30 m
1 暗茶褐色砂
2 暗赤褐色砂
（しまりあるが
さほど赤くない）
3 暗褐色砂
6.20 m
1 黒褐～黒色砂
（しまりよし）
2 暗褐色砂
SI 41
5.60 m
1 明茶褐色砂
（やや赤いがかたくない）
2 茶褐色砂
3 暗褐色砂（やや黒い）
4 黒褐色砂
SI 41
1 淡褐色砂
2 黒褐色砂
3 暗黄色砂
SK 39
5.50 m
1 茶褐色砂
2 暗褐色砂
3 暗茶褐色砂
4 淡茶褐色砂
SK 24
5.50 m
1 暗褐色砂（土器多い、あまりしまらない）
2 黒褐色砂（しまりよし、粘質土含む）
3 暗黄色砂
0　1:80　3m
0　1:60　2m
（カマド）

遺構個別実測図19 1:80 SI 1302、SI 1304、SI 1300、SI 1313、SI 1311、SI 1312、SB 1314

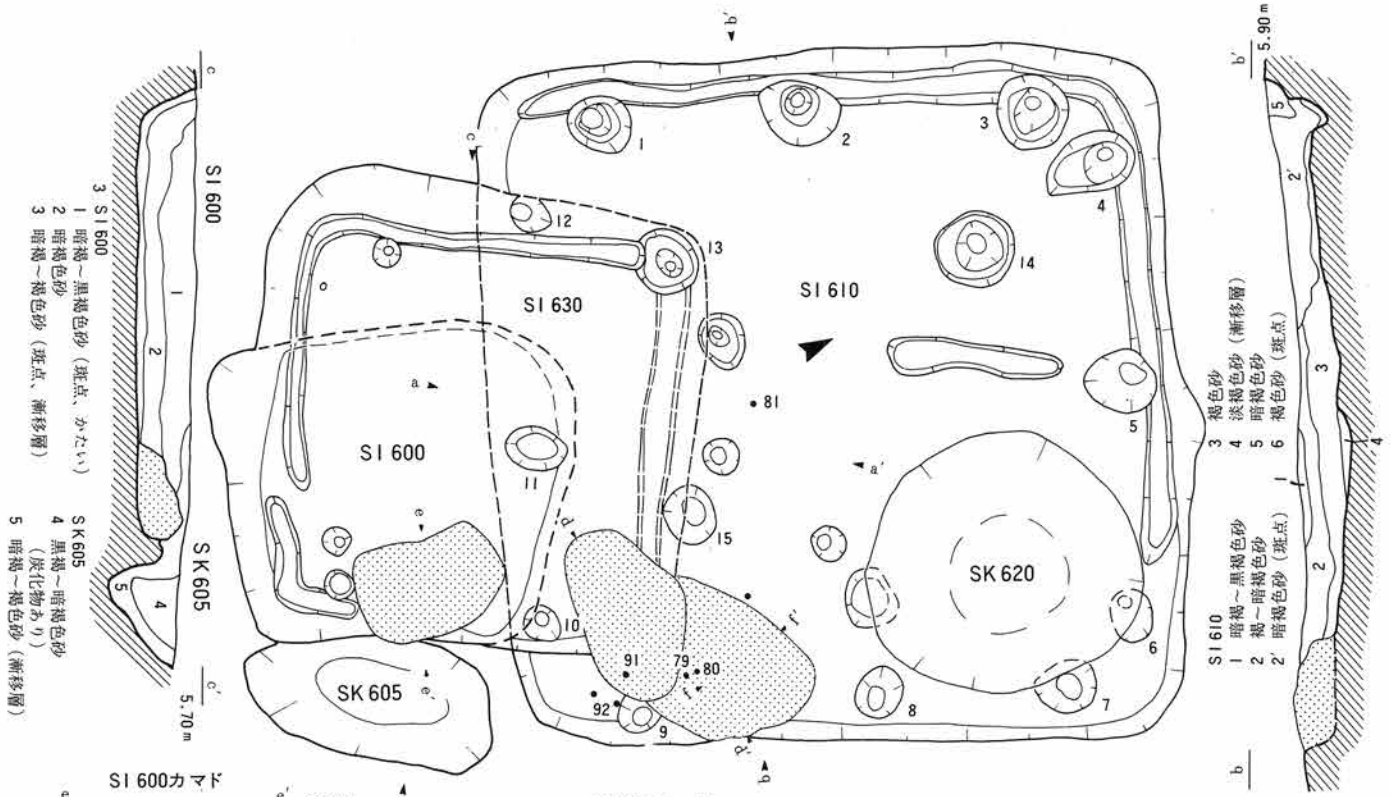


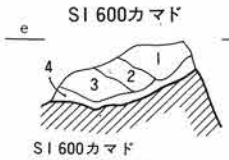
本文 67～68頁


SI 71
91・92
89
古墳74
古墳71
SI 71カマド
1 くすんだ褐～明褐色砂（粘土質、しまりよし）
2 褐色粘質土（しまりよし）
3 暗褐色粘質土（しまりよし）
4 褐色砂（粘土分が少なくしまりなし）
1 暗褐色砂
2 褐～暗褐色砂（下部褐色の斑点入り）
3 カマド
SI 70
1 暗褐色砂（しまりよし）
2 暗褐～褐色砂（しまりよし）
SB 85
SI 70（古墳）
古墳35
古墳31
SI 595（古墳）
古墳133
1 暗褐色砂質土
2 褐色砂質土
SI 502A（古墳）
SI 502B
178
古墳11
SI 502Bカマド
1 灰白色粘質土
2 灰白色粘質土＋茶褐色砂（粘性はあるが若干やわらかい）
3 赤茶褐色砂（しまり良好）
1 茶褐色砂
2 暗褐色砂
2′ 赤茶褐色砂
3 褐色砂質土
3′ 褐色砂質土（若干の鹿子状に入る）
4 褐色砂質土（地山砂主体）
1:80
1:60
（カマド）

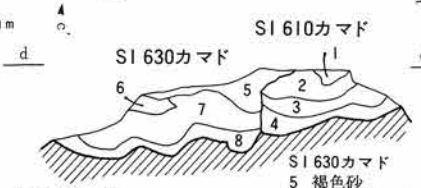
本文 68～69頁

遺構個別実測図21　1:80　SI 600、SK620、SI 610、SI 630、SI 741



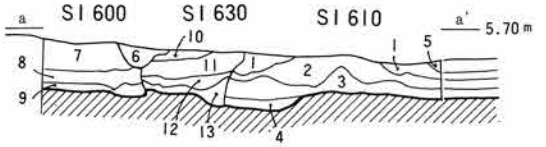


SI 600カマド
1 暗褐色粘質土
2 暗褐～褐色粘質土
3 褐色粘質土
4 褐色砂



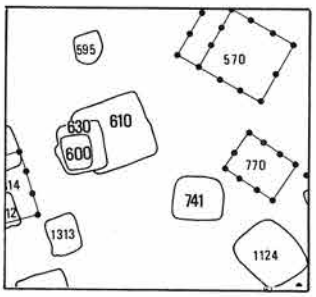
SI 610カマド
1 褐色粘質砂（砂質）
2 褐色粘質土（やや赤味を呈す）
3 褐～暗褐色粘質砂
4 褐色砂

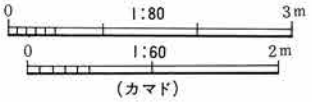
SI 630カマド
5 褐色砂
6 褐色粘質土（斑点）
7 褐～暗褐色粘質砂（粘土質＋砂質）
8 褐色砂

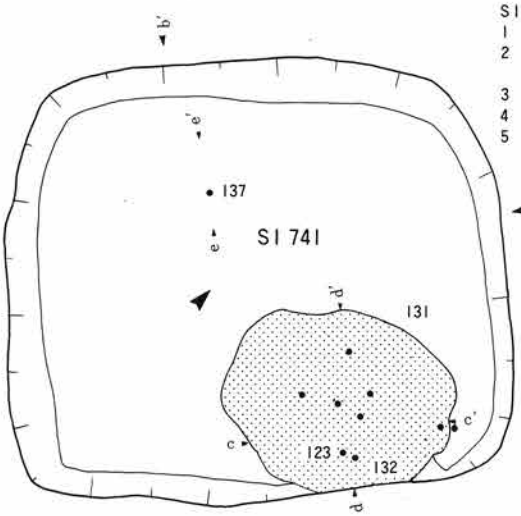


SI 600
6 黒褐～黒色砂
7 黒褐～暗褐色砂
8 暗褐色砂
9 暗褐～褐色砂

SI 630
10 黒褐～暗褐色砂
11 暗褐～黒褐色砂
12 暗褐色砂
13 暗褐～褐色砂





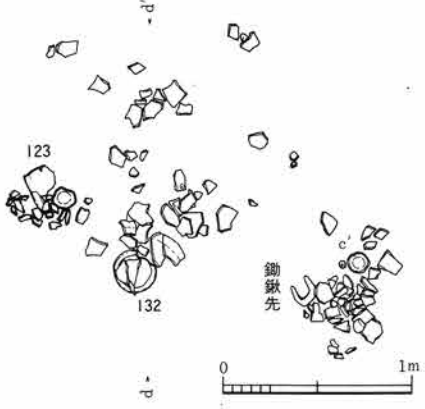


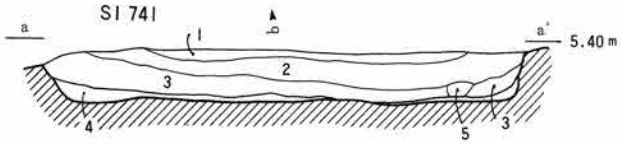
SI 610
1 暗褐～黒褐色砂
2 暗褐色砂（斑点）
寛永通寶出土
3 暗褐～褐色砂
4 淡褐色砂
5 黒褐色砂

SI 610カマド土器

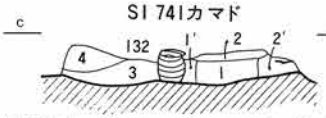
SI 741土器

SI 741カマド土器

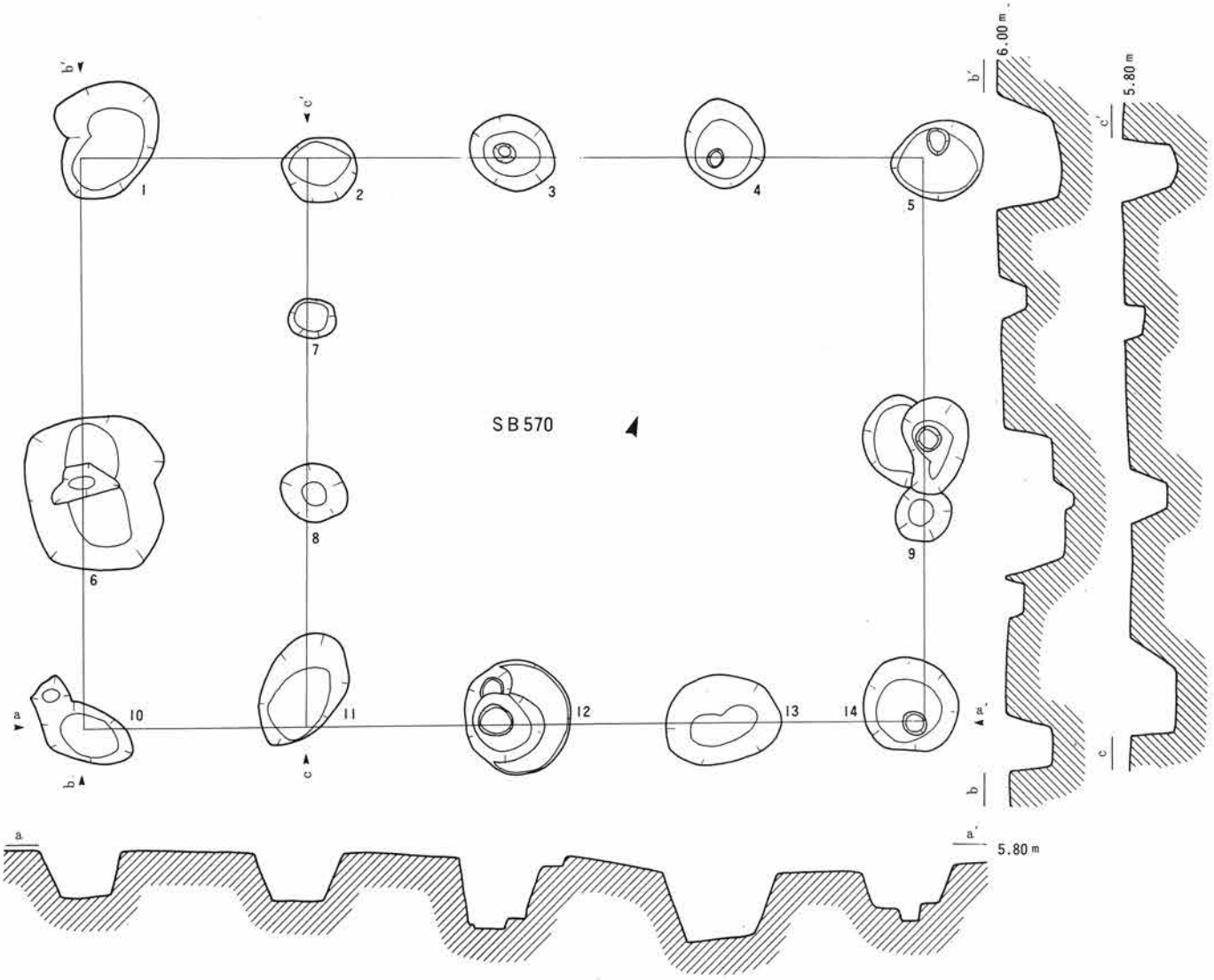


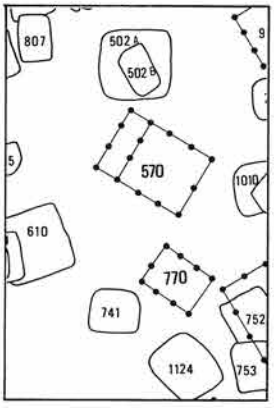


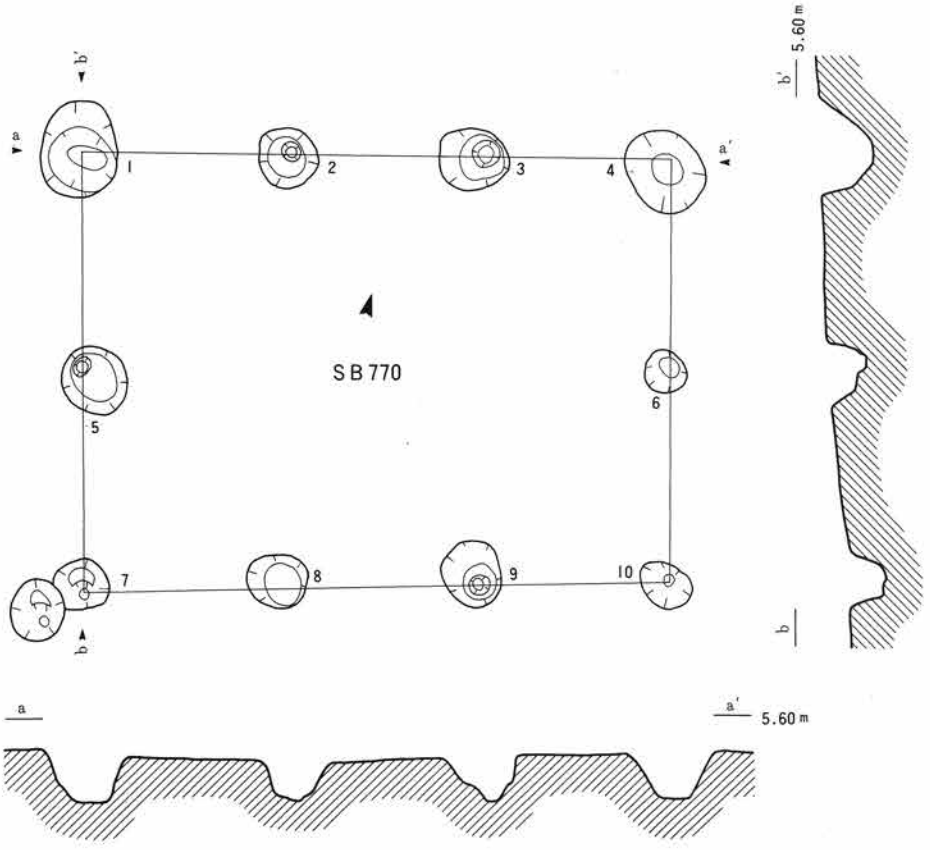
SI 741
1 暗茶褐色砂
2 茶褐色砂
3 暗褐色砂
4 灰褐色砂
（比較的よくしまる）
5 黒褐色砂



SI 741カマド
1 赤褐色土（粘土含む）
1' 暗赤褐色土
2 黄茶色土（粘土含む）
2' 暗黄茶色土（粘土含む）
2' 暗黄茶色土（粘土含む）
3 黄茶色土（粘土含む）
4 淡黄色粘質土（焼）





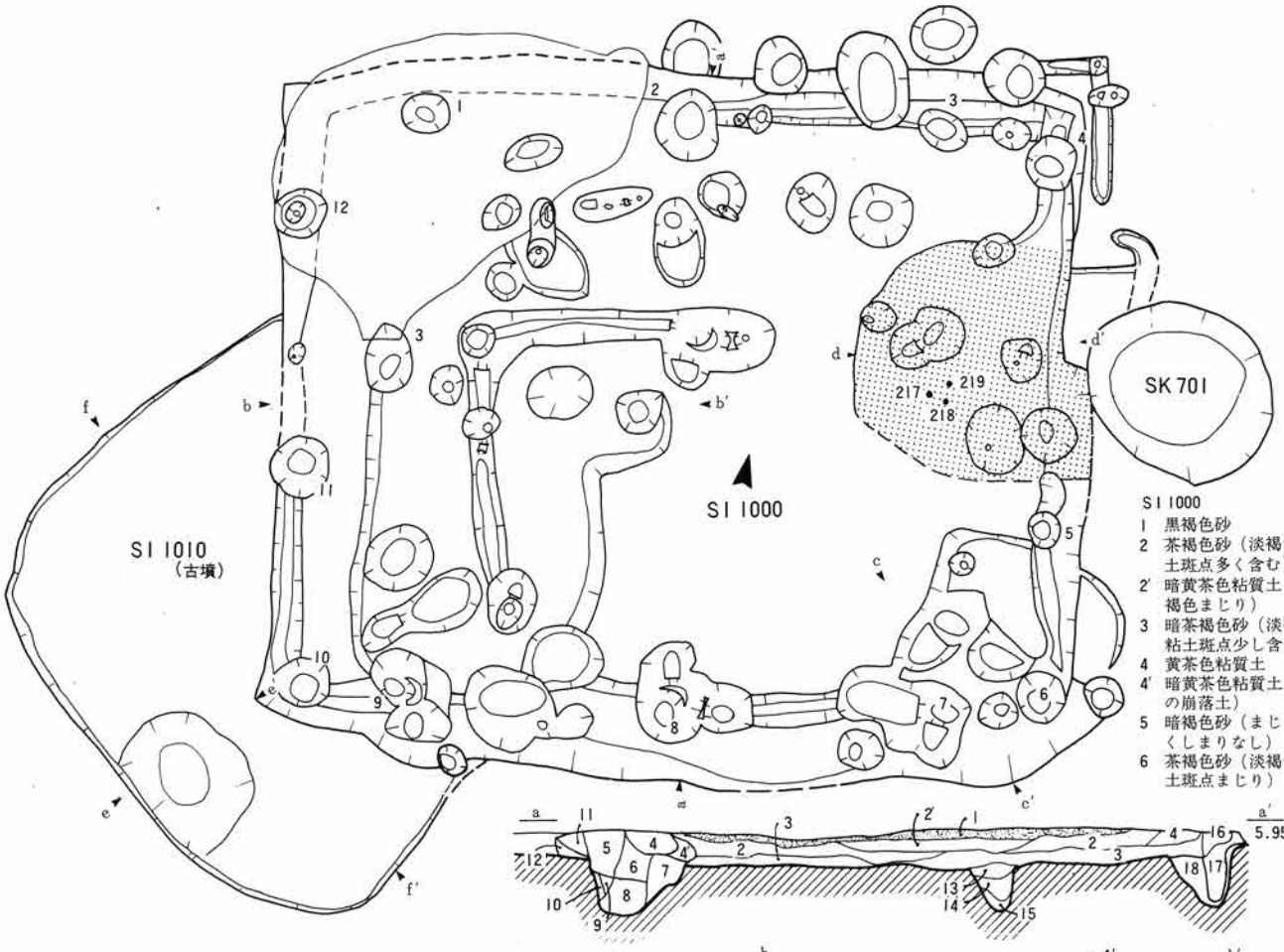


0　1:80　3m

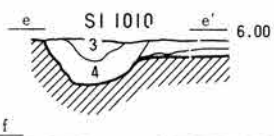
0　1:60　2m
（カマド）

本文 70～71頁

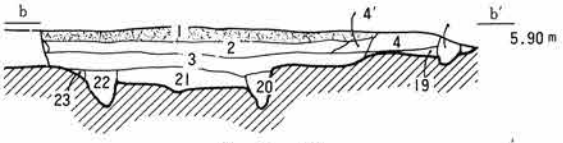
遺構個別実測図23　1:80　SI 1000、SI 1010

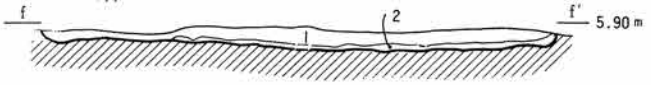


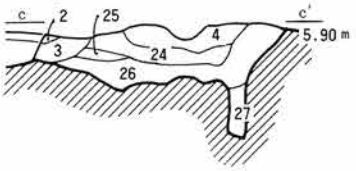
SI 1000
1　黒褐色砂
2　茶褐色砂（淡褐色粘土斑点多く含む）
2'　暗黄茶色粘質土（茶褐色まじり）
3　暗茶褐色砂（淡褐色粘土斑点少し含む）
4　黄茶色粘質土
4'　暗黄茶色粘質土（Aの崩落土）
5　暗褐色砂（まじりなくしまりなし）
6　茶褐色砂（淡褐色粘土斑点まじり）

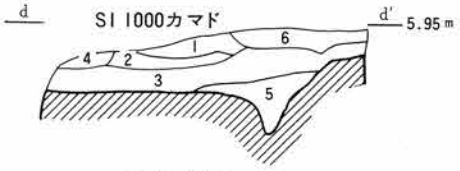


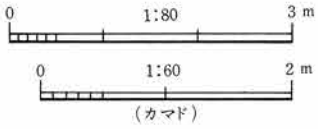
SI 1010
1　暗褐色砂
2　黄褐色砂(地山に近い)
3　暗茶褐色砂(土坑)
4　暗褐色砂(土坑)







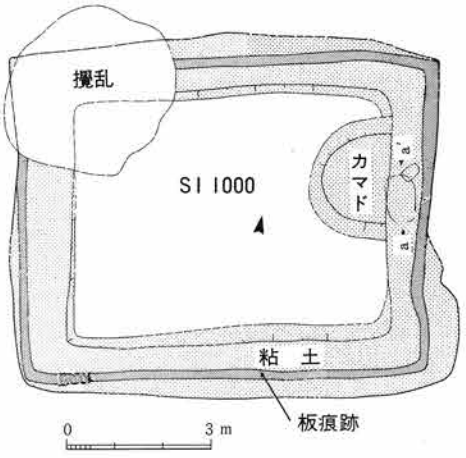




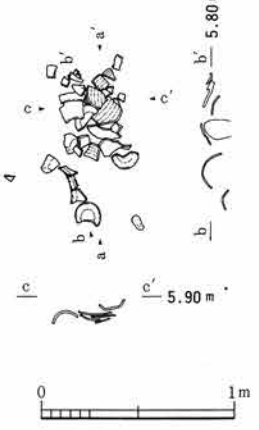
SI 1000カマド
1　褐色粘土まじり
2　茶褐色粘質土
3　暗褐色砂(粘土まじり)
4　茶褐色(淡褐色粘土まじり)
5　灰褐色砂
6　黄茶色粘質土

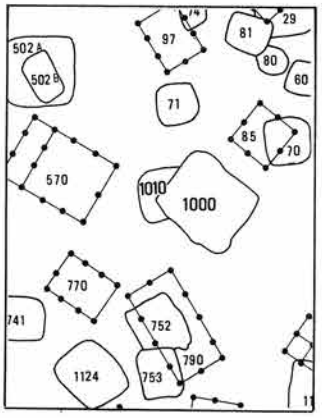
SI 1000
7　淡茶褐色砂（粘土斑点多い）
8　暗褐色砂（淡褐色粘土斑点含む）
9　黄褐色砂
10　黄白色砂
11　暗褐色砂（やや茶色）
12　暗褐色砂
13　茶褐色砂
14　暗褐色砂
15　暗黄茶色砂
16　暗茶褐色砂
17　暗黄褐色砂＋黄色砂
18　暗黄褐色砂（まじりなし）
19　黄褐色砂
20　黄茶色砂質土
21　暗黄色砂（よくしまる、まじりなし）
22　茶褐色砂（粘土斑点ほとんどはいらない
23　淡茶褐色砂
24　淡茶褐色砂（淡褐色粘土斑点含む）
25　暗黄茶色砂（粘土含まない）
26　淡茶褐色砂（淡褐色粘土斑点含む）
27　ピット

内周堤模式図

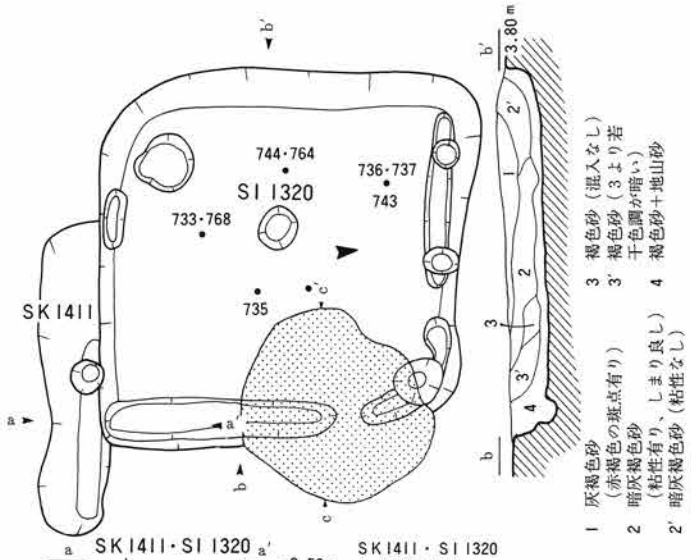


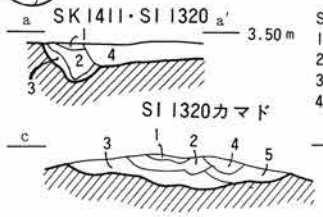
SI 1000カマド土器





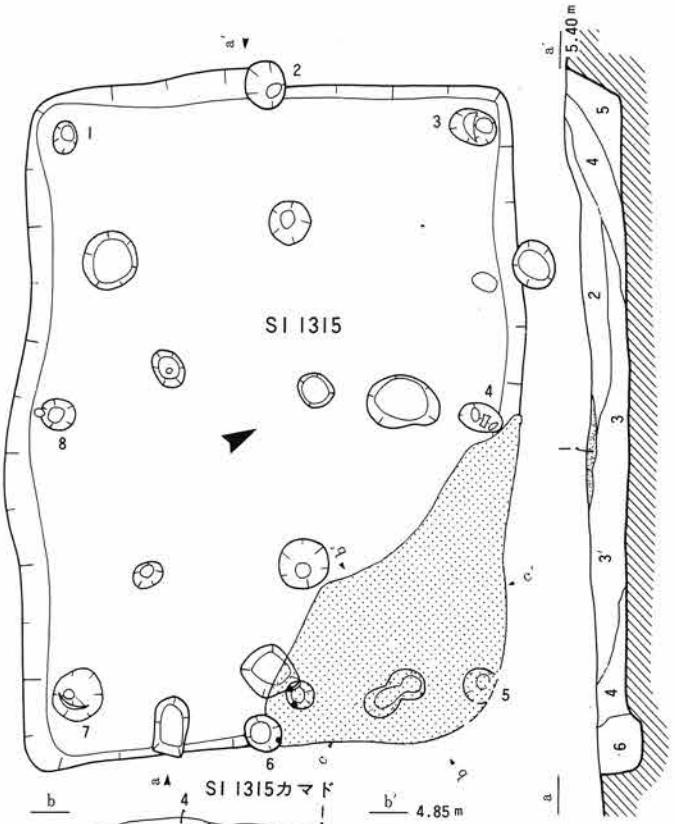
本文 71頁

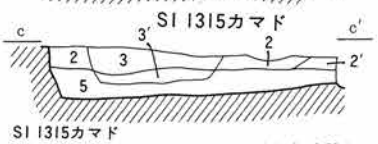




SK 1411・SI 1320
1　淡暗褐色砂
2　淡褐色砂（地山斑点有り）
3　2＋地山砂
4　SI 1320、4層

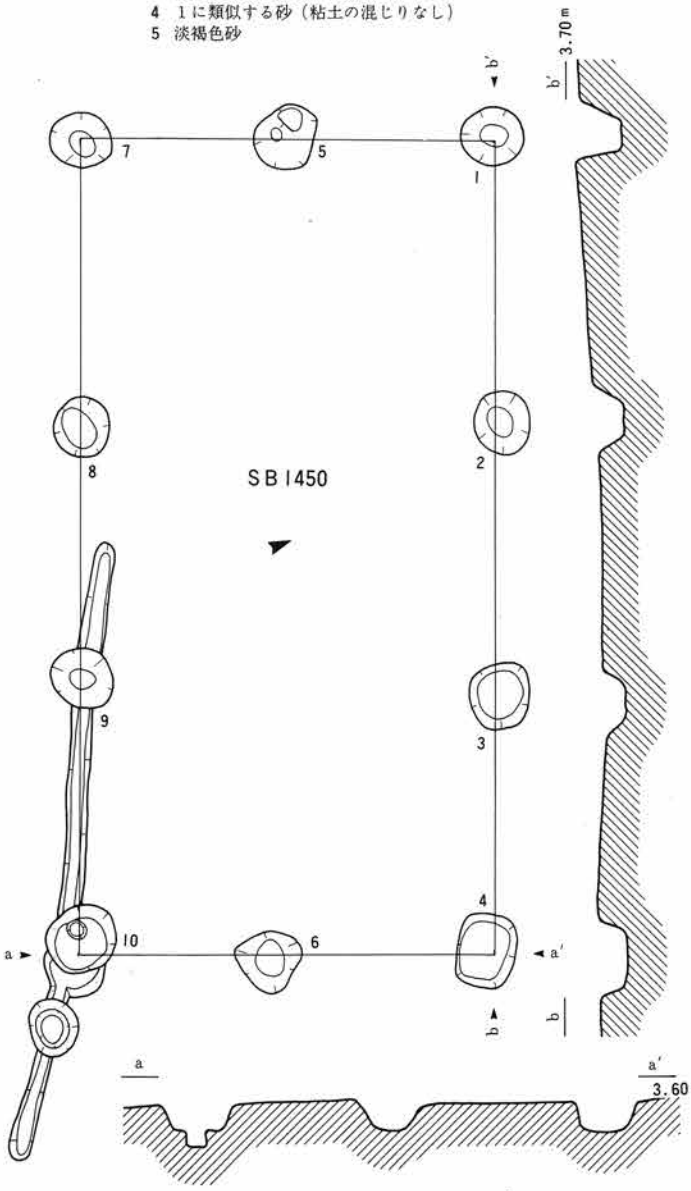
SI 1320カマド
1　黒色砂＋灰褐色粘質土（粘性有り）
2　灰褐色粘質土（粘性強、しまり有り）
3　褐色砂（黄褐色砂の斑点若干有り）
4　1に類似する砂（粘土の混じりなし）
5　淡褐色砂

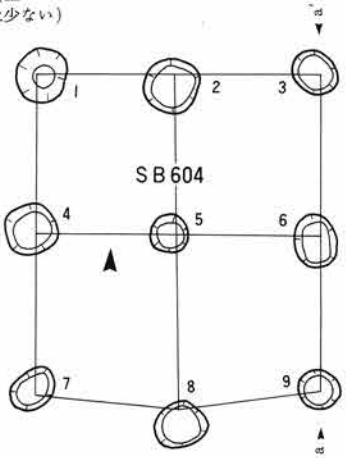


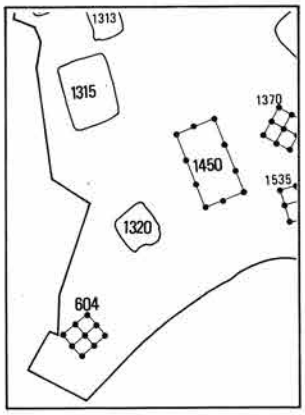


SI 1315カマド
1　暗黄茶色砂
2　黄茶色粘質土
2'　黄茶色砂質土
3　赤茶色粘質土（焼）
3'　暗赤褐色砂質土（3より粘土少ない）
4　暗褐色砂質土（粘土粒含む）
5　暗褐色砂

1　黒褐色砂
2　暗褐色砂質土（粒土斑点、まとまりよくしまる）
3　暗褐色砂（やや粘土含む）
4　茶褐色砂
5　黄茶色砂（まとまりなし）
6　黄茶色砂質土（やや粘土含む）

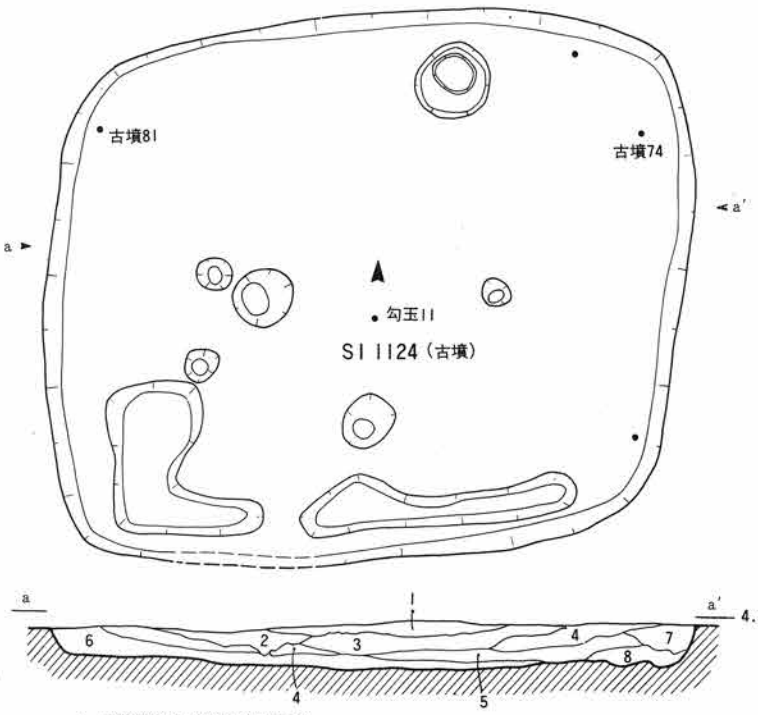


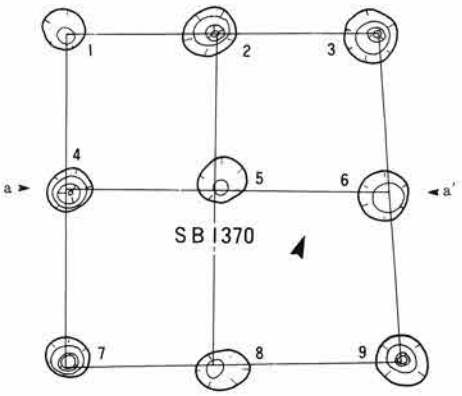




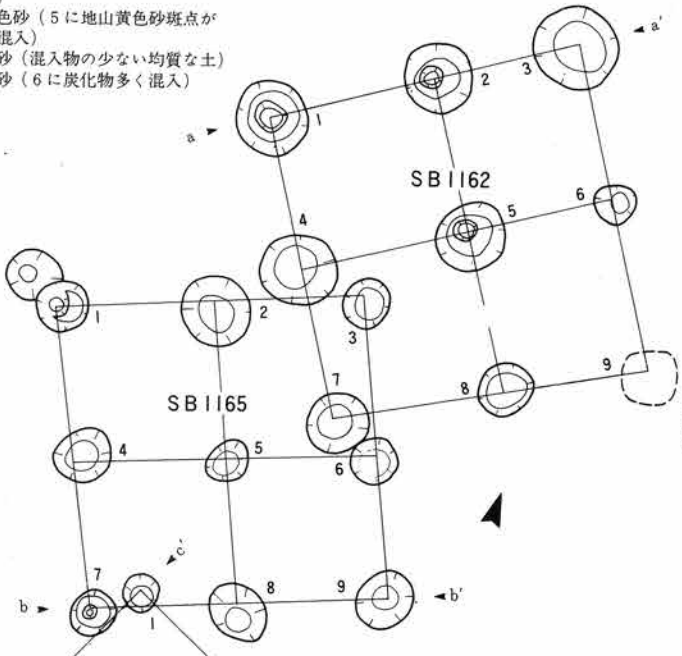
0　1：80　3m
0　1：60　2m
（カマド）

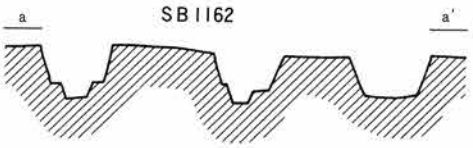
遺構個別実測図25　1:80　SI 1124、SB 1370、SB 1162、SB 1165、SB 1535、SK 1373

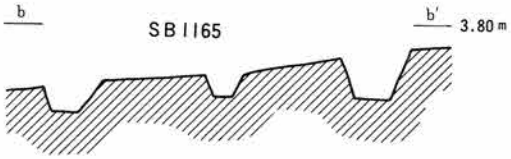


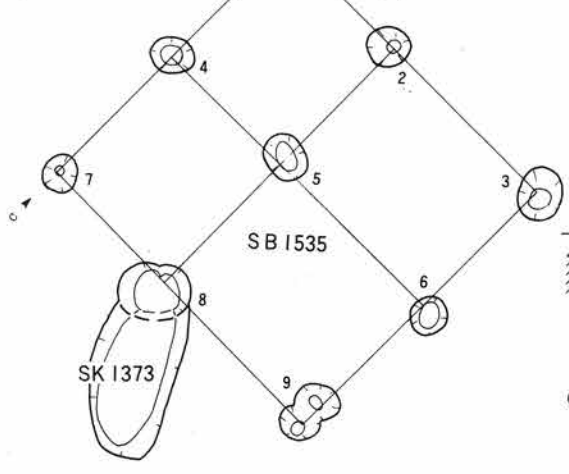


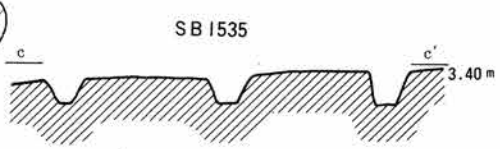
1 暗黄褐色砂（奈良平安含む）
2 暗褐色砂（しまりなし）
3 褐色砂（部分的に暗褐色砂含む）
4 褐色砂（部分的に黄褐色砂含む）
5 暗褐色砂（しまりなし、少し黒味をおびる）
6 暗黄褐色砂（5に地山黄色砂斑点が斑状に混入）
7 黄褐色砂（混入物の少ない均質な土）
8 暗褐色砂（6に炭化物多く混入）

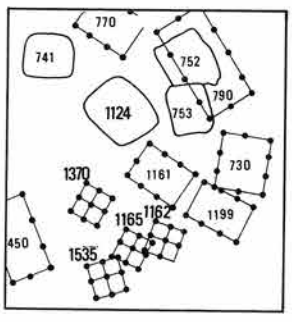


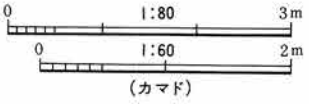




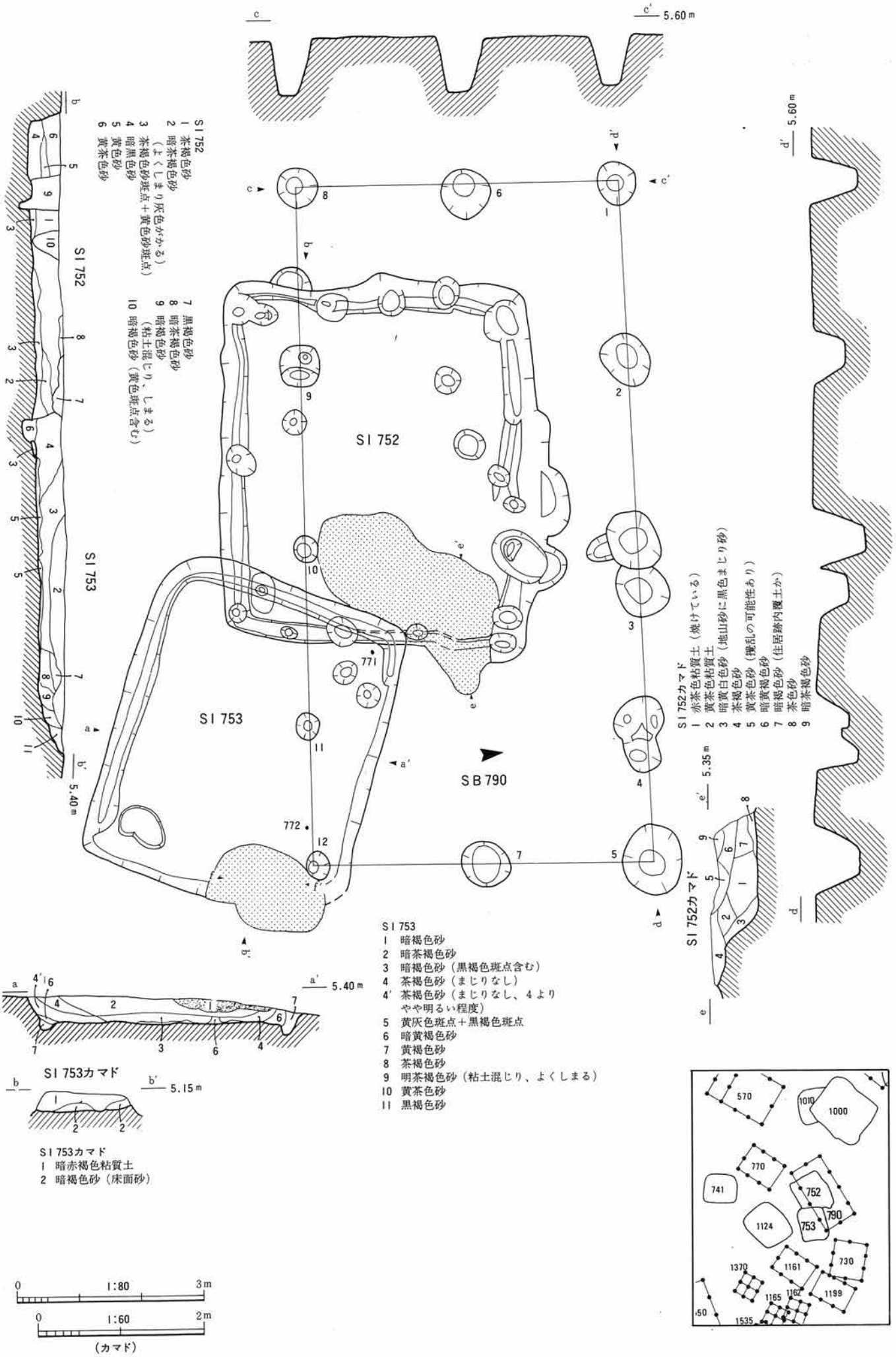






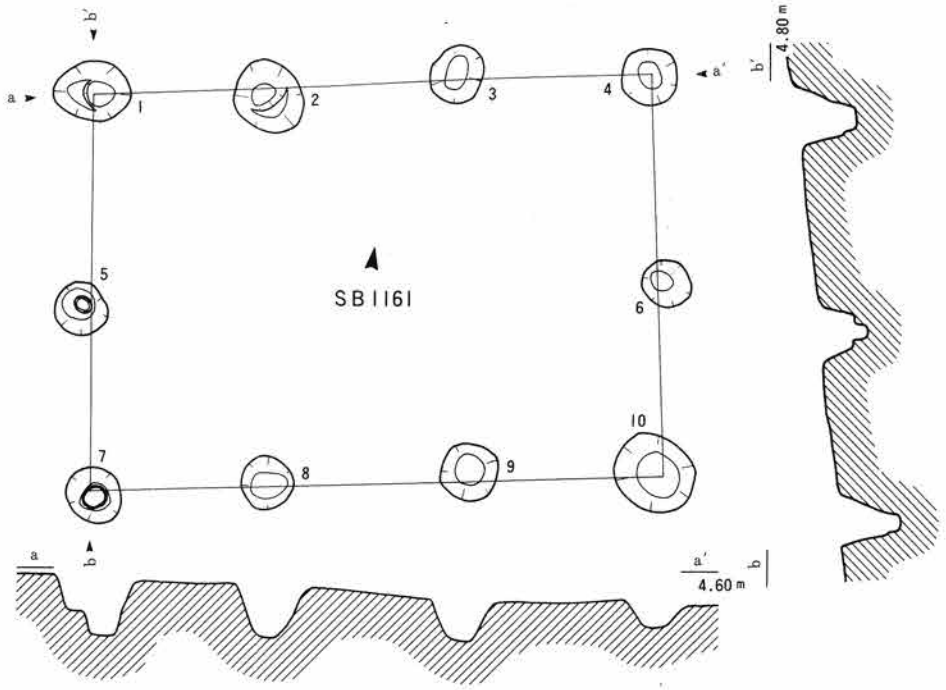


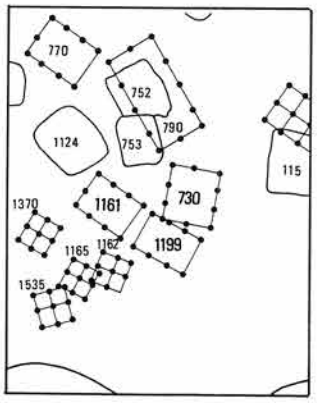
本文 72～73頁・78頁

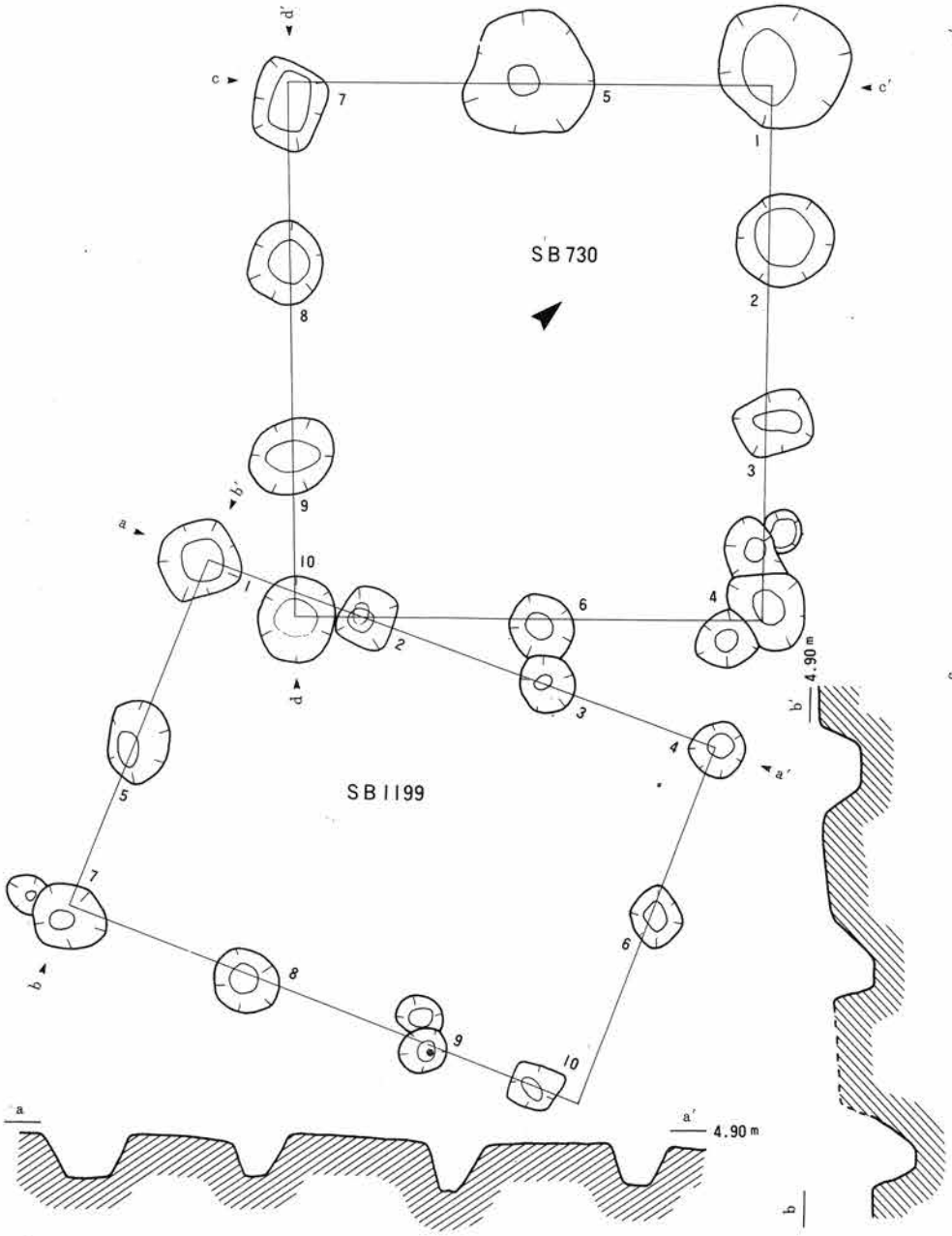

SI 752
SI 753
SB 790
SI 752
1 茶褐色砂
2 暗茶褐色砂（よくしまり灰色がかる）
3 茶褐色砂斑点＋黄色砂斑点）
4 暗黒色砂
5 黄色砂
6 黄茶色砂
7 黒褐色砂
8 暗茶褐色砂
9 暗褐色砂（粘土混じり、しまる）
10 暗褐色砂（黄色斑点含む）
SI 752カマド
1 赤茶色粘質土（焼けている）
2 黄茶色粘質土
3 暗黄白色砂（地山砂に黒色まじり砂）
4 茶褐色砂
5 黄茶色砂（攪乱の可能性あり）
6 暗黄褐色砂
7 暗褐色砂（住居跡内覆土か）
8 茶色砂
9 暗茶褐色砂
SI 753
1 暗褐色砂
2 暗茶褐色砂
3 暗褐色砂（黒褐色斑点含む）
4 茶褐色砂（まじりなし）
4′ 茶褐色砂（まじりなし、4よりやや明るい程度）
5 黄灰色斑点＋黒褐色斑点
6 暗黄褐色砂
7 黄褐色砂
8 茶褐色砂
9 明茶褐色砂（粘土混じり、よくしまる）
10 黄茶色砂
11 黒褐色砂
SI 753カマド
1 暗赤褐色粘質土
2 暗褐色砂（床面砂）
5.60m
5.40m
5.35m
5.15m
0 1:80 3m
0 1:60 2m
（カマド）

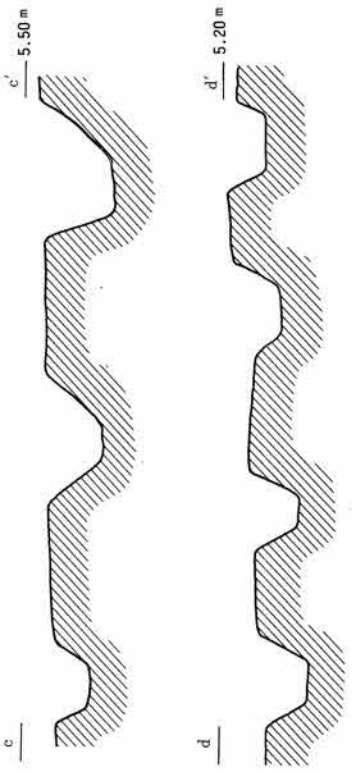
本文 73～74頁

遺構個別実測図27　1:80　SB1161、SB730、SB1199







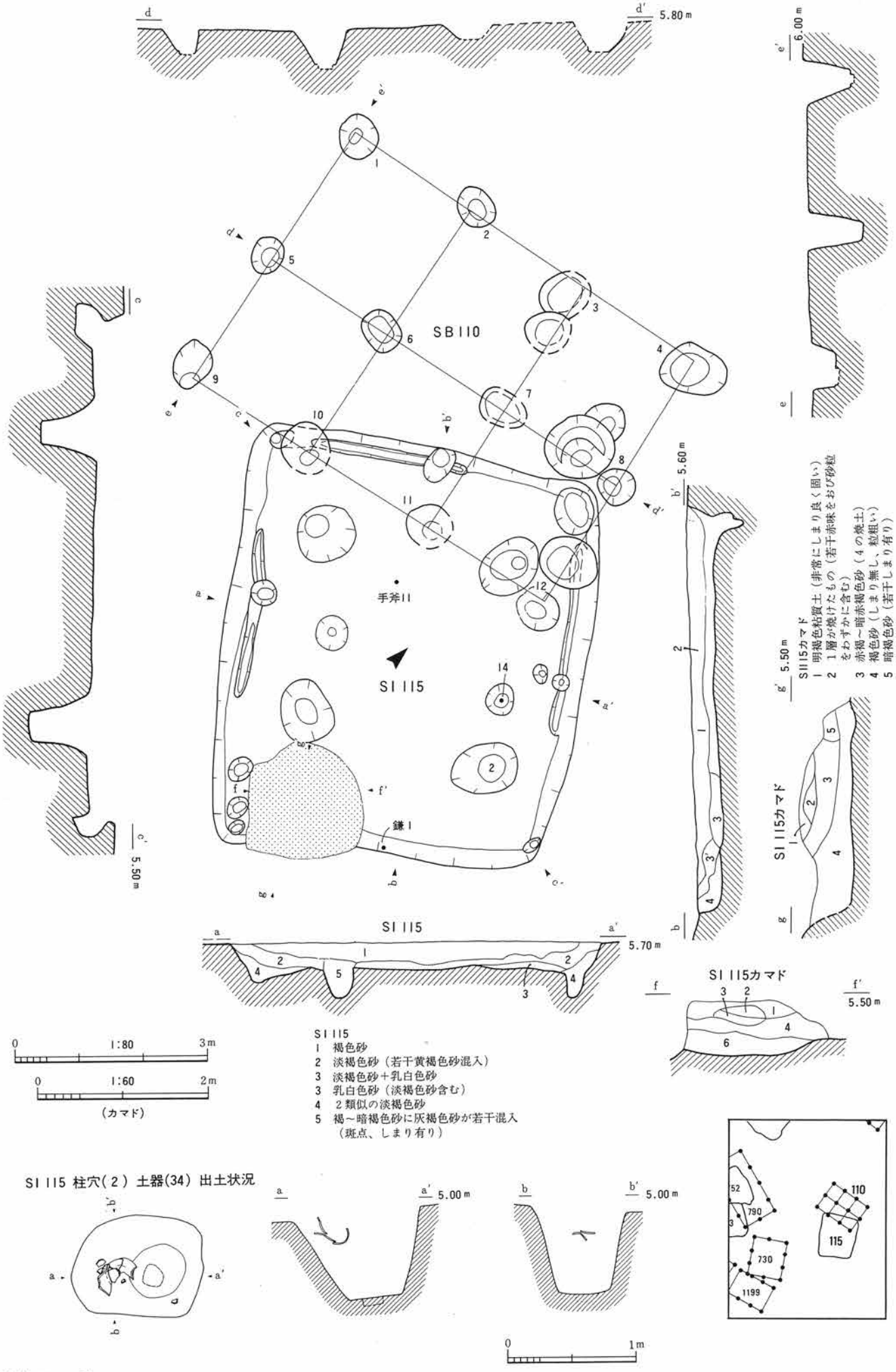


0　1:80　3m

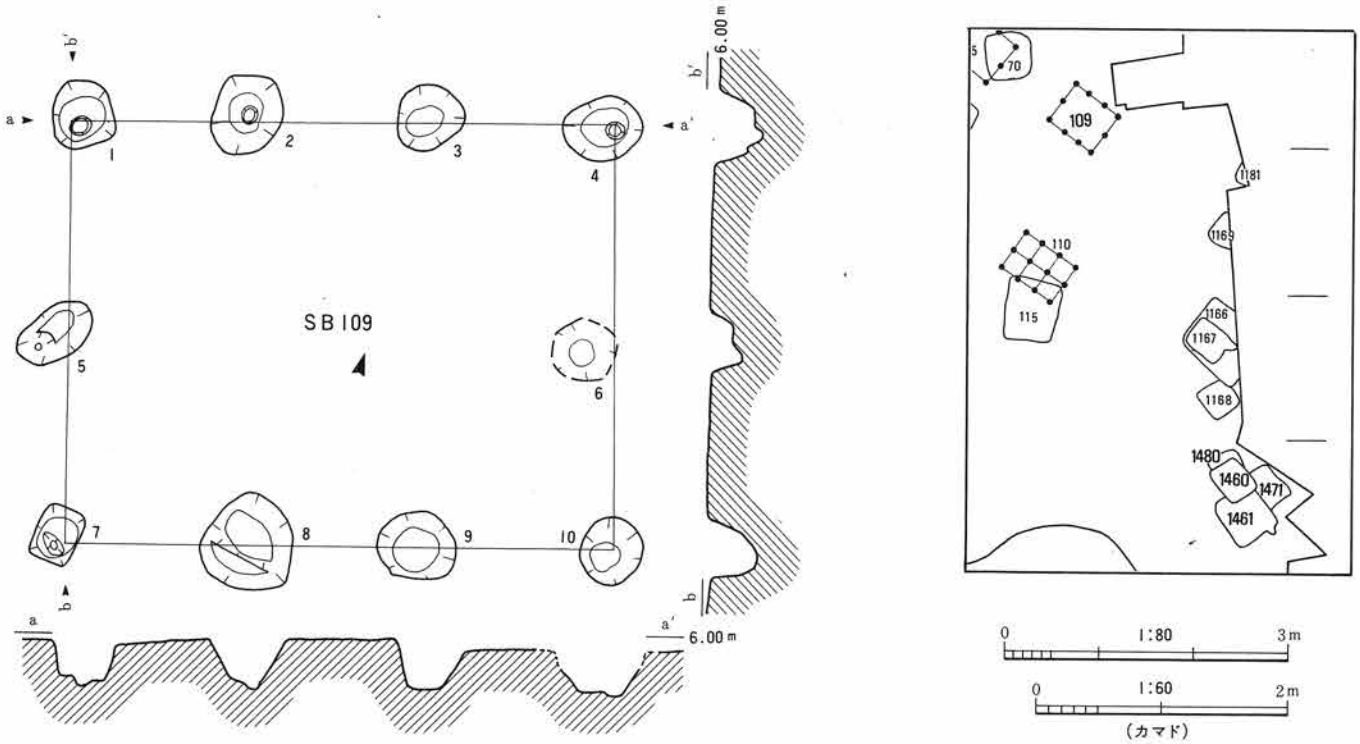
0　1:60　2m

(カマド)

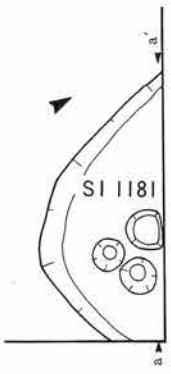
本文 74頁


SB 110
SI 115
手斧11
鎌1
SI 115カマド
SI 115カマド
1 明褐色粘質土（非常にしまり良く固い）
2 1層が焼けたもの（若干赤味をおび砂粒をわずかに含む）
3 赤褐～暗赤褐色砂（4の焼土）
4 褐色砂（しまり無し、粒粗い）
5 暗褐色砂（若干しまり有り）
6 茶褐色砂
SI 115
1 褐色砂
2 淡褐色砂（若干黄褐色砂混入）
3 淡褐色砂＋乳白色砂
3 乳白色砂（淡褐色砂含む）
4 2類似の淡褐色砂
5 褐～暗褐色砂に灰褐色砂が若干混入（斑点、しまり有り）
0 1:80 3m
0 1:60 2m
（カマド）
SI 115 柱穴（2）土器(34) 出土状況
0 1m

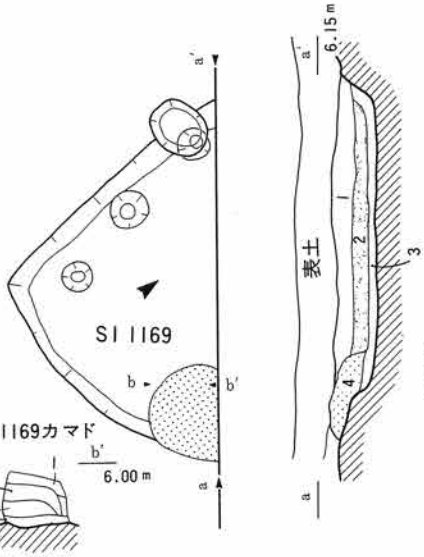
遺構個別実測図29　1:80　SB109、SI1461、SI1471、SI1460、SI1480



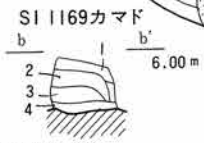
本文 75～76頁



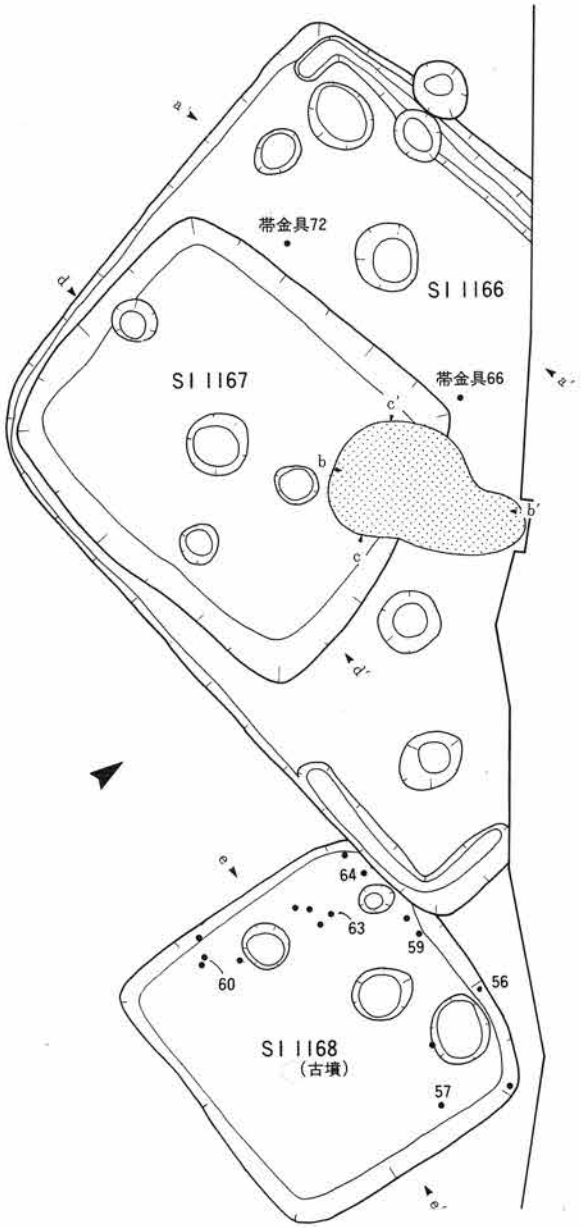
SI 1181
1 黒褐色砂
2 暗褐色砂（よくしまる、多少粘性有り）
3 明褐色土（褐色土に地山砂と2が斑状に混入した土（しまり有り））

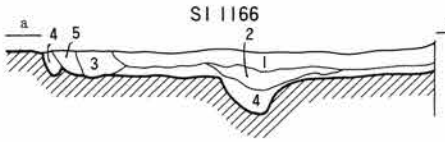


SI 1169
1 褐色土、明褐色土、暗褐色土を斑状に含むよくしまった土
2 黒褐色砂
3 黄褐色砂（暗褐色砂と地山砂の混合土、砂質あまりしまりなし）
4 カマド

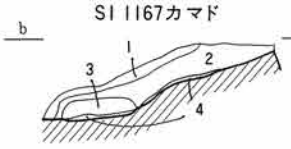


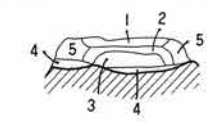
SI 1169カマド
1 褐色粘質砂＋暗褐色砂
2 灰黄褐色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 褐色砂（焼）
5 黄褐色砂



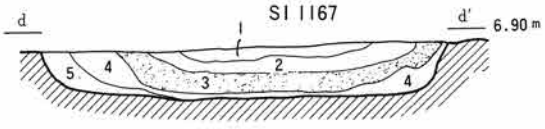


SI 1166
1 暗褐色砂
2 褐色砂
3 黄灰色粘質土
4 暗黄褐色砂（褐色土＋地山砂）
5 暗褐色砂

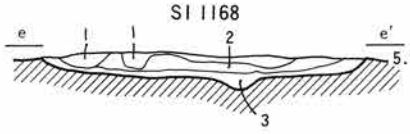




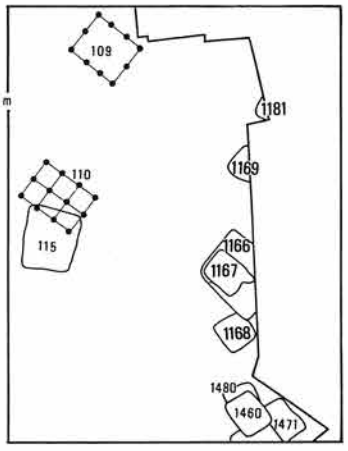
SI 1167カマド
1 灰黄褐色粘質土
2 黄褐色粘質土（部分的に焼けている）
3 赤褐色砂（焼）
4 地山砂と1・2・3層の混合土
5 灰黄褐色粘質土

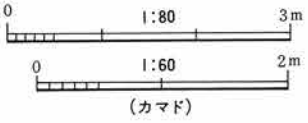


SI 1167
1 黒褐色砂
2 暗褐色砂
3 黒褐色砂
4 褐色砂（しまり有り）
5 明黄褐色砂

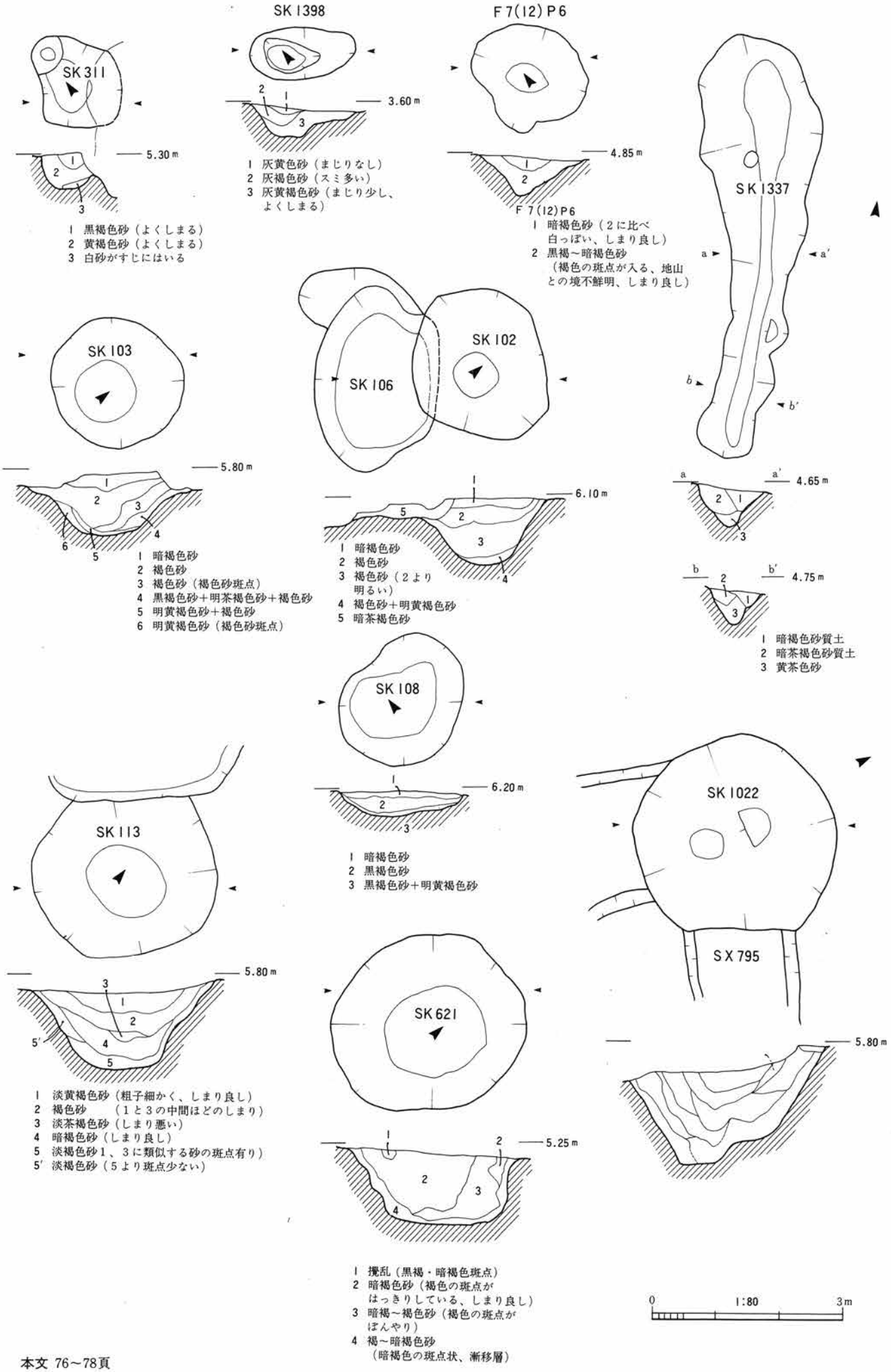


SI 1168
1 暗褐色砂
2 褐色砂
3 黄褐色砂＋地山砂



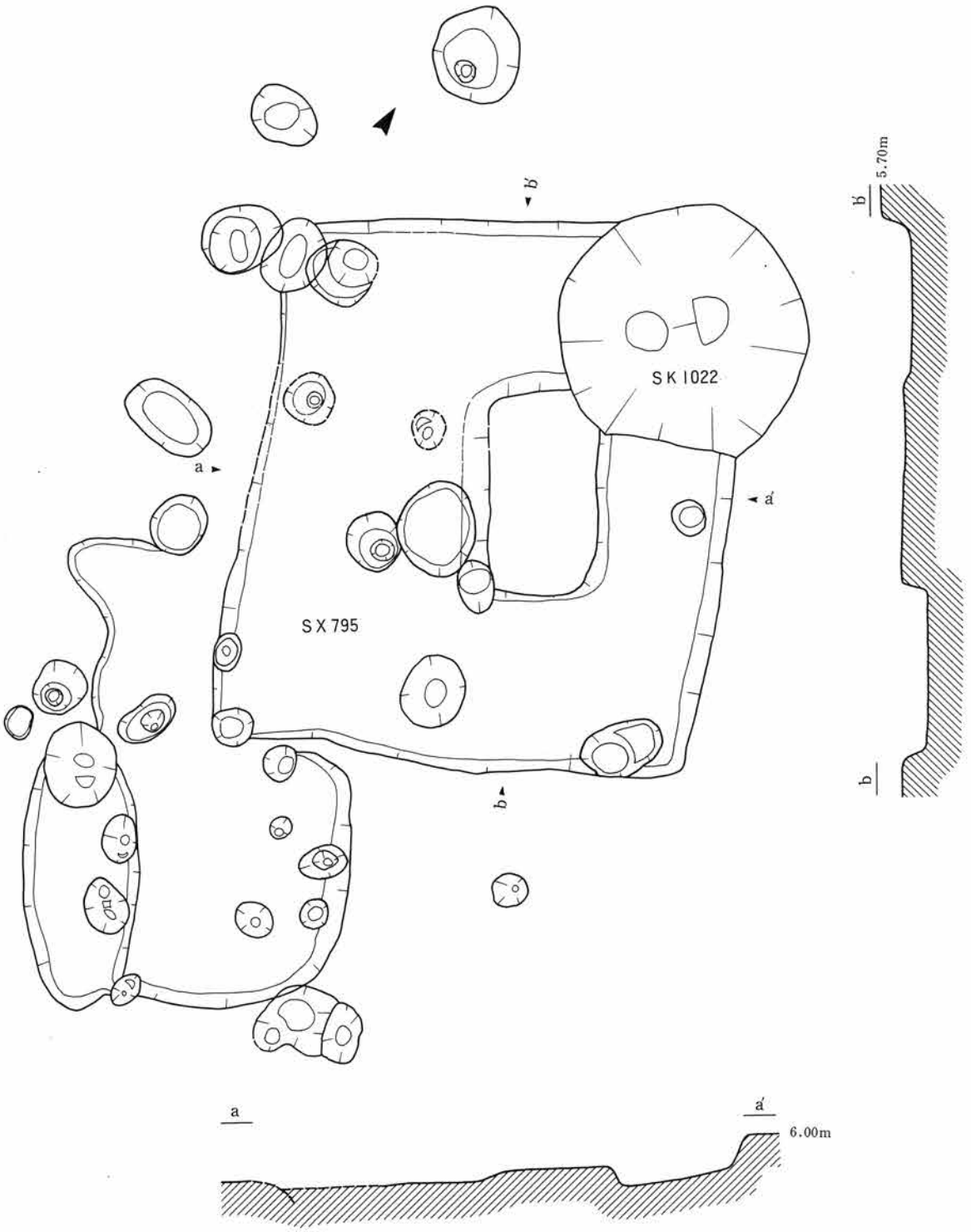


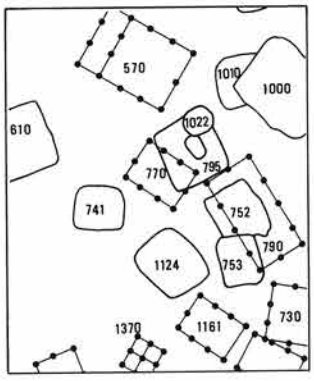
遺構個別実測図31　1:80　SK311、SK1398、F7(12)P6、SK103、SK106、SK102、SK1337、SK108、SK113、SK621、SK1022



本文 76～78頁

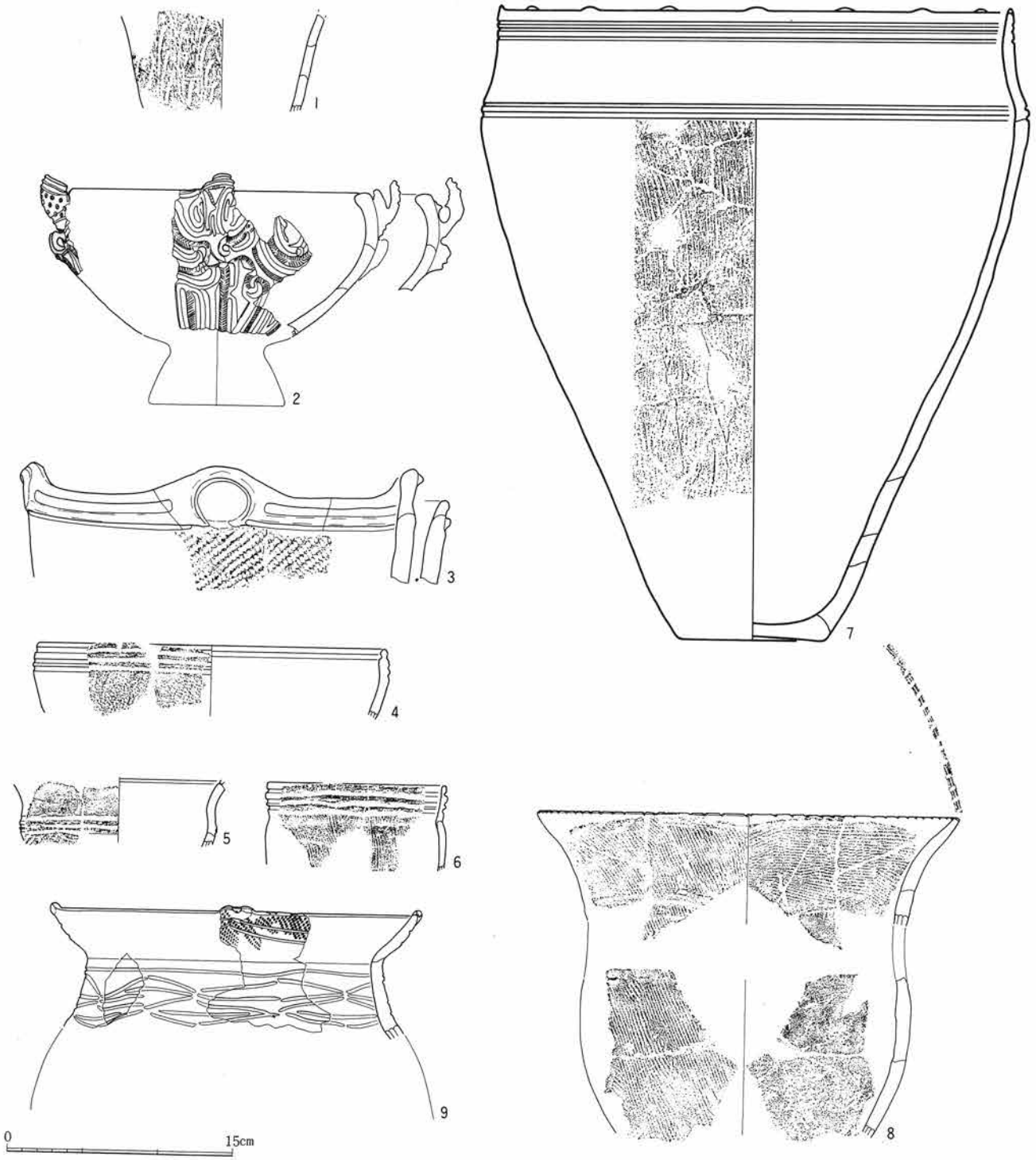
遺構個別実測図 32 1：80 SX 795

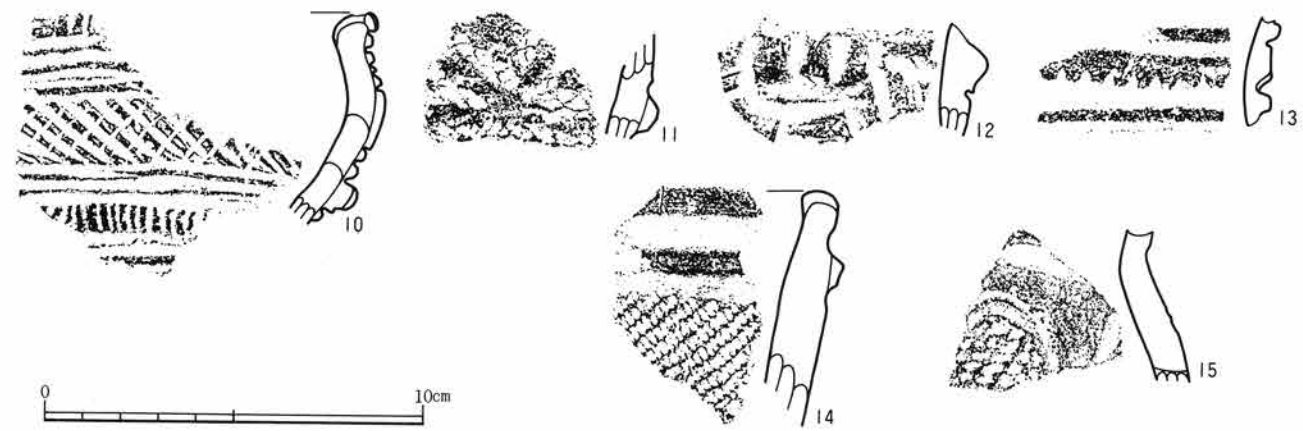




0 3 m

本文78頁



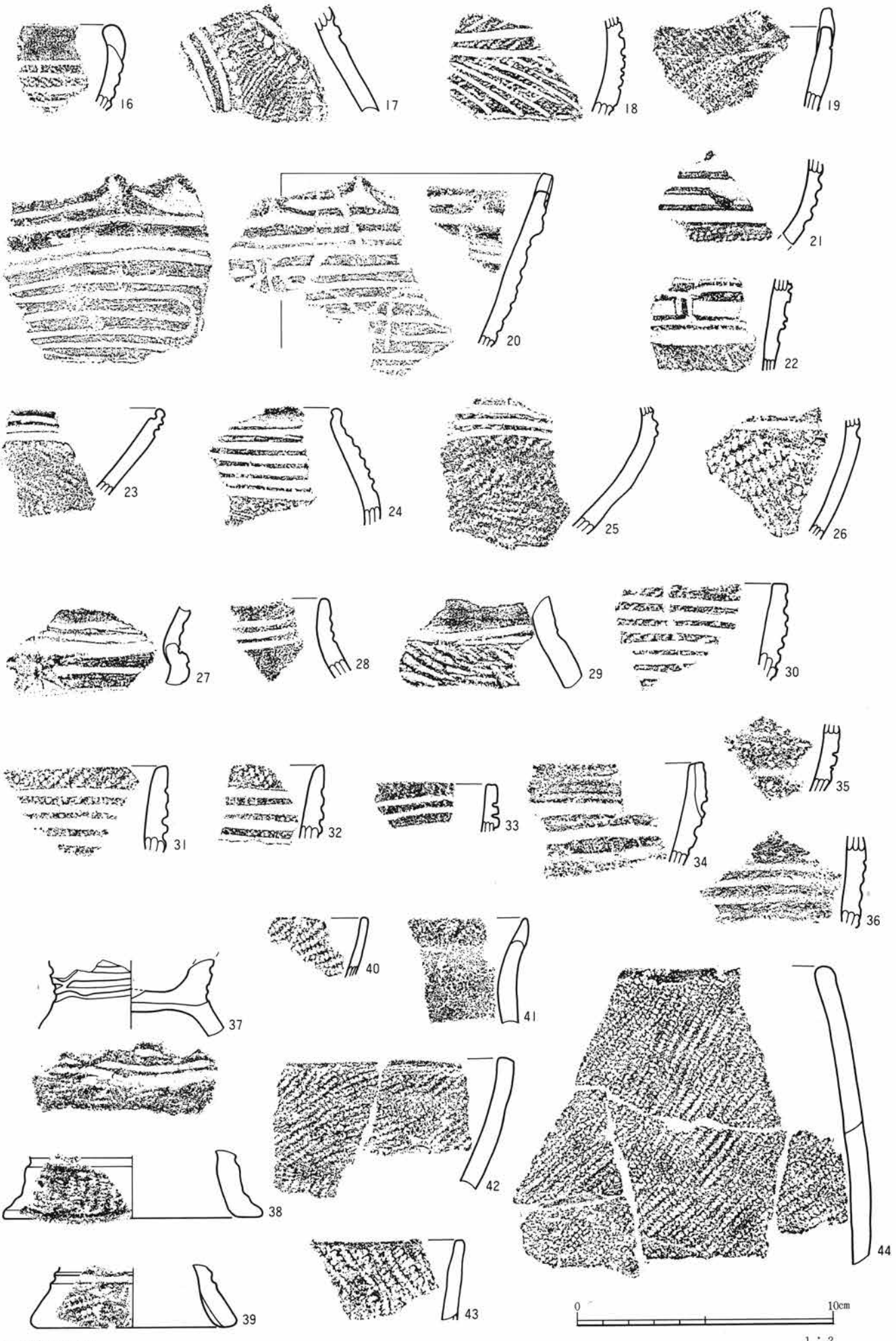


1～7・10～15縄文土器　8・9弥生土器

本文79～82頁

1～9　1：4

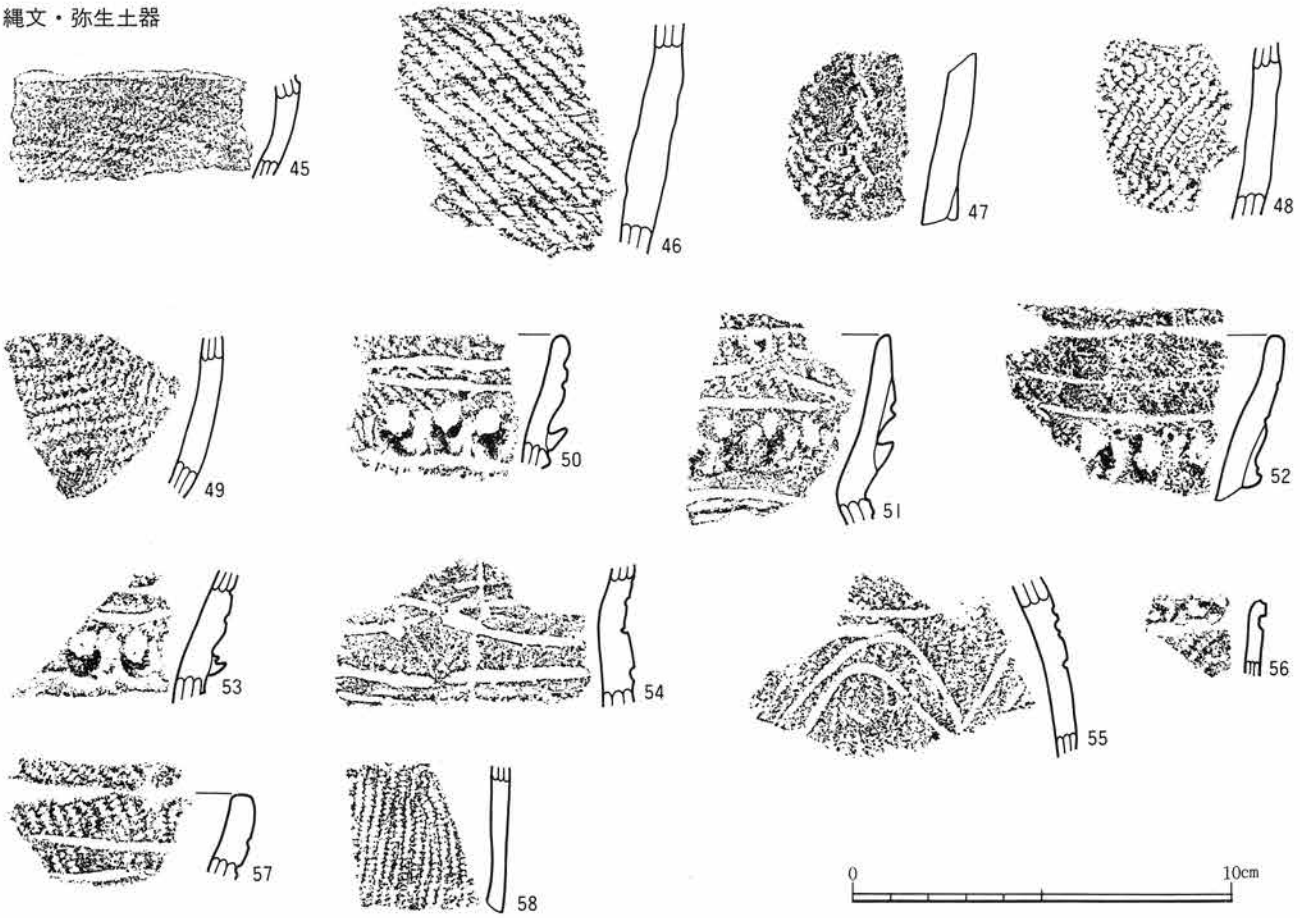
10～15　1：2



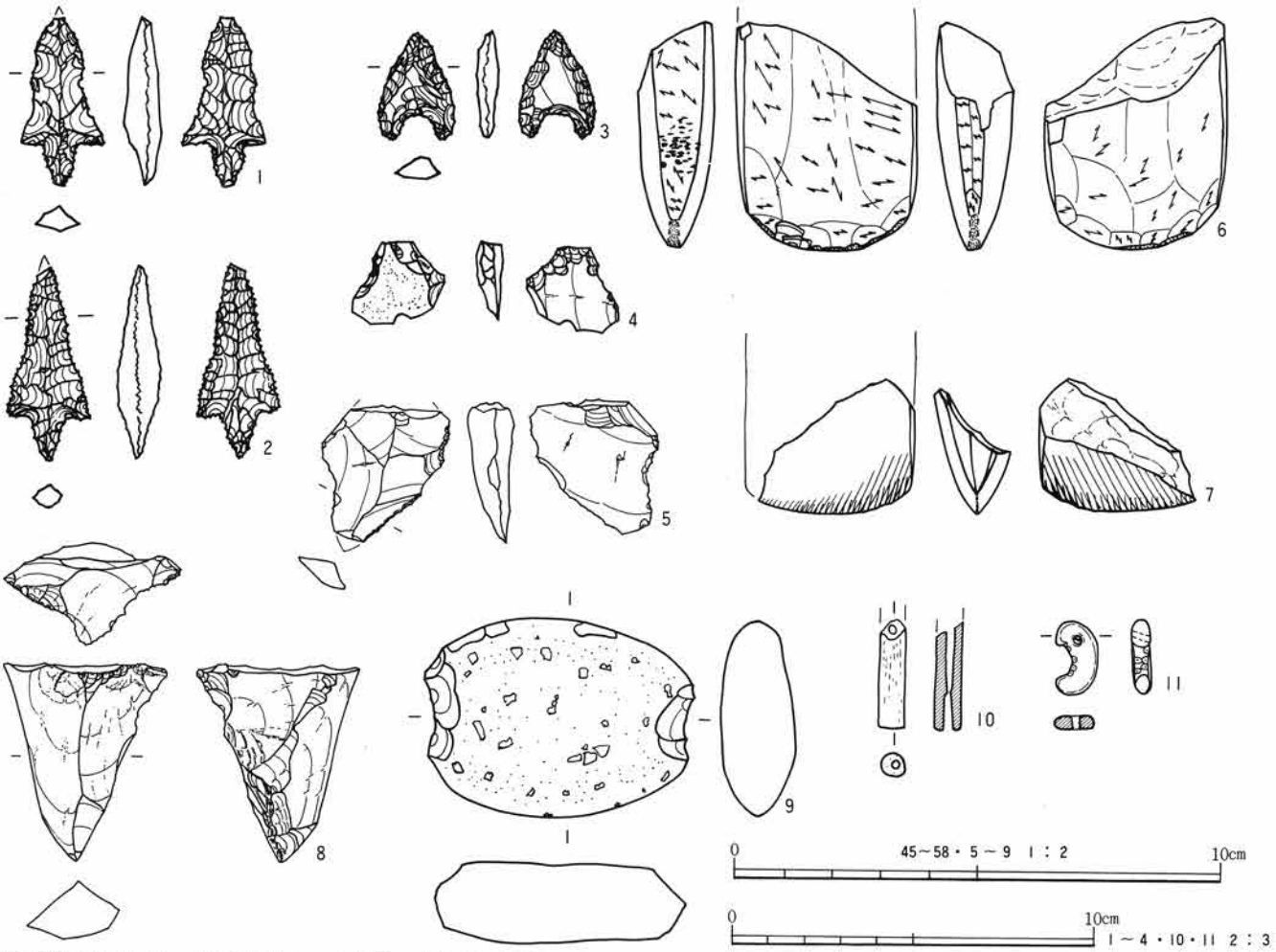
16～44 縄文土器
本文 79～81頁

1：2

縄文・弥生土器

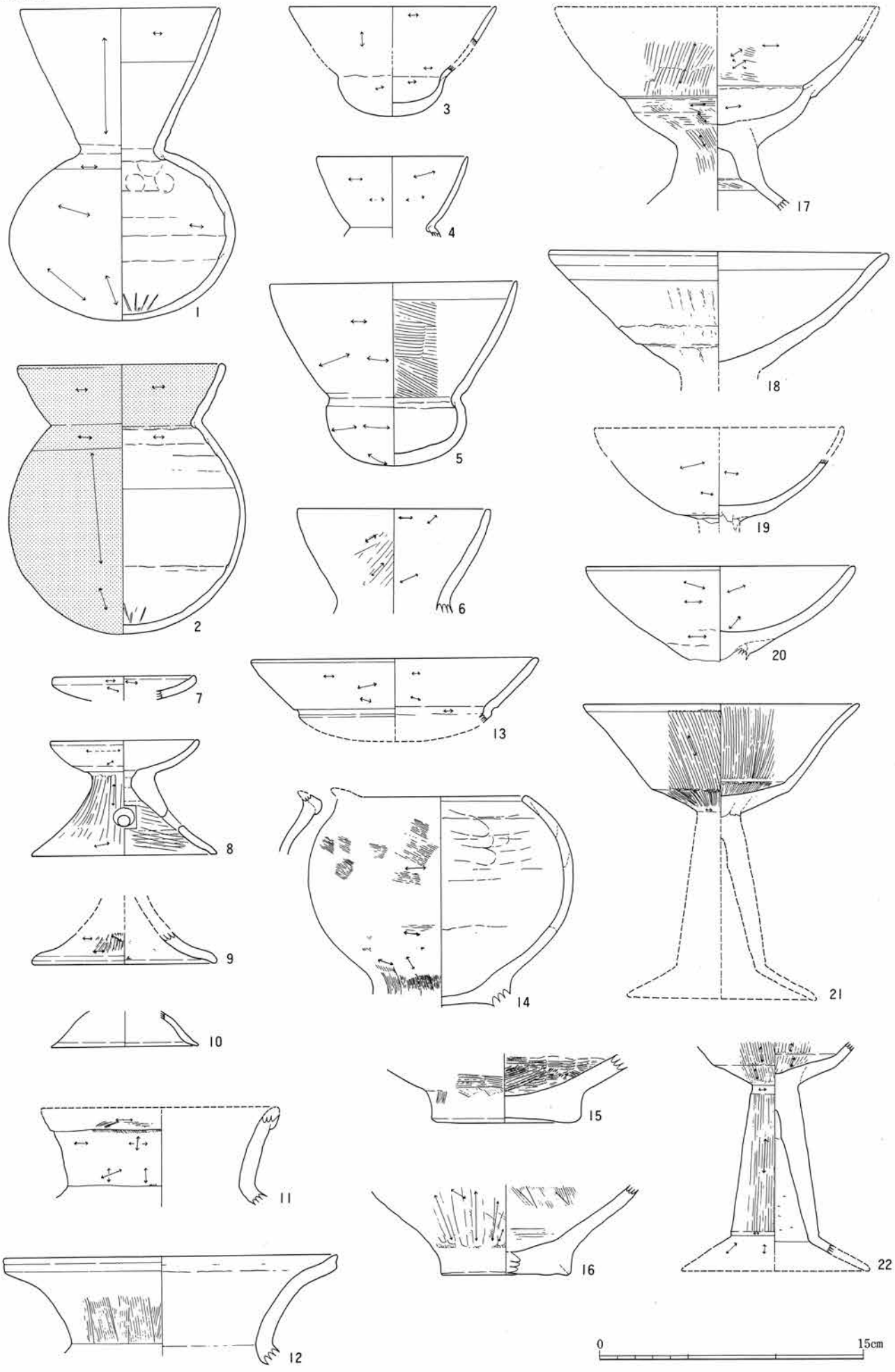


石器・石製品



45～49縄文土器 50～58弥生土器 1～9石器　本文81～83頁
10・11石製品(古墳時代)　本文92頁

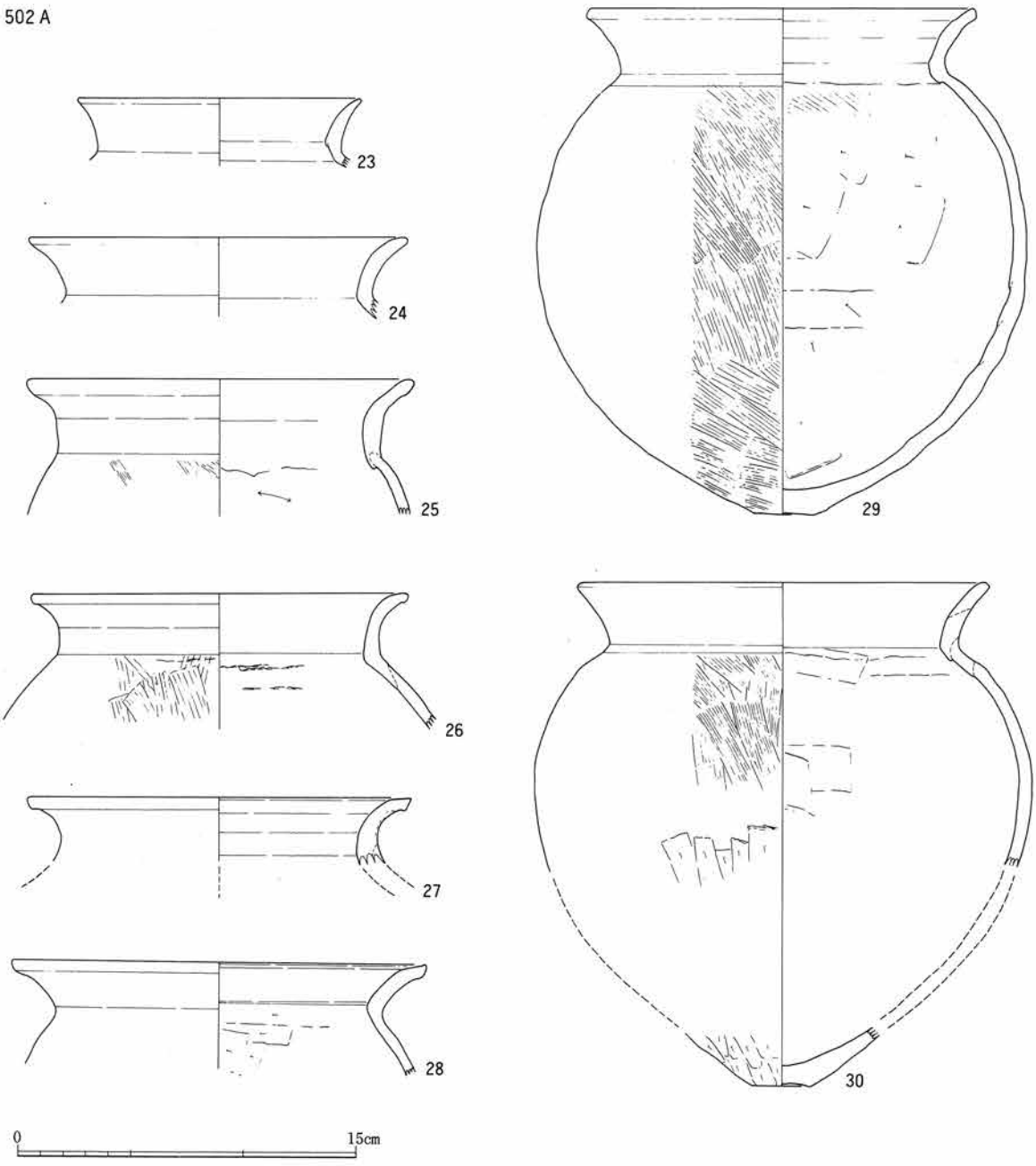
SI 502 A



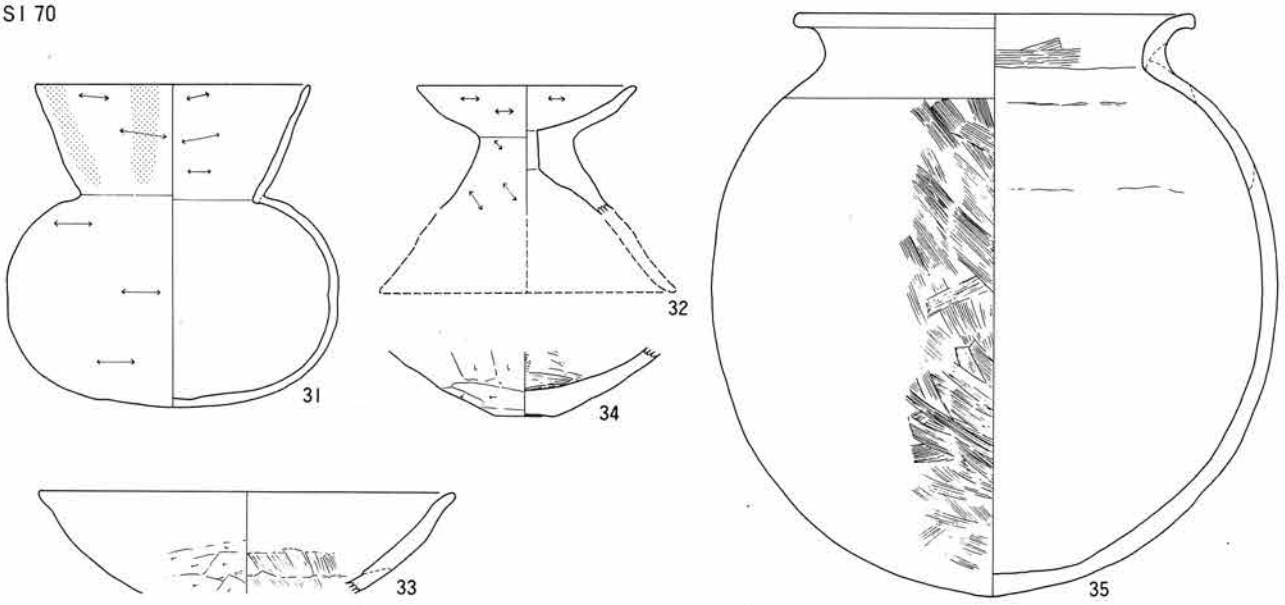
本文87・88頁，観察表243頁

2 赤 彩

SI 502 A



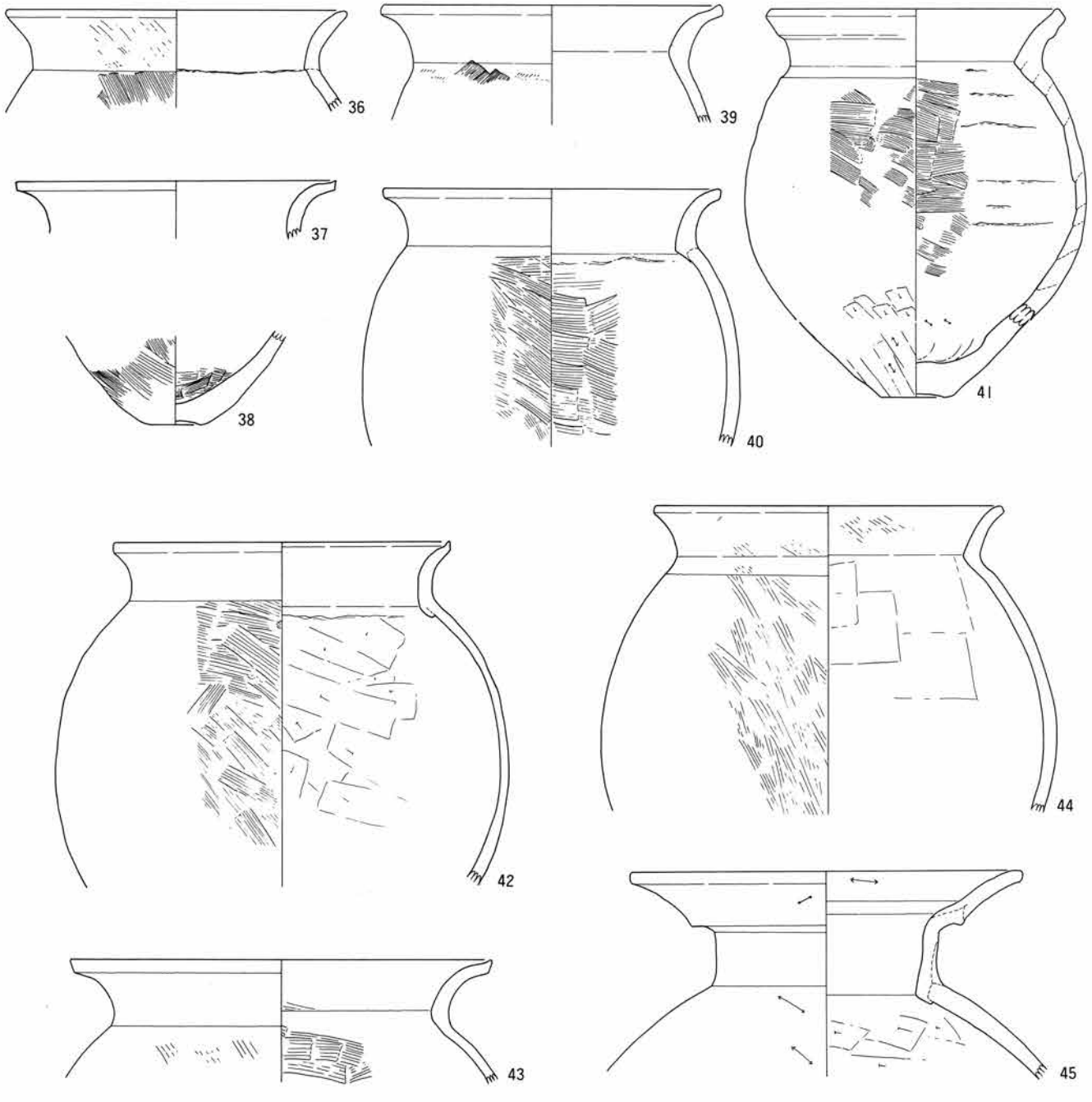
SI 70



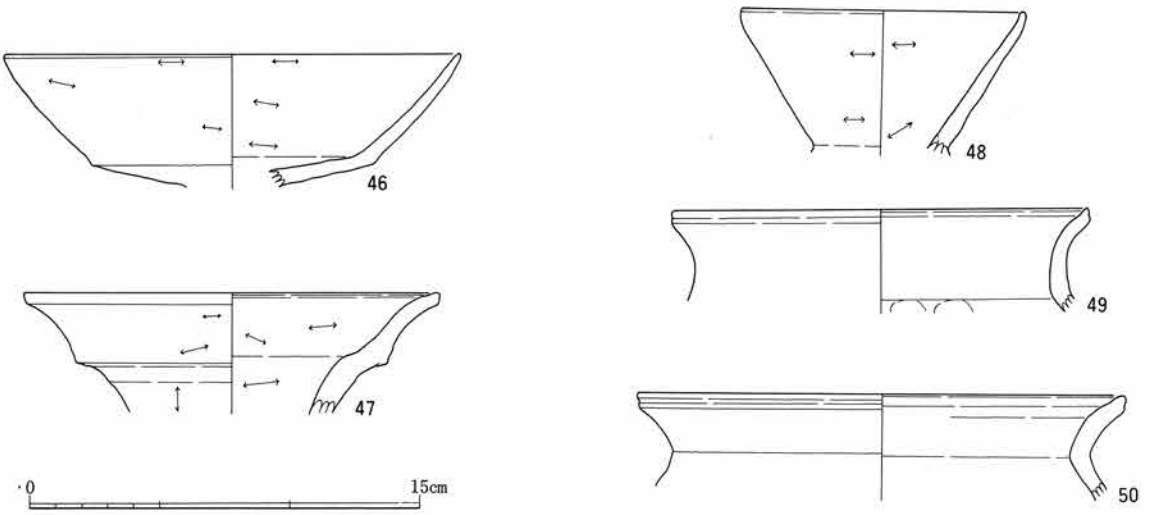
本文88・90頁，観察表243頁

31　部分赤彩

SI 1480

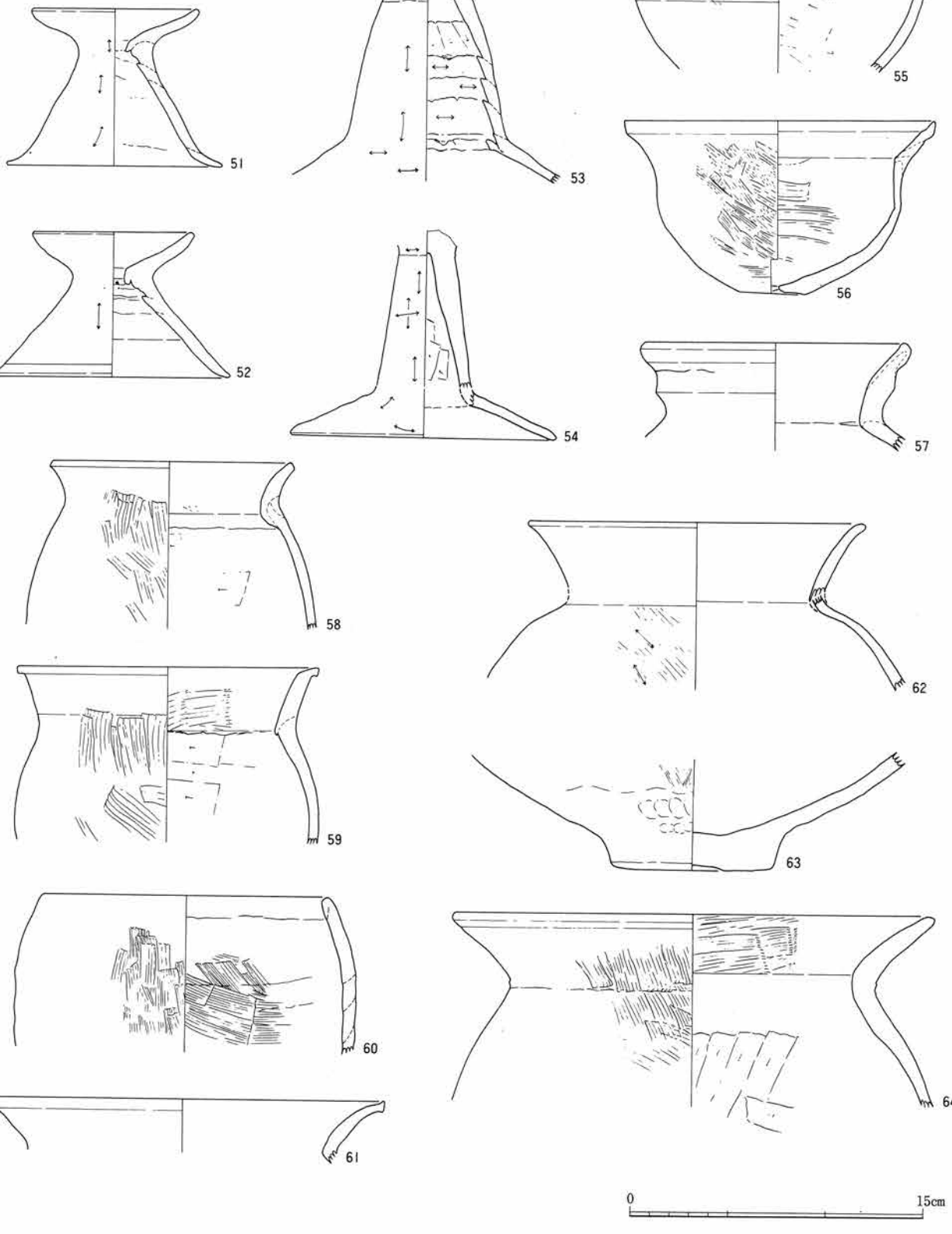


SI 1460

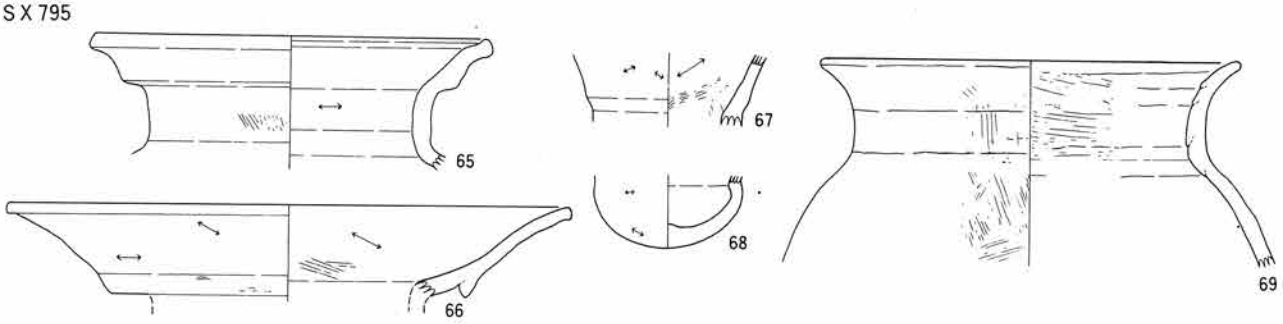


本文89・90頁，観察表243・244頁

SI 1168

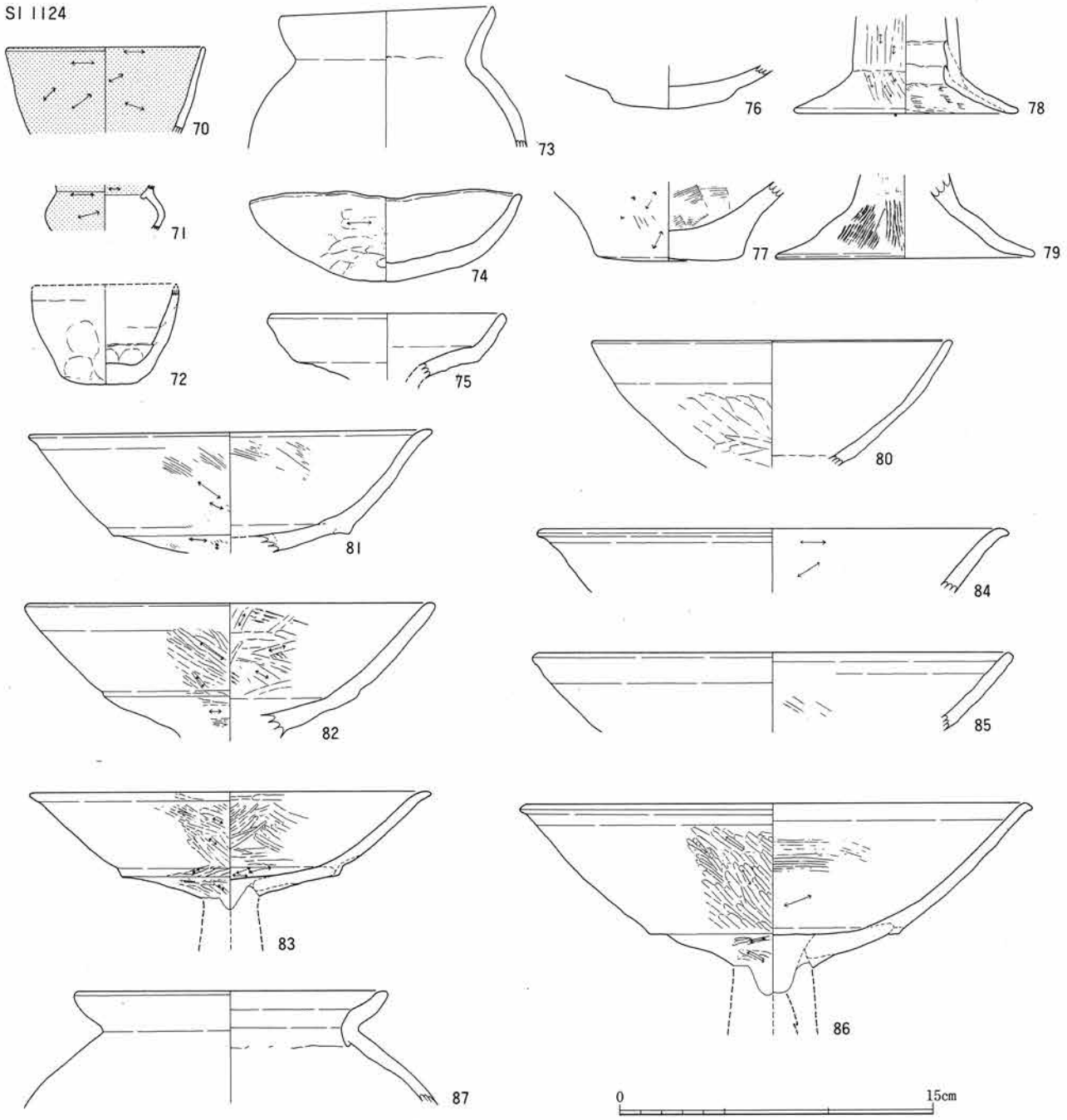


SX 795

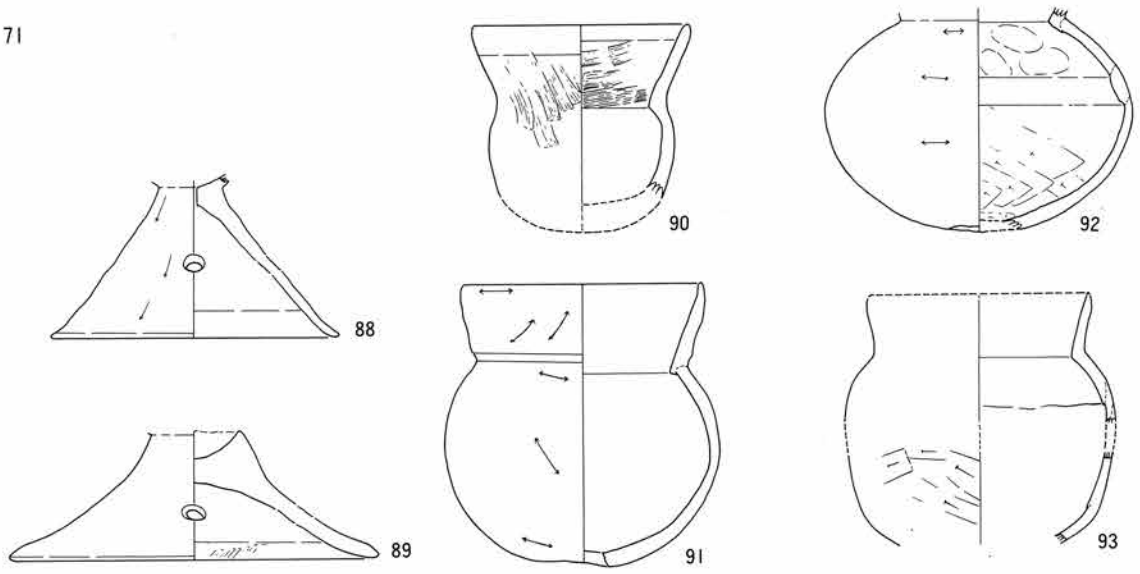


本文88～90頁，観察表244頁

SI 1124



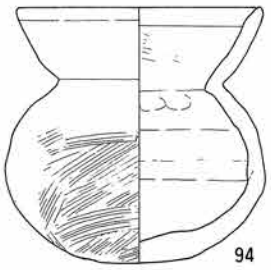
SI 71



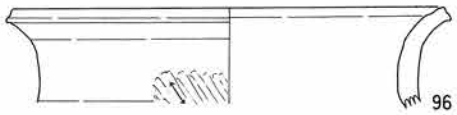
本文89・90頁，観察表244・245頁

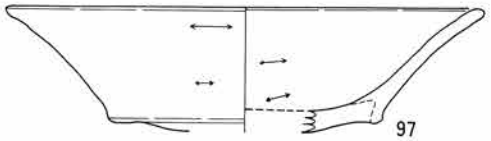
70・71　赤　彩

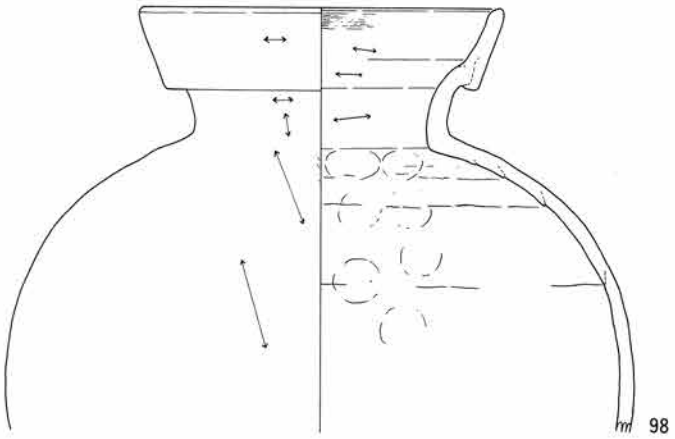
SI 115


94

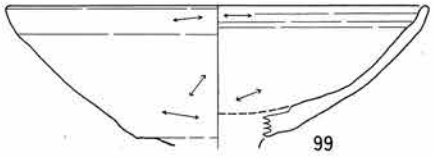
95

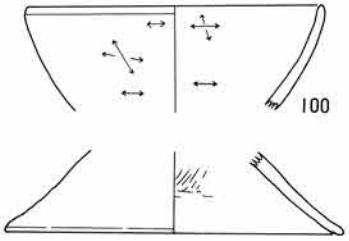

96


97

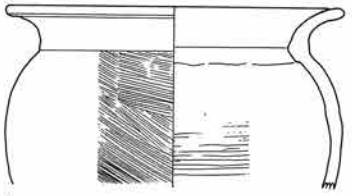

98

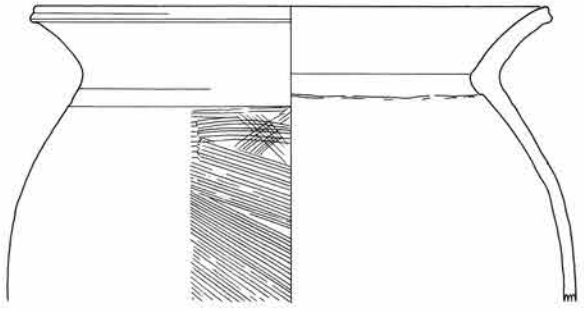
SI 1010

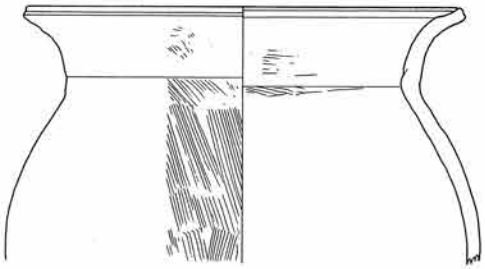

99


100

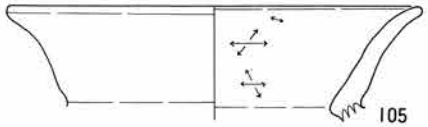
101

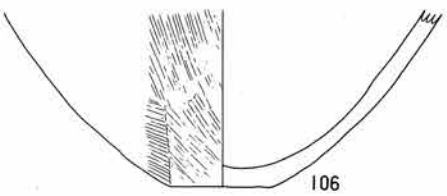

102

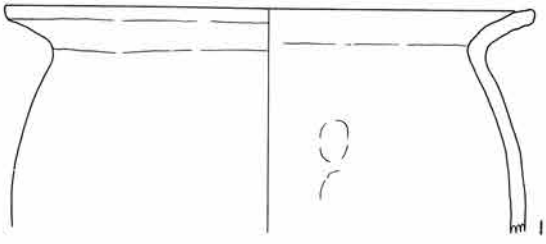

103

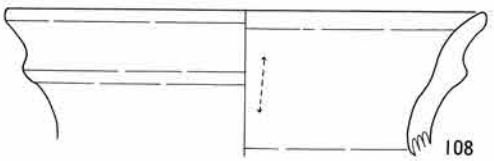

104

SK 108　SK 107


105


106

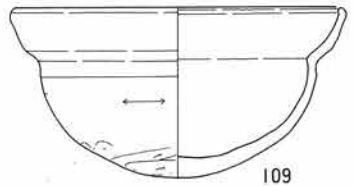

107

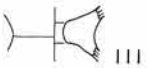

108

0　15cm

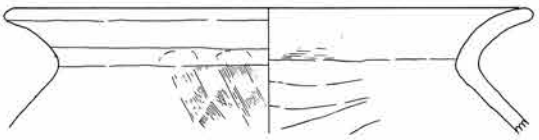
本文90・91頁，観察表245頁

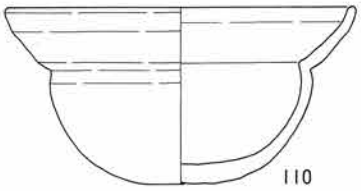
SI 439


109

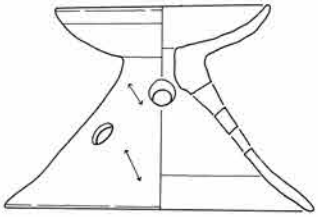

111

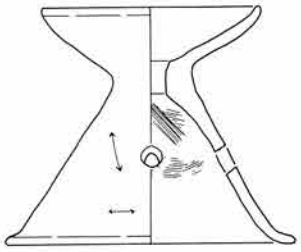
112


113

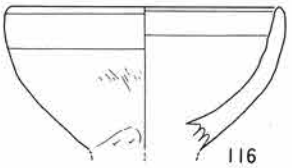

110

SI 263


114

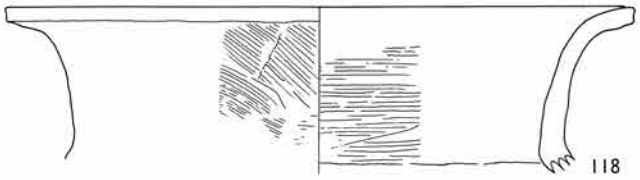

115

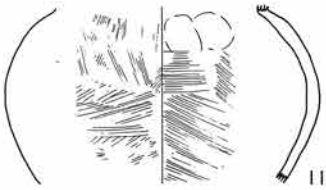
SI 402

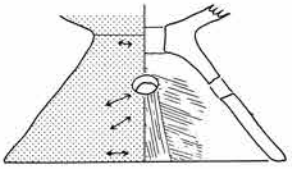

116

117

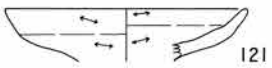
SI 660・SI 650

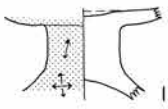

118

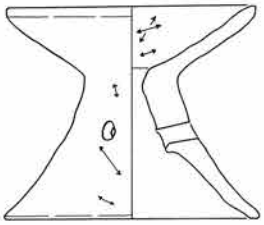

119

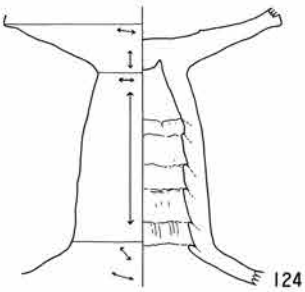

120

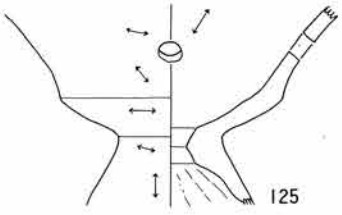
その他


121


123

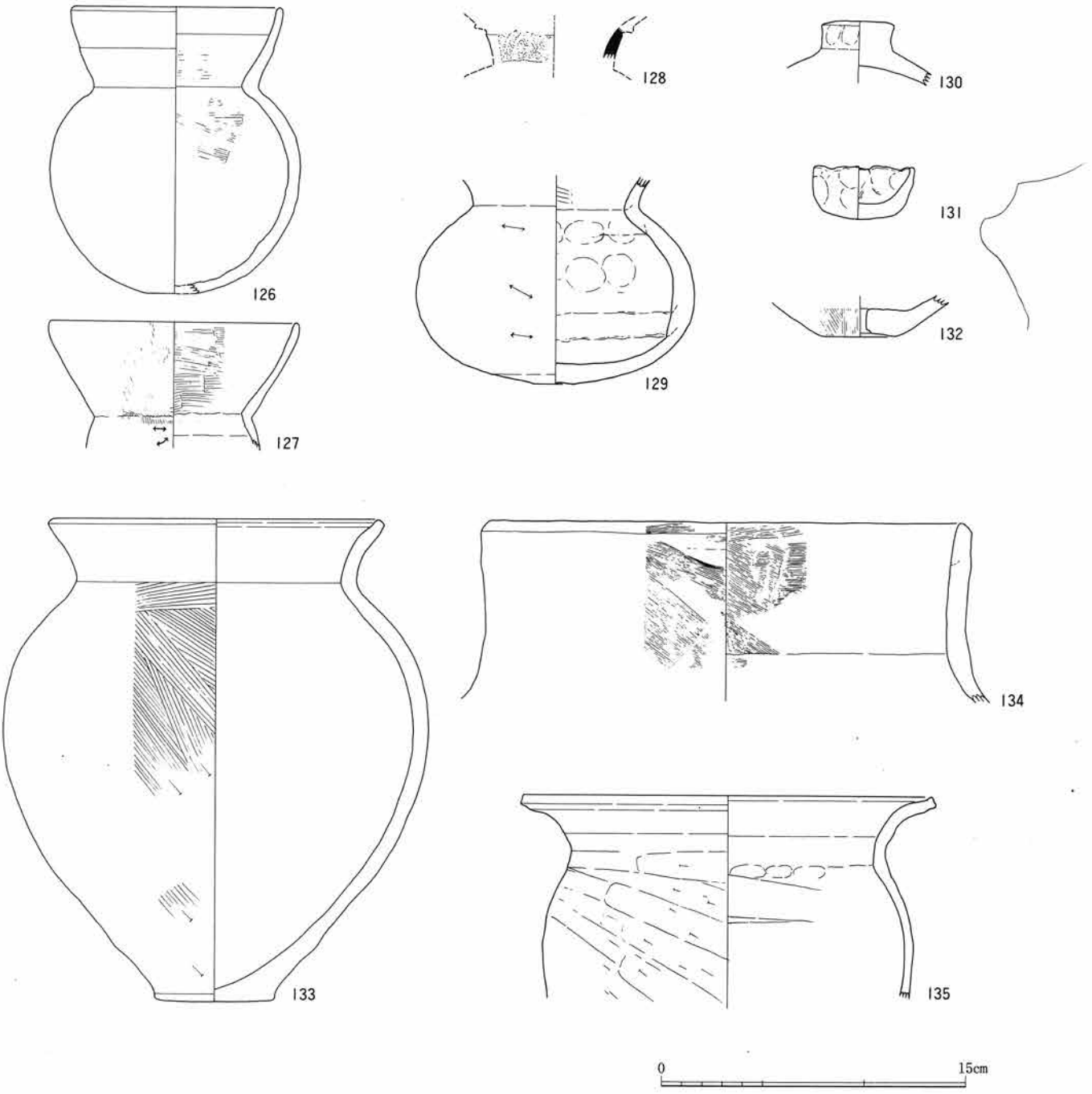

122


124

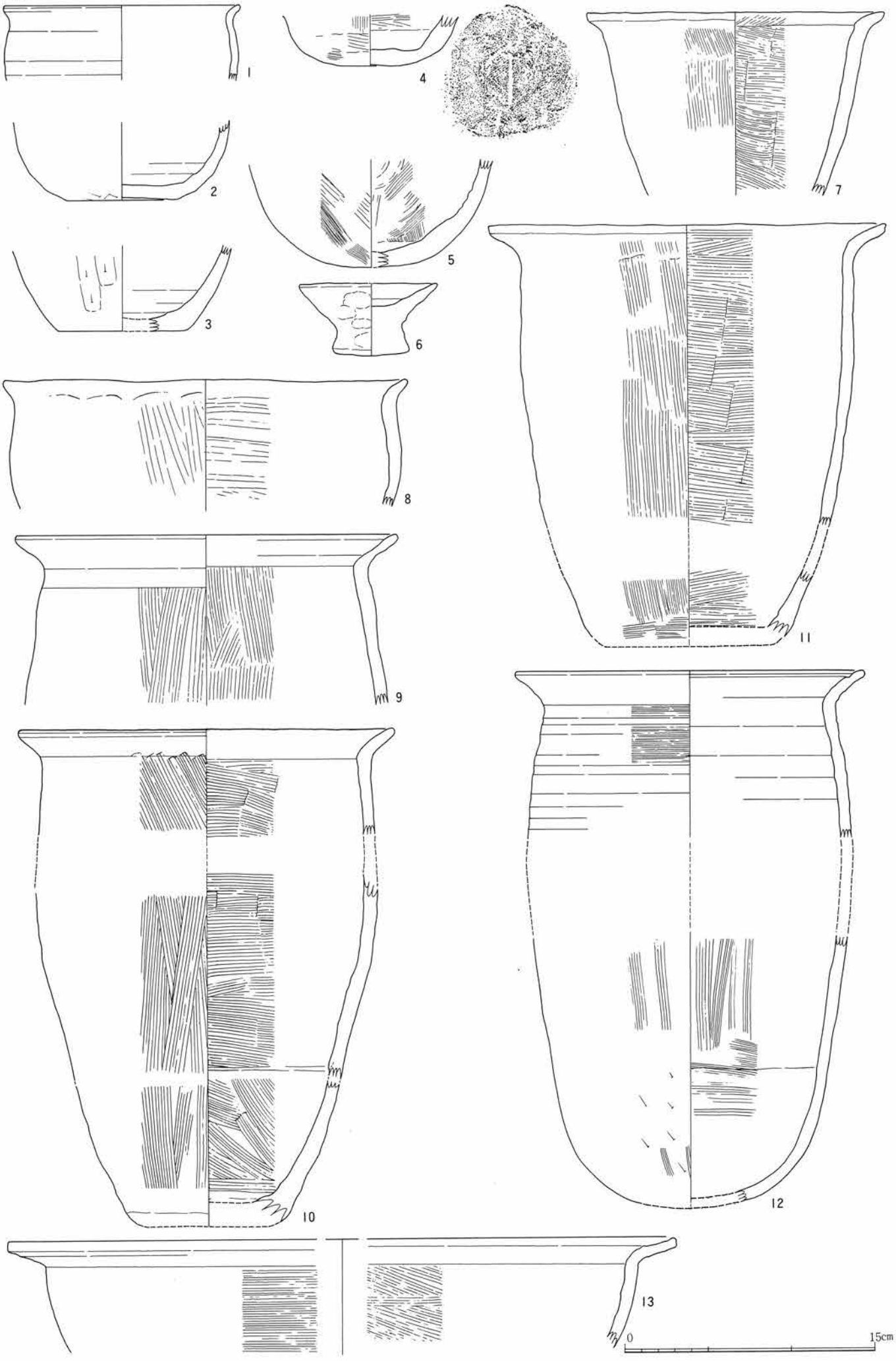

125

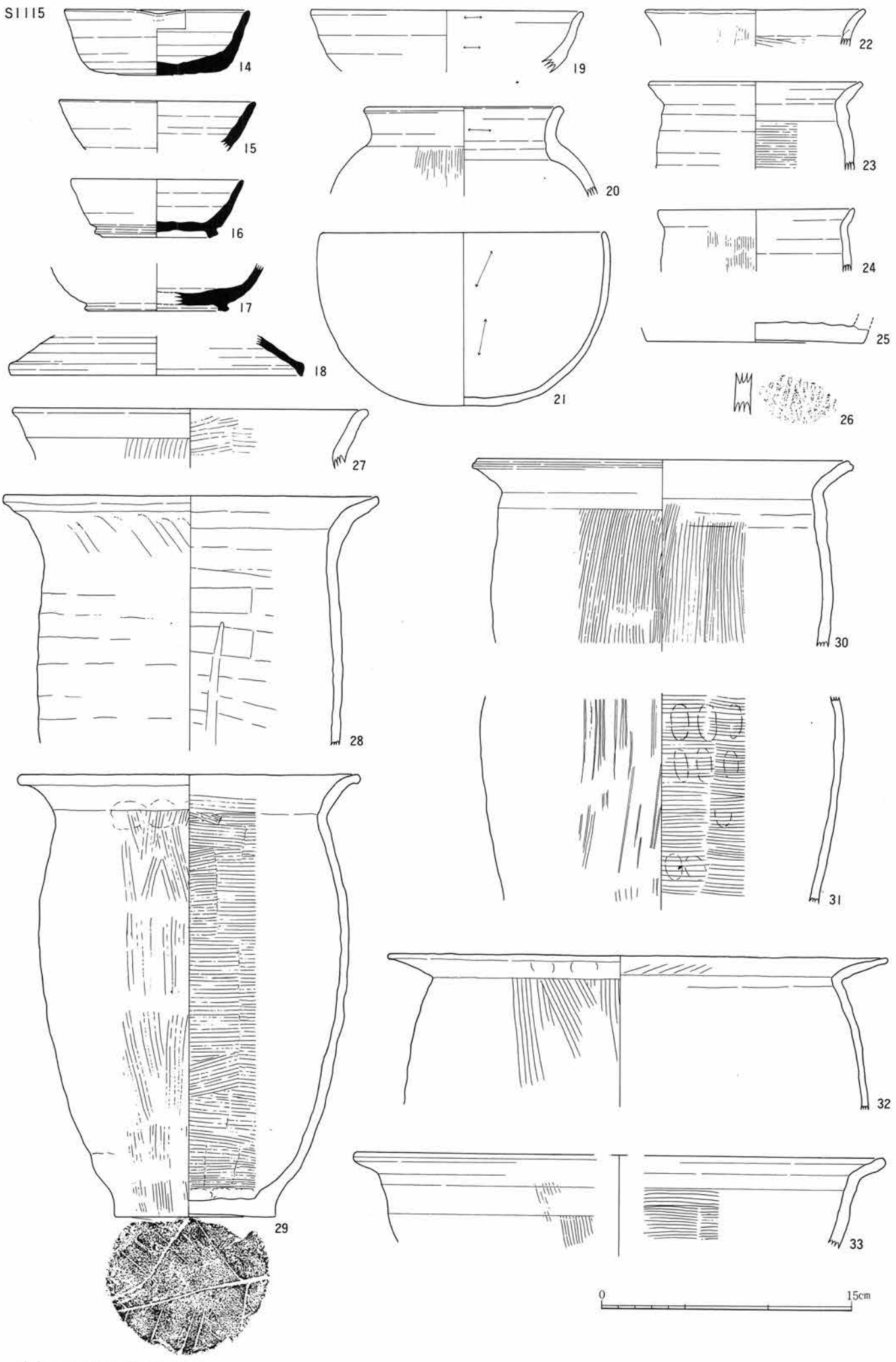
120・123 赤 彩

その他



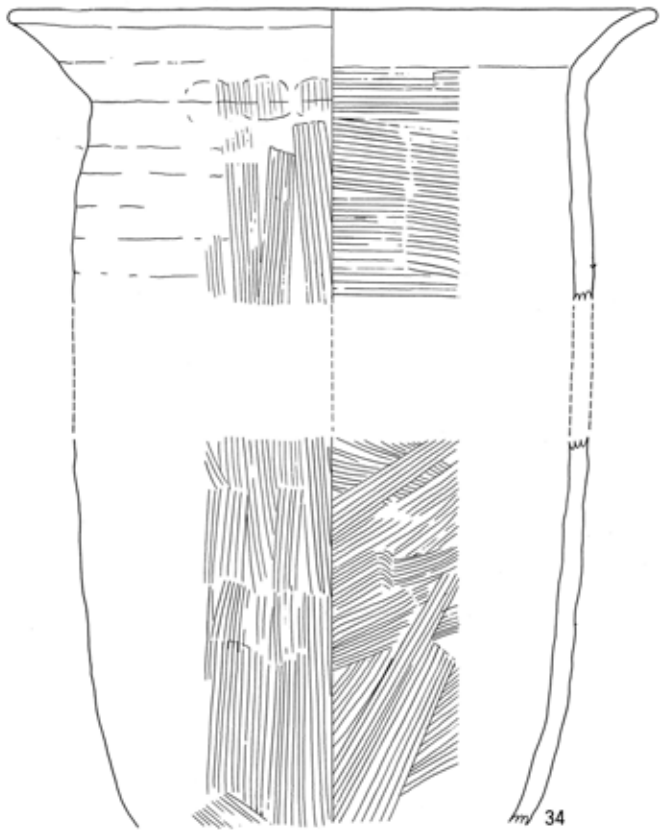
SI5

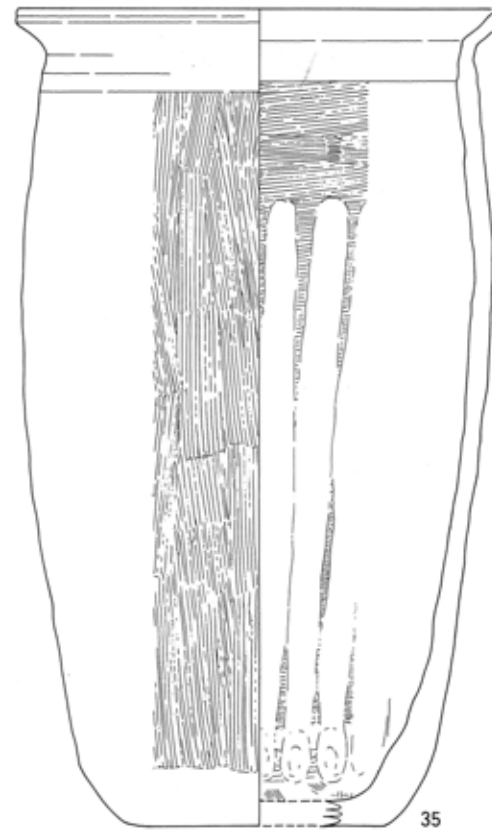




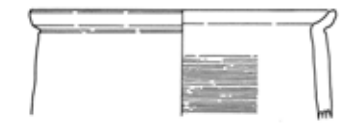
本文111～113頁，観察表247頁

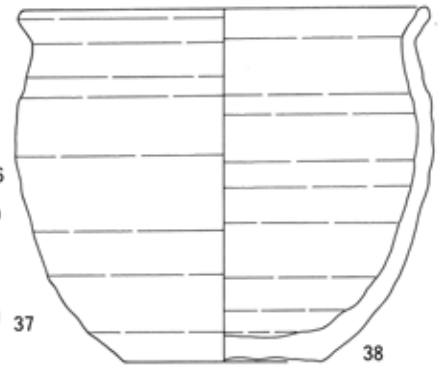
SI 115

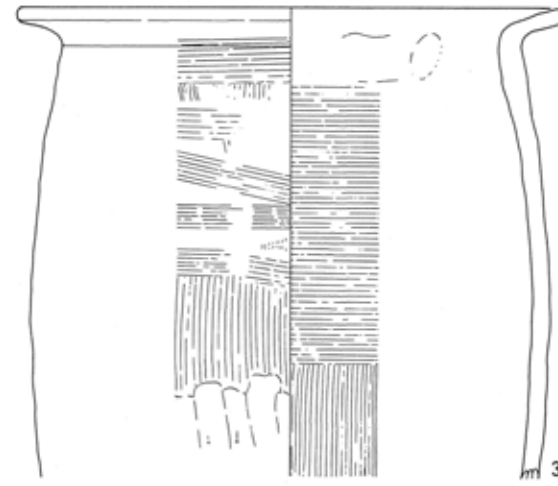


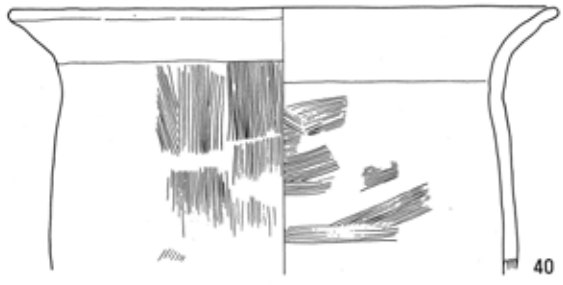


SI 804

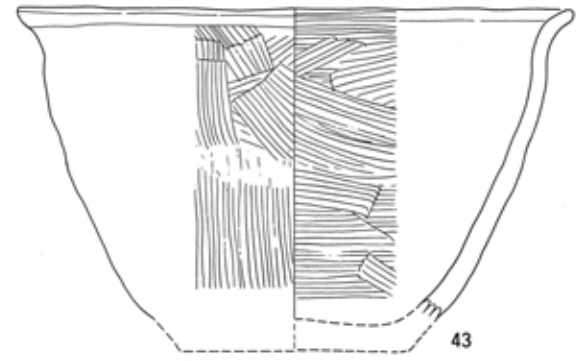




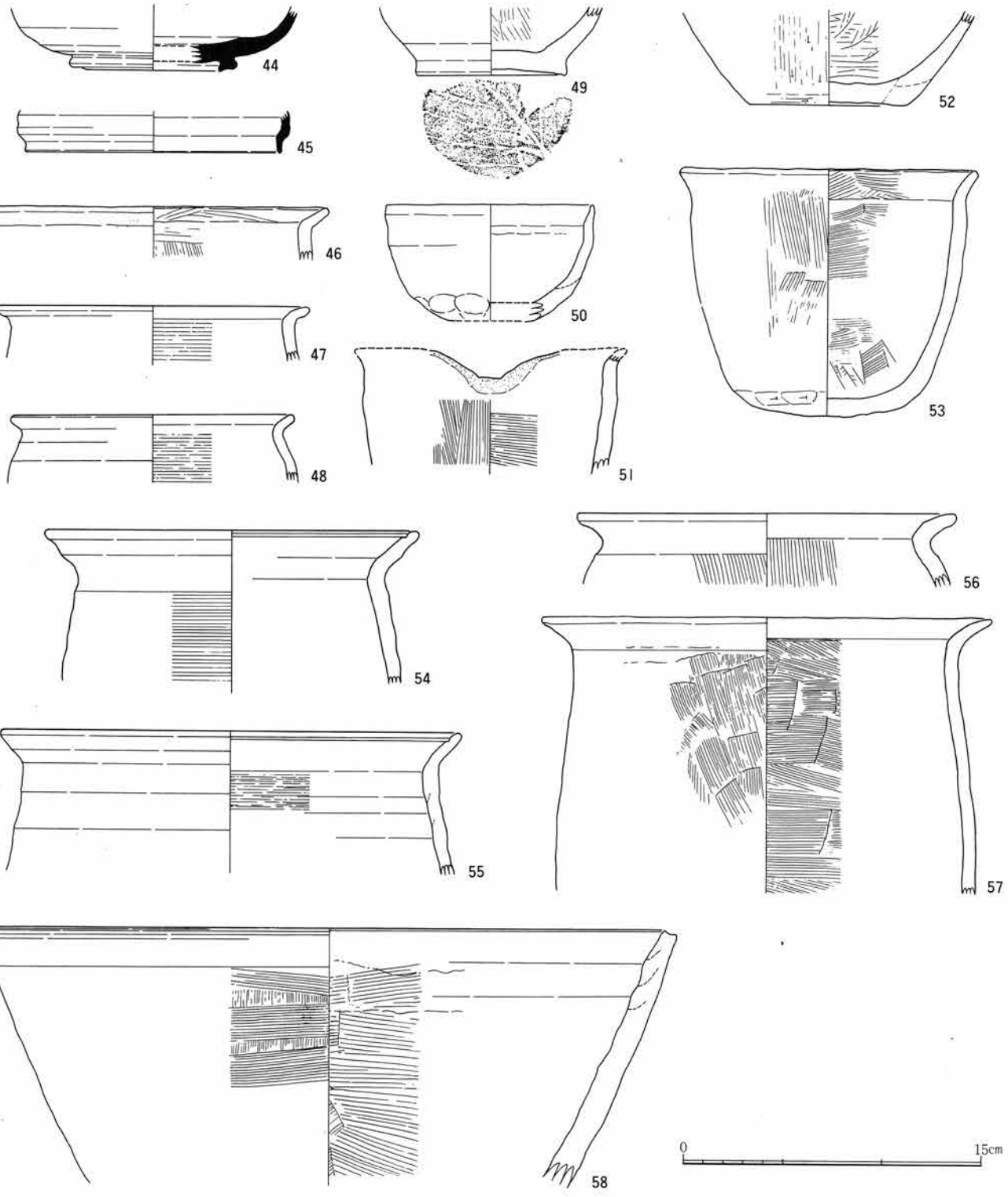




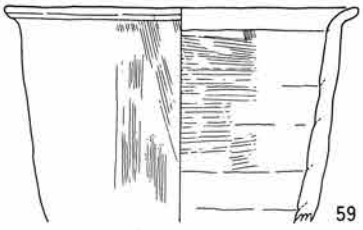
SI 807



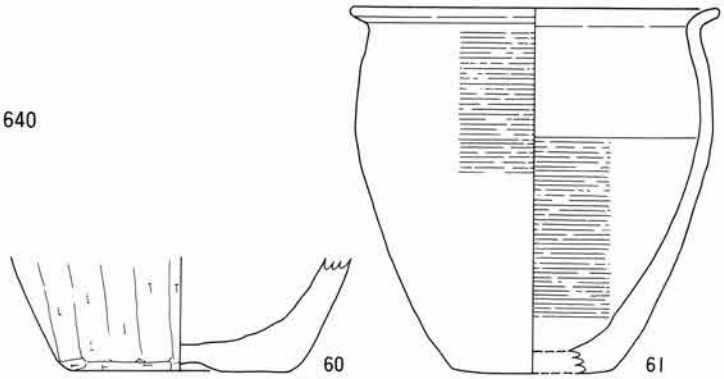
SI 336



SI 1312

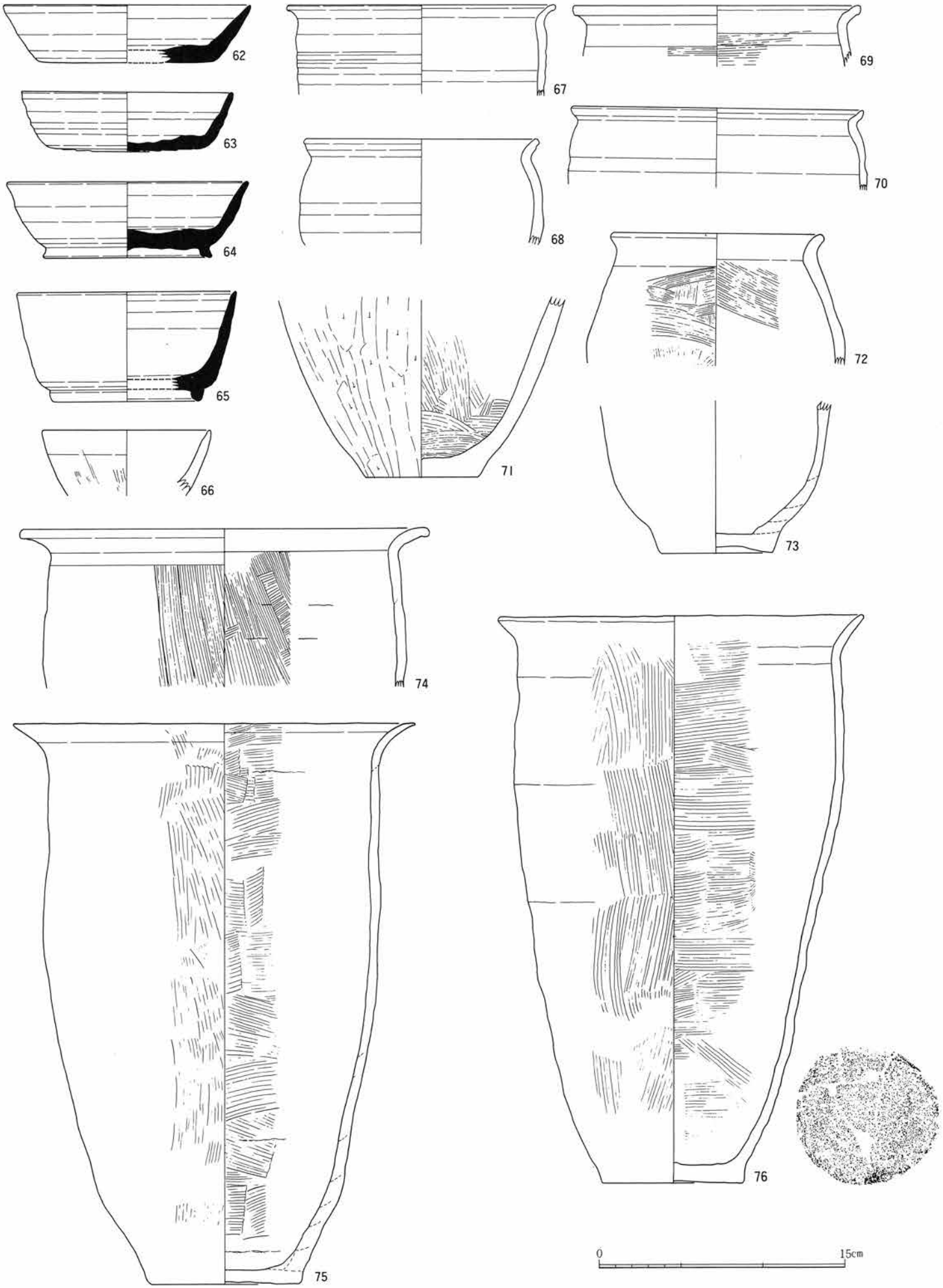


SI 640



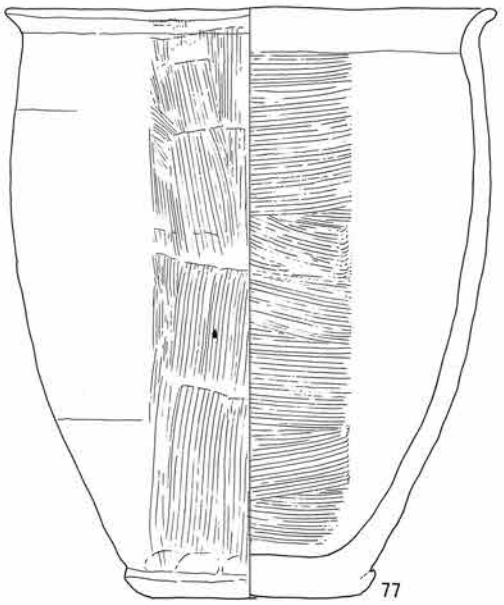
本文113・114頁，観察表247・248頁

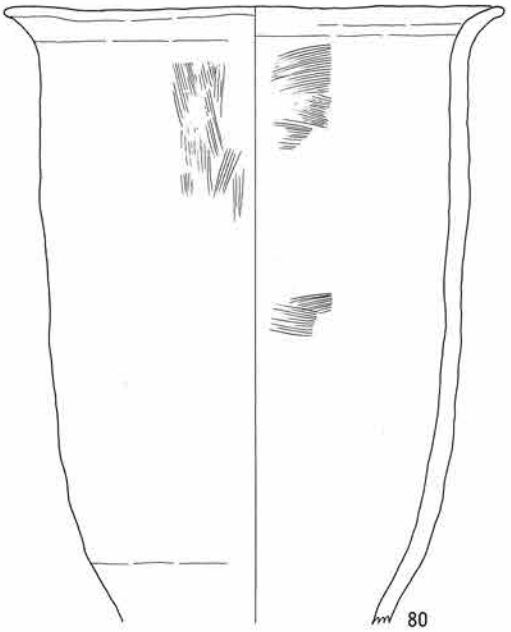
SI 71

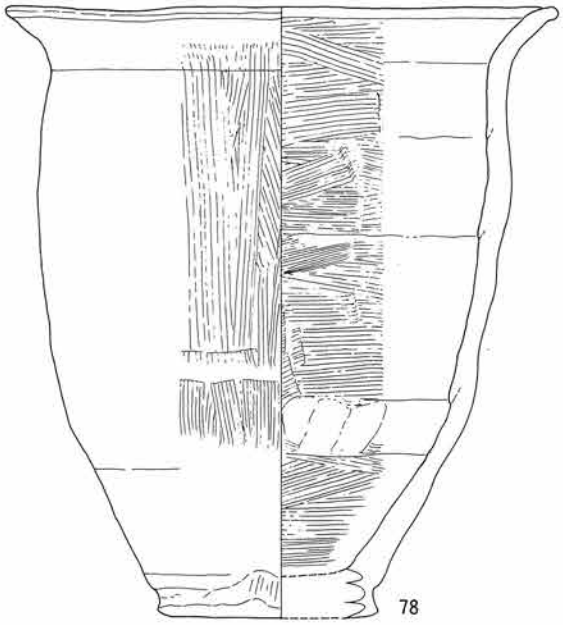


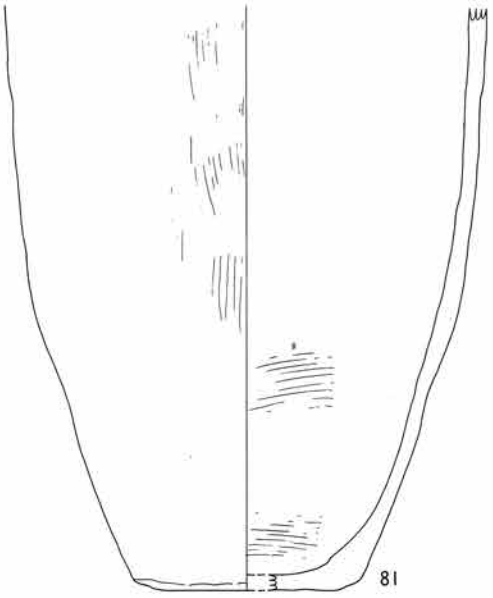
本文114・115頁，観察表248頁

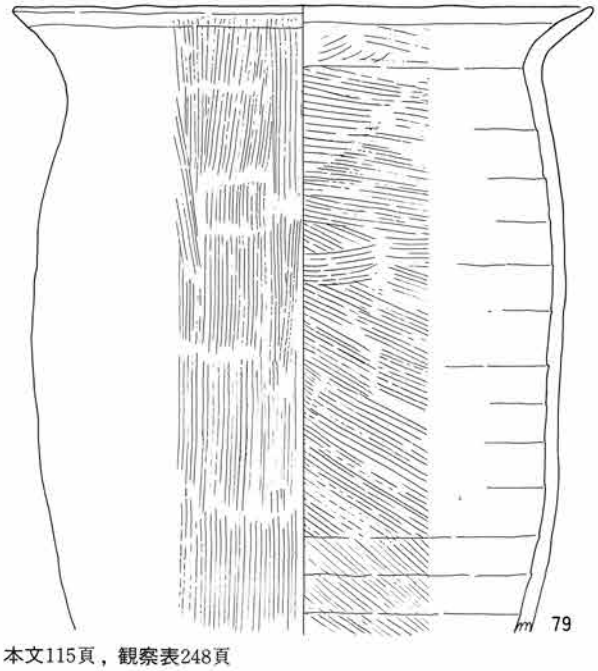
SI 610

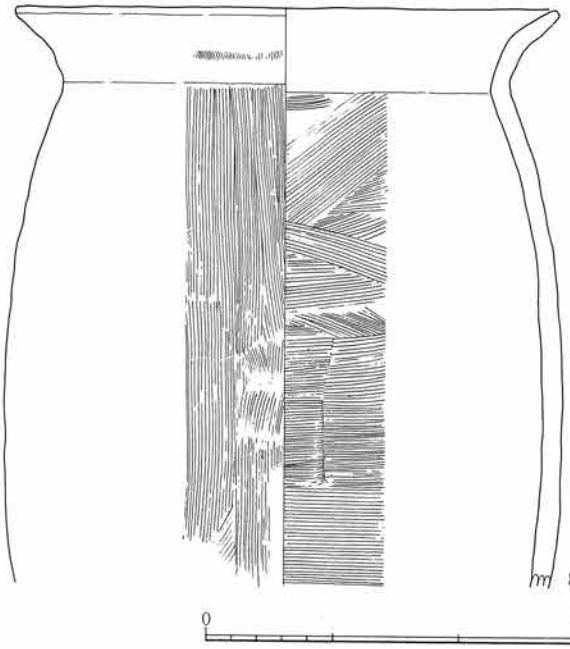

77


80


78


81

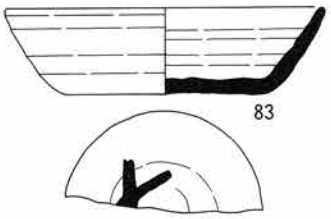

79

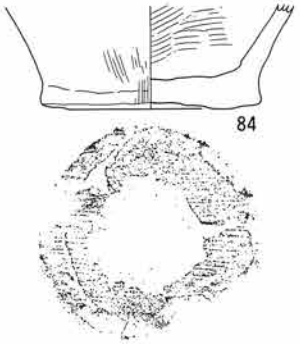

82

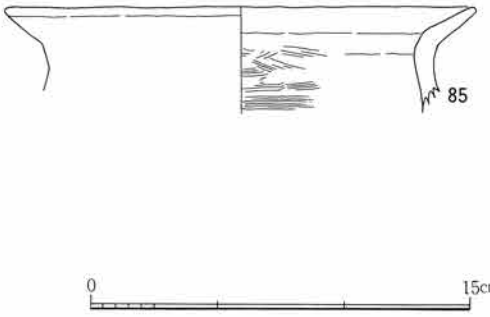
0　15cm

本文115頁，観察表248頁

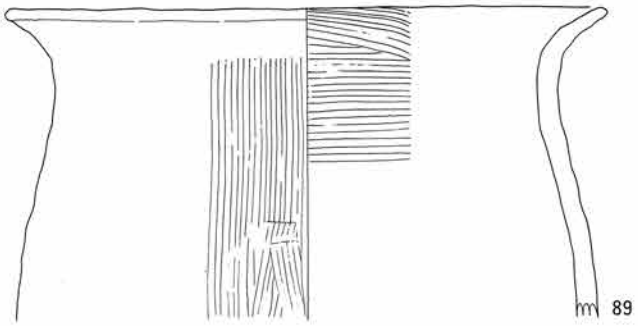
SI 610

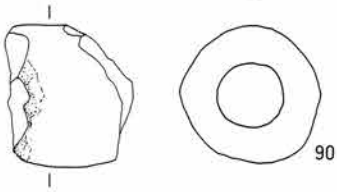




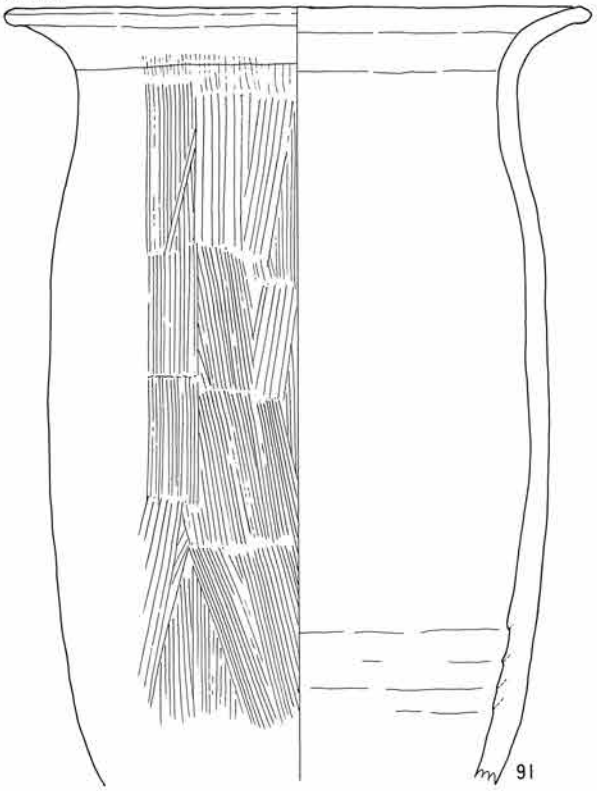


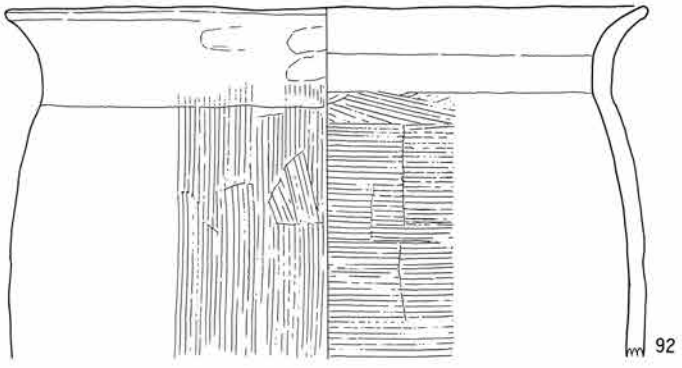
SI 600



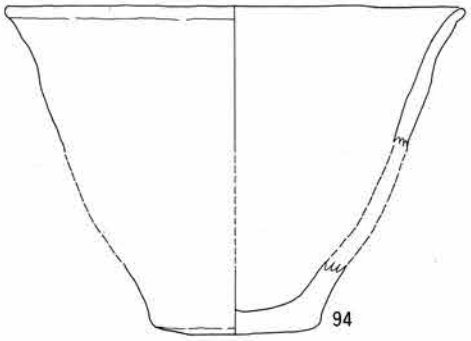


SI 630



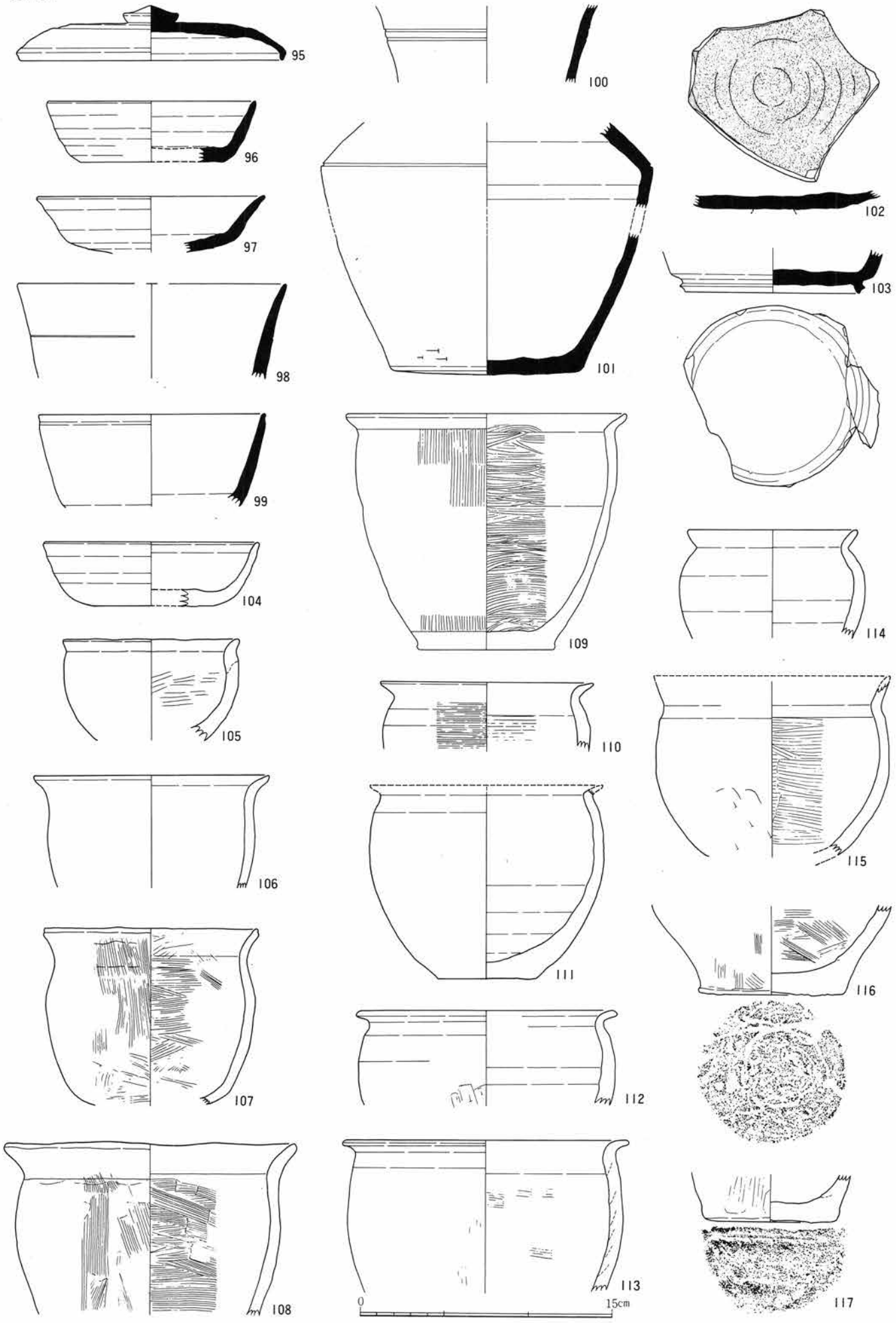


SI 1311



本文115・116頁，観察表248・249頁

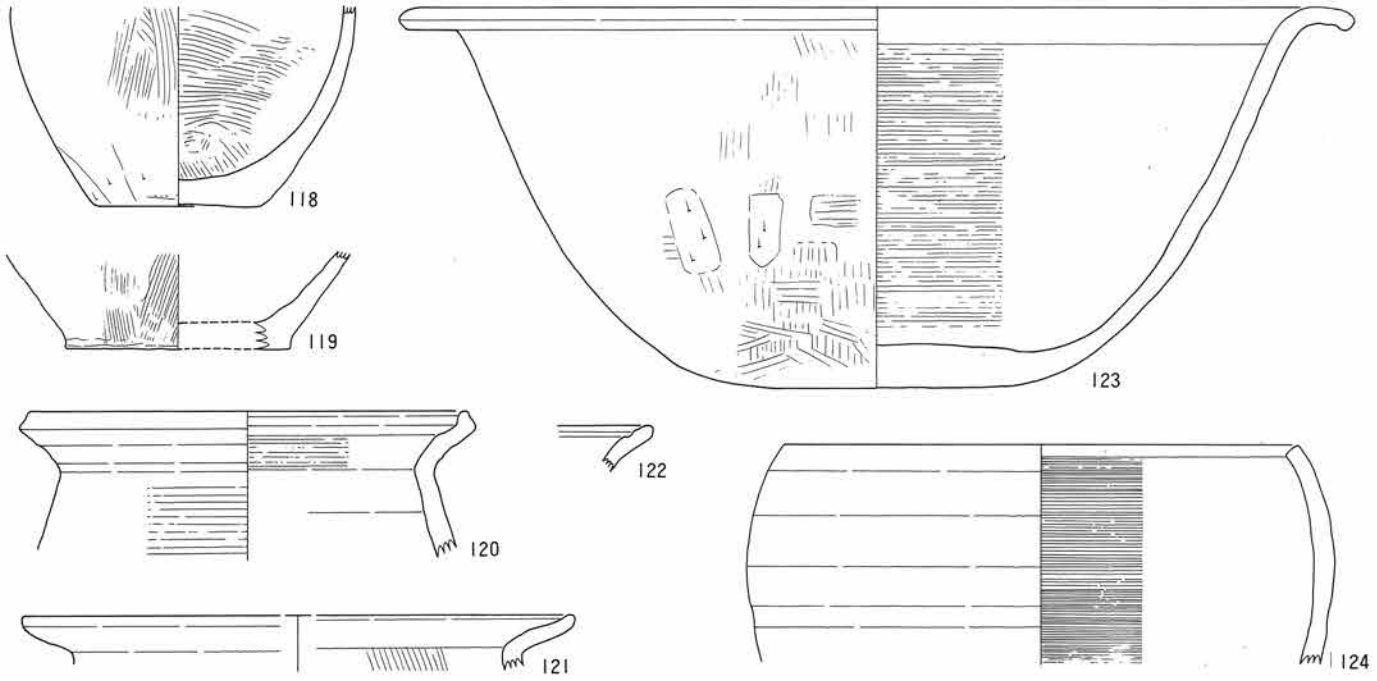
SI 462



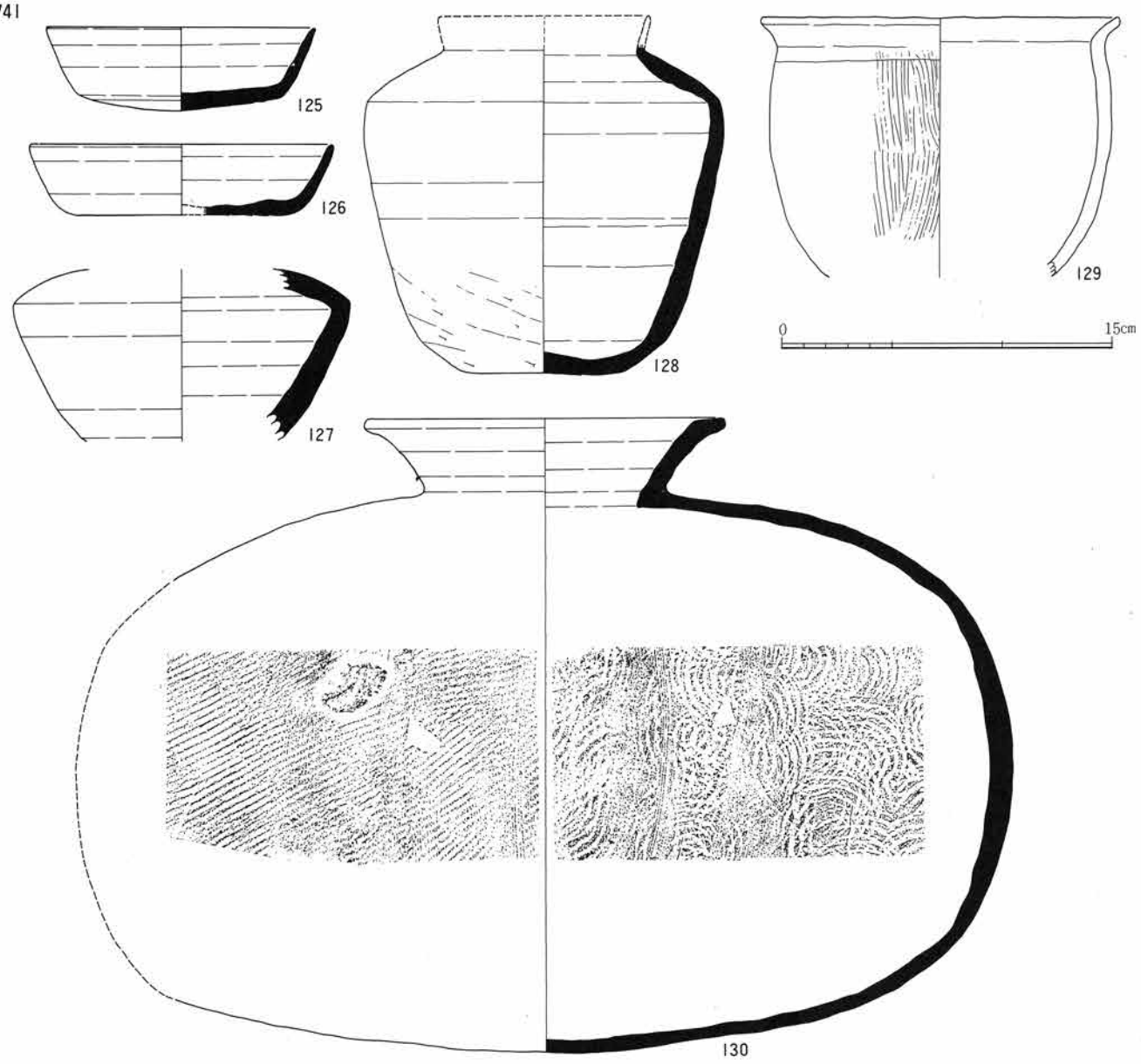
本文116・117頁，観察表249頁

102　墨痕

SI 462

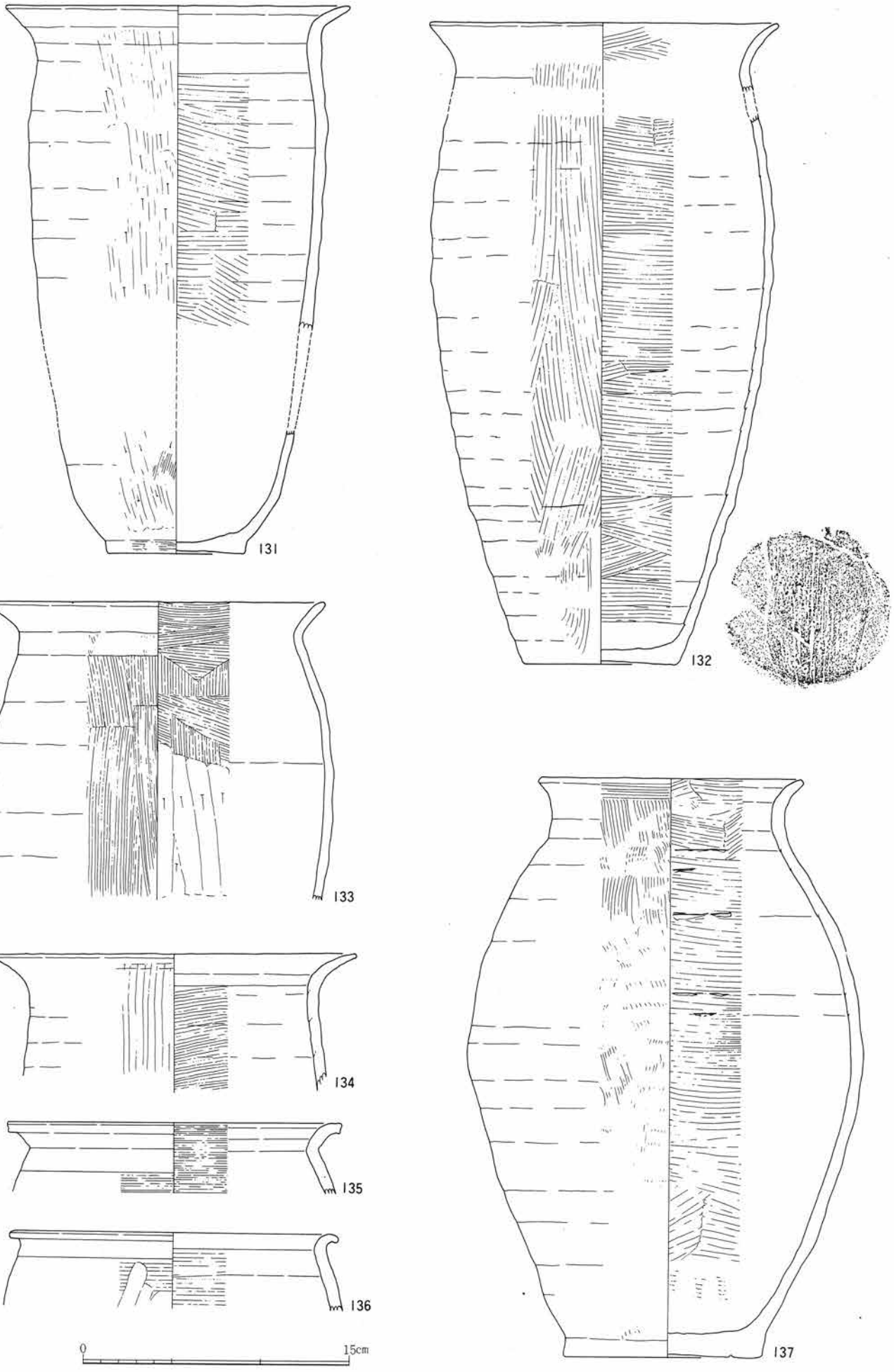


SI 741



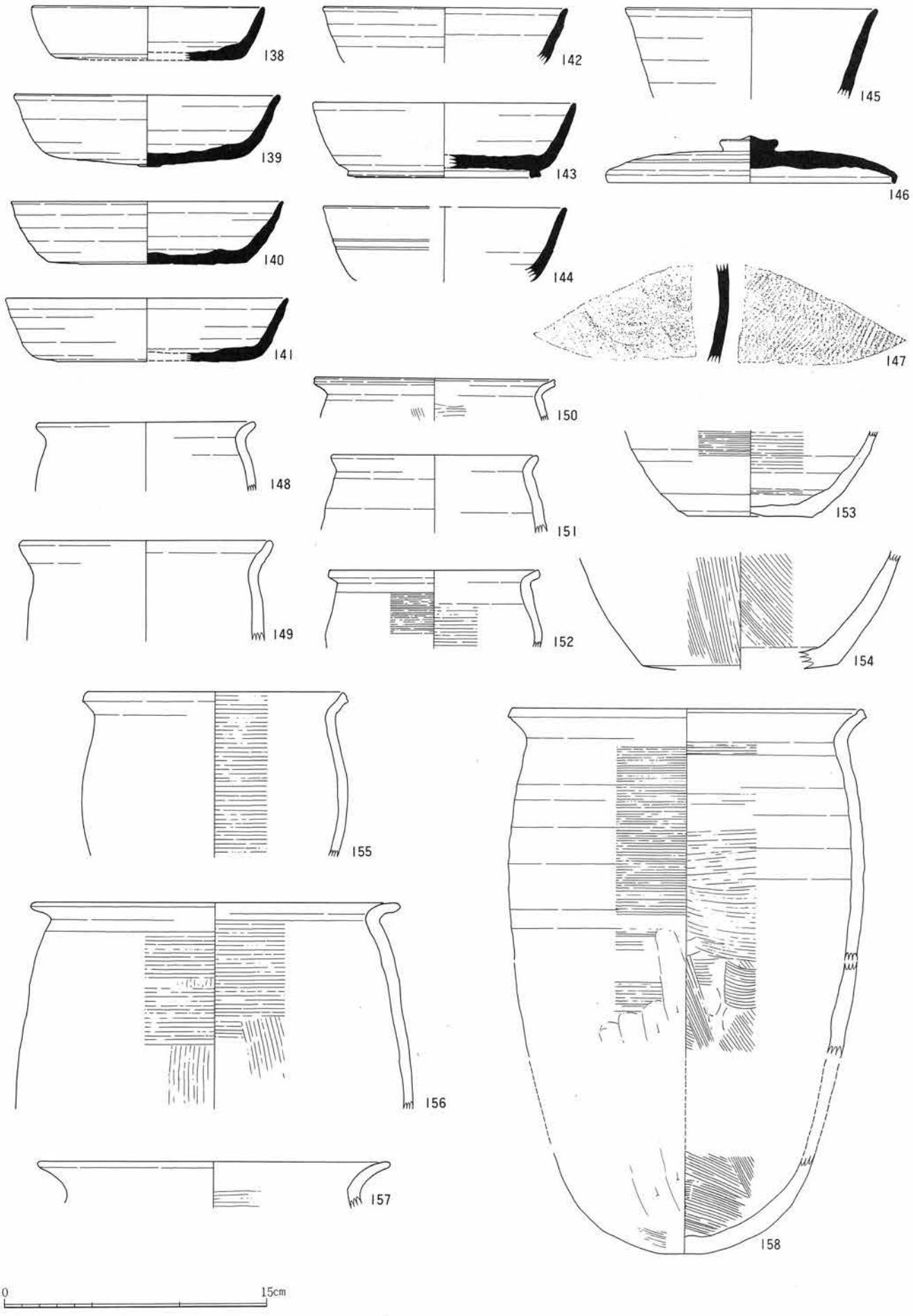
本文117頁，観察表249・250頁

SI 741



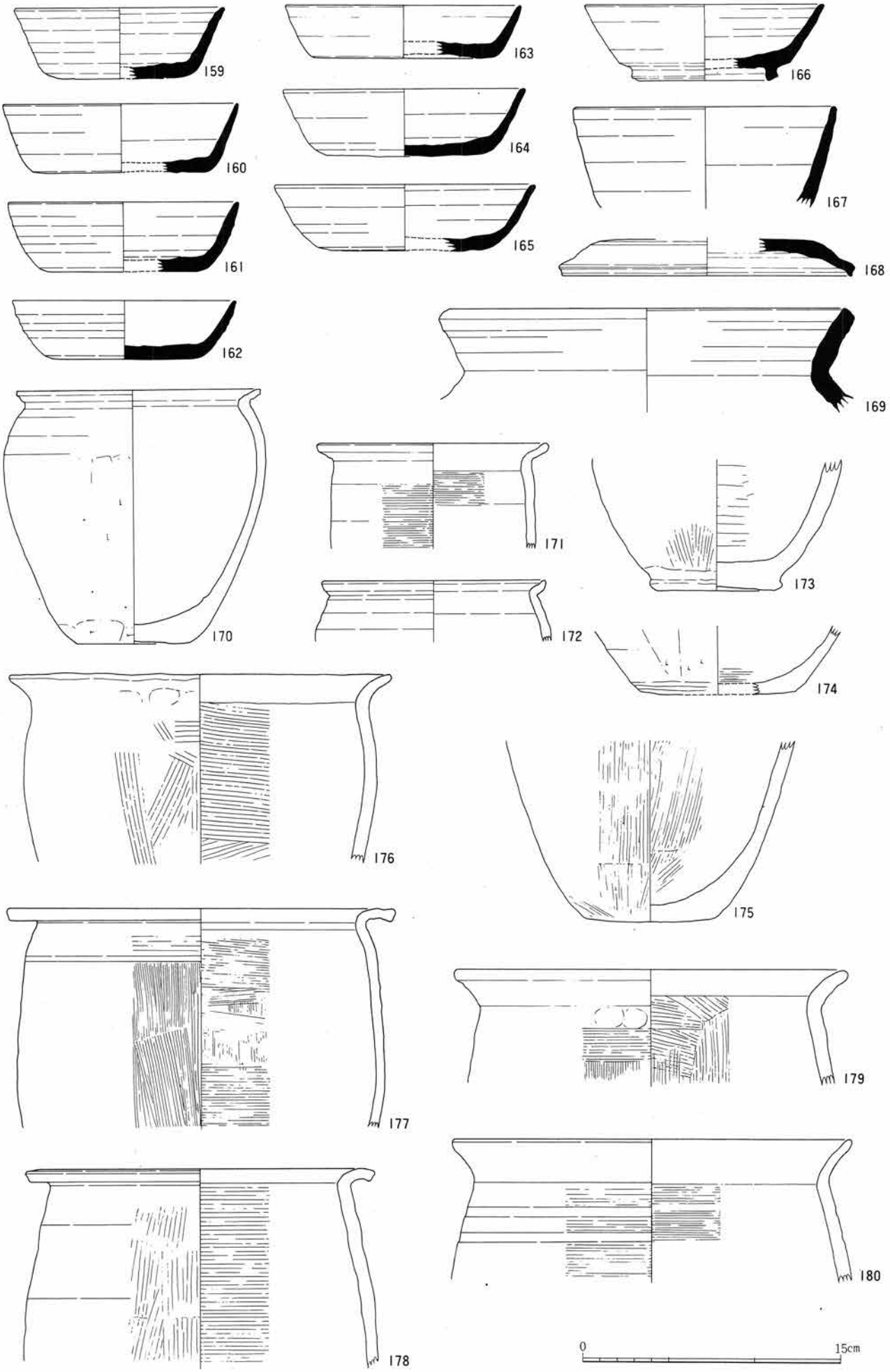
本文118頁，観察表250頁

SI 12



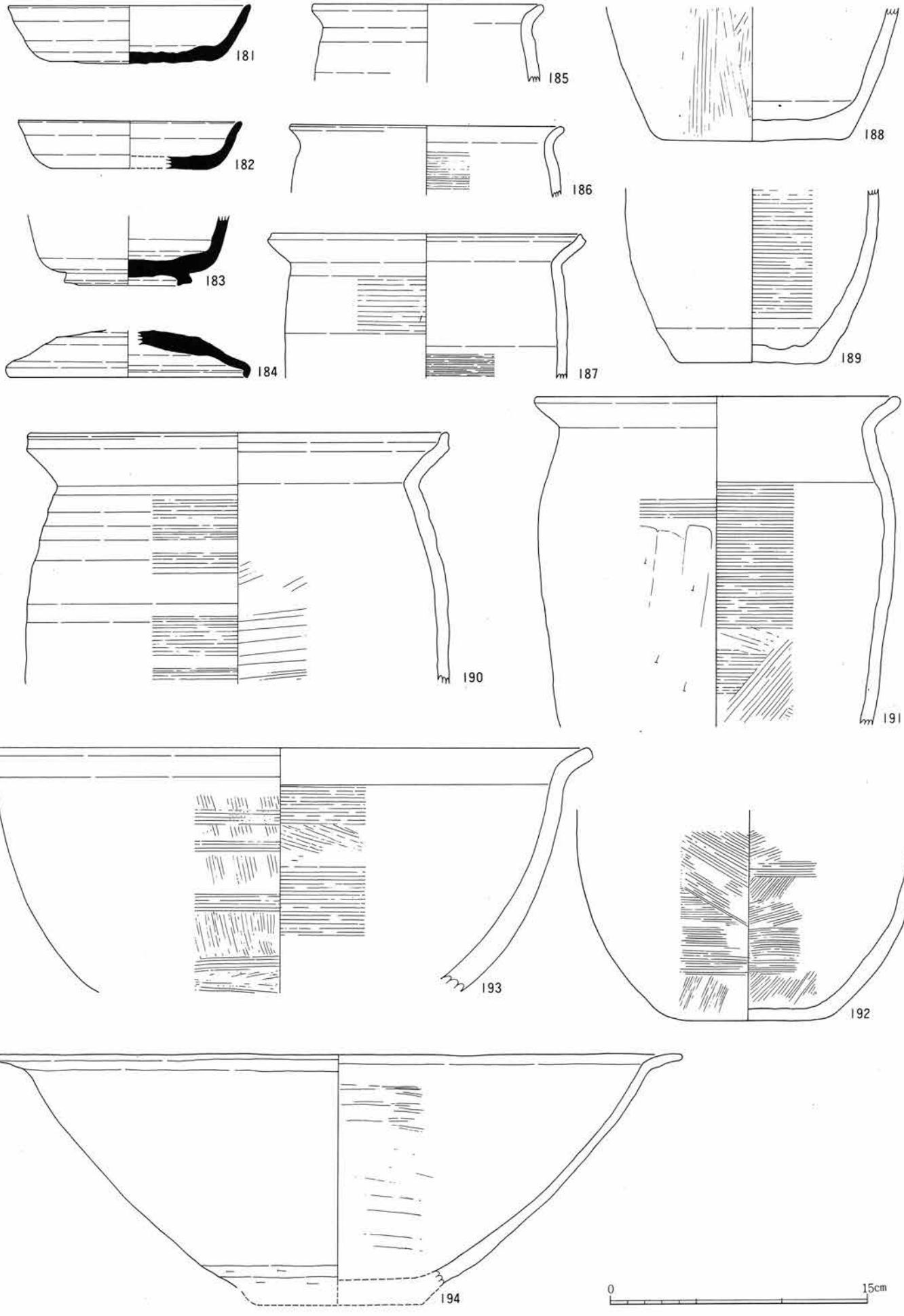
本文118・119頁，観察表250頁

SI 502 B



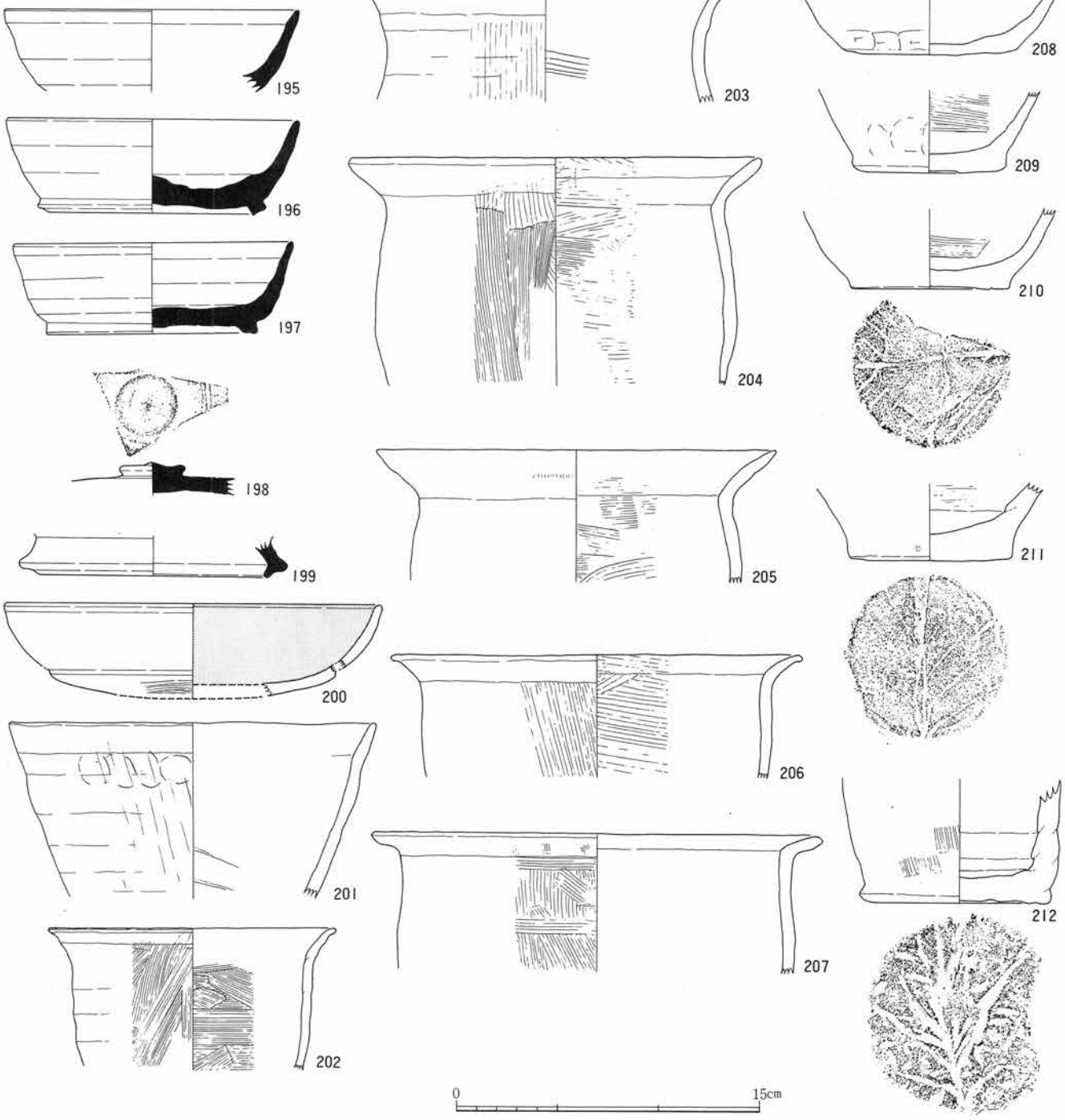
本文119・120頁，観察表250・251頁

SI 806

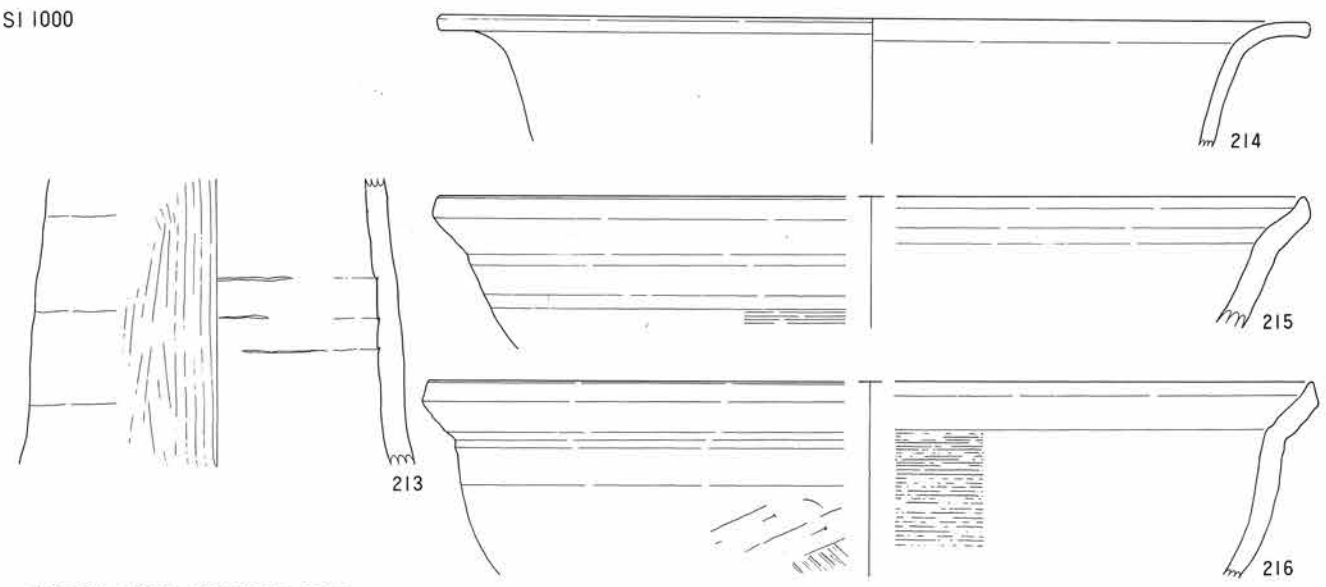


本文120・121頁，観察表251頁

SI 752



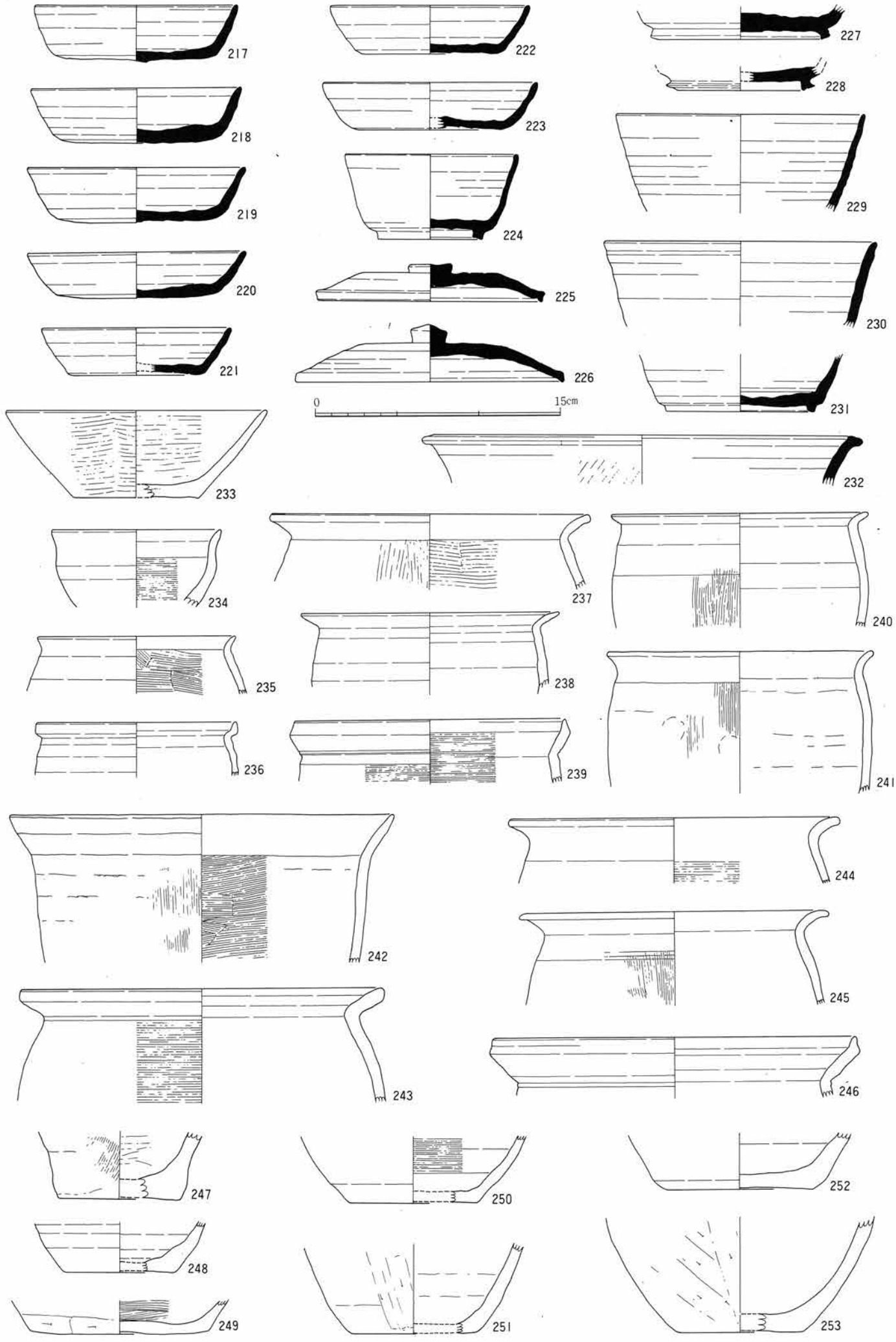
SI 1000



本文121～123頁，観察表251・252頁

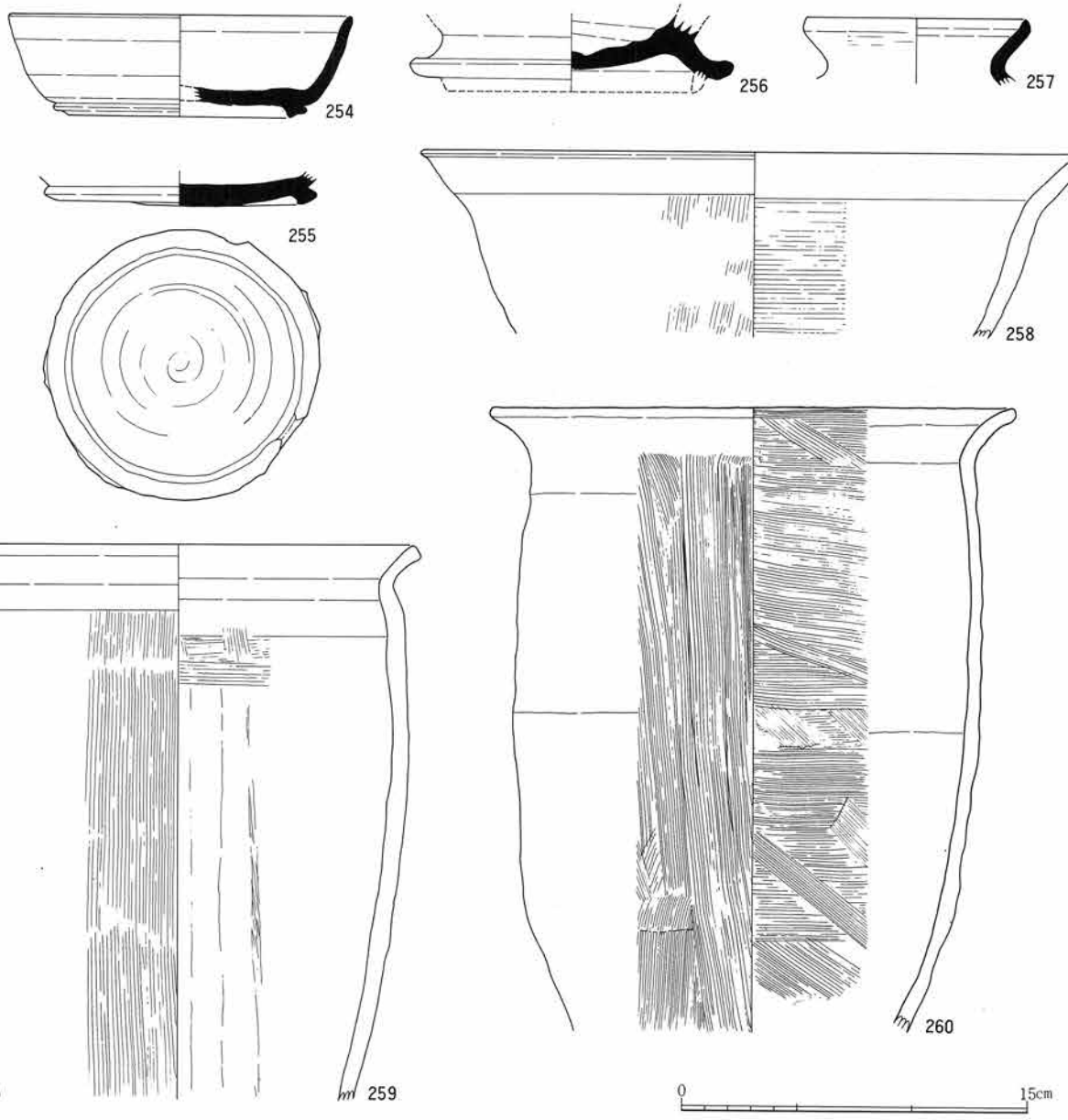
200　黒色

SI 1000

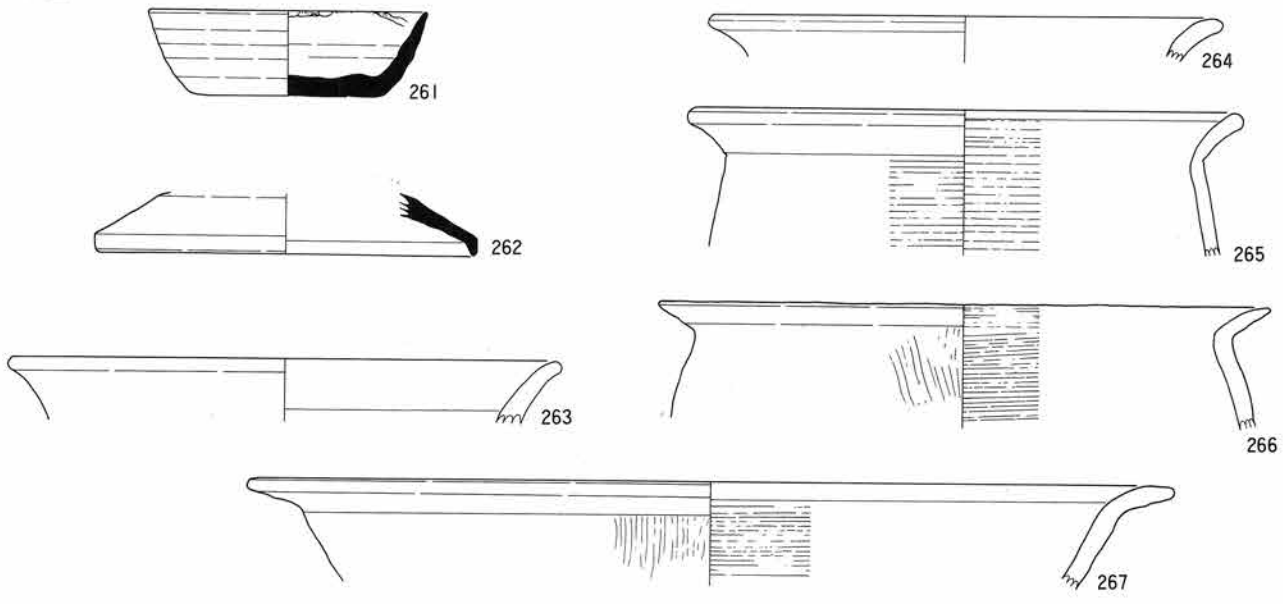


本文122・123頁,観察表252・253頁

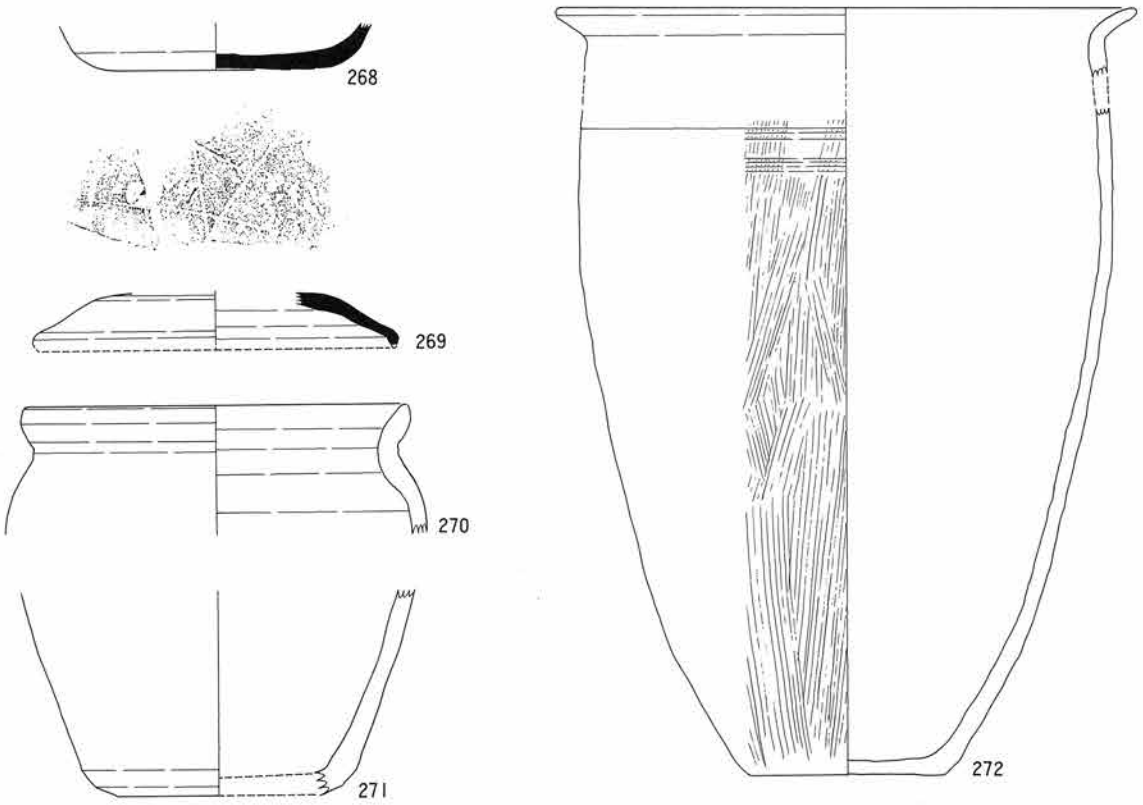
SI 1461



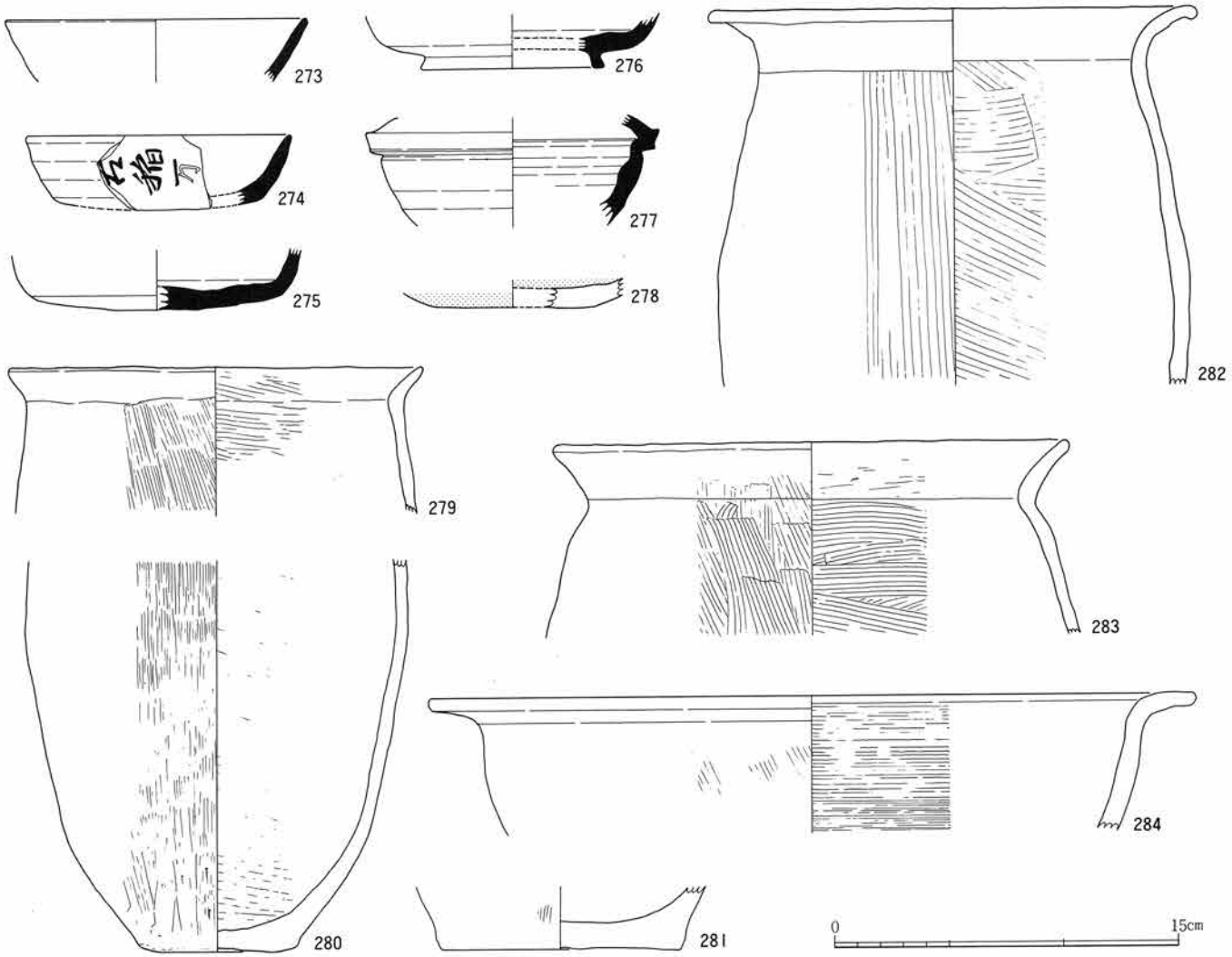
SI 27



SI 314



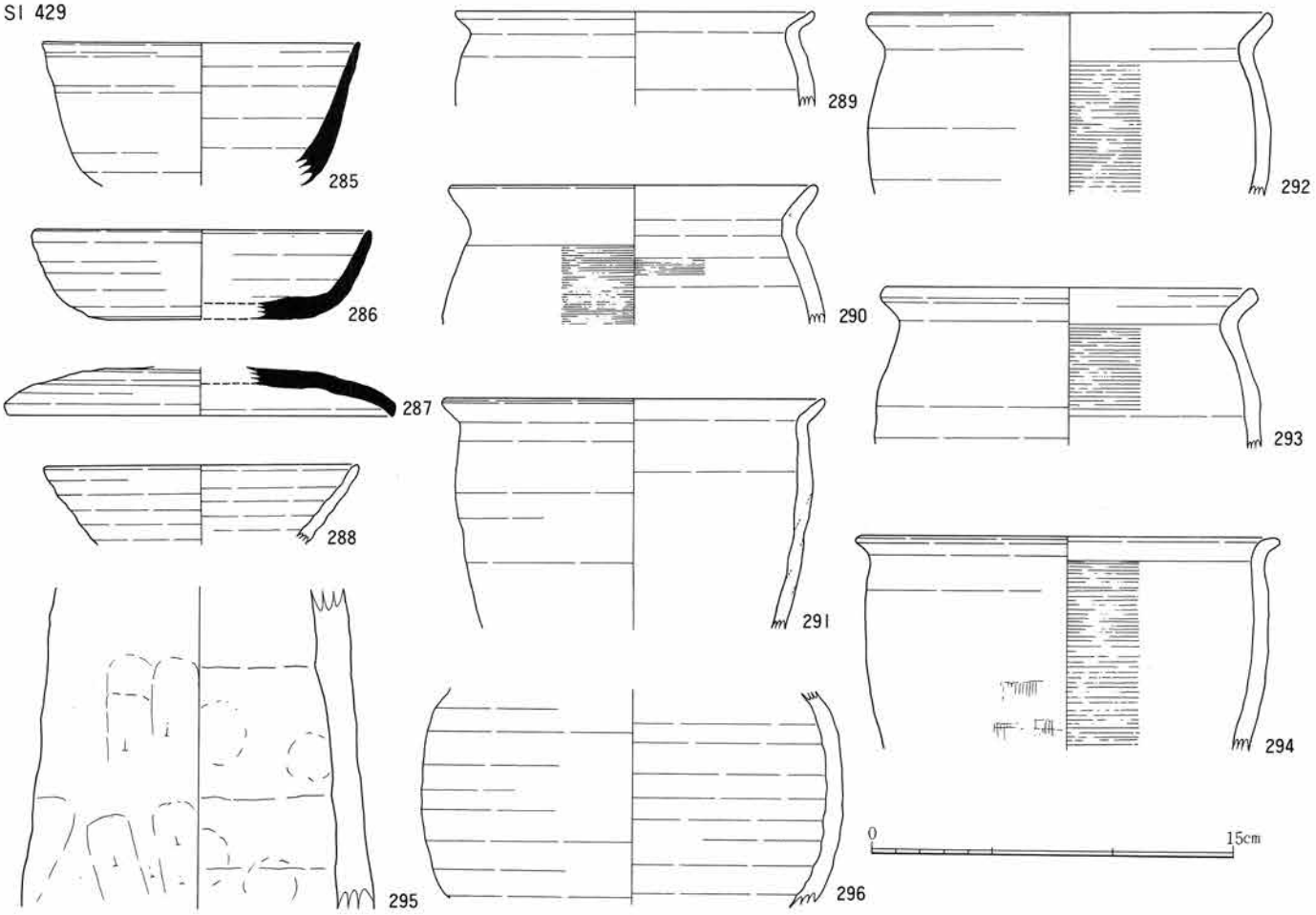
SI 1315



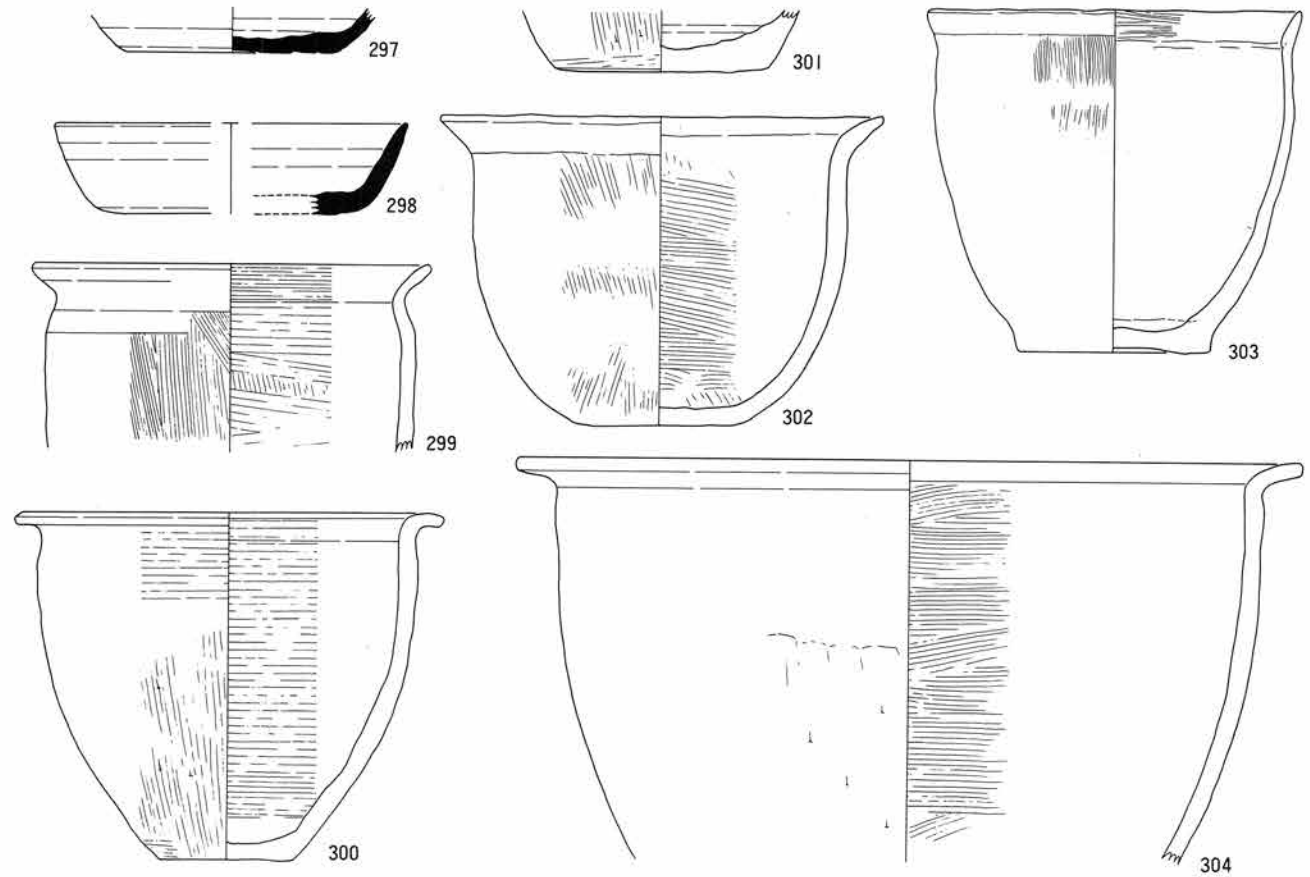
本文124頁，観察表253頁

278　赤彩

SI 429

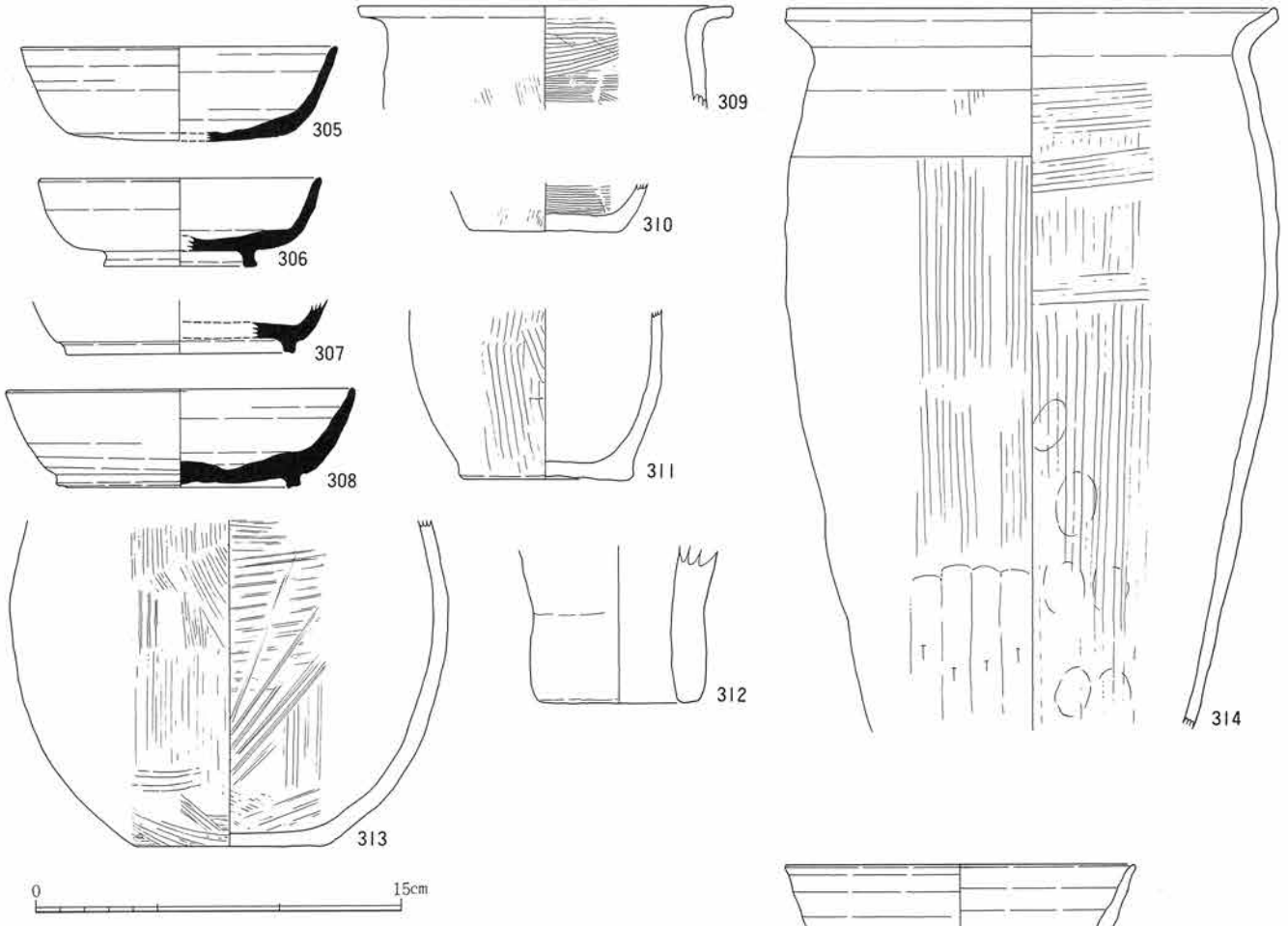


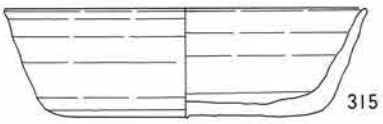
SI 1300



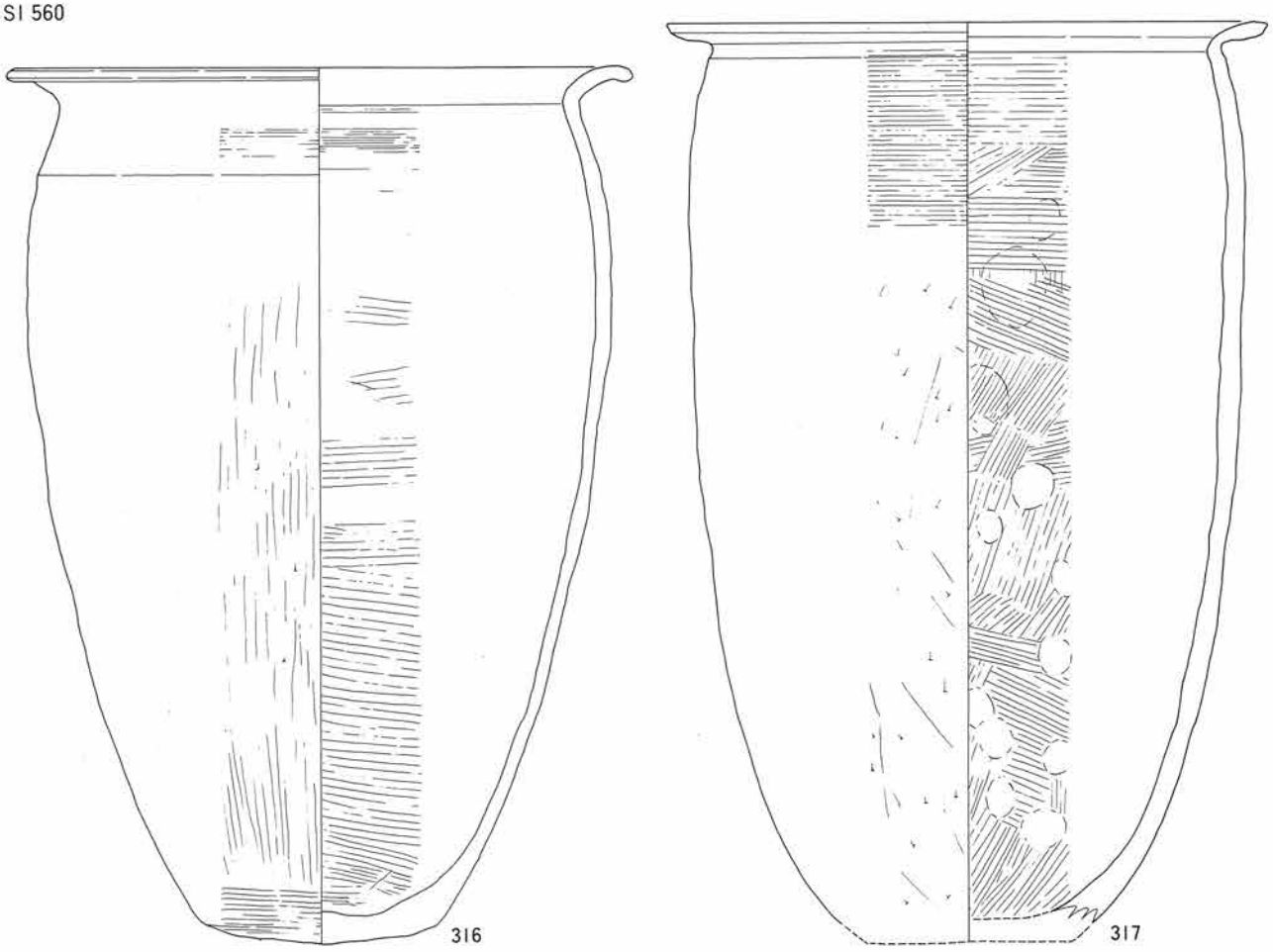
本文124・125頁，観察表253・254頁

SI 1307

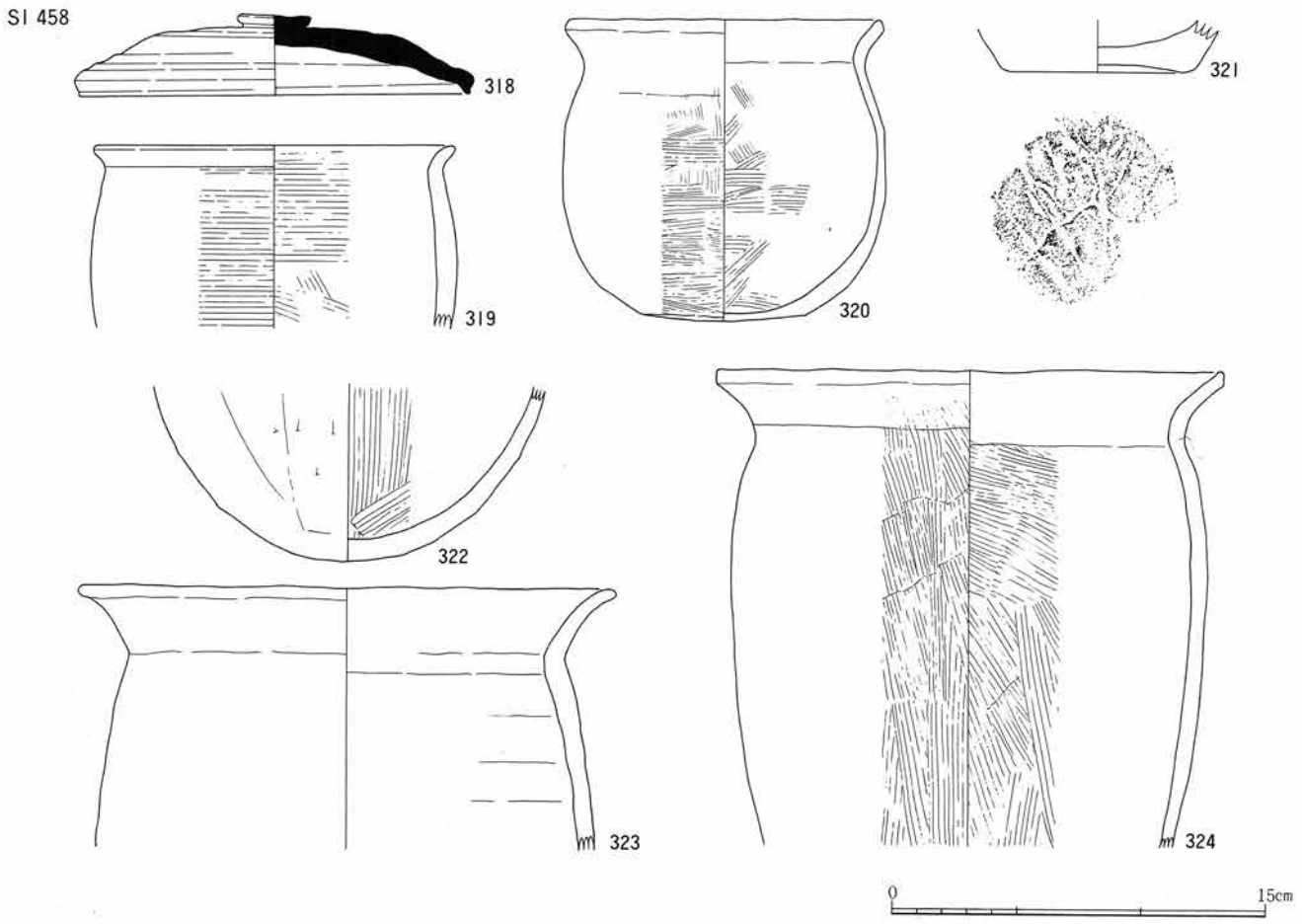


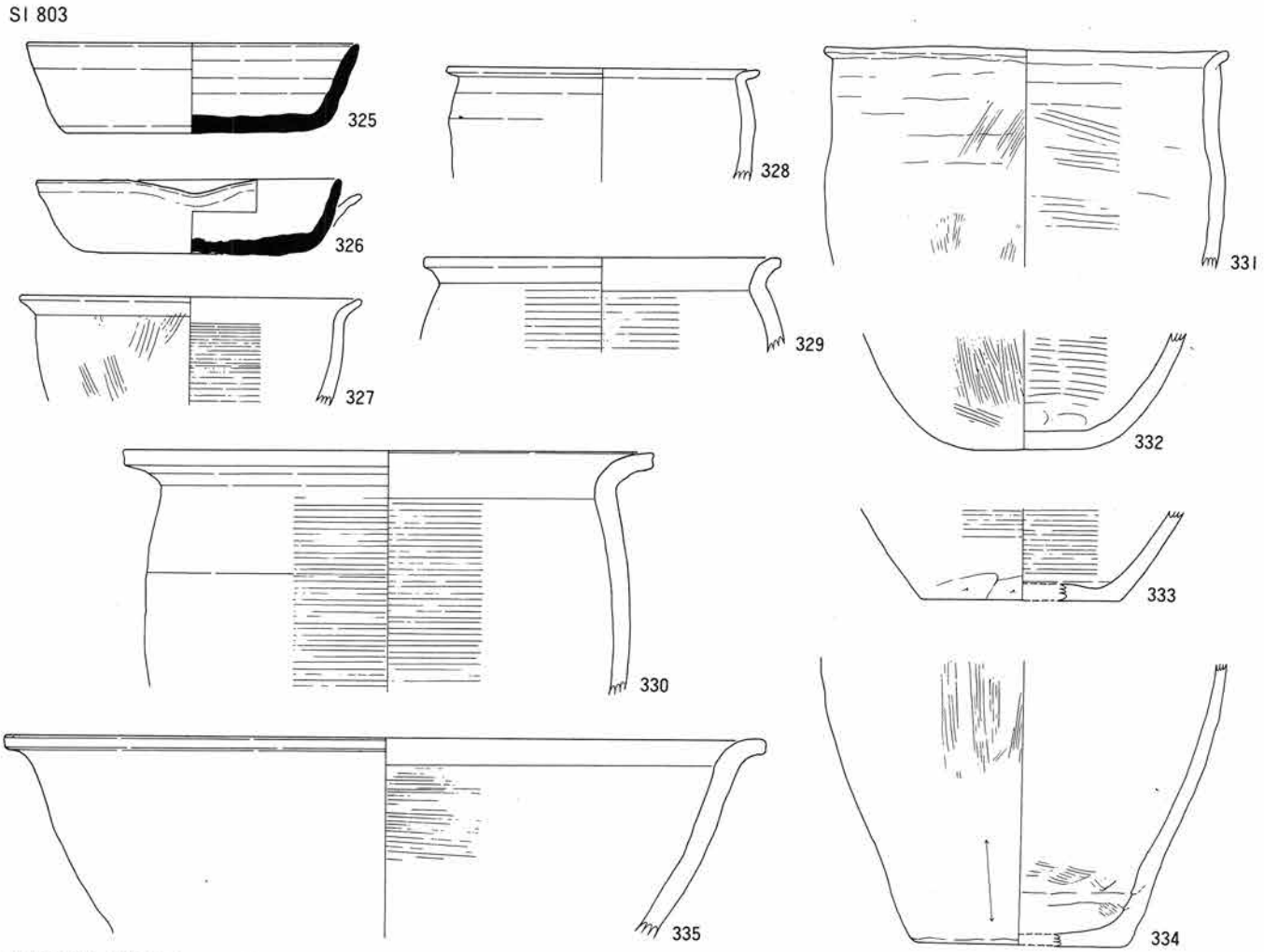


SI 560



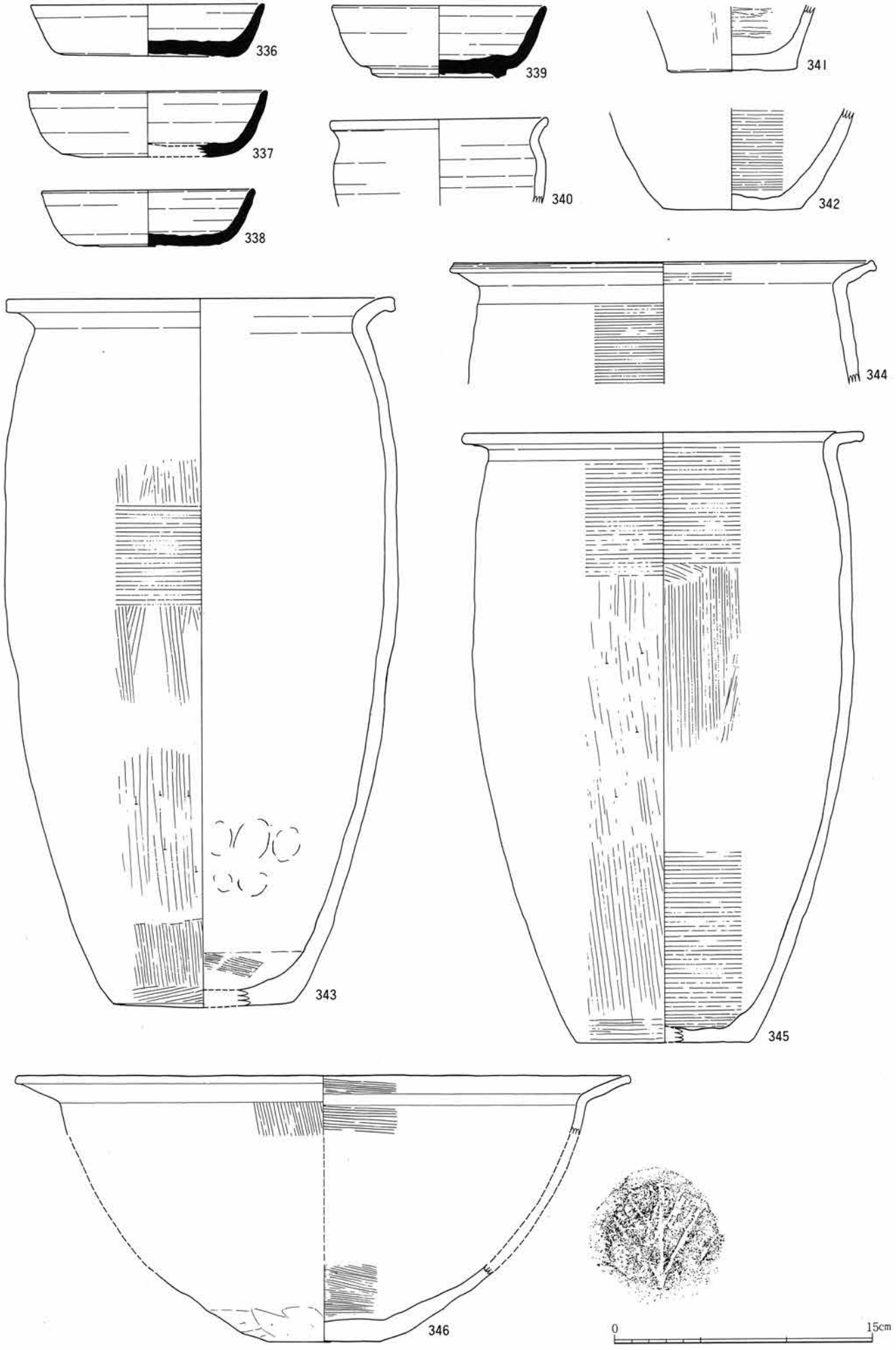
本文125・126頁，観察表254頁





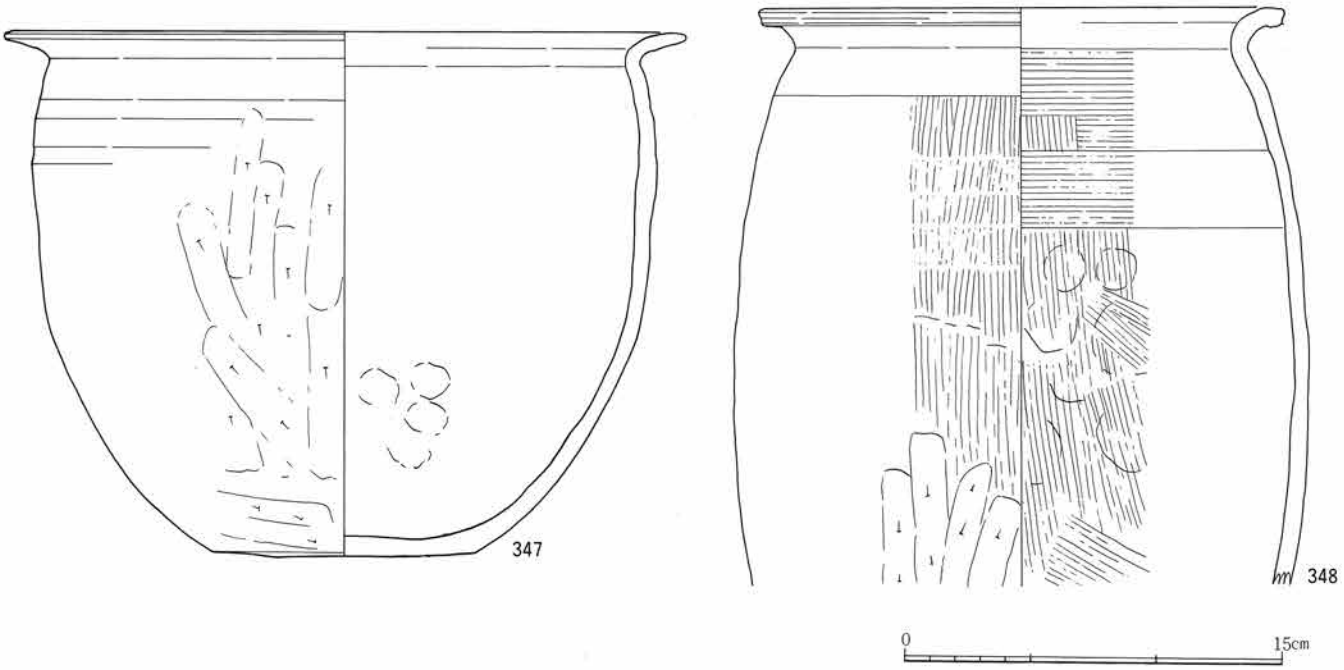
本文126頁，観察表254・255頁

SI 8

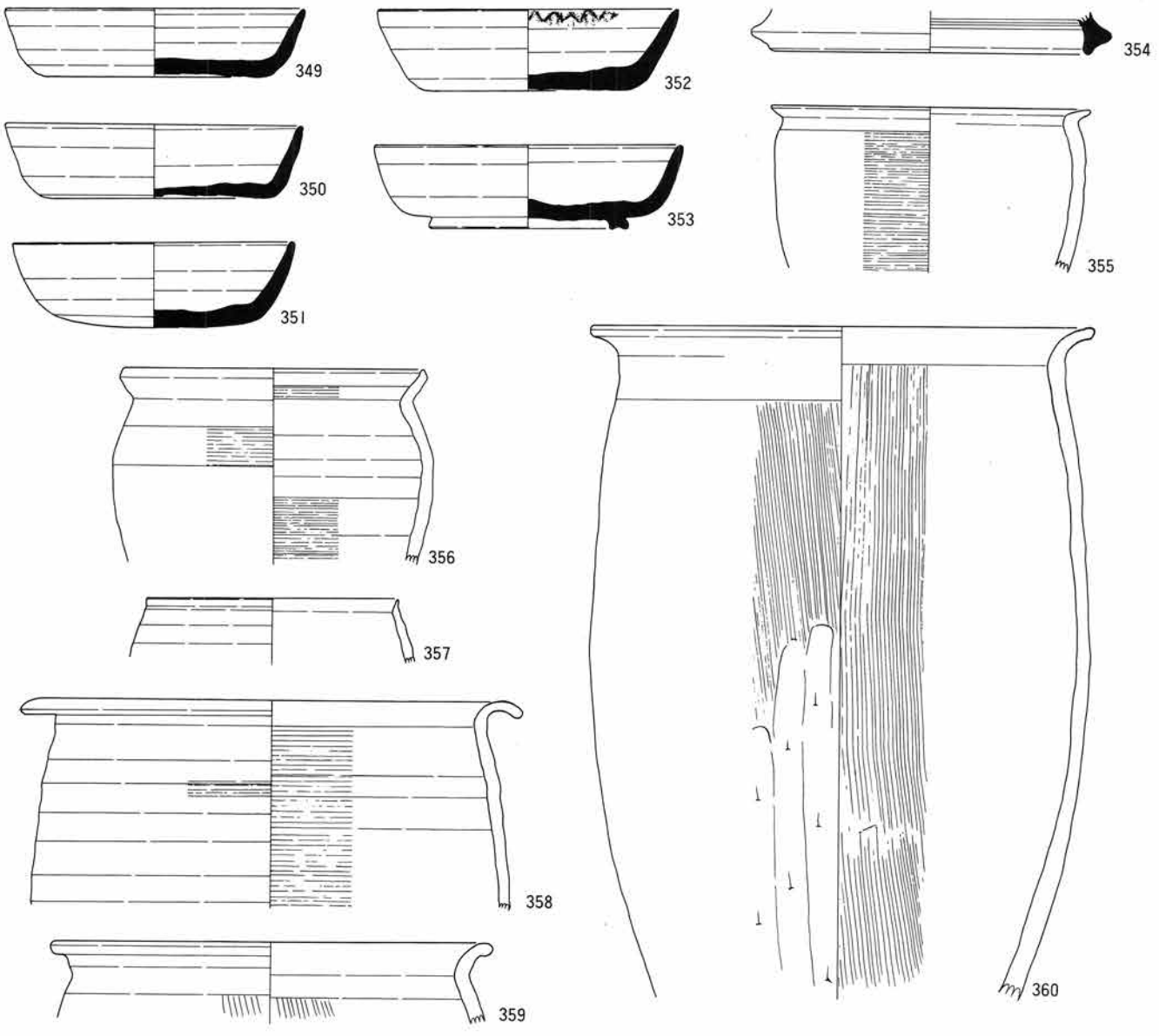


本文126・127頁，観察表255頁

SI 8

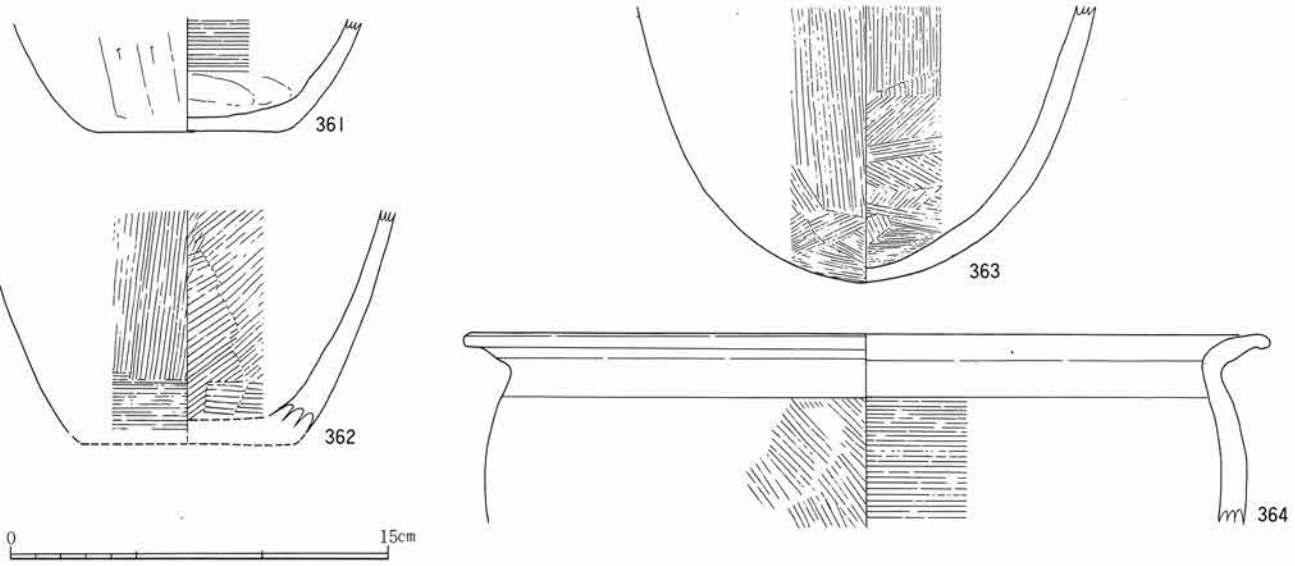


SI 72

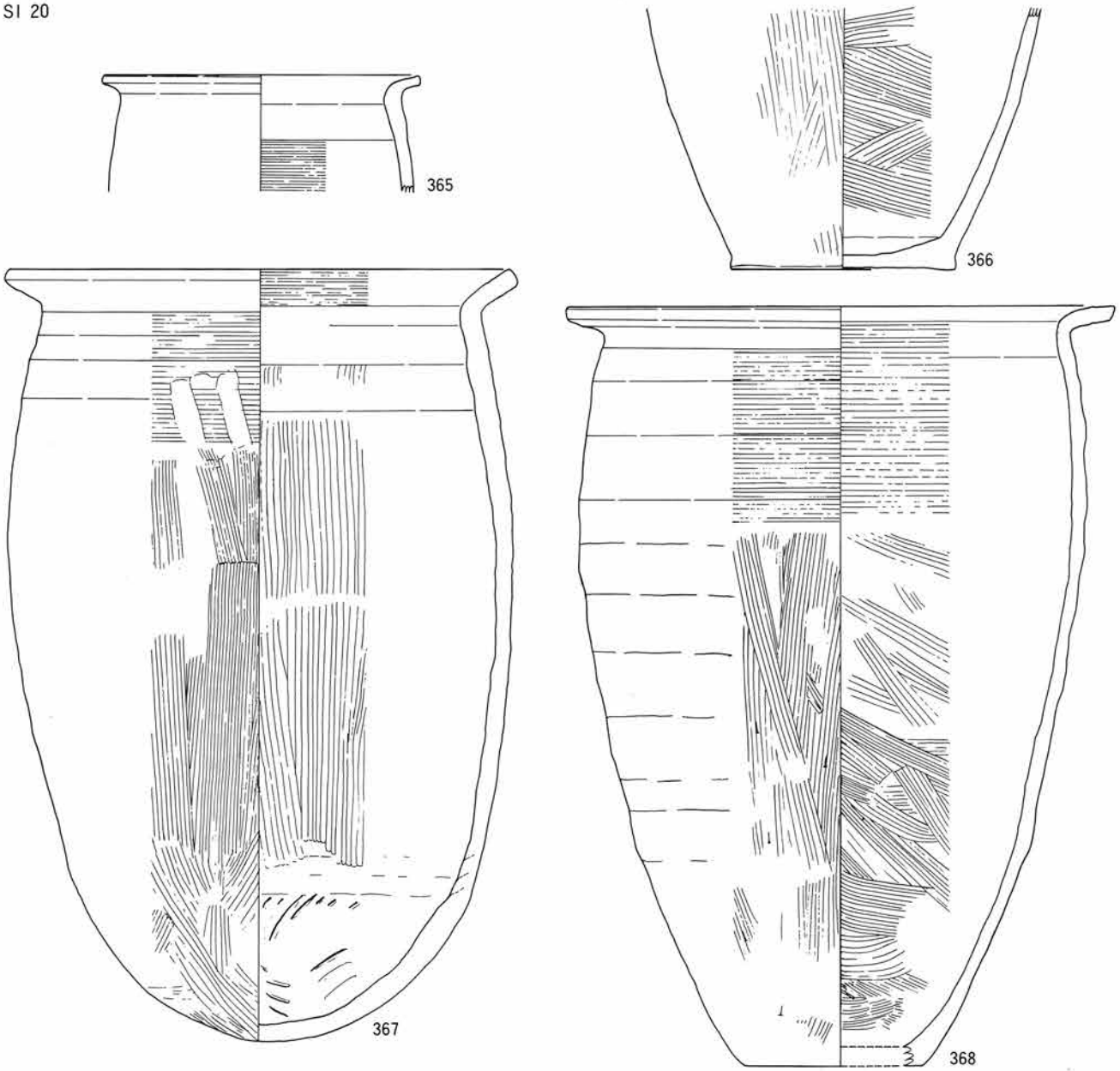


本文127・128頁，観察表255頁

SI 72

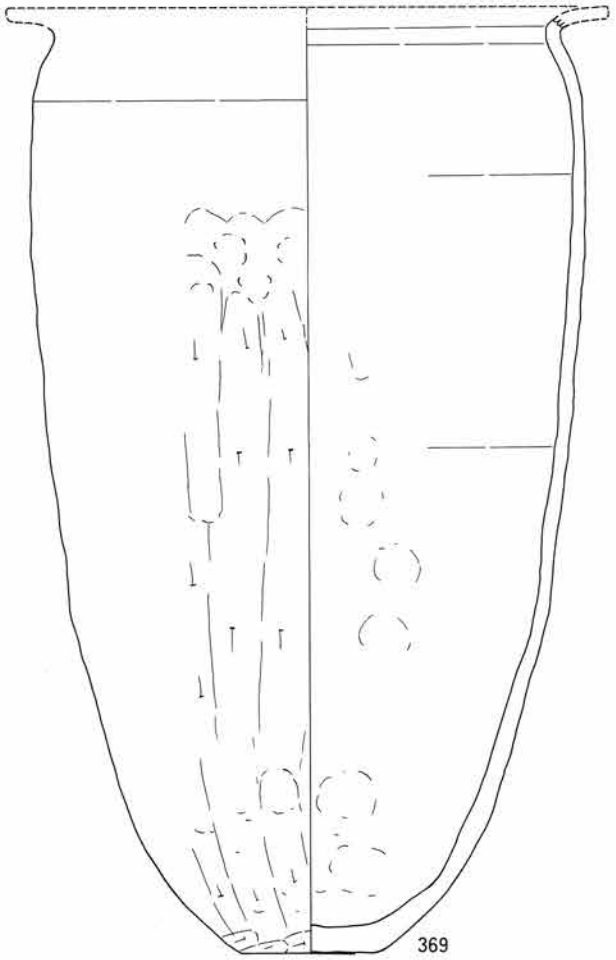


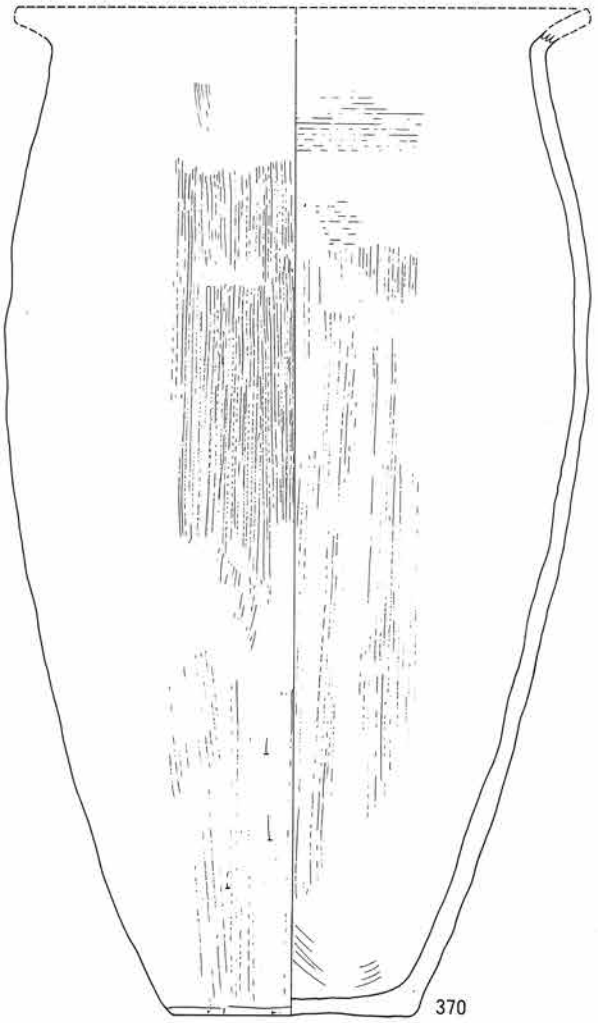
SI 20



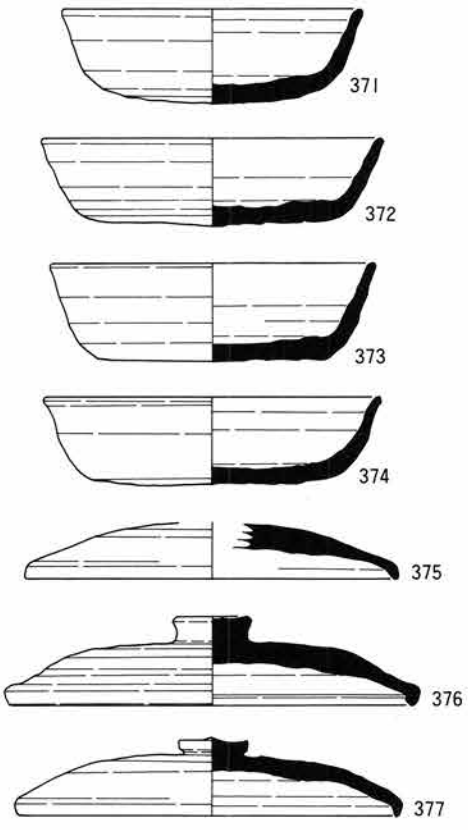
本文128頁，観察表255・256頁

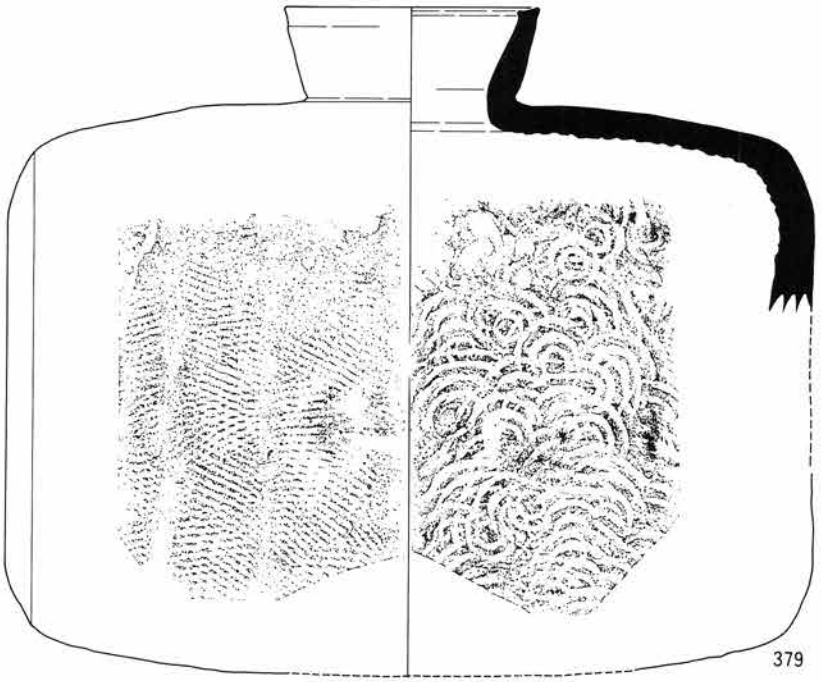
SI 20

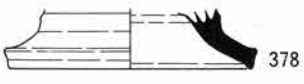




SI 14

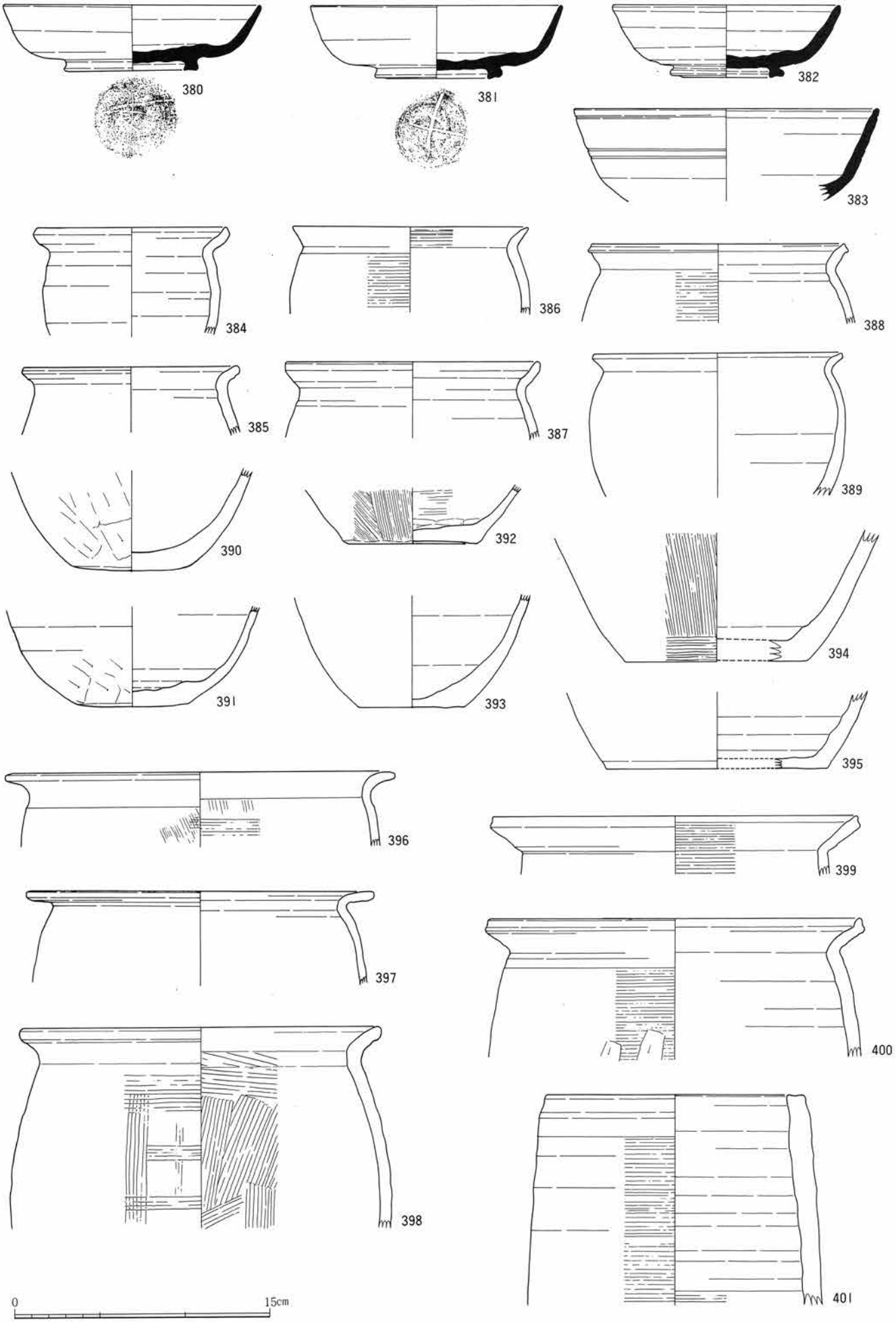






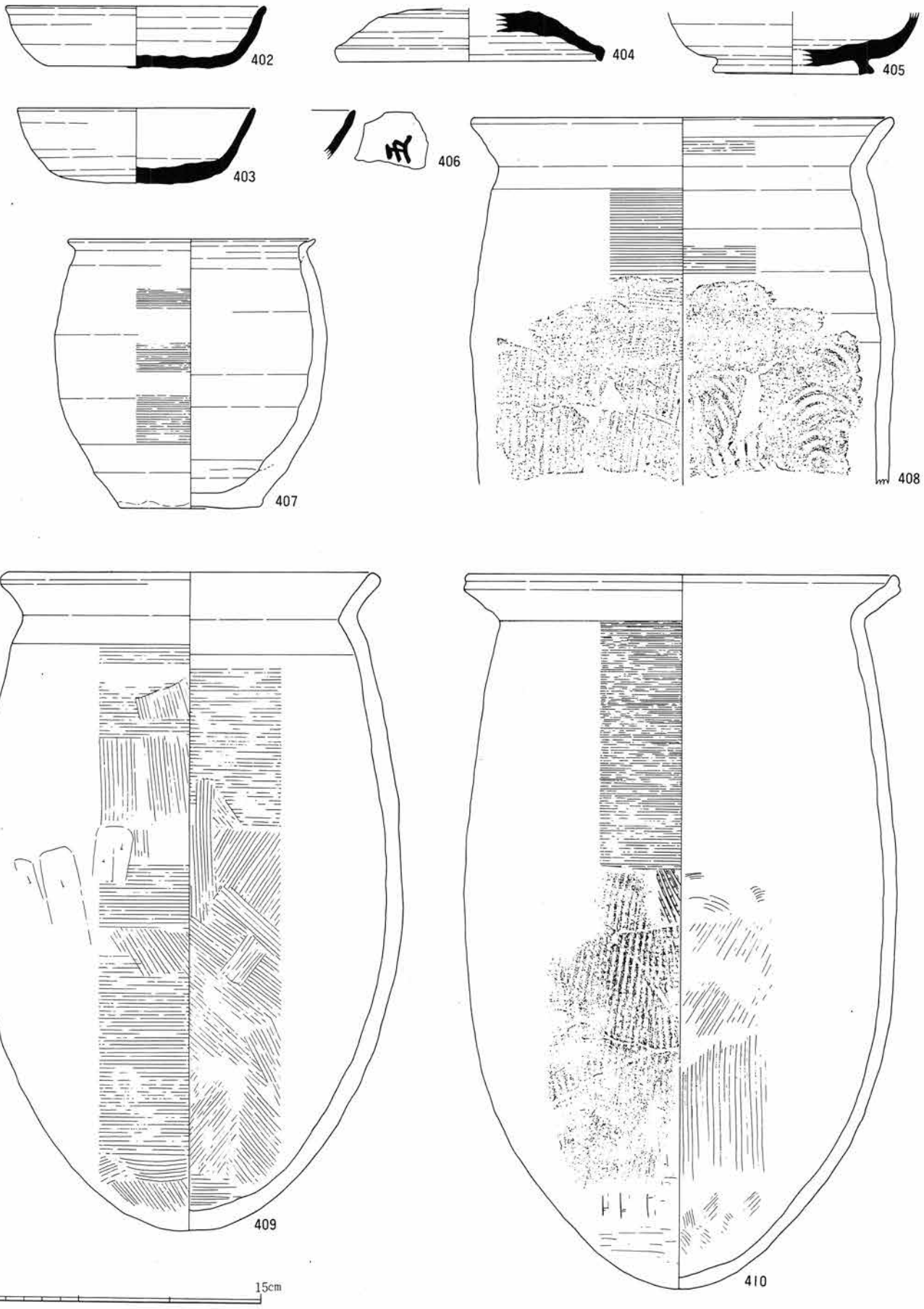
本文128・129頁，観察表256頁

SI 14



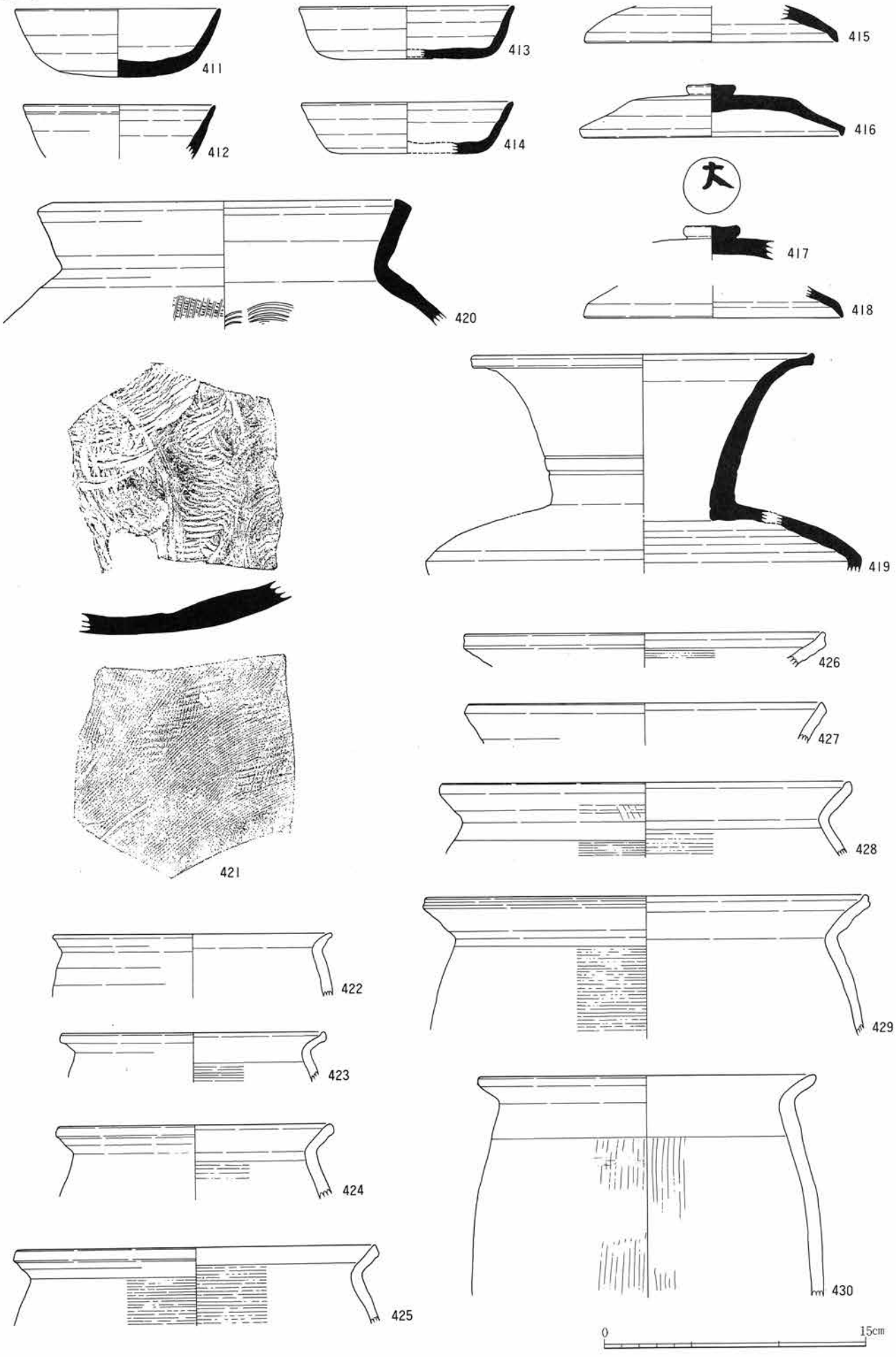
本文129・130頁，観察表256頁

SI 280

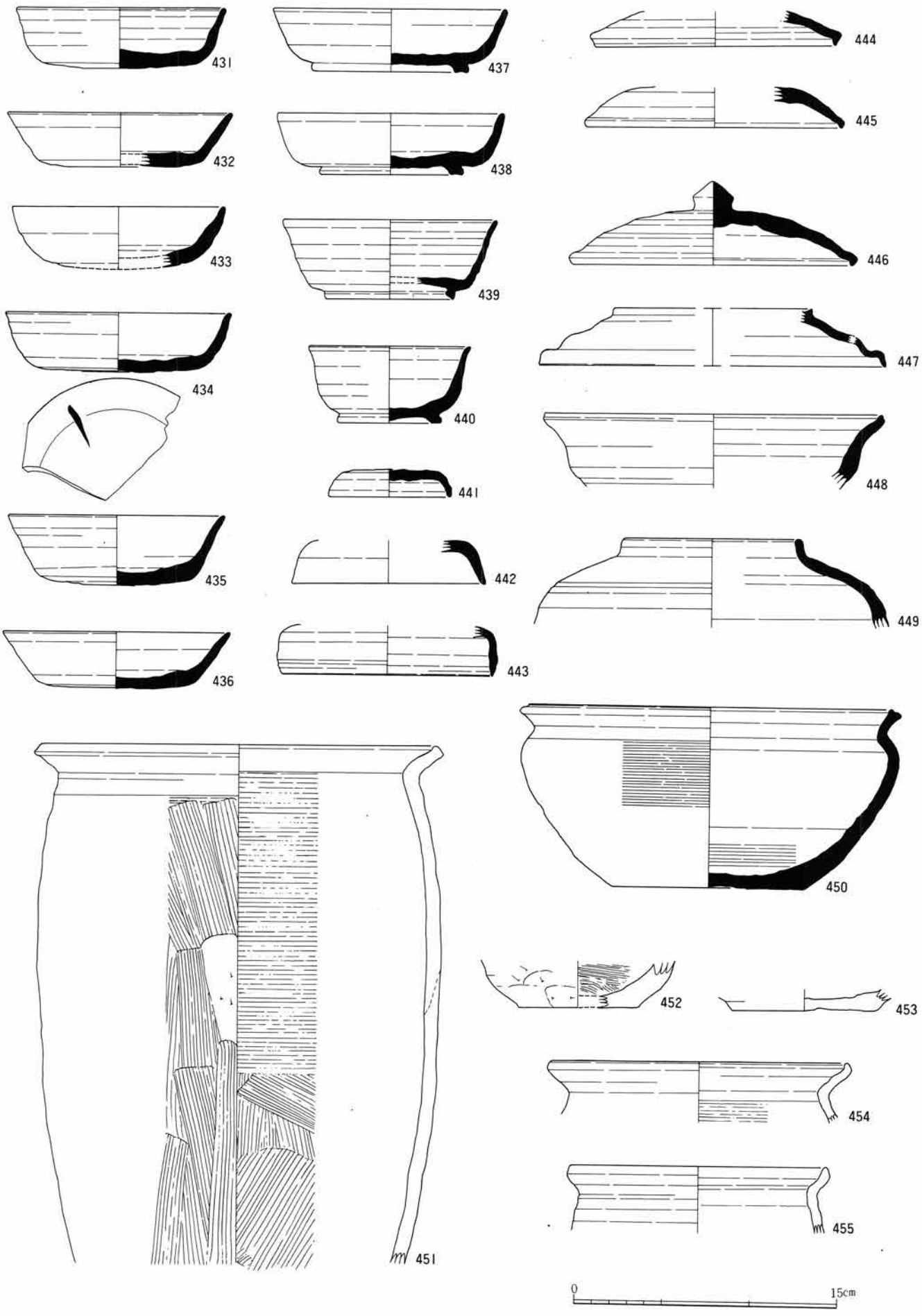


本文130頁，観察表256・257頁

SI 75

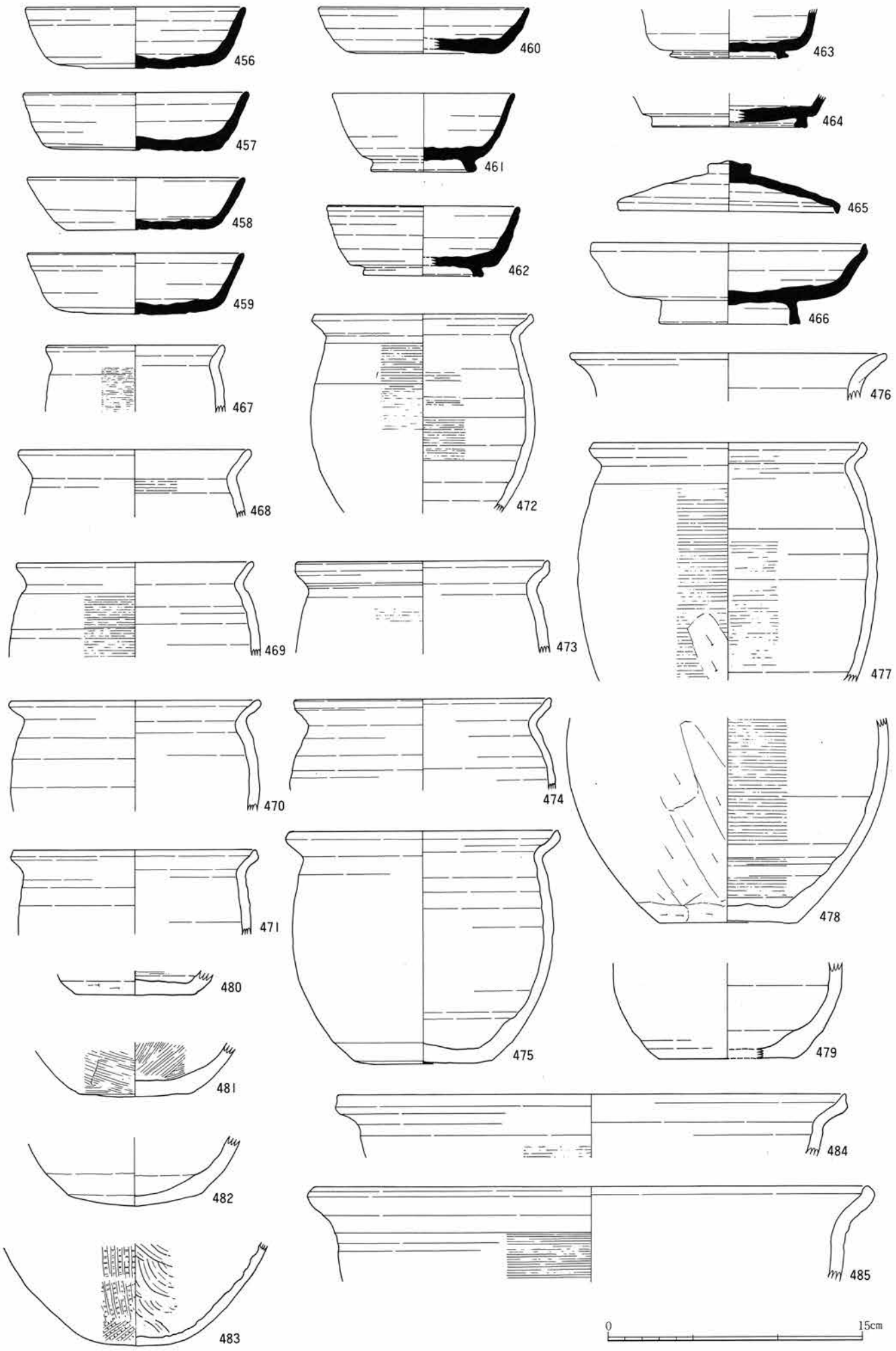

411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
0
15cm

SI 339



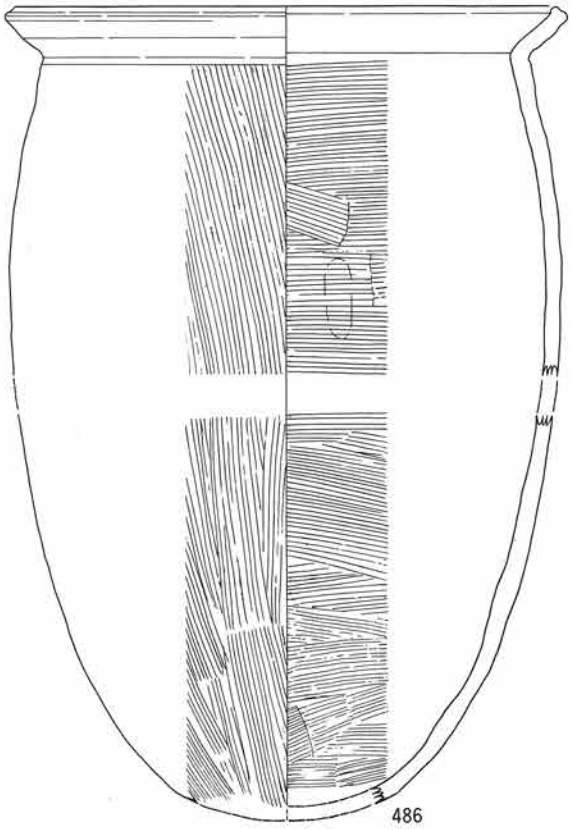
本文131・132頁，観察表257・258頁

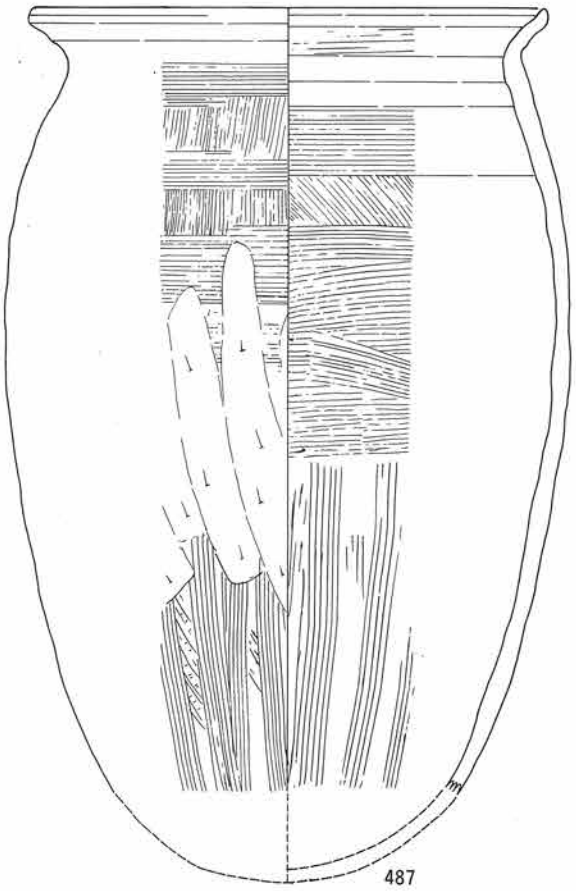
SI 7

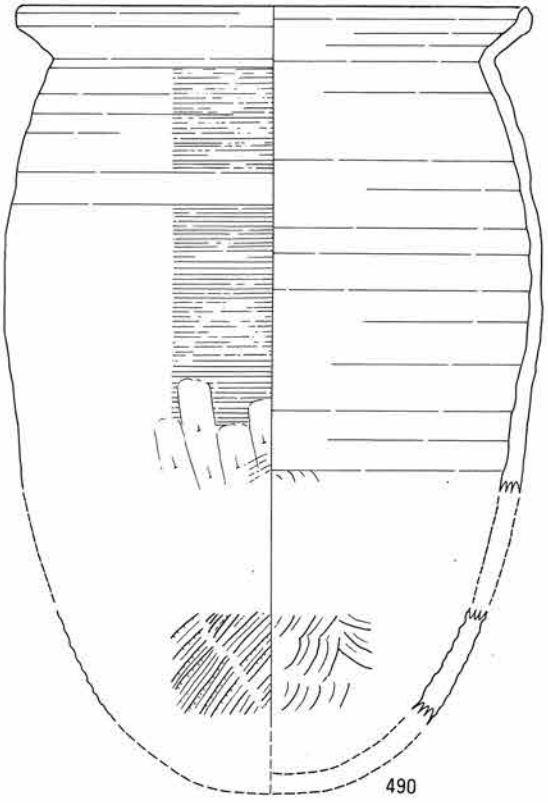


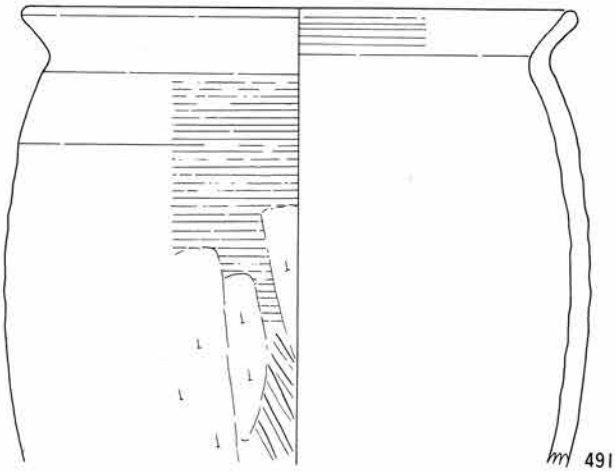
本文132～134頁，観察表258・259頁

SI 7

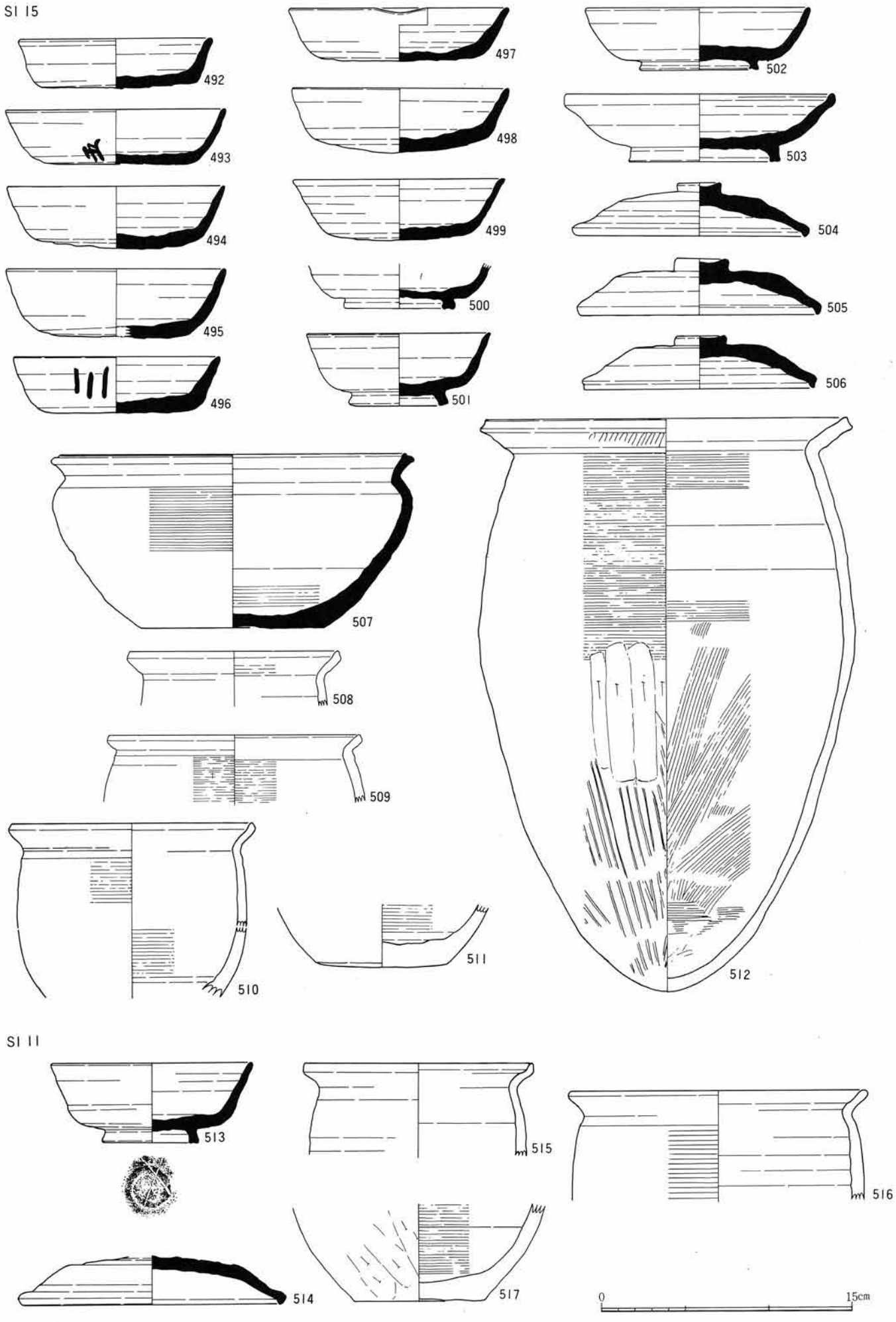






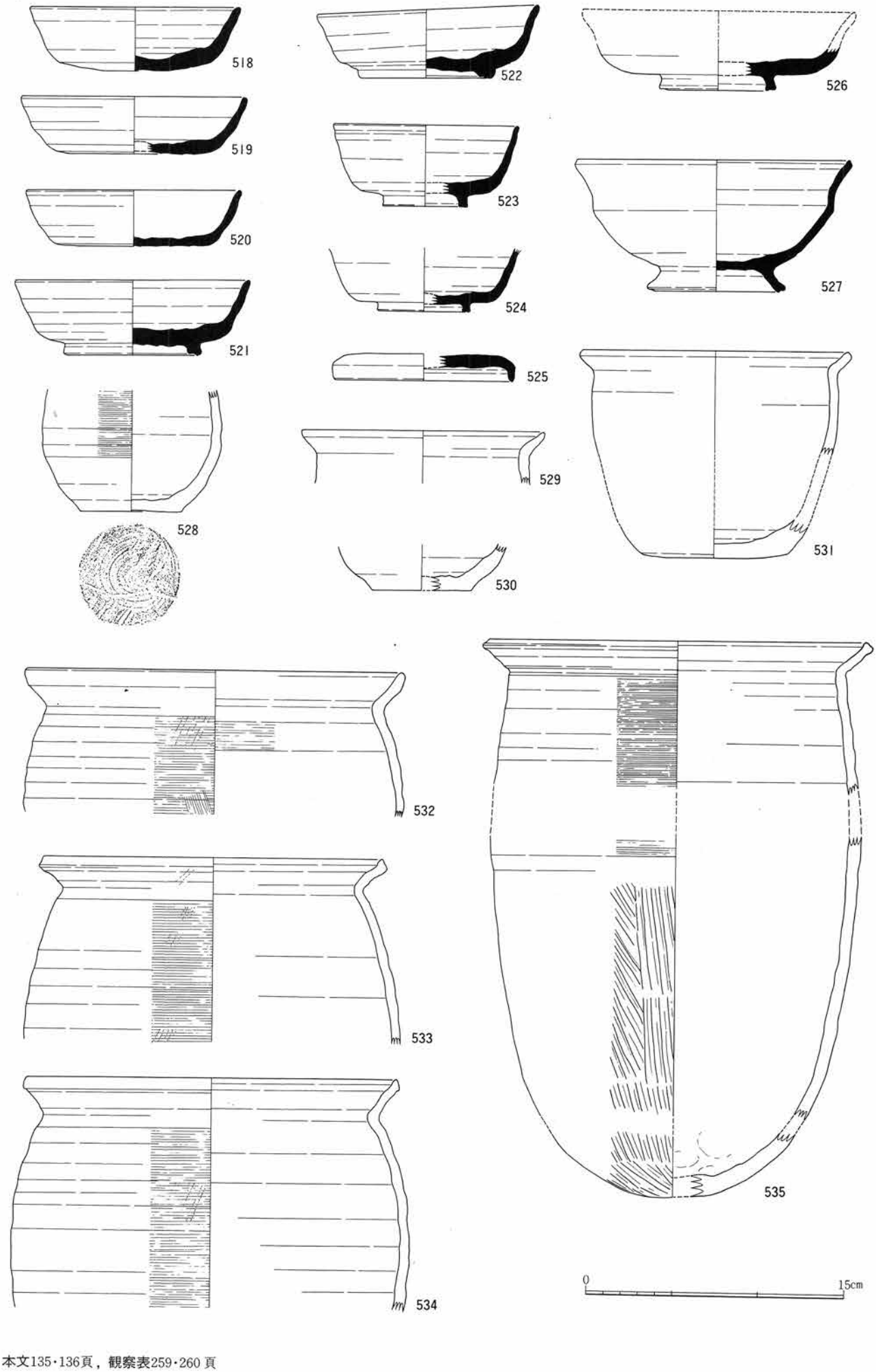


本文133・134頁，観察表258・259頁



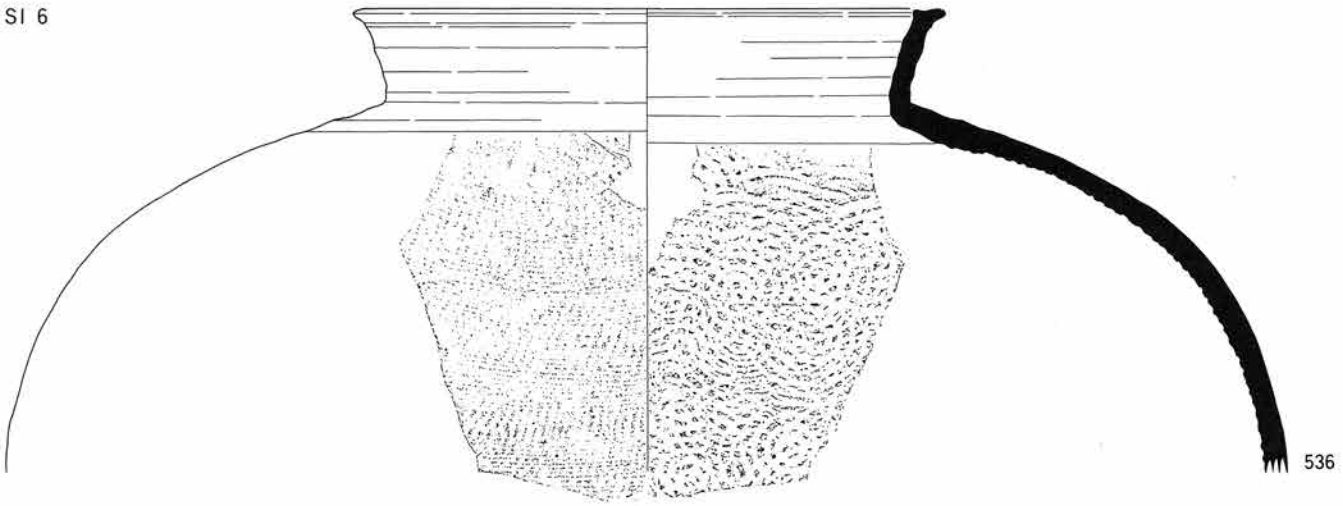
本文134・135頁，観察表259頁

SI 6

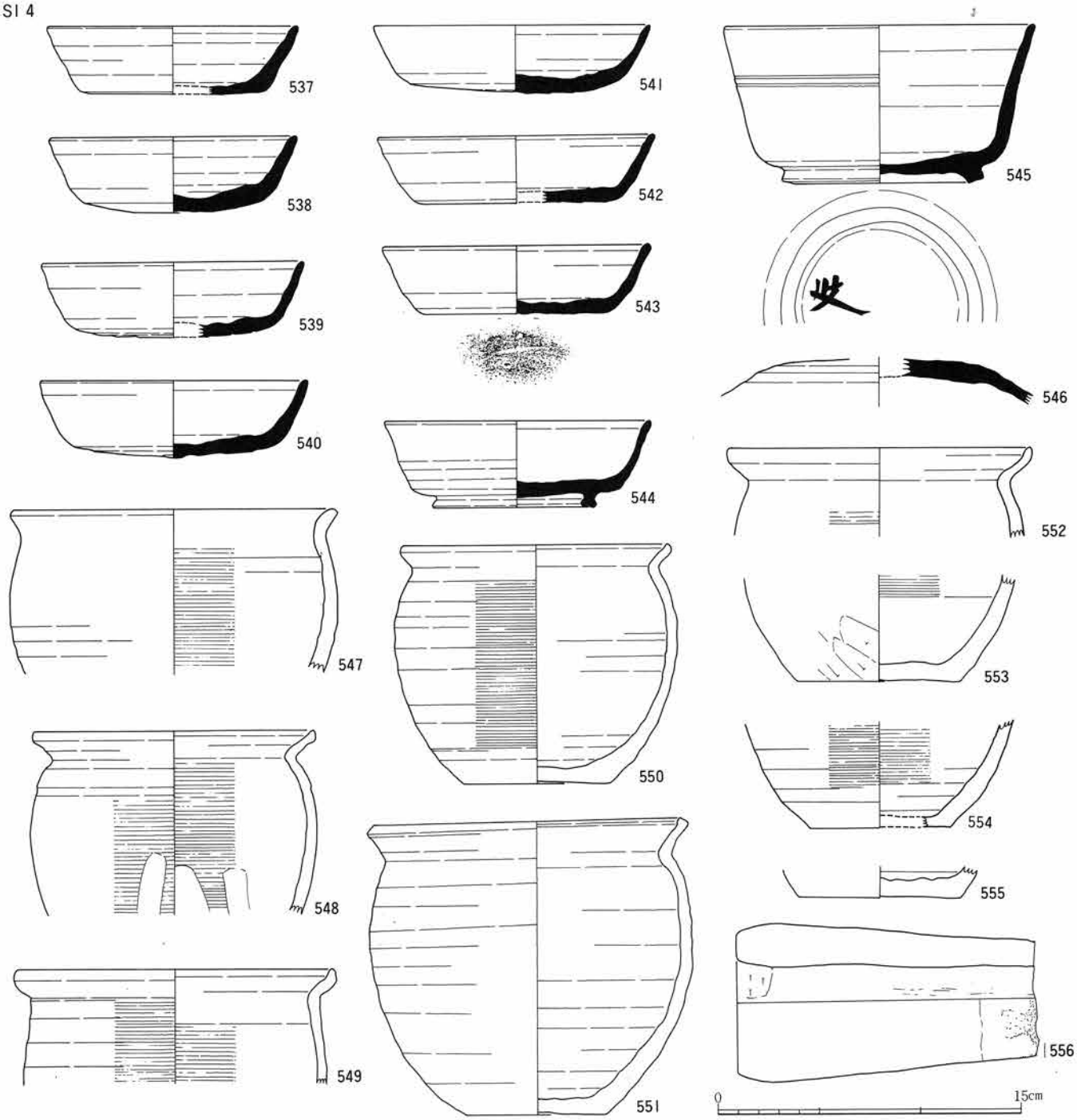


本文135・136頁，観察表259・260 頁

SI 6

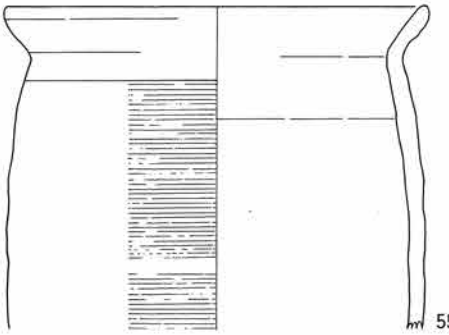


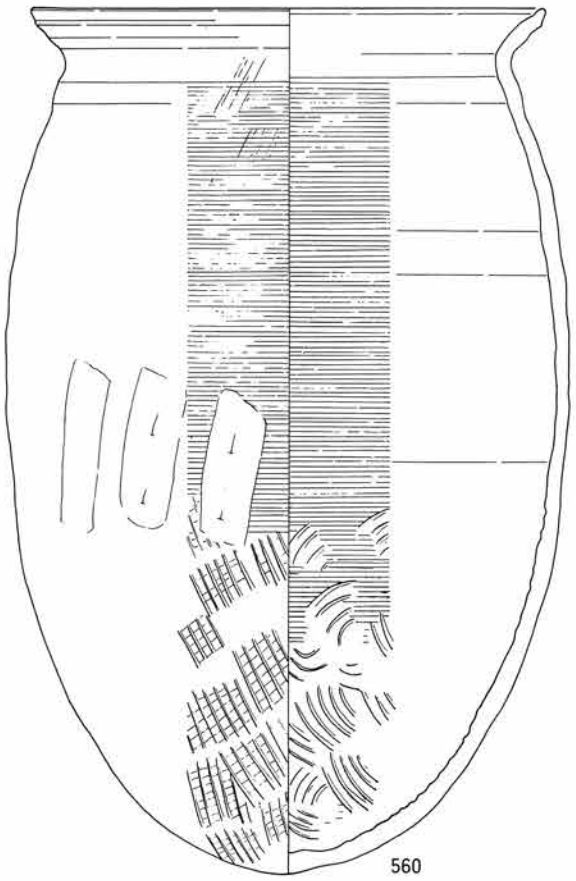
SI 4

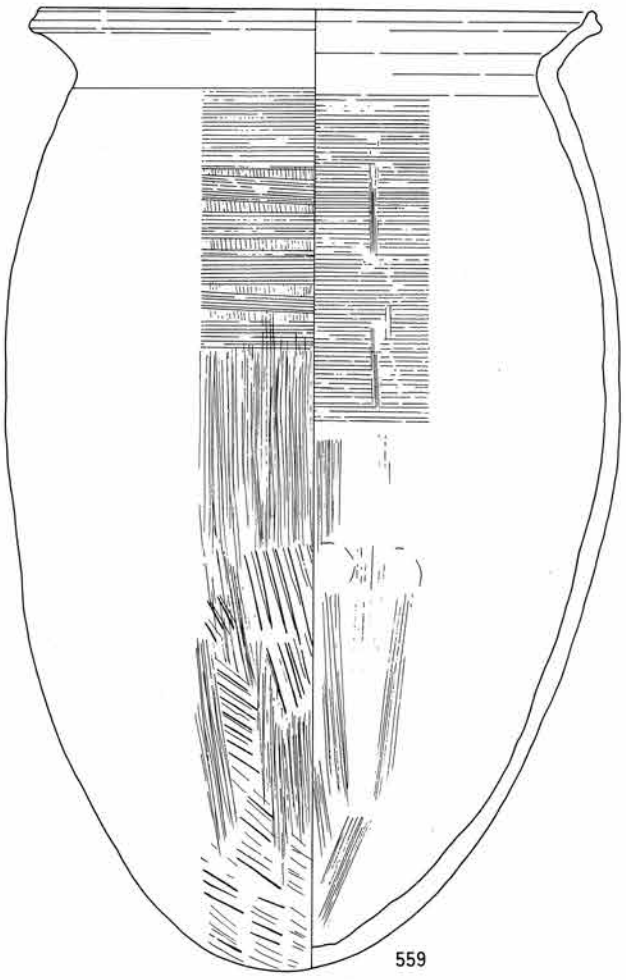


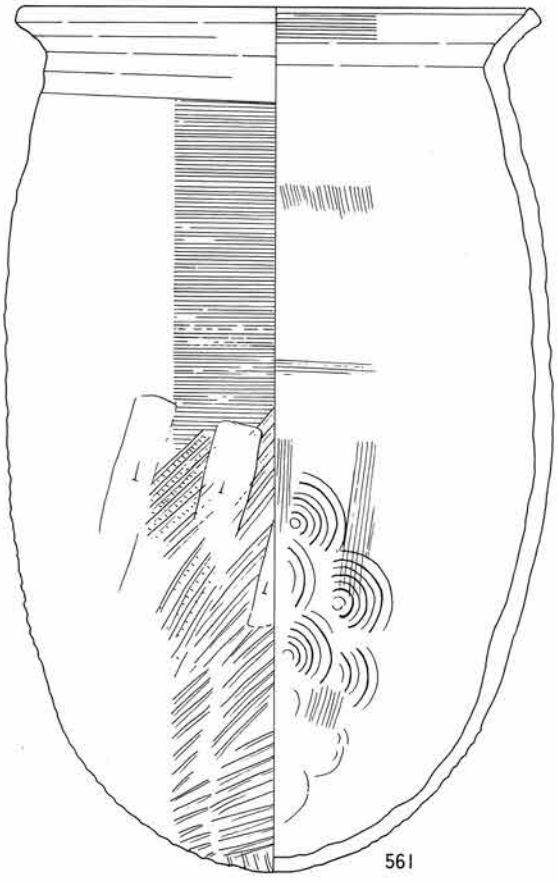
本文136～138頁，観察表260頁

SI 4



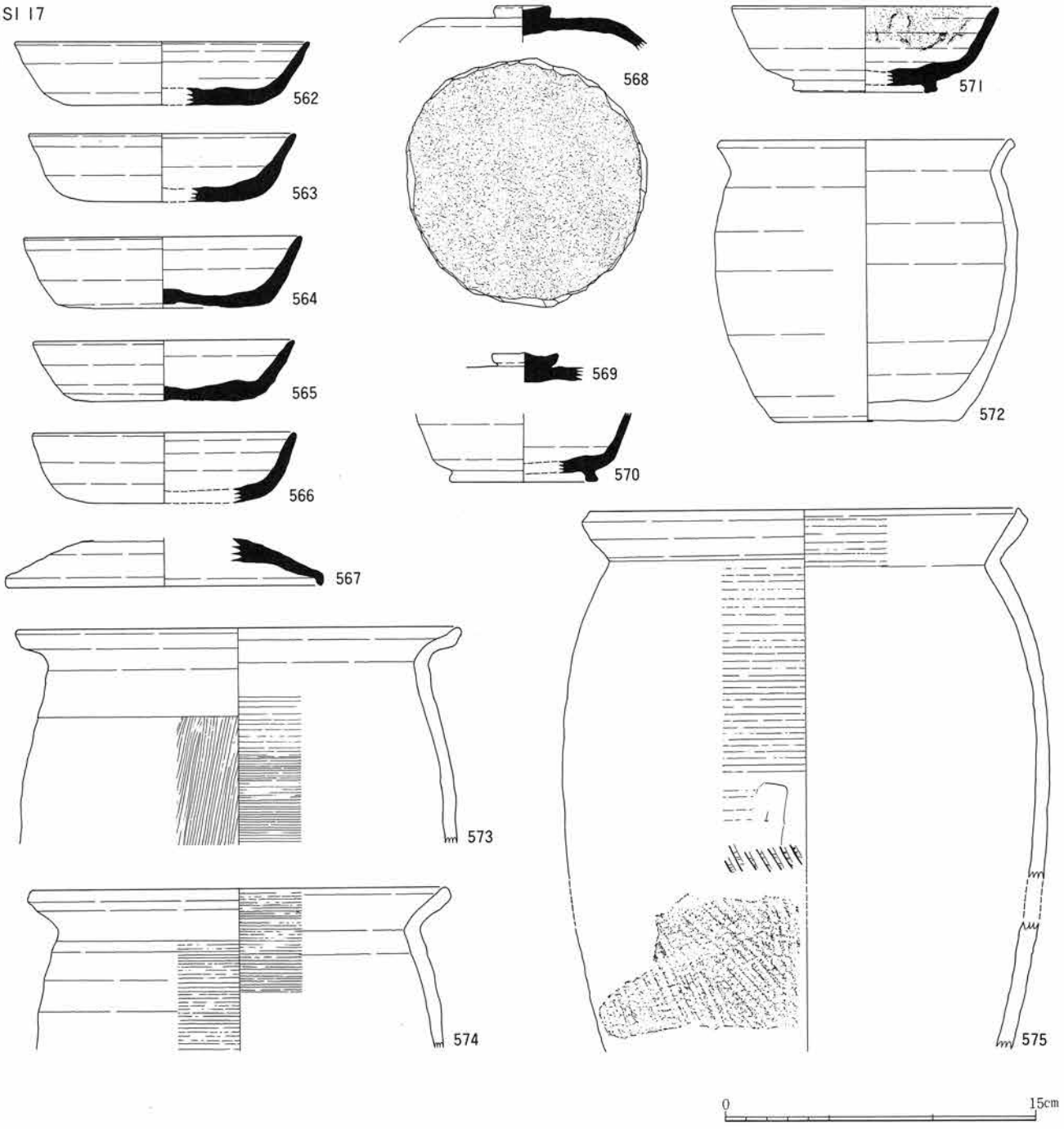




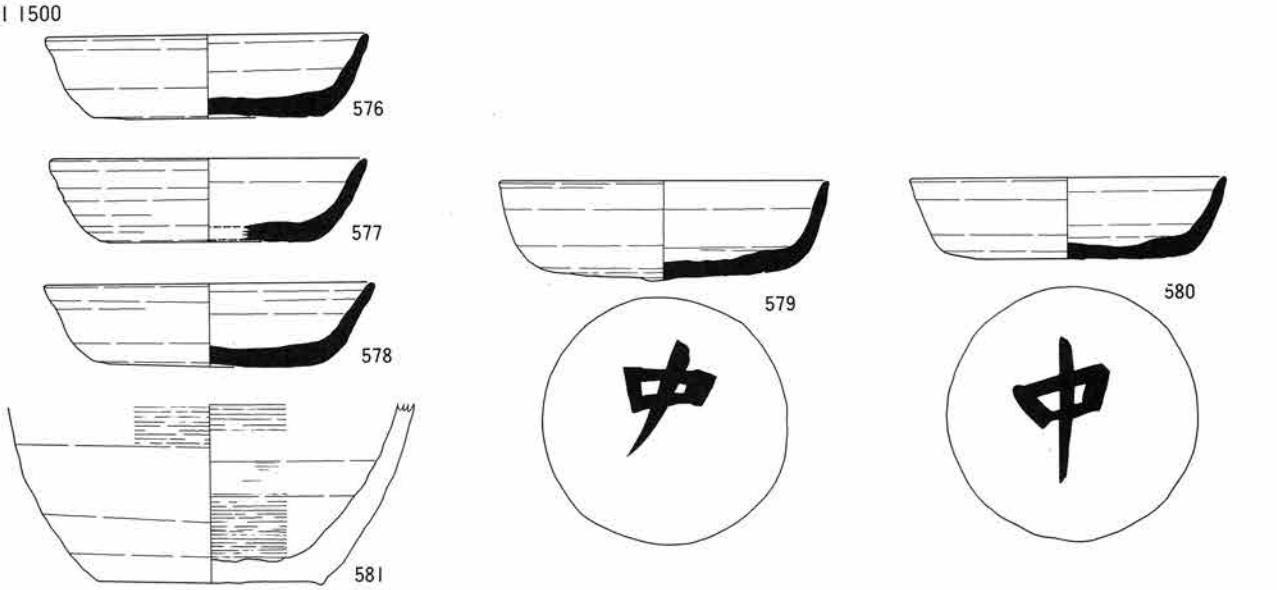


本文137・138頁，観察表260頁

SI 17



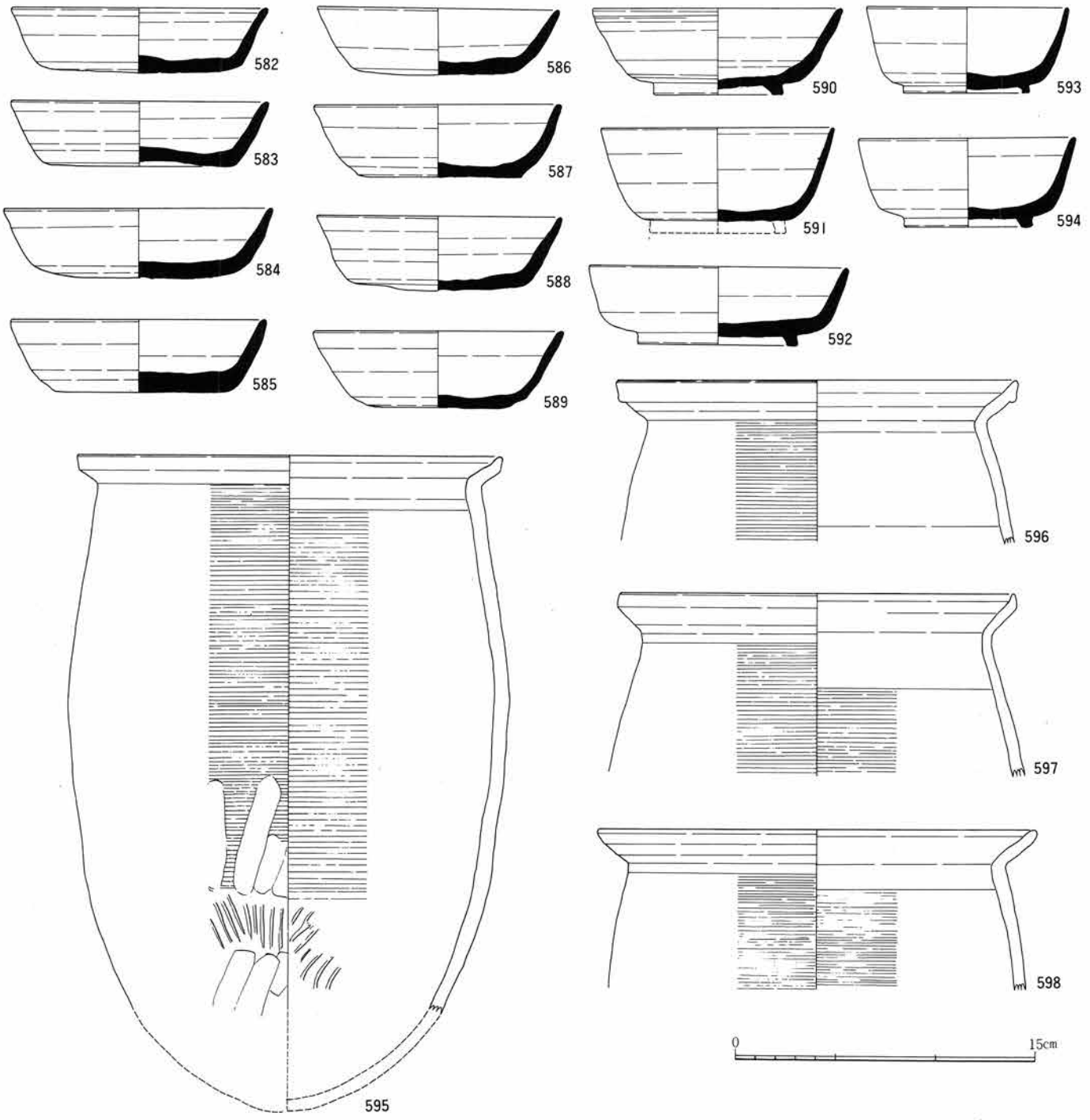
SI 1500



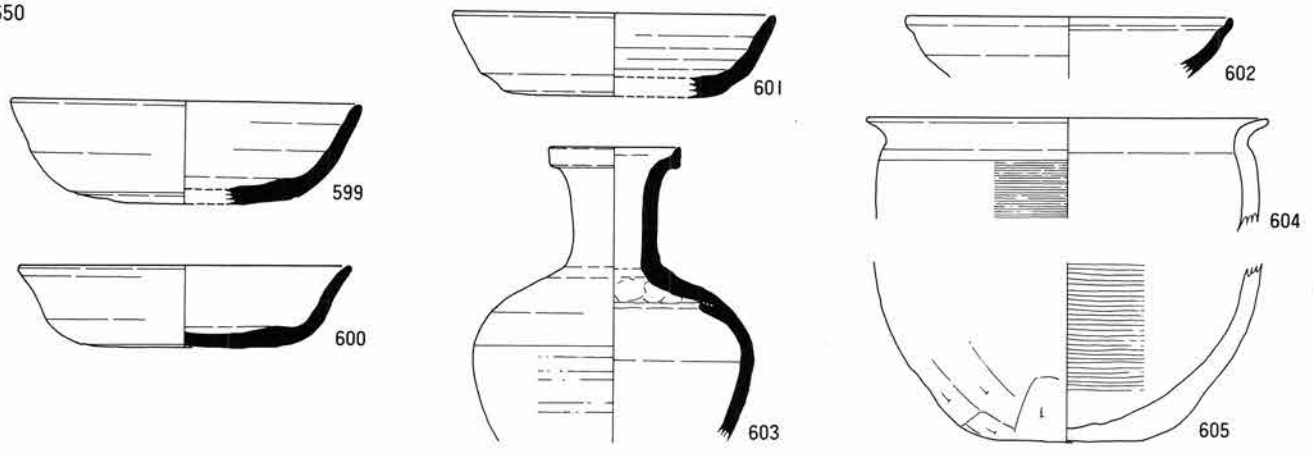
本文138頁，観察表260・261頁

568墨痕　571タール

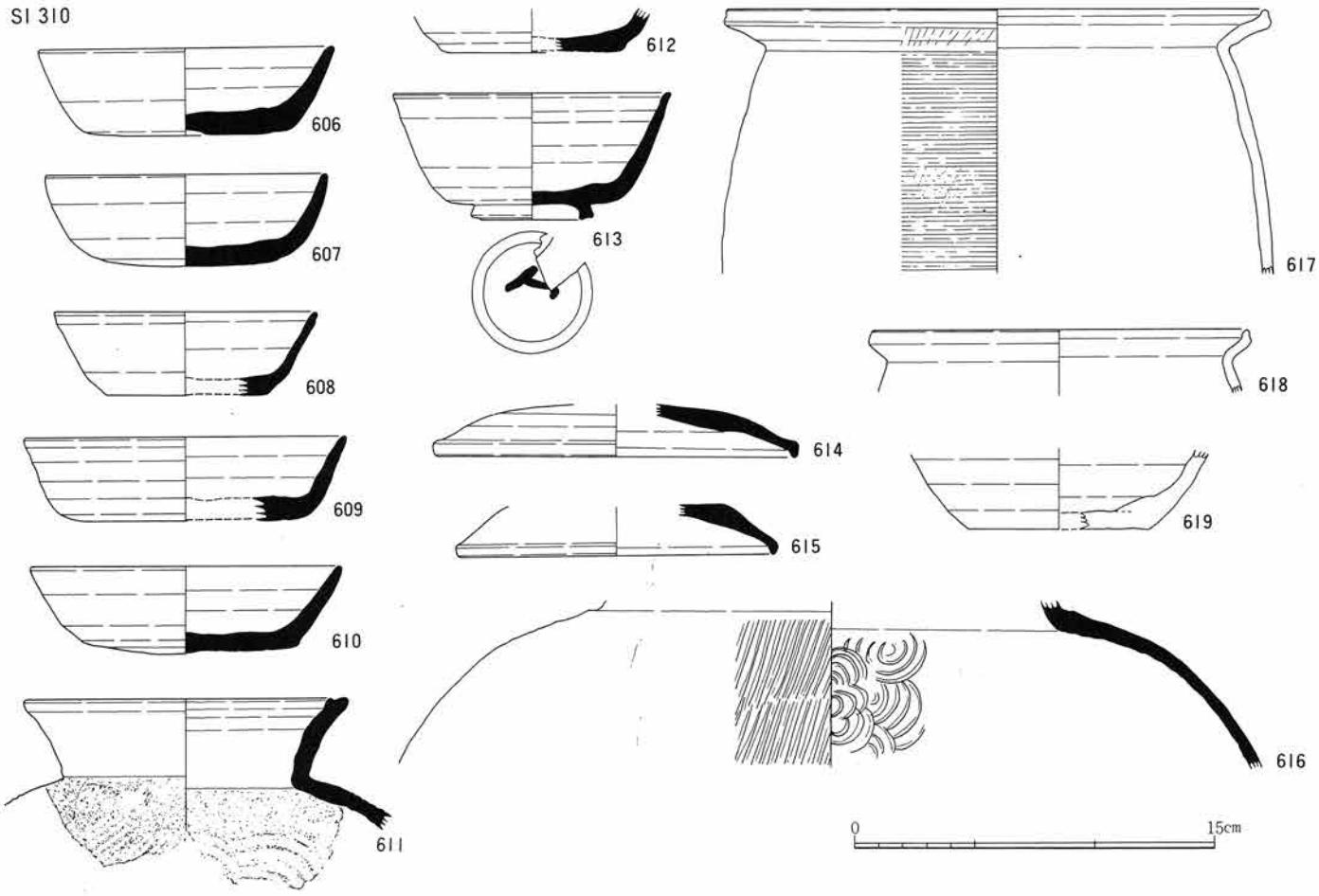
SI 60

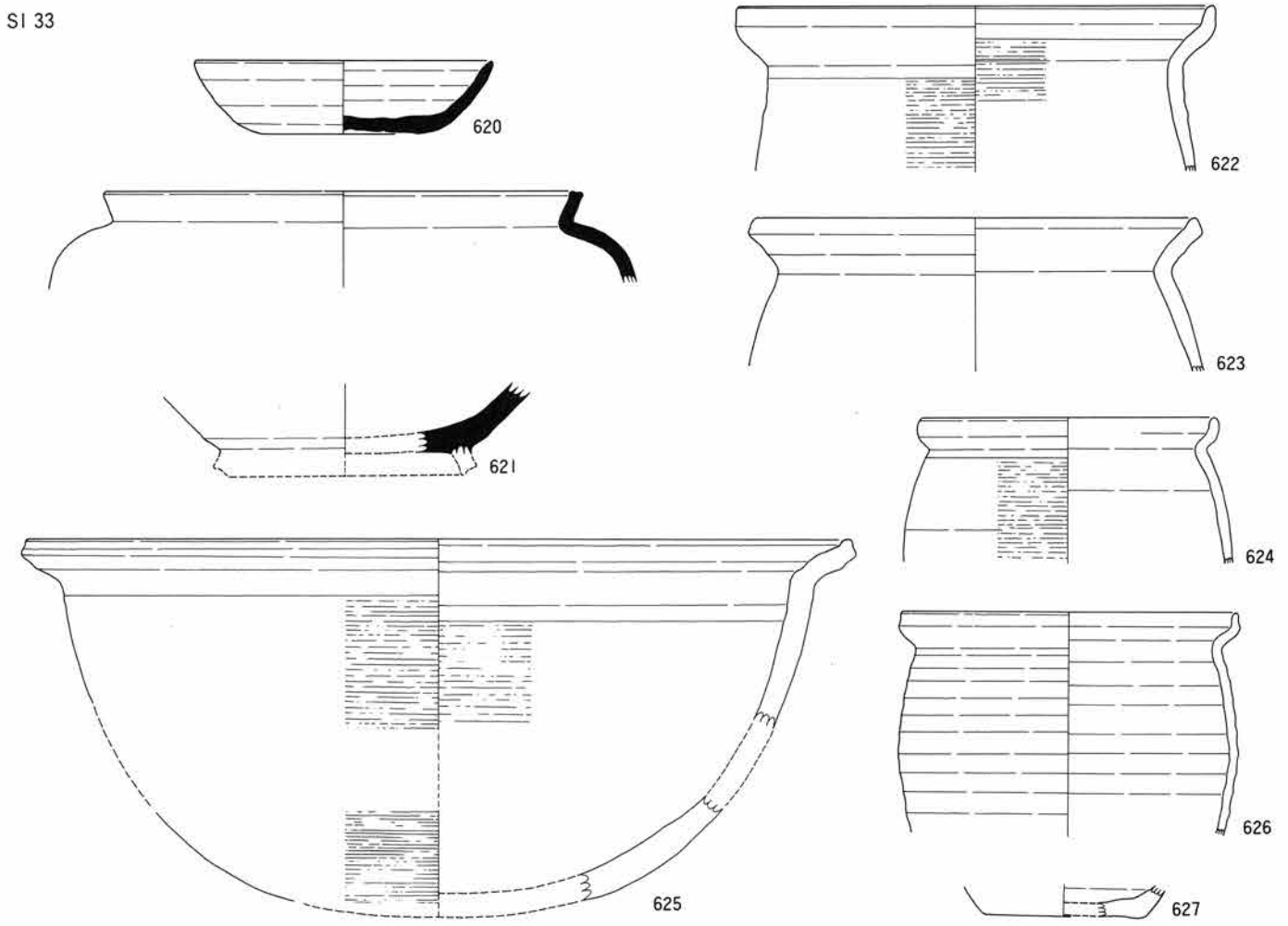


SI 650



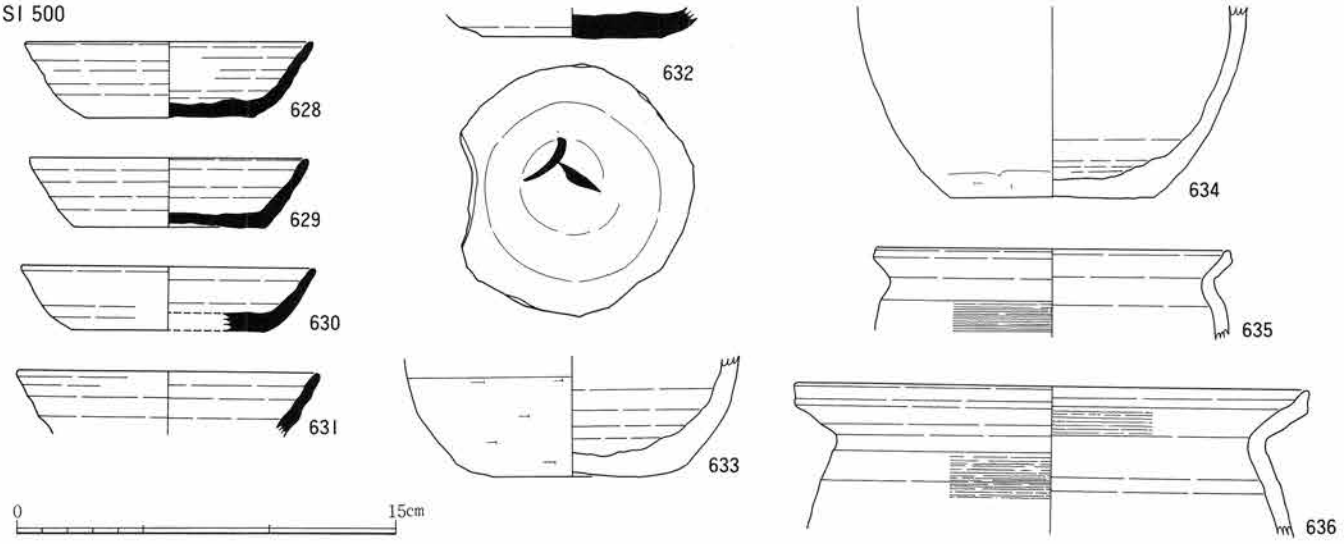
本文139・140頁，観察表261頁



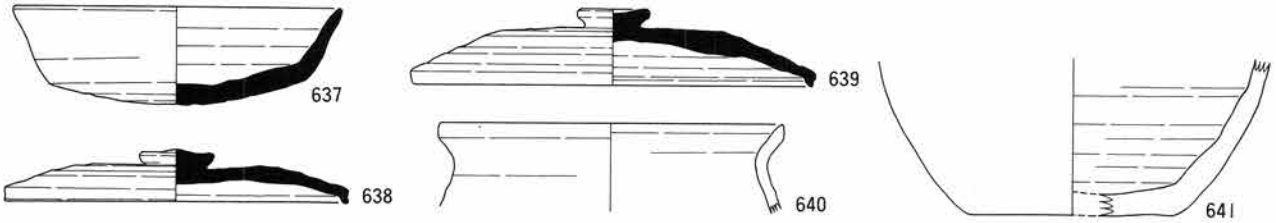


本文140・141頁，観察表261・262頁

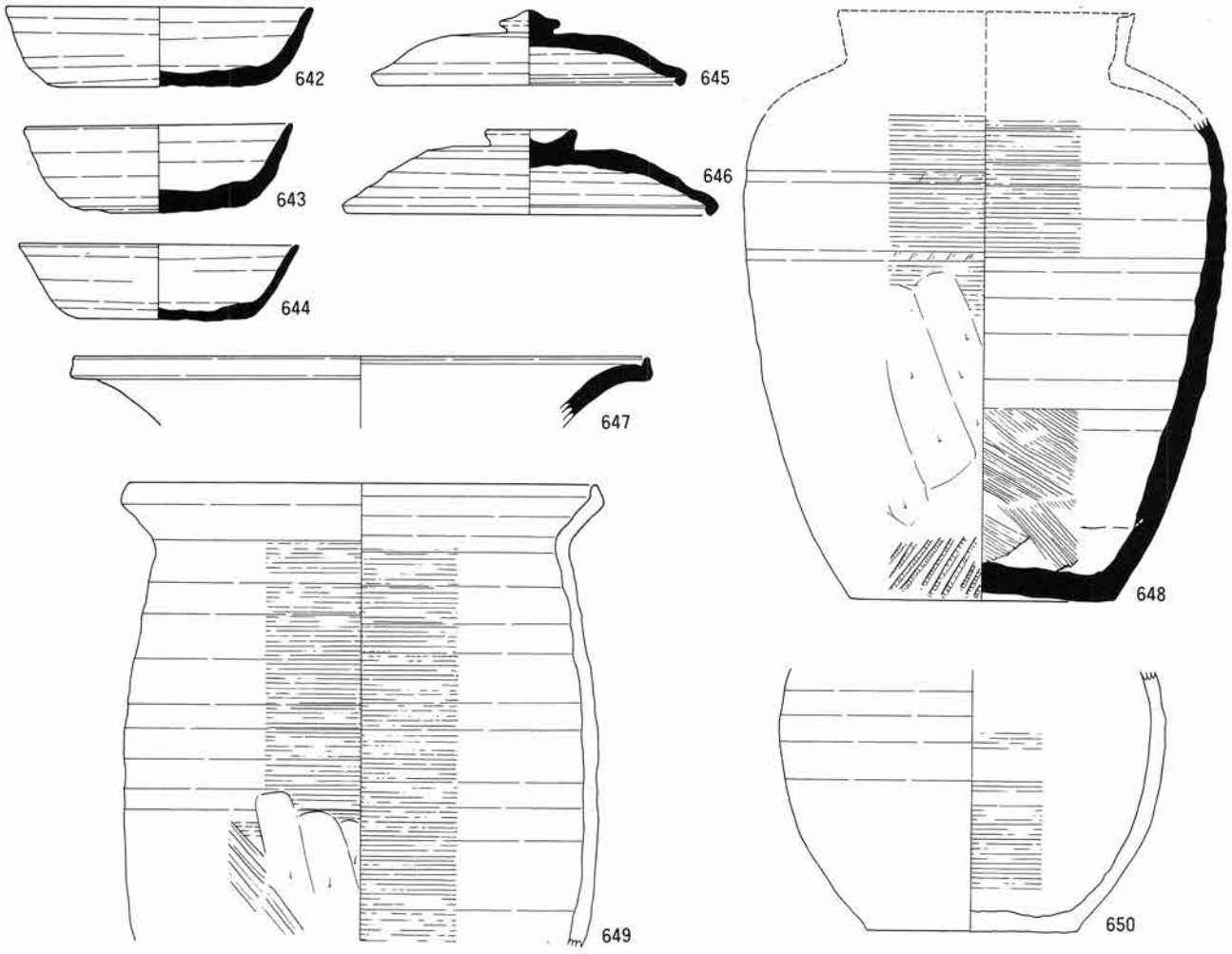
SI 500



SI 10

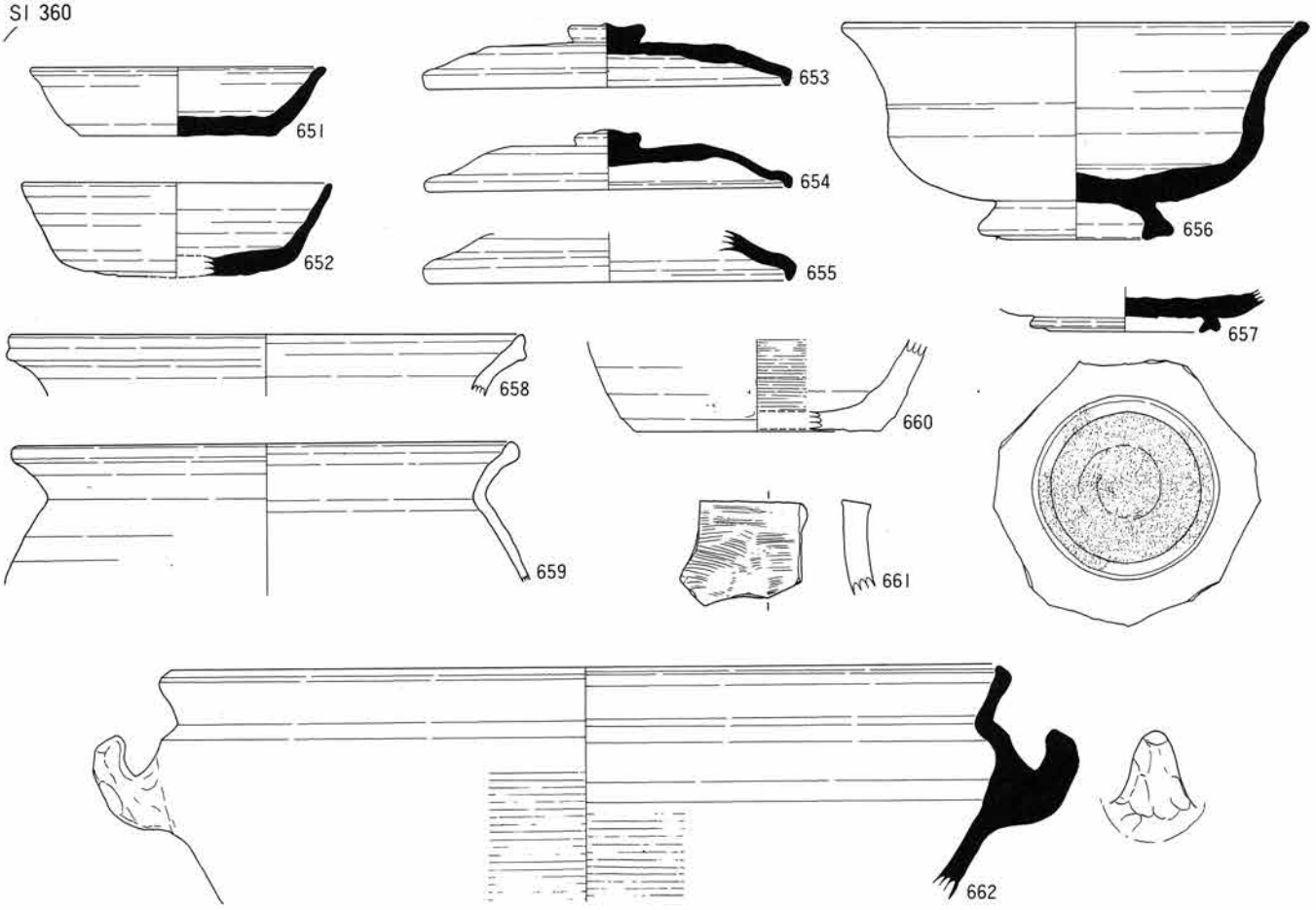


SI 41

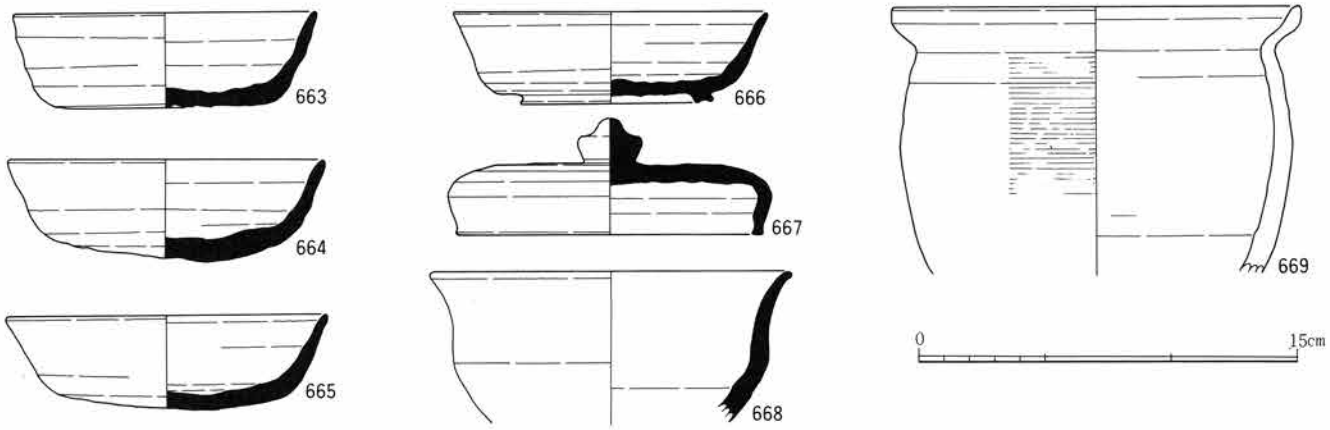


本文141・142頁，観察表262頁

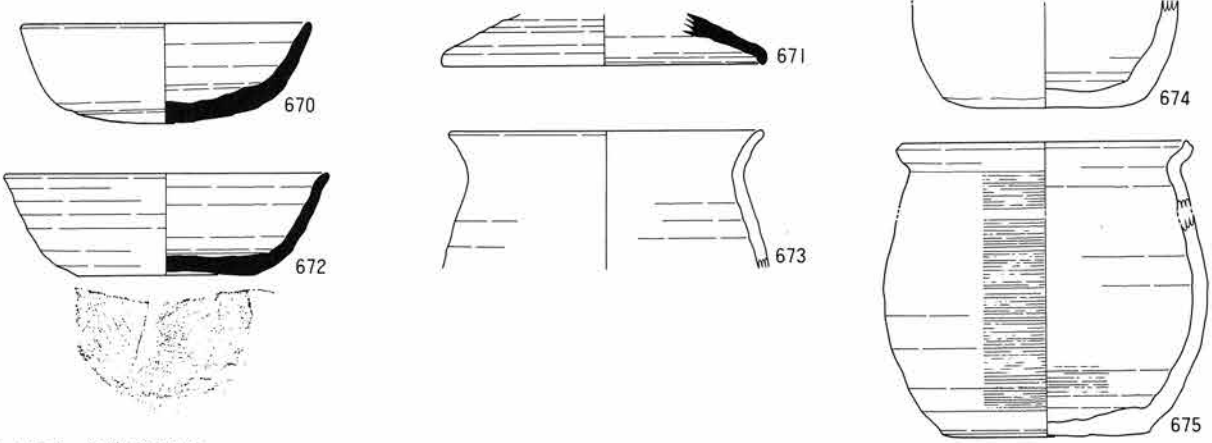
SI 360



SI 1302



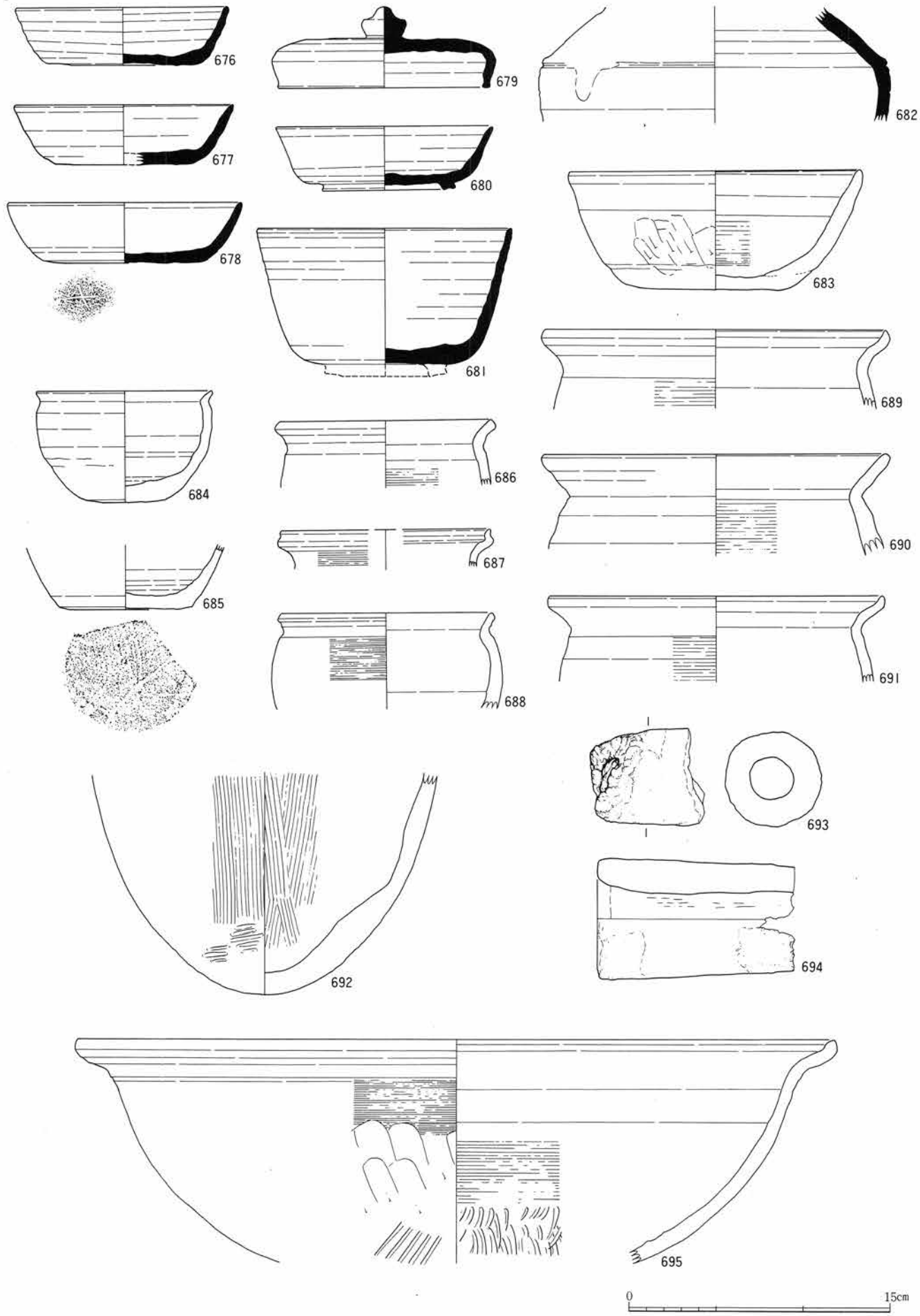
SI 1



本文142・143頁，観察表263頁

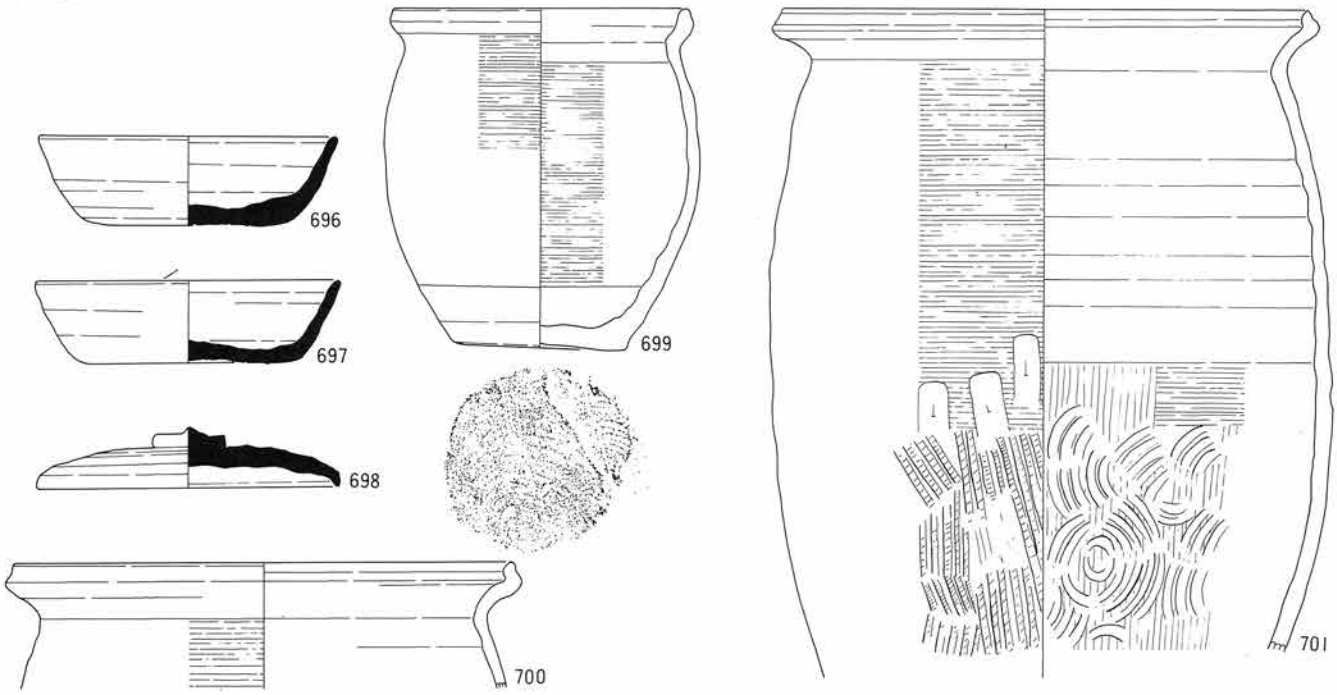
657 墨 痕

SI 1100

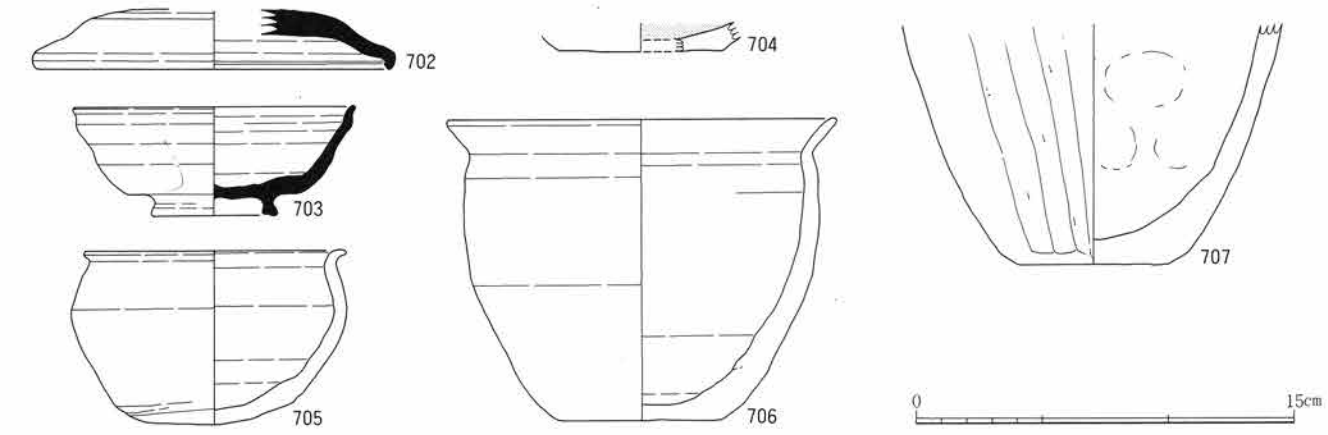


本文143・144頁，観察表263・264頁

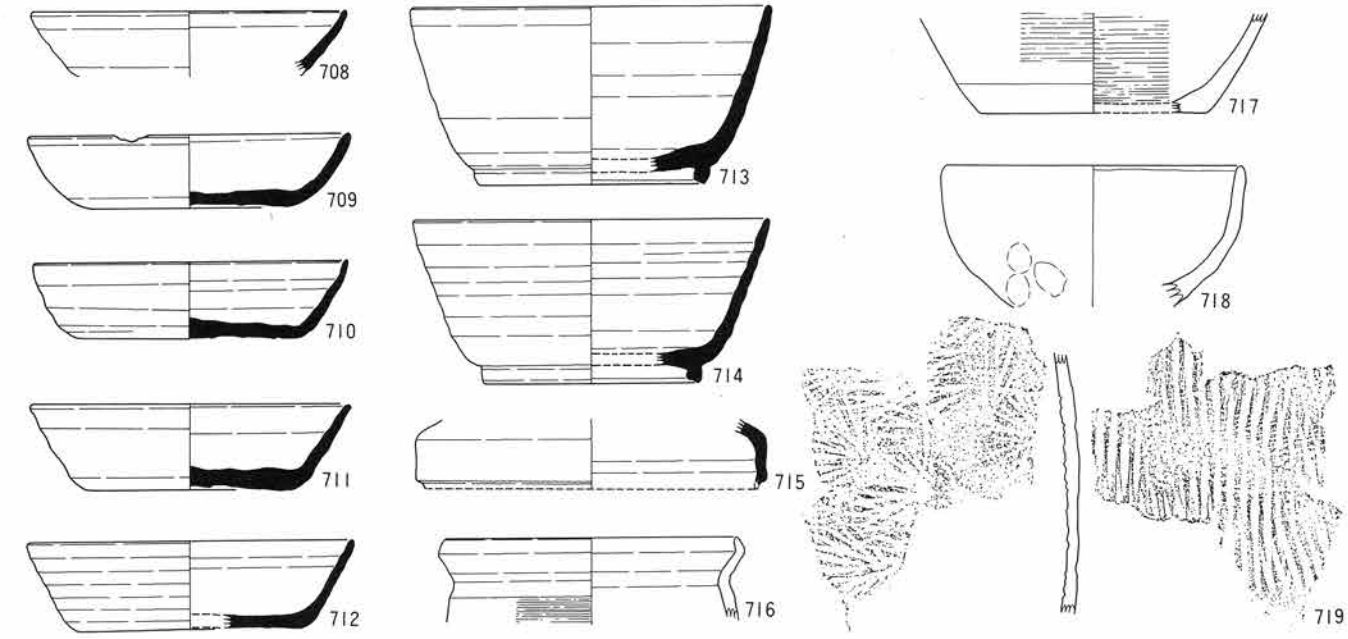
SI 1101



SI 299



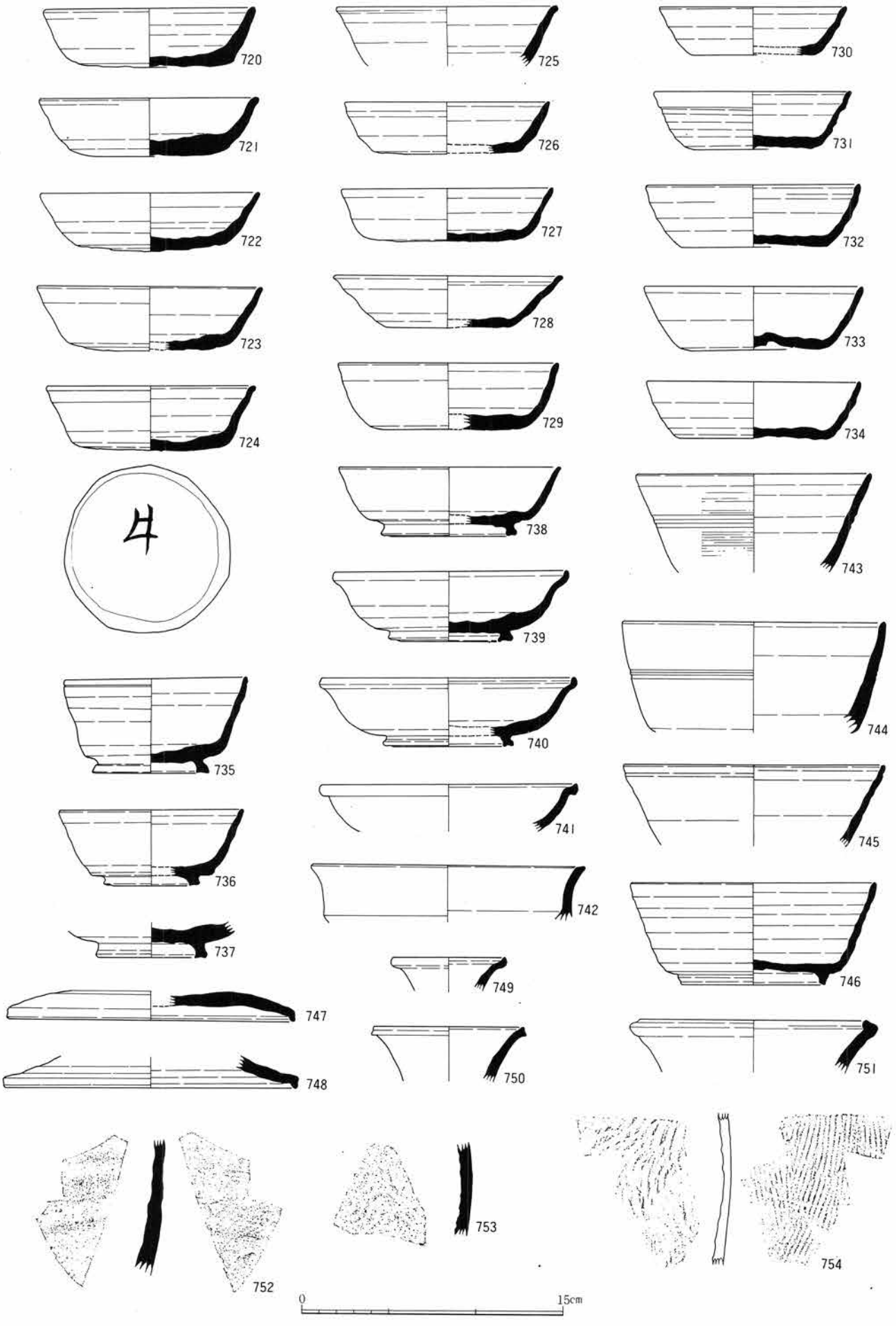
SI 401



本文144・145頁，観察表264頁

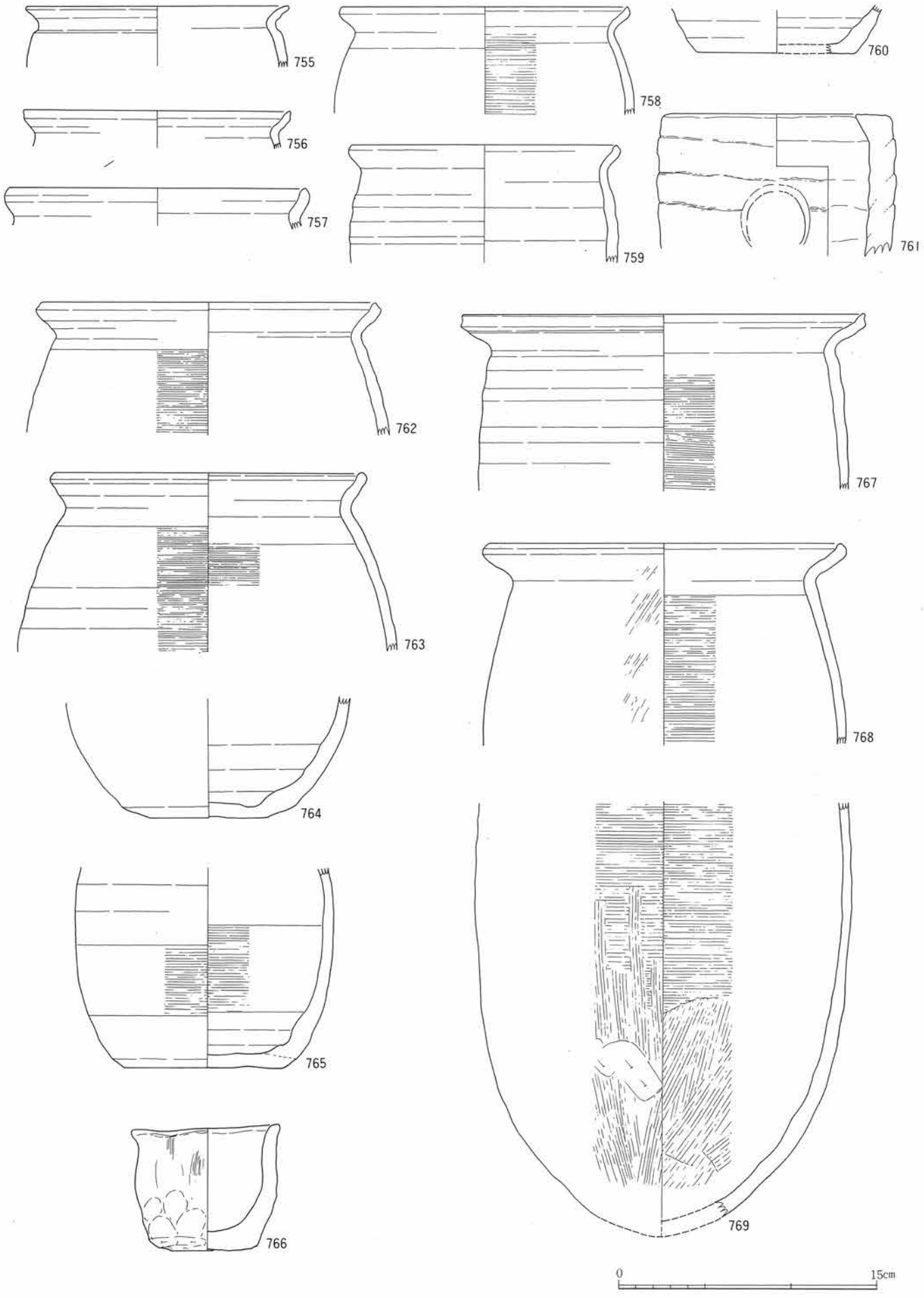
704　黒　色

SI 1320

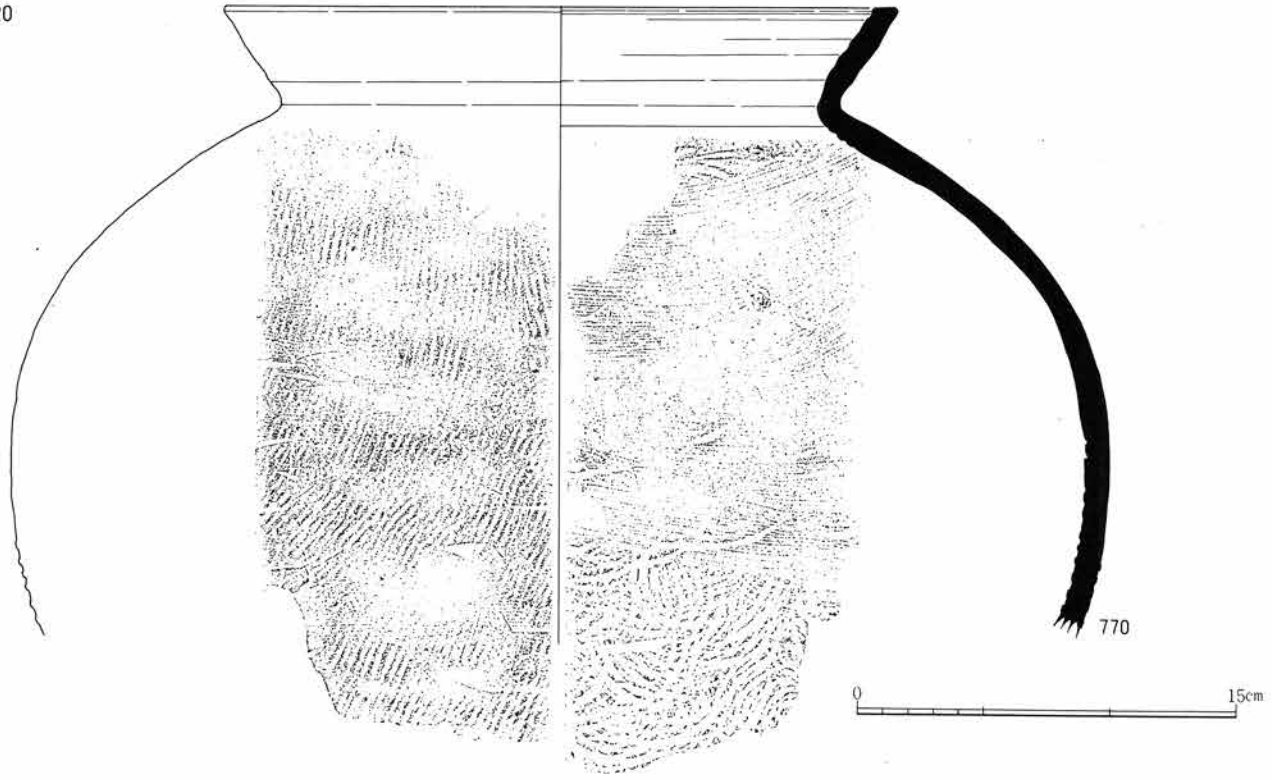


本文145・146頁，観察表264・265頁

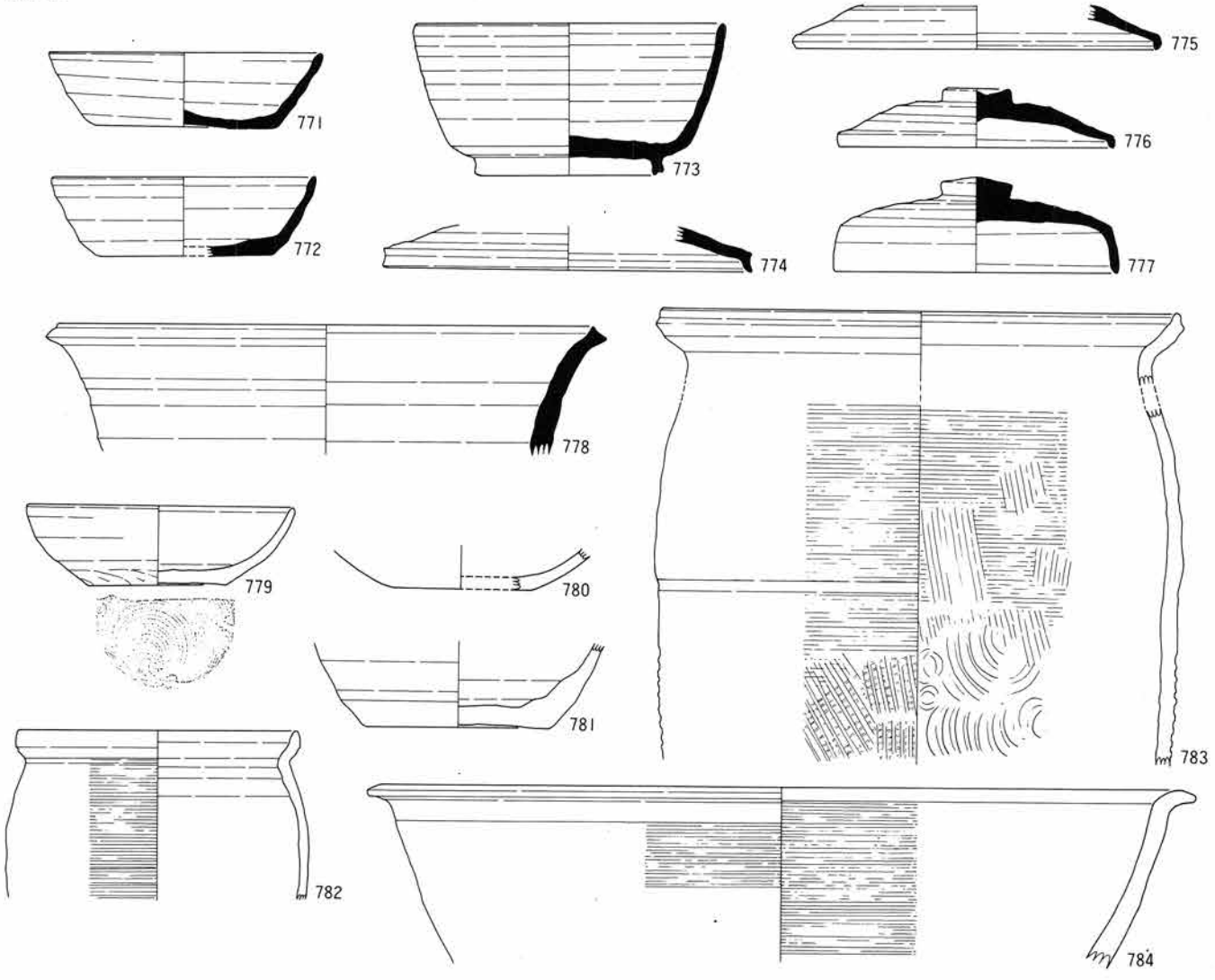
SI 1320


755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
0
15cm

SI 1320

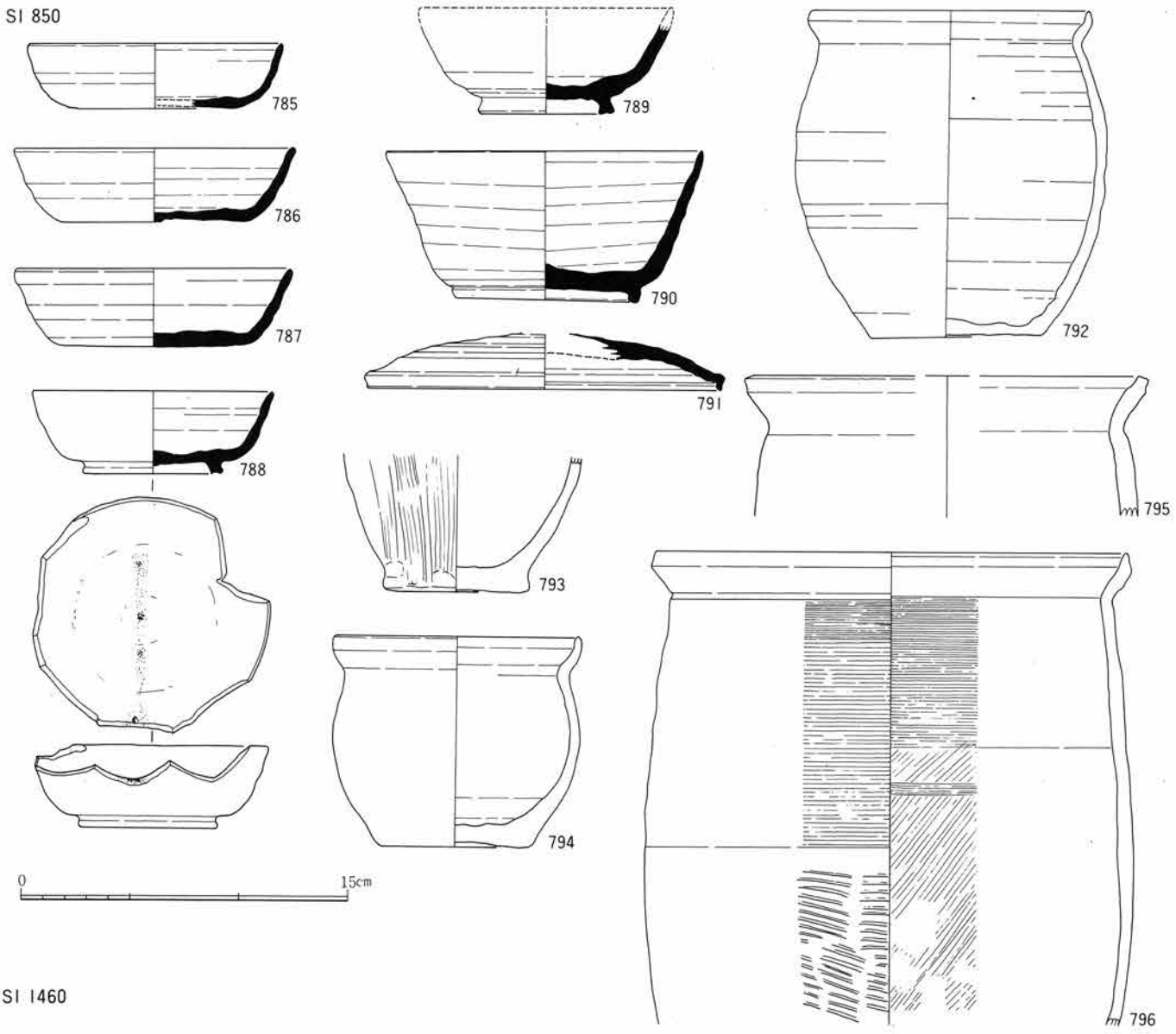


SI 753

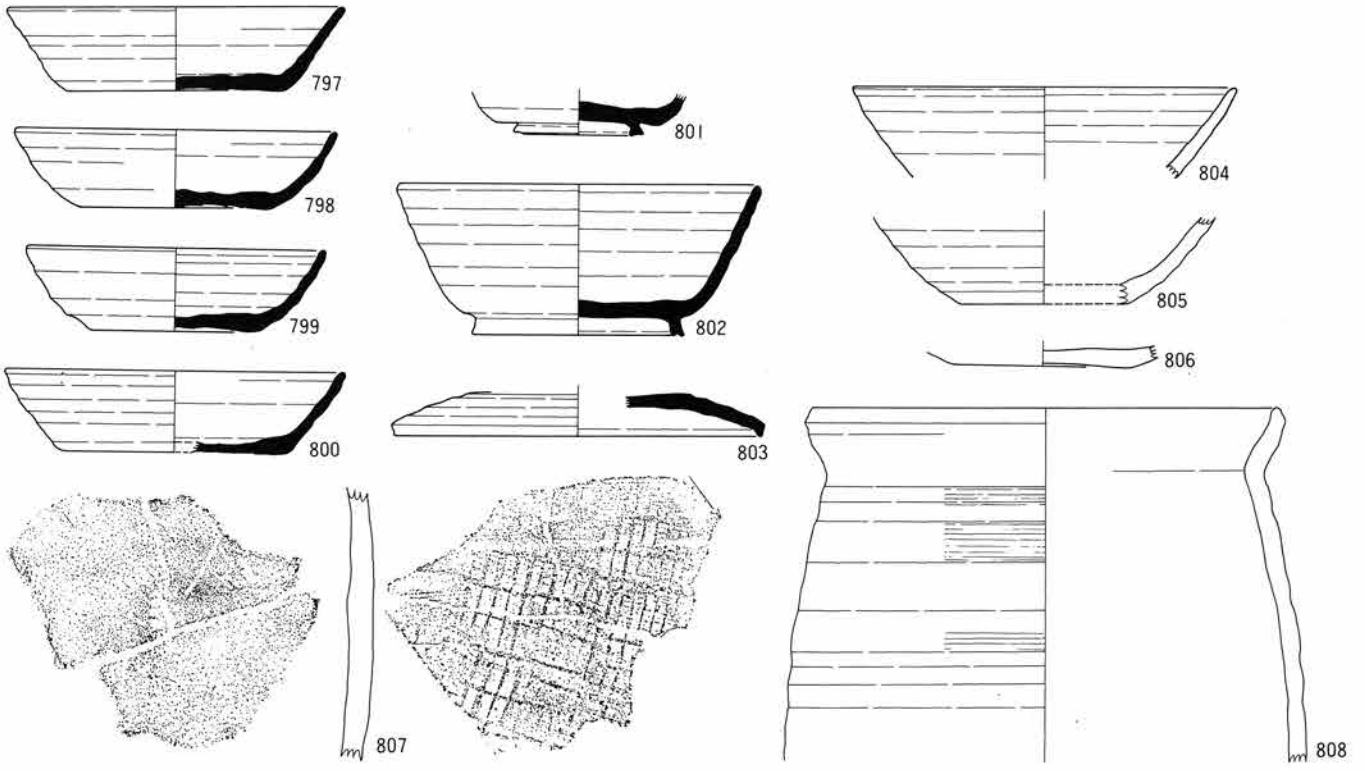


本文146～148頁，観察表265・266頁

SI 850



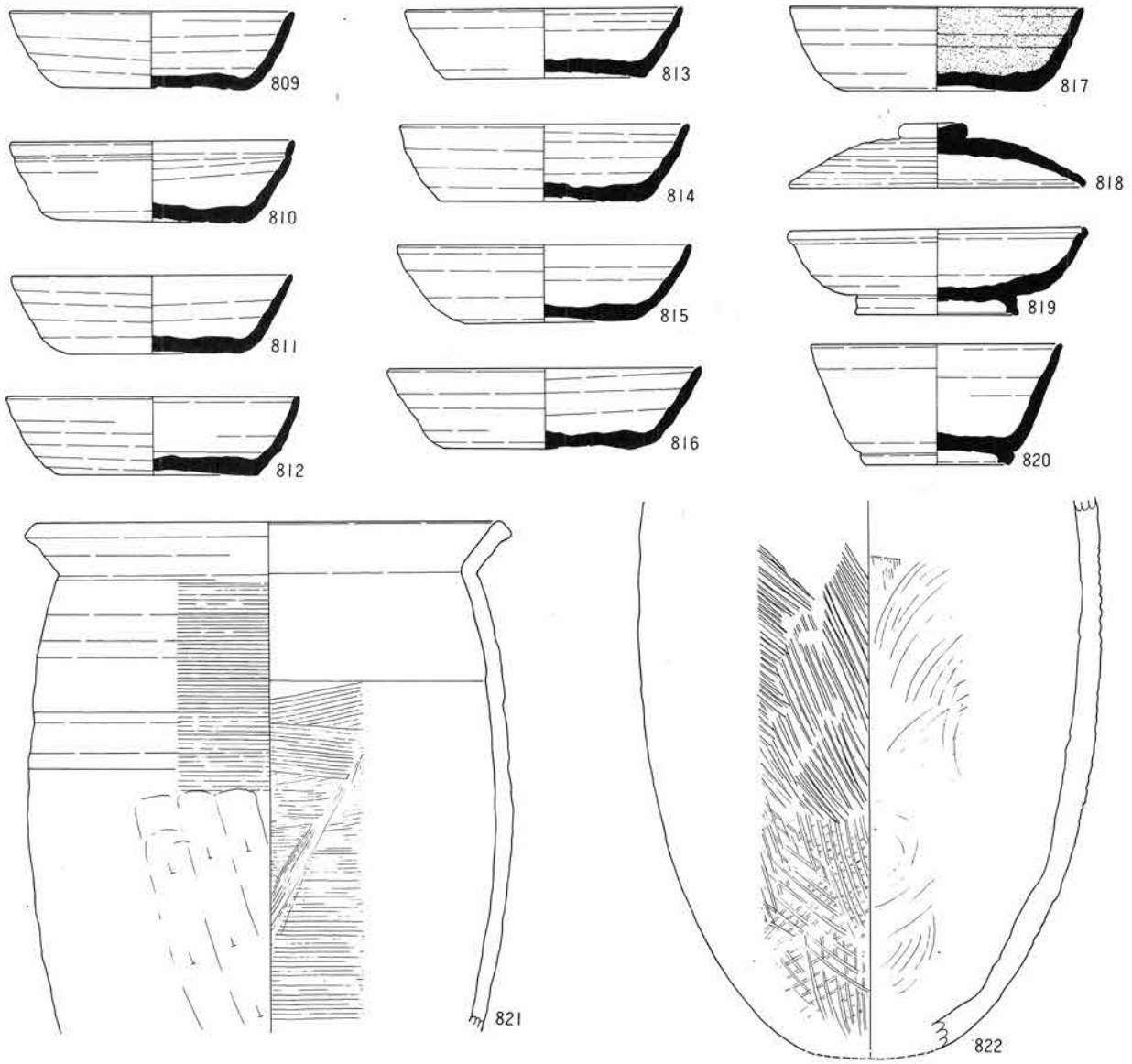
SI 1460



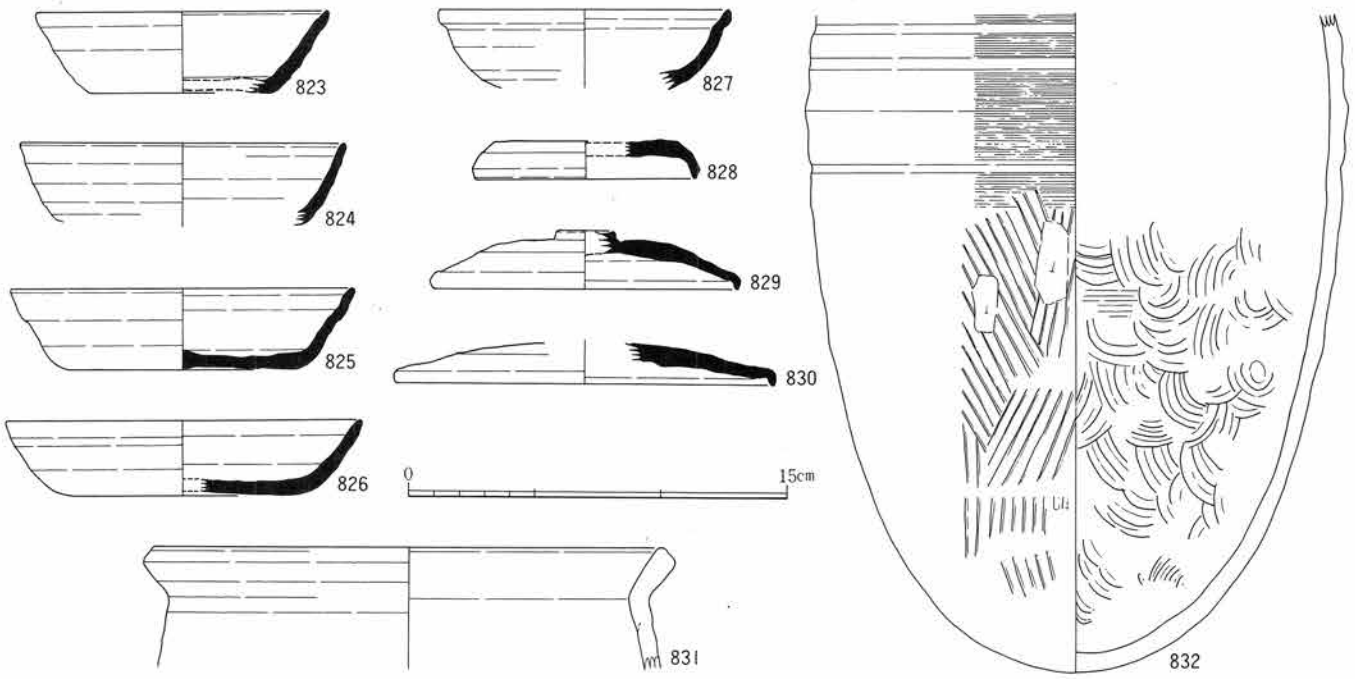
本文148・149頁，観察表266頁

788　タール

SI 1202



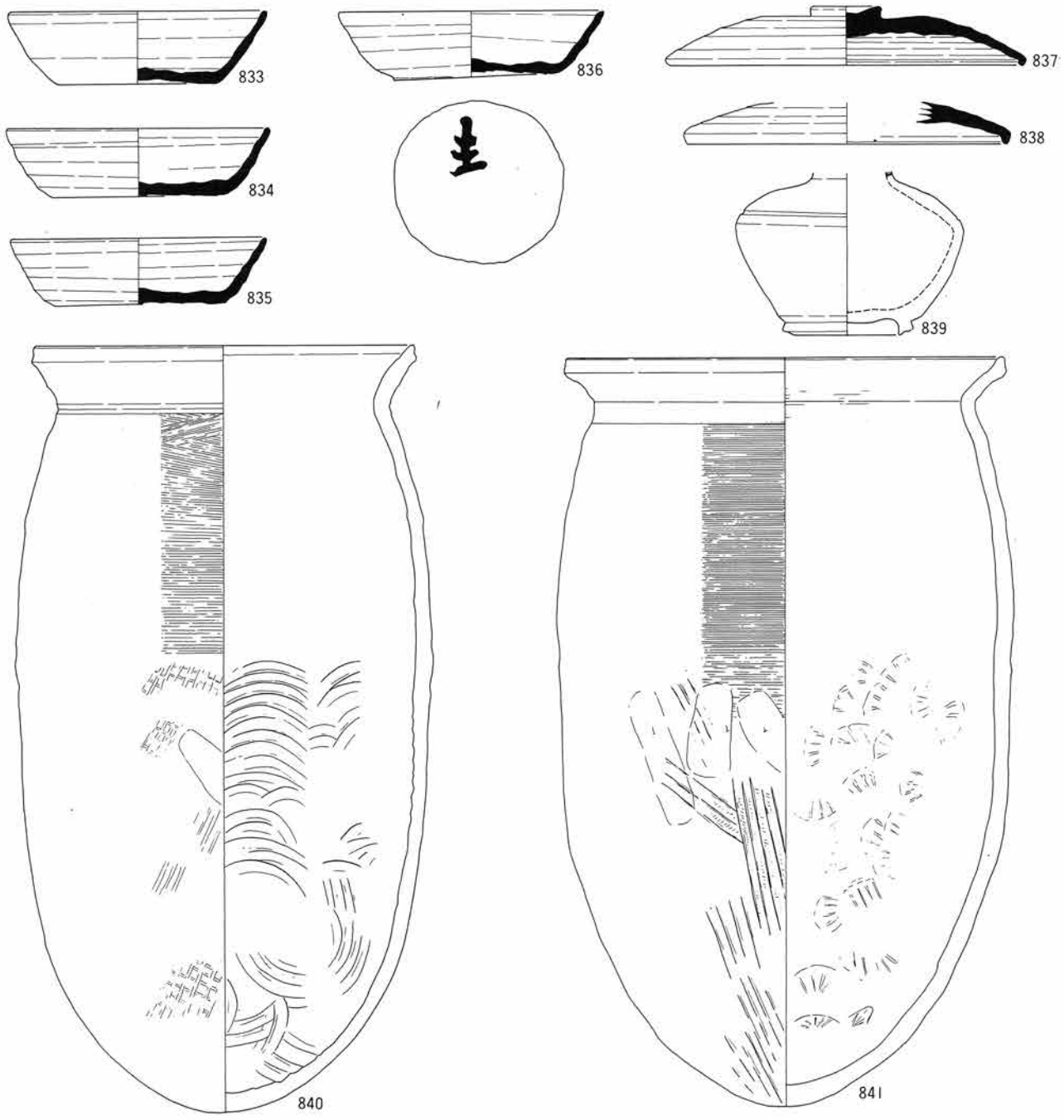
SI 435



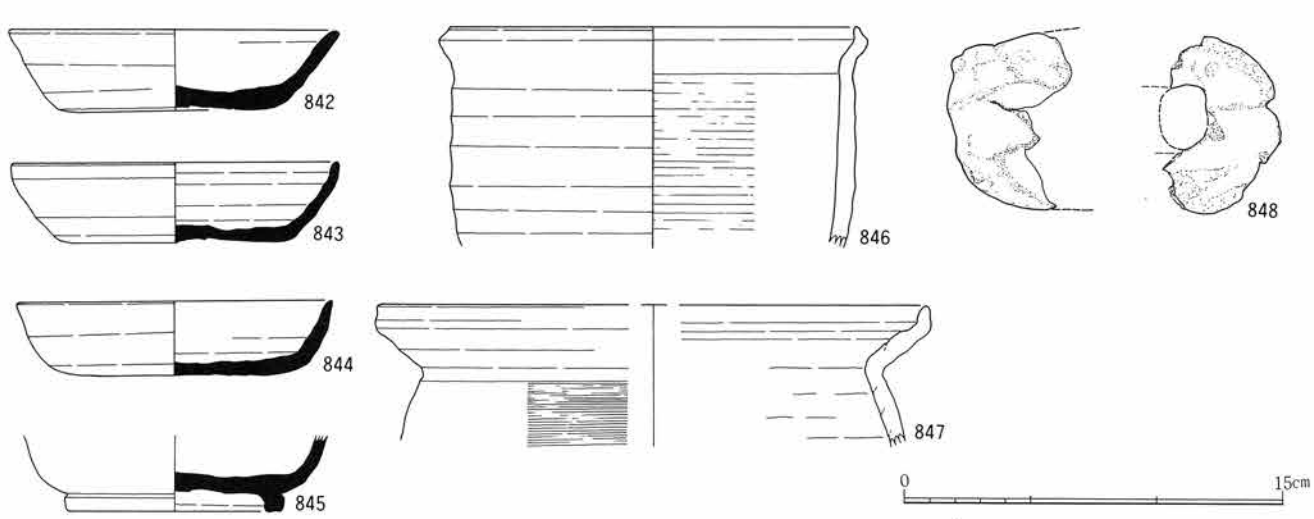
本文149・150頁，観察表266・267頁

817　タール

SI 440

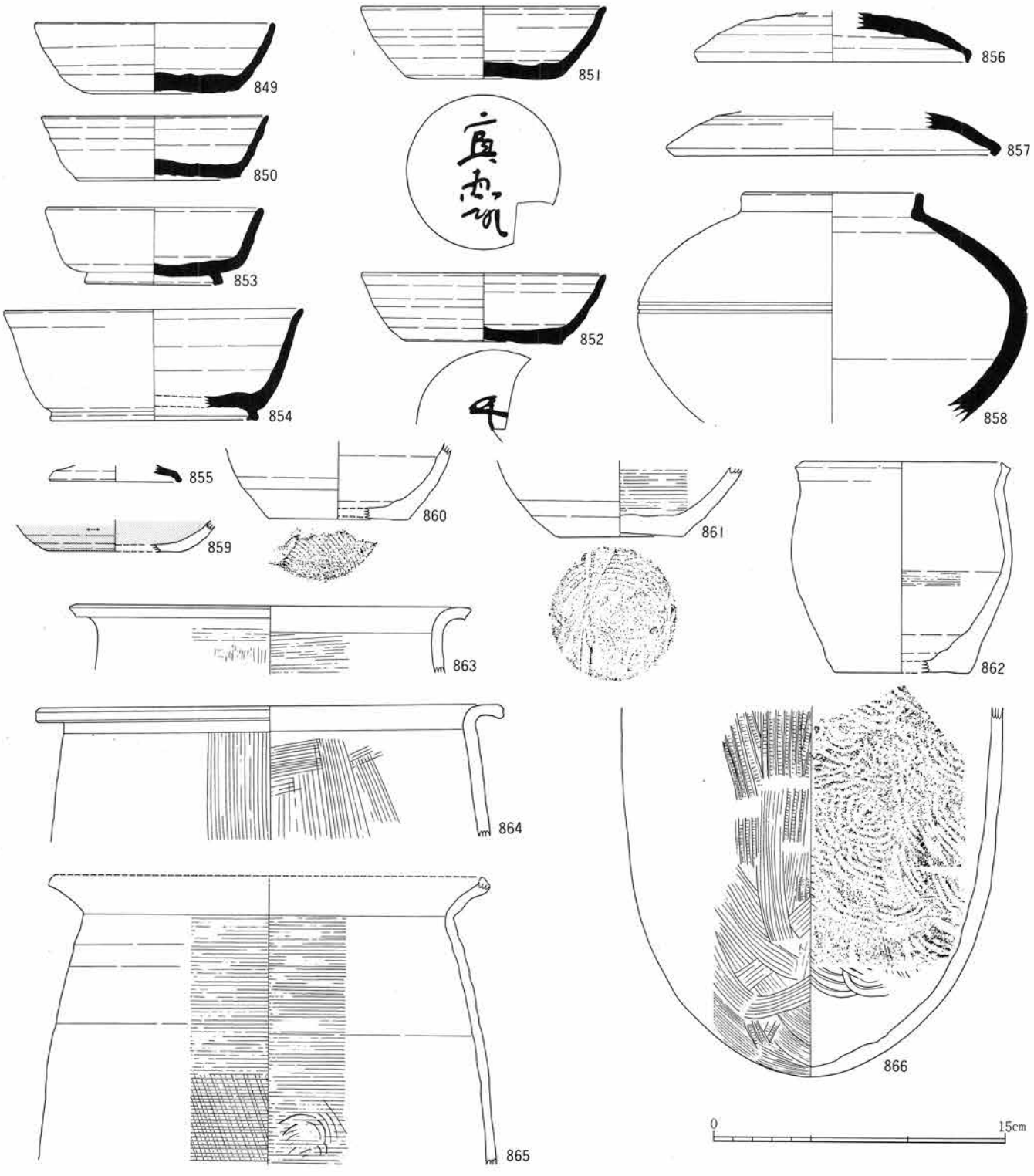


SI 840

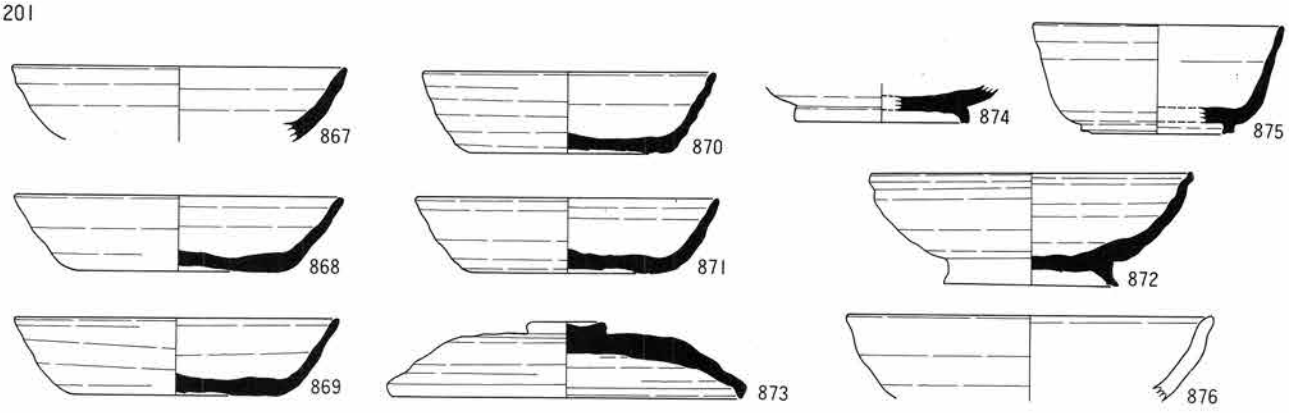


本文150・151頁，観察表267頁

SI 802



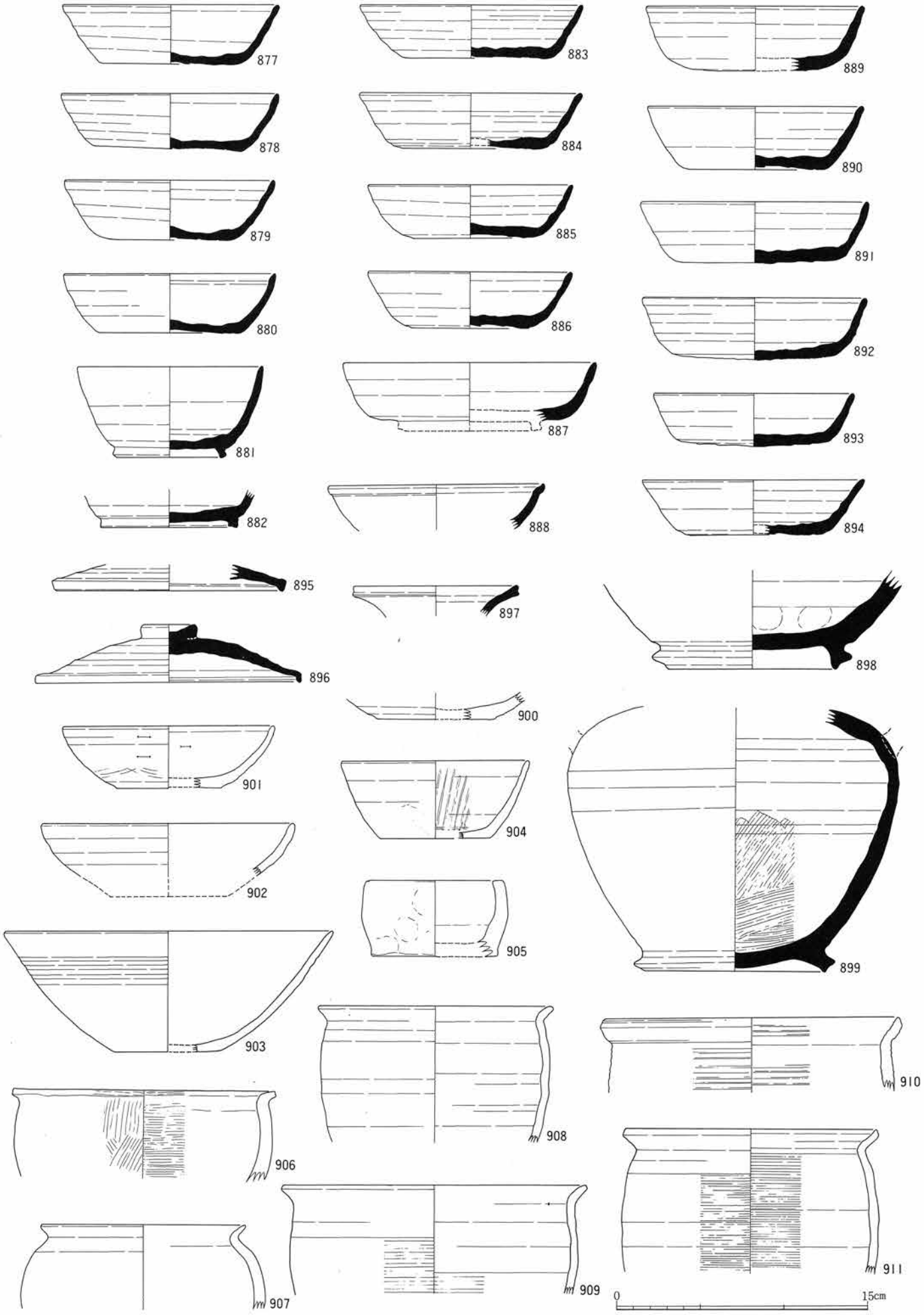
SI 1201



本文151・152頁，観察表267・268頁

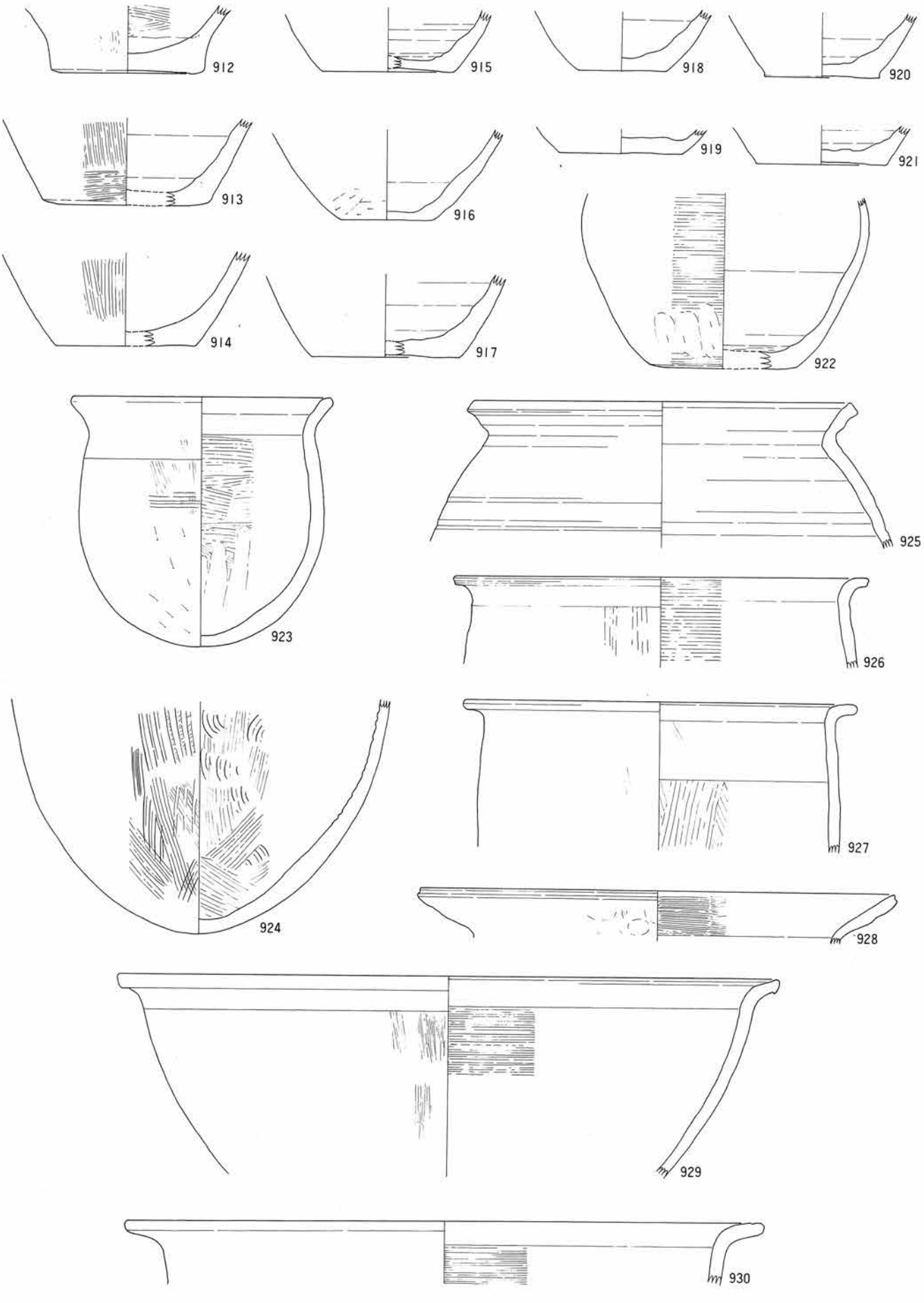
859　黒色

SI 1167



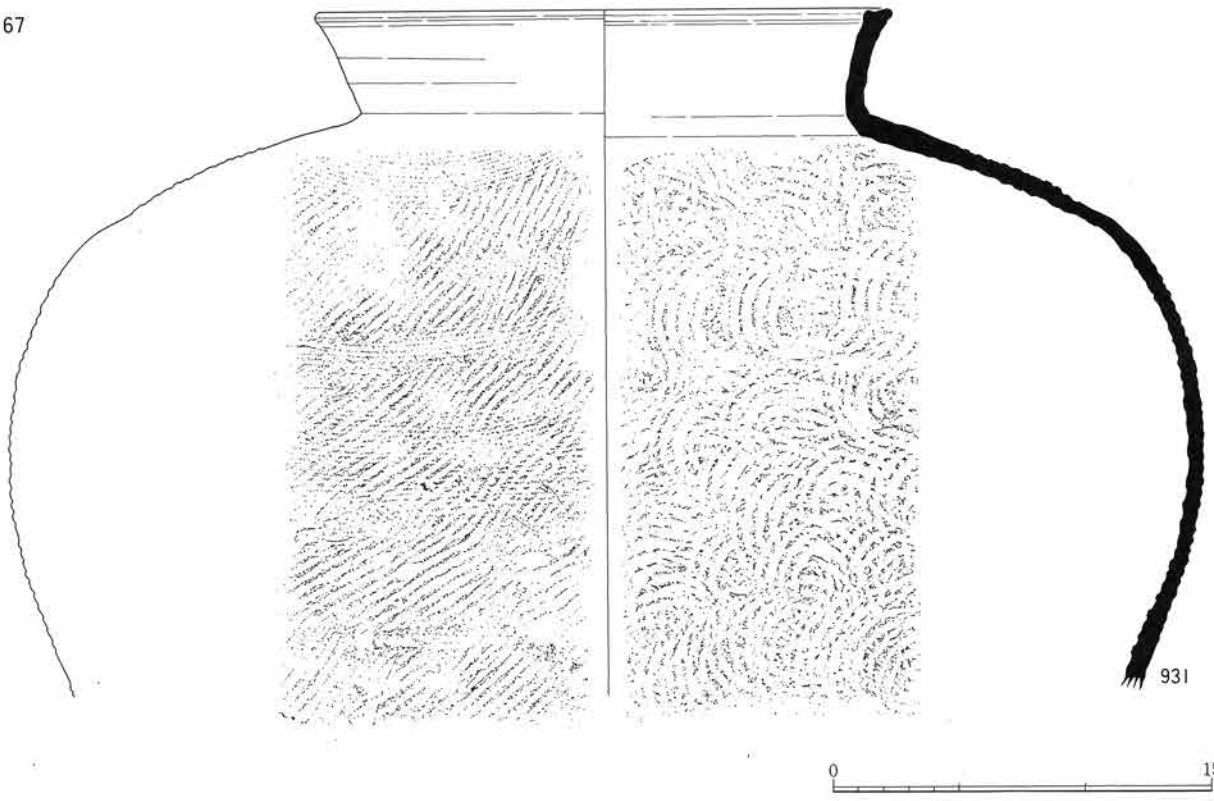
本文152～154頁，観察表268・269頁

SI 1167

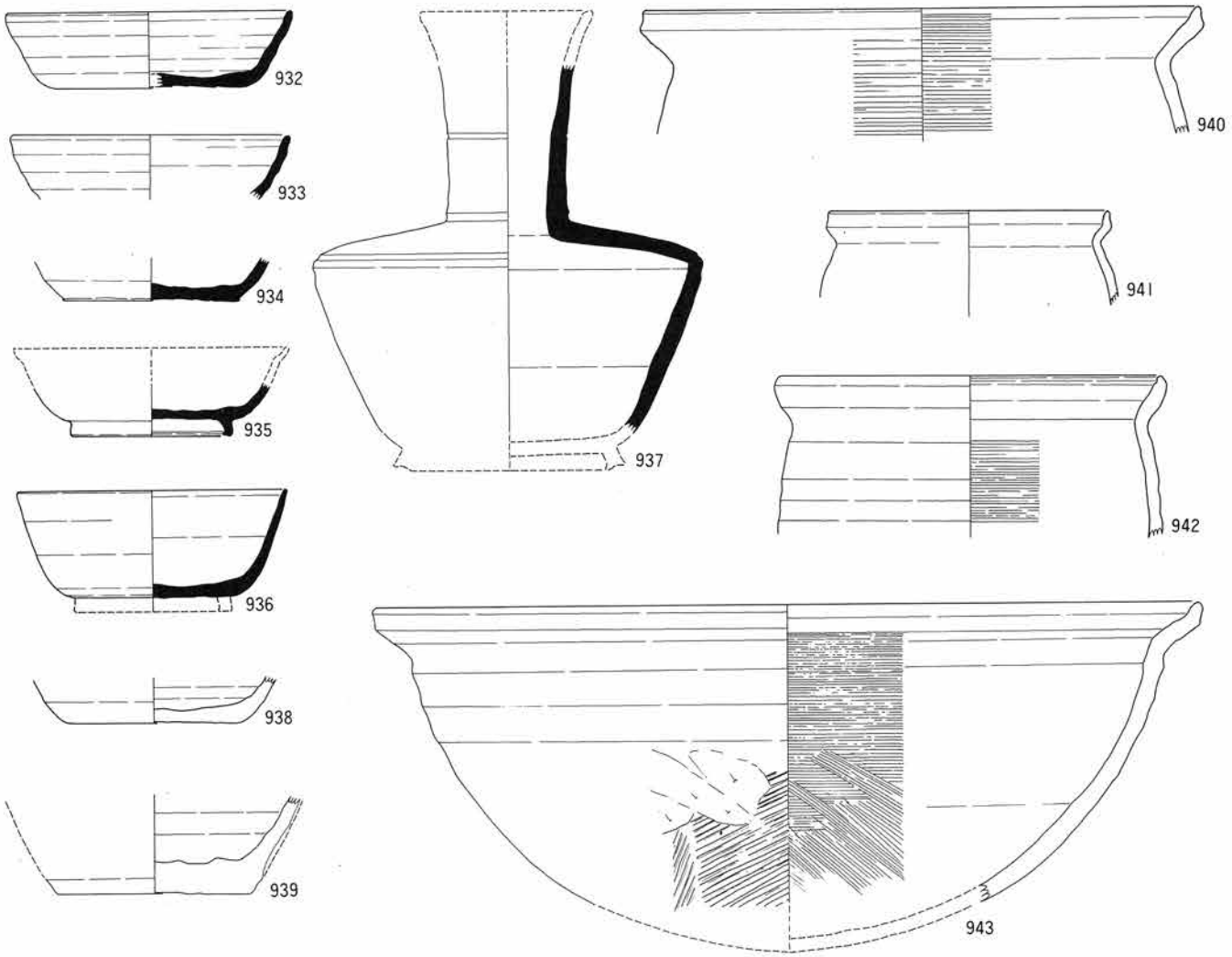


本文153・154頁，観察表269頁

SI 1167

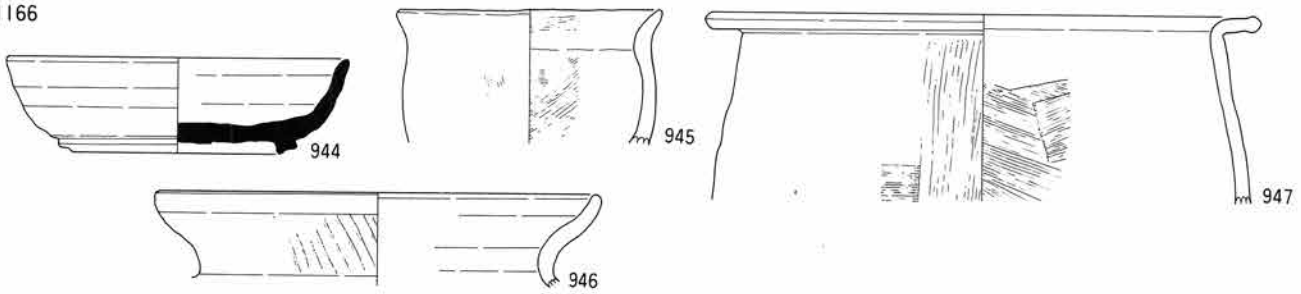


SI 29

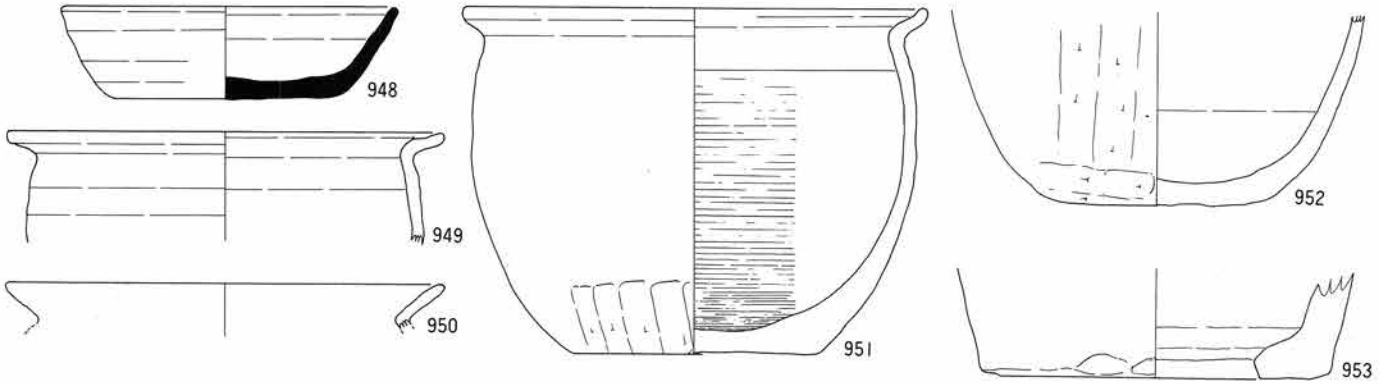


本文153・154頁，観察表269頁

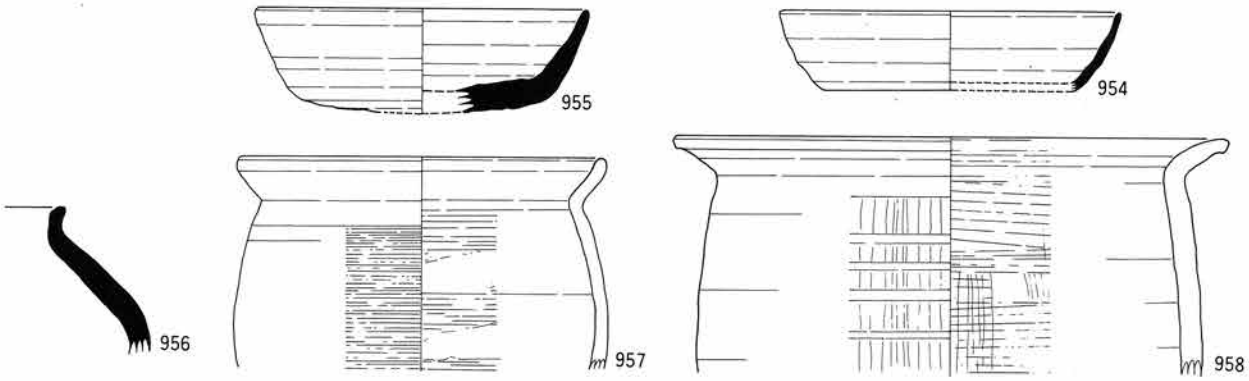
SI 1166



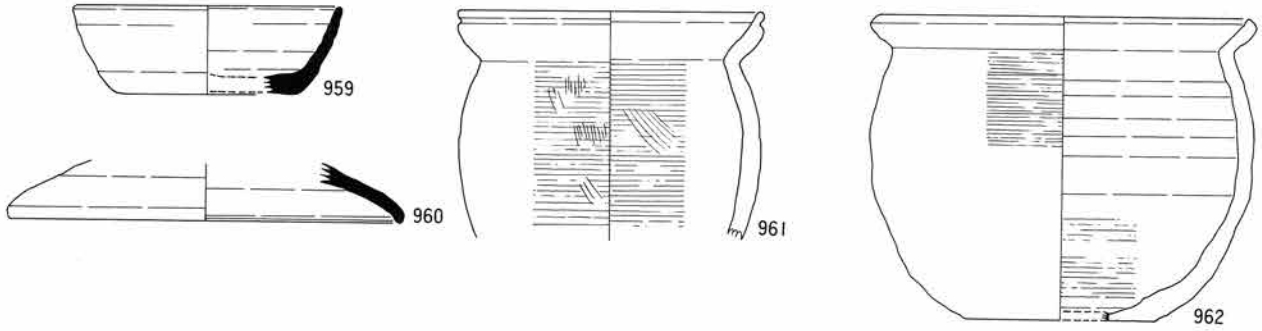
SI 805



SI 18



SI 325



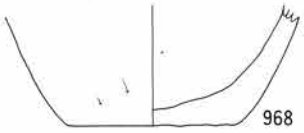
SI 42

0　15cm

本文154～156頁，観察表269・270頁

SI 16

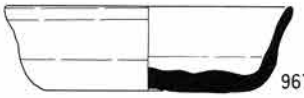
965


968

969

966

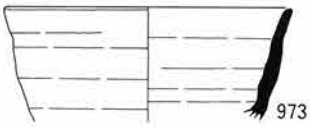
970


967

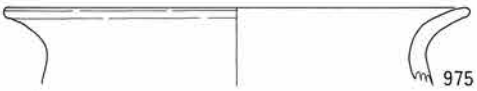
SI 1313

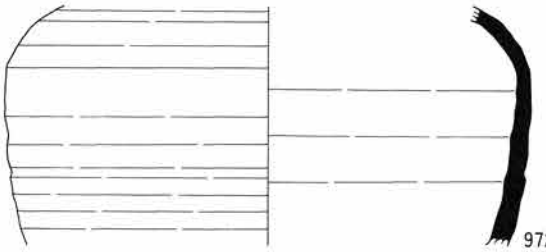
SI 1471

971


973

974


975


972

SI 1304

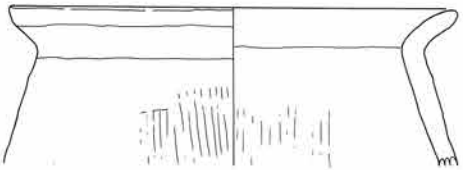
978

979

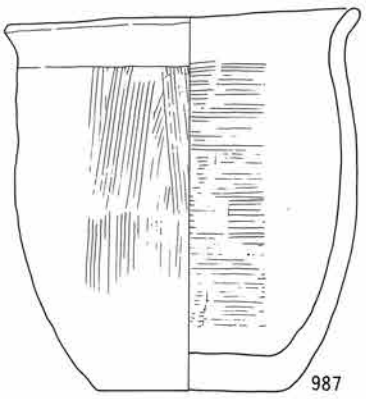
SI 670

976

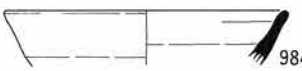
980

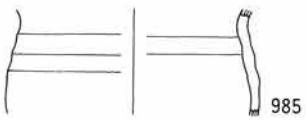

977

SI 1169


987

SI 9


984


985

SI 80

981

982

983

SI 1181

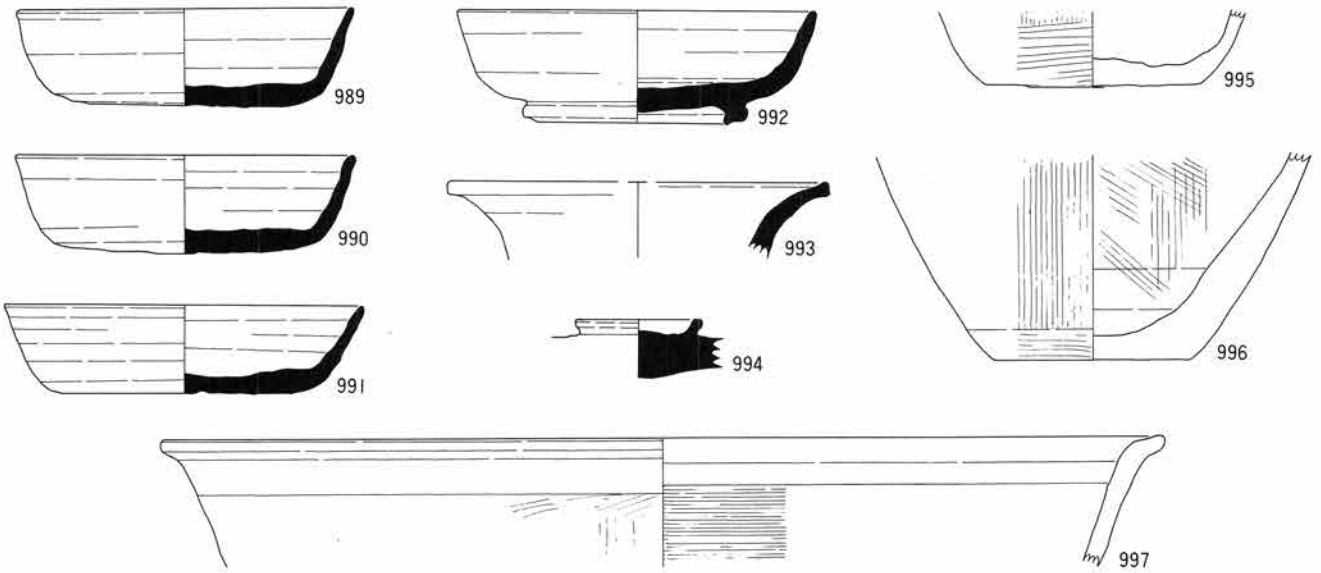
986

SI 82

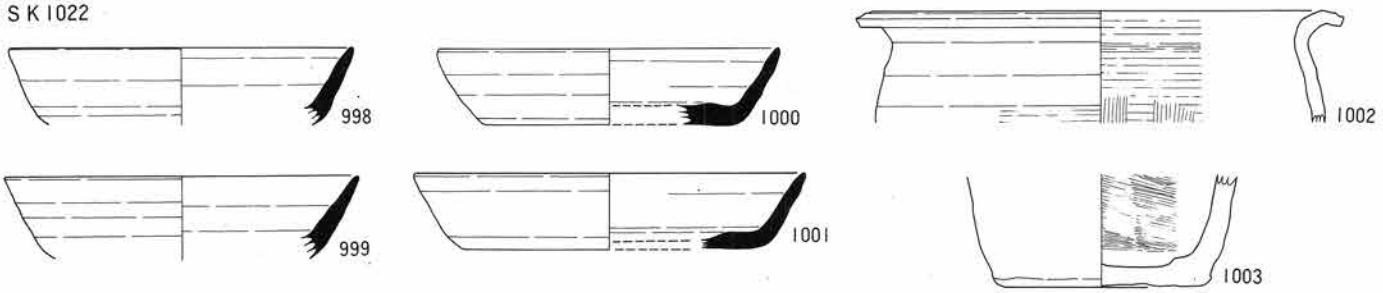
988

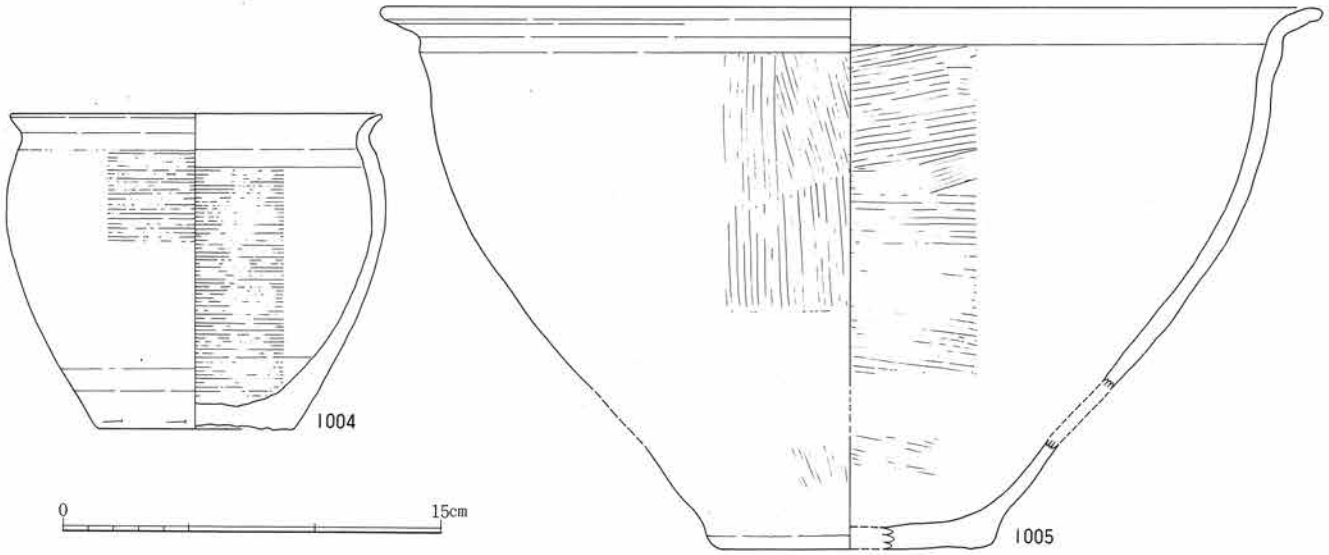
本文156～158頁，観察表270・271頁

SK39

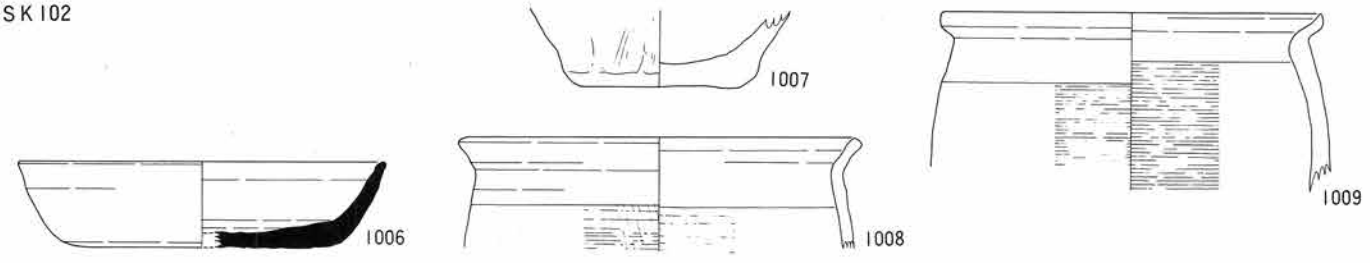


SK1022





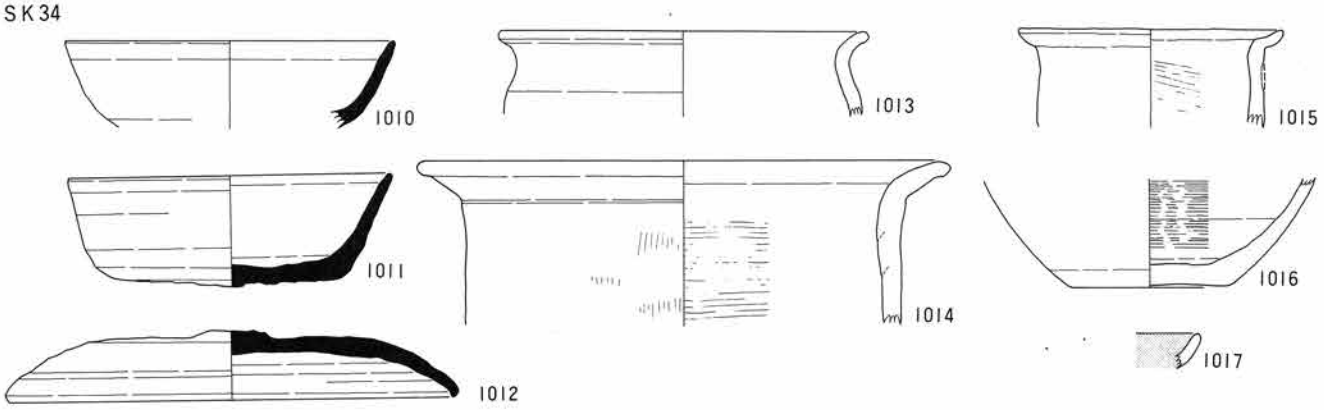
SK102



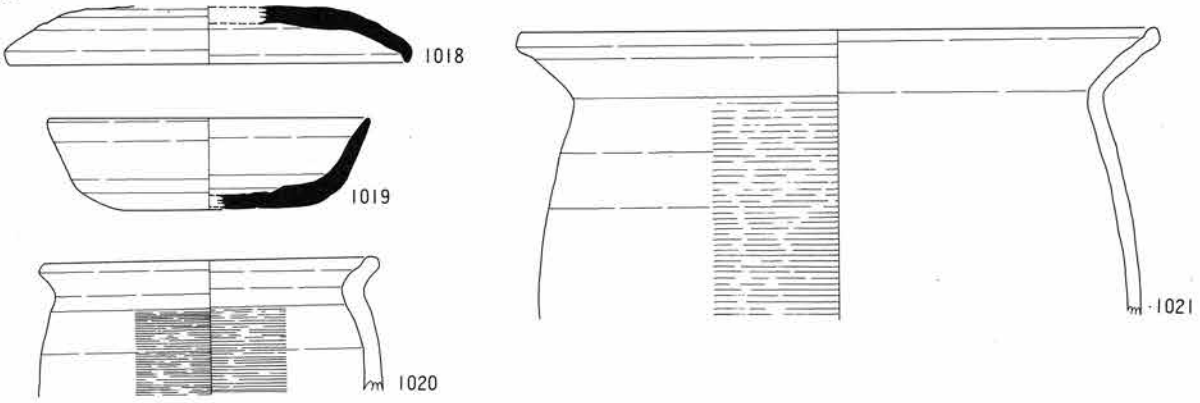
本文158・159頁，観察表271頁

奈良・平安時代土器55　SK34・SK32・SK340
SB730・SB790・その他の須恵器(1)

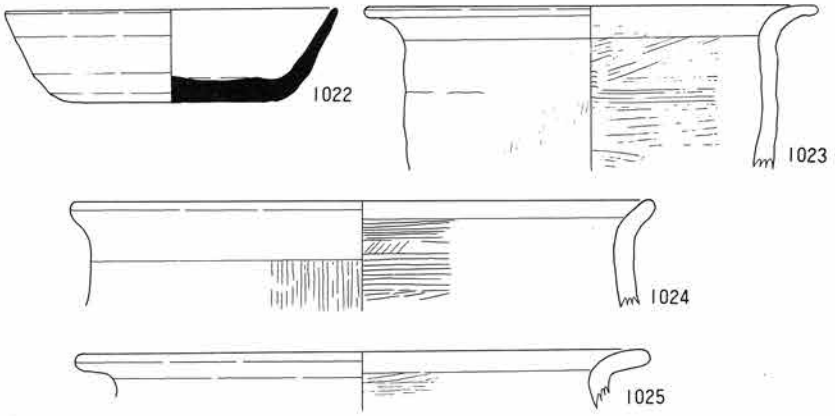
SK34



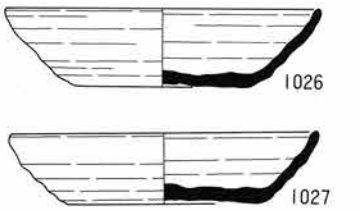
SK32



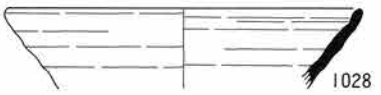
SK340



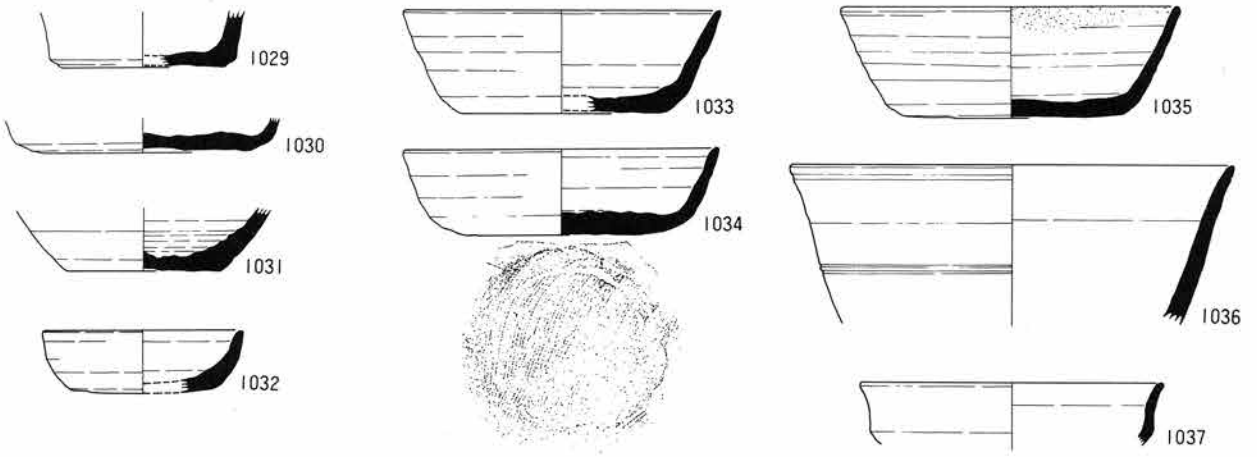
SB730



SB790



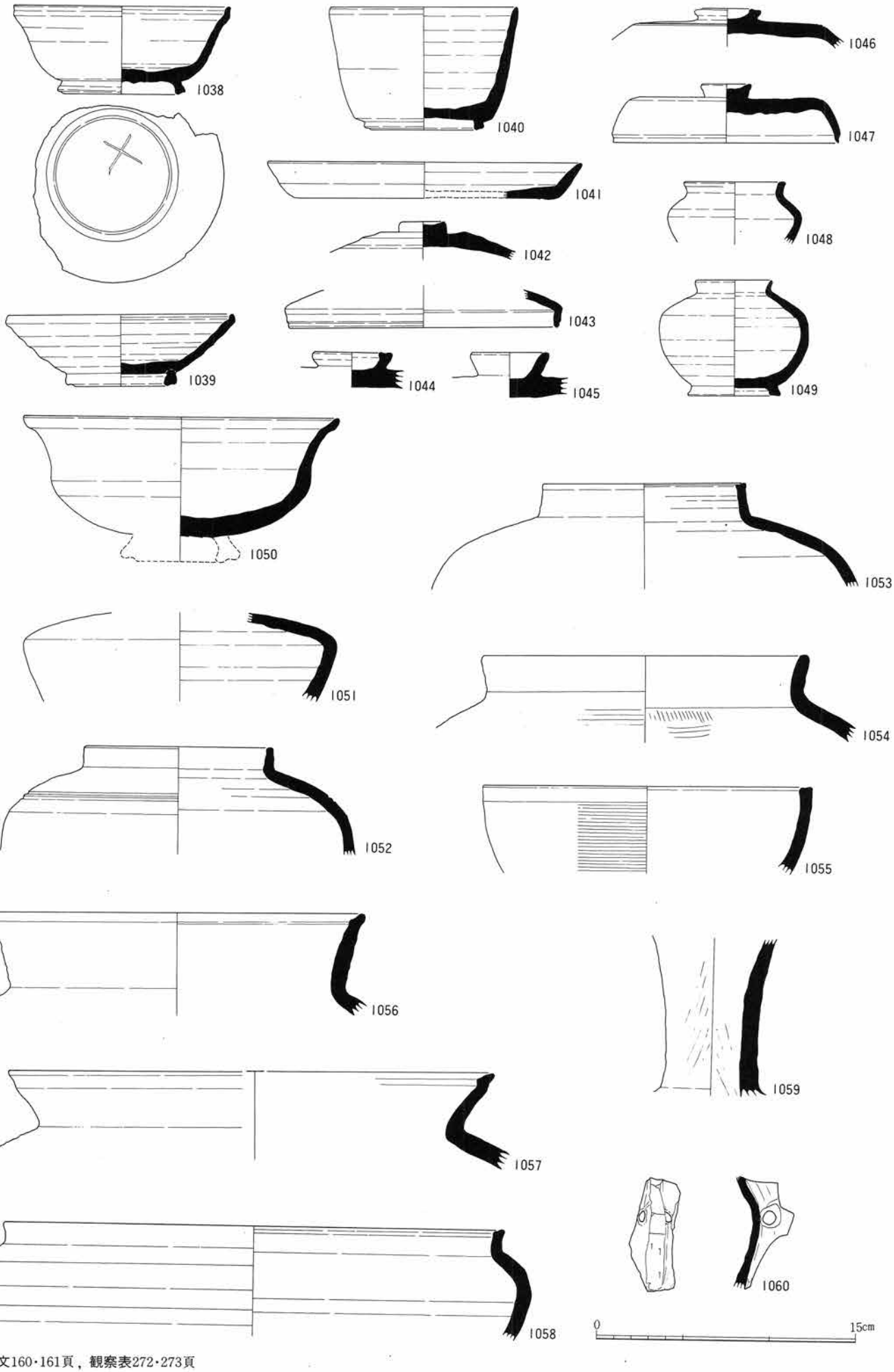
その他の須恵器



本文159～161頁，観察表271・272頁

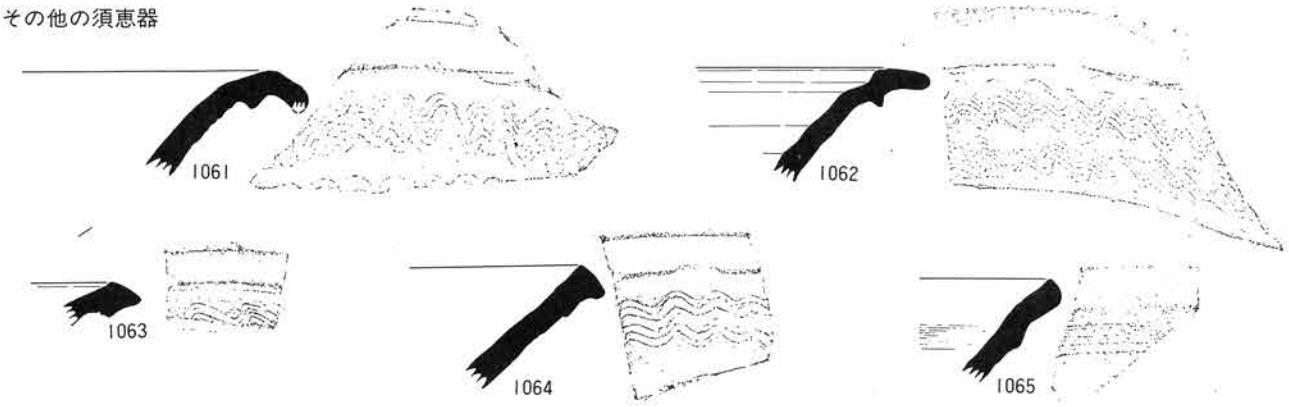
1017　黒色　　1035　タール

その他の須恵器

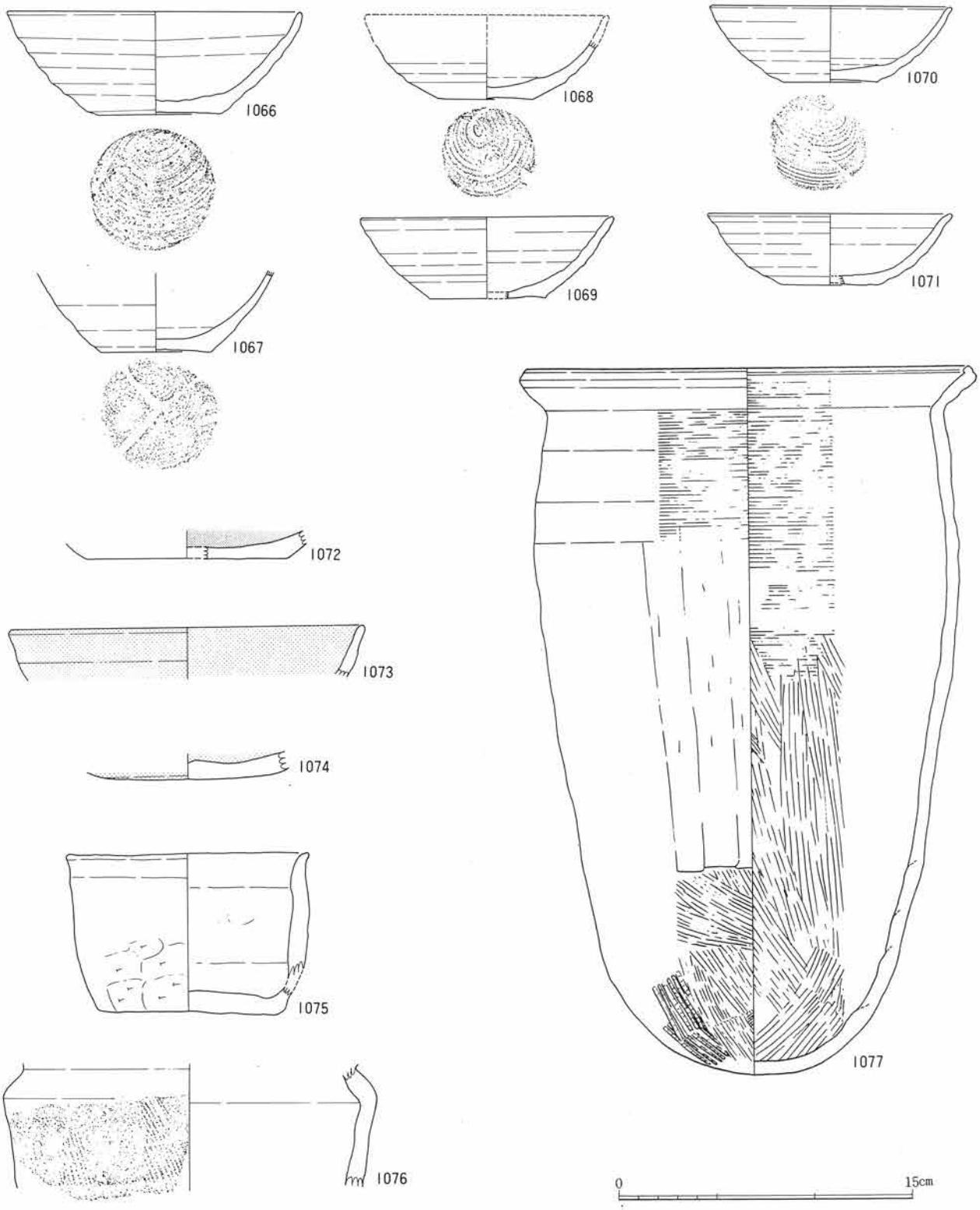


本文160・161頁，観察表272・273頁

その他の須恵器

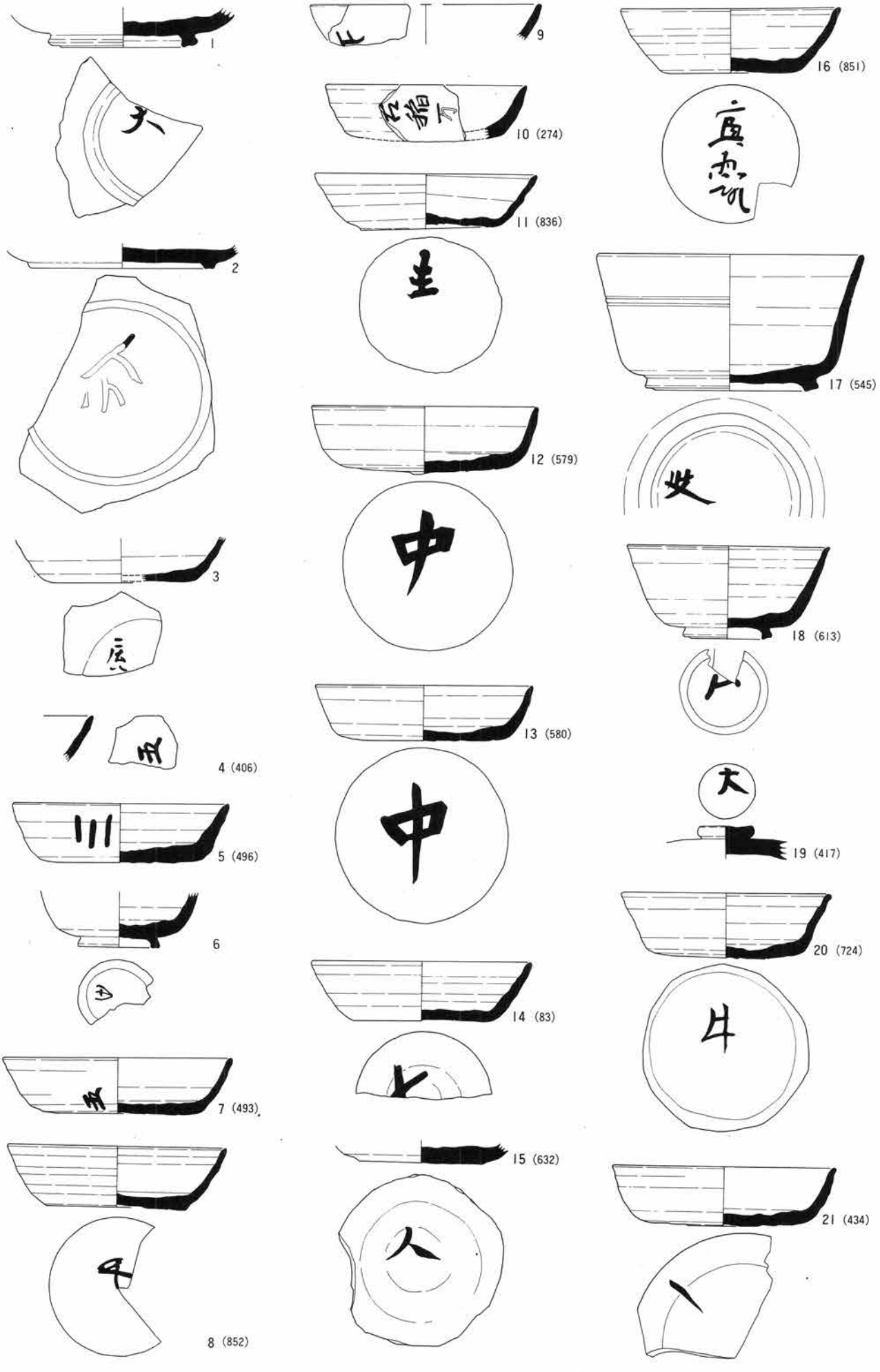


その他の土師器

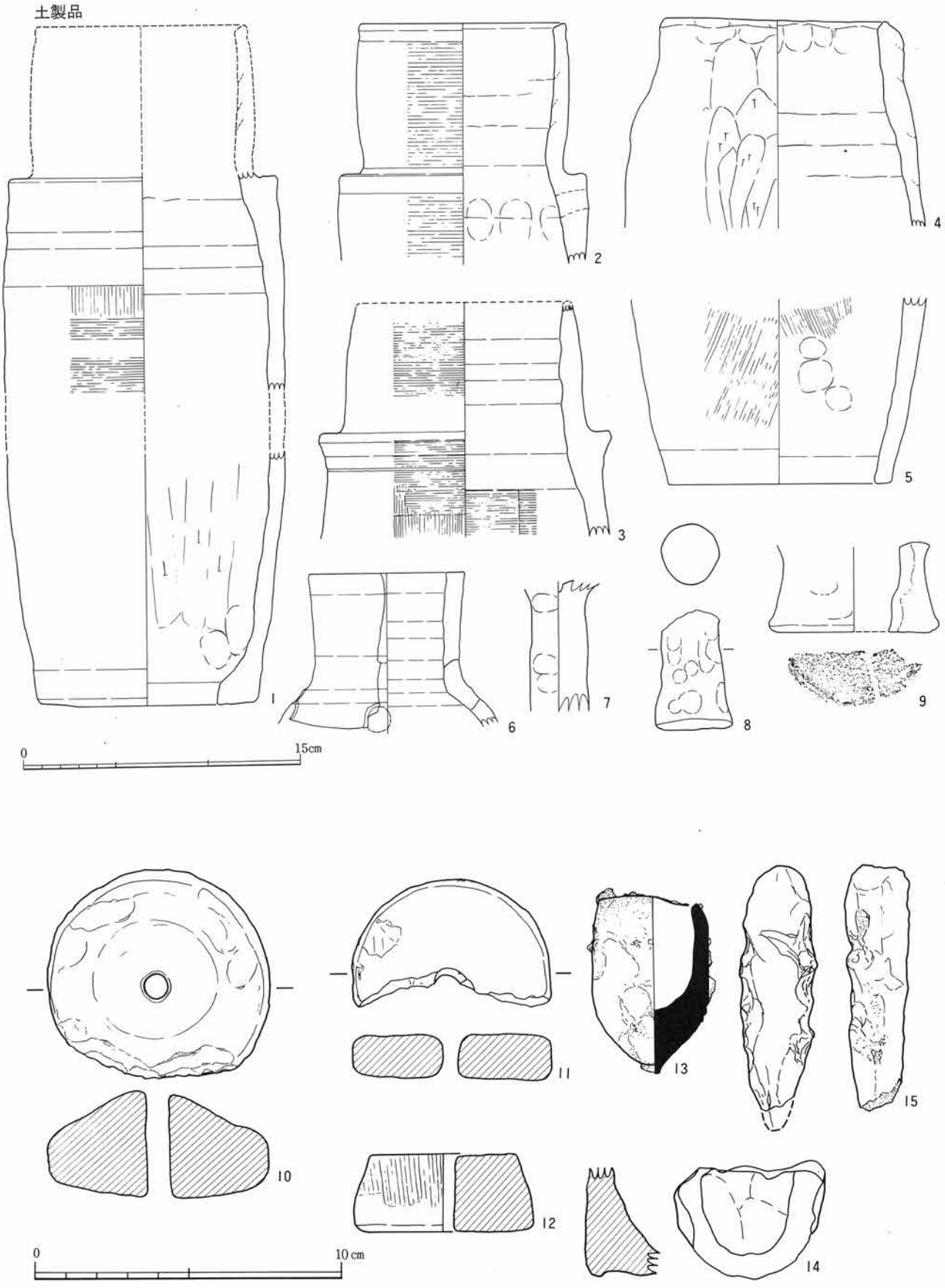


本文161・162頁，観察表273頁

1072 黒色　1073・1074 赤彩

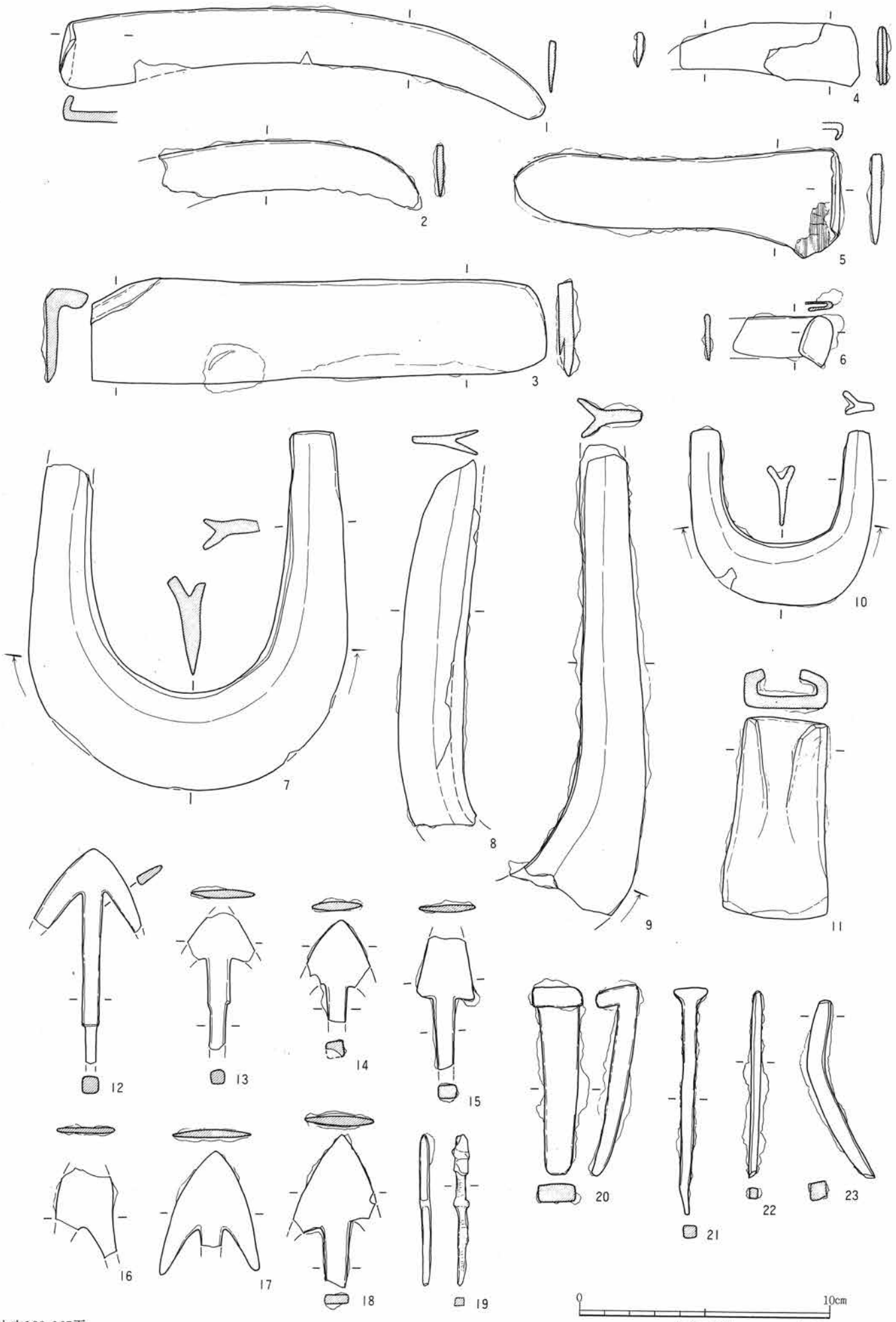


本文162～165頁，観察表273頁

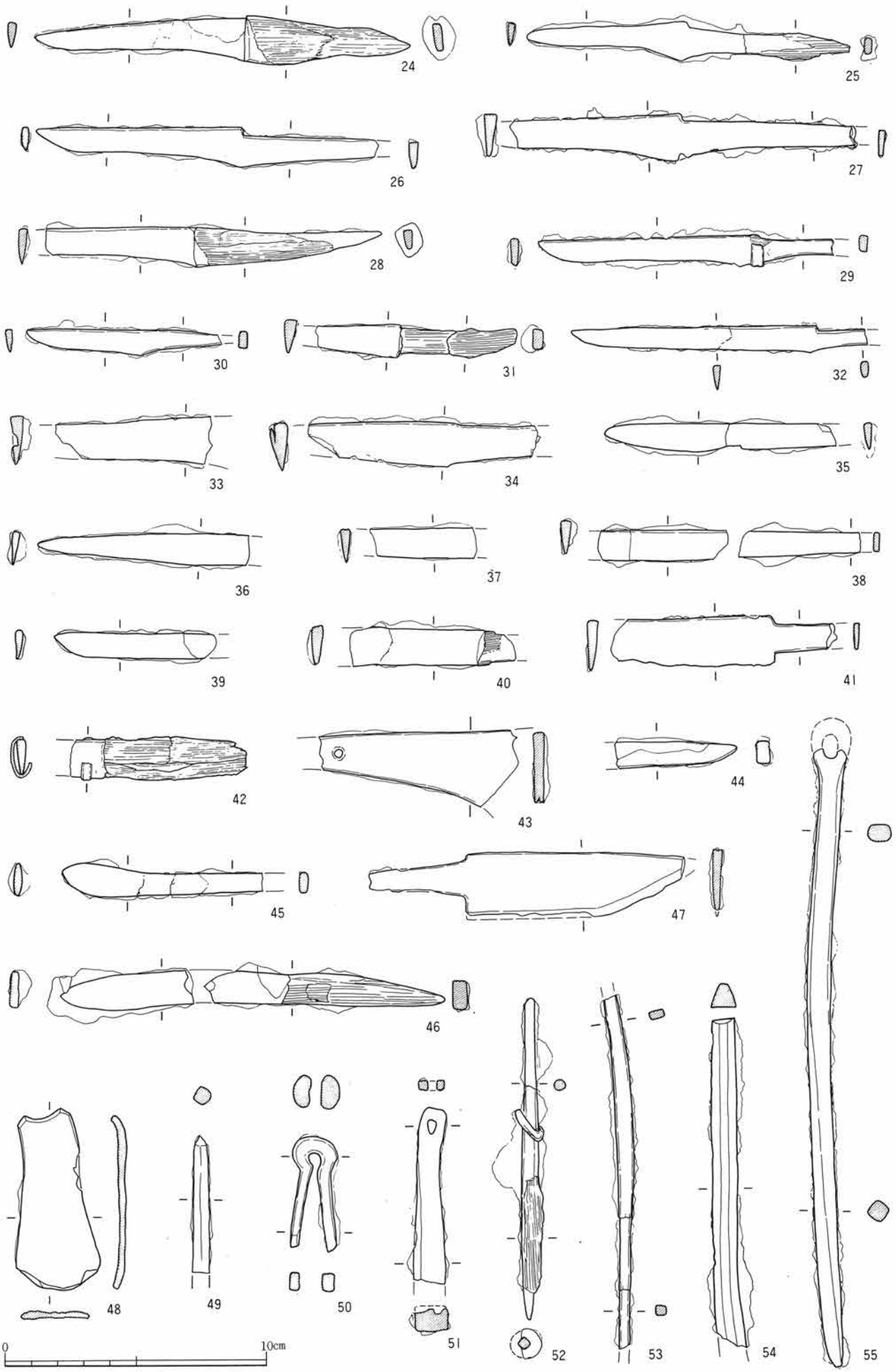


本文165～166頁，観察表274頁

1～9　1：3
10～15　1：2

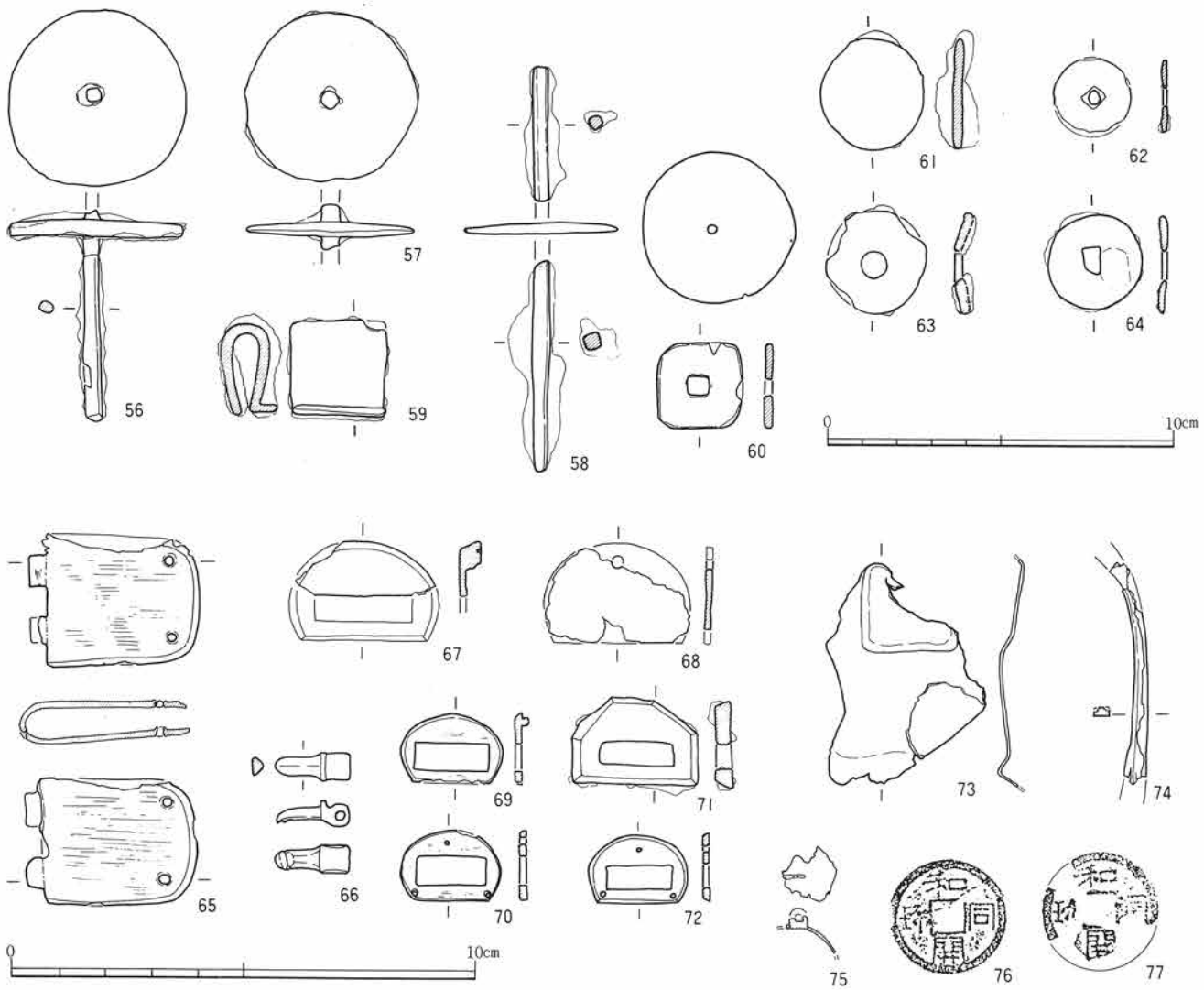


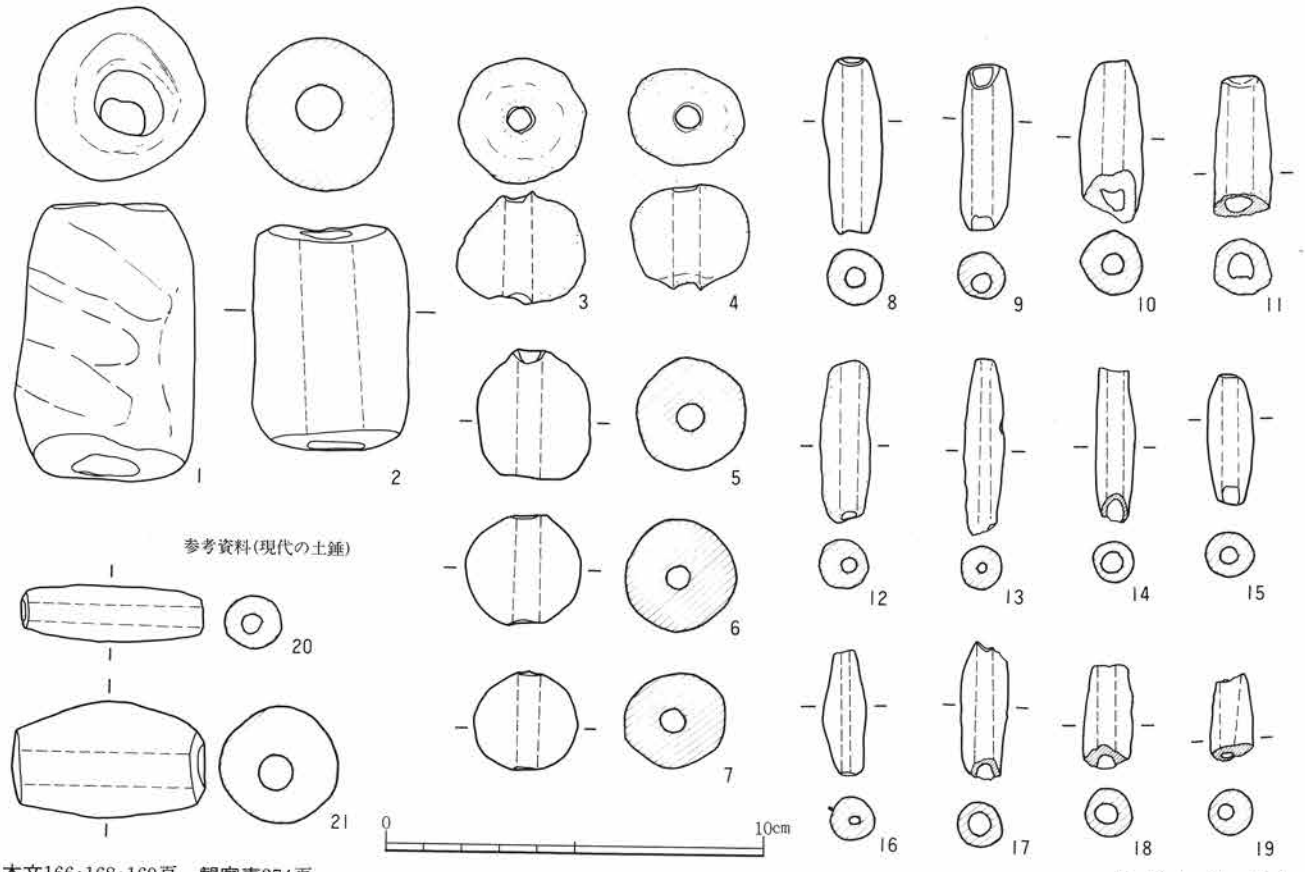
本文166・167頁



本文167・168頁

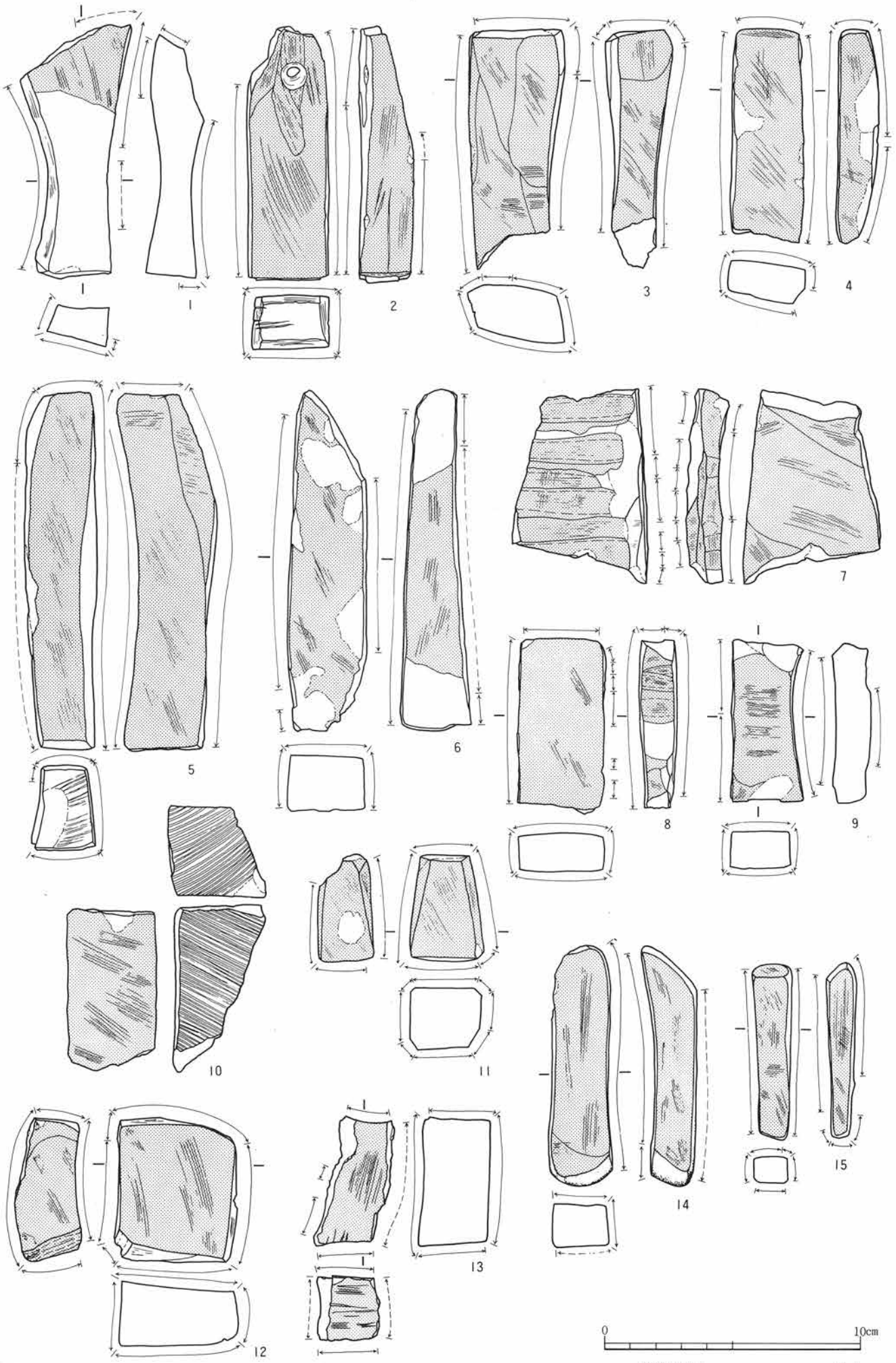
1：2





本文166・168・169頁、観察表274頁

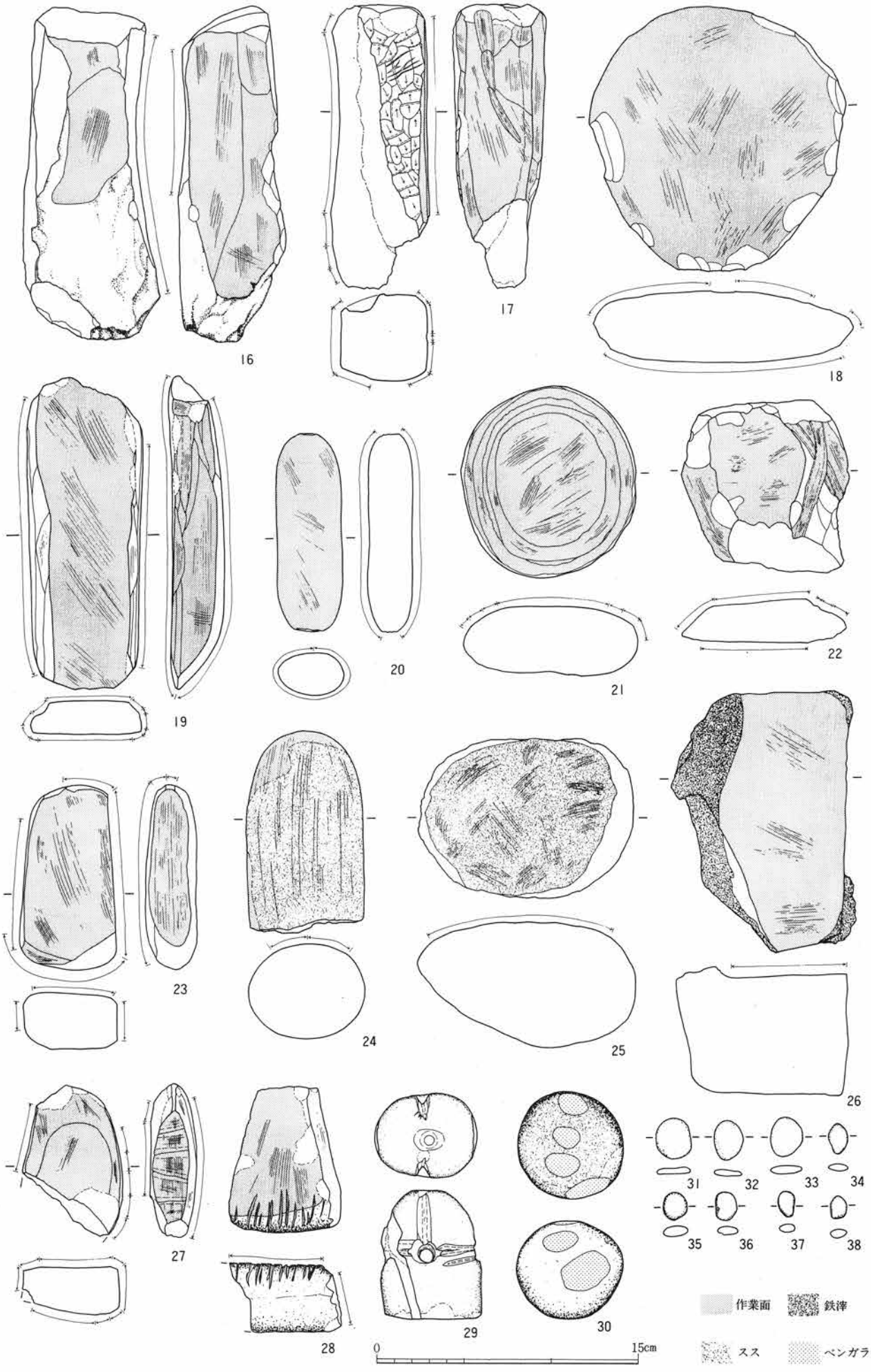
56～64、1～21　1：2
65～77　2：3



網目：作業面

1：2

本文170・171頁



本文170～172頁

1：3

遺跡遠景航空写真

建設省北陸地建新潟国道工事事務所　1988年 6 月撮影

1. 遺跡全景(61年)
北より笹神丘陵方面を望む

2. BC9～11区付近
北より

3. S1167土層断面
西より

山三賀周辺空中写真

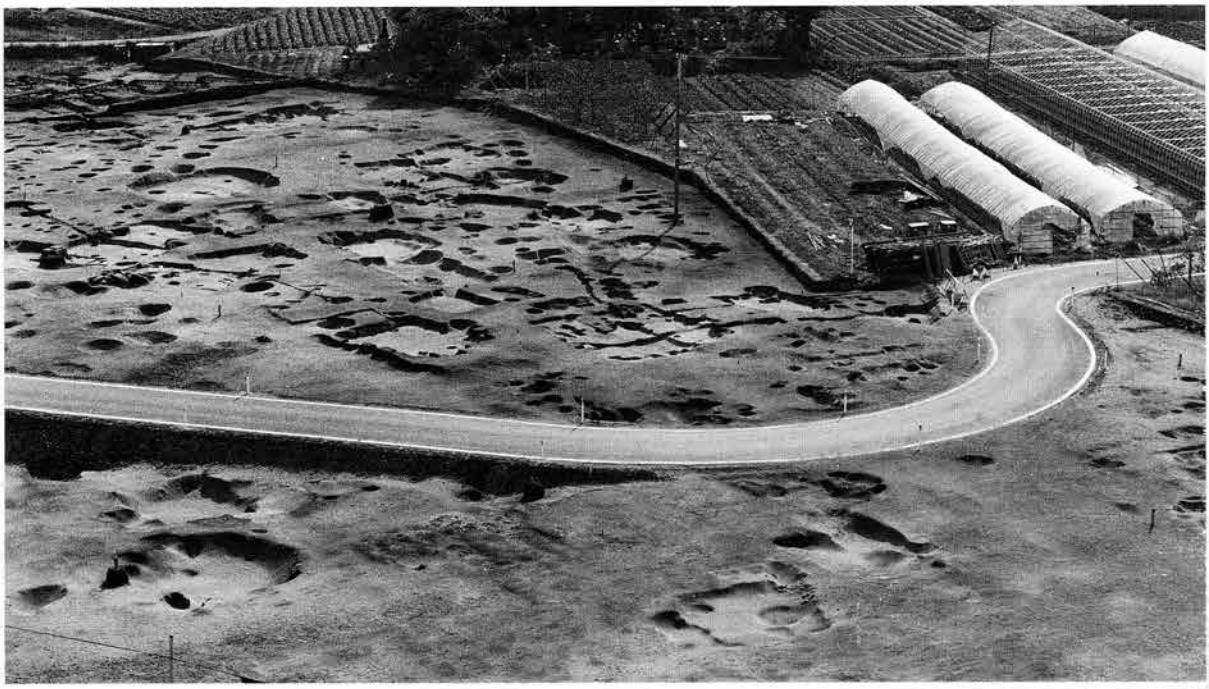
国土地理院1962年撮影　1：10000×2

1. 遺跡遠景(59年)
北西より

2. 遺跡近景(61年)
北西より

3. 確認調査状況(59年)
北西より

1. 調査区全景(61年)
南東より

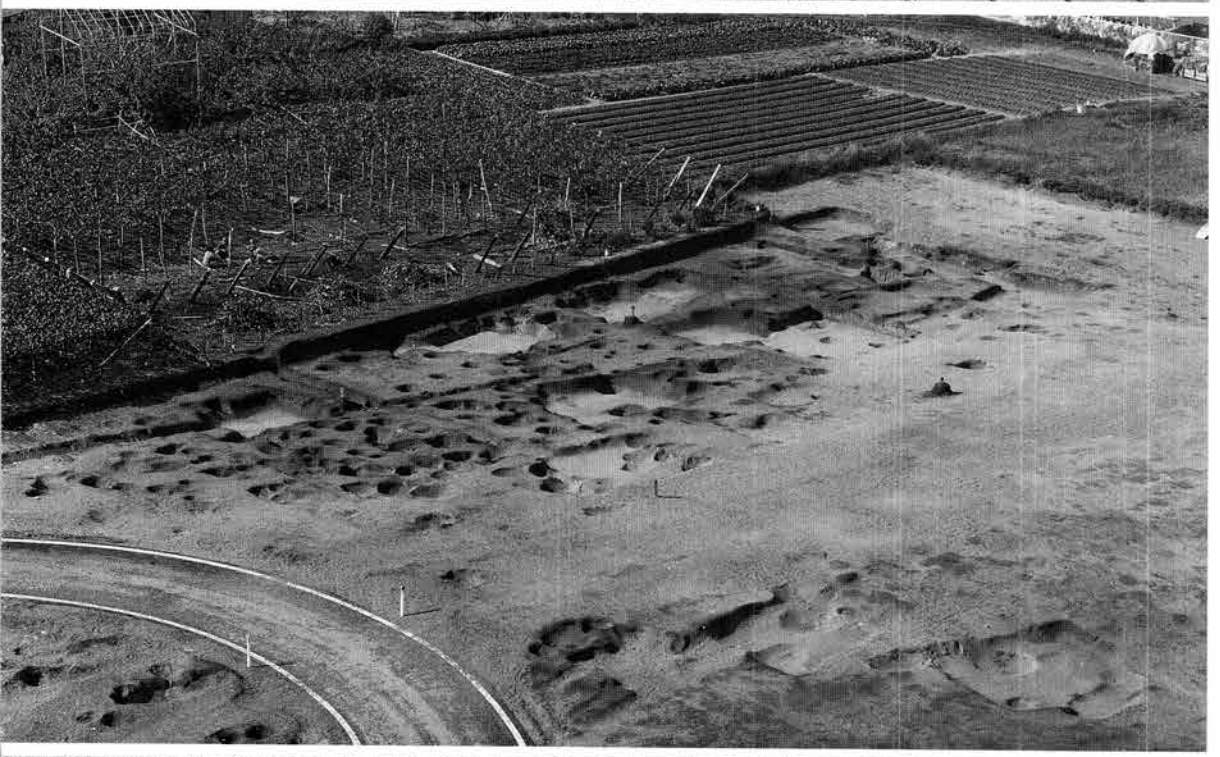


2. B・C7～9区付近(61年)
北より

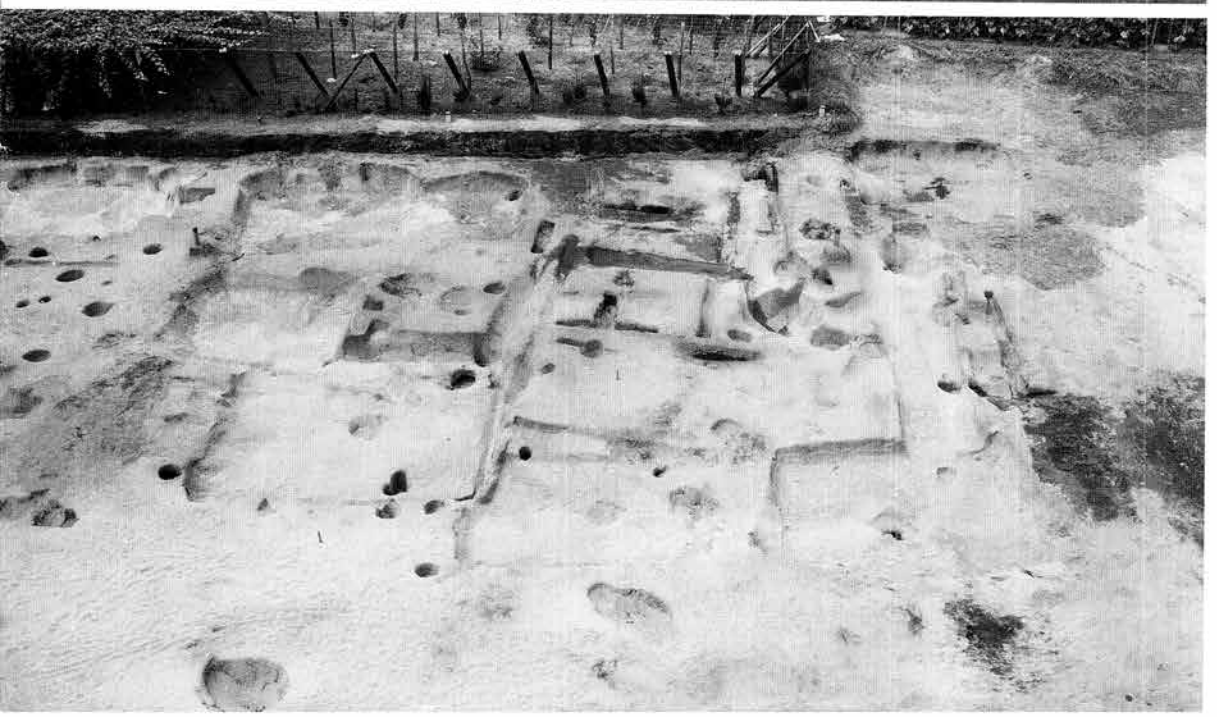
3. C・D9・10区付近(61年)
北東より

図 版 124

1. A・B2～5区付近(61年)
北より



2. A・B2～5区付近(61年)
東より



3. A・B2～4区(61年)
北東より

1. B・C12・13区付近(62年)
東より

2. C・D10・11区付近(61年)
北より

3. B・C5・6区付近(61年)
北より

図 版 126

1. C・D5～7区付近(61年)
北西より

2. D・E8・9区付近(61年)
北西より

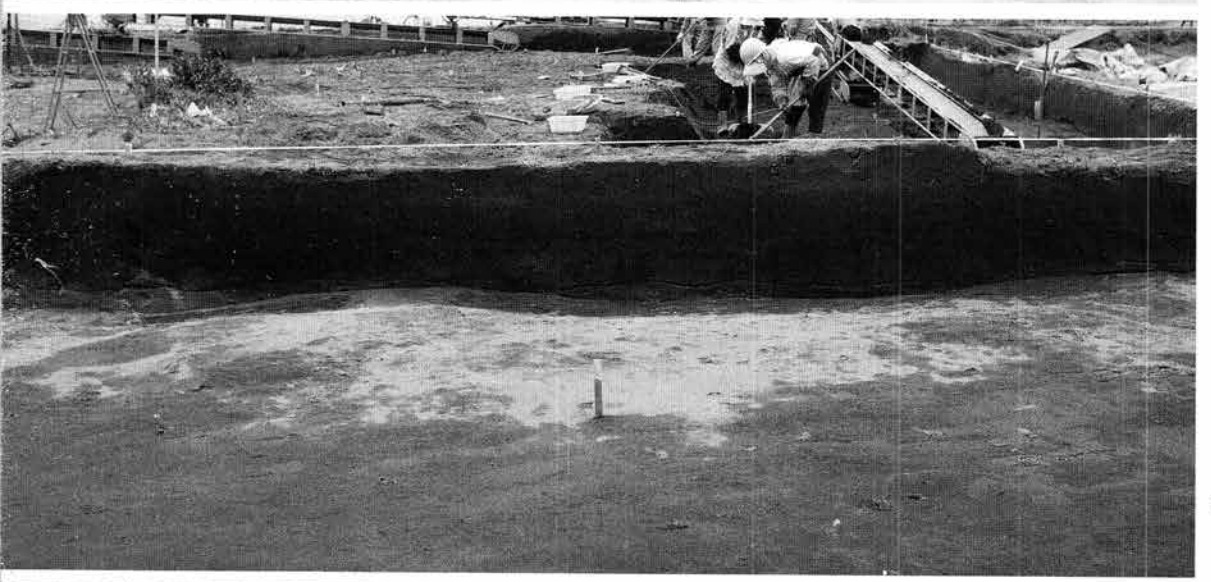
3. D・E6・7区付近(61年)
北西より

1. B・C 7～9区付近(61年)
北東より

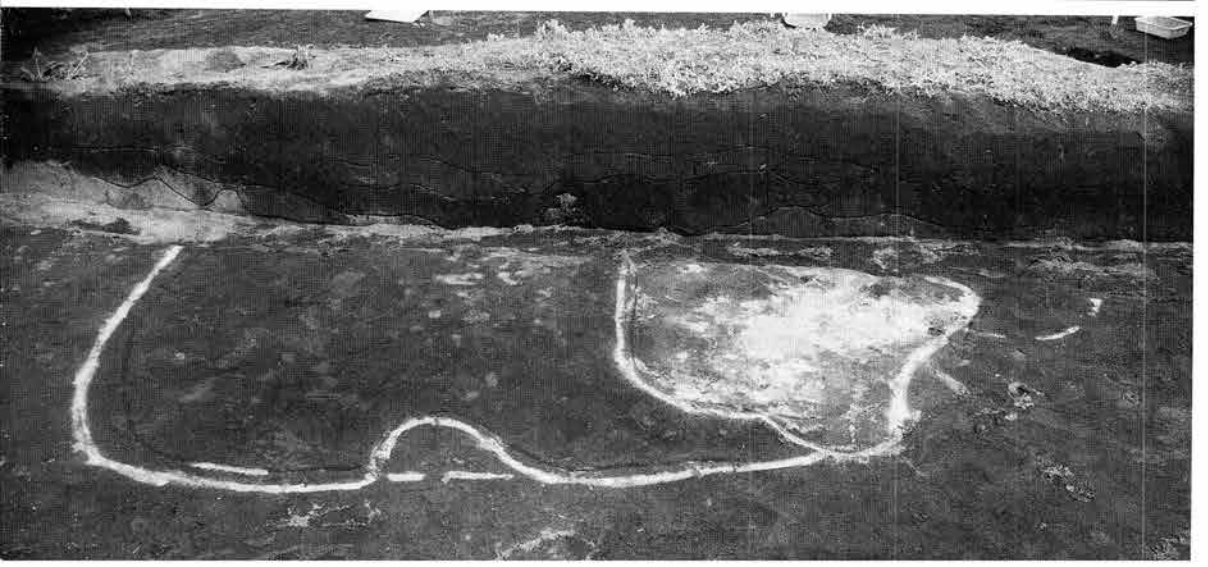
2. A 7～10区付近(62年)
北西より

1. D・E11区土層断面
（包含層なし）
北東より

2. B・C12・13区土層断面
（包含層時代別に分離）
南西より



3. D・E8区土層断面
北東より



4. SI16部分土層断面
北西より

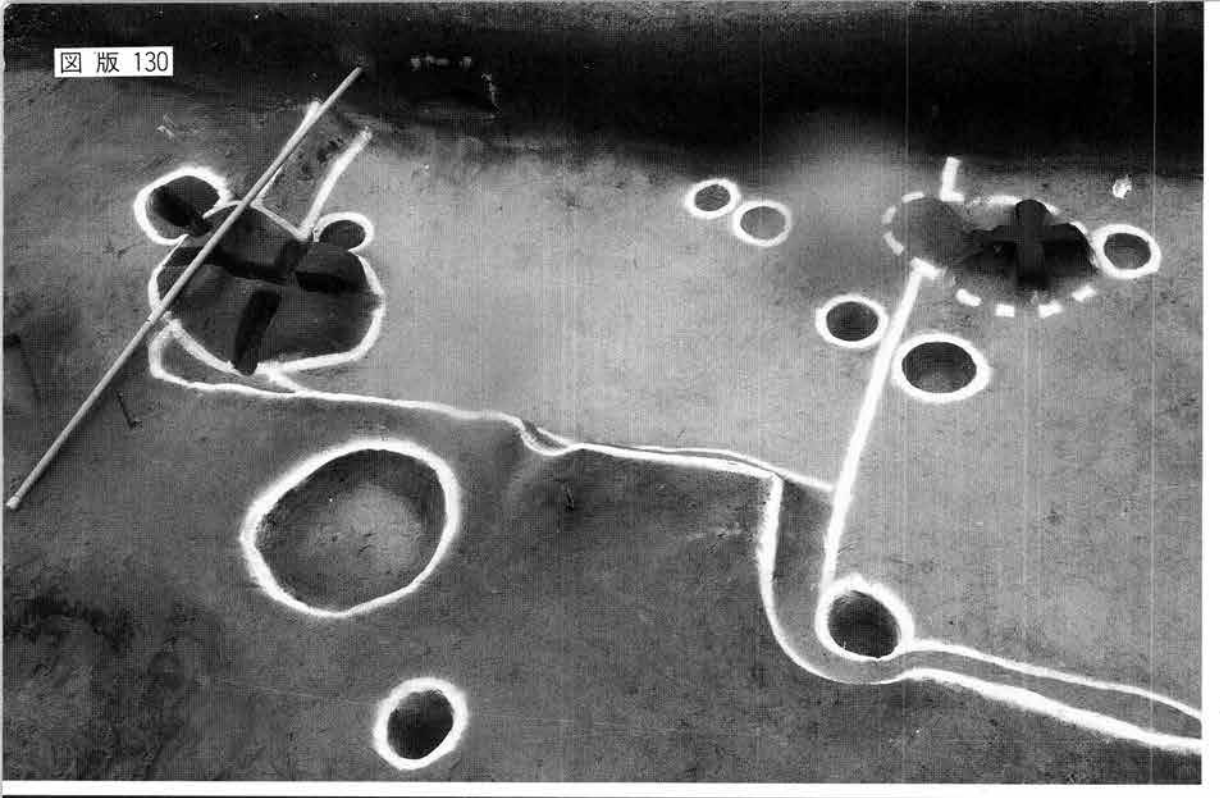
1. SI 4・5完掘
北東より

2. SI 4完掘
北西より

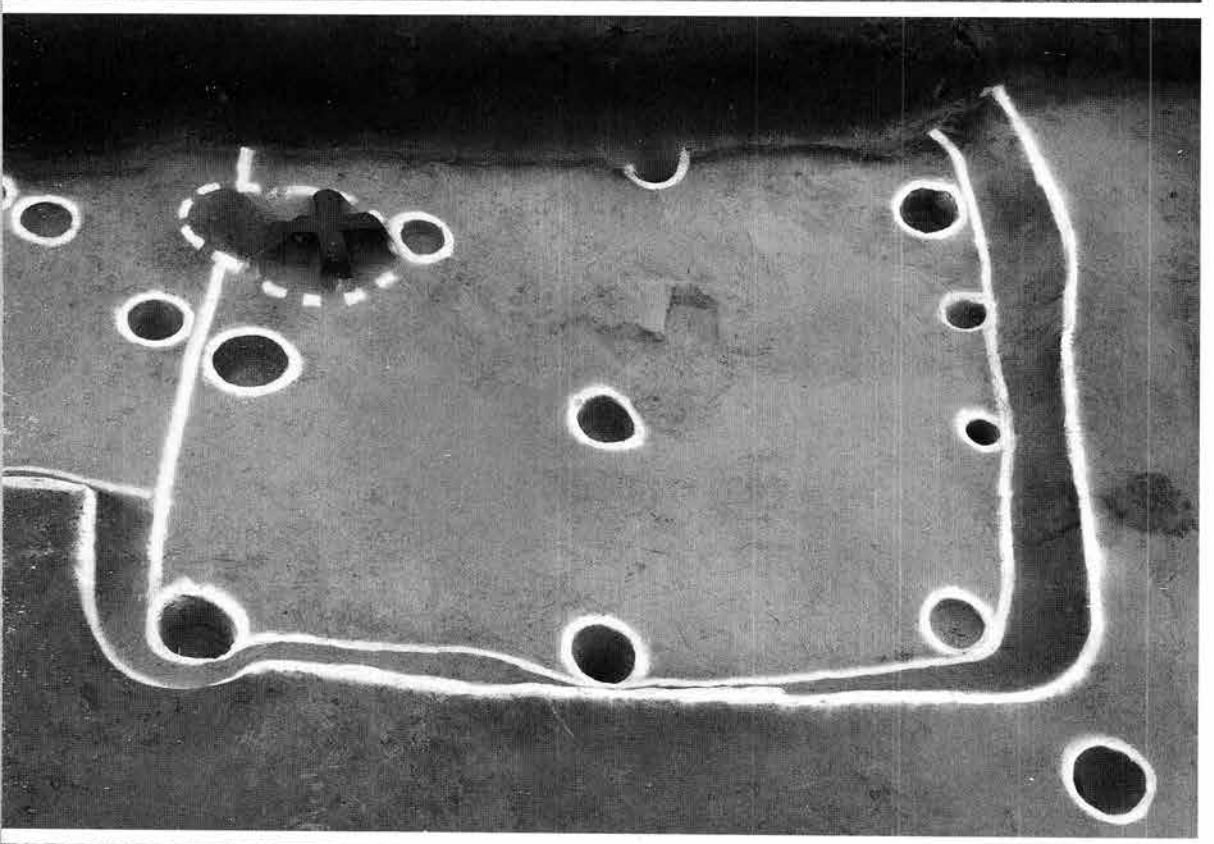
3. SI 5カマド
北西より

4. SI 5カマド
北西より

図版 130



1. SI 1100完掘
北東より



2. SI 1101完掘
北東より

3. SI 1100・SI 1101
南北断面
北東より

1. SI 1101C区土器(699)
出土状況

2. SI 1101カマド
南北セクション

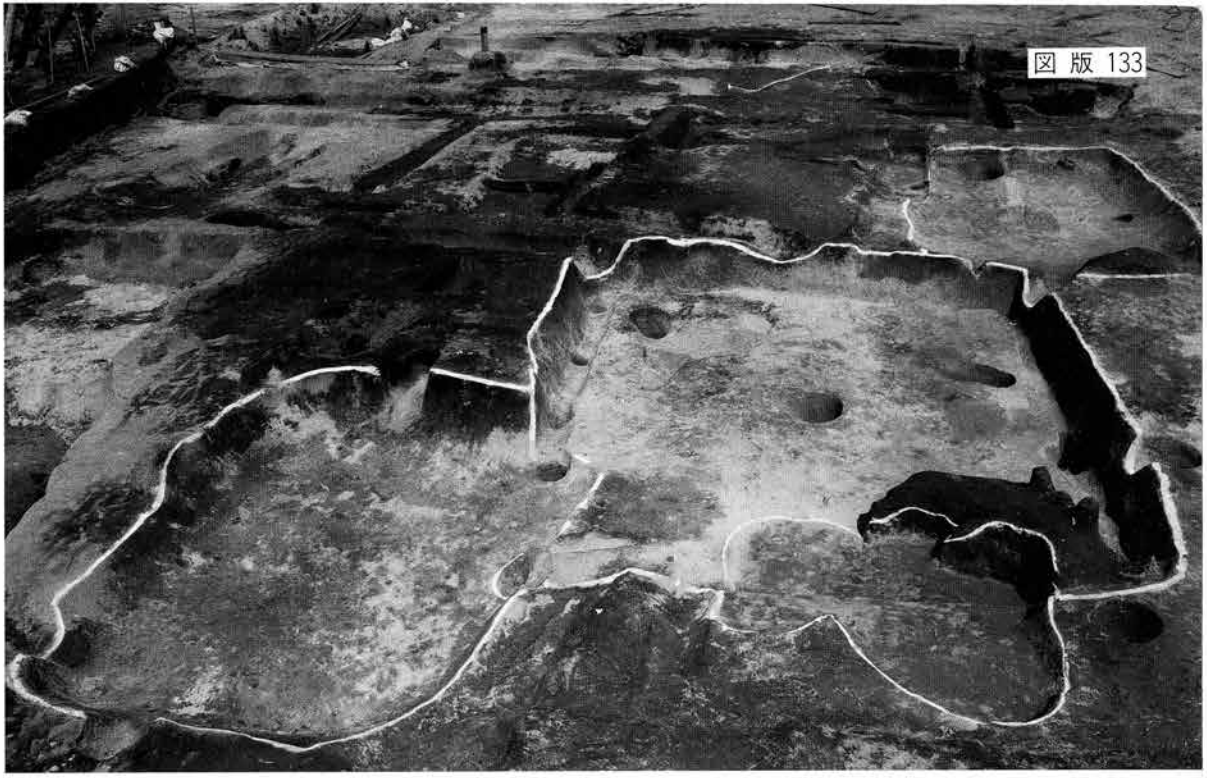
3. SI 1100遺物出土状況

4. SI 1完掘

1. SI 6完掘
北より

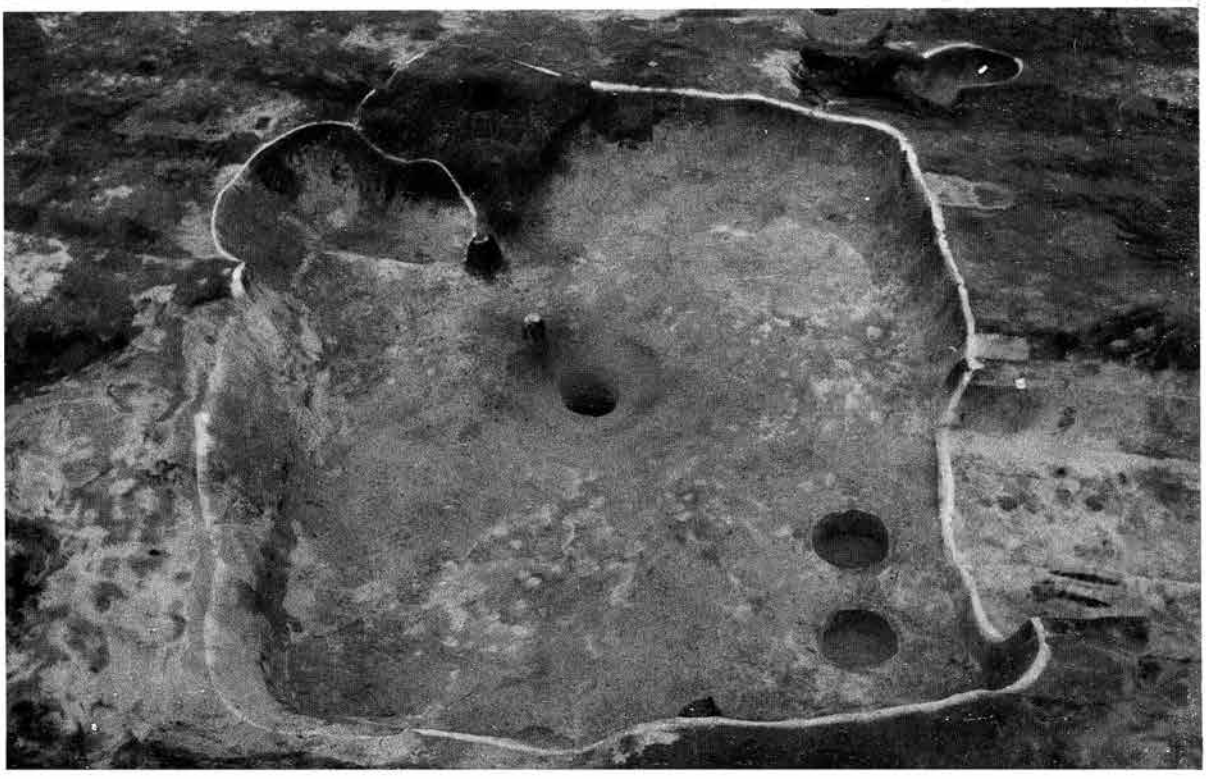
2. SI 6断面
南東より

3. SI 6カマド土器
出土状況
北西より



1. SI 6・SI 8・SI 9完掘
南東より

2. SI 8断面
北西より

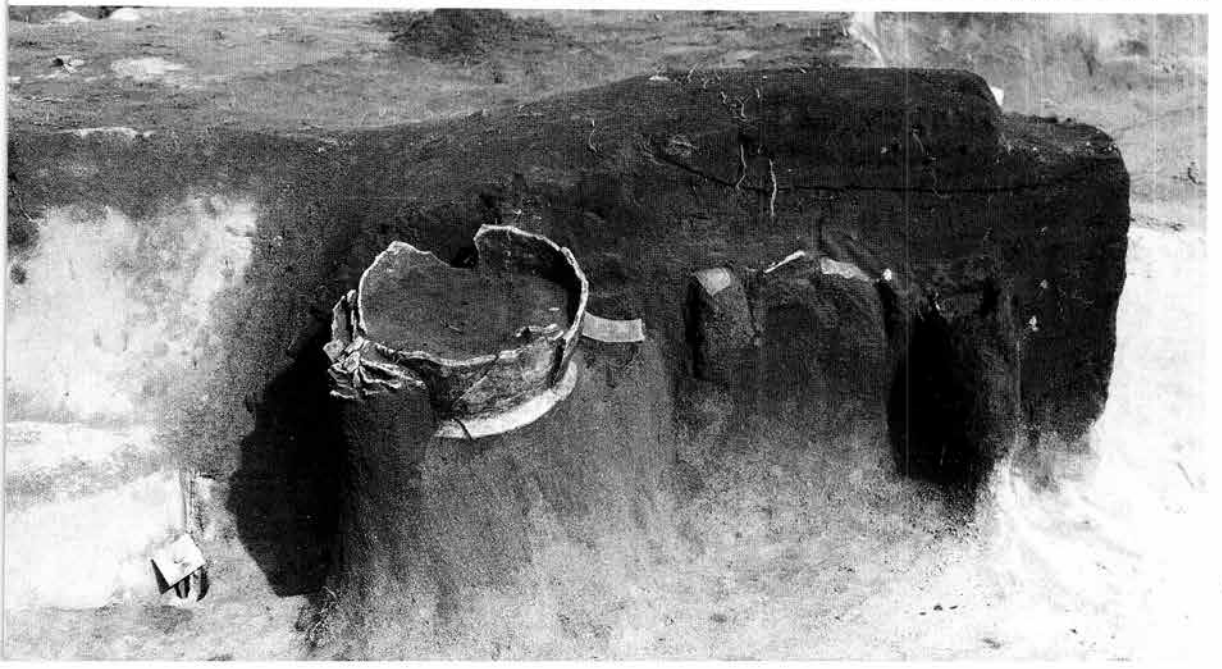


3. SI 10完掘
北西より

図版 134

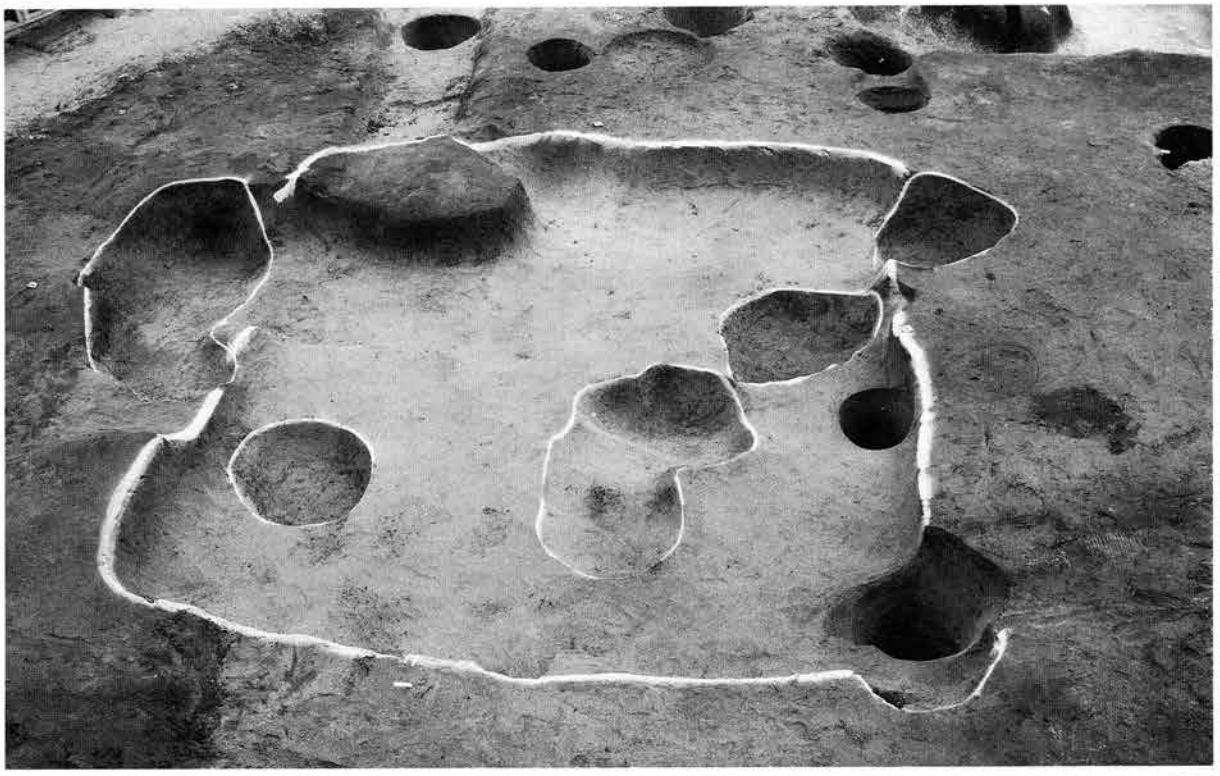
1. SI 11完掘
北より

2. SI 7完掘
北西より



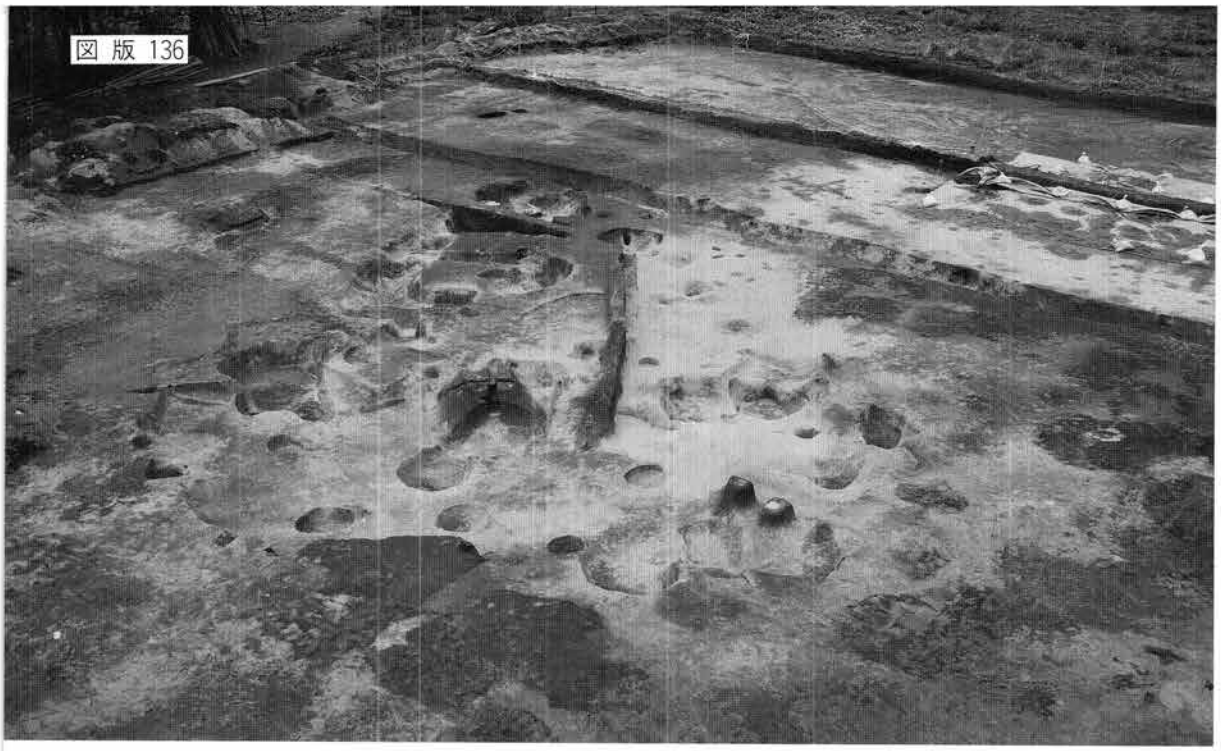
3. SI 7カマド内土器

1. SI 310完掘
北西より

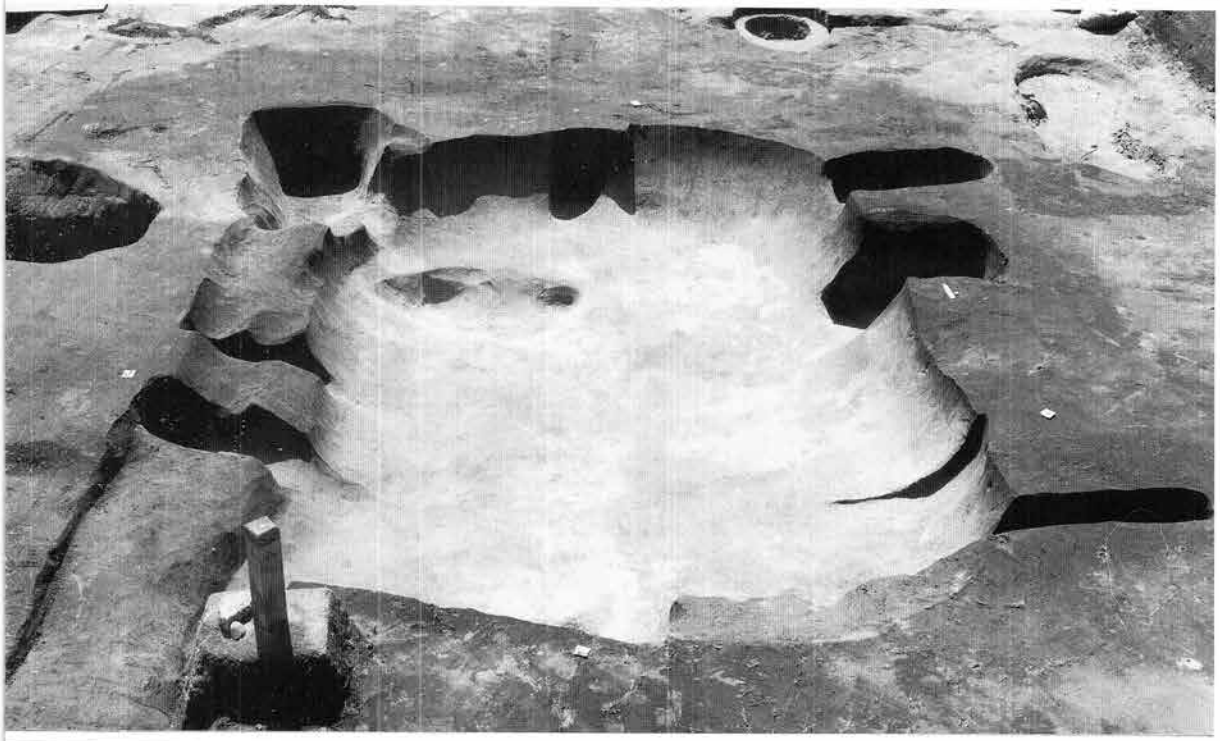


2. SI 314完掘
北東より

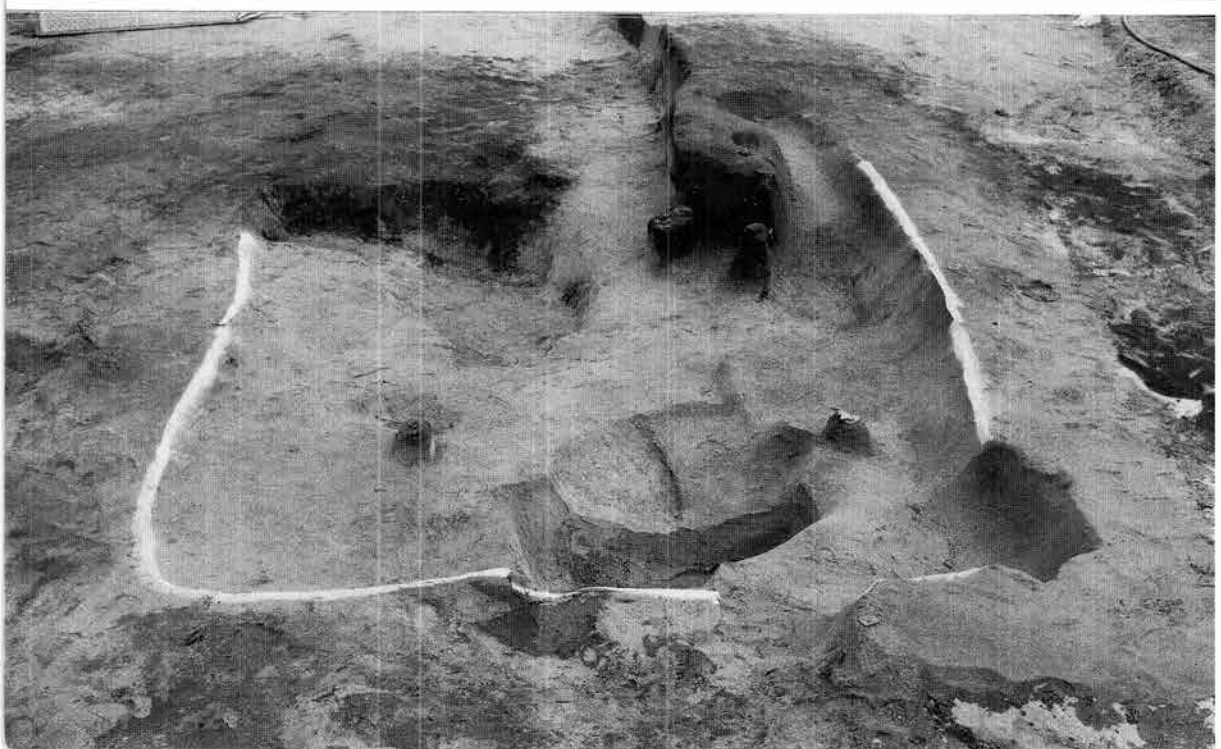
3. SI 1500土層断面
南西より



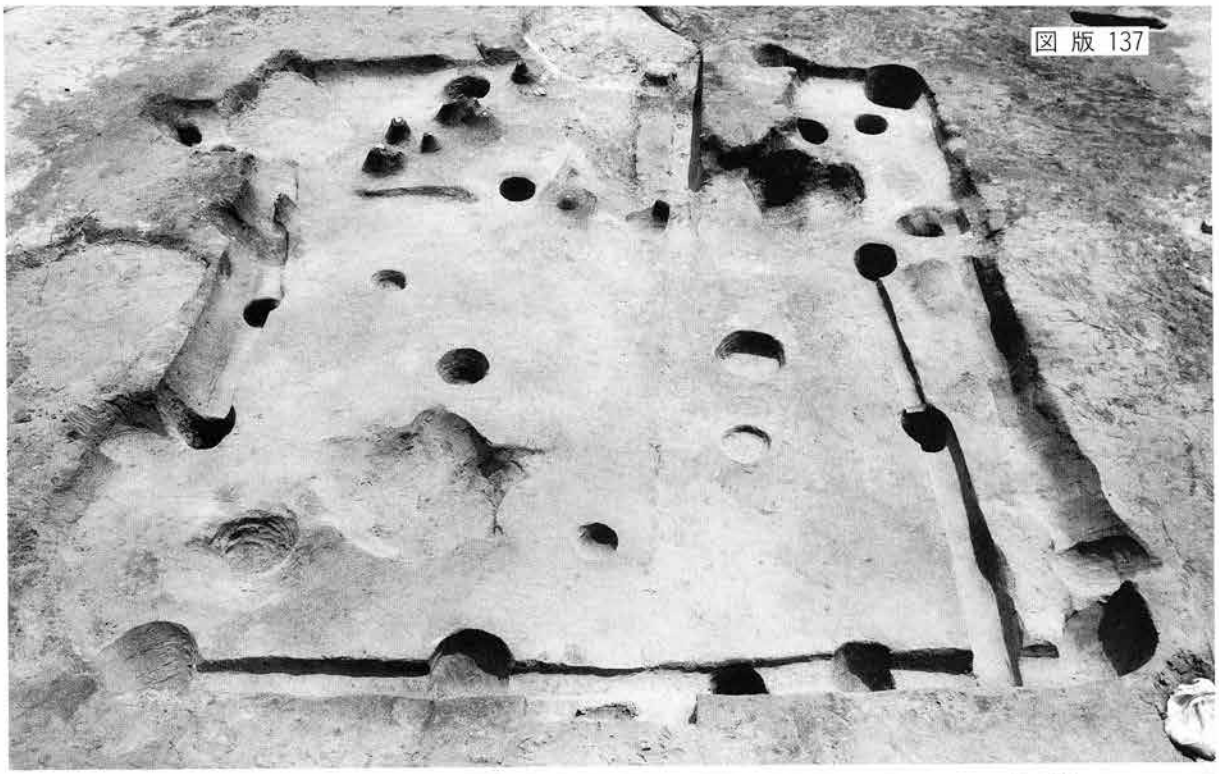
1. SI 12完掘
西より



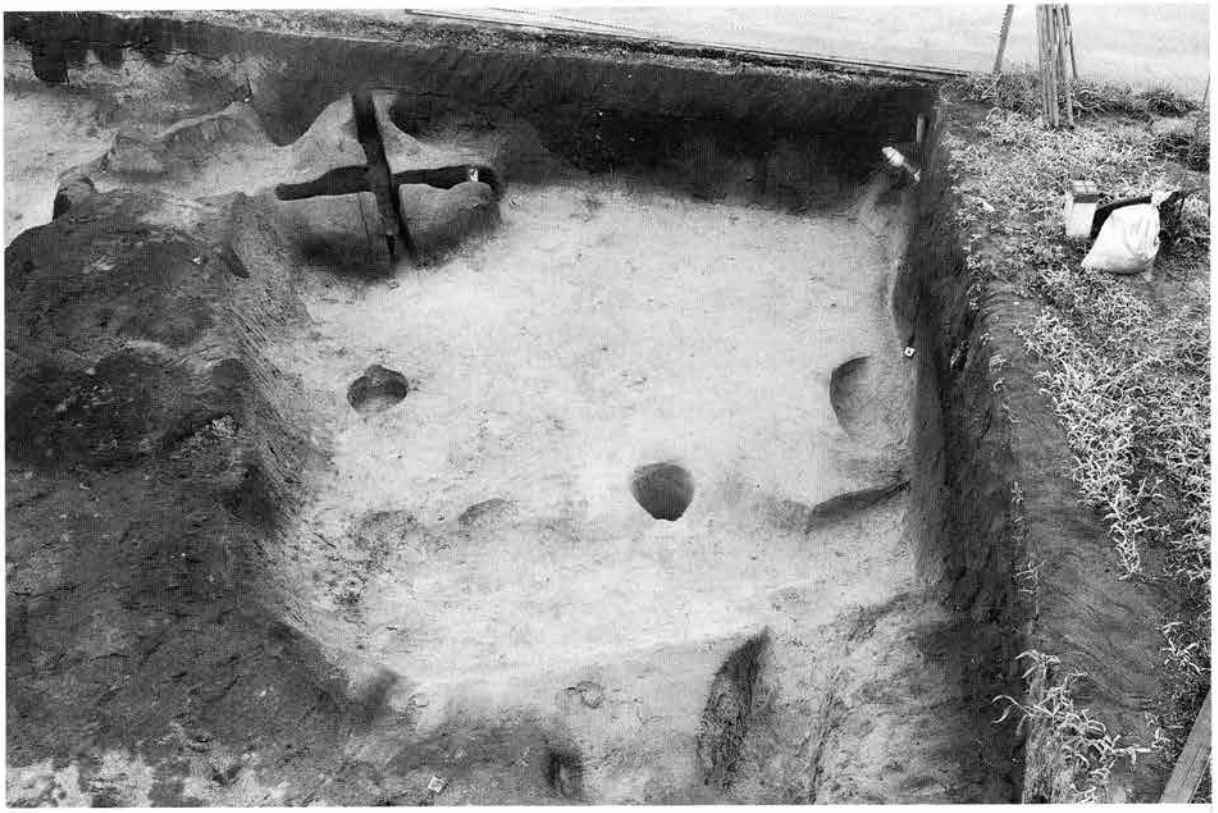
2. SI 325完掘
北西より



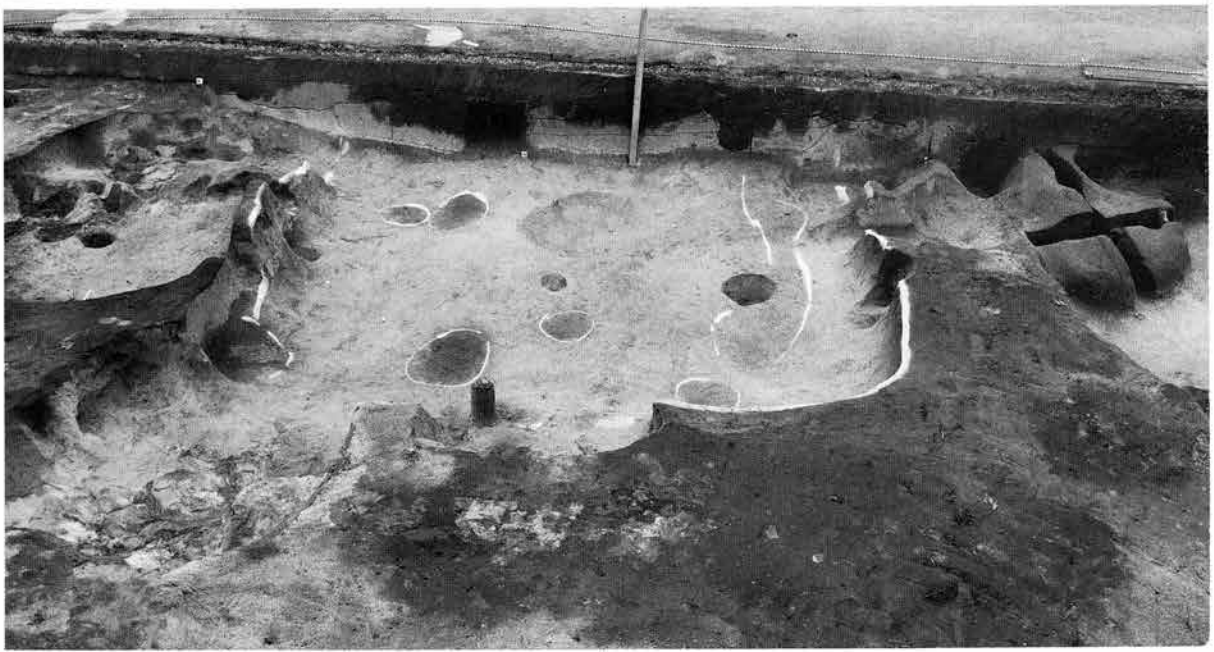
3. SI 299完掘
北西より



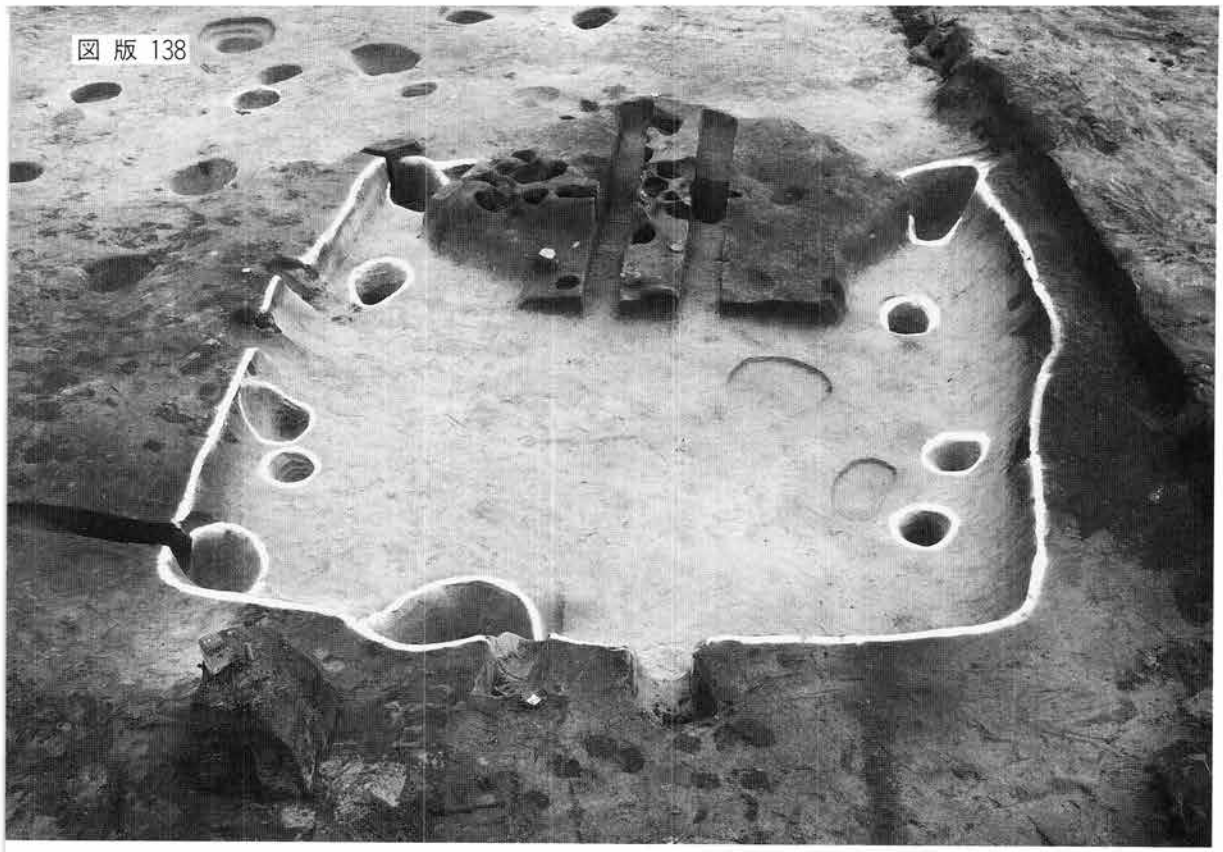
1. SI 360完掘
北西より



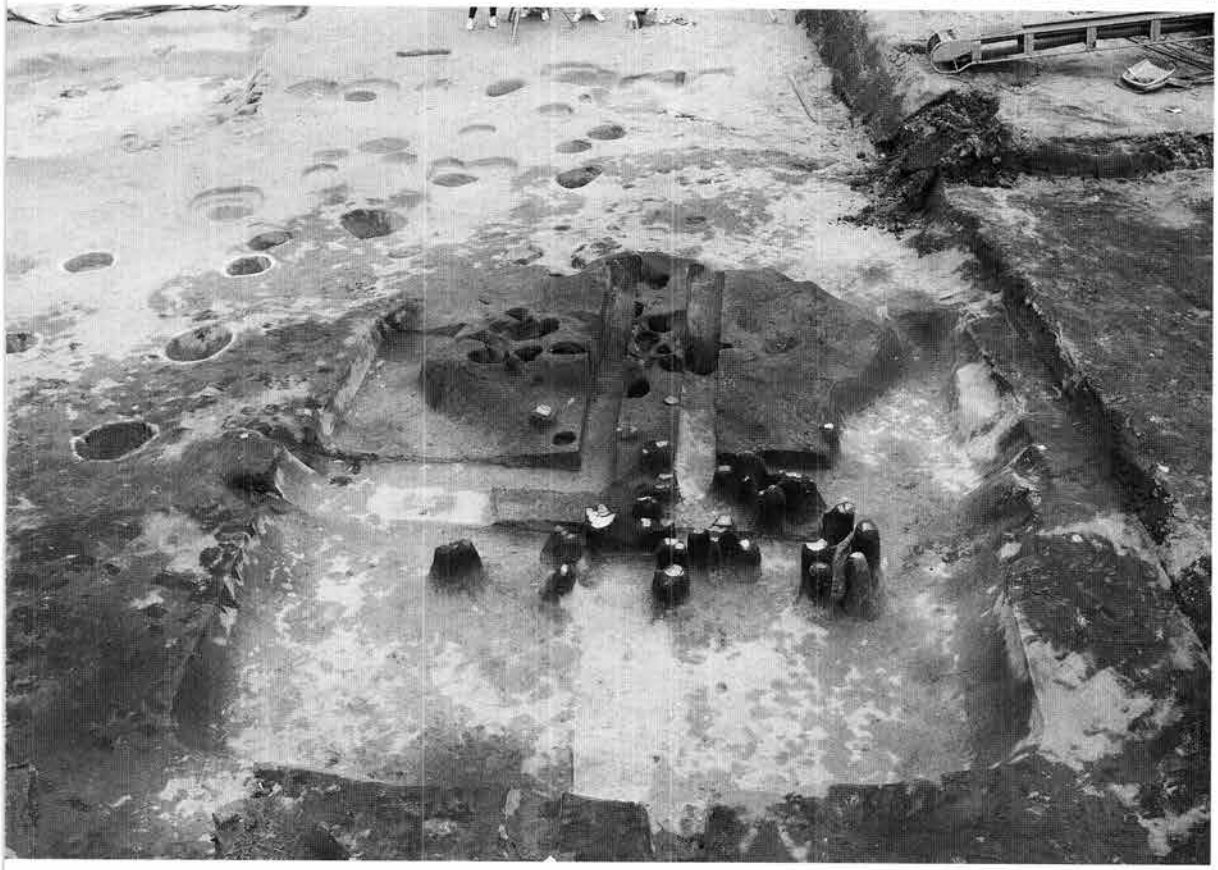
2. SI 336完掘
北西より



3. SI 339完掘
北西より



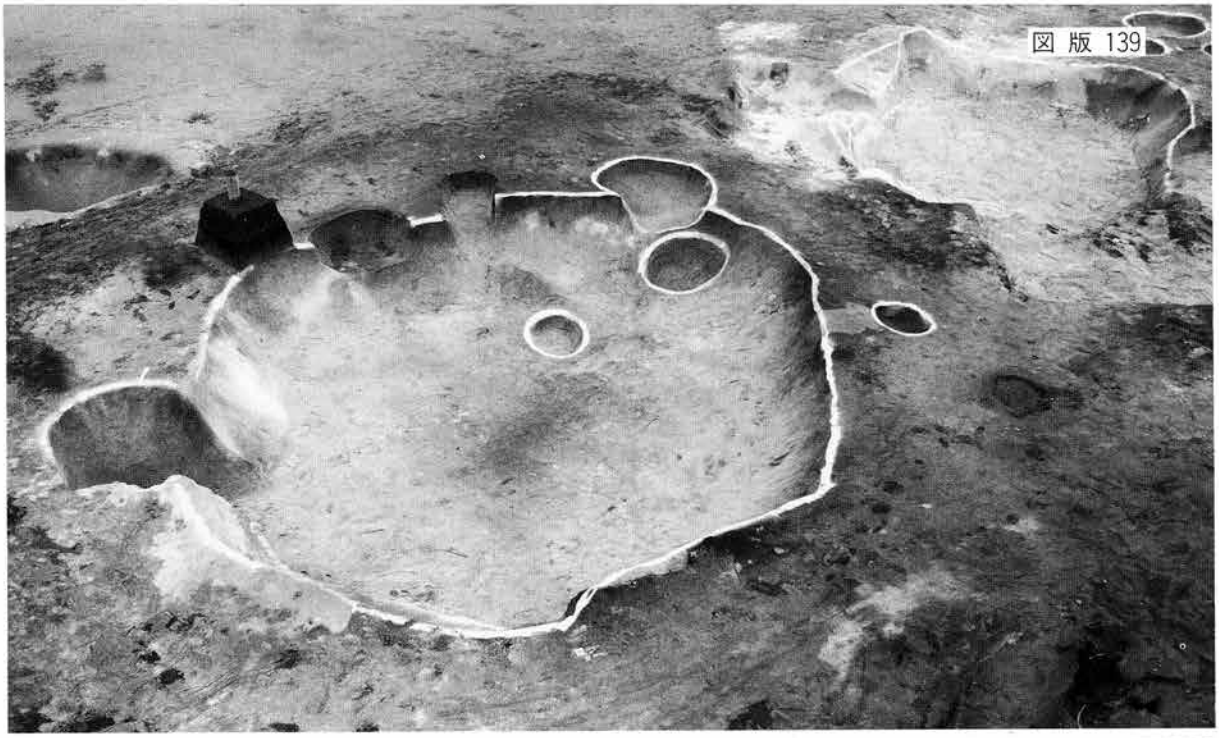
1. SI 14完掘
北西より



2. SI 14遺物出土状況
北西より

3. SK 340
北東より

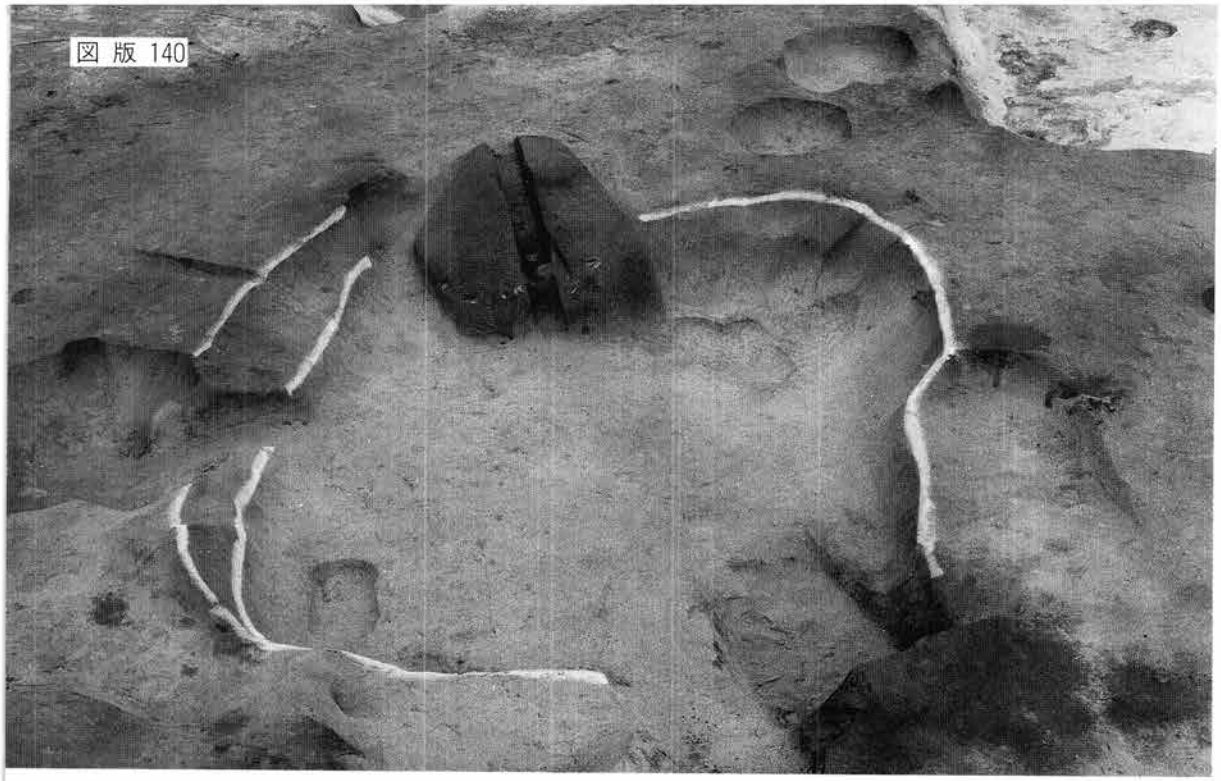
4. SI 299カマド土器
南西より



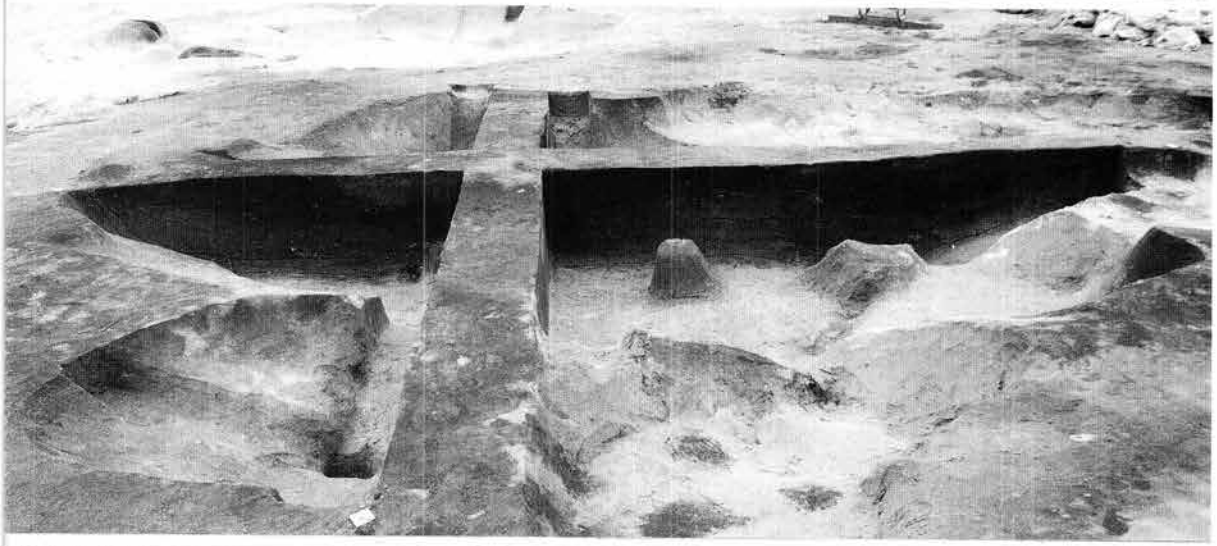
1. SI 15完掘
北西より

2. SI 15遺物出土状況
南東より

3. SI 15遺物出土状況

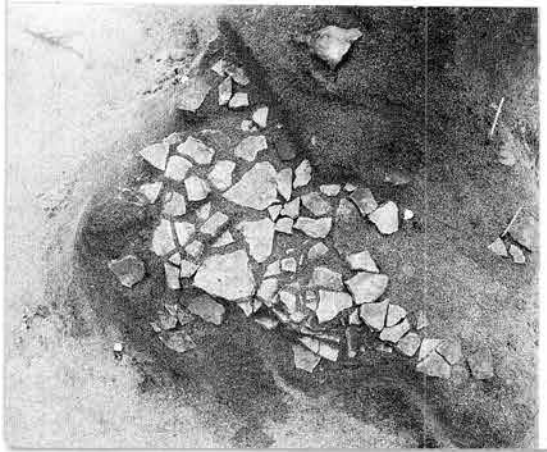


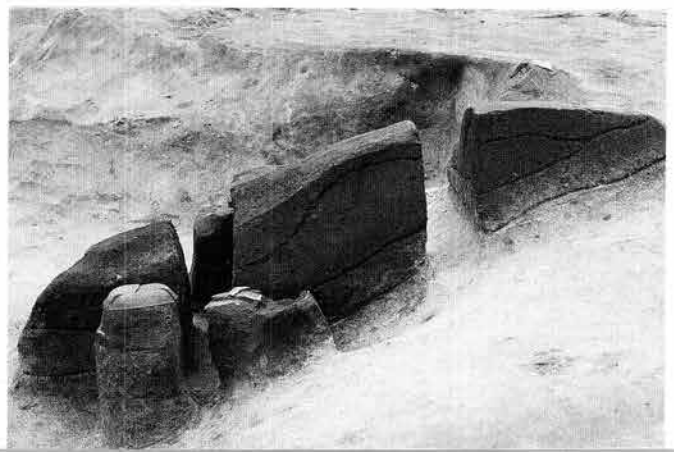
1. SI 280完掘
北西より



2. SI 280土層断面
南より

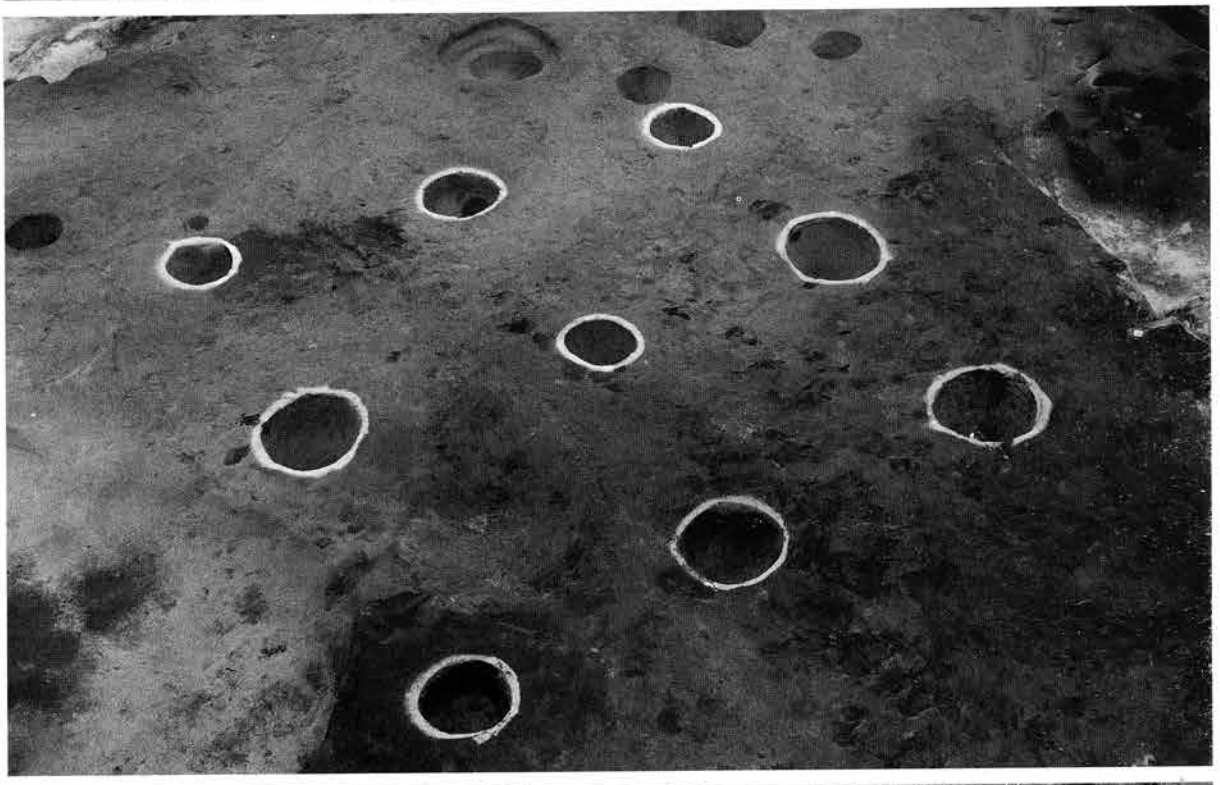
3. SI 280遺物出土状況
4. SI 280土層断面
南より



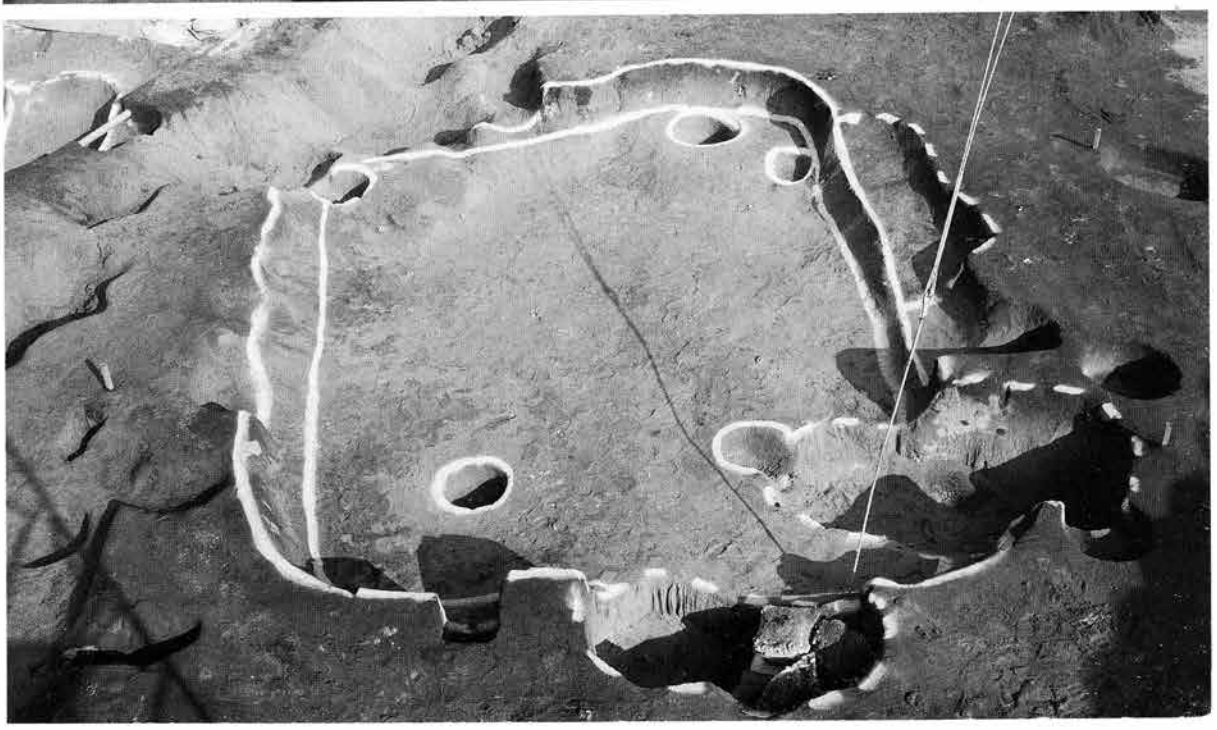


5. SI 280土器出土状況
6. SI 280カマド断面
南西より

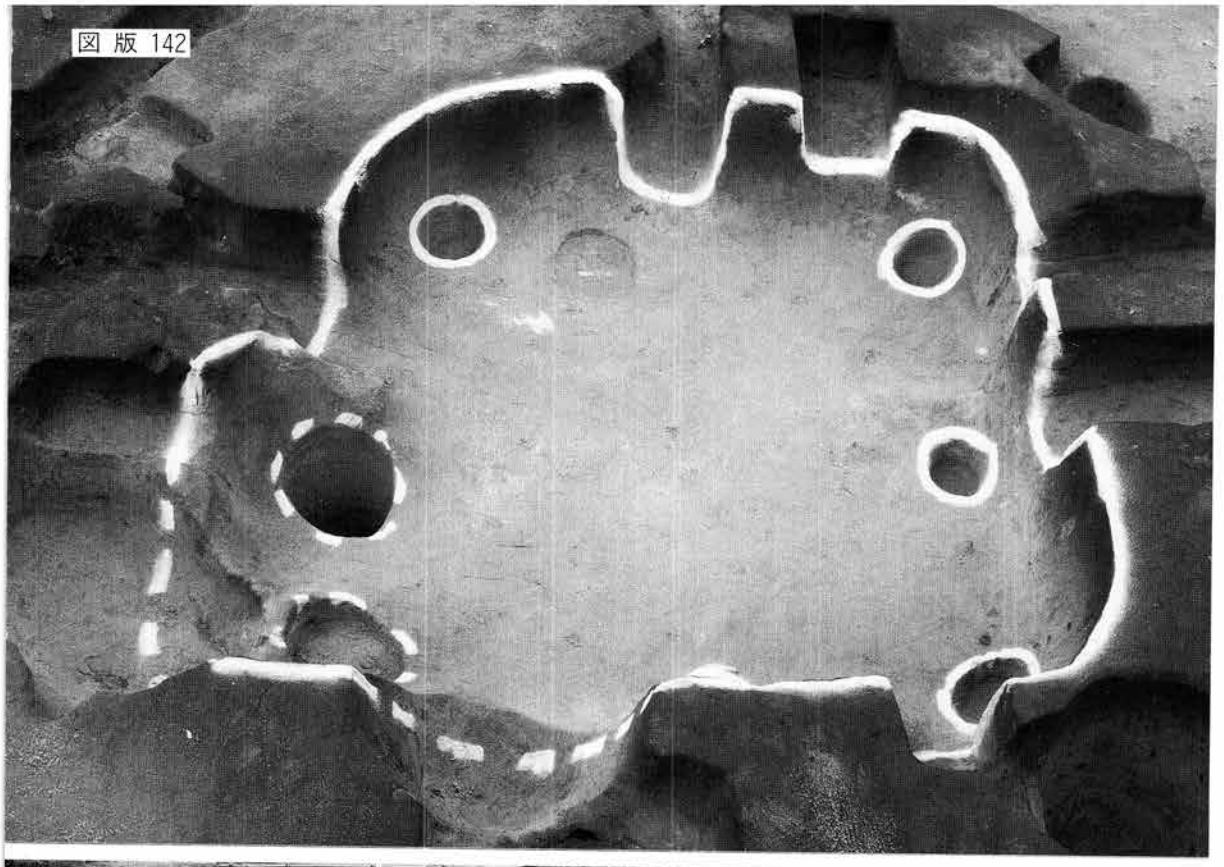
1. SB355(D6区)付近
北西より



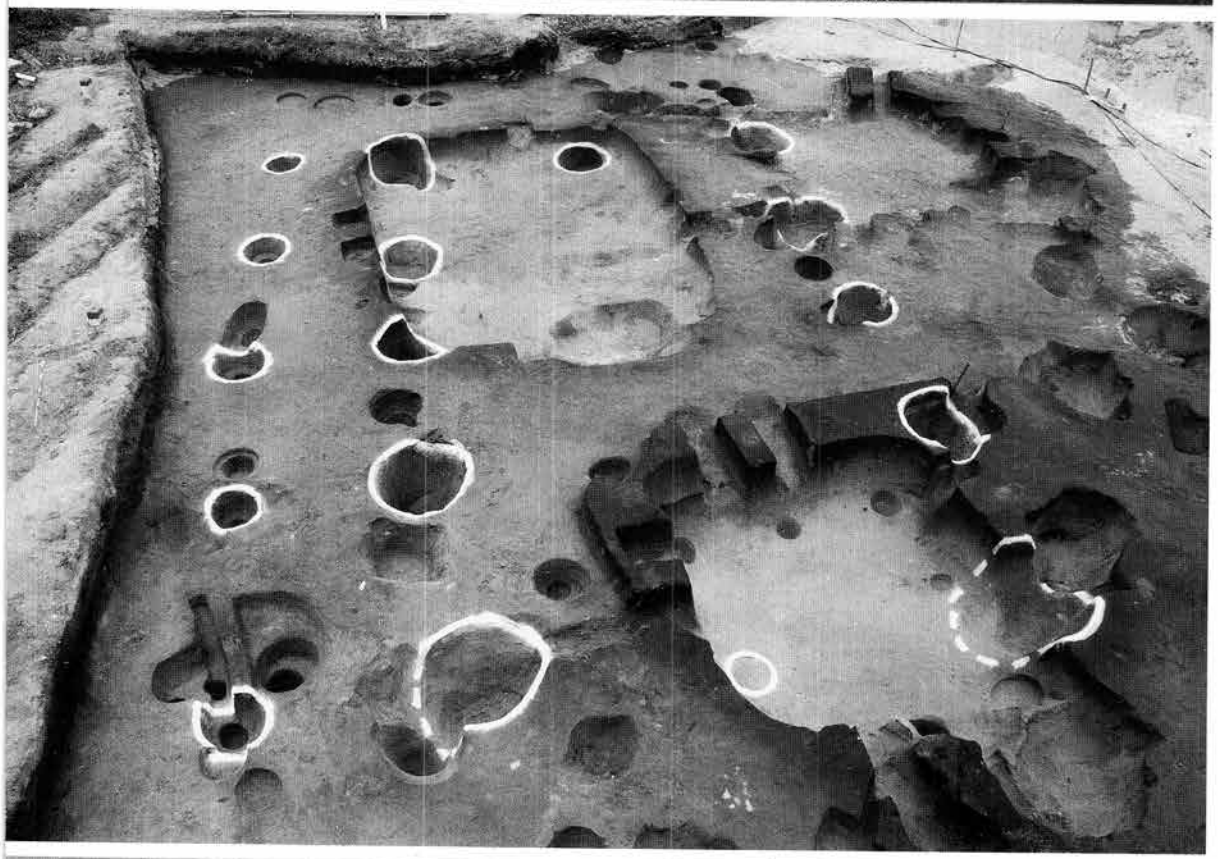
2. SB355完掘
北より



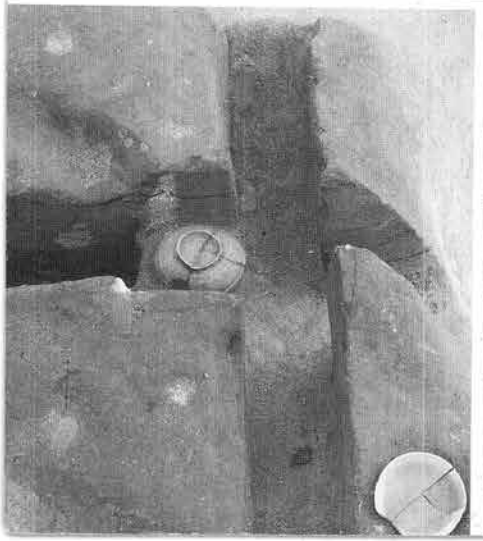
3. SI440完掘
北西より



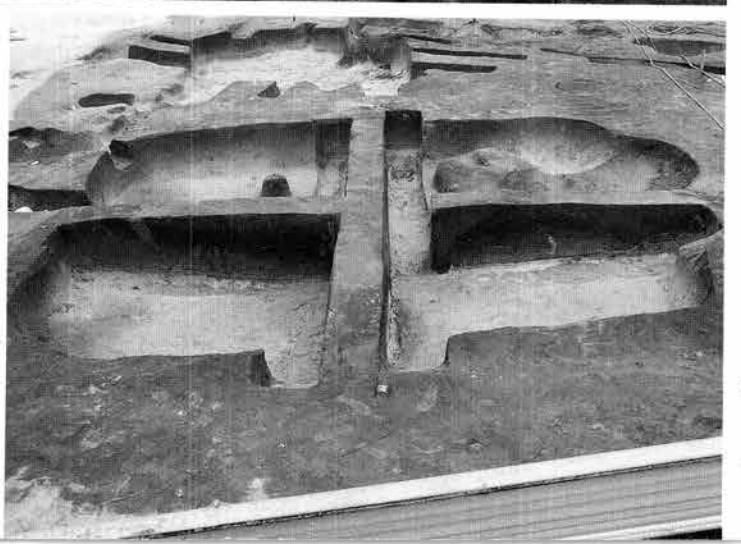
1. SI 1202完掘
北東より



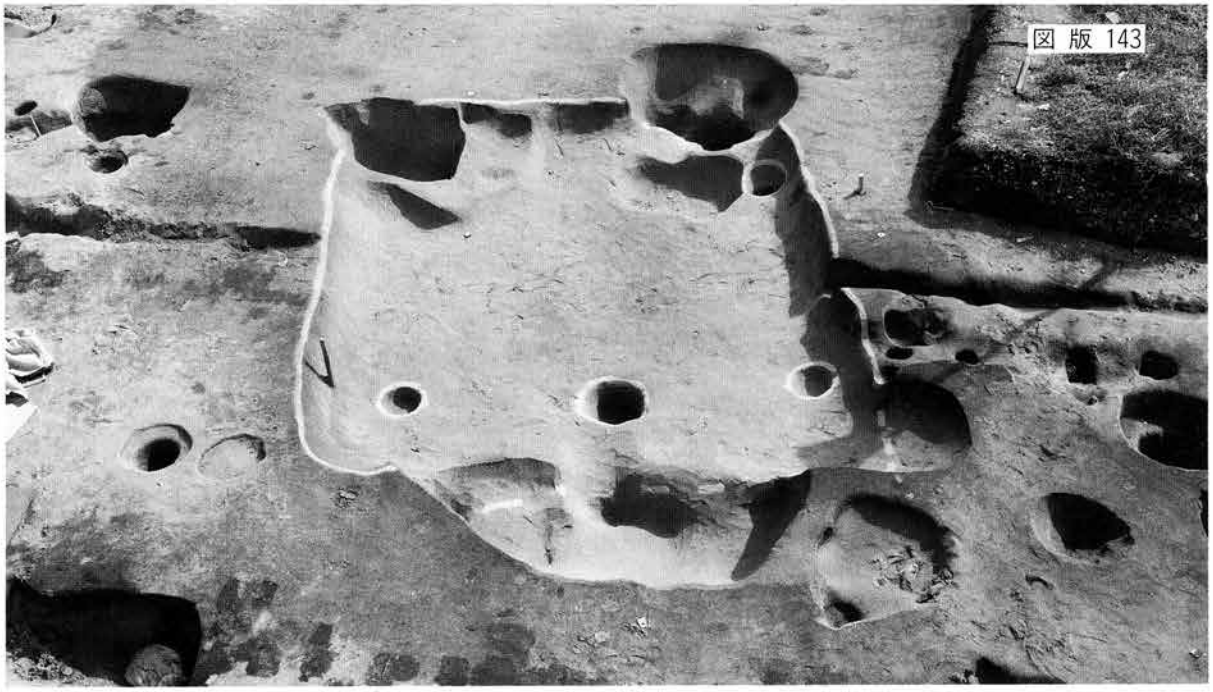
2. SB 1229・SI 1201・
SI 1202完掘
南東より



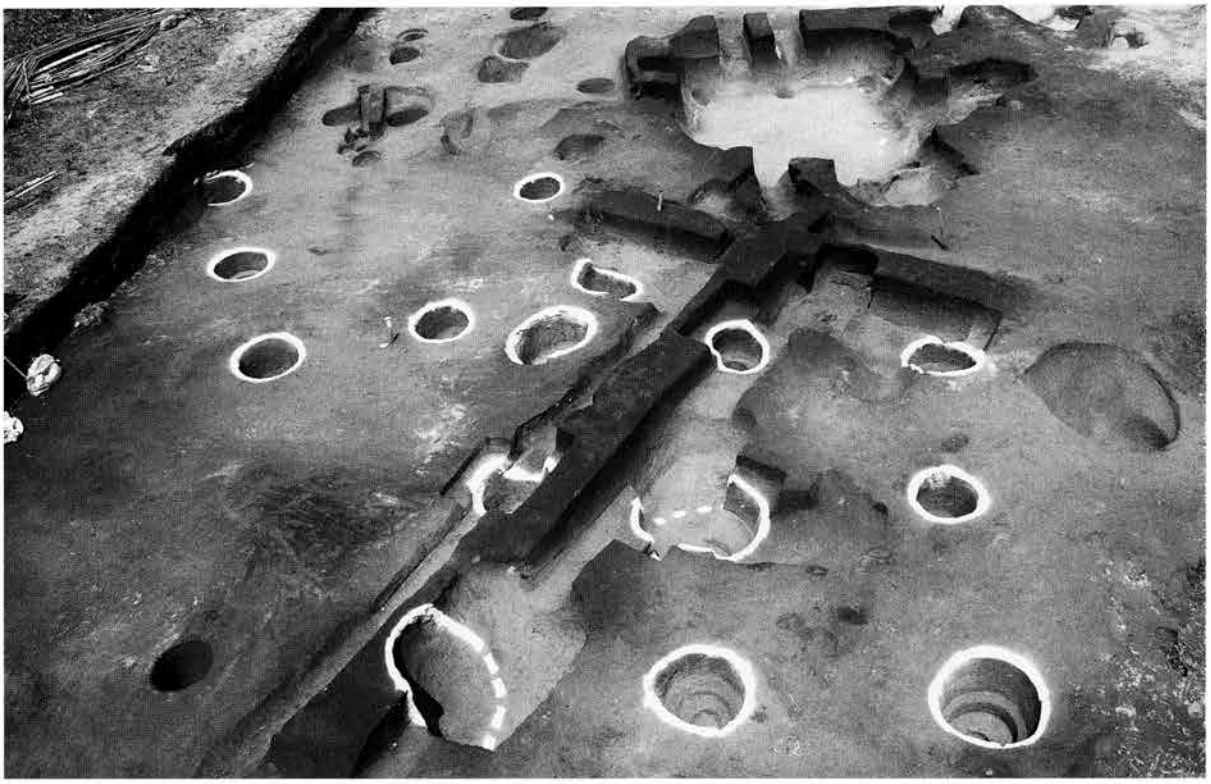
3. SI 1201カマド土器(872)
出土状況



4. SI 1201土層断面
北西より



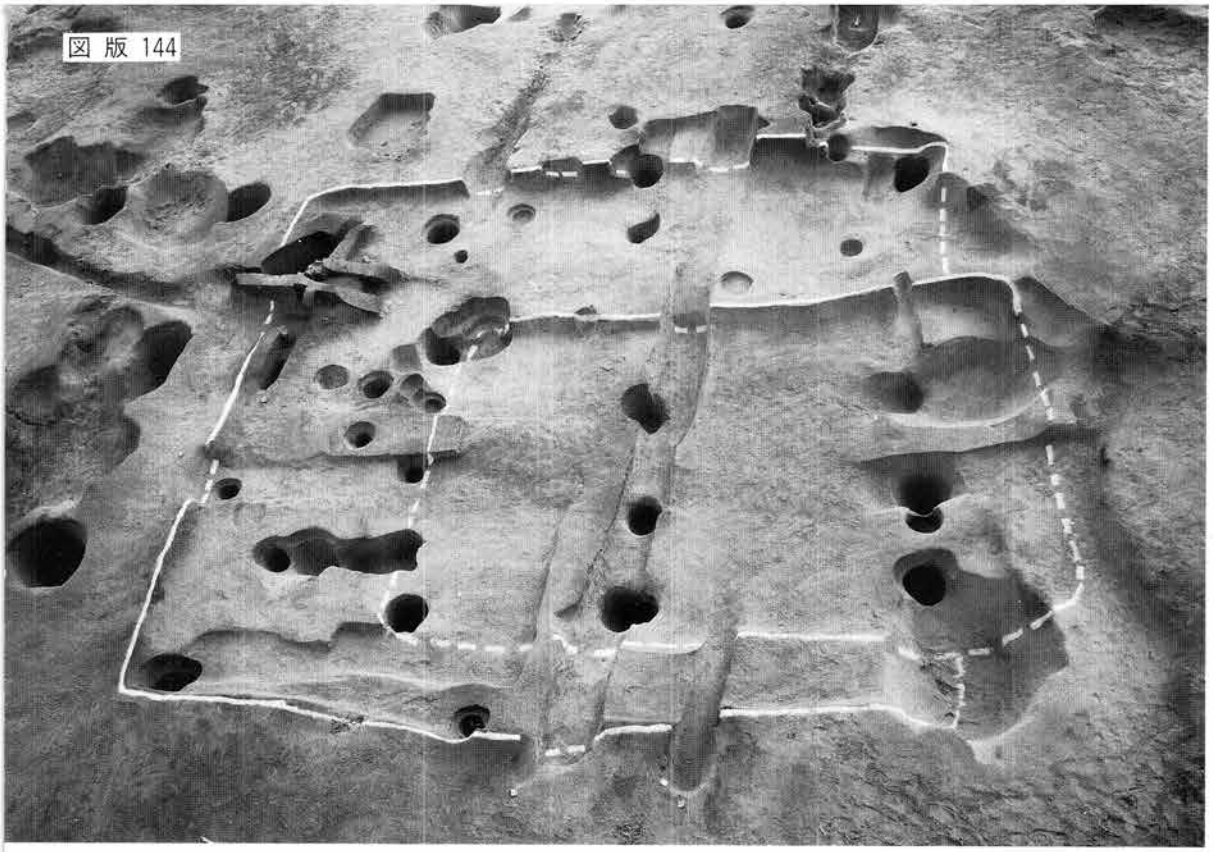
1. SI 435完掘
北西より



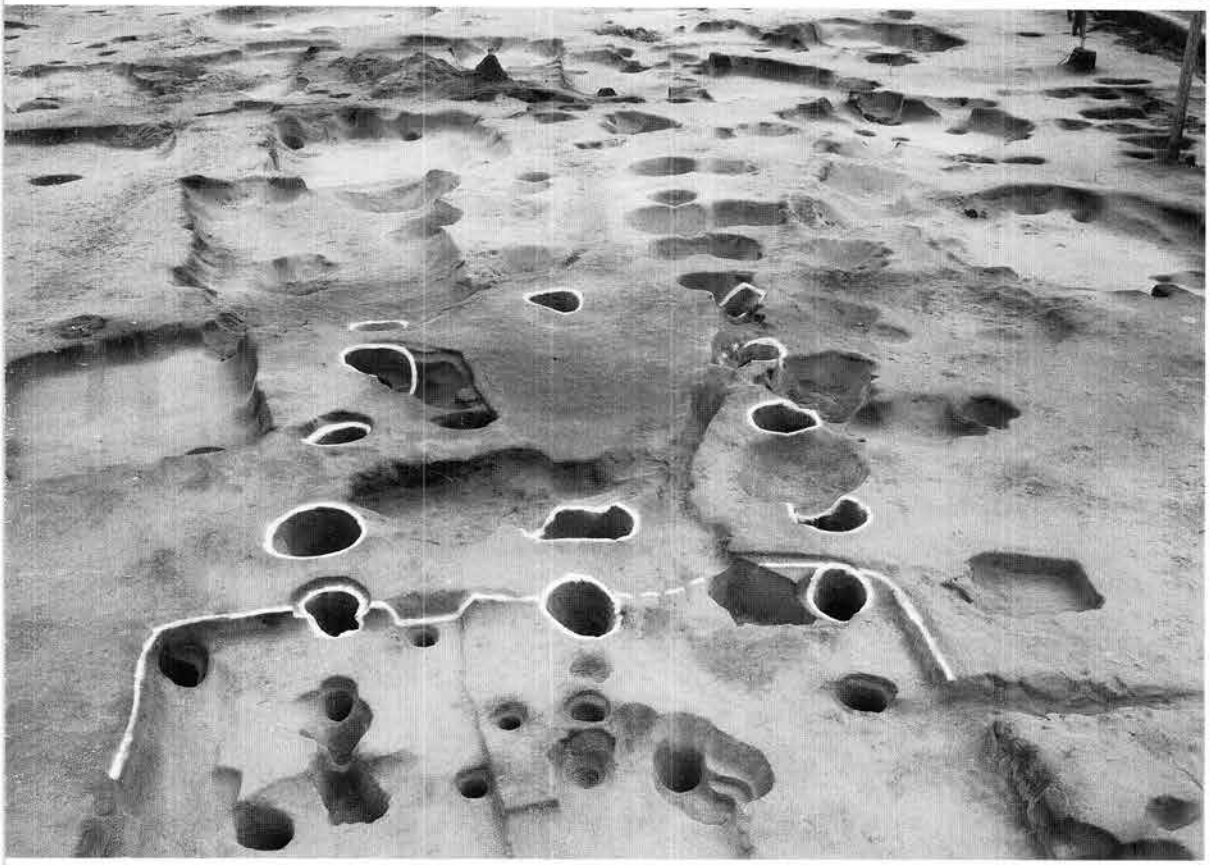
2. SB1241・SB1280完掘
南東より

3. SI 462土層断面
南東より

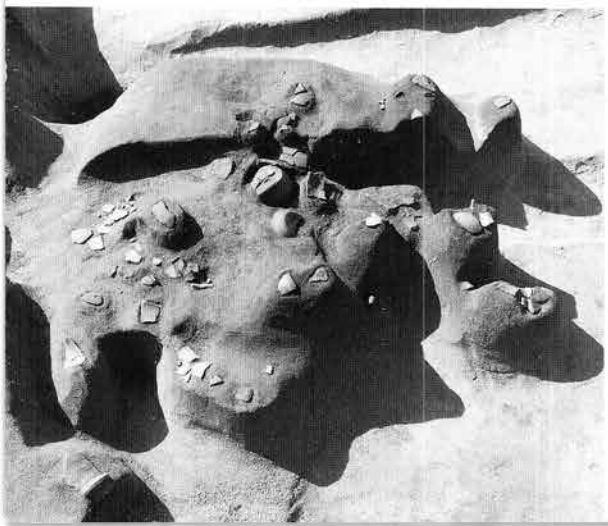
図 版 144



1. SI 429・SI 840完掘
北東より

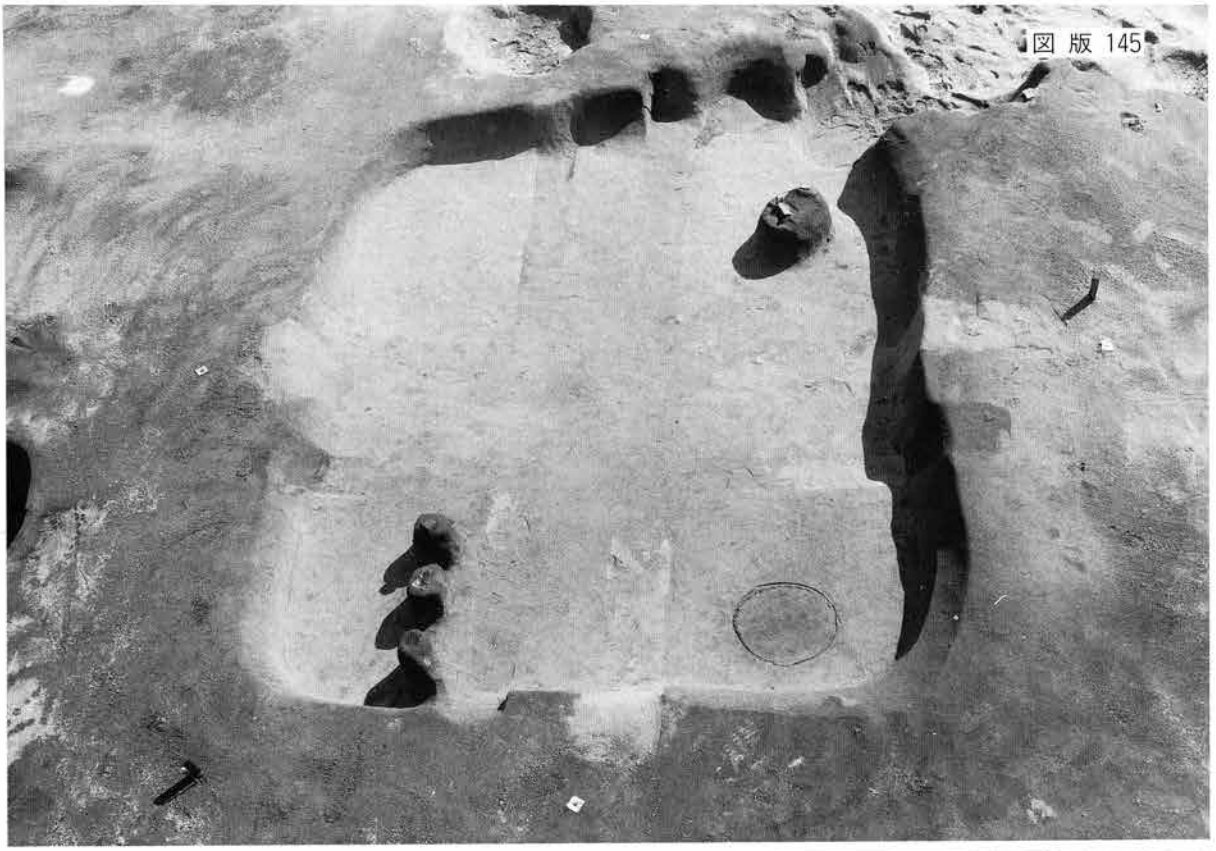


2. SB 870完掘
北東より

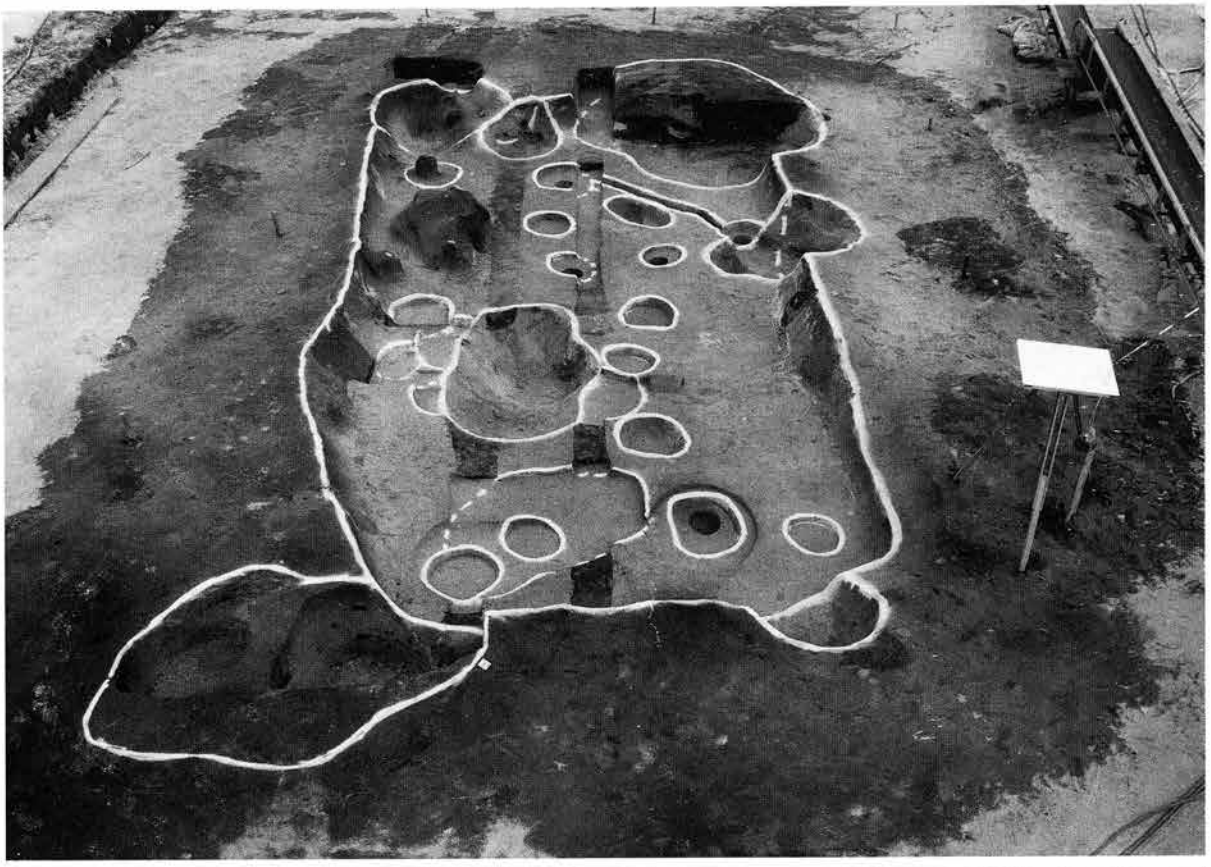


3. SI 850カマド土器
出土状況
北東より

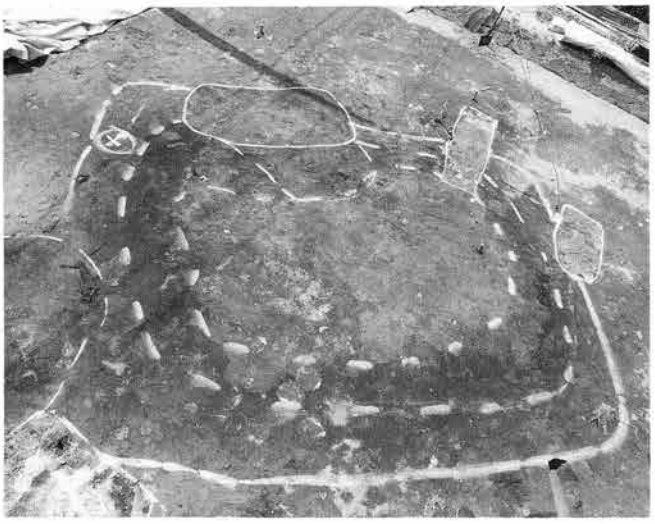
4. SI 850カマド土器
出土状況
北西より



1. SI 402完掘
北西より

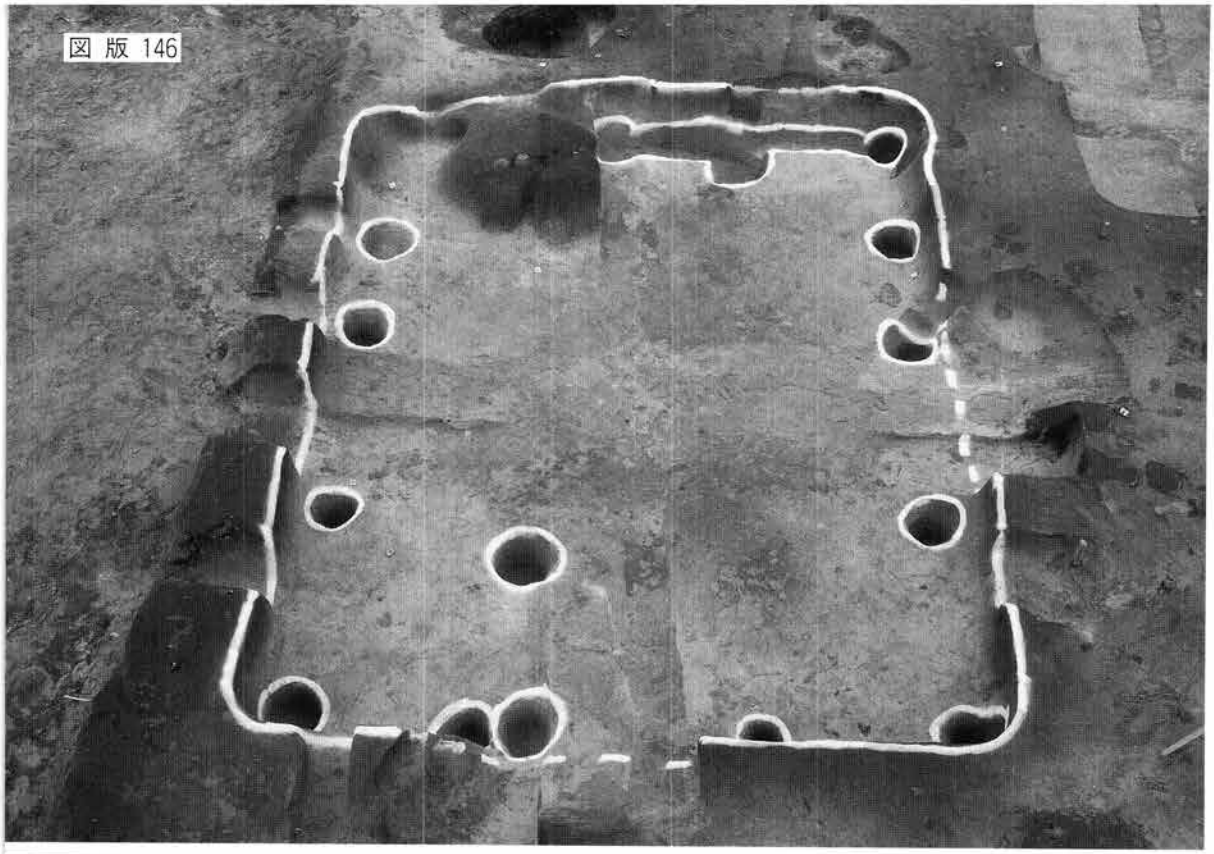


2. SI 401完掘
北西より

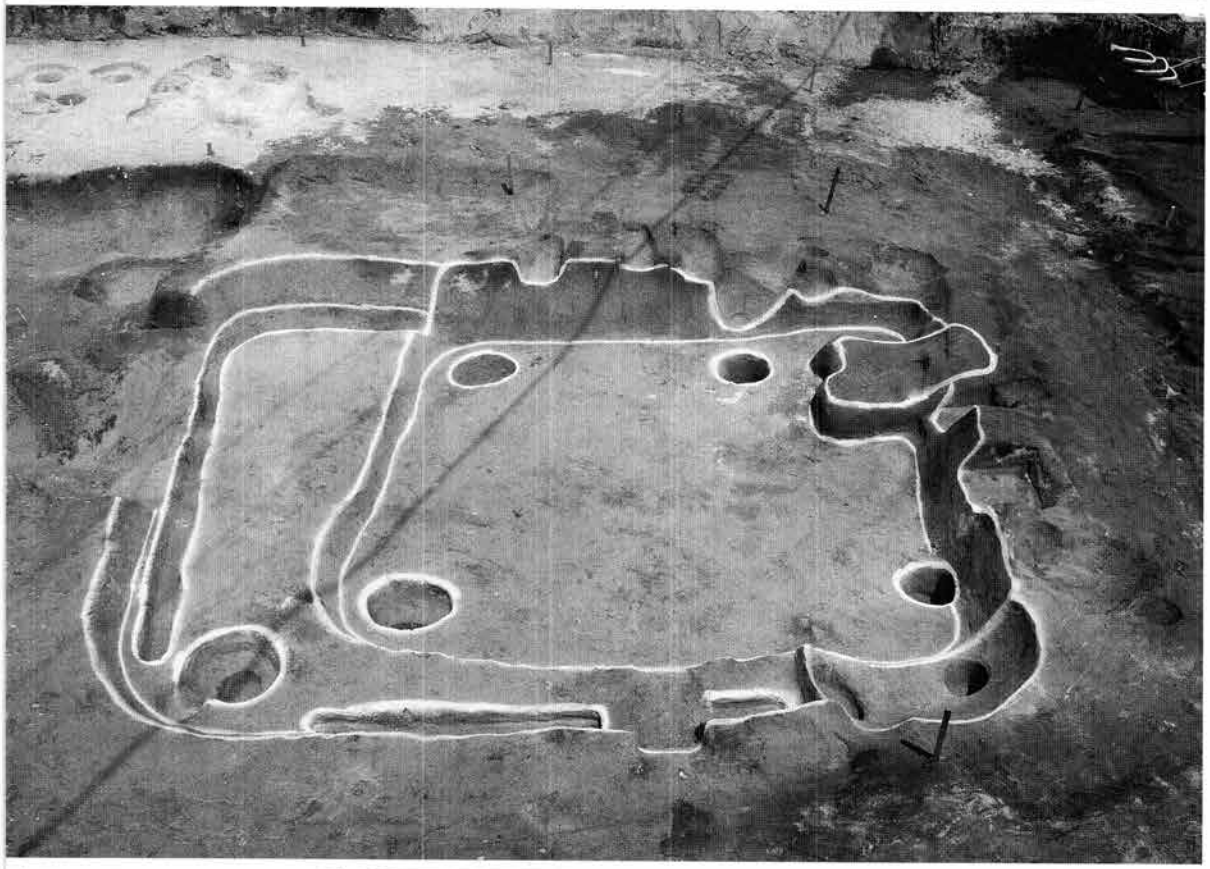


3. SI 440検出状況
北より

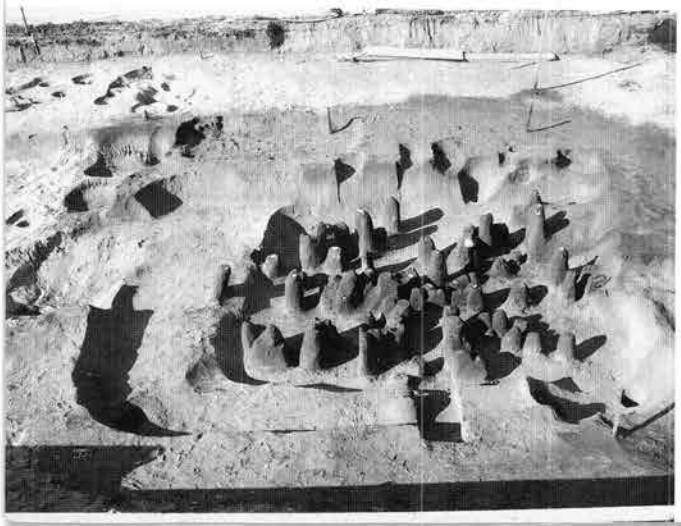
4. SI 440完掘
北東より



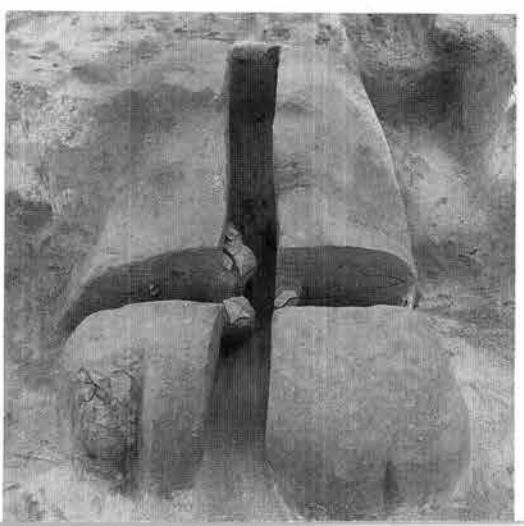
1. SI 850完掘
北西より



2. SI 462・SI 483完掘
南西より



3. SI 462遺物出土状況
南西より

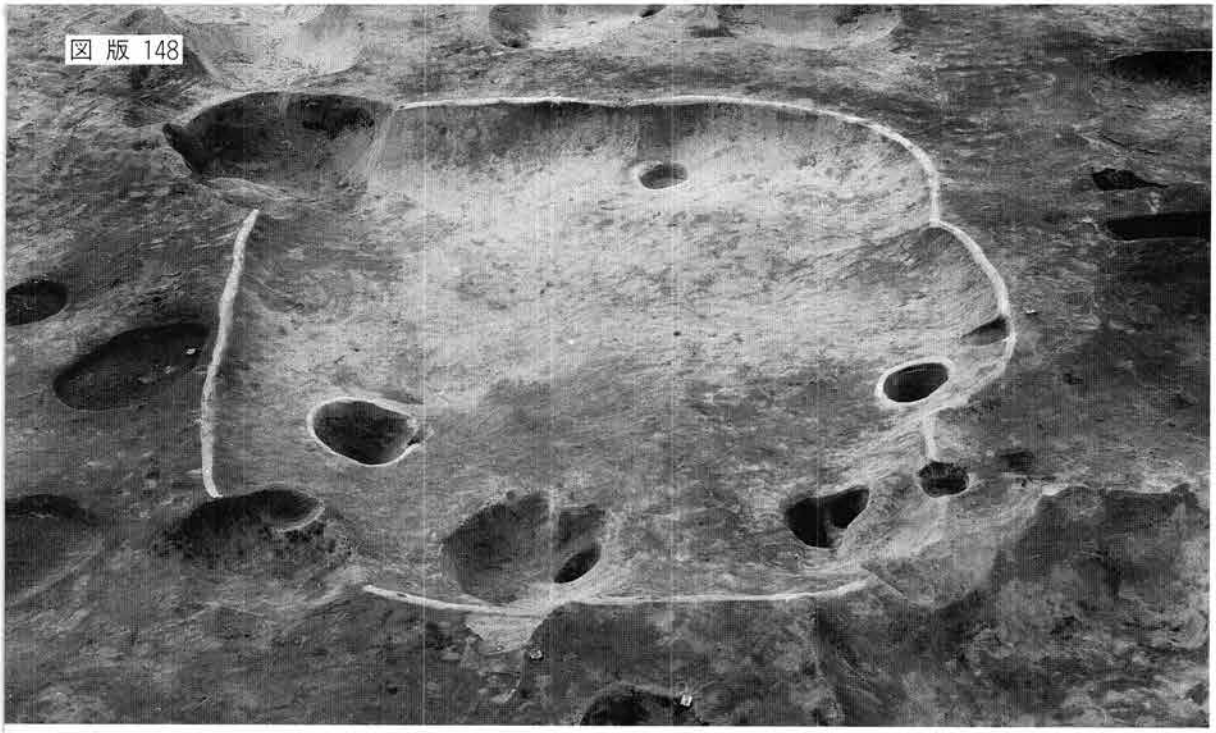


4. SI 462カマド
北西より

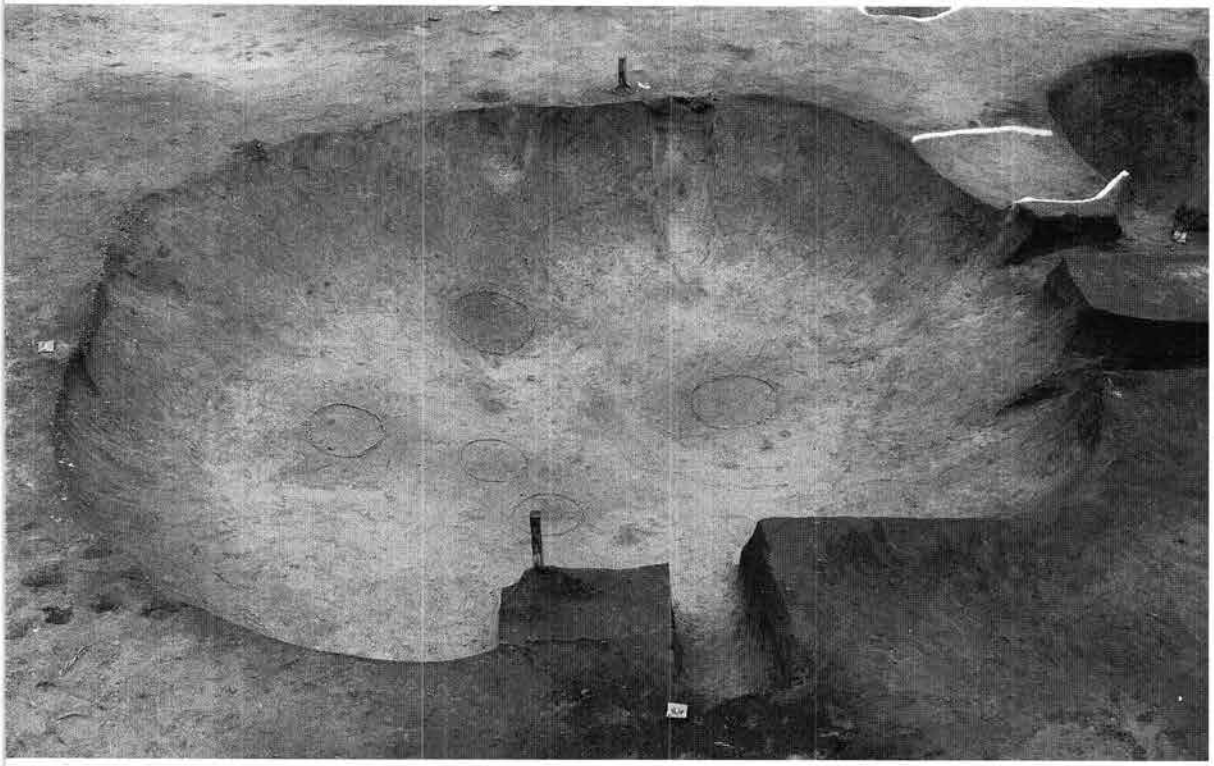
1. SI 17完掘
北西より

2. SI 17遺物出土状況
北西より

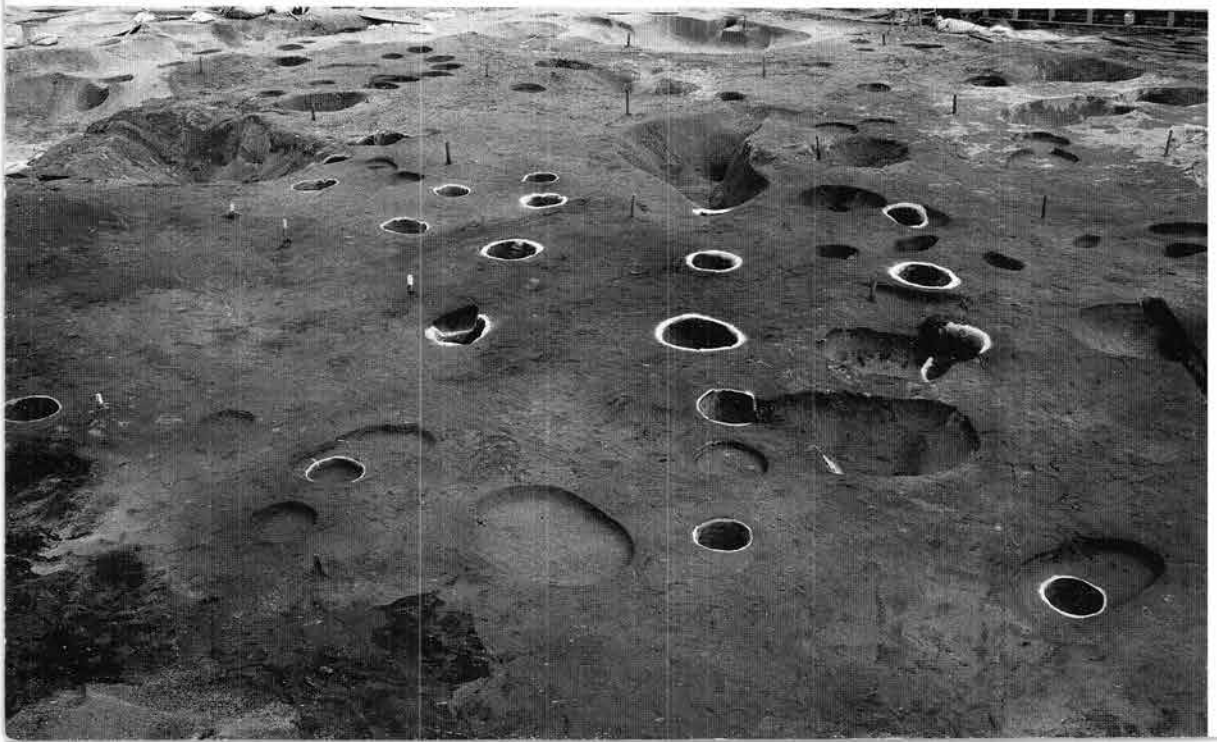
3. SI 17カマド
北西より



1. SI 263完掘
北東より

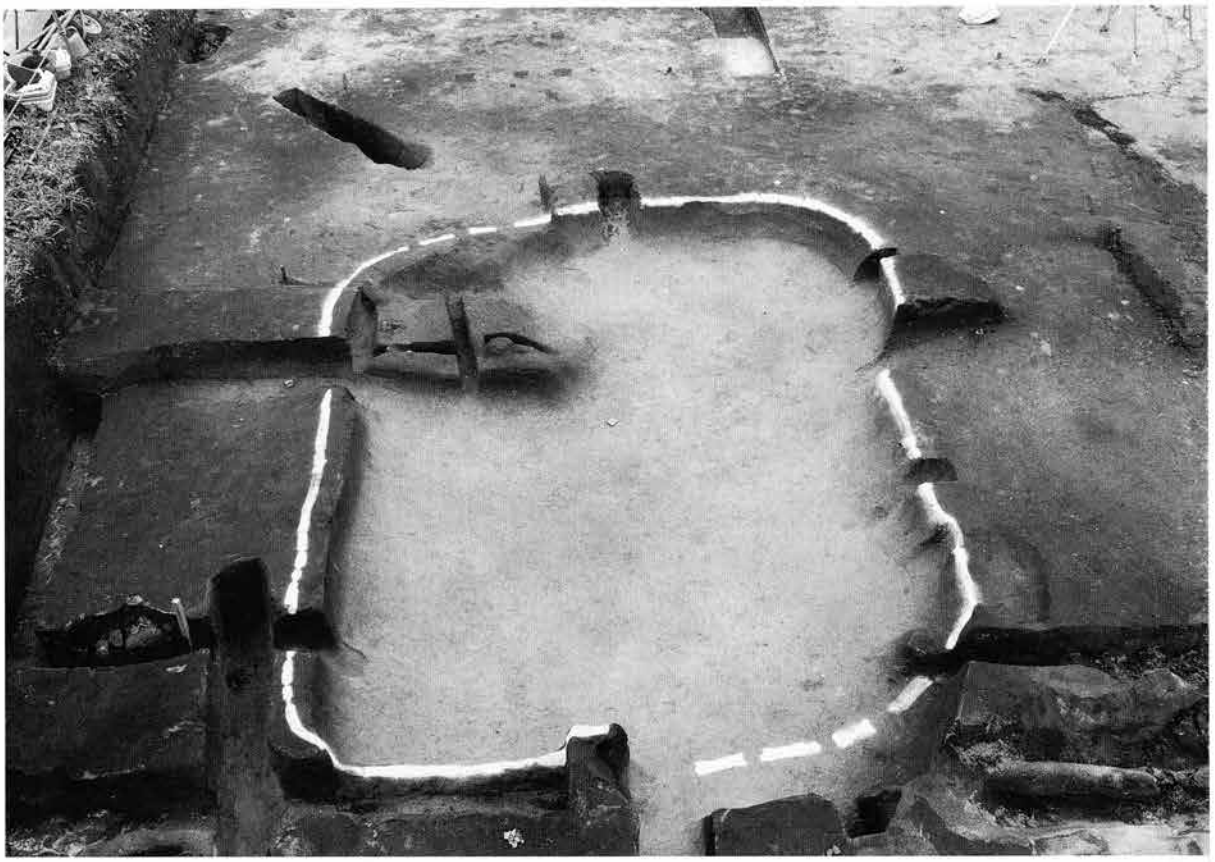


2. SI 98完掘
南西より

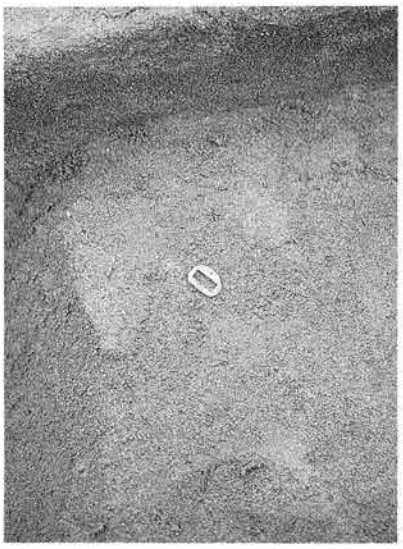


3. SB 252 完掘
北より

1. SI 27・SI 640
北西より



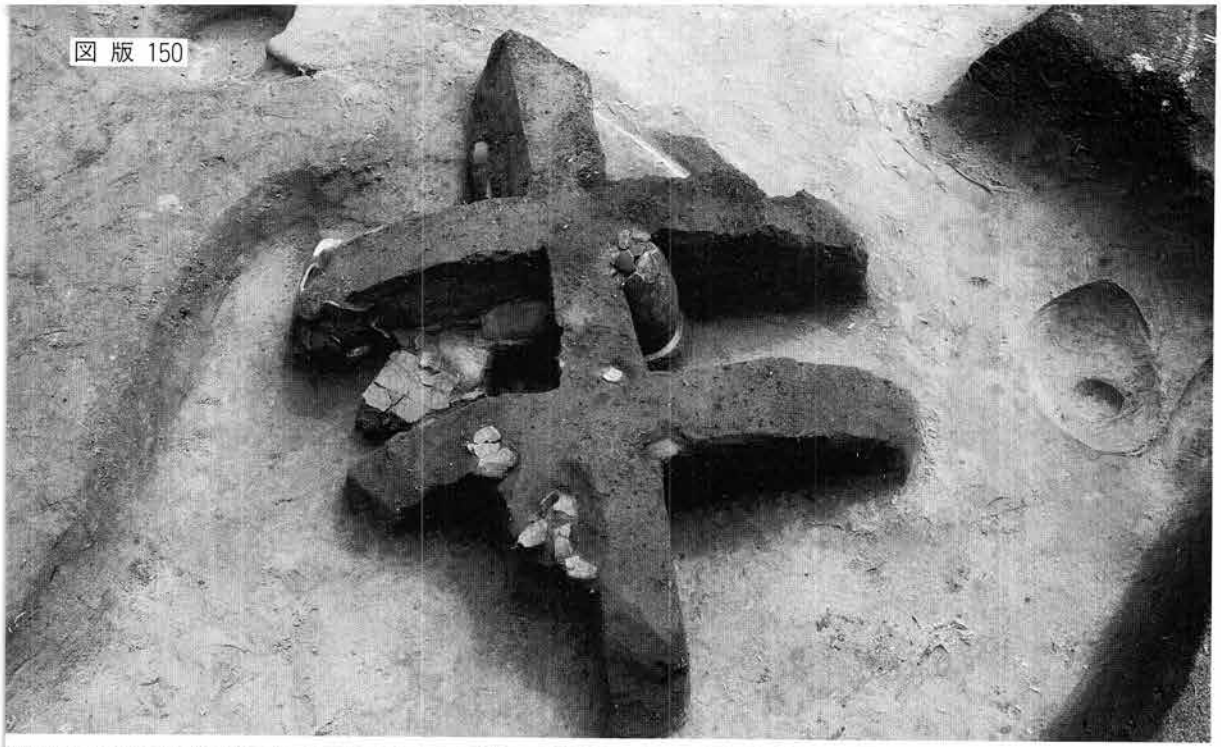
2. SI 500完掘
北西より



3. SI 640帯金具 (70)
出土状況

4. SI 27鉄製品 (46)
出土状況

5. SI 429和同開珎 (76)
出土状況

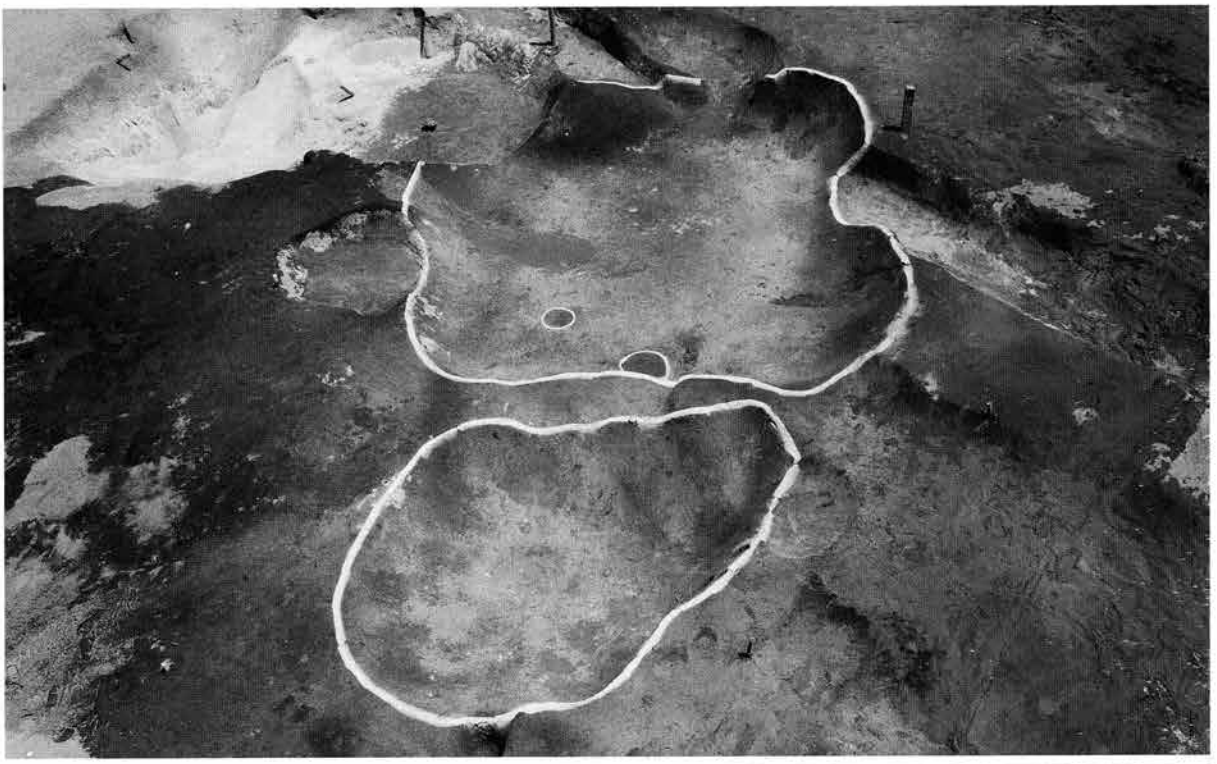


1. SI 20カマド土器
西より

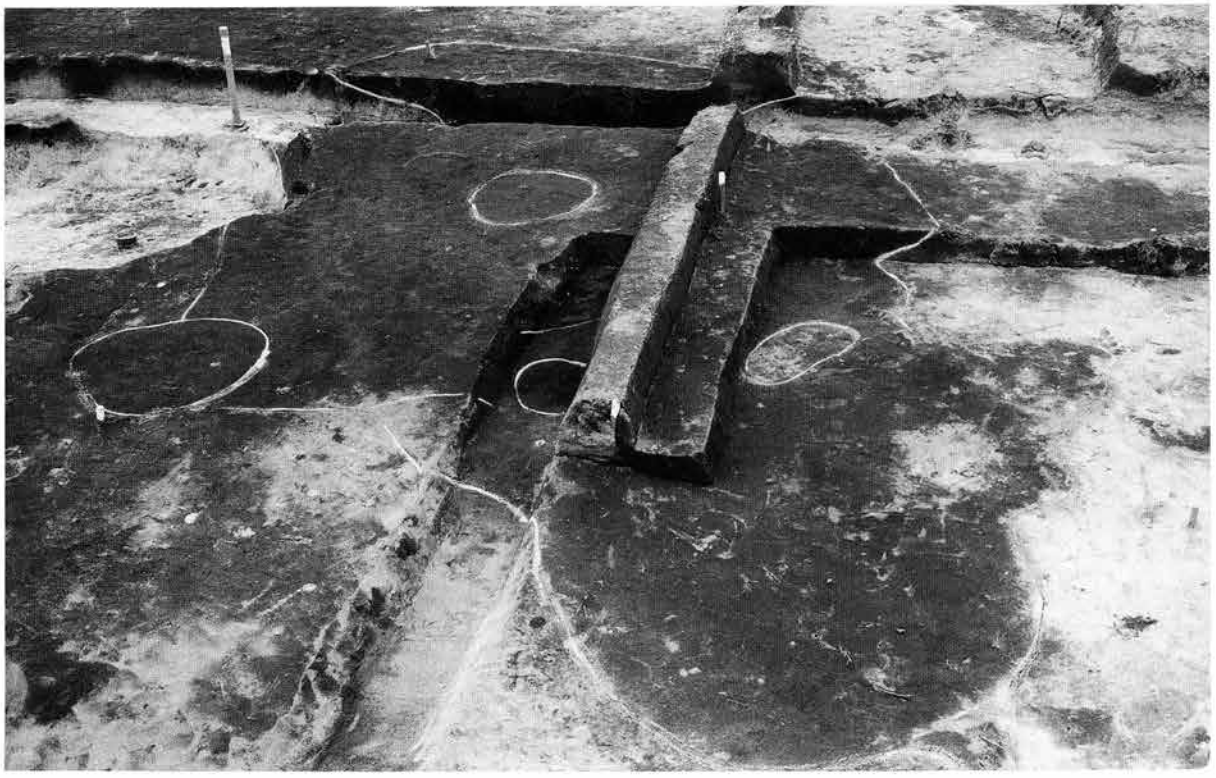
2. SI 20カマド土器
西より

3. SI 20カマド土器
西上方より

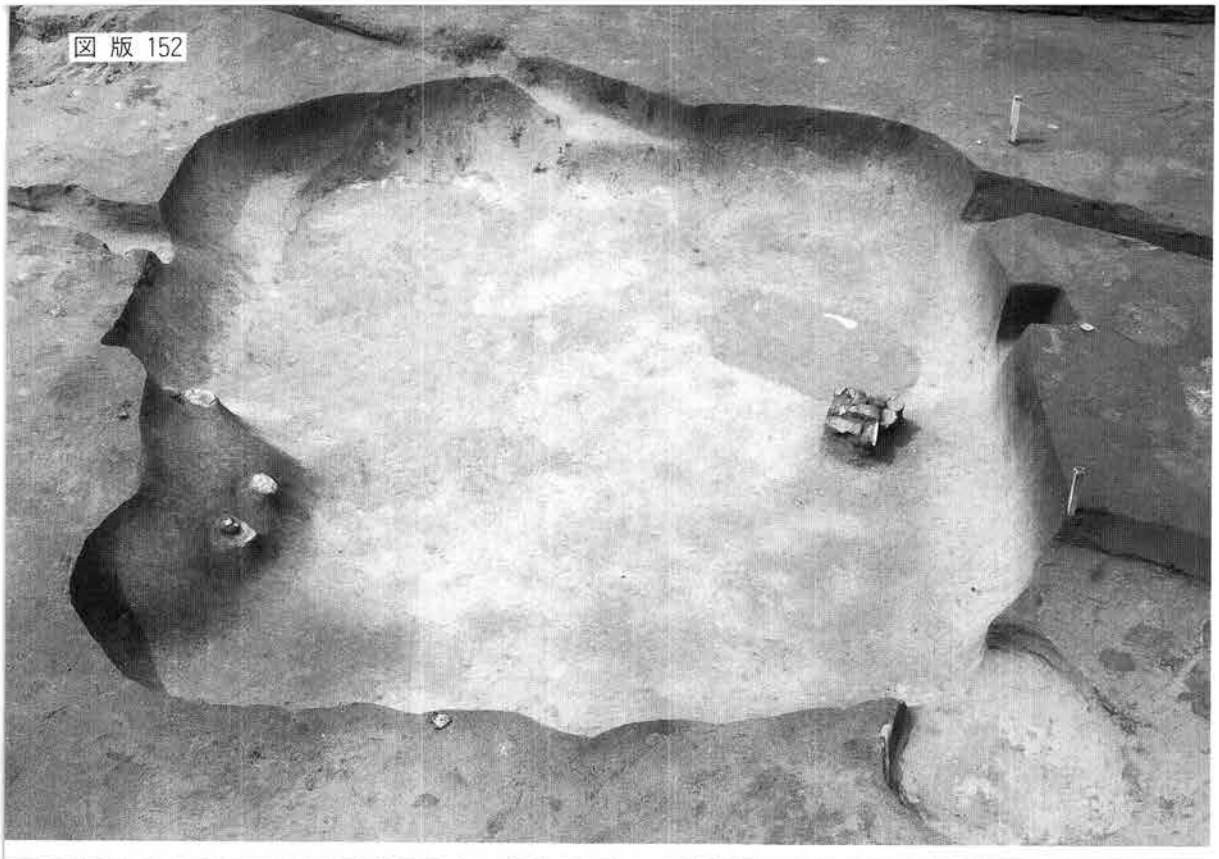
1. SI 20カマド
南北断面，支脚
検出状況
北より



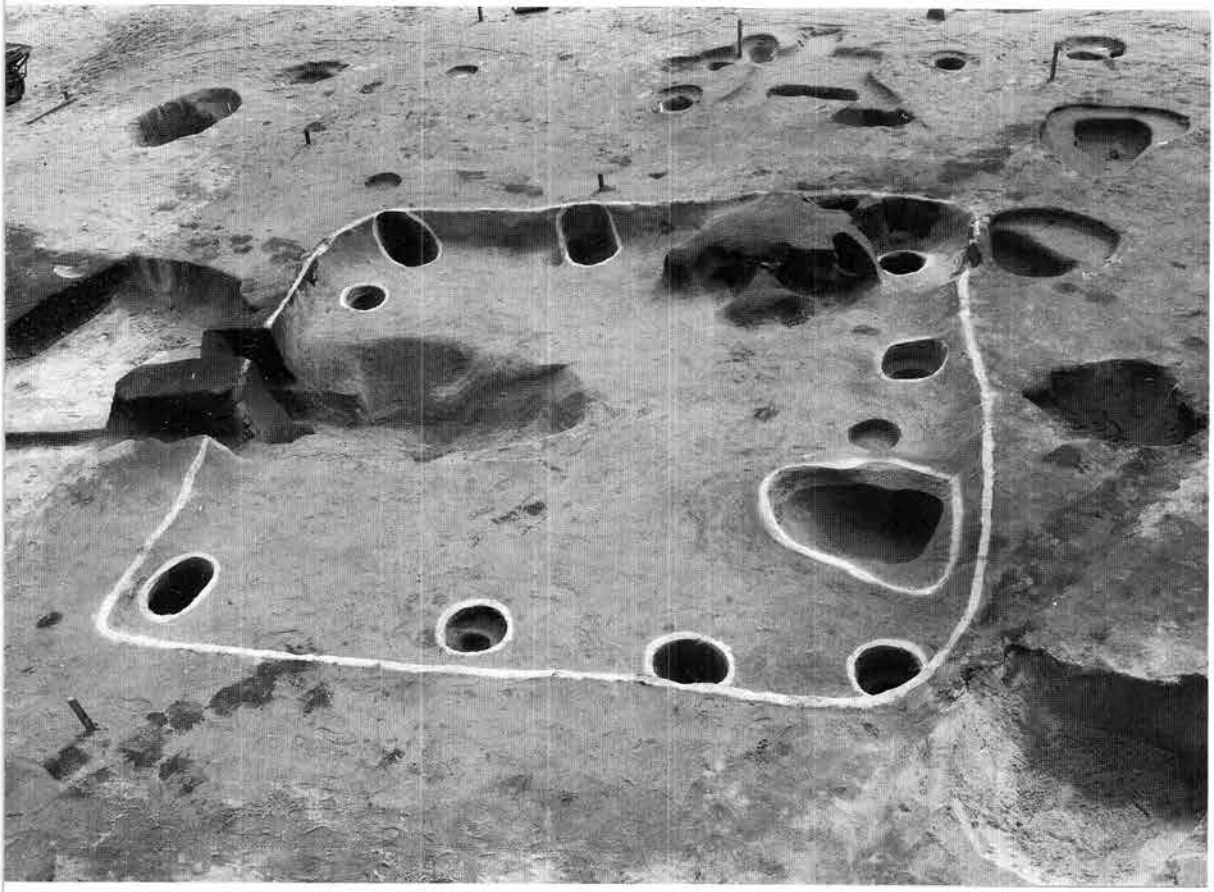
2. SI 18・SK 34完掘
西より



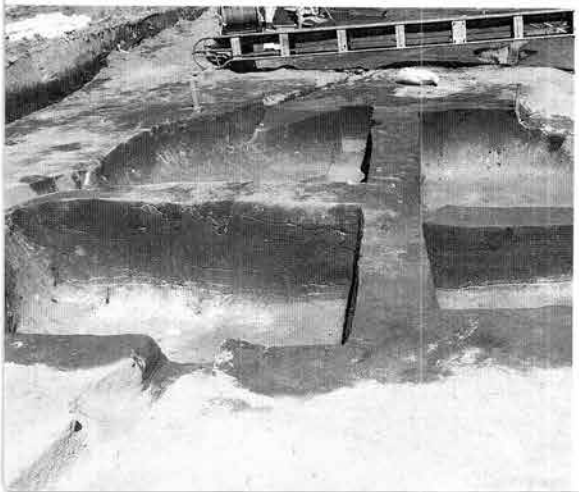
3. SI 18・SK 34検出状況
西より



1. SI 1307
北東より



2. SI 560
西より



3. SI 1307土層断面
北西より

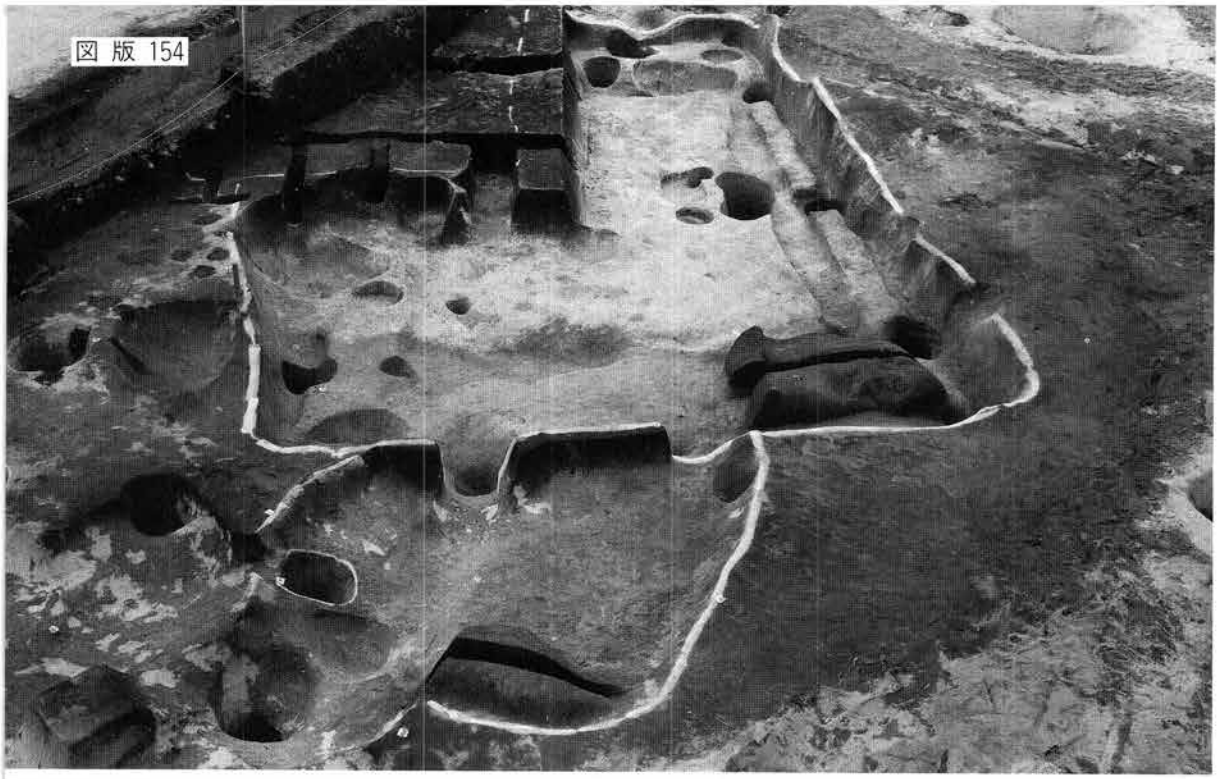
4. SI 560カマド土器出土状況
北西より

1. SI 802・SI 805・SI 806・SI 804・SI 807・SI 560完掘
南東より

2. SI 802・SI 803・SI 804・SI 806土層断面
北西より

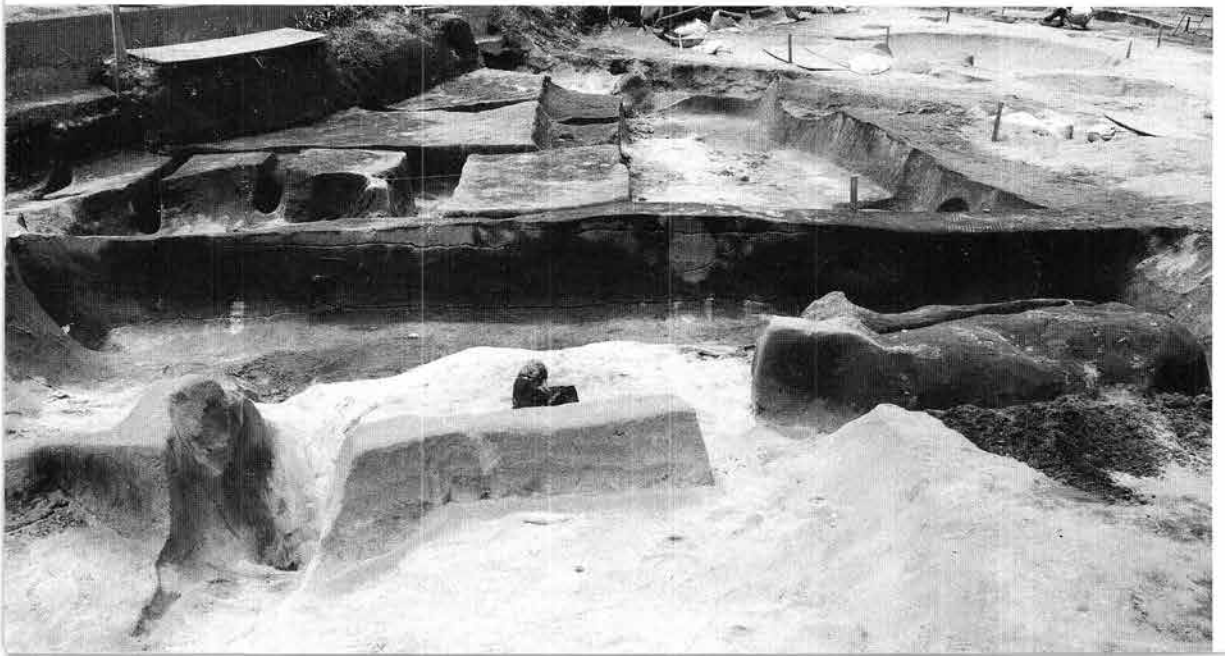
3. SI 33・SI 41・SI 42完掘
北西より

図 版 154



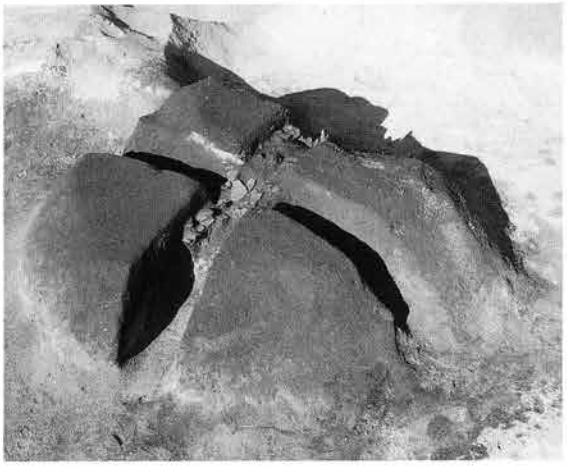
1. SI 72部分完掘
東より

2. SI 72部分完掘
西より

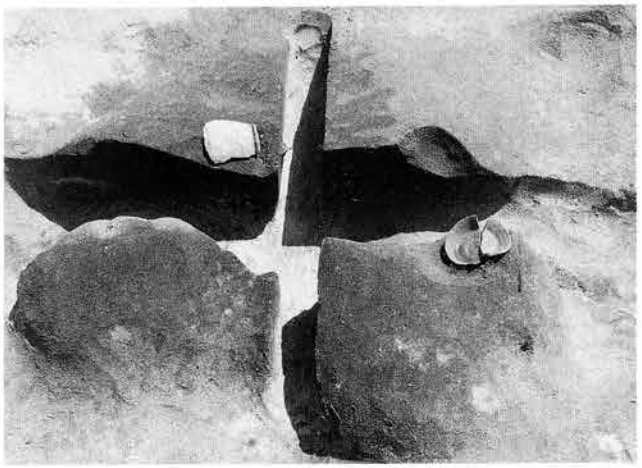


3. SI 72土層断面
東より

1. SI 60・SI 80・SI 81完掘
南より

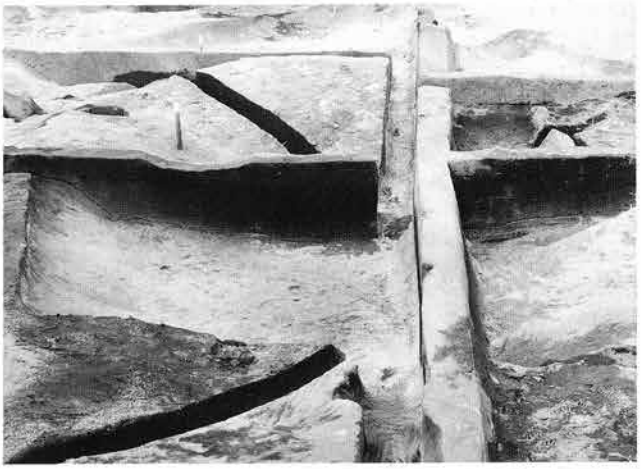


2. SI 33A カマド



3. SI 60カマド

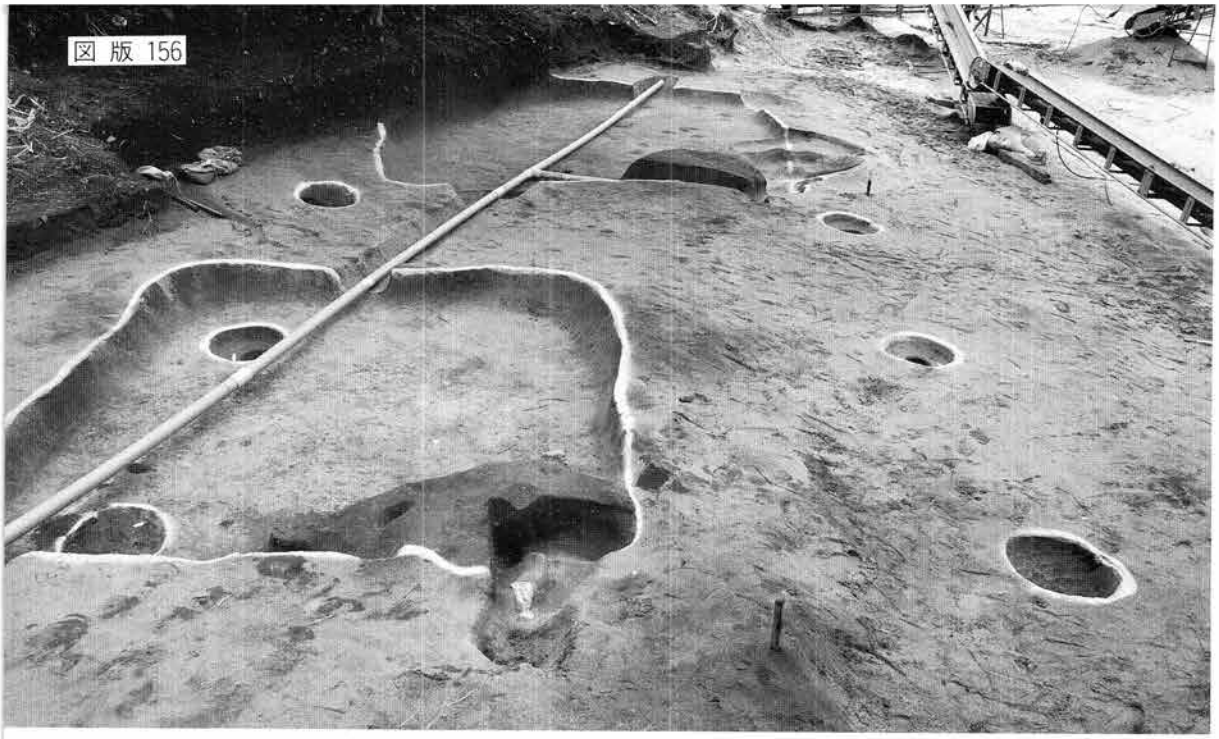
4. SI 82カマド土器(988)
出土状況



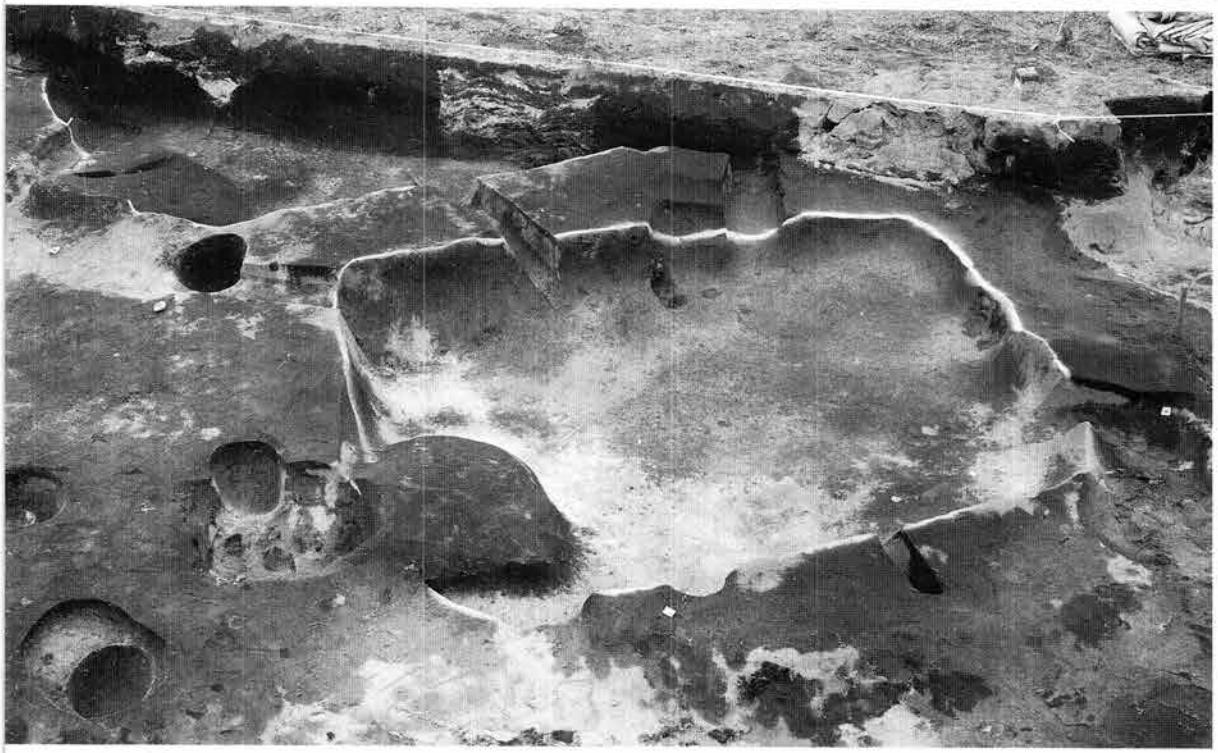
5. SI 41土層断面
南東より

6. SI 1300完掘
西より

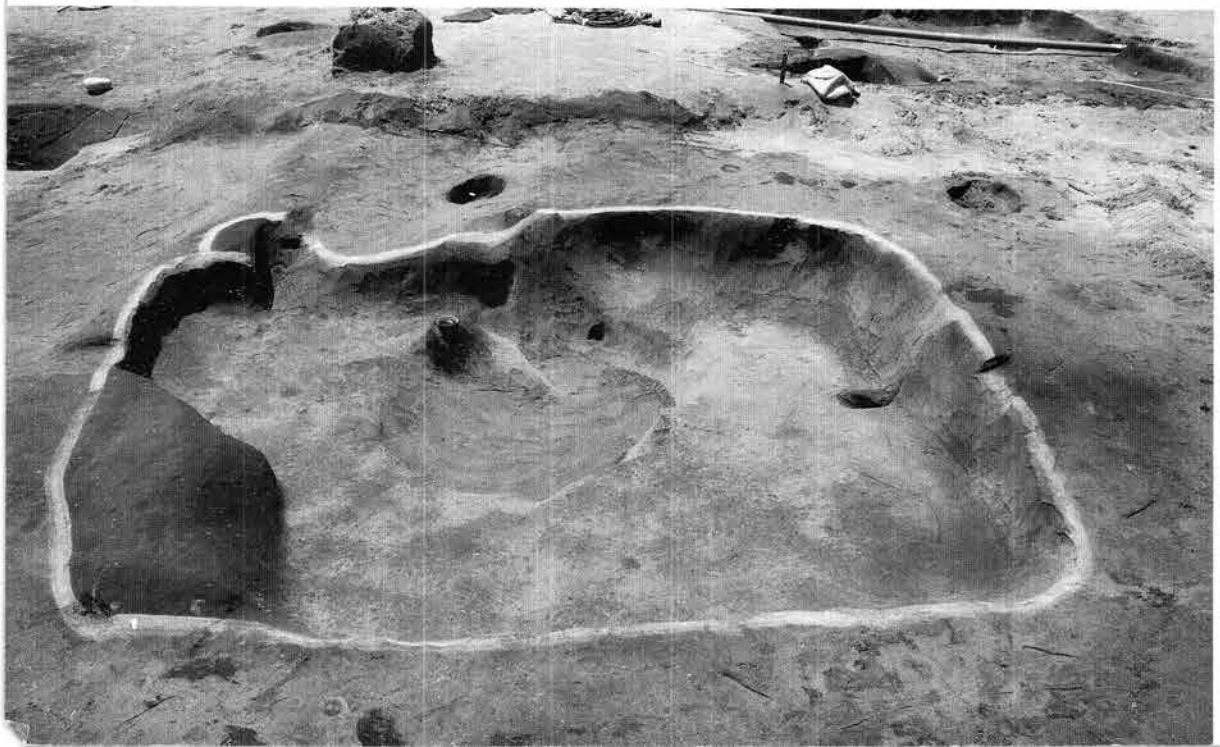
7. SK 1022土層断面



1. SI 1311・SI 1312・SB 1314完掘
南東より



2. SI 1302・SI 1304完掘
東より



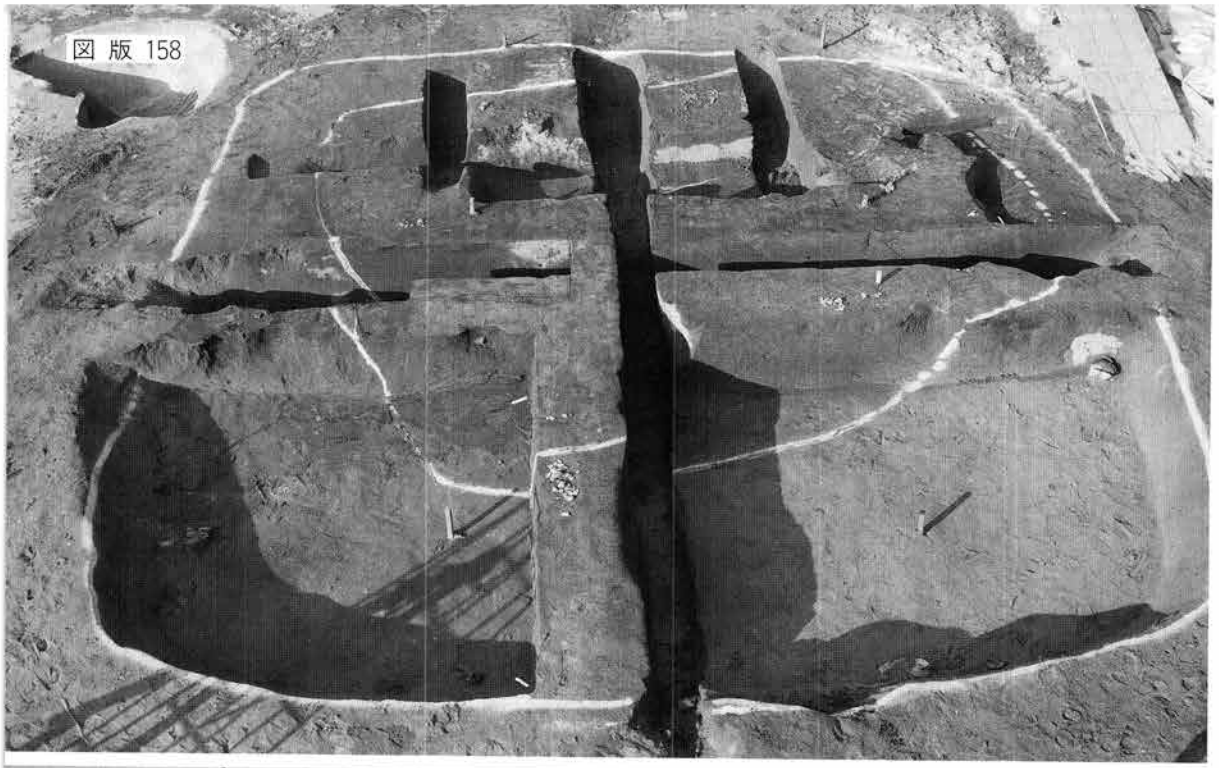
3. SI 1313完掘
北東より

1. SI 70完掘
北東より

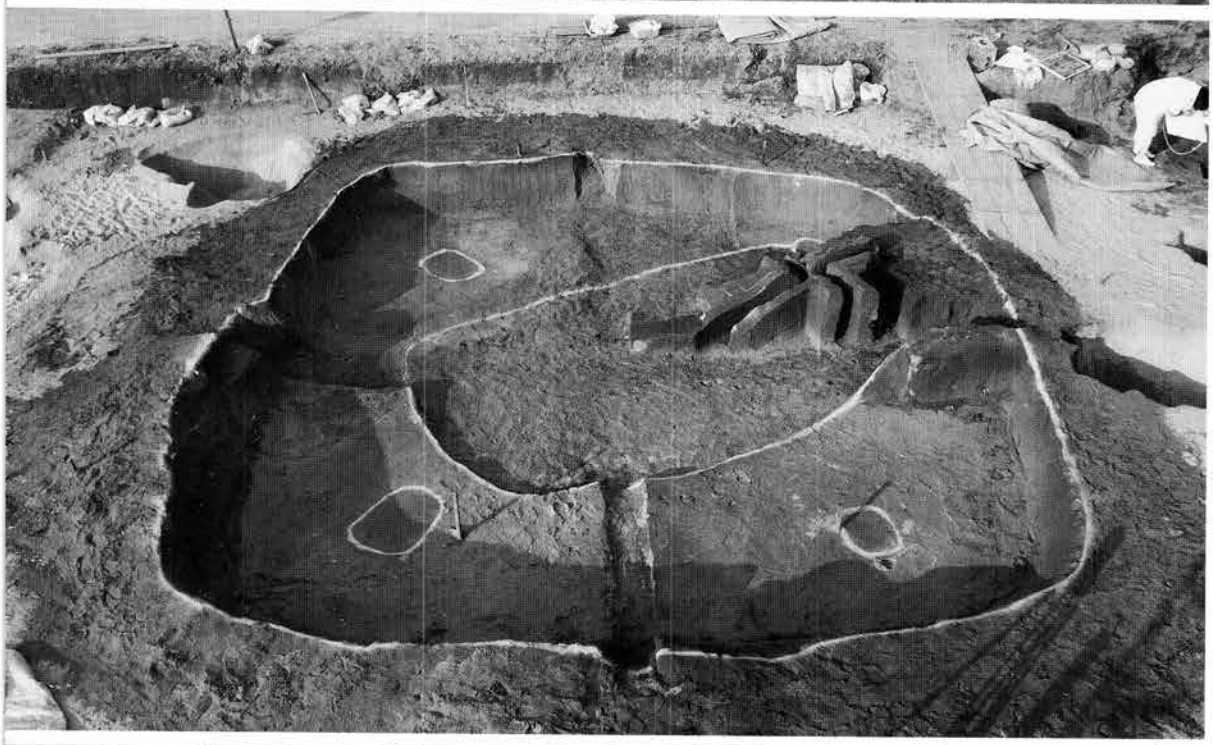
2. SI 71土器出土状況
南東より

3. SI 71土器出土状況
東より

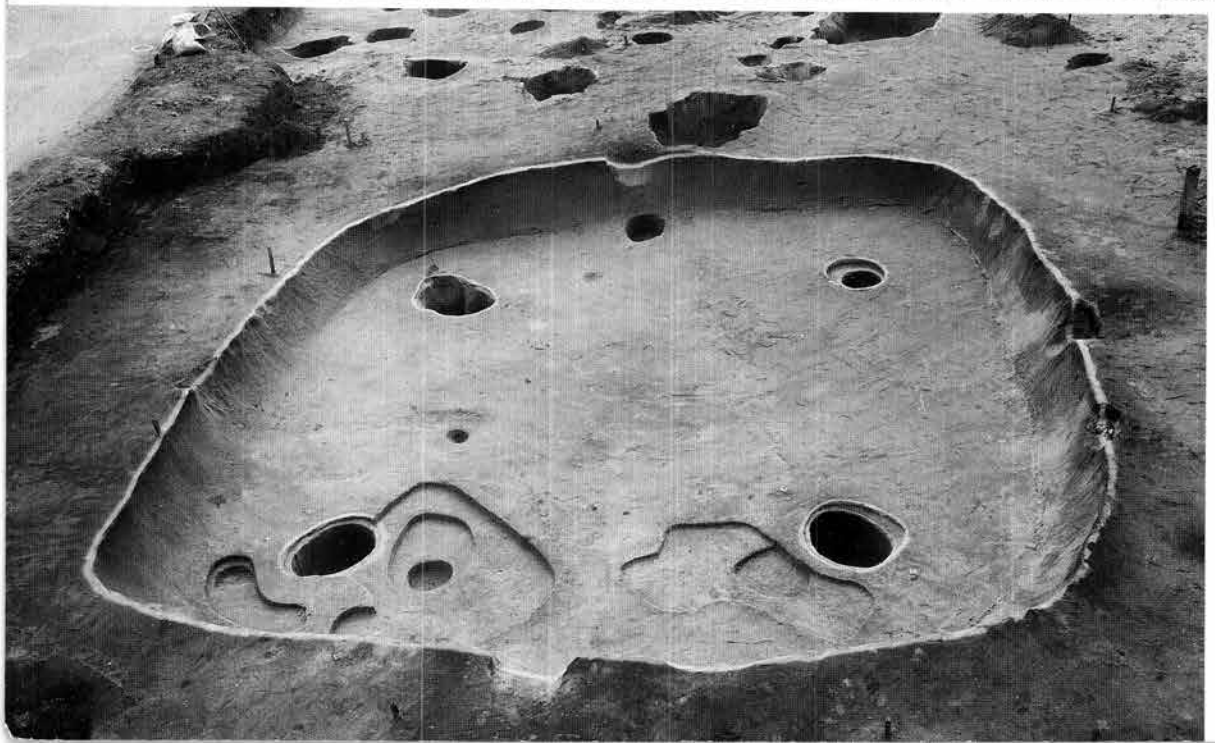
4. SI 71土器出土状況
北西より



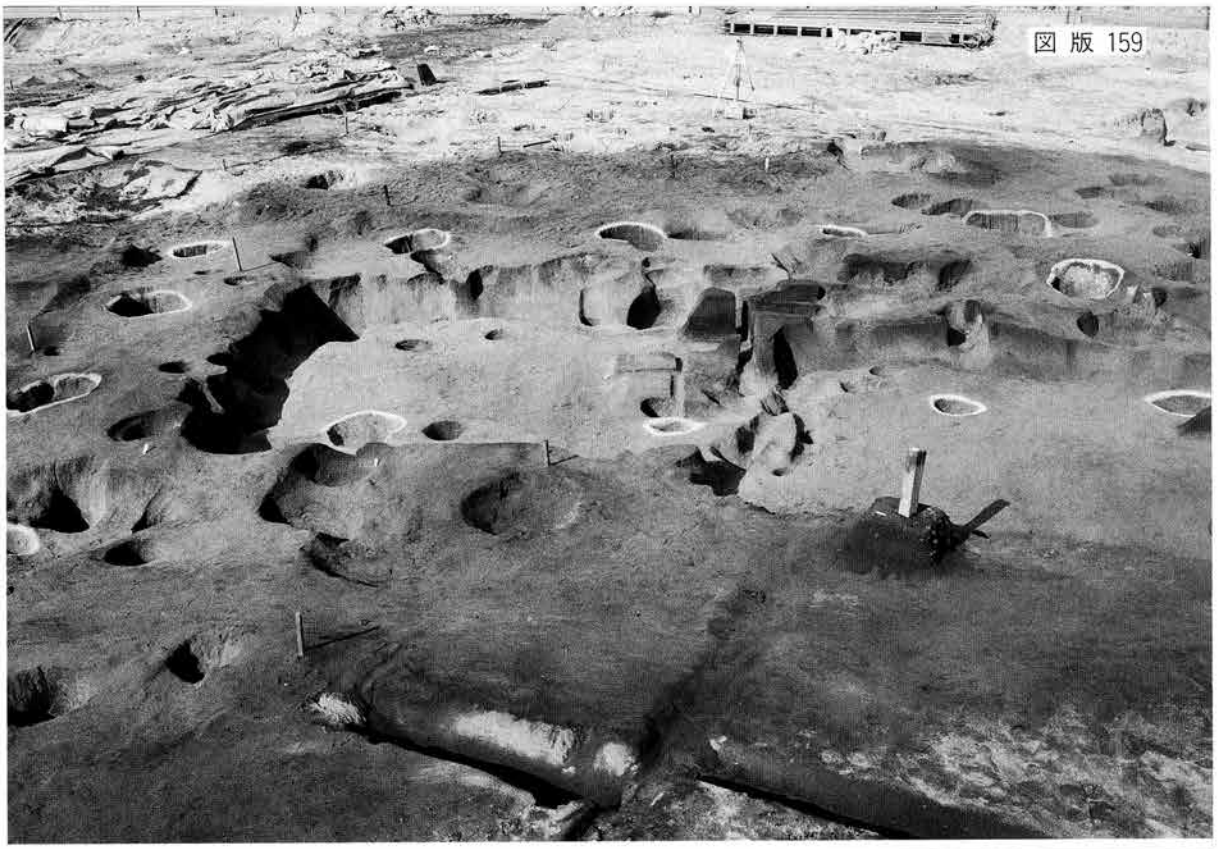
1. SI 502 A・B切り合い
西より



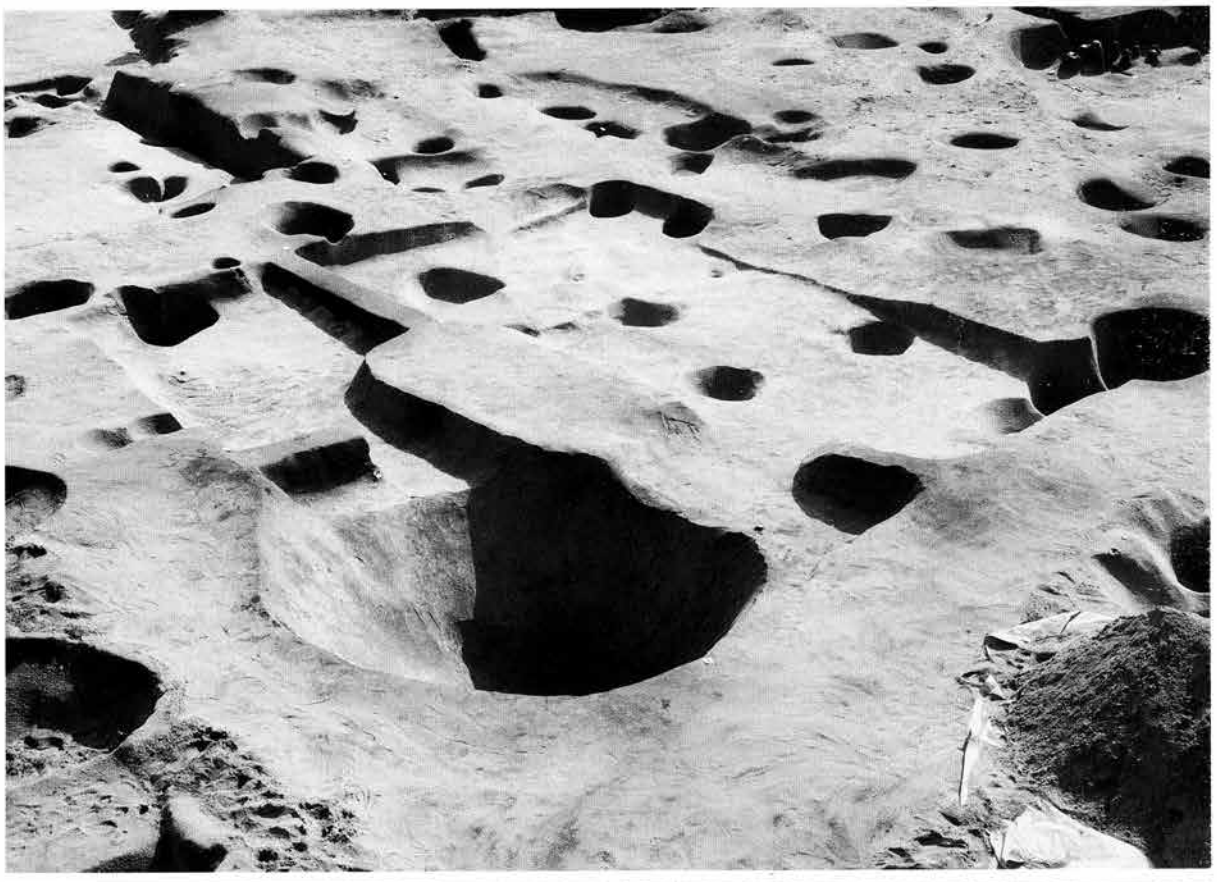
2. SI 502 B完掘
西より



3. SI 502 A完掘
北西より



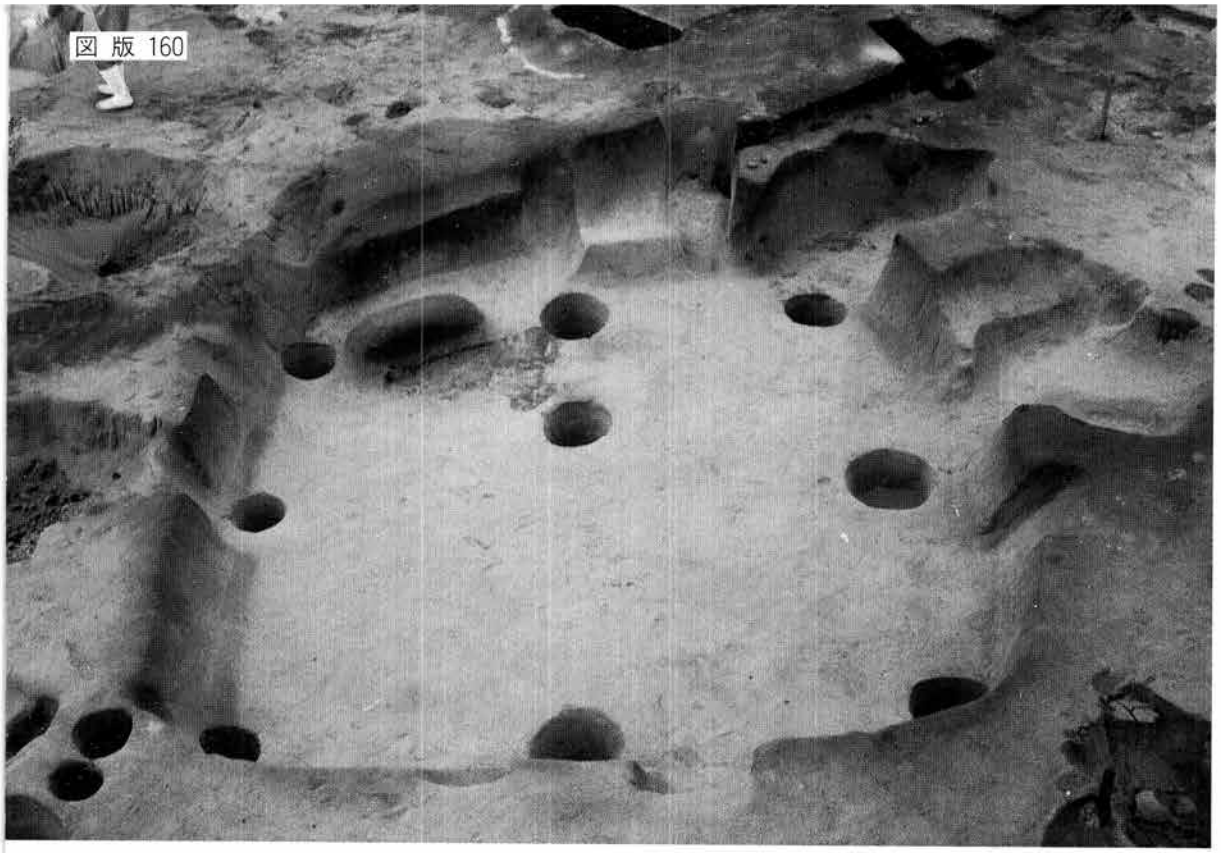
1. SI 752完掘
南西より



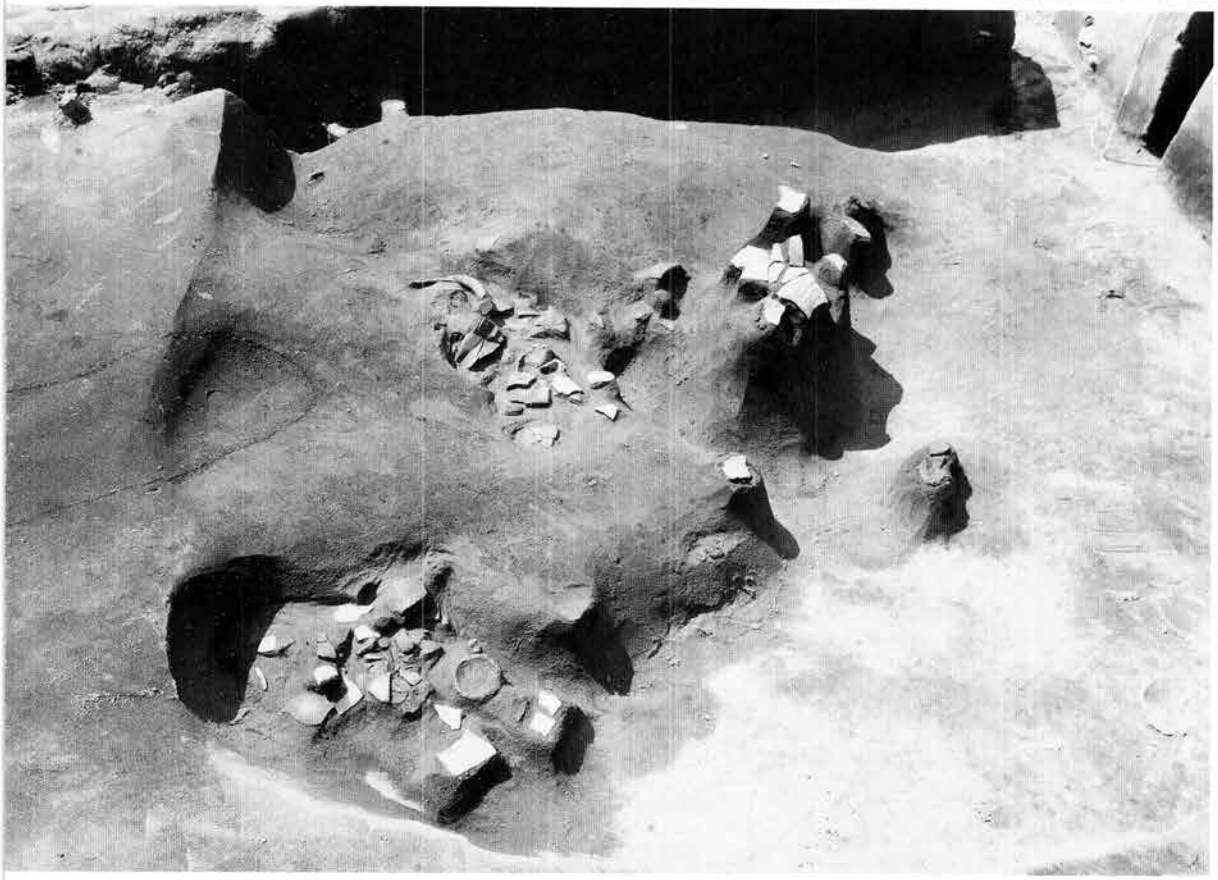
2. SK1022・SX795完掘
北より

3. SI 263土器出土状況

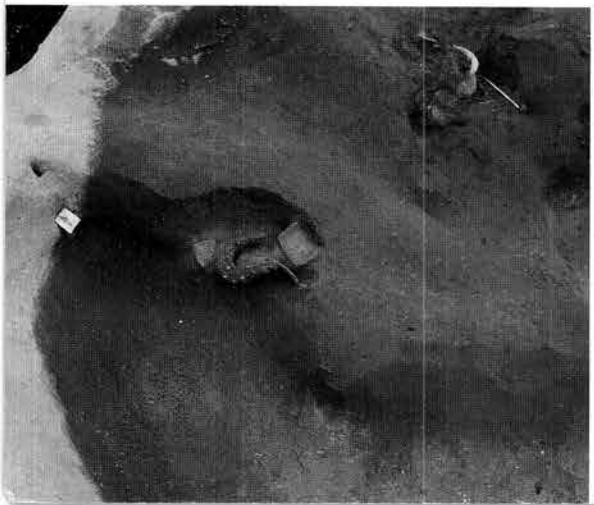
4. SI 98土層断面
南西より



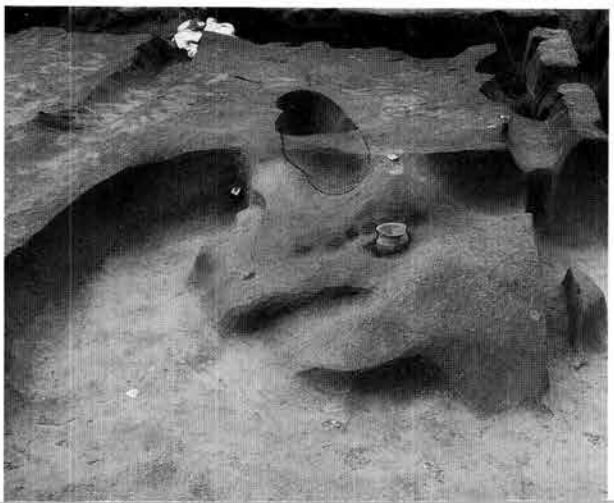
1. SI 458完掘
西より



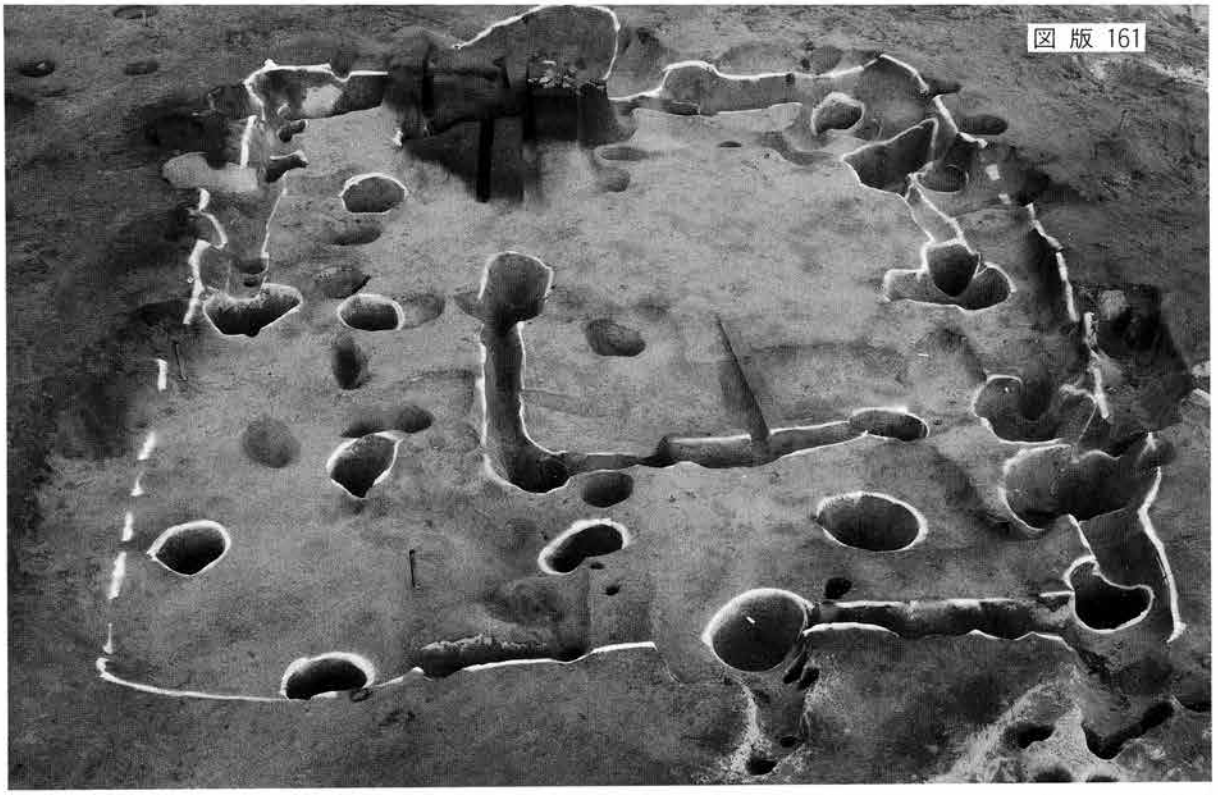
2. SI 741カマド周辺
土器出土状況
北東より



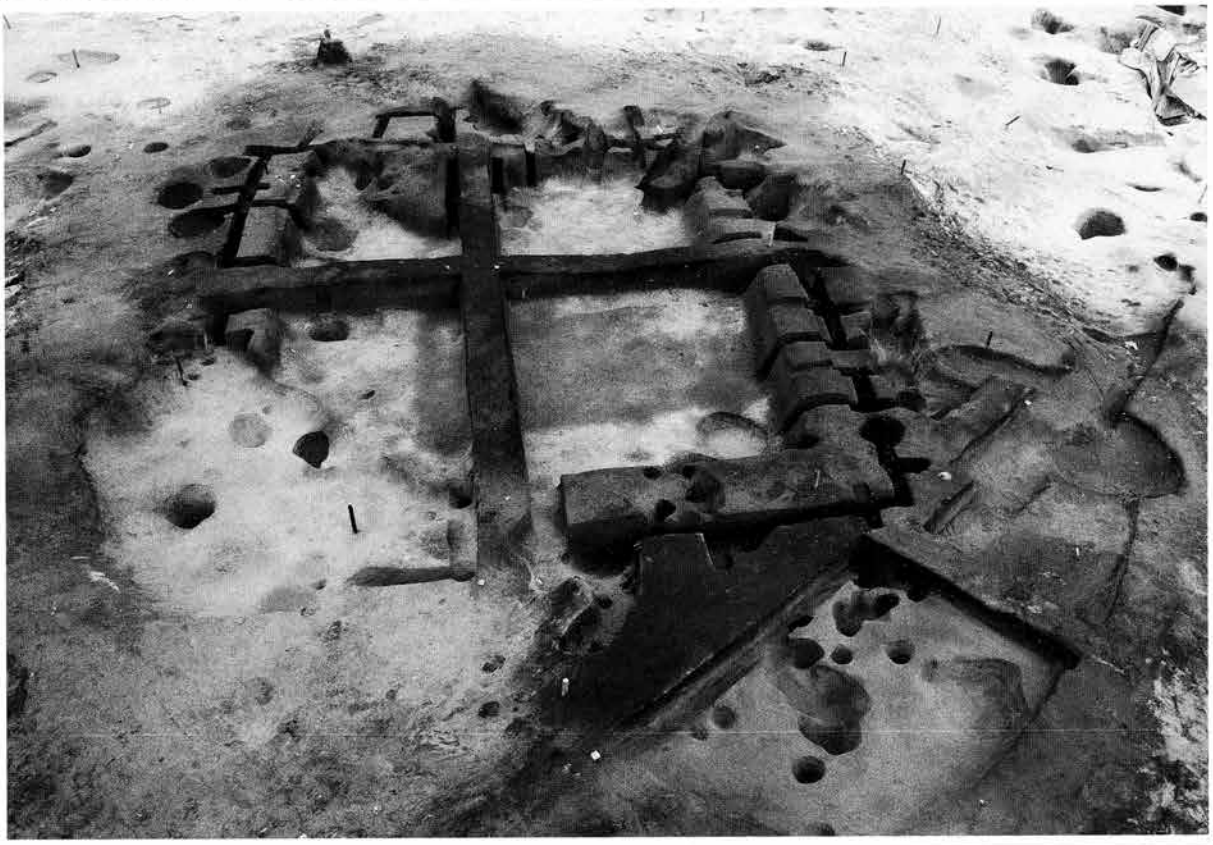
3. SI 741カマド付近
鋤鍬先出土状況
北東より



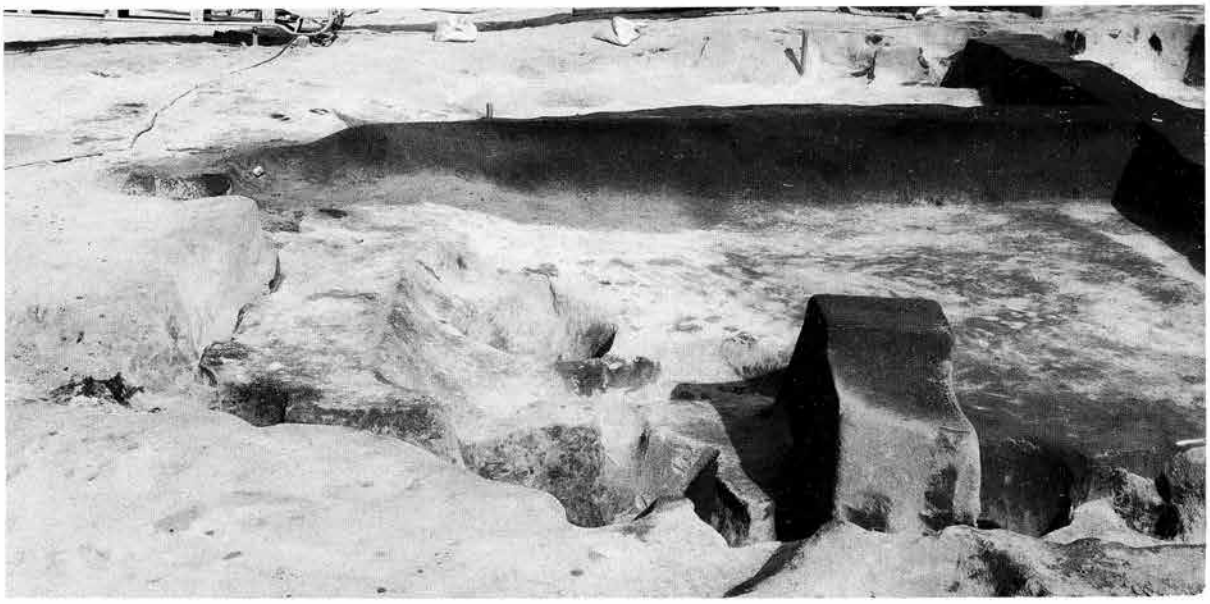
4. SI 741カマド土器(133)
出土状況
北西より



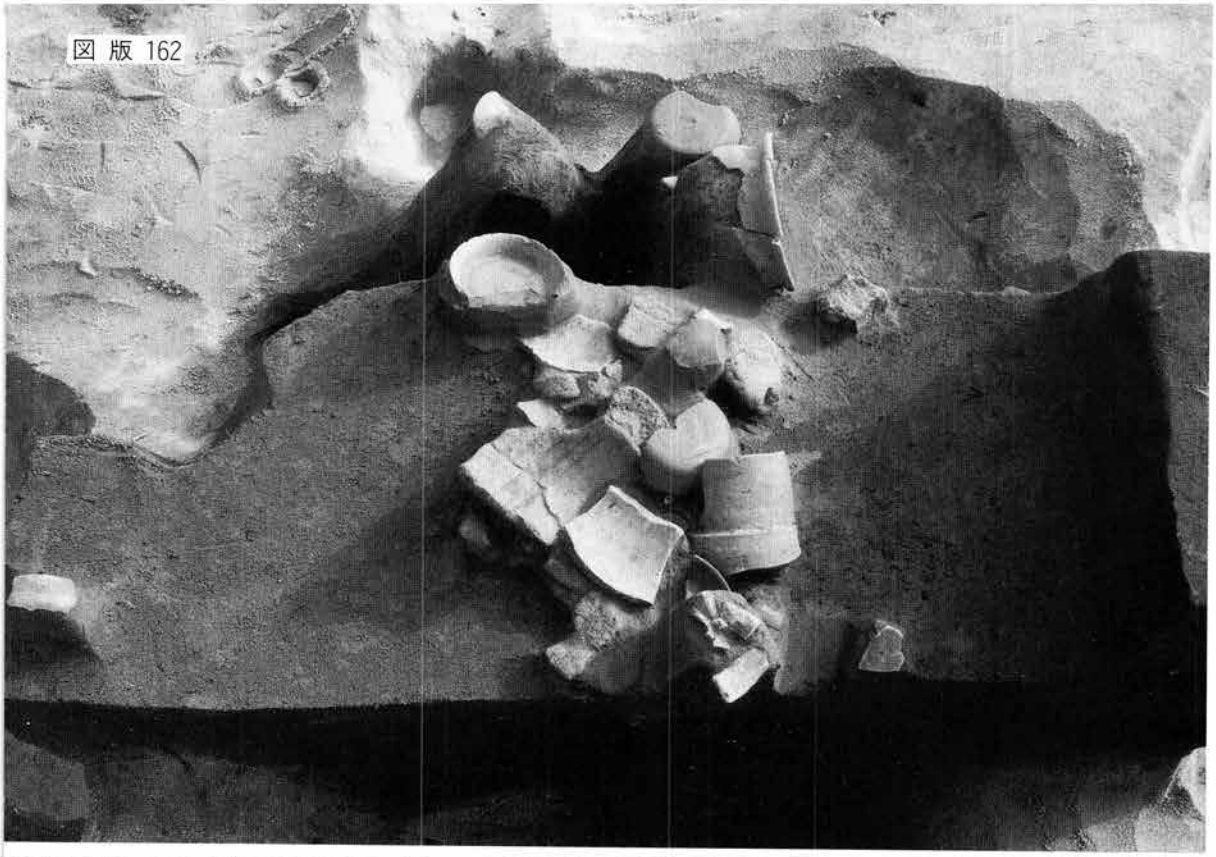
1. SI 1000完掘
西より



2. SI 1000土層断面・
内周堤
西より

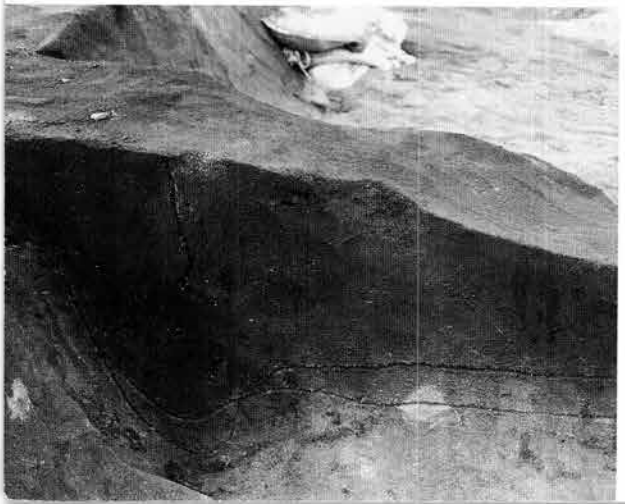


3. SI 1000・SI 1010
土層断面
南より



1. SI 1000カマド付近
周堤内土器出土状況
南より

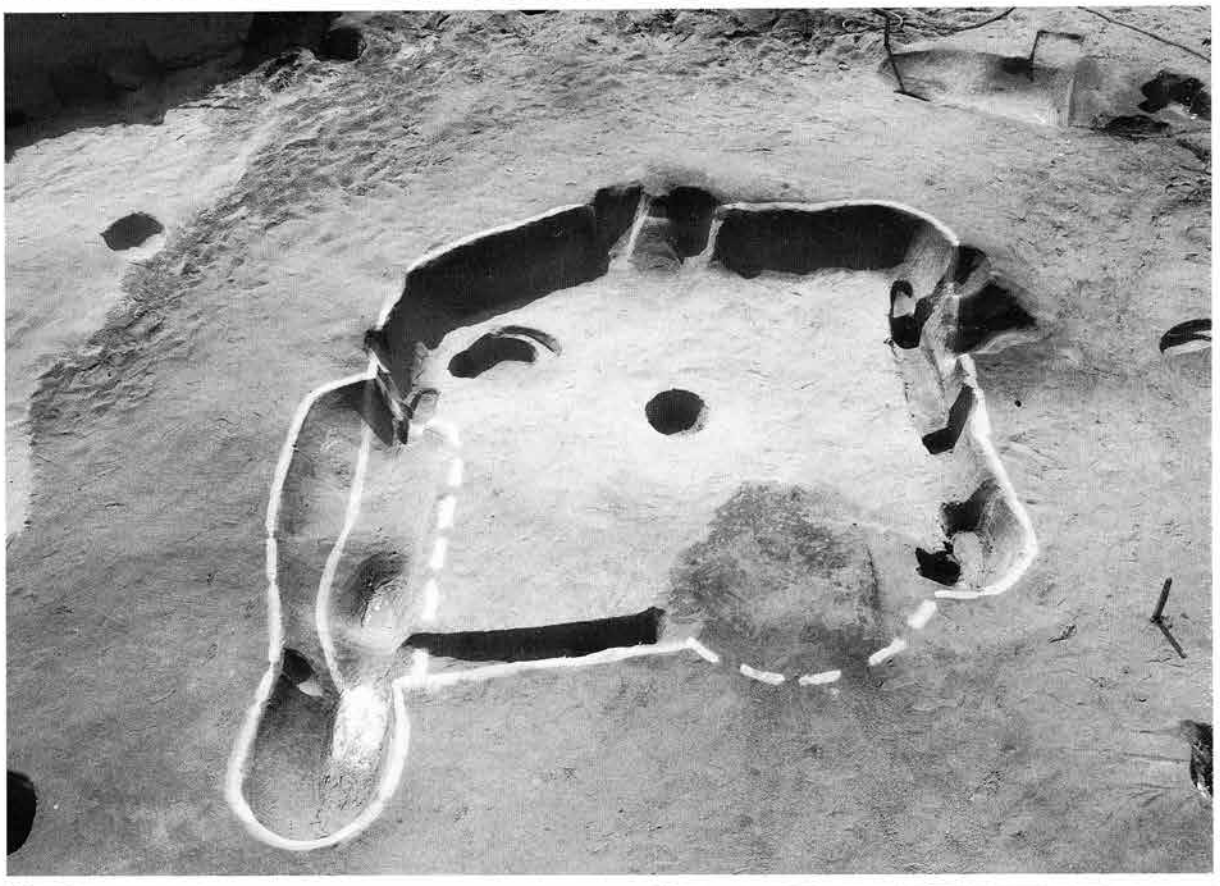
2. SI 600・SI 610・
SI 630完掘
北より



3. SI 610周溝断面

4. SI 610カマド土器
出土状況

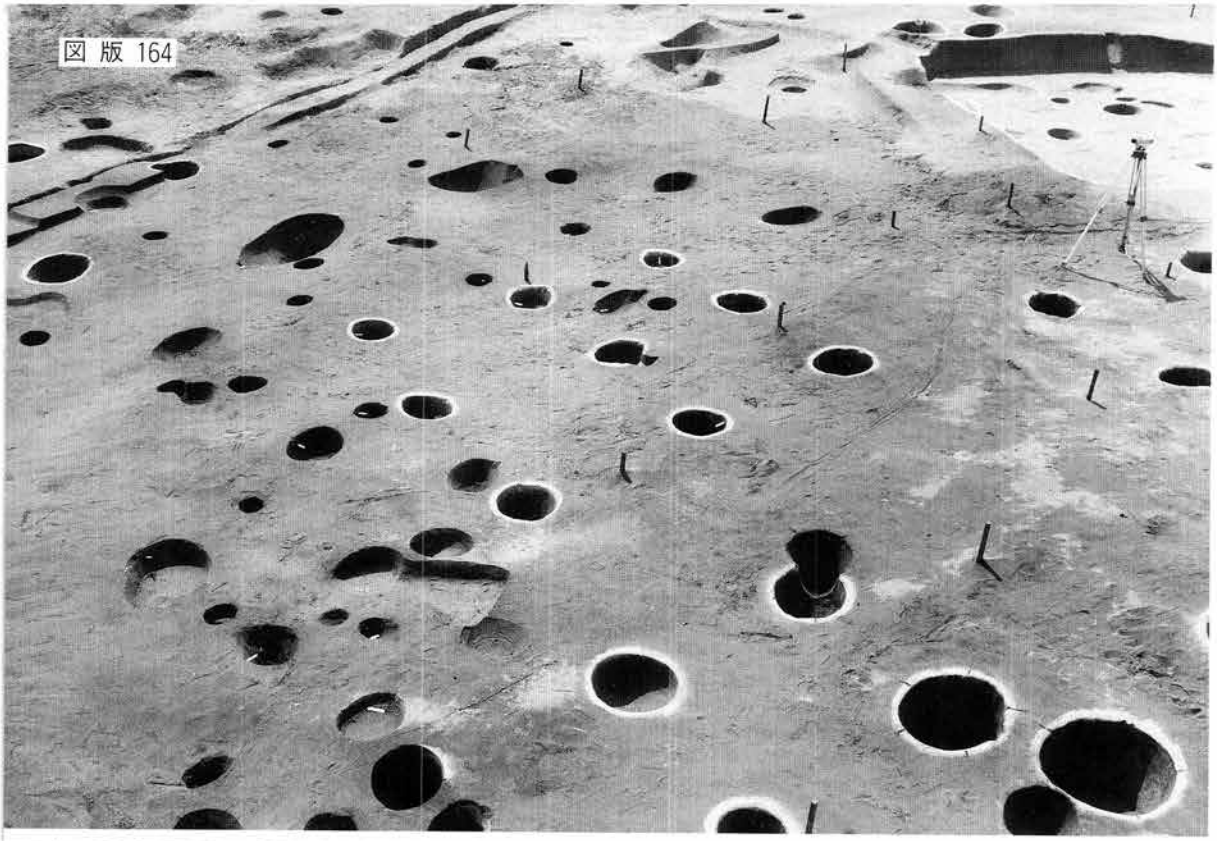
1. SI 1315完掘
南東より



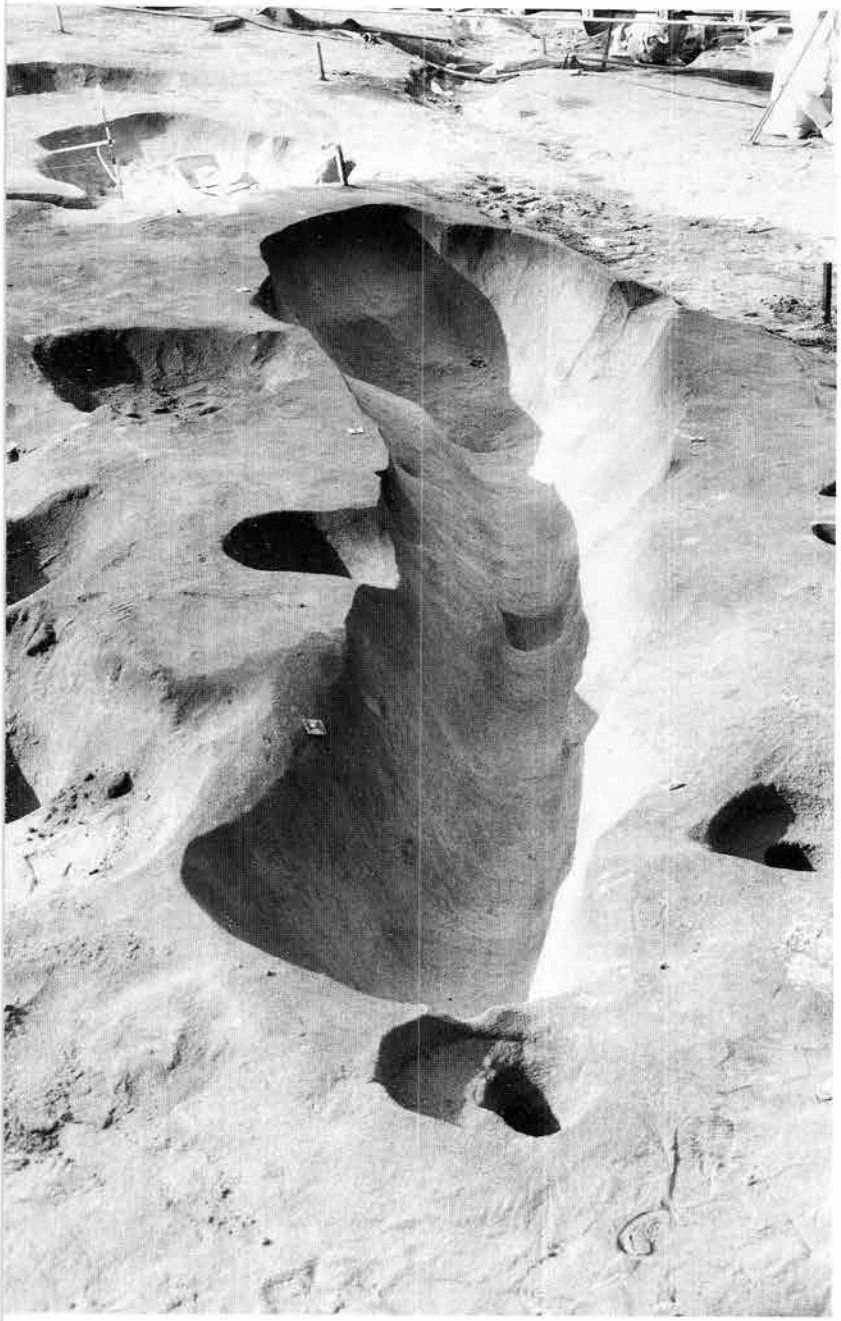
2. SI 1320完掘
東より

3. SI 280カマド土器
(407)出土状況

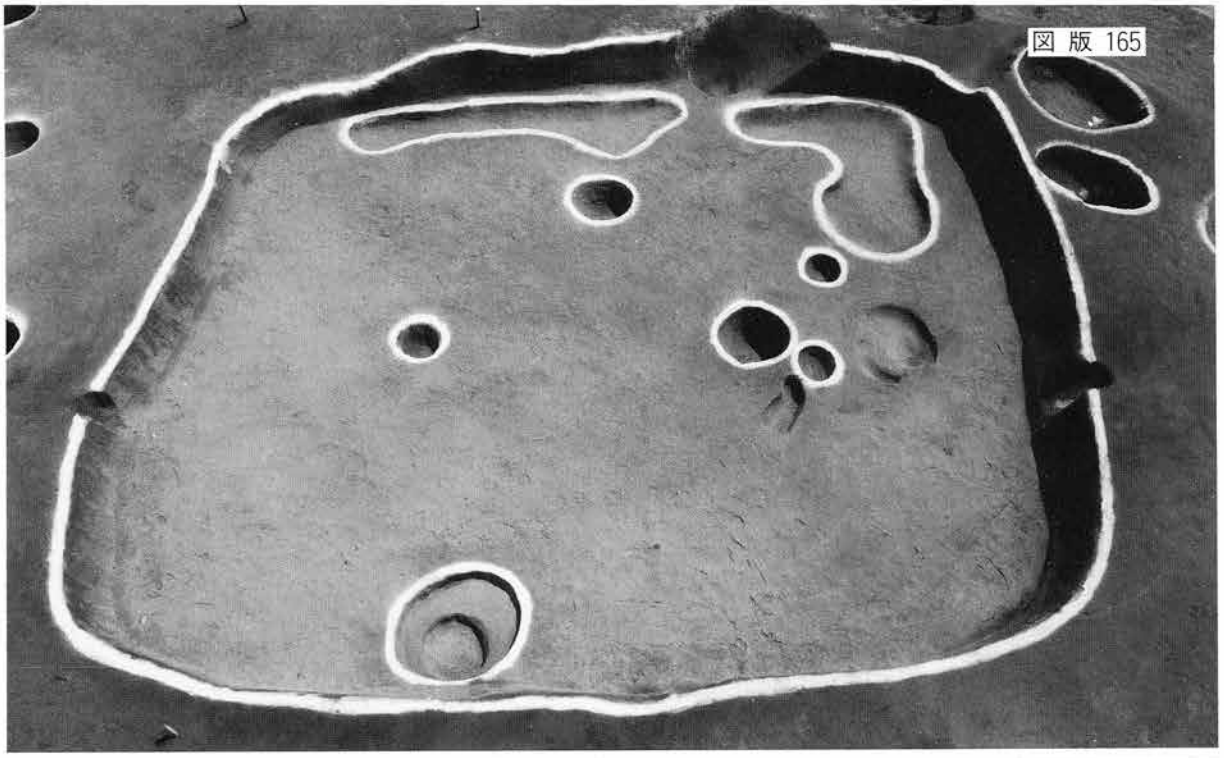
4. SK 113土層断面
南東より



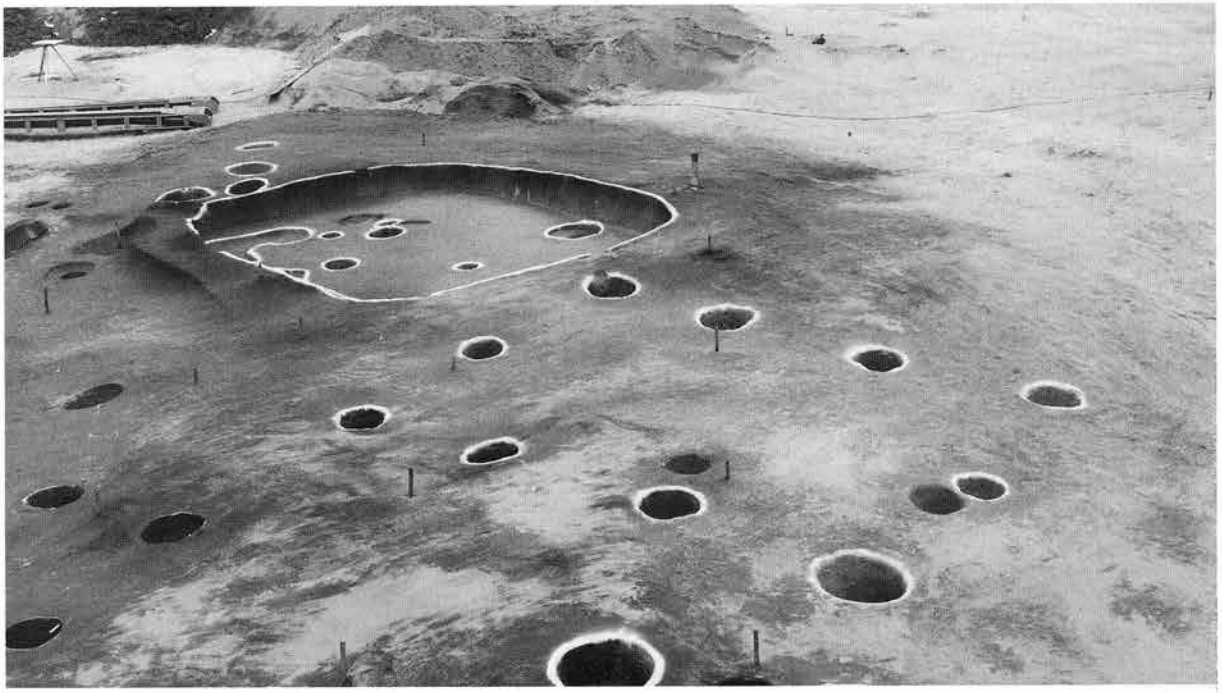
1. SB1370・SB1450完掘
東より



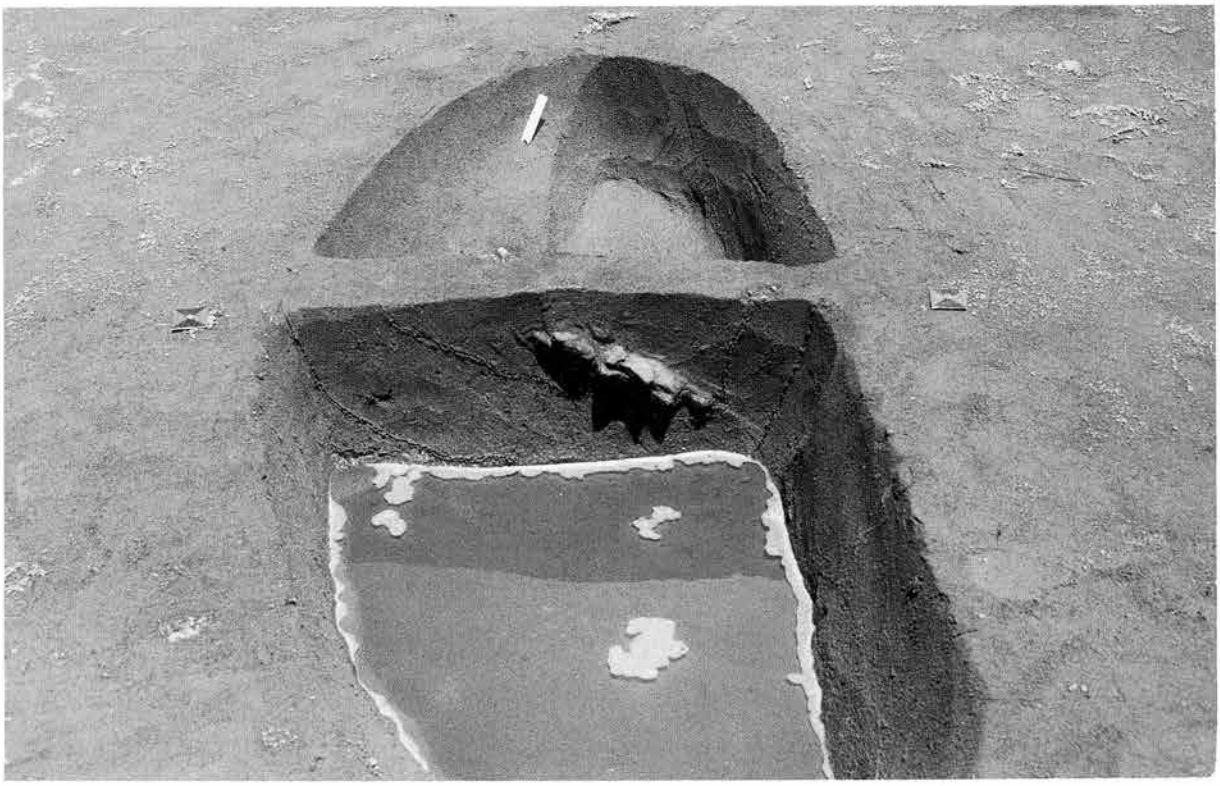
2. SK1337完掘
南より



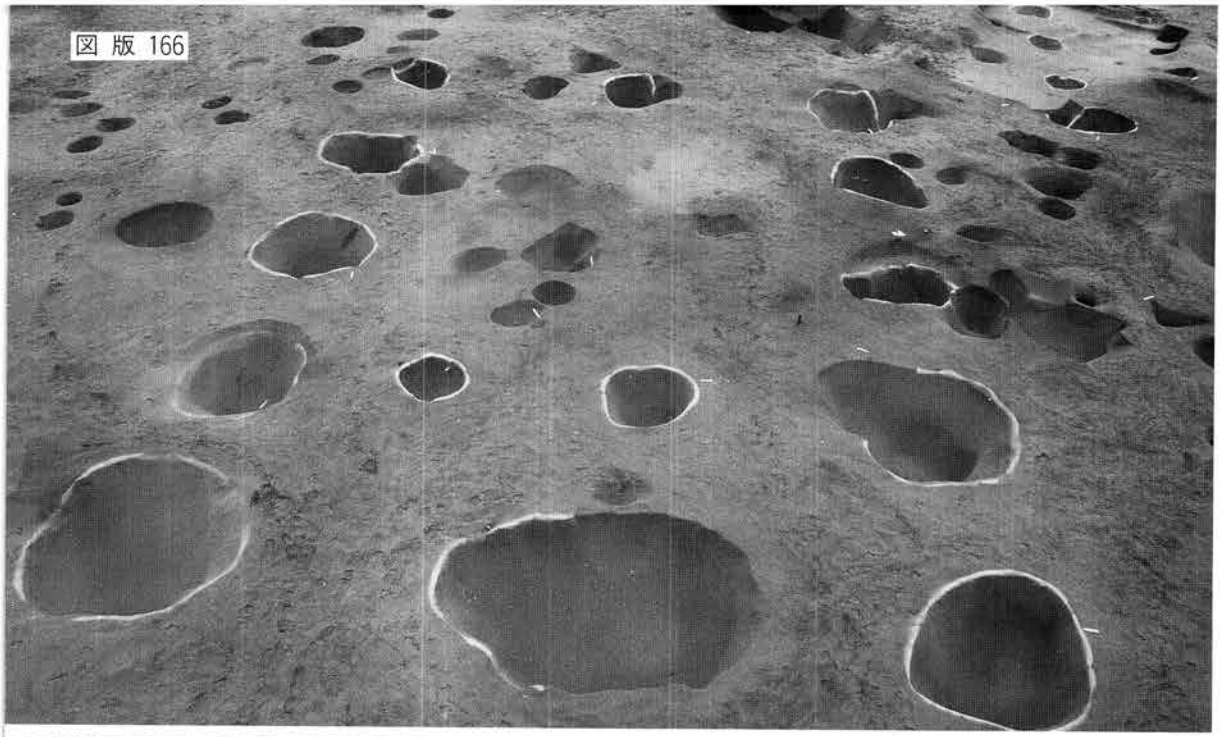
1. SI 1124完掘
北より



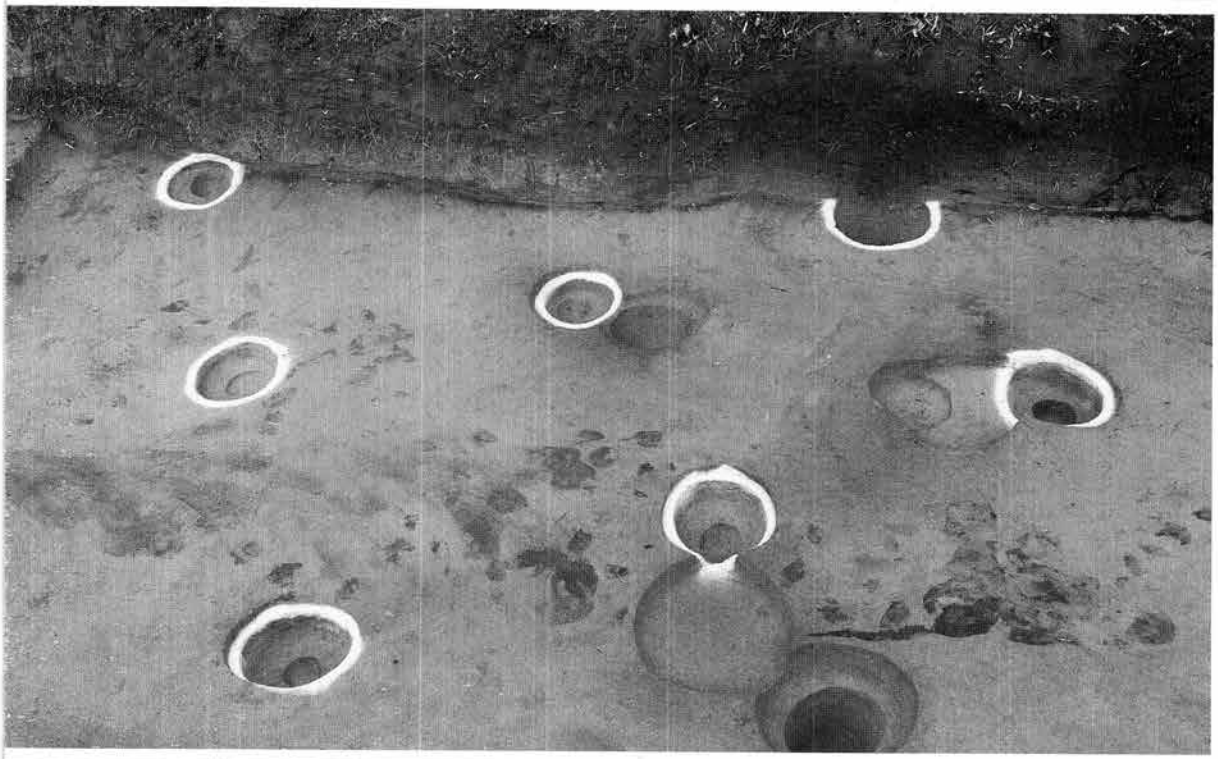
2. SI 1124・SB 1161完掘
南東より



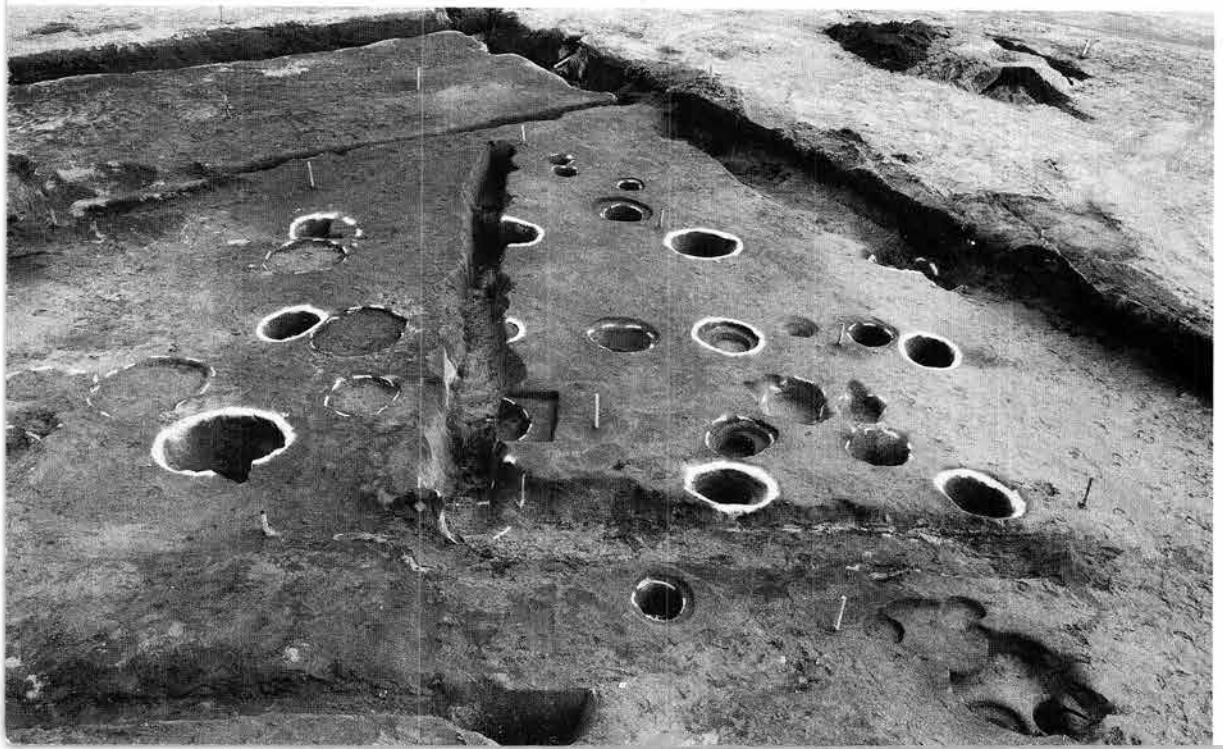
3. SK 1373土層断面
南より



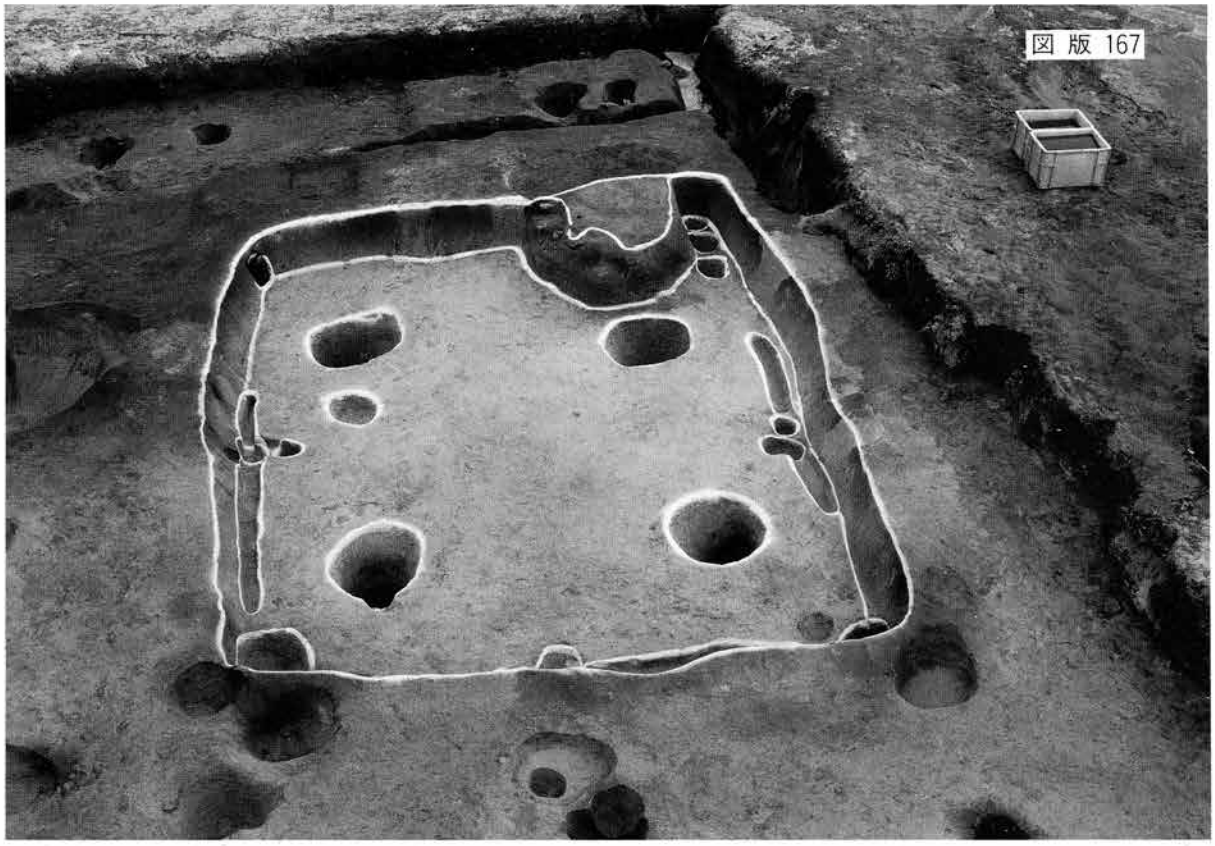
1. SB570完掘
西より



2. SBI570完掘
南より



3. SBII0完掘
北より



1. SI 115完掘
北西より

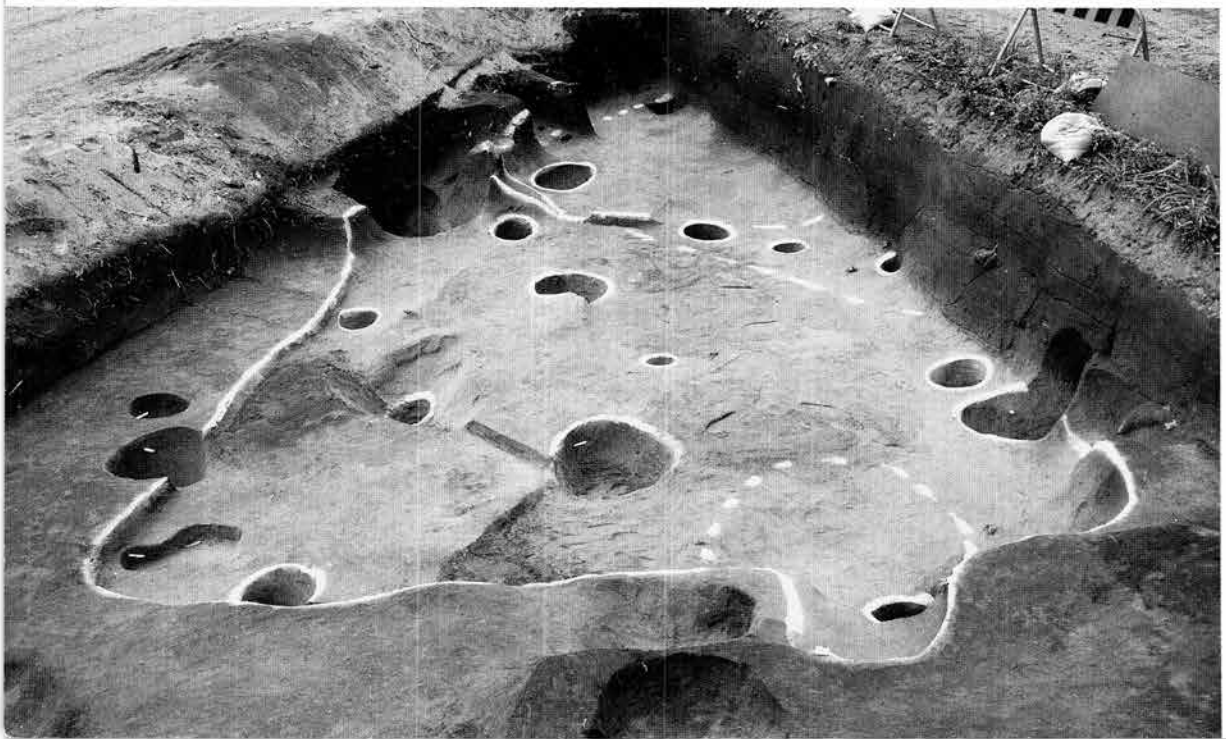
2. SI 115土層断面
南西より

3. SI 115柱穴土器(34)
出土状況

4. SI 115カマド
北西より

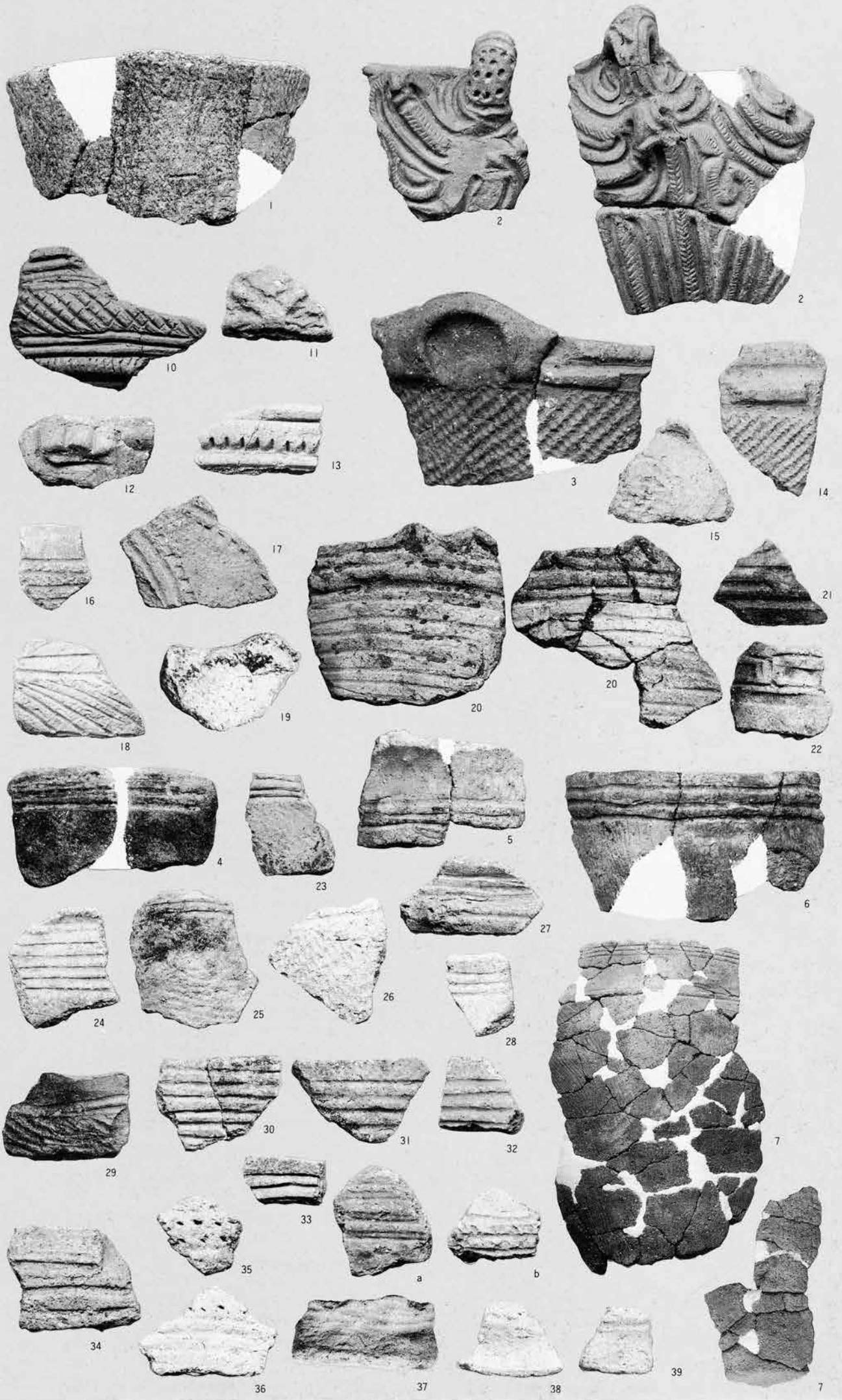
1. SI 1169完掘
南より

2. SI 1166・SI 1167完掘
南西より



3. SI 1460・SI 1461完掘
東より

7　1:5
その他　1:2

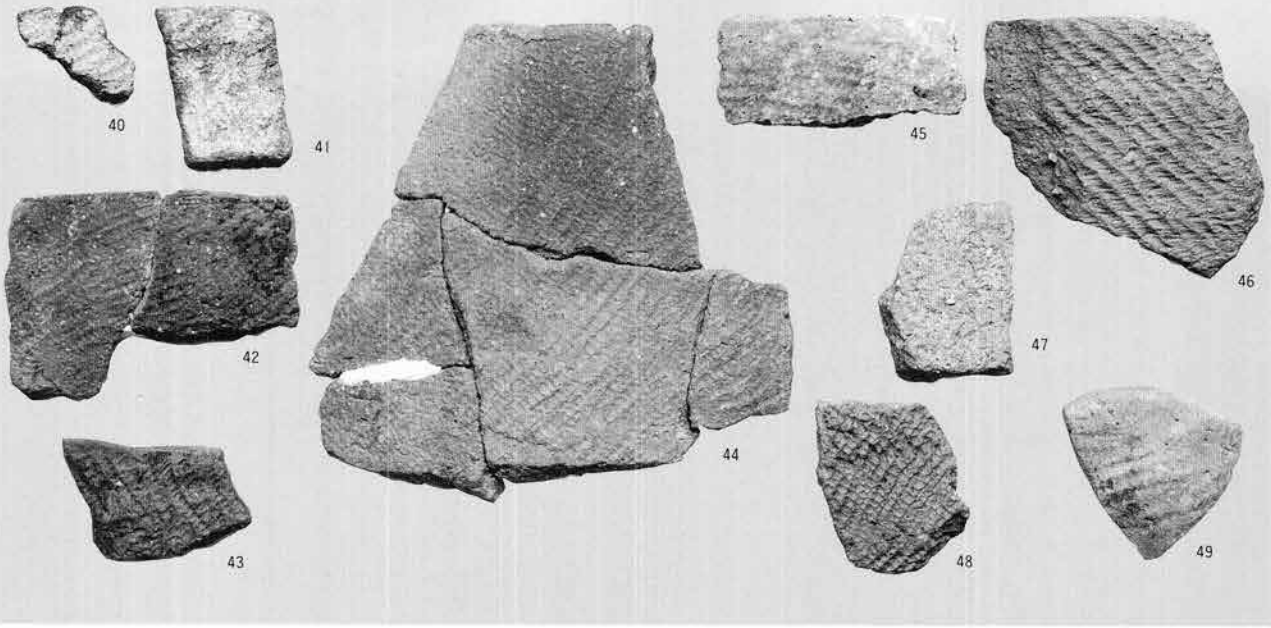


中期
(1～3・10～15)
後期
(16～19)
晩期
(4～7・20～39・a・b)

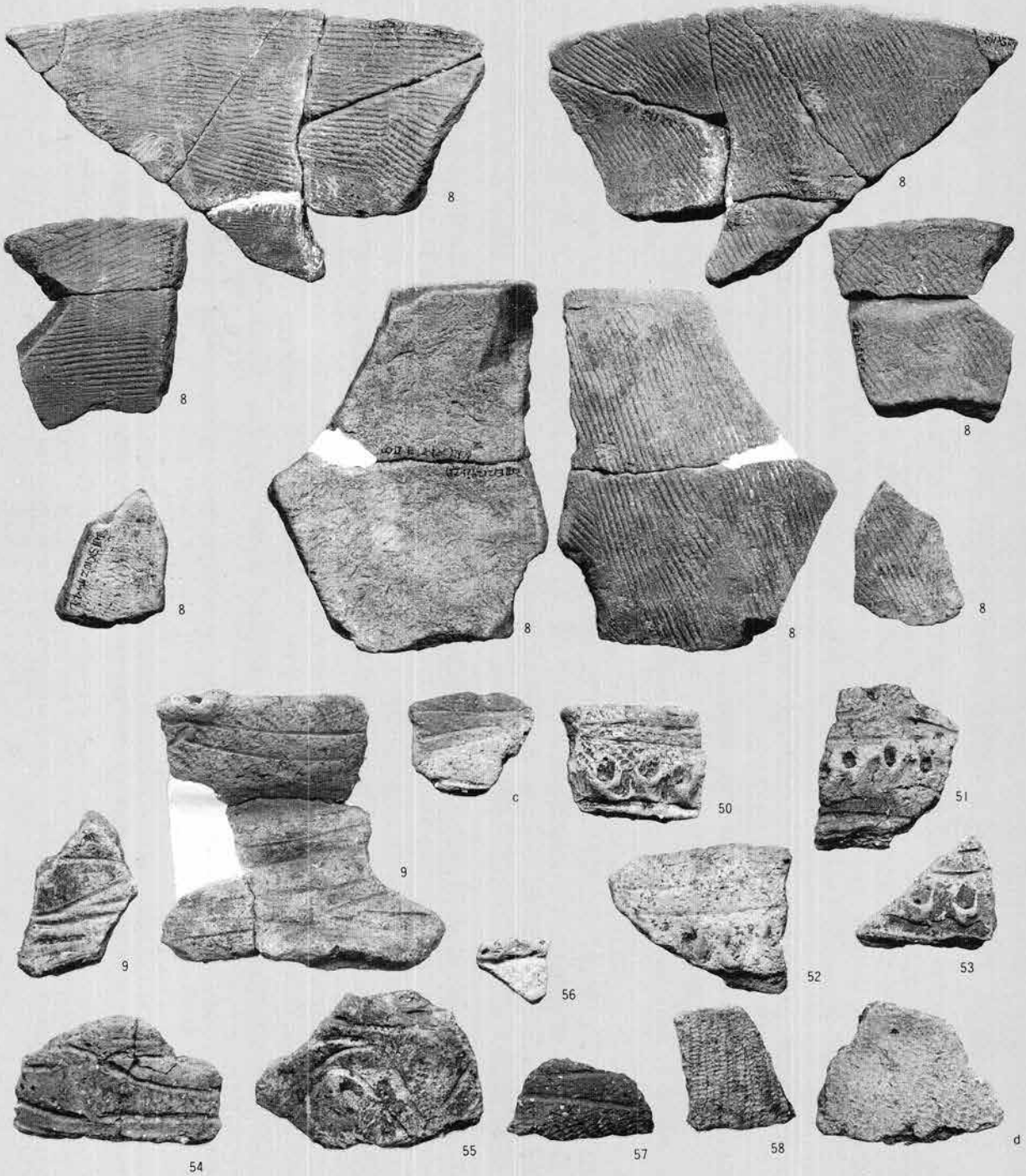
図 版 170

縄文・弥生時代土器

1：2



1　縄文土器



2　弥生土器
天王山式（9・50～58・c・d）

1～15 1：3
16 1：1

98 1

45 3

65 4

74 2

57 5

1 6

4 9

31 13

91 10

129 14

5 7

92 11

126 15

2 8

94 12

須恵器
128 16

SI 70(13)
SI 71(10・11)
SI 115(1・12)
SI 502A(6～9)
SX 795(4)
SI 1124(2)
SI 1168(5)
SI 1480(3)
その他(14～16)

図 版 172

古墳時代土器

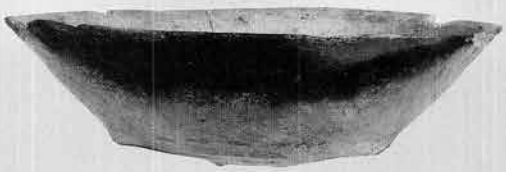
1:3

21 1

18 2

20 3

14 4


81 5

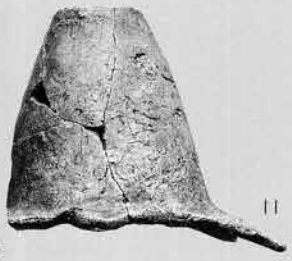
99 6

17 7

109 8

56 9

22 10


53 11

124 12

130 13

72 14

131 15

114 16

115 17

51 18

52 19

8 20

122 21

120 22

32 23

123 24

SI 70(23)
SI 263(16・17)
SI 502 A(1～4・7・10・17・20)
SI 650(12)
SI 1010(6)
SI 1124(5・14)
SI 1168(9・11・18・19)
SI 439(8)
その他(13・15・21・22・24)

1:3

35 1

29 2

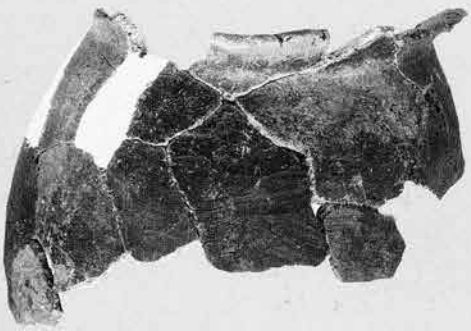
133 3

41 4

44 5

42 6

40 7

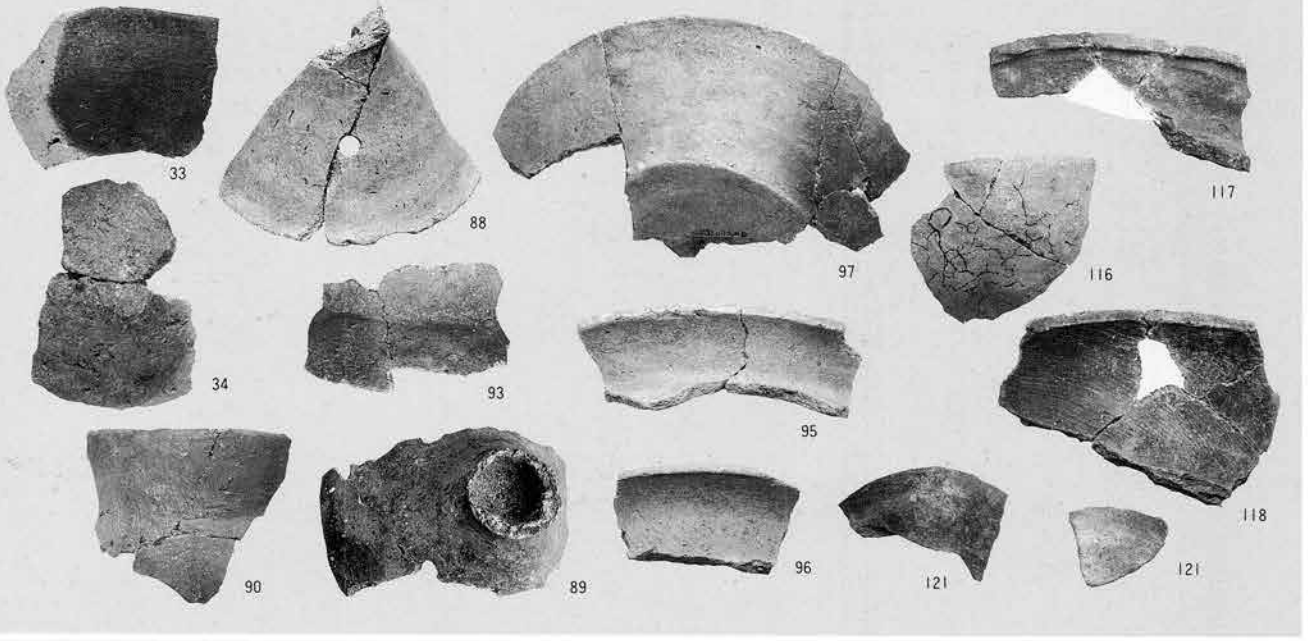


107 8

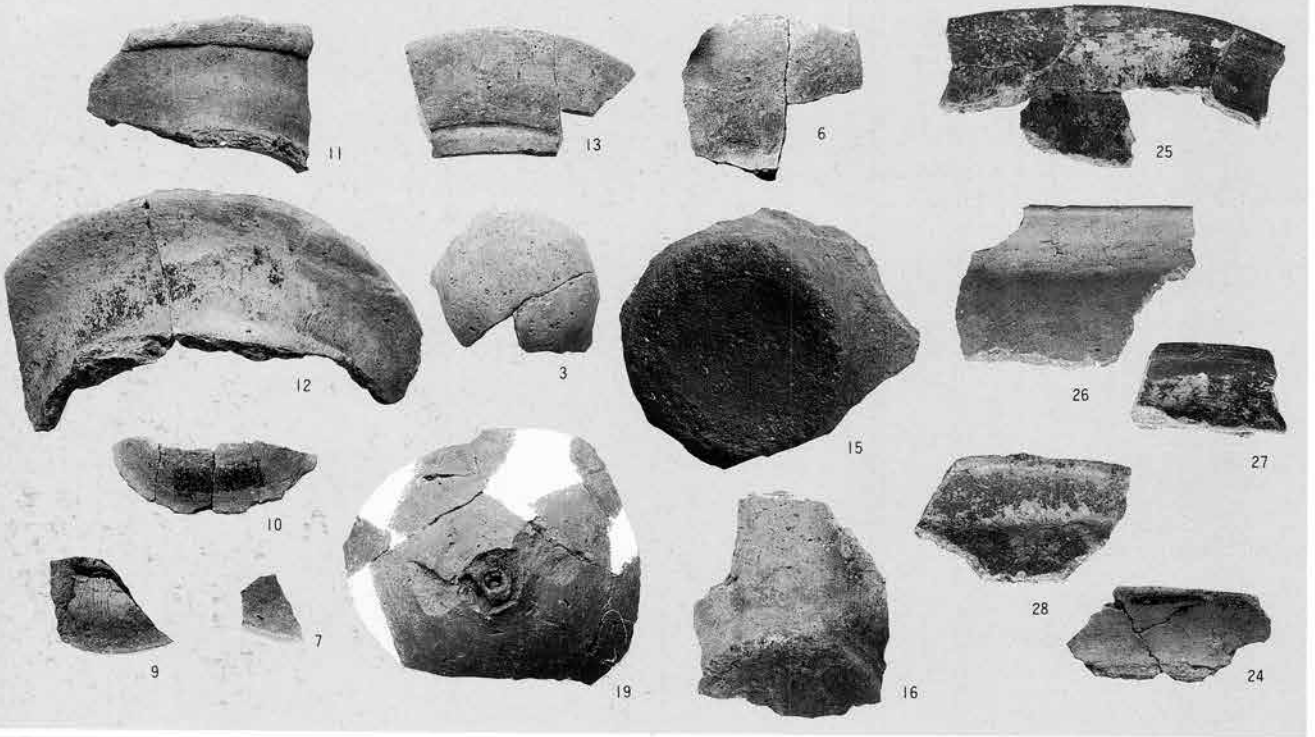
SI 70(1)
SI 502A(2)
SI 595(3)
SI 1480(4～7)
SK 107(8)

古墳時代土器

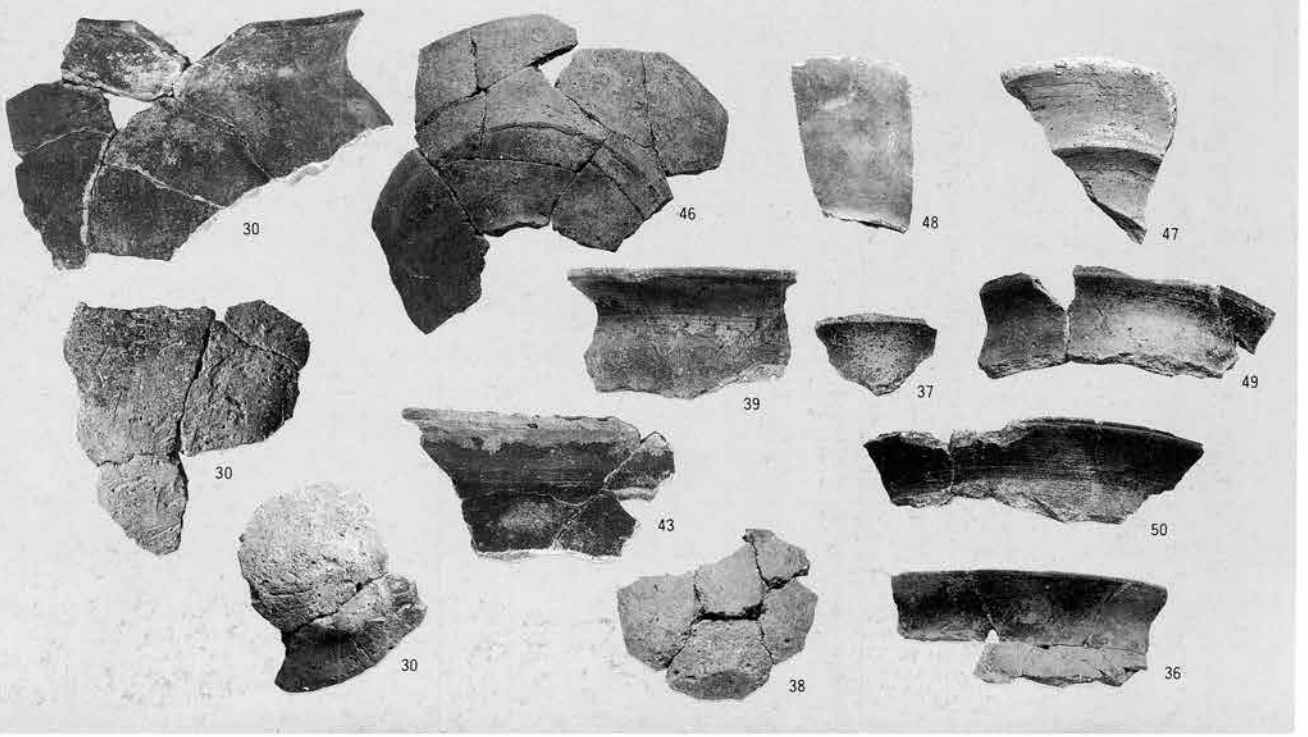
1:3



1　SI 70(33・34)
SI 71(88～90・93)
SI 115(95～97)
SI 402(116・117)
SI 660(118)
その他(121)

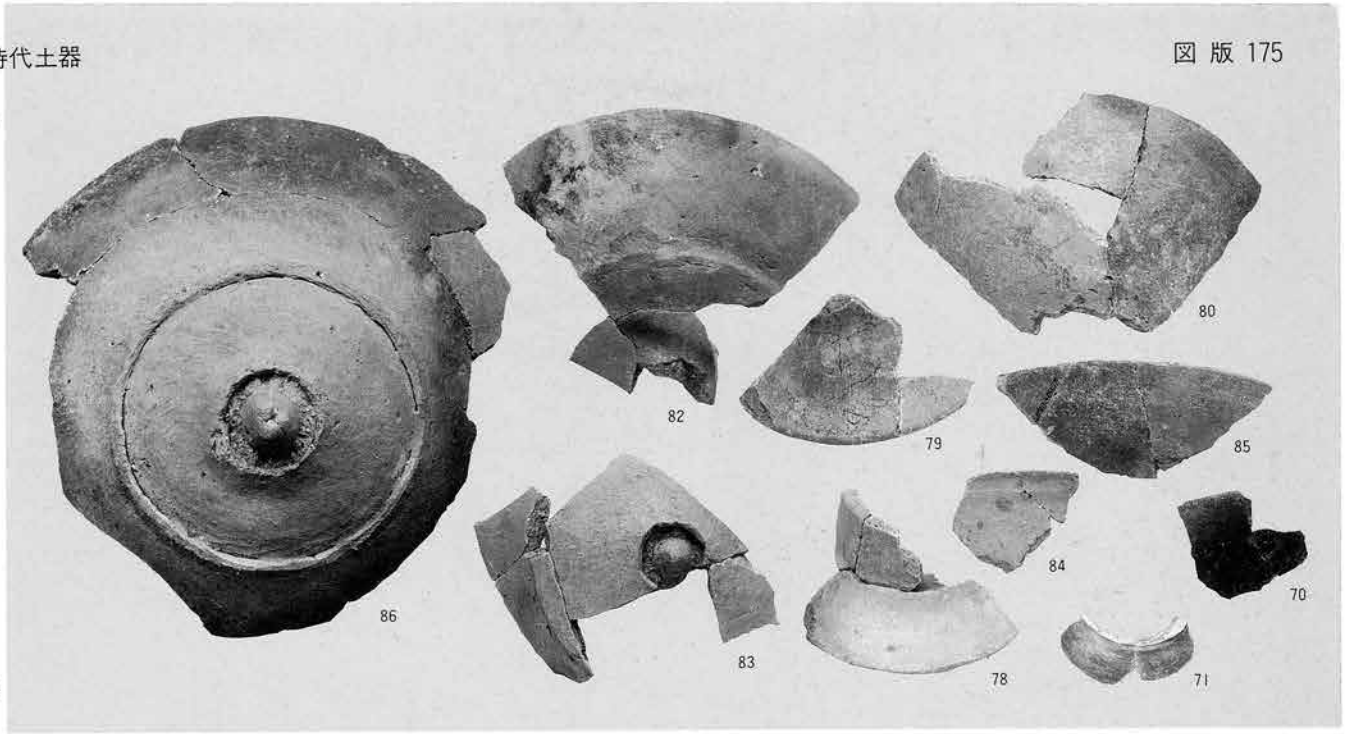


2　SI 502 A

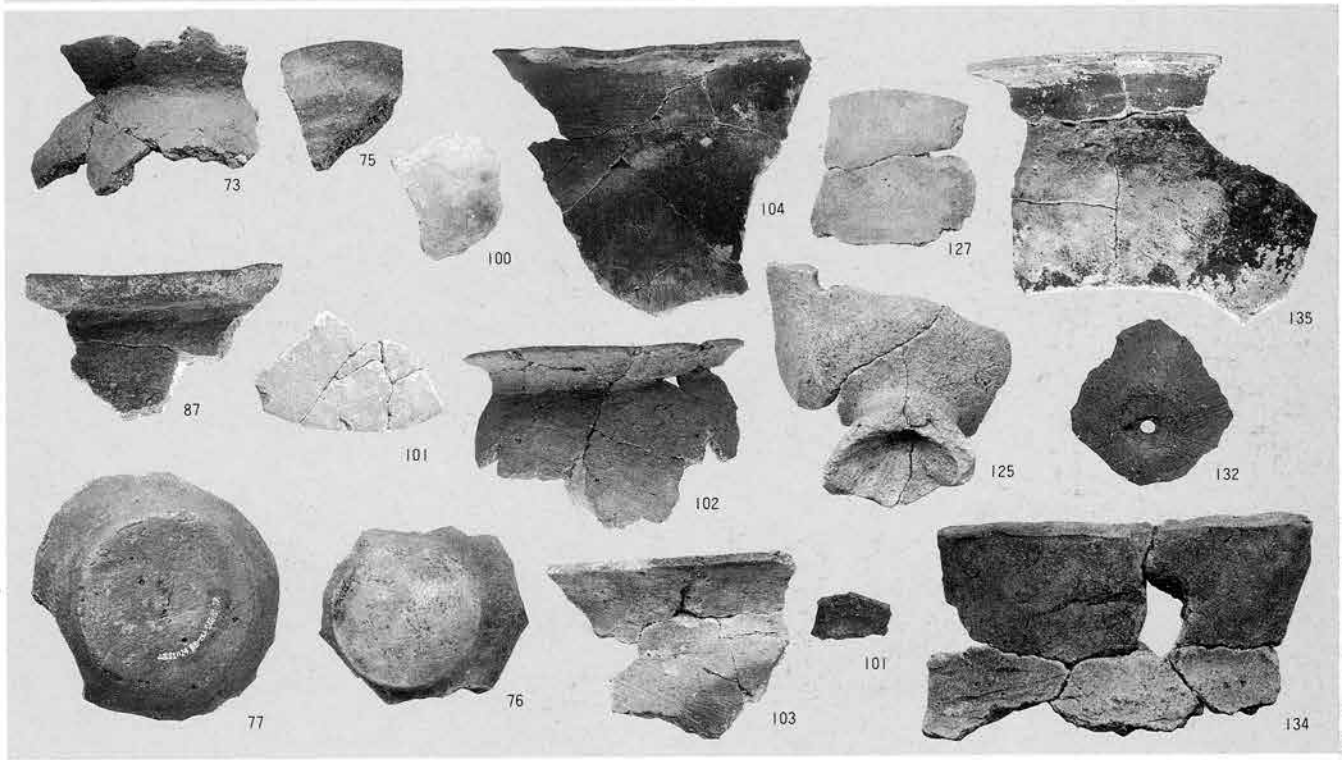


3　SI 502 A (30)
SI 1480・1460
(36～39・43・46～50)

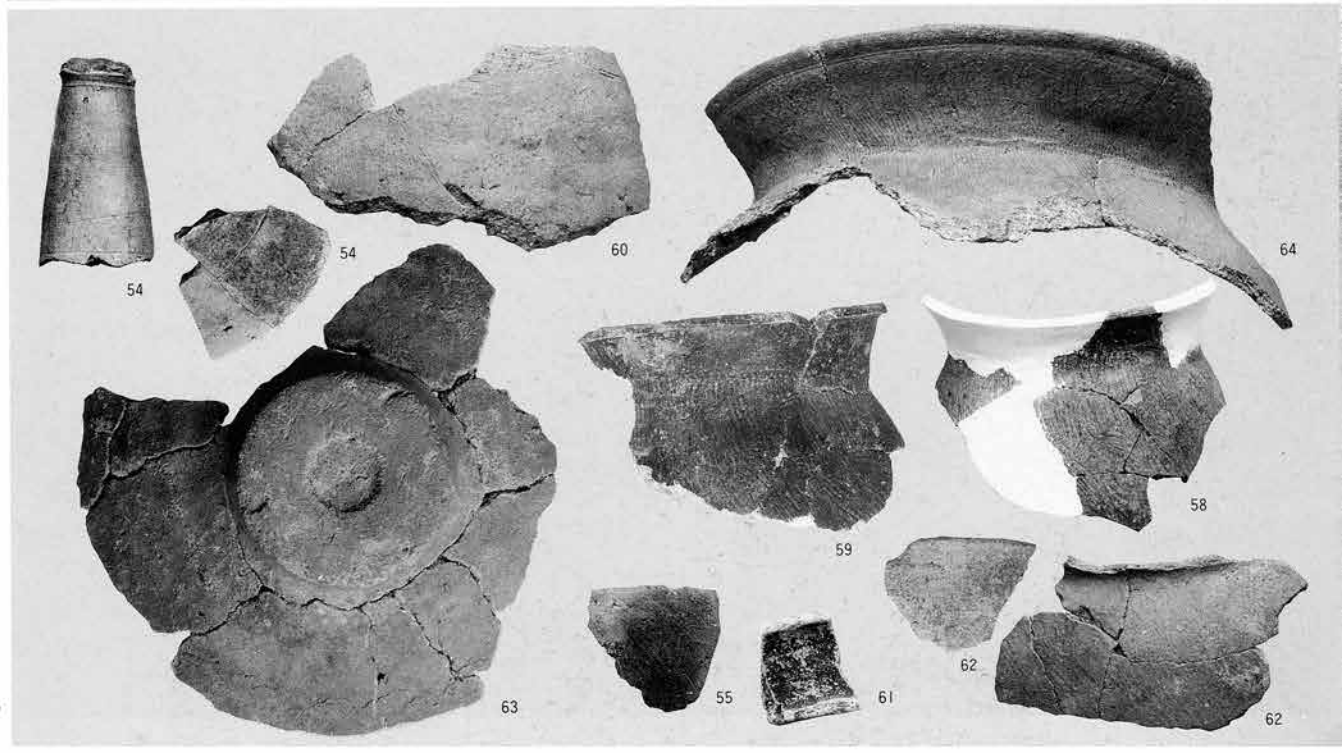
1:3



1 SI 1124

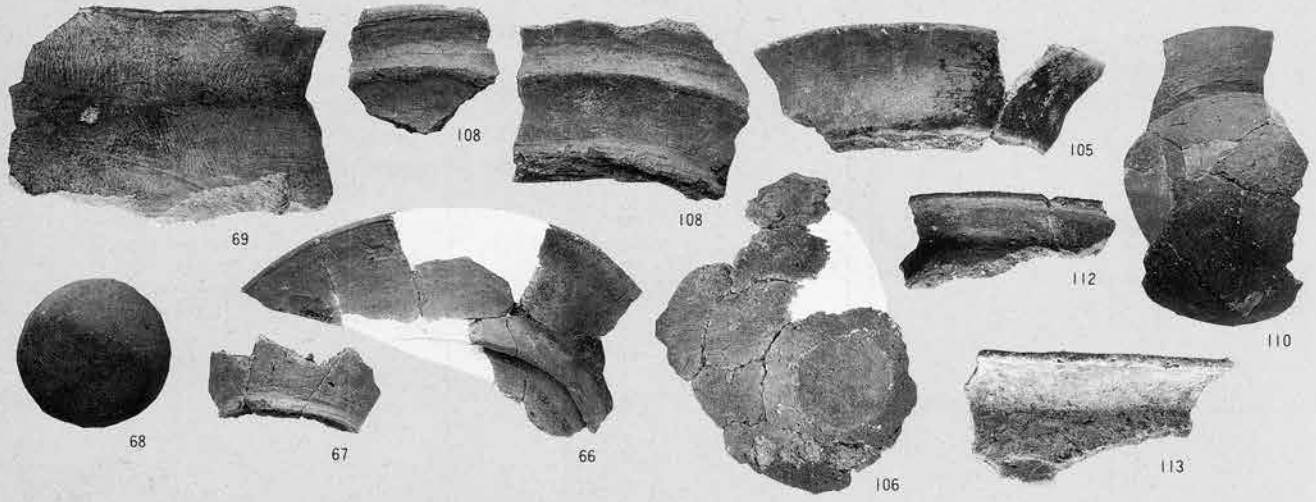


2 SI 1124(73・75～77・87)
SI 1010(100～104)
SK 1337(135)
その他 (125・127
・132・134)

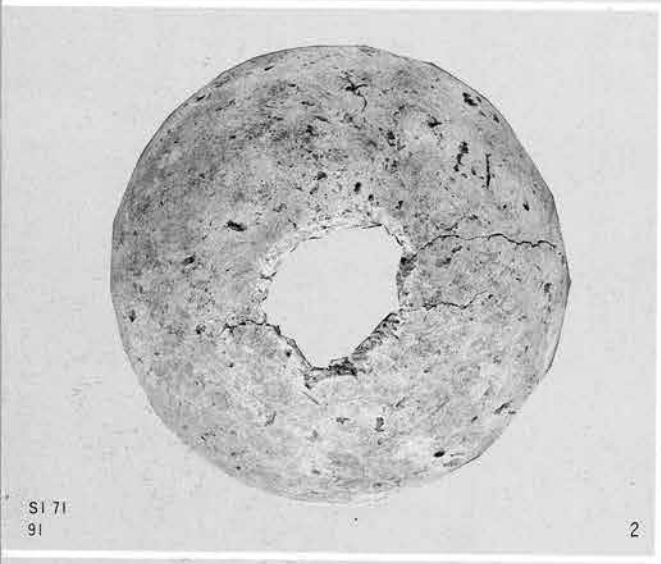


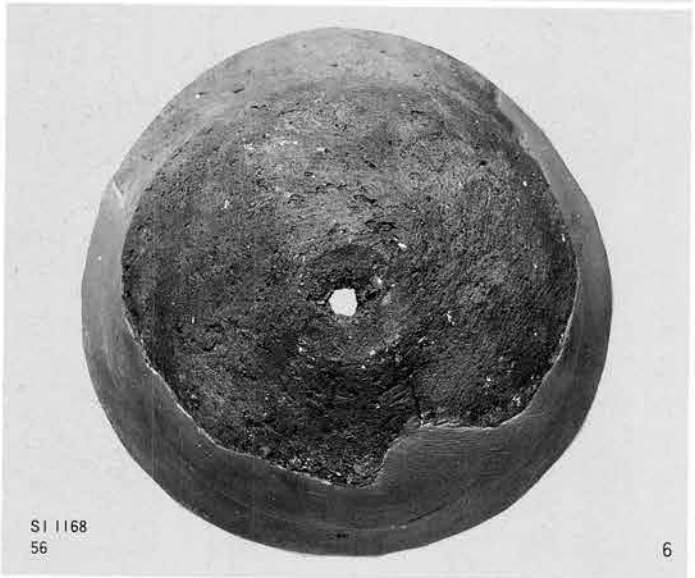
3 SI 1168

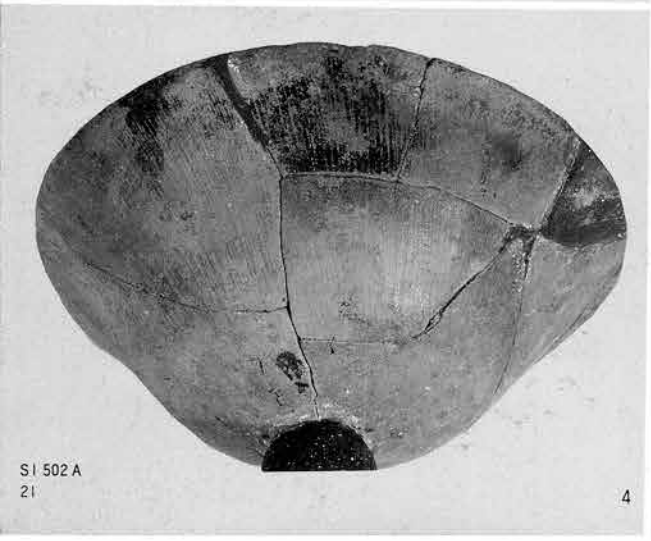
1・5・7　1:3
2・3・4・6　1:2

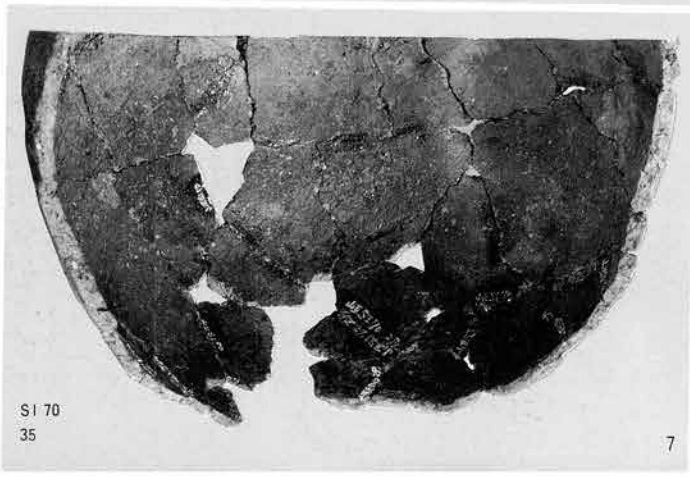


I　SX 795(66～69)
SK 107(108)
SK 108(105・106)
SI 439(110・112・113)





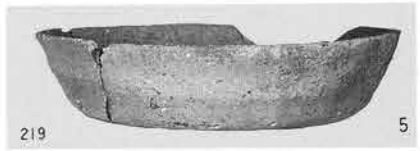


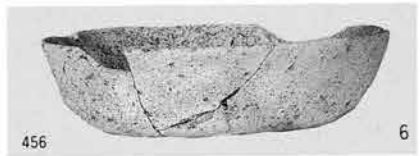


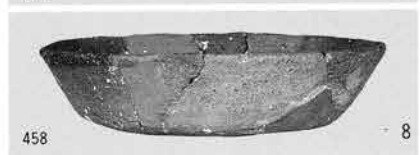
2　小型壺外面
（底部穿孔）
3　小型壺外面
（底部穿孔）
4　高杯外面
（暗文風ヘラミガキ）
5　甕外面
（丸底）
6　有孔鉢外面
（底部穿孔）
7　甕内面
（炭化物）

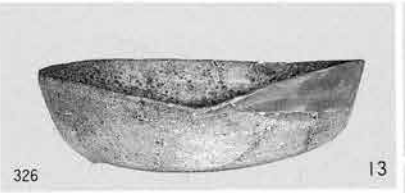
奈良・平安時代土器　須恵器杯類ほか

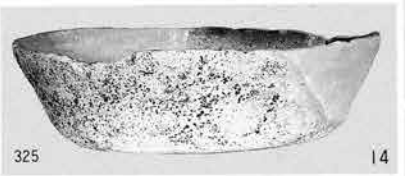
12 約 3:10
33 約 1:5
その他 約 1:3

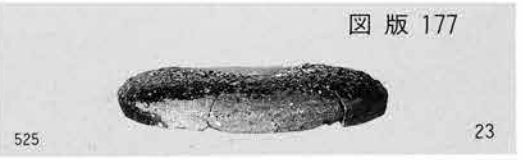


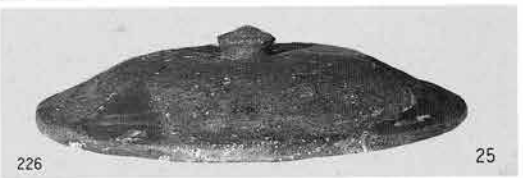


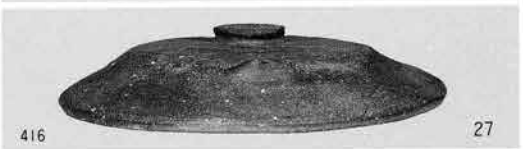












SI 5 (32)
SI 6 (19・23・29)
SI 7 (6 ～ 8)
SI 8 (15)
SI 12(24)
SI 14(18・28)
SI 29(12)
SI 72 (9・16・17)
SI 75(27)
SI 115(1・31)
SI 280(10・11)
SI 458(26)
SI 560(30)
SI 741(2・33)
SI 752(20)
SI 803(13・14)
SI 1000
(3 ～ 5・22・25)
SI 1307(21)

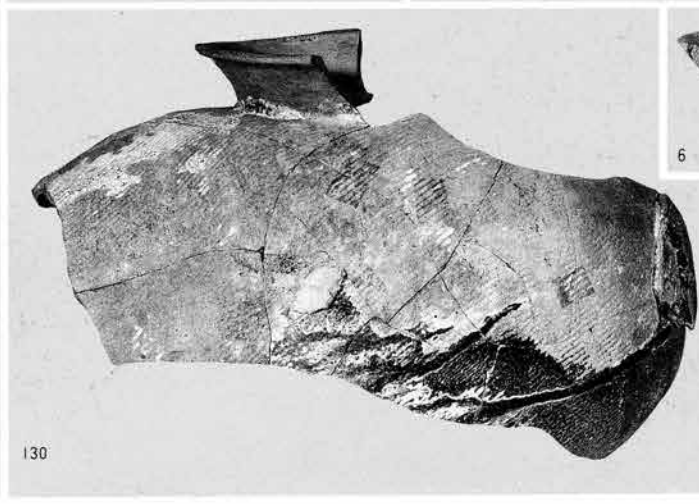
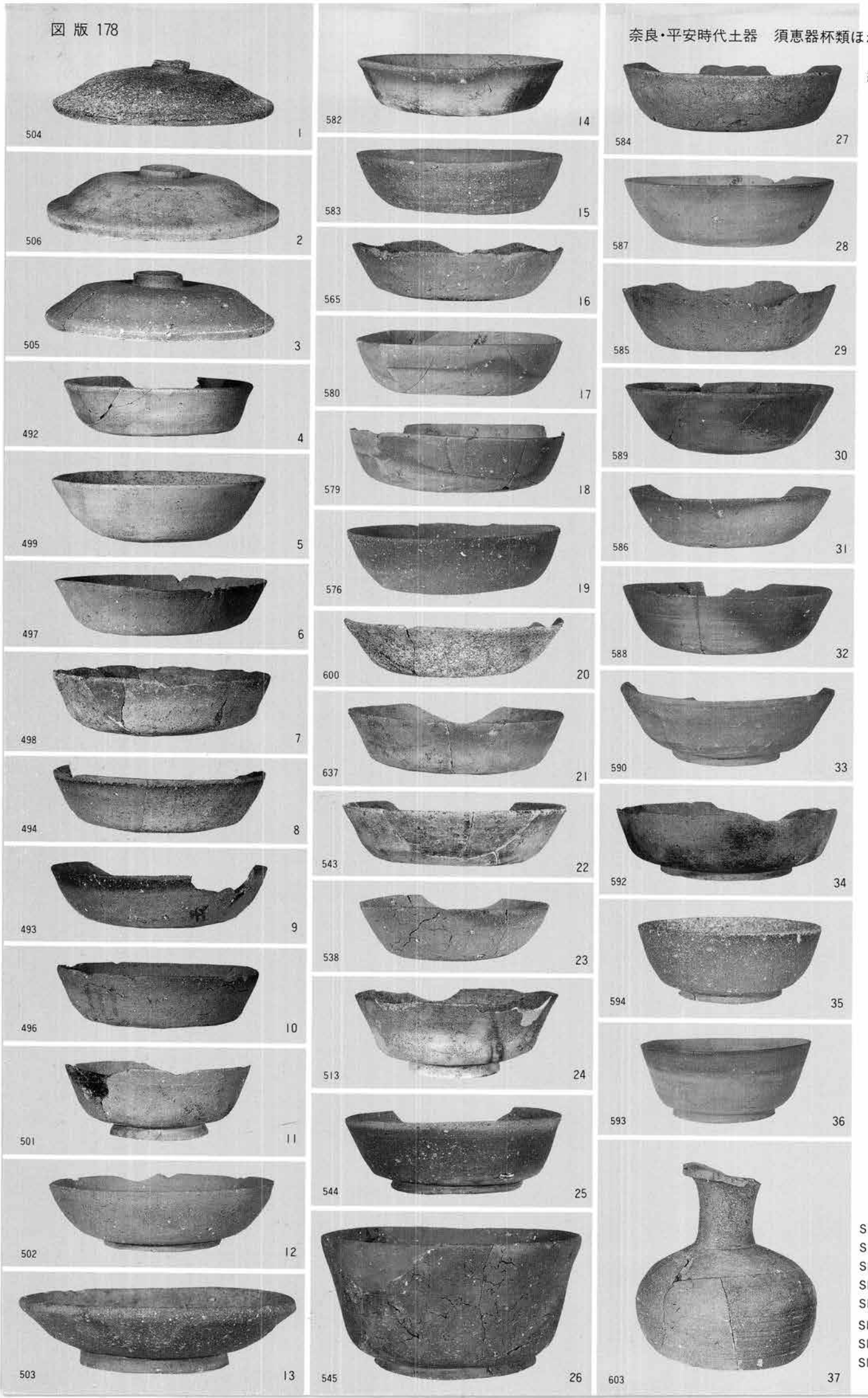


図 版 178

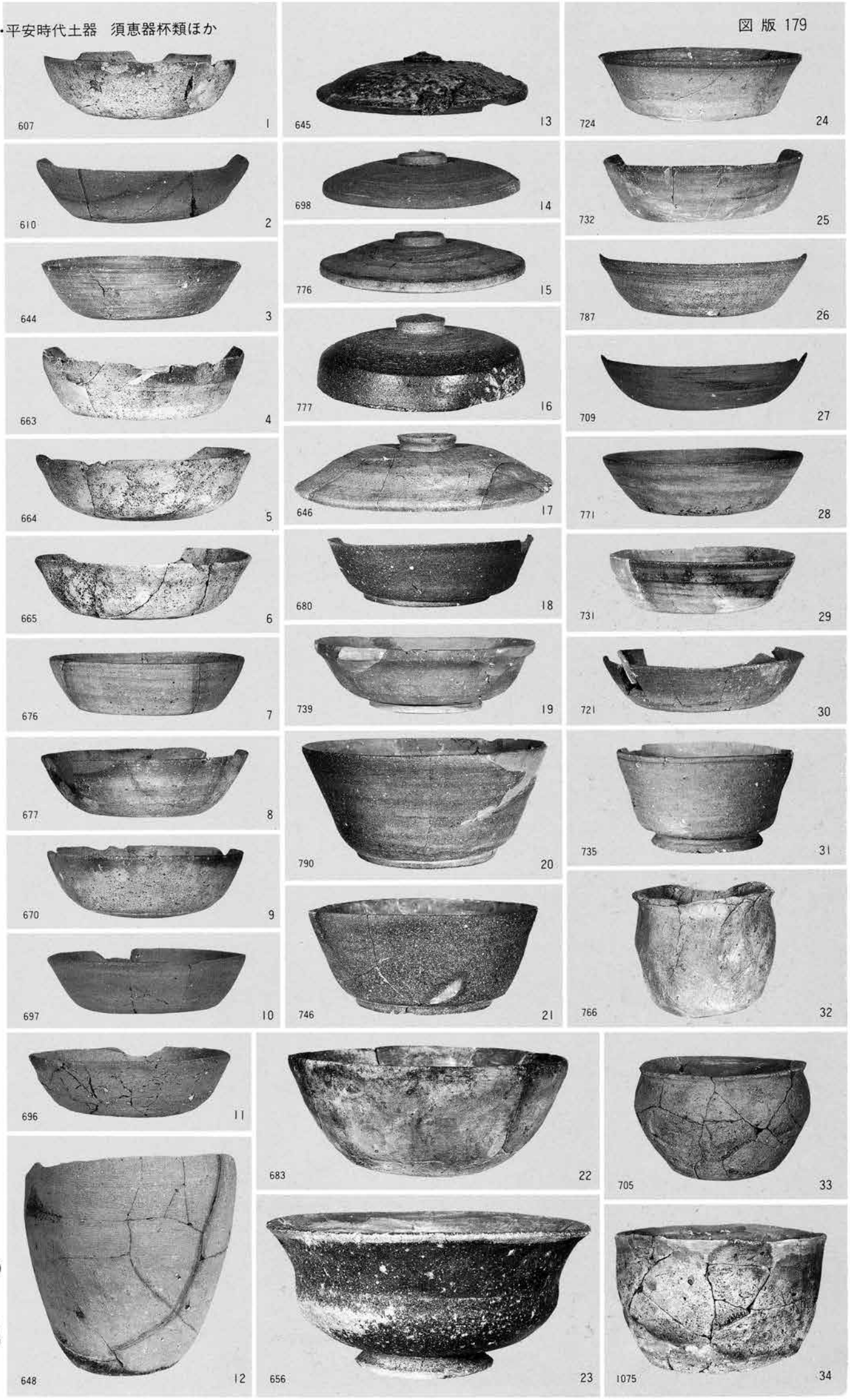
奈良・平安時代土器　須恵器杯類ほか

約1：3



SI 4 (22・23・25・26)
SI 10(21)
SI 11(24)
SI 15(1～13)
SI 17(16)
SI 60 (14・15・27～36)
SI 650(20・37)
SI 1500(17～19)

12　約1:4
その他　約1:3



SI 1 (9)
SI 41 (3・12・13・17)
SI 299(33)
SI 310(1・ 2)
SI 360(23)
SI 401(27)
SI 753(15・16・28)
SI 850(20・26)
SI 1100(7・8・18・22)
SI 1101(10・11・14)
SI 1302(4 ～ 6)
SI 1320(19・21・24・25・29～32)
その他(34)

図 版 180

奈良・平安時代土器　須恵器杯類ほか

11・23　約1:5
34　約1:4
その他　約1:3

797 1

835 13

948 24

810 2

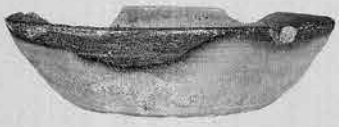
834 14

878 25

812 3

836 15

877 26


815 4

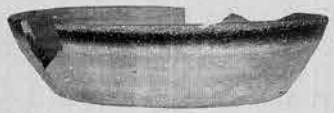
833 16

879 27

811 5

844 17

886 28


814 6

842 18

883 29

809 7

849 19

891 30

816 8

851 20

881 31

870 9

850 21

819 32

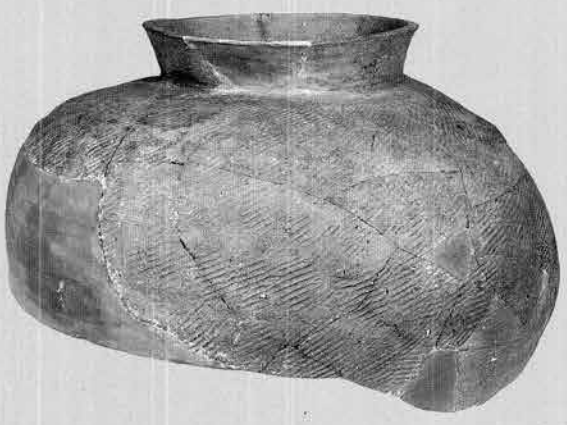
869 10

818 22

872 33

858 11

839 12


931 23

899 34

SI 440(12～16)
SI 802(11・19～21)
SI 805(24)
SI 840(17・18)
SI 1167(23・25～31・34)
SI 1201(9・10・33)
SI 1202(2～8・22・32)
SI 1460(1)

7・8・15・16・22・23
約1：4
その他　約1：3

978 1

979 2

988 3

971 4

986 5

974 6

78 7

29 8

991 9

990 10

989 11

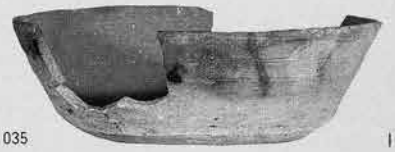
992 12

994 13

1049 14

79 15

34 16


1035 17

1038 18

1040 19

1070 20

1066 21

35 22

123 23

SI 82(3)
SI 115(8・16・22)
SI 462(23)
SI 610(7・15)
SI 1181(5)
SI 1304(1・2)
SI 1313(6)
SI 1471(4)
SK 39(9～13)
その他の須恵器
(14・17～19)
その他の土師器
(20・21)

図 版 182

奈良・平安時代土器　土師器甕ほか

1：4

75　1

76　4

137　2

132　5

1077　3

133　6

SI 71（1・4）
SI 741（2・5・6）
その他の土師器（3）

奈良・平安時代土器　土師器甕

1：4

410　1

409　4

260　2

343　5

348　3

347　6

SI 8（3・5・6）
SI 280（1・4）
SI 1461（2）

奈良・平安時代土器　土師器甕

1~3　1:4
5~7　1:3

368　1

367　3

370　2

369　4

923　5

572　6

987　7

SI 17(6)
SI 20(1~4)
SI 1167(5)
SI 1169(7)

奈良・平安時代土器 土師器甕

1～5 1:4
6 1:3

487 1

560 2

561 3

317 4

559 5

551 6

SI 4(2・3・5・6)
SI 7(1)
SI 560(4)

図 版 186

奈良・平安時代土器　土師器甕

1~4　1:4
5~7　1:3

841　1

840　3

314　2

701　4

732　5

951　6

699　7

SI 440(1・3)
SI 805(6)
SI 850(5)
SI 1101(4・7)
SI 1307(2)

奈良・平安時代土器　土師器甕

1：4

82　1

595　4

77　7

360　2

80　5

81　8

345　3

91　6

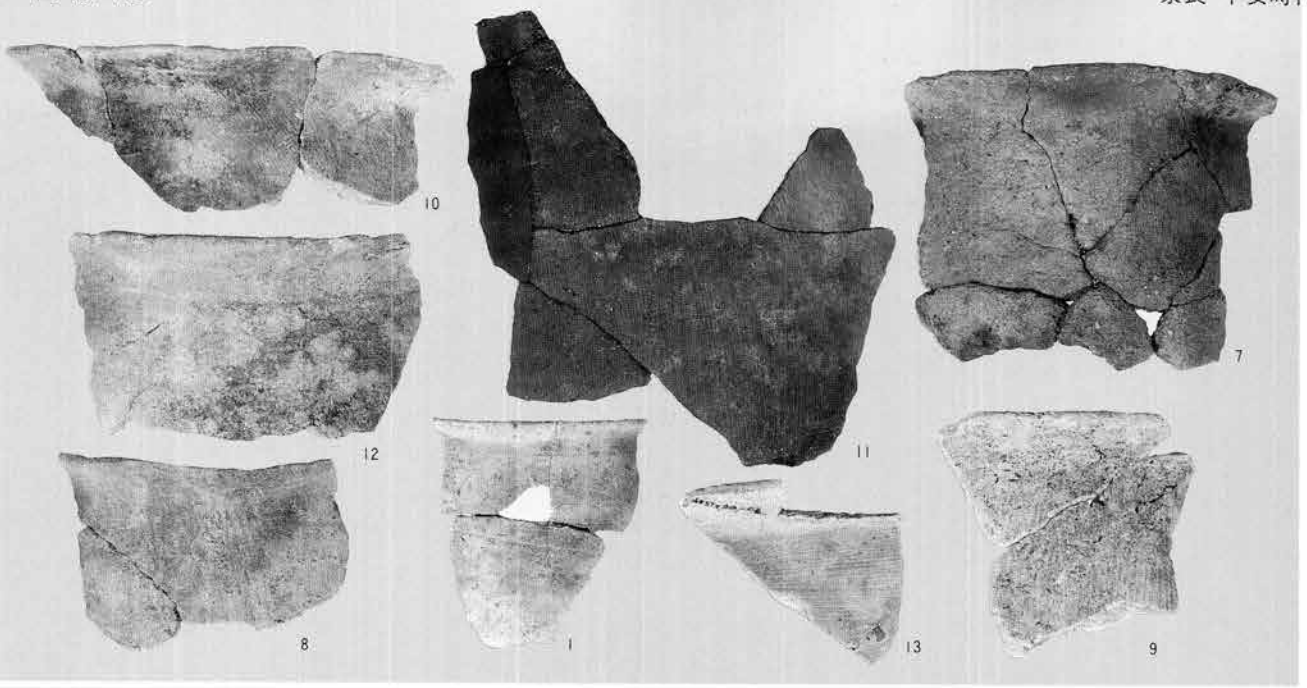
272　9

SI 8（3）
SI 60（4）
SI 72（2）
SI 314（9）
SI 610（1・5・7・8）
SI 630（6）

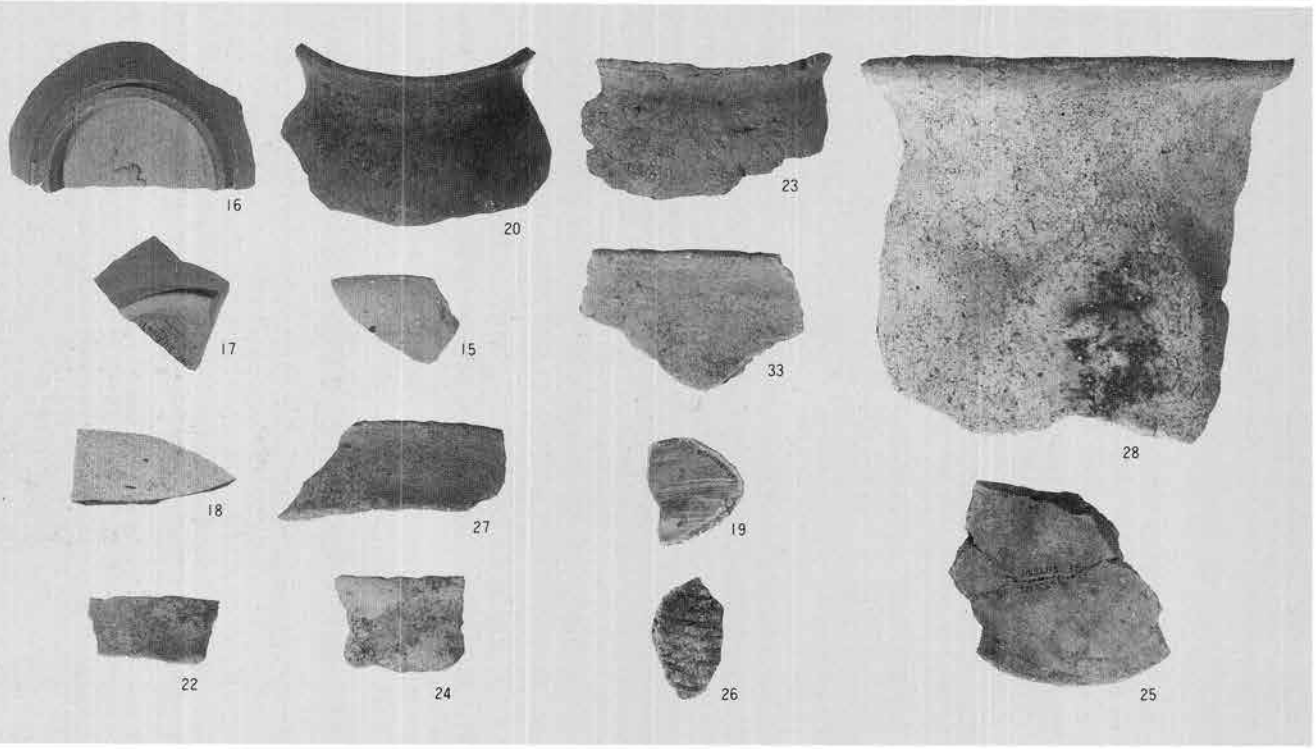
図 版 188

奈良・平安時代土器

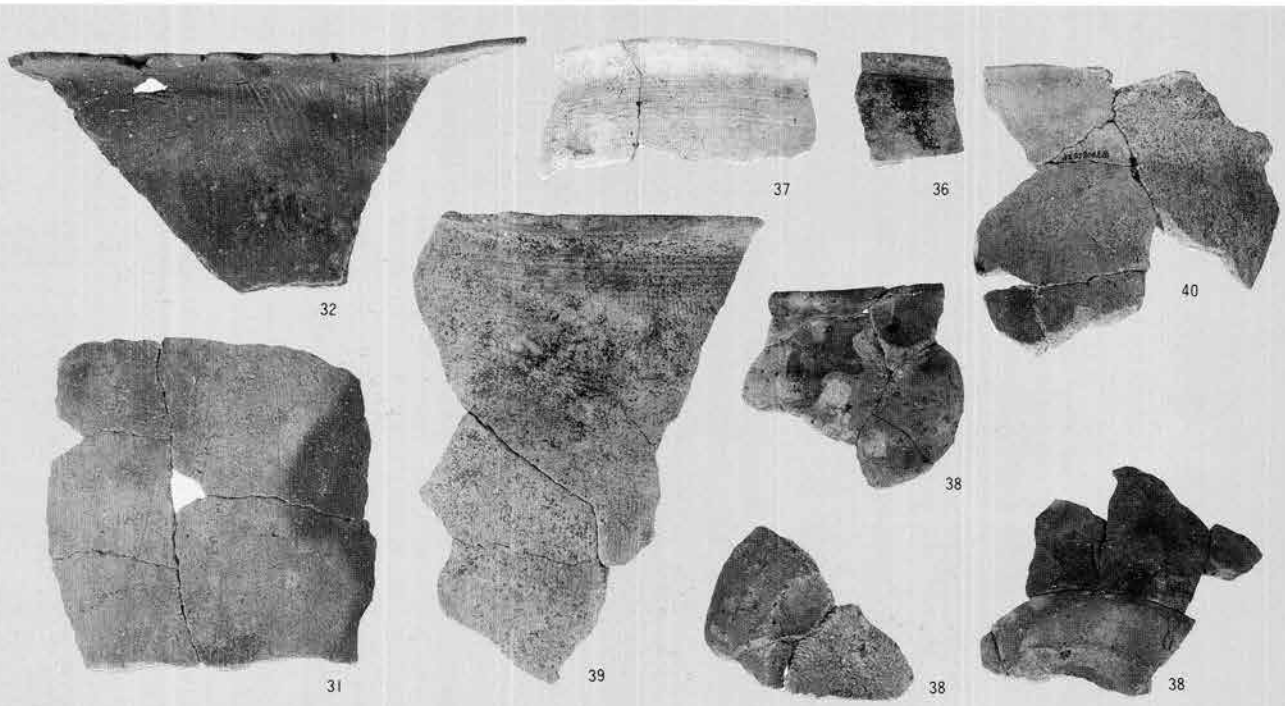
1:3



1　SI 5

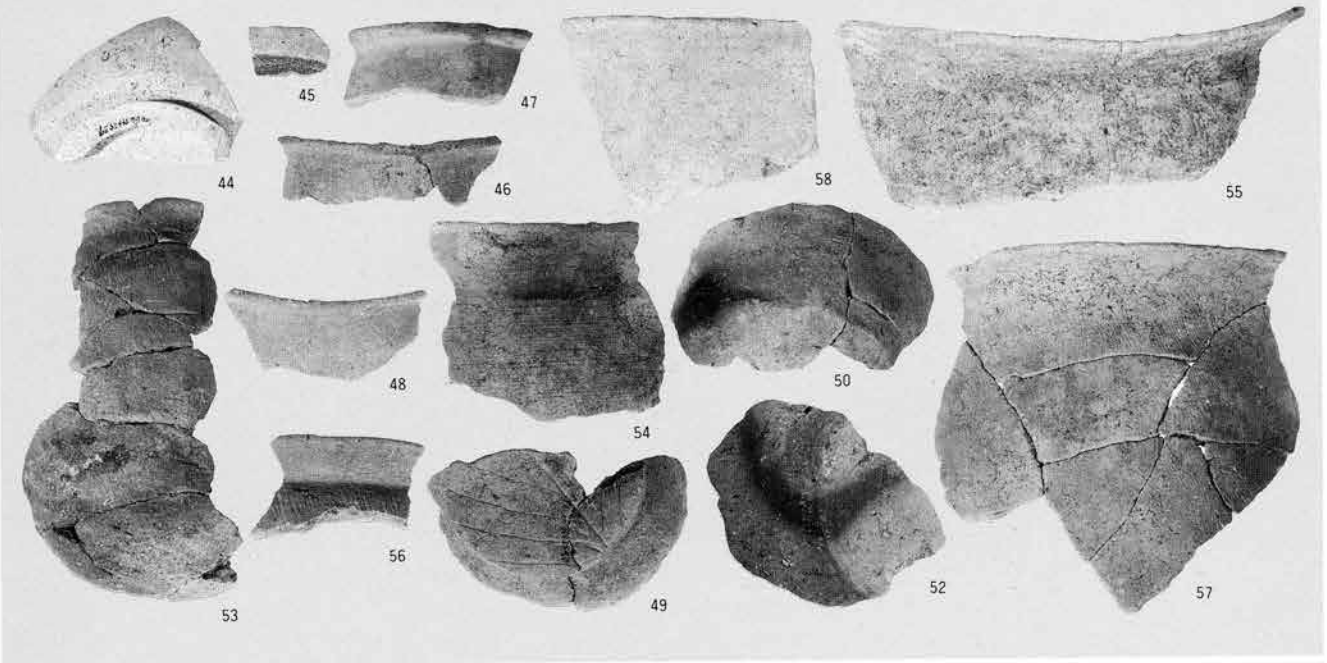


2　SI 115

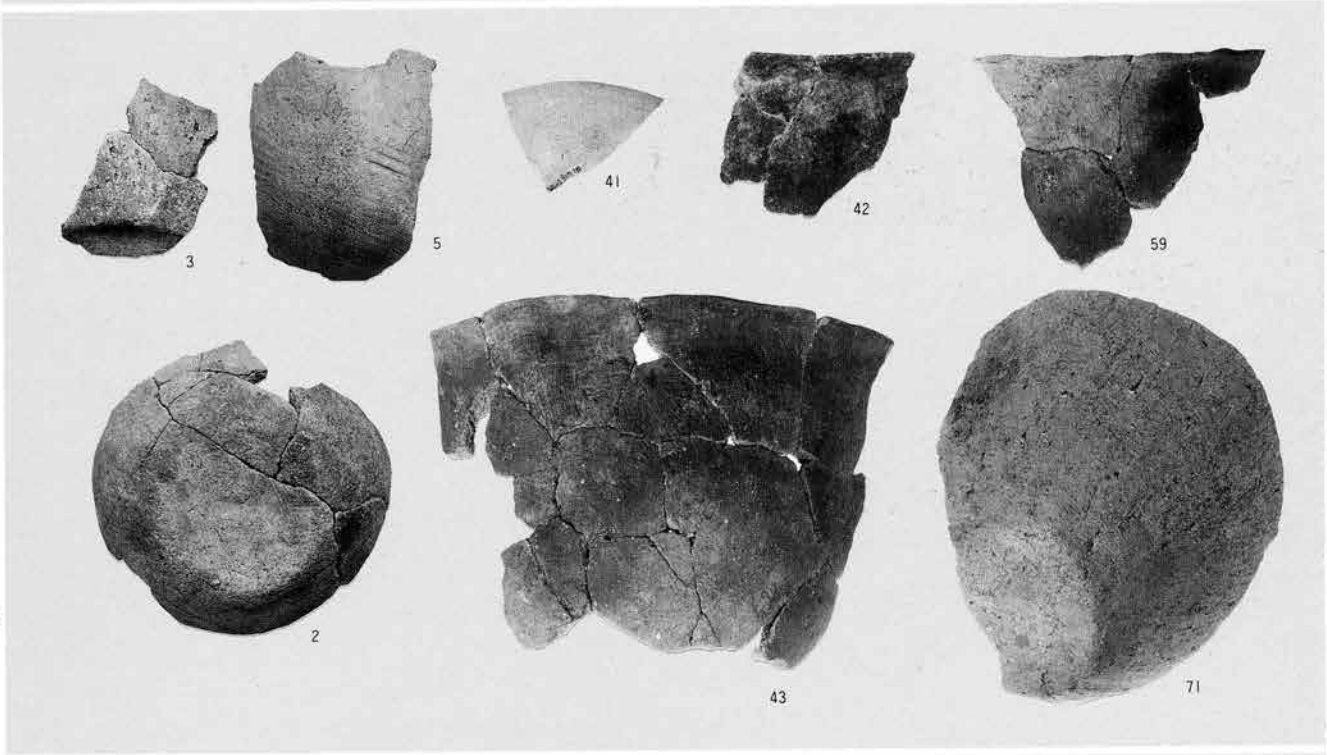


3　SI 115(31・32)
SI 804(36～40)

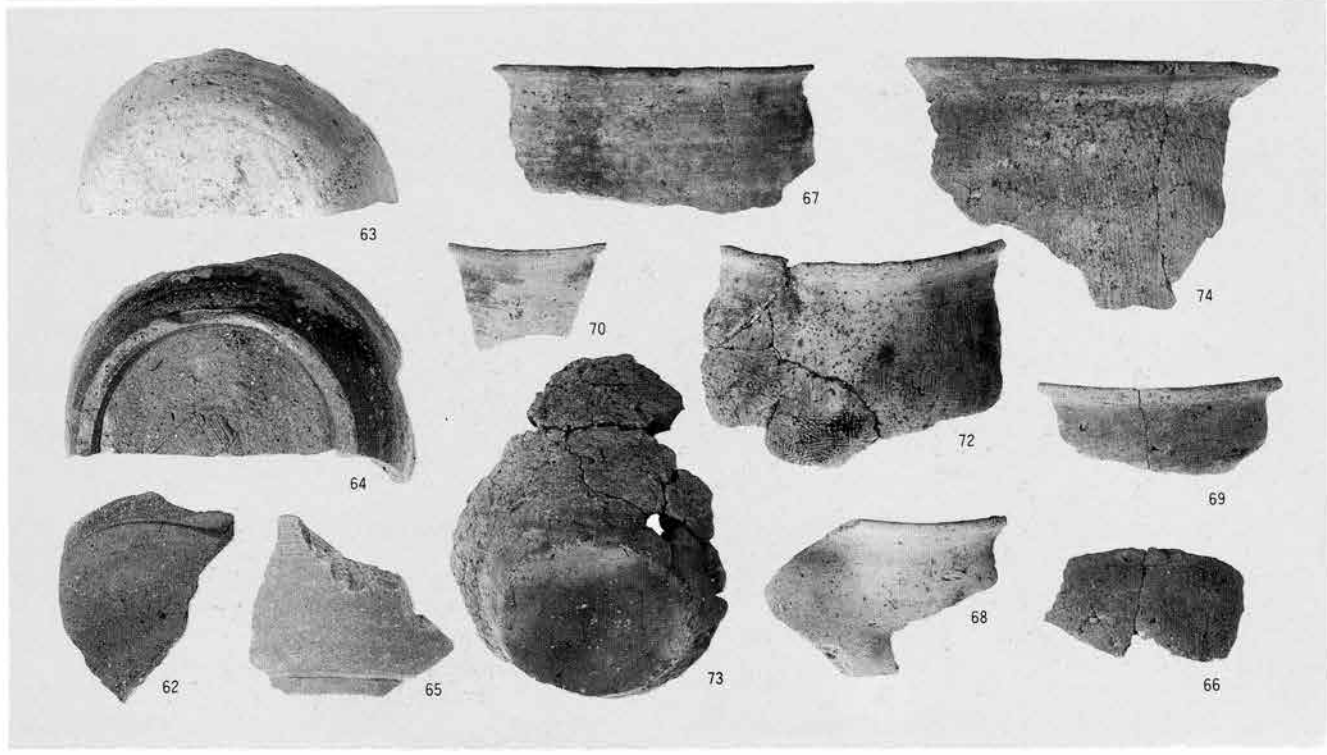
1:3



1 SI 336



2 SI 5 (2・3・5)
SI 71(71)
SI 807(41～43)
SI 1312(59)

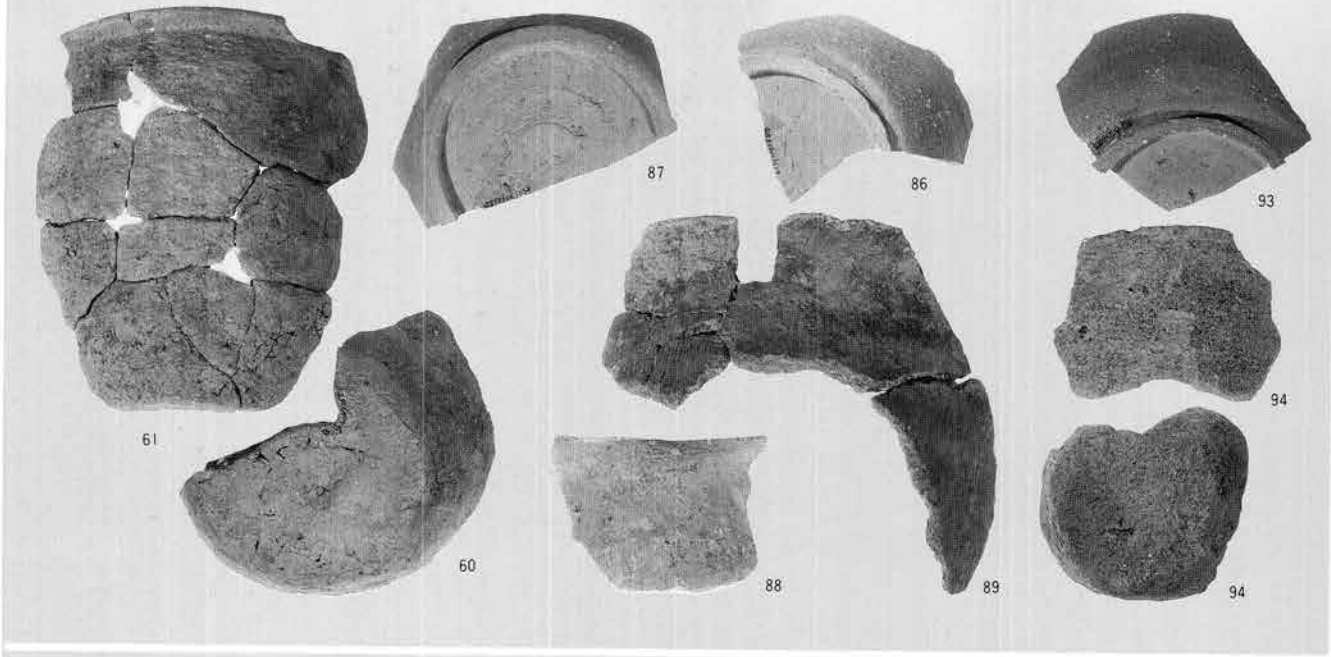


3 SI 71

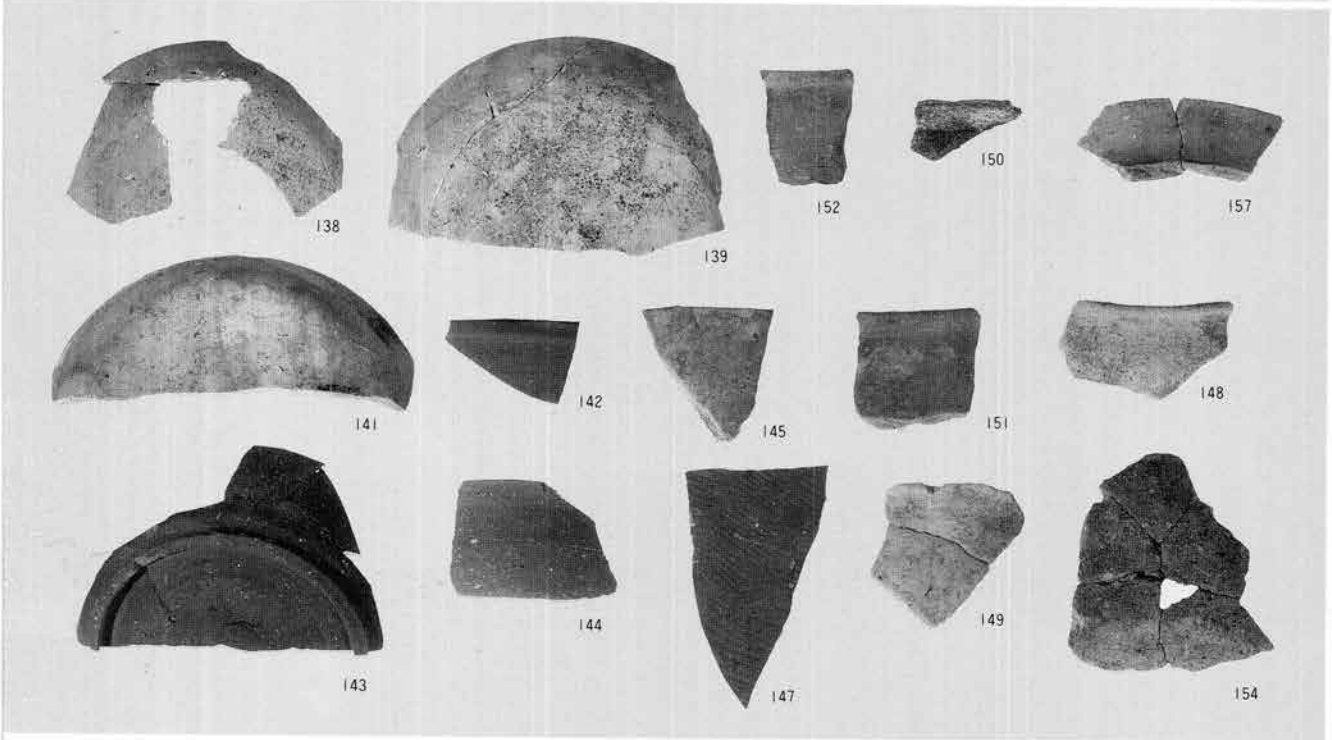
図 版 190

奈良・平安時代土器

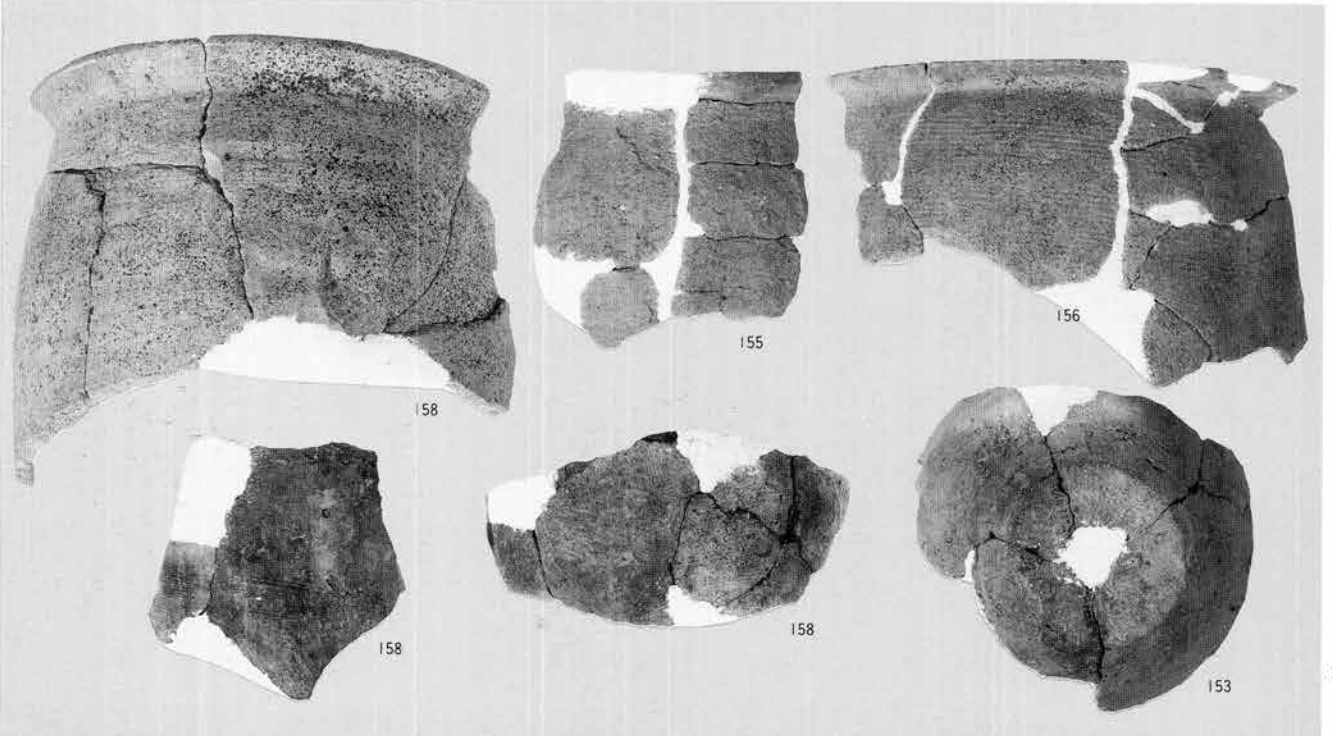
1:3



1　SI 600(86～89)
SI 640(60・61)
SI 1311(93・94)

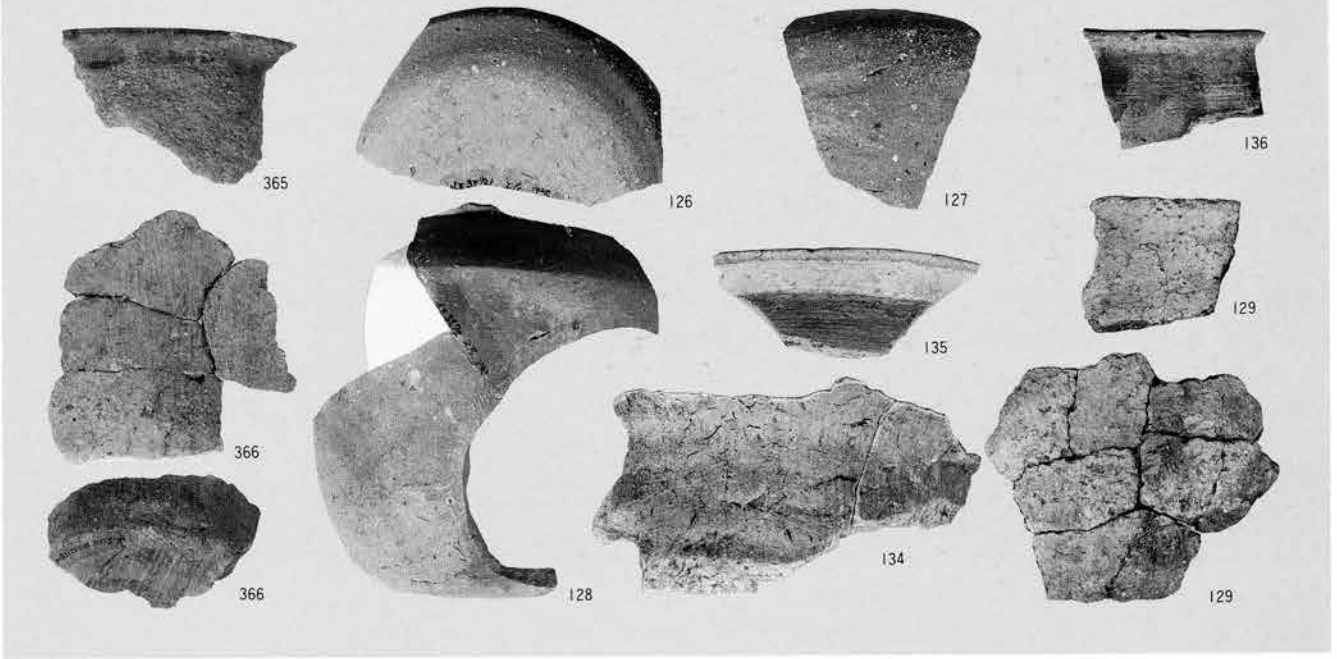


2　SI 12

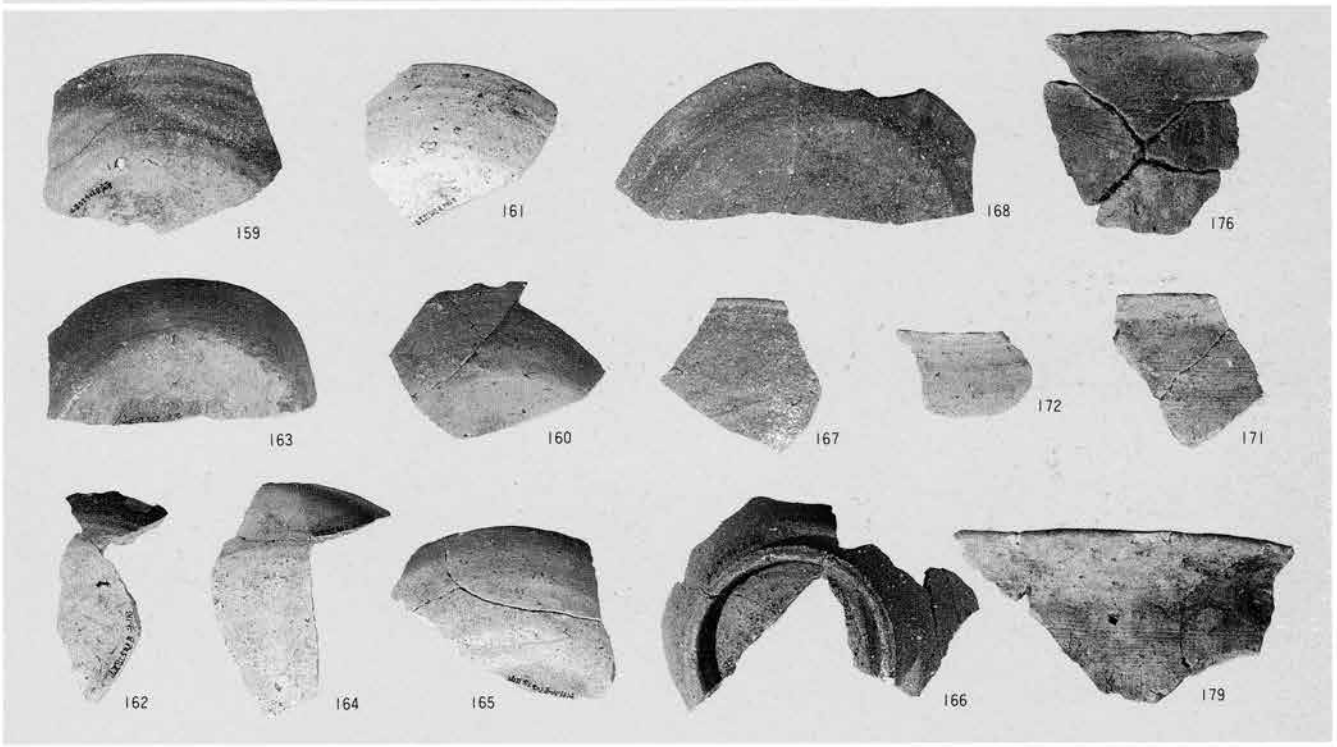


3　SI 12土師器

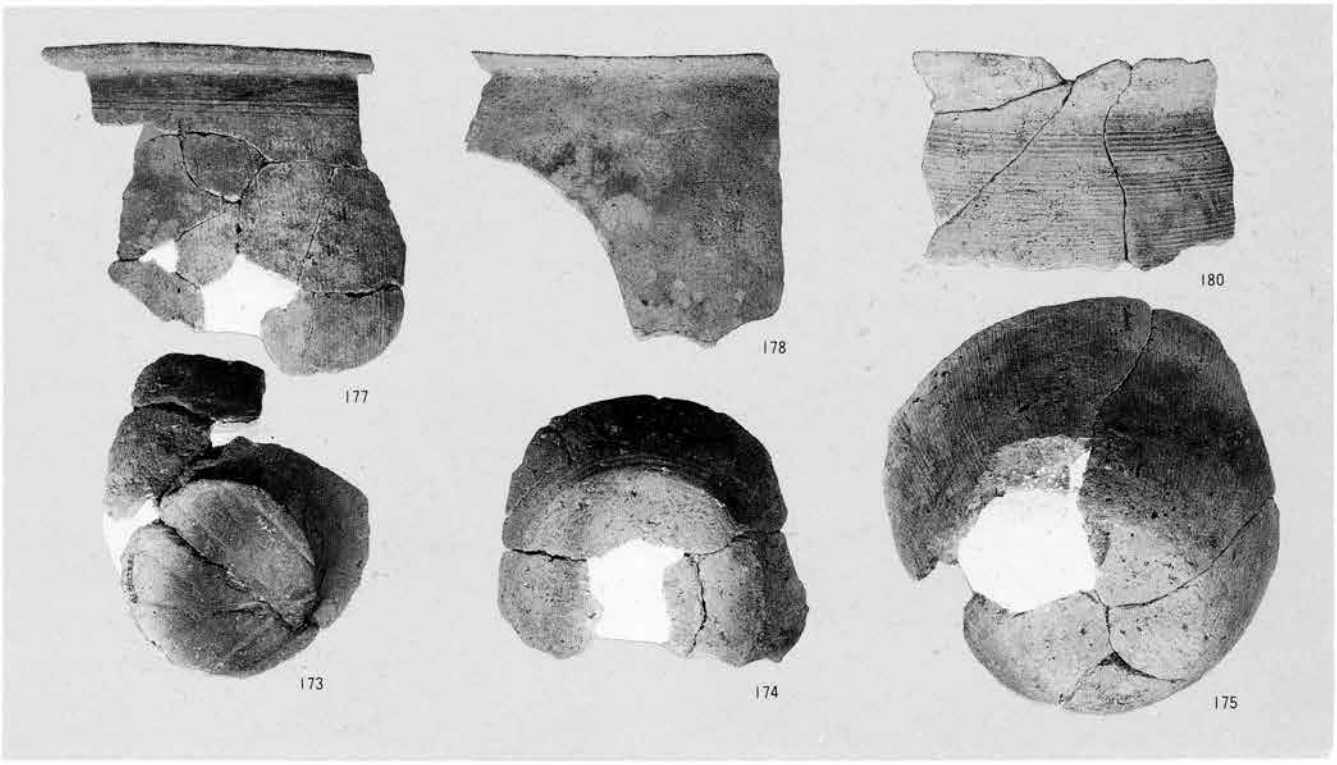
1：3



1　SI 20(365・366)
SI 741（126～129・134～136）

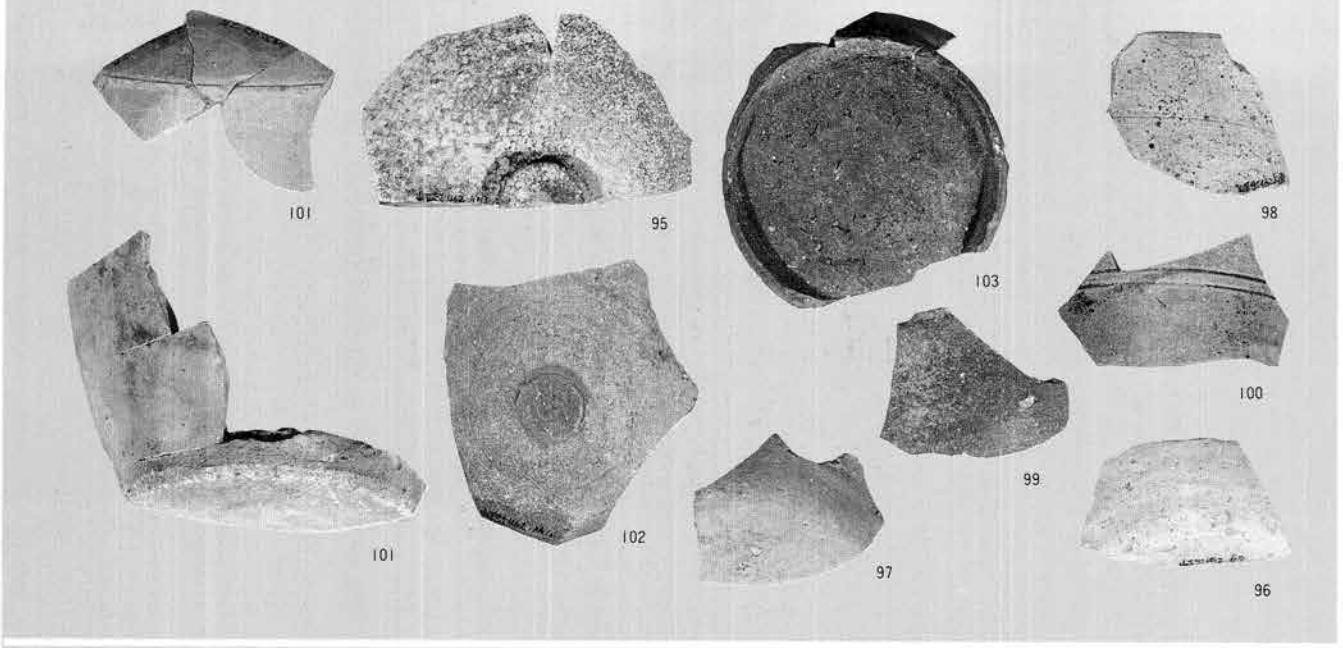


2　SI 502 B

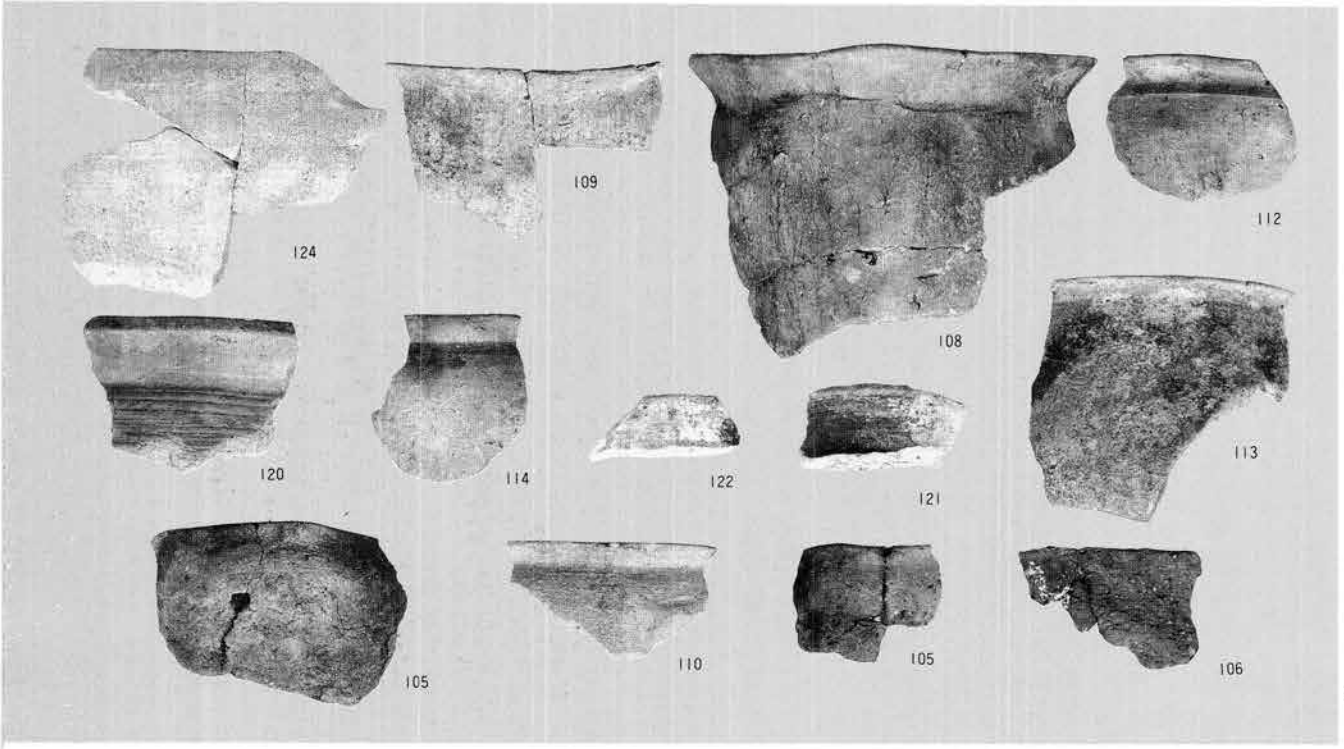


3　SI 502 B 土師器

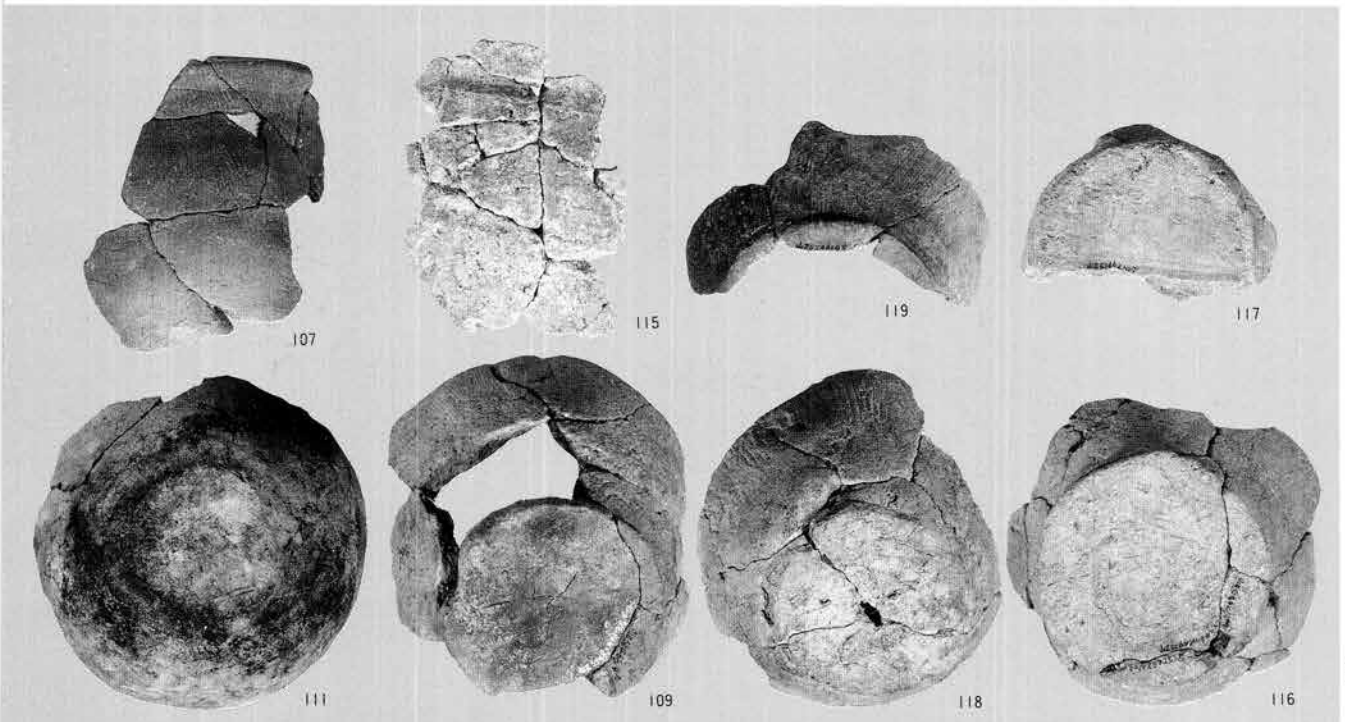
1:3



1　SI 462須恵器

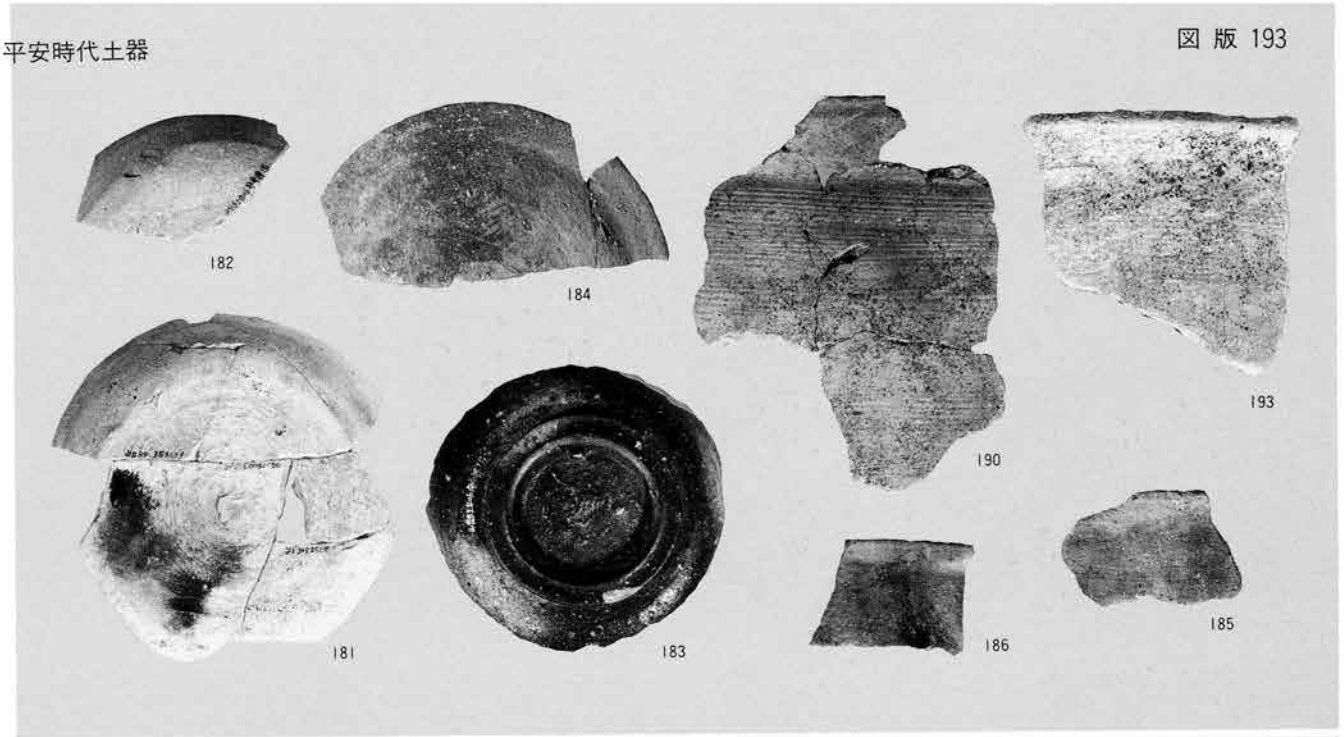


2　SI 462土師器

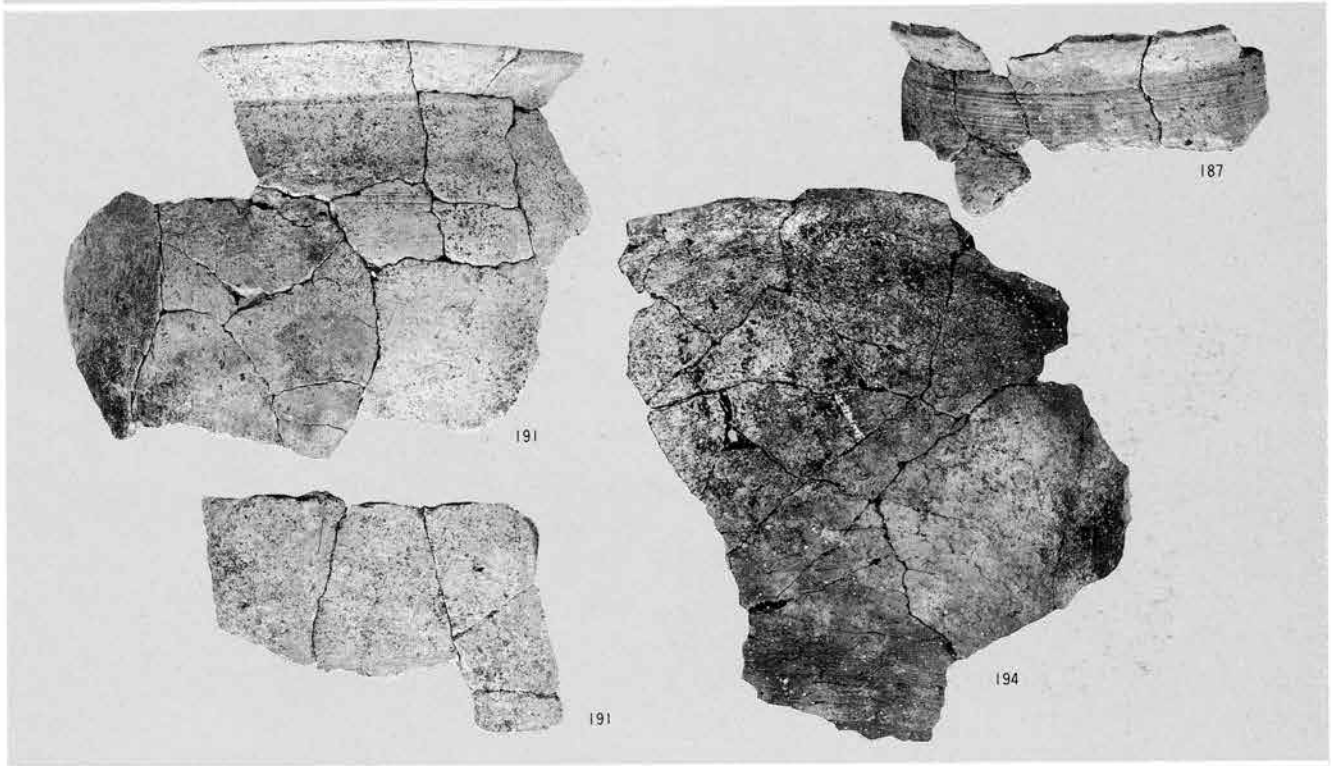


3　SI 462土師器

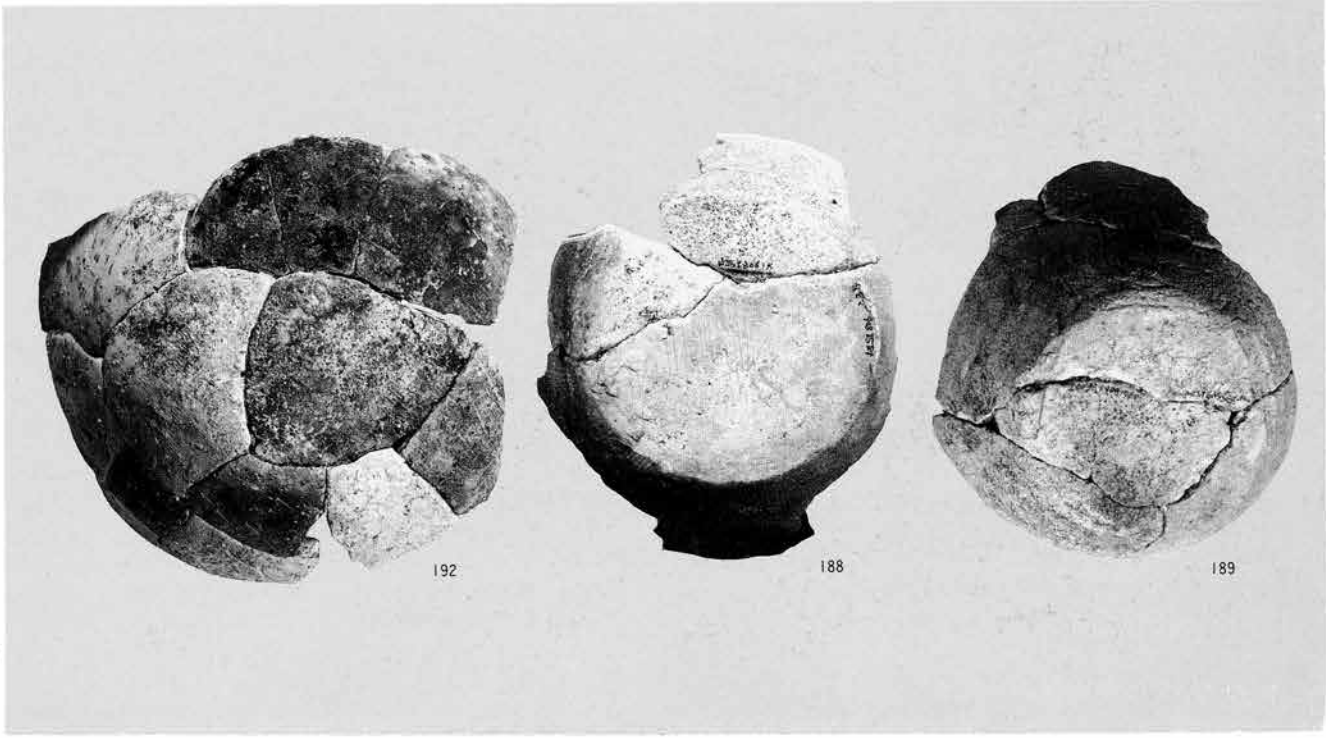
1：3



1　SI 806



2　SI 806土師器

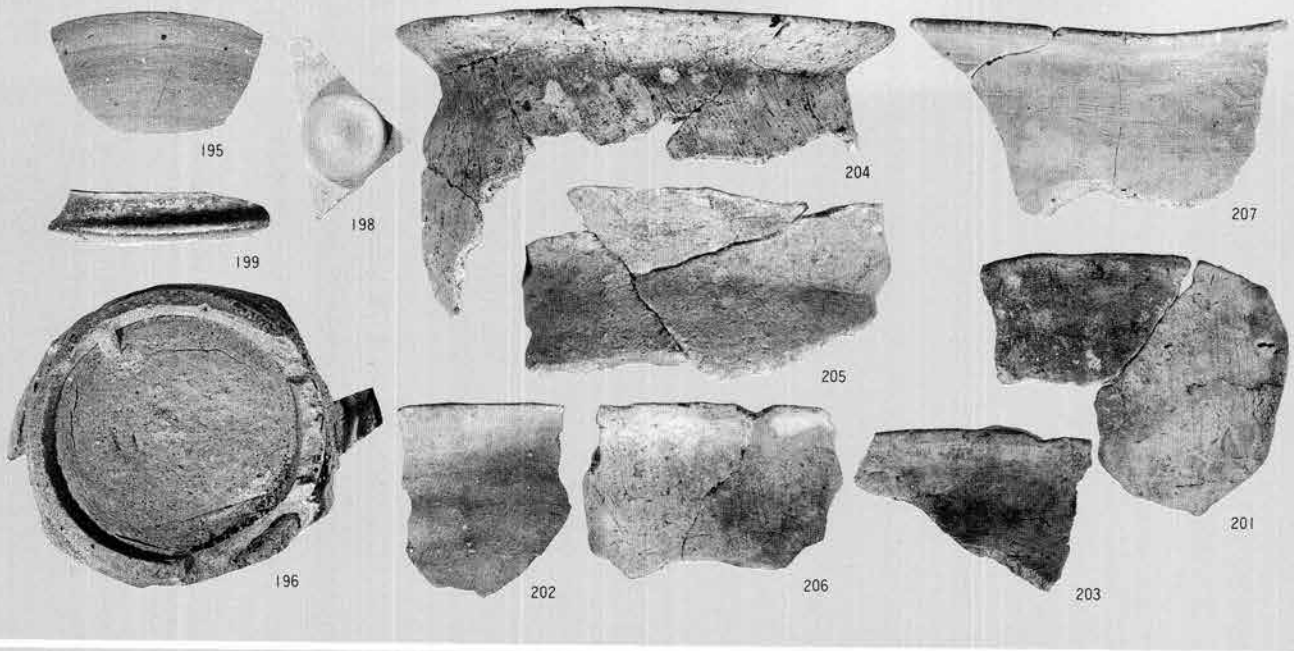


3　SI 806土師器

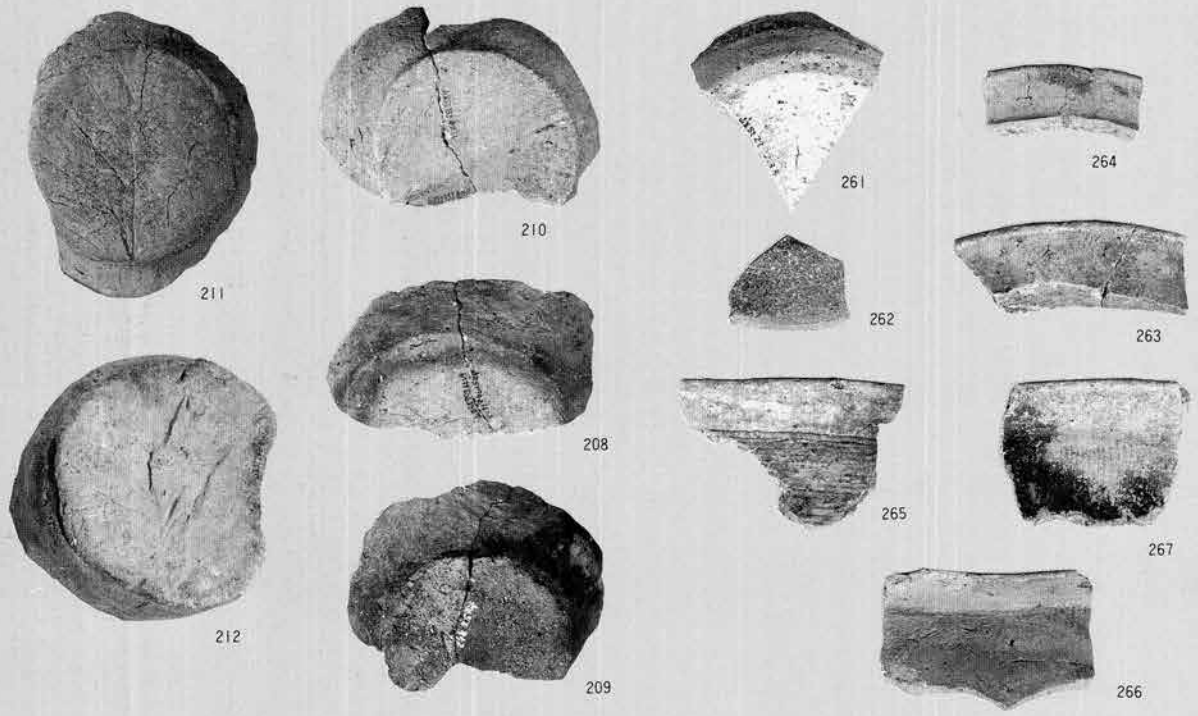
図 版 194

奈良・平安時代土器

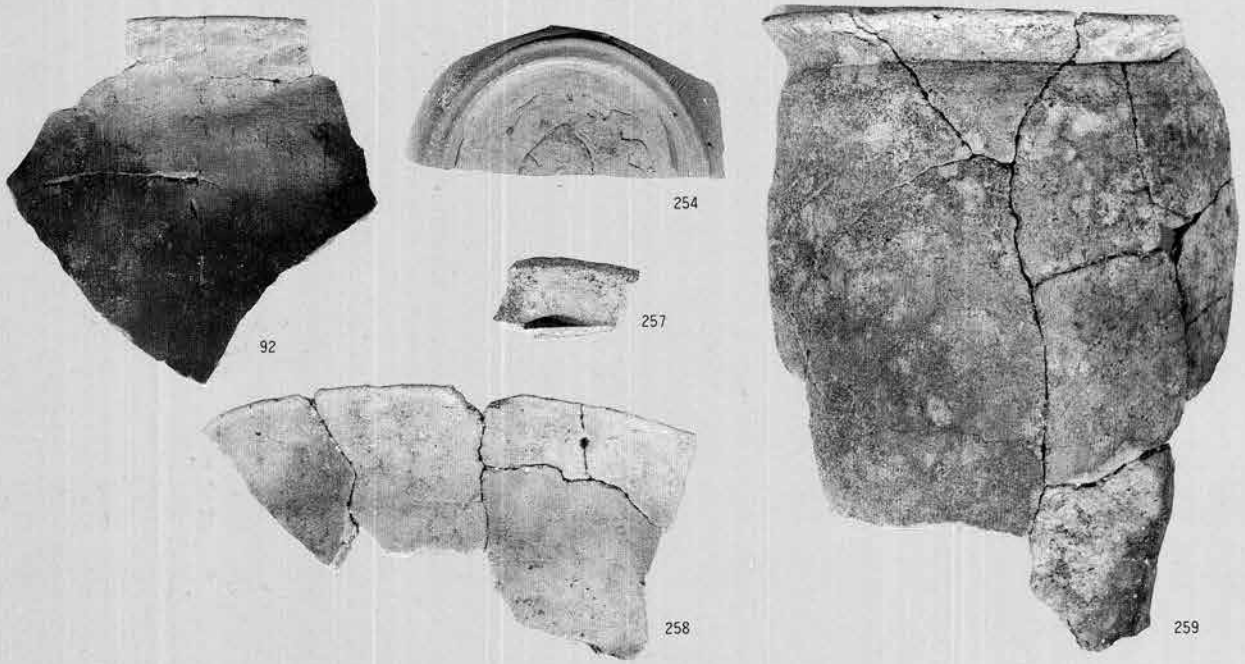
1:3



1 SI 752

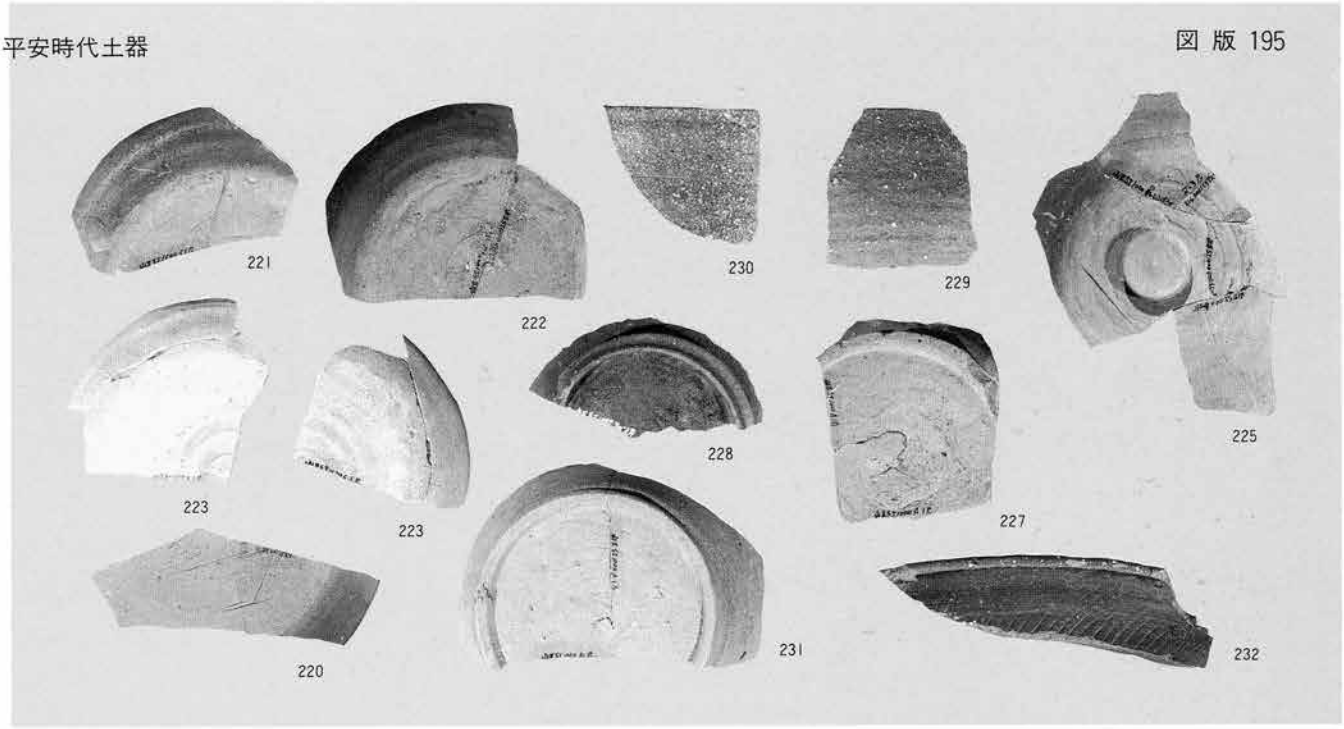


2 SI 27(261～267)
SI 752(208～212)

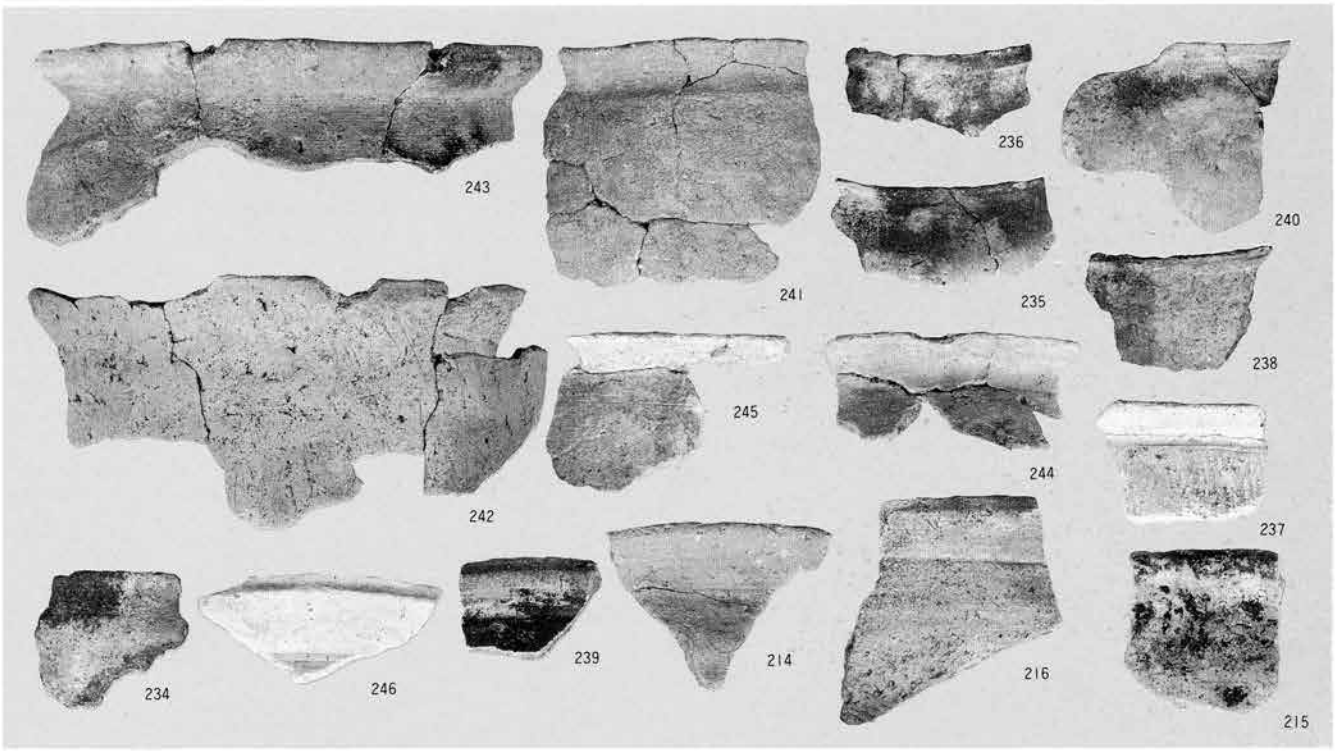


3 SI 630(92)
SI 1461(254・257～259)

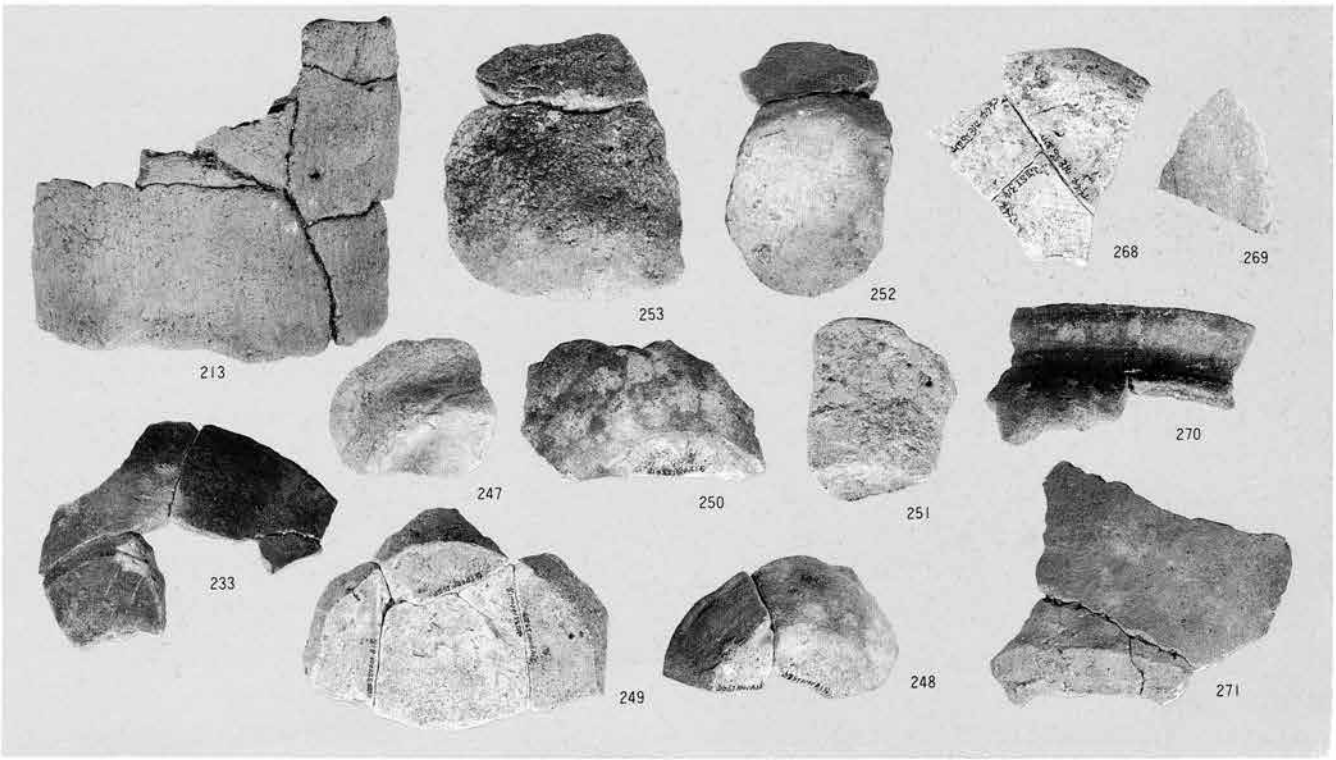
1:3



1　SI 1000須恵器



2　SI 1000土師器

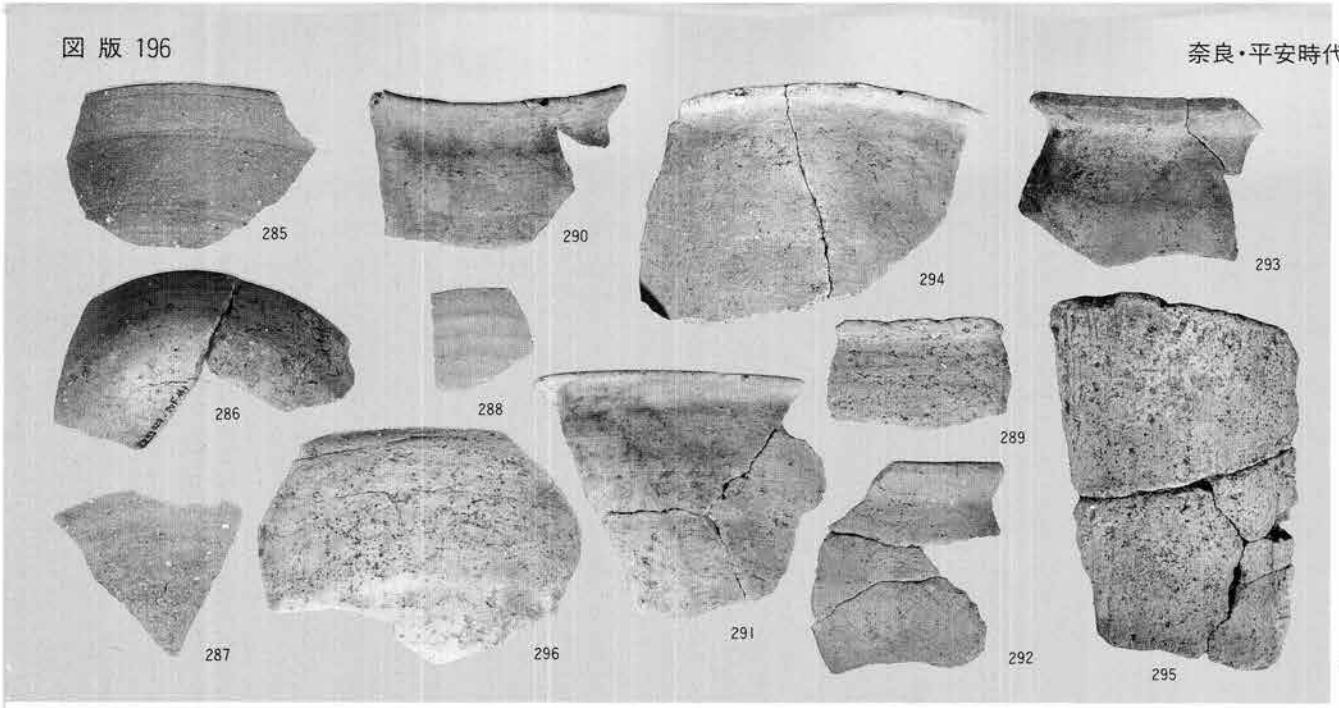


3　SI 314(268～271)
SI 1000土師器
(213・233・247～253)

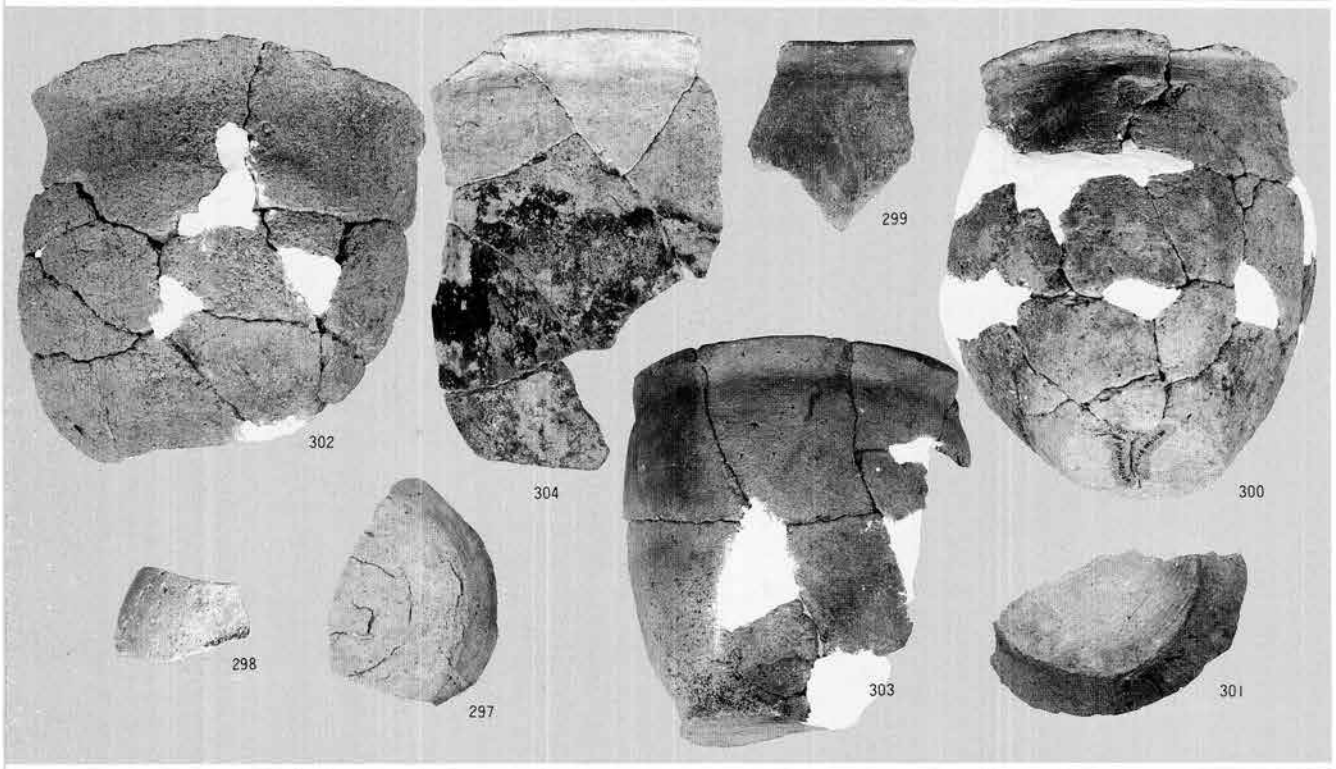
図 版 196

奈良・平安時代土器

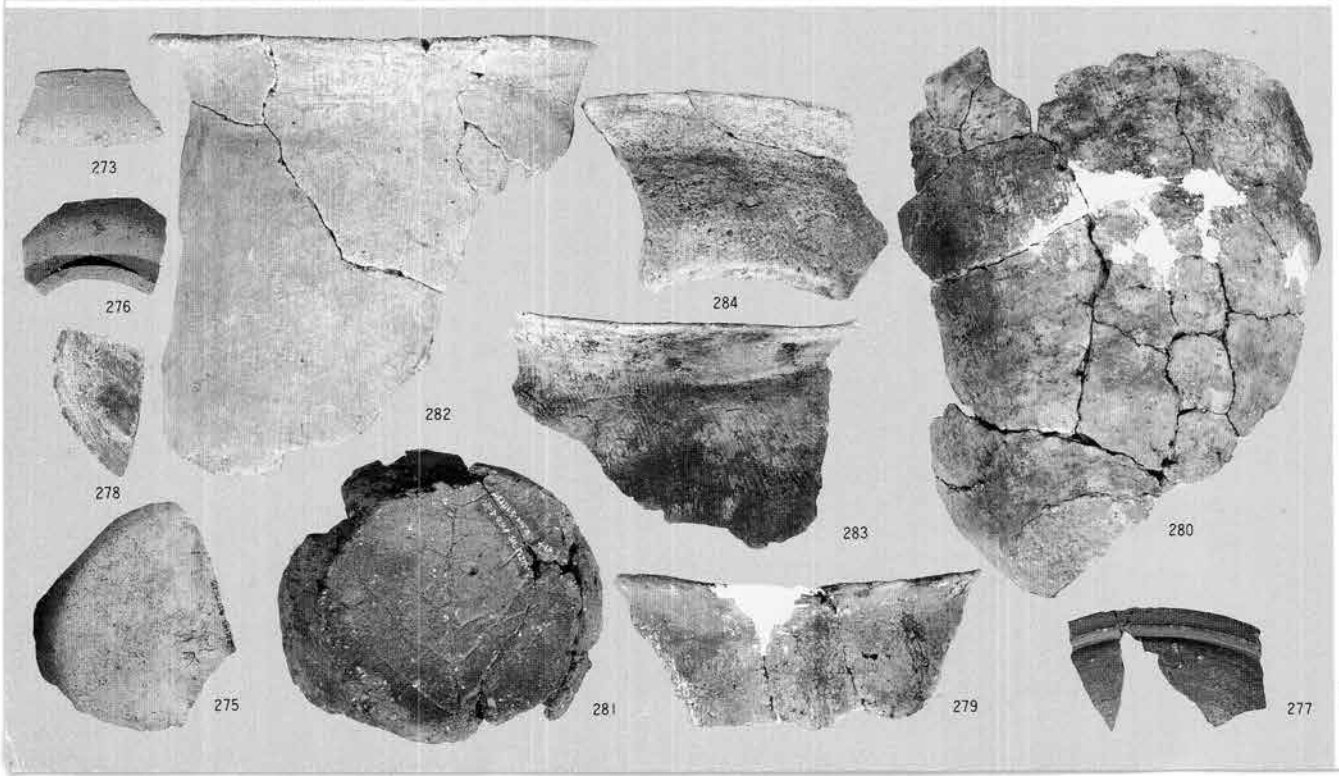
1:3



1 SI 429

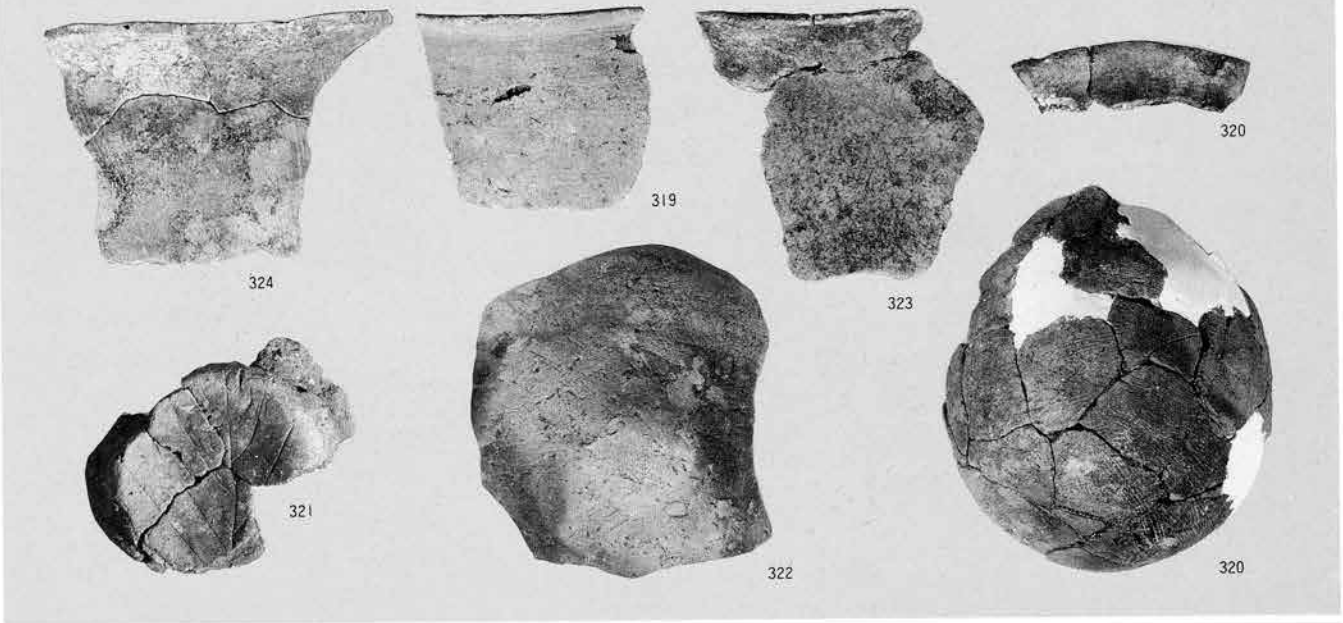


2 SI 1300

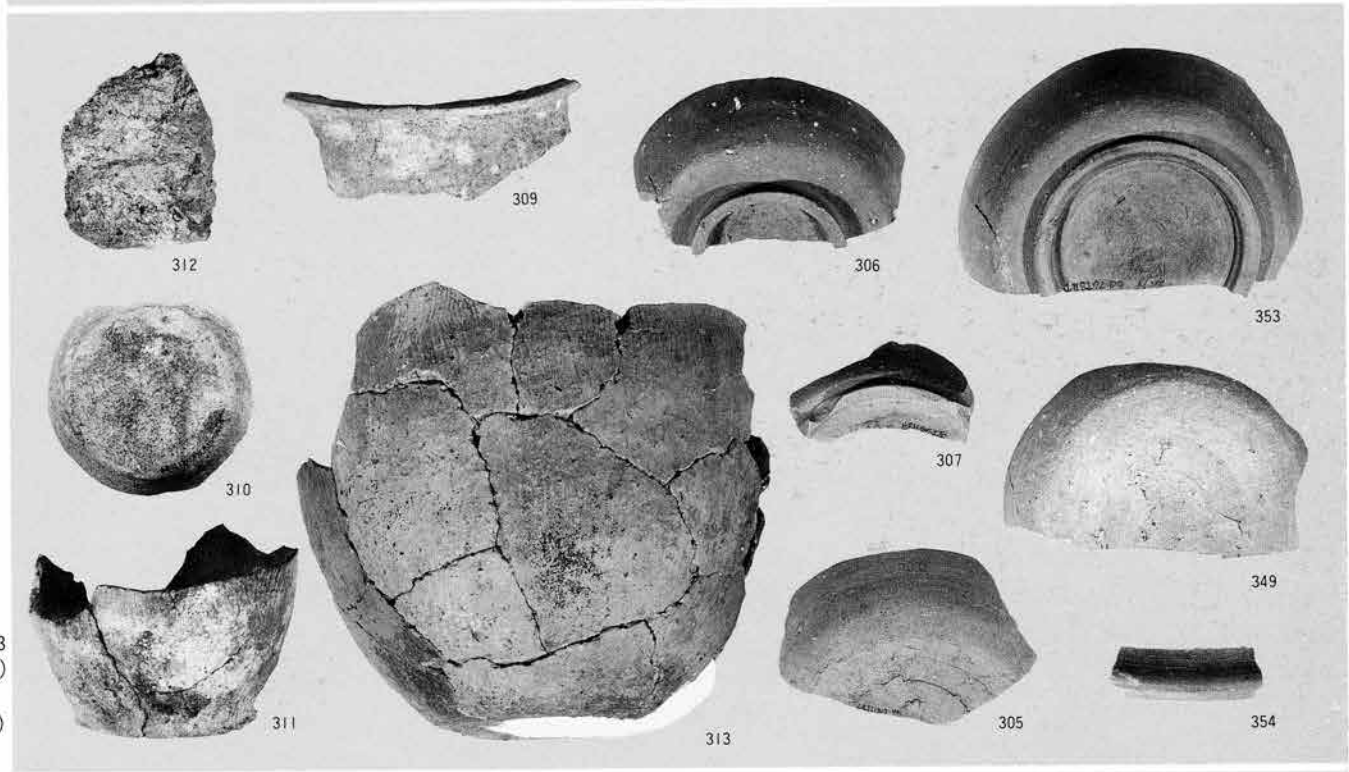


3 SI 1315

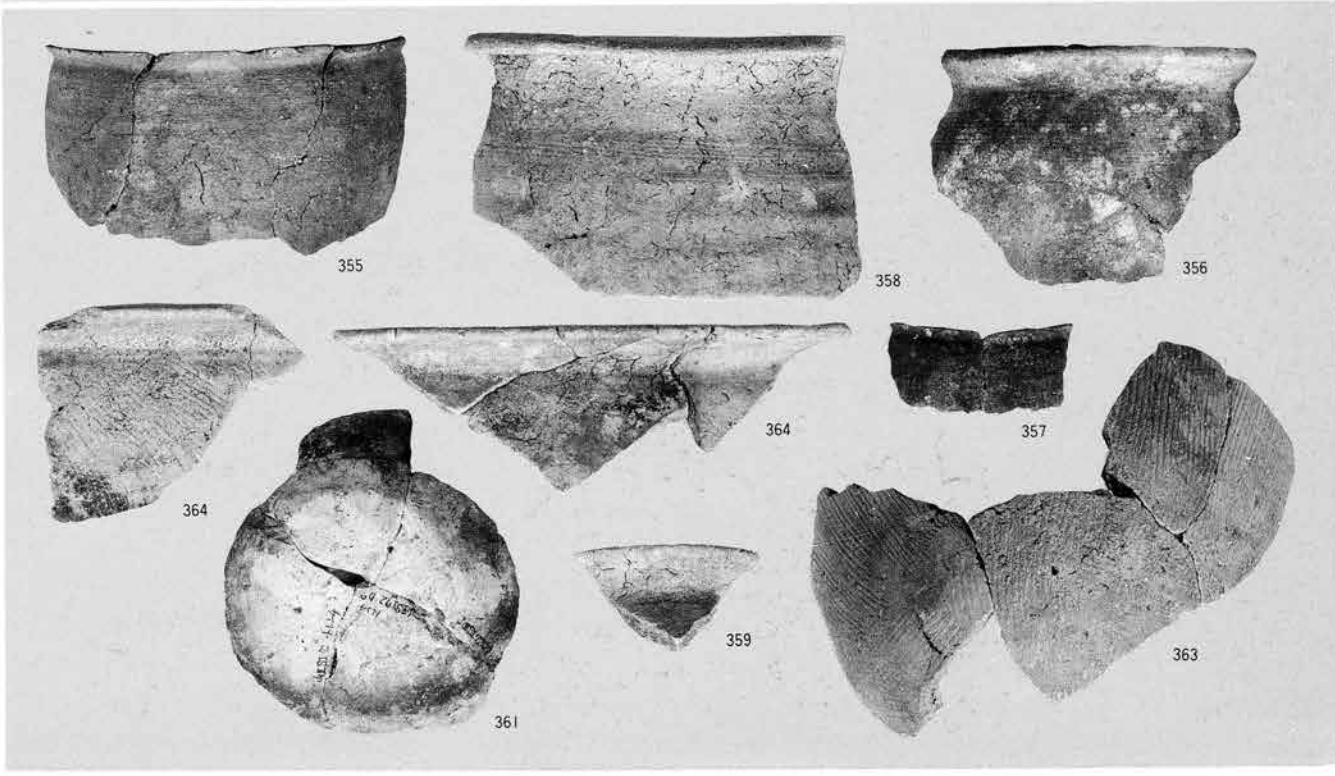
1:3



SI 458土師器

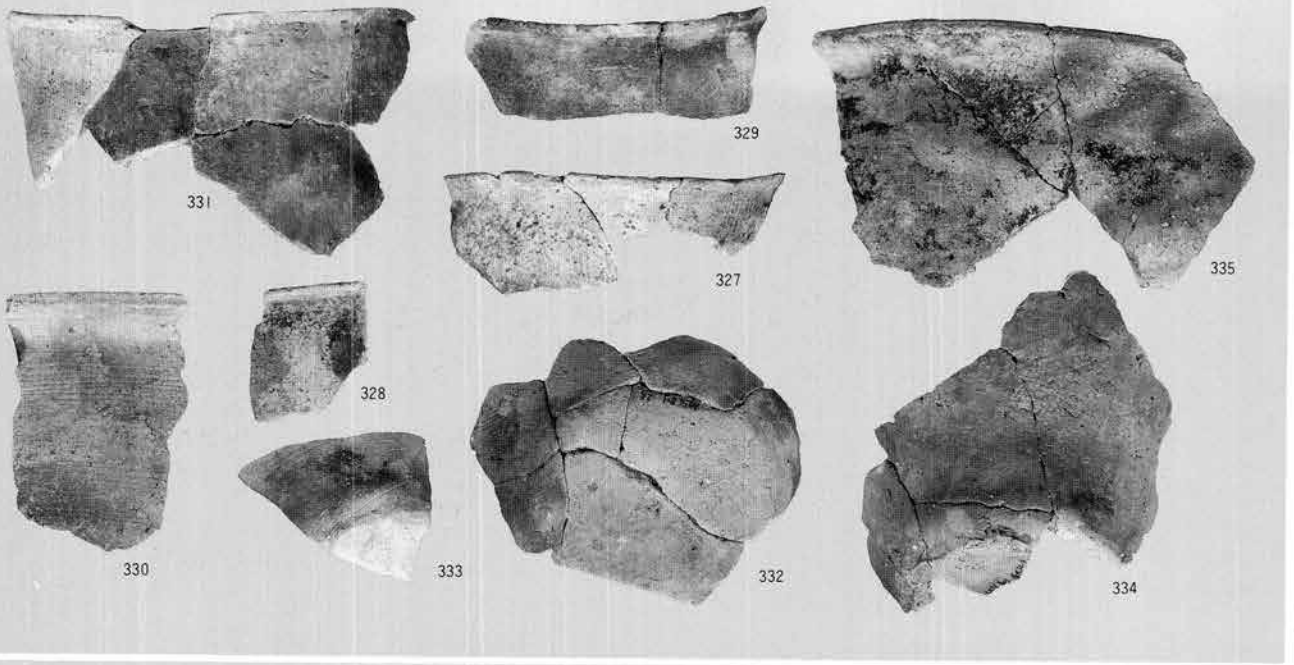


SI 72須恵器（349・353・354）
SI 1307（305～307・309～313）

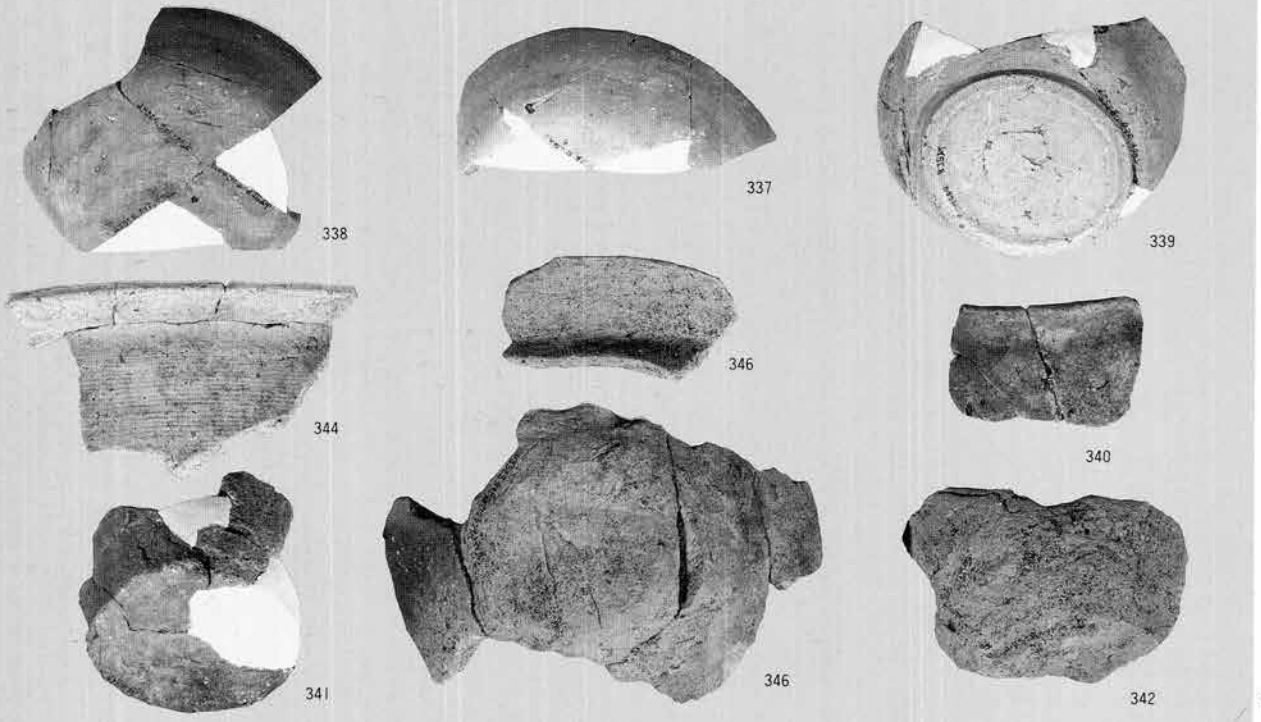


SI 72土師器

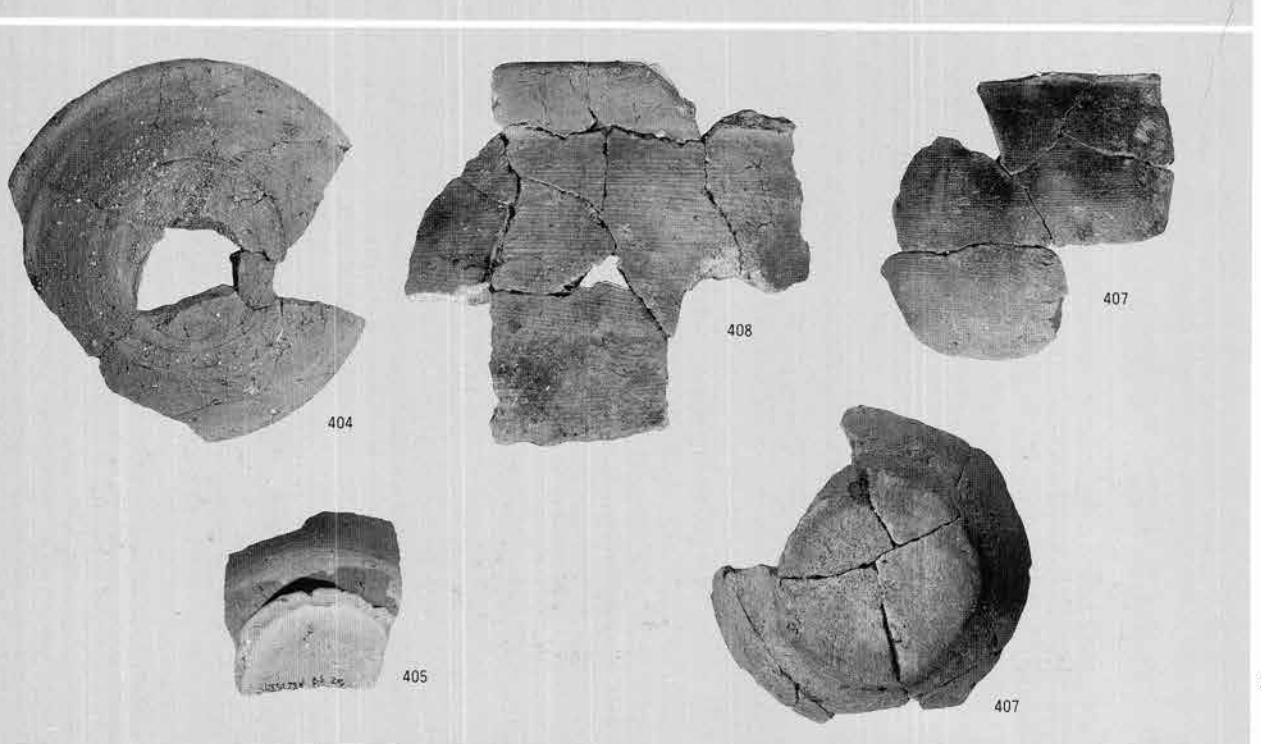
1:3



1　SI 803土師器

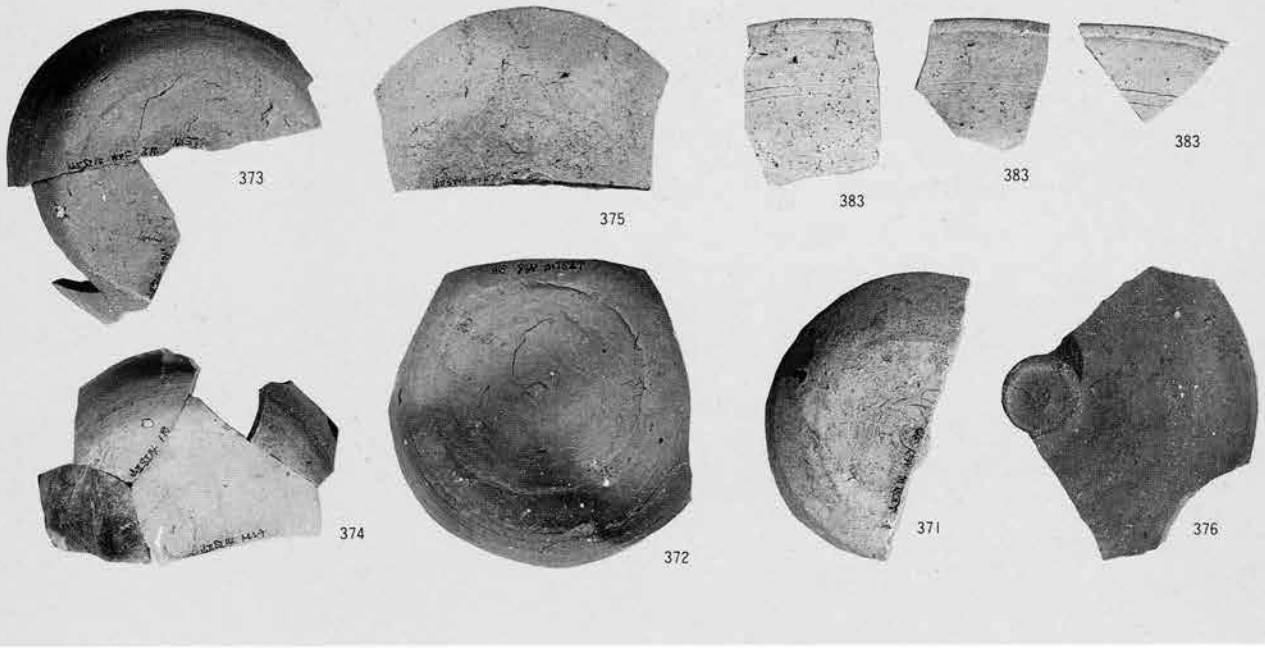


2　SI 8

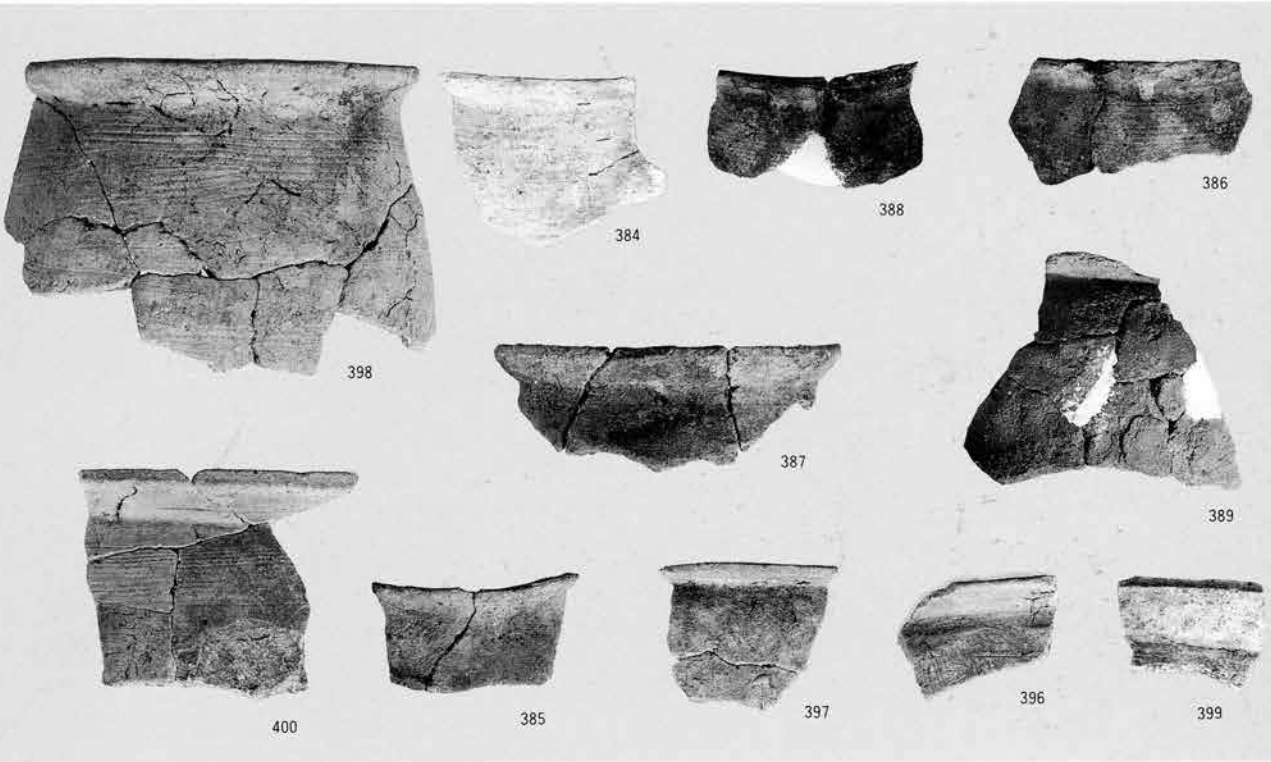


3　SI 280

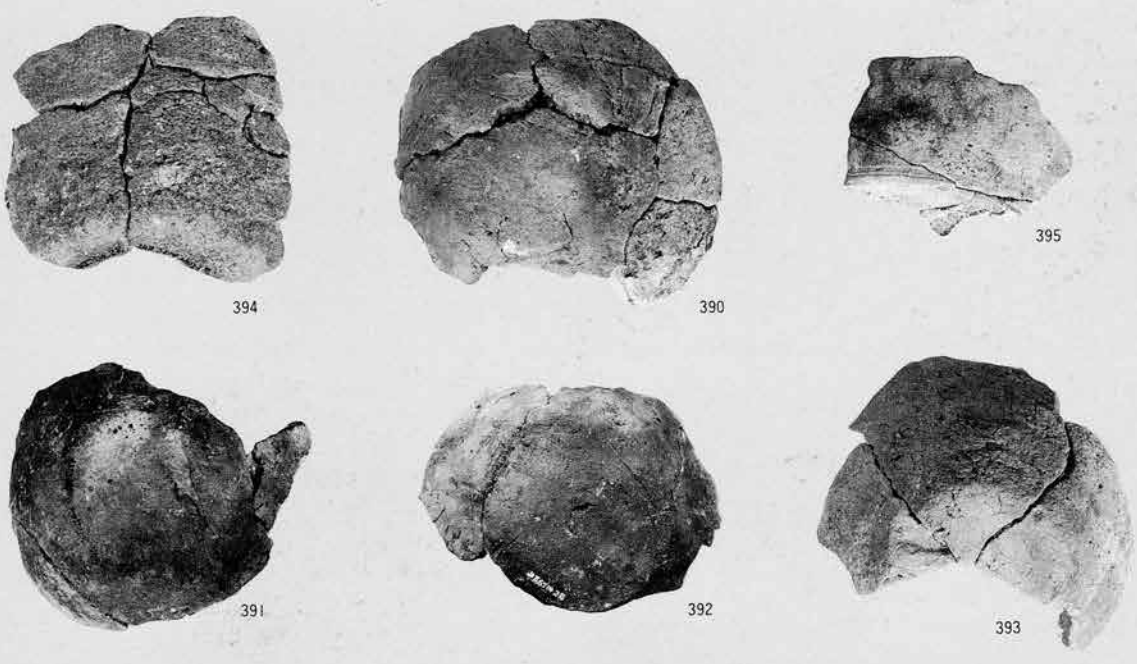
1:3



1　SI 14須恵器

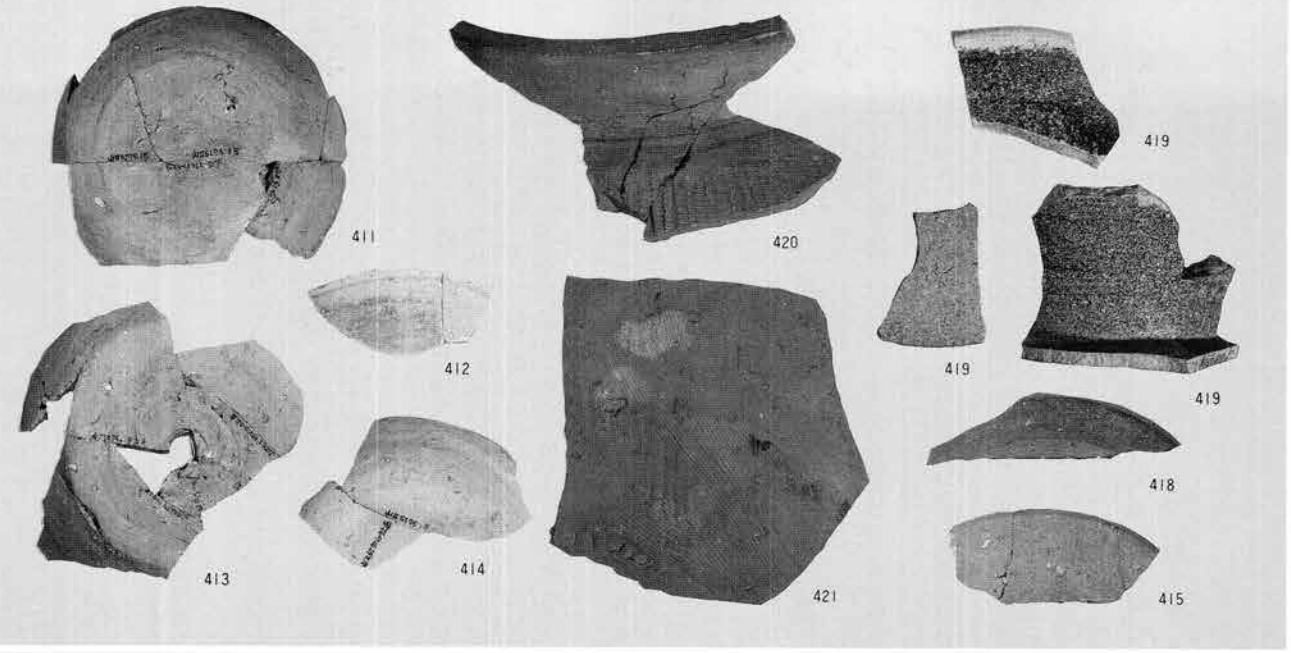


2　SI 14土師器

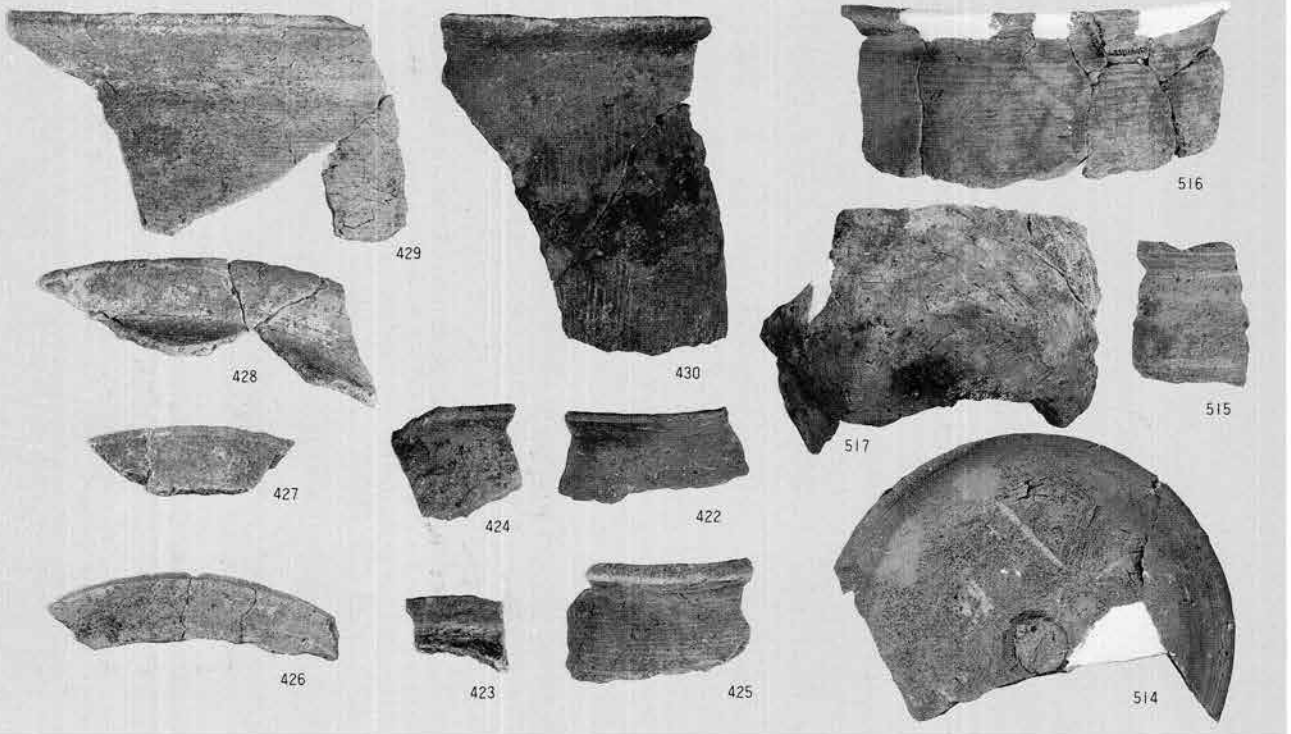


3　SI 14土師器

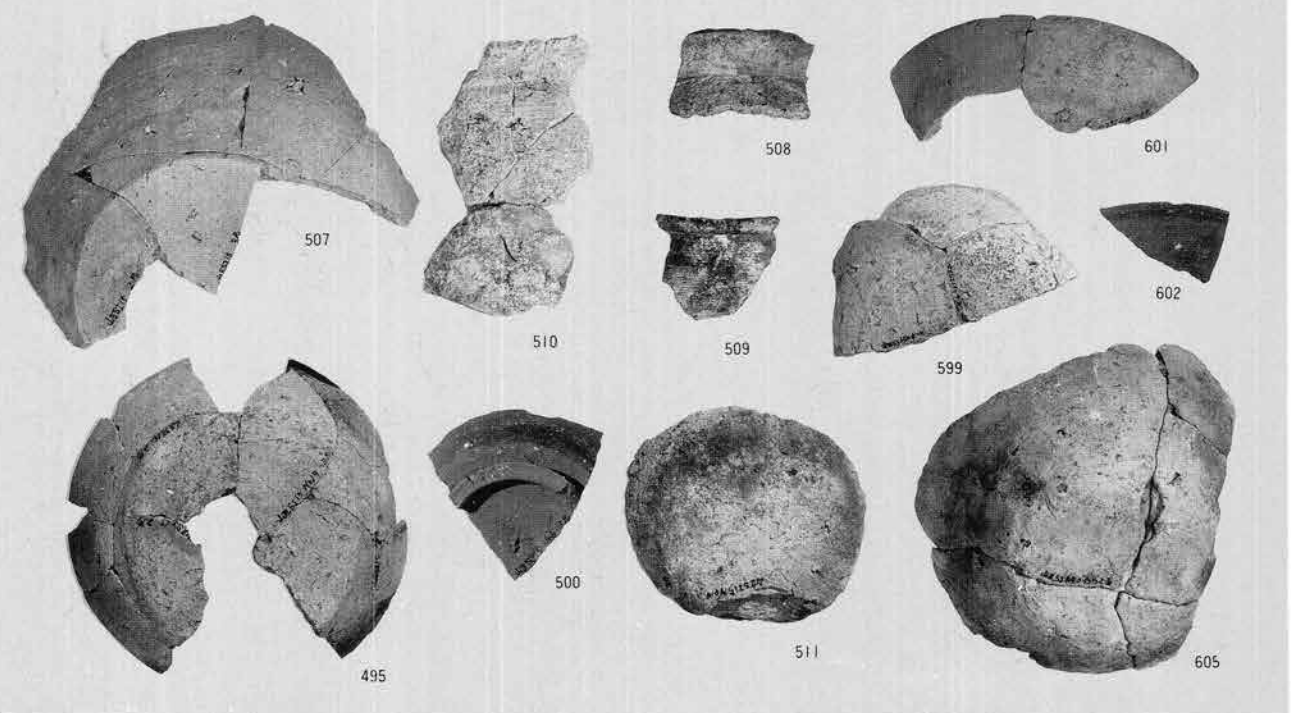
1:3



1　SI 75須恵器

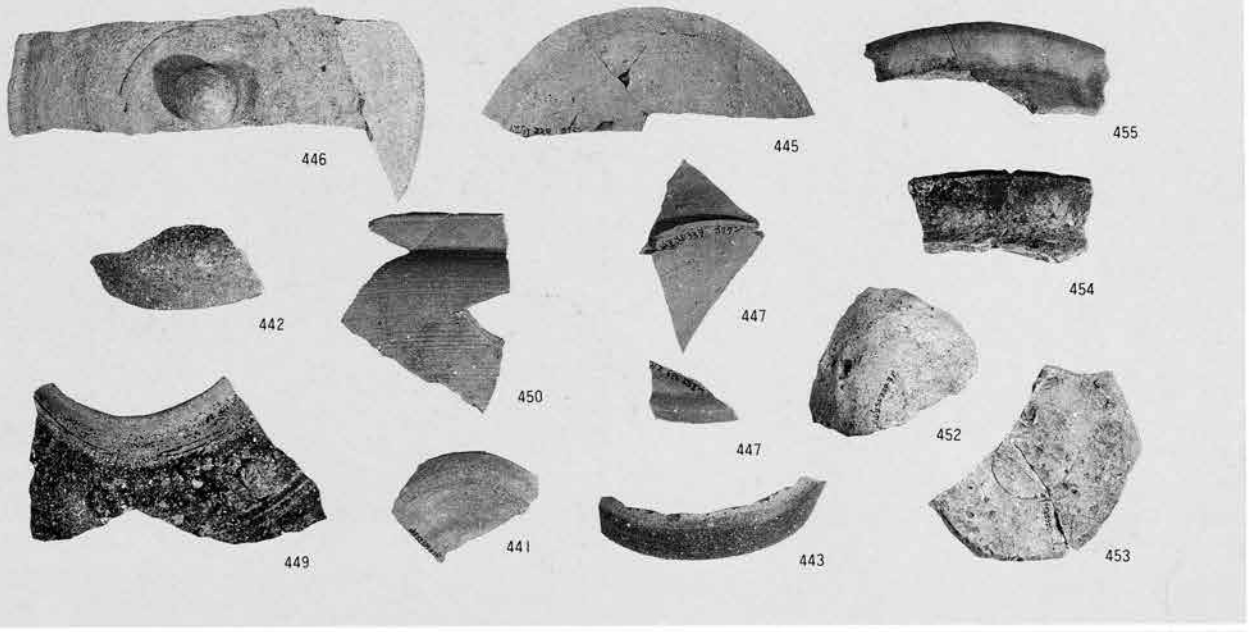


2　SI 11(514～517)
SI 75土師器
(422～430)

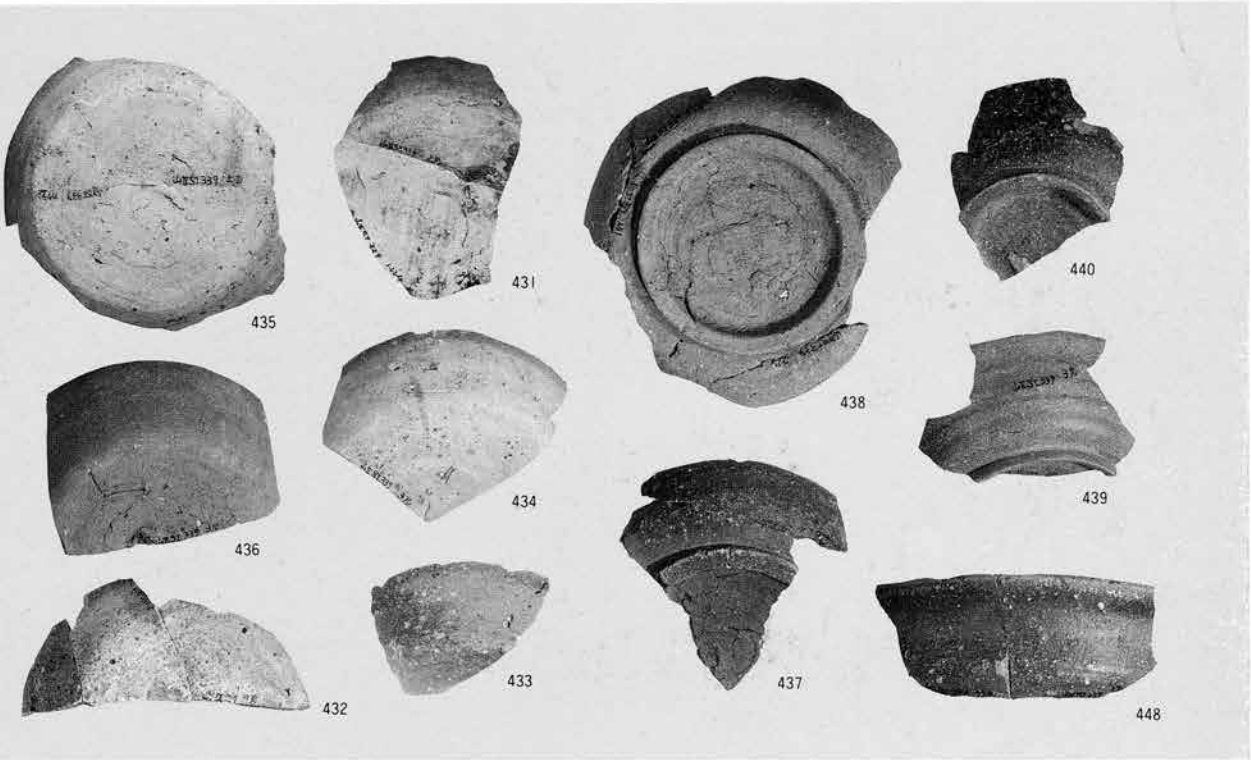


3　SI 15
(495・500・507～511)
SI 650
(599・601・602・605)

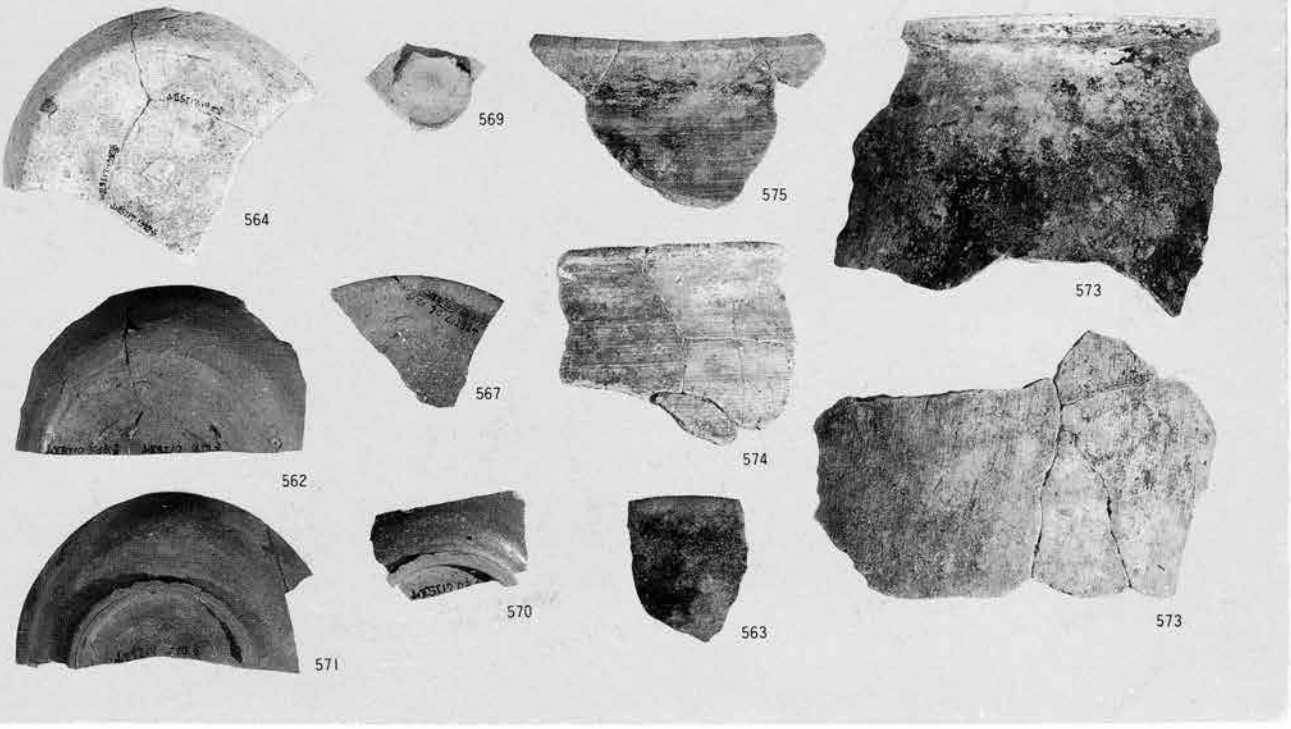
1:3



1　SI 339



2　SI 339須恵器

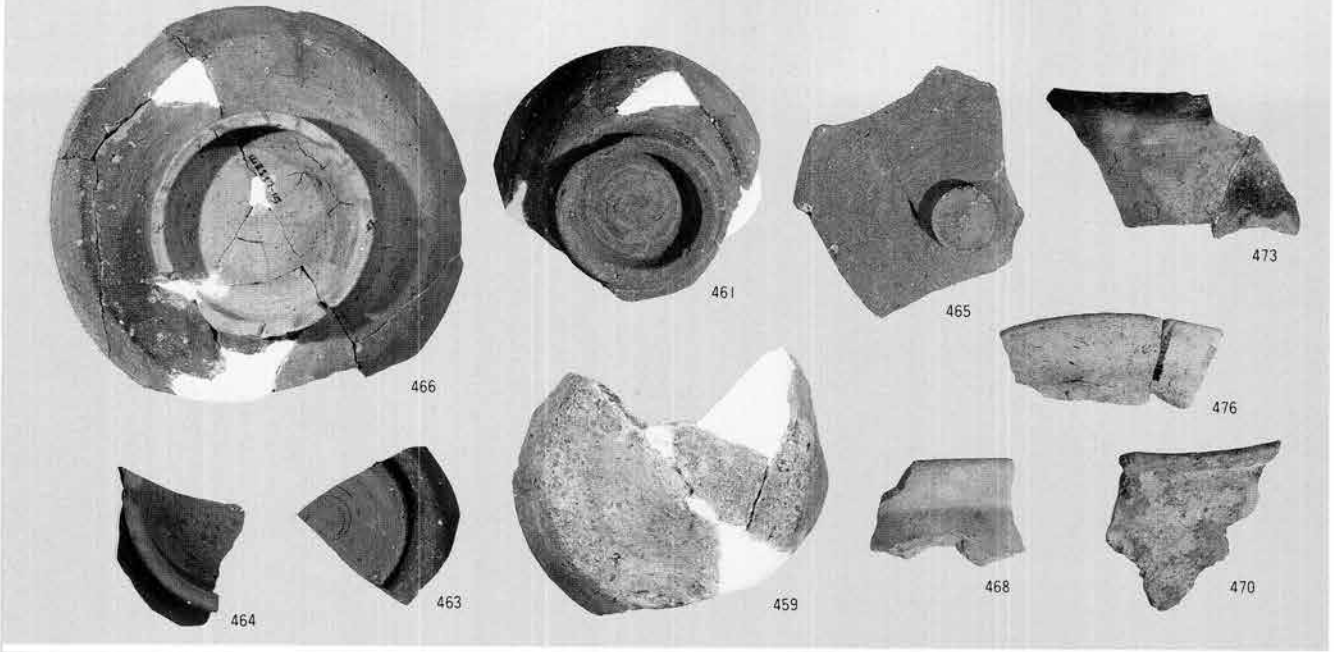


3　SI 17

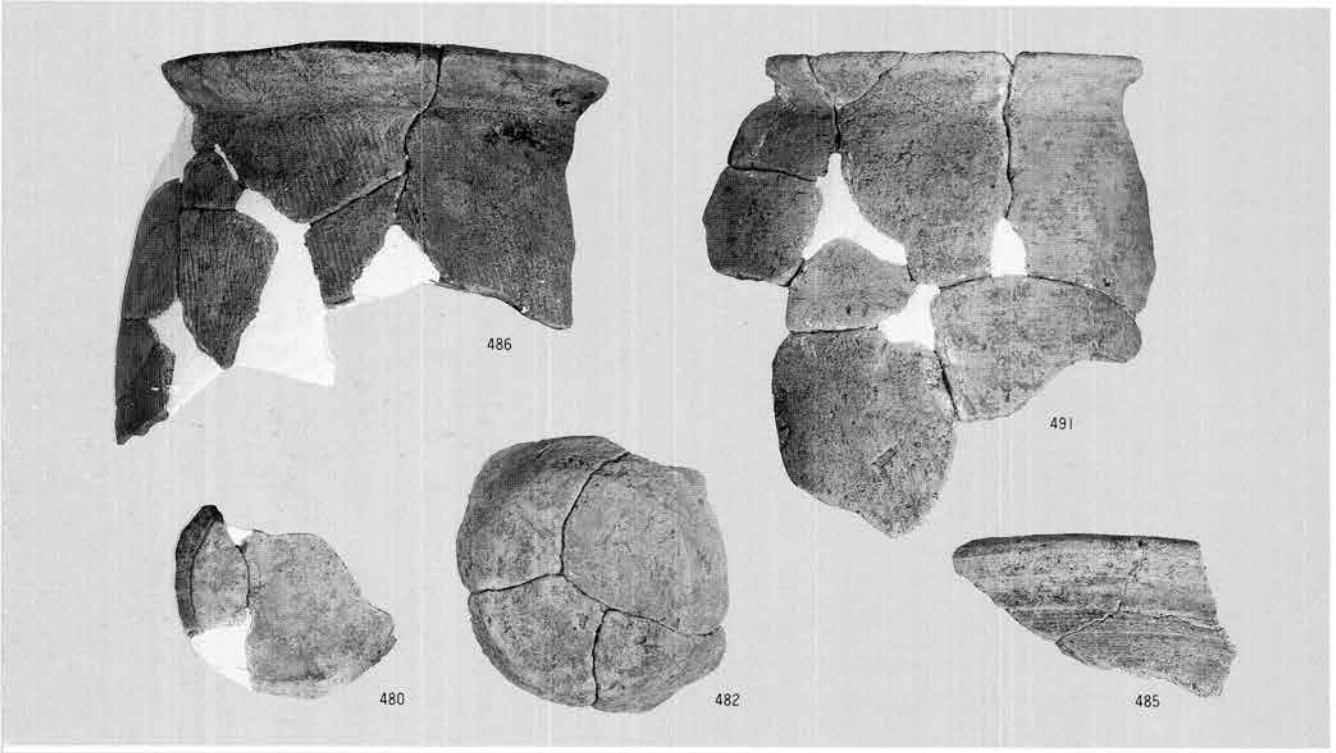
図 版 202

奈良・平安時代土器

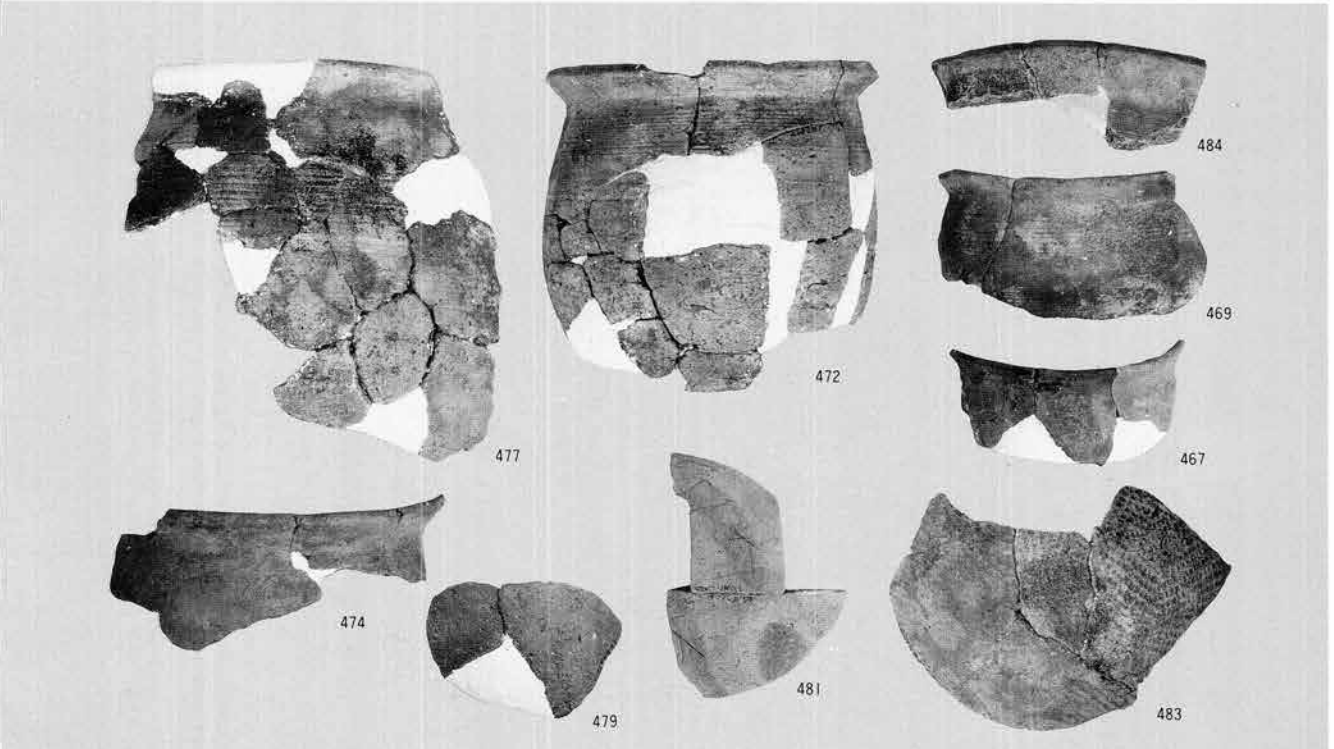
1:3



1　SI 7

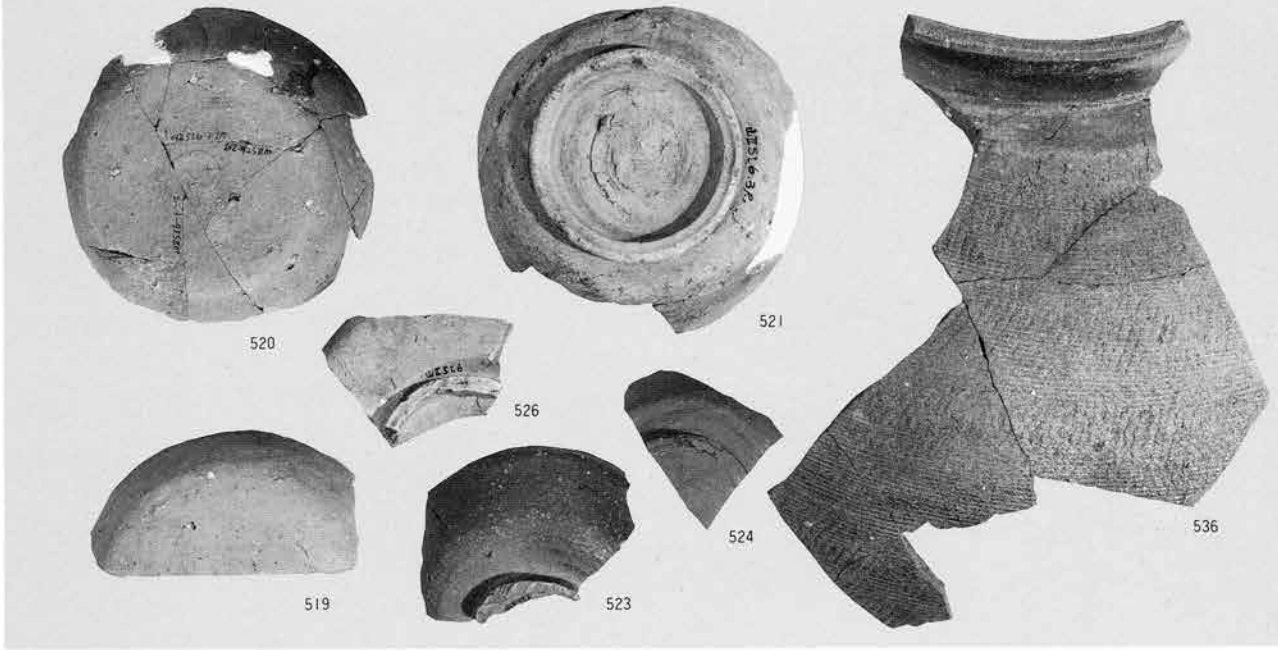


2　SI 7 土師器

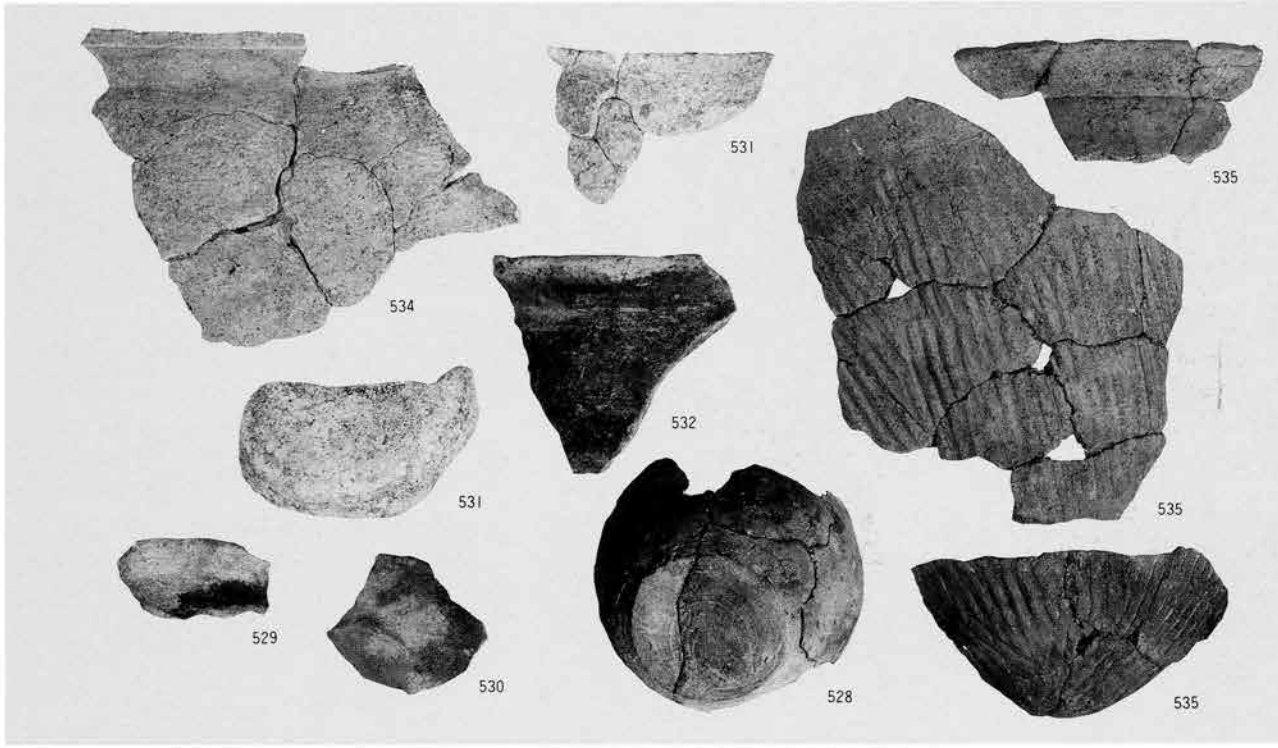


3　SI 7 土師器

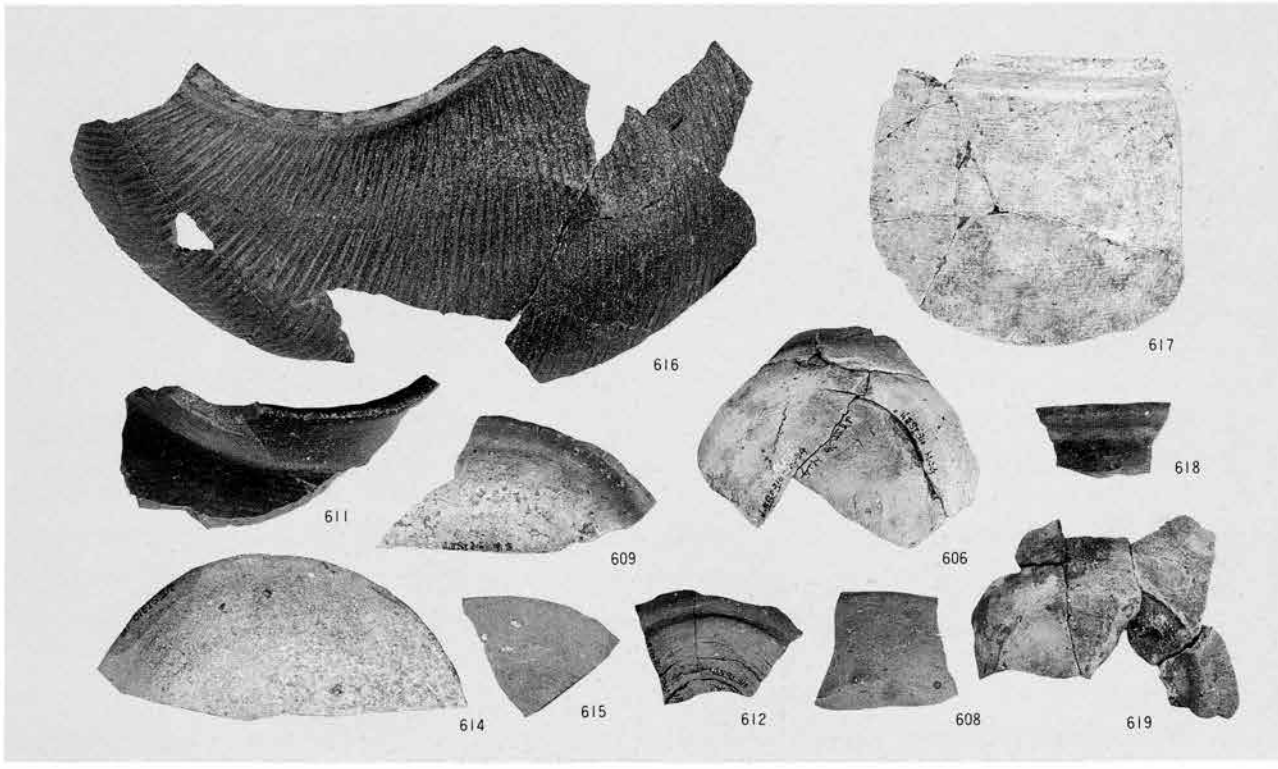
1：3



1　SI 6須恵器

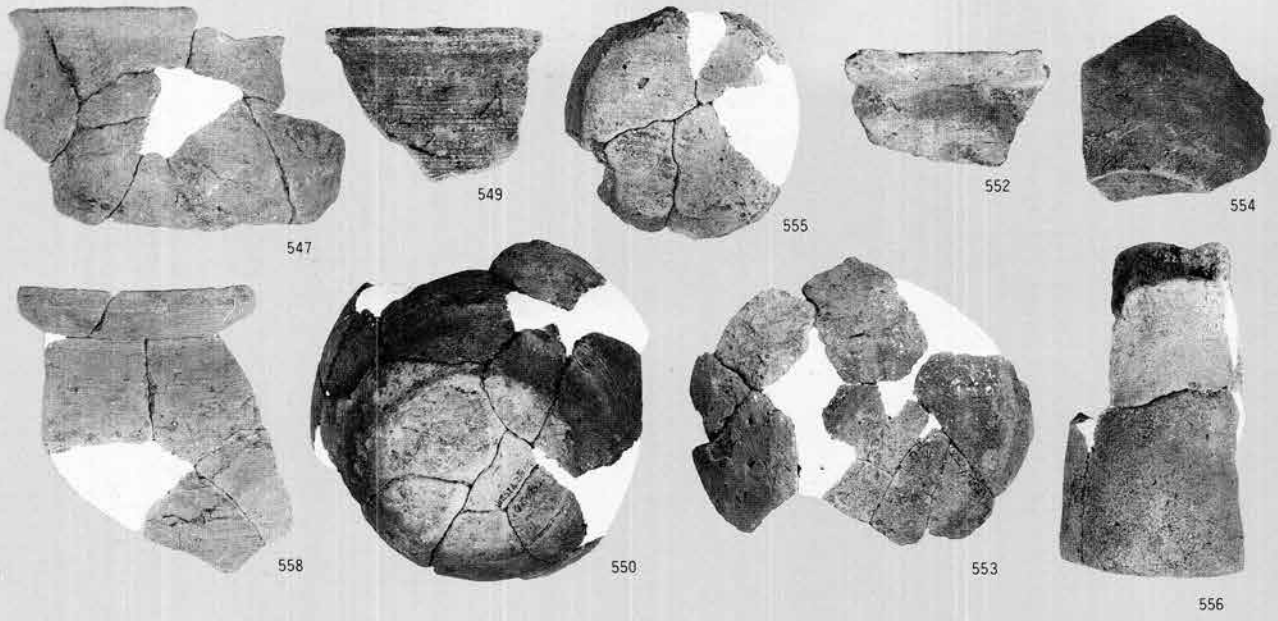


2　SI 6土師器

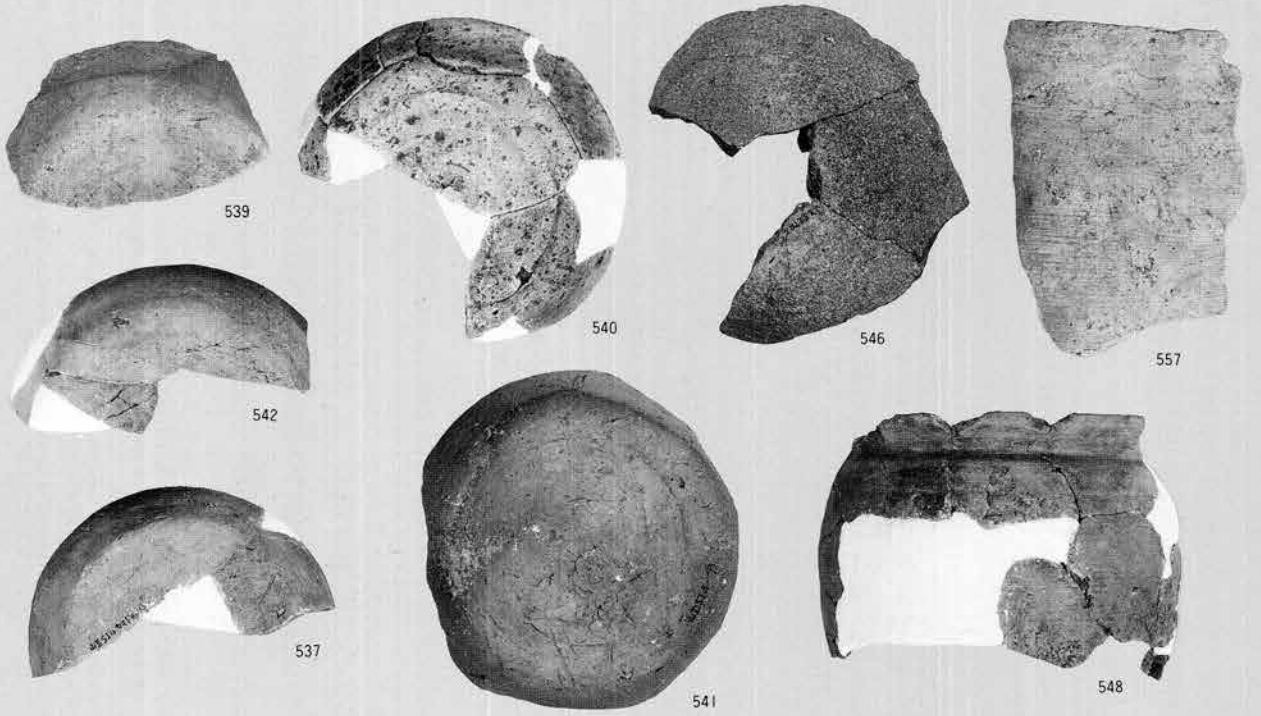


3　SI 310

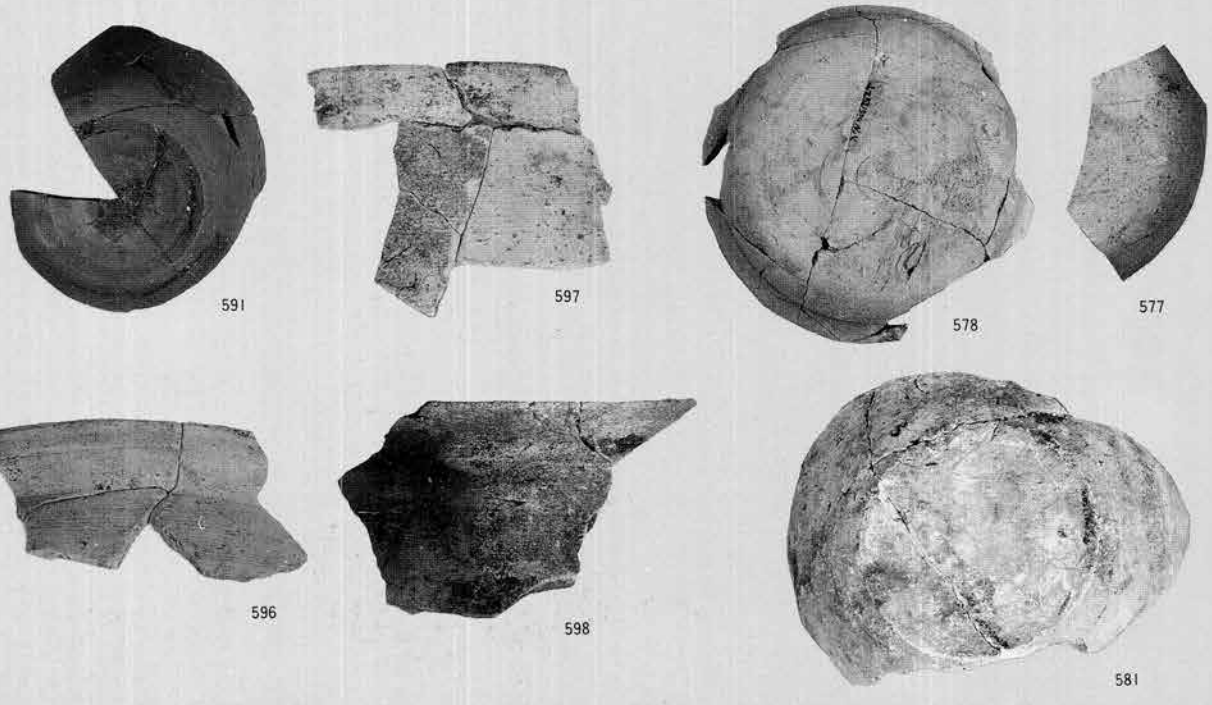
1:3



1 SI 4

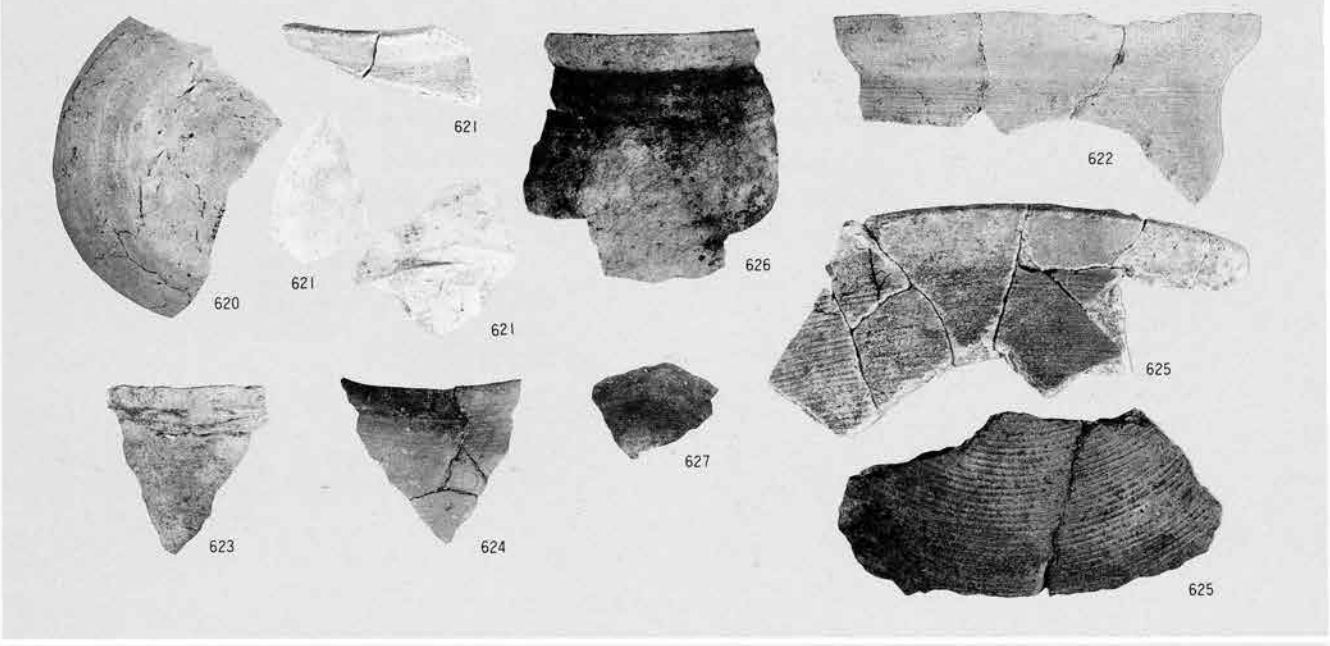


2 SI 4

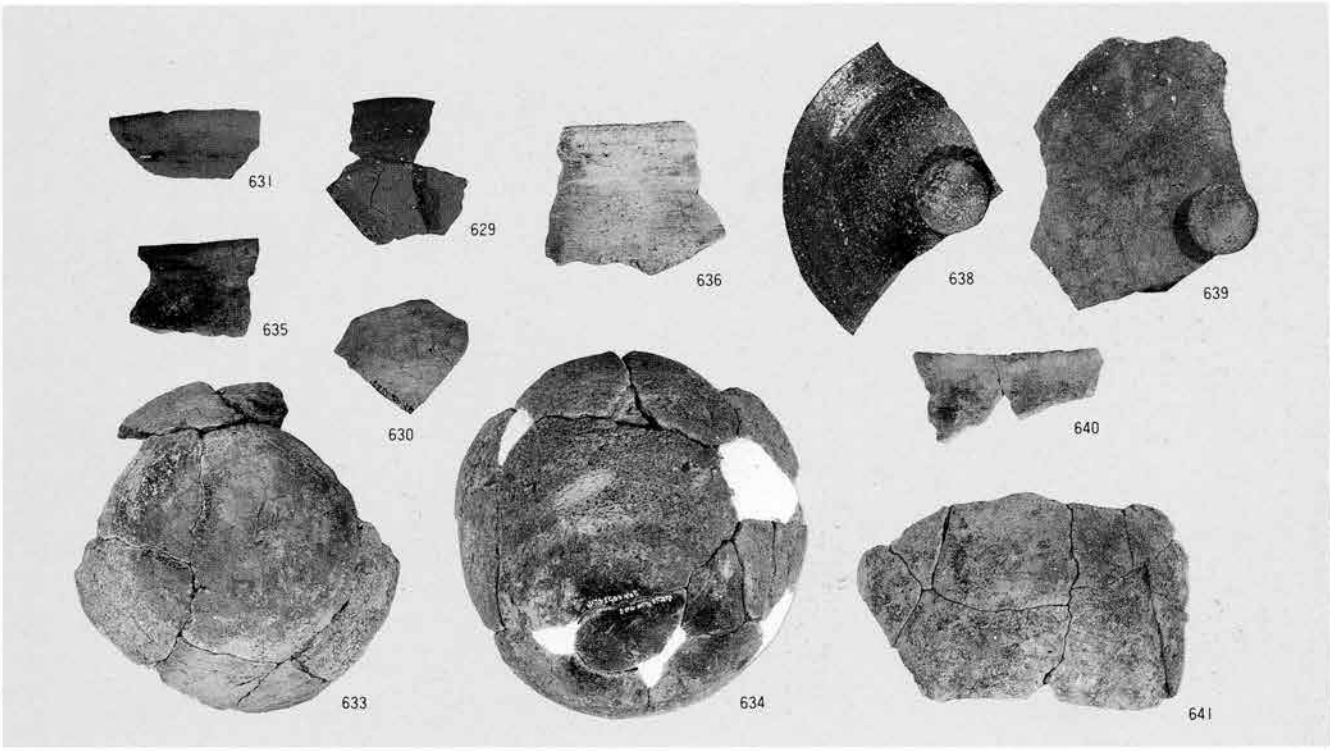


3 SI 60
(591・596～598)
SI 1500
(577・578・581)

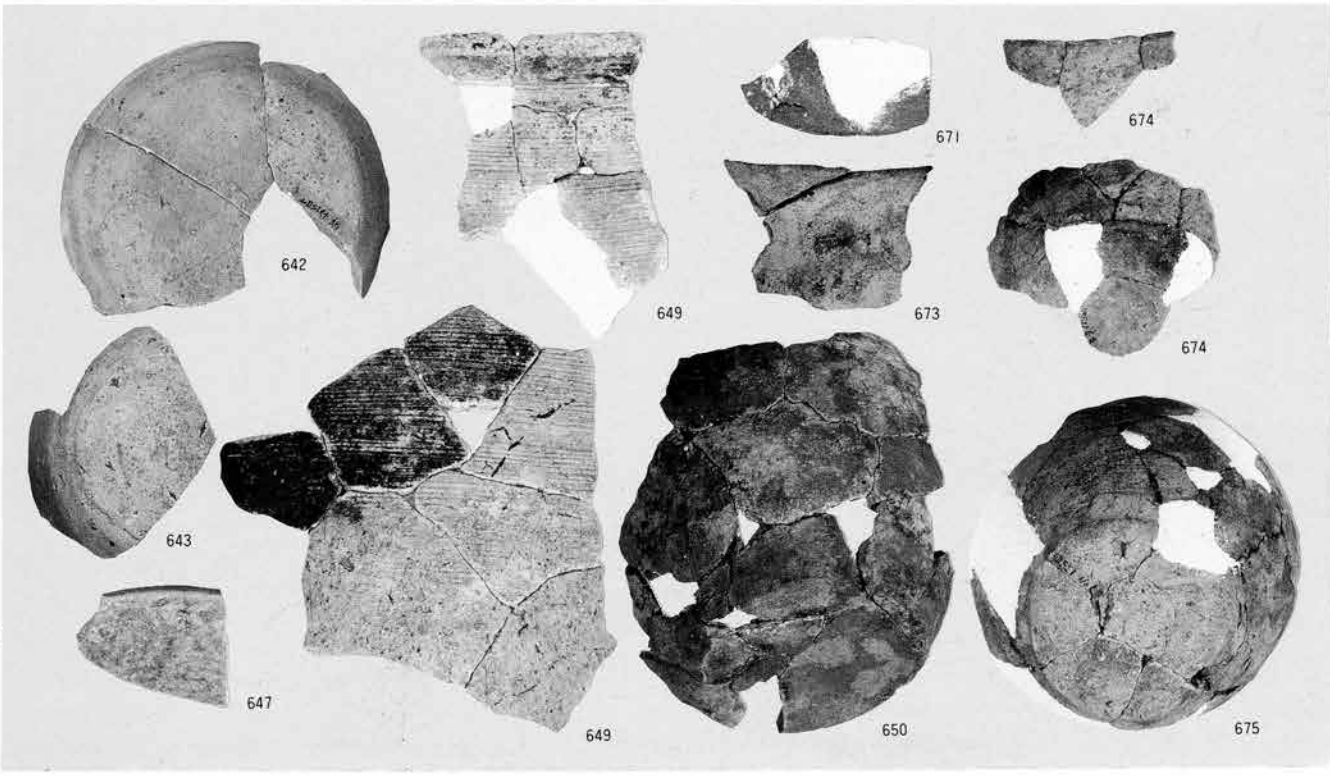
1：3



1　SI 33

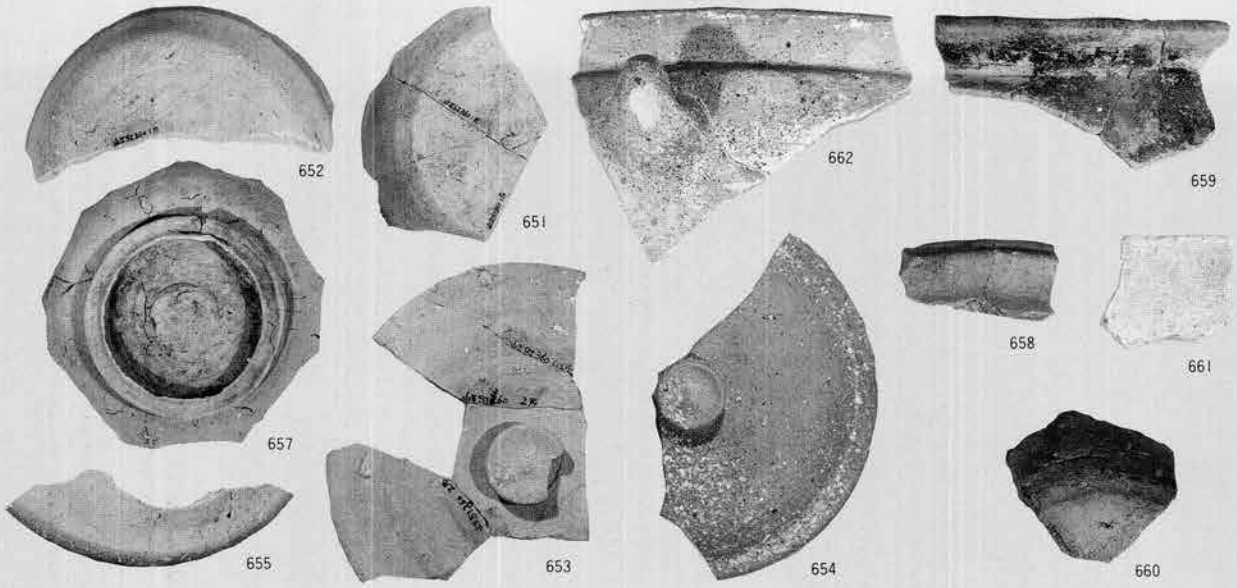


2　SI 10(638～641)
SI 500 (629～631
・633～635)

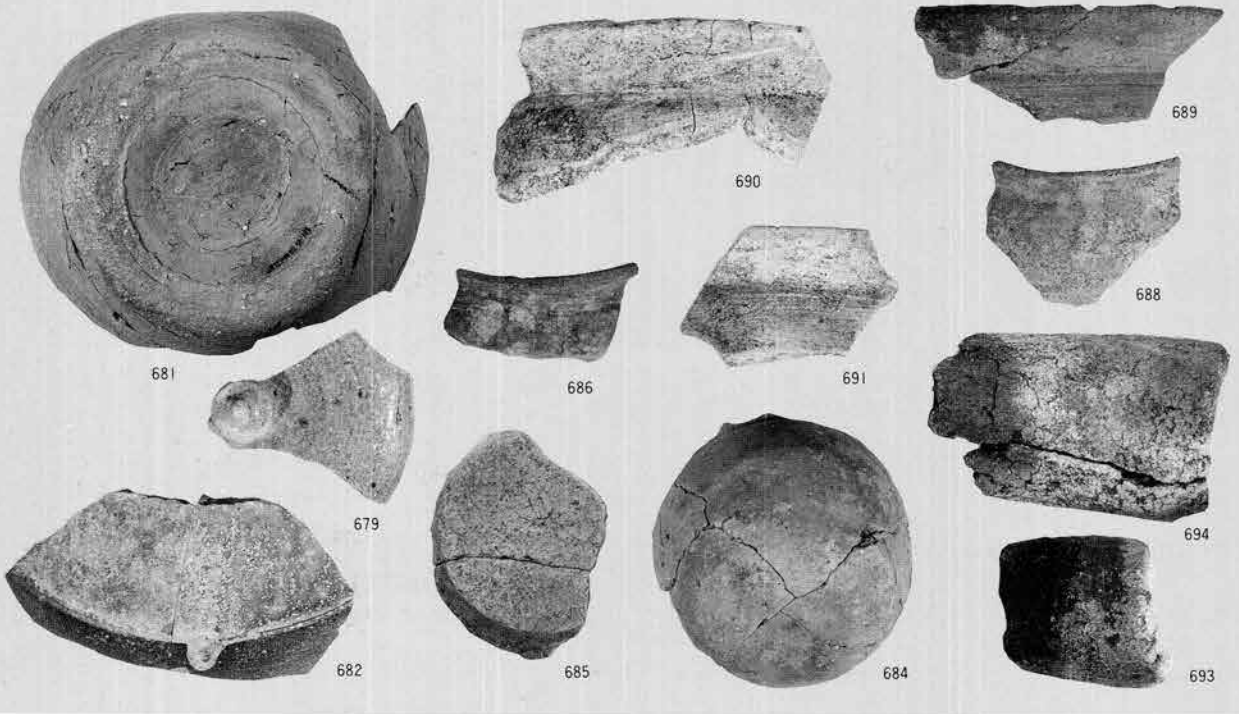


3　SI 1 (671・673～675)
SI 41 (642・643・647
・649・650)

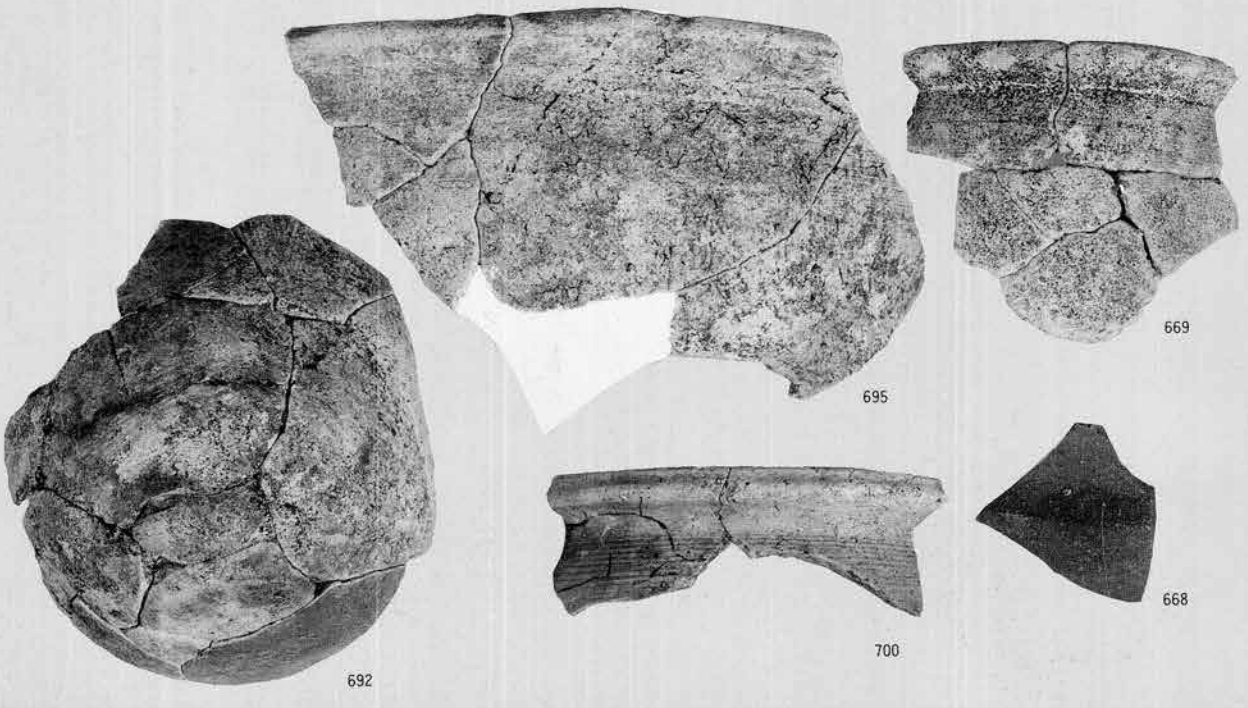
1:3



1 SI 360

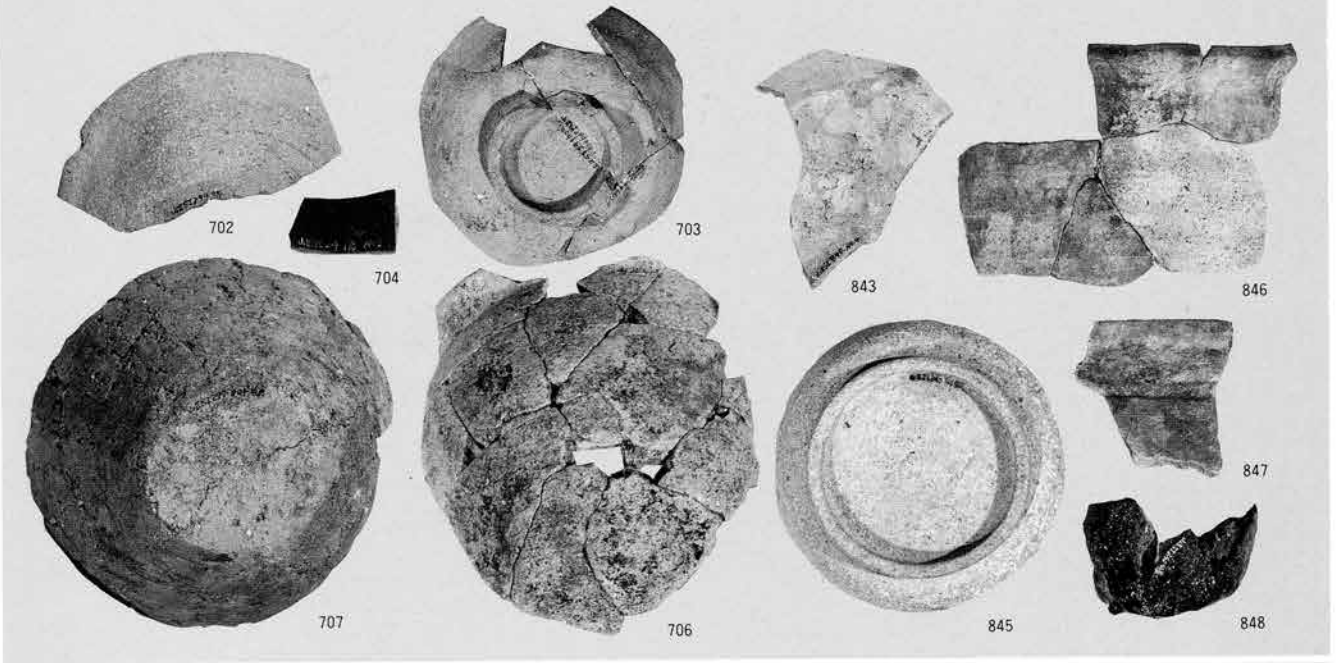


2 SI 1100

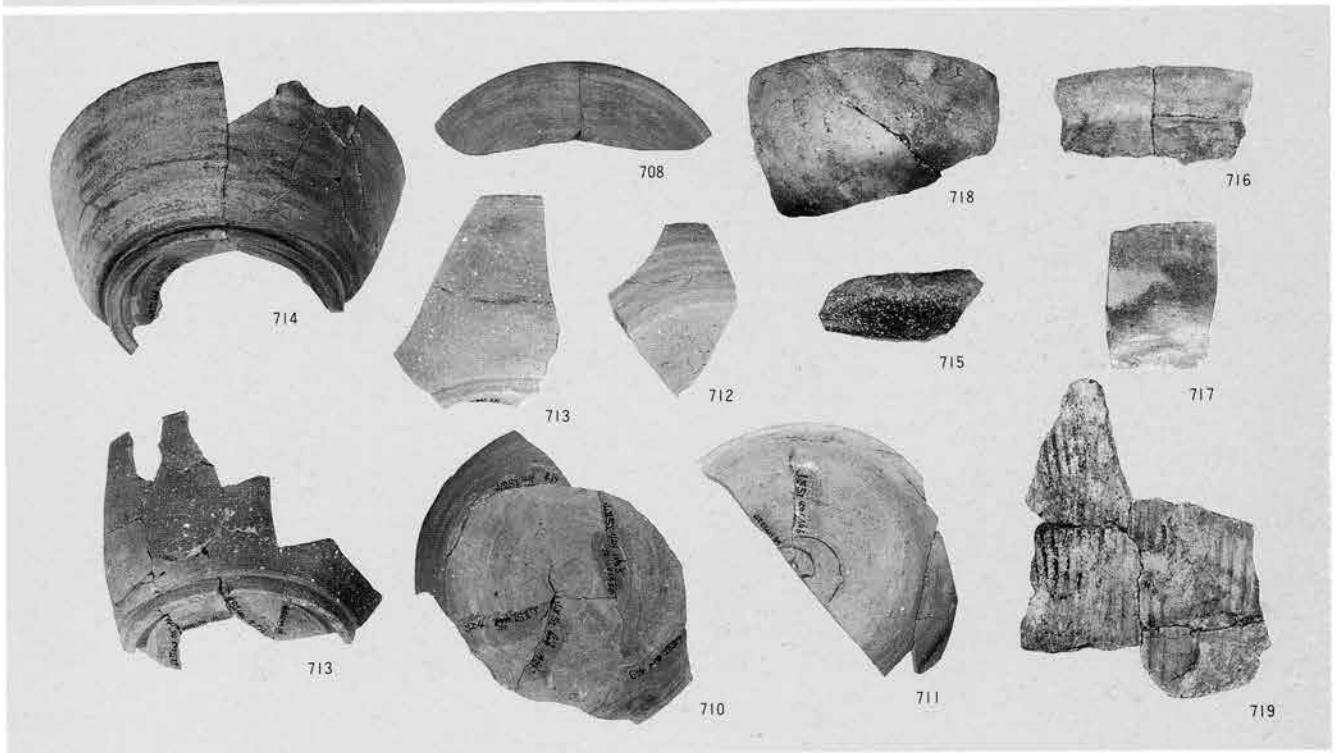


3 SI 1100 土師器
(692・695)
SI 1101(700)
SI 1302(668・669)

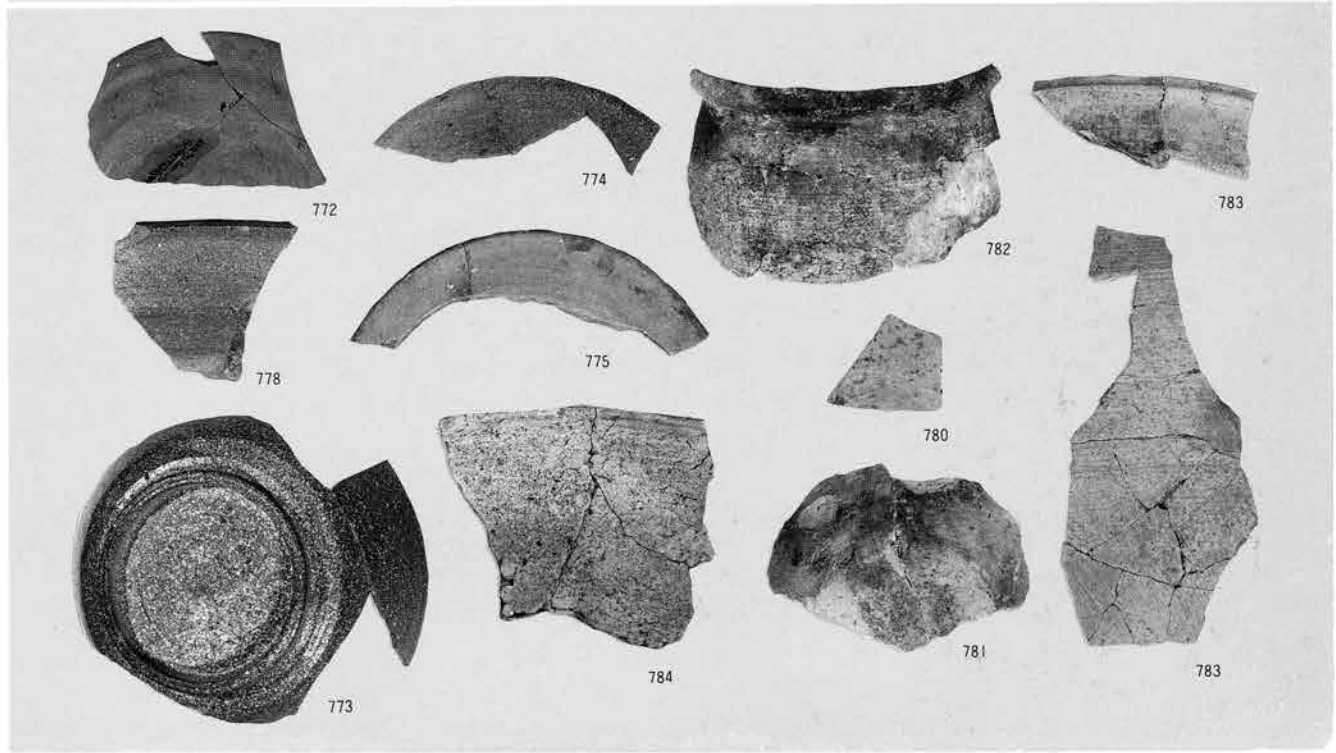
1:3



1 SI 299 (702～704・706・707)
SI 840 (843・845～848)



2 SI 401

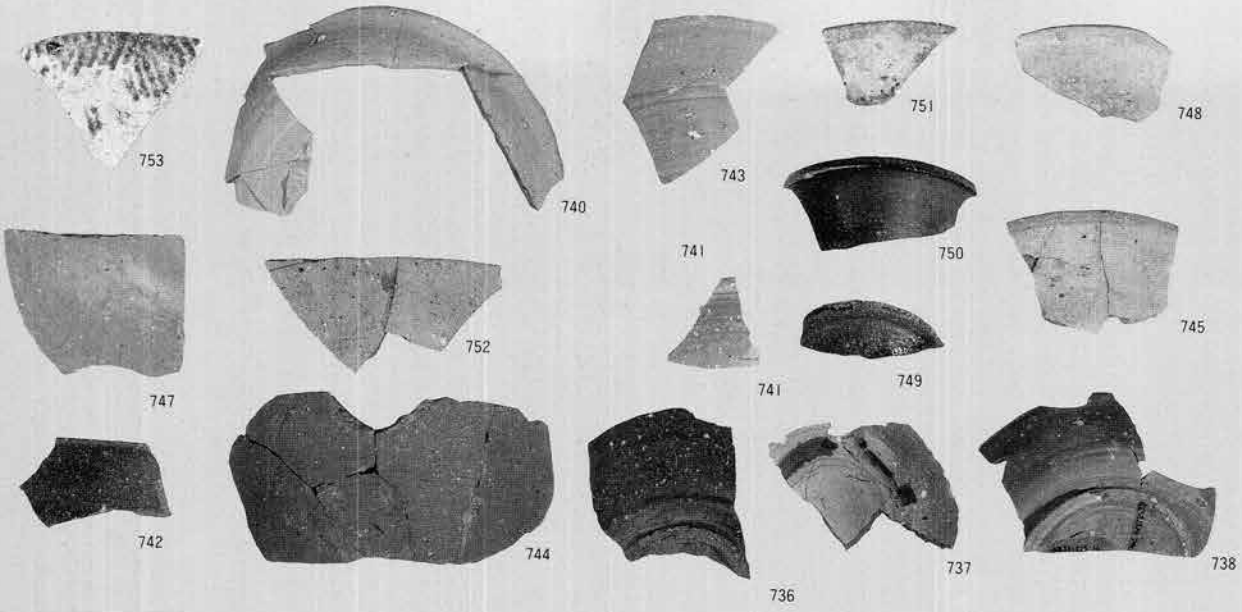


3 SI 753

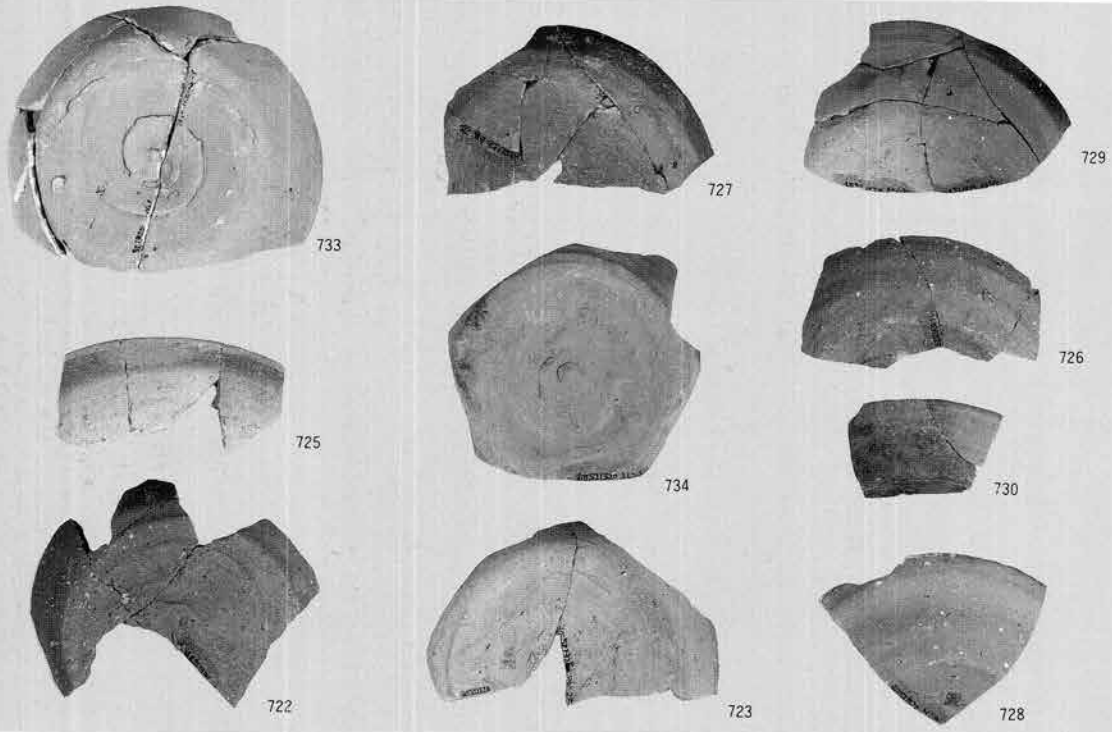
図 版 208

奈良・平安時代土器

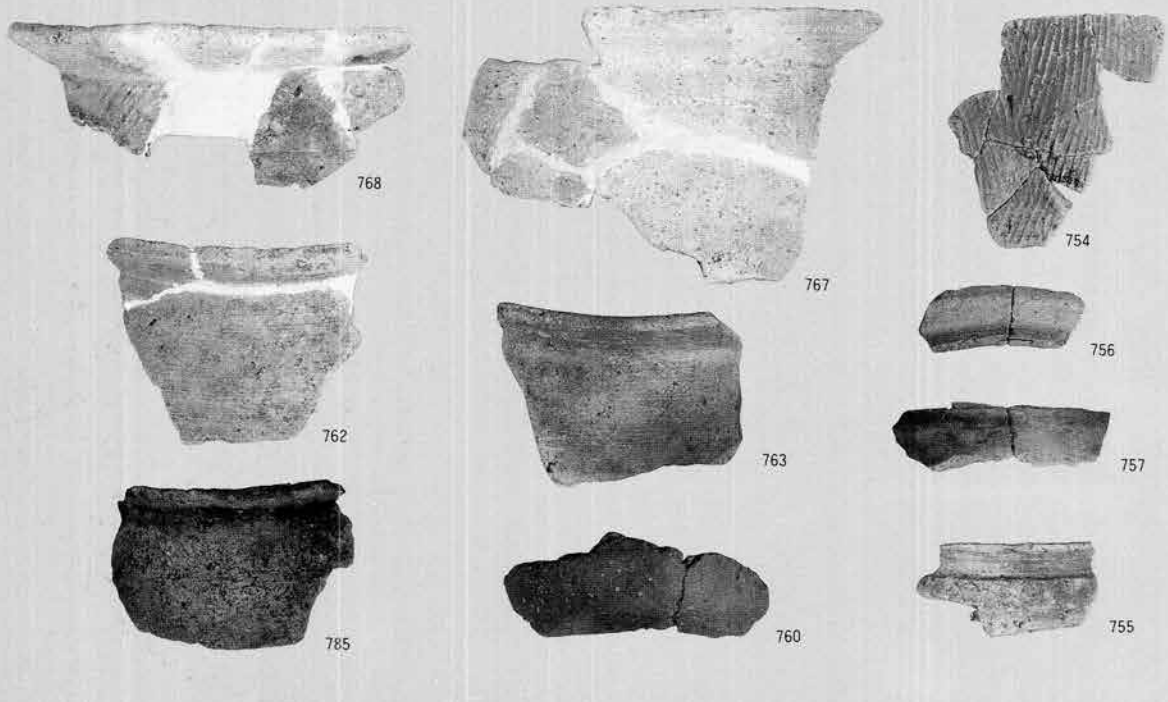
1:3



1　SI 1320須恵器

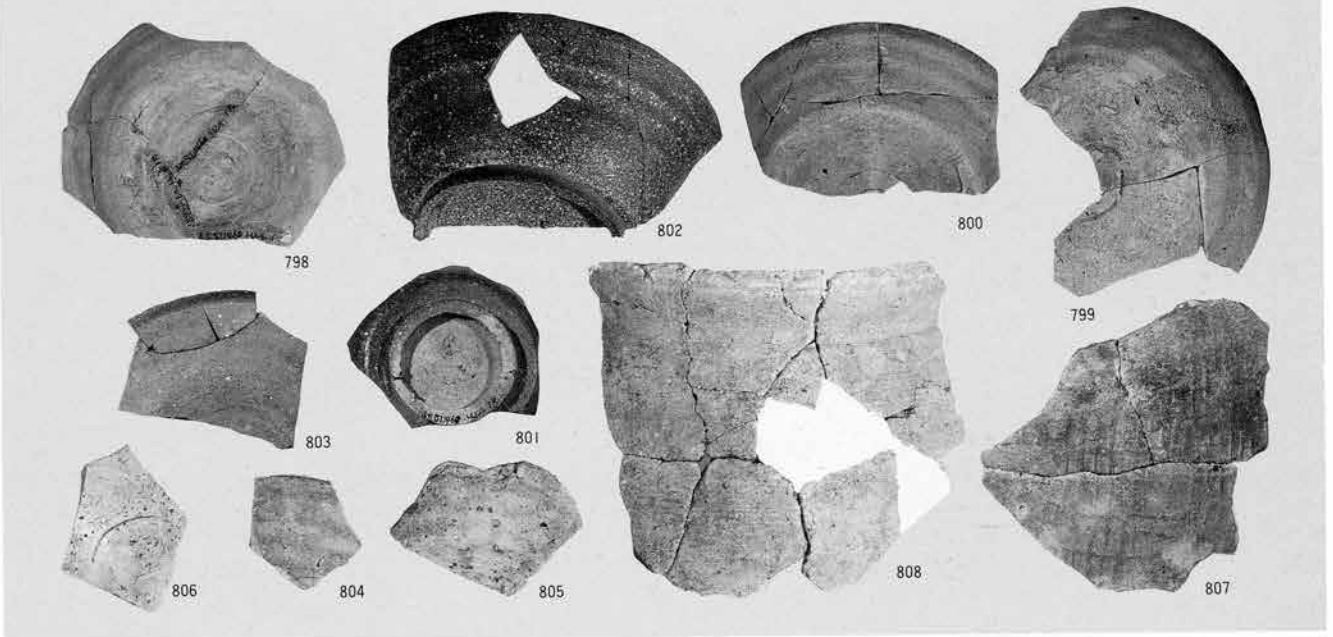


2　SI 1320須恵器

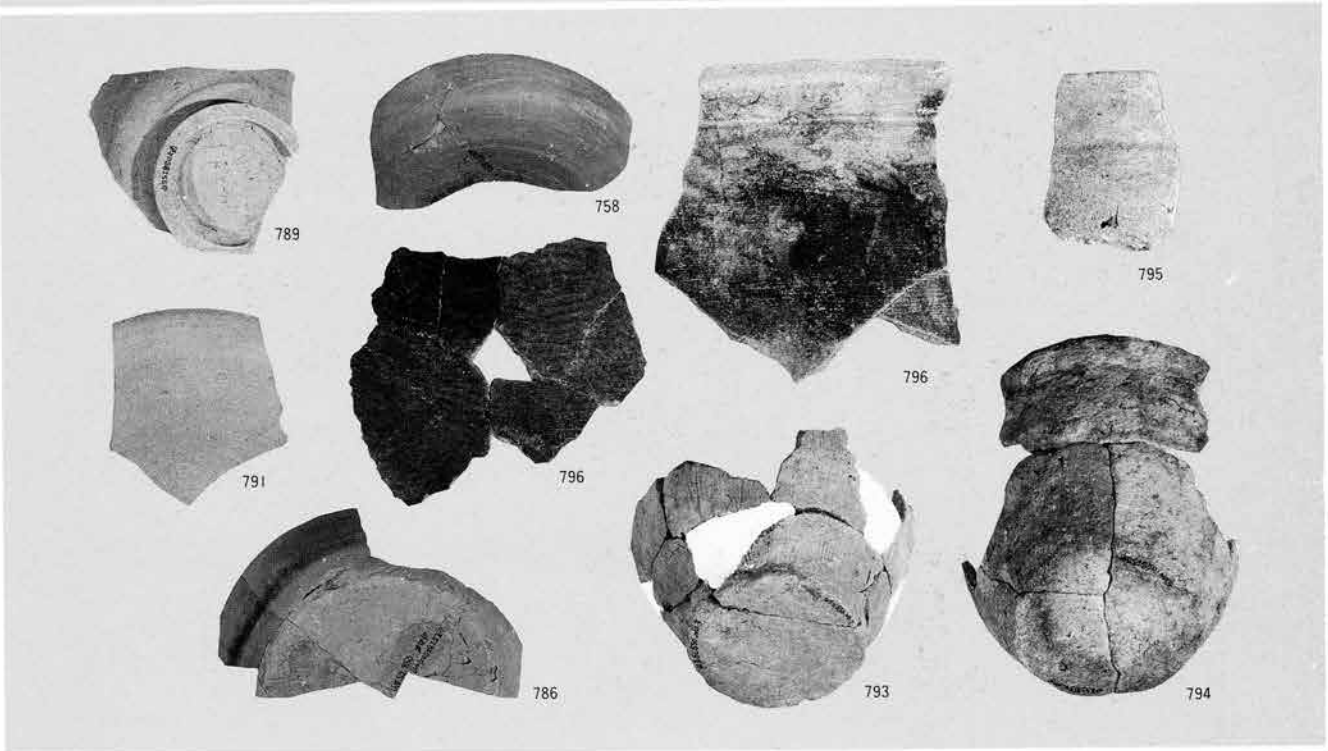


3　SI 1320土師器

1:3



1 SI 1460



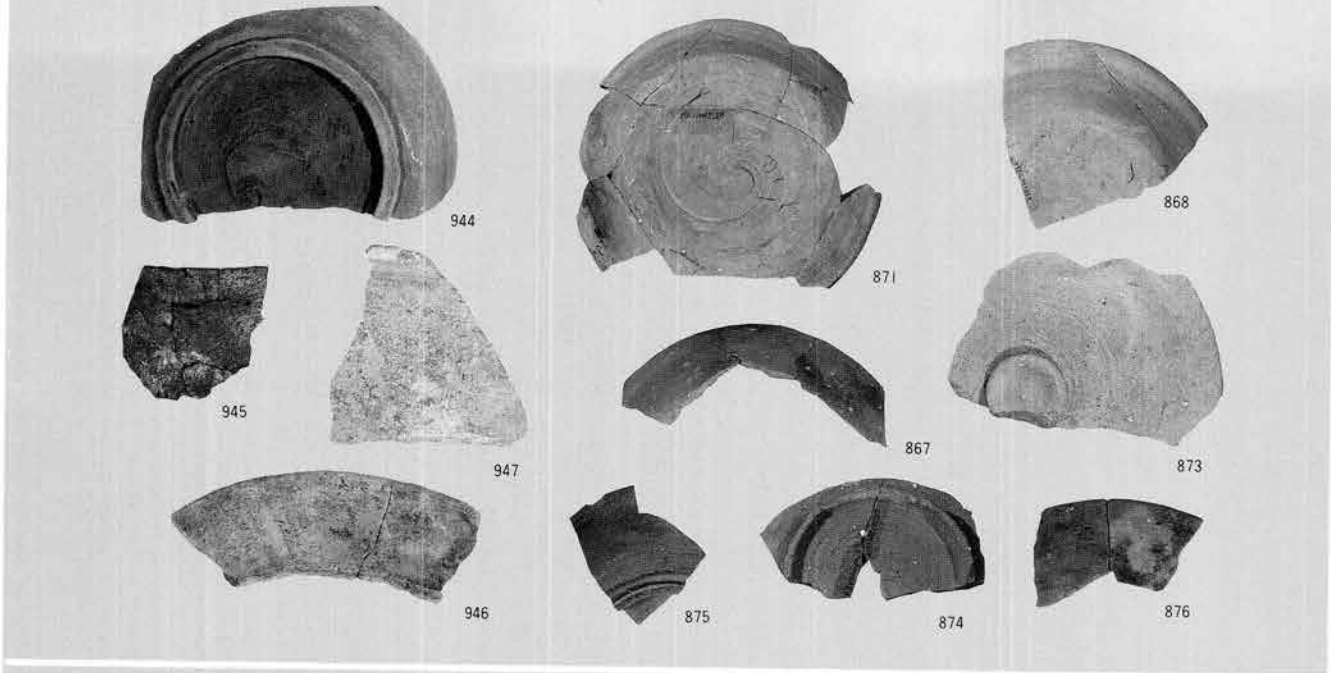
2 SI 850

3 SI 1320土師器

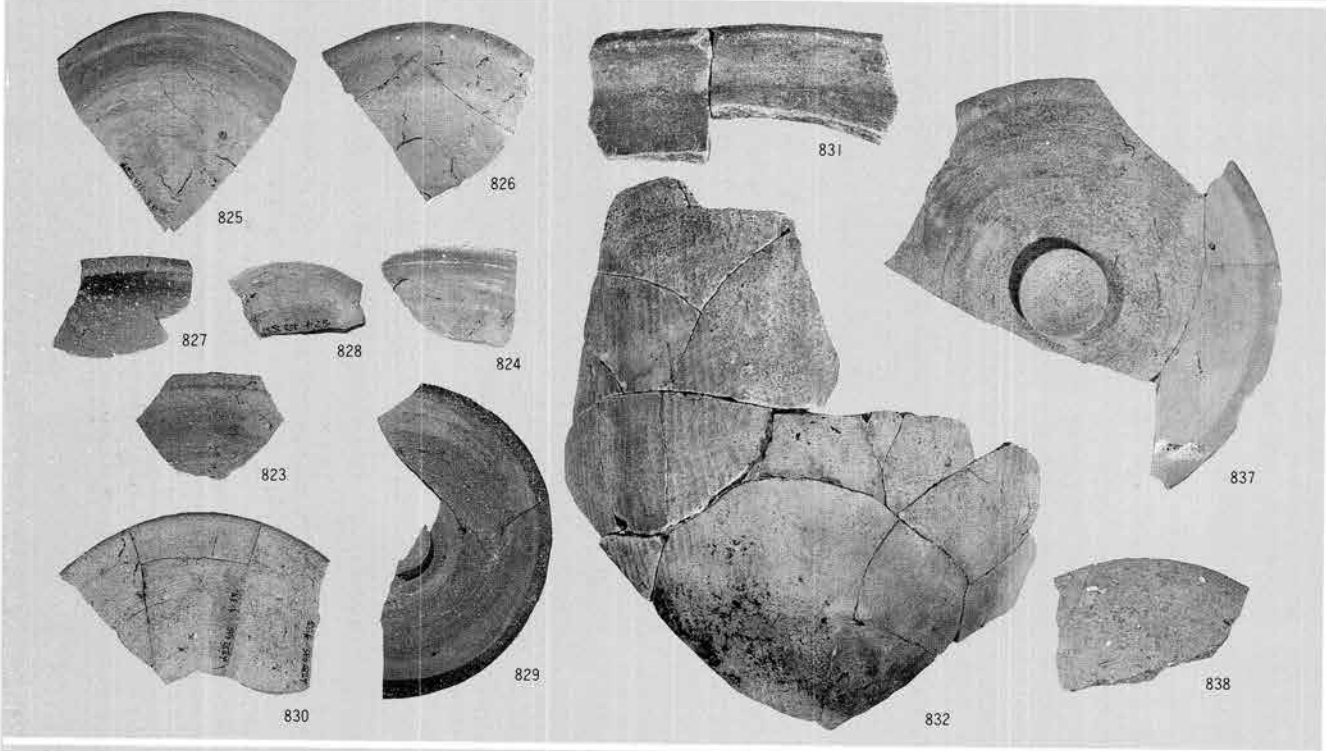
図 版 210

奈良・平安時代土器

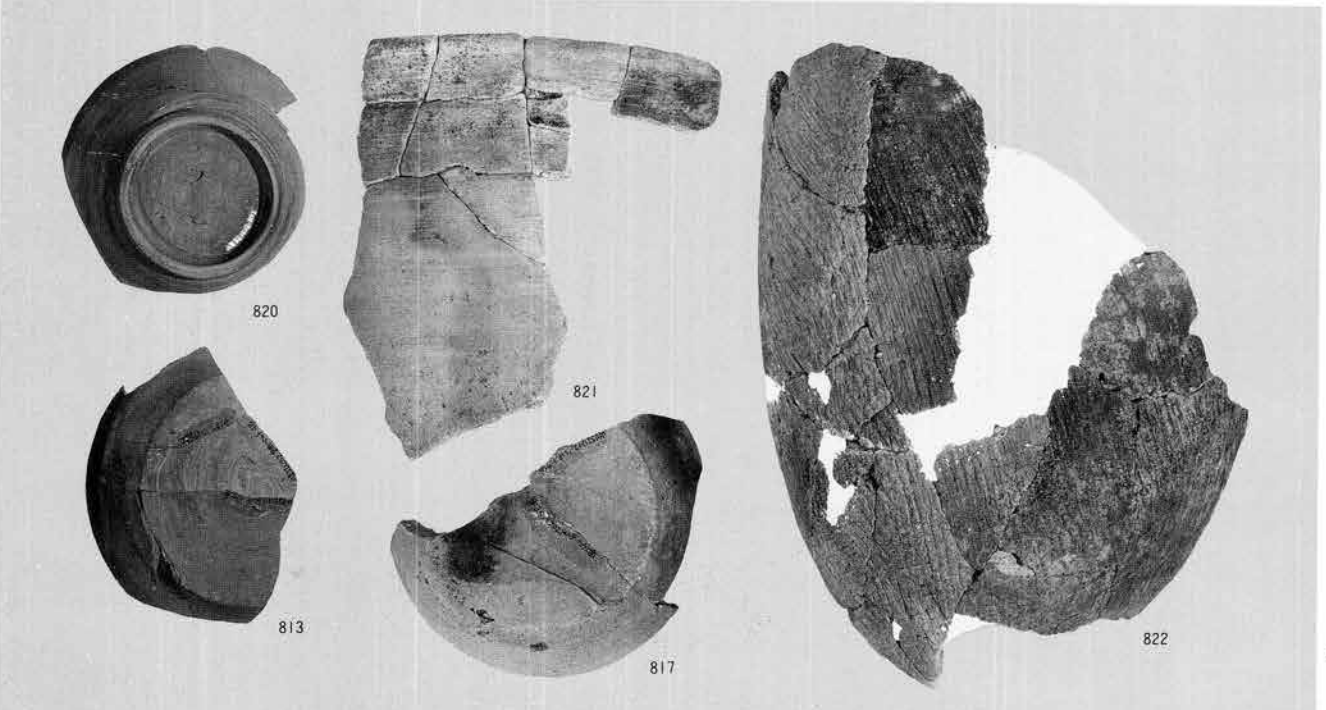
1:3



1 SI 1166(944～947)
SI 1201(867・868・871・873～876)

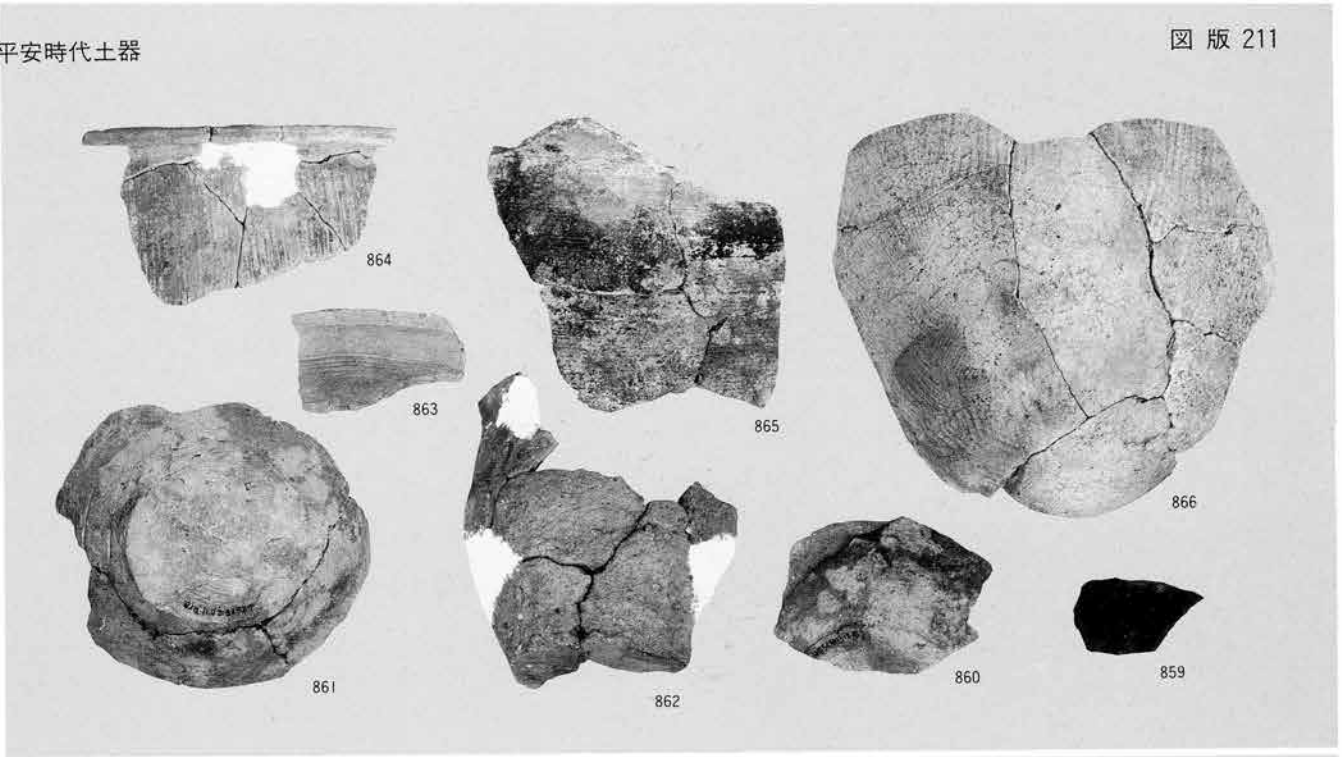


2 SI 435(823～832)
SI 440(837・838)

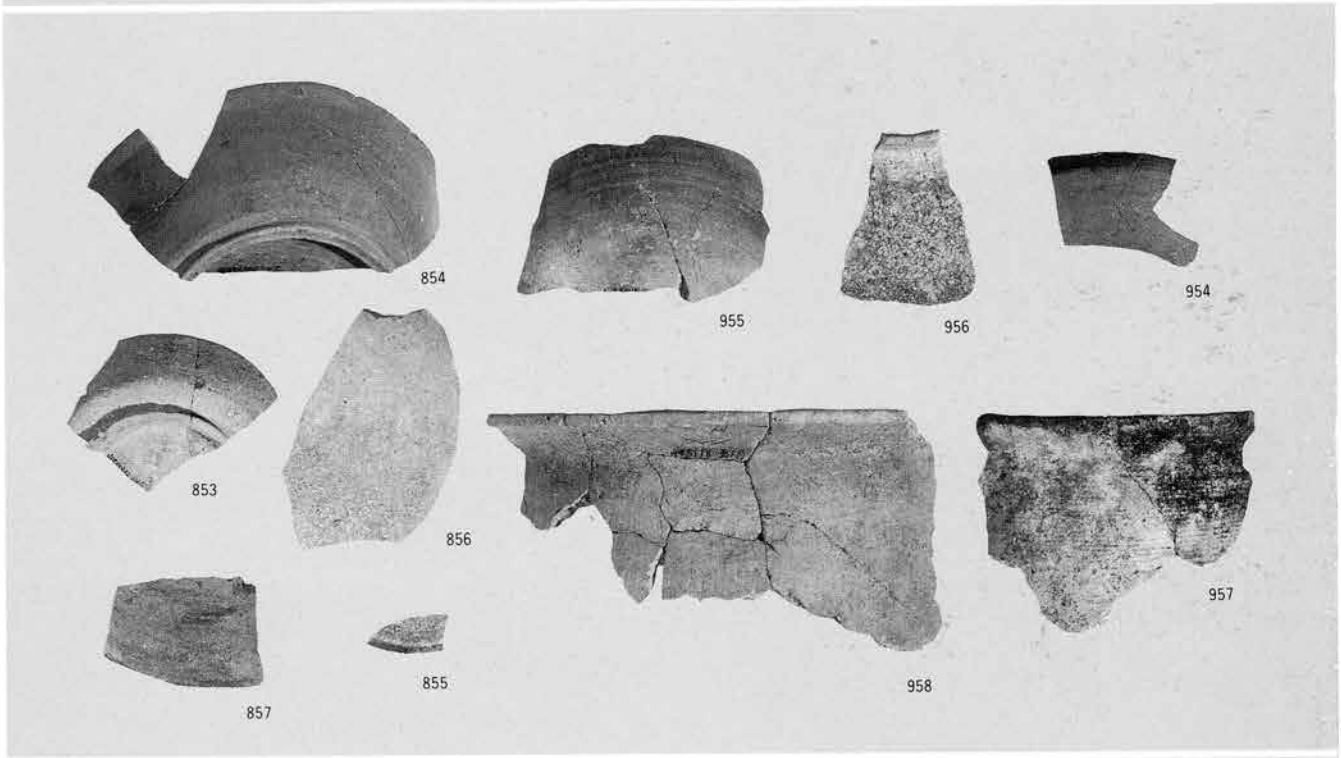


3 SI 1202

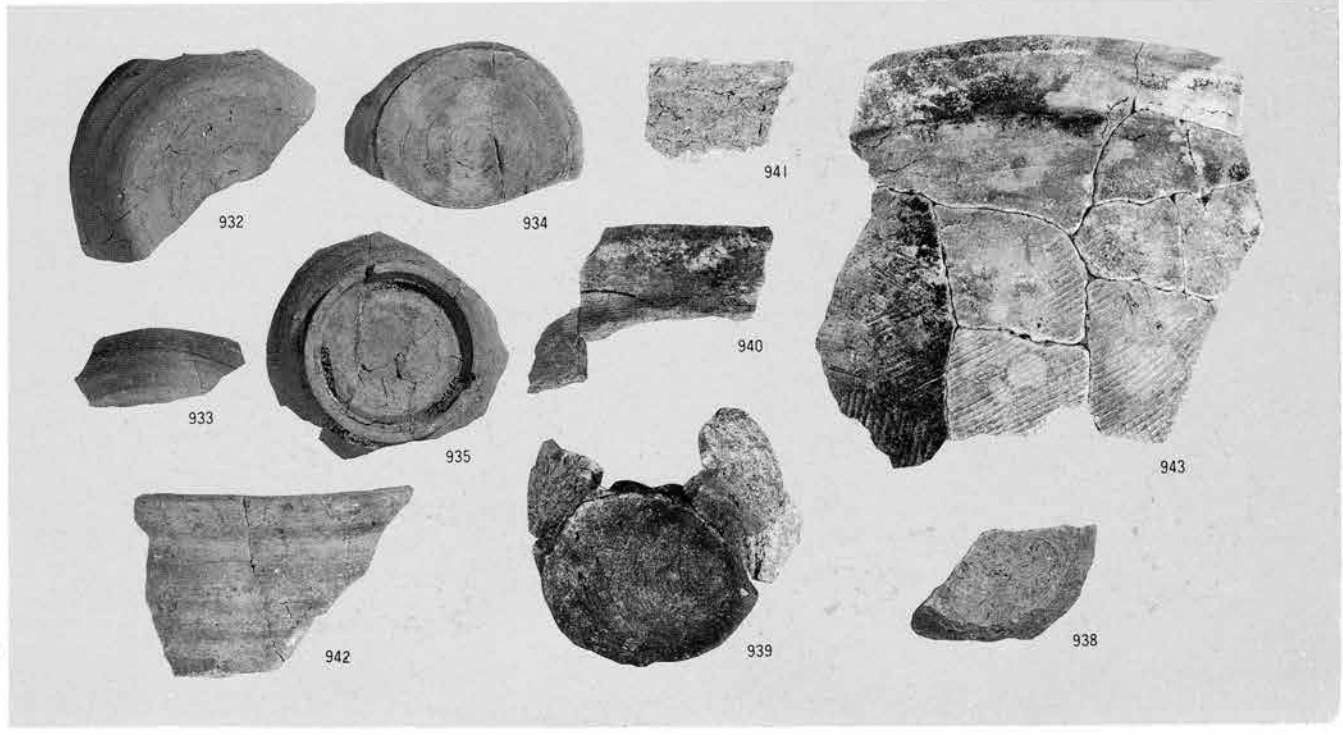
1:3



1　SI 802土師器



2　SI 18(954～958)
SI 802須恵器
(853～857)

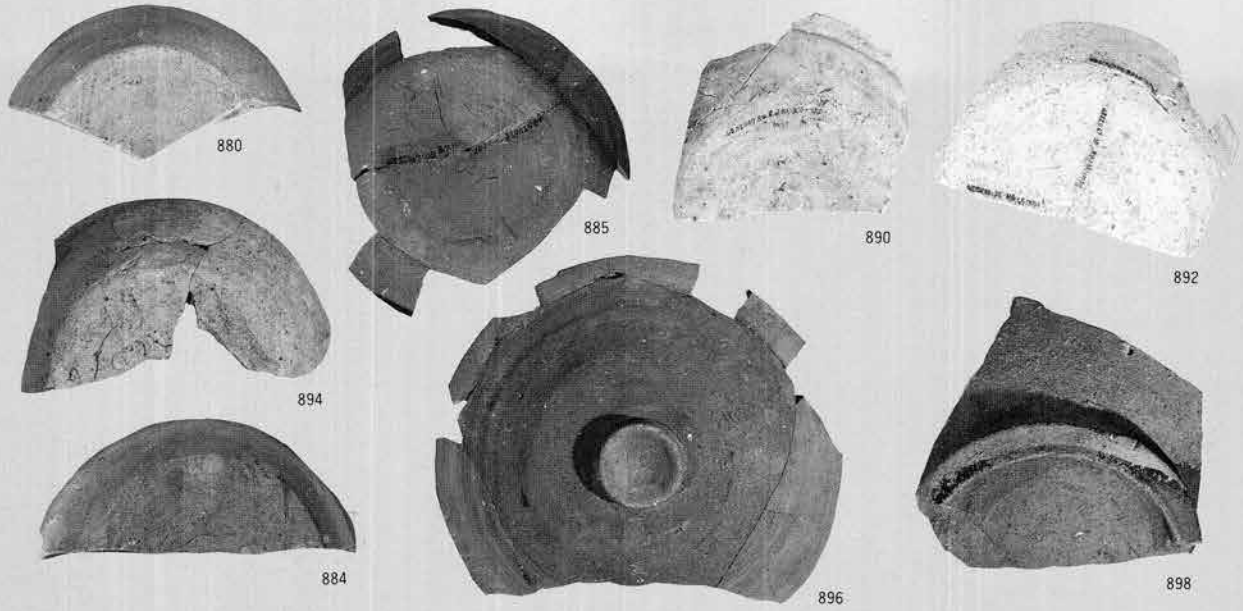


3　SI 29

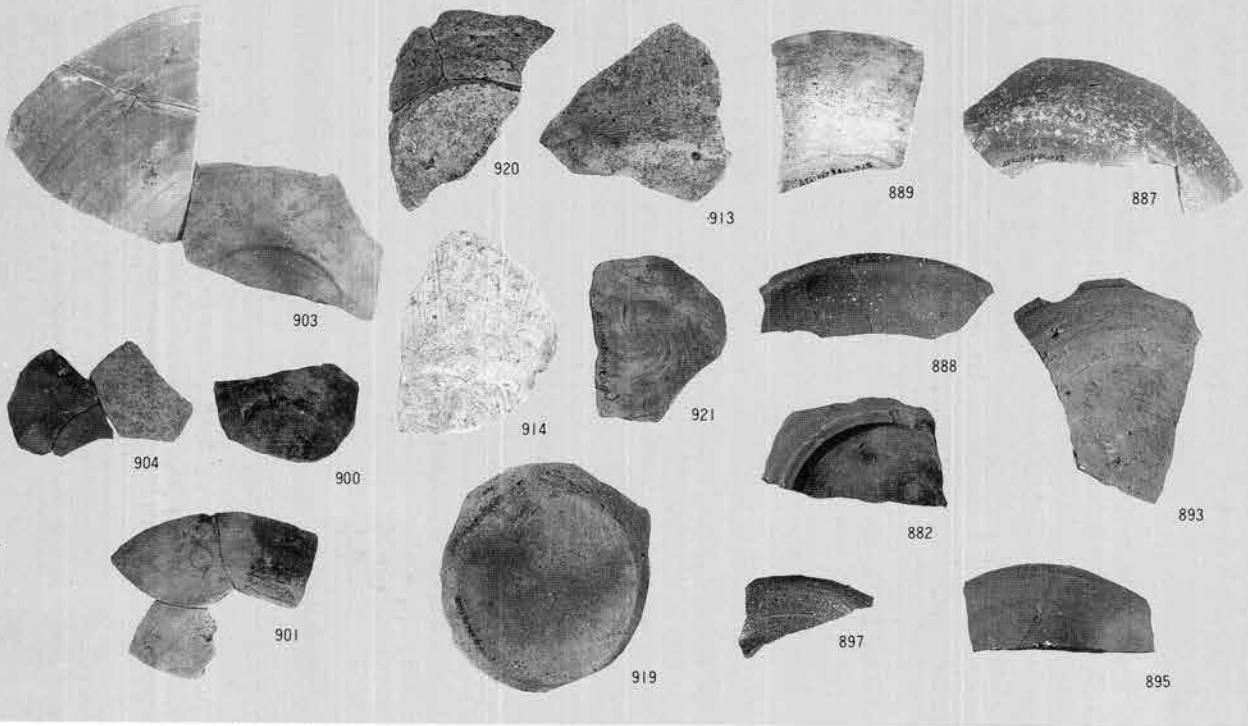
図 版 212

奈良・平安時代土器

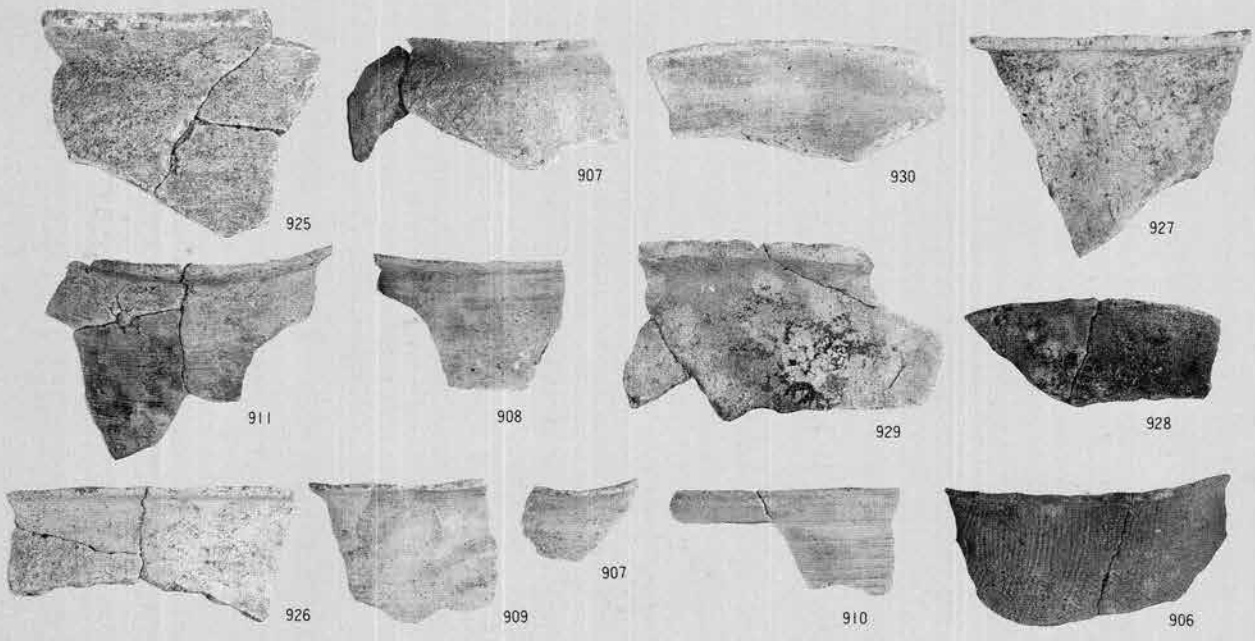
1:3



1　SI 1167須恵器

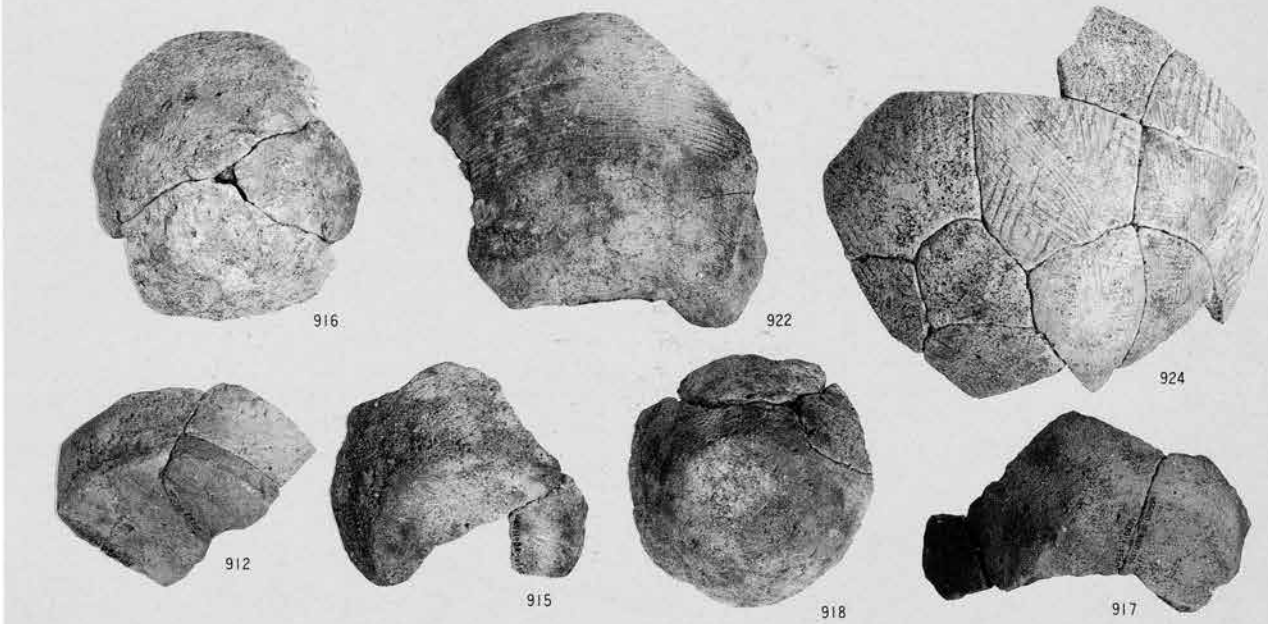


2　SI 1167

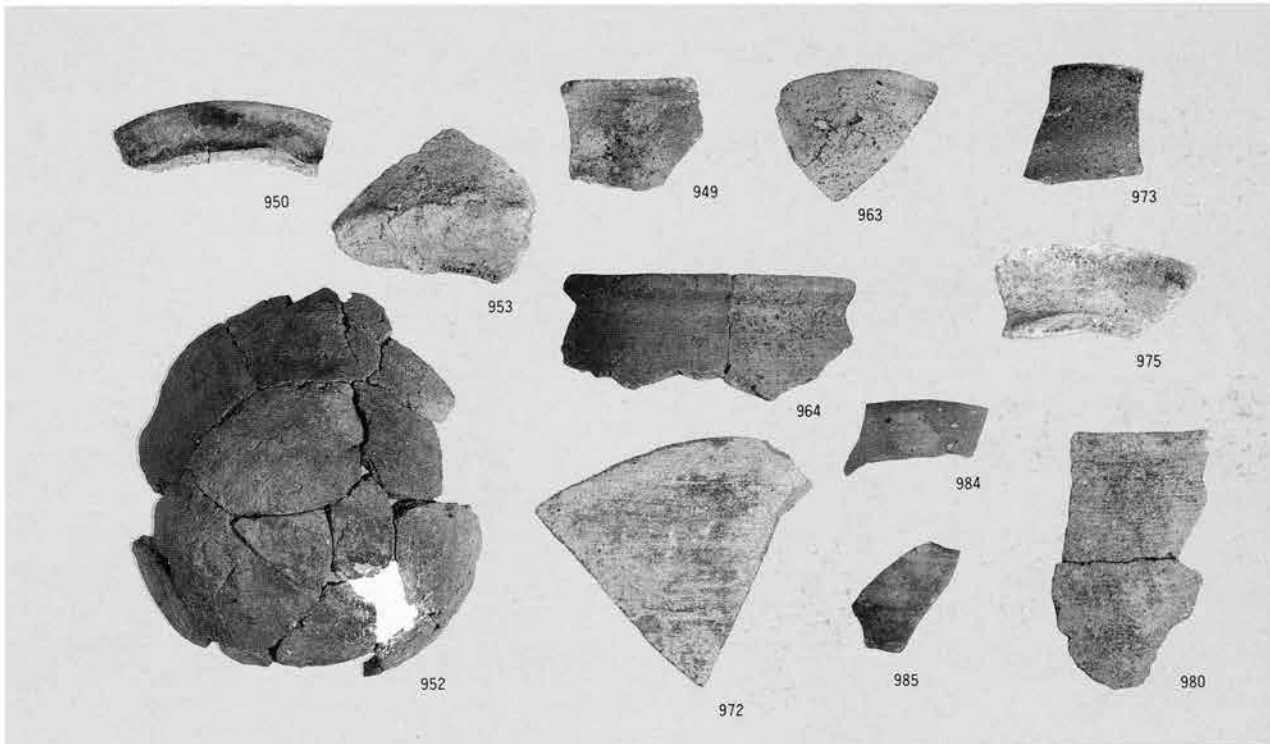


3　SI 1167土師器

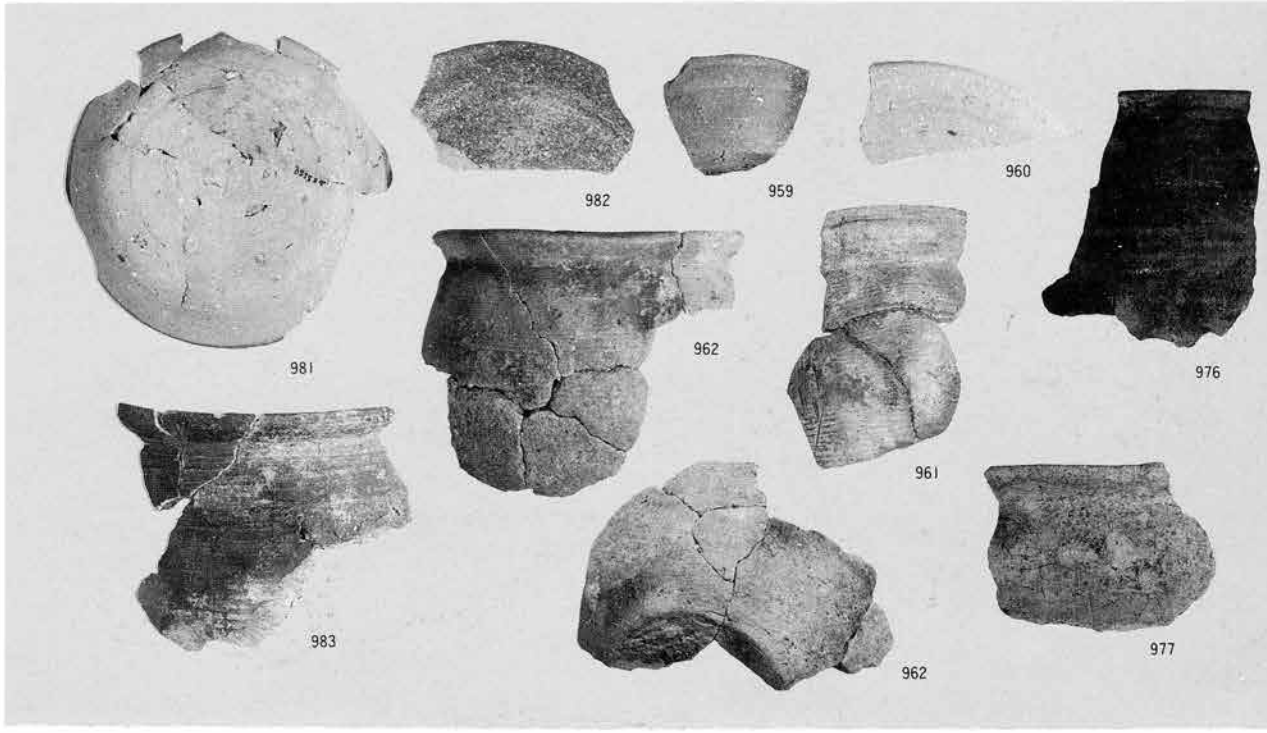
1：3



1　SI 1167 土師器

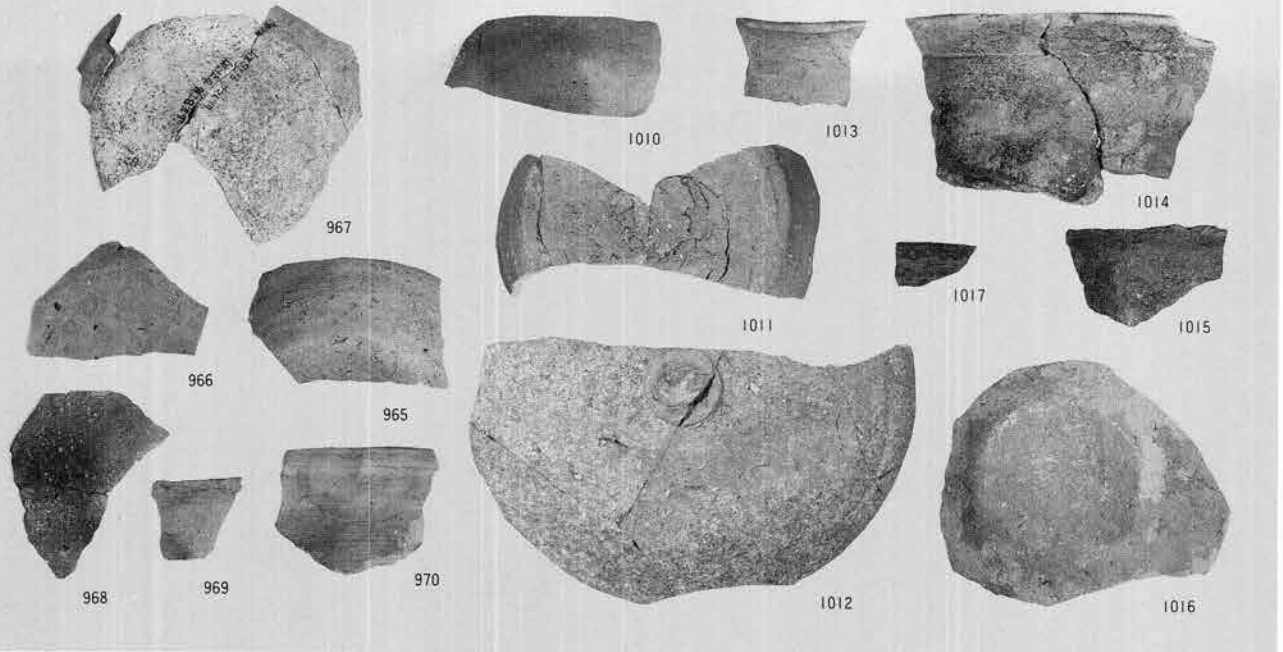


2　SI 9 (984・985)
SI 42(963・964)
SI 805 (949・950
・952・953)
SI 1304(980)
SI 1313(973・975)
SI 1471(972)

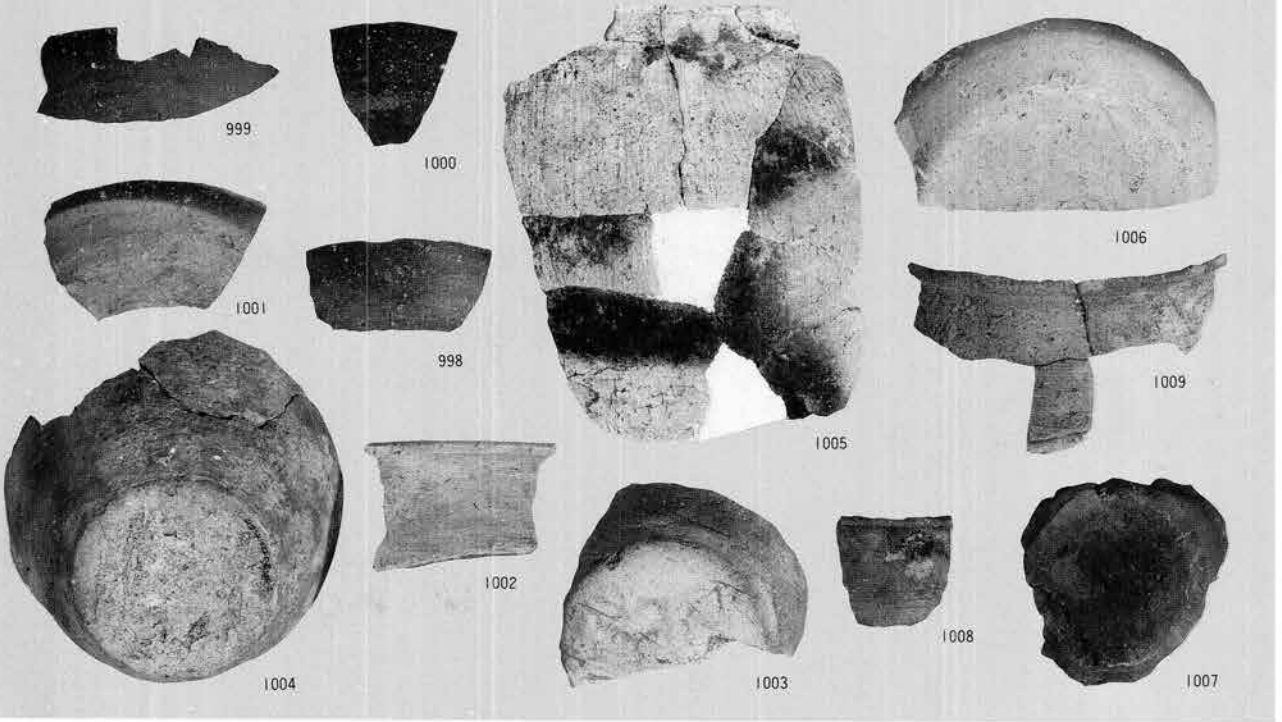


3　SI 80(981～983)
SI 325(959～962)
SI 670(976・977)

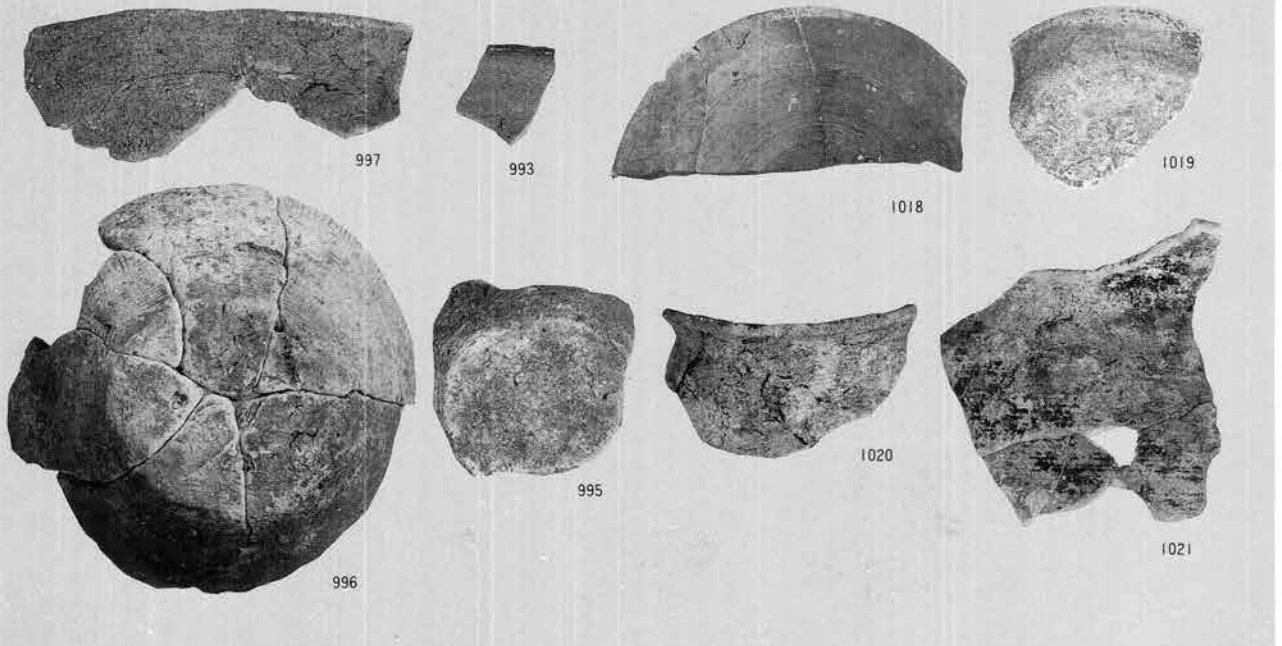
1:3



1 SI 16 (965～970)
SK 34 (1010～1017)

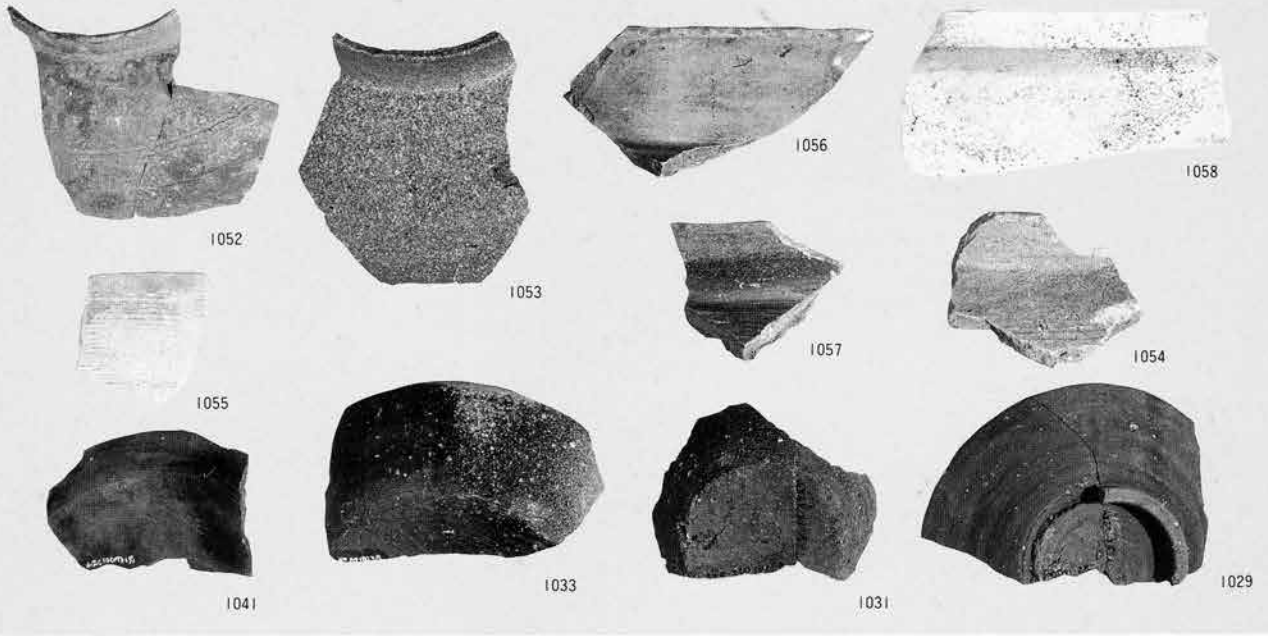


2 SK 102 (1006～1009)
SK 1022 (998～1005)

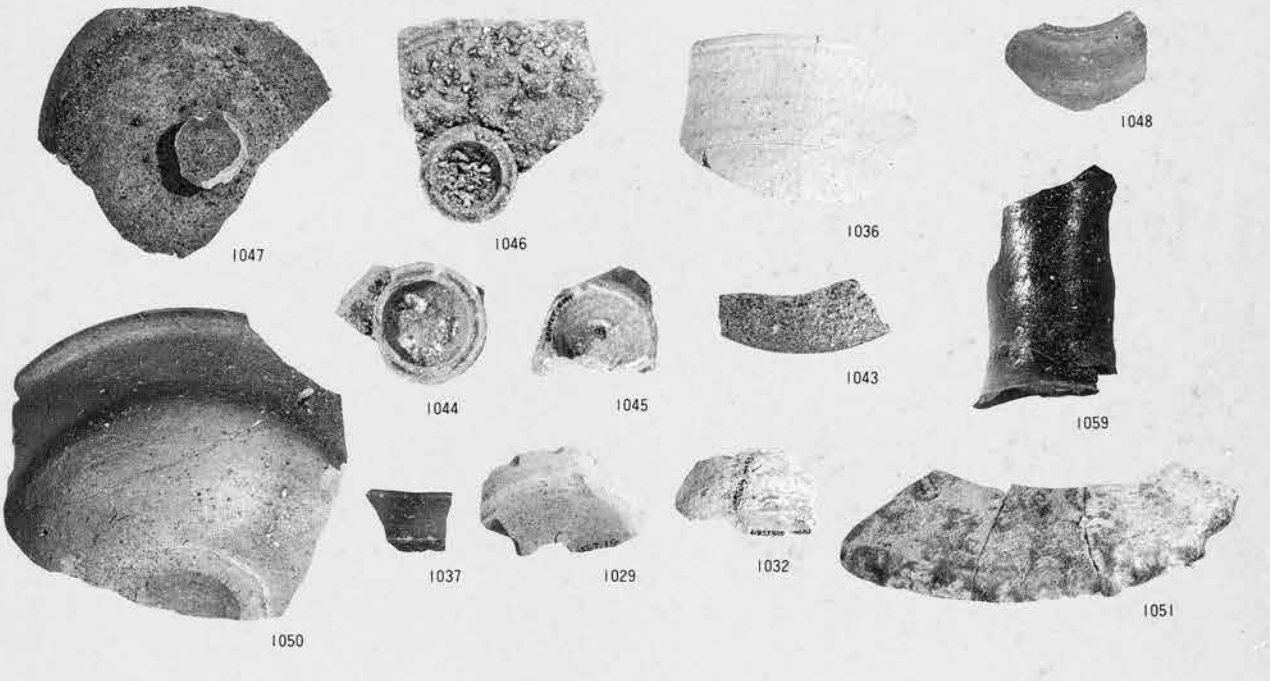


3 SK 32 (1018～1021)
SK 39 (993・995～997)

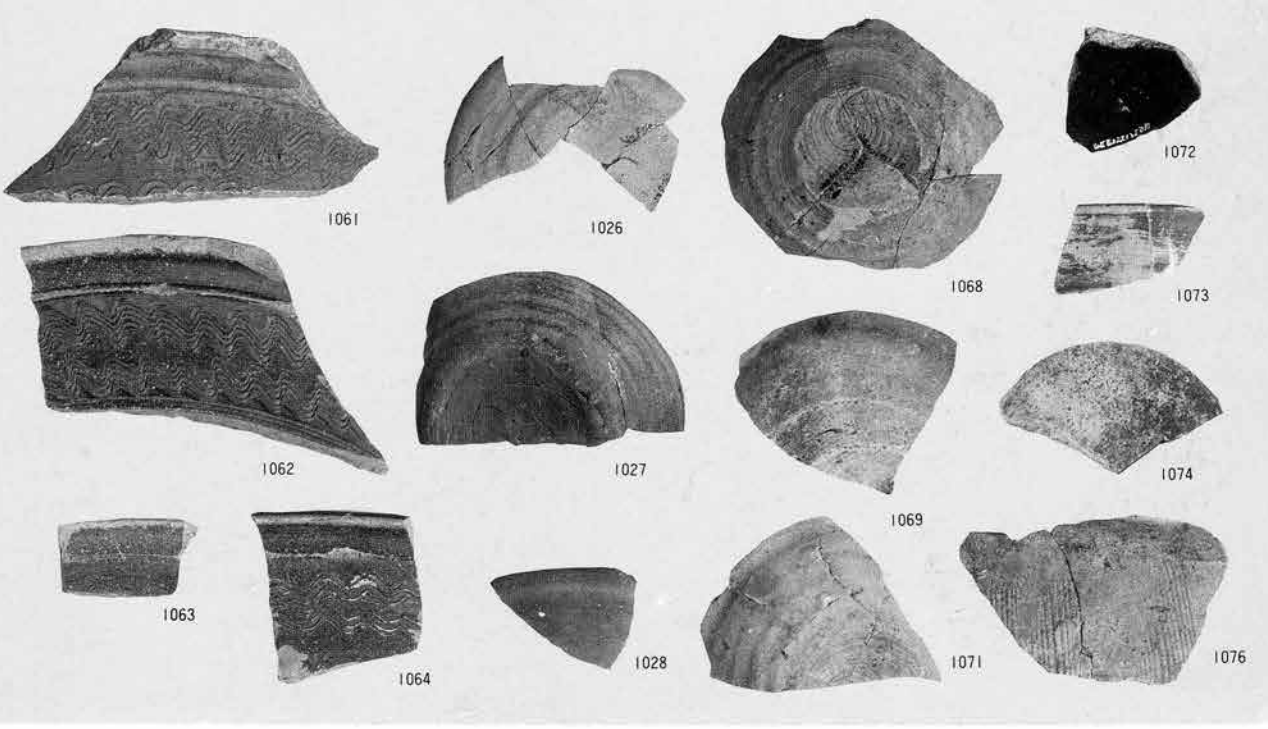
1：3



1　その他の須恵器



2　その他の須恵器

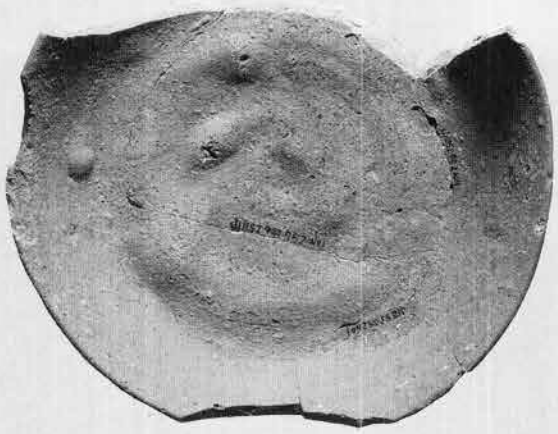


3　SB 730（1026・1027）
SB 790（1028）
その他の須恵器
（1061～1064）
その他の土師器
（1068・1069・1071～
1074・1076）

図 版 216

奈良・平安時代土器　調整技法(須恵器有台杯など)

1:2



内面

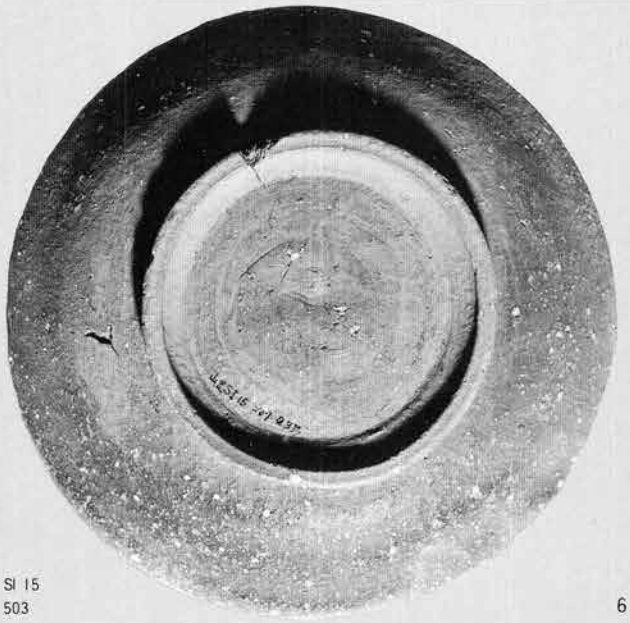
外面
SI 752
197
1

SI 4
544
2

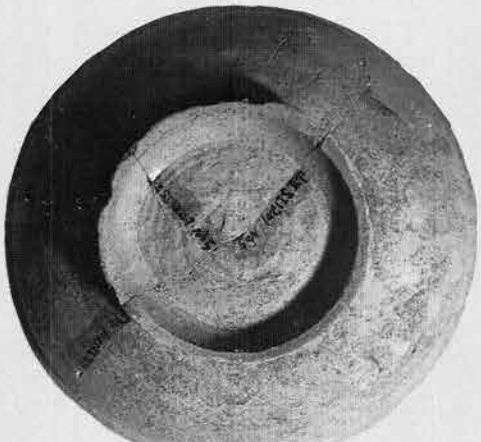
SI 60
590
3

SI 1000
224
4

SI 850
790
5



SI 15
503
6



SI 1201
872
7

1　須恵器有台杯
(胎土A群)
内外面(ヘラ切り)

2　須恵器有台杯
(胎土A群)
外面(ヘラ切り)

3　須恵器有台杯
(胎土A群)
外面(ヘラ切り・墨痕)
体部(ロクロケズリ)

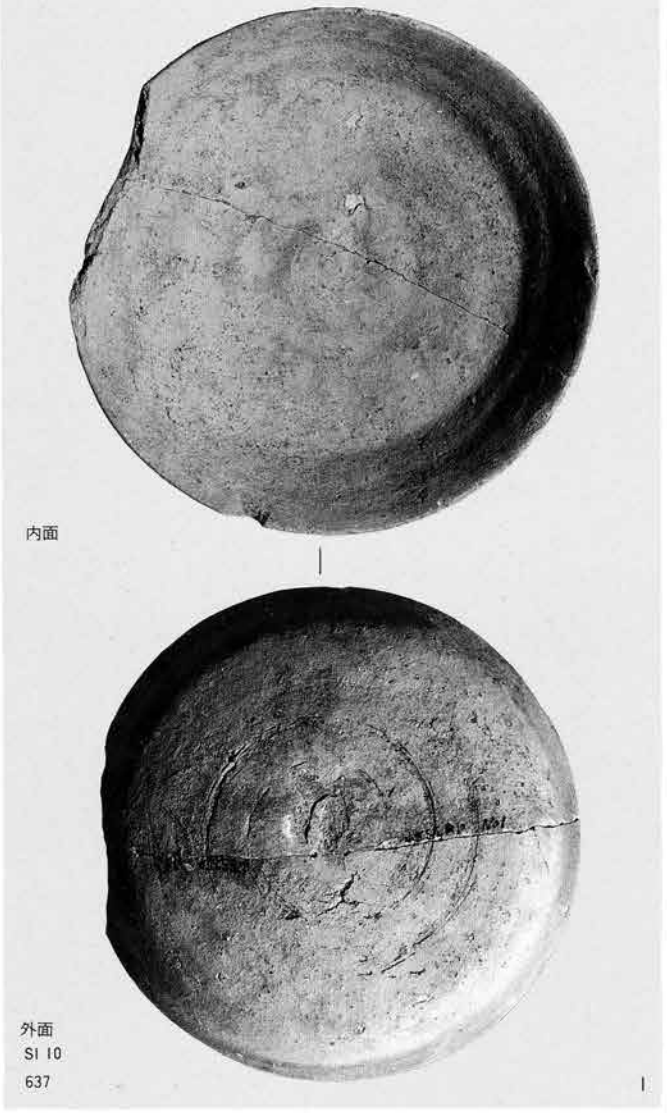
4　須恵器有台杯
(胎土B群)
外面(ヘラ切り)

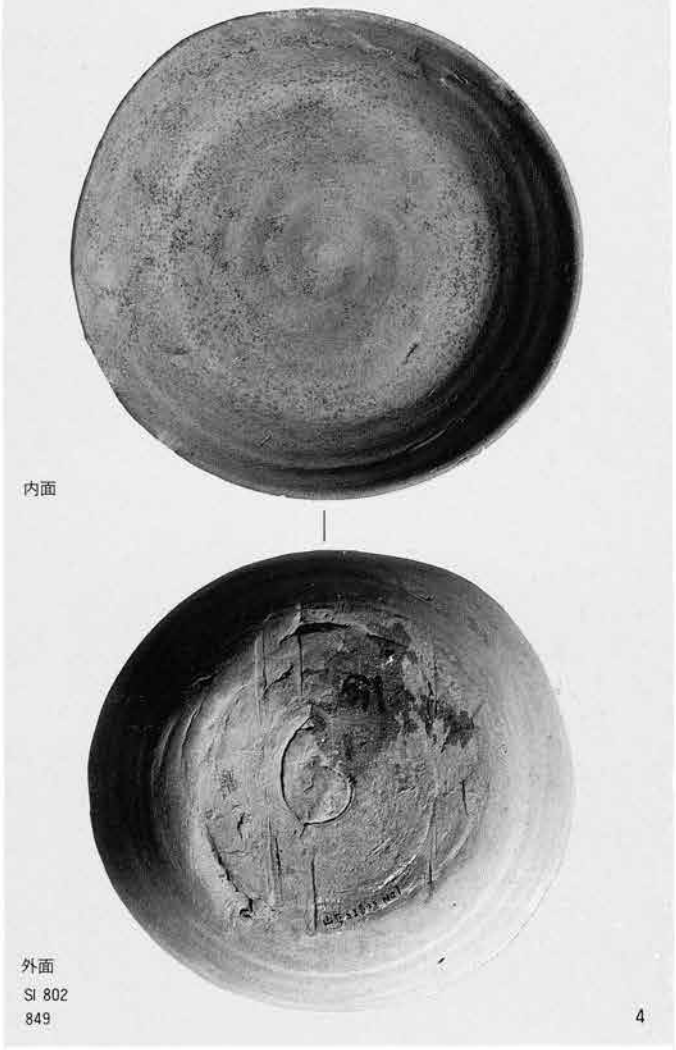
5　須恵器有台杯
(胎土B群)
外面ヘラ切り)

6　須恵器折縁杯
(胎土A群)
外面(ヘラ切り)

7　須恵器折縁杯
(胎土A群)
外面(ヘラ切り)

1:2





1　須恵器無台杯
(胎土A群)
内外面(ヘラ切り)

2　須恵器無台杯
(胎土A群)
外面(ヘラ切り)

3　須恵器無台杯
(胎土B群)
外面(ヘラ切り)

4　須恵器無台杯
(胎土B群)
内外面(ヘラ切り
・板状圧痕)

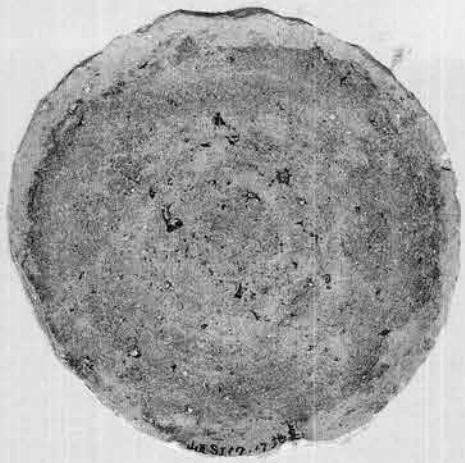
5　須恵器無台杯
(胎土B群)
外面(ヘラ切り
・板状圧痕)

6　須恵器無台杯
(胎土C群)
外面(ヘラ切り)

図 版 218

奈良・平安時代土器　調整技法(須恵器杯蓋など)

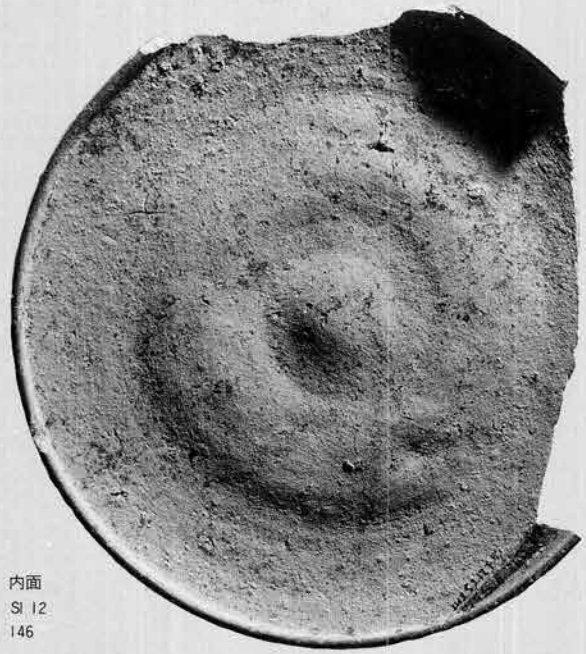
1:2



内面
SI 17
568

外面

1

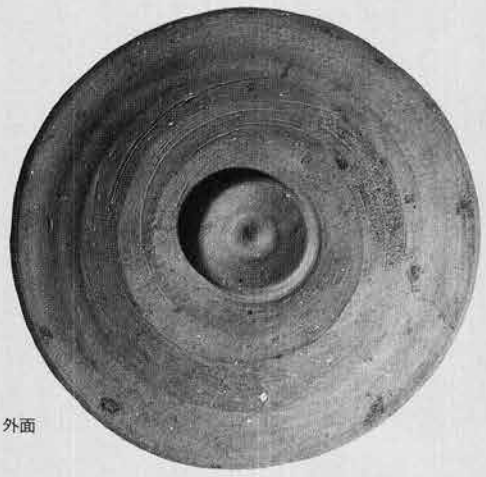


内面
SI 12
146

外面

2

内面
SI 753
776



外面

3

内面
1042

外面

4

内面
SI 7
464

外面

5

1 須恵器杯蓋(胎土A群)
内　面(転用現)
外　面(ヘラ切り)

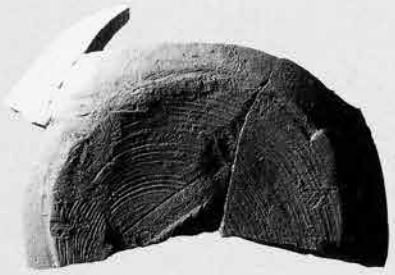
2 須恵器杯蓋(胎土A群)
内外面(ロクロケズリ)

3 須恵器杯蓋(胎土B群)
内外面(ロクロケズリ)

4 須恵器杯蓋(胎土C群)
内外面(回転糸切り・
ロクロケズリ)

5 須恵器有台杯
(胎土C群)
内外面(回転糸切り?)

1:2



SI 1
672
1

1049
2

SI 14
381
3

内面

外面
SI 11
513
4

1034
5

1030
6

1035
7

内面

外面
SI 1461
255
8

1 須恵器無台杯
(胎土C群)
外面(回転糸切り)

2 須恵器小壺
(胎土A群)
外面(回転糸切り)

3 須恵器有台杯
(胎土A群)
外面(ヘラ切り・ヘラ記号)

4 須恵器有台杯
(胎土A群)
内面(火だすき)
外面(ヘラ切り・
ヘラ記号・火だすき)

5 須恵器無台杯
(胎土C群)
外面(ハケ目)

6 須恵器無台杯
(胎土A群)
外面(ヘラケズリ)

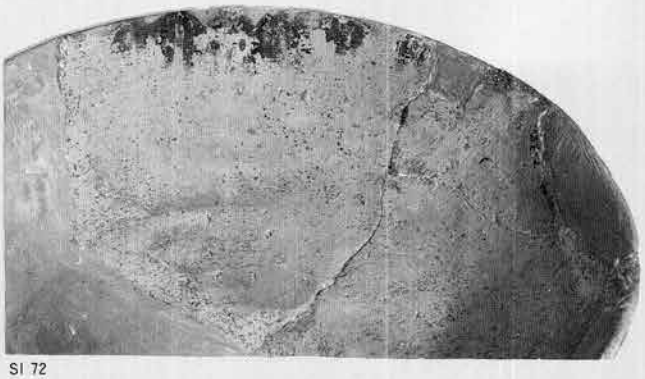
7 須恵器無台杯
(胎土C群)
外面(ロクロクズリ)

8 須恵器有台杯
(胎土C群・東海系)
内外面(ロクロケズリ
・墨痕)

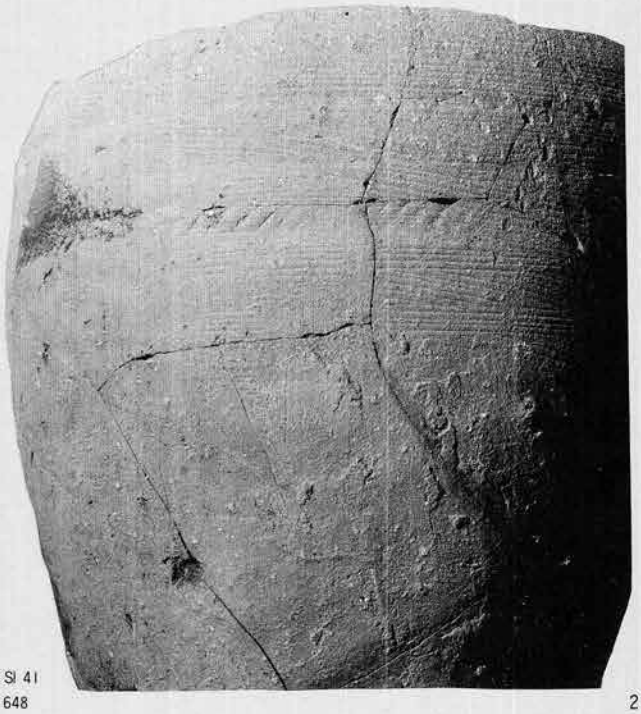
図 版 220

奈良・平安時代土器　調整技法・使用痕(須恵器)

1・4・6・8　2:3
2・3・5・7　1:2



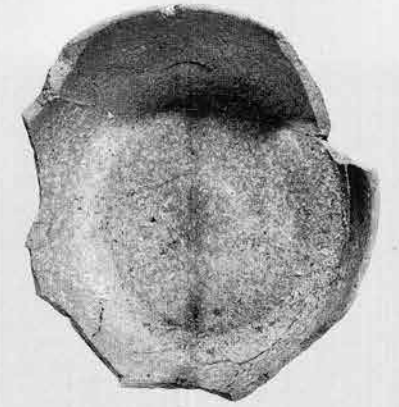
SI 72
352
1



SI 41
648
2

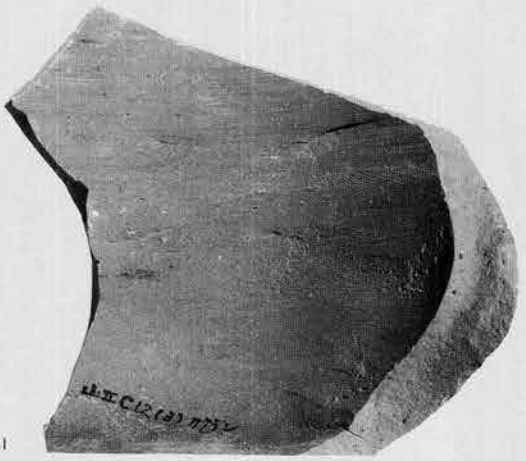
SI 41
648
3

SI 72
353
4

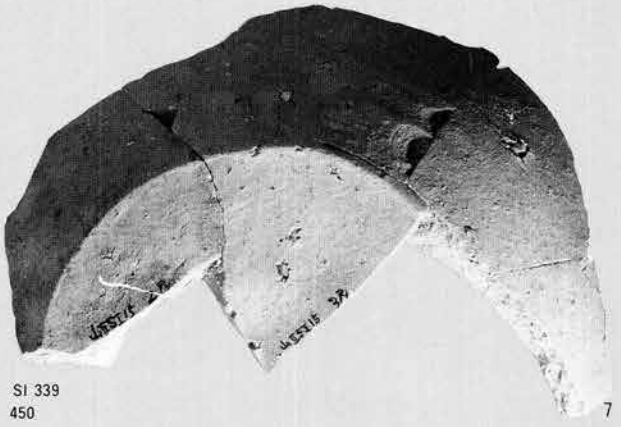


内面

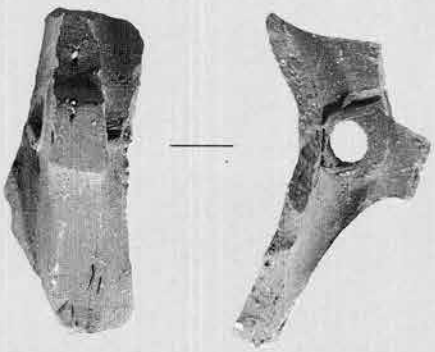
外面
SI 850
788
5



SI 741
128
6



SI 339
450
7



1060
8

1　須恵器無台杯
内面(灯芯痕)

2　須恵器直口壺
外面(タタキ目・カキ目・ヘラケズリ)

3　須恵器直口壺
底部外面(圧痕？)

4　須恵器有台杯
断面

5　須恵器有台杯
内外面(灯芯痕)

6　須恵器短頸壺
内面(粘土紐痕)

7　須恵器鉢
底部外面

8　須恵器双耳瓶

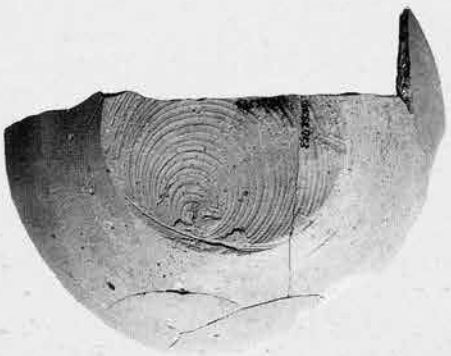
奈良・平安時代土器　調整技法(土師器底部)

1・2 1:2・5
3~7 1:2
8 2:3

SI 741
137
1

1070
5

SI 115
29
2



SI 753
779
6

SI 610
84
3

1067
7

SI 741
132
4

SI 1101
699
8

1　土師器壺 A
外面(木葉痕)

2　土師器長甕 A 系
外面(木葉痕)

3　土師器長甕 A 系
外面(木葉痕)

4　土師器長甕 A 系
外面(木葉痕・砂痕)

5　土師器椀 B
外面(回転糸切り)

6　土師器椀 B
外面(回転糸切り)

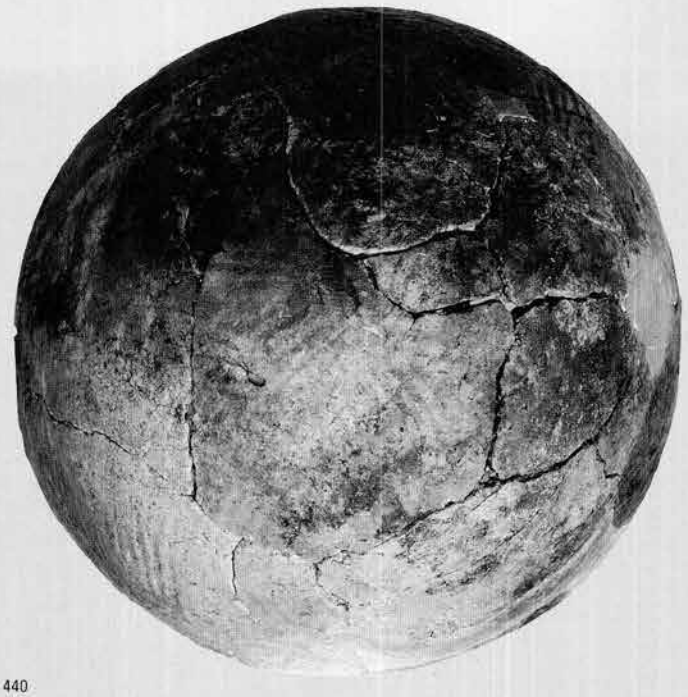
7　土師器椀 B
外面(回転糸切り・ヘラ記号)

8　土師器小甕 B 系
外面(回転糸切り)

図 版 222

奈良・平安時代土器　調整技法(土師器底部)

1・2・7 1:3
3~6 1:2



SI 440
841
1

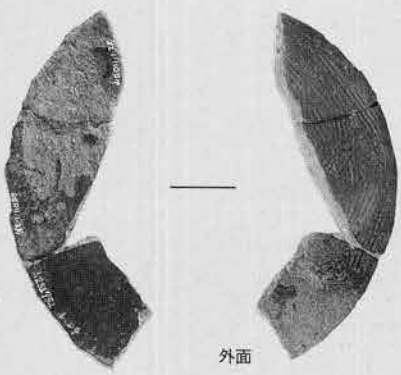
SI 4
561
2

SI 1500
581
3

SI 462
104
4

SI 1
675
5

SI 5
2
6



内面
外面
SI 752
200
7

1 土師器長甕B系底部
外面(タタキ目)

2 土師器長甕B系底部
外面(タタキ目)

3 土師器小甕底部
外面(不調整)

4 土師器無台杯B底部
外面(ヘラ切り)

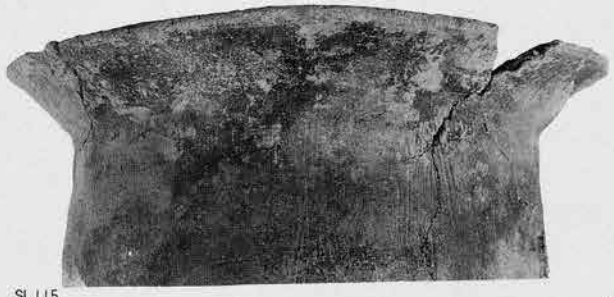
5 土師器小甕底部
外面(ヘラ切り?)

6 土師器小甕底部
外面(ハケ目)

7 土師器杯X(東北系)
外面(ハケ目)
内面(黒色処理)

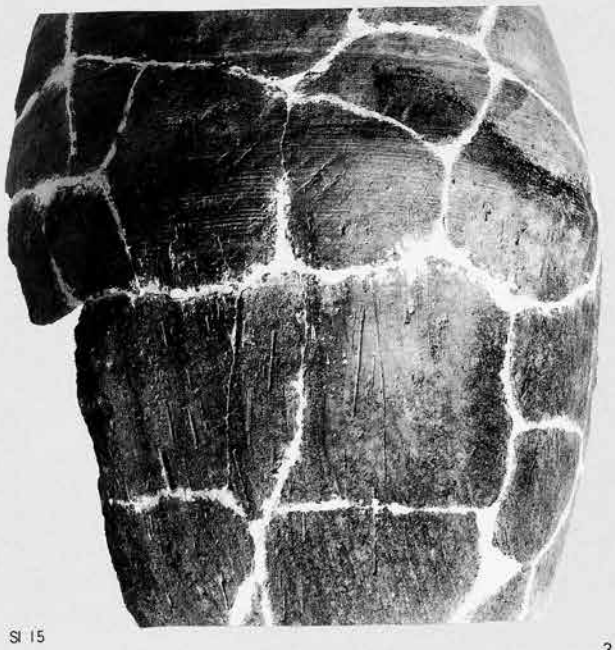
奈良・平安時代土器　調整技法(土師器)

4　1:2
その他　1:3



SI 115
34
1

SI 115
30
2



SI 15
512
3

SI 741
137
4

SI 7
489
5

SI 20
367
6

SI 741
137
7

1　土師器長甕A系
外面(口縁部ヨコナデ
A系1類)

2　土師器長甕A系
外面(口縁部ヨコナデ
ナデA系2類)

3　土師器長甕B系
外面(タタキ目・カキ目
・ヘラケズリ)

4　土師器壺A
外面(ハケ目・
・ヘラミガキ)

5　土師器長甕B系
外面(口縁部タタキ目)

6　土師器長甕B系
内面(ハケ目・粘土紐痕)

7　土師器壺A
内面(黒斑・粘土紐痕
・ヘラミガキ)

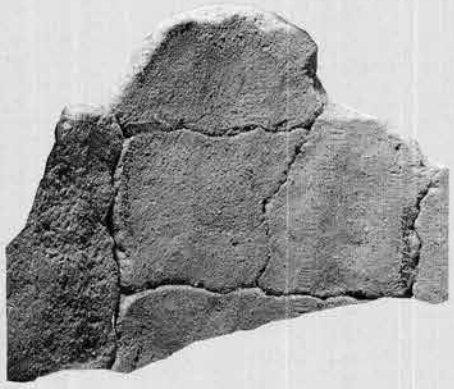
奈良・平安時代土器　調整技法・使用痕(土師器)

1:3

内面
SI 1320
761

外面

1



SI 115
35

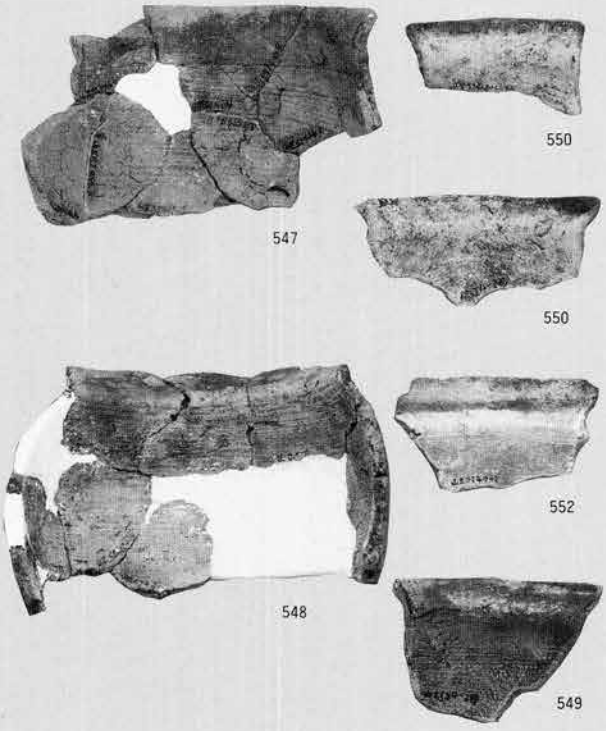
2

SI 440
841

3

SI 502 B
170

4



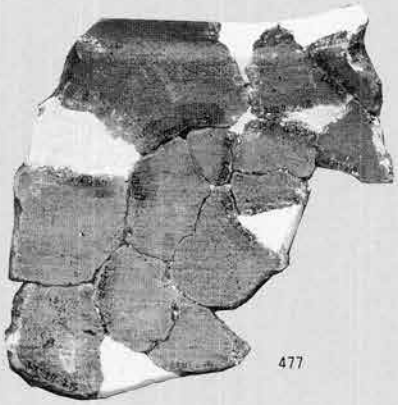
550
547
550
552
548
549

5

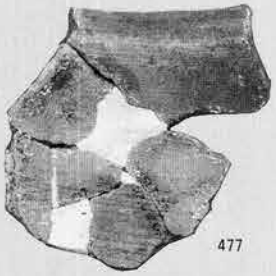
469

467

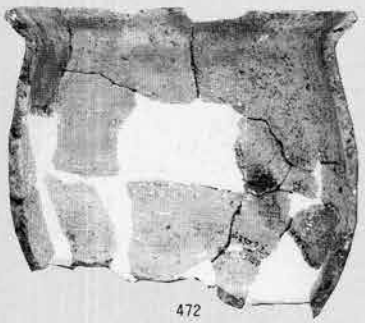
474



477



477



472

6

1　製塩土器
2　土師器長甕
　　A系2類
　内面(ハケ目・ナデ)
3　土師器長甕B系
　内面(あて具痕)
4　土師器小甕
　内面(口縁部炭化物)
5　SI 4土師器小甕
　内面(口縁部炭化物)
6　SI 7土師器小甕
　内面(口縁部炭化物)

奈良・平安時代土器　墨書土器

1:1

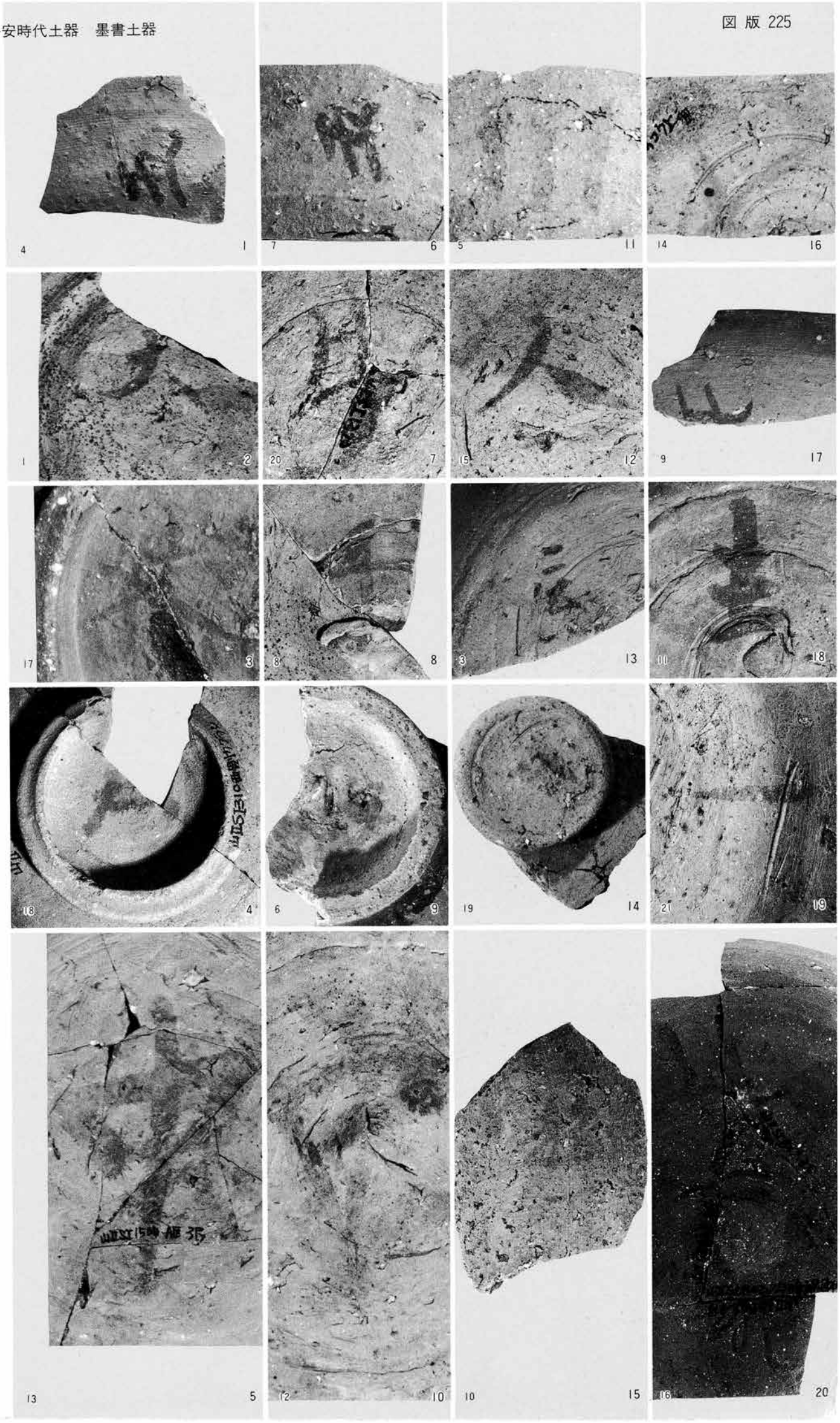
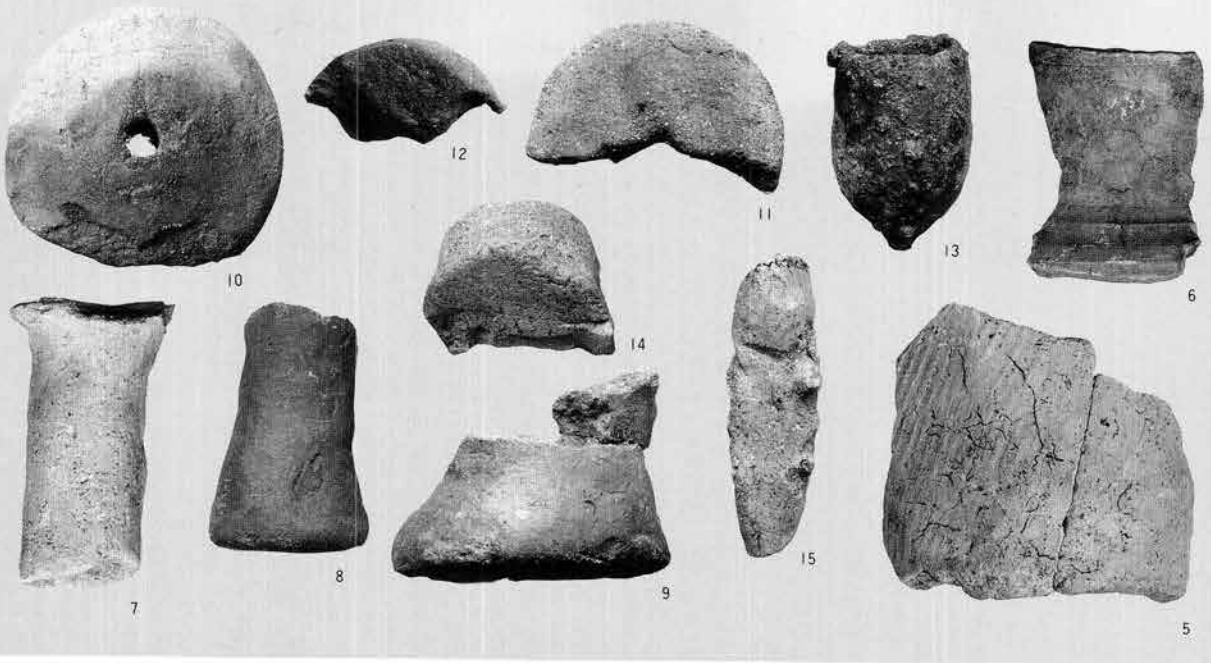


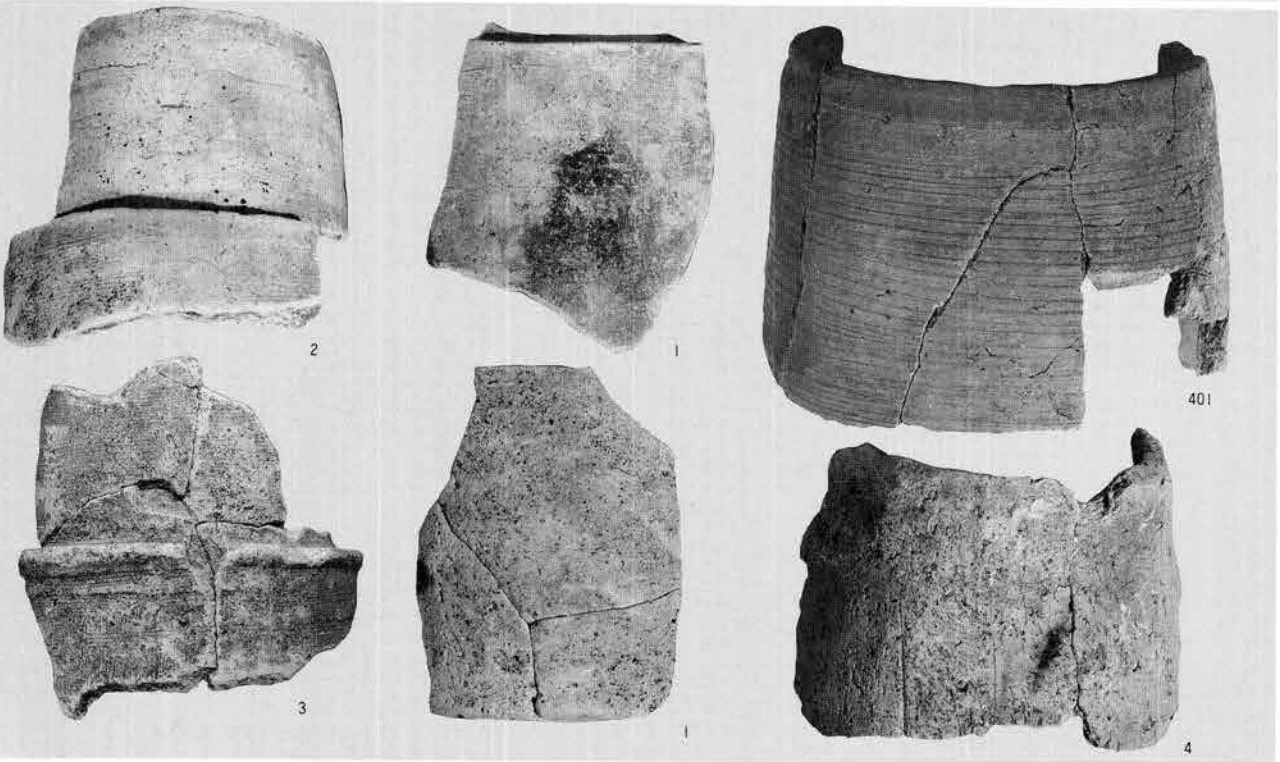
図 版 226

土製品

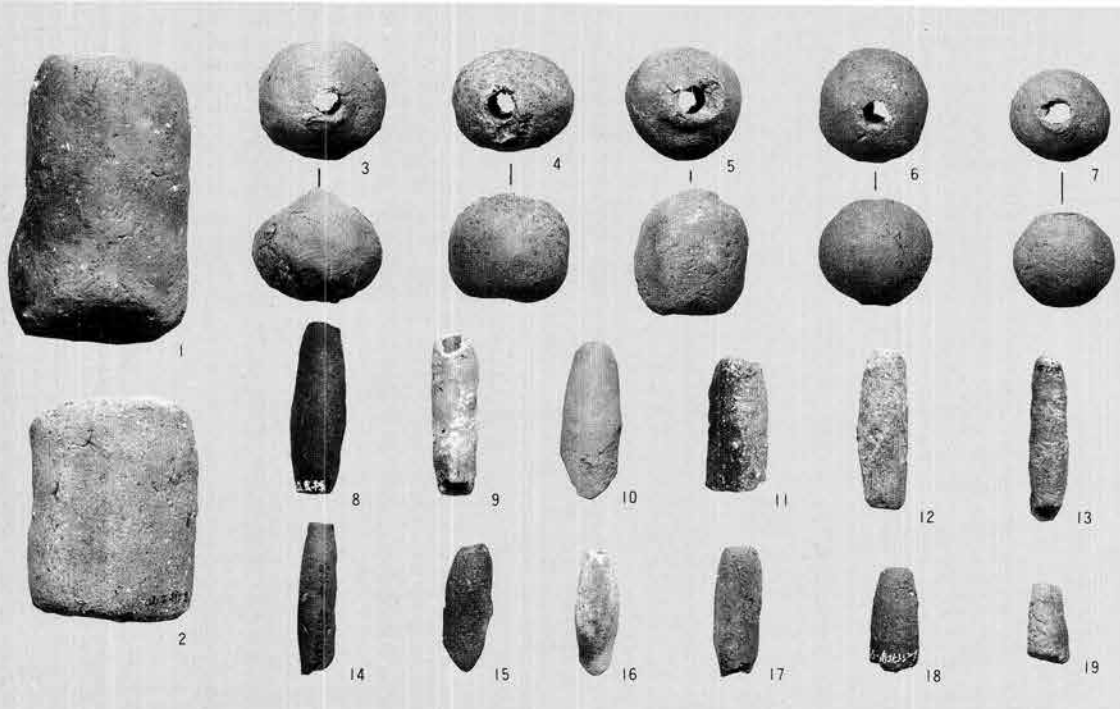
1(7~15)・3
1:3
1(5・6)・2
1:3



1　土製品



2　土製品(SI 14ほか)



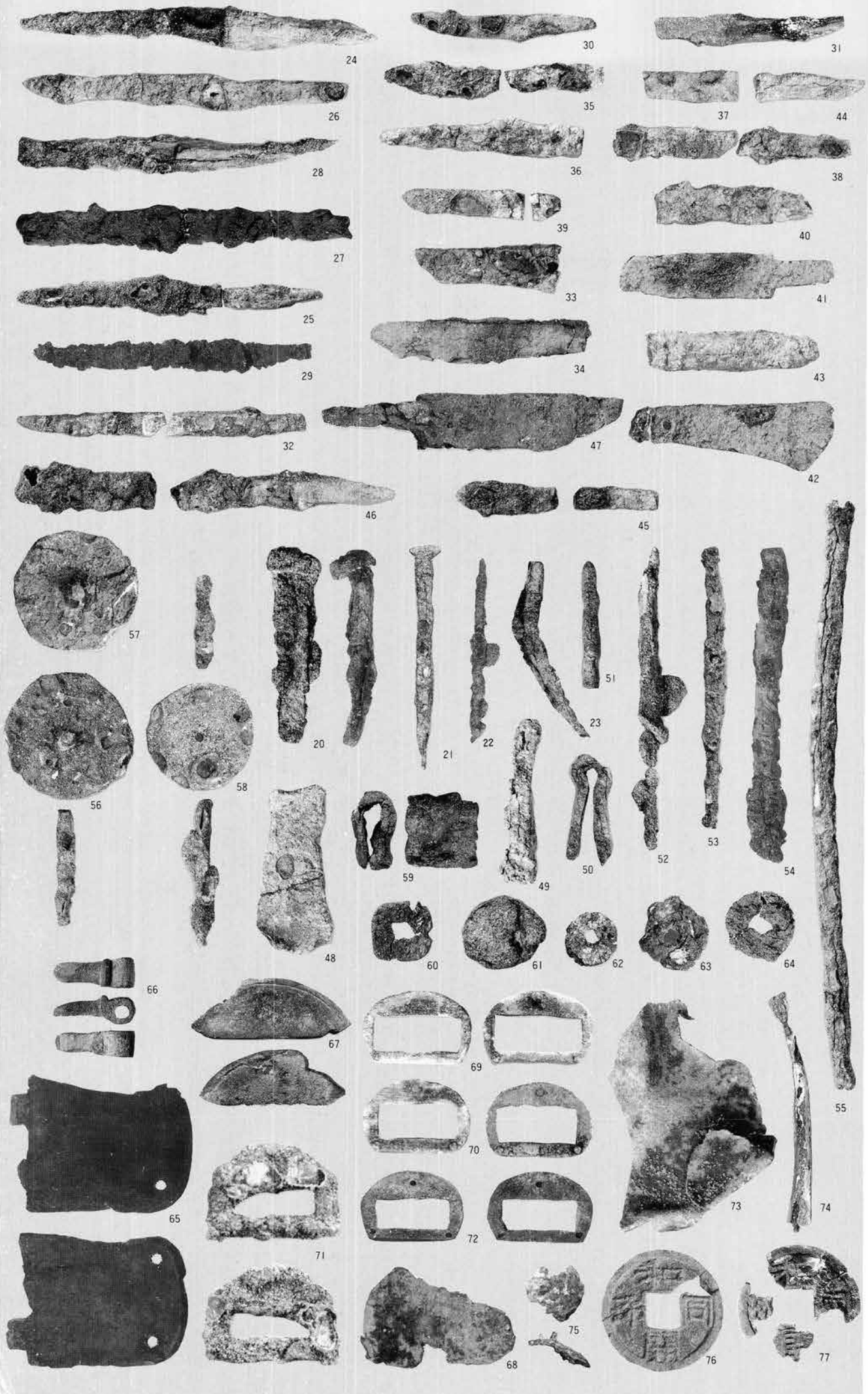
3　土錘

1:2

鎌(1～6)
鋤鍬先(7～10)
手斧(11)
鉄鏃(12～19)

奈良・平安時代金属製品 2

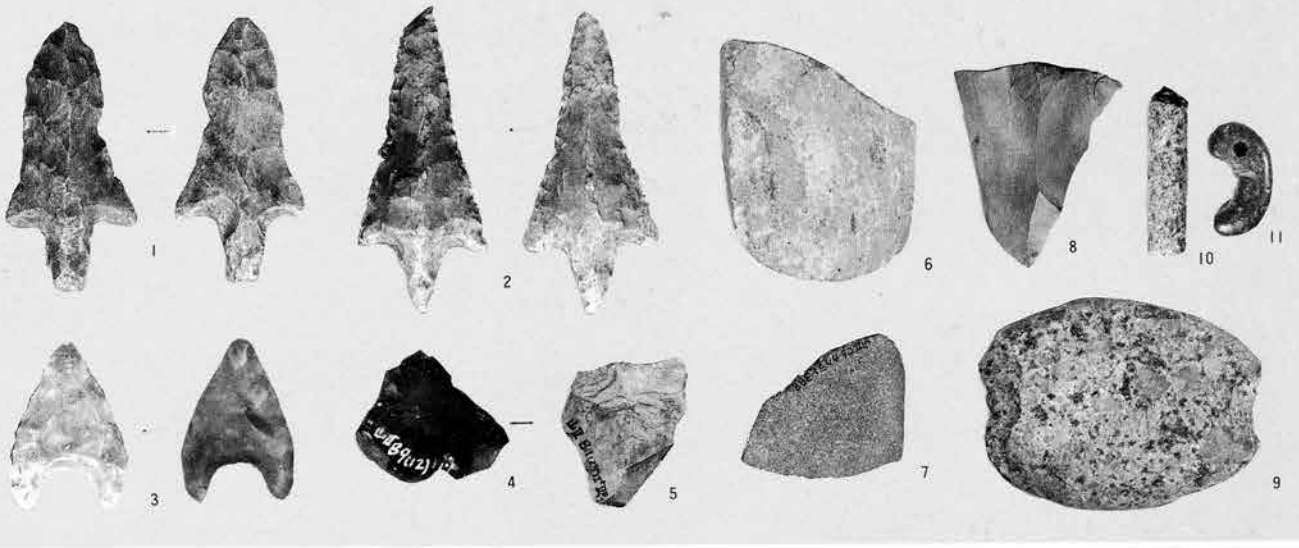
20～64 1：2
65～77 1：1



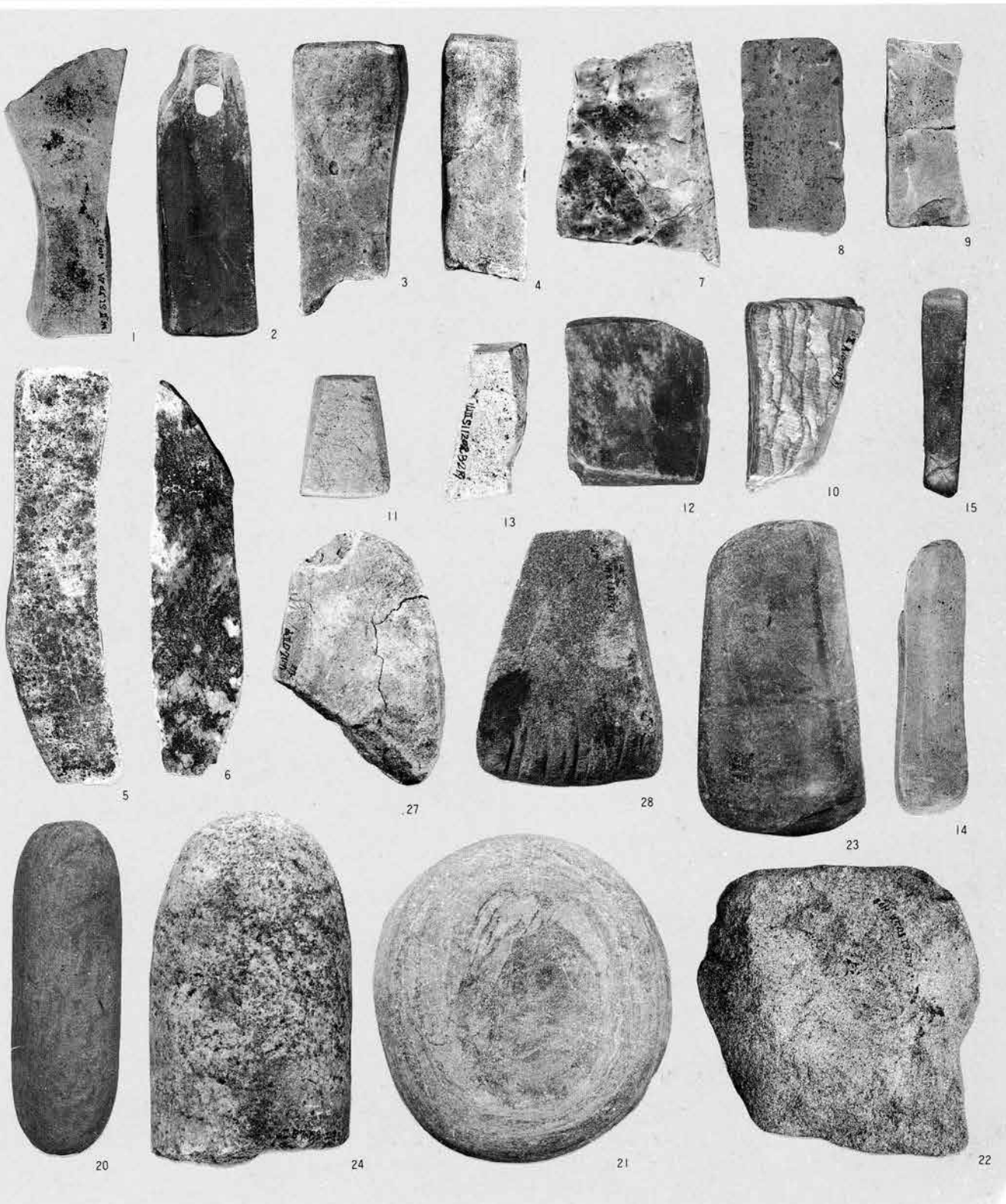
釘(20～23)
刀子(24～44・47)
紡錘車(56～58)
帯金具(65～72)
和銅開珎(76・77)
品種不明金属製品
(48～55・59～64・
73～75)

1～4・10・11 1：1
5～9 1：2

1 縄文・弥生・古墳時代
石鏃（1～3）
リタッチド・フレーク（4）
サイド・スクレイパー（5）
磨製石斧（6・7）
スクレイパー（8）
礫石錘（9）
管玉（10） 勾玉（11）



1：2



2 奈良・平安時代
手持砥石
（1～15・20・23・27・28）
置き砥石（21・22・24）

奈良・平安時代 石製品

16・17・19・25・29・30～38　1：2
18・26・39～56　1：3

16

19

17

25

30

31

32

33

34

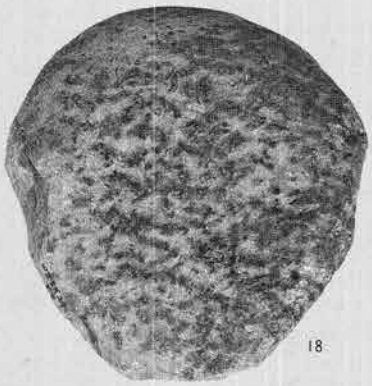
35

36

37

38

29


18

26

56

44

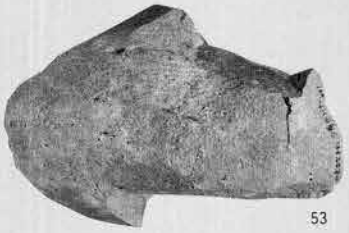
49

39

45

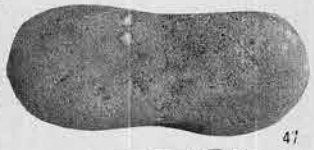
40

50


53

46

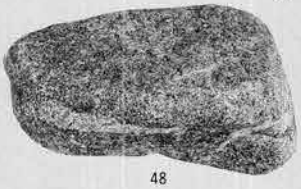
41

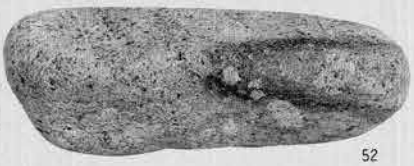

47

51

54

42


48

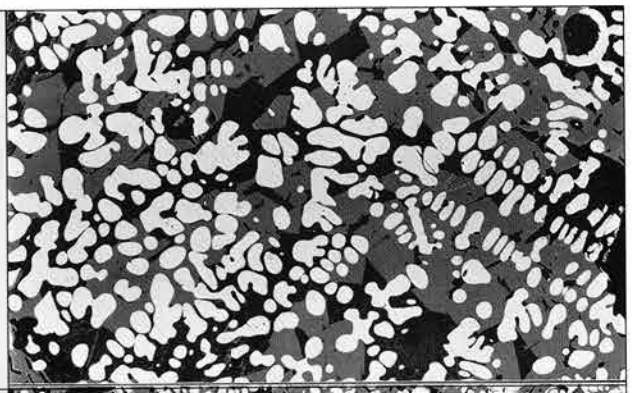

52

55

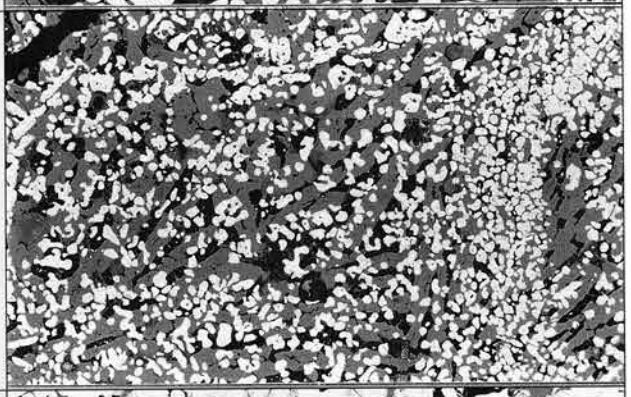
43

置き砥石(16～19・25)
石錘(29・39～55)
用途不明石製品(30～38)

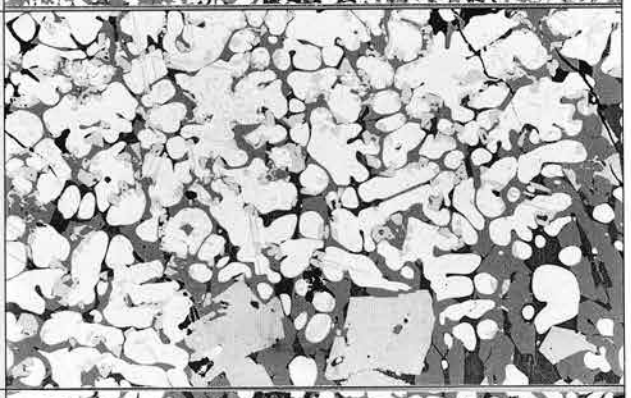
(1)W—866
山三賀II遺跡
(SI 840カマド？4層出土)
鍛錬鍛冶滓
×100
外観写真 1/2.6



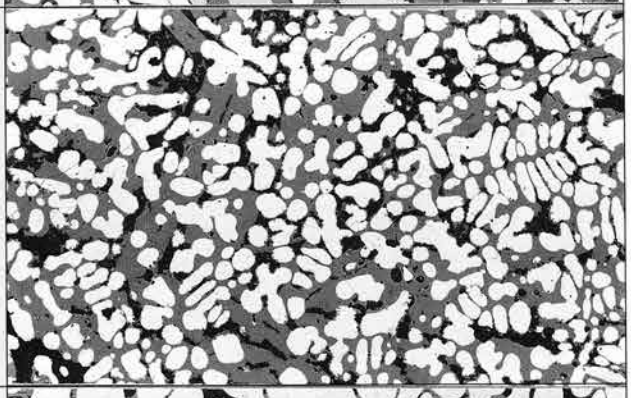
(2)W—867
山三賀II遺跡
(SI 840 4層出土)
鍛錬鍛冶滓
×100
外観写真 1/2.6



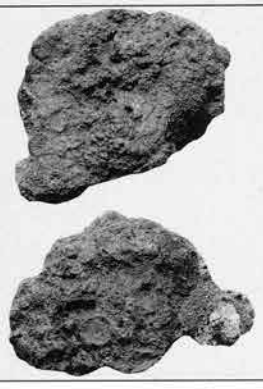
(3)W—868
山三賀II遺跡
(SI 840 4層出土)
精錬鍛冶滓
×100
外観写真 1/2.6

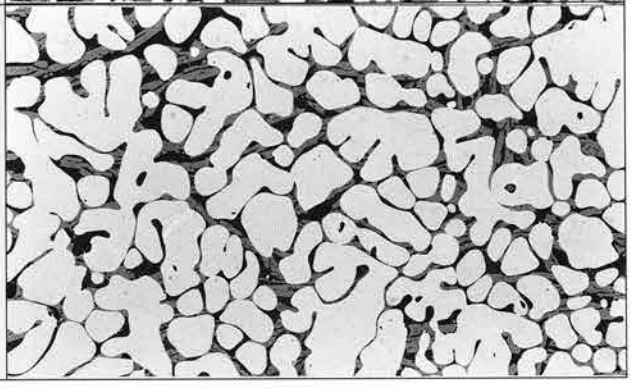


(4)W—869
山三賀II遺跡
(SI 4 2層黒色土出土)
鍛錬鍛冶滓
×100
外観写真 1/2.6



(5)W—860
山三賀II遺跡
(SI 4北東2層黒色土出土)
鍛錬鍛冶滓
×100
外観写真 1/2.6





新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集

新新バイパス関係発掘調査報告書

山三賀II遺跡

平成元年３月20日　印刷
平成元年３月31日　発行

編集　新潟県教育委員会
〒950 新潟市新光町4-1
電話　(025)　285—5511

発行　新潟県教育委員会
建設省北陸地方建設局
新潟国道工事事務所

印刷　北越印刷株式会社
長岡市福住1丁目6-27
電話　(0258)　33—0306